
ブラックリング

笹田 一木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックリング

【Nコード】

N5569K

【作者名】

笹田 一木

【あらすじ】

真紅の瞳を持つ黒髪の剣士クロコは、相方の剣士ブレットと共に軍に入るため入軍試験を受けに行く。しかし途中偶然立ち寄った店で、黒い指輪をはめてしまって……

1 - 1 黒い指輪

太い根を下ろした樹木が生い茂る森、あたりは闇に包まれていた。月はずかに雲に隠れ、風のない静かな夜だった。

漆黒の森に大きな光が不自然に揺らいでいる。

森に囲まれた一つの村が炎に包まれて燃えていた。

村にある、ありとあらゆる建物から炎が上がり、村中は血を流し倒れる村人の姿であふれていた。

囲む森がわずかに開けている村の出口、そこに二人の少年が立っていた。

少年の一人は黒い髪と真紅の瞳、年は十歳にも満たないだろう。

悲しげな目で村を見つめている。

もう一人の少年は茶色い髪で、年は十歳を少し超えたぐらい。静かな様子で村を見つめている。

茶色い髪をした少年が黒い髪をした少年の手をつかみ、村の外の方へ引つ張り、歩きだそうとする。

しかし黒い髪をした少年は抵抗し動こうとしない。黒い髪をした少年の真紅の瞳がさびしげに光る。

茶色い髪の少年が静かに口を開く。

「……行っつ」

黒い髪の少年がゆっくりと茶色い髪の少年の方を見る。

「どっくに……行くの?」

黒い髪の少年は不安そうな表情で言った。茶色い髪の少年は表情

を変えず答える。

「ここじゃない……どこかだ」

「……でも、ここはオレの……オレ達の村なんだよ」

「クロ……、もうここには何も無い、何も無いんだ……だから、行こう」

茶色い髪の少年はそう言うと引つ張る力を強めた。

「……………」

黒い髪の少年は黙ったままゆっくりと歩き出した。そして歩きながら振り返り、もう一度だけ村を見つめた。少年の真紅の瞳には燃える村の姿が映っていた。

それから7年後、ネシス歴1020年。

太陽が真上から照らしていた。

ゴーンゴーンと教会から昼の鐘の音が響いた。

灰色の四角い建物が道沿いに無数に建ち並んでいる。

建物に挟まれた道は石畳で舗装されており、その道には遊びに行く子供や散歩をする老人など、この街の住人達が歩いていた。

道の真ん中を馬車がゆっくりとした速度で通ると通行人は左右に散って道をあける。

ここはクラウド帝国中部に位置する街フルスロツク。

この街の、ある通り、赤や黄色や青のカラフルな布で飾り付けられている灰色の建物が、道沿いに規則正しく立ち並んでいる。

フルスロツクの街の商店街である。

肉屋、パイ屋、布屋、ベル屋、金属屋、さまざまな店がさまざま布で飾り付けられ立ち並ぶ。その中の一つに、色々な布をうまく使い分けて飾ることで、とてもきれいで明るい雰囲気をもたしている店があった。

その店内には色鮮やかな果物がきれいに棚の上に並べられている。赤、黄色、緑、オレンジ、ピンク、探せばどんな色でもありそうだ。

そんな果物屋で一人の少女が働いていた。

少女は愛想よく客と接し、果物を売っている。

その少女は年齢十五、六歳ぐらい、白い髪、ぱっちりとしたきれいな目で、明るい雰囲気を持っている。

ヒゲを長く生やした中年の客がその少女に話しかける。

「よう、ソラちゃん、久しぶり」

「あつ！ ウェルターさん、久しぶりです。元気になりましたか？」

果物屋の少女ソラが愛想良くニコリと笑う。

「はっはっはっ、見てのとおりさ、久しぶりにソラちゃんの果物を食べたくなっただね」

ヒゲの客ウェルターはソラの笑顔を見て上機嫌に笑うと、店の果物をじっくり見始める。

「しかし、平和だねえ」

その言葉を聞き、ソラの表情が少し曇る。

「平和だなんて……東の方ではひどい戦争をしてるっていう話ですよ……」

「まあね、でもこの町はまだ平和じゃないか。ただセウスノール軍が押されれば、ここも戦場になっちまうだろうけど。あそこには頑張ってもらわないと……、あつ、これちょうだい」

ウェルターはそう言いながら黄色い果物をソラに見せた。

「あつ、イエローピーチですね。150バルになります」

ソラはウェルターから銅貨を受け取る。

「ああ、カゴはいいよ、すぐ食っちゃうから。それじゃあ、またなソラちゃん」

ウェルターはそう言って、果物片手に立ち去った。

「頑張ってもらうだなんて、戦争を……」

ソラは複雑な表情だ。

そのとき、店に客が勢いよく入ってきた。

ドンッ！

ウェルターを見送っていたソラに勢いよくぶつかる。

「あっ！」

ソラはその衝撃で倒れこんだ。

「いつて、おい店員、なに突っ立ってだよ！」

太い声がソラに向かって怒鳴る。店に入ってきたのは年齢二十前後の男だった。ずんぐりとした大きな体には、丸太のように太い手足が付いている。顔は岩石のようにいかつい。

ソラはそんな大男にもひるまず、キツとにらむ。

「勢いよく入ってきたのはあなたでしょう！？ いったい何のために……」

「ああ！？ なんだその態度は！！」

店内に大柄の男の怒鳴り声が響き渡る。それでもソラはひるまず男をにらむ。

するともう一人、背の高い男が入ってきた。年齢二十前後、髪をとさかのように逆立てている。

「へえ、おいおい、ずいぶん強気な女じゃねーか」

どうやら大柄の男の仲間のようだ。とさか髪の方は、立ち上がったソラの姿をジロジロと見る。

「ちょっと幼いがいい女だなあ、ハハハ」

「ああ、噂通りだな」

二人の男はソラをなめまわすように見る。その様子を見てソラは数歩退く。

店にいた客は不安げな顔でその様子を見ている。

「えっ？ なんなの、いったい……」

「ソラちゃんが突然からまれて……」

「しっ！ あいつらあの有名なジェスとベルセットだ。ヤバイって……見ろよ」

男の客がとさか髪 of 男の背中を軽く指さす。とさか髪 of 男の背中には大きな剣が付けられている。

大柄の男は大きな手でソラのきやしゃな腕をつかんだ。

「オレにぶつかった謝礼として、なんか払ってもらわないとなー」

「オレ達と楽しいことしようぜ」

大柄の男は力任せにソラの腕を引っ張る。

「……！ 痛い！」

ソラは外へと引っ張り出された。

大柄の男はさらに引っ張り、ソラを連れていこうとする。しかしソラは痛がりながらも必死に抵抗した。

「クソッ！ こっちに来い！」

「いやだ！ 離して！」

「へえ、無駄に抵抗しちゃってえ……かわいいもんだ」

とさか髪の男はソラの様子を見て上機嫌に笑う。大柄の男はソラの手を持ったまま離そうとせず、さらに力を入れる。

「痛い！！ やめて！！」

ソラは悲鳴のような声を上げた。それでもソラは抵抗する。大勢の通行人が悲鳴に気づき足を止めた。しかし関わりうとする者はいない。

男達も通行人の存在など全く気にしていない。おそらくはもう慣れっこなのだろう。

男達は必死に抵抗するソラをなかなか連れ出すことができない。ついに大柄の男が声を荒げる。

「うぜーんだよ！ このクソ女が！！ 責任取るまで逃げられると思っでんのか！」

周りの通行人は一定の距離を取り、その様子を不安げに見ている。そんななか、別の二つの影がその騒動の現場へと近づいてくる。

「……邪魔だ」

近づいてきた影の一方、黒い髪の少年が二人の男にそう言い放った。その少年は年齢十五、六ぐらい、少し長めの黒髪と真紅の瞳を

している。どこか威圧的な雰囲気を漂わせているその少年は、鋭い目つきでソラに絡む二人の男をにらみつける。

「なんだぁ！」

大柄の男が黒髪の少年の言葉に反応した。
少年はふてぶてしい態度で口を開く。

「道で突っ立てんじゃねえよ。そのくせバカでかい声出しやがって、邪魔に加えてうるせーんだよ」

黒髪の少年の発言に周りを囲む通行人がザワザワする。

「てめえ！！」

大柄の男はソラから手を放し黒髪の少年に近づいていく。その隙にソラは離れようとするが、

「おおっと！」

とさか髪の男にすぐに捕まってしまった。

大柄の男がいまにも殴りかかりそうな雰囲気で黒髪の少年に近づいていく。その時、男はあることに気づく。
少年の腰に剣が付いている。

「こいつ、ガキのくせに剣なんか飾りやがって……」

「おい、抜いてきたら代わってやるぞ」

とさか髪の方が言った。

「必要ねえよ。こんなガキ相手に」

「いらねー心配だ。こんな街中で剣抜くほどイカれてねーよ。まあてめーらの場合はどうだか知らねーが」

「このガキッ!」

すると突然、黒髪の少年の連れのもう一人が二人の間に割って入る。

「すみません、こいつ言葉づかい知らなくて、ここは少し落ち着いて……」

その連れは年齢十八、九ぐらいの青年で、茶色い髪、高い鼻が特徴だ。目つきはきついが穏やかそうな雰囲気がある。黒髪の少年同様に腰に剣を着けている。

「おい、ブレット!　なんで止めんだ」

黒髪の少年は不満そうだ。すると茶色い髪の青年ブレットは黒髪の青年に小声でボソボソと言う。

「バカヤロウ、大事な日に変なもめごと起こすなよ、クロ」

黒髪の少年を止めるブレット、大柄の男はその様子をみて、少し考えたあと、二人に背を向けた。

「ちっ、オレ達は忙しいんだ。今回は見逃してやるからさっさと消

えろ」

大柄の男はそう言ったあと再びソラの腕をつかんだ。
黒髪の少年はその様子を少し見ていると、ソラに話しかける。

「おい、おまえ！　なんでこんなやつらに絡まれてんだよ」

「こ、この二人はこの街で有名なゴロツキで……わ、私に言いかけ
りをつけてきて……」

「はっ！　なに訳わかんねえこと言ってたよ、てめーが突っ立て
たせいでぶつかったから責任取れて言ってただよ。いいから来い
よ……」

大柄の男は大声で怒鳴る。

「あなたたち、さっき、最初からこうするために来たみたいと言っ
てた……！」

その言葉にとさか髪 of 男が笑う。

「はっはっはっ、そんなこと言ったけ、聞き間違いじゃないかなあ
？」

「そんなこと……」

「いい加減なこと言いやがって……いいからこっちに来てい……」

大柄の男はソラを無理やり連れて行こうとする。
その様子を見てブレットがボソツとしゃべる。

「ここらへんは解放軍が治めるようになってから治安が安定したって聞いてたが……」

「けど、どこにでもいるモンなんだよ、こついうクソはな」

黒髪の少年ははっきりとした口調でそう言い放った。ブレッドはそれを聞いてギョツとする。

「なんだと！！ てめえ！」

黒髪の少年の言葉を聞き、大柄の男がすぐに反応し大声を上げた。少女をとさか髪の男に渡し、再び黒髪の少年に近づく。それを見てブレッドはため息をついた。

（やれやれ、こりゃあダメそうだな……）

大柄の男は黒髪の少年の目の前までズイッと近づいた。男の体は大きかった、黒髪の少年はけっして小さくはないが、それよりふたまわりは大きい。

大柄の男の影が黒髪の少年の体を覆った。

「よりによってこのオレにここまでの口をきいたんだ。もう後戻りはできねえってことはわかるよなあ」

大柄の男の後ろでとさか髪の男が楽しそうにニタニタ笑う。黒髪の少年は黙って棒立ちし、目の前の男をにらんでいる。大柄の男は拳を握った。

そして丸太のような腕を勢いよく動かした、その瞬間だった。

ゴッ！

鈍い音とともに大柄の男の巨体が宙を舞った。
そして大きい音を立てて地面に落ちる。

ザワツ！と周りの通行人が騒ぐ。

大柄の男はそのまま仰向けにピクピクとけいれんしたまま動かない。
い。

その様子を黒髪の少年は黙って見下している。右手にはいつの間にか剣が、鞘に納まった状態で握られていた。

「えっ……、お、おまえ何しやがった！！」

とさか髪の男が訳もわからず叫ぶ

「なにしたって、この剣で普通にアゴ突いただけだ……当然、鞘は抜いてないぞ」

黒髪の少年は右手の剣を見せる。

「……っのヤロウ！！」

とさか髪の男は背中の大剣を抜いた。
ブレードが思わず口を開く。

「おいおい……、街中で抜いちまったぞ」

とさか髪の男は両手で剣を構えた。

「おらぁっ!!」

とさか髪の男が黒髪の少年に斬りかかるうとしたその時、

ビュンッ!

黒髪の少年は目にも止まらぬ速さで剣を振り、鞘を男の顔面に直撃させた。鈍い音とともに男の体は宙で反回転した。そして頭から落ちる。

倒れたとさか頭の男は、大柄の男同様にピクピクと痙攣し動かない。

周りで見っていた人は、今度はザワつかずにシーンと黙って目を丸くしている。どうやらなにが起きたのか理解できない様子だ。ソラもその様子をぼうぜんとしている。

「す……すごい……こんなこと」

ブレッドはその様子を見て口を開く。

「やれやれ、また派手に……」

黒髪の少年は何事もなかったかのような顔をしている。

「さて、行くか」

黒髪の少年はゆっくりと歩き始めた。

ソラはハッと我にかえり黒髪の少年を見た。

「あ、あの、ありがとう……」

「別に助けたわけじゃねえ、目障りなやつを片づけたただけだ」

「な、なにかお礼を……」

「いらねえよ」

黒髪の少年はソラの言葉を流すように答えて、その場を立ち去ろうとする。

少年とソラの距離が開く。

「わ、私はソラ、ソラ・フェアリーフ。あなたは……！！」

ソラは遠くに離れていく少年に向かって叫んだ。すると黒髪の少年はスッと後ろを向いた。

「オレはクロコ、クロコ・ブレイリバーだ」

少年の真紅の瞳が一瞬光った。

黒髪の少年クロコとブレットは、街の景色の中へと消えていった。

先ほどの商店街とはまた別の通り、建物ではなく様々な屋台店が立ち並ぶ屋台商店街。昼時だからだろうか、店はほとんど閉まり、

人影も見えない。

そんな屋台の中にひときわ怪しい屋台店が立っていた。木で組み立てられた屋台は、上から黒色に塗りつぶされており、その周りは黒い布のみで飾り付けられている。さらにその布の周りにはトカゲの顔の骨が横一列に付けられている。明らかに悪趣味で不気味で、そして場違いな雰囲気をもっていた。

そんな店の前で黒髪の少年クロコと茶色い髪の青年ブレッドは立っていた。

クロコがおもむろに口を開く。

「なぜオレ達はこんな所に立っているんだ……」

「それはオレが聞きてーよ！ オレ達は解放軍基地に向かっていたはずだろ！」

「いや、それが地図通りに行ったらなぜかこの店の前に……、ほら」

「……クロ、それ上下逆だぞ」

「あつ！ バ、バカ、勘違いするなよ。さっきはこの向きで見てたんだ！」

「それは横だ！！……あー、おまえがどうしても地図を見るって聞かないから、こんななるらやっぱりオレが見とけばよかった……」

「過ぎたこと言ってもしょうがないだろ」

「おまえなあ、ちょっとは反省しろよ。仕方ない、近くの人に道を聞くか」

「よし、じゃあ聞くか」

そう言ってクロコはドクロ屋台の店員に近づいていく。
ブレットはクロコを素早く止め、小声で叫ぶ。

「ちょっと待て！　なんでよりにもよってこんな怪しい店で聞くんだよ！　もっと他にいるだろう！」

「うるせえな、道聞くのにわざわざ人選ぶ必要なんてねーだろ」

クロコはブレットの制止も聞かず店の店員に近づいていく。

（やれやれ、このトラブルメーカーは……まーた厄介ごと引き起こすのだよ）

ブレットは肩を落とす。

ドクロ屋台の店員は店そのものに似つかわしくない身だしなみの整った小ぎれいな女性だった。年齢は二十代前半ぐらい、黄色の髪はきれいに整えられ、紫色の上品な服を着こなしている。ただしその上にコウモリ羽のような厚い黒ローブを羽織っており、どこかしら不気味な雰囲気を漂わせていた。

クロコはその店員の前に立つ。

「おい、解放軍基地に行きたいんだが、道を教えてくれないか？」

「うん、いいよ。ただ店の商品どれか一つ買ってってよ！」

店員は明るく答えた。

「しょうがねえな、こんな変な店に関わることもそうないし、なんか記念に買ってやるか」

クロコは店の商品を見回す。

店の商品のラインナップははつきりいつて不気味だった。何かの骨の付いたベルトに、何かのしっぽのくんせい、紫色の草が入った水晶玉……

さすがのクロコも少し眉をひそめる。

「お客さん、この街の人じゃないでしょ」

店員が気さくに話しかける。

「ん、ああ」

「二人とも剣を持つてるね。もしかしてセウスノール解放軍の人？」

「正確に言うとこれから解放軍に入ろうとする人だ」

「オレたち入軍試験を受けに来たんだよ」

ブレッドがクロコの斜め後ろから口を開く。

「へえ、これから軍人になろうって人なんだ。それでこの街に……、まあ、実は私もこの街に商売に来て三日目なんだけどね」

「おい、それよりここは何の店なんだ」

クロコはもう一度、店の商品のラインナップに目を通しながら言った。

「呪い屋よ!」

「呪い屋?」

「そう! ここに置いてあるものはすべて、人を呪うための道具なの!」

店員はなぜか誇らしげだ。

「呪いなんてこの世にあるわけねーだろ」

クロコが下らないという顔で言う。

ブレッドはクロコの耳元でささやく。

「おい、クロ! いやいよ怪しいぞ、やめとけて」

しかしクロコはまったく聞く耳持たない。

「まあ、何でもいいや。じゃあこの中で一番安いのをくれ」

クロコはいい加減な口調で言った。

「はい、この指輪になります」

店員は上機嫌に答えると黒い指輪を差し出した。全体が黒いその指輪は特に何の装飾も付いていないただのリングだった。しかしそれは日の光を返しながら不気味なほどきれいに光っている。

「ふーん、この店の商品の中では良い方だな。いくらだ」

「800バルになりまーす」

クロコは店員に大きい銅貨を払うとその指輪を受け取った。

「じゃあ約束通り解放軍基地までの道を教えてくれ」

「えーと、この道をひたすらまっすぐ行けば、そのうち見えてくるよ」

「なんだよ、すぐそこかよ」

クロコはそう言って受け取った指輪をじっくりと見る。

「ん？ この指輪、ちょうどオレの指に入りそうなサイズだな」

クロコはそう言つとおもむろに右手の人差し指に指輪をはめようとする。

「おい、クロ、やめとけって！ そんな怪しいもの……」

素早くブレットが止める。

「おいおい、ブレット、本気で言ってるのか？ 呪いなんてものの世に存在するはずないだろ」

そしてクロコは指輪を人差し指にスポツとはめた。
店員とブレットは指輪をはめたクロコの方を見る。しかしクロコ

の身には何の変化も見られない。

しばらくの沈黙。

クロコが口を開く。

「なっ？ 言つたろ。呪いなんて存在しないって」

「いや、それは確かにそうなんだろうけど……まったく！ おまえにはいつも冷や冷やさせられるよ」

ブレッドは軽くため息をついた。

「じゃあ、予定通り解放軍基地へ……」

その時だった、クロコの指輪から強烈な光が放たれ、その光がクロコのいた辺りを激しく照らす。

「うわ！ なんだ！」

クロコは突然の事態に混乱の声をあげた。

「くっ！ なんだってんだ」

ブレッドもこの状況に驚く。強烈な光で辺りが全く見えない。

やがて光は徐々に収まっていく……

強烈な光で目を閉じていたクロコはゆっくりと目をあける。

辺りを見ると光はおさまり、再び元の景色に戻っていた。

「なんだったんだ、あの光は……………って、ん…………？」

声を出したクロコは、自分の出した声に不自然さを感じた。それは普段自分の出している声よりも明らかに高かった。

「おまえ、…………クロなのか？」

ブレッドは明らかに戸惑った様子だ。

「なに訳のわからないこと言ってたんだ、オレに決まってたんだろ！それよりもさっきから耳が変なんだ。自分の声が妙に高く聞こえるんだよ」

ブレッドは何も答えず、じつくりとクロコを観察するようにして見ている。

クロコはそれを不思議に思ったが、ブレッドのただならぬ様子から何も言わずに黙って見ていた。どうもブレッドの身長が急に伸びたように感じた。

クロコを見ていたブレッドは、やがてすべてを悟ったような表情をした。

「クロ…………、変なのはおまえの耳じゃない。自分で自分の体をよく確認してみる…………」

ブレッドは静かな口調で言った。

「自分の体？」

クロコはブレッドに言われて、はじめて自分の体全体に違和感を感じた。

クロコは自分の体中を手で触り確認し始めた。
まずは髪の毛だった。首の途中までしか伸びていなかった後ろ髪が肩まで伸びていた。

次に顔だった。触るとどうも普段よりも丸っこくて柔らかい気がする。

さらに手足。普段より小さく細い感じがした。
そして服。サイズの合っていたはずのものが、なぜかダボダボになっている。

最後に胸のあたりを触る。なにやら柔らかい感触がした。
ブレッドの方にもう一度顔を向ける。自分よりちよつと高いぐらいの身長のブレッドが、自分より頭一つ分高い。周りの景色もさつきより高くなっていたことに気づいた。

クロコは自分の顔から血の気が引くのを感じた。

「ブレッド……」

クロコは弱々しい声を出す。その声も妙に高く頭に響く。

「いまオレどういう姿をしてるんだ……」

クロコは弱々しい声でまるで助けを求めるようにブレッドに質問する。

「それは……」

ブレッドは言葉に詰まる。

「はい！」

店の店員が黒い装飾の丸い鏡をクロコの方に向けた。

クロコは鏡を見る。そこには黒髪を肩まで伸ばした少女の姿が映っていた。鋭い目で、真紅の瞳、少し威圧的な雰囲気を持つ少女の顔。

クロコが一步退くとその鏡の少女も一步退く。
顔から汗がダラダラと流れる。

明らかに戸惑いの表情をするクロコを見てブレッドは頭を抱えて大きくため息をついた。

クロコは鏡を見て目を丸くする。

「な、なんなんだ……………これ……………」

クロコは小さく声を出したかと思うと、さっきまで青かった顔が今度はみるみるうちに赤くなっていく。

「なんなんだよ、これは！！ こいつがオレで！ オレがこいつで！
っていうかこいつは誰だ ……！！！！」

クロコの高い声があたりに響く。

「おい、落ち着けよ」

ブレッドがクロコをなだめようとするが、クロコは目をグルグルさせながらワーワー言っている。

「呪いに決まってるじゃん」

混乱する二人の声を切り裂き店員の声が響く。その声を聞いてクロコの動きがピタッと止まる。

「お、おい、この姿、やっぱり呪いで……」

クロコは不安げな声で店員に話す。

「そうみたいね。正直どういいう呪いかは知らなかったんだけど、まさか女になっちゃう呪いだとはね。びっくりした」

店員はクロコとは正反対で落ち着いた様子だ。

「女になるって、じゃあ、これで……オレは……女に」

完全に困惑した表情のクロコ、しかし突然ハッとすると、人差し指にはめた指輪を抜こうとする。

「こんな指輪！」

しかし指輪は引っ張っても抜けない。

「クソ！！ 抜けない」

必死に指輪を引っ張るクロコ、しかし指輪は肉に挟まっているわけでもないのにまったく抜ける気配がない。

「クソッ！！ このっ！ このっ！」

指輪を必死で抜こうとするクロコを観察しながら、店員が落ち着いた様子で口を開く。

「うーん、でもずいぶんかわいくなっちゃったね。それに声なんてほら、ものすごくすきとおっててきれい」

「言ってる言葉はきれいじゃないけどな」

「異国に行けばモテモテなんじゃない？」

「ブレットてめえー！！　なに落ち着いて話してんだよ！　このヤロー」

「まあ待てって、クロ」

混乱するクロコをよそにブレットは店員の前に立つ。

「この指輪の呪いでクロコは女になった、それはわかる。……だとすればこの呪いを解くことだって可能なんだろう」

ブレットが冷静な態度で店員に話す。その言葉を聞きクロコも少し落ち着きを取り戻す。

「さあ〜ね〜、少なくともわたしにはこの呪いの解き方わかんないね」

店の店員の軽い口調にクロコがイラッとする。
ブレットが店員に詰め寄る。

「解き方が分からないって、あんた呪い屋なんだろう」

「そうだよ、私は呪いのスペシャリスト。店で扱ってる大抵の器具の呪いは解けるけど……」

「じゃあなんでこの指輪の呪いは……」

「いい？ 呪いってものは相手をおとしめるもの。これはわかるよね。だけどそれと同時に相手との交渉手段としても重宝するの。ようするに相手をまず呪って、その呪いを解く代わりに相手に何かを要求する」

店員は二人に言い聞かせるような口調で説明する。

「そういうこともあって、呪いの器具は本来とても高価……。例えばこのギャロック草の入った水晶は40万バル。だけどこの指輪に関して言えば、呪いの解き方はわからない。つまり交渉手段としての価値がないの。だから安値」

「なるほど……な」

ブレットは半ばあきらめた様子だ。

「まー、だから仕方ない！ 勝手に付けたのはそっちのミスなんだしー、潔くあきらめて……」

「あきらめるわけないだろ」

クロコが明らかに殺気のこもった声を出した。

「てめえ、それで済むと思ってんのか……!!」

そう言って鋭い眼で店員をにらみつける。

そして一歩ずつ店員に近づいていく。その異常な迫力にヒョウヒョウとしていた店員にはじめて焦りの色が見える。

「ま、まあ、私は呪いの解き方知らないし、自分で探すしかないんじゃない？ まあ、そゆことで……」

店員はそういうと白いボールを服から取り出して地面に投げつけた。地面に当たったボールがパンッ！ という音をたてた瞬間、辺りが白い煙に包まれる。

「バイバーイ」

「うわっ！ なんだ」

白い煙で何も見えない。

煙が収まった頃には店員の姿は屋台と共に消えていた。

ブレットは店員と屋台が立ち去った跡をぼうぜんとした様子で見ている。

「逃げ慣れてる……」

「クソ！ ブレット！！ 今すぐあの女を探すぞ！」

クロコは興奮した様子で怒鳴る。

「おいおい……、落ち着けよ。店員は呪いの解き方を知らないんだぞ。探すだけ無意味だろ。それにクロ、この事態はおまえ自身の責任でもあるんだぞ」

「……!!」

クロコはくやしそうな表情をしながらも言葉を失う。ブレットはため息をつく。

「仕方ない……、入軍は先延ばしにして、まず呪いの方をなんとかしよう」

「なに言ってるんだ……」

「いや、だからこの体のままじゃあ……」

「関係ねえよ」

「いやいや、関係あるだろ」

「ブレット！ オレ達はなんのためにここに来た！ なんのために町を出たんだ!!」

「わかる！ おまえの言いたいことはわかる。けどな……」

「オレ達は決心してここまで来たんだ。セウスノール解放軍に入軍するために!!」

「わかってるって、オレだって同じ気持ちで来たんだ。けどな、クロ！ 非常に残念なことに、セウスノール解放軍は男しか入軍を

認めてないんだ！！」

ブレットが強い口調でクロコに言い聞かせるように言った。

「関係ねえ！ オレは男だ！ なんと言おうとオレは解放軍に入る
！！」

（えええ ……………）

ブレットは青い顔をした。

クロコ達のいるこの国グラウドは、今ひどく荒れている。
約十二年前、この国の皇帝ブルテンはある出来事をきっかけに悪
政を振るい始める。

それにより人々の暮らしは荒廃を極めた。異常な地位の隔たり、
乱れる治安、そして国軍の暴走。

この混沌としたこの国の状況を、ある哲学者はこう呼んだ。国を
丸ごと飲み込む暗黒円

『ダークサークル』と……

国中で農民の反乱が多発する中、十年前、グラウド西部の都市セ
ウスノールで過去最大の反乱が勃発した。当初グラウド国軍はその
存在を軽視していたが、ファントムと呼ばれる謎の人物がその反乱
軍をまとめあげ組織化、セウスノール解放軍を作り上げた。

セウスノール解放軍は各地の反乱軍を次々と吸収、結果セウスノ
ール解放軍は、グラウドが所有する世界最強の国軍に匹敵する規模
にまで成長した。

国を変えようとするセウスノール解放軍、国を守ろうとするグラ

ウド国軍。

二つの勢力の争いは、現在に至るまでの十年、国を東西に分けた長い長いみぞうの内乱へと突入していった。

そして今クロコ達のいる街フルスロツク、ここには解放軍基地の一つであるフルスロツク基地が存在する。クロコ達はそこに入軍するためにこの街を訪れたのだ。

四角い灰色の建物が建ち並ぶ街の景色、その中にひととき巨大な建物が建っていた。横長なその巨大な建物は、幅300m以上にもなるだろう。その巨大な灰色の建物にはいくつもの大型大砲が取り付けられている。

建物の壁には解放軍の大きな旗が取り付けられている。ヘルムのシルエットが旗印の赤色の旗だ。

そして建物の四方を高い石壁がグルツと囲んでいる。

ここはフルスロツクにある解放軍基地。

建物を囲む石壁には大きな門が一つだけ取り付けられていた。

その門を見る二つの影。

一人は茶色の髪の青年、そしてもう一人は黒髪をした真紅の瞳の少女。

「ついに来たな……しかしでけーな。こんなでかい建物、生まれて初めて見た」

クロコは建物を見て素直に驚いている。

「ホントにでかいな……」

ブレットも驚いた表情で建物を見上げている。
クロコが口を開く。

「これなら少し高い所から見ればすぐ見つけられたな。わざわざあんな店で道聞かなくても……！」

「過ぎたこと言っても仕方ねーよ」

「……まあいい、とにかく行くぞブレット」

「いやちよつと待て、だからな……クロ」

「なんだよ」

「さっきも言ったが女じゃ解放軍の兵士にはなれないんだよ……！」

「そんなの関係ねーだろ、オレ男だし」

「世間的にはどう考えたって女なんだよ！」

「じゃあっ！　ここまで来てあきらめろっというのか……！」

「そうは言っていないだろ！　兵士じゃなくても支援員としてなら女でも入れる。だから、まずそこから入って徐々に上の連中に実力を見せて……」

「そんなメンドくさい事できるか……！」

クロコは高い声でそう叫ぶと、ズンズンと門の方へと向かう。

ブレットはあきらめてクロコの後についていった。

（やれやれ、また何かトラブルの予感がする）

「おい、そこ、止まれ」

クロコが門に近づくと、門の左右に立つ門番兵が呼び止めた。若い二人の門番兵は、黒の軍服に身を包み、腰に剣を付けている。

「ここは部外者立入禁止だ」

「部外者じゃねーよ、兵士になるためにここに来たんだ」

クロコはふてぶてしく態度で言った。その言葉を聞き兵士達は一瞬キョトンとする。

その様子をブレットはあきれた表情で見ている。

（また挑戦的な発言して……）

「きみ、知らないんだろうけど、残念ながら女の子は兵士にはなれないんだよ」

兵士一人が子供に言い聞かせるような口調で言った。隣の兵士が口を手で隠して笑う。

クロコはその様子を見て少しイラつく。

「オレは女じゃねえ、男だ」

「いや、男の格好はしてるけど、どっから見ても女でしょ。服のサイズも合ってる……。それに残念だけど軍の規則で決まってるからね」

「そうそう、ダメなモンはダメ！ あきらめな、かわいいお嬢さん」

この兵士の発言でクロコの怒りは頂点に達した。

「男だっって言ってるんだろ！！」

「おい、クロ！ 落ちつけて」

ブレッドがすかさず制止に入る。

「おい、どうしたんだ。騒がしいな」

軍の敷地内から一人の男が歩いて来た。

「あつ！ ベイトム隊長」

二人の門番兵は男を見るなり、素早く敬礼した。

近づいてきた男は年齢四十前後、黄色のあごヒゲをたくわえ、細く鋭い目をしている。がっしりとした体で、どこか威厳のある雰囲気を持っていた。

門番兵がすぐにその男に説明する。

「いえ……、それがこの少女が兵士になりたいって言ってきて……ダメとは言ったんですが、全く聞かず、そのうえ怒り出してしまい……」

「違う！ それはおまえがオレのことを女って言ったからだろ！」

クロコが反論する。兵士はその態度に半ばあきれた様子だ。

「この通り、この少女は自分のことを男だと言い張ってしまして……」

兵士は困り顔を作って見せる。

黄色ヒゲの男ベイトム隊長は落ち着いた様子だ。

「ふむ、なるほどな。兵士になる以上は女を捨ててきたと、そういうことか」

ベイトム隊長は自分なりに解釈する。その言葉に対しブレットが少し前が出る。

「いえ、そうではなくて、これには呪いが……」

（って信じるわけないか）

ブレットは言いかけた言葉を止める。

ベイトム隊長はクロコに話しかける。

「しかしね、お嬢さん、この小さく非力な体では少し覚悟を決めたり、少し剣をかじった程度ではとても戦場では生きていけないんだ……。君が思っているよりずっと戦場は過酷な場所なんだ」

ベイトム隊長はさとするように話しかけるが、クロコはまったく聞く耳もたない。

「剣は少しかじった程度じゃねーよ」

「しかし、この小さい体では限界が……」

「限界なんかねー、少なくとも見た目でしか相手の力量を計れないようなオッサンよりは、強いつもりだぜ」

クロコはそう言っただけで鋭い目でにらみつけた。
それに兵士が反応する。

「おい、きみ！ ベイトム隊長に……いくらなんでも失礼だぞ！」

しかしベイトム隊長は突然声を上げて笑い出した。

門番兵の二人はその様子にぼうぜんとした。

ベイトム隊長は口を開く。

「いいだろう、ではこういふのはどうだ？ 今から私と君で勝負をしよう。私に一度でも攻撃をかすらせることができれば、入軍試験を受けられるように司令官に掛け合おう。しかし、君が私に一度も攻撃をかすらせることもできずに、一方的に私に負ければ、その時は素直にあきらめて帰ってもらう」

ベイトム隊長はほほえむ。

「どうかな？」

「おもしろいなソレ。いいぜ、受けて立ってやる」

「た、隊長！ よろしいんですか！？」

「構わないさ、こういう輩はこれくらいいなければ引き下がらんだろっ」

門番兵はクロコの方を見る。

「おい、きみ！ 止めるなら今のうちだぞ！ この方はフルスロット基地三番隊4000人をまとめる隊長だぞ」

「おい、4000人だってよブレッド。アークガルドの人口とどっちが多いかな？」

「さあな……」

「おい、きみ……！」

「うるせえな、関係ねー。倒すだけだ」

クロコは一步前に出る。

「大丈夫なのかクロ、この体で……」

ブレッドが心配そうにクロコに話しかける。

「問題ねーよブレッド。この体にも少し慣れてきた」

クロコは相変わらず自信満々に答えると肩をブンブン回す。ブレッドはその様子を黙って見る。

（慣れてきたって……街歩く以外なんかやったか？）

「では、今から訓練用の木剣を持ってきます」

兵士がそう言って走り出そうとすると、ベイトム隊長はそれを手で制す。

「いや、必要ない。剣を鞘に収めたまま使えばいい。……君もそれでいいだろう」

「かまわねーよ」

「しかし、それではお互い危険では」

「問題ない、私が鞘を落とすことはありえないし、彼女の方の鞘が抜けても彼女の攻撃は、絶対に私には当たらない」

ベイトム隊長は笑みを見せた。

クロコ達は基地の敷地内に入れられた。巨大な基地が立つ広い敷地内は、灰白色の石畳で覆われていた。

門を入ってすぐの場所で、クロコとベイトム隊長は距離を置いて向かい合う。

ブレットは少し離れてその様子を見ている。

兵士が向かい合う二人の間に立つ。それと同時に二人は鞘に収まったままの剣を構える。

クロコはベイトム隊長の構えを観察した。

（このオッサン、兵士のやつがああいっただけあって、確かに隙のない構えをする。さっき街で会ったチンピラとは当たり前だが格が違
うな……）

静かな時が流れる……

「互い、準備は良いですか？」

二人の間に立つ兵士が尋ねる。

「問題ねーよ」

「私もだ」

兵士は二人の返事を聞くと、腕を天に向けた。

「それでは……………始めっ！！」

先に動いたのはベイトムだった。中年とは思えない素早い動きで突進する。

兵士二人がその動きに声を上げる。

ベイトムはクロコとの間合いを一瞬で詰める。

「はあっ！！」

ベイトムが強烈な斬撃を振り下ろすその瞬間、

ビュンッ！！

ベイトムの体が反転しながら吹き飛んだ。

クロコが顔面に一撃を叩きこんだのだ、ベイトムよりもはるかに速く。

吹き飛んだベイトムはそのまま大きな音をたてて地面に引きずられた。

「べ、ベイトム隊長！！」

二人の兵士がほぼ同時にベイトム隊長へと駆け寄る。

しかしベイトム隊長は地面に仰向けに倒れ、白目をむけたままピクピクしている。

ブレットはその様子を冷静に眺めていた。

（はい、ご愁傷様……）

クロコはゆうぜんと立っている。

「ダメだな。この体じゃ、いまいち動かねえ」

クロコは自分の肩に剣をポンツと置くと、満足そうにほえんだ。

「だが、これで何の問題もないな」

1 - 2 入軍試験

灰色の建物が建ち並ぶ街並みの中で、一つだけやたらと巨大な建物がある。四方を高い壁に囲まれたその横長な灰色の建物には、大型の大砲がいくつも取り付けられている。

ここは解放軍フルスロツク基地。

基地を囲う壁の周りを複数の影が動いている。

「すべての班との合流は完了したか」

「はい、完了しました……」

「よし、これより作戦を開始する」

基地の中、白い壁に囲まれた広い廊下を二人の男が話しながら歩いている。

一人の男は年齢二十代後半ぐらい、ずっしりとした大きな体で、少し逆立った黒髪と、力強い眼をしている。どこか活気のある雰囲気だ。

もう一人の男は、年齢二十代半ば、スラッとした長身に、長めの白い髪を後ろで結んでいる。気品のあるきれいな顔立ちをしており、雰囲気は全体的にどこか冷たい。

白い髪の男が落ち着いた口調で言う。

「最近、戦況はあまり良くないようです」

それに黒髪の男が答える。

「らしいな、敗戦の割合も増えてるし。国軍の方は例の『瞬神の騎士の再来』が出てきてから、勢いが増してるしな」

「そうですね、『瞬神の騎士の再来』のようなルーキーはこちらにはここ一、二年出てきてはいませんからね。それに加えて解放軍ができて十年目、志願数の減少によって、兵士一人ひとりの質が徐々に落ちてきています」

「やれやれ、そのせいでオレは訓練官として各地の基地を回る羽目になってるんだが……」

「そうですね、司令官である 그레이さんが不在だと俺も楽ではありませんよ」

「苦勞かけるなファイフ。しかし何とか好転しないんだろうか、この状況は」

「こちらにも『瞬神の騎士の再来』のようなルーキーが出てくれば良いのですが……、そのような存在は軍全体を活気づかせます。しかし現実問題として、今の状態ではそのような存在も出にくいのでしょうね」

二人がそんな会話をしながら廊下を歩いていると、なにやら廊下の先が騒がしいことに気づく。

四人の兵士が慌てた様子で話している。

白い髪の男が気になり、兵士の一人に話しかける。

「どうした？ 何か問題でも発生したか」

「あつ！ アールスロウ副司令！ それにガルディア司令官。いえ、それがついさつき、変な女がここを訪ねて来たらしく、それで、女にも関わらず自分に入軍試験を受けさせる、だのなんだの言ってきた、それでそのいざこざの中で……」

「いざこざの中で？」

「その………ベイトム隊長を殴り倒して気絶させてしまったそうです」

「気絶させた……！？ その女がか？」

「はい、らしいです……それで、その、ベイトム隊長が言いだしたことらしいんですが、自分に認めさせれば入軍試験を受けられるように上と掛け合っていると……いえ、多分追いついたための適当な理由付けだと思うのですが、それで、それが原因で基地の広間で騒いでるんです」

それを聞いて黒髪の男ガルディア司令官が笑う。

「ハッハッハッハッ！！ おもしろい女だな」

「どうでしょうか」

白い髪の男アールスロウ副指令がガルディア司令官をチラッと見て聞いた。

「おもしろいじゃないか！ 受けさせてみよう、入軍試験」

「いいんですか？　 그레이さん……」

「ああ、今決めた！」

基地の入り口から入ってすぐの広間、二階まで吹き抜けになっているその広間で、クロコは複数の兵士を前に立っている。すぐ後ろにはブレッドの姿もある。

クロコは大声で怒鳴る。

「だから！！　おまえらとじゃ話にならないんだよ！　少なくとも外で気絶しているオッサンより上のやつを出せ！」

クロコの高い声が広間中にこだまする。

「いや、だからそれに関しては今検討中で……」

兵士達もクロコの迫力に押され気味だ。
クロコは軽く息を吐いた。

「まったく、約束したオッサンは外でのびてるし……、話しにならねえ」

「おまえが気絶させたんだろ。大体なんで顔面を狙うんだよ、当てれば勝ちだったんだから足や腹を狙えば良かっただろ」

ブレッドがつっこむ。それを聞きクロコが顔を指でかく。

「いや……、それはその場の勢いでな。まっ、過ぎちまったモンはしょうねーだろ」

「おまえなあ……」

二人がそんな会話をしていると遠くから別の兵士が駆け足で近づいてくる。

「おい！ その二人、許可が出たぞ。すぐに試験を行っからこっちに来なさい」

兵士はそう言って二人に手招きする。

「おい、マジか……」

ブレッドは驚いた。

「まあ、結果オーライだな」

クロコは満足そうに言った。

二時間後、解放軍基地の東端にある実技場、木製の床と白い壁に囲まれた広い正方形の空間、上部には大きな木窓が付けられている。その実技場にガルディア司令官とアールスロウ副司令が入ってきた。

「そろそろ面接試験が終了する頃あいだな」

「ええ、あとはここでおこなう実技試験が最後です」

二人は実技場の隅に立つ。

「さーで、どんなもんかな、とくと見物するか」

「あなたも物好きですね」

すると兵士が一人実技場へと入ってきた。

「ようっ！」

ガルディア司令官は気さくに兵士に声をかける。

兵士は二人に気付くと駆け足で近づく。

「ガルディア指令官、いらしていたんですか。アールスロウ副司令まで……」

「……で、どうだ、これまでの結果は？」

ガルディア指令官がそう聞くと兵士はいそいそと書類を取り出す。

「はい、素性検査、身体検査、面接試験が終了しました。今のところ特に問題はないようです。ただ……」

「ただ？」

「はい、面接を担当した兵士が言うには、女の態度が多少ふてぶて

し過ぎだと……」

「ハッハッハッハッ！ 元気そうでいいじゃないか！」

「あと、これは素性検査と身体検査の結果です」

「どれどれ、名前はクロコ……んっ？ 女にしては変な名前だな。クロコ・ブレイリバー、ブレッド・セインアルド、……… 女の方の名前、修正した跡があるな」

「はい、どうも本人、字の、ある一文字をよく間違えるクセがあるらしく、面接で試験官がそれに気づいて修正したそうです」

「そうか、まあ地位は農民って書いてあるし珍しい話じゃないか……ん？」

ガルディア司令官は書類の、ある項目に反応した。

「二人とも出身地がスロンヴィア……」

「……ということは、二人ともスロンヴィア虐殺の生き残りですね」

アールスロウ副司令が少し険しい表情をする。

「国軍の起こした最悪な事件の一つですね。農民を村ごと焼きはらった虐殺事件……」

アールスロウ副指令のその言葉に対しガルディア司令官は黙っている。

「どうしましたか？」

「いや、なんでもない。しかしスロンヴィア出身か」

「入軍理由はおそらくは国軍への復讐でしょうね」

「復讐、か……」

ガルディア司令官は書類を兵士に返す。

そのすぐあと、クロコとブレッドが数人の兵士と共に実技場に入ってきた。

ブレッドは周りを見渡す。

「ここが実技試験の会場か。立派な造りだな」

「ムダに広いな」

クロコはそう言つと兵士を置いてズンズンと実技場の真ん中へと進んでいく。

「なるほど、聞いてた通りふてぶてしい」

ガルディア司令官はクロコを遠くから見ながら笑みを浮かべる。

実技場の中央に立ったクロコは隅に立っているガルディアと目が合う。クロコは遅れて中央に進んできた兵士の一人に話しかける。

「あそこに立つてる男は誰だ？」

「立ってる男って……、あの人はガルディア司令官、ここのトップだ」

「ふーん、あいつが最終試験を見るのか？」

「あいつって……、希望者の入軍試験を行う毎に司令官がわざわざ動くわけがないだろう」

「じゃあ、なんているんだよ」

「そんなことオレは知らんよ。君が騒ぎ過ぎていたからだろう」

「おい、実技試験を始めるぞ」

別の兵士がクロコに呼び掛けた。

クロコとブレットの前で、兵士が説明を始める。

「さつきも言ったが、この実技試験が最後の試験だ。おまえ達はこれから用意する兵士と戦ってもらう。その結果で我々がおまえ達の実力を判定する」

「分かりやすくいいな。要するにその兵士をぶっ飛ばせばいいわけだ」

クロコは自信ありげな表情で言う。

「では、まずはクロコ・ブレイリバー、中央に立て」

クロコは言われたとおりに実技場の中央に移動する。

するとクロコの相手をすると思われる兵士が正面に立った。

兵士は二十代半ば、短い黄色の髪、長い顔と大きな鼻が特徴的だ。

「試験は訓練用の木剣で行うから剣を預かるぞ」

兵士の一人がクロコに寄ってきて言った。

「なんだ……、大事な剣を見ず知らずのやつに預けるのかよ」

クロコは不満げな顔だ。

「クロ、文句言わずに預ける。どっちにしる試験に合格すれば基地にいる全員と命を預け合う関係になるんだ」

ブレッドが遠くから言った。

クロコはそれを聞いてしぶしぶ剣を兵士に預け、木剣を受けとる。

隅に立って見物しているガルディア司令官が口を開く。

「相手の兵士はロブソンか。アイツとベイトム隊長、どっちが強いんだ？」

隣のアールスロウ副司令が答える。

「ベイトム隊長は年齢のせいで動きがだいぶ衰えてきています。今はロブソンの方が上でしよう」

「なるほど、じゃあこれであいつが本物かどうか分かるな」

「ロブソンもベイトム隊長がやられていることは知っているはずですよ。おそらく油断することはないでしょう。しかし……」

「なんだ？」

「もし合格したとして、女の兵士を採用するというのはどうでしょうか。基本的に男の兵士しかいないことになっているので、色々細かい問題が……」

「部屋とか着替えとかか？」

「それもありますし、そのほかにも色々とあるでしょう」

「まあ、いいじゃないか。ようはそんなのが問題にならないくらい強ければいいわけだろ。おまえもさっき言ってただろう？ 強いルークーキーが必要だって」

「それなら確かに文句はありませんが、彼女が果たしてそれほどのものか」

「まあ、見れば分かるさ。おっ！ 始まるぞ」

クロコとロブソンが木剣を構えて、少し離れて向かい合う。

いつの間にか実技場には噂を聞きつけた野次馬の兵士達が見に来ていた。数は二十人以上いるだろう。

その中の兵士数人が話しながらクロコを指さすのを、ブレットが遠目で見ていた。

（入る前からもう有名人だな……）

ガルディア、アールスロウを含めた二十人以上の見物客が周りを囲む中、実技場の中央で向かい合うクロコとロブソン。

審判の兵士が二人の間に立つ。

「それではこれより実技試験を開始します。二人共準備はよろしいですね？」

「ああ」

クロコはそう返事をしたあと、ロブソンをキツとにらむ。

ロブソンも静かにうなづく。

審判の兵士が腕を挙げた。

「それではよい………始」

その瞬間だった。

ブシュッ！

実技場に突然、大量の血が舞った。

……と同時にロブソンが力無く倒れる。

ザワッと兵士達が騒ぐ。クロコもその状況に混乱する。次の瞬間、

ガシャーンッ！

実技場上部の窓が一斉に砕け、それと同時に窓から無数のナイフが実技場全体に向けて飛んでくる。

実技場の所々で血が飛び、実技場全体が混乱と恐怖の悲鳴に満ちる。

それと共に窓から黒い覆面と黒い衣装に身を包んだ者達が二十人ほど、実技場に一斉に侵入してきた。

「な、なんなんだよ、一体……！！」

クロコはこの事態に混乱の声を上げる。

アールスロウ副司令が険しい顔をする。

「くっ！！ アサシン隊……、国軍の奇襲か！」

ガルディア司令官が大声を張り上げる。

「敵の奇襲だ！！ とにかく態勢を整えろ！！」

しかし兵士の半数以上は剣を持たない無防備な状態だった。

黒服のアサシン達は恐ろしいほど素早い身のこなしで、次々と無防備な兵士をナイフで切り裂いていく。

さらに剣を構えた兵士達も、アサシン達の素早い動きに全く対応できず、次々と切り裂かれていく。

その中でブレッドは必死で走り、倒れてた兵士からクロコの剣を取る。

「クロー！！」

ブレッドは叫び、クロコに向かって剣を投げる。クロコはそれを

受けとると素早く剣を抜き、アサシンの一人に突進する。

クロコは一瞬で間合いを詰め、斬りかかる。

ヒュンッ！

しかしアサシンは素早く反応、後ろに跳んでかわす。

「チッ！」

気づけば実技場の味方はクロコ、ブレッド、ガルディア司令官、アールスロウ副司令を残して全てが倒れていた。アールスロウの顔が歪む。

「くそ……！ こんなことが」

アールスロウは剣を構えた。

「待て！！ ファイフ」

ガルディアは素早くアールスロウを止めた。

「なぜです……！？ グレイさん」

「確かめるんだ……。あいつらが本物かどうか」

「何を言っているんですか！？ 正気とは思えない。それにアサシンは特別な訓練を受けた特殊戦闘員、並みの兵士とは格が違う。敵うはずがない……！」

「そうかどうかはすぐ分かる……！ それにいざとなったら……」

ガルディアの額から汗が流れる。

クロコはブレッドと共に中央付近に立った。

「ちょうど左右にばらけてるな……」

クロコはアサシン達の配置を冷静に分析する。

ブレッドは額から冷や汗を流している。

クロコは剣を力強く握ると、ブレッドと背中を合わせた。

「右に十二人、左に八人だ。右はオレがやる」

「わかったよ……、りょーかいだ」

ブレッドの返事と同時に二人は左右に散る。

クロコはアサシンの一人に狙いを定めて突進する。

アサシンはそれを向かいうつように構える。

突然アサシンの前からクロコの姿が消える。次の瞬間クロコはアサシンの横に立っていた。しかしアサシンはそのクロコの動きを目でとらえていた。アサシンは素早く逆へ飛ぶ。

「それで避けたつもりか？」

アサシンの背後から突然クロコの声がした。

ヒュンッ！！

斬撃音とともにアサシンの体が吹っ飛ぶ。

「まずひとり」

クロコはそう言うと、鋭い眼で残りのアサシン達をにらみつけた。思わぬ事態にアサシン達の動きが一瞬止まるが、すぐに三人のアサシンがクロコに襲いかかる。

「陣形も組まずに突進してきやがって、なめられたモンだな」

三人のアサシン、その一人が三本のナイフ飛ばす。三本のナイフは空気を切り裂き強烈な速さでクロコを襲う。クロコは素早く跳び、それを難なくかわす。しかしクロコの飛んだ方向に別のアサシンが回り込み斬りつける。しかしナイフは空を切る。クロコはアサシンの背後を一瞬でつき素早い斬撃を浴びせた。

地面にたたきつけられるアサシン。

しかし残りのアサシン二人が素早くクロコとの間合いを詰め、同時にクロコを斬りつける。

クロコはアサシン二人の斬撃を素早くかわすと、はるかに速い斬撃を返す。アサシン二人の体が飛んだ。

クロコは勢いそのままにアサシンの集団に突撃する。

そして次々とアサシンを倒していく。

ブレッドはそんなクロコの様子をチラッと見て、冷や汗を流す。

「おいおい、女になってもホントめちゃくちゃだな……」

そんなブレッドの背後から一人のアサシンがナイフを持って襲い

かかる。

ヒュンッ！

一瞬の風切り音がした……かと思うとアサシンが力無く倒れた。
ブレッドの右手にはしっかりと剣が握られていた。

「さーで、こうなったらやるっきゃねえな」

ブレッドは剣を振るう。クロコほどの素早く派手な動きはないが、無駄のない洗練された剣技で、次々とアサシン達を仕留めていく。

それら様子をアールスロウ副司令は驚いた様子で見っていた。

「これは、凄いな……。予測の域を超えている」

ガルディア司令官はそれを眺め、ほほえんだ。

「どうやら本物だったな……」

ヒュンッ！

クロコの強烈な斬撃によりアサシンの体が宙を飛ぶ。そして地面に力無く落ちた。

「……………これで全員片づけたな」

クロコは倒れているアサシン達を見回しながら言った。
ブレットがクロコに近づいてきた。

「まあ、こんなもんだろ」

ブレットは笑みを浮かべた。

「あれ……？ 足りない」

クロコがおもむろに口を開いた。

「何がだ」

ブレットが聞く。

「オレの方……倒れてるアサシンが十一人しかいない。一人足りない……」

そう言うときクロコはハッとガルディア司令官の方を見た。するとガルディアの上空で、飛び上がったアサシンがナイフを構えている。そしてガルディアにナイフを突き立てようとしていた。

「……上……！」

近くでアールスロウ副司令がとっさに叫ぶ。

「クソ、間に合わない……！」

ブレットが叫ぶ。

クロコもブレットもアサシンから大分距離があった。しかしクロコは一切迷わずアサシンの方向へ風のように走る。

アサシンは重力に身を任せ、ガルディアの方へナイフを握り落ちてくる。

「うおおおおっ!!」

クロコは大声をあげ力の限り地面を蹴り、飛び上がった。アサシンのナイフがガルディア司令官に突き刺さるであろうその瞬間、クロコの体がその間へ滑り込んだ、と同時に剣でナイフを受け止めた。

「てめえーはおとなしくやられてろ!!」

ヒュンッ!!

クロコは斬撃をアサシンに叩きつけた。アサシンは白目をむいて上空に吹き飛ばされる。それと同時にクロコはガルディアとぶつかる。

「わっ!!」

「うおっ!!」

軽いクロコだけが倒れ込む。

「うおお!! こりゃあ本当にすげーな!!」

ガルディア司令官は驚きの表情を浮かべた。

ブレットはその様子を眺めながらホッと肩を下ろす。

「やれやれ、これでホントに終わりか」

国軍の奇襲という事件から数時間、日はゆっくりと落ちかかっていた。

クロコとブレットはひたすら待たされている。

日が暮れかけてきたため少し暗くなった廊下で、クロコとブレットは二人、壁にもたれかかっていた。

「おい、ブレット、もうずいぶん経つぞ。いつまでここで待たされるんだ」

「しょうがねーよ。あんな事が起こった後じゃそうそう入軍試験程度には対応できないって」

「けっきょく入軍できんのか？」

「さあな、試験は中断しちまったからな。こればかりは分からないな」

「やれやれ、少し疲れた……………」

「おっ！ さすがのクロコ様も今日はお疲れか」

「当たり前だろ……今日は色々あり過ぎた……」

「色々か……」

ブレッドはそう言って今日一日のことを思い出す。そして軽く息を吐いた。

「……………確かに、本当に色々あり過ぎた」

するとクロコがジッとブレッドの方を見た。

「なあ、ブレッド」

「なんだよ」

「おまえはいつも通りだよな。オレがこんな姿になっても」

「おっ、意外だな。実は気にしてたんだな、この姿のこと」

「当たり前だろ、あれだけ入軍試験受けるのに手こずったら」

「ハハハ、確かにな」

「いくら女の姿だからって変な気おこすなよ」

「起こそうって思ったって起こせるかよ。中身がおまえじゃな」

二人がそんな会話をしていると、遠くからアールスロウ副司令が近づいてきた。

「二人とも待たせたな。ガルディア司令官が呼んでいる、司令室まで来てくれ」

「おっ！ やっとお呼び出しか」

二人はアールスロウ副司令の後をついていった。長い廊下を歩き、いくつもの階段を上がった先に司令室はあった。

「よう！ おふたりさん。悪いな長々待たせちゃって、色々立て込んでてな」

ガルディア司令官は二人が部屋に入った途端呼びかける。

「いえ、仕方がないと思ってますよ。あんな事が起こった後じゃ」

ブレットが言った。

司令室には立派な机が正面に置いてあり、そこにガルディア司令官が正面を向いて腰かけている。机には書類が山積みにおいてある。また左右にある大きな本棚には大量の資料が押し込まれていた。

アールスロウ副司令は部屋に入るなりガルディア司令官の横に立ち、クロコ達の正面を向く。

「おい、それより入軍試験の結果は……」

クロコがそう言いかけた瞬間だった。

「合格だ」

ガルディア司令官がパツと答えた。

「おいおい、ずいぶんあっさり……」

クロコはあきれた様子だ。

「まー、二人とも素性検査、身体検査、面接試験、どれにおいても大きな問題はないし、実技に至っては文句なしって感じだからな。まあクロコに関しては『特例』って事になるが、まっ！ 能力的には問題ないからな」

ガルディア司令官が軽い口調で説明した。横でアールスロウ副司令が口を開く。

「とにかく二人とも入軍おめでとう。今日から君達はこのフルスロツク基地の正式な兵士だ」

「よっし！ やったな、クロ」

ブレッドがうれしそうにクロコに言った。

「まあ、当然といえば当然だが」

クロコがふてぶてしくそう言ったその時、突然ブレッドが思い出したように口を開く。

「あっ！ ガルディア司令官、実はこいつ……クロコには一つ問題が」

「問題……？」

その後ブレッドはクロコの呪いに関することをガルディア司令官とアールスロウ副司令に一通り話した。

「ハッハッハッハッ！ おもしろいな、女になる呪いなんて」

ガルディア司令官はおもしろい話を聞いた後のように上機嫌に笑う。

アールスロウ副指令は少しうさんくさいものを見る目でクロコを見た。

クロコは上機嫌に笑うガルディアにあきれた様子だ。

「まったく、笑いごとじゃねーよ」

ブレッドが話を続ける。

「それで、素性検査や身体検査の時は、これ以上の混乱を避けるために女つてことで通すようこいつに言ったんですが、これからのことを考えるとやっぱり、このまま通すには無理があるだろうと思いまして……………こいつの性格も考えて」

「まあ、確かにな。正直に話してくれてありがとう。オレの方でも少しその呪いについて調べてみよう。男に戻ればクロコは今よりも強くなるんだろ？ 頼もしいじゃないか」

ガルディア司令官は笑顔だ。横でアールスロウ副司令が二人の方を見る。

「今の話が仮に本当だとすれば、考慮しなければならない点が多々あるようだな」

「まあ、呪いの件はとりあえずオレ達に任せて、おまえらはまずは基地に慣れることからだな。ああ、それと……」

ガルディア司令官は手を組んだ。

「おまえ達に聞きたいことがあるんだ」

それを聞いてブレッドが反応する。

「聞きたいこと……ですか？」

「ああ、本来オレ達は試験の合否を伝える役目じゃないんだが、それがあるから来てもらったんだよ。まあ、オレ個人の興味みたいなもんだが」

ガルディアはそう言ったあと、二人の方を真っ直ぐに見る。

「おまえたちが入軍した理由を聞きたい」

ブレッドが一瞬キョトンとする。

「入軍理由なら面接試験のときに答えましたが」

「ああ、そうか。だが面接試験の詳しい内容はオレの耳には入らな

いんだ。それに試験用の答えにはあまり興味がなくてな。個人的に聞きたいんだよ、おまえらの入軍理由。もし良ければ教えてもらえないか？」

アールスロウ副司令は横目でガルディアを見ながら、実技試験の前に出身地の話をしたことを思い出していた。そしてその場所で起きた事件のことも……

国軍が起こした事件、スロンヴィア虐殺。

ガルディア司令官は急に真剣な様子になり、真っ直ぐ二人を見る。力強い眼だ。その鋭い眼光はごまかしやはぐらかしなど一切通用しない息をのむような雰囲気放っていた。

その眼にブレッドが一瞬だけ気圧される。しかしクロコは全くひるむ気配がなく、ガルディアの眼を強く見つめ返した。口が大きく開く。

「そんなの、オレ達にとっては決まってる」

クロコは迷いなく言う。

「光を求めてだ」

ガルディアは一瞬、不意を突かれたような顔をした。

「光……？」

「オレ達の出身はスロンヴィアだ。だが三日前までの六年間アーク

「ガルドに住んでいた」

「アークガルド」という単語を聞いてガルディア司令官とアールスロウ副司令はピクツと反応した。

アールスロウ副司令は少し目を細める。

（血と略奪の町アークガルド……）

クロコは話を続ける。

「オレ達は幼いころ、国軍に全てを奪われた。その後、オレ達は町を転々とした。そしてオレ達が生きることのできる場所は、アークガルドしかなかった。だが………あそこは、生きる以外は何も無かった。あったのは暗闇だけだったんだ。誰にも認められない、存在も、生き方も、誇りも。そして何にもなれない……」

クロコの表情が一瞬くもった。しかしすぐに強い眼を取り戻す。

「オレ達が解放軍に入って、そしてもし解放軍が勝てば、オレ達は認められる。そう思ったんだ。この国で生きていていい存在になれる。認められる存在になれる」

クロコは前のみを見つめていた。

「それがオレ達の光だ」

その答えを聞いたガルディアは微動だにせず、クロコを真っ直ぐ見つめている。

二人の視線は全くそれる様子がない。

「復讐は考えていないのか？」

ガルディアは静かな口調でそう聞いた。

ブレットはわずかに反応するが、クロコは全く動じる気配がない。

「確かに国軍は憎い。だがその先に何がある、光はあるのか？」

クロコはしっかりとした口調で力強く言う。

「オレ達は光がほしい。オレ達が求めるのは『希望』ただ一つだ！」

一瞬の静寂。

そしてそのクロコの答えを聞いたガルディアは、ゆっくりとクロコから視線を移した。

そして目をつぶって、何かを考えている様子をしばらく見せる。

そしておもむろに口を開く。

「なるほどな。そうか……、『希望』か」

そう言ってガルディアは、また何かを考えるような様子を見せた。

ガルディアはゆっくりと口を開く。

「答えてくれてありがとうな。少しだけおまえらのことがわかった

「気がするよ」

その後、クロコとブレッドはアールスロウ副指令から一通りの説明を受け、廊下に出された。

廊下を歩きながらブレッドは安堵の表情を浮かべる。

「ふう〜、一時はどうなるかと思ったが、なんとか当初の予定通り無事入軍できたな」

「始めっから問題なかったんだ。オレは男だし、実力的にもなんの問題もなかったんだからな」

「いや、しかし現実問題けっこう厳しかったと思うぞ」

ブレッドはそう言った後、クロコから少し視線をそらす。

（まあ、なんにしろ、この呪いのせいでこいつのトラブルメカぶりに拍車がかかることは間違いなさそうだけどな……）

クロコは少し笑顔を浮かべた。真紅の瞳は、ただ前だけを見つめていた。

「全ては今から始まるんだ」

1 - 3 トラブルメーカー

フルスロツク基地内のある男子トイレ、一人の兵士が用を足しに中に入ってきた。その兵士は年齢十八、九ぐらい、背がとても高く2 m近い、少しはなた赤い髪をしている。

するとトイレにもう一人の兵士が入ってきた。その兵士は年齢十四、五ぐらい、背はとても低く150 cmないだろう。柔らかい灰色の髪をしている。

赤髪の青年は並んで立つ灰色髪の少年を見て声をかける。

「よう、フロウ」

「……ああ、クレイド」

「なあ、フロウ。どうして男は用を足すとき、必ず一つ空けるんだ？」

「そんなこと、僕が知るわけないだろう」

するとスツと二人の間に人影が入る。その人影は長めの黒髪をしていた。そしてその姿は間違いなく女だった。

「む……、前に立ったはいいが、どうやってするんだ？」

クロコは真剣な顔で悩む。左右の二人はクロコのその様子を、目をまんまるくして見ている。

その視線にクロコが気づく。

「なんだてめーら、なんか文句あんのか」

クロコは首を動かし左右の二人を鋭くにらむ。

「おおありだっ！！」

ブレッドが背後から大声を出してクロコを殴った。

「いってゝ、何しやがんだ！ ブレッド！」

クロコが怒鳴る。

「それはこっちのセリフだ！！ とにかく出るぞ」

ブレッドはそのままクロコの手を引っ張り、トイレから出ようとする。

「あつ、コラ！ 離せ！」

「二人ともどうもすいませんね。こいつには強く言っとくんで」

ブレッドはトイレの二人に謝ると、クロコを引っ張って廊下に出ていった。

その様子をトイレの二人はぼうぜんと見ていた。

「フロウ……なんだアレ……………」

「僕が……知るわけないだろう……………」

ブレットはトイレを出て少し離れたところまでクロコを引っ張ると、手を離れた。そしてクロコをにらみつける。

「……ったく！ おまえなに考えてんだ！ この姿で男子トイレに入るかフツ」

「男なんだから男子トイレに入るのは普通だろ」

クロコは反省している様子はない。

「……おまえ、アールスロウさんが説明したこと覚えてるか？」

「………なんか言ったけか？」

「いいだろう、もう一度オレが説明してやる……一つ、トイレは女子トイレを使用すること。二つ、着替えは個室か、アールスロウさんが用意してくれた特定スペースのみで行うこと。三つ、更衣室の使用は特定時間のみ、シャワ も単体。まずこの三つだけは最低頭に入れる！」

「そういえば言ってたな、そんなこと。メンドくさいからあんま聞いてなかった」

クロコは興味なさそうな顔でブレットから目をそらす。しかし少し何かを考えたあと、突然叫ぶ。

「……って、おい！！ なんでオレが女子トイレ使うんだよ！！」

「バカヤロウ！ 混乱を避けるために決まってるだろうが」

「バカはどっちだ！ 男のオレが女子トイレに入っていていいと思ってるのか！」

「……………いいんだよ、女子トイレは全部個室だ。この姿で堂々と入って、そして堂々と出てこい」

「そ、そんなことできるわけないだろ……！」

「そんなことにだけ縮こまるな……！」

基地の司令室、立派な机に腰掛けるガルディア司令官、その正面にアールスロウ副司令が立っている。

アールスロウ副司令は書類を見ながらガルディア司令官に報告する。

「昨日起こった国軍襲撃事件の被害は死者六名、重傷者十七名とのことです」

「六人も死んだのか……」

ガルディアは深刻な表情だ。

「あの状況を考えると死者数は少ないと言えます。アサシンにやら

れた全員が死んでいてもおかしくはなかったでしょう」

「確かにそうかもしれないが……」

「今回のアサシンの襲撃の目的は、 그레이さん、あなたの可能性が高い。アサシンの最後の一人の行動を見てもわかることです」

「敵もずいぶん思い切った手を打ってくるな」

「今回の件ではこちらの基地の情報が敵側に漏れていた可能性が考えられます。まずは情報統制を早急に修正、整理する必要があります」

「そうか、また忙しくなりそうだな。……でそんな時に悪いんだが」

ガルディアは少し申し訳なさそうな顔をする。

「なんですか」

「本部からスフォード基地に訓練官として行くように、っていう要請がきてな。こんな時に悪いんだが、また基地をおまえに預けることになる」

ガルディアは要請書をペラペラと見せる。

それを見てアールスロウは少しだけ肩を落とした。

「分かりました。いつものことなので、もう慣れましたよ」

「悪いな……、それでクロコの件だが、その呪いについてはその基地の連中から色々聞いてみるつもりだ。ただそれ以外は全部おまえ

に任せちまうことになる」

「これに関しては仕方がないですね。本部からの要請なので」

「あとクロコに関しても頼む」

「そうですね。彼女、いや彼は、見て判断する限りこれから色々問題を起こすでしょうしね。……これで、解放軍において『特例』は二人になるわけですか」

「そうだな、『戦乱の鷹』以来ってことになるな」

「それと一つ、呪い以外で彼について気になることがあるのですが」

「なんだ？」

「彼が倒したアサシン、全て急所を外していました」

「急所を……」

「ええ、もしかしたら彼はまだ……」

「……………ああ、そうかもな。ただ、今はまず、あいつに対して真っ先にやる必要がある」

「……………？　なんでしょうか」

「天狗の鼻を折ること、かな」

「……………？」

基地の廊下の一角、ブレットは壁にもたれかかっている。
突然横のドアが乱暴に開く。

「ブレット、見ろ、ピッタリだ」

クロコが黒の軍服に身を包んで現れた。
それを見たブレットがほえむ。

「いちばん小さいサイズだけだな。サイズが合ってよかったよ。なければ特注しなきゃいけないらしいからな」

「ああ、だが少し胸のあたりが苦しいな」

「男用だからな、女用はないし」

「まあ、仕方ねーか。女用なんてあっても絶対着ねーし。しかし軍服を着るといよいよ軍人になったって気がするな」

「確かにな」

「だけど、軍服なんてしゃれたモンよく作るよな。だってここ反乱軍だろ？」

「ファントムってやつがこの軍をかなりのレベルまで組織化させたそうだからな。軍服もその一つだろ。十年も戦ってるんだ、ある程

度の組織じゃないと続かねーだろ」

「ファントムか……どんなやつなんだろうな」

「さあな、ヘルムで顔隠してるらしいし、名前も偽名だし、正体不明の英雄ってやつだな」

「正体不明か……」

クロコはそう言ったあとハッとした。

「そんなことより呪いを解かねーと！ サイズなんか合わせってたてしよーがねー！！」

「けど見通しがないからな。今は基地に慣れることじゃないか」

「指輪ごと指切っちゃまうか」

「おまえ、怖いこと言うな」

「ヘタしたら一生この姿だぞ。それぐらいだったら、いつそ……」

クロコは自分の剣に目を移す。

「やめとけって、それで元にもどる保障はないんだからよ。得体の知れないものだからな。それにガルディアさんが呪いの件について調べてくれるっていうし、今は様子を見た方がいいだろ」

「信用できるのかよ、あの男」

「呪いのスペシャリストだって解き方がわからない呪いだ。オレ達個人で探したってそうそう見つからないだろ。ガルディアさんなら一応司令官だし人脈がある」

「スペシャリストって……、あの女が、完全に自称だろ」

「とにかく、指を切るよりマシだろ。利き腕だから剣技にだって影響するだろうし」

「確かにそうだが……」

「じゃあオレは着替えてくるからな。時間もあるし着替えたらずし基地を回ろう」

基地の廊下の端、ほとんど人通りのない薄暗いこの場所で、少年の兵士が一人、青年の兵士三人に囲まれていた。少年は年齢十二、三ぐらい、小柄で、一か所はねた黄色い髪、ぱっちりとした目と透き通るような緑色の瞳をしている。

対する周りを囲む青年達は十代後半ぐらい、三人とも大柄だ。

「調子に乗ってんじゃねえよ！ ザコのくせに」

青年の一人が少年の腹を乱暴に蹴り飛ばす。

「うっ………！」

黄色い髪の少年は苦しそうに倒れこんだ。

少年を蹴った青年は三人の中でも特に大きかった。

その青年は筋肉質なうえ190cmほどの巨体だ、黒髪でたれ目、太く上を向いたまゆ毛をしている。蹴られて倒れこむ少年を見てニヤリと笑う。

そしてその巨体の青年は少年の腹をさらに下から蹴り上げた。

「ぐっ……！！」

うめくような叫びと共に少年の体は軽く浮き上がった。

少年は体を丸めて苦しそうに震える。

その様子を三人の青年は楽しそうに見ている。

少年は何とか声を絞り出す。

「何で……こんな事……するんだ。ボクに対して、いったい、何の恨みが……あつて……」

黄色い髪の少年は腹を苦しそうに押さえながらも必死でにらむ。

「おい、なんだその態度は……？ 目障りなんだよ！ てめえみてーなチビに実技場でチヨロチヨロされるとよ！」

巨体の青年は大声で怒鳴る。

その青年の左右にいる二人はその様子をニヤニヤと笑いながら見ている。

黄色い髪の少年は歯を食いしばる。

「今は弱くたって、一生懸命訓練すれば強くなれるってガルディア司令官が言ってた」

黄色髪の少年は口を震わせながらも青年達をにらむ。

「ハハハ、おまえバカか？ なにクソまじめに司令官の言うこと信じてんだよ。おまえみたいになザコ、一生強くなんかなねーよ！」

巨体の青年は再び少年の腹を蹴り飛ばす。

「うっ……！！」

少年は苦しそうにうずくまる。

「てめえみてーなザコは支援員でもしてりゃーいいんだよ！ ザコ」

大柄の青年達は少年が苦しむ様子を楽しそうに見ている。

しかし黄色髪少年は腹を苦しそうに押さえながらも、顔を上げ懸命に立ち上がり、再び青年達をにらみつける。

「ボクだつて……！！」

黄色髪少年は腰に付けていた木剣を手にとって構えた。

「おいおい、オレとやるつもりかよ。ザコのくせに頭も悪いんだな」

巨体の青年はそう言って頭をチョンチョンと叩くしぐさをする、両脇の二人がケラケラと笑う。

そして巨体の青年は鞘に納めたままの剣を構える。

青年の巨体は黄色髪少年の体の軽く二倍はある。少年はそれでもひるまず、強い目で青年を見る。

「うあああー!!」

黄色髪の少年は突進する。

巨体の青年は少年よりも明らかに間合いが長い。そのため少年を向かい打つ形で構える。そして大振りの一撃を少年に向けて放った。

ビュン!

しかし少年はその斬撃を紙一重でかわすと懐に入った。そして少年は腹に向け全力の一撃を放つ。

ゴッ!

少年は一撃を浴びせた。しかしそれにも関わらず青年の巨体は微動だにしない。青年は表情一つ変えずに少年を見る。

ドッ!!

すかさず巨体の青年の蹴りが少年に向かって飛び、脇腹を直撃する。

少年の体は飛ばされ、地面に倒れ込む。

「攻撃が軽過ぎて話にもならねえな」

「うつ……うつ……」

黄色髪の少年は苦しそうにうなりながら、くやしそうな表情で歯を食いしばる。

その様子を見下して青年達は満足そうに笑った。

「ハッ、ザコにもほどがあるぜ。てめえみてーなザコが戦場で真っ先に死ぬんだよ！」

「確かに、おまえみたいなザコが戦場で真っ先に死ぬんだろうな」

突然高い声が暗い廊下に響く。

青年達は少し驚き、声の方向を見た。その方向からクロコがゆっくりと歩いてくる。

「今の勝負、もし真剣だったらてめえが真っ先に腹切られて死んだな」

クロコは巨体の青年の方を見た。

「なんだあ！ おまえは」

巨体の青年はクロコをにらみつける。仲間の青年が口を開く。

「こいつ、例の新人じゃないか？ 女なのに『特例』で兵士になったっていう」

それを聞いて巨体の青年はニヤリと笑う。

「なるほど、女とはいえ兵士だ。教えてやらないとな、強い者になてつくとどうなるかってことを」

巨体の青年は鞘に収まったままの剣をクロコの方へと向けた。

「じゃあオレも教えてやらないとな、オレに剣を向けるとどうなるかってことを」

クロコは鋭い眼でにらむと、鞘に納まったままの剣を向ける。

「おい、クロ！ 入軍してそうそう基地のやつにケンカ売るなよ」

クロコの少し後ろにいたブレッドが止めに入った。

「うるせー、先に剣を向けたのはあのゴリラだ」

「てめ……！ 誰がゴリラだー！！」

巨体の青年はそう叫びながら突進してきた。しかし青年の前から突然クロコの姿が消える、と同時に青年の懷に突然クロコの姿が現れる。

「え……！？」

ゴツ！

クロコは剣の柄でおもいつきり青年のあごを打ち抜いた。巨体は軽々と宙を舞い、頭を天井にぶつけ、さらに天井に跳ね返され、ドスンと大きな音をたてて床に叩きつけられた。

廊下に倒れ込んだ青年に仲間の二人が駆け寄る。

「お、おい、冗談だよな……？」

しかし巨体の青年からの返事はない、完全にのびてしまったようだ。

「おまえらもやるか？」

クロコは仲間二人を鋭くにらむ。

「う……」

二人はおびえた顔でクロコを見ると、巨体の青年を置いてそそくさと逃げていった。

ブレッドはあきれた様子で見ている。

「相変わらずムチャクチャだな」

「先に剣を向けたのは相手だろ」

「先にケンカを売ったのはおまえだけだな」

「あの……ありがとうございます」

倒れていた黄色髪の少年が、体を起こしクロコに礼を言う。

「別に、おまえを助けた訳じゃない。剣を向けてきたのは相手だからな」

少年はゆっくり視線を落とす。

「……ボク、弱いから、だからあんなやつらに……」

「さっきの勝負はおまえの勝ちだった。まあ、弱いってのは間違いないな」

クロコはそう言ったあと、辺りをキョロキョロと見回す。

「それよりも……ここどこだ？　ひと気がないし、基地を回ってたら迷っちゃって」

「そ、それじゃあ僕が案内しますよ。基地は広いですし！」

黄色髪少年はふらふらと立ち上がった。ブレットが心配そうに声をかける。

「おいおい……、ケガは大丈夫なのか？」

「これくらい、大丈夫です！」

その言葉を聞いてクロコが口を開く。

「じゃあせっかくだから頼むか。おまえ名前は？」

「サキ・フランティスといいます」

「オレはクロコ・ブレイリバー」

「ブレット・セインアルドだ」

「よ、よろしくお願いします」

「じゃあサキ、ついでに言っておくがオレは女じゃない、男だ」

「おと………え？」

サキはキョトンとした。

その様子をアールスロウが道の角から遠目で見ていた。

「なるほど、天狗の鼻か」

アールスロウはポツリと言った。

（どうやら俺が動かなければならないようだな）

1 - 4 賭け勝負

朝日がゆつくりと昇り、基地全体を優しく照らす。

クロコ達が入軍してから三日目の朝を迎えていた。

鳥のさえずりが聞こえる中、基地敷地内の石畳の一角でクロコとブレッドは二人、木剣で稽古している。

二人は素早く正確な剣技で互角な打ち合いをする。

しかし次の瞬間、クロコが持ち前のスピードを生かし無理矢理ブレッドの隙をついた。

ビュンッ！

「いって！」

ブレッドは打たれた腹を押さえながら倒れる。

「この体になってもまだオレの方が強いみたいだな」

クロコはうれしそうに笑みをこぼした。

「この！ 本当に生意気なヤローだな、おまえは」

ブレッドは少し悔しそうに笑った。

「ここにいたのか。二人とも」

突然離れたところから声が聞こえた。

二人が声の方向を見ると、一人の長身の男が近づいてくる。このフルスロウ基地の副司令アールスロウだ。

「クロコ、君に用がある。一緒に実技場まで来てくれないか？」

アールスロウは落ち着いた口調で言った。

「実技場？ 別にいいけど」

「よし、それではすぐに移動だ。ブレット、君も来るか？」

「……行かせていただきますしょう」

その後クロコとブレットは、アールスロウと共に実技場に移動する。

実技場、木製の床と白い壁に囲まれた広い正方形の空間、アサシンに壊わされた木製窓はもう修理されていた。

その実議場の中央にクロコ達は立った。

「……で、ここで一体なんの用だ？」

「クロコ、君がこの基地に入ってから三日目になる。率直に言っこの基地の印象はどうだ」

「印象って言われてもな」

「君はこの兵士ともう二度対決している。その兵士達の実力は君にとってどう感じた？」

「……正直に言つと話にならないぐらい弱かった」

「ならば君は、君より強い兵士がこの基地にいると思うか？」

「……………正直これまでの印象だと、オレより強いやつはこの基地にいないな」

「最後にもう一つ質問だ。君は剣の勝負で負けたことがあるか？」

「……………、なくはないな。剣の腕が未熟な頃はよく負けてた。ただここ数年間は負けた記憶はないな」

「そうか、そこまで分かれば十分だ」

アールスロウは腰に付けていた木剣を右手に持った。長剣を模した長い木剣だ。

「君は今から俺と勝負してもらおう」

「は…………？」

クロコは思わず声を出した。

「君が負けた場合はトイレ掃除を一週間やってもらおう」

「…………！ なんでいきなりそんなこと」

「必要だから、とだけ言っておこう。それとも怖いのか？」

「だれが！」

「なら始めよう。それではルールを説明する」

「ルール？」

「ルールは簡単だ。君は俺と木剣で対決する。俺が君に攻撃を十発当てる前に、君が俺に攻撃を一発当てれば、君の勝ちだ。逆に俺が勝つには、君の攻撃を一発も当たることなく、君に十発攻撃を当てる必要があるわけだ」

「……………はっ？」

クロコはその説明を聞いてぼうぜんとした顔をする。

「アールスロウさん、それはいくらなんでも」

「ブレット……、君はその言葉を何の根拠があって言っているんだ？」

アールスロウはブレットを冷たい目つきで見た。

「ふざけんな！　こんなルール！」

クロコが口調を荒げる。

「なんだ、自信がないのか？」

「あるに決まってるだろ！」

「ならば問題はないだろう。それでは始めよう」

「ちょっと待て、その前に一つ！ あんたが負けたらどんなペナルティーを負うんだ」

「そうか、それは考えていなかったな。なら、俺が負けた場合は君の言うことを何でも一つ聞こう」

それを聞いてクロコはニヤリと笑う。

「なんでも一つだぞ？ おもしろい、勝負してやるよ」

「ならば始めよう」

互いに少し離れて向かい合う。

二人は真剣な顔つきに変わり、互いに木剣を向ける。

クロコは真紅の瞳を鋭く光らせ、相手をにらむ。

アールスロウは冷たい目つきで、相手を静かに見つめる。
ピリピリとした空気が実技場を包み込む。

「来い……」

アールスロウが静かに言った。

「言われなくても！」

クロコはそう言ったと同時に、一瞬でアールスロウの懷に飛び込む。クロコの素早い斬撃。アールスロウはそれを紙一重でかわす。直後アールスロウが強烈な斬撃を放つ。長い木剣が強烈にしなり、空気を切り裂きながら高速でクロコを襲う。

(はやつ……！)

クロコはその斬撃の速さに驚く。

「くっ！」

ビュウンッ！

クロコは体を後ろに曲げ間一髪でアールスロウの斬撃をかわす。
しかし上体を少し崩した。素早く次の斬撃が飛ぶ。

ビュウンッ！

クロコは上体を素早く戻し紙一重でよけた、と同時にクロコは一瞬でアールスロウの左につき斬撃を放つ。アールスロウはそれに一瞬で反応し受け止める、と共に剣を回転させクロコの斬撃を流した。一瞬クロコは姿勢を崩す。アールスロウは素早く次の斬撃を放つ。姿勢を崩されたクロコは一瞬反応が遅れる。しかしクロコは体を最大限に曲げ斬撃から逃れようとする。

ビュウンッ！

斬撃はわずかにクロコの首をかすった。

「まずは、一発だ」

アールスロウが静かに言った。

「なっ、首にかすっただけだろ！」

クロコが素早く反論する。

「……今の一撃がもし真剣によるものだったら、君の首は切れていた。その箇所を切られれば十中八九助からない。つまり、君は死んでいた」

「……！」

「とはいえあと九回ある。その間に一発でも当てれば君の勝ちだ」

「そんなこと分かってる……！」

クロコは怒鳴る。

離れて見ていたブレットは、二人の対決を一通り見て冷や汗を流す。

（なんてレベルだよ……）

クロコは再び剣をアールスロウに向ける。アールスロウを見つめる眼はさっきよりも鋭くなっていた。

アールスロウは変わらす冷静にクロコを見つめる。

クロコの眼に力が入る。

クロコは動いた。さっきよりもさらに速いスピードで突進する。

アールスロウはそのスピードにも反応し、動きに合わせカウンター気味に斬撃を放つ。クロコは素早く反応し受け止めると、高速の斬撃を連続で放つ。アールスロウもそれに応戦する。二人の斬撃が高速で飛び交う。

実技場全体に木剣同士がぶつかり合う音が響き渡る。その連続で響きわたるテンポの速さは、とても二人だけの木剣のぶつかり合いとは思えない。まるで十人以上の兵士が同時に戦っているかのようだ。

アールスロウはリーチの長い斬撃をコンパクトにまとめ、クロコの動きに合わせてタイミング良く打ち込んでくる。

対するクロコは自分の動きに合わせる厄介な斬撃に対し、持ち前のスピードで強引に対抗する。

次の瞬間、アールスロウはクロコの連続で放つ斬撃の一つを流した。クロコは先ほどと同様に体勢を崩される。アールスロウは先ほどとは違いすぐに斬撃を放たず、一歩踏み込み、近距離での高速の斬撃を放つ。

ビュウンッ！

斬撃は空を切る、クロコの姿が突然消えた。次の瞬間クロコは素早くアールスロウの背後を取っていた。アールスロウは反応し素早く後ろに振り返り、防御の姿勢をとる。しかし再びアールスロウの視界からクロコが消えた。

「なに……！」

アールスロウはハツとする。クロコは上空に飛び、全力の一撃を放つところだった。アールスロウの反応は一瞬遅かった、防御は完全に間に合わない。

「おおおおっ……！」

クロコは全力の斬撃を打ち下ろす。

ビュンッ！！

斬撃は空を切る。アールスロウがわずかに早く体を横にそらしていた、クロコの斬撃を間一髪でかわす。仕留めたと確信していたクロコはこの大きな空振りで隙を作る。

ビュウンッ！

アールスロウの斬撃がクロコの脇腹を直撃した。空中で吹き飛ばされ、地面に転がるクロコ。

「つつっ！　クソ、あと少しだったのに……！」

悔しがるクロコ。

「これで君は二回死んだことになる」

アールスロウは表情を変えずに冷静な口調で言った。

「次は当てられる。当ててやる！」

クロコは再びアールスロウをにらみつける。

実技場の窓から入る日の光が少しだけ強くなった。クロコとアールスロウの勝負が始まってから三十分が経過していた。

実技場からは先ほどまで響いていた木剣同士がぶつかり合う音は消え、中は静まりかえっていた。

わずかに響くのはクロコの息切れだけだった。

「これで君は9回死んだな」

「ハア……ハア……ハア……」

「これで君のチャンスはあと一回、次で最後だ」

ブレットはクロコの様子に息を飲む。

「信じられねえ、あのクロコが……」

「ハア……ハア……」

クロコはゆっくりと息を整え始める。

クロコは息が整うと、鋭い眼でアールスロウを睨みつけ、剣を構えた。

「一回……、それだけあれば十分だ。オレがただやられてただけだ
と思うなよ」

「思っていない、最後の三回、つまり七、九回目は俺の動きを観察するためにワザと消極的な戦い方をしたな。最後のチャンスにかけるために」

クロコは自分の意図を完全に察していたアールスロウの発言に――

瞬驚くが、すぐに表情を戻した。

「分かってたからなんだ……！ あんたの動きはだいぶ見えてきた。それは変わらねえ……！」

クロコの真紅の瞳は今までにないほど強く輝く。

その様子を見てアールスロウは冷静にクロコを観察する。

（彼の今の技術を考えれば、もう全ての策を出し尽くした感がある。しかし彼のあの眼、何かを狙っている。何をする気だ）

アールスロウの眼に初めて力が入る。

クロコの眼がさらに鋭さを増す、と共にクロコはアールスロウに突進してきた。しかしアールスロウの間合いギリギリ外で動きを止めると、左右に俊敏に動きアールスロウをかく乱しようとする。

（さすがに最後ともなると慎重だな……）

アールスロウはクロコの動きを冷静に目で追う。次の瞬間クロコの姿が消える。

（右！）

右に回るクロコにアールスロウは素早く反応をする。しかし再びクロコの姿が消える。

（後ろ！）

後ろに回り込むクロコにまたもアールスロウは素早く反応する。

しかしさらにクロコの姿が消える。

(……上か！)

上に飛ぶクロコをアールスロウの目が追いかける。

(上に飛べばもうこれ以上は動けない！)

クロコは飛んですぐ攻撃に移れるように、さっきよりも低めに飛んでいた。クロコは素早く攻撃に移る。

「ハアツー!!」

クロコの横に振り抜く斬撃がアールスロウを襲う。アールスロウは斬撃を間一髪で止める。二度目のジャンプのためアールスロウの反応も速くなっていた。

(これで……)

アールスロウが一瞬油断した時だった。

「あぁーっ!!」

クロコは空中でアールスロウの剣をありったけの力で左にはじいた、そしてその反動を利用し体を浮かせたままアールスロウの右側に滑り込んだ。そのクロコの突拍子もない策にアールスロウは驚く。右側に回り込んだクロコ、左側にはじかれたアールスロウの木剣、勝利の条件がそろった。

「これで!!」

ゴッ！

クロコの斬撃がアールスロウを仕留めることはなかった。斬撃よりもわずかに早くアールスロウの鋭い蹴りがクロコをとらえた。クロコは空中で完全に体勢を崩す。すかさずアールスロウの斬撃が飛ぶ。

ビュウンッ！

アールスロウの斬撃がクロコに直撃した。クロコは吹き飛ばされ、床に転がった。

「これで……終わりだ」

アールスロウは静かな口調でゆっくりと言った。

「……………！！」

クロコは床に手をつけたまま立ち上がろうとせず、声にならない悔しさを噛みしめている。

「君の負けだ」

アールスロウはクロコを見下ろしながら言った。

「……………」

クロコは黙っている。

「今までの状態の君ならば、己の力を過信して自らをきゅうちに落ちいらせかねなかった。そのため、このような方法をとらせてもらった」

「……………こんな……………こんな体じゃなかったら、負けなかった」

クロコは下を向きながら静かに言った。

「確かにそうかもしれない。君が男の体だったなら、俺と互角以上に戦えた可能性は十分にある。しかし今の君はその体だ。仮にそうであったとしても、その事実はいくつがえらない」

「……………!!」

「君の負けだ」

アールスロウはそう言って、出口に向かって歩き始める。

「クロ……………」

ブレッドがクロコに歩み寄る。

出口の前に立ったアールスロウは少しだけ後ろを振り返った。

「それともう一つ言っておくが、この司令官、ガルディア司令官は俺の十倍強い」

「……………なっ!？」

クロコは思わず声をあげた。

「強くなりたいと思うのなら、俺の部屋まで訪ねて来い。暇なら稽古をつけてやる。はっきり言って剣の技量だけなら君は俺より数段下だ」

アールスロウはそう言い残して実技場から出ていった。

「……………この、誰が、誰がおまえなんか教わるかー!!」

クロコは大声で叫んだ。

「クロ…………」

「クソ、クソ、絶対に、絶対に今よりもっと強くなってやる…………!!」

クロコの絞り出すような叫びが、実技場に静かに響いた。

一方、廊下を歩くアールスロウは先ほどのクロコとの勝負を思い出していた。

（想像以上だったな。油断すればやられていた。……………楽しみなやつだ）

アールスロウはわずかにほほえみを浮かべた。

1 - 5 初任務

ゴォーンゴォーン

教会から昼の鐘が響き渡る。

クロコとブレッドは基地の廊下を歩いている。

クロコ達が入軍してからすでに十日間が経っていた。

クロコはいまだにアールスロウに負けたことを引きずっていた。朝のブレッドとの稽古も異常に熱が入り、そのせいでブレッドは体中を痛めていた。しかもクロコの鋭い眼も、いつも以上に鋭くなり、そのせいでほぼ一日中顔を合わせているブレッドは心労気味だ。

「おい、クロ」

ブレッドはたまらずクロコに呼びかけた。

「いつまで負けたこと気にしてんだ」

「別に気になんかしてねえ」

クロコはぶっきらぼうに答える。

「ウソつけ、明らかに顔にも行動にも出てるぞ」

「うるせえ、クソ！ 一日でも早くアイツより強くなってやる」

「おいおい、おまえの戦う相手はアールスロウさんじゃなくてグラ

ウド国軍だろ」

「うるせえ！ あいつのせいでオレは昨日まで基地中のトイレというトイレを掃除させられたんだぞ！ しかも兵士の一人が『がんばれ、トイレのお嬢さん』なんて言いやがって、絶対ゆるさねー！」

「まあ、確かにありやあ災難だったな、けどとりあえず少しは落ち着けて、そんなに力んだっていいことないだろ」

「……………」

「前に進もうとすることは良いことだけどよ、焦せり過ぎてもしょうがねーだろ？」

クロコは少し考える様子を見せた。

「……チエツ、分かったよ」

ブレットはその様子を見て少しホッとした。

ほぼ同時刻、フルスロック基地に一人の兵士が入って来た。
その兵士は司令室のアールスロウに書類を手渡す。

「緊急援軍要請か……」

兵士が出ていったあと、アールスロウは要請書の内容を見てボソツと言った。

一時間後、基地の二階にある食堂、とても広い部屋には多くのテーブルが置かれている。

昼時のためテーブルには多くの兵士達が腰掛け、ワイワイと騒いでいた。

その中にクロコとブレッドの姿もあった。

クロコは大きな馬肉のステーキ、ブレッドは肉と野菜がたっぷり入ったパイを食べている。

そんな二人にひとりの兵士が近づいてきた。兵士は二十代半ば、短い黄色の髪、長い顔と大きな鼻が特徴的だ。

「ブレイリバー、セインアルド、招集だ。司令室まで来るようにとのことだ」

「ん？ ああ、分かったよ」

ブレッドがパイを片手に返事する。

「確かに伝えたぞ」

兵士はそう確認するとそのまま立ち去っていった。
クロコは立ち去る兵士の後ろ姿を見ていた。

「アイツ、なんかどっかで見たことあるな」

「ロブソンだろ。ほら、入軍試験の実技試験の時におまえの相手を

するはずだった兵士だよ」

「ああ、アサシンに派手にやられたやつか。生きてたのか」

「おいおい、勝手に殺すなよ。たぶん重傷は負ったが命に別状はなかったんだろ。ああやって復帰してるし」

「ふーん」

「それより呼び出した。ガルディアさんは今留守だし、アールスロウさんだよな」

「アールスロウか………いつたい何の用だ」

クロコの顔がまた不機嫌になる。

「まあ、何の用かは行ってみないことには分からないさ」

司令室、アールスロウは立派な机に腰掛け、机に山積みになっている書類を整理している。

ドアがノックされた。

「入りましたえ」

ドアが乱暴に開かれる。

「アールスロウ、いったい何の用だ」

鋭い眼でにらみながらクロコが入ってきた。

「俺は別に君と争うつもりはないんだが」

アールスロウはクロコの顔を見るなりそう言った。少しあきれた表情だ。

「なんだと……！」

クロコはさらに鋭くアールスロウをにらみつけた。

「おまえいったい何しに来たんだよ」

遅れて入ってきたブレッドがつっこむ。

「……で、何の用だよ」

クロコはアールスロウに問いかける。少し落ち着いたようだ。

「ではさっそく要件を言わせてもらおう。今より約一時間前、ウォズレイ基地より緊急の援軍要請が届いた。君達はその援軍部隊の一員としてウォズレイ基地へ向かってもらいたい」

ブレッドは少し驚いた表情をした。

「援軍部隊って……」

「無論、入軍仕立ての君達をいきなり援軍部隊に加えることは、無

理があることは承知の上で言っている。しかし現在この基地は情報管理が整っていない状態にある」

「情報管理って、先週の奇襲事件に関してですか？」

「ああ、それも当然含めてだ。そのため規模の大きい援軍を送り、基地の兵士を減らすことは非常にリスクがともなう。そのため少数精鋭の部隊を構成する必要があつた」

「要するにオレ達は選ばれたメンバーって訳か」

クロコは腕を組みながら言った。

「少数というと何人なんですか？」

「五人だ」

「……！！　　またずいぶん少ないですね」

「残り三人もすでに呼んである。じきにここに来るだろう」

アールスロウがそう言ったすぐあとだった。

コンコン

司令室のドアをノックする音が聞こえた。

「入りましたえ」

司令室に二人の兵士が入ってきた。

一人は年齢十八、九ぐらい、背がとても高く2 m近い、少しはねた赤い髪と鋭い目をしている。どこかやる気のなさそうな雰囲気を持っている。

もう一人は年齢十四、五ぐらい、体はとても小柄で背は150 cmないだろう。柔らかい灰色の髪と、きれいに整った顔をしている。

二人とも部屋に入るなりピシッと敬礼する。灰色髪の少年の方が口を開く。

「フロウ・ストルーク、クレイド・アースロア二名、召集を受け参りました」

「あっ……」

クロコは入ってきた二人の顔を見て、思わず声をもらす。

「あっ！」

入ってきた二人もクロコの顔を見て、思わず同時に叫ぶ。クロコが二人の方向を指さす。

「いつかのトイレコンビ」

赤髪の青年もクロコを指さす。

「いつかの Hentai 女！　って誰がトイレコンビだ！」

「誰が Hentai 女だ！！」

二人がワーワー言い合う。横で灰色髪の少年がポツリと言う。

「下品な呼び方は止めてよ」

「まあまあ、落ちつけて」

ブレッドが場を収める。

その様子を見ていたアールスロウは、顔には出さないが完全にあきれていた。

アールスロウが口を開く。

「……………とりあえず紹介しよう。赤い髪をしているのがクレイド・アースロア、灰色の髪をしているのがフロウ・ストルークだ。クレイド、フロウ、君達にも紹介しよう。最近入軍してきた新米兵だ。黒い髪をしているのがクロコ・ブレイリバー、茶色の髪をしているのがブレッド・セインアルドだ」

「こいつらが精鋭なのか？」

クロコが疑わしそうな目で二人を見た。

「ほとんど無名だが、実力的には高い。おそらく基地内では三、四番手の実力者だ」

「三、四番手？ あんたは何番手なんだ」

「俺はおそらく二番手だろう」

「あんたに次ぐ実力者か、って、こいつらがオレより強いって言いたいのか！？」

「経験の面では君よりはるかに上だ。君は戦場を経験していないからな」

「なんか納得いかねえな」

クロコは不満げに言った。その様子を見た灰色髪の少年フロウがボソッと口を開く。

「ずいぶん自信家だね……」

「自信だけだろ」

続けて赤髪の青年クレイドがクロコを見下ろしながら言った。

「なんだと……!」

クロコが見上げながらクレイドをにらむ。

「そつえば、精鋭は五人って言いましたね。あとの一人は？」

ブレッドがクロコの様子を見て、すかさずアールスロウに話を振った。

「もう間もなく来るだろう」

ガチャッ!

ドアがいきなり開いた。

「サキ・フランティス、召集を受け参りま……あつ！　すみせん、ノック忘れました」

「構わない、入りたまえ」

入ってきた少年は年齢十二、三ぐらい、小柄で、一か所はねた黄色い髪、ぱっちりとした目と透き通るような緑色の瞳をしている。

「あつ！　サキ」

クロコが入ってきた少年サキに反応した。

「あつ！　クロコさん」

サキもクロコを見て反応する。

ブレッドはその様子を見ている。

（前に基地を案内してくれた子か）

アールスロウが口を開く。

「サキに関しては実力的には精鋭とはいえないが、剣技面ではなかなかのセンスを持っている。年齢は一三歳と若い、基地の訓練は一年受けている。経験を積ませる意味で今回メンバーに加えた」

「ありがとうございます！」

サキは元気よく敬礼する。

「礼を言う必要はない、君にとってはリスクの高い任務になるだろう」

アールスロウは全員を見渡した。

「それでは全員が揃ったところで改めて任務を言おう。現在、ここから北東のウォーズレイ基地は国軍に攻め込まれている。君達はその援軍としてウォーズレイ基地へ行ってほしい。緊急の要請だ、準備ができ次第すぐに向かってくれ」

「了解しました」

クロコ以外の四人が同時に敬礼した。

「……了解」

クロコも遅れて敬礼した。

クロコ達五人は基地にある小型の馬車に乗りウォーズレイ基地へと向かった。

馬車は四角い灰色の建物が並ぶフルスロックの街を駆ける。少し古い車体を運転手の白いひげの老人が運転している。馬車を引くのは背中に毛の生えた、全長4m近くある巨大な馬車馬、グラウドで品種改良されたリスハワードだ。

車体の中は六人ほどが乗り込める広さで、向かい合う形で前後に木の座席が配置されている。クロコとブレットは後側、フロウ、クレイド、サキは前側に座った。

「改めてよろしくね」

フロウがあいさつした。

「まさかサキやトイレコンビといっしょに行くことになるとはな」

クロコの言葉にクレイドが怒る。

「誰がトイレコンビだ！ おまえだってヘンタイ女だろ」

「誰がヘンタイだ！ 誰が女だ！」

「えーと、クロコさんは男なんですよね」

サキが少し早口で言った。

「男……？」

フロウが不思議そうな顔をした。

「どー見たって女じゃねーか」

クレイドがクロコを見ながら言った。
ブレットがその様子を見て口を開く。

「いや、これには少し事情があつてな」

ブレットは三人に向けて説明を始める。

そしてブレットは三人に、呪いによりクロコがこの姿になるまでの経緯を一通り説明した。

説明を聞いたクレイドが興味深げな顔をする。

「呪いか、世のなか変わった話もあるモンだな」

「ずいぶんあっさり信じるね。君は」

フロウはクレイドを見て少しあきれた様子だ。

ブレットはその様子を見て口を開く。

「信じられないのはムリもないよ、オレ達だって呪いなんて信じちゃいなかった、まあ、だからクロはこんな有様になっちまったんだけどな」

「ふん、別に信じてもらおうなんて思わないさ」

クロコは窓の方を向いている。

「ボ、ボクは信じます。クロコさん達がそう言っただけなら！」

サキは力強く言った。

「俺はハナから疑っちゃいねーよ」

クレイドもはっきりとした口調でそう言った。

「とても信じられるような話じゃないけど、君達が嘘を言ってるようにも見えないし、僕も信じてみることにするよ」

フロウはそう言って二人に笑いかけた。

その三人の様子をクロコは不思議そうな顔で見ている。ブレッドが笑顔で口を開く。

「礼を言っよ。信じてもらって」

クロコはほおを少しかく。

「まあ、好きにすればいいさ。どっちだってオレは構わない」

クロコは窓の方に目をそらす。

ブレッドが明るい口調で話し出す。

「じゃあ、改めてよろしくな。さっきも聞いたと思うがオレはブレッド。こいつはクロコ、オレはクロって呼んでる」

「えーと、知らないのはフロウさんだけだと思うんですが。ボクはサキです。サキ・フランティス」

「俺はクレイド・アースロア。まあヨロシクな」

「僕はフロウ、フロウ・ストルーク。みんなには普通にフロウって呼んでもらってる」

ブレッドは愛想よく笑う。

「それじゃあよろしくな。サキ、クレイド、フロウ」

「よろしくお願いします」

「ああ」

「こちらこそよろしく」

その様子をクロコは黙って見ている。

突然クレイドが思い出したように声を上げる。

「そうだ、おい、クロコ！ おまえトイレコンビって言うの止めるよな」

「言わねーよ、もう名前覚えたし。てめえこそ二度とヘンタイ女って言うなよ」

クロコはにらみながら言い返す。

「まあまあ落ち着いて、お互い言いたいことも言ったし」

フロウが二人をなだめた。

馬車はフルスロットルの大きな石門を抜け、草原の馬車道を走る。窓を見ると緑色の草が生い茂り広がっている。幹の高い木が点在し、草原の中からバッタが勢いよく飛び跳ねる。ときどき水色の花畑が通り過ぎる。はるか遠くには森も見えた。

クレイドがサキを見た。

「そう言えばサキ、おまえクロコと面識があつたみたいだけど、いつ知り合つたんだ？」

「それは……、グロウブ達に目をつけられた時に助けてもらったんです」

それを聞いてクロコが目を細める。

「グロウブって誰だ？」

「クロコさんと戦つたあの……黒髪のすごく大きな人です」

「……いたなあ、そんなヤツ」

クロコは遠い過去を見つめるような目で言つた、十日前の出来事だ。

クレイドの目がギラツと光る。

「あの野郎、まだそんなことしてたのかよ！ 俺と同じ隊にいた頃、あれだけシメてやったのに、違う隊に逃げて同じこと繰り返しやがつて……！」

「で……でも、近頃はめつきり大人しくなりましたよ。女の子に負けたと思つたのがショックだったのか、恥ずかしかったのか」

「じゃあ、当分は大丈夫そうだね」

フロウがニツコリ笑った。

「またやったら言えよ、二度とやらないように今度は完璧にシメてやる……！」

クレイドから少し殺気が出た。

ブレッドが三人の方を見ながら口を開く。

「そういえば今から向かうウォーズレイ基地って、どんな場所なんだ？」

フロウが答える。

「ウォーズレイ基地は一言で言うと、大きな基地同士の情報の仲介役だね」

「情報の仲介役……」

「クラット基地って場所があるんだけど、そこは北部の前線基地だね。そこはバブル山脈の影響で本部基地との連絡が取りにくいんだ。それでその情報連絡の仲介のために建てられた基地が、いま向かってるウォーズレイ基地なんだ」

それを聞いてクロコが質問する。

「つまり？　そこが敵側に落とされるとどうなるんだ」

「クラット基地は本部以外の主要基地とも連絡が取りにくいからね。そうなるとクラット基地が孤立状態になっちゃうんだ」

「孤立されるとどうなるんだ？」

「クラット基地は北部を守護する大事な基地だからね。孤立されれば当然、敵側はそこを狙うよね。クラット基地が落とされれば、解放軍領は北側から国軍に切り崩されて、そこから一気に国軍が進行するだろうね」

サキが続けて説明する。

「国軍はクラット基地の侵攻に何度も失敗しています。だからウォズレイ基地を落としてクラット基地を分断しようとしているんです。たぶん」

「ふーん、クラット基地ってトコを落とすための布石ってわけか……」

ブレットが質問する。

「いまの話を見ると、ウォズレイ基地は情報連絡が主な役割なんだろう。敵の侵攻に耐えられるのか？」

「攻められるとは思ってなかったから、相当きついだろうね。だからいま必死で各基地に援軍を要請してるんだと思うよ」

「なるほどな」

クレイドが思い出したようにフロウに聞く。

「国軍の……例の『瞬神の騎士の再来』も出てくると思うか？」

「確かに『瞬神の騎士の再来』がいる基地もウォーズレイ基地に近いけど、一番近いのはラージロウ基地だから、おそらく侵攻してるのはそこだよ」

「『瞬神の騎士の再来』ってなんだ？」

ブレッドの質問にフロウが答える。

「一言で言うなら国軍の天才剣士さ。現れたのは一年近く前かな、戦場に出てきてから間もないにも関わらず、国軍において数々の功績をあげた剣士、『瞬神の騎士の再来』っていう異名で呼ばれてる」

その説明を聞いてクロコが少し反応する。

「『瞬神の騎士の再来』か……」

「『瞬神の騎士』っていうのは過去にいた国軍最強の剣士につけられた異名、つまりそれを継ぐ存在って意味さ。僕たち解放軍の天敵の一人だよ」

クレイドが口を開く。

「つつても、戦う機会はなさそうだな」

「今回は関係のない存在ってわけか」

「でも覚えという損はないよ。いつか戦うかもしれない相手だしね」

「まあ、今回の戦いで生き残らないと意味はないけどな」

クレイドが軽く笑いながら言った。

クロコが暇そうな顔で口を開く。

「それより、そのウォーズレイ基地ってトコに着くまでどんくらいかかるんだ？」

「距離を考えると三日ってとこかな」

「なんだ、それじゃあそれまでやることなしか……」

クロコは小さくため息を吐く。

しかしフルスロットクを出発して二日目の昼、車体は今までにない揺れに襲われた。

1 - 6 フランセールの出会い

二日目の昼までは馬車は順調に走り続けていた。

二日目の午前には草原を抜け、岩石帯をひたすら駆けていた。窓を見れば茶色い砂の大地が広がり、そこには小さな岩が点在している。遠くには巨大な岩石がいくつか見えた。ときどき厚い葉をつけている低い木の集団が現れ、その木の一本、枝の部分にはしましまのヘビが巻きついてるのが見えた。

太陽が真上を向く頃、突然車体が今までにない激しい揺れに襲われ、それと共に馬車が急停止した。

「うわっ！」

サキが驚いて声をあげた。

「いつて〜、なんだ？ いったい……」

クロコは打ちつけた背中にも手を当てている。クレイドが窓から運転手の老人に声をかける。

「おい、じいさん！ どうかしたのか！？」

運転手は白いひげに顔を覆われた老人だ。老人はおっとりとした声で答える。

「いや、どうも車輪が取れちゃったみたいだな。今からちよいと確認するよ」

運転手は運転席からゆっくりと降りて、のそのそと馬車の横に回った。

「ありゃー、やっぱり車輪だなあ」

クレイドも馬車から降り車輪の様子を見る。

馬車についている大きな車輪、その後輪の一つがない、馬車の少し後ろに落ちていた。

「直せそうか？」

「いやあ、見てみな」

運転手が車輪の付け根を指さす。見ると車輪の付け根が砕けている。

「ここが砕けちまうとなー、さすがにちょっと直すのは無理だなー」

クロコが窓から辺りの様子を見回す。道の周りには砂と岩以外なものも見えなかった。遠くを見ても大きな岩石しか見えない。

「あんなボロいのいつまでも使ってるからだろ」

クロコは文句を言った。フロウも馬車から降りて運転手に近づく。

「町に寄って修理するしかないね。ハルフトさん、ここからだが一番近い町はどこです？」

「いや、それなんだが、ちょうど場所が悪くてなあ、一番近い町で五十キロ以上もあるんだ」

「地図はありますか？」

「んっ？ ああ」

運転手ハルフトは馬車の運転席から地図を取りに行った。
ハルフトが取ってきた地図を地面に開くと、フロウとクレイドはそれをのぞく。

ハルフトが地図を指す。

「今は大体こちら辺だな」

「……………おいおい、確かに何にもねーな。馬車を五十キロも運ぶわけにはいかないしな」

ブレットとサキも馬車から降りた。
サキが不安な顔をする。

「どうしましょう……………」

最後にクロコも馬車から降りる。

「今いる場所ってどこだ？」

クロコの問いにハルフトは丸めた地図をもう一度開く。
クロコは横から地図をのぞくと、ハルフトが地図を指さす。

「今この辺だな」

「……………この町はどうなんだ？ 十キロあるかないかだろ？」

クロコが地図上の町を指さした。

「いや、ここはいくらなんでも……」

ハルフトが困った様子で言った。

「どうしたんですか？」

フロウがその様子を見て尋ねた。

「いや、この子がこの町のことを言うもんだからなあ」

ハルフトはクロコがさした場所を指でさす。

「フランセール、なるほど国軍領の町ですね」

「ああ、今ちょうど、互いの領土の間ギリギリの所を走ってるからね」

「クロ、これはさすがに危ないだろ」

「そうか？ 軍服脱いで旅人のフリすりや問題ないだろ。少人数だし馬車はボロいし」

フロウが少し戸惑う。

「だけど……」

ブレットが少し考えたあと口を開く。

「確かに、今の状況じゃそれしかなさそうだな。大丈夫さ、たいして大きな町じゃないから国軍の基地もないだろ」

「うーん、確かに五十キロも馬車を運ぶのは無理があるし……」

「基地に着くのも遅れてしまいますし」

クロコが口を開く。

「じゃあ、決まりじゃねーか。今からフランセールって町まで馬車を運んで、そして修理する。それしかねえだろ」

クレイドがうなずく

「そうだな、それが一番良さそうだ」

「それでもなかなかきつい仕事になりそうですね」

サキがそう言うと、クレイドが笑みを浮かべる。

「心配すんな。俺もいるからな」

クレイドは自信満々だ、そしてクロコの方を見る。

「おまえは休んでいいぞ。体は女なんだからな」

「女扱いすんな!」

クロコは怒鳴った。

その後、一同は馬車の後輪の部分を支えながら、フランセールの町へと向かった。

およそ二時間後、岩石帯を抜け草原が広がり始めた頃、フランセールの町が見えてきた。

クロコ達はフランセールの町に到着した。

四角い灰色の住宅が並ぶ。

所々の空いた空間には草や木が顔を出し、道は舗装されておらず地面がむき出しになっている。その地面には馬車を通った車輪の跡がいくつも見える。

どこからかフェドリのピューピューという透き通った美しい鳴き声が聞こえ、ワインの匂いがどこからか漂ってくる。人影は少なく、どこか落ち着いた雰囲気のだ。

「ハア、ハア、ハア」

クロコが荒く息を吐く。

クレイドは一人ケロッとした様子でクロコの方を見る。

「おいおい大丈夫か？ ムキになって張りきりすぎなんだよ。そんな小さい体で」

「うるせえ、女扱いするな！ 体ならフロウの方が小さいだろ！

サキだってオレとほとんど変わらねーし」

クロコは怒鳴った。

「とはいえ頑張りすぎだクロ。本番はこれからなんだぜ？ その前にバテてどうすんだよ」

「そうそう、少し休んでなよ」

「うるせー、オレだけ休んでなんかいられるか」

ブレッドはそんなクロコの様子を見て口を開く。

「じゃあ、先に行つて馬車屋を探しといてくれ。馬車を支えながら探すのはきつくてな」

「……分かった」

クロコはしぶしぶ聞き入れると馬車屋を探しに走る。そんなクロコの背中からブレッドが叫ぶ。

「クロー、迷うなよー」

「バカにしてんのか!?!」

二十分後、

「アレ？ どこだここは……」

クロコは辺りを見回す。四角い建物が並ぶまったく見慣れない道が広がっている。

（まいったな、もと来た道が分からない。しかも行き過ぎた。馬車屋も見つからないし……）

クロコは再び辺りを見回す。とりあえずは商店街のようだ。それ以外に分かることといったら、ブレッド達と別れた場所からずいぶんと離れてしまったということだけだった。

（とりあえずカンに頼って来た道をもどるか。最悪どこが高いトコでも探して辺りを見渡せば見つかるだろ）

クロコは来た道を逆方向に走り出した。
しばらく走るとまた見慣れない景色が広がる。

（あれ、この道さつき通ったか？）

クロコはそう思いながらも、走る力を全く緩めない。
なかば勘で角を曲がった時だった。

ドンッ！

「うわっ！」

クロコの足に何か大きなものがぶつかった。クロコはバランスを崩すが、とつさに手について転ぶのは避けた。

「いってー、なんだ？」

クロコはぶつかった辺りを見た。するとそこには少年がうずくま
りながら、顔を押さえて痛がっていた。

クロコはその少年をにらみつけて怒鳴る。

「おい！ なに道の角に体丸めてんだよ。つまづいちまったじゃね
えか！」

「わっ、ど、どうもすみません」

少年は急いで謝った。

その少年は年齢十五、六、身に合わないダボダボな服を着ており、
サラッとした白い髪と、分厚い眼鏡が特徴だ。クロコににらまれた
せいかオドオドしている。

「ふん、分かりやいいんだよ」

クロコは少年が予想以上にオドオドしたため、あっさりと許した。
眼鏡の少年がもう一度謝る。

「ごめんなさい、迷惑かけて」

「……………なんでこんなトコでうずくまってたんだ？」

「大事な物を落としちゃって……………ここら辺に落としたはずなんだけ
ど」

眼鏡の少年は困った様子だ。

「それで身がかがめて探してたのか」

「ごめんなさい、ジャマになっちゃったみたいで……」

「まっ、分かりやいいんだよ。今からは人のジャマにならないよう探すんだな」

クロコはそのまま立ち去ろうとする。しかし、しばらく歩くとピタッと足を止めた。

（クソッ……どうも気になるな）

クロコは再び眼鏡の少年の方を見る。少年は再び身がかめて土の道をキヨロキヨロと見回していた。

「おいっ！！」

「は、はい！？」

少年は驚いた。

「手伝ってやる、何を落としたんだ」

クロコは再び少年に近づきながら言った。

「えっ！？　そ、そんな、悪いよ」

「いいんだよ、手伝ってやるから何を落としたのかさっさと教え」

「その……ペンダントで、銀色の卵型の形をしていて……、」

「分かった、それを探せばいいんだな」

「だ、だけど……」

「いいんだよ、それよりおまえもさっさと探せよ」

「そ、その……ありがとう」

「見つかったあとに言えよ。そういうのは」

クロコはグルッと辺りを見渡す。四角い灰色の建物が並ぶ比較的広い道だ。人影はなく、舗装されていない土の道にはいくつかの馬車の車輪跡ある。建物の間には木が何本か顔を出し、草がボウボウと茂っている場所もある。道のわきには無数のタルが並んでいた。クロコは頭をかいいた。

「ちょっと骨が折れそうだな」

二人はペンダントを探しだした。

眼鏡の少年はキョロキョロと建物の間を探す。

クロコは道のわきにやたらとあるタルをドスンドスンと移動させ、タルの影になっていた箇所を探る。

その様子を眼鏡の少年は目を丸くして見る。

（えっ！？ あのとタル、中身は空だよね……？ 空だよね！？）

クロコは今度、木の上に登りあたりを見渡す。

少年の方を見ると、サイズの合わないズボンを自分で踏んでコケ

ていた。

その様子を見てクロコはあきれる。

「トロいやつだな……」

クロコが探し始めて一時間が経過した。

「見つけた!!」

クロコが叫んだ!

「えっ!? ホント」

「見る、クラウドオオカマキリ」

クロコは片手に巨大なカマキリを持っている。

「……あの、探してくれてるんだよね?」

二人は再びペンダントを探し始める。

雲が急に深くなり始め、少し日の光が弱くなってきた。

クロコは道ばたのトカゲとにらめっこしていた。
眼鏡の少年が話しかける。

「きみ……この町の人?」

クロコはギクツとする。

（こいつの格好を見るかぎりここの住民だろうな、下手なウソはつけないな）

「た、旅してるんだ。いろんな村や町をまわってる」

「へえー、そうなんだ」

少年はそれで納得したようだ。

「それより早く探すぞ！」

「そうだね、天気も少しあやしいし」

クロコは今度、タルのフタを開けて、中をのぞきこみ始めた。

「タ、タルの中にはないと思うよ……、フタあるし」

「いや……ペンダントがなんかすごい動きして中に入ったかもって思ってたな」

「フタを開ける動きってどんな動き!？」

「けどこの中身……、なんかすごい匂いがするな。クラツとする」

眼鏡の少年もタルの中をのぞく。

「ああ、これは黄ワインだよ。ここは黄ワインで有名なんだ」

「ああ、どうりで町じゅうワインの匂いだらけなのか」

「この町の東にはイエローベリーの大農園があるんだ。ただこの時期は竜巻がよく起こるから大変らしいよ」

「へー」

クロコはそう言ってタルにフタをした。

「そつえばきみ、旅してるんだよね。出身地はどこなの」

「ん？……スロンヴィアだ」

それを聞いた眼鏡の少年の表情が変わる。

「スロンヴィア……、確か昔あったっていうスロンヴィア事件の……」

スロンヴィア事件、その呼び方を聞いてクロコが反応する。

（事件……？　そうか、国軍領じゃあそついう呼び方になってるのか）

「……ああ、そつだ」

「それからずつと旅を？」

「いや、ちよつと前までアークガルドにいた」

「アークガルド!? あのセウスノール領のともない町っ
てい」

少年はさらに表情を変える、今度はだいぶ驚いている。

「なんだか壮絶な人生だね……」

「ん? ああ、そう言われてみればそうだな」

眼鏡の少年はそれから黙った。
二人はまたペンダントを探し始める。
すると急に猛烈な雨が降ってきた。

「うわっ、とおり雨だ」

眼鏡の少年は驚く。

「おい、こっちだ、こっち」

クロコはすでに避難していた。建物の陰に隠れている。
少年も急いで隠れる。
強い雨が勢いよく振っている。
遅れて冷気が辺りを覆った。
弱い風が吹き始める。

建物の陰に並ぶ二人、黙って壁に寄りかかっていた。

雨の音と風の音だけが響く中、眼鏡の少年が口を開いた。

「……ねえ、さっきの話なんだけど」

「さっきの？」

「うん、きみの過去の話」

「それがどうした？」

少年は少し重い口調で口を聞く。

「きみは……、きみはそんな生き方をして………つらいと思ったことはないの？」

「ん？」

眼鏡の少年は慎重に顔色をうかがうようにして話す。

「例えばさ、『どうして自分だけこんなつらい目にあうんだ』とかさ、『どうしてこんな苦しいことばかり起こるんだ』とかさ、そうは思わないの？」

クロコはその言葉を聞いて少し考えたあと、口を開く。

「別に……」

「別につて！ ホントになんにも思わないの？」

クロコは特に表情を変えない。

「思う思わないの問題じゃないんだよ。オレがこれから生きる世界は、オレがこれから進む道だ、過去じゃない。オレがこれから生きる世界は、オレの足で、オレの意思で決めていく。だから関係ねえんだ」

少年はそれを聞いて真っ直ぐな目でクロコを見つめる。

「……………すごいね。本当に、素直にすごいと思うよ」

「おまえはどうなんだ」

「え！？　ボク？」

「人にばっかしゃべらすなよ。こんなこと聞くてことは、おまえも何か思うことがあるんじゃないのか？」

「ボ、ボクは……………」

眼鏡の少年は一瞬言葉に詰まる。しかしゆっくりと口を開く。

「ボクは……………きみみたいに立派じゃないよ。きみのようにつらい過去を振り切って、先を見つめるなんてことはできない。……………けど、それでも、その、ボクは、自分にとっての大切な人を守ることができたら、それだけで幸せだと思う」

少年はゆっくりとした口調で言葉を続ける。

「ボクにとって大切な人たち、ボクを大切に思ってくれる人たち、

そんな人たちを守ることができるようなら……今のボクには、そんな力はないのかもしれない。でも、それでも、何もしないで、あきらめたくはないんだ」

少年は真っ直ぐな目でクロコを見る。

「ボクは大切な人を守る存在になりたい」

少年の眼鏡の奥の、深い青い瞳が光った。

クロコは何も言わず、少年の方をジーツと見る。

「そ……その……変かな」

「別に……」

クロコは短く声を出すと、今度はしっかりと口を開く。

「別にいいんじゃないか。そういうの、オレは嫌いじゃないぜ」

眼鏡の少年はしばらくボーっとした表情でクロコを見るとハッと
して、すぐに口を開く。

「あ、ありがとう。ハハハ、な、なんだか恥ずかしいな」

眼鏡の少年は顔を真っ赤にしていた。

「おい」

「えっ、な、なに!？」

「やんでるぞ、雨」

雲の間から柔らかな光が差し込んでいた。

「え、あ、ホントだ」

「早く探すぞ。日が暮れちまう」

「そうだね！ 早くしないと……」

二人は再びペンダントを探し始めた。

二人でペンダントを探し始めてから二、三時間が経過した。あたりは少し日が暮れ、空が夕焼け色に染まり始めた。少し冷たい風が吹き、辺りにコウモリが飛び始める。

クロコは別の木に登って、また辺りを見渡していた。

「ガーツ!!」

突然クロコが見つからないストレスで奇声を上げた。まるで新種のけもののような音だ。

クロコは木から飛び降りると少年に詰め寄る。

「おいっ！ 見つからないぞ！」

その声に驚いて、少年は怒るクロコを見る。

クロコの右手にはコウモリがつかまれている。コウモリはキーキ

ー鳴いている。

「あの……かわいそうだから離してあげて……」

クロコはコウモリの方を見る。

「おい、おまえ、ペンダントどこにあるか知ってるか、おい、おい」

クロコはコウモリのまんまるい顔をツンツンとなでたあと放した。

「それよりおまえ、ホントにこら辺に落としたのか！？ もうこら辺はあらかた探したぞ！」

「ここで間違いないはず……」

「間違いないって、ホントに根拠はあるのか？」

「服の内側のポケットに入れてただけど、たぶんはみ出しちゃったと思うんだ。ちょうどこら辺を走ってた時に服の内側から不自然な感触がしたから。あの時は急いでたからついその感覚を無視しちゃったんだけど」

「確かなのか？ その感覚」

「うん、自信ある。そういう感覚は敏感な方だから」

「ふーん、変なトコだけ敏感ってことか」

クロコは少し考える。

（って、あいつがそうは言っても、ここら辺は細かい所まで一通り探したからな。じゃあ、もしこいつの言ってることが確かなら、そのペンダントはどこにいったんだ？ 考えられるのは、誰かが拾ったか、何かの拍子に別の場所に運ばれたか、それとも……………）

クロコは探すのを止めて考え込む。

（……………！ まてよ）

クロコは道の真ん中に移動し、地面の表面を眺める。地面はとおり雨のせいで湿っていた。その地面に無数の馬車の車輪跡が確認できた。車輪跡にはわずかに水が溜まっている。

クロコはその車輪跡を注意深く見つめながらたどった。

眼鏡の少年はそんなクロコの様子を不思議そうな顔で見つめる。

「……………？」

そんな少年を尻目に、クロコは地面を注意深く観察しながら淡々と車輪跡をたどっていく。

クロコは車輪跡の一部分に、ほんの少しの盛り上がりを見つけた。

「……………！」

クロコはその部分の泥を勢いよく払い始める。すると地面から、銀色の卵型ペンダントが顔をのぞかせた。

「……………あつた！」

クロコは少し笑顔を見せる。

「えっ！」

眼鏡の少年はその言葉を聞いてクロコに駆け寄る。

「見せて！」

クロコは少年にペンダントを渡した。

「そうだ、これだ、間違いない！ 良かった」

眼鏡の少年はうれしそうにペンダントを両手で握りしめる。

「……？ でもなんで地面の下なんか」

眼鏡の少年はペンダントの泥を拭きながら、不思議そうな顔で言った。

それにクロコが答える。

「考えたんだよ。これだけ探してもペンダントが見つからないってことは、誰かに拾われたか、なにかの拍子に別の場所に運ばれたか、それとも……」

「それとも？」

「普通じゃ見つけれない場所に隠れちゃったかだ。地面の下とか」

「でもどうして……」

「たぶん、ペンダントはおまえが落としたときに、道の真ん中あたりに転がっちゃったんだ。それが馬車に踏まれて地面にめり込んで、そのあと風に吹かれた土が上にかぶさって、って具合だな」

「なるほど、確かにそれじゃあふつうに探したんじゃあ見つからないわけだね。とにかくありがとう。こんなに長い時間いっしょに探してくれて、きみのおかげで大事なペンダントが見つかったよ」

「……………結局なんなんだ？ そのペンダント」

クロコは少し気になり質問した。

「形見なんだ、母さんの……………」

少年は少し悲しそうに笑った。

「……………そうか、良かったな、見つかった」

クロコは少し笑顔を見せた。

「きみのおかげだね」

少年も笑顔を見せた。

「って、あーっ！！」

クロコが突然大きく叫ぶ。少年は驚いた。

「ど、どうしたの？」

「やべえ、気付いたらこんな時間になってた。店を探しに行ったまんま……………ブレッドのやつ相当怒るな」

クロコは少し焦った様子だ。

「じゃあそういうことで、じゃあな！」

クロコはサッと立ち去ろうとする。

「えっ！？ ちょっと待って！ お礼も何も……………」

少年は突然立ち去ろうとするクロコに驚いた。驚く少年を尻目にクロコはとっと走り出す。

少年がクロコの後ろから叫ぶ。

「きみは……………名前は!？」

「クロコ・ブレイリバー」

「クロコ!-!」

少年の大声と共に、クロコの方に何か小さいものが飛んできた。クロコはそれをとっさに手で取る。それはさっきのペンダントだった。ペンダントは卵の殻が割れるように左半分だけになっていた。

「お、おい……………これ！」

クロコは足を止めて少年の方を向いた。

「このペンダント、二つに割れるようになってるんだ！」

少年は遠くのクロコに呼びかけるように言った。その少年に向けクロコも叫んで言う。

「これ大事なモンなんだろ！」

「いいんだ。もともと二つに割って母さんと持ってたんだけど、今はきみにあげる、またどこかで会えるように。その時、さっきの敬礼をするから！」

クロコは少し考える。

「分かった」

クロコはそう言って、ペンダントを持った手を一瞬突き上げ、走り去った。

道の真ん中で、眼鏡の少年は一人立っていた。
クロコの姿が見えなくなったあと、少年はハツとした。

「……あつ！　ボクの名前教えるの忘れた」

少年はそのあと、笑顔を浮かべる。

（クロコ・ブレイリバーか……、変な名前。女の子にしてはちょっと変わってたけど、優しい子だったな）

少年は右手に持ったペンダントを見る。

（また、あの子に会えるといいな）

すでに日は暮れ、辺りは暗くなっていた。

ブレッド達は馬車の修理を終え、クロコと分かれた場所で待機していた。

「ったく！ クロのやつは一体何をしてるんだ！ 店を探しに行つたまま、いったいもう何時間すがたをくらませてんだ……」

ブレッドは少し声を荒げながら頭を抱えた。

サキが心配そうに口を開く。

「まさか、国軍の兵士に捕まっていたりしてませんよね……？」

「いや……多分それはないはずだ。町には国軍兵の姿はなかったし、あいつなら仮に襲われても返り討ちだろうからな」

ブレッドはサキの言葉を否定した。

「でもいくらなんでも時間が経ち過ぎてるね……」

フロウが心配そうに言ったその時だった。

「おっ！ やつと見つけた」

高い声がブレッド達の頭上から聞こえた。
ブレッド達はその声の方向を向くと、そこには建物の上に立っているクロコの姿があった。

「この……！ バカヤロー、クロ！ いったい何してたんだー！！」

ブレッドが大声で怒鳴る。

「うわっ！」

クロコはその声に驚いた。

「わ、悪かったよ。少し道に迷っちゃってな……で高いトコに昇って辺りを見回しておまえらを探してたんだ」

「ったく！ 心配かけさせやがって」

ブレッドはそう言ったあと、安堵のため息を吐いた。
フロウはクロコの方を見る。

「……だけど、それにしても遅かったよね。ホントに道に迷ってただけの？」

「べ、別にそれだけだよ」

「まあ、本人がそう言うんなら、それでいいんだけど」

クレイドが口を開く。

「クロコも来たことだし、とにかく早く出発しようぜ。だいぶ遅れ

ちまった」

「そうだね、とにかく早く出発しよう」

それを聞いてクロコは少し困惑した表情をする。

「出発って、もうこんな暗くなっちまってるぞ。宿でも探して泊った方がいいんじゃないか？」

それを聞いてブレッドがクロコの方を見る。

「ここが国軍領っていうのを忘れんなよ。できるだけ早く出て、リスクは避けた方がいいんだよ」

「だからって、もう暗すぎるだろ。群れオオカミに襲われるぞ」

「少なくとも国軍領は出ておかないとね」

フロウはそう言いながら馬車に乗り込む。

「チエツ、良さそうな宿屋あったのに」

その後、馬車は一同を乗せて国軍領を出た。馬車は再びウォーズレイ基地を目指し走り出す。

馬車がフルスロツク基地を出発して四日目の昼、大きな橋を渡り、草原を駆けている時だった。

「おい、見るよ」

馬車の窓から顔を出していたクレイドが声を出す。それを聞いてブレッドも窓から顔を出す。

「おつ、やつとか」

続いて他の三人も顔を出した。

馬車の進行方向の先に灰色の建物の集団が見えてきた。それを見たクロコの顔に少し笑みが浮かぶ。

「やつと着いたか、ウォーズレイ」

1 - 7 ウォーブレイ基地防衛戦

馬車の進行方向の先に灰色の四角い建物の集団が見える。クロコ達はいよいよウォーブレイの町に到着したのだ。

馬車はウォーブレイの町中に入り、石畳の道を駆ける。道には巨大な集合住宅が立ち並んでいる。

クロコは窓から町の様子を見る。

「人ひとりいないな」

町のあらゆる窓が閉まり、店も全て閉まっていた。フロウも町を見ている。

「いま国軍に攻め込まれているからね。当然と言えば当然だね」

馬車は静かすぎる町を駆けてゆく。

四角い建物が広がる町並みに、巨大な建物が一つそびえ立っている。

解放軍ウォーブレイ基地、ヘルムのシルエットが旗印の赤色旗が付けられたその基地は、巨大ではあるが、フルスロク基地と比べると二まわりほど小さい。

その基地の内部は非常にあわただしかった。

基地内部の広間には多くのケガ人が運びこまれている。また基地の門からは大型の貨物馬車が、銃や剣を持った兵士達や大砲を乗せて、外へ向かって駆けていく。

その基地の指令室、大きな机を中央に置き、そのまわりを数人の軍人が囲んでいる、皆が深刻な表情をしている。

一人の若い兵士が司令室に入ってきた。そして司令室の軍人の一人に報告する。

「第三防衛ラインが突破されました」

報告を受けた軍人の男は、年齢四十代後半、中肉中背、白い髪、ふわっとした白いひげで顔が覆われている。

「第三ラインも突破されたか……」

白ひげの男はその報告を聞き、さらに深刻な表情になった。さらに兵士が入ってきて報告する。

「アストリア司令官！ フルスロツク基地からの援軍が来ました」

その言葉に白ひげの男アストリア司令官が反応する。

「フルスロツク基地からか、で、何人だ？」

「それが、たったの五人で……」

「五人……！？ ふむ、送ったのはガルディア司令官、いやアールスロウ副指令かな。まあ、おそらく問題はないだろう。よし、ここに連れてきてくれ」

アストリア司令官はそう命令を出すと、間もなく五人の兵士が指令室に入ってきた。

「フロウ・ストルーク一般兵、以下四名、フルスロック基地より援軍として参りました」

フロウ達はアストリア司令官に敬礼した。

「いやいや、よく来てくれた。ここの司令官バブス・アストリアだ」

アストリア司令官は愛想よく笑う。

「今の戦況はどうなっているのですか？」

フロウがアストリア司令官に聞いた。

「ああ、今から説明しよう。こっちに来てくれ。次の馬車が出るまで時間がある、せっかくだからじっくりと説明しよう」

アストリア司令官が中央の机にクロコ達を呼ぶ。

アストリア司令官、数人の軍人、そしてクロコ達でテーブルを囲む。

机に置かれている地図にはこの一帯が示されている。

アストリア司令官が地図を見ながら説明を始める。その口調はゆっくりだがしっかりと響いている。

「見たとおりウォーズレイ基地は北側と東側は岩石帯、南側には大河が通っている。そのため東側から攻めてくる国軍にとって、非常に攻めにくい基地だ」

「天然の要塞って感じですね」

ブレッドが言った。クロコもその地図を興味深げに見ながら言う。

「確かにきれいに囲まれてるな。どこから攻めてきてるんだ？」

「岩石帯から、ですか？」

フロウが言った。

「ああ、そのとおり。敵は東の岩石帯を通ってここへ攻めてきてる。ただ、この岩石帯は巨大岩石が密集している。そのおかげで簡単には通り抜けることができないんだ。敵が抜けるルートは自然にしばらく。そのため我々も事前にそれを見越して、岩石帯のめばしいルートにはあらかじめ防衛ラインを築いている」

それを聞いてフロウが口を開く。

「では現在戦闘が行われているのは岩石帯ということになりますね」

「そうだ」

「現在両軍の戦力はどれほどなのですか？」

「ここ五日の戦闘の被害を引けば、こちらは4000、敵は6000だ。敵戦力はラージロウ基地が主体だな」

「敵戦力は1.5倍ですか、きついですね。増援は望めるのですか？」

「ああ、あと2000は来るだろう」

「そうになると戦力はほぼ互角……」

「いや、偵察隊の情報によると大砲と銃の数なら、国軍が上回っている。加えて厄介なやつがいるんだ……」

「……ラジロウ基地と言えば、ベイズ・ファウンド大佐が有名ですね。昔は『裂破の獅子』の異名で有名な剣士で、今は司令官としても有能だとか」

「ふむ、詳しいな。奴とは国軍時代、一度だけサンストン軍を相手に共闘したことがあってな。優秀な奴さ。ワインが好きだと言ってたな。しかし一番の問題はそのファウンドでも武装の差でもないんだ」

アストリア司令官は深刻な顔で言った。

「……と言つとなんなのですか？」

「国軍の新型兵器グラン・マルキノだ」

「グラン・マルキノ……？聞いたことがないですね。いったいどんな兵器なのですか？」

「簡単に言えば、馬鹿でかい大砲だ」

「馬鹿でかい……………大砲ですか？」

「ああ……………全長約30mの動く砲台だ。砲身だけでも10m以上、砲弾は直径約2mあるらしい」

それを聞いて五人とも目を丸くする。
クレイドが声を漏らす。

「……………なんだ、そのメチャクチャなの」

「射程はおよそ600mある。6000人の敵戦力だけならば、基地戦を展開すればこちらが有利に戦うことができる。しかし仮にこの兵器が基地を射程内に入れば、基地戦どころか、たった一発の砲撃で基地は崩壊してしまう」

フロウはそれを聞いて冷や汗を流す。

「……………となると、一番警戒しなければならないことは、その兵器を基地の600m圏内に入れないこと……………ですね」

クレイドがぼやく。

「けどそんなバカでかい大砲を移動させることなんてできんのか？」

その疑問にアストリア司令官が答える。

「蒸気機関という技術を使っているらしい。ここ最近開発された技術らしく、私もよく分からないんだ。ただし確かなのは、その砲台

自身がある程度の速度を持って移動できる、ということだな」

「またとんでもない兵器を造ったもんだな……」

フロウが再びアストリア司令官を見る。

「戦況は今どうなっているのですか？」

「こちらが押されているよ。五つある防衛ラインの内すでに三つが突破されてしまった」

「グラン・マルキノの射程は600m……どこまで突破されると危険なんですか」

「五つ目の最終防衛ラインまでは大丈夫だ。そのラインはグラン・マルキノが基地を射程に入れるギリギリ前に設置している。我々は敵軍に攻め込む前、その兵器の情報を入手した時点で、すぐに防衛ラインの再設置を行なっているからな」

「すごいですね、情報連絡の仲介が主な役割なのに、防衛に対する行動が迅速だ」

「ふむ、確かに我々の主な役割は情報連絡の仲介だ。そのため本部基地からの兵士支給は小規模になる。しかしこの基地を守る我々は、ここ的重要性を誰よりも理解している。敵がいつか必ずここを攻めてくるであろうことは予測できていた」

アストリア司令官はそう言うと再び地図を見る。

「話を戻そう、グラン・マルキノは確かに脅威だ。だが唯一の救い

はその兵器が巨大過ぎることにある。幅が約10mあるその兵器は岩石帯では進むルートが限られる。実際には進むルートはすでに一つに絞られている」

アストリア司令官は地図に載っている岩石帯のルートをなぞりながら説明する。

「敵もグラン・マルキノを進ませるために、そのルートのみに的を絞って攻めてきている。よってそのルートを重点的に守り、敵を抑えることで、グラン・マルキノを確実に止めることが可能だ」

それを聞いてサキが口を開く。

「一本道の押し合い勝負ですね」

クロコがアストリア司令官の方を見る。

「グラン・マルキノが途中で撃ってくるってことはないのか？ 防衛ラインを突破するためとかで」

「ふむ、その可能性もゼロではないな。しかし情報によればグラン・マルキノが備えられる砲弾は最大三発、決め手である以上無駄撃ちはしないだろう」

クロコはそれを聞くとテーブルをバンツと叩く。

「……となれば話は簡単だ。ようはオレ達が加わって防衛ラインを守りきればいいわけだ。そうすればグラン・マルキノだろうがなんだろうが関係ない」

「そういつことだな」

ブレットはそう言って笑みを浮かべた。

「ふむ、そのとおりだ。きみたちには第四防衛ラインの戦闘に加わってほしい。あと少しで貨物馬車が出る時間だ」

ここはウォーズレイ基地の東に広がる岩石帯。巨大岩が無数にそびえた赤色の大地が広がっている。形の悪い巨岩が日の光をさえぎり、大地のいたる所を大きな陰でおおつ。その大地の所々から小さな岩がむき出し、おうとつの地面を作っている。風が岩のすき間を通り過ぎると地面から赤色の砂が静かに舞う。

巨大岩だらけの大地に大きく開けた空間があつた。それはまるで巨大岩の壁に囲まれた通路のようだ。

その通路の一部分には四つの石の防壁が築かれており通路を阻んでいる。

ウォーズレイ基地第四防衛ライン、幅およそ70mの通路に築かれた4つの石の防壁、それらが前後にずれながら並んでいる。一つの防壁は、幅はおよそ15m、高さ約1.5m、厚さは20cmほどだ。中央付近には解放軍旗が立てられている。

防壁の裏側には石の台が作られ、その上に大砲が設置されている。防壁の前には多くの黒い軍服を着た兵士達が剣を備え、並び立っている。少数ながらも銃を備える兵士もいる。

それらの兵士の表情はみな緊張していた。

通路の中央近くの石台に一人の男が立っている。

その男は年齢四十代後半、中肉中背で、目つきは鋭く、黒いヒゲはあごを覆い、太い眉毛はつり上がっている。全体的に威圧的な雰囲気放っている。

「ブローズド副指令！」

一人の兵士が黒ヒゲの男ブローズド副司令に駆け寄る。

「兵士の配置、完了しました」

「よし、ではその状態を維持しつつ敵の攻撃に備えろ」

ブローズド副指令が命令を出してから、しばらくが経ったときだった。

防壁の正面、遠くからゆっくりと岩石の通路を覆う波のような、青色の群れが近づいてきた。クラウド国軍だ。

角の生えた馬の顔が旗印の緑の国旗を立て、国軍の青い軍服を着た無数の兵士達が進軍してくる。

500mほどの所まで近づくと足を止めた。

兵士達は横に広がった陣形を組み待機している。

一定の距離を開け、お互いがお互いの様子をうかがっている。

長い緊張状態が続く。

ブロズド副指令は静かに敵の方をにらみ続けていた。

防衛ラインの裏、大砲を構える兵士数名がボソボソと話をしている。

「きついな、銃や大砲の数は敵が完全に上回っているし、このままじゃいずれ……」

「しっ！　ブロズド副指令に聞こえるぞ」

その時だった、

パンッ！

国軍の方向から信号銃が響いた。

その銃声を合図に国軍兵達が声をあげ、防衛ラインに向かって突撃してくる。

ブロズド副指令は静かに息を吸うとその直後、兵士全体に響く大声を出す。

「いいか、ここは何としても死守するんだ！！　これ以上敵を調子に乗せるな！」

「おおー！」

その呼びかけに兵士達が答える。しかし力強い返事とは裏腹に、剣を構える兵士達の半数が怯えを含んだ表情をしている。

ブロズド副指令が叫ぶ。

「砲兵隊、まだ撃つなよ！ もう少しだけ引きつけるんだ！」

国軍兵は距離を詰めてくる。

「いまだっ！ 撃てー！！」

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

突撃してくる国軍兵を大砲が迎撃する。

複数の兵士が砲撃を浴び吹き飛ばされた。

しかしそれにもひるまず国軍兵は距離をさらに詰めてくる。

それを見て解放軍の剣兵が剣を持って構えた。

ブロズド副指令が叫ぶ。

「敵の気迫にひるむなよ！ 第一陣まだ動くな。まだだ、まだ……
あと少しで一斉に……」

「いえ、一斉に行く必要はありません」

ブロズド副指令の台の横から突然声がした。

ブロズドが下を見ると、そこには五人の人影が立っていた。

「なんだ？ おまえたちは……」

「フルスロツク基地からの援軍です。僕達が先行して敵の陣形を崩

します。許可をください」

フロウがブロズトを強い眼で見る。

それを見てブロズドは静かに口を開いた。

「……できるのか？」

「して見せます」

その言葉を聞きブロズドは一瞬考えた。

「……分かった、許可しよう」

それを聞いた途端、フロウは高く跳びあがり、防壁の上に乗った。

「行くよ、クレイド」

「ああ……！」

国軍の第一陣は防壁のすぐそこまで迫っていた。

第一陣、前衛に約百人の剣兵隊が横三列で駆け、その後方に銃兵隊、さらに後方に砲兵隊が続く。

国軍の剣兵は剣を強く握りしめ、銃兵は隊列を組む。

勢いにのっている国軍兵達は力強い目で防衛ラインをにらんでいる。

国軍の隊長が周りの兵士達に命令を出す。

「よし！ 戦闘に入ったら陣形を組んで一気に斬りかけれ！ ……
んっ！？」

隊長は不思議そうに声をあげた。

隊長の目に飛び込んできたのは、解放軍の第一陣だった。百人近い剣兵の集団、しかしそのはるか前に、単独で飛び込んでこようとする兵士の姿があった。

フロウが一人先行する。

「た、隊長！？」

国軍兵の一人が困惑した表情で隊長を見る。

「むう……、構うな！ 陣形を組みつつ一気に囲んで切り伏せろ！」

フロウは走りながら剣を構えた。フロウの持っている剣は、剣と呼びにはあまりにも小型だった。それはまるで伸ばしたナイフだ。フロウはその小剣を構え風のように走る、あっという間に国軍との距離を詰めた。

国軍の剣兵が三人、陣形を組みつつ素早くフロウを囲む。そして剣を振り上げた。

「はあっ！」

剣兵達は掛け声と共に一斉に斬りかかる、その瞬間、

ヒュヒュヒュン！

風切り音がした、と同時にフロウを囲んでいた剣兵達が力無く倒れる。

「な、なんだ！」

その正体不明の事態に周りの剣兵達は足を止めた。

「こ、この！」

一人の剣兵がフロウに向かって単独で斬りつける。その直後フロウの姿が消える。剣兵の斬撃が空を切った時、フロウは剣兵の横にいた。

ヒュッ！

ほとんど音も無く、フロウの剣は静かに剣兵の体を切り裂いた。剣兵は力無く倒れる。

「くそ……！ ひるむな行……」

国軍の隊長がそう言いかけた時、すでにフロウは目の前にいた。

ヒュヒュヒュンッ！

隊長とその周りにいた兵士達が次々と倒れこむ。

「僕の剣技は、長い歴史を持つ高速の剣技。数は僕の前ではほとん

ど意味を為さないよ」

フロウはそのまま次々と剣兵を切り伏せ、敵陣形を中央から切り崩す。そこへ解放軍の剣兵がなだれ込む。

国軍の陣形は分断された。

しかし国軍の第一陣後方では砲兵隊がその様子を見ていた。そしてすぐに大砲を向ける。三門の大砲が同時にフロウの方を向いた。

「じっくり狙え……どんなに強かろうと敵はただの剣兵だ」

三門の大砲がフロウに照準を合わせた。

「よし！ いま……」

「フロウばかり見てちゃあダメだぜ」

赤髪の大男が砲兵隊の前に立ちはだかる。

「なっ！」

砲兵は驚き、一瞬動きを止めた。その直後、クレイドは並みの数倍はある巨大な剣を片手で軽々と持ち、横に構えた。

ギョーンッ！！

三門の大砲全てが一瞬で横に引きちぎられる。

「えっ………？」

その信じ難い状況に砲兵達はぼうぜんとした。

ドスン！

吹き飛んだ大砲の上半分が大きな音を立てて地面に落ちた。

「悪い、ここは戦場だからな」

クレイドは一瞬で兵士達との距離を詰めた。

「ヒッ！」

砲兵達が声を上げた瞬間だった。

ギョーンッ！

大きな斬撃音とともに兵士三人の体が同時に切り裂かれ、吹き飛ばされた。

そしてそのままクレイドは次々と砲兵を切り伏せる。

たった二人の兵士の活躍で、国軍の第一陣の陣形は完全に崩壊していた。

「メチャクチャだな、おい……」

ブレットは防衛ラインの前から驚きながらその様子を見ていた。待機している解放軍の兵士達も同じ表情だ。

「へえ、なかなかやるじゃねえか」

クロコは防壁の上からその様子を観察していた。サキも冷や汗を流しながらその様子を見ている。

「フロウさん、クレイドさん、やっぱりすごい……」

するとブロズド副指令が大声を上げる。

「よおーし、この機会を逃すな！ 第二陣突撃……！」

「おおおー……！」

兵士達は大声を出し、勢いよく敵軍に突撃する。表情に怯えを含んでいる者は、もう一人としていなかった。サキもそれに加わり走りだす。

「さて、オレ達もそろそろ行くか」

クロコは防壁から飛び降り、剣を抜いた。

「クロ、ちょっと待て」

ブレットがクロコを制止する。

「なんだよ」

「クロ、……大丈夫なのか？」

ブレッドは不安そうな顔をした。なにかを案じているようだ。

「……？ なにかだよ」

「……いや、なんでもない」

ブレッドはそう言うのと剣を抜き、国軍の方向を見た。

「なんだよ一体、とにかく行くぜ」

「ああ」

「第三陣突撃——！！」

クロコとブレッドは一気に国軍に向かって駆けだした。

1 - 8 弱き心

第四防衛ラインの150mほど手前では、フロウとクレイドの活躍によりクラウド国軍の第一陣の陣形が左右に分断されていた。

しかし国軍は分断された第一陣に続き、第二陣、第三陣を突撃させ、それにより勢いを取り戻す。

それに対しセウスノール解放軍も第二陣、第三陣を突撃させる。

岩壁でできた広い通路の中で、大勢の解放軍兵と国軍兵が乱れるように互いの剣をぶつけ合い闘っていた。そしてその巨大な人の波の中からときどき、爆音と共に大砲の爆炎が上がる。銃声の音も所どころで響びわたっている。

そんな中だった、

「おおおー！！」

突撃する解放軍の第三陣と共に、クロコ・ブレイリバーも兵士の集団へと突撃した。

一人の国軍兵が突撃してくるクロコの姿を見つける。

国軍兵はクロコに向けて剣を構えた。

しかしクロコは目にもとまらぬ速さで一瞬にして間合いを詰める。

ヒュンッ！

クロコの斬撃は一瞬で兵士の脇腹を切り裂く。そのスピードに兵士は反応すらできない。

兵士はガクツと地面に倒れた。

「ぬるいな……」

クロコはそう言い放った。

別の国軍兵がクロコに向かって斬りつける。

しかしクロコの姿は国軍兵の目の前から消える。次の瞬間クロコは国軍兵の後ろに背を向けて立っていた。遅れて国軍兵の脇腹が裂ける。

「がつ……！」

国軍兵は脇腹を押え倒れた。

クロコは二人の国軍兵を切り伏せると、勢いそのままに国軍兵の集団へと突撃する。

クロコはスピードと体の回転を利用した鞭のようにしなる斬撃を次々と振るう。

ヒュンヒュンヒュンヒュン……！

その目にもとまらぬ斬撃にほとんどの国軍兵は反応すらできない。国軍兵はその嵐の様な斬撃を前に次々と切り伏せられていく。

そんなクロコの前に銃兵隊が立ちはだかる。八人の兵士の集団、その前列の四人はすでにクロコに狙いをつけている。

「うわっ！」

クロコは驚く。

「撃てーっ!!」

パンッパンッパンッパンッ!!

銃兵達の視界から突然クロコが消えた。

「えっ?」

すると突然、目の前にクロコが降ってきた。

「う、うわあっ!!」

ヒュンヒュンヒュンヒュン……!!

クロコの斬撃の嵐の前に銃兵隊はあっという間に全滅した。
クロコは小さく息を吐く。

「フー、危ねえ危ねえ、これには注意しないとな」

その様子を置いていかれたブレッドが遠目で見ていた。

「やれやれ……こいつもメチャクチャだな。……さて、オレも行くか!」

ブレッドは集団の中へと駆けだす。

「はあっ……!!」

ヒュンッ！

ブレットはスピードと切れのある剣技で国軍兵の一人を切り伏せた。

「さて、こっちはこっちでコツコツ仕留めるか」

フロウは集団から少し先行し敵軍後方にいる銃兵隊を次々と仕留めていく。銃兵隊も応戦しようとするが、素早いうえに国軍兵をうまく盾にして動くフロウに狙いを定められない。

クロコ、クレイド、ブレットも剣兵たちを次々と倒していく。四人が切り開く敵の陣形に、次々と解放軍兵がなだれ込む。敵軍の増援も意味をなさず、陣形全体が大きく崩れる。

戦局は完全にセウスノール軍側に傾いていた。

「よし、このままいけば……！」

クロコは敵を切り伏せながら一瞬笑みを浮かべた。その時だった。

「おおーっ！」

一人の巨漢の剣兵がクロコに向かって突進してくる。

「フン！ サシで来るとはいい度胸だな……！」

クロコは余裕の表情で巨漢の剣兵に向かって構えた。

「うおおおおー!!」

巨漢の剣兵は決死の表情で掛け声を上げクロコに斬りかかる。その気合にほんの一瞬クロコがひるむ。剣兵の大振りの斬撃。

ヒュンッ!!

しかしクロコは軽やかにかわす。

ヒュンッ!

クロコの斬撃が剣兵の脇腹を切り裂いた。

(しまった、浅い……!)

クロコの斬撃は先ほど一瞬気圧されたせいかわずかに鈍っていた。しかし敵を動けなくするには十分な傷だった。

巨漢の剣兵は苦しそくに脇腹を押えて倒れこんだ。

クロコはその剣兵から目をそらし、次の相手を探す。その時だった。

「ぐおおおおー!!」

獣のような叫び声と共に、先ほどの巨漢の剣兵が立ち上がる。脇腹からは大量の血がボタボタと流れ落ちる。

「やめとけ……これ以上ムリすれば死ぬぞ」

「うおおー!!」

しかし巨漢の剣兵はその言葉を聞かず、体を傾けながらもクロコに斬りかかる。

「チツ……!!」

ヒュンツ！ ヒュンツ！ ヒュンツ！

巨漢の剣兵は必死の形相で斬撃を振るう。しかしその斬撃は大きく乱れていた。そんな攻撃がクロコに当たるはずもなく、クロコはそれを難なくかわす。

「ハア！ ハア！ ハア……!!」

巨漢の剣兵は苦しそうに荒く息をする。しかしその眼は死んでおらず鬼の形相でクロコをにらむ。その瞳の奥には死すらも忘れた狂気が渦巻いていた。

「クツ……!!」

クロコの背中に悪寒が走る。

「がああーっ!!」

巨漢の剣兵は血を流し体勢を崩しながらも、大きく叫びブンブンと剣を振るう。

「くっ！ っの……!!」

クロコは剣兵に向けて剣を振るおうとした。しかし剣を握るうクロコの腕がピタツと止まる。

「えっ……!？」

その体の動きにクロコ自身も驚いた。

「ぐああああ　っ!!」

剣兵はクロコの動きに構わず剣を振り回す。

その動きはクロコにとっては隙だらけといえるものだった。

クロコは再び斬撃を剣兵に向け放とうとする。しかしクロコの腕は直前になると石のように動かなくなる。

（くそ、なんでだ……!？）

こんな事はクロコが剣を振るい始めてから一度もなかった。その状況にクロコは今までにないほど混乱した。次の瞬間、クロコの視界は剣兵の大きな体にさえぎられた。クロコは懐に入られたのだ。

（しまった!）

巨漢の剣兵はこれ以上ないチャンスだと思ったのか、全ての力を振り絞り、剣を大きく振り下ろす。

ギーンッ!!

クロコはその一撃をなんとか受け止める。

クロコと巨漢の剣兵の刃は互いに重なりあつたままギリギリと震

え硬直する。

（クソ……！　なんでだ……！？　押し返せない！）

本来なら簡単に押し返し、振り払える。しかしなぜかクロコはその剣兵の剣を振り払うことができなかった。

クロコの腕はわずかに震えていた。体は完全に委縮している。それにも関わらずクロコ自身なぜ体が委縮しているのか、まるで分らなかった。

硬直状態が続く。

「クロコさんっ！！」

どこからクロコに向かって叫ぶ声がある。その瞬間クロコはハッとした。クロコの横から別の剣兵が襲いかかってくる。

しかしクロコは巨漢の剣兵の剣を振り払えず動けなかった。

（しまった……っ！）

別の剣兵の容赦のない斬撃。

ヒュンッ！！

宙に血しぶきが上がる。

しかしその血はクロコのものではなかった。

クロコと、横からきた剣兵との間に、サキがとっさに入り込みク

コロコをかばった。

サキの肩が切り裂かれる。

「……………！！」

コロコはその光景を驚きと混乱の表情で見つめる。コロコには何が起きたのかわからなかった。

肩を切り裂かれたサキはそのまま地面に倒れる。

それを見たとき始めてコロコはその状況を認識した。

「サキーツ……！！」

コロコは叫んだ。

サキを切り伏せた国軍兵は再びコロコに剣を向ける。しかしコロコはいまだ剣を振り払えずに硬直していた。

（クソ、クソ！ クソ……！！ なんだ！？ なんて動かないんだ、動け！ 動けよ……！！）

コロコは心の中で必死に叫ぶ。しかしコロコの体は動かない。コロコの横に立つ剣兵はコロコに向け再び斬撃を放つ。

（クソーツ……！！）

ギーン……！！

剣兵の斬撃はコロコへは届かなかった。クレイドがコロコと剣兵の間に入り、斬撃を止めた。

「オラアアアーツ……！！」

クレイドは気合の声を上げ、剣を止めた状態の自らの剣を力任せに振り、剣兵を吹き飛ばす。吹き飛ばされた剣兵は地面に転がり倒れこむ。

クレイドがクロコの方をキツとにらむ。

「てめえ、死にてえのか!!」

クレイドは大声で怒鳴った。クロコはその声でビクツとなる。吹き飛ばされた剣兵は立ち上がりクレイドに向けて斬りかかる。クレイドはその剣兵をにらむ。

ギョーンッ!!

クレイドの斬撃は巨大な剣とは思えないほどの速さで剣兵の体を切り裂いた。切り裂かれた剣兵は血しぶきを上げながら吹き飛ばす。クレイドは次にクロコと剣を重ねている巨漢の剣兵をにらむ。

ギョーンッ!!

クレイドの容赦のない斬撃が巨漢の剣兵の体を切り裂く。

巨漢の剣兵は吹き飛ばされ、そして力無く横たわる。

動かなくなった巨漢の剣兵の体からゆっくりと大量の血が流れる。

クロコはその様子をぼうぜんと眺めていた。

クレイドは身をかめ倒れているサキに話しかける。

「大丈夫か……?」

「うつ……」

サキは苦痛で顔をゆがめる。肩の傷から血が流れる。

「……傷はそれほど深くないな。切られたのが剣の根本だったせいだろう」

クレイドは少しホツとした表情を浮かべた。そして突然表情を変え、ぼうぜんと立ち尽くすクロコをにらみつける。

「……なぜ斬らない！」

「そ……それは……」

クロコは回答できなかった。クロコ自身も分からなかったからだ。なぜあの剣兵を斬れなかったのか、なぜ自分の体が震え、力が出なくなっただのか……

「おまえ……まさか人を殺したことが無いんじゃないだろうな」

「え……！？」

クロコはそれを聞いてハツとなる。確かにクロコは人を殺めたことは今までに一度も無かった。クロコは剣で斬っても全て急所を外して斬っていた。

「……、なるほどな……どおりで」

「サキ！ クロ！」

ブレットが、様子がおかしいことに気付き駆け寄ってくる。
しかしクロコはそれにも気づかずボーツと立ち尽くしていた。
クレイドがブレットの方を見る。

「ブレット、サキを下げさせてくれ……」

「ああ……」

ブレットはサキの様子を見て返事をした。

「……それと、こいつも下げさせてくれ……邪魔だ」

クレイドはクロコを一瞬見たあと、静かな口調でそう言った。

ブレットはそれを聞き、なにかに感じたような表情を見せた。

クレイドが見守るなかブレットはサキに肩を貸し、クロコの背中に手をやった。

そしてクロコ達を後方へと連れていく。

クロコはブレットに素直に従った。さっきの出来事で完全に戦意は消えていた。

ブレットはクロコ達を防衛ラインまで連れていくと、サキを後方の兵士に任せクロコを防衛ラインの裏に座らせた。

そしてブレットは何も言わず剣を抜き、姿を消した。

クロコはその様子をぼうぜんと見ていた。

パンッ！ パンッ！ パンッ！

クロコが防衛ラインの裏に座らされてからしばらく経つと、敵陣の方から信号銃による一時撤退の合図が鳴った。

その合図と共に国軍兵は後退していく。

クラウド国軍の姿が見えなくなると同時に、解放軍兵たちはワッと歓声を上げた。

そして戦闘が終わってから間もなく、日が暮れ始め、辺りは徐々に暗くなった。

灯がともった明かりの下でフロウとクレイドは兵士達に囲まれていた。

「すげえーよ、おまえら」

「とんでもねえ援軍だぜ！」

「これで光が見えてきたぞ！」

多くの称賛と期待が入り混じった声が二人を包む。

その灯りから少し離れたところにクロコとブレットはいた。二人は先ほど負傷したサキの様子を見ていた。サキの肩には包帯が巻かれている。

ブレットがサキの顔を見つめる。

「大丈夫か……」

「はい……大丈夫です。すいません心配かけさせてしまつて……」

サキは笑顔を見せて答えた。しかしその笑顔は少し元気がないようだ。

「状態はどうだ？」

クレイドとフロウがサキの様子を見に来た。
ブレッドが口を開く。

「命に別状はないみたいだ。医療班の話じゃあ、傷がふさぐまで少し時間がかかるらしい。次の戦闘は無理そうだ。だから一時間後の馬車で基地の方に戻ってもらおうと思う」

「すいません……みんなの役に立ちたかつたんですが……」

そんなサキにフロウは笑顔を見せる。

「大丈夫だよ、気にしなくて。君は勇敢だったし、初陣にしては良くやつたよ」

クレイドも力強い表情で声をかける。

「あとは俺達に任せろ。グラン・マルキノだろうがなんだろうが俺が叩き切つてやるよ」

サキはその言葉を聞いて笑顔を見せると、ゆっくりとクロコの方を向く。

「クロコさん……」

「ん……！？ ああ、なんだ」

クロコは不意を突かれたように返事をした。

「あと、頼みます」

サキはクロコの目を真っ直ぐ見つめた。

「……………ああ、任せろ」

クロコはサキの言葉に応える。しかしその表情はどこか自信がない。

それからしばらくして、サキは馬車に乘せられ第四防衛ラインを離れる。その様子を四人は静かに見送った。

サキを乗せた馬車は暗闇の中へと消えていった。

「クロコ……」

馬車が見えなくなると同時にクレイドがクロコの方を見た。

「……………」

クロコは口を開かない。

「もし人をまともに斬ることができないって言うんなら、おまえは今すぐ帰れ」

その言葉を聞いてクロコの表情が固まる。

「はつきり言つて邪魔なんだよ」

「なんだと……！」

クロコはクレイドをにらみつける。しかしその真紅の瞳にはいつもの鋭い光はない。

「おまえの中途半端な覚悟は必ず誰かを殺す……！」

クロコはその言葉を聞きハツとなる。そして静かに顔を下ろした。クロコの齒からギリッと小さな音が鳴る。

「オレは……！！」

クロコはなにかを言いかけた。しかしクロコはそれ以上にも言えず、地面の方に顔を落とした。

「次の戦闘までに決断しろ。だがな、もし次の戦闘で前のようなふざけた戦いをしたら……その時は……」

クレイドはクロコを殺気に満ちた眼でにらみつける。

「俺がてめえを斬ってやる」

クレイドはクロコにそう言うつと背を向けて立ち去る。フロウはクレイドを少し見たあとクロコの方に顔を向ける。

「僕は……クレイドみたいに君を斬るなんてことは言わない。けどどちらんとした答えを出しておいた方がいい。君が戦場にたとえ立たなくても、僕達は君を決して責めたりはしないから……」

そう言うつとフロウはクレイドのあとを追って立ち去った。

ブレットはクロコの方に目をやる。クロコはずっと地面を見つめていた。

その様子を見てブレットは少しなにかを考えると、クロコの前からなにも言わずに立ち去った。

クロコは暗闇の大地の上で独りポツンと立ち尽くしていた。

1 - 9 月が出る夜

冷たい風が吹いている。クレイドは防衛ラインの石壁の上に座り、独り暗い大地を見つめていた。

「クレイド！」

下からフロウが名前を呼んだ。そしてピョンツと高く跳ね壁の上になり、クレイドの隣に座る。

「ずいぶんキツク言ったね」

「アレぐらい言った方がいいんだ……」

クレイドは無表情でムスツとしていた。

「なんか嫌いなことしたあとみたいな顔してるね」

「……………」

クレイドは何もしゃべらない。
しばらく沈黙が続く。

クレイドがゆっくりと口を開く。

「……人を斬ることができないんだったら、戦場に立たない方がいいんだ。戦場には……人を斬ることのできるやつだけ立てばいい」

「僕達みたいなの、か」

フロウは満月の輝く夜空を見上げた。

「……………そうだよ」

また少し沈黙が続く。

フロウが口を開く。

「クロコ君のこと……………心配なんだね」

「…………別に、そんなんじゃないよーよ」

「クロコ君、何してるのかな」

「知らねえよ、そんなこと」

岩石に挟まれた大地、冷たい風が砂を巻き上げる。雲一つない夜空にきれいな満月が光り輝いている。

クロコは独り岩壁に寄りかかり、美しい満月にほんの少しも目をやることなく、ひたすら向かいの岩壁を見つめていた。

クレイドに厳しい言葉を浴びせられてから何時間が経っただろうか。空気がだんだんと冷えてきていた。しかしクロコはその冷えた空気を感じていないかのようにひたすら岩壁の一点を見つめていた。

「よっ！」

突然クロコの隣で声がした。

クロコの視線が久しぶりに動く。クロコの視線の先にはブレッドが立っていた。

「答えは見つかったか？」

「……………」

クロコは無言で視線を落とす。

「見つからないか……………」

ブレッドはそう言ってクロコの隣に座り込む。

「……………考えてみりゃあ、クロは今まで人を殺めたことは一度も無かったな」

ブレッドは夜空を見上げる。

「オレはおまえみたいに、ずば抜けた剣の才能があつたわけじゃないからな。あの町……………アークガルドで生き残るために必死で剣を振るつたよ。人を殺さないようになって器用なマネはとてもできなかった……………」

「オレに剣の才能があつたからこうなつたのか……？」

クロコは静かにそう言った。

それを聞いてブレッドは少しだけ考えた。

「いや……やつぱりそうじゃないかもな。たとえおまえがオレと同じ立場でも、人を斬らなかつたような気がする。クロは、優しすぎるからな」

「……………」

クロコは視線を落としたまま黙つた。

そしてしばらくしてゆつくりと口を開く。

「オレは……………」

クロコの表情が久しぶりに変わる、険しい表情だ。

「オレは……覚悟ができてたはずだった。したはずだったんだ、あの時……軍人になると決めたあの時から……………」

クロコの声は震えていた。ブレッドはその様子を黙って見つめる。

「なのにオレは……………！ どうして……………！！」

クロコは静かに声を荒げた。口元がわずかに震えている。

「自分でも……………分からないんだ」

そんなクロコの言葉を聞いたブレッドはほんの一瞬視線を落とした。そして再びクロコを見つめる。

「クロ……おまえがたとえ戦場を去る決断をしても、オレは絶対におまえを責めない……だが、もしおまえがそれでも戦場に立つと言うのなら、おまえはおまえのために、ためらわず人を斬れ」

「オレが……自分のために？」

「おまえは『光』を求めている。だから、おまえはまだ死んじやいけない。それに……おまえが死ねば、おまえを大事に思っている人が悲しむ」

それを聞いてクロコは鼻で笑う。

「オレを大事に思っている人なんて……」

「オレが悲しむ」

「……！！」

「クロ……オレだけじゃない。もしおまえが再び戦場に立つというのなら、その時は、これからできる仲間のために、これから関わり合う人のために、そして自分自身のために戦え、絶対に、死なないように……！！」

「ブレッド……」

クロコは初めてブレッドの顔を見た。

「オレの言いたいことはそれだけだ。それじゃあな」

そういうとブレッドはスクツと立ち上がり、背を向け歩き出す。するとクロコは素早く体を起こしてた立った。

「ブレッド―！」

クロコは叫んだ。

「なんだ？」

ブレッドは返事をして振り返る。

クロコはブレッドを真紅の瞳で真っ直ぐと見た。

「おまえが……おまえが隣に居てくれて良かった」

クロコはほんの少しだけほえんだ。

それを見てブレッドは笑顔を見せる。

「今頃気づいたか」

ブレッドは再び背を向けクロコの前から立ち去った。

クロコは再び岩壁に寄りかかる。

そして夜空に光輝く満月を見上げた。クロコは今日初めて満月を見た。

「どうやら大丈夫そうだね」

クロコから少し離れた岩陰に隠れていたフロウが言った。

「まったく……おまえ、こんなよけいな心配して、こんな真似までして」

フロウの隣で同じく岩陰に隠れていたクレイドが不機嫌そうな声で言った。

「こんな真似までしてって、君が先に行こうとしたんだろう」

「俺はただ用を足しに行こうとしただけだ」

「はいはい、そうだね」

「おい、なんだおまえ、その気のない返事は！」

「しっ！ 見つかったちゃうよ」

ブレットは歩きながら二人の隠れている岩をチラッと見る。

「やれやれ……」

ブレットは笑みをこぼした。

夜は静かに更けていく……

1 - 10 砲火の中で

沈んだ太陽が再び昇り始める。

巨大な岩が無数にそびえる赤い大地を朝日が照らしていく。

早朝、まだ冷たい風が吹くなかブローズド副指令が兵士達の前で大声を上げる。

「いま戦局は我々に傾きつつある！ 今こそ攻める好機である。これより我々はクラウド国軍によって奪われた第三防衛ライン奪還のため進行する！！ 皆、今こそ命を燃やし戦え！！」

「おおーっ！！」

セウスノール解放軍は第三防衛ラインを奪還するため早朝に進行を開始した。

巨岩のあいだの開けた空間を3000人近い兵士が行進する。その中にクロコ・ブレイリバーの姿もあった。その真紅の瞳にはいつもの鋭い光が戻っていた。

第三防衛ライン、開けた岩壁の道を塞ぐようにして一度崩された石板がバランス悪く再び積み上げられ、即席の防壁をなしていた。そこにクラウド国軍が構えている。

防壁の前には無数の剣兵が並び、防壁の横には銃兵隊や砲兵隊の

姿もわずかに見える。

そこに向けセウスノール解放軍が進行する。

解放軍は防衛ラインより500mほど手前で足を止めた。

セウスノール解放軍、グラウド国軍、両軍とも武器を構える。

静かな時が流れる。

その中でクレイドが敵軍の様子を見ながら口を開く。

「なんだ？ 敵は一度壊した防壁をもう一度積み上げてるぞ」

その言葉にフロウが国軍の様子を見ながら答える。

「グラン・マルキノを進行させるためには防壁が邪魔だからね。だから国軍は防衛ラインを崩しながら進行しないといけない。おそろく進行してくる僕達に対して急いで防衛体勢をとったんだ」

その言葉を聞きブレットが口を開く。

「となればグラン・マルキノはおそらく目と鼻の先か」

クレイドは敵陣のさらに遠くを見つめる。冷たい風に巻き上げられた赤い砂で景色がくすみよく見えない。

「確認はできないが敵の本陣も目の前、決着間近じゃねえか」

クレイドはニヤツと笑った。

その様子を見てブレットが言葉を漏らす。

「オレは決着うんぬんより、そのバカでかい大砲にもしも撃たれた

らって方が怖いね」

クレイドは敵陣の方に視線を移す。

「まあ、まずはこの第三防衛ラインを突破しないと何も始まらねえ、それよりも……」

クレイドは近くに立つクロコに視線を移した。

「クロコ……昨日言ったことは覚えてるだろうな。もし昨日の様な戦いをまたしたんなら、その時はてめえを斬るぜ」

クレイドがクロコをにらみながら言った。しかしクロコはそれに對して笑う。

「てめえこそボーツとすんなよ。間違えて斬っちまうかもしれないからな」

「フン、上等だ」

クレイドもニヤリと笑った。その時だった。

「全軍突撃――！」

ブローズド副指令の号令が飛ぶ。

それと共に剣兵と銃兵がかけ声をあげ一斉に突撃する。足の速いフロウが先頭を駆ける。それにクロコが続ぎ、さらにブレッド、クレイドが続く。

解放軍はどんどん防衛ラインへと近付いていく。それに対し敵軍は動こうとしない。

先頭のフロウが敵陣の近くまで迫る。

（おかしい、敵はなぜ砲撃しない。それどころか剣兵さえも動く気配がない）

フロウがそう思ったその時だった。

一発の銃声と共に、敵剣兵が防壁から左右に散り、敵軍の即席の防壁全てが音を立てて崩れた。

そしてその崩れた防壁の裏には無数の大砲が並び立っていた。二列に並ぶ大砲の数は百近く、解放軍の三倍近くあった。その光景を見て解放軍の兵士達は急いで足を止める。

ドンドンドンドンッ！！ ドンドンドンドンドンッ！！

数え切れぬほどの近距離砲撃が嵐のように解放軍の兵士を襲う。辺りは赤い炎と爆風に包まれる。兵士達の叫び声が大地に響いた。クレイドの顔がゆがむ。

「クソ！ 国軍はまだこれだけの大砲を持ってやがったのか」

クレイドは急いで距離をとる。

誰よりも早く敵の策に気づいていたフロウは、他の兵士達よりわずかに早く反応し下がっていた。

（……………！！ ここにきてこの大砲の数……………！！ これでは僕でも近づけない……………）

フロウはある程度距離をとると敵陣の方を悔しそつににらむ。その時、一陣の風がフロウを追い抜いた。

「はああああー!!」

クロコが全速力で敵陣へと突進する。

「クロコ君!! 無茶だ!」

フロウは叫んだ。

「あのバカ野郎……!!」

クレイドも思わず絞り出すように叫ぶ。

クロコは嵐のような砲撃を紙一重でよけながら一人敵陣へと距離を縮めていく。続く者はいない。

一人飛び出すクロコに無数の大砲が狙いを定める。

クロコの後ろからクレイドの大声が飛ぶ。

「クロコー! 下がれ、下がるんだ!!」

しかしクロコは振り返らず、真紅の瞳は前だけを見つめる。決して走る速度を落とそうとしなかった。次の瞬間、

ドンドンドンドンッ!!

無数の砲撃がクロコに向けて浴びせられる。無数の火柱が上がり、クロコのいる一帯が吹き飛ぶ。そして大量の土煙が辺りを包んだ。

「クロコ君……」

フロウは空へと上がる大量の煙をぼうぜんと見た。

「……………」

クレイドは何も言わず煙を見つめる。
そんな中ブレッドが静かに口を開く。

「いや……………」

その目は煙の先を真っ直ぐに見つめていた。次の瞬間、煙の中から一つの影が飛び出した。

「うおおおおおー!!」

クロコは土を少しかぶった姿で、真っ直ぐ敵陣へと突っ込んでいく。

「なにっ!!」

その姿に敵兵達は自らの目を疑った。すでに砲身はクロコから遠くの方角へと向けられていた。

それがクロコにとって一瞬の隙となった。クロコはついに大砲の並ぶ敵陣へと飛び込んだ。

クロコは近くにいた砲兵へと一瞬で間合いを詰める。

ヒュンッ!!

クロコの目にもとまらぬ動きに砲兵は何もできなかった。クロコの斬撃は砲兵の脇腹を切り裂く。

「ぐあ……………」

砲兵は地面にひざをつく。傷は急所を外れていた。

その後もクロコは高速の斬撃で砲兵達を次々と切り伏せていく。

無数の砲撃の嵐はクロコのいる一帯だけ止んでいた。

その混乱に乗じて解放軍兵たちは、砲弾が止んだ部分へと一気に突撃する。

国軍の剣兵達はクロコに襲いかかる。

わらわらと囲んでくる無数の剣兵にクロコが少し押され始めたころ、フロウ、クレイドを先頭にした解放軍剣兵たちがクロコに加わった。

「退けー、一時撤退だー！！」

敵軍の指揮官が叫び、信号銃が放たれた。

それと共に国軍は素早く後退する。

そんな中、一人の剣兵が背後からクロコに襲いかかる。クロコは一瞬反応が遅れたものの素早く体を切り返し、剣兵に強烈な斬撃を放った。

ヒュンッ！

その容赦のない斬撃は剣兵の体を深く切り裂き、そして剣兵は力無く倒れた。

倒れた兵士の体から大量の血が流れる。

クロコはその様子を見て、静かに目を閉じた。

しかしすぐに目を開き、動かなくなった兵士を見つめた。

やがてゆっくりと後退していく敵軍の方に視線を移した。その真紅の瞳には、恐怖も迷いも写ってはいなかった。

国軍の姿が見えなくなった。

次の瞬間、誰かがクロコの背中を思いっきり叩いた。

「よくやったぞ、クロ！」

ブレッドが笑顔で叫ぶ。

「ブレッド……」

クロコの表情が少しだけゆるむ。

「まさかあの砲撃を抜けるとはね」

フロウがゆっくり近づく。それに続きクレイドも近づいてくる。

「たいしたモンだよ、おまえは」

クレイドはほえんだ。

「当たり前だろ」

クロコも静かに笑った。

他の兵士達もクロコを囲んだ。

「すげーぞ！！　なんだおまえは！？」

「とんでもねーやつだぜ！！」

「おまえホントに女か！？　ホントは男だろ！」

「バカヤロー！ ホントも何もオレは男だ！！」

クロコはその言葉にだけ反応した。

「……とはいえ、あんな無茶な行動はもう止めてね」

フロウがちゃっかり注意した。

「気を抜くなっ！！」

ひととき大きな声が兵士達の声をさえぎった。

「敵の本陣は目の前だ！！ このまま一気にたたむぞ！」

プロズド副指令の言葉に対し、兵士達はかけ声で答えた。

1-11 グラン・マルキノの影

第三防衛ラインを突破したクロコ達解放軍は敵本陣へ向け進行していた。

同じ頃、クラウド国軍本陣では兵士達が慌ただしく次の戦闘の準備を進めていた。

岩壁が開けた空間に多くの剣兵や銃兵が急いで武器を備えている。大砲の数はだいぶ減り、兵士達も先ほどの戦闘で焦っている。

その兵士達の後方に巨大な建造物のようなものがそびえ立っている。その前部には10m以上はあるだろう巨大な黒い砲身が見える。国軍の新兵器グラン・マルキノだ。

塔のような砲身は斜めに天へ伸びており、それが付いている前後に長い胴体は、まるで鎧で固めた巨大な屋敷のようだ。その胴体の下部には巨大な鋼鉄の車輪がのぞき、車輪下部以外を鋼鉄の板で守られている。胴体の上には大きな煙突が左右に二つ着いている。

そのグラン・マルキノのすぐ前方に一人の中年の男が立ち、慌わただししい兵士達の様子を眺めていた。

その中年の男は年齢四十代半ば、整えられた黒い髪、黒い口ひげとあごひげ、太い眉毛の下には鋭い目が光っている。静かながらも重々しい雰囲気を持っている。

その鋭い目の中年に一人の若い軍人が近づく。

「事態は深刻です。ファウンド大佐」

若い軍人は年齢二十代前半、黄色い髪で、高い鼻と長い眉、細い目をしている。どこか生真面目そうな雰囲気を持っている。

「ロウレイブ大尉……」

鋭い目の中年ファウンド大佐は鋭い目で若い兵士ロウレイブ大尉の方を見る。ロウレイブ大尉はきびきびとした口調でファウンド大佐に話しかける。

「第三防衛ラインが取り返えされた今、セウスノール軍はまもなくこのグラン・マルキノのある本陣まで来るでしょう」

「やれやれ、各基地の援軍もあつて優勢に進めていたのだがな」

ファウンド大佐は落ち着いた口調だ。

「どうやらセウスノール側の強力な援軍が原因のようです」

「援軍か、策も練ったがあつさりと破られたな」

「あれに関しては運がなかったと言うしか……まさかあれほどの大砲を使った砲撃がたった一人に破られるとは……」

「ああ、しかし破られた以上、仕方なかったでは済まない。それによつて命の消えた兵がいるのだからな」

「……そうですね、しかし今の状況が援軍によるものだとすれば、こちらにも本来、例のアレが来るはずだったのですが、いまだに到

着の報告がありません」

「ふむ、それに関しては来ない以上あきらめるしかないだろう。しかしそうなるとそろそろこちらでも危険になる」

「ファウンド大佐、私に出撃の許可を下さい。必ずやつらを仕留めて見せます」

ロウレイブ大尉は細い目を鋭く光らせた。

「なに、そんなに肩に力を入れる必要はないだろう。君の実力は知っているが、相手も手強い」

「しかし……」

「心配はいらん、すでに新しい策も練ってある。それに要望どおりロウレイブ大尉、君にはしっかりと出てもらおう」

ファウンド大佐はほえんだ。

「ハッ！」

ロウレイブ大尉は力強く敬礼した。

一方、クロコたち解放軍は敵の本陣に向け進行していた。そびえ立つ岩石が次々と現れては過ぎてゆく。

「いよいよ敵の本陣も近いな。クロ」

「ああ、一気にケリをつけてやる」

クロコの眼がさらに鋭くなる。その時、

「国軍だっ！」

どこからか味方の声が聞こえた。それを聞いてクレイドが口を開く。

「チッ！　もうかよ」

「対応が早いね。敵はどうしてもグラン・マルキノに近づいて欲しくないみたいだ」

フロウは剣を抜く。

現れたクラウド国軍は様子も見ずに一気に突撃してきた。剣兵隊と銃兵隊の混合部隊だ。

それに対し解放軍も素早く迎え撃つ。

クロコとフロウが先頭を駆ける。

岩石帯の通路で、二つの軍勢がぶつかり合う、その瞬間クロコとフロウは高速の剣技で次々と敵を切り伏せる。

それを見て国軍の隊長が叫ぶ。

「ひるむな！　陣形を整え囲むんだ！」

国軍兵達はクロコとフロウに一定距離をとりつつ陣形を組む。

「俺達を忘れるな！」

遅れて突入してきたクレイドとブレッドがクロコとフロウを囲もうとする陣形を崩す。

「ダメだ……手に負えない！」

四人が中心となり敵陣中央を崩していく。

「とつとケリをつけてやる！」

クロコは敵を切り伏せつつ一人どんどん前へ出る。その時だった、

「調子に乗るな！」

長槍を構えたロウレイブ大尉がクロコの前に立ちはだかる。

「黒髪の女剣士……きさまか！ 先ほど砲兵隊をやったのは」

ロウレイブがクロコを鋭くにらんだ。

「だつたらなんだ！」

「我が誇りにかけ、きさまを始末する！」

「やれるモンならな！」

「ムッ！」

ロウレイブの前からクロコの姿が消える。次の瞬間クロコはロウレイブの横に立っていた、間髪入れずに素早い斬撃が放たれる。

ヒュンッ！

斬撃は空を切る。ロウレイブは横に飛びその斬撃を難なくかわす。

「なに！」

驚くクロコを尻目にロウレイブは長い槍で反撃する。槍は空気を切り裂き高速でクロコを襲う。

ヒュウンッ！

クロコはその斬撃を素早く身をかめ避ける。髪がわずかに切れ宙に散る。しかしクロコのよけた斬撃は一瞬で軌道を変え再びクロコを襲う。

「なにっ！」

予想外の槍の動きにクロコの反応が一瞬遅れる。

ギンッ！

クロコは紙一重で止めた。

「ほっ……！ さすがにやる」

ロウレイブは不敵にほえんだ。

（こいつ、強い……！）

クロコは体を反転させ敵の懷に飛び込む。さらに回転と共に斬撃を放った。

ヒュンッ！

しかしロウレイブは後ろに飛びかわす。

「チッ……！」

ロウレイブはそのまま距離をとった状態でクロコの間合いの外から高速の突きを放つ。

ヒュウッ！

クロコは体をそらし素早く避ける。しかしロウレイブは間髪入れずに間合いの外から連続で攻撃を仕掛ける。突きと斬撃を組み合わせた高速のコンビネーションがクロコを襲う。

「クソ……！！」

クロコはそれをギリギリで防ぎ続ける。

クロコがロウレイブの間合いから出ようと後方に飛んだ。その瞬間、

ヒュウンッ！

ロウレイブの斬撃がクロコの体をわずかに切り裂く。クロコの体から血が飛ぶ。

「……ッ!!」

「フッ、どうやらこれの間合いに慣れていないようだな。ならばッ!!」

ロウレイブは前に前進しつつ突きと斬撃の波状攻撃を仕掛ける。さらに勢いの増した攻撃がクロコを襲う。クロコはそれを何とか防ぐが、間合いの外からの攻撃は反撃を許さない。

「きさまはここで消えてもらうぞ! 女!!」

「……! 誰が女だー!!」

ギンッ!!

クロコは強烈な斬撃で槍をはじく。それによってロウレイブの体勢がわずかに崩れる。その一瞬の隙にクロコはロウレイブの懷に飛び込んだ。

「くっ!!」

クロコはここぞとばかりに大振りの斬撃を叩き込む。

ヒュンッ!

クロコの斬撃はロウレイブの脇腹をわずかに切り裂く。すぐに口

ウレイブは横に飛びつつ斬撃で反撃する。クロコはそれを後ろに飛びかわす。二人の距離が離れた。

ロウレイブの脇腹からわずかに血がにじむ。

「くそっ、簡単にはいかないか……！」

ロウレイブは手で脇腹を押さえる。その時、横から別の影が飛び出しロウレイブを斬りつける。

「くっ……！」

ロウレイブはそれをなんとか防ぐ。

「大丈夫！？ クロコ君」

「フロウ！」

「ちっ！ 新手か」

わずかに体勢を崩したロウレイブに対しフロウが斬りつける。

ヒュヒュヒュンッ！

フロウの素早い斬撃。

「ぐっ……！」

ロウレイブは後ろに下がりながらそれを紙一重でかわす。さらにクロコが横から攻める。

ヒュンッ！

クロコの斬撃がロウレイブの腹の辺りをわずかに切り裂く。
ロウレイブの表情が険しくなる。

（くっ、新手も手強い、二対一はさすがにきつい。しかし、どちらにしろもう……）

ロウレイブは隙を見て後ろに跳び距離をとると、さらに距離をとって後退しようとする。

「逃がすか！」

「待つて！！ クロコ君」

追おうとするクロコをフロウが止める。

「なんだ！？」

「様子がおかしい……」

フロウがそう言って前を指さす。

クロコがその方向を見ると、全ての国軍兵が後方に下がり解放軍との距離をとっていた。

ロウレイブとの戦いに集中していたクロコはその事態に初めて気づく。

「なんだ……一時撤退か？」

しかし後方に下がった国軍は撤退する様子もなく一定距離をおいたまま何もしない。

その様子をフロウが不思議そうに見る。

「不気味だ……」

フロウは考える。

（下がったにも関わらず撤退しようとしなない。そもそも撤退の合図もなかった。ということは、これは合図なしで下がるよう初めから決められていた敵の作戦、だとしたらどうして……？）

フロウは友軍を見た。気づけば中央付近に集められている味方の陣形……そして次の瞬間、何かに気づいてハツとした。

フロウはすぐさま目を向ける、後退した敵陣のさらに後方に。そこに戦闘開始前には見えなかった巨大な影が見えていた。

フロウはそれを見た瞬間、背中に寒気が走った。フロウは素早く振り返り、味方に向かって今までにないほど大きな声を張りあげ叫んだ。

「みんなっ！！ グラン・マルキノだーッ！！ 岩壁に寄って伏せろーッ！！！！」

フロウは必死で小さな体から出せるだけの大声を出した。

解放軍が一気にどよめく。それを聞いてクロコとブレットとクレイドはすぐさま岩壁に向かって全速力で走る。フロウも叫んだあと素早く岩壁に寄る。他の兵士達もざわめきながら左右に散る。その瞬間、

ドーン

遠くから小さく爆音が響いた。しかし小さいがその響きは長く、岩壁全体に響くような鈍い鈍い音だった。そのあとに風を切り裂き何かが近づいてくる音がした。切り裂く音は徐々に大きくなる。

ヒュウウウウ

次の瞬間、

ドオオオオオオオオオオッ！！！！

目の前に巨大な火柱が現れ、狂ったように一瞬で広がる。赤い閃光が辺りを包み、頭の中で巨大な爆音が暴れる。

遅れて、叩きつけるような風が吹き上がり、その風に巻き上げられた砂は視界を赤茶色で染めあげる。クロコは見た、数十の兵士の体が紙切れのように吹き上がり宙を舞うのを。爆発で吹き飛んだ石の破片が弾丸のように飛んでくる。吹き上げる爆風の嵐に悲鳴さえも聞こえない。

それは理解を超えた感覚だった。自らが見た光景が地獄であつたことを理解することは、今のクロコにはできなかった。

そして辺りは静かになった。

砂の舞い散る音が止み、しばらくの静寂が辺りを包む。

「……うん。」

クロコが小さく声を上げて体を起こす。

キイイイイン

頭を突き刺すような耳鳴りが襲う。舞い上がった土で曇った視界と痛いほどの耳鳴り。

遅れて体のすみずみの痛みと土の味、そして妙に濃い火薬の匂い。

岩壁通路の中央付近には見るに堪えない兵士の死体が見えた。

「これが……こんなものが……」

ぼうぜんとするクロコ。耳鳴りが少しずつ止んでいく。

それと共に大勢の兵士のかけ声が聞こえてくる。それを聞き、クロコはハッと正気に戻った。

少し離れたところからクレイドの叫ぶ声がする。

「敵だー！ 敵が来るぞー！」

クロコは素早く立ち上がり前を見る。すると後方に待機していた国軍が一斉に突撃してきていた。

素早くクロコ、フロウ、ブレッド、クレイドは前に立ち、敵を食い止めようと身構える。それに他の兵士達が続く。しかし続く兵士達は100人ちよつと、巨大な爆撃を受けて間もない状況で、ほとんどの兵士が混乱し判断能力を失っていた。

フロウは険しい表情をする。

（クソ！ 爆撃を受けて崩れた今の状況じゃ、撤退すらままならない……）

「仲間が態勢を立て直すまで、ここはなんとしても死守するよ！

「！」

フロウは叫んだ。それに対しクレイドも叫ぶ。

「当たり前だ！！」

前に出た四人に敵兵が次々と襲いかかる。四人は必死で敵兵を片っ端から切り伏せる。

敵軍の中で一人だけ、明らかに動きが違う者がブレッドに襲いかかる。長槍を構えたロウレイブがブレッドに強烈な一撃を入れる。

ギーン！！

ブレッドはそれを受け止めたが、体がわずかに押される。

「クソッ、なんだ！」

ブレッドは相手の動きに一瞬驚く。ロウレイブは容赦なく次々と槍を振るう。ブレッドは驚きながらも相手の動きを冷静に見極め、攻撃を防ぐ。ブレッドは攻撃に合わせて前進し一気に懐にはいる。

ヒュンッ！

ブレッドのタイミング良いキレのある斬撃。ロウレイブは素早く反応しそれをかわすが、軍服がわずかに切り裂かれた。たまらず後ろに飛んで距離をとる。

「クソッ、こいつも手強いやつか」

その時だった、

「撤退だー！ 一時撤退するぞー！！」

ブローズ副司令が大声で撤退命令を出した。解放軍は態勢をなんとか立て直していた。

それを聞いたクロコ達は追撃してくる敵を食い止めつつ、後方に下がりながら撤退した。

1 - 12 その名は……

グラン・マルキノの砲撃を受けたセウスノール解放軍はグラウド国軍を前に一時撤退をした。

現在、解放軍は第四防衛ラインまで下がっている。兵士達の表情はなおも恐怖と混乱に支配されていた。

そんな中、クレイドが一息ついて口を開く。

「……………つたく、ひどい目にあつたな。一瞬天国が見えたぜ」

「悪い冗談だね……………」

フロウが軽く笑みを作りながら言った。

フロウの隣で砂まみれのブレットがため息をつく。

「しかし敵はついにグラン・マルキノを投入してきたか」

その言葉にフロウが少し反応した。そして黙って考え始める。

(……………グラン・マルキノの投入？ でも、このタイミング……だとすれば敵の狙いは……………)

「皆こつちを向け!!」

ブロズド副司令がすぐ前に立ち大声を上げる。

「敵はついにグラン・マルキノを投入してきた。よってこれより我々は中央を空けた陣形を組む！」

兵士達はそれを黙って聞く。

ブレットがボソツと口を開く。

「まあ、当たり前か……またアレに撃たれて崩されたんじゃ、たまんねえからな」

一方敵陣ではファウンド大佐とロウレイブ大尉が話していた。

ロウレイブは少し不思議そうな様子でファウンド大佐に質問する。

「先ほどの一撃はどのような意味があったのですか？ 重要な一発を使った割には、あまり大きな被害を与えることができなかったように思えるのですが」

それを聞いてファウンド大佐がほえむ。

「ああ、アレはな、被害を与えるためでなく、これからの陣形を崩すのが目的だ」

「……これからの陣形を、ですか？」

「そう、一発撃つことで敵側に、さらに撃ってくるかも、と思わせる。敵にそれを警戒させ、それによって陣形を左右に分断させる」

「……確かに、敵陣が左右に分断されれば、勢いでこちらが押されることがなくなるでしょう。理屈は分かります。しかし、それは…

……」

「そう作戦は実にシンプルだ。シンプル過ぎる……だがグラン・マルキノの威力と恐怖を頭の奥に刻み込まれた精神状態では、冷静にそれを見抜くことは困難だ……」

「……しかし、状況さえ把握できれば見抜けないことはないように思えます」

「知能による判断ならばな。しかしロウレイブ大尉、人が行動を決める時、知能を持って判断することはほんのわずかしかな。人の行動を決める根源は、感情だよ」

ファウンドは再びほえんだ。

一方解放軍側では、ブロズド副指令の作戦を、兵士達は静かに受け入れていた。

疑問を口にする者は誰もいない。

しかしその時、フロウが大きく口を開く。

「待って下さい！ いま軍を左右に割るのは賛成できません！」

フロウはそう言ってブロズド副指令の前に出た。

「中央を取られた陣形では、どのように展開しても力負けしてしまいます」

ブロズド副司令は反論するフロウの方をにらむ。

「なにを言っている……！　もし、もう一度あれを撃たれば、先ほどと同じように我が軍は大きなダメージを受ける」

ブロズドは静かだが気迫のこもった口調で言った。
それらの様子を見て兵士達がザワつく。

「ホントだよ、何言ってるんだ」

「さっきのを砲撃を受けて何も感じなかったのか？」

「あんなのの正面に立つなんて正気じゃないぜ」

辺りから聞こえる兵士達の声を無視し、フロウはブロズドを真っ直ぐ見たまましっかりと口調で話す。

「もう一度撃つことはほぼ考えられません。情報によればグラン・マルキノの砲弾は最大で三弾、基地攻略に絶対必要である以上、敵はこれ以上の無駄撃ちはしません」

「基地攻略に必要なとしてもあと二発ある以上、もう一度撃つてくる可能性は十分に考えられる」

「いえ、考えられません。グラン・マルキノの厄介な点の一つは連続撃ちができること。もし一発しか撃てないのならこちらとしては対策をいくつか立てられる。敵は絶対に基地に着くまで二発残しません」

「……！！　それはあくまで推測であって敵が絶対に撃たないという保障はない」

「敵がもし撃てば、対策を立てることができるこちらが有利になる。もう一度撃つということはすなわちそういうことです」

「だが、今の精神状況で兵士達を中央に立たせてもどちらにしろ力負けする……」

フロウは一步前が出る。

「敵がこのタイミングで重要な一発を撃ってきたということは、敵にとって、それだけ追いつめられた状況だったということです。おそらく敵はこのグラン・マルキノの一撃で流れを変えたかったはず。陣形を変えらるということは、敵の狙い通りに動くということです」

フロウの話聞き兵士達がザワつく。

「しかし……」

ブロズドはさらに反論しようとした。そのブロズドをフロウがキツとにらむ。

「ならば僕が中央の先頭に立ち兵を引つ張ります。そうすれば僕が言うことが少しは説得力を持つでしょう？ いま我々の方が有利な状況にあるのです。このチャンスをもにしなければ我々に勝利はありません！」

その言葉を発したフロウは、その小さい体に似合わないほどの大きな存在感を放っていた。

「しかし、今は………」

ブローズドは言葉に詰まる。

「俺も中央の前衛に立たせてもらっぜ」

クレイドがズイツと前に出る。

「グラン・マルキノにビビッてせっかくの勝機を失うなんて冗談じゃないからな」

「それじゃあ、オレも立たせてもらおうかな」

ブレットも続いて前に出る。

「クロはどうする？」

ブレットは後ろのクロコを見た。

「……聞くまでもねーだろ」

「そうか、聞くまでもなく端っこで戦うか」

「どうしてそうなるんだよ！」

「ハッハッハッ、冗談だ」

その様子を見て兵士達がさらにザワつく。

「おいおいマジか……！？」

「でも確かにこちらが有利なのは確かだし」

「ここで陣形を分けても……」

恐怖に支配されていた兵士達の表情にわずかだが生気が戻る。
ブロズド副司令はその様子を見て、大きくため息をついた。

「……………分かった。では隊の配置は今まで通りの形で敵軍を迎え撃つ」

ブロズド副司令はクロコ達の方を再び見る。

「おまえ達四名は先ほど自らが言ったように、中央の前衛に立って敵を迎え撃ってくれ」

「ハッ！」

四人は力強く敬礼する。

「……………見抜かれる可能性はないのですか？」

国軍本陣、ロウレイブがファウンドの前で言った。
ファウンドは腕を組み、口を開いた。

「ないとは言えない。もしセウスノール軍側に、ある程度の発言力があり、かつあの状況下でこちらの狙いを冷静に分析できる者がいたならば、有りえなくもない。しかし私の経験上、そのような者はほとんど存在しないな」

「もし、それでも仮に見抜かれたとしたら……」

「その時は完全撤退も考えなければならない」

その言葉を聞いたロウレイブの眼がギラリと光る。

「もしそのような事態になっても、私が押さえて見せます」

ロウレイブはそう言つと長槍を持つて歩き出した。

「……無理はするなよ」

赤色の岩石が作る天然の通路、それを塞ぐ第四防衛ライン。
その前方にグラウド国軍が現れた。

およそ500m手前に陣を組み、構える。

そしてその後方には巨大なグラン・マルキノの影がうつすらと見え
えた。

パンッ！

一発の銃声と共に国軍の兵士達が一気に突撃してくる。

それに応じ解放軍の兵士達も突撃する。

解放軍側はクロコ、ブレッド、フロウ、クレイドが中央の先頭に
立ち向かい撃つ。

ロウレイブはその様子を見て険しい表情になる。

(……！ 全く崩れている様子がない。しかしそれでもこの私が……！)

中央前衛に立つ四人が敵陣中央を一気に切り崩す。そこに大勢の解放軍兵が続き敵軍陣形を左右に引き裂く。

国軍の陣形はあっさり左右に分断された。

クロコはキレのある動きで次々と剣兵を仕留めつつ、分断した陣形の左方に強引に進出をかける。

しかしその時、鋭い突きがクロコを襲う。とっさにかわすクロコ。

「そろそろ仕留めさせてもらおうか!!」

ロウレイブが再びクロコの前に立ちはだかる。

「それはこっちのセリフだ、さっきの仕返しをしないと」

クロコはロウレイブの前で笑みを浮かべた。

「ほざくな!!」

ロウレイブはクロコに間合いの外からの攻撃を仕掛ける。斬撃と突きの波状攻撃がクロコを襲う。その攻撃の全てが速く、正確だ。しかしクロコはその間合いを完璧に見切り、時に避け、時に防ぎ、それに冷静に対応する。

「悪いがアンタの間合いにはもう慣れた」

「だからどうした！ 間合いに慣れた程度で私を勝てると思っ
ているのか」

ロウレイブの攻撃が激しさを増す。しかしその攻撃はことごとく
クロコに防がれる。クロコはロウレイブの攻撃を防ぎつつ徐々に間
合いを詰めていく。

「させるか！」

ロウレイブは槍を大きく回転させクロコに向かって強烈な斬撃を
放つ。クロコはその大振りの軌道を見切り素早く剣で防ごうとした。
その時だった、ロウレイブの斬撃の軌道がわずかに変化し、クロコ
の足下へと向かう。

「……！！」

「これで！！」

ロウレイブの斬撃が足を切り裂こうとした瞬間、クロコは一瞬の
反応でロウレイブの槍を踏みつけた。

「なに！」

ロウレイブの槍は止められた。その瞬間クロコは懷に一気に飛び
込む。

ヒュンッ！！

クロコの斬撃は空気と共にロウレイブの体を切り裂いた。
ロウレイブの動きが止まる。

「こんな、こんなところで……」

ロウレイブは少し体を仰け反らしながら、よろよろと数歩歩いた。

「死ぬわけ……に……は……」

ロウレイブは力無く倒れた。

「悪いな、オレもここで死ぬ気はないんだ」

クロコは静かな口調で言った。

その頃、ファウンド大佐はグラン・マルキノの前に立ち戦場の様子を確認していた。

二つに分断された自陣。

戦局は解放軍側に傾きつつあった。

「退き時か……」

ファウンド大佐は静かに言った。その時だった、

ガシャンッ！ ドンッ！

近くでなにかの音がした。そのすぐ後に兵士の怒声が聞こえる。

「おまえ！ 何をしている」

「わわっ！ す、すみません、足が滑って……」

ファウンド大佐がその方向を見ると私服を着た少年が兵士の上におぶさっている。

その少年は年齢十五、六、身に合わないダボダボな服を着ており、サラッとした白い髪と、分厚い眼鏡が特徴だ。兵士に怒られたせいオドオドしている。

兵士が怒鳴る。

「きさま、何者だ！」

「何者って……クラウド軍人です」

兵士が眼鏡の少年を振り払って立ち上がる。少年もイソイソと立ち上がった。

「軍人ならばなぜ軍服を着ていない！」

「あの、それは、と、とにかくすみません！」

眼鏡の少年は平謝りしている。その後ニコツと愛想良く笑う。

「こんな格好しているんですけど、一応軍人なんです」

「どうしたんだ、一体」

ファウンド大佐が早歩きで二人に近づく。

眼鏡の少年がファウンド大佐を見ると背筋をピンと伸ばしイソイ

ソと敬礼する。

「はっ！ 遅れて申し訳ありません、シャルルロッド基地より援軍として参りましたスコア・フィードウッドです」

「スコア……フィードウッド、君が……」

ファウンド大佐はぼうつとした表情で少年を見る。

（彼が、『瞬神の騎士の再来』……！）

1 - 1 3 襲来

岩石に挟まれた大地に巨大なグラン・マルキノが静かにたたずんでいる。

その前でファウンド大佐と眼鏡の少年スコアは向かい合っていた。

「君がスコア・フィードウッドか……」

「はっ！ 遅れて申し訳ありませんでした。ここに向かう途中、崖崩れに遭遇してしましまして」

（あと落とし物を探したり……）

「ん？ なんだって」

「い、いえ、なんでもありません！」

「それより、君はなぜ軍服を着ていない？」

ファウンド大佐はスコアのダボダボな服装を見た。

「いえ、それは、軍服を着て町を歩くのが嫌いでして……それを上官に相談したところ長旅の時だけは私服で良いと言っていただけで、このような格好をしている次第であります……」

「……分かった、それはいい、それよりも大丈夫なのか？」

「大丈夫……と言いますと?」

「戦闘に参加できるのかということだ」

「も、もちろんです」

「そうか、ならば早く準備したまえ」

「は、はい!」

スコアはファウンド大佐に背中を向け駆け出した。そんなスコアにファウンド大佐が一言放つ。

「戦局は現在こちらが不利だ。君の活躍を期待する」

その言葉にスコアが振り向く。

「分かりました。ボクはそのために来たのですから」

眼鏡の奥のスコアの目が一瞬鋭く光った。

ファウンドはその姿を見送ると、再び戦場の方を見つめる。

（戦局は我々が不利だ。だがまだ逆転の可能性はある。あとは彼の働き次第か）

国軍本陣の隅、そこでスコアは大きな茶色のバッグを開け、中から軍服を取り出す。

ダボツとした私服を脱ぎ、サイズの合ったピシツとした軍服を身

にまとう。

白い鞘に収まった剣を腰に付けると、顔を少し下げて厚い眼鏡を外し、そして再びゆっくりと顔を上げる。少年の眼が鋭くなる。深い青色の瞳が冷たく光る。少年は戦士の表情になった。

そこにはいままでのオドオドとした少年の面影はなかった。姿はもちろん、それを取り巻く雰囲気そのものが全く別のものに変わっていた。氷のように冷たく、そして鋭い威圧感に満ちている。

スコアは戦場の方に目を向け、そして駆け出した。

赤色の岩壁に挟まれた戦場では解放軍が有利に戦いを進めていた。国軍の陣形を左右に分断し、その陣形を囲むようにして激しい攻撃を浴びせる。

しかし兵士一人一人の能力に勝っている国軍は完全に押し切られず対抗していた。

その中でフロウは素早い動きで敵陣に切り込み、敵兵を次々と切り伏せ陣形を崩していた。

フロウは一瞬全体を見渡す。

（敵陣を二つに分断してこちらが有利な状態になった。だけど敵軍もその状況に徐々に対応しつつある。有利に戦闘を進めている今の内にケリをつけるつもりでやらないと……）

フロウは決して手を緩めず、向かってくる敵を次々と切り伏せる。その時だった、

フロウは前方に白い髪をした兵士を確認した。スコアがフロウの前の現れたのだ。その直後だった。

フロウの目の前からスコアの姿が消えた。

「……！」

フロウの間合いに突如スコアの姿が現れる。

「なっ……！」

ヒュンッ！！

スコアの剣は一瞬にしてフロウの体を切り裂いた。フロウはわずかに体を反らし直撃こそ避けたが、脇腹から血が噴きあがる。

「……がつ！」

フロウは脇腹を押さえ地面に伏した。

「フロウ……！」

近くにいたクレイドが事態に気づき駆けつけてきた。

「このっ……！」

クレイドは両腕で力強く巨大な剣を握ると、正面からスコアに向けて強烈な一撃を放つ。

ギインッ！！

スコアはクレイドの一撃を片手の剣で止める。

「なんだと……っ！」

スコアは一瞬でクレイドの懐に入った。

ズンッ！！

スコアの強烈な蹴りがクレイドに叩きつけられる。鈍い音と共にクレイドの大きな図体が軽々と浮き上がり飛ばされる。

地面引きずられ、そして伏すクレイド。

「ぐ……あ……」

その蹴りの衝撃で全く動けない。クレイドは悶絶した。

一方ブレッドはフロウとクレイドのいる場所から離れた場所で戦っていた。

ブレッドは襲ってくる剣兵を一人斬り伏せると、周りの状況を確認する。その時ある異変に気付いた。

（フロウとクレイドが戦っている辺りが押され始めている……どうなってんだ？）

その時ブレッドは少し前方に白い髪の兵士の姿を見た。ブレッドとスコアの目が合う。

スコアの氷のように冷たい視線……ブレッドの背中に寒気が走る。次の瞬間スコアは恐ろしいほどのスピードでブレッドに向かってくる。それに応じてブレッドも剣を構える。

（速い……！ オレより、いやクロコやフロウよりも、もっと……！）

スコアは一気に間合いを詰めてくる。

「いくら速くても目を凝らせば……！」

ブレッドはスコアの動きに集中した。しかしスコアの姿は一瞬でブレッドの視界から消える。

「……えっ？」

スコアはブレッドの目の前にいた。

「クソ……ッ……！」

ヒュンッ！

ブレッドは素早い反応で後ろに飛んだ。しかしすでにスコアの剣はブレッドの腹をかすめ切り裂いていた。ブレッドの腹から血が噴きあがる。

「ぐっ……」

ブレッドは腹を押さえてひざをつく。しかしそれでも剣を力強く握り、スコアに向かって息を切らしながら構える。

「ハッ、ハッ、ハッ、……クソ」

スコアはそんなブレッドを表情一つ変えずに冷静な眼で見っていた。そして容赦のない一撃を放とうとする、その瞬間だった、

「うおおおおおっ!!」

クロコが横から全速力で飛び込みながらスコアに向かって斬りつける。

ギンッ!!

スコアはその攻撃に一瞬で反応した。スコアの放った強烈な斬撃はクロコの剣を宙にはじき飛ばした。剣はクロコの真上を激しく回転しながら舞う。

クロコはその瞬間からだが固まる。

今まで自分が生きていた人生の中で、これほど完璧に自分の攻撃が見切られ、そしてこれほど見事に自分の剣をはじかれたことはなかった。それはクロコにとって信じられない出来事だった。

その出来事にクロコは放心する。

スコアは剣を持たない無防備なクロコに対し、容赦なく剣を振り上げる。

「クロコーツ!!!」

ブレットが叫ぶ。その瞬間クロコはハッと我に返る。

しかし全てが遅かった。

振り上げられた剣を目にした途端クロコは全てを悟った。

(ダメだ……やられる)

しかし振り上げられた剣はクロコに向かって振り下ろされることはなかった。

スコアの手がわずかに震えていた。

「なんで……きみが……！」

今までの氷のように冷たい眼に初めて感情が宿る。

「……？」

クロコは敵のその様子をぼうぜんと見た。

その時だった。

パンッパンッパンッ！

「撤退だー！ 一時撤退するぞー！」

信号銃の音の後にブロード副司令の大声が響いた。

すでに解放軍はスコアによって攻撃の基盤が崩され、自力で勝る
国軍に押し返され始めていた。

「くっ！」

クロコは素早く自分の剣を拾うとブーツと立っているスコアから
距離をとる。ブレットも腹を押さえながらも走りだし撤退する。

少し離れたところでは、なんとか回復したクレイドがフロウに肩
を貸し撤退していた。

スコアはクロコが撤退していく様子を、剣を下げたままブーツと
見つめていた。

1 - 14 二人だけの部隊

撤退したセウスノール解放軍は岩石帯の通路を抜けた。

辺りには小さな岩石が点在するだけの荒野が広がっている。

そして目の前には灰色の石壁、第五防衛ラインが広がっていた。

ウォーズレイの基地と町を背に、町の石門を囲うように設置されたひと続きの長い防壁だ。

クロコたち解放軍はとうとうこの最後の防衛ラインまで下がってしまった。

日はすでに暮れかけていた。

第五防衛ラインの裏で多くの兵士達が医療班の手当てを受ける。

フロウとブレッドの姿もそこにあった。

「状態はどうだ？ ブレッド」

クロコが手当てを受けているブレッドに話しかけた。

「オレは大丈夫さ、傷も浅いしな。オレよりフロウの方が傷は深い

……」

「僕も大丈夫さ、次の戦闘は問題ないよ」

フロウは笑顔を見せる。そんなフロウの横からクレイドが口を挟む。

「さて、どうだろうな。見た感じ浅くはないぜ」

「……仮に浅くなくても下がるわけにはいかないさ。あんなのが出たんなら……」

「……………」

フロウがその言葉を発した途端四人全員が黙る。

しばらくの沈黙のあと、フロウが再び口を開く。

「……おそらくあれが『瞬神の騎士の再来』スコア・フィードウツだ」

「『瞬神の騎士の再来』……あれが前、話に出た国軍の剣士か」

ブレッドが静かな口調で言った。

フロウは視線を落とす。

「確かに強いつてことは知ってた……」

フロウは悔しそうな表情を浮かべる。

「名も通っていたしね、天才だって……」

その言葉を聞いてクレイドが軽く息を吐く。

「あれは天才なんかじゃねえよ」

クレイドは眉をひそめる。

「化け物だ」

「化け物か、正直……あれほどだとはね」

「……………」

またしばらくの沈黙が流れる。

ブレッドがクロコの方を見る。

「そういえばクロ、おまえ、そいつとなにか関わりがあるのか？
どうもやつの様子がおまえを見てからおかしかった気がするんだが」

ブレッドがそう言うのと他の二人もクロコを見る。

クロコは少し考えたあと、口を開く。

「分からない、正直……記憶にない、それにあんな威圧感を持ったやつなら忘れるはずねえし」

「そうか……」

ブレッドは静かにうなづく。

「確かにオレもクロとほとんど行動をいっしょにしているが、あんなやつの記憶はない」

「ああ」

クロコはそう答えたあと少し下を向く。

（あんな威圧感を持ったやつなら忘れるはずがない、けどなんだ……あいつが最後に見せた表情、頭のどこかで引っかかる……）

「なら結局それはなんだったんだろうね」

フロウは不思議そうな様子だ。

「分からねえこと考えても仕方ないだろ、ようはこれからどうするかってことだ」

そう言ってクレイドが三人を見る。

「もう最後の防衛ラインまで押し出されちゃった。さらに敵には『瞬神の騎士の再来』が加わって前のような攻めは通用しない」

フロウは空を見上げる。すでに日はほとんど落ち、うつすらと暗くなっていた。

「おそらく今日はこれ以上の戦闘はないね。となると決着は明日、状況を考えるとおそらく明日の最初の戦闘が決着戦になる可能性が高い……」

ブレットは首をさする。

「問題は『瞬神の騎士の再来』、それと当初通りグラン・マルキノか」

「だが今までのように俺達が相手の陣をこじ開ける作戦は使えない、『瞬神の騎士の再来』がいる限りな」

「正面对決で彼を仕留めるには僕たち四人が陣形を組んで戦うしかない。けど、それでも相手の方に分がある……」

「すでに手傷も負っちゃったからな」

「おおっ、ここにいたのか」

突然別のゆっくりとした声が聞こえた。

四人がその声の方向を見ると中年の軍人が立っていた。

その軍人は年齢四十代後半、中肉中背、白い髪、ふわっとした白いひげで顔が覆われている。ウォーズレイ基地の司令官アストリアだ。

それを見てフロウが少し驚く。

「アストリア司令官、どうしてここに」

「なーに、簡単なことさ。この最終防衛ラインを敵に超えられればグラン・マルキノによって一瞬で基地が破壊されてしまう。なら基地での防衛戦など意味はない。司令部をブローズド副指令に任せ、私が自ら指揮をとる」

「ということは、つまり……」

「うむ、つまりここで決着がつく。相手もグラン・マルキノを一気に前進させてくるだろう。我々もここで全ての戦力を投入する予定だ。ここに来たのはきみらにも作戦会議に出席してもらいたいからなんだ。この戦いの勝利にはきみらの力が必要だからな」

アストリア司令官はそう言うと、その後四人を第五防衛ラインの隅に建てられている小屋に連れて行った。

大きな木製テーブルをアストリア司令官、隊長二人、そしてクロコ達の七人で囲んだ。

アストリア司令官が地図を広げる。

そしてゆっくりとした口調で話し始める。

「まずは状況を整理しよう。まず我々のいる第五防衛ラインとウォーズレイ基地までの距離はおよそ600m、グラン・マルキノの射程とほぼ同じだ」

アストリア司令官は第五防衛ライン付近を指さす。

フロウが静かに口を開く。

「つまりここを突破されればグラン・マルキノによって基地は破壊される」

「うむ、しかし現在戦況は敵が有利だ。我々は最終防衛ラインまで押し出され、さらに数においてはほぼ同じものの、主戦力においては敵が優っている。つまりきみたちと『瞬神の騎士の再来』との差になるな」

「……………」

「もしこのまま、まともにぶつかれば間違いなく我々が不利だ」

「だからといってこのまま逃げるわけにはいかねーだろ」

クロコはアストリア司令官をにらむ。それに動じることなくアストリア司令官が口を開く。

「その通りだ。敵が有利なのは間違いない。しかし敵側是我々に勝つために二つの条件をクリアしなければならぬ」

「二つの条件……？」

「ああ、一つは第五防衛ラインの突破、そしてもう一つはグラン・マルキノを第五防衛ライン付近まで進ませること」

「そのまんまだな」

「ああ、そうだ。だが逆にいえば、この二つ、どちらかを阻止することができれば、敵が我々から勝利を奪うことは難しくなる。岩石の通路の押し合いにより、互いにだいたい兵力をすり減らした。現在の敵戦力では基地攻略はほぼ不可能に近い。つまり敵は現在グラン・マルキノ以外の決め手を持っていないことになる」

アストリアは再び第五防衛ライン付近を指さす。

「話をまとめよう。まず一つ目を阻止するにはさっき言ったとおり
の正面对決。しかし我々としては、そこは避けたい。となれば二つ
目の条件の阻止、つまりは……」

「グラン・マルキノの破壊、ですね」

フロウが静かに言った。

「その通りだ」

クロコが地図を見つめる。

「おい、けどアレを破壊するには敵軍を突破しなきゃいけないんじゃないのか？」

「そう、そこが今回の作戦のポイントだ。我々はこの第五防衛ラインに兵士を集め防衛ラインを守る、ここまでは今までと変わらない。だがそれともう一つ少数部隊を編成し、別ルートでグラン・マルキノを奇襲し破壊する」

「奇襲によるグラン・マルキノの破壊……」

「そうだ。グラン・マルキノを破壊すれば敵は決め手を失う。そうなれば少数規模の戦闘において基地を所有する我々が圧倒的に有利になる。敵は撤退せざるおえない」

「しかし、奇襲など簡単にできるのですか？」

「この岩石地帯の複雑な地形は我々しか完全に把握していない。つまり我々しか知らない抜け道もいくつか存在する。そこを利用すれば少数部隊ならグラン・マルキノに近づくことが可能だ」

クロコはそれを聞いてボソツと口を開く。

「奇襲作戦、か」

岩壁に挟まれた空間にある第四防衛ライン。石壁は崩され、そこにグラン・マルキノがそびえたつ。

グラウド国軍も同じように作戦会議を開いていた。灯りの下、十人近い軍人が石板に腰掛け、地面に置かれたテーブルの上の地図を囲む。

「次の戦闘には全戦力を投入しましょう。このまま押し切れれば我々の勝利は間違いありません！」

軍人の一人がファウンド大佐に向かって言った。

「そうかな？」

ファウンド大佐が静かな口調で言った。

「えっ？」

「このまま戦えば我々が有利だろう。しかし敵もそれは分かっている」

ファウンド大佐はあごひげを触る。

「もし私が敵ならば、グラン・マルキノ本体を潰しにかかる」

「それが可能だと？」

軍人の一人が言った。すると別の軍人が口を開く。

「いえ、しかしそんなことはできないのでは？ 正面からでは間違

いなく無理ですし、岩石帯を利用した別ルートでの奇襲でも、こちらの警戒網に引っかかるはずですよ」

それを聞いてファウンド大佐が答える。

「少数部隊なら可能だ。防衛ラインの設置場所からも、敵はこの地形を相当熟知している。こちらが警戒しづらいルートを少数精鋭で攻めれば奇襲は可能だ」

「ならスコアをグラン・マルキノの防衛に回しましょう。そうすれば敵の奇襲を押さえられます」

「いや、彼が抜ければ第五防衛ラインの突破は難しくなる。彼は第五防衛ライン突破に努めてもらう。グラン・マルキノは腕利きの兵士十数名で守らせる」

「しかしそれだけでは……」

「それだけではない。なに心配するな……策はある」

ファウンド大佐は不敵にほえんだ。

一方解放軍の作戦会議。

「奇襲作戦に参加するメンバーはどうするんですか？」

ブレットがアストリア司令官に聞く。

「ふむ、すでに考えてある」

アストリア司令官は顔を上げ四人の方向を見る。

「奇襲作戦を行なう部隊の人数は二人、クロコとフロウだ」

「……！ 二人ですか？」

フロウが思わず聞き返した。ブレッドも驚いた表情で口を開く。

「いくらなんでも少ないのでは？」

「奇襲の成功率を上げるには数をできるだけ少なくするのが望ましい、そしてできる限り迅速に行動できる方が良い」

それを聞いてクレイドがうなづく。

「なるほどな、つまり足のきくこの二人ってわけか。他のやつらを加えても、二人のスピードにはまずついてこれないだろうしな」

対してブレッドは不安げな表情だ。

「しかし……二人っていうのはいくらなんでも少ないな」

アストリア司令官はその様子を見て口を開く。

「確かに数は少ない」

アストリアはフロウとクロコ、二人の顔を見つめる。

「しかし私はきみたち二人だけでも十分な戦力だと判断している」

二人もアストリアの方を真っ直ぐ見つめ返す。

ふいにクロコがフロウの方を見て言う。

「……フロウ、おまえ前の戦闘での傷はいいのか？」

「大丈夫だよ。傷口はしっかり縫合したし、それに……」

フロウはニコツと笑う。

「それに奇襲は僕の得意分野。下がる気はないよ」

その後、アストリア司令官が細かい作戦の説明をして会議は終了した。

夜になった。

兵士達は防衛ラインの裏でグループごとにたき火をし、それを囲むように毛布でくるまって寝ている。

そんな中、クロコはどうしても寝つけず夜空を見つめていた。満月に照らされた丸雲がゆつくりと流れ、中心には赤い星が光り輝く。

「クロ……起きてるのか？」

突然クロコの隣から声がした。同じように寝つけずにいたブレットが話しかけてきたのだ。

「ああ、なんだ。おまえも寝つけないのか」

クロコはそう言ってブレットの方を見た。ブレットは笑う。

「どうも落ち着かなくてな。おまえもそうなんだろう？」

「……まあ、そんなトコだ」

「しかし、ここに来てから大変だよな。正直二回ぐらい死んだかと思っただぜ」

「勝った、オレは三回だ」

「ハハハ、そりゃあオレの負けだな」

ブレットは楽しそうに笑う、それに釣られてクロコも少し笑う。

「なあ、クロ」

「ん？」

「……………」

ブレットは少し黙ったあと再び口を開く。

「入軍試験のあと、ガルディアさんの前で言ったこと、覚えてるか？」

「ん……？ 何のことだよ」

「おまえが入軍する理由を言った時のことだよ」

「ああ、アレか」

「おまえは『希望』一つ求めてるって言ったよな」

「なんだよ、突然」

するとブレッドは黙った、
少しの静寂の後、ブレッドが口を開く。

「なあクロ、本当にこの先に『希望』はあると思うか……？」

「そんなもん先に進む前から考えたってしょうがねえだろ。今はただ、信じて進むだけだ」

「フツ、そうか、そうだな……いいんじゃないか、おまえらしい」

「おまえはどうなんだよ！！」

「ちょっと静かにしゃべろよ。フロウとクレイドが起きるぞ」

「……………おまえはどうなんだよ」

クロコはボソボソとしゃべった。

「……………」

ブレッドは少し黙ったあとゆっくりと口を開く。

「オレは……少し迷っているのかもな」

「何をだよ」

「わからねえ……………」

「……ハッ？」

「まあ今は、ただ見届けようと思ってるよ。それがオレの一番だ」

「だから何をだよ」

「何をだろうな」

「おいっ」

ブレッドはほえんだ。

「そろそろ寝ようぜ。おやすみなクロ……………」

そう言つとブレッドはそのまま黙った。

クロコも間もなく、ゆっくりと眠りに落ちていった。

クラウド国軍本陣、兵士達が明日に備えて寝ている中、スコアは一人起きて、座り込んで考えていた。

(クロコ……なんできみが……なんで……)

翌朝、クロコ達は準備を整えて待機していた。

「クロコさん！」

元気のいい声がクロコの背後から響いた。
クロコが振り向くと、そこにはサキがうれしそうな顔で立っていた。

「サキ！」

「あつ、サキ君、ケガはもういいの？」

フロウはサキに声をかける。

「はいっ！　なんとか間に合いました。これでまた皆さんといっしょに戦えます！」

サキはうれしそうに笑う。

「クロコさん達が活躍しているのに、僕だけがずっと寝ているわけ

にはいきませんから！ クロコさん達ほどではないにしろ僕も少しは役に立たないと！」

サキはそう言っ て意気込む。

その様子を見たクレイドがうれしそうにほほえむ。

「それじゃあ期待してるぜ。サキ」

「はいっ！」

しばらくして先行していた偵察部隊の一部が帰ってきた。

彼らはすぐにアストリア司令官に現状を報告する。

「敵軍はほぼ全戦力を投入して、こちらへ向かってきています。こちらに着くまでおよそ二十分」

「グラン・マルキノの様子は？」

「第四防衛ライン地点で待機しています」

「分かった。ご苦労だったな」

アストリア司令官は偵察隊に背を向けてクロコ達の方へ近づく。

「もうすぐ作戦開始だ。どうだ準備はいいかね？」

「はい、問題ありません」

フロウはピシッと答えた。

「待ちくたびれたぜ」

クロコは不敵に笑った。

「ふむ、大丈夫そうだなによりだ」

アストリアは二人の様子を見てニコツと笑う。

「ルートは事前に確認した通りだ。予定通りCルートで行ってくれ。あとコレを」

アストリアは黒い箱状の物体をクロコとフロウに手渡した。

「時限式の爆弾だ。昨日説明した通り、これだけでグラン・マルキノを破壊することはできない。しかしグラン・マルキノ内部に侵入して、そこにあるグラン・マルキノ自身の砲弾に引火させれば、破壊は可能だ」

「分かりました」

「クロコさんフロウさん、気をつけて」

サキが声をかける。

「こっちはまかせとけよ」

クレイドはニヤリと笑った。

ブレットはクロコに近づき、力強く目を見る。

「クロ、必ず帰ってこいよ」

「ああ、こんなトコで死ぬ気はねえよ」

ブレッドはクロコの肩をポンと叩くと、フロウの方に向きを変える。

「フロウも、死ぬなよ」

ブレッドはフロウに手を差し出す。

「クロコ君よりは安心していいよ」

フロウはそう言うとブレッドの手をギュッと握る。

「おいっ！　どういう意味だ！」

クロコがつっこむ。

ブレッドは岩石帯の方を見ると剣の柄をなでる。

「さて、オレ達の相手は『瞬神の騎士の再来』か……」

それを聞いてクレイドはギラツと目を光らす。

「あのヤロウに借りを返さないとな……！」

クレイドは力強く言った。

「おいおい、オレ達はいくまで足止めだぞ」

ブレットがつっこむ。

フロウは軽く息を吐いた。

「さて、そろそろだね」

フロウがそう言うと、クロコはフロウの方をジッと見た。

「フロウ」

「なに？」

「必ず生き残るぞ」

それを聞いてフロウはニコッと笑う。

「うん、必ず」

その後フロウは剣の鞘をギュッと握る。それを見てクロコも鋭く眼を光らす。

辺りに静寂が流れる。

その静寂をアストリアの声が切り裂く。

「これより作戦を開始する」

クロコとフロウは駆け出した。

しかし駆けるフロウの脳裏にわずかな不安がよぎる。

（総力戦と奇襲……互いに危険な戦いだ。けど、もし相手がこちらの手を読んでいたら、僕達の方が明らかに危険になる）

1 - 15 最終線の攻防

岩石が点在する赤色の大地が広がる。

その大地に灰色の防壁が長く続く。ここはウォーズレイ基地を守る最後の砦、第五防衛ライン。

クロコ達の作戦開始から約二十分、第五防衛ラインの前にグラウド国軍が現れた。青の軍服を着た兵士達の大群。

国軍は一定距離まで近づくと動きを止め、ジッと様子をつかがう。

しばらくの静寂が続く。

国軍の中にスコア・フィードウツドの姿もあった。

スコアは深い青い瞳で解放軍の方向を見つめる。

(あの中にクロコが……)

(……)

(……いや、今は戦うことに集中するんだ)

解放軍側、最終防衛ラインの中央にアストリア司令官が立っていた。いつものおっとりとした雰囲気は消え、緊迫した表情で国軍を見つめる。

「さて、いよいよだ。久しぶりの戦場……アレをやるのも久しぶり

だな」

パンッ！

信号銃が響く。

「突撃っ！」

国軍から攻撃の合図が出る。それと共にかげ声を上げ無数の国軍兵が防衛ラインへと押し寄せてくる。

スコアは国軍の中央前衛に立ち、いち早く防衛ラインへと距離を縮める。

その様子を見たアストリア司令官の表情が険しくなる。

（やはりスコア・フィードウッドを中心に攻めてきたか。しかしこちらでもそれは計算している！）

スコアが防衛ライン200mほど手前に近づいた時、

「砲撃開始っ！」

アストリアの号令と同時に六門の大砲がスコアを一斉に砲撃する。

ドドドドドドッ！！

大砲はほぼ同時にスコアに向けて放たれた。スコアはそれを素早くかわす。

「第二、一斉砲撃！」

ドドドドドドッ！

別の砲兵隊がスコアの避ける方向を狙いましたように同時に砲撃を放った。

「くっ！」

スコアはその砲撃も素早い身のこなしでかわす。

ドドドドドドッ！

しかしさらに間髪入れずに別の砲兵隊がスコアに砲撃を放った。

「……ッ！！」

大砲の爆発の一つがスコアにカスる。大砲の砲撃は絶えずスコアを狙い続ける。

アストリアは複数の砲兵隊に同時に指示を出し続ける。

「第一、砲撃準備！ 第二、大砲をC3方向！ 第三、A4方向！ 第四、一斉砲撃！！」

砲兵隊はそれに応じ完璧な連携で、間髪入れずにスコアを狙い続ける。その砲撃はスコアの避ける方向まで計算に入れて放たれ続けた。

「……クソッ！」

その砲撃の嵐に、さすがのスコアも避けるのみで防衛ラインに近づくことができない。アストリアは休むことなく指示を出し続ける。

（国軍は先の作戦で砲兵隊を多く失っている。それによって生じたこちらの砲兵隊の上回り分をスコアの足止めに使う。あとは……）

国軍の指揮官は敵の予想外の足止めに戸惑う。

「くッ……！ 敵の砲兵隊のほとんどは『瞬神の騎士の再来』に向いている。こちらは両翼に分かれて防衛ラインを崩せ！」

国軍は砲撃の集中している中央を避け、両翼に分かれて進軍を開始した。

北側と南側に分かれた国軍は防衛ライン近くまで一気に攻めてきた。その時、

「がつ！」

北側の先頭の兵士が切り伏せられる。ブレットを先頭にした隊が立ち塞がる。

「ぐあっ！」

南側の先頭の兵士達が吹き飛ばされる。南側にはクレイドを先頭にした隊が立ち塞がる。

北側のブレットがニヤツと笑う。

「『瞬神の騎士の再来』を相手にするよりはういぶんマシだな」

南側のクレイドが剣を構えて言う。

「ホントはリベンジしたかったが……」

サキはブレットと同じ北側、その後方の陣形に加わっていた。

（僕も、少しでもみんなの力になるんだ！）

ブレットは洗練された動きで敵兵を切り伏せ、陣形の中央を切り崩す。それに解放軍兵たちが続く。

クレイドは巨大剣を振り回す、その度に敵兵が宙を舞う。

南北に分かれた国軍の陣形は、北はブレット、南はクレイドを中心とした部隊によって徐々に切り崩される。

さらにアストリアの指示による完璧な連携の砲撃で、スコアは完全に足止めされていた。

国軍の指揮官はその様子にぼうぜんとする。

「おのれ……どうなっているんだ！」

その間も絶えずアストリアは砲兵隊に指示を出し続ける。

（ここまでは作戦通り、とはいえ足止めは砲弾の球が尽きるまで…
…あとは彼らの成功を信じるしかない）

その頃クロコとフロウは地図に示されたとおりのルートを一たす
ら走っていた。

地図で示されたルートは、形の悪い岩壁のせいで所々が非常に狭
く、また足場は一部岩石が盛り上がっているせいでひどく悪かった。
それでも二人は足を止めることなくひたすら走り続ける。

「はあっ、はあっ、はあっ」

フロウが少し息を切らしながら傷口を抑えた。

「おい、大丈夫か？」

クロコは少し後ろを走るフロウの方を見た。

「心配無用だよ。それよりグラン・マルキノまであと少しだ。気を
抜かないで」

二人は走り続ける。

一方、第五防衛ライン、南北に分かれた国軍はブレットとクレイ

ドによって完全に攻めあぐんでいた。

しかし中央では無数の爆音が響く中、ある変化が起きていた。

ドドドドドドンッ！

ドドドドドドンッ！

砲兵隊の兵士のほとんどが戸惑いの表情を浮かべていた。
連携は今まで通り狂うことなく完璧に行なわれている。

しかしその砲弾の嵐の中、スコアは信じられないほどの素早い身のこなしで砲撃を紙一重で避けながら、少しずつ少しずつ防衛ラインへと近付いてきていた。

「こ、こんなことが……」

「化け物だ……」

砲兵隊のほとんどがその光景を「信じられない」という表情で見
ていた。それは絶え間なく指示を出しているアストリアも同様であ
った。

（『瞬神の騎士の再来』……まさか、これほどまでとは）

アストリアの額から汗が流れる。しかしアストリアはキツと目つ
きを鋭くする。

「動じるな！ 敵はこちらに近づけば近づくほど砲撃を避けづら
くなる！ 第一、A7方向！ 集中するんだ！」

その間もスコアは素早い身のこなしで砲弾の嵐を紙一重でよけな
がら、ジワジワと防衛ラインに近づいてくる。その鋭い眼は防衛ラ

インの方だけを見つめていた。

スコアは少しずつ少しずつ近づいてくる。

本来近づけば近づくほど大砲との距離が短くなるため避けづらくなる。しかしスコアが防衛ラインに近づく速度は逆に速くなっているようにさえ見えた。

「なんなんだよ！ あいつは
「く、くそっ！」

目の前にある信じ難い光景、そしてソレがジワジワと近付いてくる恐怖。それにより、砲撃に集中していた兵士達の感情が徐々にあらわになってくる。

「第一、一斉砲撃！ 落ち着け、砲撃することだけに集中するんだ！」

アストリアは指示を出しながらも兵士達をなだめた。

（まずい、これ以上近づかれると北側の友軍を巻き込みかねない……あと少し、あと少しもたせるんだ）

スコアが近づけば近づくほど砲撃部隊の兵士達の表情から恐怖の色が濃くなる。

その中でひととき恐怖を表に出していた兵士が一人いた。その兵士は手を震わせながら必死に大砲をスコアの方へと向けていた。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

その兵士は恐怖を押し殺しながら必死でアストリアの指示に従っていた。次の瞬間、一瞬だけその兵士とスコアの目が合った。スコアの氷のように冷たく鋭い視線を浴びた瞬間、兵士の心は恐怖に支配された。その兵士の体が完全に固まる。

「第二、一斉砲撃！」

アストリアの声がその兵士の部隊に砲撃命令を出した。その瞬間、その兵士はハッとして急いで大砲を構える。

「お、おい！ どこ向けてんだ！」

同じ隊の兵士が焦った声を出した。

「えっ？」

その大砲の照準はあろうことか北側の解放軍の方を向いていた。

「し、しまった！」

気づいた時にはもう遅かった。

ドンッ！

スコアに向けられるはずだった大砲の弾は無情にも北側の部隊に向け飛んでいく。

その砲撃の先には四、五人の解放軍兵士、その中にはサキの姿があった。

自陣の中から爆炎が上がった。

突如自陣で起こった爆発。兵士達の悲鳴が響く。サキは直撃こそ避けたが、小さな体は爆風と共に飛ばされた。

スコアがその様子に気づく。そして“ある状況”を確認すると素早く横へと駆けた。

砲撃の指示を出していたアストリアもその状況に一瞬困惑する。しかし次の瞬間ハッとして素早く号令を出す。

「撃ち方やめー、すぐにやめるんだー!!」

アストリアは大砲の砲撃を止めた。

突然の爆発、そして砲撃の中止、それに多くの解放軍兵が反応する。それと共にブレットとクレイドも爆発のあった方向を見た。

「な……なんなんだ、これ……」

ブレットは我が目を疑った。

なんとサキが一人、部隊から外れ、スコアのすぐ近くに倒れこんでいた。その距離はわずか20mにも満たなかった。

1 - 16 それは突然に

赤い大地に展開するセウスノール解放軍とクラウド国軍。

両軍の激しい戦いが続く中で、戦場の中央付近でその出来事は突然起きた。

我が目を疑うブレットとクレイド。

スコアのすぐ近くには、一人倒れこむサキの姿があった。その距離は20mにも満たない。

「サキ!!」

「どうなってやがる!!」

ブレット、クレイドがほぼ同時にサキの方へと駆け出した。

「うつ……」

サキは訳も分からずなんとか身を起こした。その瞬間だった、サキとスコアの目が合う。スコアの氷のように冷たい視線を浴び、サキの背筋に寒気が走る。

「くっ!!」

サキは急いで剣を構えた。

「バカヤロー！！　すぐに離れるんだー！！！」

ブレットが力の限り叫ぶ。

スコアは自分に剣を向けるサキを確認すると、恐ろしいほどの速さでサキの方へと向かってくる。

もう遅かった。

サキとスコアの距離は一瞬で縮まる。次の瞬間サキの視界からスコアの姿が消える。サキのすぐ横に突如スコアが現れる。

サキの視界にスコアの姿が映った時、もう手遅れだった。

ヒュンッ

ギンッ！！

スコアの剣はサキの体を切り裂くことは無かった。

サキとスコアの間一髪でブレットが入り斬撃を止めた。

「ブ、ブレットさん」

「バカヤロウ……！！　早く離れろ……」

ブレットの剣を握る手からは、スコアの強烈な斬撃を受け止めたことで血がにじんでいた。

その姿をサキはぼうぜんと見ていた。

「早く離れろー！！！」

ブレッドはサキをにらみ大声で叫ぶ。サキはハッとして急いで駆けだし離れる。

スコアと一対一で対峙するブレッド。

クレイドもブレッドの方へと駆け寄ろうとする。しかしその距離はあまりにも遠い。

スコアは後ろへ飛び、いったんブレッドとの距離をとる。その様子をブレッドは冷や汗を流しながら見る。

「逃がしちゃ……くれねえだろーな」

ブレッドは思わず苦笑いしながら剣を構える。スコアもブレッドに向けて剣を構える。

先に動いたのはブレッドだった。
ブレッドは洗練された動きでスコアの懐に入ると素早く剣を振り下ろす。しかしスコアはその一撃を難なくかわす。しかしブレッドは動じない。

（そうだ、当然かわす、左に、そういう一撃だ……左側、今度こそとらえる！）

ブレッドはスコアの動きを眼で追う。ブレッドよりもはるかに速いスコアの動き。スコアはブレッドに向け強烈な斬撃を放つ。ブレッドの眼はその動きをわずかにとらえた。

ギンッ！

スコアの一撃をブレッドは素早く受け止める。

（とらえた……！）

しかし強烈な剣圧にブレッドの体は飛ばされ、わずかに浮き上がる。

「……！！ くっ！」

スコアはそのブレッドの体を追いかけ一気に懷に飛び込む。宙に浮かび上がったブレッドの体は身動きをとることができない。

ヒュンッ！！

スコアの一撃がブレッドの体を容赦なく切り裂いた。ブレッドの体から大量の血しぶきが上がる。

「ブレッドーッ……！」

クレイドの叫びが辺りに響く。

ブレッドの体は力無く地面に倒れこんだ。

スコアは倒れたブレッドには目もくれず、再び防衛ラインを見つめる。

そして再び駆けだす。しかしすぐにスコアの動きが止まった、いや止められた。

スコアの足を地面に倒れこんだブレッドの右手がつかんでいた。

「ハアッ、ハアッ、ハアッ」

ブレッドは、口の中からは血がこぼれ、体からは大量の血が流れていた。

それでもブレッドはわずかに痙攣する右手で、スコアの足をつかんで離さない。苦しそうに息をするブレッド。

スコアはその姿にわずかだが戸惑った。

ブレッドは痙攣する体に逆らいながら、もう片方の腕、左腕を上にあげると最後の力を込めて友軍に向け、ある合図を送った。

その合図を遠くで見たアストリアは一瞬驚きの表情を浮かべる。そのあと戸惑いの表情を浮かべる。しかしすぐに眼を鋭くし、くちびるに力を入れ覚悟の表情をした。そして力の限り大声で号令を出した。

「全砲兵隊、標的『瞬神の騎士の再来』に向けて……砲撃準備……！」

そのアストリアの気迫のこもった叫びに、砲兵隊の兵士全員が驚くほど早く反応する。全ての大砲がスコアの方へ一斉に向いた。

「一斉砲撃！ 撃てーッ……！」

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！
ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

「な………！！！」

スコアは初めて焦った。

ドォーンッ！ ドドォーン！ ドォーン！

スコアとブレットのいる一帯が爆風に包まれた。

そして爆風がおさまると辺りを砂煙が包む。

その様子をサキとクレイドはぼうぜんと見ていた。

大量に上がった砂煙が風にゆつくりと流されると、そこにはブレットの体だけが地面に置き去りにされていた。

「ハアッ！ ハアッ！ ハアッ！」

そのわずか後方に息を切らしたスコアの姿があった。剣を持った右腕の軍服は裂け、そこからわずかに血が流れている。その時だった。

パンッ！ パンッ！ パンッ！

国軍の方から銃声が上がった。

「撤退だー！ 一時撤退ー！！」

両翼に分かれた国軍は打撃を受け、さらにスコアも攻めあぐんだ末に負傷。その状況を見た国軍の指揮官は一時撤退を命じた。

その号令と共に国軍兵が次々と下がっていく。
スコアは悔しそうに防衛ラインの方を一瞬見ると、その後サッと立ち去っていった。

「ブレット!!」

クレイドは撤退途中の国軍には目もくれずに走った。
そして倒れたブレットに駆け寄る。

「ハア……ハア……ハア……」

ブレットはわずかに息をしていた。

「おいっ！ ブレット！ 大丈夫か！？ ブレッ……」

クレイドはブレットに呼びかけ体を起こそうとした。しかしブレットの体から流れる大量の血を見て思わず声を失う。

「……………!!」

クレイドは思わず目をそらした。

「クレ……イ……ドか？」

「……………!! ブレット!!」

「スコ……アは……？」

ブレットは弱々しい声だった。

「撤退した、だからもう大丈夫だ……!!」

クレイドは力強い声を絞り出す。しかしその声はわずかに震えて

いた。

「ブレットさん！」

サキもブレットに駆け寄る。だがブレットの状態を見てそのままぼうぜんと立ち尽くす。

「足止めは、作戦は……成功したのか……？」

「ああ、十分時間は稼いだ……だからクロコ達の作戦には何の支障もないはずだ……」

「そうか……そいつは、……！！」

ブレットはそう言いかけて激しくせき込む、口の中から血が流れた。

「ブレット、もうしゃべるな……」

「ハ……ハハ、どうやらオレはダメ……そうだな……」

ブレットがそう言うときクレイドの歯がわずかにギシッと鳴った。

「ダメなわけねえだろ！！ 助かるさ」

「クロに……すまないって……言っといてくれ」

「伝えたいことがあるなら自分で言え……！！」

「それと……もう……いっしょには……進めない……だけど……」

…おまえは決して進むのをやめるな……進み続けろって……」

「ブレットさん……！」

サキは震える声でブレットの名を呼んだ。

「ふざけんな！！ おまえは死なねえ！ 生きるんだよ……！」

クレイドは大声で叫んだ。

「フッ……、そうだな……ありがとな……クレイド」

「礼なんて言うな……！」

ブレットはフツと空の方に目をやった。

「きれいな……雲だな」

ブレットは空に浮かぶ雲を静かに見つめる。

「オレも……もう少し……もう少しだけ………」

ブレットはゆっくりと目を閉じた。

そしてそのまま動かなくなった。

「チクシヨウ……！ チクシヨーツ……！！」

クレイドは大声で叫ぶと、拳を地面に叩きつけた。大地に鈍い音が響く。

「ボクの、ボクのせいだ、ボクのせいで……ブレットさんが……」

サキは地面に力無く膝をついた。

小さな風が赤い土を飛ばした。

空は嫌なほどに晴れわたっていた。

「……ん？」

目的地に向かって走っていたクロコはフツと後ろを向いた。

「どうした？ クロコ君」

フロウがクロコの様子を不思議そうに見た。

「……いや、なんでもない」

（なんだ、なんで今オレは振り向いた……？）

「それよりクロコ君、そろそろのはずだよ」

「ああ、そうだな」

クロコはそう言った直後、急いで足を止めた。それに合わせてフ
ロウも足を止める。

巨岩同士のわずかな隙間から巨大な金属の固まりが見えた。

「クロコ君、あれが……！」

「ああ、グラン・マルキノだ！」

クロコは剣の柄をギュツと握る。

「作戦スタートだ」

1 - 17 裂破の獅子

クロコとフロウは狭い岩壁のルートを抜けた。

二人はグラン・マルキノのほぼ真後ろにあたる場所に出ていた。

二人は岩陰に隠れて敵陣の様子を見る。

グラン・マルキノを囲むようにして七、八人の剣兵が立っているのが見えた。

「クロコ君見て」

フロウがグラン・マルキノの、ある部分を指さす。グラン・マルキノの裏の中央に大きな金属の扉があった。周りには木製の足場とそこへと上がる短いはしごがある。

「あそこがグラン・マルキノの入り口だ」

「ああ、だがまずは外の剣兵をぶっ飛ばさないと」

「いや、君はその必要はないよ。奇襲はスピードが命だ。僕が道を作る。君はその隙に扉に飛び込め」

「……！ おい、だけどその傷で」

クロコは心配そうにフロウの傷口を見る。傷口は包帯で厚く巻かれている。

フロウは黙った。少しだけ目をそらし、地面を見つめた。しかし、

すぐに向き直り、クロコをジッと見つめる。

「クロコ君、聞いてくれ。戦争っていうのは人間同士の殺し合いだ。そしてそこには狂気が渦巻いている。君も、今までの戦いでその一端に触れているはずだ。……………だけど、僕は、そんな中にも確かに人の意地……『誇り』が存在していると信じてる」

フロウは真っ直ぐにクロコの瞳を見つめていた。

「そして僕も『誇り』を持って戦っている。だから……僕を信じてほしい」

フロウの青い瞳には確かな決意がこもっていた。

クロコはその瞳を見て、少しのあいだだけ何かを考える。しかし、すぐに静かにうなずいた。

そして真紅の瞳でフロウの瞳を見つめ返す。

「分かった、オレはおまえを信じる。だから絶対に生きて帰るぞ」

クロコのその言葉を聞いてフロウはニコツと笑う。

「もちろん！ そのつもりさ」

その笑顔を見てクロコもニツと笑う。

二人は前を見つめる。フロウが静かに口を開いた。

「…………行くよ」

クロコとフロウはグラン・マルキノに向けて駆けだす。

二人が岩陰から飛び出すと、警備をしていた剣兵の一人が反応する。

「敵だー！ 敵の奇襲だぞー！」

その叫び声とともに他の剣兵達がクロコ達に向けて集まってくる。クロコとフロウはそれに全く動じることなく扉に向かって一直線に走る。

数人の剣兵が二人の前に立ちはだかる。

フロウが先行し小剣で剣兵の一人に斬りかかる。

ヒュンッ！

剣兵は素早く反応し、後ろに飛んでかわした。

「……！！」

フロウはその反応に一瞬驚くが、すぐに前へ飛んで剣兵に追い打ちをかける。剣兵は素早く反応しフロウの動きに合わせて斬撃を放つ。フロウはそれに構わず捨て身で剣兵に突っ込む。

ヒュン！ ヒュン！

フロウの剣が剣兵をわずかに早く切り裂いた。それによりわずかに道が開く。

「いけー！ クロコー！！」

フロウの叫びと共にクロコは一気に突き進み、剣兵の壁を抜ける。

残りの剣兵達がクロコを追おうとする。次の瞬間、

ヒュヒュヒュヒュンッ！

フロウが放った無数の斬撃が剣兵達を阻む。剣兵達は後ろに跳びフロウとの距離をとる。

扉を背にし、剣兵の前に立ちふさがるフロウ。

フロウはチラッと後ろを見る。クロコはグラン・マルキノの扉を開けて中へと入っていった。フロウはそれを確認すると、再び前を見て剣兵達をにらむ。

「ここを通りたければ、まず僕を倒していくんだね」

フロウは次々と集まってくる剣兵達に小剣を向けた。その額からはわずかに汗がにじむ。

（グラン・マルキノを警備している剣兵……他の剣兵達とは動きが違う。敵は、こちらの作戦を読んでいる……！）

フロウの包帯からわずかに血がにじむ。

一方内部に突入したクロコはグラン・マルキノの中を駆け抜けていた。

中は広い建物の廊下のように通路が延々と続いている。通路を囲む木製の壁からはゴウンゴウンと物の動くような独特の鈍い音が響

いている。

突如、三人の剣兵がクロコの前に立ちはだかる。しかしクロコは動じず一瞬で間合いを詰める。

ヒュンヒュンヒュンッ！

クロコは三人の剣兵を一気に切り伏せた。狭い廊下の中では数の利はほとんどなく、縮んだ体も有利に働いた。

その後、六、七人の兵士が襲ってきたがクロコはそれを難なく斬り伏せる。

（この兵士、動きはいいが外で警備している兵士ほどじゃない。いける！ このままいけば……）

クロコは足の力をゆるめることなく、ひたすら走り続ける。

廊下はまるで迷路のようだった。時に道が分かれ、時に部屋があり、しかし砲弾が置かれている部屋はなかなか見つからない。

ずいぶんと進んだ。クロコは廊下をひたすら走る。

（まだか、もうそろそろ……）

クロコがそう思った時だった。狭い道が突然開けて広い空間へと飛び出した。

「じっは……」

クロコが出た場所は大部屋だった。部屋は木製の壁でおおわれている。

「ようこそ、セウスノールの剣士」

突然クロコの近くで声がした。

クロコが声の方向を見ると中年の軍人が部屋の向かいにある扉の前に立っていた。

整えられた黒い髪、黒い口ひげとあごひげ、鋭い目、静かながらも重々しい雰囲気……

ファウンド大佐がクロコの前に立っていた。

「この扉の先が砲弾の装置及び発射室だ。つまり君が目指している場所ということになる」

それを聞いたクロコはファウンドを鋭い眼でにらみつけた。
しかしファウンドはほほえむ。

「家にな……フランセールのワインを寝かせてあるんだ」

「……なに？」

「早く仕事を終えて、帰って飲みたいものだ」

「……何者だ、アンタは？」

「私か？ 私はベイズ・ファウンド、ただの中年の軍人さ」

ファウンドはニヤッと笑った。

「ベイズ・ファウンド……なるほど、アンタがこの司令官か。…
…アンタには少し興味があつたんだ」

「ほお……」

「大勢の人間のど真ん中にグラン・マルキノを、こんなものを撃ち込む作戦を考えるようなやつのはずがどんななのか、一度見ておきたくってな」

そう言つてクロコは少し怒りのこもつた眼でファウンドをにらんだ。

しかしファウンドは笑う。

「フツ……おかしなことを言う。私は国軍人だよ？ 解放軍兵がいくら死のうと私には関係ない」

「アンタ……狂つてるな」

「私は司令官だ。だからこそ、いかに多くの味方を守り、そして勝つか、それだけを考える。そしてそのためならば、どんなことでもしよう。そのためならばあえて狂おう。悪魔にもなるう」

それを聞いたクロコの歯がギリツと鳴る。クロコはファウンドに剣を向けた。

「そこをどけ、オッサン」

「ならば力づくでどかせばいい。私からどく気はいっさいないよ。お嬢さん」

「誰がお嬢さんだ！ 人を見ただ目で判断するやつは……」

「判断する気はないよ。君だろ？ セウスノール軍の強力な四人の援軍、その中の一人に女の剣士がいると聞いた」

「……………」

「見た目はお互い様、ここは互いに遠慮なく………といこうじゃないか」

ファウンドは剣を抜いた。

「じゃあ、そうさせてもらっ

そう言った直後、クロコは一瞬でファウンドの懐に入る。そして一気に剣を振る。

ギインッ！

クロコの斬撃はファウンドに素早く止められた。しかしクロコはすかさず横につく。

ギインッ！

クロコの放った斬撃は再びファウンドに防がれる。ファウンドはさらに自らの剣を回転させる。

キイン

クロコの剣は横に流される。クロコはバランスを崩す。

「……………!!」

バランスを崩したクロコにファウンドは容赦なく剣を振るう。クロコは崩れた体を無理やり動かして後ろへ飛ぶ。

ヒュンッ！

クロコとファウンドとの距離が開いた。

ファウンドは追い打ちをかけることなく、いまだ扉の前に立っている。

ポタポタ……

クロコの肩から血が流れる。先ほどの攻撃を避けきれずクロコは肩を切り裂かれていた。

「……………クソ」

クロコはグラン・マルキノに向かう途中に聞いたフロウのある言葉を思い出していた。

「スコア・フィードウッド、『瞬神の騎士の再来』。彼が最も警戒すべき相手だけど、もう一人警戒すべき相手がいる」

「もう一人？」

「ベイズ・ファウンド。敵の司令官さ。かつて『裂破の獅子』の異

名で恐れられた歴戦の剣士」

「かつてって……司令官やってるぐらいだろ。もういいオッサンなんじゃないか？」

「まあそうだけど、でももし、いまだにその腕が衰えてなかったとしたら」

「なかったとしたら？」

「おそらく僕たちの作戦の、最大の障害になる」

肩を切り裂かれたクロコはファウンドを見つめる。

「なるほど、フロウの言ったとおりってわけか」

扉の前に立つファウンドは不敵にほほえむ。

「戦線から離れて八年になるか……しかし私はその間も剣技を磨き続けてきた。力も、動きも、あの頃より衰えた。しかし剣の技術だけは、あの頃をはるかに凌駕している」

「クソツたれめ」

クロコは再び剣を構える、と同時に駆け出す。クロコは左右に素早く動きながらく乱しつつ近づく。その素早い動きに対しファウンドはほとんど反応しない。

「うおおおおッ!」

クロコはファウンドの斜め後ろにつくと剣を素早く振り下ろす。

キン

その攻撃はあっさりファウンドに流される。再びクロコの体が崩れる。

ヒュンッ!

ファウンドの斬撃がクロコの左足をとらえた。

「うつ……」

クロコはたまらず右足で地面を蹴り、後ろへ飛んで距離をとった。

「さて、これでチョコマカ動けなくなっただな」

ファウンドはいまだに扉の前に立っている。

「ぐっ……」

「さて、そろそろ守りも飽きてきたな。ではこちらからいくか!」

ファウンドはクロコに向かって突進してきた。素早い動きでクロコとの間合いを一気に縮める。

「くっ……」

クロコも必死で迎え撃つ。

ヒュンヒュンヒュン……

ファウンドの無数の斬撃がクロコを襲う。斬撃は速いがクロコほどではない。しかしクロコの死角を的確についてくる。

「クソッ……！」

クロコはその攻撃を必死に防ぐ。左足から血が噴きだす、数発の斬撃がクロコの体をわずかにとらえる。

「うっ……」

クロコの体のあちこちから血が飛ぶ。その間もファウンドは攻撃の手を緩めない。それでもクロコはファウンドをにらむ。

「うあーっ!!」

クロコはファウンドの動きに合わせて斬撃を放つ。

キーン

それでもクロコの斬撃はファウンドによって流された。クロコの体が再びバランスを失う。先ほどのように体に力が入らない。バランスを崩したままのクロコの体に容赦なくファウンドの斬撃が襲いかかる。

ヒュンッ！

クロコの腹が切り裂かれる。大量の血しぶきがクロコの腹から飛ぶ。しかしクロコはファウンドをにらみつけて剣を大きく振る。

「うわあああっ!!」

ヒュンッ!

ファウンドは後ろに跳んでヒラリとかわし、そしてそのまま距離をとる。

ファウンドは再び扉の前に立つとクロコの様子を静かにうかがう。

「はあっ! はあっ! はあっ!」

荒く息をしながら立つクロコ。体は無数に切り裂かれ、腹からは大量の血が流れていた。

「君の腕は認めよう。私にここまで対抗できたのだからな。しかし……」

「……はあっ、はあっ、はあっ」

ファウンドの言葉に対しクロコは何の反応もしない。血が地面に滴り落ち、目の焦点が合っていない。

「どうやら……」

「はあ……はあ……はあ……」

先ほどまでの荒い息切れが徐々に弱っていく。それでもクロコは

前をにらみながら数歩進んだ。

しかし体が前に崩れ、膝をついた。

「はぁ……………はぁ……………」

体から流れる血は止まることなく地面に流れ落ちる。

「どうやらこれで終わりのようだな」

ファウンドは静かにそう言い放った。

赤い岩壁に挟まれた大地に巨大なグラン・マルキノがたたずむ。
グラン・マルキノの扉を背にフロウは十人近くの剣兵達と戦っていた。

体に巻かれた包帯は赤く染まり、息は荒く乱れる。それでも歯を食いしばり、剣兵を相手に小剣を振るう。

ヒュヒュヒュヒュンッ！

フロウの無数の斬撃が剣兵の一人をとらえる。斬られた剣兵は大きな音をたて地面に倒れた。

（これで何人だ……七人目、あと何人残ってる？）

七、八人の剣兵がジリジリとフロウとの間合いをはかる。

三人の剣兵が一斉にフロウに襲いかかる。

「くっ……！！」

三人の剣兵から無数の斬撃が放たれる。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！

フロウはそれを必死にかわす。しかし一瞬フロウの体がふらつく。

ヒュンッ！

剣兵の一人の斬撃がフロウをとらえた。フロウのもう片方の脇腹から血が噴きでる。

「ぐっ……！」

それでもフロウは足に力を入れ踏んばる。そして一人の剣兵に狙いを定め、大きく叫びながら一気に斬りつける。

「うわあーっ！！」

ヒュンッ！

フロウは剣兵を斬り伏せた。残りの二人の剣兵は再び距離をとる。息を乱し、両脇腹から血を流しながらも、それでもフロウは立っていた。

フロウの瞳の光は弱まることはない。

「まだだ、まだ何も確かめちゃいないんだ。『真実』を確かめるまで、僕はこんな所で、こんな所で死ぬわけにはいかない！！」

「オレは……こんな所で死ぬわけにはいかない」

クロコは突如、口を開いた。木の床には血でできた小さな水たまりができている。

ファウンドはクロコの言葉に反応する。

「なんだと……？」

クロコは膝をつきながらもファウンドを鋭い眼でにらみつける。先ほどまで焦点が合っていなかった眼は再び光を取り戻し、その真紅の瞳は炎のように燃えていた。

「約束したんだよ、必ず生きて帰るって！ 命懸けでオレをここまで通したやつがいるんだよ！ オレを待っていてくれるやつらがいるんだよ！ オレが死んだら“悲しむ”って言うてくれたやつがいるんだよ！！」

クロコはわずかに痙攣する体を、歯を食いしばりながら必死で起こす。

しかしファウンドはそのクロコの姿を冷静に見つめる。

「あきらめろ、もう君に勝機は無い」

「うるせえよ、確かに体はボロボロだ。でも、だからなんだ。それがあきらめる理由になるのかよ！！」

クロコは荒く息をしながら、赤く染まった体で剣を構える。それを見たファウンドの顔が険しくなる。

（信じ難い精神力だ。これだけの傷、並みの兵士ならばとつくに意識を失っている。それを、精神力だけでつなぎ止めている……）

「分かった、ならば私も全身全霊をもって相手をしよう」

ファウンドはそう言い放つと、初めてクロコをにらむ。そして剣を再び構えた。

クロコも歯を食いしばりながら体を動かし剣を構えた。互いに剣を構えて再び向き合った。

クロコは乱れる息をゆっくりと整える。そして呼吸と共にゆっくりと頭の中を動かし始める。

（体を全力で動かせるのは……きっと、どんなに多くてもあと一回）

クロコはゆっくりと息をしながら頭を働かせる。

（考える……考えるんだ……どうすればやつに勝てる）

クロコは静かに息を吸う。

そしてクロコは再びゆっくりとファウンドをにらんだ。

対するファウンドは、剣を構えてジリッと間合いを詰めてくる。鋭い眼でクロコをにらみつけている。

クロコは最後にゆっくりゆっくり息を吐いた。

（迷うな……恐れるな……オレは、生きるんだ……！）

クロコの真紅の瞳が鋭く光った。先に動いたのはクロコだった。

ファウンドに向け風のように駆ける。

ファウンドはそのスピードに一瞬驚くが、すぐに動きに合わせ自分も前に出る。クロコの瞳がファウンドの左側に動く。ファウンドはそれに反応するが、クロコは素早くファウンドの右をついた、クロコの左足から血が噴きでる。しかしファウンドの剣はそれにも合わせ右を向いていた。次の瞬間クロコがファウンドの視界から消える。

「……！」

左からクロコが姿を現す。

「ああああッ……！」

クロコは力の限り剣を振るう。

キーン

ファウンドはクロコの斬撃を流した。

「いいフェイントだ。このトシにしてはな」

クロコの体はバランスを崩し傾く。傷だらけのクロコの体はほとんど無抵抗に前へと倒れ込んでいく。その間ファウンドはクロコに向けて容赦無い斬撃を放とうとする。それでもクロコの瞳の光は失われてはいなかった。クロコは最後の力を足に込め、踏んばった。

（生きるんだッ……！）

そしてクロコは、剣を振るうファウンドへ向かって一歩前に出た。

（さらに前に出ただと……だがもう遅い！）

「うああああッ！！」

クロコは大きく叫び、ファウンドに向け斬撃を放つ。

ヒュンッ！ ヒュンッ！

二つの空気を切り裂く音が響いた。

クロコとファウンド、二人の動きが止まる。

二人は静かに立ち尽くしていた。

一瞬、辺りに静寂が流れた。

「ぐうっ……！！」

ファウンドがガクツと膝をつく。

脇腹が深く切り裂かれて赤く染まっていた。大量の血が流れる。

「なぜだ。なぜ私が競り負けた……………」

「…………賭けだった」

クロコは崩れたファウンドを見下ろしながら、ゆっくりと言った。
それにファウンドも反応する。

「なに……？」

「オレがアンタに受け流された一撃。あれはワザとアンタに受け流されるように放った一撃だ」

「……！」

「オレの体が前に倒されるようにな。懐に入れば、体の小さなオレの方がわずかに早く剣が届く。そして剣速もわずかにオレの方が速い」

「だが……剣を振り始めるタイミングは私の方がはるかに早かった」

「ああ、だから賭けだった」

「いや、それでも、このような策をとった者は君以外にも何人かいた。それでも私より早く剣を振り抜いた者はいなかった……！」

「……それでも、先に振り抜いたのはオレだ。オレには確信があった。あんたより早く振り抜けるっていう確信が」

「なんだと」

「オレは、絶対に死ぬわけにはいかないんだ。オレはオレ自身にそう誓った。だから……」

「……………」

「だから、アンタより絶対に早く振り抜くって、振り抜けるって、そう確信していた」

ファウンドはその言葉を聞いて、静かに笑みを浮かべる。

「フツ、そうか、そういうことか。今まであの状態で、私よりはるかに遅く剣を振り始めたあの状態で、何の恐怖も迷いも無く振り抜いたのは、君が初めてだった……そういうことか」

ファウンドは傷口を手で押さえる。

「確かにあの状態で迷いなく剣を振り抜いた者も、さらに一歩踏みだした者も、いままでに一人としていなかった。君が、初めてだ……」

ファウンドは床に剣を刺し、それに寄り掛かった。

「私の負けだ……とどめを刺せ」

ファウンドは目の前に立つクロコを見上げた。

「……………」

クロコは黙って剣を鞘に納めた。

「アンタはもう戦えない。これ以上アンタを斬る理由はない」

クロコはスツとファウンドを横切った。そして扉へと向かう。ファウンドはクロコの姿を目で追いながら声を上げる。

「いま殺さなければ、私は再び君の前に立ち、君の命を奪おうとするかも知れんぞ！」

ファウンドの言葉にクロコは振り向かない。しかしクロコはゆっくりと口を開く。

「……それが、アンタを殺す理由になるのか？」

「……！」

「オレは、ならねえと思うけどな……」

ファウンドは床に視線を落とす。

「……君の名前を覚えてくれないか」

「クロコ・ブレイリバーだ。オッサンはとっとと逃げな。もうすぐコレは爆発するからな」

クロコは扉を開けて先へと進む。

大部屋で独り、ファウンドは剣にもたれ掛かっていた。そして小さく息を吐く。

「戦場で、このような言葉を聞く……か」

クロコの目の前には再び狭い通路が続いていた。

クロコは傷だらけの体に鞭を打ち通路を進む。

体が思い通りに動いてくれない。それでもクロコは狭い通路を一步步進む。

ゴウンゴウンと鈍い音が響く中、しばらく進むと扉が見えてきた。クロコはその扉を開けて中に入る。

中は巨大な部屋だった。

そこには巨大な砲身の後ろ姿があった、複雑な構造をした金属の固まりだ。部屋の前方には深い四角の穴があり、外を確認できるようになっていた。木製壁の所々には大型の鎖があり、さらに巨大な金属の歯車、レバー……部屋は金属だらけだった。壁の左右には大きな木窓も付いている。

部屋には四人の兵士がいたが、クロコの姿を見るなり全員が壁の隅に固まり震えあがる。どうやら戦闘員ではないようだ。

クロコはそれを無視して砲弾を探す。

辺りを見回すとソレはすぐに見つかった。

砲身の横にある鋼鉄のボックスに一つ、さらにそのボックスの真下にあるボックスに一つ。

クロコはゆっくりと下方のボックスへと近付いた。

クロコが扉から離れると、兵士達は一目散に扉から逃げていった。クロコはその様子をチラッと確認したあと、ボックスに乗っかり砲弾の隣に立った。砲弾の直径はクロコの身長よりも高い。

クロコはベルトの小物入れから箱状の時限爆弾をとりだした。

「栓を抜いてから爆発まで、だいたい一分……」

クロコは砲弾のすぐ横に爆弾を置く。栓を抜こうとした手が一瞬ふらつく。手だけではない。体全体がグラグラと揺れていた。

「クソッ、短いんだよ……タコ」

クロコは爆弾の栓を抜いた。

グラン・マルキノの外、フロウは剣を構え戦っていた。体には無数の切り傷を受けていた。

フロウの前で構える剣兵は三人にまで減っていた。

「はあ、はあ、はあ」

フロウは息を乱しながらも兵士達との間合いをはかる。

剣兵達は三人にもなるとさすがに慎重になり、なかなかかかってこない。

その時だった。

ドゴオオオオオンッッ!!!

赤い大地を震わし爆音が辺りに響いた。

フロウも剣兵達も一斉に爆音の響いた方向を見る。

グラン・マルキノの前方の方角から巨大な火柱が上り、大量の黒煙が昇る。

フロウはそれを見てニッと笑う。

「やったんだね、クロコ君……」

グラン・マルキノから離れたある場所、岩壁に挟まれた空間。そこに第五防衛ラインから一時撤退した国軍が待機していた。その国軍兵達も黒煙を見つめている。兵士達がザワザワと騒ぐ。

「なんだ、アレは」

「あの方角って、グラン・マルキノ？」

「ってことはまさか……」

スコアが指揮官の方へと駆け寄る。

「様子を見に行く許可をください！」

「だがすぐに次の戦闘が……」

「グラン・マルキノがやられている可能性があります。そうなったらもう、これ以上の戦闘は意味がない！」

「だが……」

スコアは鋭い眼で指揮官を見つめる。指揮官はその眼を見て一瞬ひるむ。

「わ、分かった。だが様子を見たらすぐに戻って報告しろ」

「はっ!!」

スコアは敬礼すると、黒煙の方向に向けて風のように駆けていった。

グラン・マルキノの前方は粉々に砕けていた。その部分からは大きな黒煙が上がり、胴体全体からも、所々のすき間から黒煙が上がっていた。

中にいた兵士達が次から次へと木窓から外へと飛び降りる。

そんな中、グラン・マルキノ内部に自ら留まっている者がいた。

ベイズ・ファウンドが機関室の壁に独りもたれかかっている。

「負けたのか……」

ファウンドは黒煙のもやを見つめていた。

機関室の扉のすき間から濃い黒煙が入ってくる。そして徐々に木製の扉が黒く焦げていく。

ファウンドはそれを冷静な表情で見ながら大きく息を吐いた。

「悪いねクロコ君……私は、こういう生き方しかできないんだよ」

扉が崩れ、部屋に一気に炎が入る。

「最後に、君のような子に出会えて良かった」

ファウンドは最後に少しだけほえむ。

「寝かせておいたワイン……一口だけでも味わいたかったなあ」

ファウンドの体は炎の中へと消えていった。

グラン・マルキノの少し前方。

空は黒い煙に包まれ、炎の赤い光に照らされた赤色の岩壁がまぶしいぐらいに辺りを紅く染めていた。

その中にクロコ・ブレイリバーの姿はあった。

「ここは……どこだ」

クロコは下を向きながらフラフラと地面を歩いている。

「グラン・マルキノの前か、当たり前だな……ハハ……」

クロコはグラン・マルキノの砲弾に爆弾を仕掛けたあと、木窓から勢いよく外に飛び出していた。

しかし無数の傷を受けたクロコの意識は、すでにもろろつとして
いる。

クロコの体から血が滴り落ちる。

うつすらと開いた目は地面を見つめている。

「くそ、目がかすむ……斬られ過ぎた」

そんなクロコの前方から、誰かが地面を踏みしめ近づく足音が聞

こえてくる。

その足音はゆっくりゆっくり近づいてくる。

「フロウか……？ 悪い、ちょっと肩貸してくれないか……さすがにちょっとヤバイ」

クロコはそう言いながら顔を上げた。その瞬間、もろろろとしていたクロコの意識が一気に鮮明になる。

心臓が嫌に大きく鳴る。

スコア・フィードウッドがクロコの前に立っていた。

紅い世界の中で、二人は互いに向かい合っていた。

1 - 19 終わりのさらにそのあとで

グラン・マルキノから大きな炎が上がる。その炎から発せられる大量の赤光は赤い岩壁にはじかれ、辺りを紅く染める。その中でクロコとスコアは向かい合って立っていた。

クロコの額からは嫌な汗が流れる。顔全体が硬直する。スコアはその様子を冷静な表情でしばらく見つめるとゆっくりと口を開いた。

「ずいぶんとやられたみたいだね。クロコ」

スコアは静かな口調でクロコの名を呼ぶ。クロコは自分の名を呼ばれて驚く。

「おまえ、なんでオレの名を……」

驚くクロコをスコアは冷静に見つめる。

「なんでだと思っ……？」

「……………」

一瞬の沈黙。

スコアは再び口を開く。

「まだ分らないのか」

そう言うとスコアは自分の首に手をやり、何かを外す素振りを見せた。

そして右手に、あるモノを持ち、クロコの方に向けた。
赤い空気の中に銀色の割れた卵型のペンダントが光る。

「……！！」

その瞬間、クロコの脳裏にフランセールでの出来事がよみがえる。
クロコの目が大きく見開かれる。クロコは驚きの感情を隠すことができなかった。

「おまえは、おまえが……スコア・フィードウッド……」

スコアはペンダントを再びかけると、ゆっくりとしゃべりだす。

「これで、お互い意識しての再開ってことになるのかな」

スコアは一瞬視線を落とす。

「まさか、こんな形で……」

スコアの口元がわずかに震える。

「こんな形で再開することになるなんてね」

スコアは悲しみの表情を浮かべる。スコアの深い青色の瞳が鈍く光った。

クロコは何も口にすることが出来なかった。ただ驚き、戸惑い、スコアの方をただぼうぜんと見つめていた。

するとスコアは静かにクロコに背を向ける。

「さよならだ、クロコ。今回は、今回だけはきみを見逃そう。だけ
ど」

スコアはクロコに背を向けたまま冷静の口調でゆっくりと話す。

「だけど次に……もし戦場で出会ったら、その時は……」

口調が強くなる。

「その時は、ボクはきみを斬る」

赤い光の中、クロコはただ呆然とスコアの背中を見つめていた。
スコアはただ前だけを見つめている。

「もう二度と出会わないことを、祈るよ……」

スコアはそう言うと静かにクロコの前から立ち去った。

スコアの姿が視界から消えたあとも、クロコは何も考えられず、
ただぼうぜんと立ち尽くしていた。

不意にクロコの意識が急にもうろつとする。

「う……」

クロコはそのまま意識を失い地面に倒れこんだ。

静かだった。暗闇な中、何の音も聞こえない静かな時間がクロコの中で過ぎていった。

静かに、静かに過ぎていった。

暗闇の中、不意にまぶたを上げるとまぶしい光が差し込んだ。目の前には灰色の壁が見えた。

すると誰かが急に自分の顔をのぞきこむ。

「おっ！ やっと起きたか、クロコ」

クレイドがクロコの顔をのぞきながらしゃべりかけてきた。

「……………、そのマヌケづらは……………クレイドか」

クロコはぼんやりとした表情でしゃべった。

「……………どうやら元気そうだな」

「……………！ いって……………」

体を起こそうとするクロコ、しかし体中に激痛が走った。

「おい、無理すんなよ！ 体じゅう傷だらけで、中にはけっこー深いものもあるんだぞ」

クレイドが起き上がろうとするクロコを止めた。

「くっ……なあクレイド、オレどんぐらい寝てた」

クロコは最初に頭に浮かんだ疑問を投げかけた。

「丸一日ってトコだな……でついでにここはウォーズレイ基地の治療室」

クロコはそれを聞いてまわりを見渡す。

灰色壁の広い細長い部屋。周りにはクロコのいるベッドのほかに、多くのベッドと、それに寝ている兵士が見える。

クロコはそれを確認すると一呼吸置いてクレイドを見る。

「……勝ったのか？」

「ああ、俺達の勝ちだ」

クレイドははっきりとした口調で答えた。

「敵軍はグラン・マルキノを失って、とつとと撤退してつた。基地も見てのとおり無事だ。基地の防衛は成功。俺達の勝ちだ」

「そうか」

それを聞いてクロコは安心した。しかし次の瞬間、ハツとする。

「そうだ！ それよりフロウのやつはどうなった！？ あいつオレのオトリになって……」

クロコは急に声を荒げた。

それに対しクレイドは冷静に口を開く。

「そのフロウにおまえは助けられたんだよ。おまえ、敵陣の真ん中で意識失ってたそうじゃないか…… ホント命拾いしたな」

「そうか…… そうだったのか」

クロコはそれを聞くとホツとしたように息を吐く。そしてその後、再び身を起こそうとする。

「いつて、いつつ……」

「おいおい、ムリすんなって言ってんだろ」

クレイドの制止を無視してクロコは体を震わせながら立ち上がる。

「寝てらんねーよ。早く顔見せねえと、あのバカに。ムダに心配性だからなブレッドのやつ」

「……！！」

クロコがそう言った途端、クレイドの顔がこわばる。クロコはそれを見逃さなかった。

「……………どうしたんだよ?」

クロコがクレイドの目を見た。

「クロコ……………落ち着いて聞けよ……………ブレットは、ブレットは……………」

クレイドはゆっくりとした口調で話します。その表情は今までに見せたことのないほど辛そうなものだった。

それを見た途端クロコは何かを感じた。心臓の辺りに今まで感じたことのないほどの重い何かがかかるような嫌な感覚に襲われた。

クロコはクレイドが言い終わらない内にいきなり駆けだし、部屋を飛びだす。

「おい!! クロコ!」

叫ぶクレイドを無視しクロコは廊下を一心不乱に走る。左足に巻かれた包帯からわずかに血がにじむが、決して足の力を緩めることはなかった。

クロコは基地の広間に飛び出した。

広間には多くの戦死者の亡骸が並んでいた。400人はいるだろうか。クロコは遠くからその亡骸一つ一つに目を通す。クロコの心臓は鈍く速く鳴っていた。

「……………!!」

その多くの亡骸の中の一つにクロコの目が止まった。

それはクロコの良く知っている特徴を持ったものだった。茶色の

髪、高めの鼻、少しだけきつい目つき。ボロボロの軍服を身にまとったまま、広げられた布の上で静かに横になっていた。

クロコは無表情でそれを見つめながら、一步一步ゆっくりと近づいた。

「……冗談だろ、なに……変なトコで寝てんだ」

クロコはそれの目の前に立った。そしてその顔を見つめた。それはまるで眠ったように静かに目を閉じていた。

「おまえ……なにしてんだよ……」

クロコはゆっくりとしゃがみ込む。そしてその顔にそっと手を触れる。

冷たい、固い感触がクロコの手伝わった。それは静かだが確かな感触……死の感触だった。

クロコの全身が震え始めた。

「ウソだろ……ウソだ……ウソだ！　ウソだ！　ウソだ！」

クロコは思わずその胸の上に顔をうずめ、大声で叫んだ。

「ふざけんな、ふざけんなよ！！　なにしてやがる！」

目からは大粒の涙があふれ出した。

「オレは約束どおり……帰ってきた……！　なのに……なんでおまえが……！　なんでだよ！」

クロコはそれに向かって絞り出すように大声で叫んだ。

「なんでだっ……！」

クロコの声が広間全体に響いた。

しかし横になっているそれはクロコの言葉に答えることはなかった。

「クロコ君……」

広間にいたフロウが声に気づいて近づいてきた。それとほぼ同時にクロコを追ってきたクレイドが後ろから近づく。

クレイドがゆっくりと口を開く。

「立派な最期だった。スコアにやられそうだったサキをかばって、あいつは命を懸けて一人でスコアに立ち向かったんだ」

「……う、うう……う……」

クロコはその胸に顔をうずめたまま顔を上げない。

「あいつがおまえに言ってたぜ。『すまない』って……それと『もういっしょに進めない、だけど、おまえは決して進むのをやめるな、進み続ける』って」

「……………ブレット」

「あいつ、最後の最後までおまえのこと気にかけてた……」

「……………」

クロコは顔をうずめたまま動かなかった。

フロウはその様子を見て、静かに目を閉じる。握った拳がわずかに震えていた。

クロコの目の前にあるそれは、眠るようにそこに横たわっていた。静かに、ただ静かに……

数時間後、辺りは暗くなっていた。

クロコは独り、基地の外で基地の壁によりかかりながら月を見ていた。

冷たい風が音を立てながらクロコの体に当たる。

クロコは月をひたすらに見ている。

そんなクロコの前に人影が一つ近づいてきた。

クロコはそれに気づき、その方向にゆっくりと目をやる。

目を向けた方向にはサキが立っていた。

「クロコさん……」

サキはクロコの顔を見つめる。その目はとても弱々しかった。

「……………」

クロコは表情を変えずに黙ってサキの方を見つめていた。

「ごめんなさい……ボクの、ボクのせいで……ブレッドさんが……！」

サキの声は震えていた。

「……ブレッドさんは言ったんです。離れろって、でも、ボクは、気が動転してて……剣を向けて……それで……それで……！」

サキの体全体が震えた。その姿は今にも倒れそうなぐらいに弱々しかった。

クロコはそんなサキの様子を、無表情で静かに見つめている。

「……………」

クロコは壁に寄りかかっていた体を起こすと、黙ってサキの方へと歩きます。

サキは震える顔が下を向こうとするのに必死で逆らい、なんとかクロコの方を向いていた。目からは涙がこぼれ落ちる。

「ごめんなさい、ごめんなさい……！！」

クロコはゆつくりとサキに近づく。しかしクロコはサキの前に立つとせず、スッと横切ろうとする。

その時、クロコはサキの頭をポンツと触る。そして静かに口を開く。

「……あいつは、そんなことでおまえを恨まねえよ。あいつ、そういうやつだから」

クロコはそう言って、サキを横切り、立ち去っていった。

「……………う……………」

サキは泣きながら、膝を曲げて地面に崩れた。

月の光が静かにサキを照らしていた。

クロコは夜の道をゆつくりと歩いていた。どこに向かうでもなく、ただひたすらに歩いていた。

そして歩きながら服からなにかを取り出した。

クロコの手には銀の卵型のペンダントの片割れがあった。

「スコア・フィードウッド……………」

クロコは誰にも聞こえないくらい静かに、一言そうつぶやいた。

それから数日後、クロコ達はフルスロツク基地へと戻ることにな
った。

クロコは馬車で帰る帰路、ずっと並走している棺の乗った馬車
の方を見つめていた。

クロコの真紅の瞳は小さく、そして悲しく光っていた。

クロコの初任務は、クロコにいくつかの戦果と、いくつかの経験
と、そして一つの大きな悲しみを与えた。

0 - 1 クロコ・ブレイリバー（前編）

今から7年前のある日、クロコの運命を変えた、ある事件が起きた。

クロコの生まれた村の名はスロンヴィア、そこは農民の村だ。

グラウド帝国には国民に階級がある。

大きく分けると上から王族、貴族、平民、農民だ。

スロンヴィアが一番下の階級の人間が寄り集まってできた村だ。

その村は、地主の領地から出ていった農民が、自らで森を切り開いて作ったもので、そのため周りのほとんどが森におおわれている。村人の多くは外との関わりがなく、外へ出るのは農作物を町へ売りにゆく者くらいだった。

それがこの村……クロコの生まれた村スロンヴィア。

優しい風が吹いている。

その風がベッドで横になっている小さな少年の顔をなでる。八歳のクロコは家の二階のベッドで寝ていた。

コンッ

部屋の木の窓に石が当たる音がした。

コンッ

「うるさいな……」

コンッ

コンコンコンッ

「うるさい!」

クロコは思いっきり体を起こした。そしてすぐに窓を開けて下をにらんだ。

「うるさいぞ、ブレッド! 人がせつかく気持ちよく寝てるのに……!」

すぐ下で十一歳のブレッドが手を振っていた。すぐに大声を返してくる。

「なにがうるさいぞだ! この時間に森に遊びに行くって言いだしたのクロだろ」

クロコは少しだけムスツとする。

（うるさいやつだな、まあ確かにそんなこと言ったような気もするけど……）

「ちえっ、分かったよ」

クロコは木の窓を全開に開けると、そこから勢いよく下の地面に飛び降りた。

ズンッ！

大きな音を立てて地面に着地した。その衝撃で少し足がしびれる。

「コラッ！！」

クロコの背中から急に声がした。クロコはビクッとなったあと、ソーツと後ろを振り向く。

そこにはクロコの母がいた。白い長い髪を風になびかせて真紅の瞳でクロコをにらんでいる。

「窓から外に出るなっっていうつも言っているでしょ！ 危ないでしょ！！ それに窓から虫が入る！」

クロコは口をへの字に曲げる。すかさずブレッドがクロコの前に出てクロコの母に頭を下げる。

「すみません、オレの方からもきつく言っておくんで」

ブレッドはヘラヘラ笑っていた。

「おいブレッド！ なにが『オレの方からもきつく言っておくんで』だよ！ おまえだって前同じことしてただろ！」

「うるせー、いくぞ！」

ブレッドはそう言うのと庭を抜けて道へと飛び出した。

「あつ！ おい待てよブレッド！」

クロコも走ってブレッドを追った。

「あつこら！ まだ話の途中……」

クロコは母の話を振りきりブレッドといっしょに土の道へと飛びだす。

道の周りはほとんど草原で、点々と木の家が立ち並んでいる。遠くには畑も見える。そこかしこからフェドリのピュウーピュウーという美しい鳴き声が聞こえてくる。

青空のもとブレッドと一緒に道を走ると、スカイパレットの水色の花畑が横を通り過ぎた。

しばらく走ると放牧場が見えてきた。

木の囲いの奥には十頭ほどの食用馬の姿が見える。ボヨンボヨンに肉をつけ、重そうな体でノソノソと歩いている。

するとブレッドが木の囲いをヨジヨジと登りだす。

「あつ！ さきこされた」

クロコは思わずそう言った。

ブレッドは囲いの上に昇ると両手を垂直に上げてバランスを取りながらヒヨヒヨヒヨ走った。

クロコもすぐにブレッドに続いて登った。そして走りだす。

「あ、あぶないよ！」

少し走ると急に下から声が聞こえた。

「まえお母さんにも怒られたでしょ。お兄ちゃん」

クロコがメンドくさそうな顔で下を見る。

そこには長い黒髪をした女の子がいた。一つ年下のクロコの妹アピスだ。アピスは二人の様子を見てソワソワしている。

「うつせーな、なんの用だよ」

「なんの用って、お兄ちゃんがまた、わたしになんにも言わずに、勝手にどっかいっちゃおうとするから……」

アピスが困った表情でジッとクロコを見る。

するとブレッドがいきなり囲いから飛び降りた。

「逃げるぞクロ！」

ブレッドはそう言って勢いよく走り出す。

「あつ、待てよブレッド！」

クロコもすぐに飛び降りてブレッドのあとを追いかける。

「待ってよ。お兄ちゃん！」

叫ぶアピスを振り切りクロコとブレッドはひたすら道を走る。

しばらく走るとクロコとブレッドは足を止めて歩きだした。二人は息を切らしている。
クロコが口を開く。

「今日は、ハア、ハア、走ってばかりだ」

「ああ、さすがに、ハア、疲れたな、ハア」

二人は歩きながら息を整える。ブレッドは後ろを見る。

「アピスは振りきったみたいだな」

「ああ、あいつおとなしいし、運動できないくせにしょっちゅうオレたちのあと付いてくるんだよな」

「それでいつもケガして」

「ああ、それでいつも泣いて、で、こりずにまたついてくんだよ」

「おまえもソワソワするし」

「してねーよ、バーカ」

二人はそんな話をしながら森に向かって歩く。
ちようど民家が密集している場所を通るときだった。
なにやら数十人ほどの人ばかりができていた。

「おい、見ろよクロ」

「すげえ、あんな人が集まってるトコひさしぶりに見た」

「なんかあつたんだ！」

「この村で事件なんかはじめてじゃねーか？」

二人は人だかりに近づく。人だかりは大きな木の屋敷の前で起きているようだった。

クロコが目をパチパチさせる。

「村長の屋敷だ！」

「よし、見に行こうぜ」

二人はワクワクとした様子で、人だかりの中に飛び込む。
人だかりの中では様々な声がする。どの声も不安そうな声だった。

「村長が兵士の手当てをしているって？」

「どうやら村に流れ着いたそうよ」

「流れ着いたって……どこの兵だ！？ 国軍兵か！？」

「それもどうやら解放軍の様だぞ」

「解放軍！？ 大丈夫なの……」

その人だかりの先、村長宅の扉の前で数人の村人が話をしている。
クロコとブレットはその人だかりの間をスルスルと進み村長宅の

扉へと向かった。

扉の前では村人と村長がなにやらもめている。

「なんで兵士の手当てなんてしているんだ！！ あれは解放軍の兵士なんだろう」

「こんなことが国軍に知れたらただでは済まんぞ」

「隣町の一家なんて解放軍の幹部の親族ってだけで公開処刑にあつたって話よ」

「おいおいホントかよ！？ ブルテン皇帝もいよいよおかしくなってきたな」

「とにかく、こんな危険なことはやめてくれ！」

村長は硬い表情で黙って話を聞いていた。厳格そうな顔立ちをした中年の男性だ。

村長はおもむろに口を開く。

「傷ついている人間を放っておけというのか？ 助けを求める人間に国軍も解放軍も関係ない。人を助けることに何の問題があるというんだ！」

村長ははっきりとした口調でそう言った。

「だが……もし、ばれて責任を問われたら……」

「その時は私が全責任を負って、どんな処罰も受けるつもりだ」

村長のかたくなな態度に騒がしかった村人が少し大人しくなった。
それを見ていたクロコはボソツと口を開く。

「バカだよなー。国軍にバレたら、なんてさ」

「ああ、バレるわけねーよな。うちの村に来るよそ者なんてほとんどいねーし」

「税を取りに来るやつぐらいだよな。そんなことより……」

クロコはブレッドの顔を見る。

「ブレッド、その手当てされてる解放軍の兵士って、どんなやつか見てみたくないか？」

「え、見てみたくないかって、おまえまさか……」

クロコは人だかりの前をさらに抜ける。

村長と村人はまだ何かを話している。それに必死で下には全く意識がいつてない。その隙にクロコは身をかがめて勢いよく走り、サツと村長達を横切り村長宅に侵入した。

（うまくいった！ 誰も気付いてない）

「おいっ！ これはいくらなんでもヤバイだろ」

あとを追って侵入してきたブレッドが小声で叫ぶ。

「大丈夫だって、それに、もうあとには引けないだろ？」

クロコは笑った。

ブレットは小さくため息を吐いた。

二人は身をかがめ、足音を忍ばせ、廊下をピョコピョコと歩く。
ブレットがボソツと口を開く。

「でもオレ達ってこういうこと天才的にうまいよな……」

「ああ、もしアピスがついてきたら絶対失敗しただろうな」

「とにかく村長の奥さんに見つからないように動くぞ」

「わかってるって、兵士はどこら辺にいるかな？」

「寝室あたりが怪しいな……」

「どこにあつたけ？」

「まえ侵入したときに思いっきり暴れたトコだよ」

「ああ、あそこか……あの時は怒られたな」

「おまえのせいだな」

クロコとブレットは二階に上がった。

そして寝室のドアの前に立つと、少し開けて中をソワソワと覗く。
寝室の大きなベッドには黒い服を着た男が寝ていた。

「誰だっ!？」

突然兵士がクロコ達の方を見て叫んだ。クロコ達はびっくりして思わずドアを閉める。

ドアの向こうで一時撤退してドキドキしているクロコ達の耳に、ドア越しから小さな声が聞こえる。

「……………子供か？」

そしてしばらくするともう一度声が聞こえる。

「大丈夫だ。入っておいで」

ドア越しから優しい声がした。

クロコとブレッドは一緒にソーツとドアを開け、ベッドに体を起こしている兵士の方を見た。

ベッドにいる兵士は年齢二十代ぐらいの男だ。

兵士は優しくほほえみかける。

「なんだ、どうした。オレを見に来たのか？」

クロコはほほえむ兵士にゆっくりと近づく。

「お、おい」

ブレッドが後ろから制止する。

「別に怒りはしないさ。大丈夫だ」

兵士がそう言うと、ブレッドもしばらく様子を見たあとクロコの

あとを追って兵士に近づく。

兵士の体には無数の包帯が巻かれていた。
クロコはそれを見る。

「大丈夫なの？」

「最初はけっこうヤバかったな。正直、きみらの村で手当てを受けてなきゃ死んでたかもな。きみらの村の……オレを見つけてくれたブラドさんって人とオレを手当てしてくれた村長さん。あの人達のおかげでこうして命を取り留めたよ」

「……………」

「村長さんと少し話もした。いい人だな」

「うん、村で自慢の村長だってお父さんも言ってた」

「そうか」

兵士はニッコリ笑うとクロコの頭をなでた。クロコはうれしそうに笑う。

ブレッドはクロコの後ろでジーッと様子を見ている。どうやらまだ警戒しているようだ。

「解放軍は怖いかな？」

兵士はブレッドの顔を見て言った。

「……………」

ブレットは下を向いて黙った。
しかしすぐに顔を上げる。

「怖くないよ」

ブレットは兵士の顔を見る。

「父さんが言ってた。解放軍は悪くないって、悪いのはおかしい政治をする国だって、解放軍はそのおかしい国の政治を正そうとしてる。だから悪くないって」

「そうか」

兵士はブレットを見て優しくほえんだ。

「オレだっておじさんのこと怖いなんて思わないよ」

クロコが続いて言った。

「だって、おじさん全然悪そうに見えない。優しくそうに見える」

「おじさんって年じゃないんだけどな。でもありがとな」

兵士はクロコの方を見てニコツと笑った。

「そう言えば……外が少し騒がしいな」

兵士は窓から外をチラツと見た。

「うん、みんなが村長の家に押しかけて『危ない』って……」

クロコがそう言うと兵士はピクツと反応した。

「お、おい、クロ！　そういうことは本人に言っちゃダメなんだぞ」

「……………そうか、それで」

兵士がそう言った直後だった。

「コラァッ！！　なにしてるのあなた達！」

村長の奥さんが大声で二人の背後から怒鳴った。

「し、しまった！」

クロコ達はそのあと村長の奥さん、そして村長の二人がかりでこっぴどく怒られた。

クロコとブレッドはシュンとしながら村長宅をあとにした。

「あーあ、めちゃくちゃ怒られたなー」

クロコはため息をつく。

「まー、しょーがねーよ。こうなったら早く森に遊びに行こうぜ」

クロコとブレッドは森へ向かった。

森の遊び場に着くといつもと変わらない景色が広がっていた。不規則に並び立つ太い根の樹木。空はその枝葉におおわれてほとんど見えない。しかし葉の間からもれだす光が森の中を優しく照らす。柔らかい地面には、所々に短い草が生えている。辺りからはフエドリの鳴き声のはつきりと聞こえてくる。

ブレットが顔を上げて叫ぶ。

「よし、今日はとことん遊ぶぞー!!」

「あつたりまえだー!」

二人は一気に駆けだす。

森に来てから二時間ぐらいが経った時だった。

「おい、クロ、ちょっと来てみるよ」

高い木に昇って景色を眺めていたブレットがクロコを呼ぶ。

「なんだよ」

クロコは1mぐらいあるへびを片手でブンブンと振り回していた。

「いいから来てみるよ」

クロコはヘビを捨ててブレッドが昇っている木をよじ登る。
そしてブレッドのいる枝に立つ。

ブレッドが村の方を指さす。その方向を見ると村長宅が見えた。

村長宅の玄関で先ほどの兵士が村長と話している。村長に礼を言っているように見える。

「さっきの人、もう行っちゃうんだな」

クロコが村長宅を眺めながら言った。

「ああ、でもあの人、死にかけたって言うてたよな。もう動いても平気なのかな……」

ブレッドは兵士のことが少し気にかかる様子だ。

「大丈夫だから行くんだろ？」

「ん……まあそうだけど」

兵士が村長宅を出ていくのを見守るとクロコとブレッドは木から下り、また遊びだした。

一方、クロコの家の前ではクロコの母が洗濯物をたたんでいた。
そんな母親にはクロコの妹アピスがピッタリとついて歩いている。

「ただいま、エルシア」

突然近くでクロコの母の名を呼ぶ声がした。クロコの母は声の方
向を向く。アピスも続けて向く。

「あつ、おかえりなさい。あなた、今回は早いわね」

クロコの父が帰って来ていた。

少し長めの黒髪とぶしょうヒゲを生やした男だ。目つきは鋭いが
優しい表情をしている。

「おかえり、お父さん」

アピスが父にあいさつする。

「ただいま、アピス」

クロコの父はあいさつを返す。そしてクロコの母の方を見る。

「今日は薬草の売れゆきが絶好調でな。あつという間に売り切れた
よ」

「それはよかった」

クロコの母はうれしそうに笑った。

「それよりアピス、おまえどうした？ 一人か？」

「お兄ちゃんが逃げてっちゃった……」

アピスはそう言ってシユンとなる。

「やれやれ……あいつしょうがないな」

クロコの父はあきれた様子だ。

「でも私は安心よ。あの子達といると、アピス怪我ばかりするから」

「やれやれ……」

クロコの父はかがんでアピスに話しかける。

「アピス、おまえ、あんな危ないことばかりするお兄ちゃんと遊ばないで、村の女の子と遊べばいいだろ。そうすれば怪我せずに住むぞ」

しかしアピスは首を振る。

「お兄ちゃんたちがいい……」

「やれやれ、あいつもずいぶん好かれてるな」

「でもわかる気がする。あの子、ああ見えて優しい所あるから。アピスと一緒に遊んでる時も、なんだかんだでアピスのこと気にかけるし……」

「へえ、あいつそんなトコあるのか。意外だな」

「そついう子よ。あの子は」

そんな会話をしている三人に複数の足音近づく。

三人はそれに気付きその方向を見た。

見ると国軍の青い軍服を着た兵士たち数十人の隊が近づいてくる。その集団の中の一人が三人の前に立った。その軍人が口を開く。

「失礼、少し尋ねたいことがあるのですが……」

その軍人は年齢三十代前半、整えられた灰色の髪、灰色の瞳をしており、頬は少しこけている。愛想よくニツコリと笑っている。

「なんででしょうか」

クロコの父がその軍人に対応する。あまりいいものを見る目はしていない。

灰色髪の軍人はほほえむ。

「村長宅はどこでしょうか。ちょっとこの村長にお会いしたいのですがね」

「村長宅はその道を通つ直ぐ行つて、放牧場を右に曲がったところにある。一番でかい屋敷だからすぐ分かるよ」

クロコの父は道を指さしながらサツと道を教えた。

「ありがとうございました」

灰色髪の軍人はまたニツコリと笑い数十人の兵士を引き連れ、クロコの父が教えた道を歩いて行った。

兵士達が立ち去るとクロコの母は心配そうに口を開く。

「なにかしらね。あの人達……」

「おそらく逃げている解放軍兵を追っているんだ。行きに村長宅に怪我をした解放軍兵が運び込まれるのを見た」

「えっ！？ 大丈夫なの」

「大丈夫さ、帰りに村長に会ったが、もうその兵士は村を出たらしい」

「そ、そう……」

二人がそんな会話をしている間、アピスは母にピッタリとくっついて離れない。

「もう、どうしたのアピス」

母はそんなアピスに話しかけた。

「怖い……」

「え？」

「さっきの、あのおじさん、怖い……」

アピスの体は震えていた。

一方、国軍の小隊は草原に囲まれた土の道をゆつくりと歩く。
灰色髪の人兵はしきりに鼻をクンクン動かしている。そしてボソ
ッとして口を開く。

「臭う、臭いますね。この村は、私の嫌いな家畜と泥の臭いであふ
れている。私の嫌いな『野蠻』な臭いだ……」

0 - 2 クロコ・ブレイリバー（後編）

村長宅の扉を数十人の国軍兵が取り囲んでいた。

その集団の中央に立つ灰色髪 of 軍人は、村長の前に立ち、愛想よくニコツと笑う。

「なに、一つお聞きしたいことがありましたね」

「なんででしょうかね」

村長は無愛想に答えた。

「先日ここより北の地、クロウジア谷で解放軍との戦闘がありましたね。無論、我々が勝利したわけですが、その際、基地を追われ逃亡した解放軍兵が多くてね。我々はそれを追っているのです」

「基地を追われたということはこれ以上戦えないということでは？
わざわざ追う意味があるんですかね」

「反乱分子は根こそぎ処罰しなければならぬのですよ。それに幹部などの主要な人物も含まれています。それで……」

灰色髪 of 軍人はニコツと笑う。

「ここに流れ着いた兵士はいませんでしたか？」

「さあ、知りませんな。こんな小さな村、そのようなことがあれば、すぐに耳に入るはずですが」

村長は落ち着いた口調で答えた。灰色髪の軍人は笑顔を絶やさな
い。

「では、近辺の町でそのようなことがあったという話は……」

「無いですな。なんせこの村、四方が森に囲まれているため外部とはほとんど連絡が取れないんですよ。森の奥にはオオグマや群れオオカミも出ます。もしかしたら逃げた兵士の大半は獣に襲われたのかも知れませんよ」

「そうですか……私達もここに来るまでずいぶん長い道のりだったのですが」

軍人は残念そうに首を軽く振る。

「そうか、そうですか……」

「用がないのならお引き取りください。このような人数の軍人に押し入られては妻も不安になります」

灰色髪の軍人は鼻をクンクンと動かす。

「におう、においますね……」

「はい……？」

「このにおいは……『血』の匂いだ」

村長はその言葉を聞いてピクツと反応する。灰色髪の軍人は数名の兵士を引き連れ強引に家へ入り込もうとする。

「お、おい！」

村長はそれを止めようとするが、近くにいた兵士に力づくで壁に押し付けられる。

灰色髪の軍人は兵士達を引き連れ、そのまま真っ直ぐ居間へと入った。居間にいた村長の妻はその様子に驚きながら呆然と見ている。灰色髪の軍人は隅に置いたあるゴミ箱に近づきズボツと手をつっこんだ。

村長は兵士に後ろ手をひねられた状態で、強引に灰色髪の軍人の前に突き出される。

「村長……」

灰色髪の軍人は冷たい目で村長を見る。村長の表情に初めて焦りの色が見える。

「これは……何ですかね」

灰色髪の軍人の手には大量の使いきった包帯があった。包帯にはベツトリと黒く変色した血が付いている。

「ずいぶんと包帯を使われたんですね」

灰色髪の軍人はニツコリと笑って村長を見た。

「なにか……問題でも？」

それでも村長は冷静な口調で答えた。

「ずいぶんと血が付いていますね」

灰色髪の軍人はその包帯を顔に近付ける。

「いい匂いだ……強い強い血の匂い、おや、それとは違う匂いが混ざっていますね。このにおいは……」

軍人の口元がニタツと歪む。

「火薬の匂いだ」

軍人はそう言ったあと、村長から目をそらす。

「殺せ」

灰色髪の軍人はそう言うのと部屋から出ようとする。

「もちろん妻ですよ」

「お、おい!!」

そう叫ぶ村長を兵士の一人が床に押さえつける。そしてその兵士はゆっくりと剣を抜いた。

「きゃあああああ」

妻の叫びが響いたあと、居間に大量の血しぶきが二つ飛んだ。

灰色髪 of 軍人が外に出ると、それを追って他の兵士達も外に出た。

「やれやれ……この村からでは、逃亡した兵士ももう安全地帯に逃げ込んでしまったのでしょね」

軍人はため息をつく。

「レイズボーン中佐、これからどうしましょう。これ以上我々が追っても……」

少し小太りの長いひげを生やした副官が灰色髪 of 軍人レイズボーンに話しかける。

「決まっているでしょう」

レイズボーンは冷静な口調で話す。

「この村の住人を全員処刑します」

レイズボーンは表情ひとつ変えずにそう言い放った。

「なっ！」

副官はその言葉に驚く。周りの兵士達もザワつく。

「この村の住人は解放軍兵士をかくまい、その事実を我々に隠ぺい

した。これはこの村の住人が解放軍に加担した重要な犯罪、つまりは共犯です」

レイズボーンは冷静な口調で言った。

「し、しかしそれは村長だけで十分では……」

「村長も言っていたでしょう？ 『解放軍の兵士が来るようなことがあれば、すぐに耳に入る』と、つまり村のほとんどの住民はそれを知り、国軍に報告せず、罪に肩入れしていた」

「で、ですが！」

小太りの副官がさらに何か言おうとした瞬間、突如、小太りの副官の体が大きく裂け、血が噴き上がる。

「私は、物分かりの悪い方は嫌いなんですよ」

副官は力無く地面に倒れこんだ。レイズボーンの手には剣が握られていた。

兵士達はその異様な光景にぼうぜんとした。

「あなたたちも……」

レイズボーンは兵士達の方を見る。その眼は冷たく暗くにごっていた。兵士達はビクツとなった。

「あなた達も早く動きなさい……私は仕事が遅い方も嫌いなんですよ」

「は……はっ！」

兵士達は急いで敬礼して、剣や銃をとる。

「よろしい……」

レイズボーンはニッコリと笑った。

「殺すなら徹底的にですよ。男、女差別無く。ああ、子供もちゃんと殺しなさい。一人取り残されるのはふびんです」

「クロ、そろそろ帰ろうぜ。さすがにもう遅いよ」

森に降り注ぐ日の光は弱まり、辺りは少し暗くなってきた。

「ええっ!？」

ブレットと木の枝で剣士ごっこをしていたクロコは物足りなさそうな声を出した。

「ええ、じゃない。もうずいぶん遅いぜ。またおばさんに怒られるぞ」

「それは嫌だなあ」

クロコはブレットの言うとおり素直に帰ることにした。

周りは暗かった。二人は森の奥の方まで行ってしまったようだ。

しばらく歩くと村の方向が赤く光っていた。

「なんだろう」

クロコがそう言うとブレッドは首をかしげる。

クロコ達はそれが気になり、小走りで村の方へと駆けていった。

クロコ達が村に出ると、そこには信じられない光景が広がっていた。

炎を上げて燃える家、大きな鳴き声をあげ走りまわる食用馬、そして……

たくさんの人が倒れていた。体からは大量の血が流れている。

クロコは心臓が急に固まるような感覚に襲われた。

「お、おい、クロ、なんだよ……これ」

ブレッドはぼうぜんとした様子だ。

しかしクロコはそれを無視して自分の家に向けて全力で走り出した。

「お、おい、クロ……!」

遠くでブレッドの呼び声が聞こえる。けれど今のクロコはその声を聞いている余裕はなかった。

クロコが走るあいだ、通り過ぎる家はどれもこれも燃えていた。道端には多くの人が血を流して倒れていた。クロコはその中に自

分の良く知る人も交じっていたような気がした。しかしクロコは気のせいだと自分に言い聞かせた。

クロコは家に着いた。クロコの家も燃えていた。しかしクロコはそれにも構わず家に飛び込んだ。

「母さん！ 父さん！ アピ……」

その時クロコの目に飛び込んだ光景は……

クロコは立ち尽くした。

父さんが倒れてる。

母さんも倒れてる。

アピスも倒れてる。

みんなたくさん血が流れて……大丈夫なの？ こんなたくさん血が流れて……

次の瞬間、急にクロコの視界が闇に包まれる。誰かがクロコの目を手でおおう。

「……見るな」

ブレットの声が出た。

ブレットはクロコの目をおったまま強引に家の外まで連れだした。

そしてそのままクロコの手を無理やり引っ張り、道を駆ける。

「とにかく……今は隠れるぞ」

ブレットは静かに言った。

「隠れるって誰から？」

「国軍の兵士からだ。まだそこら中にいる」

「国軍の兵士？ あ……ブレットの家は……」

「もう行った」

ブレットはそう答えたあと、何を聞いてもしやべらなくなった。

クロコはブレットに引つ張られるまま森に戻ると、ブレットと一緒に深い草原に身を隠した。なにもしゃべらず、息をひそめた。

クロコは何も考えられなかった。

自分が自分の家で見た光景の意味も、なぜ今隠れているのかも、ブレットが急にしゃべらなくなった意味も、何も考えられなかった。ただ自分の心臓の音がずっと耳の隣で聞こえていた。クロコは思った、心臓の音ってこんなに大きく聞こえるものだったろうか？ その音はずっとクロコの耳の隣で鳴り響き続けていた。

炎に包まれる村、それを囲む森の分け目の村の出口に、レイズボーンと数十人の兵士達は立っていた。

レイズボーンは赤い炎の光を見ながら、上機嫌に鼻をクンクンと動かしていた。

「いい匂い……いい匂いだ……私の好きな炎と血のおいだ。素晴らしい、私の好きな戦争の匂いだ。フッフフ、心地いい、心地いい、まさに……『快感』だ」

レイズボーンは顔を大きく歪め、ニターと笑った。

辺りはすっかり暗くなっていた。ずいぶんと時間が経った。クロコとブレッドは草原から体を出し、高い丘へ移動して、そこから村の様子を見た。

勢いよく燃え上がっていた炎は衰え、兵士の姿はもうなかった。

クロコ達は森を出た。

その後、クロコはブレッドに手を引かれるまま、森の分け目、村の出口へと移動した。

そのあいだ、クロコの目にはさまざまなものが入ってきた。燃える家、燃えた家、倒れた人……その中にはきつと、良く知る人も混ざっていた。

クロコ達は村の出口に立った。

クロコは引つ張るブレッドの腕に抵抗して、歩みを止めた。それをブレッドが静かな目で見る。

「……行こう」

ブレッドはクロコを見ながら言った。静かな口調だったが、少し命令するかのような強さも持っていた。

「どこに……行くの？」

「ここじゃない……どこかだ」

「……でも、ここはオレの……オレ達の村なんだよ」

「クロ……、もうここには何も無い、何も無いんだ……だから、行く」

ブレッドはそう言うと引つ張る力を強めた。

「……………」

クロコは黙ったまま止めた足を再び動かした。

けれどクロコは歩きながら振り返り、もう一度だけ、たった一度だけ村を見た。

クロコの真紅の瞳に燃える村の姿が映った。

クロコとブレッドはその日、自分の村を去った。

その夜、クロコ達は暗い道を延々と歩いた。なにもしゃべらず、ただ延々と歩いた。途中で疲れても、足が痛くなっても、おなか为空いても、ただ延々と歩いた。隣町が見えるまでただ延々と……

その後、クロコ達は住む場所もなく、町から町を転々とした。しかし、今の荒れた国では、子供二人だけで生き続けるのは容易ではなかった。

残飯をあさり、雨水をすすり、ときには畑や市場から食べ物盗んで、なんとか命をつなぎ止めた。

そんなクロコ達が最終的に行き着いた町があった。その町の名はアークガルド。世の中から見捨てられた者が集まる町。

その町では殺人、強盗などの犯罪が日常茶飯事に行われていた。治安是最悪の町だったが、クロコ達が生き残るには一番可能性の高い町でもあった。

その後クロコ達はその町に長く居つくことになる。

ある日ブレッドはどこからか剣を拾ってきた。当時十二歳だったブレッドは、その剣を持って自分自身とクロコの命を死に物狂いで守った。

その三年後、クロコが十二歳の時、クロコも剣を持った。

さらに二年後、クロコが十四歳の時には、この町でクロコ達に牙をむく者はほとんどいなくなっていた。クロコ達は強くなっていた。クロコ達はやっとこの町で命の危険のほとんどない生活を手に入れることができたのだ。

ただしそれ以外、この町には何も無かった。

一年後、クロコはある秘かな思いを持っていた。セウスノール解

放軍に入りたいと思っていたのだ。

こんな町にいたクロコ達にも解放軍の動きはたびたび耳に入っていた。

十年前『ファントム』という正体不明の指導者が加わって以後、組織化が進んだ解放軍は、五年前から勢いに乗り国軍相手に快進撃を続けていた。

国軍が本腰を入れてからは少し勢いを落とし始めているが、クロコ達が村を出た当時、占拠していた領地は四分の一にも満たなかったが、今ではすでに国土の半分近くを占拠し、国を二つに割っていた。

ある日の夜、クロコとブレッドは酒場の奥の一室にいた。その当時、クロコ達は酒場の用心棒として住み込みで働いていたのだ。

クロコはランプ一つ灯った暗い部屋で、ブレッドと二人きりだった。

ブレッドはいつものようにヒョウヒョウとした態度でクロコに話しかけてくる。これだけは昔から全く変わっていない。

そんな中クロコはブレッドに話を切り出した。

「なあブレッド、話があるんだ」

「ん？　なんだよクロ、急に改まって」

ブレッドは軽い口調で言葉を返した。

「オレ……解放軍に入ろうと思うんだ」

「……………」

ブレッドは一瞬驚いた表情を見せた。しかしすぐに普段の表情に戻り、クロコを見つめた。クロコは話を続ける。

「今のオレ達なら解放軍の力になれると思うんだ。そうすれば今とは違う暮らしがきっとできる……………」

「……………」

「オレはこのまま、ここで老いて、ここで死にたくない……………」

ブレッドはクロコの言葉を聞いたあと、しばらく黙ってなにかを考えていた。その後、ゆっくりと口を開く。

「……………いいんじゃないか。それも」

ブレッドは静かにそう言ったあと、いつものように笑った。それを見てクロコは少しホッとした。

「当然おまえも来るよな？ ブレッド」

クロコはブレッドを見た。するとブレッドはニツコリ笑った。

「ああ、どうやらおまえの世話役がオレの天職みたいだからな」

「よし、これで決まりだ！ って、今のはどういう意味だ！」

こうしてクロコ達はセウスノール解放軍に入ることを決意した。

旅立ちの前夜、クロコは七年前のあの出来事のことを考えていた。しかしクロコには燃える村の姿以外、ほとんど思い出すことが出来なかった。

あの出来事のほとんどの記憶がクロコの中でぼやけてしまっていた。

クロコは思った。あの時の自分は幼かった、だから、あの出来事を受け止めることが出来なかったんだと。

クロコは国軍が嫌いだった。しかしそれはあの出来事によるものでなく、自分をこんな状況に追い込んだという事実からの恨みだった。

クロコにはあの出来事の意味は理解できても、あの出来事を憎しみに変えることは出来なかった。

あの頃幼すぎたという事実、それはきっと幸運だったのだろうとクロコは思った。

……そしてウォーズレイの戦いのあと、クロコは再びあの出来事のことを考え始める。

それはあの出来事で自分自身がどう感じたかではなく、ブレットがどう感じていたのかだった。

村を出た当時十一歳だったブレットは国軍に対してどのような感情を持っていたのだろうか？ 本人の言うように解放軍に入るのはただ自分についていくだけが理由だったのだろうか？

それは結局クロコには分らなかった。そしてもう確かめることもできない。

旅立ちの日、クロコ達は六年間住んだアークガルドをあとにし、この町に一番近い解放軍の基地、フルスロック基地へと向かった。

その時のクロコは、その先に『希望』があるのだと信じて疑わなかった。

1 - 20 防衛戦後

灰色の四角い建物が建ち並ぶフルスロツクの町並みに、ひととき大きな横長の建物が建っている。

ここは解放軍フルスロツク基地。

ウォーズレイ基地防衛戦から二週間が経とうとしていた。

基地内のある個室。ベッドと木のイスだけが置かれている狭い部屋、そこに一人の少女の姿があった。黒い髪に真紅の瞳の少女。

クロコは男用の私服を着て、イスに腰かけながら、窓から外の景色をボーッと眺めていた。

コンコン

突然、部屋のドアをノックする音が聞こえた。クロコはゆっくり立ち上がると、ドアの方へと向かった。

「やあ、クロコ君！ こんにちは」

クロコがドアを開けるとフロウが元気よく挨拶した。

「……………ああ」

クロコが無愛想に対応する。そんなクロコに対してフロウは笑顔で話し始める。

「今日は久々の休みだし、一緒に街でも回らないかなって思ってたんだ」

「……悪い。今日はそんな気分じゃないんだ」

クロコは静かな口調でフロウの誘いを断った。

「で、でも、時には外に出て気分転換した方がいいよ。きっと気持ちも変わってくるだろうし……」

「……悪い」

クロコはボタンとドアを閉めた。

フロウはドアの前にしばらく立っていると、フーツとため息をはいてドアをあとする。

「あの野郎、ここ二週間ずっとあの調子だ」

フロウの向かいにクレイドが立っていた。

「仕方ないよ。ブレット君が、親友が……あんなことになっちゃったんだから」

フロウは肩を落とした。

「……だが振り切るものは振り切らねえと、次に死ぬのは自分自身だ」

フロウはそれを聞き、少しうつむく。

「でもね、クレイド」

「なんだよ」

「人は……そんなに強くはないから」

「……………知ってるよ。そんなこと」

その頃、フルスロック基地に一騎の馬が入ってきた。ある人物が帰ってきたのである。

その黒髪の男はずっしりとした大きな体を揺らし基地へと入る。そこには別の男が出迎えに来ていた。長身の白い髪の男。それを見て黒髪の男が笑顔を浮かべる。

「ようーう！ 久しぶりだなファイフ！」

帰ってきたガルディア司令官が元気よくアールスロウ副指令に挨拶する。

「お帰りなさい 그레이さん、どうでしたか西部は」

アールスロウはわずかにほほえむ。

二人は並んで廊下を歩き始める。

「ダメだな、兵士のレベルがずいぶん低い。ほとんどのやつは構え

もロクにできなかった。まっ！　オレが鍛えてやったけどな」

「しっかり鍛えられましたか？」

「ハッハッハッ！　六人ほど怪我したな……」

「あなたって人は……」

アールスロウはあきれた様子だ。

「あつ！　そういえばクロコはどこにいる？　呪いについて少し情報を集めてきたんだ。それをあいつに教えてやらないとな」

「クロコは……今はやめた方が良いでしょう」

アールスロウは一瞬視線を落とした。

「……なにかあったのか？」

「報告書にも記載していますが、ウォーズレイ基地防衛戦で、援軍として向かわせたブレット・セインアルドが戦死しました」

「……！！　それで……」

「ええ、全体訓練の時も、どこか上の空で……何かの用がない限りは、ほとんど個室にこもっているようです」

「……そうか」

「報告すべき内容は他にも色々あるのですが、ついでにもう一つ」

「なんだ？」

「サキ・フランティスが基地を移ります」

「サキが？」

それから二日経った、ある日の午後。

フルスロツクの石畳の道路の、高い看板が立てられている一角に、一台の大型馬車が停まっている。

ここはフルスロツクの駅馬車乗り場。

サキは十数人の仲間に見送られていた。その中にはフロウやクレイドの姿も見える。

「それじゃあサキ君、元気で」

「はい、ありがとうございます。フロウさん」

「本当に良かったのかな？ クロコ君に言わなくて……」

「いいんです、初めからそう決めていたんで。後日、友人にクロコさんへ手紙を渡してもらおうように頼んでいます」

「君の行く基地、クラット基地だってね……」

フロウがそう言うと、隣に立っているクレイドも口を開く。

「クラット基地……戦争の最前線だな」

「はい、そこへ行きたいと自分で志願しました。アールスロウさんがなかなか承諾してくれなくて……苦労しました」

サキは笑った。

フロウは少し顔をくもらせている。

「どうしてわざわざそんな所に……」

それを聞くとサキは少し視線を落とす。

「ブレッドさんはボクをかばって命を落としました……だからボクは強くなるために、そこへ行こうと決心したんです」

その言葉を聞いたクレイドが少しだけ眉を寄せる。

「ブレッドのことはおまえが気に病む必要はないと思っぜ。あれは偶然の事故だ」

「仮にそうであったとしても、もうボクは守られる存在にはなりたくないんです。ボクに力があれば、ブレッドさんはあんな形でボクをかばうことはなかった……」

サキは一瞬悲しい目をしたあと、目に力を入れしつかりと二人を

見ると言葉を続けた。

「それだけじゃなく。ボクはどんな形でいい、クロコさんの助けになりたいんです。あのことが起こる前から……クロコさんに助けられたあの日から、ずっと思っていました、強くなりたいって……だから、そのためにも」

それを聞いたフロウは少しだけ笑顔を浮かべる。

「そうかい、それなら僕からは何も言うことはないよ」

フロウはサキに手を差し出した。

サキはそれに応じフロウと握手する。

「また、必ず会おう」

「はい、必ず」

横でクレイドが笑みを見せる。

「当たり前だろ。そんなこと」

同じ頃、クロコは個室のベッドの上で何かを考えながらボーっと座っていた。

クロコは少しだけ部屋の様子を見る。窓から日の光が入っているはずなのに、クロコには、部屋はずいぶんと暗く感じた。

ドンドンドン！

部屋のドアを勢いよくノックする音が聞こえる。
クロコはうるさく思いながらドアを開けた。

「よう！ クロコ、元気が」

ガルディアが大きな声を出した。

「あんたか、なんの用だよ」

クロコは眉を寄せながら言った。

「いやな、時間が空いたからヒマつぶしにおまえの変な顔でも見に来たんだ」

ガルディアはケラケラと笑った。

「……ふん」

クロコの顔は不機嫌な顔をした。

「それじゃあ、ちょっと失礼させてもらうぞ」

ガルディアはそう言うつとズイツと前に出てクロコの部屋へ入ろうとする。

「お、おい！」

制止するクロコを無視してガルディアはズンズン部屋へ入る。

「おっ！ 意外と片付いてるな。もっとグチャグチャに散らかってるかと思ってたが」

ガルディアは感心した様子だ。

「なにしてんだ、テメー！」

クロコは怒鳴る。

「おっ！ 意外と元気だな。ファイフからは、水に浮いたサーモンみたいな顔してるって聞いてたんだがな。あっ、実際にそう言ったわけじゃないぞ」

「……！！ それで、来たのか」

クロコはガルディアを一瞬にらんだあと、顔をそらした。

「そっいえば知ってたか？ 今日サキが基地を移るそうぞ」

「……！ サキが……！」

クロコは驚いた。

「出発は……ちょうど今ぐらいの時間だな」

「……………」

クロコは黙った。

「行かなくていいのか？」

「行っても、もう間に合わないだろ」

「そうかもな」

ガルディアはそう言うつとベッドにドカッと座る。そしてクロコの顔を見ずに静かに話し出す。

「ブレットが死んだんだってな……」

「……………」

ガルディアの言葉に対しクロコは黙った。

静寂が部屋を包んだ。

チュンチュンと鳥の小さな鳴き声だけが窓から聞こえる。

その中でガルディアが口を開いた。独り言のような静かな口調だった。

「オレは戦争に参加して今年で十年になるが、そのあいだ……たくさん仲間が死んだよ」

ガルディアは過去を見つめるように語る。

「死んだやつの中にはな、好きなやつもいた、嫌いなやつもいた、………大切な友もいた」

「……………」

クロコは下を向いて黙っている。
少しの間、また静寂が包んだ。再び鳥の鳴き声だけが響く。

ガルディアが再びゆっくりゆっくり話したず。

「……人が死ぬって苦しいな。人がいなくなるってさびしいな。もう会うことができないって……………」

ガルディアは一瞬目を閉じた。

再びの静寂。

ガルディアはクロコの方を向き、真っ直ぐに見つめる。

今度の静寂は長かった。長い長い静寂。どちらも一言もしゃべらなかつた。

クロコは下を見続けていた。真紅の瞳は深い悲しみに沈んでいた。そんなクロコをガルディアは見つめ続けていた。

静かな時間が過ぎてゆく。

その中である言葉が響いた。

「あいつは……………」

口を開いたのはクロコだった。

長い沈黙のあと、クロコは小さな声でゆっくりゆっくりと話したず。

「あいつは……ずっとオレのそばにいた。知らない間に、気づいたら当然のように隣にいたんだ」

クロコの真紅の瞳は悲しく光る。

「小さい頃から、ムチャばかりするオレの面倒ばかり見てて、村を出たあとも……いつも必死でオレのこと守って」

クロコの声が震える。

「知ってたはずなのに……なのにオレはあいつに文句ばかり言っていて……オレはあいつになにもなくて、なにもしてやれなくて……」

クロコの体が震えた。

倒れるようにゆっくりとガルディアの隣に座った。クロコは下を見つめている。

「もう……あいつは、いないんだ。もう……」

クロコは下を見続けている。

ガルディアはそんなクロコの隣で黙って話を聞き続けていた。クロコの口調が少し落ち着いてくる。

「もし……もしオレがいなければ、あいつは、あいつはオレを守ることもなく、もっと、もっと自由に生きられたんじゃないかな。オレはあいつになにもせず……迷惑ばかりかけて……」

再び沈黙が続いた。

今度はガルディアの方が口を開いた。クロコから顔をそらし、静かな口調で話し始めた。

「オレは、人が死んだとき、いつも考えるんだ。『もしこうしていれば、あいつは死ななかつたんじゃないのか?』 『オレはもっとあいつにしてやれたことがあつたんじゃないのか?』 なんてな。そんなことを何回も何回も考えちまうんだ」

ガルディアは一瞬悲しい目をした。

「もう後戻りはできない、そうわかっていても、それを考えずにはいられないんだ」

その言葉のあと、また少し静寂が続いた。

静寂の後、ガルディアは再びクロコを見つめた。

「なあ、クロコ。ブレットは死ぬ前、おまえに何か残さなかったか?」

「何か残す……?」

クロコはキョトンとする。

「別に物とは限らない。形のないものかもしれない」

「形の……ないもの」

クロコはしばらく黙っていた。

「……………！」

クロコの頭の中にブレッドが死ぬ前に残した、ある言葉がよみがえる。

「どうやら、なにか心当たりがあるみたいだな」

そう言ったあとガルディアは少しだけほえんだ。

「なあクロコ、もしブレッドがおまえのことを“迷惑”や“ただの守るための存在”だと思っていたんなら、死の前におまえになにかを残すだろうか……………」

ガルディアは静かにクロコを見つめている。

「ブレッドはおまえを守っていた。けど守っていただけじゃない。おまえを守りながら、おまえ自身に救われていたんじゃないのか？」

「オレ自身に、救われていた……………」

「おまえと一緒にいたときのあいつ、楽しそうに笑ってたよ。ブレッドには、おまえが必要だった。オレにはそう思えたよ」

「……………」

「自分が死んで、こんなに悲しんでくれるやつがいる。それは何よりも、あいつにとって、おまえが大事だった証拠だよ」

ガルディアはニコツと笑う。そしてクロコを力強い目で見た。

「ブレッドがおまえに残したもの、無駄にはするなよ」

ガルディアはゆっくりと立ち上がる。

「さて、オレもそろそろ仕事に戻らないとな。ファイフに怒られちまう」

そう言つとガルディアはクロコの部屋から出ていった。

部屋の中、一人座るクロコ。

クロコは不思議なことにさっきより少し部屋が明るくなったように感じた。

クロコはゆっくりと立ち上がると窓から外の景色を見た。その時だった。突然背後から声がした。

「クロ、おまえは決して進むのをやめるな。進み続けろ」

クロコは驚いて振り返る。しかしそこには誰もいなかった。

クロコは一人部屋で立ち尽くす。しかしクロコの心にはある変化が起きていた。

「分かったよ、ブレッド。オレはもう立ち止まらない。進み続ける」

真紅の瞳に光が宿った。

クロコは部屋を飛び出し、廊下を勢いよく駆けだした。

一方、馬車乗り場ではサキの乗った馬車が出発しようとしていた。

「それじゃあ、行きます」

サキはそう言っていると馬車に乗り込む。

「それじゃあな、サキ」

クレイドが軽く手を上げる。

「幸運を、サキ君」

フロウはニコツと笑った。

馬車が進み始める。他の友人たちも思い思いの言葉をサキにかけ
る。その間、馬車の速度は段々に上がり、サキの姿は馬車と共に徐
々に遠くなっていく。

フロウ達が見つめる中、馬車の姿がゆっくりゆっくりと小さくな
っていく。

そして馬車は街の中へと消えていった。

「行っちゃったね……」

フロウはさびしそうに言った。

「そうだな」

クレイドは遠くを見つめていた。

一方、馬車に乗ったサキは馬車の窓から遠くを見ていた。
四角い灰色の建物が次から次へと通り過ぎる。

住み慣れていた街並みを見ながらサキ自身、なんとも言えない物
悲しさを感じていた。

ふとクロコと初めて出会った時のことを思い出す。
基地の仲間にいじめられる自分、そこに助けに入ったクロコ、自
分をいじめる者たちを一蹴するクロコ。

思えばあの時から、サキにとつてクロコは憧れの存在だった。
しかし結果的に自分が原因でブレッドを、クロコにとつてのかけ
がいのない存在を奪ってしまった。それでもクロコは決して自分を
責めることはなかった。

「ごめんなさい、クロコさん」

サキは静かに言葉を漏らした。

馬車は川にかかった大きな石橋を渡ろうとしていた。

その時ふつとサキの目に何かが映った。

向かいの石橋になにかが立っている。

あれは……人影だ。

向かいの石橋に人影が立っている。その時、人影から大きな声が
上がる。

「サキーツー!!」

高い声が辺りに響き渡る。その声を聞いて、サキは思わず馬車の窓から身を乗り出す。サキの瞳には向かいの橋に立つクロコの姿がしっかりと映っていた。

「クロコさーん!」

サキも思わず大声で答えた。
再びクロコの大声が響く。

「バカヤロー!! サキー!! なに勝手に行ってたんだー!!」

怒鳴るクロコ。

「すいませーん!!」

大声で謝るサキ。

その間、馬車は石橋を渡る。二人は徐々に遠ざかる。

「サキー!!」

「はーい!!」

クロコは一瞬笑うと、再び大声で叫ぶ。

「また会おう!!」

クロコのその言葉を聞いた途端、サキの目から涙があふれた。

「は、はい!! かな……かならず……必ずー!!」

サキは精一杯、声を張り上げ返事をした。
クロコの姿は徐々に遠ざかっていき、やがて見えなくなった。

（クロコさん、ありがとう……）

サキの目から涙がこぼれ落ちる。

フルスロック基地に夕暮れの光がかかる。
アールスロウは一人、書類をまとめていた。

少し広めの自分の個室で大きな黒い仕事机に座っている。横にある大きな本棚には本がぎっしりと詰まっている。

アールスロウは机に積まれた基地の資料一つひとつに目を通して
いる。

（やれやれ、まだかかりそうだ……）

アールスロウは小さくため息をつく。

コンコン

誰かが部屋のドアをノックした。

（誰だ？ このノックは 그레이さんではないな）

アールスロウがドアを開けると、そこにはクロコが立っていた。
クロコはアールスロウの顔を見上げるなり、ぶっきらぼうにあいさつする。

「……よう、今ヒマか？」

アールスロウは不思議そうな顔でクロコを見る。

「なんだ君か。珍しいな、どうしたんだ突然」

「どうしたんだ突然、じゃねーよ。アンタが言ったんだろ“暇なら稽古をつけてやる”って」

その言葉を聞いたアールスロウは一瞬キョトンとする。しかしすぐにいつもの冷静な顔に戻る。

「ああ、確かに言ったな」

「……で、今ヒマか？」

アールスロウはニツと笑う。

「奇遇だな。今ちょうど時間が空いた所だ」

そしてすぐ部屋の方を向く。

「すぐに準備する。少し待っていてくれ」

アールスロウはそう言ってドアをボタンと閉めた。

広い実技場の中央でアールスロウとクロコが互いに木剣を持って向かい合う。

アールスロウが口を開く。

「ではまず、君には俺と戦ってもらおう。模擬戦を通して君に足りないものを指摘する。そっちの方が君には合っているだろう」

アールスロウは長い木剣をクロコに向けた。

「上等だ、今度こそぶっ倒してやるよ」

クロコは木剣を構える。それに応じアールスロウも構える。

「ああ、それぐらいの気構えがなければ稽古の意味がない」

二人の顔が真剣になる。

張りつめた空気が辺りを包む。

アールスロウが静かに口を開く。

「……来い」

「言われなくても……!!」

クロコはアールスロウに向け、一気に駆け出した。

ブレット……オレは進み続けるよ

晴れわたった青い空が広がる昼、建ち並ぶ四角い灰色の建物を温かな光が柔らかく照らす。

その建物のなかに一つだけ突き出た巨大な建築物がある。その巨大な横長の建築物には、いくつもの大型大砲が取り付けられている。そして入口の真上には大きな軍旗が飾られている。ヘルムのシルエツトが旗印の赤色の旗だ。

ここは解放軍フルスロツク基地。

ウォーズレイ基地防衛戦からすでに一カ月以上が経過していた。

今日は軍人達の休養の日だ。

基地の軍人達はそれぞれの時間を過ごしていた。

そんななか、解放軍基地の東に位置する実技場内では二つの人影が木剣を構え、互いに向かい合っている。

一人は年齢十五、六ぐらいの少女、肩まで伸びた黒い髪、真紅の瞳は燃えるような光を放ち、どこか威圧的な雰囲気を漂わせている。クロコ・ブレイリバーは向かいに立つ人影を鋭い目つきでにらんでいる。

もう一人は二十代半ばの白い髪の男。長めの髪を後ろで結び、どこか気品のあるきれいな顔立ちをしており、全体的に冷たい雰囲気を持っている。

ファイフ・アールスロウはクロコと向かい合っていた。

「はあ!!」

クロコがアールスロウに突進する。アールスロウは身構える。

クロコはアールスロウの間合いぎりぎりまで距離を詰めると素早く横に飛び、アールスロウの左をつく。アールスロウは左を警戒する。途端、クロコの姿が消え、右に姿を現す。

ビュンッ！

クロコの素早い斬撃。それは素早く反応され、かわされた。次の瞬間、アールスロウの長い間合いの斬撃が飛ぶ。

ビュウンッ！

クロコは身をかがめ素早くかわす。身をかがめたままクロコは前に踏み込み間合いを詰めようとする。アールスロウは素早く横に飛び、うまくそれをかわす。クロコは構わず斬撃をアールスロウに向けて叩きつける。素早く防ぐアールスロウ。クロコは間髪入れずに斬撃を連続で放つ。

ビュンビュンビュンッ！

空気を切り裂き無数にうねる斬撃。アールスロウも横に回りながら応戦する。

二人のあいだの空間で無数の斬撃がはじける。常に先手を取っているクロコだが、横に回るアールスロウの体をとらえることができない。

「クソッ！！」

クロコがそう声を漏らした瞬間、アールスロウの斬撃がクロコの体をわずかにカスる。

「……！ このッ！」

クロコはにらみつけた。次の瞬間クロコは力強い斬撃を放つ。

ビュンッ！

大振りに放たれた斬撃はアールスロウにたやすく防がれるが、強烈な衝撃が動きをわずかに止める。その瞬間、クロコの姿が消えた。途端、アールスロウの横にクロコが現れる。横に回るアールスロウに対し先回りしたのだ。クロコは剣を振るおうとする。しかし、その動きをアールスロウの眼はしっかりとらえていた。クロコの斬撃より早く、振り上げられた斬撃がクロコの足元から伸びる。

ビュウンッ！

クロコは素早く後ろに飛ぶ。しかしアールスロウの長い木剣はクロコのアゴをとらえた。

ゴッ！

鈍い音と共にクロコは後ろによろめき、倒れる。後ろに倒れたクロコは痛そうにアゴをさする。

「いってゝ、おいアールスロウ！ なに顔面狙ってんだよ！」

クロコはアールスロウをにらみながら高い声で怒鳴る。

「実戦を踏まえてと言っただろう。当たる君が悪い。それでも一応は気をつけている」

アールスロウは落ち着いた口調だ。

「さっきもデコにあてたくせに」

「……………とにかく、君の動きは雑すぎる」

「ああ!？」

クロコはにらみつけながら起き上がる。

「まず、剣の振りだ。あれはただ振りまわしているだけだ。相手の死角も、構えも、細かく意識していない。動きに関しては、フェイントを入れてくるところはいいが、足の運びが雑だ。あれでは動きに無駄ができるし、第一、動きそのものが読まれやすい」

「なんだと……………!」

「なんだと、ではない。前に一通り動きは教えただろう。君はそれを全く模擬戦で生かせていない」

「あの妙に凝った動きか……………あれ使えるのか？ いまだにおまえに攻撃を当てられねーんだけど」

「技術を十分に戦いに取り入れていないからだろう。それに攻撃がいまだに当てられないのは俺と君の実力差が、君の予想以上に大きいということだ」

「チッ、よく言っぜ……………」

クロコは不機嫌に声をあげる。

（動きは取り入れようとは意識はしてるんだけどな……）

「今日はここまでだ」

アールスロウは突然そう言うつと背中を向ける。

「お、おい！ もうかよ」

「溜まっている仕事を片付けなければならない。続きはまたの機会だ」

「クッソー、結局今日も当てられなかった……！」

「……、先ほどはああ言ったが、学んだ技術はそう簡単に戦いに取り入れられるものではない。それにここ三週間、君にはずいぶん量の技術を教えた。そう焦るな。今日はもう休むといい、ときには休養も大切だ」

アールスロウはそう言うつと実技場をあとにした。
実技場に一人取り残されるクロコ。

「チェッ、どうもあいつと話してると腹立つんだよなー」

数分後、基地のシャワー室で一人、汗を洗い流すクロコ。

（入軍してもう一カ月以上経つ………なんか大事なことを忘れてる

気がするんだよな)

髪をなでるクロコの右手、そこにはまっている黒い指輪が光った。

「なんか忘れてる気がするんだよなー」

指令室の大きな机に腰かけている大柄の男がそう言う。

男は年齢二十代後半、ずっしりとした大きな体で、少し逆立った黒髪と、力強い眼をしている。活気のある雰囲気を持つその男はなにかを考え込んでいる。

フルスロック基地の司令官グレイ・ガルディアだ。

「はい？」

その前に立つ副指令アールスロウが返事をする。

「いやな、なんか忘れてるような気がするんだよ。昨日寝る前にそんな気がしてから、今までずっと気になってな」

「それほど気にしなくてもよろしいのでは？ 大事な用件ならば俺も知っているはずです」

アールスロウは落ち着いた様子だ。

「あっ！！」

ガルディアが突然大声で叫ぶ。その声にさすがのアールスロウも少し驚く。

「ど、どうしました？」

「呪いの件だ、クロコの。情報仕入れて以来あいつになんにも教えてない。三週間も忘れてた……」

「……まだ教えていなかったんですか」

アールスロウは少しあきれた声を出した。

基地の狭い廊下、白い壁に囲まれた通路を小さい少年がトコトコと歩いている。少年は年齢十四、五ぐらい、とても小柄で背は150cm満たない、柔らかい灰色の髪ときれいに整った顔をしている。基地の兵士フロウ・ストルークだ。

フロウはなめらかな足取りで廊下を歩く。

フロウがシャワー室の前を通り過ぎようとした、その時だった。シャワー室の扉がゆっくりと開いた。

フロウはそれに反応し、扉の方を見る。するとクロコがゆっくりと顔を出した。

顔全体が濡れており、髪も濡れている。扉から少しだけのぞかせている体はなにもまとっていないように見えた。

フロウは目をまん丸くした。

クロコと目が合う。

「あつ、フロウ。ちょうど良かった。タオル忘れちゃって……悪いんだが、オレの部屋までちょっと取りに行ってもらえないか？」

クロコは全く気にしない様子でフロウに頼みごとをする。フロウはしばらく固まっていたが、少しだけうなずいた。

「……うん」

目をまん丸にしたまま返事をした。

「わるい、頼んだ」

そう言ってクロコはドアをボタンと閉めた。

フロウは目を丸くしたまま再び廊下を歩きだす。

フロウは足をカクカクさせながら廊下を歩いていった。

それから数十分後、シャワー室を出たクロコは一人廊下を歩いていた。

すると向かいからアールスロウが歩いてきた。

「やっと見つけた」

アールスロウはクロコを見るなりそう言った。

「ん、なんだ？ なんの用だ」

「ガルディア指令が呼んでいる。指令室まで来てくれ」

指令室、クロコはガルディアに呼ばれ、大きな机に腰かけるガルディアの前に立った。

「……で、なんの用だ」

「悪い！ クロコ」

ガルディアはクロコを見るなり謝った。

「……？ なにがだ」

「調べとくつて言つてたおまえの呪いの件、情報入手したのはいいが、おまえに伝えるの三週間も忘れてた」

「……あつ、オレも忘れてた。ってかオレも最近どうもなにか忘れてる気がしてたんだよね……って、あんた三週間も忘れてたのかよ！ ！」

「悪いなー。色々あつてすっかり忘れてた」

「いい加減だな……あんたに任せて本当に大丈夫なのか？」

クロコはあきれた様子だ。

「まあ、そう言うなつて。情報は色々仕入れてきたんだ。オレの行ったスフォート基地に、呪いについてけっこー詳しいやつがいてな」

「呪いに詳しいって……大丈夫なのか、ソイツ」

「でな、呪いにも色々とあるらしいんだ。人を弱らせたり、病気にさせたり、老いさせたり、動けなくさせたり……すごいなんか、かけただけで命を奪うのなんかもあるらしいぞ」

「へー、すごい世界もあるもんだな。その気になりゃあ呪いだけで国ひとつ取れそうだ」

クロコはそう言っ腕を組む。

「まあ、そんな単純じゃないらしいんだ。呪いをかけるのもいろいろと大変らしいぞ。例えば、呪いをかける条件が難しかったり、呪いをかける代償が大きかったりと、簡単に扱えるものじゃないんだと」

「簡単に扱えるものじゃない……！？ 見ろよオレを！ 指輪をはめただけでこのザマだぞ……！」

「いや、そいつが言うにはな。おそらく、その呪いを発動させる条件は、対象者が、呪いがあると知りながら、自らの意思で、自らの手で、指輪をはめることが条件だったんだろうってさ。なっ？ 難しいだろ」

「……………」

クロコは目を細めて黙ってしまった。

「でな、おまえのその呪い。女になる呪い。あれはな、そいつが言うにはかなり珍しい呪いなんだとき。そいつも初めて聞いたって」

「それじゃあ解けんのかよ。コレ」

「まあ、おそらく強い呪いだから並大抵のことじゃ解けないだろうって」

「クソッ、じゃあダメじゃねーか！」

「まあ、そう焦るなって。解く方法がないわけじゃあないらしいんだ」

「……………あるのかよ？」

「ああ、神具つてのが必要らしい」

「神具？」

「呪いを解くための道具で、その解呪能力は抜群だそうだ。ただ神具には呪いの種類によって色々なものがあるらしいんだが…………」

「じゃあ、その神具つてのが手にはいれば…………」

「そうだ、そしてこれからが大事な話なんだ。よく聞けよ」

ガルディアはそう言う右手の甲をクロコに見せる。

「神具つてのは呪いの力を打ち消す関係で、呪具に似せて作られるらしい。つまりおまえの呪いが指輪からきてるのなら、同じように呪いを解く神具も同じ指輪型をしているってことだ」

「指輪…………」

「ああ、神具つてのは、主に教会や美術館なんかによく納品されてあるらしい。だからそこをくまなく探せば……」

「呪いを解く道具が手に入る……」

「そういうことだ。あと呪いを扱うやつなんかも神具をよく持つてるらしいんだが……」

ガルディアの話が終わらないうちに、クロコは部屋を飛び出そうとする。

「おいっ！ ちょっと待てってクロコ」

「待てるか！ 呪いが解けるかもしれないんだ。すぐに街中の教会や美術館をまわって……」

「だから焦るなって、フルスロツクだけの教会や美術館なんかたかが知れてるだろ。それだけのために街中駆け回る気か？」

「だが今はそれしか……」

「焦るなって言ってるだろ。オレの立場を使えば、多数の街の情報を一気に集められる。大規模な調査も可能だ。そっちの方が効率的だろ？」

それを聞いてクロコは動きを止める。

「……………なるほど、確かにそっちの方が良さそうだな。これが職権乱用ってやつか」

「耳が痛いな……とにかくこの件は引き続きオレに任せとけ。おまえはしっかり自分の腕を磨けよ。アールスロウから聞いたぞ。今スランプなんだって？」

「……………今日はもう休養だ」

「ん？　そうか、じゃあ街を歩いてみたらどうだ？　自分が守る街なんだからしっかり見とけよ」

「……………気が向いたらな」

それから一時間後、基地の二階にある食堂、広い空間は昼食を食べる軍人達で埋め尽くされている。

その中で一人の男が昼食を食べている。男は年齢十八、九、少しはねた赤い髪と鋭い目をしている。身長はとも高く、座っていても、頭が近くを通る軍人のアゴの高さぐらいある。全体的にどこかのんびりとした雰囲気を持っている。

基地の兵士クレイド・アースロアだ。魚の白いステーキを食べている。

向かいにはフロウがチョココンと座っている。

「ん…………？」

クレイドはなにかに気付いた様子で、食堂の厨房の一つに目をやる。

見ると、クロコが厨房の前で、食堂の調理担当に向けて大声でなにか言っている。

「クロコのやつ、なにをエリヤのばつちゃんに言っただ？ あんな大声出して……フロウ、おまえなんか知らないか？」

クレイドはフロウの方を見る。

「さあ？ クロコ君がうるさいのはいつものことでしょ。またどうでもいいことで騒いでるんだよ。彼、基本的になにも考えてないから」

フロウは早口でパツと言うと食事を再開する。

「おいおい、ずいぶん毒のある言い方だな……クロコになんかされたか？」

「いや、何も、一切」

フロウは豆のスープをパクパクと食べる。

一方、クロコは厨房の前で騒いでいる。

「だから、なんでジェリーアップルがないんだよ！」

「そんなこと言っただって、ないモンはないんだよ」

「ジェリーアップルは今が旬だぞ！ 今ジェリーアップルが一番うまい時期なんだぞ」

「そんなこと言っただって、ないモノはないの！ うちの果物屋と契約してないんだから、果物関係は一切なし！」

「なんでしてないんだよ！」

「しょうがないでしょ。契約してくれる店がないんだから。そんなに食べたきゃ、街を歩いて自分で買うことだね。それしかないですよ！」

「くっそ」

クロコは悔しそうにうなる。

それから数時間後、クロコは街中を一人散歩していた。

灰色の四角い建物が規則正しく立ち並び、それらの建物はカラフルな布で色鮮やかに飾りつけられている。

ここはフルスロツクの商店街の一角だ。青天の中、商店街は買い物客でにぎわっている。

クロコはそこを一人歩きながら店を見渡す。

（うーん。適当にそこら辺をブラブラ歩いてただけなんだが、なんかこの道、見覚えあるな）

クロコは辺りを見回しながら歩く。

（あつ、思い出した。この街に初めて来た時に通った商店街だ）

クロコがそんな事を思いながら歩いていると、ある店がクロコの目に止まった。

店の周りは様々な色の布をふんだんに使い、きれいに飾りつけら

れている。そこから漂う雰囲気はほかの店と比べ、強く心をひきつける。

クロコは店の看板に目を移す。

「果物屋……！」

クロコは思わず小さくつぶやいた。

そして吸い込まれるように店の中へと入った。

クロコは店内を見渡す。

多くの種類のフルーツが棚の上に置かれている。普通の果物屋よりもさらに種類が多そうだ。果物独特の甘い香りが店内を漂う。

「いらっしゃーい」

店員が店に入ったクロコに愛想良く話しかける。

若い女の店員だ。年齢は十五、六歳ぐらい、白い髪とぱつちりとしたきれいな目。明るい雰囲気を持っている。

「なにかお探しですか？」

少女の店員は愛想良くニコツと笑うと親しげに話しかけてきた。

「ジェリーアップルだ。どこにある？」

「ジェリーアップル？ それならお客さんの目の前にあるけど……」

「ん……？」

クロコは自分の目の前の棚に目を移す。

赤色のやわらかそうな果実がクロコの目の中に飛び込んできた。

遠くばかり見渡していたので気づかなかったのだ。

「おっ！ あった」

クロコはジェリーアップルを嬉しそうに手に取る。

「すげーな、こんな大きなジェリーアップル、初めて見た」

少し笑みを浮かべて嬉しそうにしゃべるクロコを少女の店員がジ
ーツと見ている。クロコはその視線に気づく。

「……なんだ？」

「……あなた、どこかで会ったことない？」

「会ったこと？ そんなことな……」

クロコはそう言いかけた口を止め少女の店員をジーツと見る。

（確かに言われてみれば、どっかで……）

少女の店員もクロコの方をジーツと見て考える。

（なんだろう。どこかで見たことあるような……でも、一度覚えた
顔は忘れたことないし、変だなあ）

お互い黙って顔を見つめ合う。不意にクロコが口を開く。

「あっ、思い出した。初めてここに来た時、ゴロツキに絡まれてた

やつだ。あの時、会って以来」

そうしゃべりかけたクロコは口を止めた。

（そうだ、あの時と今とじゃ姿が違う、言ったところでわからないか）

「ゴロツキに絡まれたとき？」

少女はクロコをさらにジーツと見ながら、ゆっくりと考える。

（あの時、私を助けてくれた少年の剣士がいた。あの子とこの子、雰囲気似てる。考えてみれば、目の特徴や瞳の色、髪の特徴、しゃべり方やしぐさも……なにより、この子がまどつてる独特の雰囲気……似すぎてる。唯一違うのは……）

クロコは少女の視線を無視して口を開く。

「やっぱり気のせいだな。おい、これいくらだ？」

「クロコ……？」

少女が小さくそう言った途端、クロコは思わず動きを止めた。

「……………驚いたな。この姿になってもオレのことが分かるやつがいるのか」

クロコは素直に驚いている。

「あなた！ やっぱりクロコなの！？ 私を助けてくれた……」

少女は飛びつくようにクロコを見る。

「ん、あつ、ああ……」

（まさか気付くとはな、とはいえ、一から説明するのがメンドクサ
イ……）

「まあいいや、とりあえずこれいくらだ」

クロコはジェリーアップルを少女の前に出す。

「やだ……」

少女がそう言うと、クロコはキョトンとする。

「……ハッ？」

「今の状況、説明してくれるまで絶対売らない」

少女はそう言ってニコツと笑う。

「……………」

クロコはメンドくさそうな顔をした。

結局、クロコはメンドくさがりながらも、今の状況のいきさつを
一から説明した。

少女はその話を聞いてポカーンとしている。

「別に信じなくてもいいぞ。信じられる話じゃないし」

少女はクロコのその言葉を聞くと、クロコを真っ直ぐ見つめる。

「うん。信じる。あなたの特徴、それに雰囲気、あの時あったクロコと全く同じ……そして違うのは性別だけ、だけどそんなの常識じゃありえない。本当に呪いのような常識外な事でも起きない限り、こんな事なんてありえないから」

「特徴に、雰囲気ね。一か月以上前だっていうのにたいそうな記憶力だな。で、信じるって？」

「うん」

「おまえも相当変わってるな」

「あなたに言われたくないよ。あなたにね、クロコ」

少女はクロコの名を呼ぶとほほえむ。

「じゃあ約束どおり売ってもらっぞ。いくらだ？」

「その前にもう一つ！」

「あっ？」

「私の名前覚えてる？」

クロコは少し考え込む。そして口を開く。

「なんだっけ？」

「ソラ・フェアリーフ。今度はしっかり覚えてね」

ソラはニコツと笑う。

「ああ、覚えとくよ。で、ソラ、これいくらだ」

「お金はいいよ。この前助けてもらったお礼」

「一個じゃないぞ。三個買うつもりなんだが」

「うん、いいよ。お代はいらない」

それを聞いてクロコは少し考える。

「ん……、じゃあ、ありがたくもらつとくよ」

クロコがそう言うと、ソラはカゴに果物を入れて渡した。

「じゃあな。ソラ」

クロコはそう言って立ち去ろうとする。

「また来てくれるよね！」

「ん……？ ああ、また行くよ」

クロコはそう言って立ち去った。

夕方、夕焼け色の光が巨大なフルスロック基地を照らす。

指令室、大きな机に座るガルディアとその前に立つアールスロウが話している。

「そういえば、先ほど書類が届いたようですが」

「まだだ」

「また……ですか」

特に説明はいらないようだ。

「今度はリサイドの基地だ。ファイフ、またおまえに基地を預ける形になるな」

「リサイド……前線基地の後ろ備えの基地ですね。なぜ国軍の動きが怪しいこんな時期に……」

「こんな時期だから、なのかもな」

「……そうですね。了解しました。 그레이さんの留守のあいだ、この基地は必ず守ります」

「翌日の朝には出発する。頼んだぞ！ 裏司令官」

「やめて下さい。その言い方」

翌日の朝、基地のクロコの個室。

ベッドとイスだけ置かれた狭い部屋。 昇り始めた日の光がうつすらと差し込む中、クロコはベッドの上でスヤスヤと眠っていた。

コンコン

誰かがクロコの部屋のドアを静かにノックする。 しかしクロコは起きない。

コンコンコンコンコンコン

ずっとノックをする。

ノックの音が徐々に大きくなる。

クロコは目を覚まし、起き上がったって眠そうな顔でドアに向かう。 黒い髪は寝ぐせで少しはねている。

「なんだー？ こんな朝早く……」

クロコがぼやくような口調で言いながらドアを開ける。

「クロコー!!」

元気な高い声がクロコを呼ぶ。

クロコは驚いて思わず目を見開く。

ソラ・フェアリーフが目の前に立っていた。

「ソラ？　なんでここに……」

「もう、教えてよ！　この食堂、果物屋と契約してなかったって！　だからここと契約しちゃった！　だからね、私、今日から毎日ここに新鮮な果物届けに行くね」

ソラは嬉しそうに笑いながら話す。

「ってことだから、今日からよろしくね！　クロコ」

ソラの満面の笑顔。

「ああ、そう……」

クロコは思わず一歩退いた。

2 - 2 ミリセルト大商店街

純白の四角い大きな建物が建ち並んでいる。その建物の並びは不規則で、それらに挟まれた道は迷路のように入り組んでいる。

ここはフルスロックより東に位置する、グラウド中部の国軍領の街シャルルロッド。

その街の東、そこには建物の中から突き出た純白の巨大な建築物がそびえ立っている。形全体は正方形に近く、中央には高い塔が一本伸びている。所々に大型大砲が備えつけられ、入口の上には国旗が飾られている。角の生えた馬の顔が旗印の緑色の旗だ。

ここはシャルルロッド国軍基地。

その基地内の廊下を一人の少年軍人が歩いている。

青い軍服をキツチリと着こなしたその少年は年齢十五、六、サラッとした白い髪をしており、分厚い眼鏡をかけている。おっとりとした表情をしていて、どこか優しい雰囲気を持っている。

グラウド国軍人のスコア・フィードウッドだ。

スコアは基地の一室の前に立つと、そのドアをノックする。

コンコン

「入りたまえ」

中から声がする。

「うわっ!!」

スコアは中に入ろうとした途端、何もない所で転ぶ。
ドスンと音をたてて地面に鼻をぶつけた。

「相変わらずだね」

広い部屋に置かれた大きな机に腰かける男が、正面からスコアの姿を見て笑いかける。男は年齢三十代半ば、黄色の髪と黒い瞳をしている。細長い目と落ちついた顔立ちで、どこか知的な印象を受ける。

スコアは倒れたまま、その男の顔を見る。

「し、失礼しました！ ラティル大佐」

スコアは謝りながら地面に転がった分厚い眼鏡を拾い、素早く立ち上がる。そして敬礼した。

「どのような御用でしょうか」

ラティル大佐はスコアの方を見てニコリと笑う。

「まあ、そう構えるな。実は特に用はないんだ」

それを聞いてスコアはキョトンとする。

「はい……？ ではなぜお呼びに……」

「なに、少し君と話がしたくてね。いいかい？」

「はっ！」

「そう構えなくてもいい。ただのおしゃべりだ。楽しんでくれ」

「は、はい」

スコアは少しだけ肩に力を抜く。横をチラッと見ると、部屋の隅の棚の上に手持ち時計が置かれている。二十個はありそうだ。

「気になるかい？」

「は、はい、少し……なぜあれだけあるのが……」

「ああ、数か」

「時間を見るだけなら一つだけでいいと思ったので」

「時計は良いものだ。いくつあっても良い」

「は、はあ」

「時間を見るだけでは味気ないと思わないかい。装飾に魅力を感じるんだよ」

「は、はあ」

「君にはまだ分からないかな」

「は、はい、失礼ですが……まだ……」

「そうかい、残念だ。これをわかってくれる同志が少なくてね……」

話は変わるが、最近基地の者に聞いたんだが、どうも君に元気がないらしいな。ウォーズレイ侵攻作戦以後から」

「そ、そんなことは」

「敗戦したことがショックだったのかね？」

「それは……その」

スコアは返答に困る。

ラティル大佐はそんなスコアの表情を慎重に読み取る。

「……どうやらそれだけではなさそうだな」

「いったいなぜそんなことを？ 生活はここ一カ月普段どおり、全く問題ないはずです」

「ここ最近、我が軍の動きが慌ただしい。近い内に大きな作戦が動き出すだろう。君にも出動命令が出される可能性が高い」

「それで、ですか……？」

「ハハハ、それは建前だ。正直、個人的に君に興味があると言っただけの話さ。君は色々と派手だからな。良い意味でも、悪い意味でも」

「は、はあ……」

「それに君を軍に勧誘したのは私だからな。気になるのさ。そういえば、予定では今日、フレアとコールが任務から帰還するらしい」

「そうですか。フレアとコールが」

スコアの表情が少しやわらぐ。

「君に少し、元気が出ると良いがね」

ラティル大佐はほほえみかける。

その顔を見て、スコアは口を開く。

「あの、お気遣いありがとうございます。申し訳ありませんでした。失礼な態度を取ってしまったて……」

「気にすることはないよ。言っただろう？ ただのおしゃべりさ」

数十分後、スコアは基地広間の出口付近の壁に寄り掛かかりながら、ある者達を待っていた。

「おー！ スコアじゃん」

元気な声がスコアを呼ぶ。

スコアは声の方を見る。

すると二人の少年がスコアの方に近づいてくる。

元気な声を上げた一人は年齢十五、六、横にはねた黒髪と黄色の瞳をしている。長身でスコアよりも頭半分高い。ニコニコと人なつっこそうに笑っている。

そのすぐ後ろを歩くもう一人の少年は年齢十四、五、髪は茶色で少しねており、青い瞳をしている。背は普通でスコアと同じぐらいだ。顔立ちは幼いが落ち着いた雰囲気を持っている。スコアの顔を

見るとわずかにほほえむ。

スコアも二人の表情を見て、嬉しそうにニコリと笑う。

「フレア！ それにコール、お帰り」

黒髪の少年フレアは元気な声をあげてスコアに早口で話しかける。

「よう！ スコア！ 待っててくれたのか。ありがとな。久しぶりだなあ。ってか、すごく久しぶりな気がするなあ。いつぶりだっけ？ 一カ月ぶり？ いやいや、一カ月半ぶりだっけな。調子はどうだ。ケガはないな。うん」

フレアはしゃべりながらスコアの肩をバンバンと叩く。叩かれるたびにスコアの体がガクガクとゆれる。

「フ、フレアも、元気、そう、だね」

スコアは揺れながら言った。

「久しぶりだね。スコア」

もう一人の少年コールが静かな口調で話しかける。

「コールも、本当に、久し、ぶり」

スコアはまだ叩かれている。

「フレア、もうやめてあげて」

コールかピシヤリと注意した。

「あつ、アハハハ、悪いな。ついうれしくってな。テンションがあがって、そのせいで勢いがついたって言うか。とにかくうれしくってさ」

フレアはピタツと叩くのをやめた。

スコアはずれた眼鏡を直すと二人の方を見てニコリと笑う。

「長い任務だったね。お疲れさま」

三人は並んで歩き始める。

フレアがペラペラとしゃべる。

「ホントすごく大変だったよ、ルザンヌ軍の相手は。反乱軍って名乗っちゃいるけど、やってることは完全にテロリストだし。セウスノール軍と違って市街戦ばかり展開してくるんだよ、住民メチャクチャ盾にして。いくら武力がないからってもありやないよな。あのネチネチッぷりは最悪だったな！。おかげですごい時間食うし」

隣でコールが口を開く。

「でも住民ごとせん滅しろって言う司令官じゃなくて良かったよ。時間はかかったけど。それよりはずいぶんマシだった。ねえ、スコアの方はどうだった？」

「ボクは……」

スコアの言葉が詰まる。

「……どうしたの？」

コールがスコアの表情をゆっくり見つめながら心配そうな顔をする。隣でフレアが口を開く。

「コール、おまえさー、聞いただろ。スコアの方は負けたんだぜ？ そりゃーショックだろ。オレだって負けたらへこむし、でもさ、スコア、おまえがいくら頑張ったってそういうこともあるんじゃないかな。そういうモンだろ戦いつて。うん」

「……それだけじゃなさそうだけど」

コールの言葉に対しスコアが笑みを作りながら口を開く。

「そ、そんなたいしたことじゃないんだ。気にしないでいいよ……」

「わかった！ 彼女に振られたんだろ！ そうだよな。そりゃーショックだよなー。オレ付き合ったことないけど、ショックだと思うぜ。うん。……ってスコアに彼女なんかいたっけ？」

「フレア、スコアに彼女はいないよ」

「あつ！ それじゃあ告白して振られたんだ。うんうん、あるよな、そういうこと、それならオレも結構経験あるぜ。そういうことならガンガン相談に乗るぜ。任せとけよスコア」

「ねえ、フレア。彼女の話から離れなよ」

それを聞いてスコアがわずかに笑う。

「ハハハ、彼女……か」

「……スコア？」

コールは不思議そうな顔をした。

一方、遠く離れたフルスロツク基地。

今日は軍人達の休養の日だ。ゴォーンゴォーンと朝の仕事始めの鐘が鳴る中、軍人達は皆、それぞれの時間を過ごしていた。クロコは個室で自分の剣を磨いていた。身の丈に合わない大型剣、その刃を白い布で丁寧に磨いている。

コンコン

部屋のドアがノックされる。

クロコは自分の剣をベッドに立てかけるとドアを開く。

「おはようー！ クロコ」

元気な声でソラが挨拶をする。

「なんだ、おまえか」

「なんだってことはないんじゃない？ クロコ、今ヒマ？」

ソラはぱつちりとした目でクロコを見つめた。

「ヒマじゃない」

クロコは目を細めながら言った。

「ウソだー。ヒマでしょ。ウソついてもすぐにわかるよ。クロコの場合」

「チツ、なんの用だよ」

「いっしょに街歩かない？ この前のお礼もしたいし」

「お礼なら前もらったぞ」

「あんなのほんの一部だよ。ちゃんとしたいの。あの時は本当に危なかったんだから……ねっ、いいでしょ？」

「……わかったよ。ちょっと待ってろ。今支度する」

「やったー！ クロコならそう言ってくれると思った」

数分後、基地の廊下を歩くクロコとソラ。

基地の広間に出ると、十数人の集団が机に置かれた一つのチェス盤を囲み、チェス大会をしている。

「ガハハハハハ、五連勝！」

集団の中からそんな声が聞こえてくる。ソラがその様子を見ながら口を開く。

「チエスカー。最近やってないな」

「チエスなんかやったことすらねーよ」

二人がその集団を通り過ぎようとすると、向かい側からフロウとクレイドが歩いて来る。ソラが二人に気付く。

「あつ！ フロウくん、クレイド、おはよう」

「あつ、ソラちゃん、どうしたの？ クロコ君と一緒に」

「二人で街をまわるの」

ソラが嬉しそうに笑う。

それを聞いてフロウが目丸くする。横でクレイドが口を開く。

「クロコなんかとまわって楽しいか？」

「おい！ なんかとはなんだ。なんかとは！」

クロコがにらむ。

「それじゃあ私達は行くね」

ソラがニコツと笑ってクロコと一緒に二人の横を通り過ぎる。

「ソラちゃん！ 楽しんできてね」

フロウが後ろからニコツと笑って声をかけた。

「ありがとう。フロウくん」

クロコとソラは基地の外へと出ていった。

基地の広間、残されたフロウとクレイドに大きな鼻の兵士が近づいてくる。

「おっ！ フロウじゃないか。ちょうどいい、チエス大会に参加しないか？ 今ガディウスのやつが調子に乗ってるんだ。おまえの腕で黙らしてくれないか」

「あつ、ロブソンさん。すみません、今日は用事があるんです」

フロウは申し訳なさそうに断る。

「ん？ 今日はヒマじゃなかったのか？」

「いえ、たった今できたんです。行くよ！ クレイド」

「あつ？ いったいどこに行くんだよ？」

フルスロツクのとある馬車乗り場、そこに一台の大きな駅馬車が停車した。そこから十人近い乗客と共にソラとクロコが降りる。

クロコの視界に商店街の景色が広がった。ソラの店がある商店街

とも、呪われた商店街とも違う商店街。目に入るのは無数の店、近くから遠くまで店だらけだ。比較的大きめの店が所狭しと建ち並び、少し離れた丘の上まで店が立ち並んでいる。

「すげえ店の数だ、フルスロツクにこんな所があつたんだな」

クロコは感心した様子で辺りを見渡す。

その様子を見てソラがクロコの顔をのぞき込む。

「ねえクロコ、あなたフルスロツクがどんな街か知ってる？」

「知らねえ」

「もう、自分の住んでる町でしょ。フルスロツクはね。クラウドが一番商店の多い街なんだよ」

「へえ」

「そしてココ、ミリセルト大商店街はフルスロツクで一番大きな商店街なんだよ。色々なお店がいっぱいあるんだ」

ソラはニツコリ笑った。

「ここならクロコのほしいものも見つかると思うよ」

青空のもと、ガヤガヤとにぎわう街中を二人は並んで歩く。背の高さは大体同じだが、ソラの方がクロコより少しだけ高い。

「私もいつかここにお店を出したいなー」

立ち並ぶ店を見渡しながらソラは言った。

「へえ……そういえばあの店、おまえの店なのか？」

「まさか！ 別の人のお店だよ」

「じゃあ、なんでおまえしか店員いないんだよ」

「一年前まではあそこでおばあさんが働いていたんだけど、体調崩しちゃって、それから私は私に預けっぱなし。ついでに私は三年前からあそこで手伝いしてる」

「ふーん」

「お金貯めて、いつかここに自分のお店を持ちたいなあ」

二人はそんな会話をしながらひたすら道を歩く。大きな店が立ち並ぶ街並みがゆっくりと通り過ぎる。

「ほらっ！ クロコ、こっちこっち」

ソラは楽しそうに笑いながら道を指さし、クロコを案内するように道を歩く。

そんな二人の少し後ろで怪しい影が二つ動いている。

「よーし！ やつと見つけた！」

店の影に隠れているフロウが嬉しそうにコソコソ声を出す。その横でクレイドも店の影に身をかがめて隠れている。

「やれやれ、こんな遠くまで……俺たち相当ヒマ人だな」

「別に暇人じゃないよ。デートだよ、デート！ クロコ君とソラちゃんのだ！」

フロウはコソコソ声で興奮した様子でしゃべった。

「デートっていうのか？ この場合……はたから見ると女友達同士でお買い物って感じだが。まあ、クロコは服装が変だけだな」

「クレイド！ 置いてくよ！」

フロウはいつの間にか先をコソコソ歩いていた。

ソラとクロコはひたすら街を歩く。それを後ろから隠れながらフロウとクレイドが追う。

「あの二人、いつまで歩いてんだ？」

クレイドがぼやく。

「あっ！ 止まった！」

フロウがコソコソ声で声を上げる。

「服屋か」

「いや、クレイド……あれはただの服屋じゃないよ……」

「んっ？ おいおい、女物の服屋じゃないか」

「あっ！ クロコくん嫌がつてる」

「そりゃ、そうだろ」

「あっ、逃げる気だ！ ……おっ！ それをソラちゃんが捕まえた
！」

「おいおい、すごいな」

「あっ！ でもクロコ君も必死だ。でもソラちゃんも離さない！」

「ソラのやつも思ったより強引だな……」

「いけ！ ソラちゃん！ がんばれソラちゃん！」

「フロウ……おまえはなにを望んでるんだ？ オレにはわからない」

「あっ！！ クロコ君が振り切った！ くっそー！ 惜しい！」

「やれやれ、……で、結局なにが見たかったんだ？ おまえ……」

「ん？ まあなんというか。最近クロコ君に一つ恨み事ができてね。その仕返しの布石として、何か弱みを握りたかったんだけど……」

「結局あいつになんかされてたのか。ってか、おまえもけっこう腹黒いな」

「よし、クレイド！ あとを追うよ！」

フロウがシュビツと動く。クレイドもノソノソとあとを追う。

その後、クロコとソラは様々な店を回る。

男物の服屋では、サイズの合う服が見つからなかった。ソラが子供用の服を持ってきたら、クロコはプンプンと怒った。

家具屋には、石の机に木のタンス、本棚や水びんなど色々なものがあつたが、クロコは基地の個室には入らないと言った。

ベル屋では二人で色々なベルを鳴らして回った。クロコが青い大きなベルを危うく壊しかけたので、二人はそそくさと店を出た。

そしてレストランで昼食を食べる。

開かれた大きな窓から、街の景色を楽しみながら食事ができるレストラン。

そのテーブルに座り、クロコとソラが注文をする。

「サーモンのリバーパスタをお願いします」

「じゃあ、オレは馬肉のパークステーキと鶏肉のリーフシチューと白身魚のクリームパスタ。あと、ジェリーアップルのパイ」

「そんなに食べたら太るよ。クロコ……」

「いいんだよ。その分動くから」

「すみません、私もジェリーアップルのパイお願いします」

店の大きな窓から見える二人の様子を、外からフロウとクレイドがサンドイッチを食べながら観察していた。チーズがたっぷり挟まった大きなサンドイッチをクレイドは三つも持っている。

フロウが二人の様子を見ながら口を開く。

「ソラちゃんはホントに楽しそうだね。それに比べるとクロコ君は……」

「まあ、あいつは楽しくても表情に出すタイプじゃないからな」

「じゃあホントは楽しんでるってこと？」

「さあな、そこは俺には分からねー」

食事を待っている間、クロコがソラの顔を見る。

「けど、おまえの注文した料理、リバーパスタか……川魚が中心のパスタだよな。マニアックなもの注文するな」

「うん、本当は私シーフードパスタが好物なんだけど、ここにはないから。私、港町の生まれなんだよね。そっいえばクロコは出身地ってどこ？」

「オレはスロンヴィアだ」

「……！ スロンヴィア虐殺の……！」

「ああ、……って言ってもオレはあの時のことはほとんど覚えてないんだよな。だからスロンヴィアに関する思い出はほとんどが良いモンだ」

「……………」

「けど、それを奪ったのが国軍だっていうのはよく分かってる」

「国軍は嫌い？」

「当然だろ。けど、復讐のために戦う気はねーよ。そんな理由で戦っても何も得られないからな」

「そうなんだ」

「ああ」

（けど……）

クロコの脳裏に一瞬スコアの顔が横切った。

「クロコ……？」

「いや、なんでもない」

「……………」

「それよりさっきから視線を感じるんだよな」

「えっ！」

「いや、気のせいかもしれない……」

クロコが辺りを見渡すと、フロウとクレイドは素早く物陰に隠れた。

クロコは一皿目にきた大きなステーキをあつという間に食べ終えたあとソラの顔を見る。

「そついえばおまえの店……」

「うん、なに？」

「なんで軍と契約してなかったんだ？ あんな近くなのに」

「……おばあさんはボーとした人だから、そついつのにいちいち反応しないんだよね」

「一年前からおまえに任されてるんだろ？」

「……うん、私もあんまりしなかったし」

ソラは少しだけ顔をくもらせた。

「……？ なんでだよ」

「わたし軍が嫌いだから」

「軍が？」

「って言うより、戦争が嫌い」

「ふーん」

「とても正気のこととは思えないから、それに……」

「それに？」

「ううん、なんでもない」

ソラは再び笑顔を浮かべた。

「ふーん、じゃあおまえが言うにはオレも正気じゃないやつか……でもなんで今になって契約してんだ」

「えっ！？ そ、それは……知り合いもできたし……お金も貯まるからいいかなーって……」

「なんかそこだけ変な感じだな」

「えっ？ そうかな。お金が貯まればここにお店も出せるかもしれないし……あつ、それと私、クロコが正気じゃないなんて思っただけからね」

「そうか」

「そっぴいえばさっきの視線ってなんだったの？」

「んっ？ ああ、アレは気のせいだ…… たぶん」

二人は昼食が終えたあと、丘へ上がった。少し景色を眺めると灰色の街並みとそこを通るいくつもの川が見えた。

二人は丘の上の店をまわる。

本屋では、ソラが色々な本を紹介したが、クロコはそれらを手に取ったあと三秒ぐらいで元の場所に戻した。

通りかかったケーキ屋では、クロコは窓から見えたフルーツケーキを買ってもらおうと思ったが、ソラはどうせなら残るものをプレゼントしたいと言ったのでやめた。

金属屋ではクロコがある金属に興味を示したが、高すぎたので結局出た。

そしてダメもとで剣屋にも入った。

「どうクロコ、良い剣ありそう？」

ズラツと並ぶ大中小の剣を見ているクロコにソラが聞いた。

「ダメだな、だいたいオレの剣はナイトメタル製のゴールドアって言う上物なんだ。そうそう代わりなんてねえ」

「ふーん、私そっぴいの全然わからないからなあ」

「あつたとしても金額は数十万〜数百万だな」

「それは無理だ……」

「じゃあ出るか」

その後いくつか店をまわるが、クロコは商品は見ても何かほしが
る気配は一向にない。

「ねえ、クロコ。クロコはいったい何がほしいの？　こんなにお店
まわってるのに」

ソラが少し怒った顔をしてクロコに話しかけた。

「ん？　ああ、特にないなあ」

「もうっ！　じゃあ、どこにあるの？　なにがほしいの？」

「んー……」

クロコは考え込む。

そんな二人の様子をフロウとクレイドが遠くから眺めている。

「ふああー、おいフロウ。そろそろ帰らないか？　疲れてきた」

「んー、なんかすっかり落ちついちゃったなー。最初はすごく勢い
あつたけど……」

「んじゃあ、帰るか」

「ふう、そうだね、帰ろう」

フロウとクレイドは静かに立ち去った。

商店街の道をゆっくりと歩くクロコとソラ。

二人が人通りの少ない道を歩いている時だった。突然横から声がした。

「おいおい！　なんだか楽しそうだなー。女ども！」

二人はその声の方向を向く。

見ると大柄の筋肉質の男が建物に寄り掛かってこっちを見ている。いくつものベルトを巻いた奇抜な格好をしている。片手に酒のビンが握られていた。どうやら酔っているようだ。

ベルトの男はズンズンと近づくと、二人を歪んだ眼差しで見つめる。

「楽しくお買い物ってどこか？　オレも混ぜてくれよあ」

男はニヤーツと笑う。

クロコは黙って、ソラに手を添え自分の後ろに下がらず。

「ク、クロコ……」

ソラは不安げな声を出す。今、クロコは剣を持っていない。

「大丈夫だ、ソラ」

クロコはそう言ってベルトの男を静かににらむ。

「ああっ！？　なんだ、その眼はあ」

男はクロコの態度に声を荒げる。

「生意気な女だなあ、ちよつと痛い目にあわせてやるかあ!？」

「血氣づくのは勝手だが、もしなにかしようとしたら」

クロコがそう言い終わらないうちに男の手が大きく振りかぶられる。その瞬間、クロコの鋭い蹴りが男の腹に叩きつけられた。

男の大きな図体は軽々と吹き飛び、さらに地面に引きずられる。

男は地面に仰向けに倒れ、ピクピクとけいれんしていた。

それをクロコは涼しい顔で見ている。

クロコの後ろでソラがぼうぜんとした様子で見る。

「つ、強いね。相変わらず……」

「当然だろ」

二人はその後、再び店をまわり始める。辺りは再び人であふれる。

「そういえばクロコってアークガルドに住んでたんだよね」

「んっ？ おまえにはまだ言っただけだったと思っただけだな」

「灰色髪のフのつく人に教えてもらった」

「あのおしゃべりめ……」

「そこにはあんな人がいっぱいいたの？」

「あれはまだかわいい方だな」

「そ、そう、でも良いところもあったでしょ」

「ねえ」

「一つぐらいは……」

「……………そういえば西の方に腕のいいパイ職人がいたな」

「ほら、良いところもあるでしょ」

「でも、あそこには二度と戻りたくねー」

「そ、そう……………それじゃあさ！ 今度私も連れてってよ」

「おまえ人の話聞いてたか？」

「アハハハ、じょうだんじょうだん」

二人がそんな会話をしていると大きな店が目に見え込んだ。

「あつ！ 靴屋だ。クロコ！ ここ入ろう」

「んっ？ ああ」

二人は靴屋へと入っていった。

広い店内、クロコはたくさん並んでいる男性用の靴を見回す。さまざまな色、さまざまな種類、さまざまな形。多くの靴があるが、

どれもこれも今のクロコにはサイズが大きすぎるように見える。

「クロコ！ どう？ コレ」

ソラがブーツを両手に持ってクロコの前に現れた。

黒い革のブーツだ。店内に入るわずかな光を鋭く反射している。クロコはそれをまじまじと見る。

「……悪くないな」

クロコがそう言うと、ソラはニコツと笑う。

「じゃあサイズが合うか履いてみようよ。すいませーん、試し履きしていいですかー！」

クロコが試しに履いてみると、黒いブーツはクロコの足にピッタリとはまる。

「うん……、ピッタリだ」

「じゃあ決まりだね！」

「ああ、そうだな」

クロコのその返事を聞くと、ソラが嬉しそうに笑う。ソラはブーツを持って店員のもとへ向かう。

「これは…… 2200バルになります」

「はい、あっ、ちょっと待って下さい。……はい、どうぞ」

「ちょうどですね。ありがとうございました」

ソラはクロコの前に立つと、嬉しそうに靴を差し出す。

「はい、クロコ、この前のお礼」

クロコは口をへの字に曲げてそれを受け取る。

「ああ、アリガトな」

クロコがそう言うとソラは満足そうに笑った。
その後、クロコとソラは店を出た。

「よし、用も済んだし帰るか……」

クロコは少し疲れたようだ。

「ちょっと待って、クロコ。あと一か所だけ寄りたい場所があるんだ」

「ん……？ どこだよ」

「秘密。着いてからのお楽しみ」

2 - 3 夕陽の橋

「ちょっと待って、クロコ。あと一か所だけ寄りたい場所があるんだ」

買い物を終えたあと、ソラはクロコにそう言った。

「ん……？ どこだよ」

「秘密。着いてからのお楽しみ」

ソラのその言葉を聞いて、クロコは少し考えたあと口を開く。

「……けど、急がないと帰りには暗くなってるぞ」

「大丈夫、馬車乗り場と同じ方向だから、ほんのちょっと寄るだけ……時間はかからないよ」

ソラとクロコは再び並んで歩きだした。ゆっくりと馬車乗り場の方向へ向かう。

二人がしばらく歩いた時だった。

「ん？」

ソラはあるものに気付いた。
クロコもソラと同じ方向を見る。

見ると屋台店が道ばたで営業している。

「あんな店、さっきあったか？」

「うっん、なかった。きつとこの時間だけ店を出してるんだよ」

ソラが吸い寄せられるように店に近づく。

クロコはそれを見て、一瞬メンドくさそうな顔をしたが、黙ってソラを追った。

ソラが屋台店をのぞくと、そこには色とりどりのアクセサリーが並んでいた。

指輪や腕輪、ペンダントなど様々な種類のアクセサリーがあり、一つひとつが非常に細かく作り上げられていた。それらは少しやわらいた日の光を、様々な方向に反射し鋭く光っている。

「きれい……」

ソラは魅入られたように一つひとつのアクセサリーを見つめる。

「このアクセサリー、おじいさんが作ったんですか？」

ソラが店を営業している老人に話しかけた。

深いひげの老人は、もごもごと口を開く。

「んあ、そうだよ……もう年だからなあ、多くは作れないが」

老人はゆっくりとした口調だ。

ソラは再びアクセサリーに目を通す。

クロコは少し後ろで、そのソラの様子を眺めていた。

ソラはアクセサリーの一つひとつに目をおす。そしてその中で、

あるアクセサリーの一つに目を止めた。

髪飾りだ。

それは控えめのデザインで作られているが、並べられているアクセサリーのなかでも特に細かく作り上がっていた。

中心にはめられた青い宝石がさまざまな方向に光を跳ね返し、強い独自の輝きを放っている。宝石のまわりの控えめな修飾たちも、その光に共鳴するように繊細に光り輝く。

「すごい、こんなの初めて見る……」

ソラはその髪飾りに魅入る。

「お目が高い。これはわしの作品のなかでも自慢の一品さ」

「おじいさん、これいくらなんですか？」

「2800バルさ」

「高っ！」

クロコが後ろで声を上げた。

「高くなかないよ！ 信じられないくらい安い。こんなに質の高いもの……」

「材料費は安いんだけどなあ」

「素晴らしい技術をお持ちなんですね」

「なに、無名の職人さ。こんなほめてくれたのはお嬢さんが始めた

だよ」

ソラは髪飾りをジーっと見つめる。

「おい、買うのか？ 買わないのか？」

後ろでクロコが声を出した。

「……………」

「買わないんなら行くぞ。帰る前に日が暮れちゃう」

クロコはそのまま歩き出そうとする。

しかし、ソラは動こうとしない。

「……………おい！」

「クロコ……………」

ソラは少し顔を落としジーッとクロコの方を見る。

「……………なんだよ」

「……………お金が……………もう足りない……………」

それを聞いてクロコは一瞬目を細める。

「……………」

クロコはフツとため息を吐いた。

「……やれやれ」

クロコはそう言うとズンズンと歩いて店の前に立った。

「おい、じいさん！ コレくれ」

「2800バルだよ」

「持ってけドロボー！」

「お嬢さん、それは店側の言葉だよ」

「誰がお嬢さんだ！！」

クロコはその髪飾りを買ったと、ソラの前に立ちそれを差し出した。

「ほらよ」

「……………」

ソラはボーっと黙ってクロコの方を見た。

「おい、どうしたんだよ。いらねーのか？」

「……あつ、ううん、ありがとうクロコ、ありがとう！」

ソラは嬉しそうに髪飾りを受け取ると、満面の笑みで大事そうに両手に包んだ。

「よし、さっそくつけよ」

ソラは笑みをこぼしながら髪飾りをつける。

「どう？ クロコ」

ソラのつけた髪飾りがキラリと青く輝く。

「ああ、……きれいな髪飾りだ」

「ありがとう、クロコ」

ソラは嬉しそうにほほえむ。

「髪飾りがな……」

「うん、ありがとう」

ソラはニコツと笑った。それを見てクロコはほおをかく。

「用がすんだら行くぞ。寄りたいトコがあるんだろ？」

「んっ……？」

「んっ、じゃねーよ」

「そ、そうだっけ、じゃあ行こう。おじいさん、さようなら」

「ああ、また来てくれよ」

二人は再び馬車乗り場の方向へ歩き出す。
ソラはときどき嬉しそう髪飾りをなでる。
そんなソラの様子を、クロコは見ながら、ふと思った。

（んっ？ オレは一体なにしにここに来たんだっけかな……？）

街を歩く二人。建物を照らす日の光が少しずつ傾いていく。
もうすぐ馬車乗り場へ着くだろうという時に、ソラがトコトコと
走り出し、建物の間の細い横道へと入った。

「クロコ！ こっちこっち」

ソラが手招きする。

クロコはゆっくりと歩きながら追う。
暗く細い路地裏を二人はしばらく歩いた。

すると急に道が開けた。

石畳の長い道沿いに、整備された大きな川が流れていた。
石板の堤防できれいに整備された川には、一本の大きな石橋がか
かっている。

人通りの多い街中とはうって変わり、人の姿は一人も見えない。
静まりかえった景色が広がっている。

街の中でこの場所だけが、まるで別世界に隔離されているようだ
った。

「不思議な雰囲気のあるところだな」

クロコは思わず口にする。

その言葉を聞いてソラがクスッと笑う。

「クロコでもわかるんだ」

「おいっ！　どういう意味だ」

この場所独特の、柔らかい匂いがする。
そして柔らかい空気が体を包む。

少し傾いた太陽が石橋を照らすと、その石橋の所々に影ができ、
石橋は川全体の景色の中で独特の存在感を放つ。

おそらく橋を設計した人物は、このことを計算に入れてはいなかっただろう。

人工の造形物にも関わらず、自然に生まれた景色。しかし、それは心を強く惹きつける。

「私、この時間のこの場所が一番好き……」

「ふーん」

「……わかる気がする、って？」

「別に言っていないだろ。そんなこと」

クロコはジーンと目の前に広がる景色を見る。

体の感覚を研ぎ澄ませば、この場所そのものを感じることができ
る。

不意にソラが口を開く。

「ねえクロコ、私達、今日、たくさんいろんな話をしたよね」

「ん？　ああ、そうだな。おまえが質問してばっかだったけど」

「それはクロコから話さないからでしょ！」

「そうか？ おまえがおしゃべりなだけじゃないのか」

「……………」

ソラは急に黙る。

クロコの方を静かに見つめている。

今までと表情を変え、真剣な顔立ちになる。

「…………ソラ？」

クロコはソラの態度の変化に気付く。

「ねえ、クロコ……………」

ソラはクロコを静かに見つめながらゆっくりと口を開く。

「どうしてなにも言わないの？」

「……………、どういう意味だ」

「私達、今日たくさん話したよね。だけど、クロコはなにか隠してる。きっと大事なことを隠してる」

クロコは少し黙る。そして口を開く。

「別にそんなことねえよ……………」

ソラはそんなクロコの返答を聞いても表情を変えない。

「ブレッドのこと、基地の人から聞いた。あなたの過去のこと、今日あなたから聞いた。だけどクロコ、あなたはもう一つ、大事なことを隠してる」

ソラの黒い瞳は静かにクロコを見つめる。

「……………」

クロコは口を開かなかった。

ソラはさらに言う。

「教えてクロコ……きっと、ウォーズレイ防衛戦、その時だと思う。ブレッドさんのこと以外で、もう一つ、あなたにとって大きなにかがあった。だけど、あなたはそれを話そうとしない。多分、誰にも話してない」

ソラが何を感じているのか、クロコには分かっていた。

クロコは確かに、誰にも話せないことがあることがあった。クロコはある人物のことを思い出していた。スコア・フィードウッドのことを……

ソラが言葉を続ける。

「もしも軍の人に話せないような事だったら……私なら大丈夫だよ。私は軍と契約してるけど、本職は果物屋だもん。軍とは関係ない」

ソラはそう言ったあと、表情をやわらげる。

「私になら話しても大丈夫。だからね、私に話して……」

黙っていたクロコはその言葉を聞いて、ゆっくりと口を開く。

「……それを知って、おまえはどうするんだ？」

「どうもしない。だけど、あなたに話してほしい」

ソラは真剣な目でクロコを見つめる。

その言葉を聞いて、クロコはしばらく考え込む。

ゆっくりと空を見上げ、考え込む。

静かな時間が過ぎる。

誰もいない、そして、なんの音も聞こえないこの場所で、静かな時間が過ぎる。

柔らかい空気だけが二人を包む。

そのなかでクロコが静かに口を開いた。

「スコア・フィードウッドを……知ってるな？」

その名を聞いて、ソラはわずかに反応する。

そして返事をする。

「うん、知ってる」

（ブレッドさんを……殺した人……）

「オレはあいつを……戦場で出会う前から知っている」

「知っている……？ どこかで話したってこと？」

「ああ……ウォーズレイに向かう旅路の途中、たまたま立ち寄ることになった国軍領の町、そこで偶然、本当に偶然に出会ったんだ」

ソラは黙ってその話を聞いていた。

その話をしているクロコの瞳に映る真紅の光が、徐々に薄らいでゆく。

辛い表情をしている。

「あいつは……その時はすぐトロいやつで、オドオドしてて、だけど悪い奴じゃなくて、それで、あいつは……守りたいって言った」

「……守り……たい？」

「あいつは、大切な人を守る存在になりたいって言っていた。いい加減な気持ちじゃない、真っ直ぐな眼で……」

「クロコ……」

クロコは悲しげな表情だった。

そんなクロコの様子をソラは心配そうに見つめる。
すると急にクロコの表情が険しくなる。

「だけど……だけど！ あいつはブレッドを殺した！！」

クロコの歯がギリつとなった。

「戦場だ！ 殺し合いだ！ どちらも剣を向けてた！ わかってる……！ そんなことは……！ わかってるんだ！！」

クロコは拳を強く握る。腕全体が震えていた。

「だけど！ どうすればいいんだ！ この怒りを！！ この憎しみを！！」

クロコは天を仰いだ。

「どうすればいいんだよ！！！」

クロコは叫んだ、怒るように祈るように泣くように。クロコの声が、静かな空間に響き渡る。

そして、辺りは静寂に包まれた。

クロコはわずかに息を切らし、地面を見つめていた。

ソラはその様子を静かに見つめている。その黒い瞳は悲しげに光る。

「クロコ」

ソラは静かに名を呼んだ。

「……………」

クロコは何も答えられなかった。乱れた息だけがクロコの感情の震えを痛いほどに表していた。

ソラはクロコを強い瞳で見つめる。

そしてゆっくりと、優しい口調で語りかける。

「ねえ……クロコ、聞いて。あなたは今、苦しんでる。どうしてそんなに苦しいのか、あなたにはわかる？」

「……………」

クロコは少し黙る。クロコの息が少しずつ整ってくる。

「わからない……………」

クロコは震えた声でそれだけを答えた。
ソラは静かにクロコを見つめていた。

「そう……………」

ソラは少しの間クロコを見つめる。
そして小さく口を開く。

「クロコ、あなたは……スコアを憎んでいるんだよね？」

ソラの問いかけに対しクロコはゆっくりと口を開く。

「……………ああ」

「じゃあクロコ、あなたがスコアに抱いている感情は、憎しみだけ？」

クロコは少し考えた。

「……………わからない」

「本当に……？」

ソラのその問いにクロコは黙った。ソラは静かに口を開いた。

「あなたにはわかってる。スコアに抱いてる感情は憎しみだけじゃない。だからあなたは苦しんでる。だけど……」

ソラはクロコを見つめ続けていた。クロコは地面を見つめていた。ソラは再び口を開く。

「あなたとスコアが戦場で出会ったとき、あなたはスコアと戦わなければならぬ……その時あなたは憎しみを剣に乗せず、スコアと戦うことができると思う？」

「……………」

クロコは険しい表情になった。そして口を開いた。

「……きつとできない」

「そう、あなたにはわかってる……そんなことはできないって。あなたがスコアに対して持っている感情は憎しみだけじゃない。けれど、もし今のまま戦場で出会えば、あなたは憎しみだけを剣に乗せてスコアを斬ろうとする。けど……」

ソラはクロコを力強く見つめる。

「それは間違ってる。」

ソラのその言葉に、クロコがピクツと反応する。

ソラは言葉を続ける。

「スコアを、憎しみを持って斬ることが、間違ってるって言ってるんじゃない。あなたが今の状態で戦場に立ち、スコアと戦うことが間違ってる。だからこそ……あなたは今ぶつかっている問題に対して、答えを出さないといけない」

それを聞いてクロコがゆっくりとソラの方を向く。その目には真紅の瞳が悲しげに光る。

「答え……を？」

「そう、答えにはいくつかの選択肢がある。憎しみの下でスコアと戦うという選択肢もある。それを持たずに軍人としてスコアと戦うという選択肢もある。スコアと戦わないという選択肢もある。それ以外の選択肢もあるかもしれない」

「……………」

「けれど一つだけ確かなこと……それはこのことに対する正しい答えなんかないってこと。それでもあなたは選択しないといけない。あなたの答えを、クロコの答えを……………」

「オレの……答え」

クロコはそう言ったあと、黙った。ソラも何も言わなかった。

しばらくの静寂が続いた。

夕日の光だけが静かに二人を包み込む。

その中でソラが突然ほほえんだ。そしてまた小さく口を開く。

「ねえクロコ……私はあなたがとても強いと思う。なぜならあなたは、今ぶつかっている問題から逃げようとしなかったから……」

ソラはクロコを見つめていた。

「あなたにはスコアの憎しみ以外の感情を切り捨ててしまう選択肢もできた。そして、きっとその方が楽だった。けれど、あなたはそれをしなかった。それに向き合えば、苦しむとわかっていても、それでもあなたは向き合った。それはきっと、誰にでもできることじゃない」

ソラは優しくほほえんだ。そしてそのあと、クロコを強い目で見つめた。

「クロコ、聞いて。今ぶつかっている問題だけじゃない。あなたが進もうとしているこの道は、きっと様々な問題に満ちている。そしてその問題にぶつかることにあなたは苦しむ。けれどお願い、クロコ、あなたは決してそれに目を背けないで。もしあなたが本当の『希望』を求めているのなら」

「本当の『希望』……？」

「そう……もし、なにも考えず、なにも感じずに、ただ道を突き進めば、その先にはあなたの望むものはきつとない。あなたの求めている『希望』は、事実と向き合い、問題とぶつかりながら歩んだ先にきつとあるはずだから」

そう話すソラの目を、クロコは真紅の瞳で真っ直ぐと見つめてい

た。

ソラは言葉を続ける。

「その道はきつと苦しい道になる。辛い道になる。だけど、これだけは忘れないで、あなたは……」

その時ソラはもう一度ほえんだ。

「一人じゃない」

ソラは言葉を続ける。

「あなたが倒れそうになったときは、あなたを支えてくれる人がいる。フロウ君、クレイド、アールスロウさん、ガルディアさん、それに、私もいる」

ソラが浮かべたほえみはまるでクロコを包み込むようだった。

「あなたは、一人なんかじゃないから……」

ソラは優しくクロコを見つめていた。クロコもまた、静かにソラを見つめていた。

再び静寂が辺りを包んだ。

そしてクロコは川の方へとゆっくりと目を移した。

水が静かに流れていた。

クロコの表情は先ほどよりも穏やかだった。

ソラも静かに川の方へと目を移した。二人は静かに同じ景色を見つめていた。

「ありがとう」

夕焼けに照らされたこの場所で、その言葉が静かに響いた。

夕焼けの光がフルスロツク基地を照らす。

基地の広間ではいまだにチェス大会が開かれていた。

チェス盤を挟んで向かい合うフロウとアールスロウ。

十数人の兵士が息をのんでその戦いの結末を見守っていた。
静寂に包まれた雰囲気の中、駒が一つ動かされる。

「チェツクメイト」

その言葉が響いたあと、フロウは静かにフーと息を吐く。

「……参りました」

フロウはガクツと肩を落とした。

ギャラリーもため息をつく。

「おいおいおい、これで十三連敗だよ！」

「オレたちチェス組の威厳が……」

「てかフロウでさえ負けたら、もう勝てそうな奴なんていねーよ」

「おい、ガディウス！ おまえいけよ。午前はあんな調子良かった
ろ」

「じよ、冗談じゃねーよ！ もう一度やったら完全に自信失うわ！」

ガヤガヤと騒ぐ外野を尻目にアールスロウが淡々と話す。

「なかなかの腕前だったな。フロウ」

「いえ、完敗です……」

「全体を通して非常に冷静に局面を見ていた。だが中盤の攻めで少し焦り過ぎたな。意表を突こうとする姿勢は悪くはないが」

「中盤の攻め、そこが勝負の分かれ目でしたね……攻めを急いでしまっあたり、まだまだ若いということでしょうか」

「若いことは悪いことではない。重要なのは判断力だ。あの局面は、攻めるタイミングが非常に難しかった」

「だとしたらその前の局面で……」

二人がそんな会話をしている少し離れたところで、帰ってきたクロコとソラがチェス大会に気付く。

「なんだ。まだやってたのか」

クロコはチェス大会の方を見て言った。

ギャラリーが囲むなか、アールスロウは立ち上がる。

「さて、俺はそろそろ退散させてもらおうか。仕事は全部片付けたが、ここを任された以上、指令室をあまり空けたくはない」

それを見てほかの兵士達が騒ぐ。

「待って下さい、アールスロウ副司令！」

「オレ達にもプライドってものが……」

「あと一回！ あと一回だけ！」

「……では誰が相手をするんだ？」

アールスロウがそう言った途端、シーンと全員が黙る。

「あの、私が相手をさせてもらってもいいですか？」

静寂をソラが切り裂く。

「君は……、ソラ・フェアリーフか。うちと契約している果物屋の娘だな」

アールスロウは表情を変えずにソラの方を見た。

「はい、あの、よろしいでしょうか？」

「いいだろう。これで本当に最後だ」

「やった。チエスなんて久しぶり！」

ソラはそう言って席に座った。

その様子を見て外野が騒ぎだす。

「いいぞー、ソラちゃん！」

「がぜん応援しちゃうぜ！」

「きみの魅力でアールスロウさんを倒せー！」

「ソラちゃん」

「うおー!!」

外野が興奮して声を上げる。
二人の対局が始まった。
向かい合うソラとアールスロウ。

「アールスロウさん、話すのは初めてですね」

ソラが駒を動かしながら口を開いた。

「ああ、そうだな」

「クロコからあなたの話を聞きました」

「そうか」

アールスロウが駒を動かす。

「とても冷静で、まじめで、そして優しい方だと言っていました」

「……君は嘘をついている。彼がそんなことを言うはずがない」

ソラが駒を動かす。その後、わずかに笑顔を見せる。

「ええ、確かにそうは言ってます。けど、クロコはあなたのことをそう思ってます。クロコの言葉を聞いて、そう感じられました」

「……………、フッ……………、もしそれが本当ならば、素直に驚くな」

アールスロウが駒を動かす。

チェスをする二人をギャラリーが囲む。
それを少し離れたところでクロコが見ている。
そこにフロウが近づいて隣に立った。

「どうだった、ソラちゃんのお買い物は？」

「ん？ ああ、まあまあかな」

「なんかすごく疲れた顔してるけど」

「ん？ ああ、そういえば疲れてたな。そう思うと、なんだかすごく疲れてきた」

クロコは急にグッタリとした顔になった。

「ハハハ、お疲れさま」

数十分後。

「チェックメイト」

アールスロウは静かにチェス盤を見つめる。
そしてしばらくしてゆっくりと口を開く。

「俺の……負けだな……」

そうアールスロウが言った途端、ソラが声を上げる。

「やった！　すごく久しぶりだったからあんまり自信なかったけど。ちゃんと打てた！」

ソラは嬉しそうに笑った。

二人を囲むギャラリーは、逆に完全に静まりかえっていた。数人がボソボソとしゃべる。

「お、おい、普通に勝っちゃったぞ……」

「てか、これ圧勝じゃねーか？」

アールスロウがゆっくりと立ち上がる。

「……さて、俺はこれでやっと司令室に戻るな」

アールスロウは背を向けゆっくり歩き出す。

小さなため息が聞こえたような気がした。

フロウはその様子を見て冷や汗を流す。

「クロコー、わたし勝てたよ！」

ソラは嬉しそうに遠くのクロコに向かって手を振った。

それをクロコは黙って見つめている。

不意にクロコが口を開いた。

「なあ、フロウ」

「なんだい？」

「女って怖いな」

2 - 4 大規模な戦争

夜の闇に包まれた町、大きな建物が不規則に並び立つ町の景色に、小さな明かりが点々と灯っている。その広い街の端には巨大な建築物がそびえ立っている。夜のシャルルロット国軍基地。

基地のある個室、スコアはイスに腰掛け、自分の剣を白い布で磨いていた。

部屋の中はこぎれいに整理されており、木製の棚の上にはいくつもの勲章が置かれている。

コンコン

部屋のドアをノックする音が聞こえた。

スコアがドアを開けるとフレアの元気な早口が飛んできた。

「よう、スコア、元気か？ ちょっと用事があったさ。用事っていつでも大したことじゃないんだけど、まあとにかく部屋に入っているか？ コールも一緒だぜ。なあ、コール」

フレアは少し後ろの方に立っているコールの方を向く。うなずく
コール

「うん」

スコアがキョトンとした様子で口を開く。

「どうしたんだい？ 二人とも……日が暮れてから急に姿が見えなくなつて……」

「うん、とにかく中に入らせて。話はその後……」

「そうそう、中に入ってから。ここですつとしゃべってるのもアレだし、とにかく入らせてくれよ、それから話すからさ」

スコアは二人を部屋の中に招いた。

「二人はどこに行つてたの？」

「買い物だよ。買い物。コールと二人でな。ちょっと西の商店街まで行つてきた。なあコール」

「うん」

「買い物つて、二人だけで？ どうせならボクも誘つてくれればいいのに」

「ハハハハ、まあいいじゃないか。たまにはこういうことがあつても、それにほら、ちゃんとおみやげも買つてきたんだぜ。そんながつかりするなよ。なあコール。あつ、そうだ。コール、おみやげ」

「うん、はい、スコア。おみやげ」

コールがスコアに大きな四角い包みを手渡した。

「……？ またこんな大きな物、買い物といい、いろいろ突然だね」

スコアは戸惑った様子で包みを受け取った。
包みの中からは大きな箱が出てきた。黒い立派な箱だ。

「な、なんか、高そう」

「とにかく開けてみて、スコア」

コールがほほえみかけながら言った。隣でフレアが落ち着かない様子で見ている。

「う、うん……」

スコアは箱を開けた。

その瞬間スコアの視界が白いものに包まれる。

「うわっ!!」

スコアは驚いて、勢いよく床に転がる。

箱から白い大きなボールがバネにつながれビヨンビヨンと跳ねている。ビックリ箱だ。

フレアは転がったスコアを見て大笑いしている。

「アーハッハッハッ、ア……、アッハッハッハッハッ、ハハハ、
ゴホッゴホッ！ ……ハハハ、アハハハ」

「フレア笑い過ぎ……」

コールは少しあきれている。

スコアはずれた眼鏡を上げながら立ち上がる。少し怒った様子だ。

「な、なんなんだよ。いきなり……いったい何がしたいのか」

「アハハハハ、ハハハ、悪い、ハハハ、悪い、そんな怒るなよ。スコア」

フレアがお腹を押さえながら言った。

「まあ、この企画の言いだしっぺはフレアなんだけどね……」

「……企画？」

「そうそう、最近スコアが元気ないからさー。なにかプレゼントをして喜ばせてやろうって思ったんだけどさ。いざ商店街に行ったら、つい悪乗りして、悪い悪い、怒らせちゃったみたいだな」

「うん、主に悪乗りしてたのはフレアだったけど」

「おいおい、オレのせいだけにするなよ。二人で選んだんだろ？これなら元気でそうっておまえだって言ってたろ。でもあんなに飛びあがるなんてなー。スコアには少しきつすぎたなー」

「ボクを元気づける……ため？」

「うん」

「そうそう、おまえ元気なかっただろ。久々に帰ってきたら、どうも様子がおかしいっていうか、なにか考え込んでるっていうのか。おまえが元気がなくなると、こっちの調子が狂うっていうのかなー。やっぱりスコアがいつもどおりじゃないと、なんか変な感じがするんだよなー。まあ、オレたちは三人合わせて始めて調子が出るって

「いつか……うまくいくっていつか」

「つまり？」

コールが隣で言った。

「つまり……元気出させてことだ」

フレアの言葉を聞いて、スコアは申し訳なさそうに口を開く。

「ごめん、二人に心配かけちゃったみたいだね。商店街までわざわざ足を運ばせちゃって……ボクのために……」

「まあ気にすんなって、オレ達もけっこう楽しんでたしなー。なあコール」

「うん、だけどさ、スコア、もし良かったら僕らに聞かせてほしいな……いったい何に悩んでるのか」

フレアもゆつくりと口を開く。

「そうさ、オレ達は友達だろ？ 遠慮せずに話して見ろよ。オレ達はそのためにいるんだぜ？」

フレアはそう言ってほえんだ。

スコアはその言葉を聞いてわずかに目元が緩んだ。そしてそのあと何かを考える。

少しだけ時間が過ぎたあと、スコアはゆつくりと口を開く。

「コール、フレア、ありがとう。わかったよ。全部話す」

スコアはそう言ったあと、チラッと自分の机を見た、母の形見の卵型のペンダントが入った机を。

スコアは再び二人を見る。

「なにから話せばいいか……そうだな……まずはウォーズレイの戦場に向かう途中の話からだね」

スコアの表情が懐かしい記憶を思い出すようにわずかにほころぶ。しかしすぐに眼鏡越しの瞳は暗く沈んだ。

「ボクはそこで、クロコという子に出会ったんだ」

スコアは、フレアとコールに話をした。

町でクロコと言う少女と偶然に出会ったこと。

その少女が自分と一緒にペンダントを探してくれたこと。

……そして戦場で再開したこと。

話を終えたあとのスコアの表情は険しかった。

「……もし、もし再び彼女と出会ったら、僕は彼女を斬らなきゃならない」

スコアは静かな口調で言った。その瞳に悲しみが映る。

フレアとコールも重い表情をしている。コールの口が開く。

「……………辛くないの？」

「辛いさ……だけどやらなきゃならない。もしボクが戦場で初めて

あの子と再会した時、あの子を斬っていれば、おそらく……あの戦いで敗北することはなかった。ボクの迷いが敗北を生み、結果的に守れたものを守れなかった」

フレアは真っ直ぐスコアを見つめる。

「スコアはさ……彼女のことどう思ってたんだ？」

それを聞いてスコアがうつすらと悲しそうに笑う。

「不思議な出会いだと思った。そしてできれば、またあの子とどこかで出会いたいと思ってた」

スコアは少し下を向いた。

「だけど……結局は……」

スコアの言葉が途切れた。

その様子を見てフレアは視線を落とす。そして静かに口を開いた。

「どうして出会っちゃったんだろうな……」

まるで自分のことのように辛そうだ。

スコアはフレアの言葉を聞いたあと、わずかに黙った。
しかしすぐにほほえみを作る。

「本当にね」

スコアは悲しげにそう言った。

しかしそのあと、なにかを心に決めるように強い目をした。

「でもやらなきゃならない。ボクはボクを守るべきもの、守りたいものを守るため、迷うわけにはいかないんだ」

その後、フレアとコールは部屋をあとにした。
扉の前で三人は言葉を交わす。

「今日はありがとう。フレア、コール、おかげで少し胸が軽くなつたよ」

それを聞いてコールがほほえむ。

「そう、それなら良かった。また明日ね」

フレアもいつもの早口でしゃべる。

「また悩み事があつたらオレに相談しろよ。好きな子に振られたんならオレの得意分野だからな。その時は盛大に慰めてやるよ。まあそれ以外にも何でも相談に乗るからさ」

「うん、ありがとう……フレア。ごめんね、色々心配かけさせちゃって」

「ハハハハ、気にすんなって、悪いクセだぜ、いちいちそういうのと気にすんの」

その言葉を聞いてスコアはニコツと笑う。

「そうだね。ありがとう」

フルスロツク基地の早朝、指令室に一通の要請書が届いた。
アールスロウはその内容を見て、険しい顔をする。

「いよいよ来たか……!!」

朝、基地敷地内の裏手で、ひとり剣を振るクロコ。汗を流し、息を切らしている。

そんなクロコに一つの大きな人影が近づく。

「ここにいたか、クロコ」

クロコは大きな人影の方を見る。

「なんだ、クレイドか。なんの用だ」

「招集がかかった、基地の前まで来い」

「招集……!!」

基地の前へ行くと数千人の兵士が敷地に整列している。

クロコはそれを見て驚く。

「うおっ！　　すげーな」

「二番隊と三番隊の兵力をそれぞれ半分ずつ出してるらしい」

「こんなにいたのか……」

「周辺基地からも集めてるからな」

クレイドはそう言ったあとクロコから離れる。

「じゃあ、俺は整列するから。おまえも並べよ」

クレイドはそう言って兵士の中へと消えていった。

クロコも整列する。

長く広い列の前、その中央にはアールスロウが立っていた。そしてその横に中年の隊長が立つ。

その隊長は年齢四十前後、がっしりとした体で、黄色のあごヒゲをたくわえ、細く鋭い目をしている。

その顔にクロコはどこか見覚えがあった。前方に並ぶクロコとその隊長の目がたまたま合った。すると隊長はすぐさま目をそらす。

（あー……基地に初めて来たときに戦ったオッサンだ。名前は確か、べ……べ……ベル、なんだっけか？）

アールスロウは整列した兵士の様子を確認すると前方に立つ小隊長達に向け、声を発する。

「今日の早朝、セウスノール本部基地から我らが基地へ、援軍要請

がかかった。援軍に向かう場所は、ケイルズヘル基地だ」

ケイルズヘル基地、その言葉を聞いた途端、小隊長達とその周辺の兵士達がざわつく。

前方に立つクロコにもそれが聞こえたが、クロコには意味がよくわからなかった。

「静かにしろ!!」

アールスロウの隣にいる中年の隊長ベイトムが怒鳴る。

兵士達は静かになった。

アールスロウが再び声を発する。

「皆も知つてのとおり、ケイルズヘル基地は我らが解放軍領の前線基地の一つだ。そして情報では、国軍はこの前線基地を落とすため、そこに近いソウデコナ国軍基地へ戦力を集中している。そのため本部は国軍が動き出す前に、ケイルズヘル基地に周辺兵力を招集する決定を下した」

アールスロウはそう話したあと少しだけ間をおいて再び声を発する。

「皆、覚悟してほしい。この戦いが始めれば、それはここ最近各地で起きているどんな戦いとも違う、非常に大規模な戦争となるだろう……!」

「大規模な……戦争」

クロコの口から声が漏れた。

その後、アールスロウの話が終わった。

それからその話は小隊長を通じて各兵士へと伝えられた。

話によると、この隊を指揮するのはベイトム隊長とのことだ。また、準備が整い次第すぐにケイルズヘルへと向かえ、とのことだった。

クロコは個室で準備を整え、基地の前へと戻った。

基地の前では何十台もの軍用の大型馬車が並んでいた。車体は前後に長く、下には無数の車輪が付いている。4 m近い巨大な馬車馬が八頭がかりで引いている。

そこに大勢の兵士達が次々と乗り込んでいく。

クロコはその様子を一目見て、前回の戦いとは規模が違うことを実感できた。

そしてクロコも馬車に乗ろうとする。

「この馬車に……」

「満席だよ」

「じゃあ、この馬車か……」

「満席だよ」

「こっちか」

「満席」

「ああ？」

「クロコ！」

少し離れた馬車の窓からクレイドが手招きしている。クロコはクレイドと同じ馬車に乗った。

車体の中の広い空間には席が横に並ぶ形で配置されていた。一台の馬車におよそ六、七十人の兵士が乗っている。クロコはクレイドの隣に座った。

「なんだか前の戦いとずいぶん違うな」

「まあな。というか、この前の戦いがまた極端に少なかったんだ。まあ今回はまた多いけどな」

しばらくすると馬車は走り出した。

基地の敷地内を出て、フルスロツクの街を走る。

クロコは窓際の席だったので、チラッと窓に目をやる。その時だった。

道路から馬車を見つめる一つの人影があった。

ソラだ。

二人の目が一瞬合う。

（ソラ……）

すぐに馬車の窓からソラの姿は消えた。ソラは悲しそうな目をしていたような気がした。

「どうした？ クロコ」

隣でクレイドが不思議そうな顔をしていた。

「なんでもない」

クロコはそう言って少し黙ったあと、口を開いた。

「そういえば、フロウはいるのか？」

「あいつは留守番だ」

「ふーん」

「さびしいか？」

「……別に」

「そうか」

「……そういえば、今から行くケイルズヘルって場所はどんな所なんだ？」

「ケイルズヘルってトコはな。昔は貴族の住宅街だったらしいぞ。今は解放軍領になって、一人も住んでないらしいけどな」

「いや、基地のこと聞いてんだよ。……っていうか貴族か。オレには縁がないな」

「まあ解放軍はほぼ全員が平民か農民だからな」

「まっ、そうだろうな。この内乱は極端な権力格差が引き金だからな」

「だけどな、実はこの基地に一人、貴族の生まれがいるんだよ」

「ん……！？ 誰だ？」

「誰だと思う」

「知るわけないだろ」

「おまえの知ってるやつだ」

「んー……」

「ちょっと考えろよ」

「……………アールスロウか？」

「残念、フロウだよ」

「へー、あいつ貴族の生まれなのか」

「意外か」

クロコは少し考えた。

「意外……でもねえのかな。言われてみれば、あいつのときどきす

る偉そうな態度も貴族っぽい気がする。言われてみれば、なんかプライドが高そうな気もするし。言われてみれば、なんか潔癖っぽいところもある気がするし。変に知識が豊富なのも気持ち悪いし」

「そうだな。それにあいつ変に几帳面なところもあるし、変に細かいところもあるし」

「うん、貴族だな」

「ああ、貴族っぽいな」

二人は妙に納得した顔をした。

「ハックションッ！」

基地の食堂でフロウが大きなくしゃみをした。隣の兵士が驚く。

「おいおい、どうしたんだ。珍しく大きなくしゃみして」

「いや、なんだろう。変な気がする……」

「変な気……？」

「うん、なんだか遠くで、全く根拠のないことを延々と言われていくような、そしてそれで妙に納得してしまったような、そんな気が……」

「どんな気だ」

クロコはクレイドの顔を見る。

「なんでアイツ解放軍に入ったんだ？ 貴族の生まれなのに……」

「まあ、あいつにも色んな事があるだよ」

「なんだよ、おまえは知ってんのか」

「ああ、詳しく知ってんのは多分俺だけだ」

「どんな理由なんだよ」

「本人に直接聞けよ。もしかしたら話してくれるかもな、クロコに
なら」

「……………なんだよそれ」

「あいつもいろいろ複雑なんだよ」

「ってか、なんでクレイドにだけ話してんだよ」

クロコがそう言うとかレイドは一瞬ほえんだ。

「あいつとオレは……………、まあ、似た者同士だからな」

「似た者同士？ 全然似てないだろ。むしろ正反対な気がする」

「まあ、クロコには難しいか」

「どういう意味だ！ おまえがわかってオレがわからないことなんがあるか！！」

「それこそどういう意味だ！！」

「……だけど貴族か、貴族なんか、話で聞く限りいけすかねーやつばっかかと思ってた」

「そんなことはねーよ。フロウがいい例だろ」

「フロウ以外知ってんのかよ」

「知ってるさ。過去に一人な。そいつもいいやつだった」

「ふーん」

大型馬車の集団はフルスロツクの石門を抜け、草原の馬車道を走る。

窓を見ると青い空の下、一面に緑色の草原が広がっている。草原の中からはときどきバッタがピョンピョンと飛び跳ねる。遠くには森が見えた。

「……で、基地の方はどんななんだよ。基地の方は」

「ん？ ああ、基地か。ケイルズヘル基地は解放軍にある三つのかい前線基地の一つだな。中央のビルセイルド基地、北のクラット

基地、そして今回行くのは南のケイルズヘル基地だ」

「前線基地ねー。前に行ったウォースレイ基地とは違うんだな。そういえばサキが移ったって基地は……」

「それはクラット基地」

「なんだ、違うのか」

「残念か？」

「別にそんなじゃねーよ」

「そうか」

「……で、今から行く……ケイルズヘル基地だっけか？
そこは他にどんな特徴があるんだ？……って、クレイドに聞いて
もわかんねーか」

「おいおい、俺はこれでも二年、解放軍にいるんだぞ」

「フロウは？」

「……一年だ」

「ダメじゃーねーか」

「あいつと比べんなよ！」

「……で、なんだっけか、ほかにどんな特徴があるんだ」

「ああ、ケイルズヘル基地には一人、有名なのがいるな」

「有名なの？」

「ああ、俺も詳しくは知らないんだが『戦乱の鷹』って異名を持つ有名な剣士がいるらしい」

「『戦乱の鷹』……」

「ああ、腕は確からしいぞ。相当強いって噂だ。いま解放軍内では一、二を争うぐらい活躍してるやつらしい」

「へえ、どんなやつなんだ？」

「だから詳しく知らねーって」

「ふう、フロウがいればな……」

「さっきはボロクソ言ってたくせに」

「おまえだって言ってただろ」

馬車はケイルズヘルに向け、草原をひたすら進んだ。

夜になると大きなテントをいくつも張り、そこが兵士達の寢床と

なった。

クロコとクレイドは寝る前に互いを相手に稽古をした。

それから馬車はひたすら草原を進み続け、三日目の午前には馬車の集団は湖帯に入った。

窓を見ると、いくつもの青い湖が通り過ぎる。湖同士のあいだの茶色の地面には短い草が薄く生え、たまに草をぼうぼうと生やした小さな林が姿を現す。湖のほとりにはシカの集団や、水とたわむれる水猫がいた。ときどき巨大トンボが目の前を通り過ぎる。

馬車の集団は午後には湖帯を通り過ぎ、再び草原の道を駆ける。深い霧がたちこみ始め、周辺の草原以外何も見えない。その中でも馬車は構わず走り続ける。二時間もすれば霧はきれいに晴れ再び晴天となった。

その日の夜はライズバールという大きな町に入った。赤屋根の建物が広がる町だ。そしてそこにある解放軍基地を寢床にした。ほとんどの兵士が敷地内でテントを張る中、クロコとクレイドは運よく基地内で寝ることができた。

四日目の午後、隣のクレイドがチラチラと窓の方を気にしていた。

「どうしたんだ？ クレイド」

「んっ？ いやな、たぶんこころは知ってる場所の近くだと思うんだよな」

「どこだよ。そこ」

「アルタつつう町でな。俺の故郷だ」

「ふーん、どんな町なんだ」

「まあ悪い町じゃないな」

「へえ、そうか」

「あと、カエル料理があつたな」

「カエルか、食ったことないな。その類ならオレはカメまでだな」

「カメか……逆じゃないな」

「さっきの湖にも探せばいたんじゃないか？」

「おまえなら湖でも生きてけそうだな」

「おまえは池だな」

五日目の午前、深い草原は徐々に薄くなり、茶色い土が顔を出す荒れた大地が広がっていた。クロコはそれを窓からチラッと見たあと、席に深く座りこんだ。

クロコは眉を寄せてムスツとしていた。しばらくするとクレイドがそれに気づく。

「どうした？ クロコ」

「限界だ」

「あっ？」

「どんだけ座ってりゃーいいんだよ！ なげーんだよ！」

「まあ今回は遠いからな。中部を抜けて南部まで行くからな」

「クソッ！ イライラする」

「まあのんびり待とーぜ。おっ！ 見るクロコ、山脈だ」

「山脈？」

クロコが窓を見ると、はるか遠くに巨大な山脈が見える。

「おおっ」

クロコが思わず声をあげた。

横に広がる大山脈が天に向かって鋭く伸びている。斜面は森林でおおわれているが、上部は灰色の地面が露出している。かなり奥まで山脈が延々と続いているのがうつすら見える。

クロコの上からクレイドも窓をのぞいている。

「このタイミングだと、あれはオーク山脈だな」

「オーク山脈？」

「まあ、そういう名前の山脈だ。ケイルズヘルまでもうひと我慢だ」

六日目の午後。

クロコはムスツとした顔で席に深く座っていた。急にあたりが乾燥しだし、それに加えて暑い空気が馬車の内部にまんえんし出した。その不快感も加わり、クロコのストレスはピーク近くまで達していた。意味もなく前の席をにらむ。隣でクレイドが小さくいびきをかいて寝ていた。

クロコは木窓を開け、外の景色を見た。薄く茂った草原はほとんどが消え去り、辺りは乾いた茶色い大地が広がっている。所々に亀裂の入った大地だ。遠くには岩石が点在するのが見える。

もうひと我慢……クレイドのそんな言葉を思い出し、クロコは何気なく窓から顔を出して馬車の前方を見た。すると、クロコの瞳に巨大な影が映った。

馬車の群れのはるか前方、クロコは一瞬それを山かと思ったが、山にしては形が少し変だ。台形をしている。茶色の巨大な岩のようなものがゆっぜんと乾いた大地に一つたたずんでいる。

「おい、クレイド！ アレはなんだ？」

「んー？」

クレイドはその声を聞き、目を開けた。大きな体をゆっくり起こし、クロコの上からヌーツと窓から顔を出す。

「おつ、ありゃあ多分ステイアゴア台地だ。ってことは、ケイルズヘル基地はもうすぐだ」

「なにつ、本当か。クレイド」

クロコはうれしそうに笑みを浮かべる。

「ああ、ケイルズヘルはスティアゴア台地に寄り添ってる町だからな」

「ふーっ、やっとこの座りっぱなしの生活が終わる」

間もなく馬車の前にケイルズヘルの町並みが広がった。

2 - 5 夜の出会い

クロコ達を乗せた解放軍の馬車集団は無事ケイルズヘルの町に到着した。

馬車はケイルズヘルの街の石畳を走る。

ケイルズヘルの大通りを数十台の大型馬車の列が走り抜ける。馬車の窓からは巨大で純白な屋敷が次々と通り過ぎる。

「さすが元貴族の住宅街だな……」

クロコは少し気に入らないものを見るような目だ。

馬車の集団はステイアゴア台地へ近づく形で町を走る。

ステイアゴア台地の姿が徐々に大きくになっていく。

ほかの兵達も窓の外からステイアゴア台地を見始め、ワイワイと騒ぐ。

小さな山ほどもある巨大な台地、それが徐々に近づくにつれ、茶色のなだらかな斜面がはつきりと見えてくる。

ステイアゴア台地が目の前にまで近づく町の端、台地の影に隠れるような形でケイルズヘル基地は建っていた。長方形の箱がいくつも重なったような複雑な形をした基地。大型大砲をいくつも装着した巨大な基地だったが、ステイアゴア台地が近くにあるとまるで小さな置物のようだ。

馬車がケイルズヘル基地の敷地内へ入ろうとするとき、クロコは窓から巨大なステイアゴア台地を見ていた。

するとクロコはあることに気付いた。スティアゴア台地の端っこからなにか水しぶきのような白いもやが上がっている。

「おい、クレイド。あのもやはなんだ？」

クロコはもやを指さし、クレイドに聞く。

「ああ、ありゃあ多分アルティマイアの滝だ。グラウドで一番巨大で優雅な滝さ。ここに住んでいた貴族達がこよなく愛してたっつう話だ」

「へえ……」

クレイドが目を細めながら窓をのぞく。

「……、でもここからじゃあ、しぶきしか見えないな」

馬車は基地の敷地内に入ると間もなく停まった。
多くの兵士達と共にクロコも馬車から降りた。

敷地内で隊列を組む。

少し離れたところでベイトム隊長が出迎えに来たここの司令官らしき男に挨拶をしていた。ボサボサ頭の司令官だ

その後、クロコ達は基地内へと招かれた。

「前と違ってずいぶんのんびりしてるな……」

クロコは基地全体の様子を見ながら言った。基地の広間や上のテラスからは通りかかったここの軍人の何人かがこっちを見ている。

「前は戦闘中に行ったからな。今は事前情報で動いてるから、まだ戦闘は始まってねーんだ」

クレイドが横で言った。

「ふーん」

その時、クロコは基地を歩く一人に目がいく。若い女がテラスを歩いていた。その女が広間に集まるクロコ達の方に目を向けた。するとクロコと一瞬目が合う。

しかし女はすぐにクロコと顔をそらし、何事もなかったように再び前を見て歩き出した。

「……………」

クロコはその様子が少し気になり目で追っていた。

「おい、クロコ」

不意にクレイドの声が聞こえた。

「な、なんだよ」

「なに見てんだ？」

「いや……なにも」

兵士達はその後、いくつかの集団に分けられた。そしてこの基地の兵士の案内のもと、別々に基地の中を移動した。

クロコ達がいる集団は大部屋の一つに案内された。
クロコ達はどうかやら戦闘が始まるまでここの大部屋で待機するらしい。寝床もここのようなのだ。

「おいクレイド、いつ戦闘が始まるんだ？」

「そんなの敵に聞け、今回もあくまで防衛戦なんだ。敵が攻めてく
りゃ、こっちにも勝手に連絡がいく」

「くっそー！ 結局、またヒマじゃねーか」

「まあ、そう言っな。おそらくすぐさ。しっかり気を引き締めとけ
よ」

「チエツ、わかったよ」

数時間が経過した時だった。おもむろにクロコが立ち上がった。
それにクレイドが反応する。

「おい、クロコ。どうした？」

「ちょっと基地を歩いてくる」

「おい、勝手に動くなっって言ってただろ」

「問題ない。トイレのついでに基地で迷っただけだ」

「おまえな……」

「このままじゃヒマで死ぬ……」

そう言うところクロコはサツサツと歩いて大部屋を出ていってしまった。

一人取り残されるクレイド。

「クッソ、俺もついてきや良かった……」

およそ十分後、

「……………ホントに迷った」

日が暮れ、暗くなった基地の廊下でクロコは一人ポツンと立っていた。

（大部屋はどこだ？　　っというかココはどこだ？　どの辺だ？）

クロコは辺りを見回しながら歩いた。周りは暗くてほとんど見えないが、おそらくヒト一人いない。

すると暗い廊下に弱い光が差し込んでいるのが見えた。

見ると基地のベランダに通じるドアがあった。ドアは開け広げられ、そこから月明かりが漏れている。

開け広げられたドアの前に立つと、夜の温かい空気が体に当たる。ベランダには何者かが立っていた。石の手すりに寄り掛かり、夜のスティアゴア台地を一人で眺めている。女だった。クロコが基地に入った時に目が合った女だ。

「おい」

クロコはベランダに上がり、後ろから声をかけた。
女は無言で振り返る。

女は年齢十八、九ぐらい、きれいな体つきで、黄色いサラツとした長い髪をしている。顔立ちもきれいで、冷たい目つき、緑色の瞳をしている。目だけではなく全体的に冷たい雰囲気をもっている。

「……なんだ？」

冷たい目の女はアールスロウより静かな口調だった。クロコは特ににらまれていないのににらまれているような錯覚を覚えた。しかし構わずクロコは口を開く。

「道に迷っちゃってな。大部屋はどこかわかるか？」

「……………」

冷たい目の女は少し黙まると、スティアゴア台地に背を向けベランダから出ようとする。

「ついてこい」

女は静かにそう言った。

クロコはその女に黙ってついてゆく。

（なんだ、この支援員の女。無愛想なやつだな）

冷たい目つきの女は黙々と基地内の廊下を歩く。言葉は一言も発しない。クロコもなにもしゃべらず黙々と女についてゆく。

ずいぶん長く歩いた。どうやらクロコは大部屋から大分離れてしまっていたようだ。

二人はただ黙々と歩く。

そんな中、クロコは早足で歩き始め、女の横についた。

「アンタ、ここで働いてるんだよな」

「そうだ」

「……………」

「……………」

女は端的に答えると、またしばらく沈黙が続く。
すると今度は冷たい目の女の方が口を開く。

「おまえ、クロコ・ブレイリバーだろ」

「……………！」

クロコは自分の名を呼ばれて少し驚く。

「なんで知ってたんだよ」

「一度だけ聞いたことがある……『特例』で軍に入った剣士。……
二人目の『特例』」

「ふーん、意外と知られてるんだな」

「着いたぞ」

女はそう言っで足を止める。見るとすぐ手前に大部屋の入り口があった。

「大部屋はいくつかある。ここか？」

「ああ、多分ここだ。ありがとな」

「そうか」

女はそれだけ言っでパツと立ち去ろうとする。
クロコはそのまま女を見送ろうとするが……

（待てよ。どうせなら聞きたいこと聞いといった方がいいな）

「おい、待てよ！」

クロコが呼び止めると女はピタツと足を止め、振り向く。

「なんだ」

「えーと、そうだな。……………、戦闘っでいつ始まるんだ？」

「……………戦闘が近づけば勝手に耳に入る」

（クレイドと同じ答えかよ……………あっ！ そう言えば）

「おい…………、『戦乱の鷹』って知ってるか？」

女はそれを聞いて少し黙ったあと口を開いた。

「よく知ってる……」

「そいつって、どんなやつなんだ？」

「『戦乱の鷹』なんていうやつは、この基地にはいない」

「はっ……？」

「私の名は、ミリア・アルドレットだ。覚えておけ」

窓からもれた月光が一瞬、ミリア・アルドレットを照らした。黄色の髪がうすく輝く。

ミリアは静かに立ち去っていった。

クロコはそれをぼうぜんと見つめる。

（え……？　もしかして、あの女が……）

2 - 6 ケイルズヘル防衛戦開始

それは昼頃のことだった、ケイルズヘル基地の指令室に一人の兵士が飛び込んできた。

「ローズマン司令官！ 偵察隊から敵軍あり、との情報です！！」

「規模は？」

「お、およそ50000！！」

クロコ達の待機している大部屋にベイトム隊長が駆け込んできた。

「敵軍を確認した。戦闘準備だ！」

巨大なステイアゴア台地に寄り添う巨大基地。その石畳で覆われた広い敷地内で、兵士達が隊列を組む。60000近くの兵士が基地の敷地を埋め尽くしていた。

その中でクロコはそれを見渡しながらクレイドに近づく。

「すげえ数だな」

「ああ、俺もこんな数初めてだ」

「そういえば、敵軍ってどこにいるんだ？」

西には純白の町並み、東にはスティアゴア台地、北と南には乾いた大地が広がっている。クロコにはどこから敵が攻めてくるのか見当がつかなかった。

「よく考えてみるクロコ。国軍領は東だから、敵軍はあのスティアゴア台地の向かい側だ。ケイルズヘル基地っていうのはスティアゴア台地っていう巨大な盾を持った天然の要塞なんだよ」

「……じゃあ敵はどこから攻めてくんだよ」

「地図を見たんだがルートは二つあるな。一つはスティアゴア台地を回り込んで南側から攻めてくるルート。もう一つは回り込んで北側から攻めてくるルートなんだが……クロコ、アレを見る」

クレイドはスティアゴア台地北側の水しぶきを指さした。

「アルティマイアの滝が作る大河で北側のルートが閉ざされてる。だが、この大河の数km下流には巨大な石橋が設置されている。少し遠回りになるがそのルートでも攻めてくることができる」

「つまり、ルートはこの二つか。だけどクレイド、石橋の方をぶっ壊せばルートは一つに絞れるんじゃないか？」

「壊したら壊したでこつちも困るんだろ。それにかなり巨大な橋だ。あんなもん壊す予算があつたら軍備に回すだろ」

「ケチな話だな」

「解放軍は金に困ってるからな……」

ケイルズヘル基地内の指令室、そこに司令官と副司令、数人の軍人が待機している。

司令官は年齢三十代前半、白いぼさぼさの髪と面長な顔、ぶしゅヒゲを生やした長身の男だ。

「ローズマン司令官、敵軍が動き出しました！」

指令室に兵士が飛び込んでくる。

「どう動いてる？」

ボサボサ頭の司令官ローズマンは兵士に聞く。

「戦力を二つに分けています。北側の橋ルートに15000、南側の大地ルート5000です」

「なるほどな……」

ローズマン司令官が指令室の中央に置かれた正方形の机の前に立つと、他の軍人達もそれに応じて机を囲む。

ローズマン司令官は机上の地図に目を向けると、地図上のステイ

アゴア台地の東側を指さす。

「敵の本陣はスティアゴア台地の向かい側、向かい側つつても、情報によればかなり北寄りに配置されている」

ローズマン司令官の横に立つ副司令がそれを見てアゴをさする。
その副司令は年齢三十代前半、短い黄色い髪で、ほおが少しこけており、眼鏡をかけている。

眼鏡の副司令が口を開く。

「本陣の設置はかなり北寄り……ちょうど橋ルートでも大地ルートでも、ここと等距離になる位置取りですね」

「ああ、そうだマルチ。そして敵は隊を二つに分けこっちに攻めてきた」

眼鏡の副指令マルチは眼鏡を少し上げる。

「敵の現在の総戦力は約50000、数ならばこちらが上回っていますが……」

「まだ集結しきってないだけさ。まだまだ増えるぞ。今回の二ルートでの同時攻撃も、規模を考えると状況把握のためのジャブみたいなもんだ」

「どう出ますか？」

「こっちもしっかり答えてやろっじゃないか。橋ルートには12000、大地ルートに8000、総戦力はむこうと同じだ」

「どのような作戦で？」

「橋ルートには四番隊と援軍、大地ルートには一番隊と二番隊、それとミリアを行かせよう。まず大地ルートの敵を蹴散らす。そのあと橋ルートへ時間差で増援を送ろう」

「増援で大地ルートの兵も使うおつもりでしたら、大地ルートでは敵を少し引きつけた方が良いでしょうね」

「ん？ ああ、そうか、そうだな」

基地の敷地内でベイトム隊長が声を張り上げる。

「我が軍はケイルズヘル軍と共に北ルートにて敵軍を叩く！」

クロコはそれを聞いて目を鋭く光らす。

「さて、いよいよ始まりか」

クレイドも隣で目を光らす。

「ああ、そうだな……！」

その時、クロコの横をフツと人影が横切った。ミリアだ。黒い軍服も着て小型の剣を腰に差している。

「ミリア」

クロコが名を呼ぶとミリアはクロコの方を向き、無表情で口を開く。

「なんだ、おまえか」

「なんだとはなんだ！」

ミリアは黙ってクロコを少し見たあと口を開いた。

「動きを見る限り、おまえたち隊の目的は敵の足止めだ。私が南の大地ルートで敵を片付けてそっちに駆けつけるまで、しっかり時間を稼いでおけ」

ミリアはそれだけ言うとスッと立ち去った。

「あの……女……！！ 偉そうに！」

クロコは腹を立てている。

「ああ、おまえの言う通り、なんて偉そうなやつだ……！！」

隣で聞いてたクレイドも怒っていた。

それから間もなくクロコたちフルスロツク軍は、他の援軍とケイルズヘル軍と共に北の橋ルートへと進んだ。

ひび割れたか茶色い大地を12000の大軍が行進する。

クロコは周りを見渡す。周りには乾いた大地が広がり、近くには

大河が流れている。その大河に沿う形で軍全体は進んでいる。

「うわっ！」

突如クロコの足元が急に崩れ、片足が丸ごと地面に沈む。

「おい、大丈夫か？」

クレイドが片手でヒョイツとクロコを持ち上げた。

「な……なんだ？ 急に地面が沈んだぞ」

「気をつけるよ、特に足元に。ここは極端に水を吸い込みやすい土地なんだ。そのせいでそこら中が乾燥しきって、地面の所々が陥没するらしい」

「そ、そうなのか……」

「……で、地面に吸い込まれた水の一部はスティルゴア台地の上から吹き上がってるらしいんだ。不思議なモンだな」

「……クレイドにしてはやけに詳しいな。フロウじゃあるまいし、気持ち悪いぞ」

「ほっとけ！ ココに行きたいってやつがいたんだ。昔そいつに聞いたんだよ」

「ふーん」

しばらく進んだ時だった。解放軍は初めて足を止めた。

解放軍の目の前に大きな石橋が広がる。

その向かいに国旗を立てた巨大な青い軍服の大群が見えた。グラウド国軍だ。

巨大な石橋を挟んで向かい合う黒いセウスノール解放軍と青いグラウド国軍。国軍の方が少しだけ軍の規模が大きいように見えた。

しばらくの静寂が流れる。

パンッ！

国軍の方から銃声が響く。それと共に国軍部隊がかけ声と共に一気に石橋を駆けだす。

解放軍もそれに応じ動く。解放軍の部隊も一気に石橋を駆けだす。石橋の中央に向けて黒と青の集団が一気に押し寄せる。

解放軍の先頭、複数の剣兵隊と共にクロコとクレイドも駆けだす。国軍に向かって駆けながらクレイドがクロコに話しかける。

「おいクロコ。どうやらこっちの目的は足止めらしいぞ。どうする？」

「どうするだって？ 決まってるだろ」

クロコは眼を鋭くする。

「全員ぶつとばす……！！」

それを聞いてクレイドがニヤツと笑う。

「気が合うな……俺もそうしてやろうと思ってたんだ」

クレイドは並の数倍はある巨大な剣を構える。

「全員吹き飛ばす……！」

クロコも大型の剣を構える。

「全員切り伏せる……！」

次の瞬間二人の声が重なる。

「あの女が来る前にな……！」

二人は一気に前に飛び出し、先頭に立った。

2 - 7 黒き暗殺者たち

乾いた大地を流れる大河、その大河にかかる巨大な石橋。
大きな掛け声が響くなか、その石橋の中央で解放軍と国軍が互いにぶつかり合おうとしていた。

その解放軍の先頭に立って走るクロコとクレイド。
足の速いクロコがクレイドより少し先行する。

先頭のクロコと国軍の先頭の兵士が接触したその瞬間、

ヒュンッ！

国軍兵の体が吹き飛ぶ。クロコの剣は振り抜かれていた。
クレイドもそれに続く。

「おらあー！！」

ギュンッ！

クレイドが巨大な剣を高速で振り抜くと一度に三人もの兵士が宙を舞った。

クロコは目にも止まらぬ動きで、高速の斬撃を振りまわす。
国軍兵は次々と斬り伏せられる。

クレイドが剣を振るう毎に数人の国軍兵が宙を舞う。

国軍の陣形が中央から引きちぎられる。

その様子を少し後ろのベイトム隊長は冷や汗を流しながら見ていた。

「こいつらは、本当に……………えーい！ この機を逃すな！ 二人に続けー！！」

解放軍兵が敵陣の中央になだれ込む。

石橋は巨大とはいえ地上と比べ幅が限られる。そのため敵兵はクロコとクレイドを一気に取り囲むことができない。それをいいことに二人は石橋の真ん中で縦横無尽に暴れまわる。

「おおお……………」

ケイルズヘルの兵士達も二人の異様な勢いについ見入ってしまう。敵陣は中央から押し出される。端っこの国軍兵の一部が押し出され石橋から大河へと落ちてゆく。

パンパン！

敵軍から信号銃が放たれた。

「いったん引けー！！ 引くんだー」

国軍の指揮で隊が後退していく。

「逃がすなー！！ 追撃！」

解放軍の指揮官が叫ぶ。

「当たり前だろー!!」

クロコはさらに前に出ようとする。

「待てー!!」

クレイドの声でクロコは足を止める。

「クロコ、あんまり一人で出過ぎるな」

「ちえっ」

解放軍はクロコとクレイドを中心にして国軍に追い打ちをかけようとするが、国軍の一部が陸地から石橋に向け大砲を撃ちつけ足止めしてくる。その隙に石橋から国軍が下がっていく。解放軍はそれをなんとか追う。

国軍は陸地にある岩石帯まで下がると陣形を整える。十m近くある大きな丸形の岩石がそこら中に点在している。

追撃に失敗した解放軍は少し距離を置き、同様に陣形を整えた。

「いけーっ!! 突撃だー!!」

解放軍の指揮官が叫ぶ。

「ひるむな!! 向かい撃てー!!」

国軍の指揮官も叫ぶ。

二つの大群が再びぶつかる。

クロコとクレイドは先頭に立ち、再び剣を振るう。

「おい、クロコ、気をつけろよ！ この複雑な地形じゃあ、戦局が入り組むぞ」

「関係ねー！ さっきの橋よりさらに囲まれにくい！」

クロコとクレイドは陣形の中心となって、次々と国軍兵を斬り伏せる。再び国軍の陣形が左右に割かれる。

国軍の指揮官が叫ぶ。

「陣形を両翼に展開！ 地形を盾にしつつ解放軍を攻撃！！」

解放軍の陣形が左右に分かれ、囲むように展開する。

それに応じ解放軍の指揮官も叫ぶ。

「敵はこちらを挟み撃ちにする気だ！！ 後退しろ！ 後退しつつ陣形を両翼に展開！ 向かい撃てー！！」

両者の指示が飛び交う中、二つの軍の陣形は互いに複雑になっていく。気づけば、岩のすき間すき間に兵士が入り込み、乱戦状態になっていた。

しかしクロコは構わず目の前の敵を斬り伏せる。

「はあ……はあ……」

クロコの息が少し切れ始まる。

その時だった。軍服とは違う、黒い衣装に身を包んだ者がクロコの前に立ちはだかる。他の兵士達とは明らかに異質な雰囲気を持っている。

（なんだ、こいつは……？ いや、どこかで見たことある。そうだ、こいつは国軍のアサシンだ）

クロコがそう思ったその時、アサシンが一瞬でクロコの間合いに入る。

（……！！ 速い！）

ヒュンッ！

アサシンは大型のナイフで素早くクロコに斬りつける。クロコはそれに反応するが、避けきれず、肩をわずかに切り裂く。

「……このっ！」

クロコはアサシンの右を一瞬でつく。アサシンはそれに素早く反応するが、次の瞬間、クロコは左をついた。

ヒュンッ！

アサシンは反応し、後ろに跳びかわす。

「なにつ！」

アサシンはさらに距離を取り数本のナイフをクロコに向かって飛ばす。基地で戦ったアサシンのナイフよりもはるかに速い。しなるように飛びクロコを襲う。

「くっ！」

クロコは避けきれず、わずかに足を切り裂いた。

「このっ！！」

クロコは下がったアサシンに向け駆け出す。しかしアサシンは後ろに飛び、クロコと一定の距離を取る。そしてナイフを飛ばし攻撃してくる。

クロコは負けず、ナイフを紙一重で避けつつ何とか距離を詰めようと駆け寄る。

しかしタイミング悪くナイフを投げられ、なかなか近付けない。それでもクロコはあきらめず距離を縮めようと駆ける。

その様子に遠くにいたクレイドが気付いた。クレイドはすぐに状況を把握する。

「クロコー！ 深追いするなー！！ おびき出されてるぞー！！」

クレイドはクロコに向けて叫ぶ。しかし距離があり過ぎて無数の爆音でかき消される。

クレイドはすぐにクロコの方へ向かおうとするが、目の前に何重もの兵士の群れが立ちふさがる。

「クソ……！」

クロコはアサシンに向け突進する。しかしアサシンは岩場をピョンピョン飛び越えクロコの追撃をうまくかわす。クロコはそれにいらつきながらも冷静にアサシンのナイフを見切りながら追った。

（クソッ！　いつまで逃げ回る気だ）

クロコとアサシンは巨大な岩を飛び越え、乾いた大地を駆けた。その時だった。アサシンは急に動きを止め、大型ナイフをゆっくりと構える。クロコもそれを見て足を止める。

「やっとやる気になったな」

クロコがそう言った、その時だった。

スタツ……

ナイフを構えたアサシンの隣に全く同じ衣装を着たアサシンが現れた。

「……！！　おいおい二人かよ」

クロコは少し驚いた、その瞬間ハツとした。

クロコの周りを囲む無数の岩。

その巨大な岩に無数の黒い影が点々と見える。クロコはギョッとする。

その影一つひとつ全て同じ、黒い衣装に身を包んだ姿をしていた。

クロコはその人影、一つひとつに目をやる。

(一、二、三、四……………おいおい、二十ぐらいいるぞ……………)

まわりにはクロコとアサシン達以外、国軍兵の姿も、解放軍兵の姿も無い。その時初めてクロコは気づいた。はめれた、ここに誘い込まれた、と。

クロコのこめかみから嫌の汗がにじむ。

「もしかして全員おまえぐらい強いとかって……………ないよな……………」

クロコはナイフを構えるアサシンに向かって言った。アサシンは取り合わない。

岩場にいたアサシン達が次々と降りてゆき、クロコを囲むように近づいて来る。

さすがのクロコも寒気がした。

総勢二十以上のアサシンが十mほどの距離を取ってクロコをゆっくりと囲んだ。

一人のアサシンが手を挙げて、合図を送った。

次の瞬間、三人のアサシンが陣形を組み、クロコに突撃してくる。その三人が三人、先ほど戦ったアサシンと同じレベルのスピードを持っていた。

「……………！！」「冗談じゃねえぞ！！！」

クロコは剣を構える。

一人のアサシンが正面から斬りつけてくる。

ヒュンッ！

クロコはそれをかわすが、その途端、残り二人のアサシンが左右から挟む。

ヒュンヒュンッ！

一撃はかわした。しかしもう一撃が腹をわずかに切り裂く。

「くっ！」

クロコは高速の斬撃を無数に放つ。

ヒュンヒュンヒュンヒュン……！

アサシン達はその斬撃をかわしながらクロコの周りから散る。次の瞬間、間髪入れずに数十本のナイフがあらゆる方向から高速でクロコを襲う。

「クッソーッ！！」

クロコはそのナイフを、いくつかは避け、いくつかは剣で払いながら防ごうとする。しかし数本のナイフがクロコの体のあちこちを切り裂く。

クロコはわずかによろめく。その時だった、遅れて放たれた最後のナイフがクロコの心臓に向かって進んでくる。

「くっ！！」

間一髪でナイフを叩き落とした、次の瞬間だった、一人のアサシ

ンがクロコの背後をついていた。

「しまっ……!!」

アサシンの斬撃がクロコの首を切り裂くその瞬間、

ギョーンッ！

強烈な斬撃音と共にクレイドがクロコの横から現れる。
アサシンはそれをとっさにかわし、距離を取った。

「よう、クロコ。元気か？」

大地に立つ巨大な体。クレイドはクロコを見てニッと笑う。
クロコもそれを見て少し笑う。クロコの軍服はすでに無数の傷で
赤く染まっていた。

「見たとおりピンピンだ……」

「そりゃあ、なによりだ」

アサシン達は一定の距離を取り、二人の様子を見ている。予期し
ない来客に戸惑っているのだろうか。

二人は囲んでいるアサシン達を見る。

「おいクレイド、こいつら何モンだ。前に戦ったアサシンより……」

「格が違う、か？ こいつらはおそらく第一アサシン部隊だ」

「第一アサシン部隊？」

「六つあるアサシン部隊の中でも精鋭だけを集めた最強の部隊だ。全く情報がなかったあたり、さすがアサシンってトコだな」

「……で、正直、この状況はどうだ？」

「言うまでもなくメチャクチャ悪いだろ」

「まったく、どうぜならもっと味方を連れて来てくれりゃーいいのに」

「急いでたもんでな。おかげで間に合っただろ？」

「まあな」

クロコはニヤツと笑った。

クレイドはアサシン達を見渡したあとアサシン達の方角を見ながら口を開く。

「クロコ……おまえは俺の背中を守れ」

「ん……？」

「俺はおまえの背中を守る。少人数が多数と戦うときはこうするんだよ。背中を守れば囲まれる範囲が狭められる」

「なるほどな」

クロコはそう言って、クレイドに背中を向ける。それを見てクレイドが静かに口を開く。

「できるか？ 俺の背中を徹底的に守るんだぜ」

「やってやるよ。おまえの背中を徹底的に守る」

その言葉を聞いてクレイドはニヤツと笑い、大きな背中をクロコにつける。その背中にはクロコの倍以上はあるだろう。

背中越しにクレイドが話しかける。

「ならクロコ。おまえも俺のことを絶対に信じろ……！ 俺は死んでもこの背中を守る」

クロコはその言葉を聞いてニツと笑う。

「オツケー……わかったよ」

二人は背中をつけ、周りを囲むアサシン達をにらみつける。クロコが静かに口を開いた。

「いくぞ」

2 - 8 岩石帯の死闘

大砲の爆音が遠くで響く。

無数の丸い岩石に囲まれた大地で、クロコとクレイドは二十人はいるだろうアサシン達に囲まれていた。

クロコとクレイド、二人は背中を合わせ、剣を構える。

その様子をアサシン達は静かに見ている。

その中の一人に、他のアサシンとはどこかまとう雰囲気が違う者がいた。その者の鋭い目と黄色い瞳からは、暗く、危険な気迫が放たれている。

そのアサシンが静かに口を開く。

「何を見ている……構うな、とっとと二人を処理しろ」

その言葉の直後、二人を囲んでいたアサシン達が動き出す。

アサシン達は四人の陣形を二つ作った。

その二つの陣形がクロコとクレイドを挟み込みように突進してくる。

クロコの正面、クレイドの正面にそれぞれ四人ずつだ。

クロコ側のアサシンの一人がナイフを飛ばす、クロコはそれを素早い斬撃ではじきとばすが、その隙に残りの三人が間合いに入る。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！

アサシン達の無数の斬撃、クロコの体が数か所切り裂かれる。し

かしクロコはアサシンの一人に狙いをつけた。

ヒュンッ！

クロコの斬撃がアサシンの一人をとらえる。

アサシンの体はわずかに切り裂かれ、それに驚き距離を取る。

襲ってくる斬撃が少なくなった隙に、さらにもう一人に狙いをつけ高速の斬撃を無数に放つ。

斬撃の一つはアサシンの足をわずかに切り裂いた。

一方クレイドの方にもアサシン達が襲いかかる。四人のアサシン達が一気に突っ込んでくる。

クレイドの眼はアサシン達の陣形が一本に並ぶ直線を見極めた。

そしてそれをなぞるように、勢いよく剣を振るう。

ギュンッ！

その斬撃をアサシン達は避けるが、あまりの速さに驚き陣形を崩す。クレイドは特に動きを崩したアサシンに狙いをつけた。放たれていた斬撃の軌道が一瞬で切り替わる。

ギュンッ！

クレイドの一瞬の切り返し。アサシンの一人が血しぶきを上げて宙を舞う。

しかし他のアサシン達はひるまなかった、クレイドに向けナイフを飛ばす。

「ちっ………！」

クレイドは剣でナイフをはじくが、一本が脇腹をわずかに切り裂く。

「おいクロコ、動くぞ！！ 敵は飛び道具を使う！ 止まってると危険だ！！」

クレイドの掛け声と共に二人は背中を合わせたまま駆け出す。その二人をアサシン達が追う。

クロコとクレイドはうまく呼吸を合わせ走り、追ってくるアサシン達に囲まれるのを避ける。

それでもアサシン達は囲むことはできないまでも、陣形を組み二人に追い打ちをかける。

ヒュンヒュンヒュンヒュン……ッ！

無数の斬撃がクロコとクレイドを襲う。その斬撃の嵐の中、クロコの真紅の瞳はしっかりとアサシンの一人を見ていた。

クロコの斬撃がアサシンの一人に向け放たれる。それは素早く避けられる。

今度はアサシンの斬撃、クロコはそれを見切り、紙一重でかわすとすぐさま斬撃を返す。

ヒュンッ！

クロコの高速の斬撃。しかしアサシンはそれをギリギリでかわした。その直後、クロコの蹴りがアサシンをとらえた。アサシンの動きが止まった次の瞬間、

ヒュンッ！

クロコの斬撃がアサシンを切り裂いた。アサシンは力無く後ろに倒れ込む。

ギョーンッ！

クレイドの斬撃も別のアサシンをとらえていた。アサシンの体が宙を舞う。

二人のアサシンがほぼ同時にやられた。そのことに驚き、アサシン達は少し距離をとる。

それを見てクロコとクレイドは足を止めた。互いに距離を置きつつにらみ合う。

「はあ……はあ……」

クロコは少し呼吸を乱していた。体からは血が流れ落ちる

「大丈夫か」

「当たり前だ！」

クロコはそう言って歯を食いしばる。

（傷を負いすぎた……そのくせ動きまくったせいで血が……足元がフラフラしてきやがった）

アサシン達の集団、その少し後ろに立っている黄色い瞳のアサシ

ンが周りのアサシン達に手で指示を出す。

指示が終わるとアサシン達は距離をとりつつ、動き出す。

足を止めた二人を再びゆっくりと取り囲んだ。

その直後、再び攻めてきた。

クレイドの方に向け三人が陣形を組んで突進してくる。そしてクロコの方には、たった一人が単独で突撃してくる。

クロコはその光景に一瞬驚くが、すぐに冷静に剣を構える。

単独で突撃してくるアサシン、その目からは黄色い瞳が光る。

黄色い瞳のアサシンは高速の斬撃を放つ。クロコは素早く避けて斬撃を返すが、それは難なくかわされる。

その動きにクロコは驚く。

（こいつ……！ このアサシンの中でもさらに動きが違う！）

二人の間を斬撃が無数に飛び交う。

クロコとアサシンの高速の攻防が繰り広げられる。

アサシンの斬撃の数撃がクロコをとらえ、クロコの体が切り裂かれる。

「ぐッ……！」

足元がわずかふらついたが、すぐに踏んばり直す。

「いの……！」

クロコは大振りの斬撃を放った。

ヒュンッ！

その直後、それを合図にしたかのようにアサシンが距離を取る。

次の瞬間、他のアサシン達の無数のナイフがクロコに向け放たれた。大振りの斬撃を放ったせいでクロコの反応がわずかに遅れる。飛んでくるナイフがクロコの体の所々を切り裂く。それでもクロコは紙一重で急所を守る。

その時だった。クロコの目の前を一本のナイフが横切る。そのナイフはそのままクレイドの背中へと向かおうとしていた。

「クッソッ!!」

クロコはとつさに剣を振りナイフを叩き落とす。その瞬間、黄色い瞳のアサシンがクロコの懐へ飛び込んだ。

ヒュンッ!

クロコは間一髪で避けるが体勢を大きく崩した。そのクロコに向けそのアサシンの蹴りが飛ぶ。クロコの体は飛ばされ、クレイドと距離が一気に離れた。

他のアサシンの相手をしていたクレイド、少し遅れてその状況に気付く。

「クロコッ!!」

クレイドの叫びの直後、狙いすましたように無数のナイフが二人を切り離すように間へ飛んで来る。

クロコとクレイドは分断された。

さらに狙いすましたように体勢を崩したクロコを囲む形で、三人のアサシンが飛びかかる。クロコは崩した体勢を何とか立て直そうとする。

しかし間に合わない。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！

その瞬間、クロコの目の前を無数の斬撃が飛び交った。クロコに向けてではなく、アサシン達に向けて。

直後、三つの血しぶきが飛び、三人のアサシンの体が宙を舞った。力無く地面に落ちる三人のアサシン。

崩れたクロコの目の前には……

ミリア・アルドレットの姿があった。

大地に立つミリア、その黄色い長い髪が風に流れる。冷たい瞳は静かに、しかし射抜くようにアサシンの群れを見つめている。

黄色い瞳のアサシンがミリアをにらむ。

「ミリア・アルドレット……『戦乱の鷹』か」

危機を逃れたクロコはミリアの背中をぼうぜんと見る。

「ミリア……」

ミリアは何も言わず、ただアサシン達を見つめる。

黄色い瞳のアサシンが静かに声を発する。

「構うな……三人まとめて処理しろ」

その言葉と共にミリアの近くにいたアサシン四人が、陣形を組んでミリアに向かって襲いかかる。ミリアは動かず、アサシン達を冷たい瞳で見ている。その直後、クロコの視界からミリアの姿が消えた。

一瞬だった、ミリアの体が四人のアサシン達を横切った。四つの血しぶきが宙に舞い散り、四人のアサシン達の体勢がゆっくりと崩れていく、そして力無く倒れた。

残りのアサシン達はあまりの驚きで固まった。

遠くで見ていたクレイドもその光景を信じられない、という様子で見える。

「おいおいおい、なんだありやあ……！」

クロコも驚く、声も出ない。

アサシン達の視線はミリア一人にくぎ付けになっている。

再びミリアの姿が消える。

次の瞬間、ミリアの近くにいたアサシンの一人の体が切り裂かれ、ミリアが姿を現す。

地面に伏すアサシン。

黄色い瞳のアサシンは覆面の裏からギリッと歯が鳴らした。そして丸い球を宙に放った。

パンッ！

弾は強い光を放って宙ではじけると、それを合図に全てのアサシン達が四方八方にクモの子を散らすようにその場から離れる。

ミリアはそれを黙って見ていた。

クロコはただ、ぼうぜんとしていた。

間もなくアサシンの姿は辺りから消えた。

風が静かに大地の土を巻きあげる。

クレイドがゆっくりとクロコに近づく。

「大丈夫か……？」

その言葉を放ったクレイドの体は傷だらけだった。クロコもまたクレイド以上に傷だらけになっていた。

ミリアもゆつくりとクロコに近づく。
その時だった。

パンパンパンッ！

遠くで、空に向け放たれる銃声がした。撤退の合図だ。

ミリアはその方向を見て静かに口を開く。

「あの信号銃の音は、国軍のものだ……こちらの増援も着いた。あ
ちのケリもついたようだな」

ミリアはそう言ったあと、クロコの方を見た。そして一言言い放
つ。

「足止めご苦労……」

ミリアは無表情でそれだけ言うとスタスタとクロコの前から立ち
去った。

ぼうぜんとしていたクロコの胸の中から遅れて悔しさがわき上が
る。

（クッソォー……！！！！）

2 - 9 敵軍主戦力

石橋から岩石帯へと移った戦闘は、国軍の一時撤退という形で終わりを告げた。それによりこの日の戦闘は終了した。

クロコとクレイドは基地内の治療室で傷の手当てを受けた。所々が切られたため、クロコもクレイドも体中包帯だらけにされた。

夕暮れ、廊下を歩くクロコとクレイド。

クロコが悔しそうに廊下の壁を叩く。

「くっそ!!」

「おいおい、興奮するなよ。傷が開くぞ」

「深い傷はねー……あつたとしてもこのまま引き下がるか！ あんなやつにデカイ面されて！」

「引き下がらなきゃ、アレに勝てんのかよ」

「勝てる勝てないの問題じゃねーんだよ！ クッソ!!」

クロコは悔しそうに歯を食いしばる。逆にクレイドは冷静だ。

「とりあえず広間に戻るぞ。まだ戦闘は終わってねーんだ。明日もあることだしな」

「ちょっと夜風に当たる……」

「おいおい、基地をウロウロするなって言ってるんだろ。また迷うぞ」

「……このまま戻ったらおまえに当たり散らすぞ」

「つたく、勝手にしろ」

クレイドはそう言ってクロコの前から立ち去った。

クロコはその後、基地をウロウロする。

しばらく歩くと基地のベランダを見つけたので、そこへ出た。

外は暗くなっていた。

冷たい夜風を浴びるクロコ。黒い髪が風に揺れる。

昨日の景色とは違う。今度はケイルズヘルの町の景色が広がっていた。

純白だった景色は闇に沈んでいる。明かりはなく、人の気配もない。住民は避難場所に隠れているのだ。この基地にも住民の一部が避難している。

「よっ！」

クロコの後ろで突然声がした。

クロコは振り返る。見ると、ぶしょうヒゲを生やした、ばさばさ頭の男が立っていた。

（どっかで見たことある……確か、この基地の司令官）

「何の用だ？」

クロコは無愛想に言った。

「おいおい、冷たいねー。オレのこと知ってるか？　ここの司令官
ライム・ローズマンだ」

「ああ、ここに着いたとき見た」

「ハハハ、そうか。おまえはクロコ・ブレイリバー、ミリアに次ぐ
『特例』だろ？」

「『特例』にされる覚えはないけどな」

「なーるほどな。ハハハ、おまえの話はガルディアに聞いたぜ、手
紙でだけど。あいつとオレは一応戦友だからな」

「へえー……」

「興味なさそうだなあ……おまえのためにケイルズヘル中の教会捜
索したんだぞ」

「ああ、そうか、悪いな」

「まっ、オレは命令しただけだけど」

ローズマンは笑った。

「ついでに神具は見つからなかった」

「そうか、そんな気がした」

クロコは無愛想だった。

「なんかいちいちつれねーやつだな。じゃあ、あいつのことなら興味あるだろ、『戦乱の鷹』ミリア・アルドレット」

その名を聞いてクロコは眼を鋭くする。

「おっ！ 興味を持ったか！ すごいだろ。うちのエースは」

「気に食わないやつだけだな」

「ハハハ、そう言っなよ。口数が少ないからよく勘違いされるけど、悪い奴じゃないさ」

「ホントかよ」

「まあ、あいつがすごいって言うのは認める他ないだろ」

「……………」

クロコは黙る。

ローズマンは町の景色を眺めながら、ゆっくりと口を開く。

「あいつが解放軍に来たのは八歳の時だ。戦争孤児でな、兄妹で、兄貴といっしょにここに来た。兄貴はその当時十六歳。兄貴は入軍試験に合格して、解放軍の兵士になったんだ。ここは下の者には懐が深いからな……ミリアは最初、ただの支援員だった。本当にかわいい支援員だったよ」

「ふーん、それがなんでいま兵士なんだよ」

「兄貴が戦死したからだな。兄貴が死んだ後、あいつは十歳で剣を

とった。すごいセンスだったよ。見る見るうちに上達してな。それでも女って理由で入軍はできなかった。だがな、あいつが十二歳の時、ここの軍の当時のエースを倒しちまってな……そりゃ、認めるしかねえさ」

クロコは石の手すりに寄り掛かって黙ってその話を聞いていた。
ローズマンはクロコを見て話を続ける。

「おまえも女の体で戦うんだったら、ちょっとは参考になるんじゃないか？ 女でも最強になれるんだぜ？ まあ、あいつの場合、性別が女だけで種族は化け物だけだな。ハハハ……っと、そろそろ司令室に戻らないと」

ローズマン司令官はそう言うのとクロコに背を向けて立ち去ろうとする。そして去り際に一言しゃべる。

「そんな化け物に負けた元エースは、司令官の座に収まるしかねーってな。そんじゃあな」

ローズマン司令官は立ち去った。

クロコはまた独りベランダに立ち尽くす。

「化け物……か」

その翌日の朝、再び国軍は動き出した。しかしクロコとクレイド

には傷のこともあり出撃命令は出されなかった。

その後の三日間、クロコとクレイドは基地の大部屋で待機し続けた。

「クッソ！！　こんなトコでいつまで待機してりゃあいいんだ！！」

四日目の昼頃、クロコはあからさまに不機嫌な声を出した。

「そう言っなよ。出番がありゃあ嫌でも呼ばれる。初日にあんだけ暴れたんだ」

一方、クロコ達のいるケイルズヘル基地から少し西に離れた地、解放軍リサイド基地。ここはケイルズヘル基地の後ろ備えに位置する基地だ。

その基地の上階の窓の前に一人の男が立っていた。大きな体に、少し逆立った黒髪。グレイ・ガルディアが乾いた大地を眺めている。

「どうしたかね。ガルディア司令官」

リサイド基地の司令官オルモアが話しかける。オルモアは四十代半のかつぶくの良い赤髪の大男だ。丸い目でガルディアを見つめている。

ガルディアはオルモアを見てほえむ。

「いえね……今頃あっちじゃあ、すごい戦いをしているんだろうな
って思いましたね」

「そりゃあ、そうだろうな。数万人規模の大戦争だ。君の基地から
も援軍が出てるんじゃないかね」

「でしょうね」

「もしあそこが落ちたら次は我が基地の兵が戦わなければいけない」

「そのためにオレが呼ばれたんでしょう？」

「だろうな。付け焼刃でもないよりはマシ。上はそう考えて君を訓
練官としてよこした」

「……勝てるでしょうかね。この戦い」

「勝てる、と言いたところだが、あの規模の戦争だ。なにが起こ
るかわからん」

「なにが起こるかわからない……そうですね。戦いとは正にそっ
うものだ」

ガルディアはまた窓の方に目をやる。

茶色い地面と岩石が広がる大地、遠くにはスティアゴア台地から
流れ出る大河がわずかに見えた。

クロコ達が基地に着いて五日目の朝、指令室ではローズマン司令官とマルトフ副指令、それと隊長数人で作戦会議が開かれていた。その時、突然指令室のドアが開かれた。クロコとクレイドが指令室の中へと入って来る。

「な、なんだ、おまえらは!!」

隊長の一人が反応して怒鳴った。

「おい、オレ達は呼ばれてきたんだぞ」

クロコは不機嫌な声を出した。

「わりーわりー、言ってなかったな。オレが呼んだんだ」

ローズマンが笑いながら言った。

「し、司令官が……」

「で、なんの用だよ。いきなり呼び出して」

「ああ、せっかくだから作戦会議に参加してもらおうと思ってな」

「ローズマン司令官！ なぜ一般兵を……」

「彼らはウォーズレイ防衛戦のときにアレを経験している。もしかしたら有意義な意見がもらえるかもしれないと思ってな。まあいいじゃないか。いて損はなし！ ってな」

クロコとクレイドが加わって作戦会議が行われた。ローズマンは地図を指さしながら話を始める。

「まずここ四日の戦い。結果はこっちが少しだけ押し気味だ。こっちの被害は30000、あっちの被害は推定35000。だが現在の総戦力はこっちが40000向こうは45000……敵は完全に戦力を整えた」

「しかし、勢いはこちらにあります」

マルトフ副司令が言った。ローズマンはマルトフを見る。

「そりゃあ、どうかな。敵はいままで、比較的平凡な手を打ち続けた。そのおかげでこっちは楽できたが」

「それはこちらの方が上手だったというだけでは？」

「平凡過ぎんだよ、ワザとらしいぐらいにな……そしてタイミング的に敵はそろそろ動き出す」

ローズマンは指で地図をトントンと叩く、敵の本陣がある辺りだ。

「今までの四日間、敵はほとんど主戦力を使ってない。初日こそ第一アサシン隊を動かしたが、それで降全く出さねー。そして一番問題なのは……」

ローズマンの顔が険しくなる。

「グラン・マルキノだ」

それを聞いてクロコとクレイドがピクッと反応する。
クロコが口を開く。

「それでオレ達が……」

「まあ、そういうことだな。グラン・マルキノの投入はウォーズレイ防衛戦が初めて。アレを知ってるやつが少ないんだ。おまえらは経験してるんだろ？」

それを聞いてクロコが眉を寄せる。

「経験もなにも、忘れようたって忘れられねーよ」

「それでな、問題はさらにあるんだ」

「……？」

「今回はな……三台あるんだよ……グラン・マルキノが」

「……………」

クロコは一瞬何を言っているのか分からなかった。そして遅れて声が出る。

「……はあっ!？」

ローズマンは冷静な態度で話を続ける。

「厄介だろ？　しかもまだ一度も投入してきてない。まだ三台とも

ピカピカだ……だが」

ローズマンは指でもう一度敵陣の辺りをトンと叩く。

「そろそろ……だろ」

クレイドがその状況にあきれている。

「アレとまた向かい合うのかよ。しかも三台……」

ローズマンは手で机を軽く叩いた。

「さて、話を戻そう。で、敵がこのグラン・マルキノをどう投入してくるかが問題だ。で、敵が打ちそうな手は、敵陣を三つに分けて進軍、それぞれにグラン・マルキノを配置。その陣のどれかに主戦力を集中させ……突破を狙う。グラン・マルキノで基地に一発でもぶち込めば決着がつくからな。こちらに的を絞らせない一点突破。グラン・マルキノの特性も十分に発揮できる。手とすればこれが盤石だ」

隣でマルトフが口を開く。

「私はそれで良いと思います。それを見越して作戦を立てれば……」

「さて、どうかな。今までの戦い、こちらが上手だったのか、そう思わされていただけだったのか……」

ケイルズヘル基地からスティアゴア台地を挟んだ形に位置する敵の本陣。

茶色の乾いた大地に三つの巨大な金属の山がそびえている。鎧を着た屋敷のような巨大な胴体に、四輪の巨大車輪が鋼鉄板の下からのぞいている。さらに前方には塔のように巨大な黒い砲身が伸びている。

三台のグラン・マルキノがたたずむ解放軍本陣、その中央付近に大型テント張られている。

そのテント内のテーブルに一人の軍人が座っている。

その軍人は年齢三十代半ば、黄色の髪で、上にとがった特徴的な髪形をしており、細い目と高い鼻をしている。どこか高貴な雰囲気を持っている。着ている軍服が他の国軍人とは違い白い軍服、将軍服だ。

とがった髪形の将軍は机の上に置かれた紅茶をひとくち味わったあと、口を開く。

「準備はほぼ整ったな」

将軍の向かいに座る大柄の副官がそれを聞いてうなずく。

「はい、あとはあの男の到着を待つだけです。ロイスバード少将」

とがった髪形の将軍ロイスバードがゆっくりとうなずく。

「ふむ」

「本当に来るのかよ。その男」

テントの奥から声が聞こえた。暗いテントの奥で一人イスに座る

人影が見える。暗いため姿がはっきり見えない。

「口をつつしまんか、將軍の前だぞ！」

大柄の副官が怒鳴った。

「ハッハッハッハッ」

人影はその副官をバカにしたように笑い飛ばした。

突然テントの入り口が開かれ、誰かが入ってくる。

黒服に黒い覆面をした男が入ってきた。眼は鋭く、黄色い瞳が光る。

「なんの用だ……」

黄色い瞳のアサシンは不愛想な口調だ。

それを見てロイスバード少将はニコリと笑う。

「アサシン軍、総督ラギド。あなたを呼んだのは他でもない。今回の作戦で私の指揮下に入っていただきたいのです」

「入る必要はない。我々は、我々の判断で動く」

黄色い瞳のアサシン、ラギドはそう言い放った。
その言葉を聞き大柄の副官が鼻息をたてる。

「きさま！ 少将の前で……！」

「我々アサシン軍は皇族直属の部隊だ。国軍とは別の組織……今回

もブルテン皇帝からの勅命がなければ協力などしなかった。よって
きさまらの指揮下に入る理由はない」

「しかし今回の作戦はあなた方の力があればとても助かるのです。
我々の目的は共に勝利をあげること……、どうですか、互いの勝利
のために協力してはいただけませんか？」

「断る。我々是我々の判断で動く。話がこれだけなら私は出てゆく」
ラギドはそう言つてテントからサツと出て行つてしまった。

「まったくいつもこいつも少将の前で無礼な奴ばかり！」

副官は不機嫌に声を上げた。

「まあ、そう言つな。別に作戦に大きな支障はない」

「だいたいあの男はいつ到着するんだ！」

「到着時間が大幅にずれているわけではないんだ。落ちついたまえ」

その時、テントの入り口付近から声がする。

「失礼してもよろしいでしょうか？」

ロイスバードがそれに答える。

「ああ、入りましたえ」

テントの入り口が再び開かれた。

そしてゆつくりとした足どりで一人の軍人が入ってくる。
白い髪の少年だ。

その少年を見た途端、ロイスバード少将はニヤツと笑う。

「来たか」

少年は厚い眼鏡をグイッと上げるとピシッと敬礼をした。

「スコア・フィードウッド。ただいま到着しました」

敬礼するスコアを見てロイスバードはほえんだ。

「よく来てくれた『瞬神の騎士の再来』スコア・フィードウッド。
君には期待しているよ」

「はっ、期待に応えられるよう全力を尽くします!」

「ハッハッハッハッハッ」

奥から突然笑い声がした。

スコアがその方向、テントの奥を見ると、暗い場所で座っていた人影が立ち上がる。影はゆつくりと明るい方へと歩き出す。そして光に照らされ、その男の姿がゆつくりと浮かび上がる。

その男は年齢十七、八、少し乱れた長めの灰色の髪、鋭い目には赤い瞳が光る。落ちついた顔立ちをしているが、どこか危険な雰囲気漂わせている。

「おまえがスコア・フィードウッドか……なんだか大した事なさそうだな」

灰色の髪の方はスコアの顔を見てニヤツと笑った。

「……………あなたは？」

「オレ？ オレか、オレはレイデル・グロウス……………よろしくな。スコア・フィードウッド」

「よ、よろしく、きみがレイデル・グロウス……………」

大柄の副官がスコアの方を見て口を開く。

「知っているだろう。レイデル・グロウス……………『消剣の騎士』の異名を持つ男だ」

ロイスバード少将はスコアとレイデルの二人を黙って見つめる。

（そう、レイデル・グロウス、わずか半年で、国軍内で名を上げ『消剣の騎士』の異名を得た男。その才能はスコアにも匹敵すると言われている。スコアとレイデル、この二人がいれば……………）

レイデルはスコアに近づくと肩をポンツと叩く。

「まあ、お互いに楽しもうじゃないか……………この戦いをな」

レイデルはそう言ってニヤリと笑うとテントの出口から外へ出ていった。

それを見て大柄の副官はまた怒りだす。

「全くどいつもこいつも……………！ 少将に挨拶もせず外へ出ていき

おつて。まともなのは君ぐらいだ」

「ハ、ハハハ、そうでしょうかね。それではボクも失礼いたします」

ロイスバードはスコアの方を見てニツコリ笑う。

「ああ、戦闘はすぐに始まる。しっかりと備えてくれ」

スコアが外へ出ようとしたその時、

「うわあっ！」

スコアは何もない所で勢いよくコケる。足をイスにぶつけ、勢いよくイスを飛ばす。飛んだイスは副官の顔面に直撃した。

「わっわっ、す、すいませんー!!」

スコアはアワアワしながら謝る。

「くっ……！ぬぬぬぬ……！本当にロクな奴がおらん!!」

その様子をロイスバードはティーカップを口につけながら眺めていた。

（これで完全に準備は整った。やっと動き出せるな……）

テントから出たスコアはゆっくりと厚い眼鏡をはずし、空を見上げる。

深い青い瞳が浮かぶスコアの眼、その眼が氷のように冷たく鋭く
光る。

「今度は守る、守って見せる。必ず」

2 - 10 国軍の狙い

茶色の岩肌に包まれたステイアゴア台地と、巨大な屋敷が連なる純白の町並みに挟まれたケイルズヘル基地。

ここの指令室に一人の兵が飛び込んでくる。

「敵陣、動き出しました」

その報告を聞いて、イスにもたれかかっていたメンバーがガバツと起きる。ローズマンが兵士の方を見る。

「来やがったな……規模は？」

「およそ40000！」

「ほぼ全戦力だ……！ 陣形は？」

「南の台地を回り込むルートを、一つに固まって前進してきています」

「一つに固まって……！？ グラン・マルキノは！？」

「それも三台とも一つに固まっています」

それを聞いた途端ローズマンはボサボサ頭をかきむしる。

「きたよ！　きたきた！　意味のわからん手が！　なにが狙いかさっぱり分からねー！！」

ローズマンがテーブルの前に立つと他のメンバーもそれを囲む。

「相手は戦力を固めてきやがった。だがとてもじゃないが賢い攻め方じゃねー。なにか狙いがあるんだ！」

隣でマルトフ副司令が口を開く。

「その狙いがわからなければ非常に危険では……？」

「んなこと分かってるよ！！　だからおまえも頭絞って考えろ！！」

「ハ、ハッ！」

「クソ！　時間がねー……」

基地の幹部達は真剣な表情で考え込む。
隊長が口を開く。

「ただの総力戦が望みでは？」

「んなわけねーだろー！！」

「橋のルートに別部隊が……」

「んなモンあればすぐ分かるー！！」

「途中で展開するのでは？」

「グラン・マルキノの速度じゃあ無理だ！　だったら初めから展開してる！」

幹部たちは頭を抱える。

その後ろからクロコがヒョコツと顔を出す。
それにマルトフ副司令がすぐに反応する。

「きみ！！　まだいたのか！　すぐに戦闘が始まる！　早く持ち場に戻りたまえ！！」

追い詰められているせいか不機嫌だ。

「うるせーな。狙いが読めなきゃ危ないんだろ」

クロコは地図を見ながら考える。

（このパターン……どっかで見たことあるような。どこで……そうか！）

「奇襲だ」

クロコが口を開く。それにローズマンが反応する。

「奇襲？」

「たぶんグラン・マルキノを固めてるのは、かく乱もあるんだろーが、それ以上にこつちを引きつけることにあるんだ。そして引きつけて別部隊で奇襲だ」

「だがどこから……」

クロコは地図をジーツと見る。しばらく考えると指を動かし、ある場所をさす。

「ここだ」

クロコは地図上のスティアゴア台地をさした。

「ここを直進すれば基地を奇襲できる」

それを見てマルトフ副司令が反論する。

「バカな！　こんな所を大部隊で移動できるものか……！」

それを聞きローズマンが口を開く。

「いや、足の利くやつを選抜すれば不可能じゃない。ありえない場所を抜けるからこそ奇襲になるんだ」

ローズマンは地図上のスティアゴア台地を指でなぞる。

「スティアゴア台地を回り込む際に、部隊の一部を分断させスティアゴア台地に向かわせる。そうすればこちらの偵察隊の目もこまかせる」

それを聞いてマルトフ副指令も少し納得したようだ。

「……もしそうならば、どう対応いたしますか？」

「奇襲の可能性がある以上、基地にある程度の戦力を残さないといけない。基地に6000ほど戦力を残す。そしてミアも待機させ基地を守らす。あとの戦力はガチで総力戦だ」

「なら奇襲部隊が南に進路変更して主力部隊を挟み込んでくる可能性もありますね」

「ああ、そうか。それじゃあ北からの奇襲も警戒しなきゃな。よしっ！！ 作戦がまとまってきたぞ！ クロコ、ありがとな、助かったぜ！」

「当然だろ」

クロコは得意げだ。

「だが早く持ち場に戻れ。すぐ始まるぞ」

「チエツ、わかったよ……クレイド！ 行くぞ」

「んっ！？ もういいのか？」

クレイドはまだイスにもたれかかっていた。

敵軍司令官テント、ロイスバードは一人紅茶を飲みながらテーブルに広げられた地図を眺めていた。

（我々の作戦、別部隊による奇襲。しかし、敵がこれを読もうと読

むまいと関係ない。仮に読まれたとしても、敵に奇襲を警戒させ、その陣形を拘束させることができる。敵に下手な手を打たせず総力戦に持ち込める。それさえ出来れば……」

「こちらに負けは、無い」

2 - 1 1 乾いた大地の総力戦

ケイルズヘル基地の石畳の広場に35000人の兵士が大きく広がり隊列を組む。

「クロコ」

クレイドがクロコを呼びながら近づいてくる。

「んっ？」

「受け取れ」

クレイドが時限式の爆弾を差し出す。

「グラン・マルキノ用か。全員持つのか？」

クロコは爆弾を受け取る。

「いや、主要な兵士だけだ。俺達もここに認められたってことだな」

「ってことはオレ達の目的はグラン・マルキノの破壊か？」

「いや、そうじゃない。いざって時は、って意味だろ」

「ふーん」

35000の大軍は基地をあとにし、乾いた大地をステイアゴア台地に沿って前進する。

クロコ達が歩く地面は北側のルートを歩いた時よりもさらに乾燥し、所々に大きな亀裂が走っていた。ときどき周りの兵士が足を沈ませ、騒ぐ声が聞こえる。

それらの声を聞いてクロコが口を開く。

「なあ、クレイド。アレにグラン・マルキノがハマるってことはねーのか？」

「さあな、だがハマるんだったらここまで来てねーだろ。あんなでかい車輪がハマるような空洞はさすがにねーんじゃねえか？」

「ま、言われてみればそうか。今回の戦いの障害はそのグラン・マルキノに……あとアサシン軍団か」

「そっちは多分心配ないだろ」

「どういうことだ……？」

「ステイアゴア台地の奇襲部隊は足が利くやつって言っただろ。つまり……」

「なるほどな、アサシン達は奇襲部隊の方が」

「そついうことだ。今回、俺達が相手をする必要はないってことだ」

「ミリアのやつに取られるのは悔しいけどな」

「まあ、そう言っな。競争じゃねーんだ。俺達は俺達の仕事をすりゃーいいんだよ」

軍はさらに進行する。後方にあつた基地の影は消え、ステイアゴア台地の南端まで進んだ。

その時だった。前方……遠くからうつすらと影が見えてきた。敵軍の影ではない。巨大な建物のような影が三つ、ゆっくりと近づいてくるのが見える。

クレイドの顔がこわばる。

「よう、クロコ……あの影覚えてるか？」

「バカヤロウ、忘れるわけねーだろ……」

影は次第にはっきりとしていき、巨大なグラン・マルキノが三台、姿を現した。

遅れてそれら前に横長に隊列を組む敵軍が見えてくる。

敵軍は足を止めることなくどんどん前進してくる。

それを見て解放軍の指揮官が命令を出す。

「両翼に展開！」

解放軍は横長の陣形へと移る。兵士達は素早くそれぞれの武器を構えた。

国軍と解放軍、二つの軍勢が一定の距離まで近づいた。その時、解放軍の指揮官が叫んだ。

「突撃ー！！！」

その号令と共に解放軍兵が一気に駆け出す。それに応じ国軍兵も駆け出す。

乾いた大地の上に大きく広がった数万の軍勢同士が、うねりをあげながら互いにぶつかり合おうとする。

「行くぞ！！ クレイド！」

「おう！！」

クロコとクレイドも剣を構えて駆け出す。

二人は先頭を走る。

二人が地面を蹴ると、乾燥した地面が勢いよく飛び散る。

二人の視線の先、国軍とグラン・マルキノがどんどん近付いてくる。

グラン・マルキノの鋼鉄の胴体のはつきり確認できるまでになると、二人の脳裏に過去の恐怖がわずかによぎった。それでも二人は脚の力を緩めず大地を駆ける。

数えきれないほどの敵兵が視界を覆い始める。

二人はついに国軍の先頭とぶつかる。

クロコは足を止めず一気に突撃する。強烈なスピードで剣を振り、目の前の国軍兵を次々と斬り伏せる。前回の戦いの傷の痛みがわずかに残るが、それでもかまわず剣を振るう。クロコはどんどん前に出る。

「あまり先行し過ぎるなよ！ クロコ！」

クレイドはクロコを注意しながら、巨大な剣を軽々ブンブンと振りまわす。防御不能な強烈すぎる斬撃に、敵は手も足も出ず、次々と吹き飛ばされる。

クロコとクレイド、この二人の勢いに解放軍兵たちが続く。
敵の陣形が中央から崩されようとした、その時、

ドゴォーンッ！！ ドゴォーンッ！！ ドゴォーンッ！！

大地全体を震わすような巨大な爆音が三つ、辺りに響いた。その
直後、クロコの頭上を巨大な風切り音が通り過ぎた。次の瞬間、

ズオオオオオオオンッ！！！！ ズオオオオオオンッ！！ ズオオオオ
オンッ！！！！

思わず振り向いたクロコの視界が一瞬赤い閃光に染まる、そして
天に伸びるような巨大な火柱が三つ、視界に飛び込んできた。後方、
自陣の真ん中付近を裂けるように広がる火炎は、まるでそのまま自
軍全てを飲み込んでしまうかようだった。

何人かの人間の影が浮き上がるのが見えた。そして鼓膜を容赦な
く叩く大爆音。

遅れて自軍の所々から悲鳴のような叫び声があがる。

火炎は一瞬にして姿を消したが、そこから遅れて強い爆風が、地
面の破片を巻き込みながら吹き上がって来る。

クレイドは顔を歪める。

「クソッ！ 全くケチらず撃ってきやがる……！！」

自軍が中心から崩壊する。

それを狙いすましたように敵軍から大量の砲弾の雨が飛ぶ。
砲弾の雨は自軍の前衛わずか後方を吹き飛ばした。
それに呼応して敵軍の剣兵が突撃してくる。

クロコとクレイドだけではどうにもならなかった。
解放軍の前衛は間もなく崩壊した。

「ダメだ……！ クロコ！！ 下がるぞ！！」

クレイドが叫ぶ。

「くっ、わかってるよ！！」

クロコは悔しそうにクレイドと共に後ろに下がる。
国軍の剣兵が次々と追い打ちをかけてくる。
それを斬り払いながらクロコが叫ぶ。

「クソ！！ こんなのだうすればいいんだよ！！」

「俺だって分からねー！！」

クレイドがそう言った瞬間、

ドオオオオオン！！

再び大地が響き、風切り音がした。

ズオオオオオオオン！！！！

再び自陣に巨大な火柱が上がる、目を潰すような赤い閃光も、耳が痛くなるような爆音も、さっきより近い。

それを見てクロコは歯をギリツと鳴らした。

「……！！　とにかく！　アレをどうにかしなきゃ、どうにもならねえぞ！！」

「わかってる！」

クレイドはグラン・マルキノの方を見る。

大勢の敵兵の群れが厚く厚くグラン・マルキノの前を立ち塞ぐ。

「……だが、アレを突破するのは無理だ！！」

それを聞いてクロコの剣を握る手が震える。

「クッソ……！！」

敵軍はどんどん前進してくる。それと共にグラン・マルキノもどんどん前進する。

グラン・マルキノの速度の方が兵士の進軍よりも速く、そのため前方を走る兵士達は自然とグラン・マルキノをどんどん避けていく。クレイドはその様子を見つめる。

「おいおい、このまま俺達にかまわず突破する気だぜ」

自軍の大砲がグラン・マルキノに向かって放たれる。グラン・マルキノの巨大な胴体からいくつもの爆炎が上がった。

しかしその巨大な鋼鉄の胴体はビクともしない。

グラン・マルキノはどんどん近付いてくる。

クロコはそれを見て、冷や汗を流しながらも笑みを浮かべる。

「だがチャンスだ……！　あっちから近づいて来てくれる」

グラン・マルキノの前を守る兵士の層が徐々に薄くなる。そしてグラン・マルキノが目の前にまで近づいてきた。

「行くぞ、クレイド！！ 突破する！！」

「ああっ！！ こうなりや、やるしかねー！！」

クロコとクレイドは走り出す。

二人は前を塞ぐ敵兵を次々と斬り伏せて、強引に前進する。下がっていく自陣と独立して二人はどんどん前進する。

そして、ついにグラン・マルキノの側面に付いた。

巨大すぎる鉄の塊が二人の横に広がる。

「クレイド！！ このまま裏に回り込むぞ！！ そこに入り口がある。内部からなら破壊できる」

「おうっ！！」

グラン・マルキノの側面、巨大な車輪付近では敵兵の姿はまばらだった。おそらく車輪に巻き込まれるのを恐れているためだろう。

二人はそこを狙い、一気に前進する。回転する巨大な車輪をすぐ隣において、前を塞ぐわずかな剣兵を斬り伏せながらどんどん前進する。

自陣へと向かうグラン・マルキノと交差する形で、あっという間に二人はグラン・マルキノの裏に回り込んだ。

三台の内の一台中、中央に位置するグラン・マルキノの裏、クロコとクレイドはそこにたどり着いた。

目の前には木製の足場とそこに設置された大きな金属の扉があった。

「行くぞ！ クレイド」

クロコがそう言ったその時、黒い無数の影が木製の足場近辺に点々と現れる。

黒い衣装、黒い覆面……

クロコとクレイド、二人の顔から冷や汗が流れる。

「おい……？ クレイド、こっちにはいないんじゃないのか？」

「うるせえ……おまえだって『なるほどな』って納得してただろ」

クロコとクレイドの前に再びアサシン達が姿を現した。
扉を囲むように守るアサシン達。

二人とアサシン達、お互いににらみ合う。

クレイドはアサシンたち一人ひとりに目をやる。

「二、四、六……十一人か……ミリアのやつがずいぶん減らしたかな」

「なんとかなるか……？」

「さあな、なんせあの強さだ」

「なんとかするしかねーか……！」

クロコとクレイドが先に動く。

扉を目指し、剣を構えて一気にアサシン達に駆け寄る。

二人がグラン・マルキノに近づくとアサシン達はそれに応じて動く、五人が陣形を組み向かって来る。

「うおおおお!!」

二人は同時に叫ぶと剣を振るう。クロコは剣を高速で振りまわし、クレイドも巨大な剣をブンブン振りまわす。

五人のアサシン達はそれを軽やかにかわしつつ、三人が無数の斬撃を放つ。無数の斬撃が空中ではじける。そんな中、残り二人のアサシンが宙を高く飛び、高速のナイフを飛ばしてくる。

クレイドは反応しきれず体がわずかに切り裂かれる。

アサシン達は近距離の斬撃と遠距離のナイフの波状攻撃を仕掛けてくる。

それでもクロコとクレイドはひるまず強烈な斬撃を振り続ける。互いの攻撃が互いの体の所々を切り裂いた。しかし数に劣る二人の方が多く切り裂かれる。

二人の後方から突如、別のアサシン三人が囲むように現れる。二人はそれに応じて互いに背中を合わせて構える。二人は背中合わせで駆けながら剣を振るう。

六人のアサシンがあとを追い、二人のアサシンが宙を舞いナイフを飛ばす。

無数の斬撃とナイフが、クロコとクレイドを絶え間なく襲い続ける。

「ちっ、きついぜ……」

クレイドがそうばやいた直後、さらに遠くから二十本近くのナイフが一斉に飛んできた。

「うおっ!!」

二人は背中を合わせたまま、後方に跳びナイフから逃れる。

二人が後方に下がるとアサシン達は追ってこず、二人から離れ、

再び扉付近に固まった。

クレイドはその様子を見て、口を開く。

「なるほどな……、やつらグラン・マルキノの防衛が優先か」

「オレ達は眼中にねーって感じたな。腹の立つやつらだ」

その時だった。

ドオオオオオンッ！

ズオオオオオオオンッ！！

一瞬、辺りが赤く染まり、再び巨大な爆音が響く。

クレイドの顔が険しくなる。

「……だが、ゆっくりしちやいらねーな。このままじゃ自軍もやばいが、いずれ基地を射程に入れちゃう」

グラン・マルキノは巨大な車輪を回しながら前進し続けている。クレイドはその様子を静かに見つめながら、戦闘で負った傷口に触れる。指に赤い血が絡みつく。

「チッ、せつかく塞がりかけてたのに……」

クレイドはそうばやいた後、少しの間、黙って前を見つめていた。

「クレイド……？」

クロコはその様子が気になり、クレイドの顔を見つめる。

クレイドは静かに、何かを覚悟した表情をしていた。

「クロコ……、いい作戦があるんだ」

「……なんだ？」

「まずは二人でやつらを突破する。おまえは素早く扉から中に入れ、俺は扉を守る……」

「……！！ おいつ！ それじゃあおまえは……」

「やつらの相手は俺がする……！」

クレイドはアサシン達を強い眼でにらむ。

「ふざけんな！！ そんな作戦できるか！」

「やらなきゃ……どうなる。このまま二人でアサシンと戦うか……？ だがやつらは守りに入ってる。戦えば大きく時間を食う。それじゃあ仮にアサシンに勝てても基地はやられる。俺達は負ける。味方も大勢死ぬ……」

「……！！ だけど……」

「俺はゴメンだ。自分の命欲しさに味方を大勢犠牲にするのは……ガマンできねー」

そう言ってクレイドはほえんだ。

「でも、オレは……」

「フツ……心配すんな。俺は絶対死なねー、なんとしてでも生き残る。おまえが戻ってきた頃にはアサシン達が全員地面に転がってるぜ」

クレイドは静かに笑顔を見せたあと、キツと前を見る。
その眼は真っ直ぐに扉を見ていた。

「いくぞ」

そしてクレイドは剣を構えて駆け出す。
クロコは一瞬歯を食いしばると、あとを追って駆け出した。

二人は並んで扉に向かって駆ける。
それに応じてアサシン達も動き出す。
四人のアサシンが陣形を組んで二人の前に立ち塞がる。
アサシン達とぶつかる直前、空中から無数のナイフが飛んでくる。
二人はナイフを振り払わず、避けながら進む。二人の体がわずかに切り裂かれる。

二人は四人のアサシン達の真ん中に向けて剣を振りまわす。アサシン達がそれに反応し左右に散ると、二人はそこに飛び込む。二人はただ、扉のみを目指す。

四人のアサシンはそれを追い、挟むように攻撃を仕掛ける。二人はすぐに背中を合わせ応戦しながら扉に近づく。

「「おおおおおっ！！」」

クロコとクレイド、二人は大振りの斬撃を同時に放った。
アサシン達はそれに反応し距離を取る。その瞬間、二人は再び前

を向き、扉の方へと全力で駆け出す。

後ろから追うアサシン達も、さらに左右から挟もうとするアサシン達も、二人は一気に振り切った。

扉が目の前にまでせまる。前にアサシンの姿はない。

二人が扉に向かって飛び込もうとしたその瞬間、目の前に黄色い瞳のアサシン、ラギドが立ちふさがる。

「「邪魔だーッ！！！」」

二人は同時に叫び、気迫と共に強烈な斬撃を放った。さすがのラギドも二人の気迫に押され、空中へと飛んで避ける。二人はそこを一気にすり抜ける。そして二人は一足飛びに足場に飛び乗る。ついに二人は扉の前に立った。

息を切らす二人。

クロコは力任せに勢いよく扉を開ける。

「死ぬなよ。クレイド」

「任せとけ。早く戻ってこいよ。三台もあるんだからな」

クロコは扉へ飛び込んだ。

クレイドはそれを見送ると背中では扉を閉める。

アサシン達はクレイドのいる足場を取り囲んでいた。ラギドはギロリとクレイドをにらむと、周りのアサシン達に命じる。

「何をしている……早くアレを処理してあとを追うんだ」

アサシン達がクレイドを囲みながらユラリと近づいてくる。クレイドはそれらに向かって剣先を向ける。

「よし、おまえら……」

不敵に笑うクレイド。

「ぶっ潰される覚悟はできてるんだろーな？」

2 - 12 スティアゴア台地からの刺客

ケイルズヘル基地、その敷地内広場の高台にローズマン司令官は立っていた。南方の大地を見つめ戦いの行方を見守っている。隣でマルトフ副司令が口を開く

「先ほど聞こえた五回の爆音……あれがおそらくグラン・マルキノなのでしょうね」

「だろうな……」

「最後の一回、ずいぶん近くで聞こえたように思えました……」

「……………」

（あつちはあまり戦況が良くないようだ。そして、こっちもそろそろ……）

ローズマンがそう思っただけでスティアゴア台地の方を見たその時、スティアゴア台地の斜面を駆け降りる無数の影が見えた。

「……………！！ 来やがった！」

ローズマンの目が見開かれる。敵の奇襲部隊はざっと見て4000以上。

ローズマンは信号銃を鳴らしたあと、大声で号令を出す。

「基地砲一斉砲撃！！ 敵を近づけるなー！！」

基地に装備されている大型大砲から砲撃が放たれる。

斜面を駆け降りる大群のところどころから爆炎があがる。

しかしケイルズヘル基地に取り付けられている大砲の数は、壁と
なっているスティアゴア台地側には少ない。4000人以上いる敵
の奇襲部隊に与える被害は小さかった。

奇襲部隊は斜面を下るとそのまま駆け出し、基地の方へと近づい
てくる。

味方の大砲部隊も砲撃を行う。

無数の砲撃が奇襲部隊をとらえる。しかしそれにも動じずどん
どん近づいてくる。

「出番か……」

基地にいるミリアは静かに剣を抜く。

「第一部隊突撃ー！！ 基地に近づけるなよ！」

ローズマンの声とともに、3000人近い部隊がミリアを先頭に
して駆け出す。

互いに近づく解放軍と国軍。

巨大な台地と基地の間の狭き大地、そこで二つの軍勢がぶつかり
合おうとしていた。

先頭のミリアは国軍が目の前にまで迫ると、迷いなく一気に敵陣
へと飛び込む。

ヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！

無数の斬撃の壁が国軍兵達を襲う。

国軍の兵士はまるで紙切れのように次から次へと斬り伏せられる。まるで巨大な天災にでもあっているかのようなだった。国軍の剣兵達はミリアの斬撃を目でとらえる事さえできず、ただ無抵抗に次々と斬り伏せられる。

国軍兵達はその事態に混乱した。

剣でも銃でもミリアをとらえることができない。大砲を持たない奇襲部隊はミリアに為す術なかった。

その時だった。敵軍から疾風のように駆け抜ける剣兵が一人、ミリアに向かって近づいて来る。

その若い剣兵の白い髪が自ら巻き起こした風によって流れる。スコア・フィードウッドがミリアの前に立ちふさがる。

ミリアとスコア、二人の眼が合った。

乾いた大地の上でスコアとミリア、互いに剣を構える。

次の瞬間、ミリアの姿が消える。ミリアは一瞬でスコアの間合いに入った。

ヒュンッ！

ミリアの恐ろしく速い斬撃、しかしスコアはそれをかわす。

「……！」

今度はスコアがミリアの横を一瞬でつく。

ヒュンッ！

空気を置き去りにするかのような高速の斬撃、ミリアはそれをか

わす。

「なに……！」

それと同時にミリアが反撃に出る。目にもとまらぬ連続の斬撃。スコアはそれに反応し剣を振るう。複数の斬撃が一瞬で飛び交う。その斬撃が全てぶつかり合い、はじけた。

ギイイーン！

二つの刃が勢いよくぶつかった時、二人の動きは止まった。そしてミリアとスコア、お互い同時に後ろへ飛び、距離を開ける。二人の表情がわずかに険しくなった。

戦場において絶対的な力を持っていた二人、その中で、自分にこれほどまでに対抗できる者はいまだかつて存在しなかった。

今まで出会った中で最強の敵、そしてそれに立ち向かう覚悟を二人は固める必要があった。

ほんの一瞬の静寂、大砲の爆音と兵士のかげ声が響き渡る大地、しかしここだけはそこから切り離されたように静かな雰囲気に含まれていた。

しかし、それは長くは続かなかった。

二人はほぼ同時に動き出す。

互いに目にもとまらぬスピード。

スコアが一瞬でミリアの横につき、空気を貫く強烈な突きを放つ。ミリアは体をそらし、それをかわすと一瞬で数発の斬撃を放つ。スコアはそれを見切り全て紙一重でかわす。スコアの鋭い蹴りが飛ぶ。

ミリアは素早くそれをかわす。次の瞬間、

ミリアは一步踏み込む。

体を構え、嵐のような無数の斬撃を放つ。スコアもそれに応戦する。

無数の斬撃がぶつかり合う音があたりに響き渡る。その無数の音は止まることを知らず、その恐ろしく早いテンポは、まるで一つの音が連続で響いているかのような錯覚すら覚える。

斬撃の壁が音をたててぶつかり合う。

斬撃は目にも止まらぬ速さでぶつかり合い、剣の閃光が火花のようになり、あたりを縦横無尽に飛び交う。

剣だけではない、二人の足も体も、目の動きさえも常識とははるかに離れた速さで動き続けている。

二人の回りを囲む兵士達は、解放軍も国軍も剣を止め、ただこの戦いに見入っていた。

「に、人間の動きじゃねえ……」

「なにが起こってんだ……？」

兵士達はまるで幻覚でも見ているかのように、呆然と立ち尽くしていた。

もういくつの斬撃が飛び交ったかもわからない。二人とも、まだ一太刀すら浴びていない。

しかし、戦況にわずかな変化が生じる。

ミリアの剣がスコアの肩をわずかにとらえた。

スコアの肩からわずかに血が飛ぶ。しかしスコアはひるまない。

「はあッ……！」

スコアは掛け声と共に剣を力強く振り下ろした。その斬撃はあまりにも速く、刹那の閃光にさえ見えた。

ミリアはそれにすら反応し、斬撃を受け止める。しかしその強力な一撃にミリアの体が一瞬よろめく。その瞬間だった。

ヒュンッ！

風切り音と共にミリアの腹が裂けた。ミリアの体は反射的に前に縮こまった。そのわずかな隙。

ヒュンッ！

ミリアの足が裂けた。

その瞬間、まるで幻覚を見ているかのような攻防は止まった。地面に手をつけ、ひれ伏すミリア。

「う……！」

そのミリアの姿を表情一つ変えずに見下ろすスコア。

スコアは最後の―撃をミリアに向け放った。その斬撃がミリアの体を切り裂く……だろうその瞬間、

ギィィンッ！！

スコアの剣が止まった。いや、止められた。

スコアはその事態に驚く。

最後の瞬間を覚悟していたミリア。

その目の前を大きな背中が覆う。

スコアと向かい合い、巨大な黒剣を片手に持ったグレイ・ガルデ

イアが立っていた。

「よう、ミリアちゃん。久しぶり」

ガルディアはスコアの方をにらみながらミリアに話しかける。
ミリアはガルディアの背中をぼうぜんと見つめる。

「ガルディア……なぜあなたが……」

ガルディア……その言葉に、スコアがわずかに反応した。
しかし次の瞬間、スコアの姿が消える。スコアは一瞬でガルディアの横につく。それとほぼ同じタイミングでスコアの斬撃が飛ぶ。

ズンッ！

ガルディアは一瞬で黒剣を地面に突き立てた。その巨大な黒剣は柱となり、スコアの斬撃を阻んだ。黒剣は地面に深く潜りビクともしない。ガルディアは黒剣を壁にスコアの懐に一瞬で飛び込む。

ズウンッ！！

ガルディアの蹴りがスコアの腹をとらえる。ガルディアの太い足から放たれる蹴り。その強烈な衝撃がスコアの体を貫いた。

スコアの体は軽々と吹き飛んだ。

後ろに飛ばされたスコアは素早く剣を構え、体勢を立て直す。しかし思わず腹を押さえてしまう。

「ぐ……あ……っ、ゴホッゴホッ……」

せき込むスコア、その前に立つガルディアは不敵にほほえむ。

スコアは構え直し、正面に立つガルディアを静かに見つめた。

（あれが、彼が……、国軍の最大の壁……セウスノール軍最強の剣士『黒の魔将』グレイ・ガルディア……）

ガルディアはスコアをにらみながらほえむと、巨大な黒剣を地面から引き抜き、そして構えた。

「さーて、やろつぜ。『瞬神の騎士の再来』よ……」

2 - 13 四人目の化け物

乾いた大地を進む三台のグラン・マルキノ。

その中央のグラン・マルキノの扉の前、その木製の足場に赤い滴がいくつもしたたり落ち、小さな赤い水たまりをいくつも作っていた。

無数の刃を体に受け、それでもクレイド・アースロアは扉の前に立っていた。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

荒く息をするクレイド、足場を取り囲む十一人のアサシン。クレイドはそれでも前を見てニヤリと笑みを作る。

「どうした……、その程度か。こんなショボい傷の百や二百じゃ俺のでかい体は倒れねえぜ」

アサシン達の中央に立つラギドはギリツと歯を鳴らした。

そして手で指示を出した。

それに応じアサシン達は陣形を動かす。

その瞬間、クレイドの眼は集団から一瞬離れたアサシンの一人をとらえた。

クレイドは足場からいきなり飛び出し、そのアサシンに向け強力な斬撃を振りまわす。アサシンは驚きながらもそれらをすべて避け、すぐさま斬撃を返す。しかしクレイドはさらに一歩踏み込む。

「おらあつー！」

クレイドは一気に斬撃を振り下ろす。

ギョーンッ！！

その斬撃はアサシンをとらえた。アサシンの体は切り裂かれ、勢いよく吹き飛んだ。

クレイドもアサシンの斬撃を受け、肩をわずかに切り裂かれた。すぐさま無数のナイフがクレイドの方へ飛んで来るが、クレイドは後ろに飛びながら避け、サツと扉の前に戻る。

「ふん、俺が扉の前から動かないと思ったか。この単細胞」

挑発するクレイド、ラギドの目は怒りに燃える。

「なにをやっている！ こんな死にぞこない、とつとと始末しろ！
」

「ふん、上等だ。とつとと始末してみろ」

力強いクレイドの表情。しかしそれとは逆に体からは無数の赤い滴がポタポタと流れ落ちる。

（クロコ、まだなのか……………？）

グラン・マルキノの内部、木製の壁が延々と続く通路、そのあちこちに切り伏せられた国軍兵が倒れている。

その通路の先、クロコはグラン・マルキノの通路を駆け抜けていた。

前回も通った道、構造にほとんど違いはなかった。枝分かれしている入り組んだ通路の中を、クロコはほとんど迷いなく真っ直ぐ装着室に向かっていった。

（もうすぐだ。もうすぐ……）

その時、駆け抜けるクロコの先に一人の剣兵が立っていた。クロコは足を止める。

「よう……」

剣兵が話しかける。

少し乱れた長めの灰色髪、赤い瞳が浮かぶ鋭い目。レイデル・グロウスがクロコの前に立ちふさがる。

レイデルはクロコをゆっくりと見つめると、不敵に笑う。

クロコもレイデルを見つめる。他の兵士達とはどこかが違う。異質で、そして危険な雰囲気を持つ男。クロコはそう感じた。

レイデルはクロコの方をジーツと見る。

「どんなやつが来るかと思ったら、こりゃあ、また……」

「てめーと話してる時間はねーんだ。そこをどけ」

クロコは剣先を向ける。

レイデルはそれを見て笑う。

「くつくつくつくつ、特徴から見て『戦乱の鷹』じゃあないな……女の剣士か二人……こりゃあ珍しい」

「誰が女だ！ 時間がねーんだ！ 待ってるやつがいるんだよ……！」

クロコは剣を構える。

「やる気まんまんじゃねーか……よし！ いいだろう。女だし、ハ
ンデをやるよ」

「ハンデ……？」

レイデルは右手で剣を抜くと左手に持ち替えた。

「てめえ、右利きだろ……！」

「そうだよ。だからなんだ？」

レイデルはそう言うのと、さらに床にドスツと腰を下ろし、足を組む。

「オレはここから動かねー……剣も左手、これがハンデだ」

レイデルはニヤーツと笑う。

「てめえ！ ふざけてんのかー！」

「ふざけちゃいないさ。大マジだぜ？」

「てめえ……！！ これはゲームじゃねえんだ。命を懸けた戦いだ
ってこと、わかって言ってるんのかよー！！」

クロコはレイデルを嫌悪感のこもった目でにらむ。
しかしレイデルは笑う。

「わかってねえ……、わかってねえな………命を賭けた戦いでやるからこそ、最高にカッコつくんじゃないか」

レイデルの表情はその状況を心から楽しんでいるかのように見えた。

クロコの剣を握る手がわずかに震える。

「そうか……ならっ！ 遠慮はしねーっ！」

クロコはレイデルに向け一気に突進する。

クロコがレイデルに斬撃を放とうとしたその瞬間、レイデルの持っている剣だけが、クロコの視界から突如消える。

「……！！」

クロコは直感的に後ろへ飛ぶ。

レイデルとクロコの距離が再び開く。レイデルはニヤリと笑う。

「いい勘だ……」

ポタリ

クロコの肩から血が流れる。クロコの肩はいつの間にか切り裂かれていた。

クロコの顔から嫌な汗が流れる。

（……なにが起きた？ 突然あいつの剣だけが消え、オレの方が切り裂かれた。まさか……だが……）

「確かめるしかねー」

クロコはレイデルをにらむ。レイデルはなおも笑っている。

「確かめる……？ 多分当たってると思うぜ」

クロコは再びレイデルに突進する。

クロコはレイデルの剣に目を凝らす。

クロコが近づくと再びレイデルの剣が消えた。クロコはさらに目を凝らす。

……見えた！

レイデルの剣は恐ろしいほどの速さでクロコに向かって来る。クロコはそれを避けようとするが……

（なんだ！？ この剣速は、こんな速度、ありえない……！！）

クロコとレイデルの距離がまた開く。クロコはもう片方の肩が切り裂かれていた。

「クソ、ちくしょう……」

「悔しがるなよ。すごいんだぜ。左手とはいえ、オレの剣を二度も避けるなんて、誇っていい」

レイデルは笑みを浮かべる。

クロコはそんなレイデルを静かに見つめた。そして悟った。

（そうか……こいつも、こいつもスコアやミリアと同じ……）

クロコは歯をギリッと鳴らす。

（……化け物か）

2 - 1 4 戦いの中で

ケイルズヘル基地とスティアゴア台地、それらに挟まれた乾いた大地、そこでガルディアとスコアは向かい合っていた。互いに剣を構えたまま動かない二人。

「どうした、来ないのか？」

ガルディアは不敵にほえんでいる。

「なら……こつちからいつちまうぜ？」

そう言った直後、剣を構えるガルディアから獣のように荒々しい気迫が放たれる。いや、全てを切り裂くようなその気迫は、すでに獣の域をはるかに超え、まさに異名のとおり、魔の將軍のごとき強烈な気迫だった。

それに応じてスコアからも強烈な気迫が放たれる。ガルディアとは違い、氷のように冷たく、鋭く、そして静かな気迫。

二つの気迫がぶつかり合う。大地全体がきしむような緊迫感が辺りを包む。

ガルディアの眼がさらに鋭くなる。

ガルディアが動いた。一瞬でスコアの間合いに入る。

ギョオンッ！！

巨大な黒い斬撃は恐ろしいほどの速度でスコアに叩きつけられる。

スコアはそれを瞬時に反応し受け止めるが、強烈な斬撃で後ろに押される。

「……！！くっ……！！」

ガルディアは攻撃の手を緩めず、次々と重い斬撃を放つ。

その斬撃が放たれるたびに、辺りに空間を揺さぶるような巨大な金属音が響く。

「うつっ……！！」

ガルディアの斬撃を受け止めることにスコアの腕に電気が走る。

しかし、スコアに吸い寄せられるように放たれる斬撃は、スコアに避けることを許さない。

スコアは地面を強く踏みしめ、体が吹き飛ぶのを押さえる。

ガルディアが剣を振り上げたわずかな隙、その瞬間スコアの姿が消える。

スコアがガルディアの横をつく。

しかしガルディアの目はそれをとらえていた。スコアの斬撃をあつさり受け止めると、強烈な蹴りを飛ばす。

スコアはそれをかわし、再び姿を消す。ガルディアの左にスコアが現れる。

ガルディアの目はそれをとらえていた。しかしスコアの姿がまた消える。と同時に右に姿を見せる。剣はすでに振られていた。

しかしガルディアの剣はそれにすら反応する。瞬間、スコアの姿が左から現れた。

ヒュンッ！！！！

閃光のごとき速さの斬撃。

ガルディアはそれを避けた。ガルディアの反応はその速さをも上回った。

しかし、さすがのガルディアもその斬撃をかわすことで体のバランスを崩す。

素早くスコアが懐に入る。

瞬間、崩れたガルディアの体からバネのようになった蹴りが飛ぶ。

ズウン！！

スコアの体は軽々と吹き飛ばされる。

「ぐ……っ！」

地面に足を着けたスコアが苦しそうに声を漏らした瞬間、ガルディアはすでにスコアの目の前にいた。

ギョオンッ！！

黒い斬撃がスコアの体に触れる瞬間、スコアの体は後ろにそれた。まさに刹那の反応だった。

しかしスコアの体はわずかに切り裂かれ、赤い血が飛ぶ。スコアは素早く後方に跳んでガルディアから離れる。

ガルディアは追わず、肩にドスンと剣を置く。

「うーん、惜しいっ！」

「くっ……」

一方、グラン・マルキノ内部の通路、そこで向かい合う二人。両肩から血を流すクロコ、床にどっしりと座りこんでいるレイデル。

レイデルは余裕の笑みを浮かべる。

「おい、どうした。来ないのか？ 時間がないんだろ……？」

「言われなくても……！」

クロコはレイデルに向かって駆ける。

クロコは左右に素早く動き、かく乱しながら距離を詰める。

しかし、レイデルの間合いに入った瞬間、

ヒュンッ！

レイデルの斬撃がクロコに一瞬で向かう。その剣はクロコとの間の空間を飛び越えてクロコの体へ直接届く。

クロコが後ろに下がっても、剣はすでにクロコの体を切り裂いている。

痛みでクロコの顔が歪む。

傷口から血が滴り落ちる。

「クソ……！ 時間がねえんだ。なのに……こんなやつに……！！！」

クロコは怒りに震える声を出した。目の前に立ちふさがる敵に、そして己自身に怒りがわいていた。

そんなクロコを前にしてもレイデルは表情一つ変えない。

「いい線いつてるぜ、おまえ。ここで死ぬには惜しい気がする。でも残念だったな、オレに出会っちゃまって、運が悪かったな」

「クツソォ！」

クロコは再びレイデルに突進する。

しかしクロコが間合いに入ると一瞬で剣が体に触れる。クロコの体は切り裂かれる。

「うおおお！！」

クロコは叫びながら、それでもさらに一歩踏み出す。

レイデルはその姿を目にした途端、言った。

「バイバイ」

一か所、二か所、クロコの体の傷が増える。

クロコの斬撃がレイデルに向けて放たれる。

しかし距離がほんのわずか足りない。レイデルはそれを完璧に見切り、その斬撃に対して微動だにしない。

クロコの斬撃は空を切る。

三か所目の傷、それはクロコの体を深く切り裂き始める。

「うわあああ！！」

クロコは叫びながら素早く身をそらす。

傷は途中で浅くなり、致命傷は避ける。

クロコは距離を取ろうとする。しかし剣はさらに追ってくる。クロコの足先をわずかに切り裂く。

クロコはなんとか距離を取った。

「はあっ、はあっ、はあっ」

無数の傷から大量の血が流れ、床に溜まる。

クロコの体が見るみる赤く染まってゆく。

レイデルは口を開く。

「驚いたな。今を避けるとは思わなかったぜ」

レイデルの表情から余裕は消えない。

クロコは苦しそうに膝をついた。

「クソオ……、こんな、こんな所で……」

クロコから嗚咽のような声が漏れる。

仲間が待っている。それでもどうする事も出来ない自分……

体中から深い痛みと共に大量の血が流れ落ちる。

流れ落ちる血とともに体から力が抜けてゆく。

視界がかすむ。

意識が闇に沈んでゆく。

クロコの視線は下に落ちてゆき、その真紅の瞳から光が消えてゆく……

その時だった。

その瞳に自分の履いているブーツが映った。
黒いブーツは裂け、中から血が流れている。

フルスロツクの街でソラに買ってもらったものだ。
その直後、クロコの瞳に光が戻る。

ふうー……………

クロコはゆっくり深呼吸する。

「……………ん？」

レイデルはクロコのその様子を不思議そうに見る。
クロコは深呼吸を終えるとゆっくりと立ち上がった。

「そうだな。こんなトコで終わるわけにはいかねー。オレのために、オレを待ってくれるやつのために」

クロコはキツとレイデルの方を見る。その真紅の瞳には強い光が宿っていた。

その様子を見てレイデルがうれしそうに笑う。

「変わったな……………、様子が」

クロコは剣先をレイデルに向ける。

「ここからが本番だ……………！」

クロコは剣を構える。そしてレイデルに向けて駆けだす。
クロコは左右に動きながらレイデルとの距離を縮める。
クロコの頭の中でアールスロウの声が響く。

（足の運びが雑だ。あれでは動きに無駄ができるし、第一、動きそ

のものが読まれやすい)

クロコの体がアールスロウに教えてもらった動きを思い出す。クロコの足運びが徐々に繊細なものになり、それに伴いクロコの動きが徐々に滑らかに、そして速くなる。

その様子にレイデルが気づく。

「……むっ？」

次の瞬間、レイデルの予想より早く、クロコの体が間合いに入る。レイデルはわずかに驚く。

「……チッ！」

アールスロウの声が響く。

(相手の死角も、構えも、細かく意識していない)

クロコはレイデルの剣ではなく、それをつかんでいる腕に意識をやった。

次の瞬間、レイデルから消える斬撃が放たれる。クロコの真紅の瞳はそれをとらえた。

ヒュンッ！

斬撃をかわした。レイデルの斬撃が空を切る。

「……え？」

レイデルが思わず声を漏らした瞬間、クロコはレイデルの横をついた。

「……………」

レイデルの首が初めて激しく動く。その直後だった、

トンッ……

クロコの体はレイデルを横切り、トントンとそのまま進んでいった。

クロコはレイデルから少し離れた所まで行くと後ろを振り向く。

「……………」

レイデルはその様子を、目を細めながら黙って見ていた。クロコは口を開く。

「おまえはそこから動かない、それがルールだったよな」

クロコはニヤッと笑った。

「……………、あっ……………」

「じゃあな」

クロコは前を向いてそのまま走り去った。

レイデルはそれを静かに見ていた。

クロコの姿が見えなくなるとレイデルは声を出す。

「クッソ！　してやられた！！」

レイデルはそう言ったあとスクツと立ち上がる。

「あーあ、負けちゃった……まあ、そこそこ楽しめたし、オレはとつとと退散するかな」

レイデルはそうつぶやくとクロコと反対側の通路をトコトコと歩いていった。

2 - 15 迫りくる終わり

乾いた大地を突き進む三台のグラン・マルキノ。

そのグラン・マルキノの横を無数の屍が通り過ぎる。その多くが解放軍の軍服を身にまといつていた。

中央のグラン・マルキノの扉の前で、クレイド・アースロアはなおも立っていた。

体はもうボロボロだった。数え切れないほどの無数の傷、深い傷も数か所負っている。

それでもクレイドは歯を食いしばりながら立っていた。

扉の周辺をグラン・マルキノと並走しながら囲むアサシン達。弱った獲物を仕留めるためにナイフを構えた、その時、

ドオオオオオッ！！！！

空気を震わす巨大な爆音と共にグラン・マルキノの前部から爆炎が上がる。

アサシン達が一瞬それに引きつけられたその時、クレイドが再び扉から飛び出した。

アサシンの一人に斬りつける。

隙を突かれたアサシンは、なんとかそれを避ける。しかし体勢を崩した。

ギョーンッ！

素早く放たれる二撃目。

アサシンの体が切り裂かれ、吹き飛ぶ。

近くにいたアサシンが驚き思わずクレイドに斬りかかる。それより早くクレイドは突きを放つ。

アサシンはそれを素早くかわし、斬撃を放とうとする。

しかしクレイドはそのナイフに向かって蹴りを飛ばす。わずかに切り裂かれるクレイドの足、しかしアサシンのナイフは腕ごとにはじかれる。

ギョーンッ！

アサシンの体が血しぶきを上げ吹き飛ばされた。

冷静さを取り戻したアサシン達はそれを見てサッとクレイドから離れる。

ラギドはクレイドをにらみつけると、手で指示を出す。

アサシン達は少し陣形を変える。

炎を上げて停まったグラン・マルキノから離れて立つクレイド、それをアサシン達は囲むようにして立つ。

それを見て身構えるクレイド。その時、ラギドが単独で突進して来た。

クレイドはそのアサシンの黄色い瞳を確認すると警戒心を強めた。クレイドの斬撃が先に放たれる。

ラギドはそれをヒラリとかわす。

素早い軌道変化で放たれる二撃目。

ラギドはそれにも反応し、かわす。と同時にラギドはスルリとクレイドの懷に潜り込む。

「……くっ！」

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

無数に放たれるラギドの斬撃は、避けようとするクレイドの動きに合わせ正確に放たれる。

三発の斬撃がクレイドの体をわずかにとらえた。

「ぐッ……!!」

苦痛の表情を見せながら、なんとか一步距離を取る。

しかしラギドの手から飛ばされるナイフがクレイドを追う。顔面へと飛ぶナイフ。

クレイドは素早く反応し、ナイフを避ける。

その時だった、別のアサシンがクレイドの背後を取っていた。

(しまっ……)

ヒュンッ!!

宙に血しぶきが舞った。

ドサツと地面になにかが倒れる音がした。

地面にひれ伏すアサシン。

その横にクロコが立っていた。

「よう……、元気か？ クレイド」

クロコはニツと笑う。

「見てのとおりピンピンだ……」

クレイドもニヤツと笑う。

お互いがお互いの笑顔を見た途端、二人の顔に強い生気が戻る。
突然のクロコの出現、アサシン達は距離を取る。

「とにかくだ、クレイド。こんなやつら相手にしてるヒマはねー。
次の止めねーと……」

「わかってるよ」

そう言った直後、二人は並んで走りだす。
二人を囲むアサシン達の壁、しかし以前よりだいぶ薄くなった。
二人が同時に剣を振るうとアサシン達は避け、あっさり壁は破れる。

壁を突破した二人は、黒煙を上げて止まったグラン・マルキノを
置き去りにして、基地側から右に走るグラン・マルキノを追おうと
した。

しかしその時、クレイドはギョツとする。

「まずいぞ……！ クロコ」

クロコはクレイドと同じ方向を見た。

前進する二台のグラン・マルキノのはるか前方、そこにうつすら
と巨大な建物の影が見える。

グラン・マルキノはすでにケイルズヘル基地の寸前まで迫ってい
た。距離はおよそ6、700m……グラン・マルキノの射程に入る
か入らないかの距離だ。

「ダメだ！！ クロコ！！ もう扉から入ったんじゃないあ間に合わない！！
とにかく前に回り込むぞ！」

クレイドはそう言って、前に向かって駆け出す。クロコもそれを追う。

「だけど、クレイド！ 前に出てどうするんだ！！」

「そんなモン、前に出たあと考える！！」

前へと走る二人、それをアサシン達は遠くで見ていた。
ラギドはギリつと齒を鳴らす。

「グラン・マルキノはもういい……！！ それよりあの二人を始末する。我らを散々コケにしおって……！！」

2 - 1 6 最後の攻防

スティアゴア台地とケイルズヘル基地に挟まれた乾いた大地。そこでスコアとガルディアは互いに向かい合っている。黒剣を構えゆうぜんと立つガルディア。対して息を乱し、体に数か所の浅い傷を負うスコア。

スコアの眼が鋭くなる。

直後、スコアは高速で左右に動く。

複数の残像が見えるほどの速さでガルディアをかく乱する。

しかしガルディアはそれを正確に目で追っていた。

スコアがガルディアの間合いに入る。

スコアはフェイントを入れる。目の動き、足の運び、剣の振り、体のひねり、スコアは四つのフェイントを一瞬で入れたのち、ガルディアに素早い斜めの斬撃を放つ。

ガルディアはそれを見切りあつさり止めると、強烈な蹴りを放つ。

スコアはそれをかわすが、続けざまに黒い斬撃が飛ぶ。スコアはそれを受け止めるが体が押される。

しかしすぐ体勢を戻し、反撃に出る。ガルディアも応戦する。

強力でそして恐ろしく速い斬撃が二人の間を飛び交う。

力はガルディアがはるかに上回っている。しかし速さはスコアが上。それでもガルディアは信じ難い反応を見せ、最短の動きでスコアの斬撃をかわす。そして持ち前の力で主導権を握る。

「はあっ!!」

ガルディアは勢いよく斬撃を振り下ろした。

ギインッ!!

スコアがガルディアの剣圧に押され、わずかに体勢を崩した。その隙をガルディアは見逃さなかった。今までで最速の斬撃、それをスコアに向けて叩きつける。

その瞬間スコアの眼がさらに鋭くなる。

ギョオンッ!!!!

ガルディアの斬撃が空を切った。スコアはガルディアの斬撃を完璧な形で避けた。ガルディアは一瞬驚く。素早くスコアの斬撃が飛ぶ。

ドカツ!!

ガルディアは素早く体を後ろに倒し、蹴りでスコアの腕を止めて斬撃を防いだ。

すぐさまガルディアの拳が飛び、スコアを吹き飛ばす。

吹き飛びながらも、スコアはすぐに体勢を立て直す。

ガルディアの動きは、洗練された無駄のないものから、突如信じられないほど変則的に変わる。それをとらえるのは困難を極めた。それでもスコアは、わずかだがその動きに対応しつつあった。だが、斬撃だけでなく打撃も多く受けたスコアの体には、多くのダメージが蓄積されていた。

スコアは少し顔を歪める。

ガルディアはその様子静かに見つめると、剣を構えたままスコアに向けて口を開く。

「どうした、まだやるかい……？ 味方もずいぶんやられたみたいだぜ。スコア」

ガルディアの気迫が薄くなるのを感じて、スコアは周りを見た。奇襲部隊はかなりの数が減っていた。

中間距離で足止めを食った部隊は基地砲撃と大砲部隊の砲撃で甚大な被害を負っていた。

指揮官もすでに砲撃を受けて地面に伏している。

スコアは状況を把握すると、悔しそうに顔を歪める。そして大声を出す。

「一時撤退だ！ 撤退するぞ！！」

スコアはそう叫ぶと北の橋ルートに向け一気に駆けだす。

そのスコアの姿を見て他の国軍の兵もそれに続き駆けだす。

それをガルディアは剣を肩において見届ける。

奇襲部隊の姿が遠のくと、ガルディアはゆっくりと口を開いた。

「ふう、おつそろしいやつだったな」

ガルディアの少し後方、傷を負い地面に膝をつけていたミアはフツ……と静かにため息を吐いた。

ガルディアは南の方向へゆっくりと目を向ける。

国軍の総力部隊はすでに肉眼で確認できる距離にまで近づいていた。

グラン・マルキノの二つの大きな影がすでに基地のすぐ近くまで迫っていた。

「あとは、あいつらを信じるだけか……」

クロコとクレイドはなんとか基地側から右を走るグラン・マルキノの前へと回り込んでいた。

ただ回り込んだだけに二人ともだいぶ息が上がっている。二人の体から血が流れ落ちる。

グラン・マルキノの前方では解放軍と国軍の激しい戦いがなおも行われていた。解放軍の数がだいぶ減っているように思える。

クロコはグラン・マルキノを見ながらゆっくりと口を開く。

「……で？ どうするんだ、クレイド」

「うるせー……、おまえも考えろ」

その時、クロコ達の前にあるグラン・マルキノの砲身がゆっくりと上を向き始める。

クロコの顔が青くなる。

「おいおい……！ どうすんだ！」

「クッソッ……！」

さらにその時、黒い複数の影がクロコ達とグラン・マルキノの間に現れる。アサシン達だ。

七人のアサシンがクロコ達の前に立ちはだかる。クレイドは冷や汗を流しながら笑いを浮かべる。

「おいおい……冗談抜きでふざけんなよ……！」

「く……ッ……！」

焦るクロコ達をラギドがギロツとにらむ。

「殺せ……！」

その命令と共にアサシン達三人の陣形が二つ、ナイフを構え向かって来る。

クレイドが叫ぶ。

「クロコ……！とにかくグラン・マルキノに近づくぞ……！」

二人は斜めを向き、互いの背中を近づけながらアサシン達に突進する。

向かい撃つアサシン達から放たれる素早い斬撃の嵐。

クロコとクレイドは背中を合わせて、それを必死に受ける。

クレイドとクロコは背中を合わせて横走りで斬撃の嵐をかくぐく。そしてなんとかアサシン達の群れを抜けた。

そして二人は前を向き、一気に走ってグラン・マルキノに近づく。その時、クレイドはあることに気付いた。

今まで走っていたグラン・マルキノが停まっている。

（まずい……！ 照準を合わせてやがる。もう時間がない……！！）

二人はなんとかグラン・マルキノの前まで来た。七人のアサシン達がグラン・マルキノと挟むように二人の前に立つ。しかし二人の意識はそれどころではなかった。

（だめだ！！ 発射される……！！）

クレイドは砲身から自分の回りに視線を移した。

（なにか、なにか手はないのか……！！）

その時クレイドはハッとした。

グラン・マルキノの真下の地面、広範囲に大きな亀裂が走っている。今まで見てきた亀裂よりもずっと深い。

クレイドは何かをひらめいた。

「クロコー！！ ここから離れる……！！」

「……！！」

クレイドが叫ぶとクロコはその様子を察しグラン・マルキノの横に向かって飛んだ。

クレイドは剣を横に寝かせ刃を立てず振り上げた。

グラン・マルキノの砲身がうなりをあげて響こうとするその瞬間、

「うおおおおおッ……！！」

クレイドは強烈な雄叫びと共に剣を地面に、力の限り叩きつけた。大地が大きな音を立てて揺れた。

その直後、辺りの地面が一気に陥没し、グラン・マルキノの前方を飲み込んだ。

前方に大きく傾いたグラン・マルキノ。宙を向いていた砲身が一気に地面に向けられる。

「え……？」

アサシンの一人が思わず声を出した。自分達に砲口が向いている。

ドオオオンッ！！

巨大な砲身が震えたその直後、

ズオオオオオオンッ！！！！

巨大な火柱が上がり、アサシン達を一瞬で飲み込む。遅れて巨大な爆風があたり一面を吹き飛ばす。

クレイドは巨大な爆風と砂煙を手で避けながら、最後のグラン・マルキノの方を見た。

砲身は上を向き、前進を止めている。

まだ砲弾は放たれていない。

隣のグラン・マルキノの暴発。それに一瞬気を取られているのだろうか？

考える時間はなかった。クレイドは一気に最後のグラン・マルキノに向けて駆けだす。その先にクロコが待っていた。

「クロコー！！ 飛ぶ！！ 剣を貸せー！！！！」

クレイドはそう叫ぶと、それに反応しクロコは剣をがっちり両手で持ち、寝かせた状態で横に構える。

クレイドは軽く飛んでその剣に足を乗せる。

「うおおおおおつ」

クロコは叫びながら、剣ごと巨大なクレイドの体を力の限り上に押し上げた。

クレイドはそれに応じて剣を蹴る。

クレイドの巨大な体は高く高く舞い上がった。

そして最後のグラン・マルキノの車輪を守る金属板の上に飛び乗った。

さらにクレイドはそこから、グラン・マルキノの壁のわずかの傾斜を利用し、剣を立てながら駆け上がると、さらに飛び上がって砲身の付け根に着地した。

足場の悪い砲身の上、それでもクレイドは砲口に向かって最後の力を込めて一直線に駆け抜ける。

砲口の先端までたどり着くと、クレイドは時限式の爆弾を取りだした。アサシンのナイフで少し裂けている。

クレイドは爆弾の栓を抜くと、砲口のなかにポイツと爆弾を放り投げた。

「俺からのプレゼントだ。大事にしろよ」

クレイドはそう言いながら砲身から飛び降りる。

その直後、グラン・マルキノの砲身がうなりをあげて響いた。しかしその瞬間、

ズオオオオオオンッ！！！！

砲身の真ん中あたりから亀裂が入り、砲口から巨大な爆炎が飛び出した。

直後、ヒビ割れた砲身は爆炎に包まれ飛び散り、残った砲身は炎に包まれた。

飛び降りたクレイドは地面に倒れ込むように着地する。

グラン・マルキノの砲身は粉々に砕け散っていた。

炎が上がり黒煙が昇り始めるグラン・マルキノ。少し遠くでその様子を見ていたクロコ、思わず笑顔が浮かぶ。その時だった。

「こんなことが……」

背後から声がした。クロコはすぐに振り返る。

ラギドが炎を上げるグラン・マルキノを見つめていた。

ラギドは唯一、あの砲撃に反応して逃れていたのだ。クロコの方をゆっくりと向く。

「許さん、絶対に、許さんぞ……！ きさまら！」

ナイフを構え、血走った目でクロコをにらみつける。

「殺してやる！！」

ラギドは初めて大きな声で叫んだ。そしてクロコに向かって突進する。

クロコもそれに応じて剣を構える。

剣を構えるクロコを見てラギドが叫ぶ。

「いい度強だ！！ 未熟者めがッ！！」

ラギドの素早い斬撃の嵐。

クロコはそれをあっさりかわす。クロコの動きはレイデルとの戦いを経て大きく変化していた。それに驚くラギド。

（なに！ 動きが違う……！）

クロコの斬撃がラギドの動きに合わせて放たれる。

ラギドの体がわずかに裂ける。ラギドは素早く斬撃を返す。

キンッ！

クロコはラギドの斬撃を見切り、受け流した。ラギドの体がわずかに流れる。

ヒュンッ！

クロコの斬撃がラギドの体をとらえた。ラギドのわき腹がわずかに裂ける。

ラギドは素早く後ろに飛び距離を取った。

「おのれ……おのれ……！ こんなガキに、我が軍団が！ この私が――」

ラギドは強くナイフを握る。

「負けるわけがない――」

ラギドはクロコに突進する。

クロコもラギドに突進する。

「うおおおお!!」

クロコの叫びと共に、二人の体が斬撃と共に交差した。

二人の動きが止まる。

互いに背を向けたまま、二人共、わずかのあいだ大地に立っていた。

しかし、片方の体がゆっくりと傾き始める。

ラギドは力無く地面に倒れた。

クロコはそれを静かに見つめ、一人大地にゆうぜん立っていた。

パンパンパンッ!

国軍の撤退の合図が大地に響く。

その合図を聞き、解放軍の兵士達は長い戦いの終わりを悟った。

基地の高台にいたローズマンはその合図を聞いた直後、急に気が抜けたようにため息を吐いた。

基地の前に立つガルディアはその合図を聞き、静かに笑みを浮かべた。

国軍の兵士の姿は消え、静まりかえる戦場。

置き去りにされた三台のグラン・マルキノ、その二つからは大量の黒煙が昇り、残り一つは前方が地面に陥没している。

クレイドは一人、地面にひざを着けたままその黒煙を見上げていた。地面に倒れるようにして着地したまま、立ち上がれずにいた。傷だらけの体、ボロボロの服を染めていた血はすでに黒く変色していた。

「よう……」

近くで声がした。見るとそこにクロコがいた。傷だらけの体、ボロボロの服、黒く変色した血、クレイドとほとんど同じだった。

「立てるか」

「ああ」

クレイドはそう言って、歯を食いしばりながら、大きな体をゆっくりと起こす。

そして立ち上がろうとしたその時、

「おおっ!？」

クレイドはグラツとバランスを崩し倒れそうになる。クロコがすぐに肩を貸し、クレイドを支えようとする。しかし、

「うわっ！」

クロコもグラスとバランスを崩し、そのまま二人で地面に倒れ込んだ。

「くっああっ！！」

クロコは変な声を出し、そのまま仰向けになって空を見上げた。
クレイドも仰向けになる。
クレイドが青い空を見ながら口を開く。

「終わったな……」

「ああ……」

「勝ったな……」

「ああ……」

「おまえ、ボロボロだな……」

「ああ、おまえもな……」

「そうだな。だが……」

「ああ……、生きてる」

クロコがそう言った直後だった。クレイドがプツと息を吐く。

「フッフ……、ハハハ、ハハハハハ」

クレイドは大声で笑う。続けてクロコも笑う。

「ハハハハハハハハ」

二人は空を見上げたまま子供のように無邪気に笑っていた。

互いに多くの傷を負い、立つことすらできない二人。しかし生きている、生き残った。どちらも命を失うことなく、今、ここで、二人は大声で笑っている。

二人の笑い声は長く長く大地に響いた。

日が沈み始めていた。戦いを終えた敵の本陣、その司令官テント、その中で、報告を聞いたロイスバードはぼうぜんとした様子でイスに座っていた。

「スコアを含む奇襲部隊は返り討ちにあい……第一アサシン部隊は全滅……そしてグラン・マルキノは三台とも失った……」

向かいに座る大柄の副官が声を荒げる。

「少将！！ 態勢を立て直し、再び攻撃を仕掛けましょう！！ かなり戦力が削られたとはいえ、数ならばまだこちらが上回っております！！」

「撤退する……」

「し、しかし……」

「このままでは消耗戦になる。ガルディアが現れたという報告もある」

「そ、そんな一人の剣士など……」

「おまえはグレイ・ガルディアのことを知らんからそんなことが言える……！」

ロイスバードは初めて顔を歪める。そして叫ぶ。

「くそオーツ！！」

ロイスバードは拳を振り上げドンツ！！と机をたたいた。
ティーカップが倒れ、なかの紅茶がこぼれて机に広がる。

（なんとという失態だ……！ブルテン皇帝やオルズバウ元帥になんと報告すれば……！！）

ロイスバードは歯を食いしばる。そして鬼の形相でゆっくりと顔を上げる。

「覚えていろよセウスノール軍……！私はきさまらの前に再び現れる。そして、その時こそ……！！」

テントの外、多くの手傷を負ったホコリまみれの兵士達のなか、レイデルは一人きれいな格好で、上機嫌に鼻歌交じりで歩いていた。

そこから少し離れた場所、兵士達から少し離れ、スコアは一人立っていた。

スコアは静かにスティアゴア台地越しに、自分がいた戦場の方向を見つめていた。

（また、ボクは守れなかった……）

スコアは悲しげな瞳で台地を見つめる。

同じ頃、解放軍基地の広場。そこになんとか戻ったクロコは、終わりの余韻を感じながら静かに、スティアゴア台地越しの敵本陣の方向を見つめていた。

ケイルズヘルの戦い。その激しい戦いは静かに幕を下ろした。

0 - 3 フロウ・ストルーク（前編）

それは約一年前の出来事。

セサミボーダーという名の町、その中心地、純白の屋敷が連なる貴族住宅街にフロウ・ストルークは住んでいた。

その頃のフロウは、将来この町の町長である父親の後を継ぐために、様々な教育を受けていた。

貴族の家庭に生まれたフロウは裕福で何不自由ない生活を送っていた。そしてフロウにとってはそれが当たり前のことだった。

そして将来は町長になってセサミボーダーの町を治める。それがその時のフロウの目標だった。

フロウはその目標に向け日々努力をしていた。

その頃のフロウにはそれが一つの強い目標であったが、目標とは別にフロウは家族に対してある大きな秘密も持っていた。

ある日の午後、フロウはいつも通り屋敷の一室で家庭教師に勉強を教えてもらっていた。

フロウは大きな机に座り、問題を解いている。問題を解き終わるとそれを先生に手渡す。

先生は問題を採点すると満足そうに口を開く。

「うん……素晴らしい、満点だ。フロウ」

「本当ですか！ 先生」

「やはり君は理解が速いな」

フロウにとってはいつもの通りの結果だ。それでもほめられると素直にうれしかった。

その日の夜フロウはいつものとおり、父と母、三人で食卓を囲んだ。

母はうれしそうに口を開く。

「今日も満点だったそうね。フロウ」

「はい、母上」

「先生がほめてらしたわ。フロウは自分が今まで教えた生徒のなかでも特に優秀だと」

「そんなこと……、僕なんてまだまだです」

フロウは笑いながらそう言った。

「剣術の先生も言っていたわ。フロウには特別なものがあるって。ホント、フロウは我が家の自慢ね。この町の将来も明るいわ」

「後はもう少し背が伸びるといいのだがな」

父が落ち着いた声で口を挟む。

「そうねえ、もう二年前から止まってしまっ……でも大丈夫よ、フロウ。またすぐ伸び始めるわ」

「べ、別に僕は気にしていませんよ。母上、たとえ身長が低くてもこの町を立派に治めることはできます」

「だが威厳はないな」

父がまた口を挟む。

「まあ、あなただったら、大丈夫よ、フロウ。父上も私も背は高いから、あなただけ低いなんてことは……」

「だ、だから、気にしていませんよ!!」

「声が大きいぞフロウ。食事中だ」

最近なにかとこの話題が多い、十八歳になるフロウはいまだに身長が150cmない。町を歩けば五つは年を下に見られる始末だ。これのおかげで年上好みのフロウには、いまだに付き合う相手がいない。

知識が広く、頭も良い、運動神経もあり、気配りもでき、顔も整っているフロウだが、この異様に小さい身長のため、おかげさまで彼女ができる気配がない。実は秘かな悩みである。

そんな悩みはさておき、フロウにはある秘密がある。

家族の誰も知らないある秘密が……

ある日の午後、フロウはいつもどおり屋敷で昼食を食べたあと、

いつもどおり自家用馬車に乗り、いつもどおり町に出る。ある場所に行くために。とはいえ、そこは同じ町の中心部、あつという間に着いてしまう。

大きな屋敷が並ぶ街の中心部、その中でもひととき巨大な純白の建物。

セサミボーダー町立ジーブ図書館。

グラウドでも屈指の書籍数を誇る図書館である。ここに通うのがフロウの日課の一つだ。

フロウは広い図書館内に入ると、大きな本棚のあいだを歩く。

「さてと……」

フロウは適当に一冊本を抜くと、さらさらと素早く読み始める。そして十分ぐらい読むと、それをすぐにもとの本棚に戻した。実はこの図書館に行った目的は読書ではない。

このあつという間に終わる読書は食卓での話題作り、つまりは「しっかり読書をしていました」と家族に報告するためのものだ。

フロウはそのまま階段をのぼり二階のテラスへ上がる。

一階は人が多いが、二階は専門的な本ばかりで人の姿はまばらだ。フロウはさらに三階のテラスに上がる。

ここまで行くと誰もいない。ときどき専門家らしい老人がいることもあるが……

「今日はいないね」

フロウは誰もいないことを確認するとテラスの壁に取り付けられている大型の窓を全開に開けた。

窓から見える純白の屋敷の屋根の数々。優しい風が入ってくる。

フロウは迷わずその窓から身を乗り出し、外に飛び出した。

フロウの体は図書館の窓から勢いよく落下する。

右足で建物の壁に触れ、軽くブレーキをかける。

そしてフワッと地面に落下する。

もうこれを何十回もやっている、フロウにとっては慣れたものだ。図書館の外でフロウを待っている使用人は、まさかこんな所から外に出るなんて思ってもいないだろう。

家族に内緒で外に出るフロウ。

外に出てしまえば自由の身、フロウはタッタと走りながら裏道に入る。

そして町の中心部からあつという間に飛び出す。

セサミボーダーの町の中心部から外側、そこには平民の住む町が広がっている。それよりもさらに外側、町を囲む最外部。そこには平民と農民が入り混じって住んでいる荒んだ町並みが広がっている。

フロウは路地裏の陰で平民の服装に手早く着替え、髪を少し乱し、そして念のため護身用の短剣を懐に忍ばせる。

そして荒んだ路地を歩く。木製のハリボテの様な民家が延々と続く景色。まともに補修もされていない家の数々は痛々しいほどだ。

ブルテン皇帝が悪政をふるってからは、国全体が荒れ果てている。そしてとくに貴族、平民、農民の権力差は異様な隔たりを見せ、地位的に下位に属する者の生活は目もあてられない。

フロウはこの路地のさらに裏道に入る。

ボロボロの家に挟まれた裏道は、子供一人がやっと通れるほど狭さだ。

フロウはそこを難なく抜ける。

そして少しだけ広いスペースに出た。フロウにとってはいつもどおりの道順だった。

そこには、ひときわボロボロの小さな家が建っている。

比較的大きな木製の家々に囲まれているその家は、周りに光が届かず外の路地よりもさらに暗く、荒んだ雰囲気だ。

フロウはそこに近づく。

家の扉が目の前まで近づいたその時、小さな音色が耳に入ってきた。

その音色が耳に入った瞬間、フロウは、辺りの景色が急に明るくなり、光に包まれるような感覚がした。

美しく、そして優しい音色。

フロウはゆっくりと扉を開けた。

美しい音色がよりはつきりと聞こえてくる。

暗い部屋のなかで一人の少年がフルートを吹いている。

少年は年齢十六、七、黄色い髪に茶色の瞳をしている。柔らかな顔つきで、全体的に優しいが雰囲気を持っている。

暗い家に響き渡る美しい音色。

荒んだ町でこの空間だけ、柔らかな黄色い光に包まれたような錯覚を覚える。

そして曲はゆっくりと終わった。

少年は静かにフルートから顔を離し、フロウの方を見てニコツと笑う。

「やあ、フロウ」

「綺麗な曲だね。マウル」

「うん、最近作ったんだ」

「僕のお迎えに吹いてくれたんだね」

「ハハハ、さすがフロウ、なんでもお見通しだね」

マウルは頭を触りながら笑顔で言った。

マウルはフロウの友達だ。

五年前、当時十三才のフロウは屋敷の生活に飽き飽きしていた。町長になることに興味がないにも関わらず、そのための勉強ばかりが続く日々。

ある日フロウは図書館から始めて抜けだし、町の最外部に出た。貴族の服装をしたままここへ来たフロウは、町のチンピラ達に目をつけられ襲われた。

必死で逃げるフロウを偶然見つけたマウルは、フロウを裏道へと引っ張り、チンピラ達を巻いて助けた。

それをきっかけにフロウとマウルは友達になり、以来フロウはたびたびマウルの家を訪れるようになった。

マウルの地位は農民。

本来なら貴族が農民と友達になることは世間的には許されない。けれどフロウにとってはそんなことは関係なかった。フロウにとってマウルは大切な友達だからだ。

十八になって両親の信頼を得てからは毎日のように図書館に通い、そしてこっそり抜け出し、ここに来ている。

フロウはここでマウルの演奏を聴いたり、雑談などをしたりして過ごしている。

「『ダークサークル』……?」

マウルがフロウに聞き返す。

「そつ、『ダークサークル』……地位の隔たり、長く続く内乱、乱れる人の心、そんな混沌とした今のこの国の状態を、哲学者クラース・デイルリッチが国を丸ごと呑み込む暗黒円『ダークサークル』って名付けた。以来、国中でそう呼ばれてる。今のマウル達農民の生活が荒れ果てているのもその一つさ」

「そうなんだ。今のこんな状態が国中で起きているんだ……」

「そう、この町の最外部の今の状態も『ダークサークル』の影響だって言えるね」

「それじゃあ、今起きてる国軍と解放軍の大きな内乱も？」

「そうだね、それも『ダークサークル』に含まれる……ただ、ここだけの話、僕は解放軍側の方を支持してるんだ」

「解放軍側を？ ……だけどここは国軍領だよ」

「うん、だからここだけの話……正直、国軍の暴挙には耳を疑うことが多いからね。スロンヴィア虐殺にピークライト虐殺、ライゲン虐殺……挙げればきりがいいからね」

「うん……確かにそういう話を聞くことに、すごく怖く感じる。ボクらにも同じことが起こるんじゃないかって……」

「そうだね、それほど今の国の状態は悪いって言える。特にマウル達農民に関しては、はっきり言って異常だ……でもねマウル」

「なに？」

「僕が町長になったら、この町のこんな状態を変えてみせる。農民がちゃんとした生活を送れるような、そんな町に変えるんだ。そうすれば今の状態を、この町だけでも変えることができる。そして、もしかしたらこの町から、その変化がこの国中に広がって、国全体が変わることだってあるかもしれない！」

フロウは強い口調でそう言った。それを聞いてマウルがほほえむ。

「そうだね。そうなったらステキだね」

「そうさ！ 夢はでかく持たないと！」

「フロウだったらきっとできるよ。僕もそうなるように応援するね」

「ありがとうマウル。それじゃあさ、応援ついでに聞かせてくれない？ いつもの曲」

「ハハハ、またか、フロウは好きだね」

「マウルは嫌い？」

「ううん、もちろん大好きさ」

マウルはそう言って白いフルートに口をあてる。

その直後、暗く狭い部屋は、美しい音色に包まれる。

フロウにとってここは、自分の屋敷よりもはるかに質素で、狭く、暗い空間だ。けれどこの音色一つでこれ以上ないほどの癒しの空間へと変わる。

マウルのフルートによる演奏はそれほどまでに美しいものだった。

マウルの持っているフルートは実は高価のものだ。
美しい装飾が施された白色のフルート。

マウルの誕生日にフロウがプレゼントしたものだ。

マウルはそれまでは木のフルートを使っていた。

壊れて捨てられていたフルートを真似て、マウルが木を削って作ったものだ。音が出るようになるまで相当苦労したらしい。

その木のフルートをフロウが吹いても、かすれたような音しか出ない、しかしマウルが吹くと美しい音色を奏でた。

マウルには音楽の特別な才能があった。

フロウがプレゼントしたフルートを初めて吹いた日、マウルはわずか三十分でそれを自分のものにした。

そしてマウルが奏でたいつも曲。

それを聞いた時、フロウはあまりの美しさに感動すらした。

フロウは屋敷で父親が招待した音楽家たちの演奏を良く聴くが、そこで聴いたどのフルート奏者よりもマウルの音色は美しかった。

そしてマウルが作る曲、それは屋敷で聴いたどの曲よりも暖かく、

優しい音色だった。マウルの性格がよく出ているとフロウは思った。

フロウはそれらの曲がなによりも好きだった。

音色が静かに止む。

温かい光に包まれていた部屋が、再び暗く沈む。

「ねえ……、マウル」

曲を吹き終えたマウルの前で、フロウはこの日まで、ずっと考えていたことをマウルに話す。

「マウルは音楽家になる気はないかい？」

「音楽家？」

「そつ、フルート奏者」

「考えてことないな。ボクは好きで吹いてるだけだし、それにボクの腕で音楽家になんて……」

「そんなことはないよ。僕は色々な演奏を聴いているけど、マウルの腕は決してそれに劣らない。しっかりとした指導を受ければ、きっとすごいフルート奏者になれる！」

「だけど……」

「フルート奏者として有名になれば今の生活だって抜け出せるよ。大丈夫、僕も協力するから」

マウルは少し考えた。

「うん、わかった。ボク、音楽家を目指して見るよ」

マウルはそう言ってニツコリと笑った。

その答えを聞きフロウも嬉しくなってニツコリと笑った。

その日の夕食、フロウの父がある話を始めた。

「最近、町の最外部に住んでいる農民達がなにやら奇妙な集会を開

いているらしい……」

「奇妙な集会？　どんなものなんです」

母が聞き返した。

「詳しいことはわからん。だが警察の話では反乱を起こそうとしているのではないか、ということだ」

「反乱！？」

「セウスノール軍が勢いを増してから、そのようなことが国のあちこちで起きているらしい。そのような反乱は主として貴族をターゲットに行われる……」

「怖いわ……取り締まれないのですか？」

「無論取り締まるさ。今その対策を立てているところだ」

その話を聞いてフロウは食事の手を止めた。

「確かに対策を立てるも大切だと思います。しかし、それより今の農民の待遇を少し改善した方が良いのでは？」

それを聞いて、父は静かな口調でしゃべる。

「……町にいる農民は領地を追われて移りつんだ者が多い。そのよ
うな者達に一人ひとり構っていては町の運営は成り立たん」

「その理屈はわかります。それでも、今の貴族と農民との生活には

あまりに差があります。町の貴族の生活レベルを少し落としても、農民、平民の待遇の改善をはかるべきではないんですか。それが結果的に町の治安を良くすることにも繋がります」

「お前の言いたいことはわかる。しかし、それを貴族が了承するはずがないだろう。それをさせるにはかなり強引な手を使わなければならない」

「それでも……」

「それができたとしても平民や農民の生活レベルの向上は今の体制下で容易にできることではない。フロウ、おまえは頭がいい……しかし頭がいいだけで経験を持たないおまえは、いつも小手先で物事を考える。現実はその構想どおりにはいかないものだ」

「……!」

フロウは言葉に詰まった。

「とにかく今、町の最外部は非常に治安が悪い。お前がそこに近づくことなどないと思うが、住宅街の少し外側にも、そのような輩はうろついている。十分気をつける」

「……はい」

「農民などに関わっても口くなことはない」

「……! 父上、今の発言はどうでしょうか? 農民にも『誇り』を持っている者はたくさんいるはずですよ。それをひとくくりにするのは間違いです」

「しかし、町の治安を一番乱しているのは農民だ」

「それは生活に困っているから……」

「どんな理由があろうとも、危険なものには警戒する。当然のことだろう」

母も口を開く。

「フロウ、父上はあなたを心配しているのよ。分かるでしょう……？」

「……………はい」

約一週間後、フロウはいつも通りマウルの家に行った。
フロウが重く口を開く。

「今回も駄目だったか……………」

「うん。農民は組合に入れないって……………」

マウルは肩を落とす。

「これで三つ目……町にある組合全てか……」

「うん……」

「組合に入って許可を得ない限り、音楽家として商売するのは不可能に近い……」

「けど……演奏すら聴いてもらえない」

重い空気が流れる。しばらくの沈黙。

フロウは口を開いた。

「マウルの腕なら絶対に音楽家としてやっていけるのに……地位なんて関係ないじゃないか……！　そんなの音楽といたいなんの関係があるんだ……！」

フロウは声を荒げた。理不尽と思える状況に対して怒りがわいていた。

「フロウ……」

「本当に信じられないよ！　もし僕に町長になるっていう目標があれば、今ごろ解放軍に入ってるぐらいさ！　……こんな地位だけで人を判断するなんて正しいはずないんだ！」

フロウは感情的になっていた。

「……………地位か」

マウルは静かに言った。フロウと違い冷静な表情だ。
なにか違うことを考えているように感じた。

「……マウル？」

フロウはその様子が気になり顔をのぞく。

「あっ！ ゴメン、フロウ。“地位”って聞いてちよっと思つことがあつて……」

「“地位”で？」

「うん、前にフロウが『ダークサークル』の話をしてくれたよね」

「えっ？ うん」

「ボク達の世界は今、『ダークサークル』に吞まれているんだつて。地位の大きな開きもその一つだつて」

「………うん」

「ねえ、フロウ。でもさ、ボク達つて不思議だよね、こんなに混沌としてる世界のなか、こんなにも境遇が違つのに、ボク達は出会い、そして互いに大切な友達になつてる」

「そんなの………当たり前だよ。友達になるのに境遇なんて関係ない」

「………でも、ボク達はただ会っただけでも、こうして隠れて会わなきゃならない」

「……………」

「ねえ、フロウ。ボク、ときどき思っんだ。ボク達はきっと、生まれながらに友達だったんじゃないのかなって」

「生まれながらに？」

「うん、たとえ二人が今とは違う境遇であつたとしても、ボク達は出会っていればきっと友達になった。地位なんか関係なく、どんな境遇でも、ボクらはきっと友達……」

フロウはそれを聞いて思わずほほえんだ。

「そうだね、僕もそんな気がするよ。でも今とは違う境遇で会いたかったなあ。そうすれば堂々とマウルに会えるもの」

「そうだね。フロウ」

マウルもニコツとほほえんだ。

ある日の朝、フロウは父と偶然、屋敷の廊下で顔を合わせた。

「フロウ、今日は早めに帰ってこいよ」

「え……………なぜです？」

「なんだ、聞いていないのか？　今日は著名な音楽家を屋敷に招いているんだ。食卓の場で間違っても遅れることのないようにな」

「……！　わかりました」

（これは……チャンスだ！！）

フロウはその日、マウルの家に行くまでのあいだ興奮しきりだった。

マウルの家に行っても興奮は収まらなかった。

「大チャンスだよ！　マウル！　こんな機会二度とない……！！」

「で、でも、その先生、貴族なんですよ。ちゃんと演奏聴いてくれるかな……」

「それは大丈夫！　僕に考えがあるんだ」

その日の夜、家族とその先生を加えた四人で食卓を囲んだ。

その音楽家の先生は、四十代半ばの男性、丸い眼鏡をかけており、大きな鼻が特徴的だった。

グラウドでは、楽器は主に、フルートとたて琴が親しまれている。この先生はマウルと同じフルート奏者だった。

食事が終わった後、先生は父に客室に案内された。

先生が一人になるのを見計らってフロウは屋敷の門へと向かった。鋼鉄の門は固く閉ざされ、警備も二人配置されている。

フロウは警備の二人に声をかける。

「ゼクソン、サーズ、母上が呼んでいるよ」

「ターニア様が？」

「うん、早く行ってあげて」

「わかりました」

警備員の二人はそう言っで屋敷のなかへと入っていった。フロウはその姿を見送ると内側から鋼鉄の門を開ける。そして外へとヒョイツと顔を出す。

「マウル、大丈夫だよ」

フロウがそう言っで塀にくっついて隠れていたマウルが顔を出す。

「フ、フロウ、大丈夫なの……？」

マウルは不安そうな声を出す。

「大丈夫さ、見つかりっこないよ。仮に見つかったも僕がなんとかするから」

フロウはそう言っでマウルを敷地内に連れだす。

そして屋敷の裏へと連れて行っだ。

窓から漏れ出す屋敷の明かり、それに照らされるマウルの姿は、いつものホコリだらけの恰好よりもきれいになっていた。

「ちゃんと洗ってきたみたいだね」

「う……うん、すごく時間かけて」

「よし！あとは服装だ」

フロウは屋敷の植木に隠していた大きなバッグを取りだす。
そしてそこから貴族が着る高価な服を出した。

「うわあ、きれいな服」

「僕が買ったんだ。新品だよ」

「ごめんね、こんな高価の服……」

「いいんだよ。お金のことは」

フロウはマウルにその服を着せると、部屋から持ちだしたクシで
丁寧に髪を整える。

身だしなみを整えたマウルは、農民とは思えないほど上品に見えた。

柔らかい黄色い髪にもともと整った顔、冷たい夜風が吹くと黄色い髪がフワリと浮いた。

「どこかの育ちのいいオボツチャンみたいだ」

フロウが思わず言った。

「や、やめてよ。なんだか恥ずかしいな」

マウルは顔を赤くする。

「よし、とにかく行こう。時間はあまりない」

フロウはマウルを引っ張り、開けておいた窓から屋敷に入る。

そのままマウルを連れて先生のいる客室に向かった。

屋敷は広い割に住んでいる人間は少ない。客室は少し遠いが、注意していけば誰にも見つからずにたどり着ける。

二人は誰にも見つからないように、慎重に、慎重に、先生のいる客室へと向かった。

二人は客室の扉の前に立った。フロウの心臓はここにきて初めて高鳴り始めた。

フロウはチラッとマウルの顔を見る。

マウルは青い顔で、唇を震わせている。フロウよりはるかに緊張しているようだ。

「僕が合図するまで中に入らないでね……扉から少し離れて待って」

フロウはマウルにそう言って扉をノックした。

しばらくして扉が開き、先生が顔を出した。

「……ん？ フロウ君。どうしたんだ、いったい」

「夜分遅くに恐れ入ります。少し失礼してもよろしいでしょうか？」

「ん……？ ああ、いいとも」

先生は不思議そうな顔でフロウをなかに入れた。

「あの、ここに来た理由はほかでもない。先生に聴いていただきたいんです。僕の友達の演奏を」

「友達の演奏？」

「はい、フルート奏者でとても才能があるんです。先生ならば、きっと理解してくださると思います……」

「今来ているのかね？」

「は、はい、マウル！」

フロウが呼ぶと扉がゆっくりと開き、マウルがヒョコッと顔を出す。

不安そうに部屋を見渡している。

「大丈夫、入ってきて」

緊張した様子のマウルは固い動きで部屋に入ってきた。

「この子が……」

先生はマウルの方をジッと見る。

先生に見られ、マウルはあまりの緊張でアワアワしている。

フロウはその様子を見て少し不安になる。

（大丈夫かな。これで演奏できるのか？ とにかく早く始めた方が良さそう……）

「マウル、先生に君の演奏を聴いていただいて」

「う、うん！」

マウルは真つ赤の顔をしてうなずくと、白いフルートを取りだす。そして一度ゆっくり深呼吸すると、スッと口をつけた。口をつけた途端、マウルの表情が急に真剣になる。今までの様子とは一変し、静かな雰囲気のマウルを包む。

マウルは演奏を始める。

その瞬間、その客室は暖かな光に包まれた。黄色い光、淡い赤い光、薄い青い光、その光は優しく演奏を聴く者の体を包み込んだ。

（すごい、やっぱりマウルはすごい……いつも以上の響きだ）

先生は静かな様子で、その演奏を聴いていた。優しく温かな光がしばらくのあいだ客室を包んだ。

そして演奏は終了した。

マウルはフルートから口を離す。

するとまた、顔がみるみる赤くなる。

フロウはチラッと先生の表情を見た。

先生は無表情でマウルの方を見ている。ゆっくりと口を開く。

「フロウ君、彼はフルートに関してどのような教育を受けてきたんだね」

「えっ！？ え〜と……独学です」

「独学……」

先生はアゴを指でさする。

「ど、どうでしょうか？ 彼の演奏は……？」

「……………天才だ」

「……！」

「信じられない……これが独学なんて。しかしこの音色の特徴、確かに独学としか……、しかし信じられない」

先生の額から汗が流れている。驚嘆の汗だ。

フロウは確かな手ごたえを感じた。

「せ、先生がよろしければ、彼にしっかりとした指導を受けさせてはいただけないでしょうか？ 彼ならきっと……」

「ああ、もちろんだ。喜んでそうさせてもらおう。彼ほどの才能をこのままにしておくことは、フルート奏者としての私が許さない」

「そ、そのことなんですが、先生。実は彼には少しだけ、ほんの少しだけ問題が……」

フロウはここで初めてマウルの地位について打ち明けようとした。

「問題？　なんだね」

（大丈夫だ、絶対に）

「彼は農民なんです」

それを聞いた瞬間、先生の顔色が変わった。表情が急に固まる。そしてゆっくりと顔を手で覆う。

「……………、なんてことだ……………」

「先生……………」

先生はフロウの顔を見つめる。

「フロウ君、すまないがそれは無理だ。農民は音楽家にはなれない……………」

「……………！　そんな、なぜですか！？　先生もあの演奏を聴いたでしょう！　彼には才能がある！」

「フロウ君、残念なのは私も同じだ。しかし無理なんだ」

「しかし！　音楽は地位でするものではないでしょう！　どんな境遇の人が演奏しようと、その演奏が素晴らしければ同様に人の心を動かすことができる！！」

「そのとおりだ。しかしね、私は今までさまざまな子達に音楽を教えてきた。貴族だけではない、平民にもだ。そして、過去には音楽家になろうとした農民の子にも教えたことがある。だが、無理なん

だ。農民は音楽家にはなれない……今のこの国での音楽の世界では、農民が踏み込める領域はないんだ」

「境遇と音楽はなんの関係もない！ マウルの表現する音色は素晴らしい！！それで充分じゃないんですか！？」

「フロウ君、聞いてくれ。境遇とは運命にも等しいものだ。そこから人は逃れることなどできない。どんな才能があろうと、腕を磨かれた音楽家が楽器を弾けないのと同様に……」

「そんなこと……！」

「フロウ君、それにマウル君、だったね。本当にすまない。私では君の力になることはできない」

マウルはこれまでの会話をぼうぜんとした黙って聞いていた。

「ご家族には内緒で連れてきたのだろう。先ほどの演奏をもし聴かれていたとしても、私がしたことにするから、君は早くここから出たほうがいい」

フロウはそのままマウルとともに警備の目を盗んで屋敷を出た。夜の暗い道を、フロウとマウル、二人きりで立っていた。

「送るよ。マウル……」

「え……！？ でもフロウ……こんな夜に屋敷から出たら」

「いいんだ」

フロウは静かにそう言った。

夜の道を歩く二人。

そのときのフロウの表情は、表情だけなら冷静そのものだった。しかし、内心ははらわたが煮え返る思いだった。フロウは心臓のあたりに燃えるような熱さを感じていた。

夜の道でなければ、真っ赤に上気した顔で、マウルに内心を気付かせていただろう。

フロウはマウルに気付かれないように静かに歯を食いしばっていた。

（境遇？ 地位？ なんだ、それは。マウルは才能がある。それなのに……、境遇だって、地位だって、ただの人間が定めているラインじゃないか。そんなもの、マウルとなんの関係があるんだ。どんな境遇だってマウルはマウルだ。どんな地位だってマウルの演奏は美しい。そんなの、聴けば誰にだってわかるじゃないか。どうして……！ どうしてそれがわからないんだ……！！）

フロウはあまり悔しさに涙が出そうだった。

言葉が出てこない。

フロウとマウルは黙って町の最外部へと歩いて行った。

フロウはマウルを家まで送った。

「それじゃあね。マウル」

「待って！ フロウ」

立ち去ろうとするフロウをマウルは止めた。

「マウル？」

「ボクの演奏、一曲だけ……聴いてくれないかい」

フロウはマウルに部屋へ招かれた。

フロウはこんな時間にマウルの家に入るのは初めてだった。明かり一つない漆黒の空間。

暗闇のなかでマウルの声だけが響いた。

「ねえ、フロウ。少しだけ話を聞いてくれないかい」

「なに……？」

「ボクはね……嬉しかったんだ」

「えっ？」

「フルート奏者になれなかったのは確かに悲しかった。でもねフロウ、それ以上に、ボクのためにフロウが色々としてくれたことが、ボクには嬉しかったんだ……」

「マウル……」

「ボクの演奏は、確かにたくさんの人に聴かせることはできないのかもしれない。だけど、フロウには聴かせられる。ボクにとって一番聴かせたい人に聴かせられる。一番聴かせたい、たった一人に聴かせられる。ボクはそれだけで十分幸せだ……」

「マウル……………、ハ……………ハハハ、贅沢だな……………マウルの演奏を一人占めにできるなんて」

「ありがとうフロウ。本当にありがとう。今日のことも、そして今までのことも、だから、これはボクからのほんの少しのお返し。聴いてフロウ、ボクときみが一番好きなこの曲を……………」

マウルはゆっくりと演奏を始めた。

漆黒の空間に暖かな光が差し込み、そして満たす。

優しい音色、温かな音色、包み込むような音色。

暗闇のなかで音色が響く。

暗闇のなか、本来ならマウルの姿は見えない。

けれどフロウの目には、確かにそこにマウルの姿が映っていた。

柔らかな光に包まれて演奏するマウルの姿が……………

（そうか、そうだったんだ。父上や先生が間違っていたように。僕も間違っていたんだ。才能……………名誉……………そんなもの、マウルにはきつと、なんにも関係なかったんだ。そんなものがなくても、マウルは、人は……………こんなにも輝ける）

フロウの目から熱い涙がこぼれ落ちる。

（ありがとう、マウル。ありがとう）

……………フロウはこの日の出来事を、今でも鮮明に思い出せる。

けれど、その時のフロウはその後に起こる、ある悲しい出来事を、欠片ほども予期してはいなかった。

0 - 4 フロウ・ストルーク（後編）

暗闇での演奏から数日が経っていた。

フロウはいつも通りの日常を送っていた。

マウルを屋敷に連れ込んだことと、夜遅く屋敷を無断で外出したことは、幸運にも家族にはばれていなかったようだ。

しかし、ある日の夜、突然フロウは父の部屋に呼び出された。

黒い仕事机に座る父。

「なんででしょうか？ 父上」

フロウが来ると父はゆっくりと口を開いた。

「フロウ……お前に一つ聞きたいことがあってな」

重々しい口調だった。

「なんででしょうか？」

「おまえは私に一つ、隠しことをしているだろう」

その言葉を聞いて、フロウはドキッとした。すぐにマウルの顔が頭に浮かんだ。

「なんのことでしょうか？ 確かに父上にすべてのことを話しているわけではありません。しかし別に大きな隠しごとなど……」

「ごまかしても無駄だ。私はもう知っている。お前が農民と交流を持っていることなど」

「……！！」

フロウは自分の顔がこわばるのを感じた。あの日、マウルを連れてきた日、実は父に気付かれていたのではないか、そう思った。

「いつから、気付いていたのですか……？」

フロウは確認するためにそう聞いた。

「二年前からだ」

「……！」

それは思いがけない答えだった。父はずっと以前からマウルのことを知っていたのだ。

「お前なら、いつか気付くと思っていた。貴族と農民は決して関わりあうことなどできないと」

「そんなことはありません！ 確かに生活や境遇には大きな差はあります。しかし、そんなことは大きな問題じゃない……！」

「……今すぐ縁を切れ」

「……!!」

フロウは一瞬驚いた。しかしすぐに怒りがわいた。

「なぜですか！？　なにか問題でも……」

「それがわからないお前ではないだろう……！」

父は声をわずかに荒げた。

フロウは少しだけひるんだ。しかしすぐに父をにらみつける。

「確かに貴族が農民と深い交流を持つなど、世間的に許されることではないのかもしれませんが。しかしマウルは僕の友達です！」

「おまえは仮にも将来、町長になる身だ……！　それがわかっていくのか」

「町長になるからこそ、町の住民に差別無く関わるべきではないのですか！？」

「そんなものは理想論に過ぎん……！　前にも言ったがおまえは頭だけで経験がない。だから現実と理想の区別がつかんのだ。現実はその簡単なものではない……！」

「仮にそうであったとしても、なにもしないよりはマシなはずだ！」

「………もういい。もし、おまえがその農民と縁を切らないのならば、お前とは親子の縁を切る。屋敷から出ていってもらふ。無論町長にもなれん」

「そんな……」

フロウは一步退く。父の目は冗談を言っているようには見えなかった。

「だが私も悪魔ではない。最後に一度だけその農民と会い、別れを告げることを許そう。だがそれ以後、その農民と会うことを一切禁止する。もし一度でも会えば……わかつているな」

父の話はそれで終わった。

フロウの心はこの日、闇のなかへと放り込まれた。

次の日の昼ごろ、フロウは普段と違い、堂々と屋敷を出て、堂々と街の最外部へと足を運び、マウルの家を訪ねた。
そしてその話をした。

「そんなこと………」

マウルはぼうぜんとした様子だった。

フロウは悔しさをかみ殺している、唇がわずかに震える。

「こんなの絶対におかしい。どうして……!!」

「フロウ……」

「マウルと別れるぐらいなら、僕は町長になんてならなくていい……」

…！ 屋敷にだって……」

「……………」

マウルは悲しそうな顔をしていた。

フロウは体全体が震えるのを感じていた。悔しくて、悲しくて、そして怒りがわいていた。

マウルはしばらく何かを考える様子を見せると、静かに口を開いた。

「ボクは構わないよ。フロウ」

「……！ マウル！！ なにを……」

「ボクのせいで、フロウが自分の家族を失うのは、悲しい。ボクはずっと昔に家族を亡くしているから。それに町長になることだってフロウの大切な夢だ」

「でも……！！」

「大丈夫さフロウ。ボクは思うんだ。人生って別れの連続なんだって…… だけど一生会えないわけじゃない。会おうと願えば、いつかきつとまた会える」

「だけど……こんな形で」

「フロウが将来町長になって、町を良くしてくれれば、ボク達は堂々とまた会うことができる。だから、それまでの我慢、ほんのちょっとした我慢……」

「マウル……」

「フロウ、ボクは大丈夫。だからきみはきみの夢を捨てないで。ボクはその時を楽しみに待ってるから……」

「……………ごめん……マウル」

フロウの目から涙がこぼれた。

「フロウは悪くない。謝ることなんてないよ」

マウルはほえんだ。

その後、マウルはフロウを路地の途中まで見送った。そして、そこで最後のあいさつをした。

「さようならマウル……そして、また会おう」

「うん、必ずまた会おう。必ず」

フロウの目からまた涙がこぼれた。

マウルは笑いながらフロウを見送った。けれど、そのマウルの目にも涙がこぼれていた。

フロウはマウルの前から立ち去った。

必ず会える。ただそれだけを信じて……

それからフロウの日々は退屈だった。

マウルと話せない日々、マウルの演奏が聴けない日々。不思議と寂しさはなかった。

けれど、何かが足りない感覚がした。

何か、大切な何かが……

そんな日々が、ただ無機的に過ぎていった。

マウルと別れてから二週間が経ったある日の午後、フロウはなんとなく屋敷の三階から町の景色を眺めていた。その時、フロウはあるものに気付いた。遠くから黒い煙が出ている。

フロウはハッとした。

あそこは町の最外部。

フロウはとんでもなく嫌な胸騒ぎがした。あそこは……マウルの住んでいたあたりだ。

フロウはすぐに屋敷を飛び出そうとした。しかしその時、父の言葉がよみがえる。

（もし一度でも会えば、分かっているな……）

けれどフロウはすぐにその言葉を振り切った。

なにかとんでもないことが起きている。そう直感した。

迷っている時間なんかない！

フロウはそのまま屋敷を飛び出そうとする。

しかし、昼間にもかかわらず鋼鉄の門は固く閉ざされ、警備の者がすぐにフロウを止める。

「いけません、フロウ様。今日の外出はヴァルト様から固く禁じられております」

「禁じている！？ 父上が……？ どうしてだ……！」

「それは……私どもの口からでは」

フロウは歯をギリッと鳴らした。

そしてすぐに屋敷に走って戻った。

そしてフロウはすぐにまた門に戻ってきた、片手に小剣を持った状態で。

「フ、フロウ様……！」

「どけえっ……！」

フロウは大声で怒鳴った。

「や、やむをえん、門を開けよう」

警備のものはすぐに門を開けた。

フロウは屋敷から飛び出すと、マウルの住む小屋に向かって一直線に駆けだす。

向かう途中、煙の昇っている方向から歩いて来る国軍の兵士の集団とすれ違った。百人近くはいただろう。

そのなかの数人の青い軍服には、目立たないが、赤い染みが付いていた。

心臓が嫌な音を立てて鼓動する。

フロウの記憶の中から、ある会話が思い出されていた。

（最近、町の最外部に住んでいる農民たちがなにやら奇妙な集会を開いているらしい）

（奇妙な集会？　どんなものなんです）

（詳しいことはわからん……だが、警察の話では反乱を起こそうとしているのではないか、という話だ）

（怖いわ……取り締まれないのですか？）

（無論取り締まるさ。今その対策を立てているところだ）

国軍が立ち去ったあとの最外部の路地。

ひどい有様だった。

路地を挟んでいた民家はもとからボロボロだったが、それがきれいに思えたほどだ。

ほとんどの扉が砕かれ、壁の所々には無数の銃弾の跡があった。いたる所から薄い煙が上がり、ただの燃えカスとなっている家もあった。

けれど民家だけに閉していえば、まだマシだった、それに挟まれている路地に比べれば。

地獄のような光景だった。

路地にはたくさんの人が血を流し倒れている。路地の奥まで並ぶ倒れる人の群れ、誰一人として動く気配がない。

その中には、剣を握ったままの人も多くいた。おそらく強い抵抗をしたのだろう。反乱を企てていたという話は本当だったのだ。

フロウはそれらを前にして、しばらく立ち尽くしていたが、再び駆けだした。マウルの小屋へ向かうために。

（大丈夫だ。マウルは反乱とは関係ない）

路地を駆け抜けると次から次へと倒れ込む人が通り過ぎる。

フロウはひたすら地獄の道を駆け抜けていた。心臓が肺ごと外側から押し潰されているような感覚、それがひたすら続いた。

走り抜けるフロウの前を次々と通り過ぎる無数の人、その全てが地面に倒れ伏していた。

その時だった。

通り過ぎる人の群れ、その一つに目がいった時、フロウの足は自然と止まった。

黄色い髪が見えた。

そして見慣れた服装をしていた。

若い少年が道の端に倒れていた。通り過ぎていった無数の人と同じように。

フロウはマウルに駆け寄った。

「マウルッ！！」

フロウはマウルを抱き起した。

マウルのうつろな目が、少しだけ動いた。

「フロウ……」

マウルはフロウの顔を見ると嬉しそうにわずかにほえんだ。

「マウル、良かった。生き……」

フロウはそう言いかけた時、気付いた。

マウルを抱き起している自分の腕が、赤く染まってきている。
背中から切り裂かれている。

この血の量は浅くない。

「待ってマウル！　すぐ助けを呼ぶから！」

「いいんだフロウ……」

「……！　なにを言って……」

「もう助からない……分かるんだ……」

マウルは遅い手つきで、自分の上着からなにかを取りだした。
白いフルートだ。

「フルート……フロウがくれた。しっかり守れたんだ……これだけ
しか……守れなかったけど」

「こ……こんなもの……！」

「ボクにとっては……すごく大切な物だから……」

「マウル……」

「フロウ……そんな悲しそうな顔をしないで……フロウはボクの大好きな友達なんだ……ボクのせいでこんなに悲しがるのは、ボクにとっては、つらい……」

「だけど……マウル……！」

「笑って……フロウ……」

フロウは思った、マウルは残酷だ。こんなときに、友達が目の前で死のうとする時に、こんな苦しい時に、笑えるはずがない。けれどマウルは、同じように、苦しいだろう時に、笑った、満面の笑みで。

「ありがとう。フロウ」

マウルの腕から力が抜けた。
握っていたフルートが手からこぼれ落ちた。

「マウル、マウル、マウル……！」

マウルはもう何も答えなかった。
フロウの視界が大きくかすんだ。

「うわあああああ」

フロウは大きな声で叫ぶように泣いた。
荒れ果てた静かな路地に、フロウの泣き声だけが延々と響いていた。

暗闇を照らす温かな光は、静かに静かに消えていった。

屋敷の父の部屋。

父は窓から外を眺めていた。

「父上……」

「なんだ……」

返事をする父は振り返らず、背を向けたままだった。

「友達が死にました」

「……そうか」

「国軍が動くには町長である父上の許可がいる。父上は知っていましたね？ こうなるかもしれないということを。だからあのタイミングでマウルと離そうとした」

「……責めているのか？ 私を」

父はゆっくりと振り返った。

「はい」

「……農民達は反乱を企てていた。これ以外、町の治安を守る手立てはなかった」

「……！ だからといって！ 農民を無差別に殺す必要なんてあったんですか！？」

「軍には、極力反乱とは関係ない農民には危害を加えるなど言った」

「今の軍の状態を聞けば、こうなることなんて容易に想像できたはずだ！ あなたは農民というだけで、その存在を差別し軽視したんだ！！」

「差別した……？ 違うな、農民は反乱を企てていた。その行動は治安を乱す悪だ。それをかばうことこそ差別となるのではないか……！」

「違う！！ あなたは貴族や平民の生活を守るために、農民という立場の、地位的下位の者を根こそぎ切り捨てたんだ！！」

それを聞いて父はにらんだ。

「下らない……！ お前はあの農民が死んだことを私の行動のせいにしたただけだろう。だがなフロウ、私は私の行動が間違っていたとは思わない……！」

「間違っている……！ マウルが死んだのはあなたのせいだ。あなたはマウルや罪のない人達を農民というだけでひとくくりにして、虐殺した！！ あなたは人殺しです……！！」

「知ったようなことを言うな!!」

父が初めて怒鳴った。

「たったの十八年しか生きていないお前が、いったい何を知ったよ
うなことを言っているんだ……! お前はこの世界の何を何も経
験してはいない……何も知らない……!」

「知って、経験した結果、あなたのような考えになるのなら、そん
な経験したいとも思わない!!」

「いい加減にしろフロウ、おまえは子供すぎるのだ! だからなに
も分からない!!」

「話にならない……!! もういい! もうたくさんだ! 僕はこ
の家を出る……!」

「つまらんことを言うな……! 出てどうする!?!」

「僕は本気です。父上」

「なんだと……!」

「僕がここに来た一番の理由は、あなたと怒鳴り合うためじゃない。
これを言うためだったんです」

「……………!!」

「母上には『ごめんなさい』と伝えておいて下さい。さようなら父
上」

「……!!」

フロウは父に背中を向けた。

「フロウ!!」

叫ぶ父を無視し、フロウは屋敷を出た。

この日、フロウは自らが持つほぼ全てのものを失った。

フロウはそのあと、町を転々としながら西へ西へと向かって行った。

そしてゆっくりと解放軍基地のあるフルスロックを目指していた。セサミボーダーから決して近い基地ではないけれど、『黒の魔将』グレイ・ガルディアがいる基地として有名だ。

セサミボーダーを出て一週間が経とうとしていた。

フルスロックに近い町の料理屋で昼食をとっている時だった、数人の男の話し声が耳に入った。

「それでな、その反乱で……」

「農民が中心なんだろ」

「ああ、一気に四つの町を占拠してな。かなり大規模らしい」

「どの町だ」

「ロゴ地域の町だ。レイクル、サードフォード、アルケア、セサミボーダー……」

（セサミボーダー！？）

フロウは驚いた。

すぐにその集団に割り込んだ。

「すみません！ その話、詳しく聞かせてもらえませんか！？」

「な、なんだ！？」

「セサミボーダーは僕の住んでいた町なんです！」

「えっ！ ああ、それで……」

「それは気の毒だな。……話によるとロゴ地域で、大規模な農民の反乱が起きて、セサミボーダーもその反乱に巻き込まれたって話だ。それによってセサミボーダーの町長が農民に処刑されたそうだ」

「……！！」

「知ってるかもしれないが、セサミボーダーの町長は最近農民の反乱分子を軍に依頼してせん滅しててな。その罪を問われてつてことらしい。噂によれば、町長だけじゃなくその妻も処刑されたって話だ……残念だが、あの町はもう駄目だろう」

「まったく、恐ろしいねえ……」

フロウは感じた、すべてが崩れるのを。
フロウの思考は闇の中をさまよった。

友達を殺した父、農民の反乱によって殺された父と母。
なんだこれは。

なにが起こっている？
なにを恨めばいい？
なにを否定すればいい？

もうなにもわからない。

フロウはしばらくその町に留まった。
フルスロックに真っ直ぐ向かっていた足は止まり、そこから動き
だすことができずにいた。

完全に目的を見失った。

日が経つにつれ手持ちのお金が徐々に少なくなっていくた。

一週間が経った。

フロウの頭は少しだけ落ち着きを取り戻していた。

友達を奪われ、両親を奪われた。

なにを恨めばいいのか。なにを否定すればいいのか。なにを信じればいいのか。結局はわからなかった。けれど……

フロウは頭の中にはあると疑問が生まれていた。

ダークサークル……

マウルを飲み込み、父と母を飲み込んだ、世界を包む闇。

それがいつたいなんなのか、

僕はその真実を確かめたい。

そして、その真実を確かめることができる場所は……

(……解放軍)

解放軍に入ろう、フロウはそう決断した。

恨みでもなく、否定でもなく、ただ知りたいがために。

巨大な暗黒がもっとも渦巻く戦場、そこにはそれがあるような気がした。

その『真実』が……

フロウはフルスロック基地の入軍試験を受けた。

入軍試験の面接。

基地の一室で、若い試験官三人がフロウと向かい合う形で座っている。

試験官の一人がフロウの提出した資料を読み上げる。

「出身はセサミボーダー。……名前はフロウ・ストルークか」

「ストルーク。どこかで聞いたことあるな」

「……おい！！ 先日反乱で殺されたっていうセサミボーダーの町長じゃないか！！」

三人の試験官は驚きと混乱の表情をした。しかしフロウは動じない。

「そうです。僕はその息子です」

「な……！！ は、話にならない！ 貴族がセウスノール軍に入るなど！ それに加え、反乱で処刑された町長の息子……！！」

「そうであったとしても、僕は今の国が間違っていると思っています！ 地位や境遇、それを正すための解放軍なんでしょう！？ そんなこと、何も関係ないはずです！！」

フロウは訴えかけるように言った。

「関係ないはずないだろう！ 試験は中止だ。今すぐ基地から出ていけ！！」

「……！！」

（変わらない……差別される対象が変わっただけ、ここも、あそことなにも変わらない……）

その時、突然ドアが開いた。

「アレ？ なにやってんだ」

黒い髪の大柄の男がヌツと顔を出した。

「ああ、試験中か」

「ガルディア司令官……」

試験官の一人が言った。

フロウは驚いた。

（ガルディア！？ この男が……）

フロウはすぐにガルディア司令官に駆け寄った。

「ガルディア司令官……！！ お願いします。試験を続行させてください！！」

それを見て、試験官の一人が声をあげる。

「な、なにを言っている！ 司令官に直接言っても……」

キョトンとするガルディア司令官。

「……？ なんの話だ」

「この少年、先日殺されたセサミボーダーの町長の息子です！」

「……！！ あの事件の……」

「お願いします！！ 僕はどうしても解放軍に入りたいんです……！！
そのためだけにここまで来たんです！！」

ガルディア司令官の目つきが変わる。真剣な目でフロウを見た。

「………おまえら、席をはずしてくれ」

「し、司令官！？」

「オレが話を聞く」

「は、はい」

試験官達は部屋の外へと出て行った。

ガルディア司令官は空いた試験官席の一つに座る。

「さて……それじゃあ聞かしてくれないか」

「はい、この国の状況について、最初に疑問に感じたのは十歳の時です。その時は……」

「あつ！ ちょっと待ってくれ」

「え………はい」

ガルディア司令官は笑顔を浮かべながら口を開いた。

「建前はいいんだ。オレが知りたいのはそんなモンじゃない。オレ

は、おまえが知りたいんだ。教えてくれないか？ オレに、おまえ自身を」

おまえ自身。

地位でもなく。境遇でもなく、フロウ自身を見る目。

その目は真っ直ぐにフロウの目を見つめていた。

(……話そう、なにもかも。この人には、ごまかしは必要ない)

フロウは話した。

マウルの話、父の話、そして自身の本当の意思。

ガルディア司令官はその話を、真っ直ぐな目で、真剣に聞いていた。

話が終わった。

ガルディア司令官は一息つくと、天井を見つめながら何かを考えていた。

「なるほどな……」

ガルディア司令官はそうぼやくと、再びフロウの方を見た。

「それじゃあ、オレの方から一つ質問だ」

「はい」

「おまえは『誇り』を持って戦えるか？」

「『誇り』……？」

「仲間のため、そして自分自身のために、おまえは『誇り』を持って戦えるか？ 『誇り』を持って戦場で剣が振るえるか？ それを、それだけを聞かせてほしい」

『誇り』、それは思ってもみない問いかけだった。

フロウは静かに目を閉じて、しばらく考えた。

静寂が続く。

フロウは再び目を開けて、ガルディア司令官を真っ直ぐに見つめた。

「戦えます。僕は『誇り』を持って戦えます。そしてそれを今ここで、誓います」

ガルディア司令官はそれを見て、ゆっくりとほえんだ。

「そうか……」

ガルディア司令官はスツと立ち上がる。

「それじゃあ、これで終了だ」

ガルディア司令官はそのまま部屋を出ようとした。
フロウは急いで立ち上がる。

「あ、あの、入軍の件は……」

「なんとも言えないな。最後の実技試験の結果次第だからな」

それを聞いた途端、フロウの顔から笑みがこぼれた。

「あ、ありがとうございます!!」

「まっ、頑張りな。オレも見物させてもらおうかな」

フロウはその後、入軍を果たした。

フロウが入軍を果たしておよそ一週間が経ったある日。

その日は剣技の集団訓練だった。

大勢の兵士が実技場で木剣を持って、剣の訓練をしている。

フロウはその内の一人と、入軍してから初めての模擬戦をしようとしていた。

木剣を互いに向け、向かい合うフロウと兵士。

「始め!」

そのかけ声と共にフロウは突進した。

フロウは兵士の間合いに一瞬で入る。

ビュビュビュンッ!!

「う、うわあっ！！」

フロウの無数の斬撃、兵士は為す術なくやられる。
周りの兵士達がどよめく。

「うおおっ、すごいな！」

「あんな小さいのに……」

「よし、次はオレだ！！ 新米にでかい面させねえ」

フロウはその後、次々と兵士を倒してゆく。
五人、十人、十五人、ひとりとしてフロウに対抗できる者はいなかった。

多くの兵士を倒してフロウは思った。

（弱いな…… 剣術の基礎すらなっていない者が多い。…… まあ、僕みたいに英才教育を受けていたわけじゃないから、仕方ないと言えばそうなんだろうけど。それにしたって……）

その時、向かいに背の高い兵士が立つ。次の相手だ。

（大きい、2 mぐらいはありそう……）

背が高いその兵士は、少しはねた赤髪と鋭い目つきが特徴的だった。

フロウの方を見てニヤツと笑う。

「うれしいぜ。久々に息のいいのが入ってきて……」

そう言って大型の木剣を構える。

「それはどうも、息が良すぎるかもしれないよ」

「上等だ。来い……！」

フロウは突進した。

素早く間合いに入る。

ビュビュビュビュンッ！

フロウの無数の斬撃。

背の高い兵士は素早くそれを避ける。

（なに……っ！）

背の高い兵士が斬撃を放つ。大型の木剣は空気を切り裂き、すさまじい速さでフロウの方へと向かって来る。

（はやっ……）

フロウはそれを紙一重でかわす。その時だった。

兵士の蹴りがフロウの体を直撃する。フロウの体は軽々と飛ぶ。

地面に着地したフロウは思わず膝をつく。

「くっ……！ 蹴りなんて、卑怯な……」

「おいおい、競技会のための訓練じゃねーんだ。生き残ったモン勝ちだよ。戦場はな」

「それなら……戦場じゃあ、僕はまだ生きてる……！ 勝負はついてないよ」

「よしっ！ 来い」

フロウは再び突進する。

今度は、間合いの長い背の高い兵士の方が先に攻撃をしかけてきた。

ギュンギュンギュンッ！

大型の木剣を信じられないような速度で振り回す。避けるので手一杯なフロウ。

フロウは斬撃の一つを避けずに受け止めようとした。その瞬間、

ガアアアンッ！！

斬撃を受け止めきれず、フロウの剣は宙を舞った。

さらに容赦なく振り下ろされる斬撃、それがフロウの頭に叩きつけられる直前、

ピタッと止まった。

「はい、おまえの負け」

兵士はサラッと言った。

フロウは兵士の顔を静かに見上げた。

「……………君の名前は？」

「クレイド・アースロア」

「僕はフロウ・ストルーク」

これがクレイドとの最初の出会いだった。

数日後、フロウは午後の休憩時間に基地の敷地内を散歩していた。その時、クレイドと偶然再開した。

「よう、フロウ」

「やあ、クレイド君」

クレイドはフロウの隣を歩く。

「……おまえなかなか強いよな。うれしいぜ。いい相手が見つかった」

「そうかい、けど、強いっていつでも君よりは弱かったけどね」

「ここで鍛えりゃあすぐ追いつくさ。まあ、追い抜かせはさせねーけど」

「君は入りたての頃はとうだったの？」

「剣も使えなかった」

「……よく入軍できたね」

「まあ、実技試験でな、素手で試験相手ぶつとばしたら入れてくれたよ」

「ムチャクチャな……」

馬車置場の建物を通る時、クレイドはドカツと建物の出っ張りに腰かける。

「聞いたぜ。おまえ貴族の生まれなんだってな」

「そうだよ」

「なんでここに入っただ？」

「………悪いけど、あまり人にペラペラと話すような内容じゃないんだ」

「ふーん、そうかい。そりゃあ残念だ。俺は個人的におまえに興味があっただけだな」

「………それじゃあ、君が軍に入っただ理由を教えてください？」

「言ったら教えてくれるのか？」

「中身によるね」

「ケチな野郎だな……まあ、いいぜ、教えてやる。座れよ」

フロウはクレイドの隣に座った。
クレイドが口を開く。

「俺が軍に入った理由は、まあ簡単に言うと『真実』を知りたいからだ」

「『真実』……？」

フロウは思わず反応した。

「そうだ。この混沌とした世界、歪んでしまった人の心、なぜこうなったのか、俺はその『真実』を知りたい。見極めたい」

それ言葉を聞いてフロウは驚いた。そして少し黙ったあと、ゆっくりと口を開いた。

「……僕も」

フロウは静かに言葉をつなげた。

「僕も、『真実』を知りたい……」

「……おまえも？」

「君になら、話してもいいかもね」

フロウはクレイドの横に座り、自分の過去の話始めた。
クレイドはその話を真剣な表情で聞いていた。

話が終わったあと、クレイドが口を開く。

「そうか……」

「だから……僕は『真実』を知りたい。ここにいればいつか分かる気がするんだ」

「似てるな」

「え……？」

「俺も、おまえと同じ、地位の違いで大切なものを失った……」

「大切な……もの？」

「俺は平民だが、大貴族の娘に恋をした。俺もリイナも互いに思い合っていた」

「……………」

「……だが、結果的にその恋は叶わなかった。リイナの父親がそれを知り、リイナに知らせず、俺に無実の罪を着せて殺そうとした」

「……………それじゃあ、もしかして、君は国軍領じゃあお尋ね者？」

「いや、罪は晴れたよ」

「……じゃあその子とはどうなったの？」

「リイナは……………自殺した」

「……………!!」

「俺が殺されようとしていると知ったリイナは、自分の父親を説得するために、自らの命を捧げて、俺を殺さないように訴えかけた。俺がすべてを知った時、なにもかもが遅かった……………」

「……………そんな」

「そのあとな、風の噂で聞いたんだが、その父親の家系も没落したらしい。娘を失ったせいなのかもな。その後、その父親も後を追ったそうだ……………」

「……………」

「どうしてこんなに歪んじまったんだろうな。世間じゃあ、皇帝の悪政だって言われてるが、俺はともじゃねーがそんなんじゃあ納得できない。皇帝だって、国のために動いているんだろう？ それがここまでの歪みを生むモンなのか。そして政治が荒れたからといって、人の心がここまで歪むモンなのか」

「……………」

「俺には分からなかった。だから俺も『真実』が知りたい。この歪みの『ダークサークルの真実』を」

「そうか……………そうだね、探そう。一緒に、その『真実』を……………!」

フロウはクレイドを真っ直ぐに見つめた。
それを見てクレイドが笑う。

「不思議なモンだな……俺とおまえの出会い」

フロウは立ち上がり手を差し出した。

「今日から僕らは同志だ。共に『真実』を探すための」

それを聞いてクレイドは笑った。

「ハッハッハッ、こりゃいい、同志か。一生独りで探し続けるモンだと思つてたが……」

クレイドは立ち上がった。

「おもしれえ、よろしくなフロウ」

二人は互いに握手した。

強く強く握手した。

フロウは探し続ける、クレイドと共に、彼らの求める『真実』を。

2 - 17 帰る場所

灰色の天井。

クロコはベッドの上にいた。

ケイルズヘル防衛戦から一夜明け、クロコはケイルズヘル基地の治療室のベッドの上で、灰色の天井を見つめている。

包帯ぐるぐるの姿、防衛戦初日後よりさらにひどい。

隣のベッドではクレイドも寝ころんでいる。同じように包帯ぐるぐるの姿だ。

クロコはつまらなそうな顔をする。

「クソ……またこれか」

その声に隣のクレイドが反応する。

「というか、前よりひどいдар。そういえば知ってるか？ ミリアもケガしたらしいぞ」

「へえー、ならあいつもどっかで寝てんのか？」

「いや、元気に歩いてたな。パツと見て、どこケガしたのかよく分からなかった」

「なんだそれ。クソッ、おもしろくねー」

一方、基地の廊下ではガルディアとローズマンが話していた。

「しかしホント久しぶりだな。ガルディア」

「本当だな。何年ぶりだ？」

「たしか二年ぶりだな」

ローズマンは笑顔で答える。ガルディアも笑顔だ。

ローズマンが口を開く。

「おまえが来てくれて助かったぜ。しかし相変わらずの化け物ぶりだなあ。久しぶりに見るとホントとんでもねえぜ」

「まあ、二年ぶりの戦場だったが、思ったよりは動けたよ」

「思ったよりどころかほとんど衰えてねえよ。もうウチのミリアの方が上だと思ってたが……やっぱりおまえは正真正銘の化け物だな」

「」

「ハッハッハッ、素直に喜んでいいのか分かん例えだな」

基地の治療室、ベッドのクロコは包帯だらけの体を必死で起こす。

「い……いててて」

「おい、クロコ、大丈夫なのか？ もう動いて」

隣のクレイドが首だけ起こす。

「ヒマなんだよ。ずっとこんな所で寝てられるか」

クロコはそう言って体を起こすと、そのまま痛がりながら廊下へ出て行った。

そんなクロコを見届けるクレイド。

「やれやれ、せわしないな」

廊下をバランス悪く歩くクロコ、すると向かい側から大柄の男が歩いてくる。

「あつ！ ガルディア！」

「ようクロコ」

「なんでいんだよ！」

「ああ、たまたま近くの基地に居たんだな。ついでに寄ってみた」

「散歩気分かよ」

「ハッハッハッ、まあ、そんなもんか？ それより派手にやられた」

なー。大丈夫か？」

「大丈夫じゃねーよ！」

「ハッハッハッ、元気そうだなにより」

「まったく、こっちは死にかけてたのに……気楽に来やがって」

「まあ、そう言っなって、あとオレは先にフルスロツクに帰らせてもらっからな。おまえの顔見たらなんだか元気が出てきたよ」

「ふん……」

「じゃあな」

ガルディアは軽く手を上げ、そのままクロコを横切って立ち去った。

基地の敷地、ガルディアは置いておいた自分の馬へ向かって歩いていた。

基地の壁の一角、そこにミリアが寄りかかっていた。ガルディアの方をじっと見ている。

ガルディアが気さくに声をかける。

「よう、ミリアちゃん」

「その呼び方はよせ、ガルディア」

「なんでだ？ 昔からだろ」

「もう子供じゃない」

「そうか？ オレからはまだ子供に見えちゃうんだけどなー。まあ、でも大人っぽくなったな」

「……………」

ミリアはなにも言わず、ガルディアの方を見る。
そしてゆっくり口を開く。

「なぜ来た……………」

「……………」

ガルディアは一瞬黙る。
そして口を開く。

「なに、ついでに寄っただけさ」

「リサイド基地から馬で二時間駆けて、戦場に飛び込むことがか…
…？ そんなはずないだろう」

ミリアは冷たい目でガルディアをジッと見る。
ガルディアは頭をかく。

「やれやれ……………まいったね。本当に大した理由なんてないんだが」

「クロコ・ブレイリバー」

ミリアはボソツと言う。

「結果的に助けたのは私だったが、あなたが本当に助けたかったのはそっちじゃないのか……？」

「へえー、自然にそう感じたんなら、ミリアちゃんはクロコのこと
が気になってるみたいだな」

「私も、だろ。ガルディア」

「……………」

「あいつはあなたのなんだ。いったいなんの関係がある？」

ミリアがそう問いかけると、ガルディアはゆっくりと歩き出し、
ミリアを横切る。

そして背中を向けたまま答えた。

「大事な仲間だよ。ミリアちゃんだってそうさ……………」

ガルディアはそのまま立ち去った。

一人残されるミリア。

「クロコ・ブレイリバー……………」

夜、クロコは痛がりながら廊下を歩いて治療室に戻ろうとしていた。

「いてててて、なんかムダに疲れたな……」

治療室の自分のベッドに戻ると、隣のベッドが空になっていた。

「あれ？ クレイドのやつどこ行っただ。……トイレか？」

基地の正面に立つステイアゴア台地。

その北側、巨大なアルティマイアの滝が大きな音を立てて水しぶきを飛ばす。巨大な水の塊が宙を浮くようにゆっくりと流れて落ち続ける。月明かりに照らされたその滝は、その巨大で優雅な姿を一層きわだたせていた。

そのアルティマイアの滝がほぼ正面に見える場所、乾いた大地の上をクレイドは独り立っていた。

クレイドはその滝を正面から眺めていた。

「やっと来れたぜ。リイナ」

クレイドは巨大な滝を真っ直ぐ見つめる。

「おまえの言ったとおり、本当にすげえ滝だ。本当に優雅だ……」

月明かりに照らされるアルティマイアの滝の前。クレイドはただそれをじっと見つめていた。

次の日の朝、フルスロツク基地に戻る第一便の馬車が出た。ほぼ無傷の兵士達ばかりが乗る馬車のなかで、包帯ぐるぐる巻きのクロコとクレイドは、せっかちにもそこに乗り込んでいた。

クロコは窓から外を眺める。

「ふうー、これでここともさよならだ」

クロコの目に巨大なステイアゴア台地が映る。

「なんだ、さびしいのか？」

隣に座るクレイドが言った。

「別に、おまえはどうなんだ？」

「俺もだ。もうここには未練は無い」

「そうか、まあこれでやっとフルスロツク基地に帰れるな」

「フツ……帰る、か……」

「なんだよ、おかしいか？」

「いや、おかしくねえよ」

クレイドは少しだけほえんだ。

ケイルズヘル防衛戦から約一週間後、フルスロツク基地の敷地には多くの人が、帰りの第一便の馬車の到着を待っていた。

その中にはソラの姿もあった。

ソラの耳に兵士の話声が聞こえてくる。

「おい、聞いたか？ スコア・フィードウッドが出たそうだぞ」

「ああ、それにレイデル・グロウスも出たって」

「かなり激しい戦いだったみたいだな……」

「こちらもかなりの戦死者を出したって話だぜ」

そんな不吉な話が入ることに、ソラの唇がわずかに震える。

（クロコ……）

ソラは祈るように心の中でその名を呼んだ。

「大丈夫だよ」

フロウが声をかける。

「クロコ君も、それにクレイドも、そう簡単には死なない。彼らには強い意志があるんだから」

フロウは震えるソラを優しい目で見る。

「フロウくん……」

「だから大丈夫、心配ないよ」

フロウはそう言ってほほえむ。

その直後、基地の敷地内に大型の馬車が三台入ってきた。

馬車が停まると、なかから大勢の兵士が降りてくる。

ソラはサッと駆け出して馬車に近づいた。

兵士達の中からクロコを探す。

他の者達も馬車を囲むなか、兵士たち一人ひとりに目を向けるソラ。

ほとんど無傷の兵士たちが次々と降りてくる。その中で一人、包帯ぐるぐるの少女が降りてくる。

「クロコ!!」

ソラは叫んだ。

その声でクロコはソラの方を見る。

ソラは駆け寄って、そしてクロコを抱きしめる。

「良かった、ちゃんと帰ってきた……」

抱きしめられたクロコは少し恥ずかしそうな顔をする。

「なに言ってたんだ。当然だろ」

クロコはそう言ってソラの顔をのぞいた。すると目に少しだけ涙がこぼれていた。

「良かった。本当に良かったよ……クロコ……」

クロコはそれを見て少し驚くが、すぐにソラの頭をポンポンと叩く。

「大丈夫だ、ソラ、オレは必ず戻ってくる。だからもう、そんなに心配すんな」

「本当に……？ 約束だよ、クロコ」

ソラの声が少しうわずっている。

「ああ、約束だ」

クロコの頭の中で、過去にブレッドに言われた言葉がよみがえる。

（もしおまえが再び戦場に立つというのなら、その時は、これからできる仲間のために、これから関わり合う人のために、そして自分

自身のために戦え。絶対に、死なないように……！
(

3 - 1 街で出会ったある男

灰色の四角い建物が立ち並ぶフルスロツクの街並み。その中でひとときわ突き出た巨大な建築物がそびえている。高い石壁に四方を囲まれたその横長な建築物には、いくつもの大型大砲が備え付けられ、入口の上部にはヘルムのシルエットの旗印の大きな赤色の旗が飾り付けられている。

ここは解放軍フルスロツク基地。

ケイルズヘル基地防衛戦からおよそ二カ月が経過していた。

今日は兵士達の休養の日。

皆がそれぞれの時間を過ごしている中、基地の東の実技場では、二人の人影が向かい合っていた。

一人は、年齢十五、六の少女で、黒い髪と、鋭い目に真紅の瞳、どこか威圧的な雰囲気を持っている。

クロコ・ブレイリバーは木剣を握り、向かいに立っている長身の男をにらんでいた。

その向かいに立っている長身の男は、年齢二十代半ば、長めの白い髪を後ろで結んでおり、冷たい目に青い瞳、どこか気品のあるきれいな顔立ちをしている。全体的に冷たい印象を受ける。

この基地の副司令ファイフ・アールスロウは長い木剣を片手に持ち、構えている。

クロコがギラツと目を光らす。

「今日こそ一撃入れてやる」

「気合を入れるのはいいが、学んだ技術をおろそかにするなよ」

「ふん、わかってるさ」

「なら、いい」

二人は静かに向かい合って木剣を構えている。
アールスロウが静かに口を開く。

「来い」

「言われなくても！」

クロコはアールスロウに突進する。間合いのギリギリ外で足を止めると素早く左右に跳んでかく乱する。しなやかな足運びで高速で動くクロコ。

アールスロウはその動きを目で追うが、一瞬クロコを見失う。

その瞬間、クロコがアールスロウの横をつく。

アールスロウは素早く防御の姿勢をとるが、気付けばクロコは正面に立っていた。

素早く斬撃を放つクロコ。

ビュンッ！

その斬撃は防がれた。アールスロウの防御がわずかに早かった。アールスロウはさらに剣を回転させる。クロコの木剣は流される。しかしクロコの体勢は崩れない。素早く木剣を引き、突きへと移行する。

ヒュッ！

素早くかわされる。それと共に返されるアールスロウの長い斬撃。

ビュウンッ！

クロコはそれを見切った。

キーン

クロコはアールスロウの斬撃を流した。

わずかに体勢を崩すアールスロウ。

クロコは一気に踏み込んだ。

ビュンッ！！

クロコの斬撃にアールスロウは素早く反応した、しかし避けきれず左肩にわずかにカスる。

「……ッ！」

アールスロウはクロコをにらんだ。素早く高速の斬撃を返す。

クロコはそれを防ごうとするが、斬撃は途中で軌道を変え、足先へ延びる。

「……！」

驚くクロコ、しかしそれにも反応し足を上げようとする。その瞬間、さらに斬撃の軌道が変わり、突きへと変化する。

「な……ッ！」

ヒュッ！

素早い突きはクロコの脇腹をわずかにとらえた。

しかしクロコはひるまず一歩踏みこむ。

アールスロウはそれに合わせて半歩引き、カウンターの斬撃を放つ。

それに構わずクロコも斬撃を放つ。二つの斬撃が交差する。

ビュンッ！ ビュウンッ！

二つの木剣はほぼ同時に振り抜かれた。

そして二人の動きが止まる。

一瞬辺りに静寂が流れた。

「いつて……！」

クロコは脇腹を押える。

「君の負けだな。クロコ」

「クッソーッ！ あとちょっとだったのに……ってかアンタ、オレの知らない技つかってきただろ！ なんだよあの軌道変化ッ……！」

「実戦では敵は常に自分の知らない技を使ってくる。甘えたことを言っな」

「そういうことじゃなくて！ セコいぞ！ オレの技は全部知って

いるくせに！」

「君は攻めのパターンが少ないんだ」

「そうそう、だからファイフに教えてもらってるんだよな」

突然離れたところから別の声がした。

二人は驚いて同時に声の方向を向くと、そこには大柄の男が立っていた。

その男は年齢二十代後半、どっしりとした大きな体で、少し逆立った黒髪と力強い目をしており、活気のある雰囲気をもっている。この基地の司令官グレイ・ガルディアだ。ガルディアは笑顔で左手を上げる。

「よっ！」

「なんだ、アンタか」

クロコは軽いため息をつく。

「上達したじゃないかクロコ。ファイフがあんな必死になって……惜しかったな！」

「チェッ！ そんなのわかってるよ」

アールスロウがクロコに向き直る。

「クロコ、さっきの模擬戦だが、前後のステップが甘かった。反復だ」

「く……ッ！」

クロコは悔しそうに前後にピョンピョンと跳ね始める。
それを横目にアールスロウがガルディアに近づく。

「だいぶ強くなりました」

「ああ、そうだな。それに……」

ガルディアはアールスロウの顔を見てほえんだ。

「……？」

「おまえも強くなってる」

「俺も……ですか？」

「ああ、クロコと模擬戦を繰り返したせいだな。おまえの剣技は型にはまりすぎていた感があったが、クロコの自由に動く剣に触れるうちに、おまえの無機的な剣技に血がかよい始めたんだ。今までのおまえなら、もうとっくにあいつに一本取られてるよ」

「……自分では気づきませんでした。教えていたつもりで教わってもいたんですね」

「人に教えるってのはそもそもそういうものさ。しかし頼もしいな、強い仲間がいっぱいいるってのは」

「あなたの十分の一でも活躍できれば俺としては本望ですよ」

「そう謙遜するなよ。おまえは十分すぎるくらい強いよ」

「……クロコの稽古、時間があれば 그레이さんが試してみては？」

「いや、おまえの方がいいよ。オレの剣技は自分に特化し過ぎてるからな……それに比べておまえの剣技は万人に通じるしっかりとした技術だ。それに……」

ガルディアはほえむ。

「クロコにはおまえがいい、そんな気がする」

「……そうですかね」

「まあ、おまえが技術を一通り教えたなら、締めにちよつとくらい付き合ってもいいけどな。ああ、そういえば……」

ガルディアはクロコの方を向く。

「クロコっ！」

「なんだっ！」

クロコはピョンピョン跳ねながら返事をする。

「おまえの剣……ゴールドアのことなんだけだな」

「……？　なんだよ」

「アレ、多分おまえの体に合わないぞ。デカすぎる」

「別に問題なく使ってるよ。筋力なら十分あるし」

「筋力じゃなくて重心の問題だな。あのサイズじゃあ、おまえの動きがわずかに削られる」

「……………あんまり自覚はないけどな」

するとアールスロウが口を挟む。

「クロコ、 그레이さんの言うことは戦闘に関してならほぼ間違いない。剣を変えたらどうだ」

「元に戻った時はあれで問題ないんだよ」

「クロコ、おまえなー、またそんなこと言って、いつ戻るんだよ」

「アンタが任せろって言ったんだろ！！」

クロコはピョンピョン跳ねながら怒った。

アールスロウは再びガルディアの方を向く。

「そっいえば 그레이さん、仕事の方は片付きましたか」

「……………あー、これからな」

「今からやって下さい」

アールスロウはピシッと言った。

「おい！ アールスロウ！！ いつまでやってればいいんだよ！」

「ああ、もうやめていいぞ。今日はこれまでだ。俺はこれからグレイさんを司令室に連れていく」

「もうかよ……」

クロコは少し物足りない顔をした。

「満足しないのなら一人でしばらくやっていればいい、もう大体のことはできるだろう」

「……チエツ」

アールスロウはその後、ガルディアと一緒に実技場を出た。ガルディアはしおれた顔をしていた。

クロコはその後、しばらく一人で木剣を振ったあと、実技場を出た。シャワー室に向かうため廊下を歩いている途中、向かいから声がした。

「クロコ！」

向かいには少女が立っていた。年齢は十五、六歳ぐらい、白い髪とぱつちりとしたきれいな目。明るい雰囲気を持っている。

街の果物屋の店員、ソラ・フェアリーだ。笑顔で手を振っている。

「あれ？ おまえなんでいんだ。朝だけだろ、ここ来るの」

「うん、いつもはそうなんだけど、今日は契約の更新日だから、それだね」

「ふーん」

「それより汗だくだね。特訓してたの？」

「ああ、今からシャワー浴びるところだ」

「お疲れ様、ねえ、クロコ。今日ウチ来るよね？」

「ん……？」

「先週約束したでしょ」

「ああ、そういえば……じゃあ、午後の二回目の鐘が鳴るあたりに行く」

「うん、わかった」

ソラはうれしそうにニコツと笑った。

「じゃあ、あとでね」

シャワーを浴びたあと、クロコが基地の食堂へ行くと、テーブルの一つにずいぶんと背丈の違う二人の兵士が座っていた。

背の高い方は、年齢十七、八、少しはねた赤髪に鋭い目、どこかのんびりとした印象を受ける。基地の兵士、クレイド・アースロアだ。背の低い方は、年齢は見た目、十四、五、柔らかい灰色の髪に、整った顔立ちをしている。基地の兵士、フロウ・ストルークだ。二人は何かを話している様子だった。

「よう」

クロコが声をかける。

「ああ、クロコ君」

フロウはそう言ってクロコに笑いかける。続けてクレイドが口を開く。

「おまえ、髪濡れてるぞ」

「ああ、アールスロウと特訓したあとシャワー浴びたからな」

「クロコ君もよくやるね。休日ぐらい体休めたらいいのに」

「今から休めるんだよ。それよりおまえら、なに話してたんだ？」

「ちょっとね……クレイドと情報交換」

「情報交換……？」

クロコは二人の間に座る。するとクレイドが口を開く。

「最近、また国軍の動きが慌ただしくなってきたって噂を聞いてな。

もうすぐ北の方で大きな戦争が起こるんじゃないかって話してたんだ」

「戦争か……ケイルズヘル防衛戦に続いてまたデカイのが起こるかもってことか。けど、おまえら、そういう情報どこから手に入れるんだよ。オレなんか全然知らなかったぞ」

それにフロウが答える。

「ここフルスロック基地は、国軍領と解放軍本部のセウスノールのちょうど中間に位置する場所だからね。色々な情報が入ってくるんだよ。それに僕は特にそういうのに耳を傾けてるからね」

「耳を傾けてる……？　なんでだよ」

「僕らは『ダークサークル』に関心があってね。その関係でよく情報収集してるんだよ。僕が色々な知識に精通しているもそのせいなんだ。まあ、クレイドは関心のあること以外、全部忘れちゃうらしいんだけど」

「『ダークサークル』……？　なんでそれに関心があんだ？」

「まあ話せば長くなるからそれはまた今度ね。とにかくそういう関係で大抵のことには答えられると思うよ」

「へえ、じゃあさ。いまさらなんだけどな」

「なに？」

「ここ……解放軍の上下関係ってどうなってんだ？」

「ホント今さらだな……」

クレイドがあきれる。

「えーと、そうだね。基地内であれば一番偉いのは司令官だね。その次がそれを補佐する副司令。さらに次が隊長だね。ここフルスロツク基地では収容している兵力はおよそ8000人だけど、周辺基地から招集させれば20000人……、ガルディア司令官はそのトップに立っている人なんだ。さらに20000人の兵力を4000人ごとに分けて一つの隊にしている。それをまとめるのが隊長。その隊をさらに30人〜100人単位で管理してるのが隊長の次に偉い小隊長、そして最後に一般兵だね」

「割の碎けた上下関係だな」

「まあできて十年ちよつとの組織だからね。そこまでの細分化はまだできてないよね」

「司令官が一番って言うても、もっと広く見ればまだ上はいるんだろ?」

「うん、司令官は全体でみれば上から三番目だね。その各基地の司令官をまとめるのがセウスノール本部基地にいる総司令官、それがトップだ。そしてそれを補佐する複数人の副総司令、それが上から二番目だね」

「なるほどな……まあ大体つかめてきた。それじゃあ、噂の『ファントム』ってやつが総司令官ってわけか」

「うっん、違うよ。総司令官はティム・ランクストンって人」

「……？ 『ファントム』ってやつが解放軍を作ったんだろ」

「そうだね。けど『ファントム』は正体不明だし、突然現れては突然消える神出鬼没だからね。人々をまとめ、軍を作り上げたのは確かなんだけど、常に軍をまとめてるってわけじゃないらしいんだ。でも実質のトップは確かに『ファントム』なんだらうね……」

「ファントムって一体何者なんだらうな」

「それはさすがに分からないね。解放軍の一部の人しか知らないらしいし、噂じゃあ、国の重役って話も出てるらしいけど……」

「結局は分からないってことか……解放軍の上下関係はそんなもんか、なら国軍の方の上下はどうなんだ？」

「それは細かいぞ」

「うん、細かい」

「細かいじゃわかんねーから、いいから言ってみるよ」

「そうだね……国軍は、上から、元帥、大将、中将、少将、准将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、准尉、曹長、軍曹、伍長、上等兵、一等兵、二等兵、って順だね。覚えられそう？」

「……いや、もう忘れた」

「まあ、グラウド国軍の場合は、上から三番目まで……元帥、大将、

中將は立場上の違いはあっても、権力的な上下関係はほとんどないんだけどね」

「へえー」

「国軍の中將以上の地位からは議員権が得られるから」

「ギインケン……？」

「そう……中將以上の軍人十人と各大臣十人が持つ議員権、それを持つ二十人の議員によって行われるのが議会政治……グラウドの政治は皇帝がすべて行ってるって思ってる人が割といるけど、正確には皇帝政治と議会政治の二つで成り立ってるんだ」

「へえー、初めて知った。けど一番権力を持つてるのは皇帝だろ？」

「個人としてはね。けど皇帝と議会の政治への影響力は五分五分……むしろ議会の方が強いぐらいなんだ」

「……………待てよ。じゃあ『ダークサークル』は皇帝政治の悪化って言われてるけど……………」

「そう……正確には議会政治も深く関わってるんだ。本来皇帝が悪政を振るえば、議会がそれを止める、っていう二つの政治が互いの暴走を牽制できる間柄にあるはずなんだけど……………」

するとクレイドが口を開く。

「実際、議会は皇帝の暴走を全く止められてねえんだ」

「つまり、議員どもも無能ってことか……？」

「うーん、まあ砕けて言うとなんなんだけど、議会が皇帝を牽制できるのは、議員全てが一致団結したときだからね」

クレイドが首をかきながら口を開く。

「議員共の九割方が貴族だからな。権力の開きなんかやつらにとっちゃ、どうでもいいのかもな」

続けてフロウが口を開く。

「まあそれも一理だけど、国がここまで荒れたら本来なら貴族でも皇帝を牽制にかかるよね。それが出来てないっていうのは少し不自然な感じがする」

「じゃあ『ダークサークル』の本質は皇帝じゃなくて実は議会にあるってことなのか……？」

「僕らはそつにらんでる」

「その先に俺達の求めてる『真実』があるのかも知れねえな。まあ、今のところはまだ情報不足だ」

「どうクロコ君？ 少しはピンときた？」

「ああ、まあ少しはな……」

クロコは難しそうな顔をした。

「そういえばクロコ君、これからなんか予定ある？　これからクレイドにチェスを教えようと思ってるんだけど、君はどう？」

「あー、今日ソラの家に行く予定があるんだよな。まあ、まだけつこー時間はあるんだけど……ついでに街をちよつと見て歩こうと思ってるから」

「君も少しはこの街に興味を持ったのかな？」

「ソラもガルディアもアールスロウも、もつとこの街を知れってうるさいからな」

「僕も大切なことだと思うよ」

するとクレイドが口を開く。

「俺は無理に知ろうとするより自然に馴染めばいいと思うけどな」

「とにかくそういうことだ。ジェリーアップルをちよつとかじつたらずぐ外に出る」

フルスロツクの商店街、石畳の道を二つの人影が歩いている。

「おお、ここが噂のフルスロツクの商店街！」

人影の一つ、長身の男が声を上げる。

長身の男は、年齢二十代後半、サラツとした黄色い髪、形の良い目に青い瞳、高い鼻、全体的に気品のある雰囲気を持っている。

「あまりハシヤがないで下さい。御自分の立場を考えた上である程度の行動は慎んでいただきたい」

隣の男が注意する。

その男は、年齢二十代半ば、白い髪で、上に伸びた眉、鋭い目、どこかまじめそうな印象を受ける。腰には剣を付けている。

その注意を聞いて長身の男が笑う。

「まあそう硬いことを言うなミツシュ。せっかく来たグラウド有数の商店の街……楽しまなくてはな。ついでにグレイとはち合わせたりしたら、なかなか愉快じゃないか」

それを聞いて白髪の男ミツシュは頭を抱える。

「冗談じゃありませんよ。間違ってもそのようなことはないように……」

ミツシュはそう言ったあと、フンツと鼻息を立てる。

「とにかく！ 私が目を光らせている限り、あなたに勝手なことは……」

そう言いながらミツシュが長身の男の方をグルッと向いた。しかし長身の男の姿はどこにもなかった。

「アレ……？」

そこから少しは離れた通り……。

「やれやれ、うまくいったかな……」

長身の男は周りを見渡す。

「彼がいると好きに振るまえないからな」

その時だった。

ドンッ！

男は何かにぶつかった。

「いつて、おい！ どこ見てやがる！」

黒髪の少女が男をにらむ。

「おっと失礼、お嬢さん」

「誰がお嬢さんだ！」

クロコは怒鳴る。

「おや、何か失礼なことを言ったかな？ 誤りがあれば正すが」

「オレの事をお嬢さんって言っな」

「フム……ならんと言えはいいのかな？」

男がそう言った時だった。別の人影が男の横を通り過ぎようとしていた。その瞬間、その人影が男の服から財布を抜き取った。

「あっ！」

クロコがとつさに声を上げる。

それに反応し人影はさっと駆けだす。若い男のスリだ、ものすごい速さで逃げてゆく。

「おやおや」

長身の男はとぼけた声を出した。

「このっ！ 基地の近くでスリしようなんていい度胸だ！」

クロコはそう言つて勢いよくスリを追いかける。クロコはスリよりもさらにものすごい速さで駆ける。

「な、なんだ！」

少し後ろを振り向いたスリはその速さに驚く。

間もなくクロコの蹴りがスリの背中をとらえた。地面に伏して気絶するスリ。

「……つたく」

クロコはスリが盗んだ財布を取り上げる。

「ありがとう」

突然背後から声がした。

「うわっ！」

驚くクロコ、長身の男が立っていた。

「いや、助かったよ。ありがとう。お嬢さんではなく、なんて呼べば良いのかな？」

「ク、クロコでいい」

「そうかい、ありがとうクロコ」

（……こいつ、いつの間にオレに追いつきやがった）

「お礼にクロコ、何かを御馳走しよう。時間は大丈夫かい？」

「まあ、ちょっとなら」

「そうか良かった、この街は初めてなんだ、クロコ、いい店を知っているかい？」

「ああ……ついて来い」

クロコと男はパイ屋に入った。
注文するクロコ。

「ホワイトフルーツのパイ」

「私はイエローピーチのパイ、うん、おいしそうだ。それとリーフ
ティーを頼む。……クロコ、君も紅茶はどうだい？」

「じゃあ、オレも」

注文が終わると男はクロコの方をじっと見る。

「君は何の仕事をしているんだ？」

「軍人だ。すぐ近くに基地がある」

「ああ、軍人か。どおりで足が速いわけだ」

「アンタはこの街の住民じゃないんだろ」

「ああ、そうだ。解放軍領から国軍領まで、クラウドの町という町
を旅行するのが趣味な道楽者さ。名はディアルだ」

「……………解放軍領から国軍領まで……………酔狂なやつだな」

しばらくして、二人のテーブルにパイと紅茶が運ばれてきた。
ディアルは細かい手つきでそのパイを一口食べる。

「ふむ、おいしいな。君は店を見る目があるな」

「まあ、オレは初めて入ったんだけどな」

「……ん？」

「オレの……女の友達がうまいって言ってたんだ」

「……ホウ、なら、その友人の見る目があるということだね」

ディアルはそう言って紅茶を一口飲む。

「うん、紅茶もおいしいな……ん？」

ディアルがクロコの皿を見ると、クロコのパイはもうなくなっていた。

「君は食べるのが早いな」

「よく言われるよ。そういえばアンタはいろんな町を回ってるんだつたよな」

「ああ」

「この街はアンタにはどう映った？」

するとディアルはほほえむ。

「いい街だね」

「どこが？」

「実はまだたいして回ってはいないんだ」

「ウソかよ」

「嘘は言わないよ。良い街か悪い街かは、少し見ればだいたいは分かるものだよ」

「……少し見れば？」

「ここの住民はいい目で働いている。街の持つ雰囲気もいい。それだけ分かれば十分だ」

ディアルはほほえみながらそう言ったあと、パイを再び食べ始める。

ディアルはパイを食べ終えた。するとゆっくりとクロコの方を見つめ始める。

「さて、クロコ、君に質問してもいいかな」

「ん？ ああ」

クロコの返事を聞いて、ディアルは静かにほほえんだ。

「なぜ君は解放軍にいるのかな？」

「国軍嫌いだから」

「悲しい返答だ。私はそれなりにまじめに質問しているのに……」

ディアルは悲しそうな顔をする。

「……昔、村を国軍に焼き払われたんだ。好きになれるわけないだろ」

「ホウ、それで復讐のために軍人になったのかな？」

ディアルは興味深げに聞く。

「ちげーよ。そのせいで全て失って、それを取り戻すために軍人になったんだ」

「なるほど、出世が目的か」

「あまりいい響きはしないな、けどその通りだ。そこまで上にいかなくていいが、せめて人として認められるぐらいの存在にはなりたくないな」

その言葉にディアルは小さくうなずく。

「ふむふむ、君はなかなか苦労人のようだ。話を少し変えるが、君は国軍が嫌いなんだろう。なら君は、国軍は間違っていると思うかい？」

「あんなメチャクチャする軍が正しいわけないだろ」

「なら解放軍は正しいと？」

「国軍に比べりゃあな」

「なるほど、そういう考えか。では国軍がなくなったらこの国は平和になると思うのかい？」

「……少しは良くなるだろ」

「そうかな？」

ディアルはクロコを真つ直ぐ見ながらほえむ。

「国軍の役割は本来、国を守ることにある。他国の侵略阻止、内乱の鎮圧、そして治安の維持」

「……………」

「君は知っているかい？ 国軍領では国軍は立派に国の治安を守っている。国軍がなければ国の治安は成り立たない」

「オレの村は焼かれたぞ……………」

「そういう暴挙に出る輩もいる。しかしほんの一部だ、それが全てではない。多くは国民のために働いている。それと……………」

ディアルは手を組む。

「君は知っているかい？ 東の軍事大国サンストンが常に我らの国を乗っ取るうと狙っていることを…………それを阻止しているのも国軍だ」

「……………」

「解放軍は正しい、国軍は誤り、それはただの先入観だ。そうは思わないかい？」

「けど、いま国を荒廃させてる政治を守ってるのも国軍だ」

「そうだね。けれど、いま急に国軍が消えてしまっても困るだろう。なぜならこの国にとって必要な存在なのだから」

その言葉を聞いてクロコはディアルをにらみつけた。

「だけど！ ほつとくわけにもいかないだろ！」

「そうかもしれないね。けれど悪ではない。君は悪ではない存在と戦っているわけだ」

ディアルは冷静な表情でクロコを見つめる。

「……………」

クロコは言葉に詰まる。

「おっと、悪いね。君をいじめるつもりはないんだ。悪ではないといっても、完全な悪ではないというだけさ」

「完全な悪……………」

「よく正義と悪はコインの表裏に例えられる。表は正義、裏は悪、表裏一体の存在。正義の中にも悪があり、悪の中にも正義がある、

とね」

「……………」

「少しわかる気がするだろう？ 人の心もこれによく共通する。この考えに基づけば、国軍も正義の部分もあり悪の部分もある。解放軍にも正義の部分もあり、そして悪の部分もある。平和主義者なんかはその考えになぞらえて、こう主張するんだ。戦争に正義も悪もない……と」

ディアルはほえんでいる。

「けれどね、私はこの考えとは少し違うんだ。私はね。完全な悪も、完全な正義も存在はすると考える」

「完全な正義と悪……？」

「そう、たとえば私がここで突然ナイフを抜き、特に意味もなく君を切りつけ殺すとする。それは悪の行為だ。その行為の裏に正義はあると思うかい？」

「……………ないな」

「そう、完全な悪は存在する。そしてナイフで君を切りつける私を止める者が現れたとする、それは正義の行為だ。その裏には悪はない。そしてその関係が集団化するのかな？ シンプルな正義と悪の戦争の誕生だ。それでも平和主義者は声高々に叫ぶだろう、戦争に正義も悪もないのだと」

「……………」

「無論、そんな完全な正義と悪だけの戦争など存在しないし、完全な悪の行為を行う人間は、そう世の中にあふれてはいない。この話は仮説の域を出ない……だが、いま起きているこの戦争も、複雑になって分かりづらくなっているだけであって、どちらが正しく、どちらが誤りか、本来は存在するのではないかな」

ディアルはそう言ったあと、ジッとクロコの目を見つめる。

「君はどう思う？ 正義と悪、正しき方と誤った方、解放軍はどちらで国軍はどちらに属するのか」

「オレは………」

クロコは一瞬返答に迷った。それを見てディアルが再び口を開く。

「しかしね。解放軍は治安を乱し、国軍はそれを抑えようとしている。シンプルなものの方なら、これも一つだ。そして、この混沌とした世界、『ダークサークル』の最たるものは、解放軍が起こした巨大な内乱であることは疑いようがない」

クロコは表情を険しくする。ディアルは話を続ける。

「そして、解放軍人である君は、この内乱の片棒を担いでいるんだ。君は果たしてそれをどれほど自覚していたのかな……？ まあ、君が解放軍人だからこういう言い方をしているのだけれどね。さて………」

ディアルはクロコを青い瞳で鋭く見つめる。

「正しい方はどちらなのかな……？」

その質問に対してクロコはとっさに口を開いた、しかし開いた口からは何の言葉も出てこなかった。

その様子を見たディアルはクロコから目をそらした。

「さて……私はそろそろ失礼しようかな」

ディアルはゆっくりと立ち上がり、銀貨を二枚テーブルに置くと、クロコの方を再び見てほえんだ。

「君と話せて良かったよ。なかなか良い経験だった」

ディアルはクロコに背を向けて歩き始める。

立ち去ろうとするディアルに、クロコはとっさに問いかけた。

「アンタは……どちらが正しいと思うんだ」

ディアルは静かに振り返りほえむ。

「それを聞くのは、普通は君が答えたあとだろう？ よく考えてみるといい、全てはそれからだ」

ディアルは再び前を向く、そして最後に背中越しに一言だけ言った。

「けれど、もしその判断が下せないのなら、最後に頼るのは、自らの中にある正義なのかもしれないね」

ディアルはそう言ってクロコの前から立ち去った。

クロコはその様子を静かに見つめていた。

店を出るディアル。すると突然すぐ横から声がした。

「見つけましたよ！」

「おや、ミツシュ。見つかってしまったか」

ミツシュは軽く息を乱していた。

「あなたは御自分の立場というものを」

「ああ、分かっているよ。ただそれが行動に表れていないだけさ」

ディアルは笑う。

「それが問題なのです！ あなたは……」

ミツシュは急に小声になる。

「『瞬神の騎士』の異名を持つ国軍の中将なのですよ。ロストブルー将軍」

ディアル・ロストブルーはほほえんだ。そして先ほど出た店をチラリと見る。

（また会おうクロコ。次に会うのはおそらくは戦場だろうな）

3 - 2 議会

その日は少し霧が出ていた。

巨大な純白の建物が連なる街並み、霧の中にさまざまな建築物の影が立ち並んでいる。天にも延びるような高い塔。巨大な図書館、軒を連ねる巨大な屋敷。

ここはグラウドの東に位置する首都ゴウドルークス。

そのきれいに舗装された純白の道を一台の馬車が走っている。

馬車の中には一人の男が腰を下ろしていた。

その男は四十代前半、茶色の髪に、柔らかい茶色の口ひげをはやしている。鋭い目つきをしているが、どこか全体的に落ち着いた印象を受ける。

馬車はある巨大な横長の建物の敷地内へと入ろうとしていた。

この建物の名はブリアンド国会議事堂。議会が開かれるグラウド政治の拠点の一つだ。

馬車は正門の前で一時停車し、通過に必要な確認を取る。

運転手が門番に許可証を見せる。

「ルイ・マスティン軍務大臣の馬車だ」

「確認しました。どうぞお通り下さい」

馬車はゆつくりと敷地の中へと入っていく。

馬車の中の茶色ヒゲの男マスティン軍務大臣は、少し疲れた様子で小さくため息をついた。そして軽く目を押さえる。

馬車が止まるとマスティン軍務大臣は馬車から出て空を見上げる。

霧によつて陽の光は薄くなり、昼間だというのに辺り全体が薄暗い。

（やれやれ、天気も私の体と同じ状態か……）

マスティン軍務大臣はゆつくりとした足取りで建物の中へと入る。長く広い廊下を歩き、議会の開かれる大部屋へと向かう。

マスティン軍務大臣は議会部屋へと入った。

広い部屋の中には巨大机が置かれている。二十角形の円形に近い机だ。ここで議会が開かれる。

マスティンは議会が始まる時間よりもずいぶん早くに來たつもりだったが、自分よりも早く、すでに三人の議員が机の前に腰掛けていた。

マスティンの席と離れた席に座っている男がマスティンに気づく。その男は年齢四十代前半、黒い髪にあごをおおう黒いひげ、太い眉に鋭い目をしている。威厳に満ちた顔立ちをしているが、表情はずいぶんと人なつっこそうだ。

総務大臣のジオ・グランロイヤード。

マスティンに気づくと軽く手を上げ、笑いかける。

マスティンも軽く手を上げながらほほえみ、それに答える。

（そういえば、彼とは最近付き合っていないな……若い頃はよく付き合ったものだが）

マスティンがそう思っていると、さらに一人の男がマスティンに気づいた。

その男は年齢三十代後半、黄色い髪に高く整った鼻、何物にも興

味がないような無機質な目をしている。

ザベル・ライトシュタイン中将だ。

マスティンの方を一瞬見て、その存在だけ確認すると何事もなかったように手持ちの資料に目を戻す。

（彼だけは何を考えているのかさっぱり分らないな）

マスティンはそう思いながら席に座る。すると最後の一人がマスティンの方を見る。

ディアル・ロストブルー中将だ。

目が合うと静かにほほえみかけてきた。

（いつ見ても若いな、若すぎる議員だ。議員の中でたったの二人の平民の内の一人、そして史上最年少の議員……か）

マスティンが席に座ってしばらくすると、次々と他の議員達が部屋へと入ってくる。

議会が始まる三十分前には二十席あるほぼ全ての席が埋まった。しかし、一席の空席だけが埋まらない。

しばらくしてマスティンは手持ち時計を見た。議会が始まる五分前、それでも最後の空席は埋まらない。

議会が始まる二分前、最後の議員が部屋へと入ってきた。

五十代前半のその男は、整えられた白い髪と白いひげで顔全体が覆われている。丸っこい顔には少したれ気味の目がチョココンと浮いている、しかしその目からは鋭い光が放たれている。

グラウド国軍のトップ、サーマス・オルズバウロ元帥だ。

議会が始まる二分前だというのに全く焦る様子もなく、ゆっくりとした足取りで席へと向かう。

オルズバウロ元帥が席に着いて間もなく、議会が開始された。

司会者が様々な議題を読み上げ、そこから議論が行われ、投票により可否が決定される。

そしてある議題に対する議論が行われた時、マスティンは席を立ち、大きな声で議員達に呼びかけた。

「現在のこの内乱は、俗に言われる『ダークサークル』の代表とも言えるものでしょう。すでに我々には有余はありません。国家転覆の危機にひんしているこの状況に対し、我々は早急に対策を立てねばなりません」

声を上げるマスティンに議員全員が注目する。

「私は今の国民制度の改善を提言します。資料に示されたとおり、改善内容は大きく分けて三つ。まず一つ目、大きくなり過ぎた貴族権力の縮小。二つ目、国民の重税の減額。三つ目、領地主の農民に対する待遇の改善。以上の三つを私は提言します」

一人の議員が口を開く。

「えーと、一つ目の貴族権力の縮小に関してだがね。どれほどの縮小を予定しているのかね」

「特権の50%を停止する方向で考えています」

「1、50%!?」

議員達はザワザワと騒ぐ。

「別に騒ぐほどのものではありません。予定している特権内容は十年前のものと大差ありません。逆に現在の貴族権力が肥大し過ぎていると私は考えています」

議員たちが口々に声を上げる。

「こんなことが実行できるわけがなかるう」

「貴族全員と戦うつもりかね」

マスティンは議員達を少しだけにらむ。

「先ほど述べたように特権内容は十二年前のものと大差ありません。縮小しても権力としては十二分にあると私は考えます。それよりも今の国の状態を放置すれば権力どころが命までも失いかねない状況にあるということを、議員の皆様には理解していただきたい」

「それは我々が解放軍に負けるということなのかね？」

オルズバウロ元帥の太い声が静かに響いた。マスティンをジッと見ている。

「今のまま国の状態を放置すれば、内乱の規模は膨らむ一方です。じき国軍でも抑えられなくなるでしょう」

そのマスティンの言葉に対して別の議員が口を開く。

「杞憂だよ。農民の寄せ集めに世界最強のクラウド軍が負けるはず

がない」

その言葉にマスティンは反論する。

「しかし現状、すでに領地の半分が解放軍に奪われています」

別の議員が口を開く。

「半分といっても東の首都から離れた西の半分……つまり地方だろ。そこで打ち止め、これ以上の進行などできんよ」

「しかし現状を放置すれば、国は荒廃する一方でしょう」

そのマスティンの言葉に対して数人の議員が口を開く

「このタイミングでここまでの制度の改革……まるでセウスノール軍に許しを請うているようではないか。むしろが走るな」

「そうだな……制度の改革はあくまでも解放軍を抑えたあと、国の威厳を保つためにはそれが望ましい」

するとその時、ロストブルー中將が口を開いた。

「制度の改革は解放軍を抑える前でも良いでしょう。制度改革によつて縮小した解放軍を叩けば良いのです。それで国の威厳も保たれます」

その言葉に一人の議員が口を開く。

「やれやれ、『瞬神の騎士』ともあろうお方がずいぶんな弱腰ですな。まさか解放軍に勝つ自信がないのではないでしょうな」

軽い挑発を含んだ議員の発言。ロストブルーは動じない。

「内乱に限らずテロも増えています。こんな戦いは早く終わりにした方が良いでしょう」

それらの意見を聞いてグランロイヤー総務大臣が口を開く。

「制度の改善には賛成だが、いささか急過ぎるな。この内容では貴族の反発は避けられないだろう。もう少しゆるくすべきだな」

それを聞いてマスティンが少し荒げた口調で言う。

「今の状況でいちいち反発を気にしてはまともな改革はできません」

グランロイヤー総務大臣もマスティンを見つめる。落ち着かせるようにゆるい口調で話しかける。

「ルイ、君の意見も分かるが、貴族の反発が強まれば議会そのものの存在が危うくなる。それでは改革どころではなくなるだろう。今は我慢の時だ」

「その我慢がいつ解けるのかが疑問だな」

ライトシュタイン中将が静かに口を開いた。無機質な目で議員全体を見つめた。

「そう言い続けて…… 皇帝政治が常に主導となっていたのだろうか？ これでは議会が存在しようとしまいと同じだな」

グランロイヤーはそれを聞いて眉を寄せる。

「耳が痛い話だな。しかし我々も皇帝政治に遅れをとっているものの、それなりの仕事はしてきた」

「今の国の状況を見て、何を持ってそれなりの仕事なのか疑問だ」

ライトシュタインは静かな口調で言った。

グランロイヤー総務大臣は少しだけ黙ったあと、再び口を開いた。

「だが我々が消えれば、また完全な皇帝政治に逆戻りだ。とにかく話を戻そう、ルイ・マスティンの提言を踏まえて、私の提案を言う」

グランロイヤーは議員全員を見渡す。

「貴族の権力縮小と領地主の農民待遇改善は、今の状況下では難しい。今回は減税を行い、少し様子を見てみよう。現状の改善傾向が見られれば貴族たちの反応も変わってくるだろう」

それを聞いて他の議員達が少しうなる。

「確かにその程度なら反発は少ないが……」

「貴族権力の改革の方向で考えるは内心シャクだが、現状を考えれば致し方ないか」

「時間です………では先に挙げられたルイ・マスティン軍務大臣

の提言、議論の中で挙がったジオ・グランロイヤー総務大臣の提案にそれぞれ投票を行おうと思います。よろしいでしょうか？」

そして議員達の投票が行われた。

間もなく結果が発表された。

まずはマスティンの提言からだった。

「賛成4票、反対15票、否決されました」

続いてグランロイヤーの提案の結果。

「賛成13票、反対6票、可決されました」

その後、いくつかの議題を終えたあと議会は閉会した。

廊下を歩くルイ・マスティン軍務大臣、険しい表情だ。それに一人の男が早足で追いつこうとする。

「ルイ！」

ジオ・グランロイヤー総務大臣がマスティンに呼びかける。

「ジオ……」

グランロイヤーはマスティンの隣を歩く。

「ふう、せわしないなルイ。せっかく久しぶりに顔を合わせたって
いうのに」

「……ああ、悪いね」

マスティンは細い目でグランロイヤーを見つめる。

「おいおい、そんなににらむなよ。君の提言を潰してしまったことを怒っているのか？」

「別ににらんではないさ。少し疲れているだけだよ。それに君が私の提言を潰したとは思っていない」

その言葉を聞いてグランロイヤーはほほえむ。

「そう言ってくれると少し胸が軽くなるよ。実際私があの提案を出さなければ、九割方、君の提言は一つも通らなかつただろうからな」

「本音を言つと一割でもすべてを通る可能性を残したかつたがね」

「やっぱり少し怒ってるな」

「ああ、ほんの少しな」

マスティンはほほえんだ。

「しかし、今の国の状態は全く良くなる気配がない」

マスティンは少し深刻な表情をしながら言つた。

「まあな、議論の途中でザベルのやつに皮肉たつぷりに言われたしな」

「私は多少無理をしなければこの国が良くなることはあり得ないと思うがね……………まあ、それは今は置いておこう」

「別に置く必要はないさ。議会以外でもどんどん話せばいい、少なくとも私の前では遠慮はいらないよ」

「そうかい。正直、今のこの国の状況に対して、議会の無力ぶりに憤りを感じるよ」

マステインはそう言って軽くため息をつく。

「そうは言っても我々もたった二十人の集まりだ。なかなか思うようにはいかんだろう」

グランロイヤーが励ますように言った。

「そうかもしれんが」

「君はまじめ過ぎるな、それでは身が持たないぞ。どうだ？ 今から食事でも行かないか。いい店を見つけたんだ」

「すまないが、これから少し用事があったな。すぐに馬車に戻らないと」

マステインは申し訳なさそうに言った。

「そうか…………それは残念だ。最近、起きている重役殺しには気がつけろよ」

「ああ、君もな」

「私は大丈夫だ、腕のいい護衛がいるからな。ではまたな」

「ああ、食事の件はすまなかったな」

二人は離れていった。

そこから少し離れた廊下をディアル・ロストブルー中將が歩いていた。

「やあ……ロストブルー中將」

横から静かな声がしてロストブルーはその方向を向いた。見るとライトシュタイン中將がいた。無機質な目でロストブルーを見ている。

「おや、ライトシュタイン中將。あなたが声をかけてくるなんて珍しい」

ロストブルー中將はほえみながら言った。

二人は並んで廊下を歩く。

ライトシュタインが表情を変えずに口を開く。

「どうだったかね。今日の議会は」

「あまり良くありませんね。議員全体の傾向が、自らの保守を最優先にしている。まるでオウムのように同じ言葉の繰り返しだ」

「君らしくないものの言い方だな。少しいらだっているようだな」

「でしょうね、自分でもはっきりと分かりますよ。私だけではなく、マスティン大臣にも正直同情します。彼の正当な主張が全く相手にされていない」

ロストブルーは少しだけ強い口調だった。

「マスティンか……君は議員にいらだっていると言ったな。君の目にはあの議会全体はどう映った？」

「まるで液体のようですよ。どんなに強く押しても避けられて、違う切り口でモノを言っても避けられて。いらだっているのはつきりと言いますが、議員全体の考えが浅く、判断力が鈍い」

「なるほど、しかしもう一度聞こう。君の目にはあの議会全体がどう映った？」

ライトシュタインは無機質な目でジッとロストブルーを見た。

ロストブルーは一瞬戸惑う。

「本当に先ほど言った印象だけか？」

「……………」

ロストブルーは少しだけ考えた。

「いえ……どうも、何と云うか。ほんの少しですが、気味の悪い感じを受けました」

「どう気味が悪いんだね？」

「どうも何か……自らの保身以外で、なにか奇妙な団結感のよ
うなものを感じました。まるで議会が別の意思を持った生き物のよ
うに……」

「ふむ」

ライトシュタインは前を向いてあごを一回さすった。そして再び
ロストブルーを見る。

「君はやはり優秀だな、私も同意見だ。議会そのものに不自然な印
象をはっきりと受けた。マステイン大臣の弁論……まるで銅像に向
かって呼びかけているかのようだった」

「一体どういふことなのでしょう？」

「議会内に何かの意思が働いているな……議員の一部に何かを企ん
でいる者たちがいる」

「何かを……？」

ライトシュタインはロストブルーを鋭く見つめた。

「『ダークサークル』」

「……！」

「どうやら……………この円の中心に立っている人間がいそつだ」

「今の『ダークサークル』は何者かによって引き起こされたものだと…………？」

ロストブルーは少し驚いた表情をした。

「今日はここまでだ」

「……………！」

「ロストブルー中将、今度の休日にチェスなどどうかな？ 最近新しい対局時計を買ったんだ」

それを聞いてロストブルーはほえんだ。

「ええ、喜んで」

四角い灰色の建物が並ぶ街並みに巨大な横長の建物がそびえ立つ。ここは解放軍フルスロック基地。

その司令室の机で、ガルディアは一通の手紙を読んでいた。

コンコン

ドアがノックされる。

「おーう、いいぞ」

ガルディアの返事と共にドアが開かれアールスロウが入ってきた。

「 그레이さん、この資料ですが……………手紙ですか」

「んっ？ ああ、さっき手紙鳥で届いた」

「基地関連ですか？」

「まあ、無関係じゃないな」

「ではどこから？」

「セウスノール本部からの招集だ」

「招集を手紙で済ますとは……………」

「まあ、理由は分かる。まあパツと行ってパツと帰ってくるよ」

「では護衛を用意しますね」

「ん、いや、いい。もういっしょに行くやつ決めてるから」

「……………？」

クロコは基地の廊下を歩いていた。その時、向かいからガルディアが歩いてきた。

ガルディアはクロコを見るなり手をあげて笑いかける。

「よう、クロコ。見つけた」

「ああ？」

ガルディアは素早くクロコの横について肩に手を回す。そして耳もとでボソつとしゃべる。

「なあ、クロコ……」

そしてガルディアは一言つぶやいた。

「『ファントム』に会いたくないか？」

クロコは一瞬驚く。

そして少し間をおいて答える。

「……会えるんだったらな」

「よしっ！！ 決まりだ。クロコ、今からセウスノールへ行くぞ！」

「……………」

クロコは一瞬何を言っているのか分からなかった。
そして遅れて声が出る。

「はあっ!？」

間もなくクロコとガルディアは馬車に乗って基地の外へと飛び出した。

3 - 3 邪悪な意思

純白の大きな建物が迷路のように入り組んで立っている町並みが広がっている。

ここは国軍領の町シャルロット。

その町の東端には巨大な建築物がそびえている。四方を石壁に囲まれた正方形に近い形の建物だ。中央には高い塔が一本伸びており、建物全体にいくつもの大型大砲が備え付けられている、入口の上部には角の生えた馬が旗印の緑色の旗が飾り付けられている。

ここはシャルロット国軍基地。

その基地内の廊下を二人の若い軍人が歩いていた。

一人は年齢十五、六の少年で白いサラツとした髪に、厚い眼鏡をかけており、どこか優しげ印象を受ける。

国軍人のスコア・フィードウッドだ。

その隣を歩くのは、年齢十五、六の長身の少年、少し横にはねた黒髪に、黄色い瞳をしており、全体的に人なつっこそうな印象を受ける。

スコアの友人、フレア・フォールクロスだ。

フレアはものすごい速さで口を動かしてスコアに向かってしゃべり続けている。

「それでさー、オレは彼女に勇気を振り絞って告白したわけだよ。そしたらなんて言ったと思う？ 『おしゃべりな男は嫌い』って一蹴だよ。でもさ、そって逆を言えばオレの最大の魅力でもあるわけだろ。だからオレは言っちゃったんだよ。『常にしゃべり続けている男と全くしゃべらない男だったらどっちがいい？』って、そして

ら普通にしゃべり続けてる男って言うよな。そしたら彼女なんて言ったと思う。『どっちも嫌い』って……おい！……聞いているかスコア？」

「うん」

「でもさー。今だからこそ思っただけど、やっぱりオレと彼女は合わなかった気がするんだよなー。前にオレが彼女にお気に入りのベアイコンを紹介したときだって、脂が少ないと言ってた。分かってないんだよ。ベアイコンの魅力は脂じゃなくて味だろ？」

「うん」

「でもさー、そうは思ってもやっぱり傷つくモンなんだよ。その傷を癒やすためにも新たな愛を探さないと。なあスコア、今度一緒に町へ女の子探しに行こうぜ。おまえだってそろそろ彼女がほしいだろ？　それが嫌だったらさー、オレにいい子紹介してよ。オレもいい子紹介するからさー。まあ、みんなオレを振った子たちだけだ」

「つまり？」

「え？　まあつまり……彼女がほしいってわけだ。ってコール！　おまえいつの間に!？」

二人の後ろにいつの間にか一人の少年軍人が立っていた。

その少年は年齢十四、五、少しねている茶色の髪に、青い瞳、幼い顔立ちをしているが落ち着いた雰囲気を持っている。

スコアの友人、コール・レイクスローだ。

「やあ二人とも」

コールは落ち着いた口調で二人にあいさつした。それを見てスコアがほえむ。

「やあコール。町の見回りはもう終わったんだ」

「うん」

三人で廊下を歩く。

コールが二人の方を見る。

「そういえばあのウワサ聞いた？ フォロポールで起きた農民の反乱でのウワサ」

「フォロポールで起きた農民の反乱？ ああ、あの国軍が鎮圧したやつか」

フレアが答える。

「うん、鎮圧って言うよりせん滅の方が正しいけどね」

それを聞いてスコアがうつむく。

「なんだかそういう話を聞くと複雑な気分だね。ボクらは何のために国軍にいるんだろう……なんて考えちゃうよ」

それを聞いてフレアが口を開く。

「だけど放置したらしたで大変だろ。一年前のロゴ反乱なんか大変

だっただろ？」

「そうだけど……」

「うん、それでね、話はウワサに戻るけど、今回反乱が起きたフォロポールって町には大勢の奴隷がいたらしいんだけど……」

するとフレアが口を開く。

「へえ、まだ奴隷がいる町なんて存在してたんだ」

「うん、でウワサによると、今回のせん滅作戦で、その大勢の奴隷が、裏で国軍に虐殺されたらしいよ」

「えっ!？」

スコアが驚く。

「それってどういうこと？」

「つまりさ、町の人が大勢死ぬと必然的にその人のもとにいた奴隷が路頭に迷っちゃうよね。それを放置するわけにもいかないし、だからといって国軍が保護するにも資金がいる、だからさ……」

「処理……てわけか。うえ。その作戦の司令官ってもしかしてあのレイズボーン？」

「いや、別の司令官らしいよ」

それらを聞いてスコアがまたうつむく。

「なんだか本当に嫌な話だね。国軍は国民を守るためにあるはずなのに……」

それを聞いてコールがゆっくりとうなずいた。

「そうだね、ボクと見回りした人もそう言ってたよ」

「でもそういう事件も一時期よりは減ったみたいだよな。ロストブル―将軍が目を光らせてるって言うし」

「まあね」

フレアはコールの顔をのぞく。

「そういえばコールさー。町の見回りの任務はどうだった。なんか事件起きた？ 泥棒とかさー、強盗とかさー」

「うっん、いつも通り平和だよ」

「今回おまえがいないせいで、戦闘訓練大変だったんだぜ。スコアの相手できるのオレとコールくらいだからさー、きついんだよ、一人だと、スコアの相手は」

それを聞いてコールが小さくうなずく。

「うん、そうだね。できるだけ三人一緒に訓練したいよね」

「じゃあ今度ラティル大佐に相談してみるね」

スコアはそう言ってほえむ。
三人は廊下を歩き続ける。

「そういえばさ、スコア。疑問だったんだけど、きみ、目悪いでしょ。よく戦闘のとき、あんなに相手の動きが見えるよね」

「コールそれはさー。違うんだよ。スコアの目は」

コールの質問にフレアが答える。

「スコアは見る方の視力は悪いけど、動くものも見る視力はメチャクチャいいんだよ。それに、なんだっけかな……そうそう、あいつはそれ以外の感覚もメチャクチャいいんだ」

「それ以外の感覚って言うと、聴覚とかきゅう覚とか？」

コールのその言葉にスコアがうなずく。

「うん、そう。ボクの場合は聴覚やきゅう覚、触覚がものすごく鋭いんだ。集中すれば目をつぶってても、相手の位置がはっきりわかるぐらい」

「じゃあ、もしかしてスコアって、死角ないの？」

「うん、無いよ」

「サラッともものすごいこと言うね……」

「だけどさー、コール。スコアはそりゃあすごいよ。だけどさ、戦闘の時だけだよなー。スコアってさオンとオフの落差が激しいよな

「」

「フレア、軍務中をオフに例えちゃダメだよ」

コールが素早くつつこんだ。

「うーん、ボクも常にしっかりしようとはしてるんだけど……」

スコアのその言葉にフレアが素早く答える。

「スコアはさー、いいんだよそれで。普段集中抑えてるから、戦闘の時あれだけ動けるんだって。オレなんかさー任務中しゃべるのやめただけで……」

「うわぁっ!」

突然スコアがコケた。顔面を床に思いっきりぶつける。

「これはこれで、問題あると思うけど……スコア大丈夫? すごい音したよ」

「だ……だいじょう……ぶ」

「大丈夫だってコール、こいつこう見えてメチャクチャ丈夫だから」

「鼻赤くなってるよスコア」

「うん、でも眼鏡は無事だった。良かったー」

「ほらな」

「大丈夫かね。スコア・フィードウッド」

突然向かいから別の声がした。三人がその方向を見るとそこには一人の軍人が立っていた。

その軍人は年齢三十代前半、黄色い髪に、細長い目に黒い瞳、落ち着いた顔立ちをしており、どこか知的な印象を受ける。

このシャルルロード基地の司令官ケイス・ラティル大佐だ。

ラティル大佐はスコアの様子を見ながら話しかける。

「だいぶ勢いよくぶつけたようだね、スコア」

「いえ、大丈夫です。こんなものしょっちゅうなんで」

スコアは急いで立ち上がる。

「いや、油断は禁物だ。今すぐ医務室に行こう」

「いえ、ホントに大丈夫なんで……」

「君は我が基地のエースだ。体は大切にしないと。よし、一緒に付いて行ってやろう」

そう言つとラティル大佐はスコアの腕をつかんでそのまま引つ張っていく。

「君達、スコアを少し借りるよ」

「あの大丈夫……うわ、わわ」

ラティルはスコアをつれて姿を消した。
取り残される二人。

コールが呆然と口を開く。

「ラティル大佐って、時々分らないよね」

「アッハッハッハッ、そこが面白いんだろ」

青い海が広がっている。きれいに整備された港には多くの巨大船が停まっており、海岸沿いには多くの四角い純白の建物がきれいに立ち並ぶ。

ここは東部に位置するクラウド最大の港町パシフィルド。

その整備された道を一台の小型馬車が走る。

その車体の中には一人の長身の男が乗っている。

長身の男は、年齢二十代後半、黄色い髪、形の良い目に青い瞳、高い鼻、全体的に気品のある雰囲気を持っている。

国軍の中将ディアル・ロストブルーだ。

馬車は間もなく丘の上へと続く一本道を走る。その一本道の周りには草原のみが広がっており、建物の姿は一つもない。

丘の上まで上がると馬車の前方には巨大な屋敷が広がっていた。

純白の美しい屋敷だ。

屋敷の前で馬車から降りたロストブルーは、丘から町の景色を見

渡した。

町全体を白い純白の建物が覆うように広がっている。純白に染め上げられた町。

そしてその白い町の景色のすぐ隣には、海の青い景色が広がっている。

眼下に広がる白と青の景色は、町の景色とは思えないほどに見事に色分けされていた。

「美しい！」

ロストブルーは感動の声をあげた。

ロストブルーが屋敷に入ると、年齢六十前後の鼻の長い執事が出迎えた。

「お待ちしております、執事のレッドロッドです」

レッドロッド執事に招かれて庭園へ行くと、そこに置かれた白いテーブルの前に一人の男が座っていた。

その男は年齢三十代後半、黄色い髪に高く整った鼻、何物にも興味の無いような無機質な目をしている。

国軍の中將ザベル・ライトシュタインだ。

ロストブルーに気づくと表情を変えずに立ち上がる。

「よく来てくれたロストブルー」

ライトシュタインは静かな口調で言った。

「光栄ですよ。ライトシュタイン家の屋敷に招かれるなんて」

ロストブルーはほほえむ。

庭園から屋敷へ向かって歩く二人。

ライトシュタインが前を向きながら口を開く。

「重役殺しが起きている中、護衛一人付けずに来るとはな。君らしいといえば君らしい」

ロストブルーはほほえむ。

「普段はミツシュを護衛に付けるのですが、今回は話が話なのでね……しかし、立派なお屋敷ですね。ライトシュタイン家……大貴族と呼ばれるだけはある」

「この屋敷は代々受け継がれているものだが、この大き過ぎる家は私には合わんよ」

ライトシュタインは前を向きながら話す。

「ご謙遜を、そんなことはありませんよ」

ロストブルーは愛想よく言った。

「いや、身の丈にだよ。こんな巨大な屋敷、一人のものとしては大き過ぎる」

「屋敷は権威の象徴でもありますからね」

「権威は形にはできんよ。それよりどうかね？ この町は」

ライトシユタインはロストブルーの目を見る。

「美しいですね。さすがはクラウド最大の港町パシフィルド。そういえば、ここはパシフィルド・ラインがあることでも有名ですよね」

「年に一度来るクジラの隊列か……残念ながら今は季節が違つ、見られる可能性はないだろう」

「そうですか。それは残念です。しかしこの町は好きになれそうですよ。帰りにゆっくりと様子を見ていきます」

「そういえば君はクラウドの町中を回っているそうだな」

「ええ、様々な町を歩き、そして様々な人と話す。私にとっては至福の時間です」

「それが上に立つ者として必要なこと……そう君は考える」

「……………よくご存じで、私はそれを何よりも大事と思っています。最も私自身、ずいふんと楽しみながらやっています」

「楽しいことばかりではないだろう」

「ええ……そうですね。しかし、今の議員の様子を見ると、それがいかに大事のことなのかがよく分かりますよ」

「確かに狭い情報だけを得ていてはその事象を真に知ることはできない。しかし注意しなければならぬことは、人は自らが足を運ぶ場所を無意識に限定してしまう、君が得ている情報もまた局所的なものに過ぎないということだ」

「……心に留めておきます」

「しかし君はよくやっている。その姿勢には正直敬服するよ。君からは、平民として上へ立つ者の誇りが感じられる」

「お言葉ありがとうございます。私はそのために戦場で命を懸けたようなものですからね。だからこそ、今の自分の無力さにいらだつのかもかもしれませんね」

「場合によっては、これから力になれるかも知れんぞ」

二人は屋敷内の広い廊下を抜け、広い一室へと入る。

美しい家具が置かれたきれいな部屋だ。その部屋の中央には机が置かれ、そこにチェス盤が置かれていた。

二人はそのチェス盤を挟んで座る。チェス盤の横には美しい装飾が施された茶色の対局時計が置かれている。

「これが先日おっしゃっていた対局時計ですか。確かに良いものですね」

「少し前、シャルルロッドのラティルに紹介されてな。機会があったので購入してみたんだ」

「ああ、ケイス・ラティルですか。部下であると同時に私の友の一人でもありますよ」

「そうなのか、君と彼なら確かに気が合いそうだ。さて、そろそろ始めよう。君は腕には自信はあるのかね？」

「ええ、私も立場上、様々な基地を回るのが、その時ついでに基地内の最も強い打ち手を探して打つのが趣味の一つなんですよ」

「ほう、成績は？」

「十九戦、十九勝です」

「それは楽しみだ」

「実はあなたとはずっと打ちたいと思っていたんです」

「そうか、久々に骨のある相手で嬉しいよ。では始めよう」

対局時計が動き出した。

国軍シャルロット基地、その司令室の机にラティル大佐は座っていた。

突然ドアがノックなしで開かれる。ラティルは少し驚いた。

部屋へと中年の軍人が入ってくる。大柄で目つきが悪く、太いくちびるの軍人だ。ズンズンと足音を立てラティルの前に立つ。その様子を見てラティルは立ちあがり敬礼をする。

「これはこれはグロップス准将、いったい突然どのような御用で」

ラティルは落ち着いた口調だ。
グロップス准将は目つき悪くにらんでくる。

「どのような御用だと……何の用で私がわざわざこの基地に足を運んだのか、そんなこととつくに分かっているだろう」

「いえ、見当もつきませんが」

「先日出された要請書だ！　これから始まるクラット基地攻略戦で、このシャルルロッド基地から3000の援軍を出せとの要請だ」

「はっ、そちらについてはただいま準備を進めておりますが」

「そして要請書にはこう書かれていたはずだ。その援軍には必ずスコア・フィードウッドとフレア・フォールクロスを入れると」

「書かれていましたね」

「だが、貴様はそれに対してスコア・フィードウッドは援軍には出せないと返答した。それはどういうことだ！」

「……？　どういうこととおっしゃられても、返送した書類にしっかりと記載されているはずですが」

「そんなことは分かっている！　その記載内容が問題なのだ」

「スコア・フィードウッドをロゴ地域に潜伏しているルザンヌ反乱軍討伐に向かわせるため、援軍には出せないという内容ですか？」

「そうだ！」

「しかし准将、現在潜伏していると考えられているルザンヌ軍にはそのリーダーであるレイド・フェムザムがいる可能性が高いとされています。今がルザンヌ軍を完全崩壊させるまたとないチャンスなのですよ」

「それがどうした」

「どうしたとおっしゃられても……准将もご存じのとおり、ルザンヌ軍は各地で多数のテロ行為を行っています。さらに市街戦を得意としており、一般市民に及ぼす被害は甚大です。この組織の危険度と厄介性はご存じでしょう」

「あんな小さな組織に国軍を脅かすような武力はない。だがセウスノール軍は違う。分かるが若僧。そして今、我ら国軍は本腰を入れセウスノール軍を潰そうと動いている。あの『七本柱』さえも本格的に動こうとしているのだ。軍全体が足並みをそろえようとする時に一人だけ逆走しようとするのか。んっ？」

「まさか……そんな気は私には毛頭ありませんよ」

「ならばとつと書類の内容を書き直せ」

「そうしたいのは山々なのですが、どちらにしろスコア・フィードウッドは現在戦場には出せません」

「出せない！？ どういうことだ！」

「スコアは不慮の事故により鼻骨骨折を起こし、現在療養中なので」

「鼻骨折だど!？」

「戦地におもむいても、あれでは役に立てないでしょう。それに仮にそれが原因で戦死でもされたら……分かるでしょう？ あのためを失うことがグラウド国軍にとってどれほどの痛手か」

「むう……」

「私の監督が至らないばかりに……非常に申し訳ないのですが」

「貴様、ウソをつくとためにならんぞ……!」

「まさか！ 私はいつでも上に忠実だったでしょう。なんせ私は早く出世したいのですからね」

「くっ……もう良い!!」

そう言つてグロップス准将はズンズンと歩いて部屋を出ていった。ラティルはまたゆっくりとイスに腰掛ける。

「ふん……治安維持に目を向けずに何のための国軍だ。あれではまるで戦争狂だ」

コンコン

ドアがノックされる。

「入りましたえ」

兵士が部屋へと入ってくる。長い顔の若い兵士だ。

「書類を届けに参りました」

「ああ、君は確か……………フォッカー軍曹か。ありがとう、ご苦労だった」

「はっ！ それではこれで」

「ああ、ちょっと待ってくれ」

出ていこうとするフォッカーをラティルが止める。

「なんでしょうか……………？」

「君はこれから三週間、基地に来なくていいぞ」

「……………！！ はい！？」

「ああ、大丈夫。ちゃんと出勤していることにするから、給与もきちんと支給される」

「……………あの、ですが」

「話は以上だ。もう出ていいぞ」

ボタン

部屋を出たフォッカーは一言つぶやいた。

「あの人はときどき分からない……」

基地の広い食堂、スコアはフレアとコールと一緒に昼食を食べていた。

スコアの顔には鼻を中心に包帯が巻かれている。
フレアが口を開く。

「でもなんなんだろうな。おまえのこの包帯」

「うん……あのあとラティル大佐に医務室に連れてかれて、この有様だよ。大佐にしばらくは外すなって言われちゃって」

「あの人って、ホントにときどき分からないよね」

三人がそんな会話をしていると大きな声が食堂に響く。

「スコア・フィードウッド!! スコア・フィードウッドはいるか
!」

目つきの悪い軍人が大声をあげてスコアを探している。

「は、はいっ! ここにありますが」

スコアは急いで立ち上がって答える。

グロップス准将はそれに気付き、スコアの前に立つと、悪い目つきでスコアの方をジーと見る。

「あ……あの、どのような御用でしょうか」

グロップス准将はスコアの包帯を一瞬見たあと舌打ちをした。

「もう良い！ 用は済んだ！！」

グロップス准将はそう言ってスコアに背を向けて立ち去った。
呆然と立つスコア。

「いったい……なんだったんだ？」

フルスロツクより西に位置する馬車道、そこを走る一台の馬車。
その車体の中で、クロコはスヤスヤと昼寝をしていた。フルスロツクを出て二日経っていた。

「おいっ！！ クロコ。起きろ！ おいっ！！」

ガルディアの騒がしい声にクロコは目を覚ます。

「ふああ、なんだよ……」

クロコが目をごすりながら体を起こす。
笑顔のガルディア。

「いいから見てもよろ。窓だ。窓の外」

クロコが窓から外をのぞいた。その瞬間、クロコは驚いた。大地全体に黄色い景色が広がっている。黄色い草原だ。

「な、なんだよコレ……」

「グラウドに名高いイエローカーテンだ。黄草のみの草原だよ」

雄大な黄色い草原は地平線まで続いている。風の波が何層にもなつて草原を走る。まるで天国の道を走っているかのようなだった。

「すげえ……」

クロコは思わず魅入る。それを見てガルディアはほほえむ。

「いや、喜んでもらえたみたいでオレは満足だ、ハッハッハッ。わざわざちよつと進路を変更して遠回りしたかいがあったよ」

「今回だけは良い仕事したって感じたな」

「まあデスクワーク以外ならな。しかし、こういうのを見るたびに思うよ。世界ってすげーなあ、ってな」

「ああ……」

クロコはしばらくの間イエローカーテンを見つめていた。馬車はセウスノールを目指して走る。

港町パシフィルド。その丘の上に建つライトシュタイン邸。
その一室で、ロストブルーとライトシュタインはチェス盤を挟んで向かい合っていた。

「チェックメイト」

しばらくの静寂が辺りを包む。
ライトシュタインが軽く息を吐いた。

「負けましたよ」

そう言つて肩を落とすロストブルー。

「まさか、ここまで圧倒的な敗北だとは……悔しさを通り越して絶望しそうですよ」

「そう落ち込むことはない。君は私が過去三年相手をした中では最強だった」

「それでこの差ですか。噂通り……いえ、噂以上の腕前ですね」

「君も良い腕だ。弱点らしい弱点はなかったな。ただ全体を比較すると中盤が少し弱いな」

「中盤ですか……あなたに言われるまでは全く自覚はありませんでしたが」

「負けていなかったのだから当然だろうな」

ライトシュタインはそう言って一息ついたあとに再び口を開く。

「盤上では、君の実直な性格がよく出ていたよ」

「性格ですか」

「打ってみれば大抵は見えてくるものだろう」

「ふむ……しかし、あなたに関してはまるで見えませんでしたよ」

「だろうな」

「ただ、見えないというよりは、見せないようにしているという感じですね。それがあなたの性格なのでしょう」

そう言ってロストブルーはほほえんだ。

「……君はなかなか油断の出来ない男だな。さて……では、遊びは終えて、そろそろ本題に入ろうか」

ライトシュタインがそう言うのとロストブルーの目がキツと鋭くなる。

「『ダークサークル』ですね」

「そうだ」

「『ダークサークル』……およそ十二年前から続く混沌とした時代の総称。それ以前は『賢帝』と称され、歴代で有数の偉大な皇帝と

うたわれたブルテン皇帝によって、平安な時代が続いていた。しかし子室に恵まれなかったブルテン皇帝の、一人息子ファルゼム皇子の死をきっかけに、ブルテン皇帝の政治は一変。皇帝の暴走を議会は止めることができず、それに伴い軍や貴族権力も暴走。国民にとつての混沌の時代が訪れた……」

「……それが『ダークサークル』の、一般的な認識だ」

「しかし、あれは天災ではなく、人災だと……あなたはそう考えている」

「そうだ。議会の中に存在する意思。そしてここ十数年で不自然に変化した国の状況……この国を自らの意思によって変化させようとする者達がいる」

「国を自らの意思で変化させようとする者達……もしも、それが事実ならば由々しき事態ですね。その者達の目的も気になりますが、この国を今の状態に導いたとするならば、何ともおぞましい存在です」

「そうだな、そしてその者たちの活動は十年以上前から行われていたことになる。今になってその存在が浮上してきたということは、やつらの活動が終局に向かいつつあるということだ」

「活動の終局……一体この国をどこへ導こうとしているのか………
…目星は付いているのですか？」

「いや、目星を付ける段階にまで至っていないというのが現状だ。しかし、私個人の調査でその者達の存在はある程度は浮かび上がってはいる。かなりの力を持った者たちだ」

「そうですね。事実、国をここまでの状態にする力……」

「目星を付けていないと言っても、ある程度絞り込むことはできる」

「議会に影響力を持つ存在……」

「そうだ。しかし、奴らの力が及んでいるのは何も議会だけとは限らん。ダークサークルに関連するものを挙げていけば分かると思うが」

「『ダークサークル』に関連するもの……皇帝政治の悪化……貴族の権力肥大……国軍による虐殺行為」

「そうだ。皇族、貴族、国軍、そのどれかにも関わっている可能性がある」

「かなりの権力と影響力を持っている者ですね」

「あるいは集団化することにより、それだけの力を得ているかだ。私が集めた資料に目を通せば、やつらの存在にある程度の真実味を持つことができるだろう。正直、私一人で相手をするのは骨が折れそうだ」

「それで私ですか」

「そうだ、君ならば能力においても権力においても申し分ない」

「その者達を押さえることでこの国の状態が好転するというのなら、喜んで協力しましょう」

ロストブルーはライトシュタインの目を見ながらほえんだ。

「ありがとう、感謝するよ」

ライトシュタインは表情を変えずに礼を言った。

二人は立ちあがり握手をした。

「とはいえ、今の軍の状況を考えると、この活動は先送りになる可能性が高いな」

「これから始まる戦い、それが終わったあとということですか」

その時、遠くからレッドロッド執事の声がした。

「ザベル様、お客様です」

「誰だ？」

「軍の方です」

「噂をすれば……か」

3 - 4 ファントムの正体

フルスロツクから西の地、その馬車道を一台の馬車が走っている。クロコ達を乗せた馬車は荒野の道をひたすら走る。フルスロツクを出て三日目の昼だ。

クロコは窓から顔を出し、道の先を見る。

するとクロコはあるものに気づいた。すぐに顔を引っ込めガルデアに声をかける。

「ガルデア、街だ。街が見えるぞ」

「んっ！ ホントか！」

ガルデアも窓から顔を出す。クロコももう一度窓から顔を出す。馬車道の先には城壁と建物の集団が見える。建物の集団には平べったい赤い屋根を付いていた。

「あの赤屋根は……間違いない、セウスノールだ」

「ついに着いたか」

「ああ、解放軍領の西の主都セウスノールだ」

馬車は間もなくセウスノールの石門を抜けた。

きれいに舗装された大通りを馬車は走る。立ち並ぶ赤屋根の巨大

な建物が次から次へと過ぎてゆく。遠くの方を見渡せば、細長い塔のようなものがいくつか立っているのが見えた。ガルディアが窓の景色を眺めながら説明する。

「セウスノールはもともと、そこそどこかい街ではあったんだが、解放軍の本部ができたことで一気に発展したんだ。今じゃあ劇場や商店街、酒場通りなんかの庶民の娯楽施設が多くできてる。東の首都ゴウドルークスは高級な雰囲気を持つてるらしいが、ここセウスノールはもっぱらの庶民肌な大都市だ」

「へえ、西部の村や町は幼いころ転々としたけど、ここに来たのは初めてだよ」

クロコは窓の景色をジッと見ている。

「まあ、今回はすぐ帰るから、多分どこも寄れないけどな」

「なんだよ、それ」

「怒るなって、割といま切羽詰まった状況なんだぜ、実は」

「チエツ、せっかく来たっていうのに」

クロコは不機嫌な声を出した。

「まあそう言うな。一番の目的はほぼ間違いなく果たせるから」

「……………」

（ファントム……）

それからしばらく馬車はセウスノールの道を走った。その間、様々な景色が目の前を通り過ぎる。灰色の家が所狭しと立ち並ぶ住宅地、巨大な建物が連なる商店街、工場地帯の横を通り過ぎた時は、塔のような巨大な煙突が立ち並んでいた。

「さて……そろそろかな」

揺れる馬車の中でガルディアがそう言って間もなく、馬車の前方に巨大な建築物が現れる。

……城だ。

巨大な純白の城が馬車の目の前に広がった。

形は複雑で、いくつもの巨大な屋敷が一か所に無理やり集められたかのようなだった。無数の壁、無数の屋根、無数の窓。そしてそれらから抜き出た形で城の中央部が高くそびえ、街全体を見下している。

馬車の窓から顔を出していたクロコは首をめいっぱいに上げてそれを見上げる。

「ここが……」

「シュルベルク城……。そう、ここがセウスノール解放軍本部だ」

馬車は間もなく敷地内に停車した。

クロコ達は大きな門から中へと入った。

入ってすぐの検問所をガルディアの顔パスで通過すると、目の前に壮大な広間の景色が広がった。美しい装飾が施された壁と天井が目の前を覆う。

クロコはそれを眺めながら口を開く。

「すげーな、解放軍にこんなトコ造る金があったとはな」

「ここを造ったのは解放軍じゃあないさ」

「……？ どういうことだ」

「ここはブルテン皇帝がファルゼム皇子のために建てた城さ。解放軍領になってからは本部として利用してゐるってわけだ」

「なるほどな。でも本部って基地じゃないんだな」

「基地もあるさ。この城の東にな。おまえ側の窓からじゃ見えなかったみたいだな」

「でも、なんで本部が基地じゃなくて城なんだ？」

「オレ達解放軍が国から領地を奪ったからだよ。自治は解放軍がやらなきゃならない。そういう関係で本部はこういう所の方が都合がいいんだ」

「ふーん」

二人はその後、広間を抜けて廊下へと入った。そしていくつもの階段を上がり、いくつもの廊下を抜けていく。

（ずいぶん高い所まで来たな……）

廊下を歩きながらクロコがそう思った時だった。向かいから一人の解放軍人が歩いてきた。

その軍人は年齢四十代後半、黄色い髪に少しはねた黄色いひげを生やし、目は開けているのか開けていないのか分からないほど細かった。

「おお、ガルディア。来たか」

軍人はガルディアに気づき声をかける。

「ごぶさたしています。ランクストン総司令官」

二人は握手をした。

ランクストン総司令官はクロコの方を見た。

「彼女が噂の『戦乱の鷹』か」

「あつ、いえ、違いますよ。もう一人の方です」

「もう一人……ああ、最近入った。名前はク……ク……」

「クロコ・ブレイリバーだ」

クロコは少しにらみながら言った。

横でガルディアが笑う。

「ハッハッハッ、こんなやつですがよろしくお願いします」

「あ、ああ」

「それよりも……」

「ああ、もう来ているよ。奥の部屋だ。行くと良い」

ランクストン総司令はそう言ったあと二人を横切っていった。二人は廊下の奥の部屋へと進んでいく。部屋の立派な扉の前に立つとガルディアがクロコを見る。

「クロコ、おまえはちょっと待ってろ。まずオレが話すから」

「なんだよ。ここまできて……」

「まあそう言うなって、いろいろ事情もあるからな。ちゃんと待ってろよ」

ガルディアはそう言うのと立派な扉を開け、一人中へと入っていった。

部屋の前に取り残されるクロコ。

三十分ほどが経ち、クロコが少しいらだち始めた頃、扉が少しだけ開かれる。ガルディアがヒョコツと顔を出す。

「クロコいいぞ。入れ」

クロコは部屋へと入った。きれいな部屋だった。様々な装飾が施されている。その部屋の奥に一人の男が座っていた。

その男は金属のヘルムで顔を隠していた。ヘルムの奥から響く声がした。

「ほつ……彼が呪いの少年クロコか……」

三、四十代ぐらいの声だ、クロコはそう感じた。
ガルディアが口を開く。

「またヘルムをかぶってるんですか」

「ああ、この目で見えるまでは警戒しておこうと思ってな。ふむ、君の言うように変わった雰囲気を持つ子だ」

男はヘルム越しでクロコを見つめているようだった。

「あんたが『ファントム』か」

「ああ、その通り。私が『ファントム』だ」

クロコはファントムをジッと見た。無機質なヘルムからは何を考
えているのか全く読み取れない。

そんなクロコをガルディアが見る。

「さて、クロコ。おまえは『ファントム』の正体が知りたくないか
？」

「……正体？ 素顔ってことか？」

「そうだ」

「確かに見てみたいけど。いいのか、オレが見ても」

「と言っておりますが、どうですか？ ファントム」

ガルディアは笑みを浮かべながらファントムを見る。

「君が彼にも見せてほしいと言ったのだろう。大丈夫と言っのなら構わないよ」

「だとさ、大丈夫かクロコ」

「何がどう大丈夫なんだ」

「誰にも正体を言っなよ」

「……分かった、言わねえよ」

「アールスロウにも言っなよ」

「言わねえよ」

「フロウにも言っなよ」

「言わねえよ」

「ソラだってダメだぞ」

「だから言わねえって!」

「だそうです。ファントム」

「フツ……分かったよ。見せよう」

ファントムはそう言って鋼鉄のヘルムを両手で押さえた。そしてゆっくりと持ち上げる。

持ち上げたヘルムをドスンと近くの机に置いた。

クロコはその顔をじっくりと見た。

その男は年齢四十代前半、茶色の髪に、柔らかい茶色の口ひげをはやしている。鋭い目つきをしているが、どこか全体的に落ち着いた印象を受ける。

ガルディアが口を開く。

「グラウドの軍務大臣ルイ・マスティン閣下だ」

「ルイ・マスティン……」

「とは言ってもクロコは分かんないだろうな」

ガルディアがそう言うのと、マスティンはほほえむ。

「軍務大臣とは国軍の兵器開発や食糧確保、基地建設など、国軍を後ろで支える軍務省の責任者のことだよ」

「国軍を支える存在……」

クロコはマスティンをジッと見つめる。ガルディアが口を開く。

「そうだ。そしてこの方は若いころから軍務省の国務官として働いていた。その手腕と経験を生かして、この解放軍をまとめ上げ、組織化していったんだ」

「でも国の偉いやつなんだろ。よくバレないな」

「国内じゃあ、『ファントム』の正体は軍上層部の誰かって見方が強いからな。だからこの人はうまく追及を逃れてきたんだ、ついで

にこの人が解放軍をまとめ上げたは若干三十ちよつとの頃だったからな。それもあるんだろっ」

「ふーん」

「さて、オレはそろそろ部屋を出るかな」

「えっ……もう終わりか」

クロコは驚く。

「そうじゃなくて二人きりにしようと思ってな」

「いや、別にいいよ」

「聞きたいことがあったら何でも聞いてみればいい」

ボタン

ガルディアは出て行ってしまった。

クロコとマスティンは二人きりになった。

「……………」

突然の事態にクロコは言葉を失った。マスティンを見たまま黙るクロコ。

するとマスティンはほほえむ。

「君の話はグレイから聞いたよ。女の姿をしているが、それは呪いで実は男。面白い話だな」

「あんたは信じるのか」

「グレイが言うなら信じようと思うよ」

「……………」

「それと君はスロンヴィア虐殺の生き残り、アークガルドにも長い間住んでいた。全てを失った君は、自分の生きる場所『希望』を求めて解放軍に入った」

「……………そうだ」

「スフォードでグレイに初めてその話を聞いた時、機会があれば会ってみたいと言ったんだよ。そうしたら……………まさか本当に連れてくるとはな」

マスティンは笑いながら言った。

その様子を見ながらクロコはボソツと口を開いた。

「……………あんたは貴族だろ」

それを聞いてマスティンは一瞬黙った。そして口を開く。

「そうだよ」

クロコはマスティンをジッと見ている。

「なんで貴族なのに、解放軍なんてものを作ったんだ」

「国をどうにかしたいと思うのに、農民も貴族もないだろう」

マステインは落ち着いた口調で言った。

「けど、あんたは全てを持っていたはずだ」

「確かに。物は持っている。しかしそれと引き換えに誇りを売り払うことは恥ではないのかね」

「誇り以外のものをそう簡単に捨てれるモンでもねーだろ」

その言葉を聞いてマステインはほほえむ。

「……………君は面白いな。 그레이の言っていた通りだ。だが私は捨てられた、結果論になるが、私はそういう人間だったのだよ」

「そういう人間？」

「人の気質や本質は様々だ。ひとくくりにはできない。だがまあ理由を挙げるとするのなら、私の思想とも深く結び付くな」

「思想…………？ 考え方が」

「そうだ、私はね、常々思っていた。農民、平民、貴族、そのあまりに開きのある生活を送っているその三者に、一体どのような違いがあるのだろうか？ とね。生まれた境遇以外に違いはあるのかとつじつま合わせの理屈ならいくらでも出てきたが、自らを納得させる答えは出なかったよ。だから私は考えた、この三者にはそもそも違いはない、全てが同じ存在なのだとね」

マスティンは強い口調だった。

「私は解放軍を作り、様々なものを見てきて、その思想は確信へと変わった。これでいいんだと、人にはそもそも違いなどないのだと同じ一つの体と心を持つ人間には、貴族も農民も今置かれている立場ほどの大きな違いはないのだとね。だからこそ、国民には今の権力からの解放が必要だと思ったんだ」

「それがあந்தの……考え方が。それじゃあ……」

クロコはマスティンの目を見つめた。

「それじゃあ聞かせてくれないか？ あんたは国軍を、悪だと思うのか」

「思わないよ」

マスティンはすぐに答えた。

「それでも国軍と戦うのか」

「そうだね。今の人々を救うには戦うしかないと思っている。ブルテン皇帝が悪政を振るうようになってからは国が大きく荒れた。けれど議会も貴族も皇族も何も出来なかった、何もしなかった。そして今もそうだ。私が議会で何を呼びかけても状況は一向に変わらない。私ほどの立場でもだ」

マスティンの表情が少しだけ険しくなった。

「もう内側から変えるのは不可能だ。戦うことは正しいこととは思

わないが、今は戦う以外の選択肢はない。そう私は考える」

「国軍が悪じゃなくてもか？」

「そうだ、国軍にも正義はある。しかし、新たな正義を立たせるには今ある正義を倒さねばならない。犠牲は出るだろう。しかし現状を放置すれば、貧困や虐げによる犠牲がどちらにしろ出る。戦う以外の改善方法がなければ、選択しなければならぬ、戦うか戦わないか」

「……なるほどな」

クロコはマスティンを真っ直ぐ見つめながら言った。

「納得できたかい？」

「あんたは演説が上手そうだ。解放軍をまとめ上げたっていうのも分かる気がする」

「どうやら納得できないようだね」

「少し考えてみるよ」

「そうしてみてくれ、自分の頭で考えることも大切だ」

そう言ってマスティンはほえんだ。

「……………」

クロコが黙ると、一瞬その場を静寂が支配した。

するとマスティンは口を開く。

「話は変わるが……」

マスティンはそう言うと、鋭い目でクロコを見つめる。

「クロコ……私は先ほど、内側からでは国を変えられないと言ったね。それはなぜだかわかるかい？」

「議会の貴族どもが自分の地位を捨てたくないからじゃないのか？」

「それもある。しかしね、私はこうも思ってるんだ。何者かが国を、今の荒廃している状態に変えるように誘導している、とね」

それを聞いてクロコは驚いた。

「変えるように、誘導……！？」

「そう、本来グラウドの政治システムは皇帝政治と議会政治の両政治のバランスが取れた非常に優れたものだった。そのためそのシステムができて五十年以上、グラウドは大きな問題が起こることなく安定な状態を保ち続けていた。そしてブルテン皇帝がまだ『賢帝』とうたわれていた時代は過去に類をみないほど安定していた。しかし……」

マスティンは再び険しい表情をする。

「十二年前から突然、グラウドの政治が不自然に乱れ始めたんだ。私は現在、クラウド側にもセウスノール側にもいる。その二つの視点によって、私は『ダークサークル』の中心に立つ、ほんの一部の

人間の邪悪な意思の存在に気づくことができた……」

「『ダークサークル』を起こした人間……そんなやつらがいるって言うのか」

クロコは呆然とした様子だ。

そんな様子のクロコをマスティンが鋭く見つめる。

「そうだ、そして我々解放軍は国民を救うという目的がある以上は、国軍だけではなく、その者たちとも戦わなければならない」

「……………！」

「もしかしたら君にも、その者たちと対峙する時が来るかもしれない」

「……………オレも……………」

クロコはボーッと立ち尽くした。
するとマスティンは机に置かれた手持ち時計を見る。

「おっと、残念ながらもう時間だ。クロコ、 그레이を呼んでくれな
いかい」

「んっ？ あ、ああ」

クロコは扉を開け、ガルディアを中へ入れた。
部屋に入ったガルディアはマスティンの方を見て口を開く。

「どうでしたか？ クロコは」

「なかなか楽しかったよ。また機会があれば話したいものだ」

それから間もなくして、クロコとガルディアは部屋を出た。

二人は城をあとにした。

馬車の中でガルディアが口を開く。

「どうだった、ファントムは」

「落ち着いた感じはあったけど、なんて言うか、熱血漢なオッサンだな」

「ハッハッハッ、確かに、それは違いないな」

「それと……………」

クロコは険しい表情をする。

「『ダークサークル』か……………」

ガルディアはそう言ってクロコを見つめる。

「……………ああ」

「なかなかびっくりするよな、初めて聞かされると」

「……………ああ」

「けどなクロコ、よく聞けよ」

「なんだ？」

「おまえは今『真実』の先っぽに触れたんだ」

「『真実』……？」

「そうだ、おまえはいつか、その『真実』と正面から向き合うことになるかもしれない。だから忘れるな。『真実』とは常に目の前にある一つだけとは限らない。だからこそ、もしそれと向き合うことになった時、それによく目を凝らせよ」

「……………」

「まあ、オレが言いたいのとはそれだけだ」

「そのためにオレをファントムに会わせたのか？」

「いや、本人が会いたいって言ったから」

「おい！」

「それよりクロコ、ちょっとこれから店まわるっぜ」

「切羽詰まった状況とか言っただけだったか？」

「細かいことは気にするな。数店回る時間ぐらいはあるさ、多分」

少しの間、街を走った時だった。

「見ろよクロコ！」

ガルディアが窓から顔を出して前方を指さした。クロコも顔を出し、その方向を見る。

街なかを大きな川が流れていた。その川の中央付近には大きな浮き島があった。そしてその島の上にカラフルなテントの集団が見えた。

「なんだ……アレ」

クロコはテントの集団を見つめながら言った。

「メロ大市場、世にも珍しい川の中の市場さ。ここなら時間も取られないだろ」

馬車は浮き島へと架けられている橋を渡る。

浮島に着くと、そこには所狭しとカラフルなテントの屋台が開かれている。

食べ物屋、ベル屋、花屋、布屋、アクセサリー屋など様々な店がある。商人同士で取引している姿も見える。川沿いには数匹の水猫が水とたわむれていた。

店を眺めながらガルディアが口を開く。

「どんな店を見たい？ クロコ」

「どんな店か……そうだ！ 呪い屋を探そう！」

「へえ、呪いを見たいのか。変わった趣味してるな」

「ふざけてんのか！」

ガルディアは辺りを見渡す。

「呪い屋か……そんな店あるかなあ」

ガルディアは近くの食べ物屋に寄る。

「サンドイッチふたつ」

「あいよ400バル」

「はいよ、400バル。なあおっちゃん、ここらに呪いを扱ってる店知ってるか？」

「はい、二つ。あんたも物好きだね。あんな店に興味があるなんて」

「あるのか！」

横でクロコが声を上げる。

「ああ、ここの西端に確かあったな。興味があれば見ればいい」

二人は島の西端へと早歩きで向かった。

西端へ着くと、その店はすぐに見つかった。多くの屋台店の中に一つ、明らかに不気味な真っ黒の屋台店があった。

「間違いない！」

クロコはそう言うとその屋台店へと突進した。
屋台店はコウモリ羽のようなマントを着た太った男が経営していた。

「おい、オッサン、この指輪の呪いを解くのをくれ！」

クロコはいきなりそう言った。

店主は目を丸くする。

「この指輪……？」

「悪いおっちゃん」

ガルディアがクロコの横から店主に声をかける。

「ちょっと事情があるんだ。今から説明するよ」

ガルディアは端的に事情を説明した。

「なるほどねー」

店主はそう言いながらフンフン鼻息を立てた。

「指輪型の神具だと思うんだ。ここに置いてないか？」

「ないねー」

「クソッ！ ないのかよ」

クロコが声を上げた。横でガルディアが聞く。

「それじゃあ同業者でそういう指輪型の商品を扱ってるやつは見たことないか？」

「仲間だね……………どうだったかなあ……………ん、待てよ」

「思い当たる節があるのか？」

「ああ、あるな」

「ホントか！」

クロコがまた声を上げた。

「旅の商人でな。確かそいつの商品に白い指輪があった。今思うとあれは呪具じゃなくて神具だ」

「旅の商人って言うとまさか……………」

「ああ、もうここにはいないね」

「いない……………」

クロコは呆然とした。

「いつ頃ここにいたんだ？」

ガルディアが聞いた。

「割と最近だね。一、二週間ぐらい前までいたかな」

「どこに向かったか分かるか？」

「詳しい場所は分かんが、確か東へ向かったよ」

「よし！ 東だ！ そこを徹底的に探してやる！」

「落ちてけクロコ、ここは西部だぞ、どれだけ東が広いと思ってるんだ」

「だけどあと一歩じゃないか！」

「まあそこらへんの司令官に手紙を飛ばしてみるよ。今回はここまでだな」

「クッソーッ！！」

クロコは悔しそうになる。

「ついでにその商人ってのはどんな顔だ」

ガルディアがそう聞くと店主は笑う。

「あいつか、ハハハ、顔は特徴的だからすぐわかるぞ。まんまるい顔でな、目がすごく離れてるんだ、さらに丸い鼻でな、赤いひげを生やしたコウモリみたいな顔してるぞ」

「赤いひげのコウモリか。ありがとな、おっちゃん。どれ、お礼に

なんか買ってくか」

「ガルディア、間違っても黒い指輪なんか買うなよ」

「ハッハッハッ、どっかのクロコじゃあるまいし、そんなことするか」

「このヤロウ……!!」

ガルディアは結局、相手に飲ませることにより一カ月間げっぷを止まらなくさせる石を買った。

「こんなでかい石どうやって飲ませんだよ」

帰りぎわに、ガルディアの持つこぶし大の石を見てクロコが言った。頭をかくガルディア。

「やっぱ呪いって扱いが難しいんだな。どうやってファイフに飲ませようかな」

「絶対メチャクチャ怒るぞ」

二人はその後セウスノールをあとにした。

3 - 5 変則チエス

シャルルロッド基地、その司令室にスコアは呼ばれていた。
机の後ろに腰掛けるラティル大佐。

「何の御用でしょうか。ラティル大佐」

「遠征命令だよスコア」

「……また単独で、ですか」

「ああ、また一人、馬で駆けてもらうことになる。今回はロゴ地域のサードフォード基地へと向かってくれ。そこでその基地の者たちと反乱軍ルザン又討伐に当たってほしい」

「了解しました」

「それと諸事情により、この任務に当たる際は、アルト・フォツカ
ー軍曹と名乗っておいてくれ」

「え……フォツカー？」

「私のことが嫌いなら、素直にスコア・フィードウッドと名乗れば
いい。そうすれば私の首が飛ぶからな」

ラティル大佐はそう言っただけ。

「は……はっ！ 十分注意します！」

「さて、今回、君が相手をするだろう反乱軍には、そのリーダーのレイド・フェムザムがいる可能性が高い。あのテロ組織の息の根を止めるチャンスだ。国民の安全な生活を守るため、君の力を貸してくれ」

それを聞いてスコアの眼鏡の奥の目がキツと鋭くなる。

「分かりました。ボクはのためにここにいるんです」

フルスロツク基地、その廊下をクロコは歩いていた。セウスノールから無事に帰って二日経っていた。今日は基地の休日だ。向かいからフロウが歩いてきた。

「やあ、クロコ君」

「よう、フロウ。クレイドは？」

「セットみたいに言わないでよ」

「だいたい一緒にいるだろ。チェス教えてたんじゃなかったのか？」

「うーん、なんか嫌になったみたいでやめちゃった」

「やっぱりな。あいつはチエスって感じじゃないからな」

「えー、クレイドって、ああ見えて頭いいんだよ」

「頭いいって言うよりはオオカミのリーダーって感じだな。チエス向きには見えないな、あいつは」

「……まあ、そうかもね。そういえばクロコ君はどこか行くの？」

「ああ、ソラのトコに行く」

「へえー、またかー」

フロウは笑みを浮かべた。

「来い来いってうるさいからな」

「たまには行く行くって言ったら？」

「なんでだよ」

フロウが笑う。

「とにかく楽しんできなよ」

「ふん」

フロウに見送られて廊下を抜け、基地の広間まで行くと、今度はアールスロウに会った。

「アールスロウは書類の束を抱えていた。」

「出かけるのか、クロコ」

「ああ、あんたは……仕事か？ 休日なのに」

「なかなか片付かなくなてな。午前中は 그레이さんに任せているんだが、あまり減っていないかった」

「ああ、ほぼ戦力外っぽいもんな」

「それより君はどこへ行くんだ？」

「ああ、ソラのトコにな」

「ソラ・フェアリーフか……」

アールスロウの顔が少しだけ曇った。

「そういうことだ、じゃあな」

クロコはアールスロウを横切って出口へと向かう。

「クロコ」

アールスロウが呼び止めた。

「ん……？」

クロコは振り返る。

「彼女には……気をつけた方がいいぞ」

「……？ なにがだよ」

アールスロウは真剣な表情でクロコを見る。

「君も気づいているだろう。彼女は……ただの十六の街の娘にしては、少し不自然だ」

「……………」

クロコは少し黙ったあと、口を開いた。

「あんたがソラのどこを見て、不自然に感じてるかわからねーけど、大丈夫だよ、あいつは」

クロコははっきりとした口調だった。

「……忠告はしたぞ」

アールスロウはそう言って背を向けて歩き始めた。

クロコはそのまま外へと出た。

クロコはソラの住まいへと向かった。
フルスロウの商店街の果物屋、その奥の狭い部屋がソラの住まいだ。

果物屋に着いたクロコは建物の裏へと回って、裏口から中へ入ろうとする。クロコがドアの取っ手をつかんだその時だった。

「きゃあああああっ!!」

突然、中から悲鳴が聞こえた。驚いたクロコはドアを力任せに開け、中へと飛び込む。するとソラが青い顔でクロコへ飛び込んだ。できた。

「おいっ! どうしたソラ!」

ソラはおびえた表情で素早くクロコの背中に隠れる。

「へや……部屋の中に……」

クロコは玄関を上がり狭い部屋へと入る。しかし部屋には誰もおらず、いつもと変わらない。

「……? どうしたんだ」

クロコは背中にくっつくソラに聞いた。するとソラは震える手で部屋のある部分を指さした。クロコがそこを見ると……壁に大きなクモがくっついていた。

「……………」

クロコは目を細めて立ち尽くす。

「おい…………ソラ、あれがどうした…………?」

「み……見ればわかるでしょ……クモだよ、クモ！ あんなに大きな……お願い！ なんとかして……」

「それがどうした。アレぐらい自分で何とかしろよ」

クロコはあきれた。

「なんとか……？ ムリムリムリッ！！ だって素早く動くうえに足が八本あるんだよ！！」

「意味分かんねーんだけど」

クロコはそう言うのとゆつくりと歩き出し、静かにクモに近づく、そしてサツとクモの後ろ脚をつかんでぶら下げた。さらに木窓を開け、最後にポイツと外に放り投げた。その様子を見てあぜんとするソラ。

「お……男の子だね……」

「当然だろ」

その後、二人はテーブルに向かい合って座る。

「おまえなー、果物屋だろ？ 食い物扱う店員がクモ怖がってどうすんだよ」

「いや、だって、クモは、あれはダメだよ。あれだけはダメ！」

「やれやれ、じゃあ鍛えるしかないな」

「鍛える……？ 鍛えられるものなの？」

「オレが街中のクモを捕まえて箱に詰めてやる。おまえはそれに手をつ込むんだ」

「ムリムリムリムリッ！！ そんなことしたら私死んじゃうッ！！ ほんとムリッ！ それだけはやめてッ！！」

「まったく……」

「そ、そうだ…… そんなことよりクロコ、お昼食べた？」

「いや……」

「じゃあ私が作るよ。私もまだ食べてないから」

「そうか、じゃあ手伝う」

「ありがとう、でもいいや、ここの台所は二人じゃ狭いから」

ソラは立って、部屋にある台所へ向かった。

「なに食べたい？」

「うーん、じゃあサンドイッチ」

「具は何がいい？」

「なんでもいいけど肉多め」

「オツケえ」

そう言ってソラは料理を作り始める。クロコは料理棚の上を見る。

「なあソラ、あのスパイスってなんだ？ 見たことねーんだけど」

「ああ、あれは私が調合したやつ」

「おまえスパイス調合できるのか」

「うん……けっこー凝り性だから」

「へえ、オレは市販のやつで済ませるけどな」

「みんなだいたいそうだよな」

ソラはテキパキと調理を進める。クロコはそんなソラの様子を黙って見ていた。

間もなくソラが具のたっぷり詰まった大きなサンドイッチを出してきた。

「野菜多くねーか？」

「肉ばかりじゃ気持ち悪くならない？」

「別にならねえ」

クロコはそう言ってガブツと食らいつく。そんな様子を見てソラが一言。

「見た目にそぐわずホントに豪快……」

そう言うソラを尻目にモグモグと食べるクロコ。

「うん……うまい」

「ホント!？」

「ああ、ウソは言わねえよ」

「やったー」

喜ぶソラ、クロコはまたかぶりつく。

どんどん減って行くサンドイッチ。勢いよく食べるクロコを見ながらソラは口を開く。

「ねえ、クロコ」

「ん？」

クロコはサンドイッチを飲み込んだ。

「クロコ、前にセウスノールへ行ったんだよね？」

「ああ」

「何しに行ったの？」

「ファントムと話してきた」

「えっ!？」

ソラは驚く。

「すごい……クロコ、ファントムと話したんだ」

ソラは興味深そうにクロコを見る。

「正体って……」

「誰にも言わない約束をした」

「じゃあヒントだけでも……」

「しつこいぞ」

「ゴメン……でどんな話したの？」

「難しい話」

それを聞いてソラは笑った。

「慣れない話だったみたいだね」

「なあ、ソラ」

「なに？」

「おまえはさ、この戦争。解放軍と国軍、どっちが正しいと思って

るんだ」

真剣な表情で聞くクロコ。それに合わせてソラも真剣な表情をする。

「どっちって言われてもね。私はそもそも戦争そのものに反対だから」

「理由は？」

「簡単に言うと、人がたくさん死ぬからかな」

「でも戦争をやらなくても飢えや虐げによる死人はたくさん出るだろ？」

「でも戦争ほどの憎しみは生まれない」

「戦争以外に救う手がないかも知れない」

「そう言うこともあるかもね。でも、だいたいの戦争はそれ以外の道を探る前に起きてる。きっとこの戦争も」

その言葉を聞いてクロコはイスに深く寄り掛かった。

「……………そっか」

「何かつかめた？」

「余計分からなくなった……………」

「……………今は分からなくてもいいのかもね。そんなすぐにパって答えが出たら、そっちの方が気持ち悪いし。それにこれは私の一意見だし、答えは人それぞれ。正しいことと納得できることは必ずしも一致しないから、そこに価値観の差が生まれ、それによって無数の答えが生まれるものだと思うから」

それを聞いてクロコは少しのあいだ黙った。

「……………おまえは賢いよな。おまえぐらい賢ければ、オレみたいに悩むこともないのかな」

その言葉を聞いてソラは一瞬黙る。

「そんなことないよ」

ソラはふと棚の上に置かれた小さな絵画に目を移す。クロコも釣られてそれを見る。夜空の星が舞い飛ぶように描かれた絵だ。

「きれいな絵だな」

「私、絵画を見るのが好きだから。これはマーク・ジェリノっていう有名な画家の作品」

「高いんじゃないか？」

「……………そつでもないよ」

ソラはそう言ったあと、前に向き直る。

「ちょっと話し込んでしまったね。さーて、早く食べよう」

数日後の昼ごろ、クロコは基地の広い食堂で一人、昼食を食べていた。

「向かい空いてる？」

フロウが現れて聞く。

「ああ」

向かいに座るフロウ。

それを見てクロコが口を開く。

「クレイドは？」

「だからセットみたいに言わないでよ。そのうち来ると思うよ」

「ふーん」

クロコはステーキをバクツと食べる。

「もっと上品に食べなよ」

「別に汚くはないだろ」

クロコは変わらずムシャムシャと食べている。

フロウはそんなクロコをしばらく見たあと口を開いた。

「ねえ、クロコ君、クレイドがないから話すんだけど」

「なんだ？」

「なんかさあ……最近思ったんだけど、クレイドがソラちゃんを見る目って……ちょっとあやしい」

「……！！」

クロコは食事の手を止めた。

「おい、あやしいって何がだよ」

「何がって言われてもね」

「あいつもしかして……ソラの事……」

「確証はないんだけど……でも気になるよね」

「ま、まあ……気になるかならないかって言われたら、なるかもな……」

「よし、それじゃあ本人に直接聞くしかないね」

「直接聞くって言うても、素直に言うのかよ……」

「クロコ君こういうのはね、シチュエーションが大事なんだよ。任せといて！ 僕がその場を用意するから」

フロウは楽しそうだ。

それから数日後、フルスロック基地の休日、広間ではチェス大会が行われていた。机に置かれたチェス盤を十数人の兵士が囲む。

「チェックメイト」

フロウはそう言って駒を動かした。

「ああ！ 負けた」

向かいの兵士が声を上げる。

フロウの隣で見ていたクレイドが口を開く。

「あいかわらずつえーな。六連勝か」

「クレイドも打つ？」

「いや、俺はいーよ」

「あつ、フロウくんはクレイド」

近くで二人の名を呼ぶ声がした。
見ると近くにソラが立っていた。

「やあ、こんにちはソラちゃん」

フロウは愛想良く挨拶するが、他のチェス組の兵士は一斉に後ず

さりする。

「おはよう、ねえ、クロコ知らない？」

「さっきまで見てたよ。そのうち戻ってくると思っけど」

「あつ、そうなんだ。じゃあここで待ってよ」

フロウがソラを見つめる。

「ねえソラちゃん」

そう言っで、フロウはチェスのキングを指先で回して見せる。

「僕と打たない？」

「えっ？ 私はいいよ」

「そんな遠慮しないでよ。ホントは好きなんですよ？」

「……そう言ってくれるなら、一回だけ」

そう言っでソラはフロウの向かいに座った。

「おい、フロウ、おまえ勝てんのか？」

隣でクレイドが言った。

「僕がソラちゃんに勝てるわけないだろ」

「あっ？」

するとクロコが戻ってきた。それを見てフロウが笑みを浮かべる。

「どうやら役者が揃ったみたいだね。ねえソラちゃん、僕はまともにやっても君に勝てる自信はない、だからさ、変則ルールで打たないかい？」

「変則ルール？」

ソラが聞き返す。

「そっ！ 僕とクレイドのペアと君とクロコ君のペアで交互に打つんだ」

「えっ！ でもクロコはチェス打てないよ」

するとクロコが口を開く。

「ルールは知ってるぞ。打ったことないだけで」

「それはつまり打てないんじゃない……」

するとフロウがほえむ。

「大丈夫、クレイドもルール覚えてただし、割と面白い勝負になると思うよ。それに、もし僕らが負けたら何でも一つ言うことを聞くよ」

「おい、フロウ、勝手に変なルールつけんなよ」

クレイドが文句を言う。

「まーま、緊張感があっていいでしょ？ それにこの二人だったらそんなに変なこと言わないよ。ちよつと付き合つてよクレイド」

「つたく……好きにしろよ」

そのやりとりを見ていたクロコは軽くため息をつく。

(……で、オレ達をワザと勝たせて、それをダシにしてクレイドからソラのことを聞き出すってわけか……やれやれ、シチュエーションとは良く言つたもんだな)

「面白ソーじゃねーか。ソラやろっぜ」

「えっ？ う、うん、クロコが良いなら……」

(なんか今のクロコの口調、棒読みだったような……)

ソラの返事を聞いてフロウはニコツと笑う。

「よし、じゃあ始めよう」

チェス盤を囲むギャラリーも何か面白そうなことが始まったぞ、といった感じでガヤガヤと騒ぎ始めた。

するとその騒ぎを聞きつけて通りがかりのガルディアが近寄ってきた。

「おっ！！　なんか面白ソーじゃないか。何やってんだ」

顔を出すガルディアにフロウが答える。

「変則チェスです。僕、クレイドペアとクロコ、ソラペアで交互に打つんです」

「おっ！ そりゃ、面白そうだ」

「それと僕らが負けたら一つ言うことを聞かないといけないんです」

「へえー……ってそりゃ変だな。クロコ達もリスクを負わないと」

「あつ、言われてみれば……」

（（そこを考え忘れてた……））

フロウとクロコが同時に思った。

「じゃあオレが罰ゲーム考えてやるよ。クロコはそうだな……今日一日女物の服を着ること」

「なにーッ！！」

クロコが大声で叫ぶ。

「あつ、おもしろそう」

それに喜ぶソラ。

「女の子の服って言うてもいろいろありますよね？」

そう言ってソラはガルディアを見た。

「あー、そうだな……じゃあ、真っ赤なドレスにするか。クロコの瞳と合わせてのコーディネートだ、良いセンスだろ。ハッハッハッ」

それを聞いてフロウが冷や汗を流す。

「確かにいいセンスだ……違う意味で」

「あのヤローいつか斬るっ!!」

クロコは殺気立つ。

「だいたいテメーは司令室開けていいのかよ！ 仕事は!？ アー
ルスロウは!？」

「あー、あいつはオレがいなくても大丈夫さ。やる男だよ、あいつ
は」

「こいつ最悪だ」

「で……ソラの方は、そうだな、今週の果物二割引にしてみらおう
かな」

「分かりました。仕方ないですね。絶対勝ちますよ!」

するとクロコがわめく。

「おい!! ガルディア! ソラのはオレのと種類が違うぞ! 不

「公平だ!!」

「細かいことは気にするなよ。カッコ悪いぞ」

「このヤロウ……!!」

多くのギャラリーが見守る中、変則チェスが始まった。

ゲーム前半……

「あーっ!! なんてそんなとくに動かすの、クロコ!!」

ソラが声を上げる。

「うるせーな、騒ぐなよ」

「じゃあこうだな」

クレイドがパツと駒を動かす。

「あーっ!!」

ソラがまた声を上げる。

「だからうるせーって」

文句を言うクロコ。

「ねえクレイドって普通に強くない？ ルール覚えてたてじゃなかったの？」

「ああ、覚えてただけだな。前の前の休日に覚えて、で、その日のうちにフロウの解説付きで一日中打ったからな。それで一日で嫌になった」

「フロウ君、スパルタ……」

「強くなるには楽しいだけじゃ駄目なのさ。さて、勝負は分からないようになってきたね」

「うう、絶対に負けないからね」

ソラはそう言ったあと駒を動かす。それを見てフロウの顔が引きつる。

「う……一瞬で押し返された……」

勝負は中盤へと進む。

「こうだっ！」

フロウが駒を動かす。

「やっぱりこうきたか……」

ソラは陰しい顔をする。

それに対してフロウはうつすらと笑みを浮かべる。

（いい展開に回ってきた。あと一歩だ……しかも次はクロコ君……この勝負、もらった！）

そんなフロウの様子を見てクロコが一瞬にらむ。

（あのヤロー、完全に本気になってやがる。絶対にワザと負ける気なんかなさそうだ。こうなったらなんとかして自力で勝たないとな……真っ赤なドレスなんか死んでも着るか！）

フロウはチェス盤に集中しておりクロコの視線に気づかない。

クロコは頭を悩ませる。

「クロコ、慎重に慎重に」

「ソラちゃん、助言はダメだよ」

「む、分かってるよ」

クロコはチェス盤をにらむ。

「こうだ……」

クロコが駒を動かす。その瞬間フロウの目の色が変わる。

「う……」

険しい表情のフロウ。

「すごい！ クロコいいトコ動かしたね」

「忘れてた……クロコ君はときどき直感がすごいんだ……」

その様子をガルディアが楽しそうに見ている。

「さーで、これで一気にクロコ、ソラペースだ」

そして終盤。

最後の駒が動かされた。

「チェックメイト」

静かになるギャラリー。

「僕らの勝ちだ」

フロウはほえんだ。同時に大きなため息をつくクロコとソラ。

「あー、負けちゃった……もう、後半崩れすぎだよクロコ」

「うるせー、オレの方が被害が出けーんだぞ」

クロコはそう言ったあと大きくため息を吐いた。

「最悪すぎる……」

するとガルディアが声を上げる。

「よし！ さっそくドレスを買ってくるか！ あっ金はオレが出してやるよ、心配するな、ハッハッハッ」

ガルディアはそのままピューッと基地を飛び出した。

「速い……」

フロウが静かに言った。

「さーで、こうなったら私も楽しんじゃおう！」

ソラはほえむ。

最後にクロコがガクツと肩を落としながらつぶやいた。

「結局オレの一人負けか……」

数十分後、基地の広間にはドレスを着た一人の少女の姿があった。

瞳は真っ赤、ドレスも真っ赤、そして顔も真っ赤だ。

「クロコかわいいー！」

ソラが声を上げる。

「ハッハッハッ、似合ってるそクロコ！」

ガルディアは上機嫌だ。

基地の兵士達も声を上げる。

「いいぞ、クロコー！ アッハッハッハ」

「似合ってる似合ってる」

「普通にかわいいぞ！」

クロコはつぶやく。

「人生で最悪の汚点だ……」

その様子を見ていたクレイドが思わず吹き出した。

「てめー！！ クレイドー！ 何笑ってんだ！！」

クロコはクレイドを元凶と決めつけ、全ての怒りを込めて突進する。

それを見て笑いながら逃げるクレイド。

二人の姿が廊下に消えると、今度はフロウがタカが外れたように大笑いし出した。

基地の廊下ではクロコが倒れたクレイドに馬乗りになっていた。

「悪かったってクロコ、そんなに怒るなよ。クツクツハハハハ」

「まだ笑ってんじゃねーか！！」

その時クロコはハっとした。

（あ……二人きりだ）

クロコは一気に落ち着いて、小さな声を出す。

「なあクレイド」

「んっ……なんだ？」

クレイドは突然の態度の変化に少し不思議がる。

「フロウが言ってたんだけど……おまえ……ソラを気にしてるって」

「んっ？ ああ、バレてたか……」

「おまえ……ソラのこと……」

「そんなんじゃねーよ」

「じゃ、じゃあ、なんなんだよ」

「オレの良く知ってるやつに似てるってだけさ」

「知ってるやつ……？」

「そいつも白い髪で、明るく笑うやつだった。年もそうだなソラと同じぐらいだったな。まあ見た目はソラよりもずいぶんと大人っぽかったが」

「……それだけなのか」

「ああ、それだけだ。少し懐かしいなって思ってただけさ。その気はまったくねーよ」

「そ、そうなのか……」

クロコは少し拍子抜けしたような顔をした。

基地の広間。

ソラが廊下の方を見つめる。

「二人とも遅いね……」

「そうだね、ちょっと様子を見てくるよ」

フロウはそう言って、廊下へ向かう。

（ちょうど二人きり……うまくやってるかな？）

ポツンと一人立つソラ、すると隣にガルディアが立つ。

「いやー、楽しかった」

ガルディアが上機嫌な声を上げる。

「アハハ、そうですね。ガルディアさんの提案、最高です」

「だろー？ デスクワーク以外なら任せてくれよ」

ガルディアは笑顔を見せる。するとそのあと、黙ってソラをじっと見つめる。

「……？」

その様子に不思議そうな顔をするソラ。

「なあ、ソラ。きみはクロコのことどう思う？」

「えっ！？ ど、どうって……」

「いや、別にぶしつけな質問してるわけじゃないんだ。あいつがいま歩んでる道は、君にはどう見える？」

ガルディアは穏やかな口調だった。

「道……ですか？」

「クロコは希望を求めて歩んでる。その道は、きみの目にはどう映る。正しい道に見えるか？」

その質問を聞いて、ソラの顔が真剣になる。

「私は……戦争が嫌いだから、いいとは思えません。けど……」

「けど……？」

「今のクロコにとっては、必要なことなのかもしれません。賢明な選択をし続けることが正しいこととは限らないから……」

「正しいこととは限らない、か……」

ガルディアは少し天井の方を見上げる。

「……だが、それが取り返しをつかないことだつてある」

「そうなのかもしれません。今のクロコが見てる世界はあまりにも狭い……。けれど、それはクロコのせいではなくて、クロコの歩んできた人生の不幸のせい……そう私には思えました」

「なにも持たない人間には、世界を見渡す余裕なんてないからな」

「はい……だからこそ、今を見つめるためにも、今のクロコには進むことが必要、そうとも思えるんです」

「だから、きみはクロコを導いているんだろう？」

ソラは小さく首を振る。

「いえ、導くなんてそんな……私はただ、道を少し照らしているだけにすぎません。最後に選択するのはクロコです」

「そうか……」

ソラも真っ直ぐな目でガルディアを見る。

「クロコが道を歩んだあと、自らの通った道を見て絶望しないように……ただ、その力になりたいだけなんです」

「たとえばそれがきみの嫌いな戦争という道でもか……」

「はい……」

ソラは小さく返事をした。そして、もう一度口を開く。

「聞いても良いですか？」

「なんだ？」

ガルディアは穏やかな口調で返事をした。

「私は戦争を決して好きにはなれません。ガルディアさんは戦争をどう思っているんですか……？」

「戦争か……」

ガルディアは優しくほほえんでいる。しかし瞳にわずかだが悲しみの色が光る。

「失うものは大きく、得るものは少ない……けれどそれを知る者はあまりにも少ない。大きな犠牲を払えば、それ相応のものが手に入るとみんなが思ってる……そういうものだと思うよ」

それを聞いてソラは驚いた。

「そう思っているのに……なぜあなたはここにいるんですか？」

「きみは知りたがり屋だな」

ガルディアはほほえんだ。

「きみは良く人を見る。だけど、そういう子に限って、案外自分が見えてないもんだ。遠くを照らせる灯台が自分を照らせないと同じようにな」

「……………」

「きみにも、きっと何かあるんだろう」

その言葉を聞いてソラは一瞬視線を落とした。

「分かりました。深くは聞きません」

「ありがとう。それと、クロコのやつをよろしく頼むよ。あいつにはきみが必要だ」

「はい、私にできることなら」

ガルディアはその言葉を聞いて満足そうにほほえむと廊下の方に視線を移した。

ソラも再び廊下を見る。

するとクロコ達が広間に戻ってきた。

それを見てソラとガルディアは静かに笑顔を浮かべた。

3 - 6 再開と出会い

フルスロツク基地の食堂。その広い空間は昼時のため兵士達によって埋め尽くされている。

その中でクロコは一人昼食を食べていた。すると向かいからフロウが近づいてきた。

「クロコ君、君の部隊、招集受けてるよ」

「えっ……ホントか」

クロコはすぐに広場へと向かう。五百人近い兵士が整列していた。その列と向かい合う形でガルディアが立っている。

クロコも列に加わり、間もなく兵士がそろってガルディアが話を始める。

「さてと……えーと、とりあえず、おまえらにはこれから北のクラツト基地へと向かってもらいたい。本部が国軍が北に戦力を集める可能性があるっていう情報をつかんだことが理由だ。ただ今回、国軍の情報管理がかなりしっかりしてるらしくてな、確証がないらしいんだ。だからまずは先遣隊としておまえらに行ってもらいたい」

「クラツト基地……か」

クロコはボソツとつぶやいた。

話が終わるとクロコは準備のために個室に向かう。向かう途中、

素早くフロウが現れた。

クロコと並んで歩くフロウ。

「今回はクラット基地だってね」

「おまえ聞いてたのか」

「まあ僕も次はそこだろうと思ってたけど」

「どんなトコなんだ」

「南のケイルズヘル、中央のビルセイルド、北のクラット。解放軍の三大前線基地の一つさ」

「ってことはもし戦いが起これば、かなりの規模になるってことか」

「うん、間違いなくね。あとクロコ君、覚えてる？」

「何をだ？」

「覚えてないならいーや」

「いや、何をだよ」

「まあ着いてからのお楽しみってことかな」

フロウは笑みを浮かべる。

「気になるな……」

「あとクラット基地って言ったら、フィンディ・レアーズが有名だね」

「フィンディ・レアーズ？」

「ミリア・アルドレットと並ぶ解放軍の二大エースの一人さ。クラットは激戦地区としても有名だけど、クラット基地は国軍の侵攻から領土線の十一度の防衛に成功してる。その成功には彼の存在が欠かせなかっただろうって言われてる」

「へえー」

「まあ、彼には色々噂があるけど、彼の異名も含めてね」

「異名？ 『瞬神の騎士の再来』とか『戦乱の鷹』ってやつか、どんな異名なんだ」

「うーん、ちょっとここでパツと言っつのはね……まあ行ってみれば分かるよ」

「そんなのばかりだな」

「とりあえずクロコ君」

そう言っつてフロウは足を止め、手を差し出す。

「どうか無事に戻ってきてね」

それを聞いてクロコはフロウの手を握った。

「当然だ」

フロウはそのあと立ち去ろうと背を向けた。その時、クロコはハッとして声をかける。

「フロウ！」

「んっ？」

「ソラに……伝えといてくれ。オレが帰ってくるのは当然だから、変な心配すんなって」

それを聞いてフロウがニコツと笑う。

「分かった、任せといて」

間もなく大型馬車十台が北を目指し出発した。

馬車集団はクロコが過去に行ったウォーズレイ基地の道順と同じ進路をたどった。

初日は草原を走り、二日目は岩石帯を走った。

窓を見ると小さな岩や巨大な岩石が辺りに点在する景色が広がっている。

（そういえば、前この辺りで馬車が壊れたっけな……）

クロコは少し昔のことを思い出した。

三日目になると再び草原を走った。途中、大きな角を生やした巨大な牛の集団が馬車を眺めていた。

四日目には再び岩石帯を走る。遠くには見覚えのある赤色の巨大な岩石集団が見えた。

五日目はひたすら岩石帯を走った。

六日目にはまた草原を走る。馬車のなかを満たす空気が少しひんやりとし始めた。

長い馬車生活でクロコはわずかにイラついてはいたが、蒸し暑さがない分、ケイルズヘルの道のりよりはだいぶんマシだと思っていた。そして七日目、窓を見ると、背の低い緑色の草原が大地全体を満たしていた。遠くには青い巨大山脈が見える。その山脈の頂上付近には白い雪が積もっていた。

それから少し経った時だった。兵士の一人が声をあげた。

「見えたぞ！ クラットだ」

その声を聞いてクロコは窓から顔を出し、前方を見た。

とがった屋根をした灰色の建物の集団が見えた。

クロコ達はクラットに到着した。

馬車集団はクラットの街中を走る。にぎわった町だった。大通りには多くの人が歩き、いくつもの商店が立ち並ぶ。通りかかった市場では商人の元気の良い呼び声が響いていた。

馬車集団はひたすらクラットの大通りを走る。そしてしばらく走ると、馬車はなぜかクラットの石門から外へ出てしまった。

「ん……？」

クロコは不思議がる。

馬車集団は再び外の草原を走ると間もなく、その先に、丘の上にそびえ立つ巨大な建築物が見えた。

「あれが……クラット基地か」

東の国軍領から町を守るように、クラット基地はそびえ立っていた。横長に伸びた灰色の建物、そこから二つの細長い塔が伸びている。塔の頂上の高さは丘の高さと合わせて300m以上はあるだろう、辺りの景色を一望できそうだ。

馬車集団は丘を上がり、間もなくクラット基地の広場へと入った。

馬車を降りると間もなく、基地の司令官が出迎えに来た。小隊長とあいさつをする。

司令官は年齢三十代後半、四角い顔をした大柄な男だ。
大きな声で兵士達にあいさつする。

「いやいやいや、よく来てくれたフルスロツクの兵士達よ。ここの基地の司令官ミケル・ロイムだ。この程度の人数だったら少しは歓迎できるよ。部屋は空いている個室を使ってくれ。国軍の動きがつかめるまでは、ゆるりとくつろいでくれ。なんせまだ確証がないからな。なんなら町にも出ていいぞ。ハッハッハッ」

クロコ達はその後、個室に案内された。一つの個室には数人の兵士が入られるが、クロコはいつも通り一人だ。

クロコは個室でしばらくくつろいでいたが、暇になったので基地を回ることにした。

クロコはしばらく基地の廊下を歩く。すれ違う兵士達が軍服を着た少女の姿のクロコをもの珍しげな目で見る。けれどクロコは気に

しない。

そのまま広間へと出たその時だった。

「クロコさんっ！！」

突然、誰かがクロコを呼んだ。クロコは驚いてその声の方向を見る。聞き覚えのある声だった。

見ると少年の兵士が嬉しそうにクロコに駆け寄ってくる。

その少年は年齢十二、三歳、黄色い髪で一か所はねた髪形、ぱっちりとした目と透き通るような緑色の瞳をしていた。

クロコはすぐに気付いた。

サキ・フランティスだ。前見たときよりも少しだけ大人っぽくなっている。

「サキッ！」

クロコは思わず叫ぶ。

サキはうれしそうにどんどん近付いてくる。しかしクロコはサキが近づくごとに何か違和感がした。サキがクロコの前に立ったとき、その違和感の意味がはつきり分かった。

……高い。

サキの背が、クロコよりも頭半分高い。

「お久しぶりです！ クロコさん！！」

サキは満面の笑顔だ。

「おい……サキ」

「はい……？」

「高くないか？」

「えっ？」

「身長……前は同じぐらいだったよな……」

「ああ、背ですか、ここに来たあと急に伸びたんですよ。四力月で……10cm近くですかね」

「……………！！」

クロコはがく然とした、サキに見下されているその事実。

（は、早く元の姿に戻らないと……………！！）

「だけどクロコさん、ああ、本当に懐かしい」

わずかに震えるサキの声を聞いてクロコはすぐに我に戻る。

「ああ、そうだな」

「またこうして会えることがすごくうれしいです」

サキの目が少しだけうるんでいた。

「大げさなやつだな。けど……………」

クロコは少しほほえみ、手を差し出した。

「久しぶりだな、サキ」

「はい……クロコさん」

二人は握手した。

手を放した直後、サキがしゃべる。

「そうだ、クロコさん。今から少し付き合ってもらえませんか？」

「付き合う？ 何にだよ」

「ボク、あのあとすぐ剣が上達したんです。クロコさんに見てもらいたくて」

「へえ、いいぜ、付き合ってやる」

「それじゃあ実技場に案内しますね」

その時だった。

「おや、おやおや」

突然、少し離れた所から声がした。二人は反応してその方向を見る。

すると一人の若い兵士が二人の方へと近付いてくる。

その兵士は年齢十八、九、黄色の流れるように立った髪に、細い目、高い鼻をしている。全体的にどこか軽い雰囲気を持っている。その兵士が口を開く。

「女の子の兵士じゃないか。フルスロツクの兵士だよね」

そう言って愛想よく笑いかけながらクロコに近づいてくる。

「こんにちは、お嬢さん」

「誰がお嬢さんだ!」

怒るクロコ、しかし男は動じない。

「あれっ? その呼び方はお気に召さないかな。じゃあなんて呼べばいいのかな」

「オレの名前はクロコだ」

「えっ、ファーストネームで呼んでいいの? クロコちゃん」

「てめえ……!! もしもう一度ちゃん付けしたら、てめえのその舌を、先端から奥まで順々に斬ってソテーにしてやる!」

殺気立つクロコ。

「あ、あの落ち着いてください。クロコさん」

サキがなだめる。

「そうさ、落ち着きなよ。ク・ロ・コ」

「やっぱり叩き斬るッ!」

サキが必死にクロコを押さえる。対してその兵士はヒョウヒョウとした態度だ。

「ああそうだ。そういえば名乗ってなかったね。オレはフィンディ、フィンディ・レアーズだ」

「フィンディ……？」

クロコはその名に反応する。

「おまえがこの基地のエースか」

「おや、すでにご存じだったとは、有名になるモンだね。君みたいなかわいい子に名前を覚えられるんだから」

「このヤロウ……！」

「どうだい、今から町を回らない？ オレがこの町のいいトコ紹介するからさ」

フィンディはそう言ってほほえみかける。それを見てサキの方が反応する。

「ク、クロコさんはボクと実技場に行く約束があるんです！」

「どうせさつきしたばかりだろ？ 決めるのはクロコだ。どうするクロコ、いい店紹介するぜ」

二人が同時にクロコを見る。

「よし、行くぞサキ」

「アレ、即答」

フィンディはガクツと肩を落とした。

クロコとサキはフィンディに背を向ける。去り際にクロコは気づいた。遠くで若い女の支援員が三人の方向を見つめていた。

「……………」

クロコとサキは広間から出た。

実技場、六角形の広い空間に木製の床。雰囲気全体はフルスロット

クの実技場とほとんど変わらない。

二人は木剣を持って向かい合う。

クロコは一回木剣をビュンッと振った。

「よし、来いサキ」

「はい」

サキは木剣を構える。そして静かにクロコをにらむ。

クロコは感じた、サキから出る強い気迫を。それだけでサキがずいぶんと強くなったことが分かった。クロコは思わず笑みをこぼす。

サキが動いた。

体を大きくかがめて、低い姿勢で突進してくる。

（……………低いな）

クロコは身構える。

サキはそのまま真上に剣を振り上げる。

（真上……？）

クロコがそう思った瞬間だった。サキの姿が消えた。速さではなく、その場からいなくなった。

「え……？」

気づいた時にはサキは懐に入っていた。

「……！！」

素早く後ろに飛ぶクロコ。サキはすぐさま斬撃を放つ。

ビュンッ！

サキの木剣がクロコの体をきれいにとらえた。威力はそれほどもないが、空中で当てられたためクロコはひっくり返った。床に叩きつけられるクロコ。

クロコはむくりと体を起こしたあと、しばらく呆然とした。

サキが声を上げる。

「やった！　ボクが……ボクがクロコさんに一撃当てた！！」

サキは歓喜の声で満面の笑みを浮かべる。

再びがく然とするクロコ。

（オ……オレが……サキに負けた！？）

喜ぶサキを前にクロコは強烈なショックを受ける。

（オ……オレは今まで何をしてきたんだ………）

クロコはここ最近では一番の落ち込みようだった。しおしおと小さくなる。

「あれはクロコが悪いよ」

突然、別の声がした。

声の方向を見ると実技場の入り口にフィンディが寄り掛かっている。

「サキの剣技は油断して見切れるモンじゃないからね。ちょっとしたカラクリがあるんだ」

「カラ……クリ……？」

「ま、まだいたんですか。フィンディさん！」

「用事が終わったあとクロコと町をまわろうと思ってね」

フィンディがそう言いながらクロコに近づく。

「立てるかいクロコ」

フィンディに引っ張られてフラフラと立ち上がるクロコ。

「ほら、元気だしなよ。気晴らしに一緒に町をまわろう」

フィンディは優しく声をかける。対して無言のクロコ、暗い顔をしている。

クロコはそのままフィンディに引っ張られるままに連れていかれる。

「ボクも行きます！」

サキが声を上げる。

「おいおい、サキ。邪魔すんなよ。負かした相手がついてきたら元氣出ないだろ」

するとクロコが小さく声を出す。

「……サキも来てくれ」

「はい！」

「ちえ……ッ」

その後、三人は馬で町へと向かう。クラットの町に着いた頃にはクロコは少し元気になっていた。

夕暮れの町の石畳の道を歩く三人。

「クロコ、ブドウ酒飲める?」

「フィ、フィンディさん! クロコさんはまだ十五ですよ」

「飲める」

クロコは一言そう言ったあと、これ以上なめられてたまるかとばかりにサキをにらむ。

サキは少し悲しそうな顔をした。

「よしっ! じゃあいい酒場があるんだ。一緒にいこーぜ」

三人は酒場へと向かう。

途中、クロコは町を見回す。とがった屋根の大きな建物が立ち並び、夕暮れで小鳥の鳴き声が響くが、まだ人通りは多く、活気が残っている。

「この町はなんか有名なモノとかあるのか?」

それにフィンディが答える。

「そうだなあ、ここはブドウ酒が割と有名だし、あとサーモン料理の種類が豊富だな」

「へえ、魚料理か」

「あ、あとクロコさん、ここはドラゴンが初めて見つかったトコとしても有名なんですよ!」

「ドラゴン……?」

「はい、見つかったのは骨だけなんですが。ものすごく大きいらしいですよドラゴンって！ ドラゴンですよ。クロコさん!!」

ドラゴンと口にするごとにサキのテンションが上がっていく。

「骨だけだろ……じゃあただのかいトカゲだろ、どうぜ」

クロコは冷たく言った。

「ド、ドラゴンは山の奥深く今でも住んでるって話ですよ」

「でかいトカゲが住むのは岩石帯だろ。誰か山で見たのかよ」

「そ……それで、それで、翼で空を飛ぶって……」

「空飛ぶトカゲなんて聞いたことないぞ。飛ぶのは鳥と虫とコウモリだけだ」

「う……う……それと、それと……火を吐くって……」

「口から何か出すのは毒ガエルぐらいだ」

「そろそろやめてやれよクロコ……サキが泣きそうだ」

フィンディはあきれている。

三人は酒場に着いた。

酒場のカウンターでフィンディがサツと注文する。

「マスター、特上のブドウ酒二つ、サキ、おまえは自腹だぞ」

「わ、分かってますよ。イエローピーチのジュースお願いします」

「あつ！ フィンディだあ」

突然横から声がした。三人の女の子の集団だ。
フィンディが愛想よく笑いかける。

「やあ、ミレーヌ、シンディ、ニーナ」

「なにー、もしかしてデート？」

「もちろん」

元氣のないクロコをいいことに好き放題言うフィンディ。

「ボクもいますよ」

サキが少しにらみながら言った。

「デート、プラスアルファさ」

フィンディのその言葉にサキがさらににらむが、構わず女の子達
に向けほえみかける。

「もうっ、今度は私を誘ってよ」

「もちろんさ。機会があればいつでも」

「約束よ。じゃあ、今度ね」

女の子達は立ち去った。

「モテるなフィンディ。さすが色男」

違うテーブルに座っていた中年の男が声をかける。

「よっ！！ 町の英雄」

「また頼むぜ天才剣士ッ！！」

次々と声上がる。

フィンディはそれに愛想よく答える。

「任せてよ。オレがいる限りここは安全だよ」

その様子をクロコは黙って見ていた。

「ずいぶん、人気者だな」

「確かに、人気者ですね」

サキはどこか浮かない表情だ。

「……町だと」

サキはボソッと付け加えた。

その後、夜の道を帰る三人。

「サキ」

べろべろに酔ったクロコはサキに抱きつく。

「ちょっとクロコさん！ くっつかないでしっかり歩いてください」

「アハハハハ」

ケラケラ笑うクロコ。

そんな様子を静かに見るフィンディ。

「ブドウ酒一杯であれか…… ちょっとクロコちゃんには早すぎたかな。最初よりはずいぶん明るくなったけど、あの酔いっぷりはちょっとアウトかな。次回はもう少し調整しないと……」

三人は基地へと戻った。

基地に戻った頃にはクロコの酔いはさめていた。

「うーん、途中から記憶がないぞ……あれ？ フィンディは？」

「もう個室に戻りましたよ」

「ああ、そうか」

「クロコさん、もう正気に戻りました？」

「……何の話だ」

「大丈夫そうですね」

そう言つとサキは急に真剣な表情になる。

「クロコさん……よく聞いてください」

「……？　なんだ」

サキの様子にクロコは少し戸惑う。

「あの人……フィンディ・レアーズとはあまり関わらない方がいいですよ」

「……どういう意味だ？」

「あの人と……」

サキは一瞬言葉を止めた。

「あの人とクロコさんは、絶対に相容れません」

サキは最後にそれだけを言つて、クロコの前から立ち去つた。

それから数日、基地には次々と援軍の部隊が集まってきた。ここ

まで増えるとクロコ達の部隊もさすがに行動が制限された。クロコは基地内に缶詰め状態になってしまった。

クロコはサキと共に基地内のテラスから広間を眺めていた。また新たな援軍部隊が到着している。

「またか、ちびちびと集まってきたな」

「はい、元の基地戦力と合わせて30000の兵力が集まる予定だそうですよ」

「30000か……ずいぶんな数だな」

同じ頃、基地司令室の机に一人座るロイム司令官。

「ロ、ロイム司令官!!」

兵士が部屋に飛び込んでくる。

「どうした？」

「たった今、手紙鳥が飛んできて……」

「国軍の動きがつかめたのか？」

「は、はい……国軍はクラット基地を完全に攻める気です。国軍領北部のデイズ基地に集められた敵戦力は推定で120000……」

「12！？ 120000だと！？」

「はい……かなり確かな情報だと……」

「バカな……過去十一度の防衛の最多戦力と比べても、三倍以上の兵力だぞ……いや、それどころか、この内乱が始まってからの過去最大の戦力だ」

ロイム司令官はギリツと歯を鳴らす。

「国軍め……！ ついに本気を出したな……」

ロイムはすぐに兵士の方を向く。

「国軍戦力が集まっているのはデイズ基地と言ったな」

「は、はい！」

「あそこからならまだ距離がある……すぐに援軍要請を出せばギリギリで間に合うはずだ」

「で……ですが」

「まだ何かあるのか！」

「は……はい、すでに一部敵戦力がこのクラット基地に向け進軍を開始し、間もなくこの基地へと攻撃を行っただろうとのこと……」

「規模は？」

「およそ20000」

「……！！ 援軍が来るまでなんとしても持ちこたえなければ……！！ この基地が落ちれば一気に領土線が切り崩されるぞ」

この日を境にクラット基地は一気に臨戦態勢へと入った。

そして二日が経ったある日、国軍の大部隊がついに基地へと姿を現した。

クラット基地の東、そこには大草原が広がっている。南の連続した丘と、北のなだらかな下り斜面の荒れ地に挟まれたその草原は、東に真つ直ぐと伸びた形で広がっている。

その草原に20000以上のグラウド国軍の青い軍勢が姿を現した。

対してセウスノール解放軍も基地の立つ丘の前に向かい合う形でほぼ同戦力の20000の陣を構える。

クロコ達援軍は左翼を任されていた。

基地の塔からロイム司令官が戦況を見つめる。

「援軍の頼みの綱はビルセイルドとフルスロックの隊か………そして我が基地の兵士達……頼むぞフィンディ・レアーズ」

解放軍の左翼、クロコはそこから敵軍を静かに見つめていた。

「いよいよ、始まるのか……」

クロコは静かに剣の柄に触れる。

同じ頃、解放軍の中央前衛でフィンディ・レアーズが国軍を見つめていた。

「さあ……ゲームの始まりだ」

フィンディはニヤリと笑った。

3 - 7 悪魔

クラット基地の東、連続した丘となだらかな下り斜面に挟まれた東へと伸びる大草原。その草原に現れた20000のクラウド国軍の軍勢。

それに向かい合う形でクラット基地の丘の前に構えるセウスノール解放軍の20000の軍勢。

今まさにクラット基地防衛戦が始まろうとしていた。

約1kmの距離を開けて向かい合う二つの軍勢。

静かな時間が流れていた。

クロコが剣の柄を握った、その時だった。

パンッ！

先に動いたのは国軍だった。およそ2000近くの部隊を切り取り、横に大きく広げて突撃してくる。それに対し解放軍はまだ動かない。

国軍が一定距離まで解放軍に近づいたその瞬間、

「撃てーッ！！」

基地の大型大砲が火を噴いた。高所から飛距離を伸ばした遠距離砲撃が国軍の部隊を襲う。無数の砲撃の嵐、国軍の勢いがわずかに

削がれたその時、

「突撃ーッ！！」

解放軍が動いた。横に広げた陣が国軍とぶつかるように動く。
二つの軍勢がぶつかる。

解放軍左翼、前衛へと出たクロコは、迫りくる解放軍の剣兵を次々と斬り伏せる。

洗練された動きと強烈なスピード、そして時に変則的に変化する動き。そのクロコの剣技に国軍の剣兵達は為す術ない。国軍右翼が徐々に切り崩される。

解放軍右翼、そこではサキが前衛に出て戦っていた。クロコほどのスピードもキレもない剣技だが、国軍兵はまるでサキの姿が見えていないかのように、無防備に斬り伏せられていく。そのサキをフオローする形で解放軍兵が周りを守る。その陣形で国軍の攻撃に耐えていた。

そして解放軍中央では、フィンディが圧倒的な力を見せていた。立ちふさがる敵は紙きれのように斬り伏せられ、フィンディが通った跡には国軍兵の死体の群れが横たわる。

フィンディの剣技は恐ろしいほど速かった。

そして恐ろしいほどに正確だった。完璧といえるまでの正確さで敵の首筋を切り裂き続けていた。倒すのではなく殺す剣技。フィンディに斬られた兵士の中で生きている者は一人としていなかった。フィンディは次々と剣兵を切り裂いていく。

(1 3 3 , 1 3 4 , 1 3 5 1 4 0)

殺した敵の数を数えながら剣を振るうフィンディ。

「フフフフ、ハハハハ、ハッハッハッハッハッハ」

フィンディは笑っていた。まるでおもちゃで遊ぶ子供のように笑っていた。敵の斬撃どころか、返り血一つ浴びていない、まるで自らに課したルールのように。

国軍中央はあつという間に切り崩される。分断された国軍の陣形。フィンディは国軍右翼を切り崩しにかかった。

それを見た国軍の隊長が命令を出す。

「大砲部隊を右翼に集める！ 早くだ！ とにかく早く！！ やつを早く仕留めなければ……！！」

間もなく大砲部隊がフィンディの周辺に集まる。

大砲部隊はフィンディを狙おうとするが、フィンディは一瞬でそれに気付き、国軍兵を盾にして動く。

砲兵達は全く砲撃できない。

「何をしている！ 早く撃つんだ」

「ダメです。できません！ 味方を盾にされて」

「クソ……他の部隊は……どこも砲撃してないだろ！？」

「まさか……すべての砲兵部隊の位置を把握しているんじゃない……」

「そんなわけがないだろう！ 当てられなくてもいい、とにかく撃

つんだ！」

「ダメです……見失いました」

「なに！！」

その時だった、その砲兵部隊の目の前にフィンディが現れた。

「う、うわああああっ」

ヒュンヒュンヒュンッ！！

砲兵部隊全員の首筋が裂けた。

戦線の後方に構える敵陣、そこで白い軍服を着た将軍が双眼鏡で様子を見ていた。

隣で若い副官が口を開く。

「ど、どうなさいますか……？　このまま予定通り第一、第二陣を突撃させるのですか……？」

将軍は双眼鏡から目を離す。

「いや、もう手遅れだな。撤退だ」

間もなく一時撤退の信号銃が鳴った。

それと共に国軍が下がっていく。

「……？　なんだ、もう撤退か？」

左翼で戦っていたクロコはそのあまりに早い撤退にわずかに戸惑う。

その時、国軍の剣兵の一人がクロコに襲いかかる。剣を振り上げる剣兵。

「うおおおっ！」

「チッ！！」

ヒュンッ！！

クロコの剣が一瞬で剣兵の脇腹を切り裂く。

「ぐ……ッ」

脇腹を押えて地面にしゃがみ込む剣兵。

「……たく、とつとと下がればいいもんを」

クロコがそう言った、その時だった。

ヒュンッ！

目の前にしゃがみ込んでいた剣兵の首筋が裂けた。大量の血が噴き出し、ガクツと力無く地面に倒れる剣兵。

クロコは固まった。一瞬自分の心臓が止まったような錯覚を覚え

た。

倒れた剣兵のすぐ近くにはフィンディが立っていた。

クロコはしばらく呆然としていた。

国軍の姿が消え、静かになる草原。

クロコはゆっくりとフィンディをにらみつけた。

「おまえ……何してんだよ」

フィンディはその言葉を聞いてクロコの方を見る。

「あつ！ 悪いな。クロコの獲物だったか」

いつもの軽い口調だった。

「獲物………？」

「こいつでちょうど400人目だったんだ。ついな」

その言葉の意味を理解するまでに少し時間がかかった。

しかしその意味を理解した途端、クロコは無意識に剣をフィンディに振るっていた。

ギンッ！！

クロコとフィンディ、二人の剣が交わる。ガタガタと震える二人の剣。

フィンディはクロコをにらみつけた。

「おい……何やってんだ？ 頭でも打ったのか」

「何やってんだはこっちのセリフだ！ なんで殺した！！」

「……はっ？」

「あいつはもう戦えなかった。とどめをさす必要なんてなかったんだ！！」

その言葉を聞いた時だった。

「チッ……！！」

フィンディは舌打ちした。

ゴッ……！！

フィンディの蹴りがクロコをとらえる。
吹き飛ばされ地面に転がるクロコ。
フィンディはクロコを冷たい目で見た。

「………おまえバカだろ。戦争は人を殺すもんだろ？ 何人殺すか、それが一番重要なんだよ、そんなのガキでも知ってる」

フィンディはそう言い放つと、その場をゆっくりと立ち去る。

「おまえだつてオレと同類だろ？ きれいごとやってんじゃねえよ」
フィンディが立ち去ったあとも、クロコはしばらく地面に伏したまま動かなかった。

クロコは拳を握りしめていた。

サキは離れた所からその様子を見ていた。サキの目がわずかに陰しくなる。

（『狂舞の悪魔』 フィンディ・レアーズ……）

3 - 8 進む道

草原を東へと進む国軍兵の大軍。

国軍はフィンディを中心とした解放軍に敗れ、撤退をしていた。

その軍勢の中心付近に白い軍服を着た將軍の姿があった。

その將軍は年齢三十代後半、大柄で、茶色い髪、大きく鋭い目に少しこけたほおをしている。敗れたばかりだというのに冷静な様子だ。

隣を歩く若い副官がその將軍を見て、口を開く。

「フィンディ・レアーズ……。異名の通り、恐ろしい男ですね。ラズアーム將軍」

それを聞いてラズアーム將軍は表情を変えず口を開く。

「そうだな」

「とても同じ人間とは思えません。我らが軍はまるで竜巻にでもあったかのようでした……」

「ああ、確かに恐ろしい男だ。あのスピード、正確な剣技、そして状況把握の早さ、どれをとっても常人離れしている。しかし……」

ラズアーム將軍は大きな目を鋭くする。

「あの男の剣技は、対集団戦に特化しているが、対個人戦には特化

していない。勝機はある」

「し、しかし、あの軍勢をねじ伏せる強さ……対個人戦においても相当なものでしょう」

「だからこそ、私が呼ばれたのだろう？」

ラズアーム將軍は不敵にほえんだ。

「わざわざ私が……『七本柱』が動くんた。解放軍には覚悟してもらわないとな。そしてフィンディ・レアーズ、そうだ……こうでなければ面白くない」

基地に戻ったフィンディに多くの兵士が声をかける。

「よくやってくれたぞフィンディ！」

「やっぱおまえは頼りになるぜ！」

「この調子でバンバン倒してくれよ！！」

半分の兵士が称賛の声を浴びせ、もう半分の兵士が離れたところで軽蔑の視線を浴びせる。フィンディにとってはいつものことだった。

フィンディが基地の廊下を歩いていると、向かいに一人の支援の女が立っていた。

その女は年齢十八、九、黒い短めの髪に、大きな目、どこか活動

的な雰囲気を持っている。

女はフィンディを見つめながら声をかける。

「今日もいっぱい殺したみたいね。さすが英雄フィンディ様」

そのフィンディを見る目は基地のどの兵士よりもはっきりとした軽蔑の意思がこもっていた。

「何しに來たファリス」

フィンディは不機嫌な口調で言った。

ファリスはフィンディを軽蔑の目で見たまま口を開く。

「別に何も。そうだ、数日前に声かけてた子とはうまくいきそう？」

フィンディは答えなかった。

「嫌われたんでしょう？ あんたの戦場の様子を見て、あんたを心から好きになる人なんているはずない」

「戦争は殺し合いだ。やつらの方がどうかしてるのさ」

その言葉を聞いてファリスの目がわずかに険しくなる。

「あなたは本当にそう思ってるの？」

「思ってる？ 間抜けな質問だな。オレは英雄だぜ、正真正銘のな。あのバカとは違う」

フィンディはファリスを横切って、そのまま歩いていった。

基地の別の廊下では、クロコが怒り狂っていた。

「ふざけやがって……！ なんなんだよ！ あいつは……！」

そう言って基地の壁を蹴りながら歩くクロコ。それをサキがなだめる。

「お、落ち着いてくださいクロコさん」

「あんな……あんなこと………何がちょうど400人目だ。ふざけんな……！」

「気持ちわかりますよ。けど……あの人は別に命令違反してるわけじゃないんです」

「そんなの知ってるよ……！ オレがあいつと同類だって？ あんな……あんなやつ………！！！」

「クロコさん……落ち着いて………」

「オレは……オレはあいつとは違う………」

「分かってます、分かってますよ。だからボクは事前にああ言ったんです」

サキの言葉を聞いてクロコは少し落ち着いた。しかしそれでも、

クロコの心には何かが引つ掛かった。

その日、国軍はこれ以上の攻撃を行うことはなかった。

その夜、クロコは独り個室にこもって考えていた。

フィンディの言葉がよみがえる。

「戦争は人を殺すもんだろ？ 何人殺すか、それが一番重要なんだよ」

「おまえだってオレと同類だろ？ きれいごとやってんじゃねえよ」

オレとあいつは違う、サキはそう言った。けど……何が違う？

オレもあいつと同じ……たくさん人を殺した。

オレは『希望』という光を求めている。それを得るために戦っている。

オレの家族と村を奪った国軍、それと戦うことは決して間違っていることだとは思ってなかった。けど……

クロコは思い出す、ディアルの言葉を。

「正しい方はどちらなのかな……？」

あいつの……フィンディのやってることは解放軍でも許される。

それでも解放軍は正しいのか？ オレは正しいなのか？

クロコは思い出す、ファントムの言葉を。

「国軍にも正義はある。しかし、新たな正義を立たせるには今ある

正義を倒さねばならない」

正義を立たせるために、正義を倒す……その方法が戦い。だけどオレは……本当はそんな大それた正義なんかない……ただ、自分の生きる場所がほしただけなんだ……。

それでもオレは人を斬ってる……オレとあいつの一体どこが違う。

クロコは思いだす、ブレッドの言葉を。

「おまえは『光』を求めてる。だから、おまえはまだ死んじやいけない。それに、おまえが死ねば、おまえを大事に思っている人が悲しむ」

オレだつて生きたい……もしオレが本当に生きたいと思うなら、今すぐ全てをあきらめてここから去るべきなんじゃないか……？
だけど……その先にはオレの求める希望はない。昔のアーケガルドの闇に戻っちまう。

それなら、自分の光だけを求めて、他のことは何も考えずにいる方がいいんじゃないか、それだけを考えて、それだけを求める方が楽なんじゃないか？ 他のことを考えたって苦しむだけだから……

なあ、ソラ……おまえだつたらどう答える？

おまえは戦争が嫌いだから、今のオレを否定するのかな……？
オレがもし、今の気持ちを伝えたら……おまえだつたら納得のいく答えを教えてくれるのかな……？

クロコはそう思った瞬間、ハツとした。

そして自分のほおをパンツと叩く。

いや……ソラがオレに答えを覚えてくれたことなんてなかった。

ソラは言った、自分がこれからぶつかる問題、それに正しい答えなんかないと、それでも自分の答えを探さなければいけないと
ソラは一つだけ答えてくれた、自らの問題に背を向けること、答えを探らないこと、それは間違っていると。

クロコは立ち上がった。

どれだけ時間がかかってもいい、自分の答えを探そう、そうクロコは決意した。

部屋を出てベランダの方へと歩くクロコ。少し夜風に当たりたかった。すると向かいから女の支援員が歩いてくる。

クロコはその支援員に見覚えがあった。
ファリスはクロコを見ると声をあげた。

「きみは……！」

「……あんだ、前オレ達を見てたな」

「うん、ねえ、少しだけ話をしない？」

二人は基地のベランダに出た。夜空には星の川が光り輝いていた。大地には暗闇の草原が広がっている。

虫の音が響く中、女はほほえみながら口を開く。

「わたし、ファリス・ルナティーク」

「オレはクロコ・ブレイリバーだ」

「アハハハ、変わった名前。聞いたんだけどさ、きみ怒ってフィン
ディを斬ろうとしたってホント？」

それを聞いてクロコがムスツとする。

「ホントだ」

「アッハッハッハッ、命知らずだね」

「うるせーよ」

「ねえ、きみフィンディのことどう思う？」

「別に何も」

「アハハハ、なにもないのに斬ろうとしたの？」

「……………あんたは、フィンディとどういう関係なんだ？」

クロコがそう言うと、ファリスは夜空を少し見上げる。

「わたしとあいつは……………幼なじみ」

「幼なじみ…………？」

「そう、わたしもあいつも同じ町の出身だね。ハーモニアっていう町のね。ちっちゃいころはよく一緒に遊んだよ」

「今も仲がいいのか？」

「まさか！ 最悪だよ」

「……………」

「ハーモニアはね……。ここから西にある町で、解放軍の基地がある町なんだ。昔はあそこが解放軍の領土線だったんだよ」

「へえー、まあ西部から徐々に領土を広げてったんだもんね」

「そう、それでね。その基地には一人の英雄がいたんだ」

「英雄……？」

「うん、英雄の名はギルティ・レアーズ」

「レアーズ……！？ って言うと……………」

「そう、フィンディのお父さん」

「……………」

「ギルティさんはね。セウスノール三剣士の一人として名をはせるぐらいの強い剣士だね。村の英雄だった。そして、あの人が持っていた異名は『慈悲の魔神』」

「慈悲……」

「あの人は魔神の如き強さを持っていたと同時に、敵であろうが一定の情けを持つことで有名な剣士だった。『同じグラウドの国民、同じ命』あの人はよくそう言ってた……そんなあの人の姿勢に味方だけでなく、敵さえも一定の敬意を持っていた。そして、そんな父親を当時のフィンディは何よりも誇りに思ってた」

「……………」

「けど……………」

ファリスの表情が陰しくなる。

「四年前に起きたある戦い……いまではレイリホークの戦いとして有名な戦い。そこでギルティさんは戦死した。その結果、ハーモニアの基地は落とされ、さらにその時にそこで支援員として働いていたフィンディの母さんも死んだ」

「……………」

それを聞いてクロコの顔が陰しくなる。

ファリスは悲しい目をしていた。

「あとで、その場にいた兵士に聞いた話ではね。ギルティさんは戦場で、追いつめていた敵兵に命乞いをされたんだって、そして、ギルティさんが刃を引いた一瞬の隙に、その敵兵に斬りつけられ、殺された」

「……………!!」

「フィンディは思ってる。自分の父親が持った情けによって、自分は家族と町を失ったんだって。父親が自分の全てを奪ったんだって。その話を聞いた時のフィンディの顔は忘れられない……怒りと悲しみに満ちたあの顔だけは……」

ファリスは遠くを見つめていた。

「フィンディはそのあとしばらくして、ここに入って、そして剣士になった。父親譲り……ううん、父親以上の剣のセンスで、あつという間に強くなった。そして、ここでの初陣……それが『狂舞の悪魔』の誕生の瞬間だった」

「……………」

クロコはファリスの顔を見た。悲しげな瞳は静かに夜空を見つめていた。

ファリスは再び口を開く。唇が少しだけ震えていた。

「わたしね……知ってるんだ……昔からあいつを見てるから……あいつはね、父親によく似て、すごく優しいやつなんだ……………」

ファリスはゆっくりとクロコの方を見た。

「わたしさあ、最初はこの基地にはいなかったんだ。でも、フィンディの噂を聞いた時、すぐにこの基地に入った、フィンディを……なんとかしたかったから。でも……」

ファリスはうつむく、瞳がわずかにうるんでいた。

「ここに来て、一度だけあいつの戦場を近くで見た時があったんだ。その時のことは今でもはつきり覚えてる。あいつは大声で笑いながら敵を殺し続けてた。でもね……わたしには……フィンディは大声で泣いてるように見えた」

ファリスの声は震えていた。

「フィンディは戦場に立つてから、今まで、ずっと、泣き続けてる……私にはそう見える」

「……………」

しばらくの静寂が辺りを包んだ。

クロコはファリスを見つめながら静かに口を開く。

「……どうして……その話をオレにしたんだ？」

それを聞いて、ファリスはクロコを見る。表情はもう冷静になっていた。

「きみは、フィンディの行動に正面からぶつかった。そんなことしたのきみが初めてだったから。きみに話せばフィンディをどうにかしてくれるなんて、そんなことは思っていないけど。それでも、きみにはこの話をする意味があるって、そう思えたから」

「そうか……」

「こんな話を、真剣に聞いてくれてありがとう」

ファリスは最後に静かにほほえんだ。

3 - 9 二人の戦士

解放軍と国軍の初戦が終わってから二日間は、国軍の動きはおとなしかった。

クロコはひたすらに基地内にとどまっていた。

クラット基地から東の草原、そこには多くのテントが張られていた。ここは国軍本陣、その一角をラズアーム将軍と若い副官が歩いていた。

ラズアームは周りの兵士達を見渡す。

「戦力はだいぶ整ってきたようだな」

「はい、今の段階で50000とのことです」

「50000か、グラン・マルキノも到着した。そろそろ動き時か……ん？」

テントの周辺に座り込む大勢の国軍兵、その中の、ある二人の若い軍人にラズアームの目がいった。

そこにはフレアとコールの姿があった。フレアのそばには白い布がかぶせられた人一人分はありそうな巨大な何かが置かれている。ラズアームはその巨大な何かを見つめる。

「あの形状は……」

ラズアームは二人に近づく。

「やあ」

ラズアームは軽く手を上げて話しかける。

それに二人は気付き、白い将軍服を見るなりあわてて立って敬礼する。

「はっ！」

ラズアームはフレアの方を見る。

「君のこの武器……君が『死神』フレア・フォールクロスか」

「はっ、そうです」

「なるほど……私はピューター・ラズアームだ」

「ラズアーム……『七本柱』の……」

「そうだ、良い働きを期待するよ」

ラズアームはそう言ってほほえみ、二人の前を去った。

ラズアームが立ち去ったあと、フレアとコールはふっと軽く息を吐く。

フレアが口を開く。

「びつくりした」。いきなり將軍が声かけてくるんだもんない」

「うん、びつくりした……」

「ピューター・ラズアームってあれだろ。確か『奪威の狐』の異名の」

「それ本人の前じゃ禁句らしいよ」

「分かってるって、だから言わなかっただろ」

同じ頃、クラット基地にもかなりの兵士が集まってきた。

その人口密度の増えた基地の廊下を、クロコとサキは歩いていた。クロコは息苦しそうな顔をする。

「……ったく、どこを見ても人ばっかりだ」

「そうですね。もうかなりの数の兵力が集結しているんじゃないでしょうか。いったい何人いるんだろう？」

その時だった。

「クロコ君！」

クロコを呼ぶ声が聞こえた。クロコは振り返る。するとよく見覚えのある二人がいた。

フロウとクレイドだ。
クロコは驚く。

「え……なんでいんだよ」

「フルスロツクの援軍の第二便さ。僕らもここで戦つよ。って……」

フロウはクロコの隣に立つ人物に顔を向ける。

「もしかして……サキ君!？」

「はい！ お久しぶりですフロウさん」

「久しぶりだなサキ」

クレイドも声をかける。

「クレイドさんも、お久しぶりです」

「けどおまえ、縦に伸びたな。一瞬分からなかったぜ」

「はい！ 10cm近く伸びました」

フロウが一瞬面白くなさそうな顔をする。
クレイドはクロコの方を向く。

「そういえばクロコ、おまえフィンディ・レアーズに会ったか？」

「ん？ ああ」

「おまえ、怒って斬りつけたりしてねーだろうな」

クレイドは冗談交じりで言った。

その言葉を聞いた途端サキの顔が少し青くなり、クロコは一気にムスツとした。

（あつ、ホントにやったな）

二人は同時にそう思った。

「とはいえ、今回はかなりの規模の戦いになるみたいだね」

フロウの言葉にクロコが口を開く。

「ああ、基地は兵士のギユウギユウ詰めだ」

「過去最大規模の戦いになるって噂だよ。おそらく『七本柱』も動くだろうね」

「『七本柱』って何だ？」

「大きな戦果をきっかけに高い地位を得た七人の將軍の総称さ。今のグラウド国軍を支えた七人の英雄、国軍の切り札……それが『七本柱』さ」

「そんなやつらがいたのか……」

「うん、地位の高さもあって戦線に出ることはほとんどないんだけど、さすがに今回は動くだろうね」

「俺達も気を引き締めねーとな」

国軍本陣、その司令官テント内で軍人達が机を囲み、作戦会議を開こうとしていた。

「失礼します」

テント内にフレアとコールが入ってきた。
それにテント内にいたラズアームが反応する。

「来たかフォールクロス」

「自分も作戦会議に？」

「ああ、君にも役目を持たせたいからな。それより横にいるのは……」

「ああ、仲間のコールです。無名ですが、こいつもかなり腕が立つんですよ。同伴させてもよろしいですか？」

「ふむ、君がそう言うならば構わんよ」

コールが敬礼する。

「よろしくお願いします」

「それではそろそろ始めよう」

大きな机を十人近くの軍人が囲む。副官が地図を広げ説明を始める。

「地図を見て分かる通り、クラット基地は丘の上に建てられた基地であり、そのためこちらの攻撃方向が制限されます。さらにその丘は南方まで続いているため、南方からの攻めは不可能です」

それを聞きラズアームがうなづく。

「そのため前回我々は基地正面からの横陣形の攻撃を仕掛けた。しかし……」

ラズアームは地図上のクラット基地を指さす。

「高度からの遠距離基地砲により、陣形全体の勢いがそがれ、さらにフィンディ・レアーズによって一気に陣形が切り崩された。そして結果は……」

ラズアームは小さくため息をつく。

「我々の大敗だ……。幸い素早く引いたため損害はそれほどでも無かったが」

それを聞き副官が周りの軍人を見渡しながら口を開く。

「次の戦闘ではこの二つの対策を立てた上での戦闘を行いたい」

一人の軍人が口を開く。

「基地砲を避けるのなら正面からの戦闘を避けるのが一番でしょうね。南に回り込むのは無理なようなので、北側に回り込むのはどうでしょうか」

それにラズアームが答える。

「北側に回り込んだ場合、足場の悪い丘の上で常にこちらが低所に回って戦わなければならない。それならば基地砲の方がまだかわいい」

別の軍人が口を開く。

「それならば正面を開けた陣形で挟み込むように展開すれば良いのでは？」

ラズアームがまた答える。

「中央を開ければ力負けするのは目に見えている」

ラズアームは軽いため息をつく。

「基地砲に関しての対策はあきらめて、ある程度の被害覚悟で戦うしかない」と私は考えている」

ラズアームのその言葉に他の軍人達が静かにうなづく。
副官が口を開く。

「ではフィンディ・レアーズに対しては？」

「彼の相手は私がする」

ラズアームのその言葉に一人の軍人が口を開く。

「勝てる自信がおりだと？」

「私を誰だと思ってる。やつの剣技は先の戦闘で確認している」

副官が口を開く。

「とはいえ前回の敗戦も踏まえて、陣形は厚く構えた方が良いでしょう」

「厚くし過ぎれば今度は基地砲の餌食になる。せいぜい5000ずつといったところか」

ラズアームはそう言ったあと、フレアに目を向ける。

「前回の戦闘時にフィンディ以外にもかなり腕の立つ者がいた。フオールクロス、君にはフィンディ以外の手練のものを任せていいかね」

それを聞いてフレアがほほえむ。

「もちろんです。コールも手伝わせてよろしいですか？」

「構わんよ」

「あつ、それとラズアーム少将、前回の戦闘時に黒髪的女剣士を見かけませんでしたか？」

「……？　なぜ君がそれを知っているんだ？」

「いたのですか！」

「ああ、おそらくはフィンディの次に手強い相手だろう」

それを聞いてフレアはニヤツと笑う。

「お任せください。必ずや仕留めて見せます」

「ふむ……対策についてはこんな所か。あとは……」

ラズアームは地図を見つめる。するとコールが口を開く。

「この北方の下り斜面、ここは使えませんか？」

「北方の下り斜面？」

「はい、地図上にはここの北方にずっと長い下り斜面が見られます。それをうまく目隠しにできれば、奇襲を行うことができるかもしれません」

「ふむ……どうだ？」

ラズアームは副官を見る。

「えー、ダメですね。事前の調査では、この下り斜面は傾斜が緩すぎて目隠しには向きません。相手に気づかせない位置までとなると……かなり大まわりするハメになります」

「なるほど……いや、待てよ」

ラズアームはもう一度地図を見つめる。そしてニヤリと笑った。

「どうやら明日は早起きすることになりそうだな」

クラット基地防衛戦四日目。

その日の昼ごろ、クラット基地の正面の大草原にクラウド国軍が姿を現した。

40000はいるだろう巨大な軍勢。

その軍勢に対し、セウスノール解放軍もクラット基地の丘の前に陣を構える。その巨大な軍勢は国軍に引けを取らない。

その解放軍の左翼にクロコも立っていた。

「すげえ数だな。ケイルズヘルの総力戦にも負けてねえ」

すると隣のフロウが口を開く。

「そうだね、これでまだお互い戦力が集結しきってないんだ。僕らのやることは、こっちの戦力が整うまでなんとか基地を守り切ること……つまり、時間稼きってことになるけど……」

「潰せるんだったら、いま潰しといた方がいいだろ」

クレイドがそう言って剣の柄を強く握った。

草原を挟んで向かい合うセウスノール解放軍とクラウド国軍。大軍同士のにらみ合いが続く。

静かに時が流れる中、クレイドが口を開く。

「しかし、左翼にオレとクロコとフロウが固まって、右翼はサキだけ……バランスが悪いな」

「まあね、ホントは両翼を一気に崩せる方がいいけど……僕ら無名だし、仕方ないよ。とにかく今は気を引き締めよう」

パンッ！！

信号銃と共に国軍が一気に突撃してきた。

およそ5000の軍勢を切り取って厚く構えた陣形だ。

基地の塔からその陣形を見ていたロイム司令官。その顔が険しくなる。

「くっ……フィンディ対策か……」

解放軍中央、フィンディはそれを見て笑みを浮かべる。

「いいねえ……狩りがいいがある」

基地砲が火を噴く。爆炎が突撃してくる国軍陣の所々で上がるが、ひるまない。国軍は大きな掛け声を上げて基地へと近付いてくる。

それを見て解放軍の指揮官が叫ぶ。

「突撃ーッ！！」

解放軍も動いた。

解放軍左翼では、クロコ、フロウ、クレイドが先頭に立って駆ける。

国軍が目の前にまで迫ると、まずフロウがそこへと飛び込んだ

ヒュヒュヒュヒュンッ！！

フロウの高速の斬撃が次々と国軍兵を斬り伏せる。
さらにクロコが続く。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

クロコの強烈にしなる連続の斬撃に国軍兵は手も足も出ない。
そしてクレイド。

ギュンギュンッ！！

空気を切り裂く巨大な斬撃、それが振るわれることに国軍兵数人が宙を舞う。

国軍右翼はあっという間に切り崩されていく。

一方、解放軍中央。そこでは以前と同じくフィンディが猛攻を見せていた。

「アッハッハッハッハッハッ！」

フィンディは笑いながら国軍兵の首筋を恐ろしいほどの速さで切り裂いていく。

クロコ達三人が切り崩している右翼よりもさらに早く、国軍中央陣形は切り崩されていく。

一方、解放軍右翼では、サキを中心にして、ほぼ互角の押し合いが展開されている。

時間が経つにつれ、国軍の右翼と中央が徐々に切り崩されていく。しかし厚く構えた陣形のため、簡単には分断されない。

「第二陣突撃ーッ！！」

国軍の第二陣が突撃する。基地砲の嵐を再び抜け、5000の国軍兵が戦線に加わる。

それに必死で対抗する解放軍。

無数の剣がぶつかり合い、銃声と爆音が絶え間なく響き渡る。

戦いは激しさを増してゆく。

解放軍左翼の一角、クレイドは迫ってくる剣兵を次から次へと吹き飛ばしていた。先行していたクロコが砲兵隊を仕留め出してから、砲撃はピタリと止んでいる。

それをいいことにクレイドはどんどん敵を斬り伏せる。その時だった。

クレイドは前方に立つある国軍人に気づく。

ただの剣兵とは違う。持っている武器の形状が明らかに異なっていた。

人一人分はあるだろう巨大な斧、それを片手で軽々と持っている。そしてその斧の形状は普通のものとは少し異なっていた。普通の斧よりもはるかに鋭利にとがった形状は、まるで死神の大鎌のようだった。

フレア・フォールクロスがクレイドの前に現れた。

二人の目が合う。

フレアはニヤッと笑った。

「強そうなやつ、発見」

クレイドも身構える。

「変なヤロウだが……たぶん強いな」

クレイドはフレアに向かって突進する。

その時、すぐ近くにいたフロウはクレイドの相手に気づく。その相手の武器を見るなり、一瞬で緊迫した表情へと変わった。

「ダメだ、クレイド!! アレと一人で戦うな!!」

フロウはすぐに駆けだした。

一方フレアは向かってくるクレイドを見て余裕の笑みを浮かべる。

「さーて、一騎討ちだ……」

そう言って、ユラリと巨大斧を両手に持ち、斜めに構えた。しか

し、

「……ん？」

クレイドの後方を駆けるフロウの姿に気づく。

「……チエツ」

フレアは巨大斧を横に構え直した。すぐそこまで迫るクレイド。フレアが大きく口を開く。

「さあっ！ 力比べだ！！」

クレイドが間合いへと入る、その瞬間、フレアは巨大斧を高速で振るう。クレイドも巨大剣を高速で振るう。

ギュオンツ！！ ギュンツ！！

二人の巨大な武器が互いにぶつかり合った。

ギイイイインツツツ！！！！

空間を揺さぶる強烈な金属音が辺りに響く。それとほぼ同時に、クレイドの体が斧の斬撃と共に高速で流れる。クレイドは勢いよく吹き飛ばされた。

フレアが勝利の笑みを浮かべた直後、斧をきれいに振り抜いた状態のフレアに、フロウが突撃する。

「甘い甘いッ！！」

フレアは斧の長い柄の部分を、槍のごとく高速で突き出した。

「くっ!!」

その突きのスピードに驚くフロウ。

ヒュッ!!

フロウは体をそらし紙一重でかわした。しかし、突きは素早く横攻撃に変化した。

ゴッ!!

柄はフロウの体に直撃した。

「う……ッ!!」

フロウの体は吹き飛ばされる。
余裕の表情を見せるフレア。

「この突きをかわすとはな!。びっくりした」

吹き飛ばされたクレイドがヨロヨロと立ち上がる。

「クッソ……なんてデタラメなパワーだ……」

フロウも立ち上がる。

「くっ……強い……」

再び剣を構えるクレイドとフロウを見て、フレアは斧を構えると、
少しだけ嫌そうな顔をした。

「複数相手は苦手なんだよなあ」

「なら、手伝おうか？」

フレアの隣にコールが現れた。

「おっ！！ いいトコに来たじゃんコール。 んじゃあ、ちっちゃい
方を頼むよ」

「オツケー」

コールはそう言うと剣を構え、フロウに突進する。コールはフロ
ウに向け斬撃を放つ。

（速い……！）

コールの斬撃に驚くフロウ。

ギインッ！

フロウは素早くコールの斬撃を防ぐ。しかし、

（重い……！）

フロウの体はコールの剣圧で押される。しかし素早くフロウは反

撃に出る。

ヒュヒュヒュンッ！

フロウの高速の斬撃、しかしコールは最短の動きであっさりかわす。

ヒュンッ！

コールのカウンターがフロウの体をとらえた。わずかに血しぶきが飛ぶ。

「くっ……！」

距離をとるフロウ。

「さて！ こっちもいくか！！」

巨大斧を構えてフレアがクレイドに突撃する。フロウがそれに気づき叫ぶ。

「ダメだっ、クレイド！！ 一人で相手しちゃいけない！！」

しかし、そんなフロウにコールが襲いかかる。

ヒュンヒュンッ！

コールの斬撃がフロウの体をかする。険しい表情をするフロウ。

「くっ……！」

「味方を気にしてる余裕はないはずだけど」

一方、クレイドは自分へと迫るフレアを見ていた。

「一人はダメつつても相手から来るんじゃないかな」

クレイドは剣を構える。

一方、フロウはクレイドのことを気にしながらコールの剣を防いでいる。

(……なんとかしないと)

その時、横から人影がコールを斬りつける。コールは素早くそれをかわした。

「フロウっ……！」

クロコだった。

「いいトコに来たクロコ！ あと任せた」

フロウはパツと言うとフレアの方へと駆けていった。

「え………？」

呆然とするクロコ。

一方、クレイドの目の前まで迫るフレア。しかし直前で足をとめた。

「クロコだって!？」

フレアはクロコのいる方向を見る。

クロコを見た瞬間、フレアの目の色が変わった。

「見つけたっ!」

しかし直後、横からフロウが斬りつける。

ヒュヒュヒュンッ!

「うわっ!」

フレアは驚きながらもその斬撃を全てかわすと、素早く小ぶりの斬撃を返す。

ギュンッ!

フロウはそれを素早くかわすが、

ゴッ!!

フレアの蹴りがフロウをとらえた。

「が……!」

軽々と浮き上がり、飛ばされるフロウ。

逆からクレイドがフレアを斬りつけようとするが、フレアは素早く反応し、突きを放つ。

ガアアアンツ！！

クレイドは剣で防ぐが、強力な威力で後ろに押し返される。

「……クソ！」

クレイドは体勢を立て直して再び剣を構える。

フロウも立ち上がり剣を構える。

フロウとクレイド、二人は左右にフレアを挟む。

それを見てフレアがメンドくさそうな顔をする。

「あーもう、オレはクロコと戦いたいんだけどなー」

一方、クロコはコールと素早い斬撃の攻防を繰り返していた。クロコの斬撃の嵐。しかしコールはすぐさまそれを返す。

ギインギインギンツ！！

二人の間で無数の斬撃がはじける。

クロコが後ろに跳んで距離をとる、するとコールも一歩下がる。距離が離れた二人。

クロコは険しい表情をする。

「クソ……なんだこいつ」

コールも表情を少しだけ険しくする。

「手強い……」

クロコは剣を構え直すと、素早く左右に動きながらかく乱する。そして一瞬で距離を詰めた。

ヒュンッ！

クロコの斬撃、しかしコールは素早くかわす。直後、クロコは蹴りを飛ばす。

ビュンッ！

それもコールはあっさりかわす。

「なにっ……！」

ヒュンッ！

コールの素早い反撃。クロコの肩がわずかに裂けた。驚いて距離をとるクロコ。

（クソ……なんだこいつ。変則的な動きに全く動じない……）

同じ頃、中央ではフィンディがなおも圧倒的な強さを見せていた。次々と斬り伏せられる国軍兵。

しかし、陣形はなかなか分断できない。

(……チツ、厚いな)

フィンディが少しだけいらだち始めたその時だった。

フィンディは気付いた。自分の前方の敵兵の群れ、その中にいる、大剣を構えたラズアームの存在に。不敵に笑みを浮かべながら、フィンディを大きな目でギラリと見つめている。

「さあ……始めようじゃないか。フィンディ・レアーズ」

3 - 10 迫りくる絶望

クラット基地の東に広がる緑色の大草原、そこで40000もの大軍勢同士の戦いが繰り広げられていた。

その軍勢同士の中央、そこでフィンディとラズアームは距離を開けて向かい合っていた。

駆け抜けているフィンディ、たいして向かい撃つ形で構えるラズアーム。

ラズアームから発せられるただならぬ雰囲気、それをフィンディは感じた。

しかし、

（関係ねえ）

フィンディは一瞬でラズアームの間合いへ飛び込んだ。

ヒュンッ！

フィンディの斬撃は強烈な速さでラズアームの首筋へと伸びた。しかしラズアームはそれをあっさりとかわす。

「なに………！」

「はあッ……！」

ギュンッ……！！

ラズアームの叩きつけるような大振りの斬撃。
フィンディは素早く反応し、それを防ぐが、

「くっ……！」

フィンディの体はラズアームの強烈なパワーで後ろに飛ばされる。
素早く体勢を整えるフィンディ。

「……チッ！」

予想以上の相手の強さに戸惑うフィンディ、その様子を見てラズアームは不敵に笑う。

「初めまして、フィンディ・レアーズ」

ラズアームは剣を少し下げ、フィンディに話しかける。
フィンディは取り合わず、黙ってにらみつけている。

「この出会いはまさしく運命だよ」

「……………運命？」

ラズアームの不可思議な発言、それに思わず反応するフィンディ。
その反応を見てラズアームは一層深い笑みを浮かべた。

「まさか親子共々、私の剣で命を失うことになるとはな」

ラズアームのその発言の意味をフィンディは一瞬理解できなかった。

しかしすぐにハツとなった。

フィンディの表情がみるみる変わっていく。驚嘆の表情だ。フィンディはゆっくりゆっくりと口を開く。

「……………おまえ……………まさか」

ラズアームはニヤリと笑った。

「馬鹿な男だったよ、君の父親はな……………戦いの途中で、剣を持った相手に対して刃を下げるなんてね。おかげでこうして私は生きているわけだが……………」

フィンディは自らの腕が震えるのを感じた。そして全身がゆっくりと熱を帯びていくのも感じた。

「うわあああああつ!」

フィンディは叫びながらラズアームを斬りつけた。しかしあっさりと防がれる。

フィンディはなおも斬撃を繰り返す。しかしその全てがラズアームに防がれる。

「どうした、フィンディ・レアーズ。剣が乱れているぞ?」

ラズアームは斬撃の一つを避けると素早く反撃に出た。

ギョーンッ!!

強力な斬撃、フィンディはそれを防ぐが剣圧によって体勢が崩れ

る。

ギョーンッ！

フィンディの脇腹がわずかに切り裂かれた。

「がつ………！」

苦痛の声を漏らすフィンディ。しかし、すぐに反撃に出る。フィンディの斬撃がラズアームの首筋へと伸びる。しかしあっさりかわされる。

ギョーンッ！

すぐさま放たれた反撃でフィンディの右足が裂けた。わずかによるめくフィンディ、しかし容赦なくラズアームの斬撃が襲う。

ギョーンギョーンギョーンッ！！

ラズアームの斬撃を防ぐことにフィンディの体勢が崩れていく。そして、

ギョーンッッ！！

ラズアームの大剣がフィンディの腹を裂いた。血が噴き出る。

「がつ………ああ………」

フィンディは大きくよろめいた。手で傷口を押さえる。ボタボタ

と地面に血が流れ落ちた。

フィンディの顔から汗が噴き出る。そして息が乱れていく。
そんなフィンディを見て、ラズアームの顔から笑みが消えた。

「興ざめだ……」

ラズアームは剣を下した。冷たい目でフィンディを見つめる。

「こんな貴様を倒したところで、私が得るものなど何もない……」

ラズアームはそう言うと、フィンディから距離をとった。そして
ゆっくりと後ろに下がっていく。

「次に会う時まで、せいぜい心の準備をしておくことだな……また
会おう、フィンディ・レアーズ」

遠ざかっていくラズアームの姿。フィンディはその姿を、傷口を
押さえてよろめきながらにらみつけていた。

「……待て……待てよ……」

フィンディは歯を食いしばる。

「……………クソ……………チクショウ……………！」

後方へと下がったラズアームはポツリとつぶやく。

「まあ、もっとも、君と再戦するのは別の戦場になるだろうがな。

なんせこの戦いはもうすぐ終わる」

ラズアームは軍服から手持ち時計を出して見る。

「時間だ」

パンパンパンッ！

国軍側から一時撤退の信号銃が鳴った。

国軍兵達が次々と後退していく。

「チエツ、時間が」

国軍右翼で戦っていたフレアが残念そうな顔をして、後退し始める。

クレイドとフロウはそれに対し追撃せず、息を乱しながらその様子を見ていた。

クロコと戦っていたコールも後退していく。

「くっ！ 待て！！」

クロコは追い打ちをかけようとするが……

「やめるんだ！ クロコ君」

フロウが止める。

「深追いしちゃダメだ」

フロウのその言葉にクロコは足を止め、悔しそうにコールを逃す。

国軍はゆっくりゆっくりと後退していく。
その様子を眺めながらクレイドが口を開く。

「なんとか……持ちこたえたか……」

しかしフロウはどこか引つ掛かる様子だ。

「なんだろう……なんでこのタイミングで国軍は撤退するんだ？」

基地から遠ざかった国軍、その真ん中付近にラズアームは立っていた。

ラズアームは手持ち時計を再び見る。

「さて……最高のショーを見せてやろう」

ラズアームはニヤリと笑う。

一方、解放軍陣の一角で叫び声が上がった。

「うわあああっ!!」

その声にクロコ達が反応する。

「なんだ……?」

クロコは声の方向を見た。

すると今度は所々から叫び声上がる。そして見る見るうちに解放軍全体が大きく騒ぎ始める。

「……おい、見るよ」

すぐ近くでクレイドが声を出した。クレイドは静かな口調だったがただならぬ様子だ。北の方をジッと見つめていた。

クロコとフロウも北を見た。その直後、二人の顔色が変わる。クロコは声を漏らした。

「な……ウソだろ……」

クラット基地の北、そこには五つの巨大な影が近づいてきていた。クロコ達はその影の形を確かに知っていた。

……グラン・マルキノだ。

塔のような砲身を支えた巨大な鋼鉄の塊が五台、煙を上げながら北方向から基地に迫っていた。

基地の北側には兵士を一人も配置していない。しかしグラン・マルキノはすぐそこまで迫っていた。

「ダメだ………どうしようもない」

フロウは固まっていた。

「完全に裏をかくれた……あの軍勢そのものが巨大なオトリだったんだ……」

その言葉を聞いてクロコは混乱した。

「ウソだろ……!? まさか……負けるのか……?」

国軍陣、その一角でラズアームは双眼鏡で基地に近づくグラン・マルキノを眺めていた。

（北側にある下り斜面……傾斜は緩やかだが、数km続くこの斜面は、最大高低差100m以上。最長コースを通ればグラン・マルキノさえも容易に隠すことができる。早朝から走らせて、やっとここまで辿り着いた長距離コース。本来ここまでの大回りを通常の隊で行うメリットはない。しかし……グラン・マルキノならば話は別だ）

ラズアームは笑みを浮かべた。

「我々の勝ちだ」

解放軍陣の所々から味方の悲鳴のような声上がる。

クロコは迫りくる五つの影を見つめながら、声を漏らす。

「何か……何かできないのか……！？ 何か手は……」

フロウは小さく首を振った。

「ある……はずがない。北側には兵は一人もない。そしてグラン・マルキノにあそこまで近づかれた。この状況で、あの巨大な鉄の塊を止める手なんかあるはずがない……」

「そんな……そんな……」

クロコは呆然とした。クレイドは悔しそうに小さく歯をギリツと鳴らした。

五台のグラン・マルキノはどんどん基地へと迫ってくる。

クラット基地敷地内の兵士達もその状況に混乱していた。叫び声を上げる者、基地の外へと逃げていく者、呆然と立ち尽くす者、様々な者がいた。

「もうダメだ……」

一人の兵士がそうつぶやき、石畳の床に膝をついた。その時だった。

「あきらめるのはまだ早い」

一人の男の声が基地の広場に響いた。周りの兵士達はその声の方向を向く。そしてその全ての兵士が驚いた。そこには鋼鉄のヘルムをかぶった男……ファントムがいた。

「ここには私がいる」

広場の中央、そこにファントムは立っていた。北を静かに見つめている。

広場の兵士達が騒ぎ出す。

「ファントム……」

「ファントムだ」

「ファントム!？」

さらに基地の広間の中に巨大な何かが入ってくる。

五つの巨大な金属の塊。グラン・マルキノよりもはるかに小さいが、それでも大きい。四角い胴体に無数の車輪が付いている。上部には煙突が付いており、そこから煙が上がっている。そして、前部には天にも伸びるような長い長い砲身がついていた。砲身だけならグラン・マルキノよりも長いだろう。

その巨大な金属の塊五つが、長い砲身を全てグラン・マルキノへと向けた。

ファントムがヘルム内にこもった声を響かせる。

「やれやれ、こんなにすぐに使うことになるとはな。……照準は？」

「問題ありません」

「こちらからです」

金属の塊にそれぞれ乗った解放軍兵達が次々と返事をする。

「うむ……では、いくぞ。標的グラン・マルキノ……」

ファントムは手を挙げた。

「リック・ノール、撃て ツツツ!!!」

五つの長い長い大砲が爆音と共に火が噴いた。
その直後だった。

ドオオンッ! ドオオオンッ! ドオオオンッ! ドオオオンッ!
! ドオオオンッ!!

大地全体に響く巨大な爆音と共に、迫りくる五台のグラン・マルキノの前方が紅蓮の炎に包まれた。さらに自らの砲弾の誘爆により、五台のグラン・マルキノ全てが内部から粉々に砕け散っていく。

破壊されたグラン・マルキノからゆっくりと黒い煙が上がっていく。

解放軍兵達はしばらくその様子を呆然に見つめていた。しかし……

「うおおおおおッ！！」

クラット基地の広間、そして解放軍陣から次々と歓声が上がっていく。煙を上げるグラン・マルキノを眺めながら、兵士達は狂ったように歓喜する。

クロコはその様子を呆然と見ていた。

「すげえ……」

「なんなんだろう。あの兵器は……」

フロウも呆然とした様子だ。

国軍陣ではラズアームが驚きの表情をしていた。

「馬鹿な！！　なんだアレは！？」

ラズアームの握っていた双眼鏡がバキンツと音を立てて壊れる。

「あんなものの情報などなかったぞ。おのれ……なんてことだ」

クラット基地の広間ではファントムが静かにグラン・マルキノの黒煙を眺めていた。

「対グラン・マルキノ用兵器リック・ノール。出来は上々だな」

ファントムは満足そうにうなずいた。

兵士達の歓喜の叫びは、国軍が姿を消したあともしばらくのあいだ響き続けた。

3 - 1 1 父親

ファントムは多くの兵士の敬礼に見送られながら基地の入口へと歩いていく。

その兵士達一人一人が笑みを浮かべ、ファントムを称えるように見つめていた。

その様子をクラット基地へと帰還したクロコ達も見ていた。

「ずいぶん人気だな。あのオッサン」

するとフロウが口を開く。

「そりゃそうさ、『ファントム』だよ。解放軍の最高の英雄だからね」

ファントムはゆっくりと基地の中へと入っていった。

その日のうちに再び国軍が姿を見せることはなかった。

夕暮れ時のことだった、クラット基地の隊長の一人がクロコを呼びだしてきた。呼ばれるままにクロコは司令室へと足を運ぶ。

するとそこにはロイム司令官とファントムがいた。

「少し席をはずしてくれないか？」

「はっ！」

ファントムの言葉にロイム司令官は敬礼して部屋から出ていった。部屋にはクロコとファントムの二人きりだ。

「久しぶりだな。クロコ」

「ああ、久しぶり」

ファントムは小さく息を吐いた、どうやら肩の力を抜いたようだ。

「何の用だ？」

「いや……特に用はない。ただ正体を隠している関係で実は話し相手があまりいなくてね。少しでも付き合ってくれないか？」

「んっ、まあいいけどさ」

クロコはドスツとイスに腰掛ける。

「呼び出しておいてすまないが、少しでも待っていてくれないか？ 目を通さなければならぬ書類があつてな」

ファントムの手には数十枚の書類の束が置かれている。

クロコがチラッと一番上の書類を見た。書類には文字がびっしり書かれている。

（うえ……）

クロコは顔を引いた。

「何時間待たせる気だよ」

「ああ、大丈夫。本当にすぐ終わるから」

するとファントムは書類一枚一枚を次々と読んでいく。ものの五分で全ての書類を読み上げてしまった。

（な……読むの速っ！）

クロコは素直に驚いた。

「待たせたね」

ファントムは書類を机に置いて、クロコの方に向き直った。
クロコが口を開く。

「いいのかよ。あんた国の偉いやつなんだろ？ こんなトコまで来て……」

「ああ、当然すぐに帰らせてもらっつよ。こんな時期に首都から長く離れると疑われるからな」

「じゃあ来んなよ」

「そう言うわけにもいかない。それほど今回の戦いは重要だからな」
「……………」

「私が来ることで士気が高まり、少しでも勝利の可能性が上がるのなら、多少のリスクはおかすさ。私にも命ぐらいは懸けさせてくれ」

「……そうか」

「まあ、もつともすぐに帰るがね。だが良かったよ、士気はだいぶ高まった」

「そういえば、あのでかい大砲はなんだ？」

「ああ、あれか。あれはリック・ノールという新兵器さ」

「リック・ノール……」

「グラン・マルキノの対策として造られた兵器だね。射程はグラン・マルキノの1.5倍、加えて正確な砲撃が可能だ。威力はグラン・マルキノと比べるとだいぶ劣るが、グラン・マルキノは、前方の鎧さえ貫ければ誘爆で簡単に破壊できるからな」

「へえー、ずいぶんなモンを造ったな」

「予算を絞り出すのに苦労したよ」

ファントムはヘルムの奥で笑っていた。

その後、クロコとファントムはしばらく話した。

クロコと話したことでファントムは満足したようで、クロコとロイム司令官に別れを告げると、基地の兵士達の敬礼での見送りの下、基地をあとにした。

クロコがフィンディの負傷の知らせを聞いたのはそれからすぐのことだった。

明くる日の昼ごろ、基地の大部屋の一つでクロコは昼食を食べていた。クロコとフロウとクレイドで床に座り込んで食事をしている。支給された干し肉とパンを片手にフロウが口を開く。

「ねえ、クロコ君はお見舞いしないの？」

「あつ？」

「フィンディとは一応知り合いになったんでしょ」

「行ったところで話すことねーし。絶対喜ばないし」

それを聞いてクレイドが笑う。

「確かに、見舞い相手が切りつけたやつじゃあ、切り傷にしみるよな」

「そういえばフィンディに傷を負わせた相手は何の因果か、ピューター・ラズアームなんだってね」

「因果……？」

クロコは首をかしげる。

「ラズアームはフィンディの父親……ギルティ・レアーズを倒した男だよ」

「……！！」

「倒したって言っても不意打ちみたいなものでね。おかげさまで『奪威の狐』なんて異名がついてる。まあ、端的に言つと卑怯者って意味だね」

「……………」

クロコは下を向いて黙りこむ。そして立ち上がった。

「ちょっと行ってくる」

クロコはそう言つてその場を立ち去った。

クロコは基地の治療室が並ぶ廊下へと足を運んだ。治療室の一つをクロコがのぞこうとした時だった。

「あんななんか知らないッ!!」

大きな怒鳴り声が部屋の入り口から飛び出してきた。そしてすぐさまファリスが出てきた。クロコと目が合う、しかしすぐに顔をそらし廊下を早足で歩いて去っていった。ファリスの目が潤んでいたことにクロコは気づいた。

クロコは治療室に入る。治療室には二十近くのベッドが並んでいた。その一つにフィンディが寝ている。天井を見つめていた。

クロコはそのベッドに真っ直ぐ向かう。

「おいっ」

クロコが声をかけるとフィンディがクロコの方を見る。そしてゆっくりと体を起こす。

「やれやれ……今度はおまえか。ここにいる女は嫌いなんだけどな」

「ファリスが怒ってたぞ」

「ああ、オレが一番知ってるよ。あいつはオレに嫌味を言うのが趣味なのさ。そのくせちよつと言い返すと感情的になって怒るし、最悪なやつさ」

フィンディのその言葉にクロコは少し眉を寄せる。
クロコはベッドの横のイスに腰かけた。

「見舞いにはあいつ以外来たのか？」

「何言ってるんだよ、そりや来るさ。オレはこの英雄だからな。まあオレに斬りつけてきたやつが来るとは思わなかったけど？」

「……フン」

「で、何の用？」

フィンディは邪魔ものを見るような目だ。

「見舞いに用もクソもあるか」

「えっ！？ 見舞いに来たの？」

フィンディがワザとらしく驚く。

「ウソだろ。何の用だよ。あいつと一緒に嫌味を言いに来たのか？」

「あいつが嫌味を言ってると思ってるのか？」

「おまえは聞いたことないから知らないのさ。アレは嫌味以外の何物でもないぜ？」

「……………」

クロコはもうファリスの話をするのはやめようと思った。フィンディの体を見る。肩と足と腹周りに包帯が巻かれている。特に腹の包帯が厚かった。

「派手にやられたな」

「ふん……ちょっと剣先が狂っただけさ」

その言葉がクロコの頭に引っ掛かった。

（狂った……？ こいつの剣が……？）

クロコは一度だけフィンディの剣を近くで見ている。恐ろしく速く正確な剣技だった。

「感情的になっただな」

クロコは直感的にその言葉を発した。
その言葉にフィンディは敏感に反応した。

「……………何が言いたい？」

「あいつが父親の……」

「誰に聞いた？」

フィンディはにらみつけてきた。

「基地の仲間の一人から……」

「本当にそいっただけか？」

「……………」

クロコは一瞬黙った。

「……ファリスからも少し聞いた」

その言葉を聞いた瞬間、フィンディは不快な感情をはっきり顔に出した。

「……あの女、何がしたいんだ」

「おまえは相手がそいっだから……」

「違うね。オレは感情的になんてなってない」

「だったらどうして剣先が狂った？」

クロコは少し大きな声を出した。
フィンディは眉を寄せる。

「チツ……要するにおまえが言いたいことはこうだろ？ 父親を殺した相手だからオレが怒って感情的になった。だがはつきり言っておく。オレは父親がこの世で一番嫌いなんだよ」

「昔は尊敬してたんだろ」

「ああしてたさ。昔はな。けどな、あいつは敵なんか情けをかけたせいでむざむざと殺された。そして母さんは死んだ。町は燃えた。オレは全てをあいつに奪われたんだ！ あいつの情けのせいだな。あいつの情けは何を生んだ？ 情けをかけた敵に全てを奪われたじゃないか！ あいつは世界一の大馬鹿野郎さ。そしてオレが世界で一番嫌いなやつだ……！！」

「……じゃあなんでそれを殺した相手に感情的になったんだ」

「ふん、仮に感情的になってたとしても、それはあいつを殺した相手って理由からじゃないさ。あいつが殺されたことで結果的に敗戦した。そして、全てを失った。ならあいつを殺した相手に怒りが湧くのは当然だろ？」

「筋が通らねえな。父親の話と殺したやつの話、この二つを合わせると話がチグハグだ。おまえの話通りなら、怒りが湧くのは甘かった父親だけで、その相手にまで怒りの矛先は向かないはずだ」

「……………」

フィンディは黙る。

少しの間二人は黙った。

クロコが静かに口を開く。

「おまえ本当は、今でも父親のことが好きなんじゃないのか？」

「……！！」

フィンディの表情が変わった。大きく目を見開いた。

「確かにおまえは父親のことを恨んでる。けど、それだけじゃない、昔の通りまだ好きなんだ。尊敬してるんだ。だから殺したやつを相手に怒りが湧いたんじゃないかねえのか？」

フィンディは歯をギリツと鳴らした。

「オレがあいつを好き……？ ふざけたこと言っただけじゃねえよ。オレはあいつを誰よりも何よりも恨んでるんだよ……！ もしかあいつが仮にいまオレの目の前に現れたなら、その瞬間、オレはあいつの首筋を剣で切り裂くだろうよ」

フィンディの声には怒りがこもっていた。

「もうたくさんだ……てめえの話なんて聞きたくもねえ。とっとと出てけ」

フィンディの様子を見て、クロコは黙りこむ。

「出てけっ！！」

フィンディは部屋全体に響く大声で叫んだ。
クロコは黙って部屋をあとにした。

「バカヤロウ……」

廊下で一人、クロコはポツリとつぶやいた。

3 - 12 ルザンヌ軍との戦い

その日は星の少ない薄暗い夜だった。

クラット基地よりはるか南東、とある草原。小さな町アルケアの城壁を外から見つめながらスコア・フィードウッドは立っていた。

周りには数百人の国軍兵の姿がある。

その前を司令官が立つ。口ひげを生やした三十代前半の司令官だ。

「皆も知つての通り、このアルケアの町には反乱軍ルザンヌのリーダー、レイド・フェムザムが潜伏している可能性が高い。そのレイド・フェムザムの身柄の拘束が第一目的だ。ただし、強い抵抗があった場合はその生死は問わない」

スコアはそれを聞きながら目を鋭くする。厚い眼鏡は外されている。

司令官は話を続ける。

「レイド・フェムザムは年齢三十代後半の赤髪の大男だ。かなり剣の腕が立つとのことだ、一人で取り押さえようとはするなよ」

司令官はそう言ったあと一息ついて再び口を開く。

「それではこれより作戦に移る。第一、二、三、剣兵隊、銃兵隊は南門、西門、東門をそれぞれ封鎖」

「はっ！」

命令を受けたスコアを含めた部隊の兵士達が一斉に敬礼する。

「第四、五、六、七剣兵隊は南、西、東、北の各地区を搜索、抵抗する者は身柄を拘束せよ。集団による強い抵抗があつた場合は北の正門から続く大通りへと追い込め」

「はっ！」

「第一、第二大砲部隊、第八剣兵隊は正門を入つた大通りを30m前進後、待機、追い込まれた敵を見つけ次第それを駆逐せよ」

「はっ！」

「残りの部隊は本陣として正門の外に待機だ」

「はっ！」

「それぞれの持ち場へと移動せよ。閃光銃の合図を確認次第、搜索開始だ！」

スコアは第二剣兵隊の一員として行動していた。行つ作戰は西門の封鎖だ。

「おい、おまえ」

部隊の小隊長がスコアに声をかけた。

「はっ！　なんでしょうか？」

返事をするスコア。

「おまえは確か、シャルルロットから一人送られてきた援軍だよな」

「はい、そうです。スコ……アルト・フォッカーです」

「ふむ、フォッカーか」

小隊長は軽いため息をつく。

（予定では、あのスコア・フィードウッドが来るとのことだったが、代わりにこんな細いガキが来るなんてな……まったく）

持ち場に着いたスコアの隊は、西地区搜索の隊と別れたあと、西門を封鎖した。スコアのいる部隊は銃兵八人と剣兵約三十人の構成だ。

西門の正面には四角い建物が立ち並んでいる。

スコアは夜空を見上げる。閃光弾はまだ撃ち上がらない。その時、スコアは何かに気付く。

「あの……何か臭いませんか？」

それを聞いた隣の剣兵は鼻をスンスン鳴らす。

「……？ いや何モ」

「そうですか」

(……気のせいかな?)

スコアがそう思った直後だった。

北の夜空に小さな光が瞬いた。

「始まりましたね」

「ああ、とは言えオレたちの作戦は封鎖だ。大した仕事はしないだろうな。まあ、レイド・フェムザムでも逃げてくりゃあ話は別だが」

西地区の道路の一角では搜索隊が動いていた。約三十人の剣兵隊だ。

「とにかく片っ端から民家内を搜索しろ」

「はっ！」

その時だった。

パンパンパンッ！！

血が飛び、数人の剣兵が倒れる。

「なんだっ！」

「銃です！ あそこ！」

道路を挟む建物の上に十人近くの銃を持った男達がいた。

パンパンパンパンツ！！

「うわあぁっ！」

銃声と共に兵士の悲鳴が上がる。

「くっ、一時路地へ避難！」

兵士達は急いで路地へ逃げ込む。しかし路地には剣を持った無数の男達が待ち構えていた。男達は一斉に斬りつけてくる。

「うわぁ！」

「がっ！！！」

血しぶきが上がり、次々と斬り伏せられていく兵士達。その事態に小隊長の表情が歪む。

「くっ……なんてことだ。完全に待ち構えられている。情報が漏れていたんだ」

夜空に響く銃声と悲鳴。

西門にもその音は届いていた。

「おいおい、ずいぶん騒がしいな」

「ああ、大丈夫なのか？」

そんな兵士達の声聞いて、スコアはわずかに嫌な予感がした。

同様に東地区、南地区も激しい抵抗にあっていた。辺りには銃声と悲鳴が響く。

西地区の一角、小隊長が大きく声を上げる。

「えーい、ひるむな！ 大通りへと追い込め！」

「おーっ！！」

最初の奇襲からしばらく経つと、隊は乱れた陣形を整え直していった。

国軍の剣兵達によって、次々と斬り伏せられる反乱兵達。国軍が押し返し始めたその時、

ドォーンドォーンッ！！

「うわあああっ！！」

味方の中から爆炎が上がる。

部隊の正面には、二門の大砲を構えた反乱兵達がいた。

「ハッハッハッ、どうだ国軍のクズ共め」

「国民の裏切り者め！」

「裏切り者には血の制裁をオッ！！！」

砲撃が国軍部隊を襲う。

小隊長は険しい表情になる。

「クソ……こんなものまで」

西門のスコア達にもその爆音は聞こえていた。

「おいおい、今の音、大砲だよな……」

「助けに行った方がいいんじゃないか？」

兵士達は騒ぎだす。

「落ち着けッ!!」

小隊長が声を上げる。

「たとえ大砲を持とうと、まともな訓練も受けていないルザンヌ軍
ごときが我らに敵うはずがない。やつらは我らをかき乱してあと、
門のどれかを一点突破して脱走を図る気だ。絶対に門から離れるな
よ」

その言葉がスコアの中でわずかに引っ掛かった。

（確かに普通に考えればそうだ……だけど何かが引っ掛かる……何
かが）

西地区の一角、国軍の隊は反乱兵達を追い込み、大通りへと誘い

込んだ。

ドォーンドォーンドォーンッ！！

追い込まれた反乱兵達を無数の砲撃が襲う。大通りで待ち構えていた国軍の大砲部隊の砲撃だ。

「うわあああっ！！」

次々と砲撃を受ける反乱兵達。

「よしっ！ このまま一気に叩き潰せ！」

小隊長がそう命令をした直後、

「あの………すいません」

背後から弱々しい声がした。

小隊長が振り向くと中年の女性が立っていた。その後方には数十人の人が続く。子供から老人まで年齢は様々だ。

「町の方ですか………？」

「はい………ルザンヌ軍に拘束されていて………町の外に出れなかったんです。隙を見て何とかここまで………どうか助けてください」

「分かりました」

小隊長は兵士達の方を向く。

「おい、おまえとおまえとおまえの三人、この町民の方々を本陣の方へと避難させる」

「はっ」

三人の兵士が町民たちを引き連れ大通りへと出る。

「おい！ 撃つなよー！ 民間人だー。本部に連れてくー」

大砲部隊に合図を出しながら住民を引き連れ大通りを歩く。

同じ頃、西門。

「だいぶ静かになったな……」

「ああ、戦闘は一段落ついたってところか」

するとスコアが口を開く。

「いえ、一段落ついたのは西地区だけです。東と南ではまだ激しい戦闘が続いてます」

「えっ！？ ここから見えるのか？」

「いえ、聞こえるんです」

「……？」

スコアは表情を陰しくする。

（想像以上に激しい抵抗だ……嫌な予感がどんどん強くなる……そ

れにさっきから漂う腐臭……）」

スコアはもう我慢できなかった。

「小隊長ッ！ 自分に様子を見に行かせてください！」

「むっ……ダメだ！ 勝手な行動は許さんっ！」

「さっきから変な臭いが漂っています」

「変な臭い……？」

「今動かなければ、取り返しのつかないことになるかもしれません」

「……そんなことは」

「隊長ッ！……」

スコアは隊長をにらみつけた。その鋭い眼光に隊長はひるむ。

「今の事態が異常なことはもうお分かりでしょう。ほんの少し確かめに行くだけです。すぐに戻ります。お願いします」

「……………」

隊長は少し考えた。

「分かった……すぐに戻れよ」

「ありがとうございます。それと二人ほど借りてもよろしいでしょ

「うか？」

「えーい、勝手にしろ。とにかく早く戻れよ」

「はっ！ その二人、ちょっと付いてきて」

スコアは二人の兵士を連れて道路を走る。

（何か……何かが起きようとしている。予想外の何かが………）

3 - 13 炎の出会い

道路を駆け抜けるスコア、連れてきた二人の兵士が付いていけるように力を抜いて走っている。

道を進むごとに腐臭が強くなる。

スコアは道の途中で足を止めた。

「あの、どうしました？」

兵士の一人が声をかけてくる。スコアは建物のあいだの路地を見つめていた。

「戦闘はこの道路の先では？」

「付いてきて」

スコアはそう言って路地へと入っていく。

「あ、あの」

「早く！」

路地へと入っていくスコア、連れの兵士二人も渋々付いてゆく。暗い路地を進むと腐臭は一層強くなっていく。連れの兵士達もその臭いに気づき始めた。

「な、なんだこの臭い……」

臭いはどんどん強くなる。しばらく歩くと、路地を抜け大きなスペースに出た。

星が少ないためほとんど何も見えない。しかし……

「おえっ！　なんだこの臭い」

「鼻が曲がりそうだ……」

二人の兵士は気持ち悪そうに声を出した。

スコアは軍服からマツチを取りだすと火を付けて、近くに投げ捨てた。

落ち葉だまりに投げ捨てたらしく、火はどんどん燃え広がり、辺りを照らす。

連れの兵士の顔色が見る見る青くなっていく。

ここはおそらくは町のごみ捨て場なのだろう。がれきや板切れが所々に散らばっている。その一角に、大量の黒い大きな人形が高く積み上がっていた。百体以上はいるだろうか。

スコアには予想が付いていた。しかしそれでも、顔を歪ませずにはいられない。人形には虫がたかっている。そしてずっと感じていた腐臭はこの人形から漂っていた。

「あ、あの、この人形。まさか……」

連れの兵士の一人がわずかに震えた声で言うと、スコアがそれに答える。

「そう、これは人形じゃない。これは間違いなく、燃やされた死体の山だ」

「で、では、これはいったい何の死体なんですか……」

スコアの表情が険しくなる。

（もしボクの予想通りなら……かなりまずい事態になる）

町の大通り、三人の国軍兵が数十人の町民を先導している。

「ほら、こっちこっち」

本陣に預けるため、大砲部隊を横切ろうとした時だった。町民たちが突然足を止めた。

「おい……？ どうした？ こっちだぞ」

兵士の一人が呼びかけた。その時だった。先頭の中年の女性が歪んだ笑みを見せる。

「我らの命を持って、裏切り者どもに血の制裁を」

その直後、町民と思われていた者全てが、服から爆弾を取り出した。

「なっ……まさか……！？」

辺りに無数の爆音が響き渡った。

その爆音にスコア達も気づいた。

「な、なんだ!？」

「大砲か……?」

連れの兵士二人が声を上げた。

「いや、違う……あの鈍い爆発音は爆弾だ」

スコアはそう言って顔を陰しくする。

(できれば当たってほしくはなかったけど、予想が当たった。住民はすでに全員殺されて、反乱軍のメンバーとすり替わってたんだ……そして今の爆音はルザンヌ軍得意の自爆攻撃の音……おそらく大通りの主力部隊は全滅だ……)

スコアは連れてきた二人の兵士の方を向く。

「ボクは先に戻る。二人もできるだけ早く戻って」

「え……先に戻るって」

兵士二人がキョトンとした声を出した直後、スコアは建物の壁を垂直に駆け上がり、あっという間に建物の屋根へと昇った。そして屋根から屋根へとピョンピョンと飛び移り、あっという間にその場を離れていった。

取り残された二人はポカンとその様子を見ていた。

「すげえ……なんだあの動き……」
「人間じゃねえ……」

西門ではスコアがいた部隊が待機を続けていた。

「小隊長ツ!!」

突然上から呼び声が聞こえた。小隊長が上を見ると屋根の上にスコアが立っていた。

「フオツカー!　なんでそんな所にいる?　他の二人は?」

「そんなことより大変です!」

「なんだと?」

「こんな所で待機している場合ではありません!　今すぐ味方の援護に出て下さい!」

「……!!　何を馬鹿なことを言っている!?」

「いいですか。良く聞いてください。音を聞く限り、東地区と南地区ではかなり激しい戦闘が行われています。そして大通りの主力部隊はほぼ壊滅……。よく考えてみて下さい。敵の対応を見る限り、敵にこちら側の情報が漏れていた。ならば敵はレイド・フェムザムを逃がすことなど簡単にできたはずだ。けれど敵はこちらを待ち構えて攻撃を行っている。その目的はレイド・フェムザムを逃がすことじゃない」

「まさか……」

「はい、敵の目的は、ボくら国軍のせん滅です。もともとリーダーが潜伏しているということは、それを守るだけの武装を整えていたということ。彼らは……この町にボくらを誘いこんで初めから倒す気だったんです。門の封鎖に戦力を割いている場合ではありません。今すぐに動いてください」

「し、しかし……」

「今動かなければ全滅します！ 小隊長達は道路を真っ直ぐ進んで西の部隊と合流して下さい。そしてそのまま東地区の敵を挟み撃つてください。南地区にはボクが行きます」

スコアはそう言うで一足飛びに道路を飛び越えて、向かいの屋根に飛び移った。そしてピョンピョンと南の方へと姿を消した。その様子を兵士達はポカンとして見ている。

「しょ……小隊長……」

一人の兵士が小隊長を見る。

「……くっ」

小隊長は険しい表情で考え込む。

「……動くぞ」

「は……はっ！」

南地区では激しい戦闘が行われていた。

数十人の剣兵部隊が、建物の屋上からの反乱軍の銃撃に襲われている。

「くっ……ひるむ！ 建物に昇って仕留めろ！」

「だ……ダメです。攻撃が激しすぎて……うわぁ！」

激しい銃撃を前に剣兵達は次々と倒れていく。

「クソオ……ここまでか……」

小隊長がそう言ってうつむいた直後だった。
銃撃がピタリと止んだ。

「……？ な、なんだ」

すると上からスコアが降ってきた。

「う、うわっ」

「銃兵は全て仕留めました。他の主力は？」

スコアはそう言って小隊長を真っ直ぐ見つめる。

「え……あ……正面に大砲が二門……それと十数人の剣を持った者

が……」

スコアは正面を見た。二門の大砲と、複数の人影が見える。

「あれか……」

スコアはすぐさま一人で突進する。

「な、なんだ!？」

反乱兵が気付き驚く。反乱兵達の正面、スコアが恐ろしいほどの速度で迫ってくる。

「バカ、早く撃て」

「せ、急かすなよ」

ドンッ！ ドンッ！

すぐさま二発の砲撃がスコアに向けて飛ぶ。

ドーンドーンッ!!

スコアのいた辺りが爆炎に包まれる。

「はっ……ざまーみろ」

しかし黒煙からスコアが飛び出してくる。

「えっ!？」

スコアは一瞬で間合いを詰めた。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

大砲回りにいた反乱兵達は一瞬で斬り伏せられた。

「な、なんだ！」

すぐさま十数人の剣を持った反乱兵が身構えるが、

ヒュッ

スコアは一瞬でその集団を横切った、と同時に、無数の血しぶきが舞い散り、十数人の反乱兵は地面へと倒れ伏した。

スコアは静かに息を吐く。

「……ここはもう大丈夫だろう。次は東地区だ」

スコアはまた建物の屋上へと駆け上がった。

東地区、そこでも激しい戦闘が繰り広げられていた。無数の爆音と銃声が響き渡る道路。

「ひるむなッ！ 撃て撃て」

命令を出す東地区の小隊長。

「すみません」

突然頭上から声がした。

「……！」

小隊長は驚いて顔を上げると、建物の屋上からスコアが見下している。

「この戦況は？」

「ん……？ ああ、西地区の部隊と挟み撃ってからはこちらが有利に運んでいる」

「そうですか。良かった……そうだ、レイド・フェムザムの姿は？」

「いや、こちらでは確認できない」

「……そうですか」

（ここにもレイド・フェムザムの姿はないか……ならどこにいる？
恐らく彼のいる部隊が主力……ならどこに……まてよ！）

スコアはハッとした。そして北の方角を見る。

（北の本陣か！！）

スコアは再び道路を飛び越えると、屋根から屋根へ飛び移りながら北へと姿を消した。

それを小隊長は呆然と見ていた。

「なんだったんだ……？ アレは……」

北地区の大通り。

国軍主力部隊は全滅し、本陣は反乱軍の激しい砲撃を受けていた。

「くそおつ！ なんとか持ち堪えるんだ……！」

司令官は険しい表情で周りに命令する。辺りには次々と爆炎が上がる。

「し、しかし、この砲撃では……引いた方が……」

「馬鹿者ッ！！ 我らがいなくなったら他の部隊はどうなる……！」

司令官が怒鳴った、その直後、

ドーンドーンドーンッ！！

本陣前方に再び爆炎が上がる。

「くっ……！！」

（クソ……大砲部隊は全滅して、銃兵ももう少ない……どうすれば……）

すると砲撃が突然ピタリと止んだ。

「……？ な、なんだ、どうした？」

「分かりません、急に敵が砲撃をやめて……」

その時だった。突然路地から剣を持った反乱兵達がワラワラと出てきた。

「……くっ、直接潰しにきたか。返り討ちにしろッ!!」

国軍と反乱軍の剣がぶつかり合う。国軍の剣兵は次々と反乱兵を斬り伏せていく。

「ふん……同じ武器で遅れをとると思うなよ」

司令官が余裕の表情を浮かべた、その時だった。

「ぐあっ!!」

「がっ!!」

血しぶきと共に二人の剣兵が地面に倒れ伏す。

「なんだ……!？」

司令官がその方向を見ると、剣を持った大柄の男が立っていた。三十代後半で赤い髪、鋭い目、野獣のように荒々しい気迫を放っていた。

「れ、レイド・フェムザム」

レイドは司令官をギロリとにらむ。

「さあ、終わりにしようじゃないか。国軍のクズ共」

「くっ……ノコノコ現れおって、やれっ！ 仕留めろ！」

数人の剣兵達がレイドに斬りかかる。しかし、

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

レイドの斬撃の嵐と共に、無数の血しぶきが上がり、剣兵達の体が吹き飛ばされる。

「な……馬鹿な……」

驚く司令官をレイドがにらむ。

「キサマが頭か……」

レイドは司令官に向かって突進してくる。

「う……！」

司令官の表情に恐怖が走る。

途中、剣兵がレイドの前に立ち塞がるが、あっさりと斬り伏せられていく。

レイドはついに司令官の目の前に立つ。

「さあ……血の制裁を受けろ！」

「う……うわぁー！」

レイドが剣を振り上げたその瞬間、

ヒュッ

風の如くスコアが現れ、二人の間に立った。

その姿を見た途端、レイドの目の色が変わる。

「白い髪の少年剣士……まさか、スコア・ファイ……」

ヒュンッ！

スコアの剣は一瞬でレイドの体を切り裂いた。

レイドの体はグラッと傾き、大きな音を立て地面に倒れ込んだ。

「大丈夫ですか。司令」

「えっ！？ あ……ああ」

司令官はポカンとしている。

「お……のれ……国軍め……」

足元から声がした。見るとレイドがスコアをにらみつけている。体からは大量の血が流れ出ている。

「これ……ほどの力がありながら、なぜ分からん……」

レイドは息を乱しながら声を漏らす。

「……何かを変えるには、犠牲を払わねばならん……犠牲を払わねば、何も変わらん……守るだけでは……何も為せない」

その言葉を聞いてスコアはレイドを見つめる。

「何も守ろうとしない者に、何かを変える資格はない」

「……………ガキが」

レイドは静かに息絶えた。
その後、

ドォーンドォーンドォーン

再び砲撃が襲ってきた。
司令官が険しい顔をする。

「くうう、頭が潰れたのが分からんか……これだから烏合の衆は……」

「ボクが止めを刺してきます」

スコアはそう言つて大砲部隊に向かって駆けだす。無数の砲撃が飛ぶが、スコアはそれをあっさりとかわす。

スコアはあっという間に間合いを詰めた。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

大砲周りの反乱兵達はあっさりと斬り伏せられた。

すると辺りが急に静かになった。
敵の気配はもうない。

スコアはそれを感じて、小さく息を吐いた。
スコアは耳を澄ました。

戦闘の音はもうどこにも聞こえない。

（終わった……）

スコアは静かにそれを悟った。
ゆっくりと本陣に向かって大通りを歩くスコア。なんとなく大通りの横道に目を向けた。その時、スコアの目にあるものが映った。道路に立っている一本の木、それが燃えていた。おそらく爆炎の火が燃え移ったのだろう。

「……！」

スコアはとつさに足を止めた。
その燃える木を誰かが見つめている。後ろ姿だが、おそらくは少女だ。布切れのような服を着ている。

（……………まさか、町民の生き残り？）

しかし、それ以外でもスコアの心には何かが引つ掛かる。その少女の後ろ姿……。

スコアはその少女に近づく。

少女は黒い髪をしていた。

スコアの足音を聞いて、少女はゆっくりと振り向く。

その少女の顔を見た瞬間、スコアはその場で凍りついた。

少女の眼には真紅の瞳が浮かんでいた。

(クロコ……!?)

3 - 14 二人の將軍

「いつになったら次の戦闘が始まるんだ？」

クロコがクラット基地の廊下を歩きながら言った。
それにフロウが答える。

「さあね、敵は前回の戦いでグラン・マルキノを五台も失う大損失を負ったからね。戦力の集結を待ってるんじゃないかな？」

フロウの隣でクレイドが口を開く。

「とはいえこつちもだいたい戦力が集まってきたからな。そろそろ攻めに転じてもいい頃だ」

「そうですね」

サキがうなずく。

「敵戦力もそろそろ集結し始める頃ですし、こちらの戦力も整ってきました。もう、いつ戦闘が始まってもおかしくない状況です」

「だね、とはいえ、戦闘が始まれば厳しい戦いになるは間違いない。フィンディ・レアーズも負傷で戦線離脱だし」

それを聞いてクレイドが口を開く。

「まあ、なんだかんだで奴の活躍はデカイからな」

その言葉を聞いたクロコは少しだけ複雑な心境だった。

一方、クラット基地よりはるか南東の国軍シャルロット基地、その司令室。

部屋の隅の棚の上には無数の手持ち時計が飾られ、窓側に置かれた幅の広い机にはラティル大佐が腰かけている。その正面には厚い眼鏡をかけたスコアが立っていた。

「ご苦労だったね。スコア」

「はっ」

スコアは敬礼する。

「君が帰還する少し前に、手紙鳥が飛んできてね。報告を見たよ。流石というべきか、今回もだいぶ活躍したそうだね」

「……………」

「報告書の内容で私が一番気に入ったのは、司令官のベスト少佐の、アルト・フォッカーとは何者なのですか？ という個人的な質問の箇所だな」

ラティル大佐はそう言って笑う。

「今回の活躍はこんな時期でなければ勲章ものだったが、仕方がないか……それにフォッカー軍曹も身に覚えのない勲章をもらっても戸惑っただけだからね。まあ、それはそれで面白いが」

「……………」

「……………どうした？ スコア」

「えっ！？ あ、はい、も、申し訳ありません……………」

「どうしたスコア、君がボーツとするなんて……………いつものことだが、今回はさらにひどいな。悩み事かね？」

「えっ！？ あっあっ、そ、そんなことはありません。べつ、別に何も……………」

「そうかね、ならいいんだ。話はこれだけだ。君もずいぶん疲れているだろうからゆっくり休みといい」

「は……………ハッ、それでは失礼いたします」

そう言つてスコアは早足で部屋から出ていった。
ラティルはその姿を見送ると、イスに寄り掛かった。

「何か気になることがあるようだな。やれやれ、彼も分かりやすいな」

スコアは基地の廊下を早足で歩く。

そして武器庫の大部屋の前まで行くと、神経を研ぎ澄ます。

（周りには……誰もいないな）

スコアはソーツと武器庫の中へと入っていく。

中は薄暗かった。明かりは小さな木窓から漏れ出すわずかな光のみだ。部屋には無数の剣や銃、そして大砲が所狭しと置かれている。

スコアはその狭い足場をゆっくりと進む。

少し奥まで進むと足を止めた。

「ボクだ！　ボクが来たよ！　どこにいるんだ！？」

スコアの声が響いたあと、辺りは再びシーンと静まり返る。

再び声を響かせるスコア。

「その……大丈夫だから！　出てきてよ！」

すると、大砲の裏からヒョコツと少女が一人顔を出した。黒い髪の真紅の瞳の少女。布切れのような服をまとっている。

スコアはその少女の顔を改めて見て息をのむ。

（やっぱり似てる……似すぎてる……クロコとうりふたつだ……）

クロコと全く同じ顔をした少女、しかしまとう雰囲気は違う、クロコの威圧的な雰囲気に対して、少女は静かでひっそりとした雰囲気を持っている。

スコアが少女の顔を見ていると、少女が突然口を開く。

「あなた……」

「えっ!？」

「あなた、どうしてわたしをここに連れてきたの？」

その言葉を聞いてスコアの顔が青くなる。そして少女に背中を向けると、頭から壁にもたれかかる。

（本当だよっ!？ 何してるんだボクは！ いくら町がなくなっても住む場所が消えたからって……!! それにクロコとうりふたつだからって……つつって、なにが“それに”だよ！ そんなの全然理由にならないじゃないか!! あーもう！ ボクは何をやってるんだ!! 軍に内緒でこんなこと……バレたら大変なことに……）

「ねえ……」

「えっえっ!？ なに？」

少女の声にスコアは急いで振り返る。

「なにしてるの？」

「あ……ごめん」

「……………」

少女は黙り、スコアの方をジーツと見ている。
スコアも少女の方を見る。

（彼女は…… 服装を見る限り、多分奴隷だ…… 国軍の奴隷に対して行った処置の話もあるし、このまま放り出すわけにはいかない…… けどどうしよう）

しばらく沈黙が続く。

「えっ、えーと…… そうだ、きみの名前は？ まだ聞いてなかったね」

「…………… レイア」

「そうか、レイアっていうんだ。 …… えーと、それだけ？」

「うん」

（姓は無いのか……）

「ボクはスコア・フィードウッド。よろしくね」

スコアはそう言って笑顔を見せる。

「……………」

対してレイアは無愛想に表情ひとつ変えない。
その様子にスコアは少し困る。

「えーと、きみは…… その……」

スコアはもう一度レイアの服装を見る。

「奴隷……なのかな？」

「うん……そう」

「そうか……じゃあ、どうしてきみはあんな所にいたの？」

スコアは床に腰を下ろす。レイアも床に座り込んだ。

「……………ルザン又軍が町に来て、町の人を捕え出した。それがこわくて、わたしはタルの中に隠れた。町の人殺されて、燃やされた後も、ずっと隠れてた。本当は町から逃げ出したかったけど、見張りが多くて、食べ物をつつそり盗むのが精いっぱいだった。そのうち、あちこちから火の手が上がってびっくりして……」

「外に飛び出したところにボクと出会ったってわけか」

「うん」

「そうか……………」

「ねえ」

「なに？」

「なんだわたしを助けたの？」

「えっ！？ それは……………」

（それは……………彼女をあのまま放置するわけにもいかないし、国軍に

預けても何をされるか……だけど……本当にそれだけなのか？　くそっ！　分からない……自分で分からないことをどう言えば……」

「わたしのこと、好きになっちゃった？」

レイアは表情を変えずにそう言った。それを聞いてスコアは驚いて顔を赤くする。

「な……何を言って……」

スコアは混乱して言葉に詰まる。するとレイアは急に立ち上がり、背中を向ける。そしてゆっくりと自分の体にまとっている布をつかむ。

「……えっ!？」

スコアは驚いて立ち上がる。レイアは服を脱ぎ出した。

「なっ!？　なっ!？　何をやって……」

その様子スコアはますます混乱する。レイアは服をきれいに脱いだ。その瞬間、スコアは息をのんだ。

レイアは背中を向けたまま脱いだ服を自分の隣に置く。

スコアはレイアの背中を見つめたまま、固まった。

レイアの背中には……大きな傷跡があった、体全体をえぐるような生々しい切り傷の跡だ。そしてその傷の周りを覆うように背中全体にやけどの跡が広がっている。見るに堪えないほど、ひどくただれたやけどの跡だ。さらにその周りを小さな切り傷やあざが囲んでいた。

レイアはスコアに顔だけを向け、静かに笑いかけた。

「わたしを襲おうとする人達はね……この傷を見たらみんな逃げていくの……………」

笑いかけるレイアの瞳の奥には深い絶望が垣間見えた。
部屋に長い静寂が流れる。

一粒の涙が床にこぼれ落ちた。
スコアの目から涙がこぼれ落ちる。
レイアはそれを見て驚く。予想外の反応だったのだろう。

「どうして…………泣いているの？」

スコアの目からはポロポロと涙がこぼれ落ちていた。泣きながら
スコアは震える声を出す。

「どうして…………だろうね。どうして…………でも、ひど過ぎるよ。こんな…………誰が…………こんな……………」

途切れ途切れの言葉を出しながら、スコアは手で涙をぬぐう。しかし目からは次々と涙があふれ出す。

レイアはそれを不思議そうな様子で見っていた。
前に向き直り、小さくうつむくレイア。

「変な人……………」

クロコとフロウとクレイドとサキの四人は基地内のテラスから広間を見下していた。

新たな援軍が到着したようだ。兵士の隊列が広間を埋め尽くしている。

クロコが口を開く。

「ずいぶん集まってきたな」

「そうだな、戦闘間近ってトコか」

「そうだね……あっ！」

フロウは急に何かを思い出したように声を上げる。それにクレイドが反応する。

「どうした？」

「……そうだ、次の戦闘が始まる前に、みんなに忠告しなきゃならないことがあったんだ」

「なんだ？」

「僕らが前に戦った相手のことを覚えてるか？」

その言葉を聞いてクレイドは少し考える。

「大きな斧を持ったやつか？ それとも剣士の方か？」

「大きな斧を持った方さ」

「あいつか……あいつがどうしたんだ」

「彼の名はフレア・フォールクロス。彼には特に注意した方がいい……」

「それは戦ったから十分わかるぜ。確かに相当強えーな」

「それだけじゃないんだ。みんなよく聞いて」

フロウは三人の顔を見る。

「彼は、噂によると一騎討ちに相当強いって話だ」

「対複数戦じゃなくて、対個人戦に強いってことか？」

「まあ、そういうことだね。それで噂によれば、彼の戦場での対個人戦での戦歴は三十戦以上して無敗らしい……」

「無敗……」

「うん……そしてこれから先の話が重要だ、よく聞いて」

フロウは三人を真剣な顔で見つめる。

「噂によれば、彼は戦場での一対一での勝負が無敗であると同時に、彼と一対一で戦った相手は全て、戦死してるらしい」

「全て戦死……！？」

クロコが声を漏らした。

「だ、だけど、あくまでも噂なんですよね」

「それはそうさ、なぜなら彼と一対一の勝負をした相手はみんな死んでる、つまり生き証人が存在しないんだからね」

それを聞いてサキは息をのむ。

「武器の形状と相まって、ついた異名は『死神』……いいかい、間違っても彼と一対一の戦いを挑んじゃいけない。みんな、これだけは覚えておいて」

その言葉を三人は静かに聞き入れた。

その時だった。

「やあ」

誰かが四人に向けて声をかけてきた。

クロコは声の方向を向く、そして驚いた。

そこには白い長い髪を後ろで結んだ長身の男が立っていた。

「アールスロウ！　なんでアンタがココに」

アールスロウはいつもの冷たい目つきでクロコを見る。

「フルスロツクの援軍の第三便だ。フルスロツクの主戦力はほとんどがここに集まる予定だからな」

「って言っても、アンタは副司令だろ。どうせ司令部に座ってるだ

「けだろ」

「ならば、わざわざこんな所に足を運ぶわけがないだろう。俺も戦闘に参加する予定だ」

「アンタも……」

アールスロウはサキの方に目を向けた。

「久しぶりだな。サキ」

「はい……お久しぶりです。クラット基地への異動の件、あの時はありがとうございます」

「ああ、元気そうだなによりだ。さて、俺は司令室に用があるんだ。これで失礼させてもらう」

そう言つてアールスロウは去つていった。
それを見送つてフロウが口を開く。

「アールスロウさんも今回は参加するんだね。フィンディ・レアーズが抜けた今の状況を考えると、心強いね」

「つつても、アールスロウさんに頼り切つてもダメだけだな」

「そうですね。ボクらもボクらでガンバらないと!」

「ふん……オレだつて、アイツなんかには負けてねえよ」

クロコがブスツとした態度で言つた。それにクレイドが反応する。

「ん……？ おまえ、アールスロウさんに勝ったことあるのか？」

「うるせーっ！！」

クラット基地より東に位置する国軍本陣、その中央に位置する司令部テント。

そのこのイスにラズアーム少将は座っていた。

「さて……戦力もだいぶ整ってきたな」

向かいに座る若い副官がうなづく。

「はい、現在の戦力は１０００００。そろそろ動きだしてもよろしいかと」

その時だった。テントの入り口が突然開かれ、二人の軍人が入ってくる。

その姿を見た途端、副官は急いで立ち上がり敬礼する。ラズアームも驚き、遅れて立ちあがり敬礼する。

ロストブルー中将与ライトシュタイン中將が中へと入ってきた。ラズアームは驚いた様子だ。

「な、なぜ御二人がここに……」

それを聞いてロストブルーがほえむ。

「元帥からの要請があつてね。軍が本腰を入れている時に、我々だけがくつろいでいるわけにもいかないだろう?」

「しかし、『七本柱』の中であなたが動くとは……」

「さて、実際に私が戦線に立つがどうかは、相手の対応次第にしているんだがね」

ロストブルーはそう言ってほえむ。するとライトシュタインが無機質な目でラズアームを見る。

「今の戦況はどうなっている? ここには到着したばかりで把握していないのだが」

「はっ! すぐに……」

ラズアームと副官は二人に今までの経過を説明した。

説明が終わるとライトシュタインが小さくため息をついた。

「前回の戦闘は見事なまでの大敗だな」

その言葉にラズアームは苦い顔をする。

「しかし、敵がまさかあのような兵器を持っているなど……予想外でした。事前にあの情報を得ていれば、こんな結果などに……」

「違うな」

ライトシュタインはそう言って机に広げられた地図を指さす。

「この地図をよく見る」

ライトシュタインはクラット基地の周りの地形を指でなぞる。

「クラット基地は丘の上に建っているため、正面に対しての守りが堅い。だからこそその半面、横や後ろに回り込まれる危険性ははらんでいる。そのため敵は警戒網を横に広く張っている可能性が非常に高い。よってグラン・マルキノをどれだけ大回りさせたところで、敵司令部が事前にその存在に気づくことは容易に予想できる。それでも敵がそれに対して何の防衛処置を取らなかったということは…」

ライトシュタインは軽く地図を叩いた。

「敵はグラン・マルキノを誘い込んでいたということだ」

それを聞いてラズアームの顔が険しくなる。

ライトシュタインはラズアームの顔が無機質な目で見つめる。

「だからこそ、グラン・マルキノに対して何の守りも見られなかった時点で、グラン・マルキノをそれ以上前進させるべきではなかった。それを君は、作戦として事前に乗組員に伝えておくべきだったんだ。この大敗の原因は敵が新兵器を持っていたか否かではない。君の単純な作戦ミスだ」

それを聞いてラズアームの表情が一気に険しくなる。

「……………」

黙り込むラズアーム。

「事前作戦に関しては、これからは私が仕切ろう」

ライトシュタインのその言葉を聞いて、ラズアームは黙ってうつむいた。

作戦会議終了後、ライトシュタインはテントの外に出て空を見つめた。

長い雲が浮いている。

するとロストブルーが隣に立った。

「ずいぶんきつく言われましたね」

「そうかね」

「ラズアーム少将が少し険しい表情をしていたのでね。実際あれほどの読みが出来る司令官はほとんどいないでしょう。あのような言い方、あなたらしくないと思いましてね」

「彼とは一度戦場を共にしているが、彼はプライドが高い。ああでも言わないと途中参加を理由に主導権を譲らないだろうからね」

「それですか……しかし、彼には恨まれるかもしれませんね」

「構わんよ。それで勝てればな」

「しかし彼はフィンディ・レアーズとの闘いだけは譲りませんでしたね」

「そうだな。何か理由があるのだろう。あの気合を削ぐ必要はないし、やらせても問題はないだろう。それより君はどうする?」

「私も戦場には出ますよ。戦線に立つかどうかはともかくとしてね」

「ふむ……そうか」

「あなたは当然、指揮をとるのでしょうか?」

その言葉を聞いてライトシュタインはまた空を見つめた。

「ああ、そのつもりだ」

クラット基地の司令官室、そこにはロイム司令官と五、六人の幹部が集まって作戦会議が開かれていた。その中にはアールスロウの姿もある。

ロイム司令官が口を開く。

「さて諸君」

ロイム司令官の目が鋭くなる。

「いよいよ攻めに転ずる時だ」

セウスノール解放軍はついに動き出した。

およそ80000の軍勢が大草原を行進する。解放軍は真っ直ぐに敵の本陣へと向かう。

一方、クラウド国軍本陣。

「ライトシュタイン將軍！ 敵が動き出しました」

「ああ、予想通りだな……あれの準備は整ったのか？」

「はい……言われたとおり全て使用しています。しかし、大丈夫なのですか……？」

「構わんよ。さて、あとは陣形内の情報線がどれほど整っているかな。命令通りに動かなければやりづらい」

「あなたにとってはそれさえ出来れば……と言ったところですね」
隣に立っていたロストブルーがほほえむ。

「ああ」

「今回の主力は『死神』だけです。ラズアーム將軍はフィンディが出撃しない可能性を理由に出撃を断りましたね」

「別に構わんよ。私は別に主力を主体にして攻めるやり方はしないからな」

「そうですか。それでは楽しみにしますよ。『戦場の魔術師』のその実力を」

解放軍は大草原の道を行進し続ける。

その中を歩くアールスロウは前方を見つめる。

（遅いな……もう敵の姿が見えてもいい頃だが、まだその姿は見えない……。対応にてこずっているのか、それとも、敵の作戦か？）

一方、国軍本陣の少し西、クラウド国軍の80000の軍勢が草原に広がっていた。

その中でライトシュタインは馬にまたがり前方を静かに見下ろしている。

「あの……將軍」

隣にいる隊長が声をかけた。

「なんだ？」

「なぜ動き出さないのですか？　そろそろ……いえ、とつくに動き出してもよろしいかと……」

「ふむ」

ライトシュタインは手持ち時計をのぞく。

「ああ、時間だ」

クラウド国軍も動き出した。

80000の軍勢が横に広がりながらゆっくりと行進する。

一方、セウスノール解放軍は行進を続けていた。

「おかしいな……」

クロコの隣でフロウがそう言った。反応するクロコ。

「何がだ？」

「もう敵の姿が見えてもいい頃だ。でも敵が全く出てこない」

「陣形組むのに手こすってるんじゃないのか？　すごい人数で動いてるし」

「それにしたって遅いよ。少し不気味だな……」

それから間もなくだった。前方にクラウド国軍が姿を現した。

それに合わせ、解放軍も陣形を横へと広げる。

クロコはフロウと共に陣形の右翼に立った。

「オレ達は右翼か……」

「うん、それで左翼にはクレイドとサキ君。今回はちゃんとバラけたね。アールスロウさんが上の方に言ってくれたみたいだ」

「でもなんで、アールスロウが中央なんだよ」

「まあ実力的にはそうだろうね」

「オレだって負けてねーよ」

「うん、さあ気を引き締めて！」

解放軍中央ではアールスロウが剣を抜く。長剣をゆっくりと構える。

パンッ！

信号銃の合図と共に解放軍の軍勢が動き出した。

それと共に国軍の軍勢も動く。

大草原を揺らし、横に広がった巨大な軍勢同士がぶつかり合う。

数え切れないほどの剣が音を立ててぶつかり合う。

解放軍の中央ではアールスロウが剣を振るう。

ヒュウンヒュウンヒュウンッ！！

アールスロウの洗練された動きにより、長剣は美しく弧を描きながら、敵を次々と斬り伏せる。

アールスロウは前進し、敵の陣形を切り崩しにかかる。

左翼ではクレイドが巨大な剣を振り回す。敵が次々と吹き飛ばされていく。

その隣ではサキが剣を振るいクレイドをフォローする。

右翼ではクロコとフロウがスピードにものをいわせ次から次へと敵を斬り伏せていく。

右翼の別の場所、フレアが辺りを見渡す。

「うーん、クロコはどこだ？」

すると隣でコールが口を開く。

「これだけ大規模になると見つけるのは難しそう。あとは運を天に任せるしかないよ」

「やれやれ、しょうがないな……それじゃあッ!!」

ギュオンッ!!

フレアは巨大な斧を大きく振り抜いた。五、六人の解放軍兵が宙を舞う。

「とにかく暴れますか!!」

巨大な掛け声と爆音が響き続ける戦場。

国軍陣形の中心付近、ライトシュタインは静かに戦場を見下ろしていた。

ほぼ互角のせめぎ合いだ。

「ふむ……押し切れないな。軍の質ならばこちらの方が上回っているはずなのだが」

ライトシュタインは鞘に納まった剣の柄を、指とトンツと叩く。

「どうやら流れを作っている兵士がいるようだな」

ライトシュタインは信号銃を手を取った。

パンパンパンパンッ！！

その合図は巨大な軍勢に次から次へと伝達し、国軍全体がゆつくりと後退し始める。

「ふむ……情報線は問題なしか」

敵の後退に対し、解放軍の指揮官が声を上げる。

「逃がすなーッ！！ 追撃！」

後退していく国軍に対し、解放軍は前進して国軍を攻撃する。

国軍はそれに応戦しながらも、ゆつくりと後退していく。

しばらくの間、その攻防が続いた。

戦場はどんどん敵本陣へと近付いていった。

アールスロウは戦いながらもその状況に眉を寄せる。

（何を考えている……。本陣に近づかれることは敵側としては本意ではないはず……。作戦か？ しかし何のために？ 敵の真意が読めない……）

後退しながら戦う国軍は、少しずつだが解放軍に押され始める。

しかしそんな中、状況に変化が生じる。

解放軍の前方、国軍の背中越しに広がる草原、そのさらに先には歪んだ地形が広がっていた。大きくくぼんだ斜面が広がる地形。なだらかな連続した丘が広がっている。

アールスロウはそれを見てハツとした。

（そうか……敵の狙いは……）

国軍陣形の中心付近、ライトシュタインは剣の柄を再び指でトンツと叩いた。

「さあ、知恵比べといこうか」

連続したなだらかの丘、国軍はそこをしばらく後退しながら進んだあと、足を止めた。

直後、国軍から解放軍の前衛全体に向けて無数の砲撃が飛ぶ。

ドンッドンッドンッドンッドンッ！！！！

解放軍がその砲撃にわずかにひるんだ直後、国軍陣形両翼の一部が切り取られて動いた。

解放軍の陣形の横へと滑りこみ、解放軍を包むように展開する。

その国軍の動きを見てアールスロウは表情を険しくする。

（やはりそうか。この複雑な地形は、互いの指揮官にとって状況の把握を困難にする。敵の指揮官は……戦術による勝負を仕掛けて来ている）

国軍の動きに解放軍の指揮官が反応する。

「敵はこちらを囲もうとしているぞ！ 後退しろ！」

解放軍は後退を始める。

それを見つめるライトシュタイン。

「そうはさせない。部隊をさらに切り取り囲め」

国軍は両翼の部隊をさらに切り取り、陣形全体を薄く伸ばし、後退する解放軍陣形の横にぴったりと張り付く。

「そう来たか……ならば薄くなった敵陣の分断を狙え！ 砲撃を集中させる」

解放軍は国軍の陣形の薄くなった部分に砲撃を集中させた。

「甘いな……中央軍勢、両翼へと広がれ」

それに対し、国軍は中央後衛の兵力を両翼へと回して薄くなった部分を補強した。

「むう……くっ！ 下がれ、後退だ」

解放軍は分断が難しくなったと判断するとすぐに後退をしようとする、しかし……

「もう遅い……両翼、敵陣背後へと回りこめ」

国軍の陣形はさらに広がり、解放軍陣の背後へと回り込む。それにより解放軍の両翼は完全に囲まれ、動きが封じられた。

解放軍の指揮官は表情を険しくする。

「……！！ 両翼が後退できない……しかしこのままでは敵に囲まれてしまう……くっ、仕方がない、中央だけでも後退するんだ！！」

解放軍陣形がねじれるように変化して、中央だけが後退していく。

その動きを見てアールスロウが思わず声を上げる。

「ダメだっ！ このタイミングで後退したら……」

ライトシュタインが指示を出す。

「中央前進」

国軍の中央が前進する。それと共に解放軍の置いていかれた両翼がきれいに分断されていく。

ライトシュタインが再び指示を出す。

「砲撃」

解放軍の分断された両翼、そこを四方八方から国軍の砲撃が狙い撃つ。

戦場に解放軍兵の悲鳴がこだまする。

クロコ達がいる場所も大量の爆炎が上がる。

「クソッ！　どうなってるんだ。回りが国軍兵だらけだぞ」

クレイド達のいる場所にも大量の砲弾の雨が襲う。

「チッ、これはヤバいな……」

その様子を解放軍の指揮官は呆然と見る。

「な……なんてことだ」

アールスロウは味方の兵士をかき分け、解放軍陣の中心付近まで移動した。そして指揮官の前に立つ。

「指揮を代われ。敵の指揮官はかなりの腕を持っている」

指揮官はそれを聞いて驚く。

「し、しかし……」

「君の次の作戦はこうだろう、両翼を囲む敵の突破を図り、両翼との合流を図る」

それを聞いて指揮官がさらに驚く。完全に言い当てられた顔だ。

「しかし、それをすれば、今度は陣形全体がきれいに囲まれる。指揮を代われ」

「ですが……ここの地形は我々の基地の者でないと……」

「基地に着く前にここの地形は全て細かく記憶している。早く代われ、敵が動き出すぞ」

「は……はっ！」

アールスロウは信号銃を鳴らした。

「これより指揮は私がとる。全軍後退！ 仲間を助けたければ一度後退するんだ！」

解放軍中央は分断された両翼を置き去りにして、さらに後退する。それを見つめるライトシュタイン。

「後退したか……いい判断だ」

「陣形を横に広げる！」

後退した解放軍は陣形を横へと広げる。

「そう来たか……」

「前進！ 分断された部隊とこちらで敵を挟め！」

横へ広がった解放軍はそのまま前進し、囲まれている味方の部隊を利用して、敵の陣形を挟み撃ちにした。

その様子を静かに見下ろすライトシュタイン。

「ふむ……指揮のタイミングが早くなった。指揮官を変えたな。おそらく若い指揮官だ……それに先ほどの指揮官より有能なようだ」

国軍は挟み撃ちによる攻撃を受けて、徐々に分断されていく。それにより、一時は完全に分断されていた解放軍の部隊が再び合流していく。

それをライトシュタインは表情一つ変えずに見つめていた。

「さて、このタイミングだな」

突如、解放軍陣の左右から二つの国軍部隊が現れ、挟み撃つてくる。

驚くアールスロウ。

「なに……！？ 一体どこから……」

「味方に目がいきすぎだ。こんなことは丘の死角を使えば容易だ」
解放軍の両翼が再び囲まれていく。

「くっ……！」

わずかに表情を陰しくするアールスロウ。
ライトシュタインはなおも表情を変えずに戦場を見下ろす。

「さて……前進するか、後退するか選択肢は二つ……」

「前進だ！」

解放軍は前進しながら国軍に攻撃を仕掛ける。

「やはり前進したか……それでは陣形全体を囲ませてもらう」

解放軍の前進に合わせ、国軍の陣形は解放軍の陣形全体を囲んだ。しかしアールスロウは動じない。

「戦力を中央前衛に集中、指揮官を……頭を潰す！」

解放軍は砲火を国軍の中央に集中させた。

「……頭を潰しに来たか」

砲火の集中により、国軍の中央が徐々に分断されていく。それに
対し、国軍は動かない。

その様子を見つめるアールスロウ。

「中央をここまで集中して狙われれば、そうそう指揮は取れないだ
ろう」

国軍をかき分け前進する解放軍中央。国軍中央はついに分断され
た。

「よし、これで指揮系統を麻痺させた」

そんな中、ライトシュタインは静かに戦況を見つめていた。

「いい選択だ。この状況下では最善の手と言えるだろう。もっとも
相手が私以外ならな」

分断された国軍中央が素早く左右へと散っていく。
その不可思議な動きに驚くアールスロウ。

「……！　なんだ、この動きは。何が狙いだ……？」

戦場の中央へと置いていかれた解放軍中央を、国軍左翼からライトシュタインが見つめていた。

「敵の狙いが分からない、だから混乱する。守るべきか……攻めるべきか……」

アールスロウは振り返り、背後の敵陣を見つめる。

「守りに入るな！　向きを変えて攻撃」

「しかし、そんなことはもう関係ない」

ライトシュタインは信号銃を鳴らす。

パンパンパンパンッ！！

国軍兵が二人、解放軍中央を左右に挟む形で立っていた。その二人が地面から飛び出している何かの栓を同時に引き抜いた。その瞬間だった。

ドオオオオオオオオオンッッ！！！！

軍勢の中央から突然、大爆発が起きた。広範囲の巨大な爆発は解放軍の陣形中央の大部分を飲み込んだ。

10000近くの解放軍兵の姿が爆発の中へと消える。

「な、なんだ！」

クロコは驚く、中央にいた味方達がすつぱりと爆発の中へと消えていった。

「そ……そんな……！」

隣のフロウも驚き、立ち尽くす。

アールスロウはその爆発を正面から見つめながら呆然とする。

「仕掛け爆弾だと……！？ しかもこんなに広範囲で……友軍を巻き込まずにこちらだけを完璧な形で……そんなこと……こちらの手を読み切っていなければ不可能だ……読み切っていたというのか……こちらの手を……」

爆炎がおさまったあともアールスロウは呆然としていた。

「勝てる気が……しない……。まさか、相手は『戦場の魔術師』ザベル・ライトシュタイン……？」

「さて、陣形をきれいに囲ませてもらおうか」

爆炎がおさまると左右に散っていた国軍の隊は、解放軍兵の死体の山を踏みわけ、中央へ戻ってきた。

それにより、国軍は解放軍全体を完全に囲んだ。

その状況にクロコが焦る。

「おい、フロウ！ これってまずいんじゃないのか!？」

「まずいなんてモンじゃないよ！ 囲まれてる上に退路を断たれてるんだよー！」

そんな二人の周辺を国軍の無数の砲撃が襲う。所々から爆炎が上がる。

「くっ……どうすればいいんだよ、クソッ！」

その最悪な状況の中、アールスロウは完全に固まっていた。

（どうすればいい……？ どう動けば……）

「もうどう動いても手遅れだよ。君達はここで全滅だ」

ライトシュタインは表情一つ変えずに囲まれた解放軍を見つめていた。

その時だった。

戦場から少し離れた場所、解放軍右翼側に位置するなだらかな丘の死角から、数千の大部隊が飛び出してきた。解放軍の隊だ。

アールスロウはすぐさまその方角を見つめる。

「あれは……援軍か……！！」

ライトシュタインもその方角を見つめる。

「やれやれ、敵の援軍か……」

アールスロウの目に再び光が宿る。

「あの援軍をうまく利用できれば……」

「まあ、援軍が現れるとすれば、あの場所からだろうな」

ドオオオオオオンッッ！

援軍を広範囲に広がる爆発が包み込んだ。援軍は爆炎の中へと消えていった。

ライトシュタインはそれを何事もなかったかのように見つめている。

「これで爆弾はきれいに使い切ったな。しかし構わないだろう。なぜならこれで決着がつくのだからな」

アールスロウはその場に膝をつきそうだった。
最後の希望が消えてゆく……

その時だった。

炎の中から一人の剣士が飛び出して来る。

疾風の如き速さで真っ直ぐと戦場へと向かって来る。

黒い髪がゆれる。左手には巨大な黒剣が握りしめられていた。

ライトシュタインはその姿を見た瞬間、表情をわずかに険しくする。

「『黒の魔将』か……！」

グレイ・ガルディアが、一人真っ直ぐと国軍へと突撃して来る。

3 - 15 剣士の力量

解放軍を包囲する国軍に向けて、ガルディアは疾風の如く、草原を一直線に駆ける。

ガルディアは駆けながら解放軍の様子をうかがう。

「なんだこりゃあ、ひどいな……ファイフもいるはずだが……まさか、指揮官はライトシュタインのオッサンか……？」

ガルディアは目の前の敵の軍勢を見つめる。

「……………！」

そして軍勢の中にいるライトシュタインを見つけた。

「やっぱりか……………」

ガルディアとライトシュタイン、二人の目が合う。

ガルディアはライトシュタインに向け、一直線に駆ける。

「ちょうど近くにいたか。悪いが、潰させてもらっぜ」

そのガルディアの様子を無機質な目で見つめるライトシュタイン。

「愚かだな、ガルディア。私の指揮する軍勢に単独で飛び込んでくるとは……………」

ライトシュタインは手を挙げて、周りの兵士達に合図を送る。

ガルディアとライトシュタインの間には厚い厚い国軍兵の層がある。

それにも構わずガルディアはその軍勢へと飛び込んだ。すぐさま周りを無数の剣兵達が囲む。しかし……

ギョオンギョオンギョオンッ！！

ガルディアは巨大な黒剣を高速で振り回す。周りの剣兵達の体が宙を舞う。

兵士達の厚い層はガルディアによって無理やり引きちぎられていく。

ライトシュタインはその様子をなおも冷静に見つめていた。そして手で合図を出す。

ガルディアの周りの剣兵達が動き出す。

「……………！！！」

ガルディアは足を止めた。

気づけばガルディアの周りを剣兵達が円を描くようにきれいに囲んでいた。

「やれ」

ライトシュタインが信号銃を鳴らす。

その瞬間、剣兵達がガルディアを360°、あらゆる方向から斬

りつける。

しかしガルディアは静かにほえんだ。

ギョォンギョォンギョォンッ！！

直後、剣兵達の体がほぼ同時に吹き飛ぶ。

ガルディアの周りの剣兵達はきれいに一掃されていた。そしてゆうぜんとたたずむガルディア。体には一太刀すら浴びていない。しかし、それでもライトシュタインの表情は変わらなかった。

「やはり剣兵だけでは難しいか……」

ライトシュタインはさらに合図を送る。

ガルディアの前方の兵士の層がひらけた。

「なんだ……？」

不思議がるガルディアの前方に、無数の銃兵が構えていた。

「おいおい……」

パンパンパンパンパンパンパンッ！！

無数の銃声が響いた。

「やったか……？」

ライトシュタインは静かにガルディアの方向を見つめる。しかし、ガルディアの姿がない。

「……！」

銃兵隊も混乱する。

「消えた……？ どこだ！！」

その瞬間、銃兵隊の横の国軍兵の群れからガルディアが飛び出す。

「な……ッ！！」

「周りに隠れる場所があるってのはいいな」

ギョオンッ！

巨大な黒剣を横に大きく一振り。その一撃で銃兵の陣形が一気に崩れる。

地面に崩れる銃兵達を置いてガルディアはさらに前に突き進む。

「さあ、次はどうするんだい？ ライトシュタイン！」

ライトシュタインの口元が少しだけきつくなった。再び手で合図を出す。

再びガルディアをきれいに囲む剣兵。

「この期に及んで……」

再び剣を振り回すガルディア。周りの剣兵達が一掃される。ガルディアは再び前を見る。

「これで終わりか、ライトシュタイン」

「これで終わりだよ、グレイ・ガルディア」

「……!!」

気付けばガルディアの周りを大砲が囲んでいた。

ドンドンドンドンドンッ……!!

ガルディアの周りの地面が一気に吹き飛ぶ。その大きな体は爆炎の中へと消えた。

辺りが土煙に包まれた。

黒煙が空へとゆっくりと昇る。

ライトシュタインはそれを無機質な目で見つめていた。

「君の剣士としての実力は認めよう。しかし人間である以上限界はある」

その時だった。爆炎の中から、大きな体が飛び出した。

グレイ・ガルディアはほぼ無傷で大砲の嵐をくぐり抜けていた。

「なんだと……!!」

ライトシュタインの表情が初めてわずかに歪んだ。

その様子を近くにいた解放軍兵達も見ていた。辺りから歓声が上がる。

アールスロウもそれを見て静かにほえむ。

味方の歓声がクロコのいる場所まで届く。

「なんの声だ……？」

クロコは不思議そうに声を漏らした。

ガルディアは前方にいる砲兵達を斬り伏せ、真っ直ぐにライトシユタインの方へと突き進む。二人の距離はあとわずかだった。

ライトシユタインをジッと見つめるガルディア。

ライトシユタインは表情を陰しくする。

「策は尽きましたか？」

突然だった。ライトシユタインの隣で声が聞こえた。見るとそこにはロストブルーが立っていた。

「ロストブルー……」

ライトシユタインに名を呼ばれ、ロストブルーはいつものようにほほえんだ。

「あなたの指揮は確かに優れている……しかし、指揮官である以上、あなたは彼の力量を正確に計ることはできない」

ロストブルーはガルディアのいる方向を見た。

「剣士の力量を正確に計ることができるのは、同じ剣士だけです」

ロストブルーは青い大剣を引き抜いた。

「彼の相手は、私がしましょう」

ガルディアはライトシュタインの方向へと直進していた。

「あと少しだ」

ガルディアがつぶやいた、その時だった。目の前を塞ぐ兵士の層が急に割れた。

「なんだ？」

ライトシュタインへと続く道が真っ直ぐに開かれた。目の前にはライトシュタイン、しかし、そのあいだにはロストブルーが一人立っていた。

それを見た途端、ガルディアは足を止めた。

ロストブルーはほえんでいる。

「久しぶりだね。 그레이」

「ディアル……おまえも戦場に戻ってきたのか」

「君が戻るのなら、当然、私も戻らねばならないだろう？」

「やれやれ……」

ガルディアはそう言って剣を肩に置く。

ロストブルーはガルディアを見つめながら、背中でライトシュタインに話しかける。

「ここは私に任せて、あなたは場所を移動して下さい」

ライトシュタインは静かにうなずいて、兵士の群れの中へと姿を消した。

「あつ！ このヤロウ……」

「さて、グレイ。やろうか」

その言葉と共に、二人は同時に剣を構えた。互いに少しの間、にらみ合う。

次の瞬間、ガルディアが一直線に突撃する。

ヒュッ！

一瞬だった。ガルディアはロストブルーの横をついた。

ギュオンッ！！

ギイインッ！！

ロストブルーはガルディアの剣を受け止めた。すぐさまガルディアの蹴りが飛ぶ。

ロストブルーは素早く反応しかわす。

しかし、さらにガルディアの拳が飛ぶ。

ロストブルーは体をそらし、それも避けた。しかし、

ギュオンッ！！

間髪入れず、ガルディアの叩きつけるような斬撃がロストブルーを襲った。

キイイイン

ガルディアの斬撃は、ロストブルーの剣により受け流された。わずかに体勢を崩すガルディア。

容赦なくロストブルーの斬撃が襲う。

瞬間の反応で後ろへと飛ぶガルディア。

ヒュンツッ!!

二人の距離が離れた。

ガルディアの肩は切り裂かれていた。苦笑いを浮かべる。

「腕は……全く衰えてないようだな」

「ああ、お互いにね」

「冗談じゃねえって感じだよ。オレの斬撃をさばくようなやつは、後にも先にもおまえだけだろうな」

「だろうね……二年明けの決着といこうか。今日こそは仕留めさせてもらう」

二人は再び剣を構えた。

一方、クロコとフロウは……

「クロコ君！ 動くよ。理由は分からないけど、国軍陣形の動きが止まってる。また動き出す前に状況を打破するよ」

「って言っても、どうすんだよ！」

「とにかくどこでもいいから陣形を分断する！ 二人でとにかく倒して倒して倒しまくるんだ！！」

「よっし、分かりやすい！」

二人は一気に国軍兵の群れに突撃する。

一方、クレイド達。

サキは戸惑った声を出す。

「どうでしょうか？ クレイドさん」

「よし……俺達は中央に寄ろう」

「え……なんですか？」

「前進するにせよ、後退するにせよ、今の状況じゃあ隅にいたんじや何もできねえ。今この場で生き残る道を探るには中央しかねえ、行くぞ！」

「は、はいっ！！」

国軍兵の群れ、その中で不自然に開かれた空間。そこでガルディアとロストブルーは向かい合っていた。

ガルディアは黒剣を構え、ロストブルーをにらみつけている。周りを敵兵に囲まれている状況の中、ロストブルーから一切目を離さ

ない。

それに対し、ロストブルーはいつものようにほえんだ。その直後、ロストブルーの姿が消えた。

ガルディアの目は素早く自身の横に動く。あいだの空間を飛び越えるような速さで動くロストブルーの体をしっかりとらえていた。ガルディアは素早く防御の姿勢をとる。しかし、直後、ロストブルーは逆をついていた。

ヒュンッ!!

ガルディアは一瞬の反応でその場を離れていた。しかし……

「……くっ」

ガルディアの足は切り裂かれていた。

「さて、足が切り裂かれたね。グレイ」

「心配すんな、もともとおまえより速く動ける自信はねえよ。それに……」

ガルディアは目を鋭くする。

「この程度じゃ、オレの動きは止まらない」

ガルディアはロストブルーに突進した。足から血が噴き出すが、まるで影響がないかのような動きだ。

ガルディアは剣を大きく振り上げる。直後、素早くガルディアは蹴りを飛ばした。

ロストブルーはヒラリと避ける。

しかしすぐに黒剣が振り下ろされる。

ギイイイイインツッ！！

ロストブルーは斬撃を受け止めた。辺りに空気をはじく金属音が響き渡る。

素早く次の斬撃を放つガルディア、それに応戦するロストブルー。二つの剣が連続でぶつかり合う。

周りの空気をはじきながら響き続ける巨大な金属音は、辺りの爆音にすら引けを取らない。巨大な力同士がぶつかり合う衝突音が連続して辺りを支配する。

周りの国軍兵達はその様子を呆然と見ている。手の出しようがなかった。

空間に絶え間なく響く巨大な音、人知を超えた動きをする二つの体。

自分たちが立ち入ることのできない空間。

ガルディアとロストブルー、その二人の周りには確かにその空間が形成されていた。

「はああああっ！！」

ガルディアは雄叫びと共にひときわ力の入った斬撃を放つ。

ギイイイイインツッ！！

それを受け止めたロストブルーの体が後ろへと押された。その瞬間、素早くガルディアが追い打ちをかける。巨大な斬撃がロストブルーを襲う。

キン

しかしその斬撃は素早く受け流される。

「……くっ!!」

体勢が崩れるガルディア、しかしその状態から強烈になった蹴りを飛ばす。

しかしかわされる。素早く飛ぶ青い斬撃。

ガルディアは一瞬で体勢を直して後ろへと飛ばうとする。しかし

……

ヒュンッ!!

二人の距離が開いた。

ガルディアの腹は切り裂かれていた。

「うつ……」

ガルディアは腹を押さえてわずかにふらつく。腹からはボタボタと血が流れ落ちる。

それを見て、ロストブルーはゆっくりと剣を構え直す。

「さあ 그레이…… 七年続く我らの戦いに決着をつけようじゃないか」

「チッ…… やっぱ基地でゆっくりしてりゃ良かった」

ガルディアは苦笑いを浮かべる。

ロストブルーはガルディアを見つめ、そして足に力を入れた、そ

の直後、

ドォォンドォォンドォォンッ！！

二人の立つ横を無数の爆炎が包む。二人は驚きそこを見る。すぐ横が爆発の煙に包まれた。その時だった。

ロストブルーに向かって、煙の中から鋭い斬撃が飛ぶ。

ヒュウンヒュウンヒュウンッ！！

「……………！！」

素早く跳んでかわすロストブルー！。

煙の中からは…………ファイフ・アールスロウが姿を現した。ロストブルーはわずかに眉を寄せた。

「……………！！　ファイフ・アールスロウ…………『千牙の狼』か」

アールスロウは素早くガルディアを守るようにして前に立つ。

「やれやれ、横やりか……………しかし」

ロストブルーはまたいつものようにほえんだ。

「私と 그레이 の戦いに、誰も立ちいることなどではしないんだよ」

その言葉を放った直後、一瞬でロストブルーはアールスロウの目の前に立った。

それと同時にロストブルーは斬撃を放つ。恐ろしい速さと威力を

持った斬撃がアールスロウを襲う。

キィィン

ロストブルーの体がわずかに崩れた。ロストブルーの斬撃はアールスロウによって鮮やかに受け流された。

（私の斬撃をさばいただと……！）

ロストブルーは驚きの表情を浮かべた。

（……しかし、今の斬撃だけに一点集中した防御の構え……これならば、私の方が早く……）

ロストブルーが素早く次の斬撃を放とうとした、その一瞬だった。横からガルディアが現れた。

「うおおおおおッッッ！！！」

ガルディアは力の限りの強烈な斬撃をロストブルーに叩きつけた。

「……くっ！！」

ギィィィィィンッッッ！！

今までで最大の金属音が辺りに響き、空間が揺れた。斬撃を受け止めたロストブルーの体は吹き飛ばされ、国軍兵の群れの中へと消えていった。

それを確認したアールスロウは素早く手を振り上げた。

「撃て ツー!!」

ドンドンドンドンドントツツツ!!

解放軍側から無数の砲撃が飛び、ロストブルーがいるであろう一帯が爆炎に包まれた。

辺りが煙に包まれる中、アールスロウはガルディアの手を引く。

「こっちです。 그레이さん」

「だがファイフ。 まだロストブルーは……」

「ここであなたを失うわけにはいかない」

「……分かった」

アールスロウとガルディアは煙の中へと姿を消した。

煙が収まった国軍陣の一角。 無数の国軍兵が地面に倒れる中、ロストブルーは立っていた。

「さすが 그레이……いい部下を持っている」

ロストブルーは小さくため息をついた。

「結局また逃げられたか……」

ロストブルーは周りを見渡す。 解放軍を囲む国軍の陣形は所々が

薄くなっていた。

「やれやれ…… 그레이 人にずいぶんかき乱されたものだ」

その時だった。 ロストブルーは解放軍の中にいる、ある一人に目がいく。

ロストブルーはその一人を見つめた。

「そうか…… 君も来ていたのか。 クロコ」

3 - 16 それは一つの選択

草原に広がる解放軍と国軍の大軍勢。

解放軍は国軍に完全に包囲されている。

その中、ガルディアとファイフは自陣に何とか逃げ込んでいた。

「 그레이さん、今から後衛に移動します。 その敵陣を分断して、退路を確保します。 俺とあなたの二人がかりなら、 なんとかできるかもしれません」

それを聞いてガルディアは腹の傷口を押さえながら苦笑いする。

「 やれやれ、 上司使いの荒いやつだな…………… よし、 行くか」

二人は自陣の後方へと下がって行く。

同じ頃、前衛で戦うクロコとフロウは敵陣を分断していた。二人の分断した場所に解放軍兵がなだれ込む。

フロウとクロコ、二人とも息を切らしていた。

「よし……………これで少しは楽になるね」

「ハアハア……………とはいえ、いつになったら終わるんだよ。 この戦い」

国軍陣の一角、ライトシュタインは全体に指示を送っていた。しかし……

「くっ……動きが悪い。情報線が完全に乱れているな」

ライトシュタインの指揮がうまく機能しないまま、戦いは続いた。解放軍は前衛の一部以外を囲まれながらも、国軍の攻撃に必死に耐えていた。

その攻防がしばらく続いた時だった。

パンパンパンッ！！

解放軍の信号銃が鳴った。

「撤退だーッ！！ 一時撤退ー！！」

指揮官の声が響く。

ガルディアとアールスロウによって、解放軍後衛に貼り付いていた敵陣は分断され、退路が開かれていた。

解放軍全体が後方へと下がって行く。

それに気づいたライトシュタインはかすかに口元を陰しくする。

「仕留めきれなかったか……」

ライトシュタインは信号銃を鳴らし、声を上げる。

「逃がすなッ！ 追撃！」

逃げる解放軍を追撃する国軍。しかし大きく広がり過ぎた国軍陣は全体の動きが鈍い。逃げる解放軍を追いつけない。

その状況の中、クレイドとサキは中央の前衛で剣を振るっていた。

「なんとか撤退できそうだが、敵もしつこく追撃してきやがる」

「ここをなんとか抑えないと」

「よし……前衛の国軍兵は俺が押さえる。サキ、おまえは隅の味方をフォローしてくれ」

「分かりました」

サキは返事をしてクレイドから離れていった。

一方、そこから少し離れた前衛では、クロコとフロウが次から次へと襲ってくる剣兵に対して必死に剣を振るっていた。

「僕らは……味方が逃げきるまでなんとか、国軍を押さえるんだ」

「分かってる！」

二人は追撃してくる剣兵を次々と斬り伏せる。

そんな中、解放軍全体が国軍全体から徐々に離れようとしていた。襲ってくる剣兵も徐々に少なくなる中、フロウは周りを眺め、その状況を把握する。

「もうすぐだ、クロコ君……」

「ああ」

クロコが返事をした、その時だった。

二人の前に一人の剣士が現れた。

黄色の髪に青い瞳をした白い將軍服を身にまとった男。

ロストブルーがクロコとフロウの前に現れた。

「やあ、クロコ。久しぶりだね」

その姿を見て、クロコは驚いた。

「ディアル……なんでアンタがここにいるんだ」

ロストブルーはほえんだ。

「すまないね、クロコ。隠したくはなかったが、あの時はどうしても君と話がしたくてね。しかし、今は戦場だ。私は君と戦わなくてはならない」

そう言うロストブルーをクロコは険しい表情で見つめる。しかし、そのクロコ以上にフロウは険しい表情をしていた。それにクロコが気付く。

「……？ どうしたフロウ」

フロウは小さく声を漏らす。

「將軍服の……ディアル……！？ ディアル・ロストブルー……！
？」

フロウの顔に汗がにじむ。

「ダメだ、クロコ君……彼とは絶対に……戦っちゃいけない……！
！」

「……！！」

フロウのただならぬ様子を見て、クロコにも緊張が走る。
しかしロストブルーは青い大剣をゆっくりと構える。

「悪いね……逃がすつもりはないんだ。私は国軍の將軍だからね。
いま目の前にある若い芽……摘ませてもらおう」

それを聞き、二人はロストブルーを静かににらむ。

「やるしかないか」

クロコはそう言って剣を構える。フロウも剣を構えた。
その後、

目の前からロストブルーの姿が消えた。

「……！！」

クロコは完全にロストブルーを見失った。
しかしフロウには、その姿が見えていた、クロコのすぐ横に立つ
ロストブルーの姿が。

「クロコ！ 横だ！！」

フロウがそう声を上げた瞬間だった。ロストブルーはフロウの目の前に立っていた。

「仲間に気を使う余裕があるのか？」

ロストブルーの剣はフロウの体を切り裂いた。

宙に大量の血しぶきが上がった。

それと共に、フロウの体がグラリと傾き、そして力無く地面にうつぶせに崩れた。

「フロウ！！」

クロコは叫んだ。クロコには訳が分からなかった、気付けばフロウが切り裂かれ、地面に伏していた。

地面に伏しているフロウは動かない。地面にじわじわと血が広がっていく。

それを見た途端、クロコの心臓が嫌な音で高鳴る。剣を握る手がわずかに震える。

「うわああああッ！！」

クロコは叫びながらロストブルーに斬りかかった。しかし、あっさりかわさえる。

すぐさま放たれる青い斬撃。その斬撃が真つ直ぐクロコへと伸びていく、その瞬間、

ギョーンッ!!

巨大な剣がロストブルーの首へと伸びていく。すぐさま飛んで避けるロストブルー！。

クロコのすぐ近くにはクレイドが立っていた。

「ふむ……新手か」

少し距離を置いたロストブルーはクレイドを見つめた。クレイドもロストブルーを見つめた。目が合った瞬間、クレイドは直感的にその強さを感じ取った。

（やべえな……こいつはやべえ……今まで会ったどんなやつより……）

フロウの方をチラッと見る。

（傷は深いが……まだ可能性はある）

クレイドはすぐにクロコにだけ聞こえるように小声でささやく。

「俺が一瞬だけ隙を作る。二手に分かれて逃げるぞ。フロウはおまえが持て、おまえの方が足が速いからな」

クロコは目でうなずいた。

ロストブルーはその様子に気づく。

「何かの作戦かい？」

ロストブルーは再び剣を構えた。その瞬間、

「おらああああッ！！」

雄叫びと共にクレイドは巨大な剣で地面を切り裂き、えぐった。
三人とロストブルーのあいだに、土と草の欠片が飛び散る。

「……！」

驚くロストブルー。

「いまだー！！」

クレイドの叫びと共に、クロコはフロウを素早く担いで走った。
クレイドも別の方向に走り出す。

欠片が地面へ落ちたあと、ロストブルーは逃げるクロコの後ろ姿
を見つめる。

「この程度で私から逃げられると思っているのか」

ロストブルーが駆けだそうと足に力を入れたその時、

「思ってたえよ」

ロストブルーの前にクレイドが現れた。
それを見たロストブルーは静かに口を開いた。

「……引き返したのか。なるほど、自ら命を懸けて仲間を守るか。勇敢だな」

それを聞いてクレイドは笑う。

「なに訳の分からねーこと言ってんだよ。俺はあんたに勝つつもりだぜ」

「そうか、それは失礼したね」

ロストブルーは剣を構えた。クレイドも剣を構えた。

「うおおおおお！」

クレイドは叫びながらロストブルーに突進した。対してロストブルーは動かない。

クレイドは剣を振るう。空気を切り裂く巨大な斬撃。

ギョーンッ！！

ヒラリとかわされる。

ヒュンッ！

風切り音と共に、宙に大量の血しぶきが上がった。クレイドの体は傾き、大きな音を立てて地面に崩れた。

「残念だが、君程度では私の足留めにすらならないよ」

ロストブルーは再び前を向こうとする。その直後、

「うおおおおっ!!」

再びクレイドの巨大な剣がロストブルーに向かってくる。

ギイイイイインツッ!!

わずかに押されるロストブルーの体。

「……………ッ!!」

ロストブルーは再びクレイドを見る。

クレイドは立っていた。体を深く切り裂かれながらも、力強く、ズシンと立っていた。

クレイドは息を乱しながらも笑みを浮かべる。

「もう勝った気でいるのか？ 本番はこれからだぜ」

それを見てロストブルーは少しだけ眉を寄せる。

「やれやれ、まだ動けたのなら、自らを助けるために動けば良いものを……………」

それを聞いてクレイドは何も言わすほえんだ。

その様子を見てロストブルーは口を開く。

「そうか……………それでも仲間を助けるか。君は本当に勇敢だな。君に放った無礼な言葉を詫びよう」

ロストブルーは後ろに跳んで、距離を取り、しっかりと剣を構え直した。

「同じ剣士として、全力で君を倒そう」

クレイドもゆっくりと剣を構える。そしてほえむ。

「悪いな。俺はまだ、あんたに勝つつもりだぜ」

クレイドの体からボタボタと血が流れ落ちる。それでもクレイドは力を込め、ロストブルーに向け突進した。

クレイドが最後の力を込め、ロストブルーに向かって剣を振るおうとした、その瞬間、

ロストブルーはクレイドの体を横切っていた。

その直後、クレイドの全身が切り裂かれ、血が噴き出る。

ゆっくりゆっくりとクレイドの体が傾いてゆく。そして大きな音を立て、地面にぶつかり、少しだけ跳ねたあと、静かに地面に倒れ込んだ。

クレイドの口から血が流れ落ちる、目はわずかにだけ見開かれていた。

（あー……………これはダメだ……………助からねえや……………）

クレイドはゆっくりと意識が遠ざかっていくのを感じた。

（俺は……………ここまでか……………探してた『真実』、結局見つかったなあ……………けど、おまえに会えて良かったよ、フロウ……………俺の……………見つけれなかった……………『真実』、おまえに……………託したぜ……………）

クレイドは最後にほえんだ。

（アリガトな、みんな）

解放軍は追撃してくる国軍から何とか逃げ切ることができた。
それにより、この日の戦闘は終了した。

この戦闘における国軍の兵力の損害はおよそ10000、対して
解放軍はおよそ45000。

その犠牲は解放軍にとってあまりにも大きなものだった。

クラット基地を夕暮れの光が包む中、基地の治療室でフロウは目を覚ました。

周りを見ると、すぐ近くにクロコが座っていた。

クロコはすぐに気づいて、顔をのぞきながら声をかける。

「おい、大丈夫か。おいっ！」

声をかけてくるクロコに対し、フロウはぼんやりと答える。

「……たぶん……ね」

フロウはゆっくりと体を起こす。

「……！！」

直後、フロウは苦痛で顔を歪めた。

クロコは心配そうにフロウの顔をのぞいた。

そんなクロコに対し、フロウは笑みを作って見せる。

「派手にやられちゃったよ」

「医者が言うには、傷は深いが、命に別状はないらしい」

「そうかい」

フロウは少しだけ周りを気にしたあと、もう一度口を開く。

「ついててくれたのは君だけ？」

「んっ？ ちょっと前までサキもいたけど、なんか呼ばれていなくなっただけ」

「……そうかい……クレイドは？」

「あいつは、見つからねえ。多分どこかにいるだろ」

「……倒れてるあいだのこと、はつきりは覚えてないんだけど、なんか、クレイドの声が聞こえた気がした」

「ああ、途中でクレイドが助けに入ってた。それで何とか逃げ切れた」

「……クレイドは無事なの？」

「ああ、同時に逃げたから、無事なはずだ」

「あのあと何があったのか聞かせてくれない？」

「あのあとか……おまえが倒れたあと、すぐクレイドが来て……であいつが地面えぐって隙を作って、二手に分かれて逃げたんだ。おまえはオレが担いだ」

それを聞いた途端、フロウの表情が変わった。緊迫した表情だ。ゆっくりと口を開く。

「……その作戦を提案したのは誰？」

「……？ クレイドだ」

それを聞いた瞬間だった。フロウは目を閉じて、顔を歪めた。体はわずかに震えていた。

「……………そんな……………」

フロウは震えた声を出した。
その様子にはクロコは驚く。

「おい、どうしたんだよ」

クロコがそう言った直後だった、フロウは目を開け、クロコをにらんだ。

「……………君はバカだ……………クレイドは……………クレイドだったら……………」

そしてフロウは叫ぶ、子供が泣きわめくようなうわずった声で。

「クレイドの性格だったら、そのあと引き返して、敵を足留めするに決まってるじゃないか！！ どうしてそれに気づかないんだ！！」

フロウは叫んだ直後、クロコは固まる。

「……………！！」

固まったクロコから目をそらし、フロウはもう一度目を閉じて顔

を歪ませる。

「君はバカだ……クレイドは……クレイドは……」

「……ウソだ……あいつは……そんなはずは……」

その夜のことだった。クレイドとロストブルーの戦闘を目撃した兵士の証言から、クレイドの戦死が確認された。

それを聞いた後も、クロコはしばらくの間、そのことを信じることが出来なかった。

月が出る夜空の下、クロコは独り、ベランダに出て、腕に顔をうずめていた。

（クレイドが………オレのせいだ………オレの）

クロコはそれ以外、何も考えることが出来なかった。ずっと腕に顔をうずめたまま、何時間も動かなかった。

クロコを心配して探していたサキは、そんなクロコを見つける。声をかけようとしたが、やめた。

顔をうずめたまま、泣いてるように見えた。

サキはゆつくりとその場を立ち去った。

サキはそのあと、大部屋でフロウの姿を見つけた。

フロウは泣いていなかった、包帯を巻かれた姿のまま、ただ黙々

と小剣を布で磨いていた。

ただどこか、近寄りがたい雰囲気醸し出していた。

サキは結局フロウにも背を向け、その場を去った。

廊下を一人歩くサキ。

（ボクは……どうすればいいんだ……）

サキは自分の目から涙がにじんでくるのを感じた。すぐにそれを腕でぬぐう。

（クレイドさん……）

クラット基地より南北の地、シャルルロット。その端にそびえ立つシャルルロット基地、その廊下をスコアは歩いていた。

右手には不自然な茶色のバッグを持っている。

スコアはそのまま武器庫の前まで行き、中へと入った。

中は暗く、シンと静まり返っている。

スコアは小さく声を出す。

「レイアー、ボクだよ」

スコアがそう呼ぶと、大砲の裏からレイアーがヒョコツと顔を出した。

その顔を見て、スコアは安心した表情をする。

「ほら、食べ物。今度はバッグに入れた来たんだ」

スコアはレイアの前に立つとバッグを開ける。

「前までは手持ちだったから、固形物しか持って来れなかったけど、今回はちゃんとした食べ物を持ってきたんだ」

そう言っつてスコアはバッグから四角い木製の入れ物を取り出した。入れ物は少しだけ濡れていた。それを見てレイアが一言。

「こぼれてるね」

「あ……うん、少しだけさ」

「バッグ……臭っちゃうかも」

「だ、大丈夫さ、すぐ洗うから！」

レイアは入れ物のフタを開けた。中にはシチューが入っていた。

「ごめんね、レイア。もう冷えちゃってるんだ。なかなかここに来る時間がなくて」

「変なこと言うね、あなたが謝る事なんて何も無いのに」

レイアはシチューを食べ始める。

スコアはその様子を少しだけ眺めたあと、口を開いた。

「その……レイア、少し聞きたいんだけど」

「なに？」

「きみのその傷のこと……いいかな？」

「いいよ」

「その傷は……どこでできたの？」

レイアは食べる手を止めた。

「小さな傷は奴隷の時に主人に叩かれてできた。大きな傷は戦争に巻き込まれた時にできたって、おじさんとおばさんが言ってた」

「おじさんとおばさん……？」

「わたしは戦争孤児で、小さい時に独りぼっちになった。その時、たまたま会った旅の医者夫婦のおじさんとおばさんに助けてもらった。小さい時のことはほとんど覚えてないけど、大きな傷はその時、おじさんとおばさんに治してもらったって聞いた」

「そのおじさんとおばさんは今どうしてるの？」

「出会ったあと、旅に長いあいだ一緒に同行させてもらって、お世話になったけど、三年ぐらい前に、盗賊に襲われて、二人とも殺された」

「……！！」

「わたしはその時捕まって、奴隷として売られたんだ。それからはずっと奴隷として暮らしてた。今思えば、おじさんとおばさんと一緒にいた時が一番楽しかったな……」

それを聞いてスコアは辛そうな顔をする。
レイアはまたシチューを食べ始める。

しばらく静寂が続いた。

「あのさ、レイア」

スコアがまた話しかけた。

「……………なに？」

「その……………こんな所に連れ込んで、ごめんね」

「また変なこと……………あなたに助けてもらわなかったら、わたし、あのままのたれ死んでたかもしれないのに」

「……………あつ、う、うん。と、とにかくさ、こんな暗い所にずっといるのは辛いよね。だからさ、時間が空いたら二人で町を回ろう。一緒にきみの居場所になる所を探すんだ」

「……………わたしの居場所？」

「そうさ、もうきみは奴隷として生きていく必要なんかない。きみの生きる場所、きみの居場所は必ずどこにある。だからそれまでは、ボクがきみを守るよ」

「……………」

それを聞いてレイアは少し黙った。そのあと、ゆっくり口を開く。

「あなたは どうして、わたしにそこまでしてくれるの?」

「え……それは……その……」

スコアは 少しでも言葉に迷う。

「こ、こうして出会ったのも、運命だし、困ってるきみを放っておくわけにもいかないし、それに……」

「それに……?」

「……ゴメン、自分でもよく分からないんだ」

「変な人」

「ハハハ……」

「ねえ、スコア」

「なに?」

「ありがとう」

レイア は ほえんだ。

クラット基地、その基地の一室で、ガルディアとアールスロウは机を挟んで話していた。

「ずいぶんな状況になっちまったな」

「はい……」

「国軍の今までの損害は推定15000、こっちの損害は50000か………ってことは、国軍は全体で120000で、こっちは100000集まる予定だったから………今の戦力は、えーと」

「国軍は105000、こちらは50000です」

「……倍か」

「はい………実際はもう基地を放棄すべき状況です」

「だが、この基地が落ちれば、領土線が切り崩されて、国軍は一気にセウスノールに進行しちゃう」

「そうですね………全ては俺の力不足。この状況の責任は俺にあります」

アールスロウは険しい表情だ。

「おまえだけが悪いわけじゃないさ。相手はライトシュタインだったんだ。あいつと戦術で勝負して勝てるやつなんかないさ」

「………しかし、またアレと戦わなければならない」

「あいつと勝負するときは、絶対にあいつに合わせて動いちゃいけないんだ。確実にハメられるからな。あいつとやるときはとにかく陣形を横に広げて、ひたすら突進だ。それが一番いい方法さ」

「まるで牛ですね」

「まあな。ただし、あいつが誘い込もうとしてる時だけは足を止める。その判断が難しい、あいつはそれをうまく隠すからな」

「……しかし、それではどうしてもこちらが不利になりますね」

「ああ、だからあいつが動かす軍勢は、兵力を倍と仮定して見ないといけない」

「……となると、相手の戦力は実質こちらの四倍ですか。ますます勝機がない気がしますね」

「まあな……」

「 그레이さんは出てくれるのですか？」

それを聞いて、ガルディアは腹に巻かれた包帯をさする。

「……オレは後方で様子を見るよ。オレが出れば、まず間違いなくディアルも出てくるだろうからな。あいつが出たら、最悪わずかな希望さえなくなるかもしれない」

「……………」

「まあそうすると、回復したって言うフィンディに頼ることになる

だろうな」

「『狂舞の悪魔』ですか……」

クラット基地防衛戦十一日目

夜の闇に包まれる国軍陣、その一角では、ライトシュタインとロストブルーが話していた。

「戦力は完全に整ったな」

「そうですね、明日の戦いで決着がつくでしょう」

「ロストブルー、君は明日の戦いには出るのか？」

「私は後方で様子を見ましょう。私が出ない限りは、グレイも出てはこないでしょう。こちらの勝利がほぼ決まっている以上、また彼にかき乱されてはやりづらいでしょう？」

「……そうだな、私としてはその方がありがたい」

（ロストブルーとガルディア……これほどの力を持つ二人が戦場を離れた理由。なるほど、そういう訳か）

ライトシュタインは再び口を開く。

「そうなる、あと厄介なのはフィンディ・レアーズか」

「彼の相手はラズアーム将軍がするのでしょうか?」

「ああ、ラズアームとフィンディ……この決着戦の最大のかなめとなるだろうな」

司令官テント、その薄暗いテントの中でラズアームは独り座っていた。

（さあ、いよいよ決着の時だ。フィンディ・レアーズ）

ラズアームは静かに笑みを浮かべた。

夜が明けた、太陽が昇り、朝日がクラット基地を照らす。
クラット基地の広間では、戦闘の準備をする兵士達が慌ただしく動いていた。

その中に、フィンディ・レアーズの姿はあった。
剣を腰に付けたフィンディはゆっくりと歩き、基地の外へと歩く。
すると基地の出口にファリスが立っていた。二人の目が合う。

「傷は……いいの?」

ファリスがフィンディの体を見ながら言った。

「ああ、さすがに全快とまではいかないけどな。やつらと戦うには

十分さ」

「今、すごく厳しい状況なんだってね……」

それを聞いてフィンディは笑みを浮かべる。

「オレがいる限りは、この基地は落ちないさ。国軍兵を殺して殺して殺して、オレがこの基地を守ってやるよ。オレは新の英雄なんだから」

「……………」

黙るファリスをフィンディは横切る。

フィンディが基地の外へと出ようとする時だった。

「フィンディ！」

ファリスは叫んだ。それを聞き、ゆっくりフィンディが振り返る。ファリスはフィンディを見つめる。

「……もう、やめない？」

つぶやくような小さな声だった。

「何をだ？」

「いままでもそう……そしてこれからやろうとすることもそう。あんたが望んで……心から望んでやっているようには私には見えない。だから……」

「やってるさ。これはオレが望み、オレ自身が決めてやっていることだ。見るよ、今の状況を、仲間の誰もがオレを頼り、オレという存在に希望を見出している」

フィンディは上機嫌に笑う。

「結局、どれだけ否定しようと、最後はみんなオレに頼るしかないのさ」

フィンディはそう言ったあと基地の外へと出ていった。

ファリスはそんなフィンディの姿が見えなくなると、小さな声でつぶやいた。

「フィンディ……無事に帰ってきてね」

サキは基地の廊下を歩いていた。するとバツタリとフロウと出会った。

「あつ、フロウさん！」

サキはフロウを見て緊張した顔になる。

「やあ、サキ君」

フロウはいつもの調子でしゃべった。

「あの……大丈夫……ですか？」

するとフロウは笑顔を浮かべた。

「ああ、傷は深いけど、出るよ、ボクは。こんな状況だからね。少しでもみんなの力になりたいんだ」

「あの……傷だけじゃなくて……その……」

「大丈夫」

フロウはまた笑顔を浮かべた。

「僕はもう大丈夫だから」

フロウはそう言ったあと、一呼吸おいて、また口を開いた。

「それよりクロコ君は？」

それを聞いてサキは少し顔を曇らせる。

「それが……その……」

「……………案内して」

サキに案内されて、フロウは基地の広間へ出た。広間の端っこにクロコの姿があった。座りながら剣の柄を握り、うつむいている。フロウはそれに近づく。

「クロコ君」

「…………フロウ」

名を呼ばれてクロコは顔を上げた。目が少し赤くなっていた。フロウの顔を見て、辛そうな顔をする。

「寝てないの……？」

フロウの質問にクロコは答えない。少しだけ黙った。

「…………オレは…………オレは…………あいつを…………」

クロコは震えた声を出した。
その時だった。

フロウはクロコの顔を勢いよく殴った。

鈍い音が鳴って、クロコの体は床に倒れた。

「……………！！」

クロコは驚いて顔を上げる。

フロウはクロコをにらみつけていた。

「何を情けない声を出してるんだ！！ 戦闘はすぐに始めるんだぞ
！！…こんな状態で君は戦うのか！！」

フロウは大きな声で怒鳴った。

「……………フロウ」

上半身を起こしたクロコは呆然とする。

「立て、クロコ。……クレイドは、命を懸けて僕と君を守った。その命を、もし次の戦闘で無残に散らすような事があれば、僕は例え死んだあとでも、絶対に君を許さない」

「……………」

「戦うんだクロコ。そして、何があっても死んじゃいけない。それが……クレイドにできる今一番の償いだ」

「……………フロウ」

フロウは体をかがめて、クロコに手を差し伸べた。

クロコは一瞬目を閉じて、そしてキツとフロウの目を見た。真紅の瞳が鋭く光る。

フロウの手を取り、立ち上がった。

「目が覚めた。ありがとう、フロウ」

「生き残るよ」

「もちろんだ！」

その様子を見ていたサキは安心したように笑みを浮かべた。

太陽が真上から照らす頃だった、クラット基地の前方の緑色の大草原に、グラウド国軍の巨大な軍勢が姿を現した。

セウスノール解放軍はクラット基地のおよそ1km前方に陣を敷く。横に大きく厚く広がった陣形だ。

対するクラウド国軍は解放軍に比べ横に少し狭い厚い陣形を敷いていた。

解放軍中央、フィンディは倍はあるだろう国軍の軍勢を見つめていた。そして笑みを浮かべる。

「さて……今までで最大難度のゲームになりそうだな」

解放軍右翼、アールスロウは険しい表情で国軍を見つめる。

（俺が与えた敗北の代償は、俺一人では、もう……どうしても返すことはできない）

静かに剣の柄を握る。

（だが……今は戦うしかない。自分のできることは、それだけしかないのだから）

解放軍左翼にはクロコとフロウ、そしてサキの姿があった。
フロウの顔色が少し悪い。

「大丈夫ですか、フロウさん」

「……大丈夫さ、何があっても僕は戦う」

フロウは笑顔を見せる。それを見てクロコが口を開く。

「オレがおまえのフォローに回る」

「冗談じゃないよ。君の足を引っ張るのはごめんさ。君はいつもの様に突進しな。自分の命は自分で守る」

「……強がりやがって」

それを聞いてフロウは笑った。

「君に言われるなんてね。……けど、とりあえずは流れを作るのは君に任すよ。僕はそこまで暴れないし、暴れないからさ」

国軍陣の一角、そこにコールの姿があった。

「この戦いもいよいよ決着か。……今回はフレアと離れちゃったな」

別の一角には巨大な斧を構えたフレアが立っている。

「前は結局会えなかったけど、最後にクロコと戦えるかなー。まあ、この戦力差で、指揮官が『戦場の魔術師』じゃあ、オレが戦うまでもなく、クロコはやられちゃうかもしれないけど」

国軍の中心付近にライトシュタインの姿があった。馬にまたがり、双眼鏡で解放軍の様子をうかがう。

「横に広く構えた陣形か……対策を立ててきたな」

ライトシュタインは信号銃を構えた。

「さて、始めるか」

3 - 18 否定と誇り

緑色の大草原に広がるセウスノール解放軍とグラウド国軍。
100000以上の国軍に対し、50000程度の解放軍、兵力
の差は歴然だった。

解放軍は横に大きく広がった陣形。
対する国軍は厚く厚く広がっている。その中でライトシュタイン
は馬にまたがり信号銃を構えていた。

パンッ！

信号銃の音が響き、国軍の大軍勢がかけ声とともに一斉に動き出
す。

ライトシュタインは無機質な目で前方を見つめる。

「さて……一気にケリをつけさせてもらおう」

国軍の動きに合わせ、解放軍の隊長達が口々に叫ぶ。

「来るぞ、全員構えろー!!」

どんどん近付いてくる国軍、しかしすぐに国軍の陣形に変化が生
じる。

アールスロウは険しい顔でそれを見つめる。

国軍陣形の両翼が左右に分かれていく。そして陣形は太い縦陣形三つに分かれた。

「まるで二本の槍だな……」

アールスロウは国軍の陣形を見てそうつぶやいた。

「さて……その薄い壁、貫かせてもらおうか」

ライトシュタインは解放軍の横に広がった陣形を見つめていた。

国軍は再び一気に前進する。

三つの縦陣形が解放軍に突き刺さる。

国軍の縦陣形の前方には無数の大砲がズラツと配置されていた。国軍からの砲弾の嵐が解放軍布陣の三か所に集中的に降り注ぐ。解放軍から悲鳴が上がる。

ライトシュタインはその様子を見つめる。

「解放軍は本来、ここで陣形を変えるべきだ。しかし、変えないの
だろう？ 私を恐れて……」

解放軍右翼、砲弾の雨が降り注ぐ中、アールスロウは前衛で剣を振るう。次々と剣兵を斬り伏せるアールスロウ。それでも険しい表情は変わらない。

（本来ここは陣形を変えるべき時だ。だが変えるなよ、クラット基

地の指揮官……倍と見積もる計算、そのグレイさんの助言がなければ、俺でも変えていただろうが……）

解放軍の陣形は変わらない。国軍の猛攻に必死に耐える。

解放軍中央、そこではフィンディが高速の剣技で敵を斬り伏せていた。砲弾が飛ぼうと、銃弾が飛ぼうと関係なかった、圧倒的な強さで、敵を次から次へと一瞬で斬り伏せる。

フィンディは敵を斬り伏せながら、その先に目を凝らす。

（どこだ……どこにいる？ ラズアーム）

フィンディの心の中に、クロコに言われたある言葉がよみがえる。

確かにおまえは父親のことを恨んでる。けど、それだけじゃない、昔の通りまだ好きなんだ。尊敬してるんだ。

（違う……オレはあいつを誰よりも何よりも恨んでいる）

フィンディの脳裏にある過去の出来事がよみがえる。

基地を襲う砲火。その中を逃げる途中、母は、目の前で、砲撃の炎に巻き込まれた。母の叫びは爆音で消え、その姿は炎の中へと消えていった。

（オレはあいつを許さない。だから……あいつが助けた命を、ラズアームの命を、オレが奪ってやる……！ オレがあいつを否定してやる）

フィンディは歯をギリツと鳴らす。

「どこだ！ ラズアーム！！」

解放軍左翼、国軍の猛攻が続く中、クロコは前衛にドシンと構え、高速の剣技で国軍兵を次々となぎ払う。しかし、周りが徐々に押されていく。

「……クソ！」

少し離れた場所、そこでフロウも必死に剣を振るう。高速の剣技はいつものキレがない。

一人、二人、国軍の剣兵を斬り伏せることにフロウの顔から汗が噴き出す。それでもフロウは剣を振るい続ける。

ヒュンッ！

フロウが剣兵の一人を斬り伏せた時だった。

「……うっ！」

フロウの体に激痛が走る。思わず体を前に倒してしまふ。その時だった、目の前の剣兵がフロウに襲いかかる。

ヒュンッ！

サキが素早くあいだに入り、剣兵を斬り伏せた。

「すまない……サキ君」

「フォローします、フロウさん」

「けど……」

「フォローはボクの得意分野です。それに、ボクは仲間の助けになるために強くなったんです」

「……すまない」

前衛に立つフロウ、それをフォローするサキ。二人によって、次々と国軍兵は斬り伏せられる。

解放軍右翼、アールスロウは次々と国軍兵を斬り伏せていた。しかし、アールスロウが戦う一角以外が徐々に押され始める。

（きついか……しかし退くわけにはいかない）

そんなアールスロウの前に一人の国軍人が現れた。巨大な斧を構えた、フレア・フォールクロスだ。アールスロウの顔が陰しくなる。

「……『死神』か」

フレアはほほえむ。

「長剣に白い髪、そしてこの強さ……『千牙の狼』さんかな」

フレアはユラリと斧を斜めに構えた。

「思わぬ大物に出会えたよ」

するとアールスロウは後ろに跳んだ。

「悪いが君と一騎打ちする気はない」

それを見てフレアはムツとする。

「勝てる自信がないの？」

「リスクの問題だ」

「へえ、逃げるんだ……」

「いや」

アールスロウはフレアを冷たい目で見つめる。

「逃げるのは君だ」

そう言って、アールスロウは手を挙げた。

「撃てーッ！！」

フレアに向かって無数の砲撃が放たれる。
フレアの周りが爆炎に包まれる。

「うわっ！！」

「そんな巨大な武器を持っていたら、砲撃も素早く避けられないだ

るっ?」

「性格ワルッ!」

フレアはたまらず後退していった。

ライトシュタインは双眼鏡で周りの戦況を確認する。
左右二つの縦陣は、徐々に解放軍陣形を切り崩し始めていた。しかし、フィンディのいる中央は押し切れない。

「フィンディ・レアーズか……………それも計算して中央に戦力を集めたが…………」

ライトシュタインは少しだけ口元を険しくする。

「剣士の力量を計ることができるのは、同じ剣士だけ…………か」

解放軍左翼、中心になって戦うクロコの前に、一人の剣士が現れる。

コール・レイクスローだ。クロコの姿を見るなりつぶやく。

「どうやらフレアより、ボクの方が彼女と因縁があるみたいだ」

「チッ、こいつか」

お互いににらみ合う。

先にコールが動く。素早く突進して、クロコに向かって鋭い斬撃を放つ。クロコも素早く反応する。

ギンッ！

二つの剣がぶつかり合った。

コールは間髪入れずに素早い斬撃を連続で放つ。クロコもそれに応戦する。

ギンギンギンギンギンッ！！

二つの剣が高速でぶつかり合う。

クロコは後ろに跳び、距離をとった。コールが追撃しようとするが、その前に素早く動く。高速で左右に動くクロコ。コールをかく乱する。

クロコは一瞬でコールの横についた。

ヒュンッ！

ギンッ！

クロコの斬撃はあっさり防がれる。

（……！！ やっぱりだ、こいつに変則的な動きは全く通じない！……となるとアールスロウに教わった技術を前面に出して戦うしかないか）

クロコは素早く逆をつき、斬撃を放つ。しかしあっさり反応され、コールのカウンターが飛ぶ。

ヒュンッ！

クロコの肩にカスる。わずかに血が飛んだ。

「……くっ！」

ひるんだクロコにさらに追い打ちをかけるコール。

ヒュンッ！

キーン

クロコはその斬撃を流した。コールの体がわずかに崩れる。素早く放たれるクロコの斬撃、しかし紙一重でかわされる。コールはすぐに後ろに跳んで距離をとる。

クロコは動きを止め、それを見つめる。

（ほとんど体勢を崩さなかったか……それより）

クロコの顔がわずかに険しくなる。

（こいつ、攻撃が当たらねえ……！ 最初に戦った時から一度も……！ ほとんど互角に打ち合ってるはずなのに……なんでだ！）

クラット基地の広場の高台、ロイム司令官は戦況を見つめていた。

「くっ……中央以外はかなり切り崩されているな」

ロイム司令官は広場を見下ろす。

「そろそろか……」

ロイム司令官は信号銃を鳴らしたあと、大声を上げる。

「リック・ノール、砲撃準備！」

広場に置かれた五台のリック・ノールが動き出す。長い長い五門の砲身が天に向かって上がっていく。

「撃てーッ！！」

ドンドンドンドンドンッッ！！！！

国軍陣形の五ヶ所に巨大な爆炎が上がる。

ドオオオオオン！！

クロコとコールのすぐ近くで巨大な爆発が起こった。

「なんだ……！！」

巨大な爆風の中、二人はたまらず後退した。

「あれっ！？ フロウさん！ フロウさーん！」

爆風の中、サキはフロウを見失った。

ライトシュタインが五つの黒煙を見つめる。

「例の新兵器か……」

しかし、ライトシュタインの表情は変わらない。

「グラン・マルキノならともかく、この程度の威力ではこちらに与える被害は小さい」

ロイム司令官は国軍の陣形を見つめる。

「与える被害は少ない、だが……これであちらの情報線を乱し、指揮系統を麻痺させれば、勝機は出てくる……！」

ライトシュタインは剣の柄を指で叩いた。

「恐らく敵の狙いは指揮系統の麻痺か……しかし、残念ながら、各部隊には事前に細かな指示を与えてある。何の問題もない」

解放軍右翼を引き裂いていく国軍陣形、その少し後方で、フレアは解放軍の方向を見つめていた。

「くそ、『千牙の狼』は戦ってくれないし、前に出ることには放火は

集中するし……オレってここにいる意味あるのかなあ」

フレアはため息をつく。

「『千牙の狼』がいるってことは、クロコは左翼かあ……あーあ」

クロコやアールスロウの奮闘もむなしく、解放軍陣形の両翼はついに分断された。

国軍の縦陣は解放軍陣を貫いたあと、わずかに前進し、横へと広がっていった。

それにより国軍の陣形は、解放軍の陣形の前衛と後衛をきれいに包み込んだ。

解放軍左翼、サキとはぐれたフロウはその様子を見て、表情を陰しくする。

「また、退路を塞がれたか……!!」

解放軍左翼の別の場所、クロコはその状況に混乱していた。

「なんだ!? どの方向を見ても国軍が見えるぞ。どうなってんだ!?!」

クロコは周りを見渡す。

「状況が変わり過ぎて……ってかオレはいま陣のどこら辺にいる

んだ……？」

クラット基地でその様子を見ていたロイム司令官の顔色が見る見るうちに青くなる。

「あと少し下がれば、基地砲による援護が出来ていたのに………それどころか、こう薄く広げられては、リック・ノールによる援護射撃もできん……！！」

ライトシュタインは解放軍の前衛と後衛を包む国軍を見て、軽く息を吐く。

「……さて、これで陣形は完成。あとはジワジワ潰すだけだ。私の役目は大体終えたな。あとは……」

解放軍中央を見つめる。

「フィンディ・レアーズだけか……」

解放軍中央を貫こうとする国軍の縦陣、その前衛の少し後方にラズアーム将軍の姿はあった。

前線からわずかに離れたその位置で、ラズアームは静かに目を閉じていた。

ラズアームは自らの過去を見つめていた。

軍事家系の貴族として生まれた自分。

親には常に軍人としての誇りを持って生きろと教えられていた。

自分もその通り、誇りを持った軍人として生きようと決意していた。

名誉よりも、権力よりも、財産よりも、誇りも持って生きる自分。自らの死すべき場所は戦場。勇敢に戦い、そして勇敢に死ぬ。それが自らにとつての理想だった。

そしてその理想の通りに、若き日の自分は磨きあげた剣技と共に、戦場を勇敢に戦い続けていた。

しかし、四年前のレイリホークの戦いで、自分はギルティ・レアーズと戦った。

磨き上げ、鍛え上げた剣技はことごとく打ち砕かれた。そしてギルティの剣によって自らの体は切り裂かれ、地面に座り込んだ。ついに自分の人生が終わる時が来たのだ。静かにそれを悟った。未練はない……はずだった。

しかし、自らに剣を向けるギルティの前で、自らが放った一言は、自分でも信じられないものだった。

「た、助けてくれ……私は……まだ、死にたくない……」

自分でも、なぜそんな言葉が出たのか分からない。ただ、体の震えが止まらなかった。

自分のその言葉に、誰よりも自分自身が驚いた。

（何を言っているんだ、何を！ 私の死すべき場所はここではないのか！！ やめるんだ！ 私は『誇り』を持って……）

目の前のギルティはその言葉を聞いて、静かに刃を下した。ラズアームはいまだに剣を握っていたが、そこから戦意を感じることはなかったのだろう。

それを見た瞬間、ラズアームは今までにないほど混乱した。

（私は……助かるのか……？ 敵に命乞いをして……むざむざと生きて……帰るのか……？）

そのあと、なぜ自分がそのような行動に走ったのかラズアームにも分からなかった。

「うわあああああッッッ！！」

ラズアームは刃を下したギルティに向かって斬りつけた。不意を突かれたギルティはあっさりと斬り伏せられた。

そしてこれが、自らの人生において、もっとも大きな戦果となった。

その後に付けられた異名は『奪位の狐』……誰よりも誇りのない異名だった。

その後、ラズアームは高い地位を得てもなお前線で戦い続けた。そして数々の戦果を上げた。しかしどれだけの戦果を上げて、その異名だけは消えることはなかった。

自らの誇りが取り戻されることは二度とないだろう、そう思っていた。

しかし……

ラズアームは目を開けた。

（この出会いはまさしく運命だ……）

ラズアームは前方を見つめる。

（あの時よりも、さらに鍛え上げた私の剣技で、ギルティを超えると言われるその息子を倒す……誇りをついに取り戻す時が来たのだ。もう誰も私を卑怯者などとは呼ばせない！ ギルティによって奪われた誇りは、その息子によって取り戻される……）

自らが立つその前方、そこから無数の兵士の悲鳴が響く。悲鳴はゆっくりゆっくりと近付いてくる。

その近づく悲鳴を聞き、ラズアームは笑みを浮かべる。

「さあ来い、早く来い……フィンディ・レアーズ！」

解放軍左翼、そこでは国軍の陣形が、前と後ろと内側から挟みこんでいる。

その中でコールは、解放軍の剣兵を次々と斬り伏せていた。

「コール！ コール！」

突然自分を呼ぶ声がする。声の方向を向くと、そこにはフレアがいた。

「えっ？ なんでいるの！？」

フレアは頭をかく。

「いやさあ、あつちは大体片付いちゃったからさ。こっちの方に来ちゃった」

「『来ちゃった』じゃないよ！ 命令無視だよ！」

「バレやしないって。それよりさあ、クロコはここにいるだろ？」

「うん……いたよ」

「よし、じゃあ探すかな」

そう言ってフレアは姿を消した。
それを見てコールはため息をつく。

「……やれやれ」

コールは再び解放軍側を見る。そのとき一人の剣士に気づく。
必死で剣を振るうサキの姿に。

「へえ……ボクより若い剣士がいたんだ」

クロコはひたすら国軍兵を斬り伏せていた。

（もう自分がどこにいるのか全く分からねえ……けど、今はとにかく戦うしかない）

クロコは知らぬ間に解放軍の中央付近に移動していた。

そこから少し離れた場所では、フィンディが嵐のような剣技を振るっていた。

解放軍中央、ここだけはフィンディの猛攻により、唯一押し切られずにいた。

恐ろしく正確な剣技で、最短の動きで敵を斬り伏せ続ける。

全く無駄な動き無く、敵を斬り伏せ続けるフィンディ。そのためフィンディはいまだに息切れ一つない。

(1088、1089、1090、1091……)

目の前の敵兵を次々と斬り伏せる。

ふと前方に目を向けた、その時だった。

フィンディの目の色が変わる。

目の前にピューター・ラズアームの姿があった。

二人はお互いに目を合わせた瞬間、同時に笑みを浮かべた。

「見つけたぞ！ ラズアーム！！」

「レアーズ！！」

二人は剣を構え、同時に突進した。

ギンッ！！

互いの剣が勢いよくぶつかり合った。

3 - 19 立ちはだかる者

解放軍左翼の一角、そこで、サキとコールは向かい合っていた。
サキはコールを見つめる。

（子供の剣士だ……年はボクより少し上ぐらい……たぶん、アレが
話に聞いていた強い剣士だ）

二人はにらみ合う。

サキは剣を真上に構えた。

（先手必勝だ！）

サキはコールに突進する。剣を真上に構えての低い姿勢だ。

コールは少し眉を寄せる。

（なんだ……？ あの変な構え……）

サキの剣先がわずかに光ったその瞬間、コールの目の前からサキ
がいなくなった。

「……！！」

コールは素早く後ろに跳んだ。突然足先からサキの剣が伸びてく
る。

ヒュンッ！

二人の距離が離れた。

コールは間一髪で斬撃をかわしていた。

それを見てサキの表情がわずかに険しくなる。

（避けられた……！？ まさか一撃目から……。勘か？ まぐれか？ それとも……）

コールはほほえみを浮かべる。

「面白い剣技だね」

サキは再び剣を構える。今度は真横だ。

再び突進するサキ。

サキの剣先が鋭く光った。そして再びコールの目の前からサキがいなくなった。

しかしコールは、今度は素早くその姿をとらえた、真横につくサキの姿を。

コールは素早く剣を振るう。サキも剣を振るう。

ヒュンッ！ ヒュンッ！

二人の剣が交差した、その直後、素早くサキが後ろに跳ぶ。

サキの肩は切り裂かれていた。

「……うっ」

サキは顔を歪める。

コールは冷静に口を開く。

「面白い剣技だったよ。よく考えられてる」

「……！」

「最初の攻撃、真上に構えられた剣……それに相手の意識が集中する瞬間に、さらに素早く身をかがめて、相手の死角にすべり込む。それによって自分の姿を消し去るわけだ」

コールはサキの剣先を見る。

「しかも……それに加えて剣の先に鏡を取り付けてある。タイミングを見計らって剣を返して、太陽光を反射させて光らせて、相手の意識を意図的に集中させている。二回目のは、その横バージョンだね……相手の意識を集中させるタイミング、死角に滑り込むタイミング、相当難しいんじゃない？　かなり特訓したんだろうね」

「……！！」

サキは驚いた。

「表情に出しちゃダメだよ。正解ですって言ってるようなものじゃないか。だけど……きみには同情するよ」

コールは不敵にほえむ。

「ボクの最も得意とするのは『見切り』……変則的な攻撃や小細工はボクには通じない。きみにとっては最悪の相性だね」

「く……ッ！」

サキは通常の剣の構えをする。その様子を冷静に見つめるコール。

「まだ……戦意は衰えないみたいだね。だけど、どうするの？ その仕掛けがなければ、実力的にきみはボクより数段下だろ」

それを言われてもサキはコールをキツとにらむ。

「それでも……ボクは引くわけにはいかない!!」

「へえ、そう」

フィンディとラズアーム、二人の剣がぶつかり合った直後だった。フィンディの体が後ろへと飛ばされる。

「……くっ！」

それを見てラズアームは笑みを浮かべる。

「どうした、フィンディ・レアーズ。まだ心の準備はできていないのか？」

二人の周りに両軍の爆炎が上がり、辺りを黒煙が満たす。

わずかに暗くなった草原の中で、フィンディは笑みを浮かべる。

「安心しろよ……もう前みたいな戦いはしない。いつものように、

ゲームのように、おまえの首筋を切り裂いて……それで終わりだ」

「ほう、なるほど。それでこそ『狂舞の悪魔』だ」

ラズアームは大剣を構える。

そして素早くフィンディの間合いへ入った。

ラズアームの一撃は辺りの空気をはじく強烈な力で放たれる。

ギョーンッ!!

フィンディは素早い動きでかわした。

ヒュンッ!

首筋へ伸びるフィンディの恐ろしく鋭い斬撃。

素早い反応でかわされる。すぐさま大剣が振るわれる。

ギョーンッ!!

ラズアームの重い斬撃を受け止めたフィンディが押される。ラズ

アームはさらに連続で斬撃を放つ。

「はあああああつ!!」

ギョーンギョーンギョーンッ!!

ラズアームの斬撃を受けるたび、徐々に崩されるフィンディの体勢。

フィンディは素早く横に跳び、ラズアームの斬撃をかわした。
距離が離れる二人。

「ふむ、この前よりは反応はいいが……」

その時だった。

ブシュッ！

ラズアームの肩が突然裂けて、血が噴き出る。

「……！！」

ラズアームは驚く。それを見てフィンディは笑みを浮かべる。

「どうした……？　いつ切り裂かれたか分からなかったのか？」

ラズアームは肩を触る、そして手に付いた自分の血を見た。その途端、ラズアームは大きな声を上げて笑った。

黒煙が満たす戦場の中、ラズアームの笑い声が響く。

その様子にフィンディはわずかに戸惑う。

「それでこそだ！　それでこそ、私が倒すに値する！　感謝するぞフィンディ・レアーズ！　おまえを倒して私は真の誇りを取り戻すのだ！！」

ラズアームは歓喜の声を上げた。

その言葉を聞き、フィンディは再び笑みを浮かべる。

「違うね……おまえはオレに狩られるただの獲物だ」

サキとコールは向かい合っていた。

緊迫するサキの表情、たいして余裕の表情を見せるコール。先に動いたのはコールだった。

コールは一瞬でサキの間合いに入る。

（速いっ！！）

サキは驚きながらも何とか反応する。しかし、素早くコールに横につかれる。

「くっ！」

ギンッ！！

サキは間一髪で反応し、斬撃を受け止める、しかしサキの剣はコールの剣圧に押され、横にそらされる。

「……うっ」

「終わりだ……」

素早くコールが次の斬撃を放とうとした、その時、突然横からの斬撃がコールを襲う。

ヒュンッ！

コールは素早く反応して、逆に跳んで避けた。距離を取り、その斬撃を放った相手をにらむ。

サキの隣にはフロウがいた。

「やっと見つけた」

フロウはサキを見てそう言った。

コールは不機嫌にフロウを見る。

「今度はきみか……」

コールはフロウの体の包帯に目が行く。

「ずいぶんひどいケガだね……よく戦場に出てくるよ」

「おほめの言葉、ありがたく受け取っておくよ」

フロウは剣を構える。サキも剣を構える。

コールはその二人を見つめる。

（一瞬あの小さい方が来て焦ったけど、あの傷だったら対して動けない……問題はないか……）

サキが前を見たまま小さくささやく。

「フロウさん……悪いんですが、主導で戦ってくれませんか？」

それにフロウが小さな声で答える。

「初めからそのつもりさ」

「フロウさんは……ボクの動きに一切構わず、好きなように動いてください。ボクがその動きに合わせますから」

「言っとくけど、僕は速いよ」

「大丈夫です。任せて下さい」

二人は同時にコールに突進する。フロウが先行し、素早くコールに斬りつける。

ヒュヒュヒュンッ！！

コールはフロウの高速の斬撃をあつさり見切りかわす。素早くカウンターの一撃を放とうとするその瞬間、
コールの横をサキがついた。驚くコール。

「……！！このタイミングで……」

ヒュンッ！

コールは紙一重でかわした。すぐに後ろに跳び、距離をとるコール。

フロウが素早く追い打ちをかける。

フロウの高速の斬撃にコールも応戦する。

ギインギインギインギンッ！！

無数の斬撃がはじける。

コールが斬撃の一つをかわし、素早くフロウの横についた瞬間だった。

サキが待ち構えていた。

ヒュンッ！

斬撃がコールの軍服をわずかに裂く。

「くっ……！」

フロウの素早い攻撃と、それに合わせたサキの攻撃。二人の攻撃がコールを襲う。

その攻撃にてこずるコール。

「なんだ……この年下の剣士の動きは……！！！」

サキはフロウの動きに完璧に合わせて動く。

（……ボクは、この基地に来て三度の戦場を経験した。鏡の剣技が完成する前のボクは力も速さもなく弱かった。そんなボクが戦場を生き抜くには味方と協力して戦う以外なかった）

サキはフロウの動きに合わせてながらコールを囲むように斬りつける。

（味方の動きに合わせ、味方と共に戦う。その技術をボクはこの基地に来て徹底的に磨き続けた。ボクが真に得意とする攻撃、それは……連携攻撃！）

フロウの高速の斬撃、そしてそれに合わせて放たれるサキの斬撃……二つの剣が徐々にコールを押ししていく。

「……くっ！」

フロウの斬撃を避けた直後のコールを、サキが斬りつけた瞬間だった。

それを避けたコールの体勢がわずかに崩れた。
それをフロウは見逃さなかった。

「うわあああッ!!」

フロウは自らの体の痛みにも耐え、全力でコールの懐に飛び込んだ。

ヒュンッ!

しかしかわされた。コールはその一撃すら見切っていた。
その瞬間だった。

ヒュンッ!

サキの剣がコールの脇腹を切り裂いた。

「……くっ!」

コールは素早く後ろに跳んで距離をとった。

二人とにらみ合うコール。

コールの脇腹からは血が流れ落ちる。痛みでわずかに顔を歪めた。
その直後、コールは後退していった。

二人はそれを追わなかった。

コールの姿が見えなくなった途端、フロウは傷口を押さえ、その場にひざをついた。

「フロウさん!」

駆け寄るサキ。フロウはわずかに笑みを作る。

「どうやら……ここらが限界みたいだ」

フロウはサキの目を見た。

「ありがとうサキ君。君のおかげで、僕はみんなの力になる事ができたよ」

フロウはほえんだ。

一方、解放軍右翼では、アールスロウは襲いかかる剣兵と戦っていた。

剣兵を斬り伏せながら、アールスロウは戦況を見た。

右翼は国軍の攻撃で潰されかけていた。

(……!! ここはもうダメだ。いま耐えているのはおそらく中央だけ……もう彼に頼るしかないのか、フィンディ・レアーズに……)

戦場の中央、黒煙が満たす中、フィンディとラズアームは向かい合っていた。

右肩を切り裂かれたラズアームは、それにも関わらず目を見開き、嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「いいぞ……レアーズ。それでこそだ」

フィンディも笑みを浮かべている。

「……早くおまえの首筋を切り裂いてやる」

二人は剣を構え、同時に駆けだした。

ギンッ！！

再び二人の剣がぶつかり合う。

「はあああつー！！」

ラズアームは掛け声と共に、強力な斬撃を振るい続ける。パワーだけではない、洗練されたスピードと死角を的確につく高い技術を備えた斬撃。それが連続でフィンディに襲いかかる。

対してフィンディはそれを時に受け止め、時にかわしながら防いでいた。ただ受け止めるだけでは、その圧倒的な力に押されてしまう。しかしフィンディはそれにしっかりと対応していた。ラズアームの斬撃はフィンディをとらえることができない。

「どうしたレアーズ！ 逃げることしかできんのか！！」

ラズアームが声を上げたその瞬間、

ヒュンッ！

フィンディの斬撃がラズアームの体をわずかに切り裂いた。

「くっ……」

ラズアームは素早く離れた。

「フツ……そうだ、そうでなくてはな」

ラズアームは再び剣を構え、素早くフィンディに突進する。

ラズアームは強力な斬撃を放つ。フィンディは素早くかわす。しかしすぐに、ラズアームの蹴りがフィンディを襲う。それもかわすフィンディ。その直後、

「はあああッ!!」

ラズアームはそのかわした動きに合わせて、渾身の一撃を放った。高速の斬撃がフィンディを襲う。

ギョーンッッ!!

しかし斬撃は空を切る。フィンディは一瞬の反応でそれかわしていた。

ヒュンッ!!

フィンディの斬撃がラズアームの脇腹を切り裂く。

「ぐ……ッ!」

ラズアームの顔が陰しくなった。

フィンディは剣を向けたまま、足を止める。笑みを浮かべるフィンディ。

「もうすぐだ……もうすぐおまえの命を奪ってやる」

「……おのれ、調子に乗るな!!」

ラズアームは再び斬撃を振るう。しかしフィンディにあっさりかわされる。

フィンディは笑う。

「さあ、今度はこっちの番だ!」

フィンディの無数の斬撃がラズアームを襲う。

素早く放たれ続ける斬撃は、ラズアームの死角を恐ろしいほどの確に正確に狙い続ける。

ラズアームの体のあちこちがわずかに切り裂かれ、血しぶきが舞い飛ぶ。

「……ぐっ!」

ラズアームが顔を歪めたその時、

ヒュンッ!!

フィンディの斬撃がラズアームの足をとらえた。

ラズアームの右足から血が噴き出る。ラズアームは思わず一步退いた。

それを見てフィンディは剣を止めた。

ラズアームは右足を引きずっている。ラズアームの表情が今までにないほど険しくなる。

フィンディはそれを見て満足そうにほえんだ。

「どうだ? 動かないだろう。足の筋を正確に切断したからな。もうどんなに頑張っても、祈っても、足は動いてくれないぜ……」

ラズアームは齒を食いしばる。

「まだだ……まだ……私は……私は……」

ラズアームはフィンディを決死の形相でにらみつける。

「貴様を倒して、誇りを取り戻すのだああああ!!」

ラズアームは剣を大きく振り上げた、その瞬間、

ヒュンッ!!

フィンディの剣がラズアームの体を切り裂いた。大量の血しぶきが飛び、ラズアームはガクツと地面にひざをつく。

ラズアームは乱れた息で小さく口を開く。

「そんな……私は……負けるのか」

ラズアームは呆然とした表情をしていた。

それを見て、剣を構えるフィンディ。

「さあ……ついにこの時が来た」

ラズアームの体は恐怖で震える。

それを見てフィンディはニヤリと笑った。

(……さあ!! 命乞いをしろ! 『助けてくれ』と、オレに命乞いをする!!) そう言うおまえの首筋を、オレが切り裂いてやる!! あいつが助けたこの命を奪って……オレは真の英雄になる

んだ！！）

「……………殺せ」

ラズアームは小さくつぶやいた。
それは思いもよらぬ言葉だった。フィンディは驚く。

「分かっていたのだ……本当は……」

ラズアームは落ち着いていた。小さく小さく語るような口調だった。

「貴様を倒したところで、私の誇りは取り戻すことなどできない……たとえ他人が、私の誇りを認めたとしても、私の中にある誇りは決して取り戻せない。あの時、あの瞬間に……私の中の誇りは完全に失われていたのだ」

「何を言っている……………！？」

にらみつけるフィンディを見て、ラズアームは静かに笑った。

「私は……本当はこの瞬間を待っていたのかもしれない。もう一度、あの時をやり直すために……」

ラズアームはそう言ったあと、自らの剣を横に放り投げた。

「これで私はやっと取り戻すことができる……自らの中にある誇りを……最後の最後で……」

ラズアームはフィンディの目を見た。

「殺せ……レアーズ」

フィンディは自らの手が震えるのを感じた。

（何をためらっている……！？ なぜ震えてる！ あとは止めを刺すだけだ……何を怯えているんだ！ いつものようにただ斬るだけなのに……！！）

昔の通りまだ好きなんだ。尊敬してるんだ。

（違う……違う、違う違う違う……）

フィンディの脳裏に父の姿がよみがえる。自分が尊敬していた頃に見た父の姿が……

（あいつは、オレの全てを奪った……！）

フィンディの脳裏に、母の最期の姿がよみがえる。炎の中へと消えていく、最後の姿が。

（殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！）

「うわあああああッッ……！！」

ヒュンッ……！！

フィンディの剣は、ラズアームの首筋を切り裂いた。

ラズアームは力無く、ゆつくりと地面に倒れ込んだ。首からは血が流れ、徐々に地面に広がる。

フィンディはそれをしばらく見つめていた。

「フッフ……ハハハハ……アハハハ、アッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！」

フィンディは大きな声を上げて笑った、今まで、どんな戦場でし
たよりも大きく、戦場全体に響くように、
大きな声を上げ、狂ったように笑い続けていた。

そんな時だった。

一人の剣兵がフィンディに襲いかかってきた。それを見て、フィンディはいつものように構えた。相手の首筋に狙いを定め、剣を振るおうとしたその時だった。

体が動かない。

剣を振るうことができない。

フィンディは驚いた。

（……なんでだ！　なんで……体が、震えてる。腕に力が入らない……！　！　何で……）

ヒュンツ！

劍兵の斬撃がフィンディの体を切り裂いた。
大量の血しぶきが上がり、フィンディの体は深く切り裂かれた。
フィンディはその事態に呆然とした。

「……どう……して」

フィンディは大きな音を立てて地面に倒れ伏した。

クロコは戦場を見渡していた。中央付近に迷い込んだままのクロコは、今の戦況を確認する。

（よし、ここはまだ押し切られてないな……）

その時だった。

戦場に無数に倒れ込んでいる兵士達、その一つに目がいった。最初に目がいったのは一人だけ違う服を着た白い將軍服の男だった。そしてすぐに……

その近くに倒れているフィンディの姿に気づいた。

「……！……！」

クロコは驚き、フィンディに向かって全力で駆け寄る。途中一人の剣兵が襲いかかってきたがあっという間に斬り伏せて、フィンディのすぐ横に立った。

「フィンディ……！」

クロコは叫んで、フィンディの体を抱き寄せる。

フィンディは少しだけ目を開けた。ゆっくりゆっくりと口を開く。

「なんだ、おまえか……ハハハ……最後に見るのがおまえの顔なんてな。ここら辺はクラット基地の兵士がいっぱいいるはずなのに……声をかけてきたのはおまえ……だけか……」

「おまえ……どうして……」

「ざまー……ないな……」

フィンディは小さく笑った。

「ずっと……思ってたんだ……父さんが、もし、オレのような戦い方をしていれば、オレは全てを失う事なんて……なかった。父さんも死ぬことなんてなかった……だけど」

フィンディはクロコの目を見た。

「おまえの言ったとおりだったよ……たとえ、それでも、オレは父さんのことが好きだったんだ。ずっとずっと……オレは父さんのような剣士になりたかった……」

フィンディの声は震えていた。

「父さんはオレの憧れで……ずっと好きで……だけど、それが原因で母さんは、炎の中で焼かれて……全てを失って……苦しかった、苦しくて……仕方なかった。だから……必死で否定し続けた。父さんと全く違う剣を振るって」

フィンディの目から涙がこぼれ落ちる。

「オレは……自分から逃げるために……ごまかすために……人を殺め続けた。これは、当然の報いだな」

そう言ってフィンディは涙を流しながら笑った。

「ファリスは分かってたんだ……オレが、自分をごまかしていたことを……そして、おまえも……結局、オレを本当の意味で見られていたのは、おまえ達、二人だけだった。今まで、気付かなかった……気付こうとも……しなかった」

フィンディの体が震える。

「どうしてだろうな……どうして……もつと早く……気づかなかつたんだろうな……どうして……あと少しだけ早く気づいていれば……どうして、最後の最後で……」

「最後なんかじゃねえよ」

クロコはそう言って、フィンディの体をグイッと引き寄せた。

「何を……」

クロコはそのままフィンディの体を背負った。

「最後なんかじゃねえ……最後になんかさせない。ファリスが待つてるんだろ、だったら、あきらめんじゃねえよ！」

クロコはフィンディを背負ったまま、戦場を歩く。

クロコの体を伝って、フィンディの血が地面に流れ落ちる。

「無理だよ……もう……助からない」

「うるせえ、待ってるやつがいるなら、死ぬその瞬間まで、生き残ることだけ考えろ……」

「オレを背負ったままじゃ……おまえが殺される」

「うつせー！ てめえ背負った程度でやられるか！」

クロコは戦場を見渡す。

（退路は敵に塞がれてる。なら、どうやって基地にこいつを連れてく……？ まてよ、そういえば……北の方に下り斜面が広がってたな。あそこでうまく身を隠せば、基地までこいつを運べる）

クロコは北に向かって小走りで走る。途中、三人の剣兵が襲いかかってくる。クロコはてこずりながらも、なんとかそれを斬り伏せていく。

しかし、さらに一人が背中から襲いかかってきた。

「……！！」

ヒュンッ！

剣兵の剣がクロコの左肩をわずかに裂く。しかし素早く反撃する。

ヒュンッ！！

クロコは剣兵を斬り伏せた。

「いつて……」

切り裂かれた左肩から血が流れる。

「下ろせ……このままじゃ……おまえも……」

「うるせえ――！」

クロコはまた走り出す。

「絶対に……絶対にあきらめてたまるか……」

クロコは真っ直ぐ前を見つめる。

「もう誰も……誰も失ってたまるか……！！」

クロコは兵士の群れを抜けた。

戦場から少し離れた草原を北に向かってクロコは走る。途中、ポ
タポタとフィンディの血が流れ落ちる。

（急げ……急ぐんだ……）

戦場から少し離れた所を走るクロコ、それに気づく敵兵はいるだ
ろうが、わざわざ離れた敵を襲う者はいなかった。

クロコは何とか下り斜面までたどり着いた。

今まで戦っていた草原とは違い、草がほとんど生えておらず、地
面がむき出しになっている。所々に小さな岩が顔を出していた。

その斜面を少し下り、振り向くと、後方の軍勢はもう見えなくな
っていた。

（こっちから見えないってことは、あっちからも見えないってこと
だ……ここを進めば、安全に基地まで戻れる）

クロコは剣を鞘に収めた。

フィンディはもう一言も話さなくなっていた。

（急がないと……早く……）

「見つけた」

「……！！」

突然、上から声がした。斜面を見上げると、少し上所に巨大な斧を片手に持ったフレア・フォールクロスの姿があった。

目が合うなり、フレアは高く跳びあがり、クロコの前にドスンと大きな音を立てて着地した。

「あきらめずに探してみるモンだね。まさか自分からあんな目立つ所に飛び出してきてくれるなんてさ」

前方に立ち塞がるフレアを見て、クロコは優しくフィンディを地面に下ろした。

そして、フレアの方に向き直る。

「……邪魔だ」

クロコは剣を引き抜いた。

「邪魔だ、どけえ！！」

クロコは殺気に満ちた眼でフレアをにらみつけた。それを見てフレアはニヤリと笑う。

少し傾き始めた日の光が二人を照らす。その光が映し出したフレ

アの影はまさに、大鎌を持った死神そのものだった。

3 - 20 破壊の斬撃

少し傾き始めた日の光が照らす中、大草原では解放軍と国軍の激しい戦いが続いている。そこから少し北、戦場から隠れた下り斜面の荒野の一角、クロコとフレアは向かい合っていた。

クロコは殺気に満ちた目でフレアをにらみつけている。
対してフレアは余裕の笑みを浮かべている。
フレアが口を開く。

「戦う前に、少しだけ話を聞いてくれないか？」

「そんな時間はねえ」

「そう言つなよ。すぐに終わらすから」

フレアはそう言ったあと、一呼吸おいて再び口を開く。

「スコアを知ってるだろう？」

「……！」

「オレはあいつの友達さ」

わずかに反応するクロコ。フレアは再び話し出す。

「オレもあいつもシャルルロッドって言う町の生まれでね。小さい頃からの友達さ」

フレアはクロコの目を見る。

「きみの話もスコアに聞いた。直接そう言ったわけじゃないけど、スコアはきみのこと、大切な友達の一人だって感じてる」

「……………」

クロコは少しだけ辛そうな顔をした。
フレアはほえんだ。

「だけど、もし戦場できみに会えば、スコアはきみを迷わず斬るだろう。あいつの仲間を守るって決意はそれだけ固い。だけどさ……………」

フレアはほえんでいたが、黄色の瞳が少しだけ悲しげに光っていた。

「あいつはすごいやつだけど、友達殺して平然としてられるほど、強くないんだ。だからさ……………」

フレアはなおもほえんでいる。しかし、目に強い決意がこもる。

「あいつはオレの大事な友達だ。だからさ、スコアにきみは殺させない。きみを殺すのは……………オレだ」

フレアはそう言ってユラリと斧を斜めに構えた。

「……………さあ、やろつか」

斧を構えるフレアを見て、クロコも剣を構えた。

二人は真剣な表情で、互いににらみ合う。

その後、

クロコが動いた、フレアに向けて突進する。クロコは素早いスピードでフレアに向け、一直線に駆ける。

クロコはフレアの間合いに入った。

（……！）

しかし、間合いに入ったにも関わらずフレアは斧を振らない。

（なんでだ……？）

クロコは一步一步、フレアの懷に迫る。クロコがフレアを斬りつけるであろう、その瞬間、

ギョオンッ！！

フレアの斧が動いた。

（速い……！！）

凶悪な速さでクロコに向けて一直線に斜めに振り下ろされる。その瞬間、クロコは気づいた。

（逃げ道が……無い！？）

前後、左右、上下、どこにも逃げ場がなかった。絶妙な角度と、完璧なタイミングで振り下ろされる恐ろしく速い斬撃。

クロコに残された手段は……

ギイイイイインツツツ！！！！

クロコは巨大な斧を剣で受け止めた。その直後、

「……………！！！」

クロコの体は斧と共に高速で流れた。そしてそのまま地面に斜め方向に叩きつけられる。その瞬間、体が粉々になるような強烈な衝撃がクロコの全身に走った。

クロコはそのまま、周りの土をえぐりながら、地面に長く長く引きずられた。

止まるクロコの体。

地面に横向きで倒れるクロコ。
それを見つめるフレア。

「……………死んだかな？」

クロコはしばらく動かなかった。しかし、しばらくしてわずかに震える。

「……………！！！」

声も出なかった。体全身に広がる深い鈍い痛み。剣による切り傷とは違う、鈍い暴力的な痛み。クロコはその痛みに声も出せない。その様子をフレアは見つめる。

「生きてるみたいだね。だけど……………そのまま寝てる気？ 友達死ん

じゃうよ」

「……………！！」

フレアのその言葉を聞き、クロコはすぐにヨロヨロと立ち上がる。苦しそうな表情のクロコ。

フレアは余裕の表情だ。

「さすがにやるね。オレは四十人以上の敵と一騎討ちしたけど、一撃目を受けて生きてたのは、きみを入れて七人だけだよ」

クロコは答えない。痛みに耐えるように歯を食いしばり、再び剣を構える。

再びクロコは突進した。

先ほどより動きが鈍い。それでもクロコは全身に広がる痛みに耐え、必死で動く。

今度はすぐに間合いに入らない。左右に素早く動き、フレアをかく乱する。

（……………こんなデカイ武器持ってたら、すぐには反応できないはず……………！！！！）

クロコは一瞬でフレアの横をついた。

（とつた……………！！！！）

クロコが一步踏み込んだ瞬間だった。

フレアは一瞬で体を切り返し、クロコの方を向いた。

（ウソだ、速すぎる！！！！）

ギョオンッ！！

再び襲いかかる斜めの斬撃。クロコはまた剣で防御するしかなかった。

クロコは再び地面に叩きつけられ、地面をえぐりながら引きずられた。

止まったあと、クロコの意識はまだあった。すぐに立ち上がろうとした、しかし……

「……！！！！　うわあああああ！！！！」

クロコは思わず叫んだ。全身を貫く鈍い痛みは先ほどよりも激しさを増していた。

乱れた呼吸を三回繰り返したあと、クロコは唇を噛んで立ち上がった。軍服の上着はすでにボロボロになっていた。

その様子を冷静な表情で見るフレア。

「へえ、すごいな。まだ立ち上がるんだ。二撃目で立ち上がったのは君で三人目だよ……だけどさ」

フレアは再び斧を斜めに構える。

「三撃目で立ち上がったやつはいないよ……」

クロコは自らの意識が揺らぐのを感じた。

(……………　まだまだ……………　まだ……………　倒れるわけにはいかない)

クロコは剣を構えた。しかしその直後、

「……………!!」

クロコは気づいた、自らの剣に亀裂が走っていた。
それにフレアも気づいた。

「あーあ、その剣もう持たないね……………次のを防げるかなあ」

「うるせえ……………関係……………ない」

クロコはフレアを見つめる。

（次のを食らったら……………さすがにヤバイ……………どうすれば、あいつの斧をかわせる）

クロコはゆっくりと息を整える。

（前後、左右、上下……………どこにも逃げ場はない……………）

しかしその時、クロコはハッとした。

（……………ある!!　あと……………一か所だけ……………）

クロコの真紅の瞳が鋭く光った。
それにフレアが気付く。

（何か狙ってるな……………）

クロコは揺らぐ意識を必死で整えた。辺りが鮮明になってくる。クロコは小さく息を吐く。フレアを静かに見つめた。そして突進した。

クロコは左右に動き、再びフレアをかく乱する。それを目で追うフレア。

(……まったく、この傷で良く動くよ)

クロコはフレアの横をついた。

フレアへと一歩一歩近づくクロコ。しかし、

フレアは一瞬で体を切り返した。

ギョオンツツ!!

フレアは見た、黒い軍服が真つ二つに裂けるのを……

(やった……!!)

フレアはそう思った瞬間、すぐにハツとなった。

裂けているのは軍服の上着だけだった。クロコがいない。

フレアは気付いた、空中に高く跳び上がったクロコの姿に。

クロコの剣はすでに振り下ろされようとしていた。

フレアの体は斧を大きく振り抜いたことにより斧と共に流れていた。

「うおおおおおツツ!!」

クロコは大きく叫んで、斬撃を放とうとした、その瞬間……フレアはニヤツと笑った。

流れる斧の動きを利用して、斧の柄の先端を槍のごとくクロコに突き立てた。

空中にいるクロコは身動きが取れない。

メキッ……

鈍い音と共に、柄の先端がクロコの体にめり込んだ。
強烈な力によって放たれる突きは空中のクロコを軽々と吹き飛ばした。

宙をゆつくりと舞うクロコ。

それを見つめるフレア。

「人つてのはさあ、思いつく発想が似たり寄ったりでね……それをやったのは君で四人目だ」

大きな音を立てて地面に落ちるクロコ。

痛みに耐え、なんとか立ち上がるうとしたその時だった。クロコの目の前にフレアは立っていた。

ギョオンッ！！！！

膝をついていたクロコができたことは、守ることだけだった。クロコの剣は斧を受け止めた、しかし、もう受け身も取れない。クロコの体は無抵抗に流される。

勢いよく地面に叩きつけられたクロコの体は、今度は地面に跳ね返され、大きく空中に跳ねた。

再び宙を舞うクロコ。しかし先ほどとは違い、もう無抵抗に浮き上がっていただけだった。地面を向いたクロコの瞳がとらえたのは、地面にむき出しになっている大きな岩だった。

グシャッ……

クロコの体は岩の上に横になったまま動かなかった。

それを見て、フレアは静かに息を吐いた。

フレアの顔には笑みはなかった。ゆっくりと斧を下ろす。

戦場の方を再び見つめ、歩き出そうとした時だった。フレアは何か動く気配を感じた。

フレアはそれに目を向けた。

クロコは立っていた。

ボロボロの体で、それでも立ち上がり、真紅の瞳でフレアをにらんでいた。

フレアは無表情でクロコを見つめる。

「……驚いたな。まだ立つのか」

クロコの真紅の瞳の光はまだ衰えていない。

クロコは小さく息をしながらフレアを必死ににらみつける。腕をゆっくりと上げ、剣を構えた、その時だった。

バキ……

クロコの剣が砕けた、刀身の真ん中あたりから、砕け散り、ボロボロと上半分が地面に落ちた。

「……！！」

それを見て驚くクロコ。

その様子を見て、フレアは小さなため息をつく。

「……もうやめときなよ。なんだかかわいそうになってきた。見逃してあげるから今から戦場に引き返しな。どちらにしろこの状態じゃ、手当てを受けなきゃ、きみは死ぬし……」

「うるせえ……」

クロコはそれでも強い目でフレアをにらむ。

クロコは再びゆっくりと息を整える。息をするだけで全身が鈍く痛む。

（……骨はいつたい何本折れたんだ……そこら中が震えてる………足は……良かった……まだ生きてる。これなら……まだ戦える）

クロコは再び剣を構える。

その様子を見ていたフレアの背筋にわずかに寒気が走る。

（信じられないな……まだ諦めてないよ）

フレアはクロコをにらみながら口を開く。

「きみの根性を認めるけどさ。もう無理だよ。分かっただろう？ どんなに頑張ったって、オレの斧を突破する道はない。それにその剣じゃもう防御もできない。きみはもうどうやっても勝てないよ」

その言葉にクロコは答えない。ただ静かにフレアをにらんでいる。真紅の瞳は鋭く光っていた。

フレアはそれを見て、少しだけ口元がきつくなる。

「そうか……じゃあ終わりにしよう」

フレアはユラリと斧を斜めに構えた。
クロコは折れた剣を構える。

二人は静かににらみ合っていた。
しばらくの静寂。

フレアはそのクロコの様子をジッと見る。

（かかってこない……もう動けないんじゃないか……？　ならオレから……）

その瞬間、クロコは動いた。

勢いよく駆けだし、フレアに突進する。

（まだこれだけ動けるのか……！）

クロコは歯を食いしばりながら痛みに耐えていた。それでもクロコは足の力を緩めない。

そんなクロコをフレアは見つめる。

（……さあ、どう攻めてくる気だ）

フレアは突進してくるクロコの眼を見た。真紅の瞳は燃えるように輝いていた。それを見た瞬間、フレアは直感した。

（……こいつ、正面から真っ直ぐ突進する気だ……！）

フレアの予想通り、クロコは真っ直ぐフレアの懐に向かって飛びこんだ。

フレアは腕に力を入れる。

「終わりだクロコ……！」

ギョオンッ！！！！

巨大な斧は斜め方向に真っ直ぐとクロコに向かって突き進む。
それでもクロコは真っ直ぐにフレアだけを見つめていた。足ももう止めない。

(……防御をあきらめて、斧を抜ける気だ……だけど、そのスピードじゃあ、絶対に届かない)

その時、フレアは気付いた、クロコの左手に握られている岩石の欠片に。

「……！！」

クロコはその岩石を斧の刃に当てた。

岩石はあっさりと切断されていく。しかし、斧の速度がほんのわずかに鈍った。そのほんのわずかな時間の遅れ……

クロコは斧の刃を抜けた。そしてフレアの懐に入った。

「……道がなければ、作ればいい」

クロコは折れた剣に残るわずかの刃を突き立てた。

ビュンッ！！！！

フレアの体が深く切り裂かれた。

表情を歪ますフレア、その体からは大量の血が噴き出した。

フレアの体はゆっくりと後ろへ傾いた。

巨大な斧と共にフレアの体は音を立てて、地面に仰向けに倒れた。
フレアは鈍い咳をした。

倒れたフレアはうつろな表情で自分の体に目を向ける。

「……………あーあ、ひどいな……………あんなボロボロの剣で斬るもんだから、傷口がえぐれてるじゃないか……………これじゃあ、もう、助からない……………」

フレアは上に目を向ける。近くに立つクロコが見下していた。
クロコは悲しい顔でフレアを見つめていた。

フレアはそんなクロコの表情を見て、ゆっくりとほえむ。

「……………おかしい……………よな……………スコアはオレの友達で……………きみもスコアの友達で……………こんな形で出会わなければ……………オレときみは友達になっっていたかもしれないのに……………」

フレアは悲しそうに笑っている。

「……………どうして、オレときみは……………殺し合ってるんだろう……………」

フレアは静かに目を閉じた。そして動かなくなった。

3 - 2 1 暗闇の中で

地面に伏しているフレア。

クロコはゆっくりとそれに背を向けた。少し離れた場所に倒れているフィンディに向かってヨロヨロと歩く。

フィンディの前に立った。

フィンディの目は薄く開かれ一点を見つめている。倒れている地面には血が広がっていた。

「……フィンディ」

クロコは名を呼んだ、少し声を出しただけなのに、体中に痛みが走った。それでも構わず声を出す。

「フィンディ!!」

クロコが大きな声を出すと、フィンディの目に浮かぶ瞳がクロコの方へ動いた。

「……良かった、生きてた」

何も答えないフィンディを、再び背負おうとする。しかし……

「……うつっ!!」

クロコの体に鈍い痛みが突き抜ける。思わす声が漏れた。

それでもクロコは齒を食いしばり、フィンディを背負った。

クロコはゆっくり歩き出す、もう走ることはいできない。基地を指し、その方向をゆっくりと歩く。

歩くごとに、クロコの息が乱れてきた。地面にしたたり落ちる血は、フィンディのものなのか、自分のものなのか、もう分からない。クロコはあまりの苦しみでそのまま倒れてしまいそうだった。あまりの痛みで泣きだしてしまいそうだった。それでもクロコは歩き続けた。

少しずつしか進まない。

それでもクロコは歩き続けた。

傾いた日は、夕暮れへと変わり、そしてゆっくりと沈んでいった。それでもクロコは歩き続けた。

意識がかすんできた。気持ち悪くてたまらなかった。

頭の中に響く、苦しそうな息切れは、恐らくは自分のものなのだろうと、クロコは思った。

ずいぶん歩いたはずなのに基地が見えてこない。

このまま意識を失ってしまうかもしれない、そうふと頭をよぎった時だった。

「……置いていけ」

小さな声がした。フィンディの声だった。

「オレを……置いていけ……」

「……いやだ」

「このままじゃ……二人とも、死ぬ……おまえだけでも……」

「いやだ！ 絶対に置いていくか！……」

「オレは……もう……助からない……だから……」

「おまえを置いて、オレだけ助かるぐらいなら、ここで二人で死んだ方がマシだ!!」

「……おまえにも……待っているやつが……いるんだろ……」

「だから、二人で生きて帰るんだよ!!」

クロコは絞り出すような声で叫んだ。それを聞いてフィンディはほほえんだ。

「……おまえって……本当に……バカ……だな」

フィンディの目から一粒の涙がこぼれる。涙はほほを伝い、地面へと流れ落ちた。

そしてそのまま、フィンディは何もしやべらなくなった。

クロコは歩き続けた。

フィンディはもう動かなかった。しかしクロコは絶対にそれを手放そうとはしなかった。

(生きてる……生きてる……生きてる)

クロコは自分にそれを必死に言い聞かせた。

クロコはひたすら歩き続けた。

目の前には暗闇だけが広がる。辺りは静寂に包まれていた。本当に進んでいるのか、本当に基地の方向を歩いているのか、それさえも分からない。

それでもクロコは歩き続けた。

少しずつ少しずつ歩き続けた。
長い時間、歩き続けた。

もういったいどれだけの時間、歩き続けているのだろうか。クロコには全く見当もつかなかった。
クロコの意識がぼやけていく中、ふと前を見ると、遠くに小さな明かりが見えた。

「……！」

基地だとクロコは思った。今すぐにも駆け出したかった。けれど、もうクロコにはその力はない。

ゆっくりとゆっくりと歩きながら進んだ。

それに合わせ、光はゆっくりとゆっくりと近付いてきた。

そしてその光がしっかりと見えた、その瞬間だった。

「……！！！」

クロコの思考は止まった。

基地が赤く燃えていた。

そして、その光が高く立てられた何かを照らしている。

……旗だ。

国軍の旗が高く掲げられていた。

クロコはその場でひざまずいた。

（負け……た？ オレ達は負けたのか？ そんな……どうすれば……どうすればいい……もう、ケガの手当てもできない……どうすれば……）

クロコの中の希望が小さく音をたてて崩れていった。

クロコは地面に手を当て、呆然とする。
意識が徐々に薄らいでゆく。

（ここまでなのか……）

その言葉がクロコの脳裏によぎった瞬間だった。
クロコは自らの腕にかみついた。歯は肉をちぎり、手から血が流れる。

「まだまだ……まだ、オレは生きてる……！」

クロコは震えながら再び立ち上がった。
その時だった。

「クロコー！」

誰かが大きな声で自分の名を呼んだ。クロコは声の方向を見た。
見ると、目の前に馬にまたがったガルディアの姿があった。

「良かった、クロコ、見つけた」

ガルディアは嬉しそうに笑う。

「……なんで、あんたがココに」

「話はあとだ、逃げ延びたやつらはここから西の基地に避難してる。とにかくそこまで逃げるぞ」

ガルディアはクロコの体を見て、思わず眉を寄せる。

（ひどいケガだ……）

そしてクロコが背負っているフィンディにも気づく。クロコが口を開いた。

「フィンディが……ひどいケガなんだ。早く手当しないと」

ガルディアはフィンディをジッと見つめた。

「……分かった。この馬なら三人ぐらい大丈夫だ」

ガルディアは馬から降り、クロコを持ち上げて、馬に乗せた。続いてフィンディを持ち上げてクロコの後ろに乗せた。

「クロコ、フィンディを置いていきたくなかったら、離すなよ。もうひと踏ん張りだ」

ガルディアはクロコの前にまたがり、馬を走らす。

クロコは片腕でガルディアにつきまわり、もう片腕でフィンディを抱き寄せていた。

馬がガクンガクンと揺れる。

クロコは薄くなつていく意識を必死でつなぎ止めていた。
闇の道を馬はひたすら駆けていた。

クロコの視界にも闇のみが広がる。

今すぐにでも、頭の力を抜いて、眠ってしまったかった。それを
必死でこらえて、クロコは必死で意識をつなぎ止める。

クロコの意識が徐々にぼやけていく。意識にかかるかすみ徐徐
に濃くなっていく。

歯を食いしばろうが、唇をかもうが、舌をかもうが、意識のかす
みをとることは出来なかった。

ふと、クロコは闇の中で、母の顔を見た、その隣には父もいた、
妹もいた……小さい頃のブレッドもいた。みんな楽しそうに笑っ
ている。

（そうだ……そういえば、オレにもこんなに幸せだった時があつた
んだ……）

「クロコー!!」

ふいにガルディアの呼び声が響いた。クロコはハッとしたり。

「もうひと踏ん張りだ!! まだ倒れるなよ!!」

「……ああ」

クロコは返事をして、再び必死で意識を集中させた。
長い長い時間が過ぎていく。

視界には暗闇だけが広がり、それ以外、何も見えない。

馬が大きく揺れているはずなのに、その感覚がまるでない。

もうどれだけ意識を保っているのか分からない。

永遠とも思える時間がクロコの中で過ぎていく。

それでもクロコは必死で意識をつなぎ止める。

「クロコー!!」

またガルディアの声が聞こえた。

「もう大丈夫だ。基地に着いたぞクロコ」

その声を聞いた途端、クロコの意識は深い闇の中へと沈んでいった。

長い時間、どこかをさまよっていた気がした。
安らかな時がクロコの中を流れていく。

クロコはゆっくり目を開けた。

すると誰かの声がすぐ近くで聞こえた。

「クロコー!!」

するとフロウが自分の顔をのぞき込んだ。

「クロコさん!!」

すぐ隣にサキの顔もあった。

クロコは小さく口を開いた。

「フロウ……サキ……良かった。生きてたのか……」

「それはこっちのセリフだよ！ あゝ、良かった」

フロウは嬉しそうに笑う。サキも嬉しそうに笑っていた、目からは涙が流れている。

それを見てクロコも思わず笑みを浮かべた。

クロコは体を起こそうと思ったが、体が動かない。仕方がないので、寝たまま口を開いた。

「オレ……生きて、帰れたんだな」

クロコはぼんやりと天井を見上げた。そしてふとあることに気づいた。

「……フィンディは？」

クロコは二人の顔を見て聞いた。

それに対し、フロウが口を開いた。

「それは……」

小さな鳥の鳴き声が響く。

暖かい陽射しをまぶたの上から感じる中、フィンディは目を覚ました。

見るとすぐ近くでファリスが座っていた。

「フィンディー!!」

ファリスは叫んだ。そしてすぐに大粒の涙を流した。それを見て、フィンディは口を開く。

「……………オレ、生きてんのか」

「良かった……………良かった……………」

ファリスは震える声を出し、嬉しそうに泣いていた。フィンディはそれをボーッと見つめていた。

「オレ……………どうなったんだっけか……………」

フィンディは自らの記憶をなぞる。

（ラズアームを斬った後までは覚えてる……………そうだ、そのあと、オレは斬られて……………それで、あいつが来たんだ……………）

「クロコに……………助けられたのか……………」

それを聞いて、ファリスが泣きながらうなずいた。

「うん……………クロコがあんたを連れてきてくれて……………」

フィンディはまだぼんやりとした表情をしている。

「どうして、生き残っちまったんだろう……」

フィンディは天井を見つめながらボソツと言った。

「オレは……多くの命を奪った……兵士としてじゃなく、仲間を守るためでもなく、ただ……自分の苦しみから逃げるためだけに……。どうしてオレは……罰を受けずに生き残ってるんだろう」

ファリスはそれを聞いて、うるんだ目でフィンディをにらみつけた。

「あんたが重傷じゃなきゃ、今すぐにでもあんたを叩いてるよ」

フィンディはそれを聞いてほえんだ。

「そっか……おまえが待ってたからか……おまえがいたから、オレは、生きて帰ってきたのか」

「……バカ」

「……なんだろう……不思議な気分だ。なんだか、懐かしい気分がする」

その言葉を聞いてファリスは笑みを浮かべる。

「懐かしくて当たり前だよ。だってここはハーモニアだよ。わたしとあんたの生まれ故郷だよ」

「……そうか」

「わたし達は帰ってきたんだ」

「……………違う、あの町は一度燃えた。オレの大切なものはもうここにはない。ここはもう、別の町だ」

「だけど……あんたは懐かしいって言った」

「……………」

ファリスは優しくほほえむ。

「やり直そう、フィンディ……………ここからもう一度……………たとえどんな罪を背負ったとしても、生きていれば、それが出来るんだから」

ファリスのその言葉を聞いた途端、フィンディの目から大粒の涙がこぼれた。

フィンディの口元が震える。

「そっか……………オレ……………生きてる……………生きてるんだ……………もんな」

それから数日後、クロコは包帯グルグル巻きの状態で廊下を歩いていた。隣にはフロウとサキがいる。

フロウが口を開く。

「僕らはフルスロツクに戻るみたい」

「敵の方は大丈夫なのか？」

「まだ動き出さないみたいだね。だけど、これから大きく動くと思う」

「そっか」

クロコは少しうつむく。そして顔を上げる。

「そういえば、フィンディは回復したのかな」

「フィンディは君よりさらに重傷だから、まだだろうね」

「そっか……」

「たぶん復帰にはしばらくかかるよ」

「……いや」

クロコは小さく口を開いた。

「傷が癒えても、あいつはもう、戦場には戻らない」

「えっ？」

「……たぶんな」

「……………」

「そういえば……………」

クロコはふと思い出した。

（フロウとサキはこの基地に避難してた。どうしてガルディアは馬に乗って、あの時、あんな所にいたんだ……………？）

「どうしたの？」

フロウがクロコの顔を見ていた。

「……………なんでもない。まあ、なんにしたって、やっと帰れるな」

「……………うん、そうだね」

「あの……………ボクもフルスロツクに戻る予定です」

「えっ！？ サキ君も」

「はい、クラットが落とされてしまったんで」

「そっか、そうだね」

「喜んでいいのかなのかってやつか」

ハーモニアよりはるか南東の地、シャルルロッド、そこにある基地内の廊下をスコアは歩いていった。

すると向かいにラティル大佐が歩いてきた。

「あつ、ラティル大佐、どうもこんにちは」

ラティルはスコアの方を見てハツとした。そしてすぐ、少し険しい表情をした。

「……………」

普段と違うラティルの様子にスコアは少し戸惑った。

「……………」あの、どうかしたのですか」

「……………」先ほど手紙鳥が届いてな。クラット基地攻略戦の報告が来た」

「あの……………」どうなりましたか？」

「我々の勝利だ」

それを聞いてスコアはほほえむ。

「良かった、勝ったんですね」

しかしラティルはあまりいい表情をしていなかった。

「それともう一つ……………」君にとっては辛い報告になるだろう」

「……？」

基地にある武器庫、スコアはいつものようにバッグ片手にそこへ入った。

「レイアー、ボクだよ」

するとすぐにレイアーがヒョコツと出てきた。
それを見てスコアは笑みを浮かべ、レイアーに近寄った。

「今日はね、サーモンのステーキだよ。サラダもあるんだ」

そう言ってスコアはバッグを開ける。その時だった。

「どうしたの……スコア」

レイアーが突然そう言った。

「え……？」

スコアは手を止め、キョトンとする。

レイアーは無表情でスコアの方をジーツと見る。

「いつものと……何か様子が違う」

「そ、そんなことは……」

「辛いことでも……あつたの？」

レイアがその言葉を放った、すぐあとだった。

ポタ……

スコアの目から涙がこぼれ落ちた。

「あれ………！？」

スコアは驚いて、自分の目を触る。

「ハハハ、なんでボク泣いてるんだろう？ 変だな……」

スコアの目から見る見るうちに涙があふれてくる。

「スコア……何があつたの？」

「な、なんでもないんだ」

スコアがそう答えるとレイアは黙った。

しばらくの沈黙のあと、レイアは口を開いた。

「ねえスコア……あなたはわたしの傷を見た時、泣いてくれた。わたしの苦しみを少しだけ受け取ってくれた。そしてあなたはわたしを守ってくれると言ってくれた」

レイアはスコアを見つめた。

「だったらわたしにも、あなたの苦しみを少しだけ分けて。わたしにもあなたを守らせて……」

レイアが優しくそう言った時だった。スコアはガクツとひざをついて崩れた。そして口元を震わせた。

「……少し前に……聞いたんだ……友達が……フレアが……死んだって」

スコアの目から涙があふれる。

「フレアは……おしゃべりで……マイペースで……だけど、だけど……すごく優しくて……優しくて……」

それを聞きながら、レイアはスコアの前にしゃがみ込んだ。そしてスコアを優しく抱いた。

その途端、スコアは大きな声を出して泣いた。大粒の涙を流し、部屋に響き渡る大きな声で泣き続けた。

スコアの泣き声はしばらくのあいだ、部屋に響き続けていた。

0 - 5 グレイ・ガルディア（前編）

それはとある過去の出来事。

ガルディアにとって、将来忘れることのできないある出来事。
そしてそれは、ガルディアにとって、もっとも大きな罪となった
出来事。

「軍をやめる……！？」

司令室に太い声が小さく響いた。

司令室の幅の広い机に座っているグロン司令官はそう言った直後、
しばらく茫然としていた。

グロン司令官は解放軍サートルポート基地の司令官だ。年齢は四十代前半、白い整った髪と、深いしわの寄った顔で、どこか重々しい雰囲気を持っている。

茫然としているグロン司令官の正面には、二十二歳のグレイ・ガルディアが立っていた。

「はい、もう決めたことです」

ガルディアははっきりとした口調で言った。

「本気なのか……本気で軍をやめると……？」

「はい」

「今の君の存在は解放軍にとってどれほどのものか、君も自覚はあるだろう」

「だからこそ今なんです。これ以上大きな存在になる前に……今ならまだ、間に合うと思いました」

「……………なぜだ、グレイ」

グロンは少し悲しげな表情でガルディアを見た。
その表情を見たガルディアは少し辛そうな顔をする。ガルディアの口元がゆつくりと動く。

「……………戦う意味が分からなくなりました」

「戦う意味だと……………」

「オレは……………初めて解放軍に入ったところ、このおかしくなった国を正すには戦う以外、方法がないと、そう思っていました。そしてそれをみじんも疑っていませんでした……………けれど、軍人として生きて様々なことを知るうちに、自分の行為が本当に正しいのか疑問に感じ始めたんです」

「……………それが、軍をやめる理由か」

「はい」

「だが、グレイ。君はその方法を捨てたとして、別の方法があると

思うのかな？ 別の方法でこの国を変えられることができると……？」

「分かりません。けれど、今の疑問を抱えたまま、人を斬り続けることはオレにはできません。意味を見いだせないまま人を殺め続けることは……辛いです」

ガルディアは視線を落とした。
グロンは目を閉じて黙った。

「申し訳……ありません」

ガルディアはわずかに震えた声で言った。

「残念だ」

「次の戦場がオレにとっての最後の戦場です」

「……そうか」

「それでは失礼します」

ガルディアはそう言って背を向けた。

「生き残れよ。グレイ」

「はい、ありがとうございます」

それから数日後、サートルボードより北の地ロック。

解放軍ロック基地の広間では多くの兵士が戦闘の準備をしていた。その中でガルディアはロック基地の隊長オルモアと並んで歩いていた。三十代前半の丸い目をした筋肉質の男だ。

オルモアはあごをさする。

「状況は正直あまり良くない」

「テラル基地が突破され、国軍はここへ真っ直ぐに向かっていると聞きました」

「ああ」

「ですが、聞く話によると国軍の規模はそれほど大きくはない。テラル基地突破の際に、かなりの戦力を消耗したのでは？」

「うーむ、実はそうでもないんだ」

「完敗したと……？」

「ああ、今回の敵勢は規模はそれほどでもない。しかし質が非常に高い。名うての実力者がかなりいるという情報もある」

「それは厄介ですね……」

「だからこそ、君には期待しているのだよ。活躍し始めて一年程度だが、すでに一部では『黒の魔将』などと言われているそうだよ」

「ハハハ『黒の魔将』ですか、またずいぶんと威圧的な名ですね」

「私は君に相応しい名と思うがね」

「ふ……そうですか。軍全体に広まる前で良かった」

「……？ 何の話だ」

「いえ、何でもありません」

ガルディアは広間の様子を眺める。
すると広間を走る小さな子供の支援員に気づいた。

「あんな子供もいるんですね」

「ああ、小さいが良く働くよ」

ガルディアは笑顔を浮かべる。

「オレは子供好きなんですよ。かわいいな」

「ハハハ、こういう状況ではああいう姿に元気をもらえるな」

「ですね、でもそろそろ避難させないと……」

「ああ、じきするだろう」

その時、ガルディアは、広間で戦闘の準備をする兵士の中で、一人の若い兵士に目がいった。
年齢は十代後半、白い髪と冷たい目つきをしている。その目に浮かぶ青い瞳は鋭い光を放っていた。

「あそこにいる……彼は？」

ガルディアは思わずオルモアに聞いた。

「ん……？」

「あの白い髪の若い兵士です」

「ああ、ファイフ・アールスロウか」

オルモアはそう言うのと少し表情を曇らせた。

「……？」

「彼は平民でありながらゴウドルークス大学に推薦入学して、首席で卒業した博学さ」

「へえ、それはすごい……んですよね？」

「ああ、かなりな。今の国の政策に反感を感じて、わざわざ東部からここまで来たらしい」

「ハハハ、たいした行動力ですね」

「まあ、確かにそこは評価できるな。だが……」

「……？」

「こちらとしては事務的な仕事で活躍するのを期待したんだが、本人は剣の特訓ばかりに精を出してね。剣技に関しては全く話にならないにも関わらずだ」

「モノになるかもしれませんよ」

「ならんよ。彼には才能がない」

「……本人は自覚してるんですか？」

「してるさ。何度も本人に話したからな。だが剣技の特訓をやめようとしな。頭の良さだけで取ったのに、どうも勉強だけのやつだったようだ」

オルモアはあきれた表情だ。しかしそれに対してガルディアはほえんだ。

「オレは好きですがね。そういうやつ」

間もなくロック基地に迫ってくる国軍の情報が入った。ガルディアを含めた解放軍の軍勢は、国軍を向かい撃つ形で北へと前進した。荒れ地を進むにつれ、徐々に景色が暗くなっていった。

ほとんど陽の光が消えた暗い景色の中、目の前には前方へと伸びる巨大な二つの谷が現れた。

「ここが……クロウジア谷か」

ガルディアは前方に伸びる二つの谷を見つめた。

（近くにそびえるレト火山の灰の影響で、年中、日の光が届かない

暗闇の谷。戦場としてはこれほど不気味な場所はないな

二つの谷に挟まれた巨大な橋のような荒地、その前方には、巨大な軍勢が見えた。

グラウド国軍だ。

それを見て、ガルディアは大剣を抜いた。

「さて……始めるか」

パンッ！

「第一陣突撃！」

隊長の号令とともに、数百人の解放軍兵が走り出した。その陣の中央前衛をガルディアは走る。

谷に挟まれた荒地を駆け抜けるガルディア。しばらく駆けけると目の前には国軍の集団の姿が見えてきた。それを確認した瞬間、ガルディアは一気に先行した。

ガルディアは国軍の群れへと飛び込んだ。次の瞬間、

ギュンギュンギュンッ！！！！

ガルディアは大剣を縦横無尽に振り回し、国軍兵を次々と斬り伏せる。

圧倒的だった。

まるで虫を払うかのように、圧倒的な力で国軍兵達をなぎ払っていった。その巨大な力の前に国軍の剣兵は悲鳴しか上げられない。国軍の第一陣はあっという間に切り崩される。

しかし、国軍の砲兵が素早くガルディアに向け照準を合わせる。

「撃てーッ!!」

ドンドンドンッ!!

爆音と共にガルディアの周辺が吹き飛ばされた。砂煙が辺りを包む。

「やったか……?」

砲兵がその声を漏らしたその直後、砂煙の中からガルディアが飛び出してきた。

大砲部隊に向け一直線に突進してくる。

「くっ! ひるむなー! 撃てーッ!!」

ドンドンドンッ!!

ガルディアに向け近距離砲撃が放たれる。その砲弾をガルディアは瞬間の反応で紙一重で避けていく。

「バカな! 当たらない!!」

ガルディアはあっという間に大砲部隊の前に立った。

そして強烈な斬撃を振るった。

ギュンギュンギュンッ!!

ガルディアの斬撃は砲兵達を大砲ごと襲った。砲兵の体と大砲の破片が、空中へ向けてはじかれていく。

大砲部隊はあっという間に全滅した。

大地にドシンと立つガルディアの姿。それを見ている周りの国軍兵達は皆が後ずさりを始めた。

牙を向ければ次は自分がやられる、その恐怖心から、剣兵も銃兵も砲兵も、誰もガルディアに攻撃することが出来なかった。その時だった。

「貴様がグレイ・ガルディアか」

一人の国軍の剣士がガルディアの前に立った。年齢は三十代前半、長い眉毛と長いひげが特徴的な巨漢だ。大型の獣のような威圧的な雰囲気を持っている。

ガルディアはその男を見る。

「そうだ」

ガルディアの返答にその男は笑みを浮かべる。

「なるほど、たった一年で様々な戦果を上げた、いま話題の解放軍の剣士。それと戦えるとは何とも運が良い」

「実際には二年前からいたんだけどな。強くなったのが最近ってだけさ」

「ほう……」

「アンタは？」

「私はマース・グラトンだ」

「マース・グラトン……『暴嵐の虎』か」

グラトンは大剣を構えてニヤリと笑った。

「先ほど見せた貴様の剛腕、それと私の剛腕。どちらが上か力比べ
というのではないか」

「やれやれ……」

ガルディアも大剣を構えた。

しばらくの間、にらみ合う二人。

先に動いたのはガルディアだった。
地面の土を勢いよく飛ばしながら、グラトンに向け高速で突撃す
る。

あっという間にグラトンの目の前に立った。その直後、グラトン
がその動きに合わせて一歩前に出た。

「フンッ！」

グラトンはガルディアの動きに合わせて、強烈な斬撃を振るった。

ギューンッ！

二つの大剣が大きな音を立ててぶつかり合った。
直後、グラトンが次の斬撃を放つ。

ギイインッ！！

グラトンは次々と嵐のごとく斬撃を振るう。無数に放たれる強力な斬撃は止まることなくガルディアを襲い続ける。

その斬撃の嵐をガルディアは時に受け止め、時にかわしながら防いでいる。

「どうしたガルディア！！ 守ってばかりでは勝てんぞ！」

グラトンがそう言い放った直後、

「そつかい……」

ガルディアは斬撃を振り下ろした。

ギュオンッ！！

その斬撃は周りの空気を勢いよくはじき、グラトンの剣に叩きつけられた。

「ぐっ……！！！」

ギイイイインッ！！！！

その斬撃を受け止めたグラトンの体は後ろへと一気に吹き飛ばされた。

バランスを失い、片足をつくグラトン。

「ぐううう……！！」

グラトンを驚いた表情を見せる。

「……バカな」

「カ比べは……オレの勝ちみたいだな」

「ぐ……！！ 図に乗るなよ！！」

グラトンは素早く立ち上がり、ガルディアに向け突進した。

素早く放たれるグラトンの強烈な斬撃。その斬撃にガルディアは反応するが、直後、その斬撃が突きへと変化する。

ビュッ！！

ガルディアはそれをあつさりと見切り、避けた。

「まだまだあ！」

素早くグラトンの強烈な蹴りが飛ぶ。ガルディアは一瞬の反応であつさりとかわした。そしてグラトンの蹴りをつかむ。

「なに……！！」

ガルディアはグラトンの足を力任せに勢いよく引つ張る。グラトンの体は浮き上がり、ガルディアの方へと引き寄せられる。その状況にグラトンは驚いた。

「ま、待て……」

ギョオンッ！！

ガルディアの剣はグラトンの体を切り裂いた。血しぶきと共にグラトンの体は大きな音を立て、地面に倒れ伏した。

地面に伏すグラトンを見下ろすガルディアは、息一つ乱れていなかった。

「見事なものだ……」

突然近くで声が聞こえた。ガルディアはその声の方向を見る。別の国軍の剣士がガルディアの前に立っていた。

今度の剣士は若い、年齢は二十代前半、黄色い髪に、青い瞳の長身の男だ。

静かにほほえみを浮かべている。

「噂以上の強さだ。『黒の魔将』グレイ・ガルディア」

ガルディアは静かにその剣士をにらむ。

「やれやれ、次から次へと、また強そうなやつだな……名は？」

「ディアル・ロストブルー」

「……！！ 国軍最強の剣士かよ」

「嬉しいよ。君のこの強さ。初めて私の相手が務まる者と出会えたかもしれない」

「やれやれ……」

二人は剣を構え、にらみ合う。

突然、ロストブルーの姿が消えた。次の瞬間にはガルディアの目の前にロストブルーが現れる。

「……！」

ガルディアは素早く一歩下がるが、その瞬間ロストブルーは横をついていた。

ヒュンッ！！

ガルディアは瞬間の反応でロストブルーの剣をかわした。

「ほう、かわすか……！」

ガルディアは素早く反撃する。空気を震わす強烈なパワーの斬撃。

ギュオンッ！！

キン

ロストブルーはその斬撃を一瞬で見切り受け流した。

「……なにつ……！」

バランスを崩したガルディアの体にロストブルーの強烈な蹴りが叩きつけられる。

「……ぐっ……！」

ガルディアの体は後ろに飛ばされる。その体に向かってロストブルーが一気に追い打ちをかける。しかしガルディアも一瞬で体勢を立て直し応戦する。

無数の斬撃が二人の間を飛び交った。

そのあまりに速い斬撃の攻防は、一瞬の閃光が二人の間を飛び交っているかのようにさえ見える。そしてそのあまりにも強力な斬撃のぶつかり合いは、二人の間の空気を間髪入れずにはじき続けた。下がりながら剣を振るうガルディア、それを追いながら剣を振るうロストブルー！。

二人の人知を超えた攻防は、徐々にガルディアが不利な形へと変わっていく。

ガルディアが険しい表情を一瞬見せたその直後、

ヒュンッ！

ガルディアの体がわずかに切り裂かれる。それにより、ガルディアの体が一瞬止まった、その瞬間だった。

ヒュンッッ！！

ロストブルーの斬撃が再びガルディアの体を切り裂いた。

「くっ……」

顔を歪めるガルディア、しかし、

「うおおおおおッッ！！」

ギョオンッ！

素早く大振りの斬撃を返した。ロストブルーは後ろに跳んでそれをかわす。

二人の距離がわずかに離れた。

「……うっ」

ガルディアは傷口を押さえながら思わず一步後ろに下がった。その直後に気づいた。

「……!!」

ガルディアのすぐ背後には、底の見えない深い谷が口を開けていた。ガルディアは知らぬ間に谷の前に追いやられていたのだ。

「……さて、チェックメイトだよ。 그레이・ガルディア」

ロストブルーは剣を構え直す。

「それはどうかな」

ガルディアは気丈に笑みを作って剣を構える。

次の瞬間、ロストブルーが一瞬でガルディアの前に立つ。それと共に二人の剣が同時に動く。

ギョオンッ!!

ヒュンッッ!!

二人の剣は交差し、空気を一瞬で切り裂いた。その直後、一つの血しぶきが空中に飛んだ。

ガルディアの体は深く切り裂かれた。そしてゆっくりと後ろに倒れ込む。

ガルディアの体はゆっくりゆっくり谷へと放り出される。そして谷底へと沈んでいった。

ガルディアは深い闇の中へと消えていった。

谷の縁で一人その様子を見つめるロストブルー。

ロストブルーはゆっくりと自らの肩に触れた。手には赤い血がからみついた。ロストブルーの肩はわずかに切り裂かれていた。

ロストブルーはほえんだ。

「……戦場で刃を受けたのは初めてだよ」

もう一度だけ谷の底を見つめる。

「もし生きていたのなら、また戦おう。グレイ」

谷の底、日の光がほとんど届かない岩に囲まれた空間にガルディアは一人倒れていた。

「……………クソ」

ガルディアは何とか身を起こす。

（岩壁に何度も引っ掛かったせいで命拾いしたな……………）

「やれやれ、自分の頑丈さにはあきれるぜ。だが……」

ガルディアは自分の体を押さえる。ロストブルーにつけられた深い切り傷から血が流れ落ちる。

「……さすがにちょっとヤバいな」

ふらつく体でなんとか立ち上がる。痛みに耐え、岩壁に寄りかかりながら歩き始める。

（この傷じゃあ、これ以上戦うのは無理そうだ……ここから、どうやって基地に戻る？　そもそもここから基地に戻るのか……？）

ほとんど光のない谷の底を、目を凝らしながらゆつくりと歩く。石だらけのデコボコの地面と形の悪い岩壁に囲まれた道が続く。体からは血が止まることなく流れ落ちる。

息が徐々に乱れてくる。

視界が徐々に揺れてくる。

（まずいな……思ったよりヤバい……）

それでも止まれば死ぬ、ガルディアは必死に歩き続けた。

しばらく歩くと、谷の道が徐々に明るくなってくる。

（……クロウジア谷を抜けたか）

少し明るくなった道をひたすら進むと、目の前には谷の道を塞ぐように森が姿を現した。

「……森……だと」

（確か、ロック基地の東にはかなり広範囲の森が広がっていたな……クソ！　かなり場所がそれてる。このまま森を進んでも獣のエサになるのがオチだ。だが、戻ったところで力尽きるのは確実。なら……）

「進むしかないか」

ガルディアは森の中へと歩を進めた。

深い森を当てもなく歩き続けた。森をしばらく歩くと体の痛みが不思議となくなってきた。

（痛みがなくなつて、体がさつきより動くな。これって……倒れる直前のサインなんじゃないか……？　いや、そんなこと今考えてもしょうがない、とにかく今は進もう）

ガルディアはひたすら歩き続けた。

しかしいくら歩いても目の前には無数の樹木がひたすら広がるだけ、方向も分らない、位置も分らない。

それでも基地に戻れると信じて、ガルディアはひたすら歩き続けた。

（クソ……景色がさつきから変わらねえ。木に登って辺りを見渡したいが、そんなことすれば傷口が開いて即ぶっ倒れる……今は運を天に任せて進むしかない）

あたりが徐々に暗くなってくる。

（クソ……日が暮れてきた。いよいよ獣のエサになっちまう）

それでもガルディアは歩き続けた。

辺りからフクロウの鳴き声が聞こえてくる頃だった。周りから何かの気配を感じた。音はない、しかしかなりの数の気配だ。

「クソ……ついに来やがったか」

ガルディアは足を止めた。

辺りからいくつもの影が現れ、ガルディアを囲む。闇の中で光る無数の目。

群れオオカミだ。

月明かりがその姿をわずかに照らす。細長い手足、肋骨が突き出た胴体、顔に浮かぶ黒い模様は目の周りを丸く囲み、まるでドクロのようだ。

無数の群れオオカミがガルディアを囲んでいた。

「やれやれ……」

ガルディアはゆっくりと大剣を引き抜いた。そして駆けだした。それに合わせて群れオオカミも一気にガルディアに向かって跳びついてくる。

ガルディアはそれらに向かって勢いよく剣を振り回す。無数の血しぶきが上がり、群れオオカミの体が次々と吹き飛ばされる。

群れオオカミの鳴き声が森の中に響き渡った。その中をガルディアは剣を振り回しながら、ひたすら駆け抜けた。

森には群れオオカミの血しぶきがひたすらに舞う。群れオオカミ

の血だけではない、剣を振るうガルディアの体からも傷口から血が飛ぶ。

ガルディアは苦痛に顔を歪めながらも、ひたすら剣を振るい、ひたすらに駆けた。

もう何回剣を振るっただろうか……

気づけば、ガルディアの周りには群れオオカミの姿は消えていた。

「終わったのか……」

再び静かになった森。

暗闇に包まれた森の中、ガルディアはゆっくりと樹木に寄り掛かり、腰を下ろした。

体からは血が流れ、呼吸はすでに十分にできない。

「もう……動けねえや」

意識が徐々に薄らいでいく。

森に朝日の光が差し込み始めた。

「オレは……ここで死ぬのか……」

ガルディアは大剣を地面に落とした。

「これで……最後の戦場のはずだったのにな。オレが最後になっちまうなんて、笑えるな……」

ガルディアは静かに最後の時を悟った。

小さな音がガルディアの耳の中に響いた。

耳の奥に響く音。

鈍い、金属の音。

……………鐘の音だ。

ガルディアの目が見開かれた。

（朝の鐘だ！！）

ガルディアは再び剣を握った。

（近くに村か町がある！）

ガルディアは最後の力を振り絞り立ち上がった。そして鐘の音の方向に向かって駆け出した。

しばらく駆けた時だった。ガルディアの目の前から森が消えた。目の前にはいくつもの民家が広がった。

（……………良かった）

ガルディアはその場にゆっくりと倒れ込んだ。

意識を取り戻した時にはガルディアはベッドの上にいた。
どこかの民家の一室のようだ。

体を少し起こすと、目の前には一人の男が座っていた。

男は四十代ぐらい、厳格そうな顔をしている。

「目を覚ましたか」

男はガルディアの顔を見た。表情を変えない。

「オレは……」

「君は村の隅で倒れていたんだ。この村のブラドという男が君を見つけて、私の家に連れてきたんだ。君ぐらいの重傷者では私の家ぐらいしか治療ができないからな」

その言葉を聞いてガルディアは自分の体を見た。体には包帯が厚く巻かれていた。

「オレは……あなたに、あなた方に助けられたんですね」

「そういうことになるな」

「助かりました。何とお礼を言えば……」

「そんなに気にすることはない。困っている者がいれば助ける、当

然のことだ」

「ありがとうございます」

ガルディアの言葉に男は静かにほほえんだ。

「……………ここは？ この村の名は何と言つんですか？」

「スロンヴィア。農民の村だよ」

0 - 6 グレイ・ガルディア（後編）

「スロンヴィア。農民の村だよ」

その言葉を聞き、ベッドの上のガルディアは中年の男を見つめる。

「スロンヴィア……ですか」

「知っているかね」

「いえ、初めて聞きました」

「そうだろう、森に囲まれた秘境のような村だからな」

「ハハハ、秘境ですか」

「そして私はここの村長だ」

「村長だったんですか。では村長さん、この村は……」
「ここはどの辺に位置する場所なんですか？」

「ラッサム地域の東の端だよ」

「……となるとギリギリ国軍領ですね」

ガルディアは顔を険しくする。

「オレは解放軍兵です」

「ああ、姿を見れば分かる」

「オレなんかを助けたら色々とまずいでしょう」

「別に気にすることはない。この村によそ者が来ることなどめったに無いからな……それに……」

村長はガルディアの目を見つめた。

「死にかけている人間を見捨てることの方が、私にとってはよっぽどまずい」

村長はそう言ってほほえんだ。

「本当に……ありがとうございます」

「そう気を使うことはない。とにかく君の傷は深い、今はゆっくり休むといい」

村長はそう言つと部屋から出ていった。

その後、村長の妻が何度か顔を出した。その都度、水を出したり、食事を出したり、具合を見たりしながら、優しい言葉をかけてくれた。

窓から明るい陽射しが入る。おそらくはもう昼ごろだろう。ガルディアは一人、ベッドに横になっていた。村長の奥さんが最後に来て一時間が過ぎていた。それ以来誰も姿を見せない。少しだけ外が騒がしいような気がした。

ガルディアはふと戦場のことを思い出す。

（あの戦い……勝てたんだろうか。敵軍にはディアル・ロストブルもいた。みんな無事だろうか。どうか、無事でいてくれよ）

ガルディアの胸に何とも言えない不安がよぎった。
その時だった。突然なにかの視線を感じた。

「誰だっ!？」

ガルディアはドアの方を見て思わず叫んだ。
ドアが素早く閉められる。

一瞬ドアのすき間から子供の姿が見えたような気がした。

「……………子供か？」

（村の子供が見に来たのか……しまった、思わず叫んで驚かせちゃったな）

「大丈夫だ。入っておいで」

ガルディアは子供を安心させるように優しい声で言った。
するとドアがゆっくりと開かれ、すき間から二人の子供が顔をのぞかせる。

一人は十歳満たない黒髪に真紅の瞳の男の子。もう一人は十歳ちょつとの茶色い髪の男の子だ。

少し怖がっているのだろうか、ドアのすき間から見つめたまま動かない。

それを見てガルディアは優しくほほえみかける。

「なんだ、どうした。オレを見に来たのか？」

ガルディアのほほえみで安心したのか、黒髪の男の子の方がドアから離れて、ゆっくりと近付いてくる。

「お、おい」

茶色髪の男の子が後ろから制止する。

「別に怒りはしないさ。大丈夫だ」

ガルディアのその言葉を聞いて、茶色髪の子も黒髪の子の後を追って近づいてきた。

黒髪の子はガルディアの包帯を見つめて、声を出した。

「大丈夫なの？」

「最初はけっこーヤバかったな。正直、きみらの村で手当てを受けてなきや死んでたかもな。きみらの村の……オレを見つけてくれたブラドさんって人とオレを手当てしてくれた村長さん。あの人達のおかげでこうして命を取り留めたよ」

「……………」

「村長さんと少し話もした。いい人だな」

「うん、村で自慢の村長だってお父さんも言ってた」

「そうか」

ガルディアは黒髪の子の頭をなでた。すると黒髪の子は嬉しそうに笑った。

その少し後ろで茶色髪の子がジーンと様子を見ている。どうやらまだ警戒しているようだ。

（解放軍の軍服……これが原因か……？）

「解放軍は怖いかな？」

ガルディアがそう聞くと、茶色髪の子は下を向いて黙った。しかしすぐに顔を上げた。

「怖くないよ」

茶色髪の子は初めてガルディアの目を見た。

「父さんが言ってた。解放軍は悪くないって、悪いのはおかしい政治をする国だって、解放軍はそのおかしい国の政治を正そうとしてる。だから悪くないって」

「そうか」

（この子なりのオレを気遣ったの言葉なんだろう）

ガルディアは優しくほほえんで、その子供の気遣いに答えた。

「オレだっておじさんのこと怖いなんて思わないよ」

黒髪の子が続けて言った。

「だって、おじさん全然悪そうに見えない。優しそうに見える」

「おじさんって年じゃないんだけどな。でもありがとな」

ガルディアは思わずニコツと笑った。この二人と話すうちにガルディアの胸の中の不安は自然と和らいだ。

「そういえば……外が少し騒がしいな」

ガルディアは窓から外をチラツと見た。

「うん、みんなが村長の家に押しかけて『危ない』って……」

(……!……!)

「お、おい、クロ！　そういうことは本人に言っちゃダメなんだぞ」

「……………そうか、それで」

ガルディアがそう言った直後だった。

「コラーッ！！　なにしてるのあなた達！」

村長の妻が大声で二人の背後から怒鳴った。

「し、しまった！」

村長の妻は子供達を捕まえて部屋の外へと引きずり出してしまった。

（内緒で入ってきてたのか……）

再び一人になるガルディア。

（やはりここは国軍領だ。オレがいれば何かと問題が起こるだろう。早くここを去った方がいいな）

ガルディアはケガを押して、ベッドから立ち上がった。

その後、ガルディアは村長に会い、この村を離れることを告げた。それを聞いて村長は少しだけ眉を寄せた。

「そうか……」

「これ以上、迷惑をかけるわけにはいかないのよ」

「うむ……先ほど、町に出ていた者から聞いた話なのだが、クロウジア谷での戦闘で解放軍は敗戦したそうよ」

「……！」

ガルディアは驚く。思わずうつむいた。

「……そうですか、ならなおさら早くここを出た方がいいですね。オレはこれでもそこそこの名を知られているんです。追手が来たら厄介だ。何より村の人たちに迷惑をかけてしまう」

「そうか……なら最後に包帯を換えよう、ずいぶんと血で汚れてしまっているからな」

「……いえ、これ以上は」

「そう言うな。汚れて病気になっても大変だろう。せつかく助けた命がそんなことで失われては私も悲しいからな」

「……ありがとうございます」

ガルディアはその後、村長宅をあとにした、去りがけにブラドにもあいさつをして、村をあとにした。

ガルディアはその後、ロック基地の南に位置するレックル基地へと向かった。

旅は思ったより順調で、特に何事もなく基地へとたどり着くことができた。

基地に着くと、広間に基地の司令官が顔を出した。

「グレイ・ガルディア。無事でなによりだ」

「無事ですんだのは本当に運が良かったと思っていますよ。死んでいても何も不思議じゃなかった」

ガルディアはそう言って少しだけほえみを作る。

その後、ガルディアは基地の一室に招かれた。

司令官はガルディアの様子を見ながら口を開く。

「……ふむ、少し元気がないな。敗戦がショックだったか」

「ええ、それもありますし、仲間が無事かどうか心配です」

「ああ、そうだな。私も部下の安否が心配だよ。そうだ、そういえば君はあの事件のことを知っているかね」

「……あの事件？」

「知らないのか……ふむ、敗戦直後の君の心をさらに暗くしてしまうかもしれないが、知っておいた方が良さだろう」

「どんな事件なのですか？」

その問いに、司令官は少し顔を険しくした。

「敗戦のすぐあとに起きた事件らしいのだが、国軍の部隊が村一つを焼き払ったらしいんだ」

「……！！」

嫌な予感がした。とてつもなく嫌な予感が。

聞きたくない、しかし聞かずにはいられなかった。

「その焼き払われた村……なんて名の村なんですか……？」

「確か……スロンヴィアという名だったな」

（……………ウソだ）

ガルディアはその場で呆然となった。

(……………ウソだ、そんなこと……………そんなはずは……………ない)

近くで司令官が驚いて呼びかける声がした。しかし、反応することが出来なかった。

(……………オレのせいだ)

ガルディアの頭の中に、村での出来事がよみがえる。ほほえむ村長。優しい言葉をかけたくれた村長の妻。部屋に顔を出した二人の子供。黒い髪の少年は頭をなでたら、嬉しそうに笑っていた。

(オレが……………殺した)

ガルディアはしばらくその場を動くことが出来なかった。

数日後、サーテルボードの基地の司令室。

ガルディアは机に座る Gron 司令官の正面に立っていた。

「無事に帰ってきて安心したよ」

Gron 司令官はほほえんだ。

「最後の戦場で命を落とすなど、そんな悲しいことにならなくて良かった」

「……………」

「口約通り、君は戦場を去るのだろうか……？」

「……いえ」

ガルディアはつぶやくような静かな口調で言った。

「……？」

「オレは戦場を去りません」

「……私としては嬉しいが、どうしたんだ、突然」

「司令官、これから話すのはただのざんげです。そのざんげに少しだけ付き合ってはもらえませんか……？」

その言葉を聞いてグロンは少しだけ戸惑った。

「……構わない。話したまえ」

ガルディアは話した。

国軍によって焼き払われたスロンヴィアの虐殺事件、その原因が自分であることを。

それを聞いて、グロンは少しの間、目を閉じた。

ガルディアは表情を変えず、静かにグロンの目を真っ直ぐに見つめていた。

「……オレが原因で、多くの命が失われました」

その言葉にグロンは少しの間、答えなかった。少し時間を開けてグロンは口を開いた。

「……君のせいではない。それは不幸な繋がりだったんだ。何より、村人を殺めたのは国軍兵であって君では……」

「オレが村に来なければ、誰も死ぬことはなかった」

「しかし……」

「オレは誰も殺していない。けれど、殺されたのは、オレが原因です」

「……………それが、君が軍に残る理由なのかね？」

「この事件が、解放軍のグレイ・ガルディアが起こした事件ならば、オレはただのグレイ・ガルディアに戻ることは、許されるべきじゃない。オレは解放軍のグレイ・ガルディアとして一生この罪を背負い続けるつもりです」

「……………」

「オレが戦場に立って人を殺め続けることが辛いなんて……そんなことはもうどうでもいい。オレはこれから戦場に立ち、命を懸けて剣を振るい続けます。そして一日でも早く、この世界を変える。それが解放軍のグレイ・ガルディアとして、オレができるただ一つの償いです」

「……そうか、分かった。ならばこれから我らのために剣を振るい続けてくれ」

「ハッ！」

この事件の真相を知る者は、世界でガルディアとグロン司令官のただ二人。

ガルディアはその真相をその後、誰にも話すことはなかった。そしてひたすらに剣を振るい続けた。

その四年後、グロン司令官はオールロウの戦いで戦死。

この事件の真相を知る者はガルディア本人だけとなった。

スロンヴィア虐殺から七年後。

ガルディアは司令官となっていた。

副官となったアールスロウと共に基地の廊下を歩いていた時だった。

数人の兵士が慌てた様子で話していた。

アールスロウが兵士達に声をかける。

「どうした？ 何か問題でも発生したか」

聞くと、軍に入りたいという少女がベイトム隊長を殴り倒したとのことだった。

その話を聞いてガルディアは思わず笑ってしまった。

（面白いやつがいるな）

本来なら試験すら受けることのできない入軍希望の少女。しかしガルディアの一言で入軍試験を受けさせることとなった。

ガルディアが興味本位で最後の実技試験を見るために、アールスロウを連れて実技場の隅で待っている時だった。

ガルディアは試験管を務めた兵士から受け取った、少女とその連れのプロフィールを目にした。

（名前はクロコ・ブレイリバーとブレッド・セインアルド……）

名前の次に出身地を目にした、その瞬間ガルディアは衝撃を受けた。

「二人とも出身地がスロンヴィア……」

「……ということは、二人ともスロンヴィア虐殺の生き残りですね」

（スロンヴィア虐殺の……生き残り……！！）

「国軍の起こした最悪な事件の一つですね。農民を村ごと焼きはらった虐殺事件……」

直後、ガルディアの脳裏に村で会った二人の子供の姿が思い出された。

（あの二人がもしそのまま成長すれば……ちょうどこの二人ぐらいの年齢になる。だが……確か二人とも男の子だったはずだ。いや、小さい方の子、あれぐらいの年齢じゃあ、性別なんてはつきりは分からないか……いや、オレは一体何を期待してるんだ）

「どうしましたか？」

「いや、なんでもない。しかしスロンヴィア出身か」

「入軍理由はおそらくは国軍への復讐でしょうね」

「復讐、か……」

（確かにそれが妥当なところだろう。オレが起こした事件、あれによって、国軍への復讐のためだけに生きる。もしそんな人生を送るのなら、それもオレの犯した罪なんだろう。けれど、もし……）

そのすぐあとに、クロコとブレッドが実技場に入ってきた。クロコの方は聞いていた通りふてぶてしい態度で、試験管を置き去りにして実技場の中央へと進んでいった。

ふと、ガルディアとクロコの目があった。その少女の持つ独特な雰囲気、それを感じた瞬間、ガルディアは確信した。

（あの時の二人だ……！ 間違いない）

しかし、ガルディアは素直に喜べなかった。『復讐』それだけのために二人は生きている可能性が高い、そう思ったからだ。

その後、試験はアサシン部隊の奇襲という形で中止された。しかしクロコ達の実力は文句なく合格というレベルだったため、入軍を認めることにした。

司令室の机に座りながら、ガルディアはアールスロウに話しかけた。

「ファイフ、悪いんだが、あの二人をここに呼んでくれないか」

「自ら合格を知らせたいのですか？」

「まあ、それもあるが、ちょっとだけ話がしたくてな」

ガルディアは確かめたかった、二人が軍に入ろうとした目的を。

（復讐か、それとも……）

「おまえ達に聞きたいことがあるんだ」

合格を告げ、二人と話している最中、ガルディアは話を切り出した。

「おまえたちが入軍した理由を聞きたい」

「そんなの、オレ達にとっては決まってる」

ガルディアの問いに対して、クロコは真紅の瞳で強くガルディアを見つめ返した。

「光を求めてだ」

その言葉にガルディアは一瞬戸惑った。

「光……？」

ガルディアは思わず聞き返してしまった。

その後、クロコは語った、自分はこの戦いを通して、この国で認められる存在になりたいと……。

暗闇の中で生きる自らの人生に光を照らしたいのだと。

「オレ達は光がほしい。オレ達が求めるのは『希望』ただ一つだ！」

その言葉を聞いて、ガルディアは自らの心が震えるのを感じた。

（そうか……クロコは……『希望』を求めているのか）

『復讐』ではなく『希望』

ガルディアは最後にある言葉を言ってその場を締めくくった。

「答えてくれてありがとうな。少しだけおまえらのことがわかった気がするよ」

『ありがとう』その言葉の意味には、別の感情が込められていることを、ガルディア以外、誰も知らなかった。

クロコは闇ではなく、光に向かって歩いている。それはガルディアにとってこれ以上なく嬉しいことだった。

しかしブレッドの方は分らない、ガルディアはそう感じた。けれど、クロコといることでブレッドの心にもきつと光が届く、ガルディアはそう感じた。

戦場の先にあるものは『光』だけではない、多くの憎しみと絶望に満ちている、けれど、自分はこの二人の道に光を照らしたい、ガルディアはそう思った。

その数週間後、ブレットは戦死した。

ガルディアの中で、一つの希望が消えていくのを感じた。

その時、ガルディアは心に誓った、クロコだけ、あいつだけでも助けたい。せめてあいつの人生だけでも。

ケイルズヘル防衛戦の時、ガルディアは一人、命令がないにもかかわらず、二年ぶりの戦場へと突撃した。

クラット防衛戦の時、周りの制止を振り切り、戻ってこないクロコを探しに敵陣へと飛び込んだ。

クロコは無愛想だが、時々、無邪気な笑顔をこぼす。それを見た時、少しだけ、昔クロコと初めて出会ったあの頃に戻ったような気がした。

解放軍のグレイ・ガルディアとして戦い続けること。それはガルディアにとって、終わりの見えない償いだった。

しかし、クロコと出会ったことで、クロコを守ることで、ガルディアは自らの心に小さな光が差し込むのを感じた。

それは小さな小さな光、けれど、なによりも強い光。

3 - 2 2 動き出す世界

クラウド中部のとある基地、その広間の一つ、純白の壁の広間にロストブルーが入ってきた。

するとそこに白い髪の軍人が待っていた。年齢二十代半ば、上に伸びた眉に鋭い目、どこかまじめそうな印象を受ける。

「お帰りなさい、ロストブルー將軍」

「やあ、ミツシュ」

「こ活躍なされたそうで」

「少し手伝っただけだよ」

「しかし大丈夫なのですか、北におられなくて……」

「私は軍人であると同時に議員だ。議員が首都を離れすぎてはいけないだろう？ あとのことは若者たちに任すよ」

「そうですか、そうですね。ああ、そういえば、少し前にお客が」

「誰だ……？」

「ライトシュタイン中将です」

「そうか」

（『ダークサークル』……ついに動き出せるな）

「ミツシュ、少し外してもらえるかい？」

「えっ!？」

「そう悲しい顔をするな。悪いが内密な話なんだ」

「い、いえ、いいのです、ロストブルー將軍がそうおっしゃるのなら……」

「すまないね」

フルスロツク基地の広場にいくつもの大型馬車が入ってくる。

クラット基地防衛戦に参加した兵士達が乗る馬車だ。

停まった馬車から大勢の兵士達が次から次へと降りてくる。出迎えに来た兵士よりも降りてくる兵士の方がはるかに多い。

そんな馬車から下りる大勢の兵士の中にクロコの姿はあった。ゆっくりと降りていく。

すると一人の人影が勢いよく近づいてくる。ソラだ。

クロコはその姿を見て思わず笑みを浮かべる。ソラが目の前に立ったその時だった。

パンッ！

ソラがいきなりクロコの頭を叩いた。

「いつて！ 何すんだよソラ！」

「何すんだよ、じゃないよ！ なんでこんなに包帯だらけなの！！
この前よりひどいじゃん！！」

「うつせーな、帰ってきたんだからいいだろ！！」

「全然よくないよ！ このままじゃいつか死んじゃうよ！！」

「死なねーよバーカ！」

「バ……！！ こっちは心配で……」

「帰ってくるんだから、する必要ねーって言ってんだろ」

「な……！！ 何それ、クロコのバカ！！」

二人がギャーギャー言っている横をフロウとサキが通り過ぎる。

「どう？ サキ君、久しぶりのフルスロックは」

「懐かしいです。馴染んだ空気がしますね。やっと帰ってこれた」

「帰ってこれた、か。でもね、この時間はそう長くは続かないよ」

フルスロック基地の廊下をガルディアとアールスロウが歩いていた。
た。

アールスロウは深刻な表情だ。

「ついに三大前線基地の一角が落ちてしまいましたね」

「ああ、これで国軍はセウスノールへ向け一気に進行してくるな」

「二年続いた均衡がついに崩れ、この戦争が大きく動き出そうとしているんですね。しかも我々にとって不利な状況へ……」

「そう暗くなるなよ。ピンチとチャンスってのは裏と表さ。これがオレ達にとってのチャンスに変わるかもしれない」

「チャンス……ですか」

「まあどっちにしろ、この戦争が終わりへと向かっているのは確かだな」

「その終わりがこちらの勝利であることを、今は……信じるだけですか」

グラウドのとある地、そのとある建物のとある大部屋、大きな長机を大勢の者達が囲んで座っている。

「ついに動き出しましたな……この戦争が」

「『ダークサークル』を引き起こし、我々の計画もついに最終段階へと移行しようとしている」

「ああ、全ては我々の計画通り……いや……あなたの手のひらの上……というべきですかね」

その言葉と共に、机に座る者達が一斉に机の奥に座るある男の方向を見る。

奥に座るその男が口を開く。

「そう……全てのことは、先に続く我らの未来のために。破壊の後の再生、崩壊の後の創造……真に力ある者の真の支配」

男は静かに笑う。

「全ては我らの新たな国のために」

フルスロツク基地の敷地内にある馬車置場の建物の一角。そこにフロウは独り立って、その建物の出っ張りの部分を見つめていた。フロウはその場所を見つめながら、過去にクレイドとしたある誓いのことを思い出していた。

「また……一人になっちゃったよ。『真実』を探す仲間はずただけだったのにさ……クレイドのバカ」

フロウは悲しげに建物の出っ張りを見つめる。

「大切なものを全部失って……また大切なものを得たと思ったら、また失って……こんなこと……ばかりだよ」

すると一人の人影が近づいてくる。フロウはそれに気づいた。クロコだった。

クロコはフロウに気づくと足を止める。
フロウは笑いかけた。

「やあ」

クロコはフロウの横に並んだ。

「ここは……?」

クロコが質問するとフロウはほほえむ。

「ここで僕とクレイドは同志になったんだ。共に『真実』を探す同志に……」

「……………」

それを聞いてクロコは静かにその建物の出っ張りを見つめた。
するとフロウが口を開く。

「クロコ、僕は君に謝らないといけないことがある」

「…………え?」

「クレイドが死んだとき、僕は君のせいのように言ってしまった。だけど、あの状況なら僕もきつと同じ判断をしていたと思う。君はただ、僕の命を必死で救おうとしたただだったんだ」

それを聞いてクロコは辛そうな顔をした。フロウはそんなクロコを見つめる。

「すまない、クロコ。そして……君のおかげで僕はこうして生きている。ありがとう」

「そんなこと……」

「いや、それだけだよ。それにこれはクレイドが望んだことでもある」

「……………」

フロウは建物の出っ張りを見つめる。

「クレイドはバカだよ。こんなに仲間を悲しませて……本当の大バカさ」

「……………なあ、フロウ。一つ聞いていいか？」

「なに……？」

「おまえとクレイドは何で、『真実』を求めてるんだ？」

それを聞いてフロウはほほえんだ。

「いいよ、教えてあげる」

そしてフロウは話した。

自分の過去と、話として聞いたクレイドの過去を。

それを聞いたあと、クロコは再び建物の方を見つめた。

「……そうだったのか」

「僕にとって、クレイドは唯一の同志といえる存在だった」

「……………」

「また……僕は独りぼっちになっちゃったよ」

「オレも、おまえの求める『真実』……一緒に探すよ」

「ありがとう……だけどクロコ、君には別の目的があるんだろう？
君は『光』を求めている。なら、君はそれを目指すべきだ。今は、
その気持ちだけで十分だよ」

「フロウ……」

「行こうか」

二人は歩きだした。クロコが少し前を歩く中、フロウは一人足を
止め、振り返り、もう一度、建物の出っ張りを見つめた。そしてほ
ほえんで、一言だけつぶやいた。

「ありがとうクレイド。君と出会えて良かった」

4 - 1 新たな剣

グラウド中部の街フルスロツク。

四角い灰色の建物が立ち並んでいるその町の中に、町全体を見下ろすようにそびえ立つフルスロツク基地。高い石壁に四方を囲まれたその横長な建物には、いくつもの大型大砲が備え付けられ、基地の入口の上部にはヘルムのシルエットの旗印の大きな赤色の旗が飾り付けられている。

その基地の廊下の一角。

「うーん」

黒い軍服を着た少女がうなっている。

その少女は年齢十五、六、黒い髪、鋭い眼には真紅の瞳が浮かぶ。全体的にどこか威圧的な雰囲気を持っている。

クロコ・ブレイリバーは基地の廊下を歩いている。

「どうしたの？」

隣を歩く少女がクロコの顔をのぞき込む。

その少女は年齢十五、六、白い髪、ぱっちりとしたきれいな目、どこか明るい雰囲気を持っている。

ソラ・フェアリーフはクロコの様子を見ながら口を開く。

「ねえ、どうしたの？ さっきから『うんうん』言って」

ソラはクロコの顔をのぞき込んでいる。

「ああ、ちょっと気になることがあってな」

「うん、それは見てれば分かるよ。何が気になるの？」

「オレの剣のことなんだが」

「あの上物って言う？」

「ああ、前の戦闘でポツキリやつちゃってな」

「ポツキリ？」

「いま剣がないんだ」

「ポツキリって、本当に上物だったの？」

「うるせえな！ とにかくいま剣がないんだよ」

「基地で支給されてるでしょ」

「うーん、基地の剣はアイアン製なんだよな。オレの持ってたのよりワンランク劣るんだよ」

「でも、みんなはそれを使ってるんでしょ」

「うーん、でもなー」

クロコはまたうんうん言いながら廊下を歩く。

基地の司令室では二人の軍人が話している。

一人は、年齢二十代後半、どっしりとした大きな体、少し逆立った黒髪に力強い目をしている。全体的に活気のある雰囲気だ。

フルスロツク基地の司令官グレイ・ガルディアだ。

もう一人は、年齢二十代半ば、長めの白い髪を後ろに結び、冷たい目つきに青い瞳、気品のある顔立ち、全体的にも冷たい雰囲気だ。フルスロツク基地の副司令ファイフ・アールスロウだ。ガルディアが机に広げられた国の地図を見ながら口を開く。

「……で、情報では、いま国軍の動きはどうなってるんだ？」

ガルディアの言葉にアールスロウが答える。

「現在、北に兵力を集めているそうです」

「まだ動き出さないのか？」

「ええ、クラット基地が落とされたことで現在国軍に対する防衛線は崩れていますが、幸いクラット周辺とセウスノールのあいだはバブル山脈で隔てられています。その関係で、国軍も簡単には動き出すことが出来ないようです」

「バブル山脈か、今まではこいつのせいでセウスノールとクラットとの情報連絡が上手く出来なかったが、今回はそれが幸いしたな。とはいえ準備が整えば国軍も動き出すだろうな。……で、それに対して解放軍の方はどう動いてるんだ？」

「西部と中部に一部戦力を集中させ、国軍に備えていますが、焼け石に水……時間稼ぎにしかならないでしょうね。遅かれ早かれ国軍はセウスノールに進行するでしょう」

「それで、そのセウスノール本部の方はどうなってるんだ？」

「セウスノールには現在、グラウド中の解放軍の主要基地から戦力を結集させています。じき、ここにも要請が来るでしょう」

「とはいえまだ国軍も準備段階。戦闘が始めるまでまだ少し時間はあるか……なあ、ファイフ。もし国軍が進行するとしたら……どう動くと思う？」

「国軍が進行するルートは二ルート予想されます。一つはバブル山脈を西に回り込むルート。このルートの場合、まず大規模な戦場はクロウジア谷になるでしょう」

「クロウジア谷……」

「二つ目はバブル山脈沿いに南下するルートです。この場合、解放軍はフルスロックでまず国軍をおさえようとするので、戦場はここ、フルスロック基地になるでしょうね」

「ここか……」

「クロウジア谷かフルスロックか……国軍はそのどちらかのルートを取るでしょう」

「おまえはどちらを取るかと思う？」

「そうですね……俺はクロウジア谷のルートの可能性が高いと思います。フルスロック基地は解放軍でも屈指の戦闘力を誇る基地。その基地を相手にして、さらに本拠地のセウスノールを相手にするのは国軍としては避けたいでしょうからね。本部もクロウジア谷ルートが有力だと見ています」

「……だが、クロウジア谷のルートだと国軍にとってはかなりの遠回りだ。解放軍としては動き出してから対応が楽になる」

「そうですね。つまり国軍にとっては、クロウジア谷のルートは守りの選択、フルスロックのルートは攻めの選択ということになります」

「自力で勝る国軍は、攻めより守りを選択する方が確実だ。だが、その選択をし続けたことが結果として、内乱の悪化につながった。今回はどう動くか……」

二人は地図をじつと見つめた。
少ししてガルディアが口を開く。

「まあどちらにしろ、もうすぐ忙しくなるな」

「はい、片づけられる仕事は今のうちに片づけてしまわないと」

アールスロウは目を光らす。ガルディアは素早く目をそらした。

「あー、そうだ。そう言えばファイフ。最近東の鉱山でガーディアンの鉱床が見つかったな」

「ガーディアンですか」

「ああ、量としては剣一本十分作れる量だ。それを誰にするかって話なんだが」

「誰にするかですか……」

「それも立派な仕事だろ？ おまえは誰がいいと思う？」

「そうですね。俺と 그레이 さんにはすでに立派な剣がありますし、今の基地の主力といたら、フロウ、クロコ、サキと言ったところでしょうか」

「そうだな、ならその三人の中では誰がいいと思う？」

「クロコですね。フロウと少し迷うところですが」

「なるほどな……よし、決まりだ」

ガヤガヤとにぎわう昼時の基地の食堂。

「という訳だ、クロコ」

「……はっ？」

クロコはジェリーアップルを片手に呆然とする。突然現れたガルディアに対し、意味が分からない様子だ。

「何が『という訳』なんだよ」

「新しい剣をプレゼントしてやる。街に出るぞクロコ」

「けど、いいのかよ、まだ軍務中だろ」

「これも軍務の一環だ。そうしないと、司令官のオレが基地から出れないだろ？」

「また仕事をアールスロウに押しつける気が……」

「大丈夫だ、あいつも来るから。今回仕事を押し付けられるのは隊長達だ」

「けっきょく押しつけるのかよ」

「とにかく街に出るぞクロコ」

グラウド中部の国軍領の街シャルルロッド。

入り組んだ迷路のような町並みが広がっている。そのシャルルロッドの端にはシャルルロッド基地がそびえ立っている。正方形に近い形をした大型基地だ。

その基地の廊下を一人の青い軍服を着た少年が歩いている。

その少年は、年齢十五、六、白いサラツとした髪で、厚い眼鏡をかけている。どこか優しいが憂鬱な雰囲気を持っている。

国軍人スコア・フィードウッドだ。

廊下を歩くスコアの向かいから一人の軍人が歩いてくる。

その軍人は年齢三十代前半、黄色い髪、細い長い目に、落ち着いた

た顔立ちをしている。どこか知的な雰囲気だ。

シャルルロッド基地の司令官ケイス・ラティル大佐だ。

ラティルは気さくに片手を上げる。

「やあ、スコア。元気そうだなによりだ」

「はい、おかげさまで。あの時は取り乱してしまつてすみませんでした」

ラティルは立ち止まる。それに合わせてスコアも足を止める。

「いや、いいのだよ。そう言えば、最近きみのことが噂になっているよ」

「えっ、ウワサ？」

「君はよく茶色のバッグを持って廊下を歩いているらしいね。その中身は一体なんなのだろうかってね」

スコアはそれを聞いてギクツとした。

（レイアの食事を入れてたバッグ……ウワサになってたのか）

「できれば私にだけ中身を教えてくれないかね」

ラティルは興味津々な様子だ。

「い、いえ、大したものではないんです！」

スコアは焦った。。

「大したものではないなら教えてくれ」

ラティルは意地悪く笑う。

「えっと、よく靴なんかを……」

「いい匂いがするそうだね」

スコアは一瞬言葉を失った。なんとか口を開く。

「は、はい、その、食べ物を……ボクよくお腹がすいちゃって、食堂の食べ物をごっそり個室で食べてるんです」

「ホウ、そうか。まあ君は若いし、とりわけ良く動くからな」

「は、はい、そうなんです。あの、では失礼いたします」

スコアはサツとラティルの前から立ち去った。

基地内の武器庫、暗い大部屋の中で、スコアはいつものように一人の少女と会う。

その少女はクロコとურიふたつの顔をしている。ただし、まとう雰囲気はクロコと違い、ひっそりと静かだ。アルケアの町の元奴隷レイアだ。

スコアはレイアとの会話の中である話を切り出した。

「次の休みに街を回ろう」

「街……」

スコアの言葉にレイアは鈍く反応した。

「うん、きみもずっとこんな所にいるのは苦しいだろうし」

「そんなに気にしなくても……もっとひどい時もあったし」

レイアは表情を変えずに言った。

「う、うん、それでも外には出たいよね。もうすぐ長い任務が入ると思うんだ。そうしたら、ボクはしばらくここからいなくなる。そうなる前にきみの居場所となる所も確保しなくちゃ」

その言葉を聞いてレイアはうつむく。

「わたしの居場所になるところなんて、本当にあるのかな……」

「それは……」

スコアは少し言葉に詰まった、その時だった。武器庫の扉が突然開かれた。

「……！！ レイア隠れて」

スコアは小声でレイアに呼びかける。

（今日はもう使われる予定はないはず……誰だ？）

武器庫の中にラティル大佐が入ってきた。

「おや、スコア。なぜ君が……？」

「えっと、それは……」

スコアは言葉に迷う。

「君は変わった趣味をしているな。こんな暗い所で一人考えることかね？」

「え……あつ、そうなんです。よく考えることになるときに、……」

「実は扉の前で、少し会話を聞いていたんだ」

スコアの顔が青くなる。

ラティルは武器庫の奥へと入ってくる。

「出てきたまえ！ どこかに隠れているのだろう？」

ラティル大佐が呼びかける。

スコアがアワアワと混乱する中、レイアが大砲の裏からゆっくりと出てきた。

ラティルはレイアを静かに見つめる。

「君もすみに置けないなスコア。こんな美人を基地に連れ込むなんて」

ラティルはそう言ってスコアに笑いかける。

「え……あの、その」

「まあ、若いから、そういうことをしたくなるのも分かるが、あまり感心はしないな。彼女を連れ込むのは」

「あ……そうなんです！ その、ごめんなさい。彼女と別れているのが辛くて」

「アルケアの奴隷かね」

ラティルの言葉にスコアはさらに顔を青くする。

「な、なぜ、それを……」

「アルケアから帰ってきた直後から君の様子がおかしくなったのでな。あと、こんな部屋に女の子を隠す理由なんてそれぐらいだろう。食事の入ったバッグもよく持っていたようだし」

「あ……その……」

スコアは完全に言葉を失った。

「場所を変えて、少し話をしようか」

基地の一室、そこでスコアとラティルは向かい合った形で机を挟む。

「その……言い訳できないことをしたことは分かっています。けど、それ以外思いつかなくて……」

スコアは意気消沈している。

「君らしいといえば君らしいな。彼女を放って置けなかったのか。それに奴隷に対する国軍の処置の噂が広まっていた時期だしな」

「はい……ここ以外、今は彼女の居場所にできるところがなかったんです」

「自分の目の届くところに隠したという訳か。しかし上官に見つかってさあ困ったと」

スコアはガツクリと黙った。

「なら彼女を基地で働かせるか」

「えっ!?!」

「それなら君にとっても都合がいいだろう」

「え……ですが、彼女は元奴隷で、身分証がないんです。基地で働けるのは平民以上の地位だけです」

「じゃあ身分証をでっちあげるか」

「そ……そんなことをして大丈夫なんですか?」

「ふむ、君はよく理解していないようだな。国軍では中将以上の地位の者に議員権が与えられる。それはつまり、平民でも出世すれば国の3%近くの権力を手にすることができるということだ。それだけ国における国軍の権力は大きいんだよ。ついでに私はその国軍の

大佐だ」

「あの……それはどういう……」

「つまり、私は権力者なのだよ。その程度のこと、私はどうにでもできる。クッククック」

ラティル大佐は悪そうに笑った。

呆然とするスコア。

ラティルは優しくほほえんだ。

「まあ、決めるのは君だ。どうする？」

スコアはラティルを見つめ、ゆっくりと口を開く。

とある基地の一室。その机に一人の若い将軍が座っている。
その男は年齢二十代後半、長身で、サラッとした黄色い髪に、形の良い目、青い瞳、高い鼻が特徴的だ。全体的に気品のある雰囲気を持っている。

国軍の中将ディアル・ロストブルーだ。

ロストブルーは机に置かれた資料に目を通している。

すると部屋に別の将軍が入ってくる。

その男は年齢三十代後半、黄色い髪に高く整った鼻、何物にも興味のないような無機質な目をしている。

国軍の中将ザベル・ライトシュタインだ。片手に数枚の資料を持っている。

机の前まで来ると、その資料をロストブルーの前に置く。

「これが、『ダークサークル』が引き起こされる原因となったであろう事件や出来事の資料のまとめだ」

「これが……」

ロストブルーはそれにサッと目を通す。

「数年前の事件の内容についても記してありますが」

ロストブルーの言葉にライトシュタインが答える。

「『ダークサークル』の増長の原因についても調べたからな。比較的新しい資料も含めてある」

「デイトヘル虐殺とスロンヴィア虐殺についての内容がきれいに抜けていますね」

「あれは個人が起こしたものだ。これに含むのはふさわしくない」

「……なるほど、確かにその通りですね」

「それと資料には出ていないが、奴らは、数年前から起きている重役殺しにも関わっている可能性が高い」

「例の重役殺しですか……国軍は、解放軍かルザンヌ反乱軍の仕業と見ていますが」

「重役殺しの手口を見ると、かなり内情に詳しい者の犯行であることが分かる。ルザンヌ軍程度では不可能だし、解放軍は不可能とま

では言わないが、もし出来たのなら、国軍をもつと崩す形で行うだろう。だが実際、その様子は見られない」

「なるほど、そう考えるのなら、確かにダークサークルを起こした者達と考える方が妥当ですね」

「国そのものを操作するほどだ。奴らの力なら、内情を知るのも造作ないだろう」

ロストブルーは資料一つひとつに目を通す。

「しかし秘密裏に、しかも個人でこれだけの情報を集めていたとは恐れ入りますね。こういう形でまとめられると、一つひとつの事件にかなり不自然な点が見られます。とても自然に起こったこととは思えない」

「だが確実と言うにはあと一步足りない」

「確かに……皇族に関しての資料はもうないのですか？ ブルテン皇帝周辺の情報を得られれば、かなり有益だと思うのですが」

「皇族に関する資料はこれが限界だ。あとは皇務省を当たるしかない」

「ならば、実際に当たってみましょう」

「いや、やめておいた方がいい。皇務省のレッテル大臣は信用できない。皇務省を当たるのは最後の手段と考えた方がいいだろう」

「ふむ……ならばブルテン皇帝と直接接触はできないのでしょうか」

？ ライトシュタイン家ならば不可能ではないと思うのですが」

「難しいな。十二年前を境にブルテン皇帝は限られた数少ない人物にしか個人的な関わりを持っていない。私自身、何度も面会を断られている」

「最後に話したのは？」

「十六年前だ」

「難しいですね。面会さえ出来れば、あなたなら情報を聞き出せると思うのですが」

「別の手段を考えるべきだろうな」

「今の段階の情報ではかなり大まかにしか人物を絞れませんからね。当面は情報収集ですか」

ロストブルーのその言葉にライトシュタインはあごをさする。

「いや、それよりもまずは足元を固めた方がいい」

「足元……同志を集めると？」

「そうだ、いくら我々とはいえ、二人だけでは心もとない」

「確かに、できるだけ有能な人物が望ましいですね」

「集めるならば少数精鋭だろう」

「それとできる限り信用のおける人物……ですか」

「ああ、我々の行動が敵に悟られないようにな」

「では当面は同志集めですか……。有能で情報に精通していて、さらに信用における人物では、流石に限られますがね。さて……誰にするか」

ロストブルーは静かに考え込む。

フルスロックのミリセルト大商店街、大型の店が連なり、多くの人々がぎわう石畳の道を、クロコとガルディアとアールスロウの三人は歩く。

ガルディアが上機嫌な様子で口を開く。

「今から行く鍛冶屋はオレやファイフの剣を作ってくれた鍛冶屋なんだ。かなりの腕も持つてる。フルスロックは実は隠れた腕利きの職人が多い街でもあるんだ」

「へえ、そうなのか」

するとアールスロウが話し始める。

「商店の街であるフルスロックは、クラウドの街の中でも特に物流がいい。だから質のいい材料を求める芸術家肌の職人が必然的に多く集まるんだ。資産や名声を求めるゴウドルークスの職人よりも、上位者だけなら腕は良いかもしれないな」

「じゃあ今から会う鍛冶屋も……」

「ああ、クラウド屈指の腕を持つてると思っていたらうっ」

「へえ」

クロコは少し興味を持った。

「行きすぎです、 그레이さん」

前を歩くガルディアをアールスロウが止める。

「ここを右です」

「あれ、そうだったっけ？」

三人は石畳の道を何度も何度も曲がる。曲がるごとに道を歩く人の数が少なくなっていく。

「おい、どんどん人通りが少なくなってくぞ」

クロコが確かめるように言った。

「気にするな、そういうモンだって」

「どついうモンだよ」

その内、小さな店ばかりが並ぶ道になった。

「ここだ」

ガルディアが足を止める。すると目の前には、ボロボロの店が建っていた。

「ここかよ」

「まあ店に見た目は関係ないさ」

三人は店へと入った。

中は店内と思えないほどすっきりとしていた。剣が三本飾られているだけだ。三人以外人の気配もない。

「おーい！　じいさん、いるかー！」

ガルディアが大声で呼びかけると、店の奥から深いひげの老人の職人が出てきた。

職人はクロコを見るなりモゴモゴと声を出した。

「おや、君はあの時の……」

「ん？」

クロコは職人の顔をじつと見た。

「あつ！　前に来た時にいたアクセサリー屋のじいさん」

「いやいや、お久しぶりだ」

そのやりとりを聞いてガルディアがギョツとした。

「クロコおまえ、アクセサリーなんか買ってるのか……」

「バカヤロウ！ ソラのだよ。あいつの付けてる髪飾りだ！」

クロコは職人に向き直る。

「でもじいさん、アクセサリー屋じゃなかったのか」

「あれは趣味みたいなもんだよ。本業はこっち」

職人はゆっくり笑った。

ガルディアがズイツと進み出る。

「とにかくじいさん、ガーディアンはちゃんと届いてるか」

「ああ、来とるよ」

職人を先頭にゆっくりと奥の部屋へと進んだ。部屋の中央には緑色の大きな金属の結晶が置いてあった。

クロコはその金属をのぞきこむ。

「これがガーディアンか」

「クロコ、君はガーディアンを知っているか？」

アールスロウの質問にクロコは少し頭をかく。

「聞いたことあるぐらいだな。詳しくは知らない」

「ガーディアンはナイトメタルよりワンランク質の高い天然金属だ。ついでにナイトメタル製の武器は解放軍では珍しいが、国軍では三割近くの剣兵が所有している」

「えっ！？ そうなのか」

クロコは少しショックを受けた。

「ついでに言うと天然金属のガーディアンは、人工合金のナイトメタルよりもはるかに高価だ。g単価で言つとちよつど100倍違うな」

「……冗談だろ」

呆然とするクロコを見てガルディアが笑つ。

「ハッハッハッ、ファイフがそんな冗談言つわけないだろ。そういう冗談を言つのはオレだ」

「ただし今回の場合は金属よりも職人の方の腕のほうが貴重だということを忘れるなよ」

アールスロウのその言葉に職人は頭をさする。

「いや、大したこたーないですよ」

ガルディアがクロコを見る。

「とにかくオーダーメイドの特注品だからな。できたら大事にするんだぞ」

「まずはサイズだな、どうするクロコ」

アールスロウの質問にクロコが答える。

「サイズは大型だな」

「お譲さんには大きくないかな」

「誰がお嬢さんだ！」

「クロコって呼んでくれないか」

「んじゃあクロコちゃん」

「誰がクロコちゃんだ！」

「普通にクロコでいいから」

「クロコ、サイズが大き過ぎないかね」

職人のその言葉にガルディアがうなづく。

「だよなー。なあクロコ、小型にしろよ、それかせめて中型」

「戻った時はそれでいいって言うてんだろ」

「だけどなー」

「手がかりはもうだいぶつかめてるんだ。そう遠い話じゃねーよ。」

それに……剣は一生ものだからな」

ガルディアは鼻をフンと鳴らす。

「まあ大事にするってなら文句は言えねえな」

「そうですね」

「んじゃあ大型でいいのかい」

職人の問いにクロコは答える。

「ああ、サイズは大型。形は……ゴルドアに近い方がいいな。ただ刀身は少し短くしてくれ、全体で95cmぐらいがいいな」

「ふむ……んじゃあ、あとはいくつか大型の剣を振って見せてくれ」

「分かった」

ガルディアは職人を見る。

「どれぐらいでできそうだ？　じいさん」

「まあ一週間つてところかね」

「一週間か……じゃあ受け取りの手はずは……」

職人とガルディアが会話する中、クロコがアールスロウに耳打ちをする。

「なあ、アールスロウ。完成した剣っていくらぐらいするんだ？」

「ガーディアンはg単価は一般で1500バルだ。君の剣のサイズでは1800g程度のガーディアンが使われるだろう。単純計算で270万だが、それはあくまで材料費だ。まあその2倍、3倍つてところか」

クロコはわずかに顔を引きつらせた。

「別に気にすることはない。ついでに言うと 그레이さんの剣は世界三大金属に数えられるダークダイヤモンド製だ。ダークダイヤモンドのg単価は60000バル、ついでに 그레이さんの剣の重量は7kgを優に超している……………あとは勝手に計算してくれ」

クロコはしばらくのあいだ固まっていた。

シャルルロッド基地の食堂。ワイワイと兵士がにぎわう中を、一人の少女が動き回っている。

基地食堂で、レイアはせかせかと働いていた。きれいな服に身を包んで、空のテーブルを拭いて回っている。

そんなレイアの様子を、スコアは少し離れた所で見守っていた。スコアの顔から思わず笑顔がこぼれる。

ある日のフルスロック、その一室、そこでは緑色の光沢を持つ新

たな剣を持ったクロコの姿があった。

「すげえ、こんなすげえ剣、初めて見た」

クロコは剣の鮮やかな出来栄を見て感動していた。
隣に立つガルディアはそんなクロコの様子を見て、ほほえみを浮かべる。

「なあクロコ、その剣の名前はどつする？」

「名前……？」

「オリジナルの剣はな。その持ち主が名前を決めるんだ」

それを聞いてクロコは悩む。

「急に言われてもな……なんかいい案ないか？」

「ガルディアソード」

「アンタの名前なんか付けるか！」

「だから自分で決めろよ」

「うーん」

クロコはしばらく考え込む。

「……よし、決めた」

クロコは剣を上げて見つめる。

「クラメント。それがこいつの名前だ」

クロコは満足そうにほほえむ。

「これからよろしくな。クラメント」

4 - 2 染物工場事件

フルスロツクに朝日が差し込む。フルスロツク基地の廊下ではソ
ラがいつものように果物を届けに来ていた、カラの荷車を引くソラ。

「よう、ソラ」

ガルディアが元氣よく挨拶をする。

「あ……ガルディアさん、おはようございます」

氣のない返事をするソラ。

「……？ どうした、元氣がないな」

「え……あ、すみません」

「どうした、何か悩み事か。オレでよければ話を聞くけど」

「あの……実は……」

ソラはゆつくり口を開く。

「この街の北にある大きな染物工場のことはご存じですか？」

「ん、ああ、知ってるよ」

「そこで働いてる私の友人がケガをして」

「友人が……」

「はい、ここ最近起きてる傷害事件です。染物工場の従業員が勤務中に狙われているっていう。被害者はもう十人以上」

「そんな事件が起きてたのか。オレの耳には入らなかったけどな」

「そうでしょうね。犯人は従業員の中にいるっていう見方が強いので、工場側も極力、外部に漏れないようにしているって話ですし。幸いまだ大きなケガをした人はいないらしいんですが」

「とはいえほつとくわけにはいかないな。治安維持も解放軍の大事な仕事だからな。よし、ウチのやつを送って見るか」

フルスロツクの北、そこには大きな工場が建っている。

その入口の前には四人の人影が立っていた。

その内の二人はクロコとソラ、残りの二人は少年の軍人だ。

一人は見た目年齢十四、五、150cm満たない小柄な体形で、柔らかな灰色の髪、整った顔をしている。

クロコの基地の仲間フロウ・ストルークだ。

もう一人は年齢十三、四、一ヶ所はねた黄色い髪、ぱっちりとした目に透きとおるような緑色の瞳が浮いている。

同じくクロコの仲間のサキ・フランティスだ

フロウは工場をまじまじと見ながら口を開く。

「グラウドーの染物工場リザーポイント。労働者は全部で200人か……」

「さて、どうするか」

クロコはフロウを見ながら言った、するとソラが答えた。

「犯人は労働者の中にいる可能性が高いから、軍人が調査になんて来たらすぐ隠れちゃうかも。だから潜入捜査がいいと思うよ」

「なぜおまえが仕切る。だいたい、なんでおまえがいるんだよ」

クロコがソラに文句を言った。

「この発端は私なんだし、このままほっとく訳にはいかないよ。それに私は絶対必要だと思うし」

「必要……?」

「この工場の労働者は全員が女なんだ。だから怪しまれないように潜入調査をするには女の子じゃなきゃ」

「……………」

クロコは一瞬黙った。

「がんばれよ、ソラ」

「ダメ、クロコも一緒」

そんな二人を見るフロウとサキ。

「じゃあ犯人を見つけたら呼んでよ」

「ボクらはここで待機してるんで」

「お、おい、冗談じゃねえぞ！ 女装なんて二度とゴメンだからな
！！」

「大丈夫だいじょうぶ、普通にズボンでいいから」

それを聞いて安心するクロコ。

「ああ、そうか、なら……」

「ただ口調は女の子でね」

「……………」

クロコは固まった。

「クロコ、これも立派な軍務だよ」

フロウがクロコの肩をポンと叩く。

「うーん、でも私とクロコだけじゃ不安だからもう一人くらい欲しいな」

ソラはそう言ってフロウとサキを見る。すぐさまフロウが口を開

く。

「だけどソラちゃん、男じゃ怪しまれるんでしょ？」

「うん、だから女装して」

「.....」

フロウはサキを素早く見る。

「がんばってサキ君」

「えっ！？ い、いやですよ。フ、フロウさんの方が似合いますよ、きっと。身長的にも」

「サ、サキ君ぐらいの身長の子もそれほど珍しくないと思うな
ー」

「じゃあ、あとでもめないように、二人ともにしよっか。実はもう
四人で手続き終えてるんだよね」

「.....」

ソラの言葉に二人は固まった。

「二人はちゃんと女物の服着てよ、それとカツラ。でないとさすが
にバレちゃう」

「.....」

「じゃあ偽名を決めるね。フロウ君はフローラ。サキ君はサーニヤ、クロコは……………エリザベス」

「オレだけテキトーだろ！！」

工場の仕事場、新入りとして紹介される四人。ソラ、クロコ、それと女装したスカート姿のフロウとサキが並ぶ。すでにフロウとサキの目は死んでいた。

中年女性の工場長が紹介する。

「ソラさんにフローラさんにサーニヤさんにエリザベスさんです。まだ分からないことが多いので、みなさん協力して仕事を教えてあげて下さいね」

四人がそれぞれ持ち場に着く。クロコとソラは一緒に持ち場で、あとは別々だ。

持ち場に着くと、あっという間に若い娘が取り囲んでくる。

「よろしくエリザベス」

「かわいいね、どこら辺に住んでるの？」

「染物のやり方は知ってる？」

「知らねえ」

ソラが素早くクロコをこづく。

「いて！ ……し、知らない」

ソラが愛想よく女の子達に話しかける。

「まだ分らないことが多いから、これからお世話になるけどよろしくね」

「うつん、こちらこそ」

「きみは要領良さそうだから大丈夫そうだよね。むしろエリザベスの方が心配」

「オレ、いて！ わたしの心配はしなくていいぞ、いて！ しなくていいよ」

「そんなこと言って、遠慮しちゃダメだって」

「アハハ、ホントにわたしは大丈夫だから……」

「手とり足とり教えてあげる。ほら、遠慮しないの」

女の子の一人がクロコの背中に回り込む。

（うわ！ 近い！ ためらわず手を取ってくる！ 胸が当たってる！ いて！ いて！ いてーよソラ！ オレが悪いんじゃないぞ、コラー！！）

別の場所ではサキが女の子たち囲まれる。

「サーニヤ、背が高いよね。スタイル良くてうらやましい」

「ど、どうも」

「でも顔はまだ幼いよね」

「そうよね、かわいい顔」

「あ、あの、あんまりかわいがられるよりも、その、ボ……わたしはもうちょっと頼りたい……かな」

「えー、頼られるってなんかイメージ違うよね」

「うんうん、むしろマスコット」

（マ、マスコット……！！）

サキはショックを受ける。

別の場所でフロウが女の子達に囲まれる。

「かわいい。小さくてお人形さんみたい」

女の子の一人が頭をなでてる。

「あ、あの、あまり子供扱いはしないで下さい」

フロウは素早く頭をそらし、なでられるのを嫌がった。

「えー、だってこんなにかわいいのに」

「そうだよ、女の子なんだから、小さくても大丈夫だって」

「そうそう、気にすることないよ。女の子ならかわいって。男じ

やダメだけどさー」

「アハハ、男でこの身長はアウトだよな」

「こんな小さな男いたら虫だよ」

（む、虫……！！！！）

フロウは強烈なショックを受けた。

休憩時間、娘達に離れてクロコ、フロウ、サキの三人は一ヶ所に固まってぐったりしていた。

それを遠目で見えるソラ。

（もう！ 頼りにならないなー）

「きゃー！！！！」

突然、廊下から悲鳴が響いた。

それを聞いて三人はガバツと体を起こし、廊下へと疾走する。廊下には腕から血を流した少女がうずくまっている。

「おい、大丈夫か！？」

クロコが一番に駆け寄って声をかける。

「う……う……」

少女は怯えて十分にしゃべれない。

クロコは腕の傷を見る。何か鋭いものに切り裂かれた傷だ。

「犯人は？ 誰にやられた？」

「……分からない、後ろから突然」

「クロ……エリザベス！」

フロウが声を上げて、窓を指さす。見ると窓の外を、建物沿いに素早く駆ける影が見えた。

クロコは窓に素早く片足を掛ける。

「ク、クロコさん、ここ三階です」

「知るか！」

クロコは窓から飛び出し、建物の外側の狭い足場を駆ける。フロウとサキも続く。

影は足場の端まで行くと、驚くほど高く跳び上がり、隣の建物の屋根に跳び移った。

「なっ！？ なんだあいつ！」

クロコは驚いた。

「クソ、オレ達も飛び移るぞ」

「えっ！？ ム、ムリですよ。遠すぎます！」

サキの制止を無視してクロコは跳び上がった。高く跳び上がったクロコはそのまま建物の屋根に着地する。フロウも続いて跳び上がり、屋根に移った。続くサキは一瞬ためらったが……

「ボ、ボクは……ボクは、マスコットなんかじゃない!!」

サキも続いて跳び上がる。しかし届かず地面に落ちていった。屋根の上を走るクロコとフロウ。
フロウが振り返る。

「あれ？　いま後ろですごい音しなかった？」

「気のせいだろ」

クロコは屋根を見渡す。

「それよりあの影は？」

すると屋根の端にいた影は素早く地面の方へと飛び降りる。

「クソ！　身軽なやつだな」

すぐに追うクロコとフロウ。しかし途中フロウがスカートを屋根の出っ張りにひっかけて、勢いよく転倒する。屋根にうつぶせに張り付くフロウ。それを見てクロコはあきれる。

「……たく、何やってんだよ。屋根に張り付きやがって。虫か」

クロコはフロウを放っておき、そのまま影を追う。建物から飛び

降りようとした、その時だった。

「きゃー!!」

再びの悲鳴、しかもクロコにとって聞き覚えのある声だった。

「ソラ!!」

クロコは素早く飛び降りる。地面に落ちる途中、クロコは見た、ソラに襲いかかる何者かの影を。クロコはそのまま二人のあいだへと落ちる。間髪入れずにクロコはその影に蹴りを入れた。

吹っ飛ばされる影。

クロコはソラの前に立った。

「なんでおまえこんなトコにいんだよ」

「みんなが人間離れた動きでどんどん行っちゃうから、下から回り込もうと思って……」

「危なっかしいやつだな」

クロコは吹っ飛んだあとの影を眺めた。

一瞬クロコはそれを毛むくじやらの人間かと思った。

「……サル？」

白と黒の毛色の大きなサルが仰向けに気絶していた。ソラがおそろおそろのぞきこむ。

「マルメオザルだ……すごくおつきい」

「どうりで身軽だと思ったよ。こいつが一連の傷害事件の犯人が」

「けど、マルメオザルは本来は森に住むおとなしい生き物のはず」

「きつと街に迷い込んで混乱してたんだな」

結局、その後四人はマルメオザルを近くの森に返して事を収めた。

帰り道、フルスロツクの通りを歩く四人。

ソラが安心した様子で話す。

「事件でシヨツクを受けた私の友達やほかの被害者の子も、サルが犯人だって分かればきつと安心すると思う」

「そっか、まあ一件落着だな」

そんな会話をするクロコとソラから少し離れて、元氣なくトボトボと歩くフロウとサキ。

基地の前でソラと別れる三人。

「今日はありがとうね、みんな」

ソラと挨拶をして、三人は基地へと歩く。

「クロコ」

フロウとサキの後ろを歩くクロコをソラが呼び止めた。

「なんだ？」

「あの時はありがとうね」

「んっ？」

「襲われる所を助けてくれた」

ソラはニコツと笑った。

「あ、あー、別に構うことねえよ」

「ねえ、クロコ。私と初めて会った時のこと、覚えてる？」

「ああ……って言うてもそこまではっきり覚えてるわけじゃねーけど」

「そのとき、ブレッドさんがクロコのこと、『クロ』って呼んでた」

「……よく覚えてるな、そんなこと」

ソラはクロコをじっと見た。

「私もクロコのことクロって呼んでいい？」

「別にいちいち呼び方なんか気にしねーよ」

「じゃあいってことだね」

ソラは笑顔を見せる。

「じゃあ、これからはクロって呼ぶね」

そう言って、ソラは背中を向けた。そのまま振り向いてほほえむ。

「またね、クロ」

4 - 3 フルスロックバザール

「フルスロックバザール？」

朝、基地の廊下でクロコは、ソラにそう聞き返した。

「うん、年に一度、この街に世界中の商人が集まって開かれる世界最大の大市场。それが今週末から始まるんだ」

「へえ、そんなものがあつたんだな」

「この街最大のイベントだよ！　ねえクロ、一緒に行こうよ」

「でもこの時期だろ。噂じゃ、ここが戦場になる可能性もあるっていうのに、そんなもの開かれるのか？」

「うん、そういう噂も聞くけど、でもここが戦場になる可能性は低いつて見方が強いし、商人達にとっては年に一度の書き入れ時だからね」

「やれやれ、商人つてのはたくましい限りだな」

「まあ、中には死活問題の人もあるわけだし」

「戦争どころじゃないってか」

「とにかくさ、週末一緒に行こうよ、クロ」

ソラは積極的に誘うが、クロコの反応は薄い。

「気が乗らないな。どうせ人でギューギュー詰めだろ」

「もう！ せっかくの大イベントなのに。それにクロ。クロのほしいものも見つかるかもよ」

「オレのほしいもの？」

「もう！ しっかりしてよ！ 神具のことだよ」

「……！！」

クロコはハッとした。

「聞くところによると、神具を持った商人はセウスノールから東に向かったんでしょ。……てことは、このフルスロックバザールに顔を出す可能性がすごく高い。これはまたとないチャンスだよ！」

ソラの言葉を聞いて、クロコは小さくうなずく。

「言われてみればそうだな」

「決まりだね」

ソラはニコツと笑った。

週末、フルスロツクの大通りの隅にはたくさんの商人達の屋台店や、商品を並べた布がズラツと縦に並んでいた。大通りの端から端まで商人だらけだ。

さらにその売り物目当ての客が通りを埋め尽くしている。その中にクロコ、ソラ、サキ、フロウの姿があった。

「す、すげえ人だな」

クロコは人の群れに半分埋もれながら声を出す。

「世界一の大市場だからね。いまは街中こんな感じだよ」

フロウがサキにつかまりながら言った。

「神具を探すのもいいけどさ、せっかくだからいろんな店を回ろうよ」

ソラが楽しそうに言った。

「そうですね、せっかくだから楽しまないと」

サキもワクワクした様子だ。

「とにかく街はこんな様子だし、みんな、はぐれないように注意しようね」

ソラはフロウを特によく見ながら言った。

「あ……うん」

見かねたサキがボソツと口を開く。

「ソラさん、実はフロウさん、こう見えても十九才なんですよ」

「「えっ!？」」

ソラとクロコが同時に驚く。

「オ、オレはてっきり同じ年か、年下かと……」

「私はむしろこの中で一番年下かと……」

フロウは軽く咳をする。

「ご、ごめんね、フロウくん」

ソラはフロウの頭をなでながら言った。素早く頭をそらすフロウ。フロウはクロコを見る。

「そういえばクロコ。セウスノールで聞いたっていう商人、なんか特徴とか聞いてないの？ 探すにしてもなんか情報がないと」

「ああ、赤いひげを生やしたコウモリだ」

「……？ 何の話」

クロコ達はフルスロツクの大通りを回る。様々な店が数え切れないほど延々と続いていた。服屋や花屋、飲食店、金属屋、ベル屋、はちみつ屋にチーズ屋。珍しい石を並べている店や、火薬を取り扱

っている店まであった。

花屋や服屋やアクセサリー屋ではソラがそれらを興味深く眺めていた。

本屋では、ソラとフロウがパラパラと本を流し読みしていた。そのあいだ、サキはその様子をボーと眺め、クロコは飲食店の脇でネコとたわむれていた。

不気味な生物の肉を売っている店では、店主とサキがドラゴンの話で盛り上がっていた。

楽器屋ではフロウがフルートを少し演奏して見せた。

チーズ屋ではクロコが気に入ったチーズを一切れ買って、分けてみんなに配った。

剣屋ではソラ以外の三人がまじまじと剣一本一本を眺めていたが、フロウが小さく首を振るのを合図に一齐に店から離れていった。

馬屋では、クロコが4 m近くある馬車馬とにらみ合っていた。店を見るたび、クロコはその店員に呪い屋のことを聞いたが、情報は何も得られなかった。

「ダメだな……見つかる気がしねー」

クロコがすっかりしたように声を出した。それを見てフロウが口を開く。

「まあ、確かに……。これだけ商人がいたんじゃあ、探すのも一苦労だよ」

「いったいどれくらいの商人がいるんだ」

クロコの言葉にサキが答える。

「たぶん街のほとんどの通りで、商人が店を開いてると思いますよ」

「通り一つでこの人数だから、とんでもない数だろうね」

「普通に探したんじゃ見つからないね。そろそろ本格的に探さない？」

ソラが三人を見ながら言った。

「でもどうやって探すんだ？」

「呪い屋って、やっぱり広い大通りで大々的には商売しづらいと思うんだ。だから主に路地を重点的に探そうよ」

ソラがそう言うと、フロウが考えながら口を開く。

「路地が多い通りって言ったら………ザンプル通りかな」

その言葉を聞いてソラが口を開く。

「ザンプル通りかー。でもザンプル通りはここからじゃ遠いし、マール通り辺りがいいんじゃないかな。あそこのすぐ隣にはラッセル通りもあるし。時間も限られてるから、その二つを集中的に探した方が可能性は高いと思う」

「そうですね、探せる機会は今日ぐらいですからね」

四人は大通りのすぐ近くのマール通りへと向かった。

マール通りでは普段開かれている小さな店と共に、道ばたで商人達がチラホラと店を開いていた。

「手分けして探した方が効率がいいね」

フロウが三人に向けて言った。ソラがうなずく。

「うん、じゃあモール通りの東と西、ラッセル通りの東と西をそれぞれ分担しよう」

「じゃあ僕がラッセル通りの東まで行くよ。あとクロコ、一緒にラッセル通りまで行こうよ」

「オレはどこでも構わねえ」

「ならボクはこの東ですね」

「じゃ、私はここか」

「昼の鐘が鳴ったらいったんここに戻ろう」

「よし！ 頑張つて探すぞ！」

ソラが力を込めて言った。

「なんでおまえが一番気合入れてんだよ」

クロコは少しあきれ気味に言った。

四人はそれぞれ分かれていく。別れ際にソラがクロコに呼びかける。

「クロコ！ 迷わないようにね」

「余計なお世話だ。おまえこそ変なやつに襲われないように気を付けるよ」

すると隣でフロウがボソッと口を開く。

「大丈夫だよ、すでに変なのが近くにいるから」

「オレのことじゃねえだろうな」

クロコは殺気立った。

クロコはその後、フロウと別れてラッセル通りを回る。

ラッセル通りに開かれていた店は大通りで見たものよりも地味でマニアックなものが多かった。

石屋、ガラス屋、鉄くず屋などが並ぶ。クロコはその商人達に丹念に呪い屋について聞いて回った。しかし情報は全く得られない。

「クソ、全く見つかる気配がない」

クロコはぼやいた。すると目の前にフロウが現れた。

「あれ？　なんでおまえがココにいるんだ」

「君こそどうしているんだよ。ここは東側だよ」

「あれ？　そうなのか？」

「君ね、ソラちゃんの心配が的中してるよ」

「それよりフロウ。おまえ見つかったか？」

「ううん、まだ見つからない」

「そうか……」

「でもまだ半分も回ってないし、せっかくだから一緒に回ろうよ」

二人は一緒に探し出した。

「呪い屋って本当に珍しいんだな……」

「だろうね、僕は一度も見たことないし」

「二度見つけた事そのものが奇跡に近いのか……。店自体は恐ろしく目立つんだけどな」

「へえ、なんか呪い屋特有の外装とかあるの？」

「ああ、黒いんだ」

「黒い？」

「とにかく黒いんだ」

「黒いか……あんな店みたいな感じ？」

フロウが前方の真っ黒な店を指さす。

「ああ、あんな店………」

クロコの言葉が途切れた。

「あつた！」

クロコは大声を上げて、店に突進する。素早く店員の顔を見た。店主は男だった。丸い顔で小さく離れた目に丸い大きな鼻、赤いひげを生やしていた。まるで……

「赤いひげを生やしたコウモリ……！」

クロコは思わず声に出す。

突進して来たクロコに店主は驚いていた。

「な……何だい、一体……」

クロコはゆっくりと息を落ち着かせる。遅れてフロウが隣に並んだ。

クロコはゆっくりと口を開く。

「ここに……神具は売ってないか……？」

「売ってるよ」

店主はスパツと答えた。

その言葉を聞いてクロコはぐっとこらえるように平静を装う。

「指輪型の……？」

「ああ、指輪型だ」

その言葉を聞いた直後、クロコは真紅の瞳をギラツと光らせた。

「見つけた!!」

クロコの大声に驚く店主。

「見せてくれないか？」

クロコの言葉を聞いて、店主は商品棚の一か所を指さす。

「これだよ」

見ると、そこには白く輝く指輪が置かれていた。

「これが……神具」

「ああ、セイルティア。指輪型の呪具の呪いを浄化する神聖な指輪だよ」

「おっさん……これを……これをくれ」

クロコのその言葉に店主はニコツと笑う。

「ああ、もちろんいいよ」

店主は指輪を片手で持つ。

「350万バルだ」

その店主の言葉にクロコは固まった。

「え……今なんて……」

「350万バル。この指輪の値段だよ」

隣のフロウも呆然とする。

「高……」

「お、おい！　いくらなんでも高過ぎるだろ！」

「神具つてのは高価な物が多いんだよ。金がないなら渡せないね」

「く……！　そんな大金持つてねえよ」

「ごめんクロコ。今の僕じゃあ力になれない……」

フロウは小さく言った。

「ないならあきらめるんだね」

「く……」

クロコは険しい顔をする。

フロウが少し考えたあと口を開く。

「すみません、僕らどうしてもそれが欲しいんです。足りない分のお金を何かで補充することはできないでしょうか？」

「補充？」

「僕らはフルスロツク基地の軍人です。隣のクロコは特例で入軍した剣士ですし、僕もいろんな知識に精通しています。何かを手伝ったり、力になることで、なんとかそれを譲ってはいただけないでしょうか」

「うーん、とはいえ、350万分の働きとなるとねー……………待てよ」

店主は屋台の裏から何かを取り出した。
緑に輝くきれいな箱だ。

「なんだ、コレ？」

クロコはその箱を見つめる。

「これはオレのひいひいじいさんの代から伝わる箱でね。だがどうしても開くことができない開かずの箱なんだ」

店主は箱を揺らす。コトコトと何かが揺れる音がした。

「何かが入ってるんだ。しかし中身が分からない。じいさんも、オヤジもオレも中身が何なのか知りたい、お宝なのかガラクタなのかだが、誰も開くことができない」

「何か鍵が必要なんですか」

「箱の中心を見てみな」

箱の中心にはなにやら八つの回転盤が並んでいた。店主が回転盤を回すと0から9までの数字が刻まれていることが分かった。

「八つの正しい数字を並べ、その上のボタンを押すことで箱が開くらしいんだ」

「じゃあ全部のパターンを試せばいいんじゃないのか？」

「……………一億パターン。クロコ、百年かかっても無理だよ」

「その通り、だがヒントはある」

男は箱の裏側を向ける。そこには数字が刻まれていた。

1 0 8 6 4 7 3 7 9 7 7 3 1 1 1 5 5 3 3 5 5 7 7 1 3 4 6 8 9 1
7 9 3

「三十三の数字……………これがカギを開けるヒントですか」

「そうだ、だが今まで開けたやつはいない。百年以上我が家で伝えられているがな。オレの代になっていろんなやつに挑戦させたが、誰も開けたやつはいなかった」

「もし、これを僕らが開けたら……………」

「ああ、この指輪をタダでやろう」

「ホントか、約束だぞ」

クロコは確かめるように言った。

「でもクロコ、百年以上誰も開けられなかった箱だ。一筋縄ではないよ」

「でもそれ以外方法はねえだろ」

「確かにね」

フロウは箱を持って裏を見つめる。

1 0 8 6 4 7 3 7 9 7 7 3 1 1 1 5 5 3 3 5 5 7 7 1 3 4 6 8 9 1
7 9 3

「この数字の謎を解けば、箱が開けられる訳か……三十二……ちょっと多いな」

するとクロコが口を開く。

「簡単だろ」

「えっ？」

「このヒントの三十三の数字の中に答えの八つの数字が入ってるのは確実なんだ。なら、まず端っこの八つの数字を入れて、そこから一つずつずらしていけばいい」

「それをやったやつはもういるぞ」

店主がスパッといった。

「……だそうだよ、クロコ」

クロコは少しうなる。

「……なら、後ろ端から逆の順番にずらして入れてやる」

「それをやったやつもいたなあ」

クロコがまたうなった。

「実際にやってみる！　じゃなきゃ納得できねえ！」

「やるのはいいけど、その前に数字を書き写させて。あつ、ペン貸してもらえますか？」

店の端でクロコが箱にひたすら数字を入れてボタンを押している。カッカッカッというボタンが引つ掛かる音がひたすら響く。その隣でフロウは紙に写した箱裏の数字を見つめる。

1 0 8 6 4 7 3 7 9 7 7 3 1 1 1 5 5 3 3 5 5 7 7 1 3 4 6 8 9 1
7 9 3

フロウは考える。

（完全にバラバラの数字……て訳ではなさそうだな。特に真ん中あたりに規則性が見える。けど、もしこの規則的な数字が答えなら、今やってるクロコの方法で開けることができるはずだ。でもおじさんの話では開かない。なら別の観点で考えるか、答えの数字は八つ、ヒントの数字は三十三。この二つの数字に関係があるのかも。まてよ）

「くそー！ 開かねえ」

クロコが声を上げた。

「じゃあ僕にやらせて」

「分かったのか？」

「この紙を見てクロコ」

紙には三十三の数字が並べ変えられていた。

「この三十三の数字を、答えの数字の八つごとに並べ変えてみたんだ。そうすると……」

1 0 8 6 4 7 3 7

9 7 7 3 1 1 1 5

5 3 3 5 5 7 7 1

3 4 6 8 9 1 7 9 3

「……これがどうしたんだ？」

「よく見て、一つだけ数字が浮き出てるだろっ？」

「あっ、ホントだ」

「つまり答えは……」

3 3 3 3 3 3 3 3

フロウは数字を入れてボタンを押した。

カッ

ボタンは引っ掛かった。

「……なわけねえよな」

クロコは冷たく言った。

「単純すぎんだよ。フロウおまえ実はバカだろ」

「だったら自分で考えろ！」

「いてててて、ほっぺをつねるな！」

二人はまた考え出す。

「んっ！？　まてよ……」

フロウが声を出した。

「分かったのか？」

「いや……というより、ヒントの数字をもう一度見て」

1 0 8 6 4 7 3 7 9 7 7 3 1 1 1 5 5 3 3 5 5 7 7 1 3 4 6 8 9 1
7 9 3

「それがどうしたんだ?」

「1のあとに0がある」

「だから?」

「つまり、これは0～9の数字じゃなく?～10の数字なんだ」

「あ……そうだな言われてみれば」

クロコは間を置いてもう一度口を開く。

「だからって何なんだよ。これで解けるわけじゃないだろ」

「う……まあね……あつ! でも後ろ端から数字を入れるやり方は、修正が必要だよな」

「ああ、まあな。じゃあやってみるか」

再びボタンがカツと引つ掛かる音が響いた。

フロウはまた考える。

(1と0の数字が実は10だということが分かったところで、答えが出るわけでもないか。でもそうするとヒントの数字は三十二……
答えの八つのちょうど四倍か……関連性は……)

するとクロコが声を上げた。

「クソ! イライラする。この箱を斬っちゃまうか」

「ダメだよ。中身まで斬れたら元も子もないだろ」

「この数字の答えを考えるより、中身を傷付けずに箱を斬る方法を考える方がいい気がしてきた」

「やれやれ……」

フロウはあきれた声を出したあと、再び考え始める。

（ヒントの数字が答えの数字の四倍……ってことは、ヒントの数字は四つ一組で、一つだけが本物……あとの三つがフェイクなのかも……。とりあえずその方向でやって見るか……）

その後、フロウが色々と数字を並び替えて試したが、ボタンが引っ掛かる音が響くだけだった。

「クソ、ダメだあかねえ」

クロコの声と共に、フロウはガツクリ肩を落とした。

「クロ、フロウくん？」

突然二人を呼ぶ声がした。気付くと後ろにソラがいた。

「ソラ、なんているんだ」

「なんているんだ、じゃないでしょ。昼の鐘はもうとつくに鳴ってるよ」

「しまった、つい没頭しちゃった」

「いつまで経っても二人が来ないから、私が呼びに来たんだよ」

「ごめん、ソラちゃん」

「だけど指輪自体は見つかったんだ」

「……?? どういうこと?」

二人はソラに今までの経過を説明した。

「ふうーん、この箱をねー。ちょっと見せて」

ソラがその箱を手にとって見る。

「さすがにお手上げだよ。まったく解ける気がしない」

「ついでに言つとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝじゃないぞ」

「うるさいな!」

「分かった……かも」

ソラがつぶやいた。

「えっ?」

「適当じゃダメだぞ。大体のことはフロウが試したから」

クロコの言葉にソラはうなづく。

「うん、自信はある」

「じゃあソラちゃんはこのヒントの数字のどこに、答えが隠されてるって思ったの？」

「ううん、この数字内には答えはないよ」

「え……？」

「これは複雑な数字パズルだね。この数字内に答えがあるっていう先入観を持つと、まず解けないと思うよ。数字を見て」

1 0 8 6 4 7 3 7 9 7 7 3 1 1 1 5 5 3 3 5 5 7 7 1 3 4 6 8 9 1
7 9 3

「この数字を見て規則的な部分はどこだと思う？」

その言葉にフロウが答える。

「真ん中あたりに規則的な数字が見えるけど」

「うん、その前に、端から見ると……」

ソラの言葉にクロコが答える。

「最初の四つの数字、1 0、8、6、4か……きれいに2ずつ減ってる」

「当たり、ここまで来ると四分の一は解けてる。つまりこれを離す

と」

ソラが紙に数字をサラサラと書く。

1	0	8	6	4		7	3	7	9	7	7	3	1	1	1	5	5	3	3	5	5	7	7	1	3	4	6	8
9	1	7	9	3																								

「……ってなるよね。この二つの数列から、ある形を生み出せるんだ」

「ある形？」

フロウが数字をのぞきこみながら言った。するとソラが口を開く。

「左の四つの数字の合計」

「合計？ 28……」

「右の数字の数は？」

「……28か」

「うん、左の数字に沿って、右の数字を振り分けると……」

7	3	7	9	7	7	3	1	1	1		5	5	3	3	5	5	7	7									
1	7	9	3																								

クロコが数字を見ながら口を開く。

「……右から二つ目の列が特徴あるな」

「それだけじゃないよ。この全ての数列には規則性がある。そしてこの規則性がこの箱の答えになってる。まずは一番右の数列」

7 3 7 9 7 7 3 1 1 1

クロコは首をかしげる。

「……規則性があるのか？ 7が多いのと1が並んでるぐらいしか……」

するとフロウがハツとした。

「分かった。全部奇数だ」

「当たり前、これがヒントの一つめ。次に右から二つ目の数列」

5 5 3 3 5 5 7 7

「これは見たまんまだよね」

「二つずつに並んだ数字か」

「うん、そして三つめ」

1 3 4 6 8 9

数字を見ながらクロコは頭をかく。

「……これはバラバラに見えるけど……待てよ、この数字、右

に行くほどどんどん増えてきてる」

「当たり前、つまり右上がり」

「じゃあ最後は左端か……」

1 7 9 3

「左端はね、このままじゃ分からないよ。これを考える前にこれまでのヒントをまとめてみないと。まずは全て奇数、二つずつ並んだ数字、右上がりの数字。この全ての条件を持った八つの数字を考えてみて」

クロコは考えながら紙に数字を書く。

「
..... 1 1 3 3 5 5 7 7、 1 1 3 3 5 5 9 9、 1 1 5 5 7 7 9
9..... えっといくつかあるんだ？」

「まだいくつか候補があるよね。なら、最後の数列を見てみて」

1 7 9 3

「あつ、使う数字か」

「当たり前！ その全てのヒントを満たす数字は……」

ソラは回転盤を動かす。

1 1 3 3 7 7 9 9

ソラはボタンを押した。

カチリ

中から鋭い音が響いた。

「開いた……」

箱の中には光り輝く金属の結晶が納まっている。箱の裏には文字が彫られていた。

真の答えとは物事の中になし
物事を理解した先にあり
箱を開けし知者の未来に幸あれ

クロコは金属の結晶を見つめる。

「この金属は……なんだ？」

店主は金属を手にとって眺める。

「見たことのない光沢だ」

ソラはその店主の手に持たれた金属をまじまじと見る。

「この白い光沢……この金属はもしかして、サントーネシスじゃないですか」

「サントーネシスって、あの世界三大金属の……？」

「うん、間違いない」

「こ、これが世界三大金属の結晶」

店主は小さい目を見開く。

「サントーンネシスは、世界三大金属の中でも最も価値の高い金属です。この量だけでもたぶん数千万はすると思いますよ」

「数千……」

「箱は開けました。約束通り、指輪はもらっていいですか？」

「あ、ああ、もちろんだ」

「ありがとうございます」

ソラはニコツと笑って言った。

「いやいや、こちらの方がお礼を言いたいくらいさ」

店主は上機嫌だ。

「よっし！ ついに手に入れたぞ」

クロコは白い指輪を手を取った。

「……でどこにはめればいいんだ？」

クロコがそう言うと店主が口を開く。

「その黒い指輪が呪具だろ？　なら黒い指輪が右手人差し指だから、その逆、白い指輪は左手人差し指だよ」

「なるほどな」

クロコはスポツと指輪をはめた。その様子を見てソラが驚く。

「えっ！？　もうはめちゃった！　服に絞め殺されちゃうよ！」

ソラの心配をよそに、クロコの身には何も起きない。

「……？？　アレ、変わらない」

クロコは呆然とする。

「お、おい！！　どういうことだ！」

クロコはすぐに店主をにらみつけた。

「こりゃあ、しばらくダメだな」

「ああ！？」

「いやな、神具には効くまでに時間がかかるやつがあるんだよ。体の中に溜まった呪いの力を、白い指輪の聖なる力が打ち消すのに少し時間がかかるんだなあ」

「時間ってどれくらいかかるんだよ」

「オレの経験じゃあ、長いやつなら一ヶ月つてのがいたな。まあ、神具が壊れてる様子はないし、呪いの力には対抗できてるな。まあ、気長に待てばそのうち解けるさ」

「く……なんだその適当な感じ」

ソラがガツクリと肩を落としながら口を開く。

「……………うん……………まあ、その場で解けてたら、服に締め付けられて大変だったし、逆に良かったと思うよ」

その言葉にフロウがうなずく。

「うん、解けるって言うなら、あとは待つだけだしね」

「ま、まあ、そうだけどな……………」

クロコは気が抜けた様子だ。

「とにかく戻ろう。サキくんが待ってる」

夕暮れの帰り道、ソラがクロコの白い指輪をのぞく。

「この緑色の光沢……………素材はガーディアンだね」

「神聖な金属って言われてるよね」

フロウも白い指輪を見る。

「そういえば、ソラさんが解いた謎って、そんなに難しかったんですか？」

サキが興味深げに聞く。それに答えるクロコ。

「ん？ 答えを聞けば単純だったような気がする」

フロウが首を振る。

「いや、かなり複雑だと思うよ」

（少なくとも十秒眺めただけで解けるようなものじゃない。一体どんな頭してるんだか……チエスで勝てないはずだよ）

クロコは白い指輪を見る。

「とはいえ、これで元の姿に戻れるな。自慢のパワーも取り戻せる」

その様子を見てフロウが口を開く。

「でもなんだか僕はさびしいな。今の姿に慣れてるから」

「あつ、実はボクもです」

「私はなんか、久しぶりに再会した気分になるのかも」

「あとは全部こいつ次第……か」

クロコは手を上げ、白い指輪を見つめる。

白い指輪は夕日を浴びて淡くキラリと光った。

4 - 4 同志集め

フルスロツクに昼の鐘が鳴り響く。
基地の廊下をガルディアが歩いていて。すると向かいからクロコが歩いてくる。

「ん……？」

ガルディアは思わず声を漏らした。

「クロコ、おまえ軍服、サイズ合っていないんじゃないか」

クロコはダボつとした軍服を着ていた。

「別にいいんだよ、これで。前に言っただろ」

クロコは左手の白い指輪を見せる。

「いつ呪いが解けるかわからないから、服に締め付けられないように大きめのサイズの服着てるんだよ」

「ああ、そういうことか。けど、動きにくくないか？」

「まあ少しな、けどほとんど問題ない」

シャルルロッド基地の入り口、そこから一人の男が基地の広間へと入ってくる。ロストブルー中将だ。ラティル大佐が出迎える。

「ようこそシャルルロッド基地へ、ロストブルー中将」

「久しぶりだね。ラティル」

二人は握手をする。

「兵士達が寄り付かない内にこちらへどうぞ。あなたは有名人ですから」

ラティル大佐は案内するように前を歩く。

「ああ、悪いね」

基地の一室、そこで机を挟んで座るロストブルーとラティル。

「しかし、どうされたのですか？ 突然理由もなしに私を訪ねにいらっしゃると聞いた時は少々驚きました」

ラティルがそう言うと、ロストブルーはほほえむ。

「内密な話なのでね」

「内密……？」

ロストブルーは少し目を鋭くして口を開く。

「ラティル。君は今の国の状況について、不自然に感じたことはないかな？」

「不自然……ですか。そうですね、状況としては疑うまでもなく不自然だと思いますが」

「ならば、その不自然さの理由については考えたことはあるかい？」

「理由……ですか。そこまで深くは。私は国全体について考察するようなことはあまりしませんからね。せいぜい、自分の身の回りや、基地全体程度のものですかね」

「まあ、普通はそうか」

「あなたなら、そこまで大きな枠組みを常に考察していても不思議ではないと思いますが」

「ああ、だが私でも、彼に聞くまでは気付くことはなかった」

「彼……？」

ロストブルーはラティルの目を見つめた。

「ラティル。私は君という人間に対し、高い信頼を置いている。そして今から話そうとすることは世界にかかわる極めて重大な話だ」

「極めて重大……ですか」

ラティルの表情にわずかに緊張が走る。

「その話を聞けば、君はもう引き返せないかもしれない。けれど、君が力を貸してくれることで、今の世界を変えるきっかけとなるかもしれない。だからこそ問おう、君にはその話を聞く覚悟はあるか？」

ロストブルーのその話を聞き、ラティルは少しのあいだ考えた。

「構いません、聞かせていただけますか？」

それを聞いてロストブルーはほえんだ。

「君ならそう言ってくれると信じていた」

ロストブルーは真剣な表情になる。

「では話そう、『ダークサークル』その裏に隠れた邪悪な意思の存在を」

同じ頃、シャルルロッドより南東の地、首都ゴウドルークス。その一角に建つ総務省局、その大臣室。

一人の男が立派な机に座りながら書類を見ている。

その男は年齢四十代前半、黒い髪に深い黒ひげ、太い眉に鋭い目。威厳に満ちた見た目だが、表情はどこか人なつっこそうだ。

グラウドの総務大臣ジオ・グランロイヤード。

その横には、一人の剣士が立っている。

その剣士は年齢二十代半ば、長身で、柔らかい赤髪に鋭く大きな

目、どこか威圧的な雰囲気を持っている。

大臣室の扉がノックされる。

「なんだ？」

すると秘書が入ってくる。

「お客様がお見えになりました」

グランロイヤー総務大臣は顔を上げる。

「お客？ そんな予定はないが」

「しかしお客がお客なので」

「誰だ？」

「ザベル・ライトシュタイン中将です」

「ザベル……！？」

客室にグランロイヤー総務大臣が入る。その部屋のイスにはすでにライトシュタインが腰掛けていた。

「おいおいザベル。突然連絡もなしに何の用かね」

「すまないなグランロイヤー。少し事情があつてな」

グランロイヤーは向かいのイスに座る。ついてきた護衛の剣士が

横に立つ。

「事情だって？」

「君に話したい事があるんだ」

「君が？ 私に？ なんだって言うだ」

グランロイヤーは面食らった顔をした。

「ただここでは少し落ち着かないな。もう少し人が寄り付かない場所がいいな」

二人は建物の端っこにある部屋まで歩く。その途中、ライトシュタインが護衛の剣士を見る。

「彼は？」

「ああ、彼はリーヴァル。リーヴァル・クロスレイ。私の護衛だよ」

リーヴァルは軽く礼をする。

「彼はもと聖騎士候補生でな。私がそこから引き抜いて雇ったんだ。護衛として連れ回すのは割と最近だな。だが、それ以前から彼には色々な仕事をさせてる。その関係で付き合いは長いよ」

「聖騎士……ゴウドルークス最強の剣士隊の元候補生か。なるほど、近頃横行する重役殺しの対策かね」

「ああ、私は君達軍人のように自分で身を守ることができないんだな」

「そうか、ただ私のする話には席を外してもらおうか」

「外す？ 彼は信頼の置ける男だよ」

「だれかれ構わず信頼するのは悪い癖だな。少なくとも私は信頼していない、席を外してもらおう」

「やれやれ、リーヴァル」

グランロイヤールの合図でリーヴァルは廊下の隅に立ち止まる。そのリーヴァルを残し、二人は人通りのない端の部屋へと入る。

部屋に入ると二人は奥に置かれたイスに座る。

「……で、話っているのは？」

「内密な話だ」

ライトシュタインがそう言うのとグランロイヤールは戸惑った顔をする。

「君が訪ねてくるだけでも珍しいのに、それに加えて内密な話とはね」

「都合が悪いならやめておこう」

「いや、構わないよ」

グランロイヤーはイスに深く座る。

「しかし、君が私に内密な話とはね。私は君の信頼をおける数少ない人間……と、思われていると判断しても良いのかな？」

「君は自らの考えをストレートに述べるし、常に自らの意思を含んだ発言をしている。大臣の中では一番信頼できる人物だと判断している」

「君にそこまで言われるとは光栄だが……少々プレッシャーだな」

「別に気張ることなどない、私が勝手にそう思っているだけことだ」

「そうかね。で話というのは？」

「『ダークサークル』についてだ」

シャルルロッド基地の一室。机を挟んで向かい合うロストブルーとラティル。

そこでラティルは緊張に満ちた表情をしていた。

「ずいぶんなスケールの話ですね。私程度には大き過ぎるような気がします」

「……私がこの話を持ち出したのは、君にはその資格があると判断したからだよ」

「光栄、というべきなのですかね」

「協力するか否かは、君の判断に委ねよう。今ならまだ引き返せるかもしれない」

ロストブルーのその言葉に対し、ラティルは即答した。

「協力しましょう。深く見れば、私の身の回りにも関わることです。聞いたからには見て見ぬふりはできません」

ロストブルーは満足そうに笑みを浮かべた。

「ありがとう」

「私は立場上、あなたほどの情報は集められませんが……」

「君には独自の人脈と情報網がある。少ないであれ、そこから得られる情報は貴重だ。それに私は何よりも君自身に信頼を置いている」

「光栄です」

ロストブルーは立ち上がり、握手を求めた。それにラティルが答える。

二人が握手をした、ちょうどその時、

バタンツ！

扉の向こうの廊下から大きな音がした。

「何の音だ？」

ロストブルーのその言葉を聞いてラティルが笑みを浮かべる。

「たぶんスコアが転んだんですよ。いつものことです」

「スコア……スコア・フィードウッドか」

「はい、あなたの再来ですよ」

「ふむ……」

ロストブルーは一瞬何かを考える。

「ラティル、悪いが十分ほど時間を潰してもらえないかな」

ラティルはほえんだ。

「了解しました」

総務省局の一室、その奥でライトシユタインとグランロイヤーはイスに座り向かい合っていた。

呆然とするグランロイヤー！

「正直信じ難いな……総務大臣の私にとってはあまりにも身近過ぎる」

「信じられないというのなら、私の集めた資料を見せよう。君ほどの人間が見れば十分に信じられるだろう」

その言葉を聞いてグランロイヤーは少しのあいだ黙った。

「……もし今の話が本当ならば、この首都で活動する人間を中心とした組織が構成されている可能性が高い」

グランロイヤーは緊迫した表情で言った。

「それをあぶり出すために、君の力が必要だ」

「……いくら君とはいえリスクは高いぞ」

「だから仲間を集めている」

「いま仲間はどれくらいいるんだ」

「少ない、とだけ言うておこつ。今のメンバーだけではその者達に對抗するのは難しいだろう」

「だからこそ私の私か」

「君がこちらに付いてくれれば、戦力としては十分に對抗できるだろう」

グランロイヤーはしばらく何かを考えたあと、ゆっくりと口を開いた。

「怖くなったら逃げだすかも知れんぞ」

「それでも構わない」

「分かった。協力しよう」

「感謝する」

二人は握手をした。

「メンバーはほかには誰がいるんだ？」

「悪いがそれは言えない。人数が少ないあいだは、仲間内であろうとメンバーを明かさないうちにしている。勧誘した者の中に敵が混ざっていた場合、芋づる式に潰されることを防ぐためだ」

「なるほどな」

「君も仲間を勧誘する時は、私の名を伏せてくれ。それとこの話は下手に記録として残さず、君の頭の中にだけに留めておいてくれ。間違っても他者には話すなよ」

「ああ、分かっているよ。その手のことに関しては立場上慣れてる」
グランロイヤーがそう返事をする、ライトシュタインは部屋の扉の方を見る。

「あの護衛の剣士にも言うなよ」

「リーヴァルか。彼が私を裏切るとは思えないが」

「どこに密偵が潜んでいるか分からないし、話がどこから漏れるかも分からない」

ライトシュタインは念を押すようにグランロイヤーをじっと見つめた。グランロイヤーは少し顔を引いた。

「ああ……分かった。そうだ、君は私が一番信頼できる大臣と言ったが、もつと信頼できる男を知っているぞ」

「誰かね？」

「軍務大臣のルイ・マスティンだ。彼とは大学時代からの付き合いだが、あの男は信頼できる。それにかなり優秀だ」

グランロイヤーは自信満々に言ったが、ライトシュタインの反応は薄かった。

「彼はやめておいた方がいいな」

「なぜだ？」

「彼のプライベートを知る者は少ない。いくら人格的に信頼できそうでも、そういう者は避けておいた方が無難だ」

「うーん、いいと思うんだがな」

「とにかく、それについての情報収集を君に頼みたい」

「ああ、任せてくれ」

シャルルロッドの一室では、スコアとロストブルーが向かい合っ

て座っていた。

スコアは緊張した表情で固まっている。
ロストブルーはスコアに向けてほほえむ。

「君とは前から話がしたいと思っていたんだ」

「は、はい！」

スコアはピシッと返事した。

「あまり緊張しなくてもいいよ。私はこれでも大分いい加減な性格なのでね」

「は、はい」

「旅行先で住民と祭りを楽しんだり、たまたま見かけた湖に飛び込んだりしているようなやつさ。極端な例では、解放軍の基地に忍び込んだ時もあったな。本名を名乗っても笑われたよ」

「は、はあ……」

スコアは呆然としている。

「最近なんかだと、若い女の子を食事に誘ったりしたかな」

「……は……はあ……あの……」

「ああ、妻はいるよ。娘も」

「……………」

スコアは今度はあぜんとした表情で固まった。

「さて笑い話はさておき、君からは色々話を聞きたくてね」

「話、ですか？」

ロストブルーは手を組んで、青い瞳でスコアをじっと見つめた。

「そう……剣士としての君の話を聞きたいんだ」

「剣士……ですか？」

「君はどうして国軍で戦っているのかな？」

「ボクが、戦う理由ですか？」

「私はそれに非常に興味があるんだ。私と同じ『瞬神の騎士』の名を持つ君のね。噂に聞く君の強さは、とても力強い。強い信念を感じるんだ」

ロストブルーの言葉を聞いて、スコアは少し戸惑う。

「ボ、ボクはそんな大それたものじゃ……」

「大それたものではなくても、理由はあるのだろうか？」

その言葉を聞いて、スコアはロストブルーを見つめた。

「ボクは……守りたいんです。大事なものを」

「それを守るための強さ。それを君は持ちたいと思っているのかね」

「はい」

「何かを失った経験があるのかな。何かを守れなかったことが」

それを聞いてスコアは少し辛そうな顔をする。

「はい……」

「そうか。私が強さを求めたのは、国を変えたかったからだ。貴族が支配する国で、平民である私にできること、変えられることがあると信じてね」

「平民として国を変えるため……」

「そうだ、私が若かった頃はちょうど『ダークサークル』が起きた時期だね。あの頃の私は様々起こる世界の変化に翻弄されていた。それ故に世界を変えたいと強く願ってもいた」

「立派な志ですね。それに比べるとボクの原因なんてずいぶんと自分本位です」

「そんなことはない。立派で誇り高い志だと、私は思うよ」

ロストブルーはほえんだ。

「ありがとうございます」

「もう一つ聞かせてもらおう。君は国軍人として自分自身の信念を貫いている。ならば、解放軍は正しくないと思っているのかね」

ロストブルーはじつとスコアを見る。

「ボクは、正しくないと思います」

スコアははつきりとした口調で言う。

「少なくとも解放軍が活動することで、世界に争いが起きている。争いが起きれば、犠牲が出ます。犠牲になった人たちを何よりも大切に思っている人がいる。その犠牲が、ボクの守りたいものになる可能性だってある」

「なるほど、けれど、それは君がすでに大切なものを持っているから言えることなのではないかね。荒廃した世界の中では、自分が大切にできるものを何も持っていない人も出てくる。働き場所のない者、家族のない者、住む場所を焼かれた者、奴隷」

スコアはピクツと反応した。

「何も持たぬ者が、自分にとっての大切な何か、それを求めることが果たして間違っていると言い切れるのかな。希望を求めることが誤っていると言えるのかな？」

ロストブルーのその言葉を聞いて、スコアは少し眉を寄せた。

「あなたは……国軍人ですよ。ならあなたは、解放軍は間違っていないと？」

「国軍にも、解放軍にも互いに正義はあると考えている。だが、どちらも正しいなどとは考えてはいない。必ずどちらの方がより正しいというものは存在はする、そう考えているよ。ただし、それを果たして人間が判断できるかと言うと少し疑問に思う所だ」

「あなたには自分が信じる正義はないと？」

「あるさ、私が着ている軍服がその答えになっていないかね？」

「……………」

スコアは少し視線を落として、何かを考えていた。少し間を置いてロストブルーが口を開く。

「今の意見を聞いて、君の答えは変わったか？」

「いえ、それでもボクの答えは変わりません。ボクはただ、大切なものを守るだけです」

「力強いな。迷いなき強き信念。軍人としてはこれ以上なく力強い。しかし……もし、君の信じる世界が、君の思っているものとは大きく異なっていたとしたら、君は変わらずその信念を守り切ることができるのだろうか？」

ロストブルーはスコアの眼鏡の奥の深い青い瞳を見つめる。

「変わらぬということは力強いということだ。しかし、変化する環境の中で変わらないということは愚かなことだ。世界の変化を君が知るとき、君はどういう決断を下すのか非常に興味深いな」

「……………」

スコアは少し戸惑った表情をしていた。
ロストブルーは小さく息を吐いた。

「どうも私は少し年寄り臭いな。前にもつい君と同じぐらいの年の子に、軽い警告をぶつけてしまったんだ」

ロストブルーは立ち上がった。

「なかなか興味深い話だったよ。付き合ってくれてありがとう、スコア」

シャルルロッド基地の食堂、休憩中のレイアに、一人の軍人が近づいてきた。

ラティル大佐だ。

「やあレイア」

ラティルが笑顔で挨拶する。

「……あ、ラティル大佐」

レイアは鈍く反応した。

「元気そうだなによりだ、今ちょうど時間を潰したくてね、少し話し相手になってくれないかい？」

「あ……わたしでよければ」

「ありがとう」

「あの、この前は、ありがとうございました。大佐のおかげで……」

レイアは少し視線を落としながら言った。

「私よりスコアに感謝すると良い。私はただ休憩の合間に書類を一枚でつち上げただけだ。それに比べればスコアの方がよほど動いている」

「……そうですね、スコアには迷惑かけてばかりで」

「別にそんな風に思う必要はないよ。他人の厚意にはしっかりと応えること、それが一番大切なことだ。その方が、本人が喜ぶからな」

「はい、そうですね」

「それに、スコアも君には助けられている。親友の件に関してね。それについては私も君には感謝しているよ」

「そ、そんなこと」

「まあ仲良くやるといい」

レイアはラティルの顔をじつと見た。

「……………あの」

「なんだね？」

「一つ聞いてもいいですか」

ラティルはほほえんだ。

「聞きたいことがあれば何でも聞くといい」

「スコアはその……大丈夫なんですか？」

「大丈夫と言うと？」

「スコアは国軍として、戦争をしているんですよ。でも、わたし、スコアがそんなことして大丈夫なのかなって思っ
て。スコア、そんなに強そうに見えないから」

それを聞いてラティルは笑った。

「ああ、それは心配しなくていい。彼の強さは折り紙付きだからな」

「……本当ですか？」

「ああ、彼一人で一個中隊にも対抗できるだろう。いや、冗談じゃないぞ。ちょっと前までは、彼は一人で馬を駆けて、戦場という戦場を回っていたくらいだ。そんなことをしているのは国軍では彼とレイデル・グロウスと言う剣士ぐらいさ」

「そうなんですか、スコアって、全然そういう風には見えなかった」

「まあ普段の彼から想像するのは難しいな。私なんか頭を使うのは

得意だが、戦闘はからきしでな、羨ましい限りさ。……おっと！
そろそろ行かないと、とても偉いお客が来ているんだ」

「あ……すみません」

「ああ、気にしないでいい、偉いと言っても変な人だから」

ラティルはサッと立ち去った。

4 - 5 シャルルロッド回り

「今度の休日に町を回らない？」

シャルルロッド基地の食堂の隅、そこでスコアは、休憩中のレイアを前にそう言った。

「町を……？」

レイアは軽く首をかしげた。

「うん、住む場所も働く場所も決まったけど、まだ色々と準備ができてないことも多いだろうしね。色々と整えた方がいいと思うんだ」

「わたしは今のままでも大丈夫」

「大丈夫……？ いま住んでる場所は基地の近くの借家だったよね。あそこはもう掃除したの？」

「ううん、別に掃除しなくても、あんまり気にならないから」

「え、じゃあベッドはきれいにした？」

「ううん、でも今までの寝床よりはずっといいし」

「えーと、じゃあ、ふ、服は今何着あるの？」

「二着」

「うーん……」

スコアは少し黙る。

「レ、レイア。せ、せつかくさ、いい環境を手に入れたんだから、やっぱりその機会を大事にした方がいいと思うんだ。これを機に心機一転して、もう少しいい環境を心がけた方がいいと思うんだ」

レイアは少し視線を落とす。

「……………そういうものかな」

「うん、とりあえず今度の休日、一緒に町を回ろう」

レイアは軽くうなずいた。

「うん、分かった」

フルスロツクの実技場、木製の床と白い壁に囲まれた広い正方形の空間、そこでクロコは木剣を振るっていた。

クロコの木剣から放たれる斬撃は軽やかに軌道を変化させ、突きへと移行する。

その突きは力強く空気を貫いた。

突きを放った体勢のままクロコは動きを止めた。

「ほぼ完璧だな」

近くで見ていたアールスロウが言った。

「この動きはこれでいいだろう」

クロコは木剣を肩に置く。

「次は？ あとはどんな動きがあるんだ？」

「いや、もうない」

「え……？」

「一通りの技術はもう教えた」

「それって……」

「俺が教えられることは全て教えたという意味だ。稽古はこれで終わりだ」

アールスロウの言葉にクロコは戸惑う。

「だ、だけど、まだあんたの技で教わってないやつもあるぞ」

「元から俺の技を全て君に教えるつもりはない。俺の技は多過ぎるからな。君に教えたのは基本的な技術だけだ」

「……………」

「今まで教えたのはあくまでもオレの剣技だ。だからこそ、これからはその技術を自分自身の剣技へと昇華させる必要がある。それができて初めてその技術は自分のものになるんだ。あとは君次第だ」

「……………そっか」

クロコは一瞬呆然としたあと、アールスロウを真っ直ぐ見つめた。

「………なら、最後の仕上げに勝負してくれ。オレはあんたに勝ってこの特訓を終わりにしたい」

「いいだろう………と言いたところだが、あいにく今はダメだ」

「え……………!?!」

「実はもうかなり時間が押しているんだ。いま忙しい時期でな、すまないがまた次の機会にしてくれ」

「オ、オレに負けるのが嫌なだけなんじゃないか」

クロコは納得いかない様子だ。対して、アールスロウは冷静な様子で口を開く。

「別に君との勝敗にこだわってはいない。第一、俺より弱い相手にどうして逃げる必要がある」

「こ、このヤロウ……………!」

「またの機会だ」

「約束だからな」

「分かっている」

アールスロウは立ち去った。

シャルルロットの町に昼の鐘の音が響き渡る。

商店通りをスコアとレイアが歩いている。スコアは身に合わないダボダボな服を着ている。

迷路のように複雑に入り組んだ道には、たくさんの通行人が歩いていた。

「レイア、ボクから離れないでね。この町は迷ったら厄介だから」

「うん」

レイアは町を見回す。

「この町、どうしてこんな形してるんだろうね」

「ああ、それについては知ってるよ、ボクはこの町の生まれだから。この町は最初は小さな町で、そこから新しい建物や道路をどんどん外側に造っていったんだ。無計画に造っていったモンだからこうな

「つたらしいよ」

「へえ」

「それより部屋の掃除に思ったより時間を食ったから、早めに買うものを買っておかないと」

「食器の方はもともと置いてあったから、必要なのは服ぐらいかな」

「そうかい、じゃあ服屋だね」

二人は商店通りの服屋の一つに入った。

店内は女性用から男性用まで様々な服が飾られている。

レイアは服を見回る。

「服って高いね」

「お金のことは気にしないでいいよ。ボクが払うから」

「え……それは悪いよ」

「大丈夫、ボク、こう見えてもお金はいっぱいあるから。仕事が決まったお祝いと、住む場所が決まったお祝いを兼ねてのプレゼントだよ」

スコアはほほえんだ。

「ありがとう……」

レイアは少し視線を落としながら言った。

レイアは店を回りながら色々な服を興味深げに見ていた。その様子を見てスコアは思わずほえんだ。

（やっぱり女の子だな。服を選んだ事なんてないはずなのに……）

レイアはいくつかの服を眺めながら悩んでいた。

「気に入ったのがあった？」

スコアが尋ねると、レイアは小さくうなずいた。

「これとこれとこれとこれ、のどれかにしようか迷ってて……」

「じゃあその四着全部買おう」

「え……」

レイアは戸惑う。

「だって二着しか持ってないんだろっ、それぐらい買わなきゃ」

「そうだけど」

「気にしなくて大丈夫だって」

「……スコアは、何か買わないの……？」

「えっ？ いやボクは……」

「スコア、服合ってないよ」

「あ……それは、その、いい加減に選んじゃうから、いつも失敗しちゃうんだよね」

「ならわたしが選んであげる。ちゃんと合った服着た方がいいと思う」

「そ、そうかな、別にボクがいい服着たってあんまり変わらないと思うけど……」

「そんなことないよ。ちゃんとした服着れば、スコア、かつこいと思う」

「そ、そうかな」

スコアは少し顔を赤くした。

二人はいくつかの服を買って店を出た。

「これでだいたい用事は済ませちゃったね」

「うん……」

スコアはレイアに笑いかける。

「これでいろんな服が着れるね」

「うん、スコアもちゃんと合った服が着れる」

レイアはそう言ってスコアのダボダボの服を見る、その時、レイ

アはスコアの首と服のあいだで光る何かに気づいた。

「ペンダント……？」

「えっ？ ああ、これが」

スコアは服からペンダントを取り出す。銀色の割れた卵型のペンダントだ。

「スコアってこういうのに興味があつたんだ」

「意外？」

「うん」

「まあ、だけど、趣味ってわけじゃないんだ」

「……？」

スコアはペンダントを見つめる。

「母親の形見でね。昔落としたことがあったから、身に付けるようにしたんだ」

「そうなんだ。だけど、ちょっと変わった形だね」

「ああ、これは本来はきれいな卵型なんだけど、二つに割れるようになってるんだ」

「なら片方は別の人が持つてるの？」

「うん、もう片方は……」

スコアは言葉を止めた。

「どうしたの？」

「うん、なんでもない。それよりレイア、これから二人でちょっとおやつ食べない？」

スコアはペンダントを服の奥にしまう。

「え、おやつ……？」

「シャルルロッドはケーキがおいしくて有名なんだ。おいしいケーキ屋も知ってるし、一緒に食べよう」

「うん」

二人はケーキ屋へ向かった。

広い店内で二人はテーブルを挟んで座る。至る所にカラフルな置物が置いてある店内は多くの客でにぎわっている。

「すごい人だね」

レイアは周りを見渡しながら言った。

「うん、この店は結構有名で、外からの人もよく寄るらしいよ。レイアはどのケーキにする？」

スコアはメニュー板を見ながら聞いた。

「どれにしよう……わたしケーキなんて食べたことないから」

「あ、そうか。えーとね、このピンクケーキっていうのはベリーを使ってるきれいなケーキで女の子に人気なんだ。あとイエローケーキはフранセルのワインを使つてて大人に人気で、ホワイトケーキは白い果物をたくさん使つてて濃厚な味で……」

「スコアは何にするの？」

「えっと、ボクはホワイトケーキ」

「じゃあわたしもホワイトケーキ」

二人はケーキを注文する。

間もなくホワイトケーキが二つ来た。白いクリームがふんだんに使われ、白い果実がたっぷり載ったケーキだ。

「きれいなケーキ……」

レイアはケーキを見つめながら言った。ケーキを一切れ口に運ぶ。スコアはその様子を見ていた。

「どっ……？」

スコアが聞くと、レイアはすぐにフォークを置いた。

「えっと、口に合わなかった？」

レイアは答えない。その様子にスコアがわずかに戸惑った時だった。スコアは驚いた。

レイアが涙を流している。

「ど、どうしたの！？ レイア」

レイアは鼻を小さくすすりながら、涙をぬぐう。

「ううん、その、あんまりおいしかったから……」

「え……！？」

レイアはフォークをとってまた一口食べる。

「おいしい。こんなにおいしいもの初めて食べた」

レイアは感動しながら食べる。

「ハ……ハハハ、良かった、口に合わなかったのかと思ったよ。喜んでもらえたみたいで良かった」

スコアはホッとする。

「うん……おいしいよ」

レイアはじっくり味わうようにゆっくりゆっくりとケーキを食べた。

夕暮れのシャルルロード、コウモリが飛び始める中、スコアとレイアは通りを歩いていった。

「今日はありがとうスコア、色々とお世話してくれて」

「別に気にしなくていいよ。それより楽しかった？」

「うん」

そう返事をしたレイアの口調はいつもより少しだけ強かった。

「なら良かった」

スコアはほほえんだ。

「ねえ、レイア。これから少し寄りたいたところがあるんだけど」

「寄りたいたところ？ でももうすぐ暗くなるよ」

「うん、そうだけど。でも、そこは基地の近くだからそこそこ安全だし、それにボクと一緒になら大丈夫だよ」

「分かった」

スコアはレイアを連れて、徐々に暗くなっていく通りを歩く。路地を抜けて町はずれまで出ると、目の前には広い草原が広がっていた。辺りはもう暗くなっていたため、どこまで続いているのかさえ見えない。

スコアとレイアはそこを進んでいき、暗い草原の中に立った。

「ここが寄りたいところ？」

「うん」

スコアは返事をして、暗い草原全体を眺める。

「よく見てて」

その言葉に合わせて、レイアも草原全体を眺める。
すると草原に小さな青い光の球が浮いているのが見えた。一つだけではなかった。見ると草原全体にその球が点々と見えてくる。

「なに、この光？」

「まだまだこれからだよ」

小さい光の球は徐々に多くなっていき、ついに草原全体を青く満たすほどになった。

「星ボタル……この地域にしかない光を放つ虫さ」

夜空の中を立っているような幻想的な景色が広がる。柔らかな光が二人を包み込んでいた。

「きれい……」

レイアはその景色に魅入っていた。

「ねえ、レイア。少しだけ話を聞いてくれる？」

スコアはレイアの顔を見た。それに合わせてレイアもスコアの顔を見る。

「きみはこれから新たな環境での生活を始める。きっと慣れないこともいっぱいあって、苦労することも多いと思う」

スコアはじつとレイアを見つめる。

「きみは今まで辛い思いをいっぱいしてきた。だから、きみは生きることについて、きつといい印象を持っていないと思う。だけど、いまを一生懸命生きれば、いままで味わったことのないような楽しいことやうれしいことが、これからいっぱい起こるから」

スコアはほほえんだ。

「ボクは明後日、出兵するからしばらくはきみに会うことはできない。だから、きみが困ったとき力になることはできない。だけど、それでもくじけずに頑張つてね」

それを聞いたレイアはスコアをじつと見て、小さな声を出す。

「ありがとうスコア」

スコアはその言葉を聞いて、またほほえんだ。

「きみは家族もいないし、故郷もない。だけど、今の生活をがんばれば、きつとこれからきみの居場所になるところが出来る。だからいまはそれを信じて」

スコアがその言葉を言った直後だった、レイアは少しだけ視線を落とす。

「わたしは……別に新しい居場所なんていない」

レイアはほんの一瞬スコアの目を見た。

「わたしには、ただ一つ、たった一つだけあれば……」

「え……？」

「なんでもない」

レイアは草原の光に視線を戻した。

「そろそろ戻ろう、レイア」

スコアがそう言うと、レイアは静かにうなずいた。

二人は草原を歩き出す。柔らかな青い光が静かに二人を照らしていた。

4 - 6 ガルディアの特訓（前編）

朝の鐘がフルスロツクの街にゴーンゴーンゴーンと響く。
基地の廊下、そこでクロコはソラとばったり会った。
ソラは会うなりすぐに、ある言葉を口にする。

「……まだその姿なんだね」

「ああ」

クロコはぶっきらぼうに答える。

「なかなか戻らないね」

「ああ」

「まっ、気長に待てってことだよな」

「ああ………そういうことだな」

基地の一室。

「ファイフ、これから一週間のオレの仕事。おまえに任せていいか？」

書類に埋もれた机に座りながらガルディアが言った。

「いやです」

向かいに座るアールスロウは即答した。

「おまえ……理由ぐらい聞けよ」

「言い訳なら聞きませんが、理由なら聞きましょう」

「……理由だ」

「为什么呢」

ガルディアは顔を上げてアールスロウを見た。

「クロコに関して何だが」

「……？　クロコがどうしました」

「前にクロコの稽古中にオレが言ったこと覚えてるか？」

「言った内容は覚えていますが、どれのことですか？」

「あいつの稽古、締めぐらいは付き合ってもいいって」

「言っていましたね」

「これから一週間、徹底的にあいつを鍛えたい」

「……この時期にですか？」

「ああ、あいつにはそれをやる価値があると思う。才能の目覚めつてのは一瞬だ。才能ってやつはあることをきっかけにして目覚めるように急激に伸びるモンだが、あいつの伸び方は今までずっと緩やかなんだよ」

「つまり、どういうことです？」

「あいつの才能はまだ目覚めてない。目覚めてない段階で、すでにおまえに匹敵する力を持っている。もしあいつの力が目覚めれば、相当なものになる」

「……なるほど、しかし、あなたは少しクロコの面倒を見過ぎている気もしますが」

「……まあ否定はできないな。とはいえ解放軍にとっても必要な力だ、あいつにはそれだけの価値がある」

「分かりました、そういう判断ならば、あとはあなたに任せます」

首都ゴウドルークス、きれいに舗装された純白の石畳の道に、無数の巨大な純白の建物が連なっている。

そこにそびえるクラウド国軍本部基地。巨大な四角い建物が無数に集まったような複雑な造形をしており、その中心に位置する巨大

建築物は天にも伸びるような高さを誇っている。グラウド屈指の巨大基地だ。

その広い廊下をロストブルー中將が歩いていた。すると向かいに將軍服を着た男が歩いてくる。

その男は年齢五十代前半、顔を整えられた白い髪とひげで覆われ、丸っこい顔には少したれ気味の小さな目が浮いている。目こそ小さいがそこから放たれる眼光は鋭い。

グラウド國軍のトップ、サーマス・オルズバウロ元帥だ。

「これはオルズバウロ元帥、ごぶさたしております」

「ロストブルーか」

愛想よく挨拶するロストブルーに対して、オルズバウロは表情一つ変えない。

ロストブルーはほえみながら口を開く。

「いよいよセウスノールに向けて進行ですか。これから忙しくなりますね」

「ああ、中部と北部の兵力を総動員する予定だ。とつとあの目障りな軍を潰しておかなければな」

「いよいよこの戦争の終結が見えてきたという訳ですか。本来なら私も力になりたいところですが。あいにく議員という立場上、ここからあまり離れるわけにはいきません」

「構わんよ。君がここにいる限り、我々は常に切り札の一つを残していることになる」

「高い評価、光栄です」

「別に私は年齢も生まれも気にはしない。能力ある者がそれ相応の地位に就くことは当然のことだと思っているからな」

「ほう、そうなのですか」

「とはいえ能力にあぐらをかいて仕事をおろそかにする姿勢は気に食わん。そういう事はないように願いたいな。こんな時期だ、軍務以外の理由で首都を離れることのないようにな」

オルズバウロ元帥は静かな口調で言った。

「承知しました」

ロストブルーはほほえんだ。

本部基地の東、総務省局の資料室に二人の男が入ってくる。
ライトシュタイン中将与グランロイヤー総務大臣だ。
部屋の棚には数えきれないほどの資料がぎっしりと詰まっている。

「大した量だな」

ライトシュタインは感心した様子だ。
グランロイヤーが棚の一つを触りながら口を開く。

「部下には資料の整理と伝えてある。ここなら各省の大体の情報を
知ることができるよ」

「さすがは全ての省をまとめる総務省だ」

「それは誉めすぎた言い方だな。実際には各省のフォローしかやっていないよ」

二人は机にめばしい資料を積んで、資料一つひとつに目を通す。

しばらくの時間が経ったあと、グランロイヤーがおもむろに口を開く。

「なかなか人物を絞るまでにはいかないな」

「ああ、確かに。人物の特定までに至らない。だがあやしい者はある程度浮き上がってはくるな」

ライトシュタインは資料を見たまま言った。

「君にはそう映るのか、誰があやしく映ってるんだ？」

「まずは皇務大臣のレッテルだな」

「レッテルか……まあ、確かに皇務大臣は皇帝との関わりが必然的に生じる役職だが」

「君は皇務省にも勤めた時期があったな、レッテルとの関わりはあるのか？」

「ああ、彼とはよく組んで仕事をしたよ」

「どういう人物なんだ？」

「まじめな男さ、堅物でな、少し融通が利かない。あまり大それたことを考えるような奴とは思えないな」

その言葉を聞いて、ライトシュタインは一度あごをさする。

「彼の議会での動きを見てみると、特に議会の流れに沿って意見を言っている印象を受ける。真面目というのは従順だということだ、彼は自らの信念や主張と言ったものを持っていない。そういう人間は総じて力のある側に流れる傾向がある。私は注意すべき人間だと判断しているがな」

それを聞いてグランロイヤーはあごをさする。

「うーむ、そうか。あとあやしいって言ったらゴッドブラン中將はどうだ。戦争推進派の代表格だろ」

「彼は完全な軍人気質だ。狡猾なタイプではないし、少なくとも主犯格ではないな。第一彼はサンストンとの国境線の守護に全精力を注ぎ込んでいるから、首都に居ること自体ほとんどない」

淡々としやべるライトシュタインを見て、グランロイヤーは頭を触る。

「そうかね、あとはホーククリフ大將はどうだ？ 資料を見る限り、内乱が増長した結果となったミネルセイ事件の司令官だ」

「ホーククリフ大將か……彼は頭が切れるし、鷹派と穏健派の中間

の微妙な立ち位置を常に維持している。確かに彼は少し引つ掛かる。確か元部下にラティル大佐がいたな。少し彼についての情報を探って見るか」

「君はほかにあやしいと思う人物はいるのかい？」

「そうだな、私はルイ・マスティンもあやしいと感じている」

それを聞いて、グランロイヤーは少し眉を寄せる。

「ルイか？ 君はルイを信用していないどころか、疑ってもいるのか。はつきり言って、私としては友が疑われるのはあまりいい気持ちではないな」

「彼については、情報が少ないうえ、少し前に探りを入れたがガードが固くて何も得られなかった」

「あいつが何か隠し事してる可能性はあるが、少なくとも『ダークサークル』を起こした者たちとは無縁だと思っがね。彼はそもそもそういう人間じゃない」

「だが信用すべきではないな。君も一度、彼を疑ってかかるべきだ」

ライトシュタインは無機質な目でグランロイヤーを見た。

「やれやれそうかい、あとあやしい人物と言ったら……ああ、彼はどうか？ オルズバウ元帥。完全な戦争推進派だし、ある意味この内乱と最も関わりの深い人物だ」

「彼か……彼は今の所そこまで注意はしていないな。彼は好戦的な

性格ではあるが、彼の行動を見てみると、軍人の責務に対してはきわめて忠実に動いている。彼が関わっている可能性は薄いと判断している」

「そうか……………ううむ、正直言つて君は不気味なほど人を分析してるな。ほとんど接点のない人物もいるはずなのに……………これほど人を見ているやつは初めてだよ」

「面と向かって私のことを不気味と言ったやつは君が初めてだよ。さて、ではそろそろ内容をまとめるか」

シャルルロッド基地の食堂、そこで働くレイア。

スコアが基地を出て二日経っていた。

レイアは空のテーブルを拭いてまわる。大きな戦争の準備と共に、日に日に基地の兵士が少なくなっていた。それにつれ、食堂の景色もどこか殺風景になっていく。

兵士達が食事をしている横のテーブルを拭いている時だった。レイアの耳に兵士達の話し声が聞こえてくる。

「もうすぐ始まるな、これでいよいよこの戦争が終わるかもしれない」

「過去最大の戦争になるだろうって話だ」

「それだけにこっちにもでかい被害が出るんだろうな。……………多分、ここのやつらもたくさん死ぬんだろうな」

その言葉を聞いたレイアの手が止まる。

「そう言えば、スコア・フィードウッドも行ったのかな」

「ああ、もう二日前に向かったらしいぞ」

「あいつに関しては何にも心配いらねえな。なんせあの強さだ」

「分からんぞ、これだけでかい戦争だ。実際あのフレアでさえも戦死してるんだ。もう、廊下でコケるあの姿も見れなくなるかもな」

レイアは自分の体が震えるのを感じた。

休憩時間になっても、レイアの体の震えは止まらなかった。

レイアは落ち着かず、うろつくと廊下を歩きまわる。

ふと窓から基地の広場を見ると、ちょうど新たに基地を出る軍用の荷馬車が目についた。大砲を積んでいるところだ。

「スコア……」

レイアは廊下の壁に寄り添って震えるようにその名を呼んだ。

何とか体を起こし、もう一度窓を見る。

荷馬車は大砲を積み終えていた。その様子を見た途端だった。

レイアは突然、廊下を勢いよく駆けだした。

フルスロツクの実技場。そこでクロコとガルディアは向かい合っ

ていた。

ガルディアは大型の木剣をヒュッと一回振った。

「さて、クロコ。これから一週間、オレに付き合ってもらおうぞ」

「……でも特訓って言っても何すんだ。技術なら一通り修得したぞ」

「オレは技術は教えない。教えるのもうまくない。……けどな、オレは教えるのが上手いことが一つある」

「なんだ？」

「直感だよ」

「直感……？」

「ああ、第六感や、一瞬の判断なんかの類さ」

「そんなもの教えられるもんなのか？」

「まあ多少荒行事になるな。ついでに言うとき昔アールスロウを特訓した時は、あいつ三日で動かなくなっただな。あつ、死んだって意味じゃないぞ」

「知ってるよ！ てか三日かよ」

ガルディアは真剣な表情になる。

「オレはな、教えるからには半端なことはしたくない。半端な教えがイコールとして教え子を死なすことになるからだ」

ガルディアは鋭くクロコを見た。

「一週間意地でも耐えろよ……て言いたいトコだが、まずは、なにより死なないように気をつける」

ガルディアはクロコに木剣を向ける。

「気を抜けば、冗談抜きで死ぬからな」

その言葉を発した途端、ガルディアから震えるような鋭い気迫が放たれた。

それに応じてクロコも構える。

「気を抜けば死ぬか……上等だ。あんたが強いってのはしよつちゅう聞くが、実際のところ、どれくらい強いを見たことねーんだ。どれくらいのもんか試してやる」

「いくぞ」

ガルディアは動いた。暴風のように一直線にクロコに突進する。そのスピードにクロコは驚く。

（速い……！）

ガルディアは一瞬で木剣を振り下ろす。

ギョオンッ！

クロコは間一髪でそれを避けた。

ガルディアの避けられた斬撃はそのまま実技場の床を切り裂いた。深く裂ける木製床。

「……なっ!!」

クロコは驚く。

（おいおい木剣だろ？ 冗談じゃねーぞ！ なんだよあの威力。当たったらホントに死ぬじゃねーか!!）

「どうしたクロコ？ 逃げるんだったら逃げてもいいぞ」

「くっ、ふざけんな!!」

クロコは勢いよく突進した。素早くしなるような斬撃を放つ。

ビュンッ！

ヒラリとかわすガルディア。

クロコはすぐさま蹴りを飛ばす。

それもあっさりかわすガルディア。かわす際にクロコの足をつかみ、そのまま力任せに一気に引き寄せた。

「くっ……!!」

ガルディアはそのまま、斬撃を叩きつける。

ギュオンッ!!

クロコはとつさに木剣で防御した。

ガアアアアアンツツ！！！！

大きな音が実技場に響き、クロコは勢いよくふっ飛ばされ、壁に激突した。

「が……ッ……！」

クロコは吐き出すような声を漏らし、壁にそのままたれかかった。

「クロコ」

ガルディアが静かな口調で名を呼ぶ。クロコは小さく息を乱したまま答えない。

「どうしたクロコ、立て。ここが戦場なら、おまえはこのまま死んでいるぞ」

その言葉を聞いてクロコはムクリと起き上がる。息を乱しながら、必死でガルディアをにらみつける。

「いい眼だ。その集中をこの特訓中に常に維持しているよ」

その言葉を口にしたガルディアから、鋭い威圧感が放たれる。

「く………！」

クロコは自分の体が恐怖でわずかに震えるのを感じた。

「うああああっ!!」

恐怖を押し殺すようにクロコは叫び、突進した。
高速の斬撃を放つクロコ。

ビュンビュンビュンッ!!

クロコの連続の斬撃は全く当たる気配がない。ガルディアは最短の動きであっさりとかわしていく。

「クソ……!!」

クロコがそう声を漏らした直後、太い足がクロコに向かってバネのように飛んできた。

ゴスッ!!

鈍い音が響き、クロコの体は宙に弾き飛ばされた。そのまま地面に勢いよくぶつかり、少しのあいだ転がったあと、止まった。

クロコは動かなかった。

体をわずかに曲げたままのクロコ。苦しさのあまり体が動かなかった。なんとかわずかに顔を上げた時だった。目の前にガルディアが立っていた、木剣をすでに振り上げている。

ギョオンッ!!

木剣は床を切り裂いた。クロコは起き上がり紙一重で逃れていた。素早く後ろに跳び、距離をとるクロコ。その顔は恐怖で引きつる。

（冗談じゃねえぞ、マジで殺される）

ガルディアは冷静な表情で静かににらみつけている。

「初めに言ったよな？　まずは死なないように気をつけろ、気を抜けば死ぬって」

ガルディアは再び剣を構えた。

「続けるぞクロコ。特訓はまだ、始まったばかりだ」

4 - 7 ガルディアの特訓（後編）

コツンコツンと廊下に足音が響く。

アールスロウは基地の廊下を歩いていた。

（ 그레이さんの特訓が始まった。俺が依然やった時は三日で動けなくなったが、それを一週間……いくらクロコでも持つのか？）

アールスロウは実技場の入り口から中をのぞく。その瞬間、アールスロウはそこで立ち尽くした。

壮絶な光景だった。

木製床は無数に裂け、白い壁の所々が砕けていた。実技場全体がすでにボロボロになっていた。

二人の姿は実技場の端の一角にあった。

ガルディアはすでにその場に座り込んでいた。そのすぐ近くには床に伏したクロコの姿があった。軍服は避け、体中が傷だらけの状態で、無気力に床にうつぶせになったまま動かない。

アールスロウはしばらく固まっていた。

（これは……ひどい。俺の時以上だ………それだけ 그레이さんも本気だということか）

アールスロウはゆっくりと歩きだし、二人に近づきながら、もう一度クロコを見る。クロコはまったく動き出す気配がない。

（持つのか？ 一週間も……）

ガルディアはアールスロウに気づいて立ち上がった。

「ファイフ。ちょうどいいトコに来た。悪いがクロコを医務室まで運んでやってくれないか？」

「はい」

アールスロウはクロコに近づいて様子を見る。かろつじて意識はあるようだ、ボーツとした表情をしている。

「動けるか？」

アールスロウの質問にクロコは答えない。小さく首を振る。それを見てアールスロウはクロコに肩を貸し、なんとか立ち上がらせた。そのまま医務室まで向かおうと実技場を出ようとした時だった。

「クロコ」

ガルディアが静かに呼びかけた。

「明日もやるからな」

クロコの体がわずかに震えるのをアールスロウは感じた。

その次の日も、ガルディアの特訓は続いた。

クロコは死に物狂いでガルディアの動きに対抗しようとした。しかし、吹き飛ばされ、蹴り上がられ、殴られ、ときには木剣を叩きつけられた。床にへばるごとに、ガルディアは木剣を振り下ろしてきた。そんな勢いのまま、二日目が終わわり、三日目が終わった。

その間のクロコの寝床は個室ではなく、医務室となった。

実技場のひどい荒れようが噂になり、フロウとサキが心配して見に来たが、ガルディアにすぐに追い返された。様子を見るのが許されたのはアールスロウだけだった。

四日目の昼。仕事の合間に二人の様子を見に来たアールスロウは、その光景に思わず顔を歪めた。

ガルディアと向かい合うクロコは、すでに立っているだけのような状態だった。目はうつろで、木剣は構えているだけで、体がフラフラと揺れている。

(……!! もう限界だ)

アールスロウがそう思った時だった。クロコの体はふらっと崩れ、大きな音を立てその場に倒れた。

「クロコ!!」

思わず駆け寄ろうとするアールスロウ。

「来るな!!」

ガルディアがすぐに止めた。

「まだ特訓の途中だ」

アールスロウは辛そうに足を止めた。その直後、クロコはヨロヨロと立ち上がった。剣を再び構え、真紅の瞳でガルディアをにらむ。

「そつだ、来いクロコ」

その後も特訓は続いた。五日、六日と特訓は続いた。

クロコの体はほとんどボロボロのようになっていた。それでもクロコは必死で食らいつく。はたから見ればただフラフラと動いているだけだったかもしれないが、それでもクロコは必死にガルディアと戦っていた。

六日間のあいだ、クロコはすでに死に直面し続けた。

そして一週間、夕日が実技場内を照らす中、静かにガルディアは口を開いた。

「終わりだ、クロコ」

クロコは木剣を構えて、ガルディアと向かい合っていたが、その言葉を聞いた途端、その場に崩れ落ちた。

クロコは小さく息をしながら、うつぶせにその場を動かなかった。表情には喜びの感情は一切なく、ただ無表情にこの地獄のような特訓の終わりを悟っていた。

「よくここまで頑張ったな、クロコ」

ガルディアの言葉にクロコは答えない。答える元気は四日目の段階でなくなっていた。

「今は休めクロコ、少ししたら医務室に連れてってやる」

ガルディアはそう言いながらその場に腰を下ろした。

「おまえはすげーよクロコ。よくここまで頑張ったな」

するとクロコの口が小さく動く。

「どうして……あなたは、そこまでやったんだ？」

「ん？」

「あんただって……楽しなかったはずだ。どうしてそこまで……
あんたはオレに……やってくれたんだ？」

その言葉を聞いて、ガルディアはしばらく黙る。
短い静寂が流れたあと、ガルディアの口が動く。

「死んでほしくないからだよ」

「……………それ、答えになってねーよ」

クロコはそう言ったあと、その場で眠った。

ガルディアはしばらくしてからクロコを医務室へと運んだ、そしてその足でアールスロウに特訓の終わりを伝えるために、司令室へと入ったその時だった。

「 그레이さん！」

アールスロウは緊迫した表情でガルディアに駆け寄る。

「ん？ どうした」

「国軍が動き出しました」

「……………！ どう動いた？」

「国軍は現在、バブル山脈に沿って南下しています」

その言葉を聞いたガルディアの表情に緊張が走る。

「南下……！！　ってことは……」

「フルスロックが……ここが戦場になります」

4 - 8 戦いの始まり

フルスロツク基地の司令室、そこでガルディアとアールスロウは向かい合って立っていた。二人はともに緊迫した表情をしている。ガルディアが口を開く。

「フルスロツクが……ここが戦場になるのか」

「ええ、距離を考えると、今日からおよそ一週間後、国軍がこの街に現れるでしょう」

「ついに、ここが戦場になるのか」

「北部地区、および中部地区のほとんどの解放軍基地はすでに放棄したようです。ビルセイルド基地も間もなく放棄するでしょう」

「そうか……」

「俺達はこの基地で、国軍の大勢力を受け止めなければならない……」

「……」

「……すまない、ファイフ」

「……？」

「戦闘中、オレはフルスロツクにいない」

アールスロウは驚いた。

「どういうことですか？」

「今日の早朝、本部から連絡がきたんだ。国軍の動きがつかめ次第、セウスノールに向かえってな。どうやら本部はオレをセウスノールに置いておきたいようだ」

「……そうですか」

アールスロウは険しい顔をする。

「すまないなファイフ。こんな時……こんな時だって言うのに、おまえにここを任せることになる……」

ガルディアは辛そうに言った。

「いえ、解放軍における 그레이さんの存在を考えれば当然の処置です。あとは俺に任せて下さい」

「すまない」

「いえ、いつものことなので、もう慣れましたよ」

アールスロウはほほえんだ。

「生き残れよ。ファイフ」

「はい」

夜のフルスロック基地、その治療室のベッドの上で、クロコは一人、灰色の天井を見つめていた。

「クロコ」

突然自分と呼ぶ声がした。見るとガルディアが近くに立っていた。

「クロコ。ここはもうすぐ戦場になる」

「……!!」

クロコは驚いた。

「ここが……」

「ああ、だが、オレはここにはいれない。明日、セウスノールに向かわなきゃならない」

ガルディアは辛そうな表情をしていた。その様子を見てクロコは思わず黙る。ガルディアの口元がゆっくりと動く

「クロコ………オレは……」

ガルディアは何かを言いかけたがやめた。少しのあいだ黙り、再び口を開く。

「クロコ、生き残れよ」

ガルディアはそれだけ言うと背中を向けた。

「セウスノールで会おう」

ガルディアは立ち去っていった。

北部の元解放軍領のとある町、その大通りで、多くの国軍兵が座り込んで食事をしていた。

その中に、一人の少年軍人が座っている。

その少年は年齢十四、五、少しねた茶色の髪に、青い瞳。幼い顔立ちをしているが、落着いた雰囲気を持っている。

スコアの基地の仲間コール・レイクスローだ。

そのコールに数人の若い兵士が近づいてくる。

「ようコール、久しぶり」

「あつ、みんなも来たんだ」

「ああ、だけとおまえも大変だな、もう一カ月近く基地に戻れないで」

「うん、早く戻りたいよ。そう言えばスコアも来てるの?」

「いや、まだだ、オレ達がシャルルロードの第一便だからな」

「そつか、シャルロットからはどれくらいの兵士が来るの？」

「詳しくは分からないが、6000は硬いんじゃないか」

「そうか……きっとほかの基地もかなりの兵力を出してるんだろうね」

「ああ、それに精鋭ぞろいだろうな。聞いた話によればスコアのほかに、レイデル・グロウスが来るって話だぜ」

「『消剣の騎士』か……。ボクの方は『七本柱』がいるって話を聞いたよ。すでにフルスロックに向かった軍勢に一人混ざってるって」

「へえ、誰だ、もしかしてロストブルー将軍？」

「いや、あの人は議員だから、首都をそんなに離れられないよ。けど……」

コールはほんの少し眉を寄せる。

「違う意味では、ロストブルー将軍ぐらい有名なやつさ」

太陽が真上からフルスロック基地を照らす。
クロコは基地の廊下を歩いていた。少し包帯を巻いている。
向かいからアールスロウが歩いてきた。

「クロコ、怪我の具合はどうだ？」

「まあまあだ。それよりいつ始まるんだ」

「国軍が着くまで、あと数日と言ったところだ」

「そっか」

「クロコ」

アールスロウはクロコの目をじっと見た。

「この戦い、あまり無茶はせず、生き残ることを優先しろよ」

「ふん、当然生き残るさ。けど、勝つためにはある程度無茶はするかもな」

「いや……この戦いは、勝てない」

「……！！」

クロコは驚く。

「……どういうことだよ」

「フルスロツク基地に集まる予定の兵力はおよそ30000。対して、向かってくる国軍の軍勢は50000。勝ち目は薄い。仮にある程度対抗できたとしても、すぐに、後方に控えている100000以上の軍勢が加わってくるだろう。どう戦おうとここは落ちる」

それを聞いてクロコはアールスロウをにらんだ。

「アンタはもう、あきらめてるっていうのか」

「この戦いにおける我々の目的は、勝利ではない。セウスノールへと迫りくる国軍の戦力を少しでもすり減らすこと、及びセウスノールに戦力が集結するまでの時間稼ぎだ」

「……！！」

クロコは一瞬呆然とした。そしてギリツと歯を鳴らす。

「負けるために戦えって言うのか！！」

クロコの声が廊下に響いた。

「……違う、最終的に我々が勝つための戦略だ」

アールスロウは冷静な口調だったが、わずかに表情が険しかった。

「だけど、オレ達がどう戦おうと、街を失うんだろ……！！」

「……」

「ガルディアもアンタも、この街を知れって言った。自分が守る街だからって。だけど、守れないじゃないか。失うしかないじゃないか」

クロコは辛そうに声を出した。アールスロウは黙る。

少しのあいだ静寂が流れたあと、クロコは再び口を開く。

「やっとここが好きになりかけてたのに……こんなことなら、こんな街の事なんて知らなきゃ良かった」

クロコはそう言ってアールスロウを横切った。

「クロコ！」

アールスロウが呼び止めた。クロコは背中を向けたまま、足を止める。

「街は人だ。人が戻れば街はよみがえる。だからこそ、生き残れよクロコ」

クロコは何も答えず、また歩き出した。

クロコが暗い表情で広間に出ると、ソラが近づいてきた。

「クロ！」

「ソラ……」

「まだその姿なんだね」

ソラはクロコの姿を見ながら言った。

「おまえ最近そればっかだな」

「クロ、少し元気がないみたい」

「……別に大したことじゃねーよ。それより、なんでこんな時間におまえがいるんだ？」

クロコがそう聞くとソラは少し辛そうな顔をする。

「ねえ、クロ。私もうすぐこの街から出ないといけないんだ」

「え……？」

「もうすぐここは戦場になるから、ここの住民はみんな避難場所に避難するんだけど、避難場所には住民全員おさまらないから、この基地の周辺の人はセウスノールに避難するんだって。私もすぐ、セウスノールに行かなきゃいけない……」

ソラは少しさびしげな声で言った。

「そうか……」

「クロは……ここに残って、戦うんだよね？」

「ああ」

「気をつけてね」

ソラはもう泣きそうな声になっていた。

「変な心配すんな。オレは当然生き残る。おまえこそ気をつけろよ」

「クロ……」

ソラは自分の髪飾りに触れた。

「また……商店街をいっしょに歩こうね」

「ああ」

クロコの返事の直後、広間に大声が響く。

「セウスノールへ行く者は、馬車に乗ってください!!」

「私、行かないや」

「ああ、またな」

「うん、また……」

ソラは馬車と共に街を去っていった。

その数日後、フルスロツクの東から、草原を踏みしめ、**国軍**の巨大な軍勢が姿を現した。

4 - 9 炎の街

フルスロック基地の司令室、そこに兵士が飛び込んでくる。

「来ました国軍です！」

部屋にいたアールスロウが立ち上がる。

「規模は？」

「およそ50000」

太陽が真上を照らす中、東の草原から横に広がった国軍の大軍勢が、フルスロックの石門に向けて行進する。

それに対して、解放軍はフルスロックの東の砦と石門を守る形で布陣を展開する。その軍勢の規模は国軍の五分の一にも満たない。

パンッ！

国軍からの一発の信号銃と共に、巨大な軍勢は雄叫びをあげて走り出す。

それに応じて、砦の大砲が国軍に向け無数に放たれる。砦を守護するベイトム隊長が声を張り上げる。

「撃て撃て撃てー！！ とにかく撃て、撃ちまくるんだー！！」

砦から絶え間なく放たれる砲撃。しかし国軍の巨大な軍勢の前ではあまりにも小規模だった。

すぐに国軍の軍勢から何倍もの砲撃が返ってくる。あらゆる方向から降り注ぐ砲弾の嵐。

砦はあっという間に爆炎に包まれた。

砦と門を守る布陣も、国軍のはるかに上回る剣兵と銃撃と砲撃の前に為す術なく崩されていく。

「く……！！ 後退だー！」

ベイトム隊長の号令と共に、解放軍は後退していく。

「東の砦、突破されました」

アールスロウは報告を聞き、険しい顔をする。

「早いな……。予定通り各防衛線に兵士を配備。各ルートを守護させる」

無人となった街では、バリケードを張った解放軍兵と、攻め入る国軍兵の市街地戦が展開される。街の所々で、剣と剣がぶつかり合い、銃撃が飛び、爆炎が上がる。

フルスロウの街の所々から炎が上がり、黒い煙が昇った。その通りの所々で兵士の死体が転がる。

基地の司令室には戦況報告の兵士が次々と入ってくる。

「ローズ通り突破されました！」

「ザンプル通りも突破されました！」

「北門の守りも突破されました。北側からも国軍兵が侵入して来ています！」

アールスロウの表情が険しくなっていく。

「く……！ ラッセル通りの防衛線は放棄、マール通りまで後退しろ！」

基地内に待機しているクロコは、広間が徐々に騒がしくなっていくのを感じた。

（クソ……！ 押されてるのか！？）

司令室に焦った表情の兵士が入ってくる。

「二ス住宅街にある各防衛線が突破されました。国軍兵はもうすぐそこまで迫っています！！」

「落ち着け、その周辺の防衛線をすべて放棄、水道橋付近に兵士を集めろ」

街の各地区で戦闘が繰り広げられる中、街を通る巨大な水道橋の真下の一角では特に激しい戦いが展開されていた。

「撃てー！」

解放軍の無数の大砲が火を噴く。

ドンドンドンドンッ！！

解放軍は水道橋の後方に大砲を並べ、道を塞ぐように砲撃を放つことにより、国軍を足止めしていた。

無数の爆炎が道を覆う中、国軍の足は完全に止まっていた。

「クソ……！」

「よし、この調子だ、このままずっとやつらをここに拘束するんだ」

解放軍の砲兵部隊は砲撃を撃ち続け、国軍を止める。しかし次々と新しい国軍兵が駆けつけてくる。

徐々に増してくる国軍の兵力。

ついに国軍からの大量の砲弾の反撃により、解放軍の砲兵部隊は押されていく。

「く……耐えるんだ！　なんとか耐えしのげ！」

国軍兵の数は見る見るうちに増えていく。国軍の砲撃は激しさを増す。

「く……もういいだろう。下がれー!!」

解放軍の砲兵隊が後退するとともに、国軍兵が水道橋の下へと押しかける。

「今だー!!」

解放軍の小隊長の号令と共に、水道橋を支える柱が爆発した。その事態に国軍は驚く。

「な、なに!!」

水道橋は巨大な音を立て崩れ落ち、国軍兵の大群を押し潰した。

「作戦成功しました」

報告を聞いたアールスロウは静かにうなづく。

「よし、これでニック通りルートは封鎖した。ニック通りの兵士達を他の防衛線に回せ！」

その後、解放軍は盛り返し、国軍の進行をストップさせた。

長い攻防が続き、日がわずかに暮れてきた。

アールスロウは静かに司令室のイスに座っていた。

（本部は一日足止めすればいいと言っていた。今日さえしのげば、この基地を放棄して、兵士達をセウスノールへ下からせることができる。もうすぐだ、もうすぐ……）

「マール通り、突破されました！」

兵士が入ってきて報告した。

（……！！ 日が暮れてきたのに、まだ敵は攻撃を止めないのか）

「三番隊の第八小隊を向かわせろ！」

別の兵士が入ってくる。

「アウトレン通り、突破されました」

その報告にアールスロウはわずかに驚く。

「なんだと……！？ あそこは三重の防衛線を張っていたはずだ」

「し、しかしあっさりと……」

「一番隊の第六、九、十小隊を向かわせろ！ ポーセン通りの防衛線を守らせるんだ！」

「はっ！」

アールスロウが命令を出してから少し経った時だった。

「ポーセン通り突破されました！」

「……………！！　　どういうことだ！？　　早すぎる。大砲部隊を二つ送ったんだぞ」

「し、しかし、あっさりと……………」

「くっ……………」

（ローツ地区の状況がおかしい……………クロコとフロウを向かわせるか）

「二番隊の第一小隊と、三番隊の第五小隊を向かわせる」

「ど、どこに防衛線を張りますか？」

「防衛線はいい！　積極的に攻撃して撃退しろ、と伝える！」

「はっ！」

間もなく基地内に待機していたクロコとフロウの小隊に命令が下った。

クロコはフロウを見る。

「おまえの隊と同伴か……………偶然か？」

「さあね、今はかなり状態が混乱してるから何とも言えないね」

クロコとフロウを含めた六十人の小隊は基地を出て、通りを駆ける。通りはすでに暗くなっていた。遠くを見ればオレンジ色の光が瞬き、大量の黒煙が昇っているのが見えた。

「クソ……ひどいな」

しばらく駆けると小隊長の指示で足を止める。

「この周辺に国軍の部隊が進行しているはずだ。こちらは積極的な攻撃により、その部隊を迎撃する」

「この通りは道が途中三つに分かれますが、どうしますか？」

フロウが聞いた。

「そうか、なら、ブレイリバーのいる隊、ストルークのいる隊、私が率いる隊の三つに分けて進行するぞ」

再び駆ける小隊。

途中の分かれ道でフロウのいる隊が分かれた。さらに進んだ分かれ道で、クロコのいる隊は小隊長の隊と別れる。

クロコは二十人の兵士と共に通りを駆ける。

しばらく駆けた時だった、前方から五十人近くの国軍の剣兵が突撃してくる。

「クソ、思ったよりいやがる」

クロコは大剣を引き抜いて、先頭を駆ける。クロコはちゅうちよなく敵の群れに飛び込み、剣を振り回す。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

国軍の剣兵は次々と斬り伏せられていく。

クロコの回りでも剣兵同士の戦いが繰り広げられていた。クロコが剣を振り回す中、仲間の一人が斬撃を受け倒れた。クロコは思わず眉を寄せる。

「……くっ！」

二人、三人、仲間が次々と倒れていく。

クロコが最後の敵兵を斬り伏せた時には仲間はクロコを含めて八人になっていた。

クロコが倒れた仲間に駆け寄ろうとした直後、大きな爆音と共に辺りが爆炎に包まれた。

「……！！！」

クロコは素早く前方を見た。国軍の砲兵部隊が遠くで構えていた。

「ヤロウ……！」

クロコはすぐさま砲兵部隊に向け突進する。

三発の近距離砲撃がクロコに向けて放たれる。クロコは素早い動きでギリギリでそれらを避ける。途中爆発による石の破片がほほに当たる。それにより、一瞬気を取られた時だった。

ドオンッ！！

火炎がクロコの視界に広がった。素早い反応で紙一重で避けるクロコ。

「あぶねえ……！」

クロコはそのまま砲兵達に突撃した。

ヒュンヒュンヒュンッ！

素早く砲兵達を斬り伏せるクロコ。

砲兵部隊を倒したクロコは仲間の元に戻った。しかし……

「……！！」

すでに立っている者は一人もいなかった。先ほどの砲撃で仲間はずべて倒れていた。

「おい……！」

仲間の一人を抱き起して声をかける。しかし反応はない。

「……クソ」

クロコは仲間をそつと置き、立ち上がった。

クロコは回りを見た。見知った仲間がクロコを囲むように倒れていた。建物から炎が上がり、夜の闇を照らしていた。

その時だった。

クロコの心臓が嫌に高まり始める。どうしようもなく嫌な感じがした。

地面に伏した見知った者。燃える建物、夜の闇。

それに近い光景を、クロコは過去のどこかで見ていた。

クロコの心の奥に眠る、嫌な何かが呼び起こされるような気がした。

クロコは元来た道を駆け戻った。それほど速く駆けていないのに妙に息が上がる。心臓の音が耳の隣で聞こえた。

クロコは小隊長と別れた地点まで戻ると、小隊長の隊が進んだ道を駆ける。心臓がどんどん高まっていく。

クロコは感じていた、忘れていたはずの記憶が徐々によみがえってくるのを。

燃える家、倒れる村人……炎を上げて燃える自分の家。

クロコは息を乱しながら駆け抜けた。

道の先のあるものを見た時、クロコは足を止めた。

石畳の道には血が広がっていた。

小隊長を含めた隊の兵士全てが道の上に転がっていた。体が切り裂かれ、息絶えている。

それを見た途端、クロコの記憶の奥に眠る、最も嫌な記憶が呼び起こされた。

クロコは、燃える部屋の中に、独りで立っていた。

目の前には、血を流した父親と母親、そして妹が倒れていた。

石畳の道をクロコは一步退いた。

「いやだ……いやだ、いやだ」

フルスロツクの街の中、クロコはガタガタと体を震わせながら、

ぼやくようにつぶやいた。

その時だった。

一人の剣士がクロコに近づいてきた。

その剣士は白い將軍服を身にまとっていた。

その男は年齢四十前後、ほおが少しこけており、整えられた灰色の髪に灰色の瞳、その瞳は冷たく、深く濁っていた。

男は、顔を歪ませるほどにニタリと笑みを浮かべた。

「いい匂い、いい匂いだ。ここは私の好きな戦争の匂いに満ちている。なんとも心地いい。なんとも『快感』だ」

七年前、スロンヴィア虐殺を起こした張本人、レイズボーンがクロコの目の前に立っていた。

4 - 10 怒りの剣

夜のフルスロツク、燃える建物の炎が石畳の道を照らす。その道の一角には二十人近くの解放軍兵の死体が血を流し転がっていた。その中で、クロコは立っていた。目の前にはレイズボーンが立っている。

クロコはレイズボーンから放たれる不気味な気迫を感じ取り、何とか息を整え、臨戦態勢に入る。
剣を構えるクロコ。

それに対してレイズボーンは不気味に笑みを浮かべている。

「何とも心地いい……」

レイズボーンは剣を片手に、ユラリとクロコに近づく。

「……！」

クロコはそれを見て、素早くレイズボーンに斬りつけた。

ヒュンッ！！

クロコの高速の斬撃を、レイズボーンはユラリと紙のようにかわした、その直後、レイズボーンは斬撃を返す。その斬撃は恐ろしいほどの速さでクロコに向かって放たれた。

ヒュンッ！！

とつさの反応で後ろに跳んだクロコ。しかし避けきれず左肩がわずかに裂けた。

（クソ……なんて速い斬撃だ）

レイズボーンはいまだに不気味に笑みを浮かべている。

「何とも懐かしい、ここを包む雰囲気、この高揚感。七年前を思い出す」

「七年前……？」

クロコの心にレイズボーンの独り言が引っ掛かる。

「おい……」

クロコはレイズボーンをにらみつけた。

「おまえは七年前、一体何をした……？」

クロコの問いにレイズボーンはさらに顔を歪ませ笑う。

「ほう……あなたは私の思い出に興味があるのですか？」

レイズボーンは濁った瞳でクロコを見つめる。

「この雰囲気、似ているですよ。私の思い出の一つに」

レイズボーンはニタリと笑う。

「スロンヴィアを燃やしたあの時に」

クロコは思わず一步退いた。目を見開き、呆然とする。

「おまえ……おまえが」

クロコは齒をギリツと鳴らし、殺意に満ちた目でレイズボーンをにらみつけた。

「おまえがあれをやったのか!!」

石畳の道にクロコの声が響き渡った。

「ふむ、あなたは……」

「オレは……スロンヴィアの生き残りだ!!」

「ほう、なるほど」

レイズボーンは笑う。

「けれど一つ勘違いがありますよ。あれは私がやったのではなく、やらせたのですよ、部下に命令してね」

その言葉を聞いたクロコは、自分の心臓が早く大きく鼓動し始めるのを感じた。息は小さく乱れ、胸から首にかけてが異様に熱くなるのを感じた。腕がガタガタと震える。

「殺してやる。おまえを……殺してやる」

クロコの真紅の瞳は、かつてないほど怒りに燃えていた。その言葉を聞いて、レイズボーンは声を上げて笑った。

「あなたのような下衆が、私を殺す？ 冗談としては面白いですね」
クロコはもうレイズボーンの言葉など聞いてはいなかった。

「うあああああッ……！」

クロコは叫ぶような声を上げ、レイズボーンに向けて斬りかかった。

ヒュンッ！

あっさりとかわすレイズボーン。
しかし構わずクロコは剣を振り回した。狂ったように剣をブンブ
ンと振り回す。

レイズボーンはその斬撃を全てあっさりとかわす。

「まるで牛のようですね。所詮は農民の剣技、何とも品のない」

ヒュンッ！

レイズボーンから放たれた斬撃がクロコの腹を切り裂いた。

「う………！」

クロコの体がわずかに傾く。それでもクロコは地面を踏みしめ立て直した。

「うあああッ!」

クロコはレイズボーンの懷に飛び込む。しかし、レイズボーンの斬撃がすぐさま飛んでくる。

ヒュンッッ!!

レイズボーンの剣はクロコの脇腹をとらえた。
脇腹から大量の血が噴き出す。

クロコは石畳に手をついた。体からは血が流れ落ちる。

「……クソ、クソ……チクショウ」

地面に血が流れ落ちる中、それでもクロコは立ち上がろうとする。しかし、目の前のレイズボーンはすでに剣を振り下ろそうとしていた。

「さようなら、スロンヴィアの生き残り」

レイズボーンが剣を振り下ろすその時、フロウが横から斬りつける。

とつさに跳んでかわすレイズボーン。

「おや? まだ敵がいたのですか」

フロウはレイズボーンに向け無数の斬撃を放つ。

ヒュヒュヒュヒュヒュンッ!

フロウの斬撃を全てかわすレイズボーン。

ヒュンッ！

レイズボーンの斬撃がフロウの肩を切り裂いた。

「くっ……！」

フロウは素早く距離をとった。

「強い……」

フロウは険しい表情をする。

レイズボーンは剣を構え直す。

「あなたはそこそこ剣を扱えるようだ。その剣技、貴族のものです
ね？」

「ああ、僕は元貴族だ」

「ふっふっふっ、なるほど元貴族ですか。よくも堕ちたものです」

「さあね、僕は堕ちたとは思ってないけど」

その言葉を聞いてレイズボーンは馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「まあ、どちらにしろあなた達の命運もここまですよ」

レイズボーンがそう言った時だった。

ドオンドオンドオオンッ！！

数発の砲撃がレイズボーンを襲う。フロウとクロコの後方には解放軍の砲兵部隊が駆けつけていた。

それをレイズボーンは不機嫌ににらむ。

「やれやれ、次から次へと……」

レイズボーンは自分の後方をチラッと見た。

「援軍が来ませんね。少し先行しすぎましたか……」

レイズボーンは剣を下ろす。

「一度戻るとしますかね」

レイズボーンはそのまま、走り去ろうとする。

「待て！！」

クロコは叫んで、立ち上がろうとする。体からは血がボタボタと流れ落ちる。

「よせ！ クロコ」

フロウの制止も聞かず、クロコは立ち上がり、追いかけようとする。すぐにフロウが腕をつかむ。

「何をしてるんだ！ クロコ」

「黙れ！」

クロコは叫んだ。

「あいつは……あいつだけは……！！！」

クロコのただならぬ様子に、フロウはハツとした。

「……まさか、レイズボーン！？」

フロウはそれに気づくと、今度はクロコを力づくで、羽交い締めにして止めた。

「クロコ、落ち着くんだ。今は、今の状態じゃ、戦えない。追っちやいけない」

「黙れ！ 離せよ！！！」

クロコは泣き叫ぶような声を上げた。
体から、さらに血がボタボタと流れ落ちる。

「う……！！！」

クロコは激痛でその場にしゃがみ込んだ。

「クソ……」

動けなくなつたクロコにフロウは肩を貸し、その場をあとにした。

大砲部隊にその場を任せ、二人は基地へ戻った。

基地の広場に着くと、フロウはケガ人用のベッドの上にクロコを寝かせた。

深い傷を負ったクロコはうつろな表情をしている。
待機していたサキがそれに気づき近づいてくる。

「クロコさん！」

サキは心配そうにクロコのケガの様子を見る。
フロウが口を開く。

「大丈夫さ、傷は深いけど、命に別状はない。もともと生命力も強いから」

フロウは広間の様子を眺めた。広間には多くのケガ人が寝ている。
するとアールスロウが入ってきた。

（アールスロウさん……どうして広間に？）

アールスロウは全体に聞こえるように大きな声を張り上げた。

「もうここは限界だ！ この広間にいる者はすぐに馬車に乗り込み、セウスノールに後退しろ！！」

そのアールスロウの言葉に広間がさわめく。

「急げ！ 時間はそうそうないぞ！」

広間の兵士や支援員は急いで動き始める。そんな中、サキがアールスロウに駆け寄る。

「後退つて、なぜです！」

「もうここは持たない。いまならば安全に脱出できる」

「けど、まだ防衛線を守っている味方が……」

「ああ、だから俺や隊長達は最後まで残って戦う」

「そんな……そんなことしたら、アールスロウさんは……」

「大丈夫だ、むざむざ敵に命を渡す気はない。夜が更ければ、敵の攻撃はやむ可能性が高い。そこまでのげば、あとは隙を見て脱出する。多少リスクはあるがな」

「……………」

サキは一瞬黙った。しかしすぐにアールスロウの目を見つめ、敬礼した。

「どうかご無事で」

アールスロウは敬礼を返した。

「セウスノールで会おう」

クロコ、フロウ、サキを含めた広間の兵士達は馬車に乗り込み、西の通りからフルスロックを脱出した。

途中クロコは馬車から、もう遠くなったフルスロックの街の姿を見た。

見慣れた街並みは戦火によつて、赤く燃えていた。

クロコは幼い頃、ブレットと共に旅立ったあの日のことを思い出した。

4 - 11 選ぶ答え

グラウド東部に位置する首都ゴウドルークス。そこに建つブリアント国会議事堂。その廊下を一人の大臣が歩いていた。

年齢四十代前半、茶色の髪に、柔らかい茶色の口ひげをはやしている。鋭い目つきをしているが、どこか全体的に落ち着いた印象を受ける。

グラウドの軍務大臣であり、セウスノール軍のリーダーでもあるルイ・マステインだ。

ルイ・マステインは廊下を早足で歩く。表情は非常に険しかった。

（セウスノールが攻め入れようとするこんな状況の中、ここから動けないとは……！）

マステインはぐつと歯？みする。

すると向かいから歩いてくるグランロイヤー総務大臣に気づく。横には護衛のリーヴァルが付いている。マステインはすぐに平静を装った。

「やあ、ルイ」

グランロイヤーが笑顔で声をかけてくる。

「やあ、ジオ」

マステインもほほえみながらそれに答える。

「どうしたルイ。どうも様子が落ち着かないな」

グランロイヤーのその言葉に、マスティンは内心でわずかに驚く。

「参るよ、君の鈍そうで鋭い所には」

マスティンはほほえむ。

「ハッハッハッ、取り柄の一つだからな。それよりどうしたルイ」

「なに、大したことじゃないさ」

「どうも君は最近私に冷たいな。私はそういう風に突き放されるとさびしくなるのは知ってるだろう？ 何か悩み事があるなら聞こうじゃないか」

「今は少し都合が悪くてな。また機会を作るよ」

「そうかい……」

グランロイヤーは少し口調を落とした。

「すまないな。またな、ジオ」

マスティンがグランロイヤーを横切ろうとした、その時だった。

「ルイ、ちょっと聞かせてくれないか？」

グランロイヤーの口が開いた。じつとマスティンを見つめている。

「君は最近付き合いが悪いな。いったいプライベートの時、君は一人で何をしてるんだ？」

「……最近一人旅に凝っていてな。年甲斐もなく遠くへ行って疲れを溜めてしまっんだ」

それを聞いてグランロイヤーはほほえむ。

「そうか、今度気が向けば私も誘ってくれ」

「ああ、そうするよ」

マスティンはグランロイヤーを横切って、そのまま歩いていく。

グランロイヤーはその場で立ち止まっていた。

去っていくマスティンの背中をしばらく見つめたあと、ゆっくりと口を開いた。

「……リーヴァル」

「はい」

リーヴァルはグランロイヤーを見た。

「一時的に護衛の任を解こう。少し調べてほしいことがある」

荒野を走るクロコ達の馬車。

フルスロック脱出後から、三日走った頃、荒野の向こうからセウスノールの街が姿を現した。

馬車はセウスノールへ入り、大通りを走る。

しばらくすると正面に、セウスノール基地が見えてきた。

ずっしりと横と奥に広がった巨大基地だ。数え切れないほどの大砲が備え付けられている。後方にはシユルベルク城が見下していた。

基地に着いた頃にはクロコの傷もだいぶ良くなり、馬車から自力で降りれるほどには回復していた。

クロコ達が降りると、すぐにガルディアが出迎えに来た。

「おまえら、よくここまで来てくれた」

ガルディアは兵士達一人一人にねぎらいの言葉を言う。
クロコの前にガルディアが立つ。

「クロコ。約束通り、またここで会えたな」

「ああ……」

クロコは軽く返事だけをして、ガルディアを横切った。平静を装っていたクロコだが、その心は穏やかではなかった。レイズボーンの顔が、頭から離れない。

ガルディアはそんなクロコの背中を静かに見つめた。
そんなガルディアにサキが近づく。辛そうな顔をしている。

「ガルディアさん。アールスロウさんは……」

「分かってる。そういうやつだから」

ガルディアはフルスロツクの方角を見つめた。

「なに、大丈夫さ。あいつも必ずここに来る」

無人となったフルスロツク。焼き焦げた建物が並ぶ大通りには無数の国軍兵が座り込んでいた。

その街にそびえるフルスロツク基地。その一室にレイズボーンが一人座り、紅茶を飲んでいた。

扉が開き、その部屋に一人の将軍が入ってくる。

年齢四十代前後、白い髪に、鋭い目をした整った顔だちをした男だ。少し恐そうな顔をしているが、表情は穏やかだ。

「お疲れだったな、レイズボーン少将。また勲章が増えるな」

白い髪の将軍は気さくに話しかけた。

「これはこれは、『剣封』ファイナス少将ではありませんか。私以外の『七本柱』が来ていたとは」

「ああ、何せこの戦いで内乱に終止符が打たれるかもしれないのだから。国軍にも気合が入るさ。ついでにロイスバード少将も来る予定だったが、残念ながら間に合いそうにないな」

「それは可哀想に、あの方はケイルズヘルの敗戦以後、解放軍への復讐にご執心だと聞いていましたのに」

「それよりレイズボーン。基地内には解放軍の捕虜やケガ人が一人もいないのだが……」

「ああ、生き残りは少なかったので、邪魔にならないよう手早く処理しましたよ」

その言葉にファイナス少将は少し驚く。

「……少々やり過ぎではないか？」

「巨大な戦いが間近なのに、そうそう敵兵に労力はかけられませんよ。なにせ、倒すか倒されるかの戦いなのですから」

レイズボーンはニタリと笑った。

セウスノール基地の広間、そこでは迫る戦いの準備が進められていた。多くの兵士達が走り回り、次から次へと大砲が運ばれていく。フロウは一人、歩きながらその様子を眺める。

（だいぶせわしなくなってきたな。戦闘ももうすぐか）

「よう！」

突然誰かが呼びかけてきた。その声の方向を向くと、そこにはガルディアがいた。

ガルディアは気さくに話しかける。

「傷の状態はいいのか？」

「ええ、僕の方は問題ありません」

「クロコの方はどうだ？」

「クロコも全快とはいきませんが、だいぶ良くなっています」

「そうか、そりゃ良かった。そういえばクロコのやつ、ここに来てから少し様子がおかしい気がするんだよねあ」

「……………。それは……………」

フロウは少し言葉に迷った。

「ガルディアさん、少し場所を移して話をしませんか？」

「……………分かった」

二人はひと気のない広間の端に移った。

「……………で、話って言うのは？」

「はい、クロコの様子がおかしい理由ははっきりしているんです」

「はっきりしてるって言うത്?」

「クロコはフルスロットルの戦いでレイズボーンに出会っているんです」

それを聞いた途端、ガルディアの表情が一瞬こわばった。

「……………そうか」

「僕が駆けつけた時、すでにクロコはやられかけていて……………それにひどく混乱していました。完全に怒りで正気を失っていたという感じ」

ガルディアは表情を変えずに話を聞いている。

「レイズボーンがどんな人物なのか、僕も噂で聞いた限りで知っています。それにクロコがされたことを考えても、クロコの反応は当然だと思います」

「……………だろうな」

「クロコは多分、いま、彼に対する復讐しか頭にはないと思います。ただ……………」

フロウは少し視線を落とす。

「僕は、それは別に間違っているとは思えない。レイズボーンはそれをされて当然の人間だと思いますし、それに僕自身、今は違いま

すが、解放軍に入ろうと思ったきっかけは復讐心に近いものでした。だからクロコの今の気持ちを否定する気持ちにはなれないんです。だけど……」

フロウは少しだけさびしげな顔をした。

「なぜでしょう、クロコにはそんな形で剣を振るってほしくない、そう思っている自分もいるんです」

フロウの話を聞いたあと、ガルディアはしばらく黙っていた。しばらくの静寂が続いたあと、ガルディアは口を開く。

「フロウ、クロコがどこにいるか知ってるか？」

「……いえ、彼の行動はいまいち読めなくて」

「そうか」

ガルディアは歩き出す。

「教えてくれてありがとな」

夜のセウスノール基地、そのベランダでクロコは夜風に当たっていた。夜空には多くの雲が漂い、星は見えない。その夜空と同じように、クロコの表情もどこかすっきりしていない。

「よう！ クロコ」

ガルディアがベランダに入ってきた。

「アンタか、何の用だ？」

無愛想な対応のクロコ。

「さびしいこと言うなよ。オレとおまえの仲だろ？」

「殺し、殺されそうになった仲か？」

「ハッハッハッ、まだ記憶に新しいか……やり過ぎちゃったかな？」

「絶対やりすぎだと思う」

ガルディアはクロコの隣に立って夜空を見上げる。

「……聞いたぞ、レイズボーンに会ったんだってな」

「フロウか。あのおしゃべりめ」

クロコは夜空を見ていた。

「おまえは、レイズボーンを斬るのか？」

「……………」

クロコは視線を落とし、少しのあいだ黙ったあと、小さく口を開く。

「あいつは……あいつだけは……絶対に許せない。許しちゃいけない」

「……だから、おまえがやつを裁くのか？」

小さな風が音を立てた。

「やつが自分の大切な者達の命を奪ったから、おまえがその復讐にあいつの命を奪う……。やつのしたことを考えれば、それをされて当然だと」

ガルディアの言葉にクロコは答えなかった。

「別にオレはそれが間違ってるって言うてるわけじゃない。そういう正義もあると思う。だけど、それをすることで、おまえが今まで大切にしていた何かが壊れてしまうような、そんな気がするんだ」

それを聞いて、クロコはしばらく黙ったあと、小さく口を開いた。

「……けど、オレは……あいつだけは許せない……!!」

クロコはギリツと歯を鳴らした。

「……他の全てを失ってもいいくらい。あいつが憎い……!!」

その言葉を聞いて、ガルディアは黙った。

夜のベランダに再び風の音が鳴る。

「それが全てというのなら、その選択をすればいい。それが本当に

おまえの求めたことならな」

その言葉を聞いてクロコは黙った。ガルディアは再び口を開く。

「おまえは、もう気づいてるんじゃないか？」

ガルディアはクロコを見つめた。

「おまえはいままで、なんのためにアールスロウに剣技を教わった？ おまえはなんのためにオレとの特訓に一週間も耐えた？ おまえは今まで何を思って、必死で戦って生き残ってきた？ それはおまえが今しようとしているもののためなのか……？」

その言葉を聞いてクロコはわずかに眉を寄せる。

「おまえの振るう剣。それに乗せるべきものは、いったい何なのか」

ガルディアは静かにクロコを見つめていた。

「オレは本当のところ、おまえの心なんか、分かりやしない。だから、それはおまえにしか分からない」

ガルディアはゆっくりと口を開く。

「答えは、おまえの中にある」

ガルディアはクロコに背を向けて歩きだした。

「後悔のない選択をしろよ」

ガルディアは去り、クロコはまた独りになった。再び夜空を見上げる。

いまだに自分の心はすつきりとしない。ただ、先ほどまでと違い、ひどく震えているような気がした。

クロコはふとウォーズレイ基地で、ブレッドの死に触れた時のことを思い出した。

胸が苦しくなるのを感じた。

（あの時と同じだ……）

その時、思い出した。夕陽の橋でソラと二人きりで話した時のことを。

その時のクロコも、先ほどの同じように、ソラに自らの中の怒りを言葉にして吐き出した。

ソラの言葉がよみがえる。

「あなたは選択しないといけない。あなたの答えを、クロコの答えを……」

「あなたの求める『希望』は、事実と向き合い、問題とぶつかりながら歩んだ先にきつとあるはずだから」

クロコは夜空を見つめる。

（オレの求める『希望』……オレの答え）

クロコの脳裏にスコアの顔が浮かんだ。その時、クロコは軍服からあるものを取り出した。その手に銀色の卵型のペンダントの片割れが光る。

（この戦いには、あいつもいるんだろうか……？）

同じ頃、フルスロツクの街の一角、そこでコールは一人、座りながら剣を白い布で磨いていた。

「コール」

突然、コールを呼ぶ声がした。見ると、そこにはスコアの姿があった。

「スコア……！」

「久しぶりコール、一ヶ月ぶりくらいかな？」

スコアはほえむ。それを見てコールもほえむ。

「久しぶりスコア、司令官に挨拶しなくていいの？」

「もう済ましてきたよ」

「そっか……」

コールはそう言ったあと、わずかに暗い顔をした。

「ねえスコア。フレアの話はもう聞いた？」

それを聞いてスコアはわずかに表情を曇らせる。

「うん」

「そっか……」

コールはそう言ったあと、何かを考える様子を見せる。

「コール……？」

コールは真剣な表情でスコアを見た。そして口を開く。

「……やっぱり、きみは知っておくべきだ」

「え……？」

「スコア、少し場所を移そう」

二人は建物の裏に移動して、向かい合って立った。

「なに？　ボクが知っておくべきことって。フレアについてだろうか？」

それを聞いてコールはスコアをじっと見つめる。

「うん……フレアの死についてのこと」

「どんなこと？」

「……理由は分からないけど、フレアの遺体は戦場からずいぶん離れた所で発見されたらしいんだ」

「……？」

「その発見場所のすぐ近くには割れたゴルドアの破片が見つかったらしい。たぶんフレアを殺した相手のものだ」

「ゴルドア……」

「解放軍の兵士でゴルドアを使っている剣士はだいぶ限られる。そしてフレアを倒してもおかしくないほどの実力を持った剣士……」

スコアは思い出した、クロコが身の丈に合わない大型の剣を持っていることを。

「まさか……」

「何よりフレアは、あの戦場でクロコを倒すことに執着していた。きみとクロコを戦わせなくなかったから」

「……！！」

スコアは衝撃を受ける。しばらく呆然とした。

スコアの口元がゆっくりと動く。

「そうか……分かった」

「正直、きみに言うべきがどうか迷った。だけど、きみには知る権利があると思ったんだ」

「うん……ありがとうコール。教えてくれて」

スコアはつぶやくような静かな口調だった。

「少しの間、独りにしてくれないかな？」

その言葉にコールは静かにうなずいて、その場から離れた。独りになったスコアは夜空を見上げる。

（そうか……クロコ。きみはボクの大事なものを奪ったのか）

スコアは眼鏡をはずし、深い青い瞳で夜空を見つめた。

（ならばボクはこれ以上、大事なものを奪われるわけにはいかない。ボクはボクの大事なものを守らなければならない。だから……）

スコアは剣の柄を強く握った。

（きみはボクが倒す）

4 - 12 集結する精鋭

柔らかな太陽がセウスノール基地を照らす。

セウスノール基地の広間、クロコは一人でそこを歩いていた。
新しく来た兵士達で込み合っている広間、クロコは其中でサキを見つけた。

「サキ！」

クロコが呼びかけるとサキは小走りで近づく。

「クロコさん！」

サキはクロコの前に立った。

「ケガの具合はどうですか？」

「ああ、もうほとんど大丈夫だ」

サキはクロコのケガの具合を見るふりをして、クロコの様子を見ていた。前より表情が少し柔らかくなっているのを見てホッとする。

「良かったです。大丈夫そうです」

「おまえ一人か？」

「いえ、あそこにフロウさんが」

サキが指さす方向にフロウが座っていた。剣を磨いている。

フロウとも合流し、三人は広間を歩きながら、周りを見渡す。

「アールスロウ達はまだ到着してないのか？」

「うん、まだみたい」

フロウの言葉を聞いて、クロコは少し視線を落とす。

「そっか……………戦力は集まってんのか？」

「うん、ガルディアさんの話だと今の時点の兵力は110000だ
って」

「すごいな。よく集めたモンだ」

「実力者も多く集まっているみたいですよ。例えば、ほら、あそこ
の大きな人」

サキが指さした方向には、大柄の剣士が座り込んでいる。

その剣士は年齢二十代半ば、馬のタテガミのような長い白髪をしており、獣のような鋭い目をしている。かなり威圧的な風貌だが、どこか物静かな印象を受ける。

「中央の前衛基地ビルセイルドのエース。『進撃の白竜』ロザン・スロディーンです」

「へえ、白竜ねえ、おまえが好きそうだな」

「ボ、ボクが好きなのは実物です！」

「実物なんかいねーよ」

すると向かいから一人の女が歩いてくる。

クロコはその女に見覚えがあった。

「ミリア……！」

クロコはその名を呼ぶと女はクロコに気づく。

女は年齢十八、九、きれいな体つきで、黄色いサラツとした長い髪、きれいな顔立ち、冷たい目に緑色の瞳。目だけでなく全体的に冷たい雰囲気をもっている。

ケイルズヘル基地のエース。ミリア・アルドレットだ。

「クロコ・ブレイリバーか……」

ミリアは静かな口調で名を言った。

「おまえも来てたのか。ミリア」

「ああ……フルスロックでは大変だったな」

「……あ、ああ」

「隣にいるのはおまえの仲間か？」

「ああ」

クロコがそう返事をして、二人の顔を見る。すると、サキの顔が異常に真っ赤に上気していた。

サキは目を回すように口を開く。

「ボ、ボ、ボボクは、サ、ササササササキ・フフフランティスです」

サキはアワアワと言った。

「こいつは異国人か？」

ミリアは表情を変えずに言った。

「いや、クラウド人だ。多分……」

フロウが一步前に出て、手を差し出す。

「僕はフロウ・ストルーク。はじめまして『戦乱の鷹』ミリア・アルドレット」

「ああ」

ミリアはフロウの握手に応じる

サキが何とか息を整えて口を開く。

「ボクは……サ、サキ・フランティスです！ よろしく！」

「ササキ・フランティスカ。変わった名だな」

ミリアは無表情で言った。

「じゃあな」

ミリアは三人をサツと横切った。サキは去っていくミリアの後ろ姿をボーッと見つめていた。

「おい、行くぞサキ」

「あ……！ はい」

三人は廊下を歩く。

「驚いたな、『戦乱の鷹』があんなに美人だったなんてね」

フロウのその言葉にサキが敏感に反応する。

「でも、僕の好みじゃないな。少し若いや」

その言葉を聞いてホツとするサキ。すると向かいから二人の軍人が歩いてくる。

クロコはその内の一人に見覚えがあった。

軍人の一人は、年齢四十代後半、黄色い髪、ピンとはねた黄色いひげ、目は細く、開いているのかいないのか分からないほどだ。

その軍人はクロコに気づく。

「おお、君は……クロコじゃないか」

「アンタは……えーと、タ……タ……」

「ティム・ランクストンだ」

ランクストンはあきれた顔で言った。
フロウが驚く。

「ラ、ランクストン総司令!？」

フロウとサキは素早く敬礼する。

「誰のですか？ この子は……」

ランクストン総司令の隣にいる若い軍人がクロコを見ながら口を開く。

その軍人は年齢二十代半ば、短い黒髪に大きな目、さわやかな雰囲気を持っている。

「二人目の特例だよ。名はクロコ・ブレイリバーだ」

ランクストン総司令が、黒髪の軍人にクロコを紹介する。

「クロコ、君にも紹介しよう。彼はリーク・ディスク。本部軍の精鋭である特別戦闘部隊。その隊長だ」

クロコとディスクは目を合わせる。

「特例になるくらいだから、君も腕は確かなのだろう」

「当たり前だ」

二人の様子を見ながら、ランクストンがディスクに向けて口を開

く。

「クロコはあのグレイ・ガルディアのお墨付きだよ。実力は確かだろっ」

クロコはディスクを見つめる。

「アンタも……よく分からないが、とにかく……強いんだろ」

「ああ、もちろんだ」

ディスクは自信に満ちたほえみで答えた。
クロコはランクストンの方を見る。

「ファントムは……来るのか？」

「いや、彼は来れない。動けないそうだ」

「そうか」

（国の偉いやつって言ってたもんな。いまゴウドルークス辺りにいるのか……？）

「では我々は行くでしょう。クロコ、君の活躍に期待するよ」

ランクストンのその言葉と共に、二人は横切って去っていった。

国軍に占領されたフルスロック基地。その広間をファイナス少将とレイズボーン少将は歩いていった。広間に集まっている国軍人達を見渡す。

ファイナスがレイズボーンを見ながら口を開く。

「私たち『七本柱』のほかにも実力者が数多く呼ばれている。例えば……ほら彼だ」

ファイナスは広間の端に座る長身の青年を指さした。

その青年は二十代後半、黄色い髪に、細い目に高い鼻、厳格そうな雰囲気をまとい、長槍を携えている。

「軍事貴族であるロウレイブ家の若き当主アグレス・ロウレイブだ。槍技の天才だよ」

それを聞いてレイズボーンはあごをさする。

「ほう……彼が『一角獣』ですか」

「半年前のウォーズレイの戦いで、弟のサイ・ロウレイブが戦死してから、それを倒した女剣士と戦う機会を狙っているらしい」

「女剣士？ ミリア・アルドレットですか？」

「いや、無名の剣士らしいが」

「ホウ……」

レイズボーンは一瞬ニタツと笑った。

「ファイナス少将、同じ槍使いとして、あなたは彼をどう思いますか？」

それを聞いてファイナス少将はほほえむ。

「私の槍技は特殊だからな。それに比べれば彼は正統派だ。さてと……」

ファイナス少将は再び広間全体を見渡す。

「ほかには実力者と言うと……」

ファイナス少将は指先を漂わせる。すると目の前に年齢十七、八の若い剣士が横切ってきた。

少し乱れた長めの灰色の髪、鋭い目に光る赤い瞳。落ちついた顔立ちをしているが、どこか危険な雰囲気漂わせている。

その剣士の姿を見た途端、ファイナス少将の目の色が変わる。

「まさか、レイデル・グロウス……！？」

レイデルは長めの灰色髪を揺らしながら、鋭くファイナスをにらみつける。

「ああ……！？」

レイデルはファイナスとレイズボーンをじつと見る。

「なんだ、將軍様が二人揃って、オレに何か用か？」

ファイナスが冷静に答える。

「君はレイデル・グロウスだろう？ 『消剣の騎士』の……」

「そうだよ、だからなんだ」

「私はファイナス少将だ、よろしく」

ファイナスは握手を求めるが、レイデルは無視した。

「ファイナス？ 知らない名だ」

「そうか、それは少しショックだな」

「わざわざ名前を覚えてるやつなんか、両手で数えられるぐらいしかないからな」

「しかし、 그레이・ガルディアとミリア・アルドレットは知っているのだろう？」

それを聞いてレイデルはニヤツと笑う。

「ああ、そうだ。この戦いで、その二人と戦いてえなあ。どちらでもいい。オレが楽しめる相手だといいな」

「君の活躍を期待するよ」

ファイナスのその言葉に答えず、レイデルは無言で二人の前を立ち去った。

「無礼な男ですね。これだから平民は」

レイズボーンは少し不機嫌な声を出した。ファイナスが口を開く。

「実力は確かなのだがな。ただ、積極的に働くスコア・フィードウツドと比べ、あの男はかなりの気分屋のようだ。まあ彼の言うように、どちらかとせひ戦ってほしいよ。そうすれば彼もしっかりと働くだろうからな」

「主力はこんな所ですか」

「あと聖騎士隊も協力してくれるらしいぞ」

「聖騎士隊……あの皇族直属のゴウドルークス最強の剣士集団ですか」

「ああ、そして、『瞬神の騎士の再来』スコア・フィードウツド」

「大したメンバーですね。これでこの野蛮な農民どもの内乱に終止符が打たれることでしょう……」

レイズボーンは上機嫌に笑みを浮かべた。

4 - 13 命運を懸けた戦い

「フルスロックだ。フルスロックからの馬車が来たぞ！」

セウスノール基地の広間に兵士の声が響き渡る。

話を聞いたガルディアが全力で広間に駆けつける。ガルディアが着くと、広間には数百人のフルスロックの兵士が歩いていた。その中にアールスロウの姿もあった。駆け寄るガルディア。

「よくここまで来た。ファイフ」

アールスロウはだいぶ疲れた様子だったが、ケガをしている様子はなかった。

「みんなも本当にご苦労だったな。よくここまで来てくれた。ありがとう」

ガルディアは他の兵士たち全員に声をかけた。兵士達はその声を聞いて安心したようにほほえむ。

ガルディアは兵士達を引率する形で先頭を歩く。隣を歩くアールスロウに声をかける。

「信じてたぞファイフ。必ず来るってな」

「……………」

ガルディアの言葉を聞いて、アールスロウは一瞬黙る。

「……確かに俺は、ここまでたどり着くことができました。ただ、脱出の途中、敵の厳しい追撃にあい、多くの仲間が死にました」

アールスロウは苦しそうに目を閉じる。

「俺に力があれば、もっと多くの仲間を救ってやれた……」

その言葉を聞いてガルディアはアールスロウの背中を優しく叩いた。

「おまえだからこそ、これだけの仲間が助かったんだ。おまえはそれを、誇るべきだ」

「……………」

「今はとにかく休め」

それから間もなく、セウスノール基地に国軍が動いたという情報が入る。それにより、基地は一気に臨戦態勢へと突入した。

それから二日後、夜のセウスノール基地、その司令室。

解放軍の幹部が集まるその部屋で、ランクストン総司令が緊張した顔で口を開く。

「いよいよ、明日、戦いが始まる」

ランクストンは細い目をめいっばいに開き、幹部達を見渡した。

「我々が生きるか死ぬかの戦いだ。我々がいなくなれば、また不合理的な権力がこの国を支配するであろう。全ての国民のため、皆、この戦いに向け全精力を注いでほしい」

基地の大部屋、その一角の敷かれた毛布の上で、クロコとフロウとサキの三人は座り込んでいた。

「いよいよ明日ですね」

サキが緊張した表情で言った。

「うん、明日の戦いが最後の戦いにならないようにしないとね。クロコ、調子はどう？」

「ああ、大丈夫だ。もう我を失ったりはしねーよ。あとは戦うだけだ」

クロコは真紅の瞳をギラツと光らせた。

基地の廊下、その窓からガルディアは独りで外を見ていた。夜のセウスノール、住民は全員避難場所に集まっているため、光のない

暗い景色が広がっている。その街並みを月明かりだけが包み込むように照らす。

「 그레이さん」

背後からアールスロウが声をかけた。

「ファイフ。もう調子は戻ったか？」

「ええ、疲れはだいぶ取れました。明日の戦いには支障ありません」

「ここに来て数日だ。無理はするなよ。今回の味方は精鋭ぞろいだ。おまえがそこまで無理する必要はないさ」

「ですが、敵も精鋭揃いです。そして兵力も火力も向こうの方が上……。負けるぐらいなら無理をした方良いでしょう」

「やれやれ……」

ガルディアはそう言って再び外の景色に目を移す。

「この空気は……西部の空気は体になじむな」

「そう言えば 그레이さんは西部の生まれでしたね。ロックの辺りですか、それとも……」

「セウスノールのすぐ西のリブスって村だよ」

「そうですね、この近くなんですな」

「ああ、生まれ故郷を思い出して懐かしいよ、そのせいか、体の調子もいい」

「それは何よりです」

「まあ、いいことばかりじゃないけどな、この西部での思い出は…」

ガルディアの表情が少し曇る。

「……？ 嫌な思い出でもあったんですか」

「ああ、ここに……西部に来るたびに鮮明に思い出すよ。オレが若かった時のある出来事を……」

「……………」

「なあ、ファイフ、おまえはずっと、オレの隣にいて、オレを助けてくれたな」

「そんなことは……俺もあなたによく助けられていますよ」

それを聞いてガルディアは静かにほほえむ。

「なあファイフ。ちょっと昔の話を聞いてくれないか？ あるどうしようもないバカが起こした、どうしようもない事件の話だ」

「……どのような話なのですか？」

「七年前……もうすぐ八年前になるか。ロツクの地方で起きたクロ

ウジア谷の戦いは知っているよな？ おまえも参加してたもんな」

「ご存じだったんですか」

「ああ、実はオレ、その時からおまえのこと知ってたんだよな。それで、その中で起きた事件も知っているよな？」

「……スロンヴィア虐殺ですか」

「それについての話だ」

ガルディアはその後、スロンヴィア虐殺が、自身が原因で起こったこと、そしてその経緯を話した。

その話を聞いたアールスロウは、表情にはほとんど出さなかったが、ひどく驚いている様子だった。

話が終わるとアールスロウはすぐに口を開く。

「あの事件は、あなたが起こした事件ではない。レイズボーンが起こしたものです」

それを聞いて、ガルディアは冷静に口を開く。

「そうだな、あの事件を起こしたのはレイズボーンだ。だが、オレがあそこに来なければ、あそこで事件は起きなかった。だから、オレが起こした事件でもある」

アールスロウはわずかに眉を寄せる。

「……それが、あなたがここで戦う理由なのですか」

「ああ、そうだ」

「少しだけ、引っ掛かっていたんです。あなたは戦争に対して否定的な考えを持っていた、にも関わらず、どうしてもここで戦っているのが」

「だろうな」

「……………」

二人はしばらく黙った。

アールスロウが口を開く。

「……………その話は、クロコに言ったのですか？」

「いや」

「そうですか……………」

再び静寂が流れた。

アールスロウはゆっくりと口を開く。

「俺は思ってます。もしその話をクロコが聞いても、彼は……………彼なら、決して、あなたのことを責めるようなことは……………」

「しないだろうな」

「……!!」

「分かってるよ、そんなことは。あいつはそういつやつだ。だからこそなんだ」

「……………」

「オレは、あの出来事を自分の中で許すつもりはない。それは、誰に何を言われようと変わらない。だけど……あいつだけは」

ガルディアは視線をわずかに落とした。

「もしあいつに許されたら、オレはほんの少しでも自分自身を許してしまうんじゃないか。そう思うと……それが、なにより怖いんだ」

アールスロウはさびしげな目をした。

「そんな目で見るな、ファイフ。別にオレはそんな目で見られるような辛い人生を送ってるわけじゃないさ。そんなの普段のオレを見れば分かるだろ？ それに今は楽しくもある、あいつを、クロコを見るのがな」

ガルディアは笑顔を浮かべた。

「だからこそだ。こんな所で、クロコを死なせるわけにはいかない。それにおまえらもだ。そのために、明日は必ず……勝つぞ」

その言葉を聞いてアールスロウは強い目でガルディアを見た。

「はい、もちろんです」

月明かりが基地を照らす中、夜はゆっくりと更けていった。

太陽が昇り、朝日がセウスノール基地を照らす中、基地の兵士達は次々と自らの配置へと向かう。

クロコも準備を整えた状態で広間から外に出ようと歩いていた、その時だった。

「クロ！」

その呼び声を聞いてクロコはギョツとした。基地の広間にソラがいた。

クロコはすぐに駆け寄って声を上げる。

「なんでいんだよ！」

その声を聞いてソラはビクツとする。

「ここは兵士と支援員しかいちゃいけねーんだぞ！」

「うん、だから支援員のふりして紛れ込んでるんだ」

「バカヤロー！！ 敵に押されれば、ここは攻撃されんだぞ！ 死にてーのか！」

クロコは怒って大声を出す。

「でも……」

「おまえはおとなしく避難場所に居ろ！」

「でも……避難場所で、クロの姿を見ずにじっとしてる方が、死にそうになる」

「……………」

クロコはしばらく言葉を失った。

小さなため息をついたあと、クロコはゆっくりと口を開く。

「……勝手にしろ。このバカ」

「うん、今回は認める」

セウスノールの街の東、その荒野からグラウド国軍が姿を現した。荒野を覆う巨大な軍勢だ。

セウスノール解放軍140000、対するグラウド国軍160000。セウスノール解放軍の命運を懸けた戦いが、いま始まろうとしていた。

国軍は荒野を進み、徐々にセウスノールの街に迫り来る。

西部で最も巨大な都市セウスノール。その街を囲む巨大な城壁は、セウスノールを全て囲んでいるわけではない。

セウスノールの街の西、そこにはいくつにも枝分かれしたクラブ
ン川が流れているため、城壁は必要ない。また北と東の城壁のあい
だには林が広域に分布しているため、城壁は分断した形で築かれて
いる。そのため、東から攻める国軍の巨大な軍勢は、攻める方向を
必然的に東と南側に限定される。

迫りくる国軍に備え、解放軍は東の城壁の前に立ちはだかる形で
40000の横に広げた陣を構える。

その陣の中央にはビルセイルドのエース『進撃の白竜』スロディ
ーン、右翼にはクロコ、フロウ、サキ、左翼には『千牙の狼』アー
ルスロウが構える。

またその軍勢の後方には城壁に挟まれる形で、街を守る巨大砦が
そびえ立っている。

対する国軍はおよそ10000ずつに切り取った横長の軍勢を何
重にも並べて構えている。

長いにらみ合いが続く中、時は静かに流れていく。

パンッ！

国軍から放たれる一発の信号銃と共に、声を上げ国軍の横陣の一
つが動いた。

国軍の軍勢が近づくと共に、解放軍陣の後方にそびえ立つセウス
ノール砦から、大型大砲の砲撃が放たれる。

国軍を迎撃する形で放たれる大型大砲の無数の砲撃。国軍の軍勢
から大きな爆炎がいくつも上がる。しかし国軍は怯まない。

「向かい撃てー！！」

解放軍の軍勢も動く。40000の解放軍兵がうねりを上げて進む。

解放軍の軍勢が国軍の軍勢の間近に迫った時、

ドンドンドンドンドン！！

国軍中央から砲撃の雨が降る。火力に勝る国軍は、それにものを言わせ強烈な砲撃を浴びてきた。その爆炎によって、解放軍兵は次々と足を止める。しかしただ一人の足だけは止まらなかった。

馬のタテガミのような白い髪をなびかせ、スロディーンは砲弾の雨が降る中、国軍の軍勢に向けて真っ直ぐに突進する。

爆風が包む荒野の中、迷いなく駆けていく。

途中、自分に向けて近距離砲撃が放たれるが、紙一重で避け、ついに国軍の軍勢に飛び込んだ。

「ウオオオオオッ！！」

スロディーンは雄叫びをあげ、大剣を振り回す。

ギユンギユンギユンギユンッ！！

スロディーンの暴風のような斬撃と共に、その周辺を大砲の破片や砲兵達が舞い飛ぶ。

「な、なんだ、こいつは！」

砲兵達が混乱する中、スロディーンは縦横無尽に暴れまわる。スロディーンによって国軍の砲弾の壁が崩されていく。

「オレ達も続くぞーッ!!」

中央の解放軍兵がスロディーンに続いて、突進する。

解放軍右翼、その一角でフロウは小剣を振り回す。

ヒュヒュヒュヒュヒュンッ!!

止むことのない高速の斬撃で敵を次々と斬り伏せる。
その斬撃により剣兵の壁が崩れ、それと共にフロウはさらに前進しようとした、その時だった。

ヒュウンッ!

鋭い斬撃がフロウを襲う。

「……!」

後ろに跳び、とっさにかわすフロウ。

フロウの目の前に長槍を持ったアグレス・ロウレイブが姿を現した。

ロウレイブは解放軍を見渡す。

「さあ、どこにいる……クロコ・ブレイリバー」

解放軍左翼、そこではアールスロウが前衛に立ち、剣を振るう。
鮮やかに弧を描く美しい剣技で、国軍兵を次々と斬り伏せていく。

そのアールスロウの前に一人の国軍人がゆっくりと歩み寄ってきた。

その軍人は白い將軍服に身を包んでいた。

「……………！！」 『七本柱』 か……………」

アールスロウの前にファイナス少将が姿を現す。右手には無数の鍵爪を付けた不気味な槍が握られていた。

ファイナスは不敵にほえんだ。

「さて、終わりを告げる戦いの始まりだ」

4 - 14 精鋭同士の戦い

セウスノールの街の東に位置する荒野。そこでは巨大な軍勢同士がぶつかり合っていた。

セウスノールの城壁の前に横に広がる解放軍の40000の軍勢。それに同じ幅まで横に広がる国軍の10000の軍勢がぶつかっている。

「第二陣進めー！！」

後方に備えていた二つ目の国軍の10000の横陣が、声を上げて戦場へと進む。

解放軍中央ではスロディーンが国軍兵を斬り伏せていた。敵陣のなかをゆつくりと歩み進む。途中、国軍兵が斬りかかるたび、その国軍兵は宙を舞う。

スロディーンは止まることなく敵陣を進み続け、徐々に国軍陣形を切り裂いていく。

解放軍右翼、その一角でフロウとロウレイブが向かい合っていた。ロウレイブは辺りを見渡す。

「どこにいる……クロコ・ブレイリバー」

それを前にフロウが口を開く。

「僕を前にしてずいぶん余裕だね」

その言葉を聞き、ロウレイブはゆっくりとフロウの方向を向く。
その直後、ロウレイブは突進し、長槍で斬りかかる。空気を切り裂く高速の斬撃。

ヒュウンッ！

フロウはとつさに反応し、かわした。

「ほう……これもかわすか」

フロウは剣を構え、突進しようとするが、ロウレイブの突きがそれを阻む。

「く……！」

ロウレイブの攻撃がフロウを襲う。
突きと斬撃を組み合わせた攻撃に加え、その攻撃の軌道は複雑に変化していく。

その変幻自在の攻撃がフロウを絶え間なく襲い続けた。

「う……！」

ロウレイブの攻撃の壁を前にフロウは近づくことができない。

（く……突きと斬撃のコンビネーションに、切り返しに、軌道変化、軽いフットワーク。加えて僕の三倍以上の間合い。これじゃあ防ぐ

だけで攻撃に移れない)

どんどん攻めるロウレイブに対し、フロウは徐々に後ずさっていく。

途中、ロウレイブの攻撃の数発がフロウをかすった。わずかに血が飛ぶ。

(くっ……これじゃあ、なぶり殺した。踏み込むしかない……!)

フロウは一步踏みこんだ。その直後ロウレイブの大振りの斬撃がフロウを襲う。

ギイインッ!!

何とか受け止めるフロウ。しかし強力な威力に体勢が崩れた。

ヒュウンッ!

ロウレイブの斬撃がフロウをとらえた。フロウの体が切り裂かれ、宙に血が舞った。

「ぐ……!」

思わず膝をつくフロウ。

「他愛もない……終わりだ!!」

ロウレイブが長槍を勢いよく振り下ろす。

ヒュウンッ!!

ギンッ！

ロウレイブの槍は止められた。

フロウとロウレイブのあいだにはクロコが立っていた。

ロウレイブはその姿を見る。

「黒い髪の女剣士……」

ロウレイブの目の色が変わる。

「見つけたぞ！ クロコ・ブレイリバー！！ 弟の仇。我が誇りに懸けて、きさまは私が倒す！」

「ああ……！？」

解放軍左翼、その一角でアールスロウとファイナス少将は向かい合っていた。

アールスロウはファイナスが持つ不気味な形の槍を見る。六本の鍵爪のついた短い槍だ。

「……この奇妙な武器。あなたが『剣封』ジン・ファイナスか」

「ああ、その通り。君は『千牙の狼』ファイフ・アールスロウだね」

「そうだ」

「久しぶりの戦場、何とも血が騒ぐ……」

ファイナスは槍を構える。

「この奇形槍ギサイアと我が戦術。君に破れるかな？」

その言葉を放った直後、ファイナスは突進する。

それに合わせ、アールスロウは斬撃を放った。

ヒュウンッ！

その斬撃を素早く鍵爪にひっかけるファイナス。

ファイナスは笑みを浮かべ、斬撃をそらし、投げ捨てるようにアールスロウの長剣を弾き飛ばした。大きく逸れるアールスロウの剣。

「なに……！」

それと共にファイナスは素早くアールスロウの懐に飛び込む。

ヒュンッ！

アールスロウの肩がわずかに切り裂かれた。

「くっ！」

すぐに間合いを取ろうとするアールスロウ。それに対し素早く追撃するファイナス。

ヒュンヒュンヒュンッ！！

アールスロウはファイナスの斬撃の一つを受け止めようとした、その瞬間、

ガッ！

ファイナスの鍵爪が再びアールスロウの剣をひっかける。再び剣は大きく逸れされる。懷に飛び込むファイナス。

ヒュンッ！

アールスロウの左腕がわずかに切り裂かれる。

「くっ！」

ファイナスはどんどん前に出て、激しい斬撃をアールスロウに放ち続ける。

それをひたすら避け続けるアールスロウ。

（なるほど、これが噂の『剣封』か……斬撃を放てば、逸らされ、防御さえも逸らされ、強制的に隙を作らされる）

ファイナスの斬撃の一つがアールスロウをかすった。しかしアールスロウは冷静にファイナスの攻撃に目を凝らす。ファイナスの斬撃の一つをかわしたその瞬間、

（今だ！）

ヒュウンッ！

アールスロウの素早い反撃。しかしファイナスの槍がすぐに返っ

てきた。

ガッ！

長剣は再び槍につかまり、弾き飛ばされる。

ヒュンッ！

アールスロウの脇腹が切り裂かれた。血が噴き出る。

「ぐ……ッ！」

脇腹を押さえながら距離をとるアールスロウ。
それを見ながら不敵に笑うファイナス。

「軍事貴族である我がファイナス家に、200年ものあいだ代々伝わる剣士封じの技、その極み。そうそう破れるものではない。ノーマルな剣士では絶対に私には勝てない」

「く……！」

アールスロウの脇腹から血が流れる。

解放軍右翼、そこではクロコとロウレイブが向かい合っていた。

「覚悟しろ、クロコ・ブレイリバー」

ロウレイブは長槍を構えた。

クロコもそれに合わせ大剣を構える。

ヒュウンッ!!

ロウレイブの強力な斬撃。それに合わせクロコも斬撃を放つ。

ギンッ!

二つの斬撃はぶつかり合い、共にはじけた。

素早く次の攻撃に移るロウレイブ。突きと斬撃の波状攻撃がクロコを襲う。それに対抗し、クロコも大剣を振るう。

二人の間をいくつもの攻撃がはじけ合う。

「やるな! クロコ・ブレイリバー」

「チッ!」

ロウレイブと撃ち合う中、クロコはウォーズレイ防衛戦の際に戦った槍使いのことを思い出す。

(……!! そうか、こいつは……)

ヒュウンッ!

ロウレイブの斬撃の一つがクロコの体をわすかに切り裂く。

「く……!!」

「まだまだあ!」

ロウレイブの槍は軌道を二度変えたあと斬撃となってクロコを襲

った。

ヒュウンッ！

肩をわずかに切り裂かれるクロコ。

「クソッ！」

クロコは素早く距離をとる。その直後、

「クロコさん！」

サキが駆けつける。それに気づき、にらみつけるロウレイブ。

ヒュウンッ！

ロウレイブの斬撃がサキを襲う。素早く後ろに飛ぶサキ。しかし避けきれず、わずかに体が切り裂かれた。

「う………！」

「雑魚が……私の戦いの邪魔をするな」

攻撃を受けたサキを見て、クロコはロウレイブをにらみつけた。

「てめえ！」

突進するクロコ。それに合わせて斬撃を放つロウレイブ。

キーン

クロコはロウレイブの斬撃を受け流した。

「なに……」

素早く懐に入るクロコ。

ヒュンッ！

紙一重でかわすロウレイブ。しかしわずかに生じた隙にサキが飛び込んできた。

ヒュンッ！

ロウレイブの軍服がわずかに裂ける。

「く……！」

クロコもさらに斬撃を放つ。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

クロコの激しい攻撃。それにロウレイブが応戦しようとする。しかしそのタイミングに合わせ、サキが斬撃を放つ。

「チ……ッ！」

（クロコ・ブレイバー、思ったより手強い。加えてこの子供の剣士、嫌なタイミングで攻撃してくる）

クロコとサキ、二人の剣がロウレイブを囲むように襲う。少しずつ押されるロウレイブ。表情が険しくなってくる。さらにフロウが立ち上がり、攻撃に参加してきた。

（この三人を相手にするのはさすがにきつい……ここはいったん退くか）

ロウレイブは大振りの斬撃を数発放つと共に、後ろに飛んで距離を取り、そのまま国軍兵の群れの中へと消えていった。

ロウレイブの姿が消えたあと、クロコは小さくため息をついた。

大勢の兵士達の激しい戦いが荒野で繰り広げられる中、東の石門から、巨大な大砲が顔を出した。

天にも伸びるような巨大な砲身と、無数の車輪を付けた巨大な砲台。

解放軍の巨大大砲リック・ノールだ。

石門から荒野に出た八台のリック・ノールは、左右に散ると、解放軍の右翼と左翼の後方に四台ずつ整列した。

「リック・ノール。撃て !!!」

八台のリック・ノールはごう音を上げ、巨大な砲撃を国軍両翼に向けて放った。

国軍の両翼から大きな火柱が上がる。

国軍左翼、アールスロウとファイナスの戦うすぐ後方で爆発が起きた。

「くっ……なんだ！」

驚くファイナス。その隙を突いて、いくつもの傷を負っていたアールスロウは素早く後方へ逃げた。

「くっ……逃げられたか」

国軍陣后方、レイズボーンは双眼鏡で戦況を見ていた。

「ふむ、あれが噂のリック・ノールですか。まあ、あの程度の火力ならダメージは少ないでしょう。中央の一角もわずかに切り崩されていますね……しかし」

レイズボーンはニヤリと笑う。

「大した問題ではない」

激しい戦闘が続く中、戦場には次々と国軍の横陣が加わっていく。国軍の数え切れないほどの砲撃が放たれる中、徐々に解放軍の陣形が崩されていく。

中央で戦うスロディーンは初めて足を止めた。

「……どうやらここまでか」

パンパンパンッ!!

「後退だー！！ 後退しろー！！」

号令と共に、解放軍は徐々に後退し、応戦しつつ石門から街中へと下がる。

それを追って国軍も街中へと入ってくる。

戦いは市街地戦へと突入する。

セウスノール東の石門から、国軍兵が次々と市街地へとなだれ込んでくる。

それに対し、石門を入ってすぐの大通りで、待ち構えていた解放軍兵の部隊が応戦する。建物のすき間からの銃撃や、正面に並べられた大砲の砲撃が国軍兵を襲う。

それにより、少しのあいだは国軍兵を足止めしていた。しかし、石門から次々となだれ込んでくる国軍兵によって、解放軍兵の部隊は、ついには切り崩されていった。

広い石畳の大通りを国軍が進撃する。先頭にはファイナス少将が立ち、立ち塞ぐ解放軍兵を次々に斬り伏せていく。

「ここをまっすぐ進めばセウスノール基地だぞ！」

ファイナスの掛け声と共に、国軍はどんどん大通りを進んでいく。しかし進むにつれファイナス少将はあることに気づく。

（守りが薄い……？ ここを突破されればすぐに基地だというのに……）

「止まれ！」

ファイナス少将は全軍を止める。

「ここより後退し、左右の大通りから基地を目指す」

それを聞いて後ろの兵士達が驚く。

「し、しかし……」

「言う通りにしろ！」

セウスノールの司令室に兵士が飛びこむ。

「総司令！ 国軍が左右の北通りと南通りに進路を変更しました」

「なに！ おのれ…… 中央通りの仕掛け爆弾に気づいたか。北通りには二番隊と三番隊。南通りには四番隊と五番隊…… それとフルスロツクの部隊を一部回せ！」

国軍は北側の大通りと南側の大通りを、左右に分かれて遠回りに進軍する。対してセウスノール軍もそれに応戦する形で二つの大通りに部隊を構えた。

戦闘が進むにつれ基地内は慌ただしくなる。その中でグレイ・ガルディアは基地の中で控えていた。次々と出撃する兵士を落ちて着かない様子で見ている。すると、基地内に戻ってきた一人に目がいく。

アールスロウだ、体の何か所もが切り裂かれていた。

「ファイフ！」

ガルディアがすぐに駆け寄る。

「大丈夫か」

「ええ、なんとか……」

「おまえがここまでやられるとは」

「少々厄介な敵につかまってしまったので……応急処置をしたらすぐに出ます」

「おい、無理するなよ」

「先ほどの戦闘に出てはつきり分かりました。多少無理をしなければ、この戦い勝てない」

するとクロコも基地内へと戻ってくる。クロコは小さな傷が二ヶ所だけだ。

「クソ……大砲部隊に仲間が全部やられちゃった」

続いてサキとフロウも戻ってくる。

アールスロウは戻ってきた三人を見る。

「サキ、フロウ。俺の応急処置が終わったら、一緒に南通りまで行くぞ」

「おい、オレもだ!」

クロコがすぐに反応する。

「いや、君は残ってくれ、戦況が著しく変化している。君は状況が変化したらそれに応じて動け」

「む……」

クロコは納得のいかない顔をする。

「期待してるぞクロコ」

アールスロウはそう言い残して医療班の所へ歩いていった。

北の大通り、そこを進む国軍部隊の先頭ではコールが鋭い斬撃で軍を率いていた。

「よし、これよりこちらの通りに進路変更する」

指揮官の命令で国軍は狭い通りに進路を変更した。
それに対し、コールが眉を寄せる。

（確かにそっちの方がショートカットだけど……広い通りを行った方が絶対いいのに）

南の大通り、そこ一角では進撃する国軍を前にフロウが立ちはだかり応戦する。ロウレイブに受けた傷の痛みに耐えながら必死で剣を振るい、剣兵を斬り伏せていく。そんな中だった、フロウの目の

前に一人の剣士が立ちはだかる。

フロウは一瞬目を疑った。着ている服が違う。国軍のものでも解放軍のものでもない。

赤い制服に白いマントを羽織った姿の剣士。しかしフロウに向かってくるところを見ると、どうやら敵のようだった。フロウもすぐに剣を構える。

マントの剣士は鋭い連続の斬撃を放つ。

ギンギンギンギンッ！！

フロウとマントの剣士、二人のあいだを無数の斬撃がはじける。わずかに表情を険しくするフロウ。

(く……………強い)

キーン

マントの剣士はフロウの斬撃を受け流した。

「なに……………！」

ヒュンッ！

マントの剣士の斬撃がフロウの体をわずかに切り裂く。

「く……………」

フロウは素早く反撃する、しかしヒラリとかわされた。すると横から全く同じ格好の剣士がもう一人、突然現れ、フロウを斬りつける。鋭い斬撃が飛ぶ。

ヒュンッ！

フロウの足がわずかに裂ける。

「な……なんだ!？」

驚くフロウを尻目に、正面の剣士もフロウに襲いかかる。

二人の斬撃がフロウを襲う。

「く……!」

横の剣士の斬撃がフロウの動きに合わせて放たれる。フロウは素早く反応するが、直前で斬撃の軌道が変わった。

「しま……」

マントの剣士の斬撃がフロウをとらえるであろうその瞬間、アールスロウが現れ、斬撃を止める。

アールスロウは正面の剣士をフロウに任せ、横の剣士に斬りかかる。

アールスロウの素早い斬撃。マントの剣士は素早く反応するが、途中、斬撃は軌道を変え、突きへと変化した。それにもマントの剣士は反応しかわしたが、直後アールスロウの素早い蹴りがマントの剣士をとらえた。

マントの剣士の動きが止まる。

ヒュウンッ!!

アールスロウの剣はマントの剣士を切り裂いた。

地面に倒れるマントの剣士。

「アールスロウさん……こいつらは……」

もう一人の剣士と戦いながらフロウが聞く。

「おそらく聖騎士隊だ。一人ひとりが強いぞ、注意しろ」

アールスロウがそう言った直後、さらに三人の聖騎士が現れる。

「く……ッ」

四人の聖騎士の斬撃が二人を襲う。

「フロウさん、アールスロウさん！」

サキも助けに入る。しかしさらに三人の聖騎士が現れる。

「くっ……下がれ！ 囲まれるぞ！」

アールスロウがそう言った直後だった。聖騎士の斬撃がサキをとらえた。宙に大量の血しぶきが飛ぶ。

「ぐ……あ……」

小さな声を漏らすと共に、サキは体勢を崩した。

「サキ……！」

アールスロウとフロウがすぐに助けに向かおうとする、しかし別

の聖騎士達に阻まれる。

サキの前に立つ聖騎士からとどめの斬撃が放たれた。

ヒュンッ！

ギンッ！

聖騎士の斬撃は阻まれた。サキの目の前には特別戦闘部隊の隊長
リーク・ディスクが立っていた。

突然の新手に聖騎士が驚いた一瞬の隙に、ディスクは懷に飛び込
む。

ヒュンッ！

ディスクの高速の斬撃は、一瞬で聖騎士を斬り伏せた。素早く別
の聖騎士達が囲もうとするが、

ヒュンヒュンッ！！

ディスクから速さと力を兼ね備えた強烈な斬撃が放たれる。聖騎
士達は後方へと押し返される。

ディスクはアールスロウ達の方を見た。

「君達は下がれ。聖騎士は我々、特別戦闘部隊が引き受ける」

ディスクの後ろには数十人の剣士が構えていた。

「ですが……」

フロウがすぐに言い返そうとするが、

「よせフロウ」

アールスロウがフロウを止めた。

「ここは彼らに任せよう。俺達は別ルートのフォローだ」

アールスロウは動けないサキに肩を貸し、フロウと共にその場から離れる。途中、フロウはチラッと後ろを見る。敵の後方には四十人以上の聖騎士が控えていた。フロウはグッと歯？みした。

（クソ……このレベルの戦場じゃあ僕はほとんど役に立てない）

司令室に兵士が駆け込んでくる。

「ランクストン総司令。敵は中央大通りの仕掛け爆弾を処理し、中央にも進軍を開始しました！」

それを聞いたランクストンは険しい顔をする。

「く……第一部隊とビルセイルドの軍をすべて動かして止めろ！」

ランクストンがそう言った直後、今度はガルディアが飛び込んでくる。

「総司令。そろそろオレが動いてもいいでしょう!？」

ガルディアは落ち着かない様子だ。ランクストンはイライラした表情でガルディアを見る。

「君はまだだ！ 君は我々の切り札だぞ。ぎりぎりまで動くな！！早く広間に戻れ」

ガルディアはしょんぼりして外へ出ていった。

広間ではアールスロウ達が戻ってきていた。動けなくなったサキを医療班に預けて、再び出撃しようと外へ向かう。

「フロウ、君は北の大通りを頼む。俺は中央へ行く」

「了解しました」

激戦が続くセウスノールの街。その一角を一人の国軍の若い剣士が歩いていた。

「ふんふんふん」

その剣士は鼻歌を歌いながら、まるで散歩でもするかのような軽い足どりで歩いている。

「うおおおおおー！」

前方から解放軍の剣兵が二人、かけ声を上げ、その剣士に斬りかかるうとする。しかし、直前で解放軍兵二人の体が突然裂ける。大量の血しぶきが上がり、二人の解放軍兵はグラリと傾いて倒れた。

レイデル・グロウスは片手で剣をぶらぶら揺らしながら、通りの一角を歩いていた。

レイデルの背後には切り裂かれた解放軍兵の死体が無数に横たわっている。

「さあーで、オレが楽しめる相手はいるかな？」

レイデルは鼻歌交じりに戦場を散歩する。

基地の司令室にディスクが入ってくる。

「……今戦況はどうなっています？」

ランクストンが声を上げる。

「ディスク！ 聖騎士隊は片づけたのか？」

「すみません、半分以上まで減らしたのですが、無理でした。オレ以外の隊員は全てやられました。今は砲兵部隊がなんとか抑えているのですが、長くは持たないでしょう……」

「く……」

ランクストンは険しい表情をする。

「それより戦況は？」

ディスクは机の上の地図を見る。地図の上には様々な印が付けられている。

「中央と北の大通りも押され始めていますね……………ん？」

ディスクは何かに気づく。

「北通りを進む敵、なぜこの進路で移動しているんでしょう。あちらの道の方が広いのに……………」

ランクストンが答える。

「こちらの方がショートカットだからだろう。スピードを優先しているんだ」

「いや…………押してる以上、大回りしてでも物量で攻めた方が圧倒的に有利だ。この敵の選択はおかしい……………」

ディスクは司令室にいた兵士の一人に顔を向ける。

「ガルディアさんと呼んで来てくれないか？」

間もなくガルディアが司令室に入ってくる。

「なんです、出撃ですか？」

「ガルディアさん、ちょっとあなたに意見を聞きたくて」

机の前のディスクがガルディアに手招きする。
机の地図を見るガルディア。

「北側の敵の進路なんですが、どう思いますか？」

ディスクに聞かれて、ガルディアは頭をかく。

「これは……んー、要するに、解放軍に北側に来てほしくないんだな」

「北側に来てほしくない？」

「ああ、こりゃあ………まずいな、たぶん国軍は北東の林に兵を伏せてるぞ。すぐに動いた方がいいな」

「……！」

ディスクは驚いた。すぐにランクストンの方を見る。

「総司令、いま動かしている隊は？」

「あ、ああ、七番隊の第三、第六小隊を動かせる」

「……少し頼りないが、動くしかないか。万一に備えて、北側の守りも固めておいて下さい！」

ディスクは駆け出し、司令室の外へ出た。

広間に出たディスクは小隊を率い、そのまま基地の外へ出ようとした、その時だった、

「ん……？」

広間の脇に座るクロコに気づく。

「クロコ！」

ディスクの呼びかけに気づき、クロコは立ち上がって近づく。

「君は強いんだよね？」

「当たり前だ」

「そうか、なら君も来てくれ」

ディスクと共にクロコは基地の外へ出た。

中央の大通り、その一角でアールスロウは剣を振るっていた。傷だらけの体に鞭を打ち、力強く剣を振るう。

国軍兵を次々と斬り伏せるアールスロウ。その前に長槍を携えたロウレイブが姿を現した。

「貴様は、『千牙の狼』ファイフ・アールスロウだな」

「君は何者だ？」

「アグレス・ロウレイブ」

「『一角獣』か……」

二人は同時に武器を構えた。

先に動いたのはロウレイブだった。間合いの長い鋭い斬撃。

素早く見切りかわすアールスロウ。すぐさまアールスロウは反撃に移る。美しく弧を描く鋭い斬撃。

ロウレイブは素早く反応しかわした。素早く槍を振るうロウレイブ。

それに対抗するアールスロウ。

二人のあいだを無数の斬撃がはじける。

その戦いの中、ロウレイブは軽やかなフットワークで戦う。対してアールスロウは無駄のない洗礼された足運びだ。その二人の間をはじけ合う斬撃は、軌道を次々と変化させる。曲がりくねる斬撃が

二人のあいだを縦横無尽に駆け巡る。

共に高い技術を持つ戦士同士の戦い。

コンビネーション、軌道変化、フェイント、カウンター、二人のあいだで様々な技術の攻防が繰り広げられる。

その攻防の中、アールスロウはロウレイブの斬撃の一つを見切った。

キン

ロウレイブの斬撃は受け流された。体勢を一瞬崩すロウレイブ。アールスロウは懷に飛び込んだ。

ヒュウンツッ!!

アールスロウの強烈な斬撃はロウレイブの肩をわずかに切り裂いた。ロウレイブの表情が怒りに歪む。

「この……!!」

ロウレイブは素早く大振りの斬撃を返した。

ギイイインツ!!

アールスロウがその斬撃を受け止めた、その直後だった。

「ぐ……!!」

脇腹の傷から激痛が走り、アールスロウは思わず体勢を崩した。それをロウレイブは見逃さなかった。

ヒュウンッ！！

ロウレイブの斬撃はアールスロウの体を切り裂いた。後ろに仰け反るアールスロウ。

「これで終わりだ！」

ロウレイブは長槍を振り下ろす。

ヒュウンッ！！

ガアアアッ！！

突如、横から現れたスロディーンが長槍を力任せに弾き飛ばす。長槍はロウレイブの手を離れ、宙を回転しながら戦場へと消えた。

「しまった！」

ロウレイブは素早く後方へと逃げる。

「クソ、武器を失うとは何という不覚。無念……」

ロウレイブは国軍兵の群れへと姿を消した。

「動けますか、アールスロウ」

太い声を出し、スロディーンが手を差し出す。それを取りなんとか立ち上がるアールスロウ。

「ああ、なんとかな……」

「あなたはもう下がってください」

「だが……」

「もうその怪我では戦えないでしょう。あなたは十分戦った。あとはオレ達を信じて下さい」

スロディーンはほほえみを見せる。

「……すまない」

アールスロウは後方へと下がっていった。

それを確認しスロディーンは後方の解放軍兵に呼びかける。

「いくぞ、おまえら！ ビルセイルド兵の力を見せてやれ！！」

「おおー！！」

中央大通りに掛け声が響き渡った。

南の大通り、ここでは聖騎士隊を中心とした国軍がどんどん進軍してきていた。

大通りを守る解放軍兵達は、次々と聖騎士隊に斬り伏せられていく。

「このまま基地を落とすぞ！」

先頭の聖騎士がその声を上げた時だった。恐ろしく速い斬撃がその聖騎士に向けて放たれた。

ヒュンッ！！

血しぶきが舞い、聖騎士は大きな音を立てて地面に崩れ落ちた。他の聖騎士達は驚き足を止めた。

聖騎士隊の前にはミリア・アルドレットの姿があった。

「『戦乱の鷹』ミリア・アルドレットか」

聖騎士の一人がミリアをにらみつけた。

ミリアも聖騎士達を静かににらむ。するとミリアはその群れの中に一瞬で飛び込んだ。

ヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！！！

ミリアから放たれる無数の斬撃の壁。聖騎士達はそれに一斉に反応して距離をとるが、二人の聖騎士が避けきれず斬り伏せられた。

「な……バカな！！」

驚く聖騎士達を尻目にミリアは一瞬で間合いを詰めていく。ミリアの恐ろしく速い斬撃は聖騎士を一人、また一人と斬り伏せていく。その状況に聖騎士達は我が目を疑う。

「な……なんだこいつは！！　ぐあッ！」

ミリアは人知を超えた身のこなしと斬撃で、聖騎士を次々と斬り伏せていく。ミリアの無数の斬撃の壁が消えた頃には、辺りにいた

聖騎士は全員、石畳に倒れ伏していた。

その中をミリア一人だけが悠然と立っていた。

その光景を国軍兵も解放軍兵もただ呆然と立ち尽くして見ていた。

「おい……」

ミリアは解放軍兵の方を向く。

「ここの主力は片づけた。私は北の大通りの主力を片づけに行く。
あとはおまえ達で何とかしろ」

ミリアはそれだけ言うと、サツと後方へ下がっていった。

中央の大通り、ここではビルセイルドのエース、スロディーンが暴れていた。馬のタテガミのような白髪を振り乱し、目の前の国軍兵を片っ端から斬り伏せる。

砲兵部隊がスロディーンを仕留めようとするが、爆炎にも全く動じないスロディーンはあっという間に間合いを詰め、大砲ごと砲兵をめった切りにする。

「こ、こんなやつどうすれば……」

剣兵の一人が怖じ気づきあかずさりをした、その時だった。

「どきなさい」

その剣兵をどかし、一人の剣士がスロディーンの前に現れる。
レイズボーンがスロディーンの前に立ちはだかる。

「あなたが『進撃の白竜』ロザン・スロディーンですか」

スロディーンはレイズボーンをにらみつける。

「白い將軍服……『七本柱』か。名は何と言う？」

「愚民に名乗る名はありませんねえ……」

「……そうか、おまえは『灰の吸血鬼』ワイフ・レイズボーンだな」

スロディーンは大剣を構える。

「ここから先は通さん」

「ホウ……」

レイズボーンはニタリを笑う。

「はぁ……！！」

掛け声と共にスロディーンは突進する。大剣を嵐のように振り回す。

ギュンギュンギュンッ！！

その嵐のような斬撃をレイズボーンは紙のようにユラユラと動き、あっさりとかわす。

「なに……！！」

ヒュンッ！

スロディーンは腹が一瞬で切り裂かれた。

「ぐ……！」

スロディーンは一步下がる。

レイズボーンはスタスタと歩くように間合いを詰めてくる。
それを見たスロディーンはギロッとにらみつける。

「この……！」

ギュンッ！

スロディーンは強力な斬撃。しかしユラリとかわされる。

「くっ……！」

ギュンギュンッ！

スロディーンは大剣を振り回す。しかしレイズボーンにはかすりもない。

ヒュンッッ！！

スロディーンは斬撃に合わせ、レイズボーンから恐ろしく鋭い斬撃が飛ぶ。切り裂かれるスロディーンの右肩。

「っ……っっ」

よろめくスロディーン。顔にはわずかに恐怖が浮かぶ。

レイズボーンはニタリと笑いながら、ゆっくりと間合いを詰める。

「うっ……うわあああッ!!」

スロディーンは捨て身でレイズボーンに斬りつけた。

ヒュンッ!

宙に大量の血しぶきが舞い散ると共に、スロディーンの巨体は大きな音を立て、地面にうつぶせに倒れた。

石畳の床に大量の血がジワジワと広がる。

レイズボーンが、倒れたスロディーンから前方へと視線を移した、その時だった。

「……うっ……うっ……こんな、ところで、倒れる、わけには……」

倒れているスロディーンから、うめくような声が漏れた。

「おや、まだ息があったのですか」

ヒュンッ!

レイズボーンの剣が再びスロディーンの体を切り裂いた。石畳に血が飛び散る。

スロディーンはもうピクリとも動かなかった。

レイズボーンは再び、ゆっくりと前を向く。

「さあ、みなさん、前進なさい。愚かな解放軍に制裁を加えるのです」

中央大通りを国軍が一気に進行する。

北の大通り、そこを進軍する国軍。その先頭にはコールが立ち、立ちはだかる解放軍兵を次々と斬り伏せる。

国軍は、コールを中心に解放軍を蹴散らしていく。

「そこまでだ！」

コールの前にフロウが立ちはだかる。

「またきみか……」

コールは足を止め、フロウの姿をじっと見る。フロウはすでに体の数か所が切り裂かれ、息もわずかに乱していた。

コールが冷静な表情で口を開く。

「もうボロボロじゃないか。それでボクに勝つ気？」

「じゃなきゃ、わざわざ出てこないよ」

「ふーん、まっ、いいけど」

コールは剣を構え、一気にフロウに斬りかかる。

ギイインッ！！

コールの斬撃を受け止めるフロウ。しかし剣圧でわずかに押される。

「く……！」

フロウは素早く後ろに跳んで距離をとると、体勢を立て直して斬りかかる。

フロウは高速の斬撃を連続で放つ。

ヒュヒュヒュヒュンッ！！

コールはそれを見切り、全て紙一重でよける。

ヒュンッ！！

コールのカウンターの斬撃がフロウをとらえた。血しぶきが飛び、膝をつくフロウ。

「く……！」

「もうキレがないね」

膝をついたフロウに向かってコールは容赦なく剣を振り下ろそうとした、その時、ミリアがコールの横から現れる。コールを襲う超高速の斬撃。

ヒュンッ！！

コールはとつさに後方に飛んだが、避けきれず右足がわずかに裂けた。

「なんだ……!？」

ミアはコールに追い打ちをかける。ミアは三発の斬撃を放った。その三発の斬撃は同時に放たれたと錯覚するほどの速さでコールを襲った。

ヒュヒュヒュンツッ!!!

コールはその斬撃を見切った、しかし体がついていかず、一撃を脇腹に受けた。

「く……!」

コールの脇腹から血が流れ、表情が陰しくなる。

(スコア並みのスピード……冗談じゃない、こんなの一人じゃとても相手できない)

コールはサッと国軍の後方へと引いた。

ミアはそれを見届けると、フロウの方へ目を向けた。

「動けるか、フロウ・ストルーク」

その言葉を聞いてフロウはヨロヨロと立ち上がった。

「な……なんとかね」

「なら下がれ、このケガでこれ以上の戦闘はもう無理だ」

「く……」

フロウは悔しそうな表情を一瞬したあと、素直にフラフラと後方へ下がる。

司令室にガルディアが飛び込んできた。

「オレを出させて下さい、ランクストン総司令！」

「またか、 그레이」

「もう我慢できません、ランクストン総司令！ オレは出ますよ」

「前にも言ったように君は我々の切り札……」

「後手ばかり踏むのはもういいでしょう。こちらから動かないと」

ガルディアは前に進み出る。

「いまどこが、攻められてる？」

ガルディアは兵士の一人を軽くにらみながら聞く。

「え……と、南の大通りです。聖騎士達を倒してから、しばらくはしのいでいたのですが、再び崩れ始めて……」

「南の大通りか。では行ってきます、総司令」

「えーい、分かった、早く行け！」

ガルディアは走り去っていった。

セウスノールの東の石門付近、そこにファイナス少将の姿があった。それに気づいた国軍人の一人が話しかける。

「おや、ファイナス少将、戻られたのですか」

「ああ、この年齢で長期戦闘はさすがにこたえるな。レイズボーン少将と代わってきたよ。それより戦況はどうなっている？」

「こちらが有利に運んでいます、もうひと押し足りませんね」

「もうひと押しか……伏兵の使い時かな」

北の大通り、そこではミリアが圧倒的な力を見せていた。ミリアは嵐のような斬撃で、向かってくる国軍兵を次から次へと斬り伏せていく。通りの道幅が少し狭いのも手伝い、ミリア一人で完全に押え込んでいた。

そのあまりの強さに、国軍兵達が後ずさりし始めた時だった。ミリアに向かって、一人の国軍の剣士がゆっくりと歩み寄る。その剣士はニヤリと笑った。

「強そうなのがいるじゃねえか」

レイデル・グロウスがミリアの前に現れた。

北の大通りを守護するミリアの前にレイデルが姿を現した。

レイデルはミリアを見ながらニヤツと笑う。

「おまえ、『戦乱の鷹』ミリア・アルドレットだろ?」

ミリアは表情を変えずレイデルを見つめる。

「誰だ、おまえ」

「オレはレイデル・グロウスだ」

「『消剣の騎士』か……」

「おまえは、オレをどれだけ楽しませてくれるんだろうなあ……」

ミリアは静かに剣を構えた。

それを見てレイデルは笑みを浮かべる。

「やるか、よし……」

レイデルは右に持っていた剣を左に持ち替えた。

「女だしな、ハンデとして……」

レイデルが言い終わらないうちに、ミリアが一瞬で斬りつける。
その速さに驚くレイデル。

「はや……！」

ヒュンッ！！

レイデルは斬撃をギリギリでかわす。ミリアは間髪入れず連続で
斬り込む。

「うわっ！　ちょ……待て……」

ヒュヒュヒュンッ！！

ミリアの斬撃の一つがレイデルの軍服をわずかに切り裂いた。レイ
デルは素早く後ろに飛んで距離を取る。それを追わずにミリアは
足を止めた。

「すまない、話の途中だったな。……ハンデがどうだった？」

ミリアは表情を変えずに言い放った。それを聞いてレイデルが苦
笑する。

「……………言い終わってないからセーフだろ」

レイデルは左手の剣を再び右手に持ち替えた。

「見せてやるよ、オレの本当の剣を」

レイデルは真剣な表情になり、剣を構えた。それに応じミアも剣を構え直す。

戦場で二人は静かににらみあっていた。

先に動いたのはミアだった。一瞬でレイデルの間合いに飛び込む。数発の斬撃が一瞬でレイデルに向かって飛ぶ。レイデルは素早い動きでそれらをかわすが、一発が肩をわずかに切り裂いた。

「チ……ッ！」

レイデルは素早く距離をとる。
離れる二人。

「どうした？ 本当の剣を見せるんじゃないのか」

ミアのその言葉を聞き、レイデルはニヤツと笑う。

「もう見せたよ」

ミアの右肩から血が噴き出る。知らないうちに肩が切り裂かれていた。

「……！！」

ミアの表情が初めて変わった。驚きの表情だ。

「……いつ斬られたか分からなかったか？」

レイデルはなおも笑っている。

ミアは少し険しい表情をして剣を構え直す。
今度はレイデルが動いた。ミアに向け一気に突進する。そのレ

イデルの動きにミリアは目を凝らす。レイデルが間合いに入った瞬間、ミリアはとらえた、レイデルの斬撃を。

空間をまたぐような圧倒的速さの斬撃。その斬撃は今までミリアが見たどの斬撃よりも速かった。

ヒュンツツツッ！

レイデルの斬撃は空を切った。ミリアはレイデルの斬撃を紙一重でかわしていた。

「避けやがった！」

レイデルは嬉しそうに笑う。素早く放たれるミリアの斬撃。

ヒュンツッ！

反応し、避けるレイデル。さらに斬撃を放つミリア。それに応戦するレイデル。

二人の間を雨のような斬撃のつぶてが飛び交い、はじける。

斬撃の速さは明らかにレイデルの方が速かった。しかし、それ以外の全ての速さ……反応、体の動き、俊敏さ……それら全てはミリアの方が速かった。それにも関わらずレイデルは、斬撃の速さだけでそれを押し返した。

常軌を逸した速度と速度のぶつかり合いが続く。

その二人の高速の攻防は、戦場の中でしばしのあいだ繰り広げられた。しかし、その均衡は一瞬で崩れた。

レイデルの斬撃の一つを、ミリアはとらえきれず浴びる。血が飛び、ミリアの脇腹が裂ける。その直後、レイデルもミリアの斬撃を浴びた。胸から血が噴き出る。

デルだが、斬撃速度で無理やり押し返す。

ギィンツ！！

二人の剣が勢いよくぶつかった直後、再び高速の斬撃同士が、辺りを縦横無尽にはじけ飛ぶ。一発の斬撃がレイデルをとらえた。肩を切り裂かれるレイデル。しかし全くひるまない、笑みを浮かべ、構わずミリアに斬撃を放った。

ヒュンツ！

ミリアの腹が切り裂かれる。わずかに表情を険しくするミリア。レイデルは向かいくる斬撃に構わず、懐に向かって飛び込む。斬撃が体を斬り裂こうが、構わず突っ込み、斬撃を放つ。

ヒュンツ！！

レイデルの斬撃がミリアの首筋をわずかに切り裂いた。

「く……！！」

険しくなるミリアの表情。

二人のあいだを無数の斬撃が飛び散った。

レイデルが捨て身の攻撃を行ってすることで、二人の斬撃が次々と互いをとらえる。

互角の攻防を繰り返しているにも関わらず、二人の表情は両極端だった。

険しい表情をするミリア。楽しそうに笑うレイデル。

互いを斬り合うギリギリの攻防が二人の間で繰り返される。

二人の回りを血の粉末が舞い飛び続ける。

そんな中だった。

ドーンッ！！

国軍の砲撃がレイデルの真後ろで爆発する。その爆風によって、レイデルの体がわずかに揺れた、その一瞬だった。

ヒュンッ！！

ミリアの斬撃がレイデルの脇腹を深く切り裂く。

「が……ッ！」

レイデルの表情が一気に険しくなった。脇腹から大量の血が噴き出る。

国軍からさらに数発の砲撃が放たれ、ミリアの回りを爆炎が包む。ミリアは素早く後ろに距離を取った。

レイデルは背後をにらんだ。

「いらねえ援護しやがって……クソ！！あとで殺してやる……！！」

レイデルは脇腹を押さえながら国軍兵の群れの中へと消えた。

その様子をミリアは遠くで見ながら、小さなため息をついた。

空に暗雲が垂れこめてきた、セウスノールの街が徐々に暗くなっていく。

ミリア達のいる北の大通りより、さらに北、街の狭い石畳の道路の一つをディスクが率いる部隊が走っていた。ディスクの隣にはクロコの姿もある。

「おい、その兵を伏せてる林ってのはまだなのか？」

クロコの問いにディスクが答える。

「もうすぐだ」

すると、すぐに石畳の道路が途切れ、前方に林が広がった。林の前でディスクは双眼鏡を取り出し、遠くを見渡す。

「その予想したのガルディアだろ？ 信じられるのかよ」

ディスクの横でクロコがぼやいた、その時、

「ア、アレ！」

兵士の一人が叫んだ。その兵士は南東の方角を指さしていた。クロコは南東を見る。空に不自然な白い丸い煙が浮いていた。

「発煙銃……国軍の合図か。どうやら本当っぽいな」

「いた！」

ディスクが叫んだ。

「国軍の部隊だ！ すぐ前方だ。街に入れるな！」

ディスクは剣を抜き、走り出す。クロコ達もそれについていく。ディスクを先頭に林の中を走っていると、すぐに目の前に国軍の部隊が姿を現す。数百人の部隊だ。

クロコは走りながら、それを見つめる。

「数は思ったより少ない……こっちと同じくらいか」

「散開！」

ディスクの号令と共に、部隊は一気に広がり、林の中で国軍との戦いが始まった。

無数の剣がぶつかり合う。

その中でクロコとディスクは圧倒的な力を見せる。クロコは高速の斬撃を放ち、見る見るうちに国軍兵を斬り伏せる。ディスクも力と速さを兼ね備えた攻撃で国軍兵を圧倒する。

しかし二人の活躍もむなく、クロコとディスク以外の味方は倒れ伏し、気付けば二人が囲まれる状態になっていた。しかし敵の数もだいぶ減っていた。

二人は一瞬背中をつけたあと、別れて国軍兵を次々と斬り伏せる。見る見るうちに国軍兵の数は減り、あと数人にまで減っていた。

「あと少しだ……」

ディスクが目の中の兵士を斬り伏せ、その言葉を放った直後だった。疾風のごとき速さの剣士がディスクの前に現れた。

「な、何だ、この速さ……」

ヒュンヒュンヒュンッ！！

宙に大量の血が飛び散り、ディスクの体は力無く地面に倒れ伏した。

クロコが目の中の剣兵を斬り伏せ、その方向を向いた、その時だった。

クロコは見た、林に立つスコアの姿を。

スコアは氷のような冷たく鋭い視線でクロコを見つめる。

「久しぶりだね、クロコ」

無数の兵士の死体が並ぶ暗い林の中で、クロコとスコアは二人、向かい合っていた。

4 - 18 戦場に響く小さな声

暗い林の中で、クロコとスコアは向かい合っていた。

クロコは緊迫した表情でスコアを見つめる。対してスコアは冷静な表情をしていた。

「スコア……」

「きみと最後に出会ったのはウォーズレイの赤い岩石帯だったね。だいたい半年ぶりか」

「……………」

「あの時、ボクはきみに言ったよね。もし、もう一度君に出会ったら、ボクはきみを斬ると。たとえきみが女の子でも」

それを聞いて、クロコは頭を軽くかいた。

「……おまえは一つ、重大な勘違いをしてるようだから、訂正してやる。オレは男だ」

「……？」

クロコは右手の甲を向けて、黒い指輪を見せた。

「この指輪は呪いの指輪でな。こんな姿をしてるのは、この指輪のせいだ。オレはもともと男なんだよ」

それを聞いてスコアは表情を変えず黙っている。

「まあ、信じる信じないはおまえの勝手だけだな」

「不思議な話だね。だけど、別に関係ないよ。たとえどっちでも、ボクはきみに容赦しない」

「ああ、そうかい」

スコアは鋭く見つめる。

「クロコ、ボクは前にきみに『もう二度と出会わないことを祈る』と言ったことを覚えているかい？」

「ああ、覚えてる」

「だけどボクは、今回は、きみと出会いたいと、戦いたいと思っていた」

その言葉を聞いてクロコは一瞬黙ったあと、口を開いた。

「オレが……フレアを殺したからか？」

「そうだ」

それを聞いて、クロコも鋭く見つめた。

「だけど、おまえもブレッドを殺した」

「……？」

「おまえが分からないのは無理ないだろうな。だけど、確かにおまえは殺した、オレの、オレにとってかけがえのない友達を……」

「……そうか」

スコアは小さく口を開いた。

「……それでクロコ、きみはその復讐のために、ボクと戦うと……？」

そのスコアの問いを聞いて、クロコは一瞬目を閉じた。
クロコの口がゆっくりと動く。

「……いや」

クロコはスコアを強い目で見つめる。

「オレが戦う理由は復讐じゃない。オレはセウスノールの剣士として、そしてオレ自身が生き残るために、おまえと戦う」

「そうか……」

スコアはそう言ったあと、また口を開く。

「ボクも、復讐のためじゃない。これ以上きみに、ボクの大切なものを奪わせないため。ボクの大切なものを守るために、きみと戦う」

スコアはクロコに剣を向けた。クロコもスコアに剣を向けた。二人はにらみ合う。そして同時に口が動いた。

「勝負だ」

静寂が流れたのは一瞬だった。

二人は同時に駆けだした。間合いに入ると共に、二人の剣が同時に動く。

二つの剣は勢いよくぶつかり合った。

ギィィィンッ!!

鋭い金属音が響くと共に、クロコの体が後ろに飛ばされる。

「……この！」

クロコは一瞬で体勢を立て直すが、次の瞬間、スコアが斬りつけた。空気を置き去りにするような高速の斬撃。

ヒュンッ!!

紙一重でクロコはかわした。素早く放つクロコの高速の斬撃。

ヒュンッ!

スコアはあっさりとかわす。すぐさまスコアは数発の斬撃を放つ。クロコもそれに反応する。

ギィンギィンギィンッ!!

三発の斬撃が互いにはじけるとともに、クロコの体が後ろに押される。それに合わせてスコアの斬撃がクロコを追う。

ヒュンッ！！

クロコの肩がわずかに裂けた。

「く……ッ！」

クロコは後ろに下がる。しかしスコアはそれを追撃する。再び放たれるスコアの斬撃。

クロコは反応し、後ろに飛んだが、避けきれず腹を切り裂かれる。

「うっ……！」

（やっぱり半端じゃねえ……！！　ガルディアの特訓がなきゃ、もう殺されてる）

一瞬距離が離れたのも束の間、スコアはどんどん間合いを詰めてくる。

「はあッ……！」

スコアは掛け声と共に、力を込めた斬撃を叩きつけてきた。クロコはとっさに受け止める。しかし、力づくで剣がはじかれ、そらされる。

「しまっ……」

間髪入れずにスコアの鋭い蹴りが飛んできた。

スコアの蹴りはクロコを直撃し、その衝撃でクロコの上半身は後方に仰け反る。

「ぐ……う……」

スコアの蹴りで一瞬意識が歪むクロコ。ハッと気付いた時には、スコアはすでに斬撃を放とうとしていた。

（しまった……やられる……）

その瞬間だった。

クロコの体から強烈な光が放たれた。その光は暗い林を鋭く照らす。

スコアは驚き距離を取った。

光はゆっくりと収まっていく。

光が収まると共に、再び辺りは薄暗くなった。

静かになった林に、一人の声が響いた。

「やれやれ……」

その声は、スコアにとっては聞き覚えのない声だった。

「とんでもないタイミングだな。けど……最高のタイミングだ」

スコアは見た。今までクロコが立っていたはずの場所に立ってい

る少年の姿を。

黒い髪、鋭い眼に浮かぶ真紅の瞳、そして威圧的な雰囲気を持つ少年だった。少年はゆっくりと口を開く。

「まさか……ここで呪いが解けるなんてな」

クロコは鋭い目でスコアを見た。さすがのスコアも戸惑いの表情を浮かべている。

「まさか……クロコか」

「ああ、そのまさかだ。オレも正直驚いてる。けどな……」

クロコは大剣をスコアの方に向けた。

「この姿になったら、ちょっと違うぞ」

クロコがその言葉を発した直後だった、クロコは一瞬でスコアの間に飛び込んだ。

スコアはその速度に驚く。

「な……速い！」

クロコは大剣を力任せに振り下ろした。スコアはそれを受け止めるが、

ギイイイイイインツッ!!

金属音と共にあたりの空気が勢いよくはじけた、その直後、スコアの体が後ろに押された。

「……!!」

スコアの表情がわずかに険しくなる。クロコの真紅の瞳が鋭く光った。

「さあ、こっからが本番だ」

暗い林の中で、少年に戻ったクロコと、スコアは向かい合っていた。近距離で互いに剣を構える二人。一瞬のにらみ合いのあと、互いの剣が同時に動いた。

ギイイインツツ!!

強力な斬撃がぶつかり合った直後、スコアは一瞬でクロコの横をついた。スコアの鋭い斬撃。

ヒュンツ!

クロコは素早くかわした。そのクロコの動きに合わせ、スコアから強烈な速さを持った斬撃が打ち下ろされた。

ヒュンツツツ!!

その斬撃さえもクロコはかわした。一瞬の体の切り返しだった。

(なに……! 筋肉のバネで無理やり避けた!?)

素早くクロコの斬撃がスコアに飛ぶ。

ヒュンッ！！

スコアも負けじと一瞬の反応で避けた。直後、二人から同時に斬撃が放たれる。

ギイイインッ！！

大きな金属音が響き、辺りの空間がはじける。クロコとスコアからさらに無数の斬撃が放たれる。二人のあいだの斬撃は、縦横無尽にはじけ合う。

強烈な力の斬撃がぶつかり合い、高速の攻防が繰り広げられる。速さはスコアの方が上、しかし力はクロコの方が上だった。二人のあいだを、恐ろしく速く力強い斬撃が乱れ飛ぶ。その高速の攻防はしばらくのあいだ続いた。

次の瞬間、

スコアの斬撃の一つがクロコの脇腹をわずかに裂いた。

「く……ッ！」

クロコの表情がわずかに険しくなる。二人の攻防は徐々にクロコの不利な状況へと変化していった。スコアの剣が少しずつクロコをとらえ始める。数発の斬撃がクロコをかすり、わずかに血が飛んだ。クロコは険しさをはつきりと表情に出した。

（これは……ヤバい。今までと体の勝手が違うせいで、アールスロウの技術が生かせない！ イヤでも動きにひずみが生じる）

スコアの蹴りがクロコをとらえた。後ろに押されるクロコ。

（……！！　いままでは……その動きのひずみが変則的な動きになって、いい方向に働いてた……だけど、スコアはもう慣れた。今はもう完全に足を引っ張ってる。技術面の差で、完全に負けてる）

クロコはどんどんスコアに押されていく。

（……いや、違う。それだけじゃない。もともと、元に戻ったとしても、それでもこいつには全然追いついてなかったんだ。それだけオレとスコアの差はでかかったんだ。クソ！）

スコアの斬撃がクロコの足を切り裂いた。

「ぐ……！」

クロコは歯を食いしばる。

「それでも……」

クロコは真紅の瞳を光らせた。

「それでも、負けるわけにはいかねー！！」

クロコは渾身の斬撃をスコアに向けて放った。

キイイイイン

スコアは鮮やかに、クロコの斬撃を受け流した。体勢を崩すクロコ。

「しま……」

ヒュンッッ！！

スコアの剣はクロコの腹を切り裂いた。腹から血が噴き出す。

「う……！」

クロコの体は傾きかけた、しかし寸前で踏ん張り、スコアに向けて斬りつけた。スコアはあっさりと避ける。それに合わせてクロコは距離を取った。

二人は距離を取った状態で動きを止めた。

「クソ……」

クロコの腹から血が流れ落ちる。息もわずかに乱れていた。

「チクシヨウ……こんな所で……死んでたまるか」

クロコは険しい表情で剣を構えた、その直後だった。クロコの体から強烈な光が放たれる。再び光が林を照らす。光がおさまった途端、クロコは感じた。

（視線が低くなってる……って言うよりもこれは……）

クロコは再び少女の姿に戻っていた。

「な……なんでだよ」

クロコの表情はさらに険しくなる。

（じよ、「冗談じゃねえ……すでにこんな傷も負ってるのに、この状況でさらにこの姿に戻ったら……」）

クロコの様子を見て、スコアは冷静な様子で口を開いた。

「終わりだ……クロコ」

その言葉を放った直後、スコアは動いた。一瞬で斬りつけてくる。

「ぐ……ッ！」

クロコは必死でスコアに応戦する。数発の斬撃が二人のあいだではじけ合う。次の瞬間、スコアはクロコの斬撃の一つを見切り、完璧な形でかわすと、クロコの懷に飛び込んだ。

ヒュンッッ！！

スコアの剣はクロコの脇腹を鋭く切り裂いた。血が飛び散る。

「……………！」

クロコは無意識で地面に膝をついた。

（しまった！）

クロコがそう思った時には遅かった。スコアはすでに剣を振り下ろそうとしていた。

（ダメだ、防げ……ない……）

スコアの剣が動き出す、クロコの全身を切り裂く形で……

「スコア……………」

小さな声が、二人から離れた場所から響いた。クロコに触れる前にスコアの剣は止まった。

二人は声の方向を見た。

その方向にはレイアが立っていた。おびえた表情で、スコアの方向を見ていた。

呆然とするスコア。

「レイア……なんできみが……………」

混乱するスコアをよそに、クロコもレイアを見つめていた。

クロコは完全に体が固まっていた。

目を見開き、微動だにしないほどクロコは衝撃を受けていた。自分とつりふたつの姿をした少女。

しかし、クロコが衝撃を受けたのはそれが理由ではなかった。

その少女がまとう雰囲気。

その雰囲気をクロコは知っていた。

その雰囲気はクロコの良く知る、ある人物の雰囲気に酷似していた。

「アピス……………」

クロコは無意識にその名を呼んだ。アピス……それはクロコの妹の名。

その名を聞いた途端だった。レイアは一步下がった。それと共に、レイアの体が小刻みに震え始めた。

「…………いや…………いや、いや」

レイアの真紅の瞳は恐怖に染まっていた。その瞳はいま目の前にある光景を見ている様子ではなかった。

まるで、そこにはない何かを見ているかのようにだった。

まるでフルスロットルの戦場でクロコが過去の出来事を見ていたかのように。

「いやあああああああ！！」

レイアは大きな悲鳴を上げた。その悲鳴が林に響くと共に、レイアは意識を失い、その場に倒れ込んだ。

「レイア！！」

スコアは叫び、レイアに向かって一直線に駆け、すぐにレイアを抱きかかえた。

クロコも体をなんとか起こし、レイアのもとに向かおうとする。

「来るなあッッ！！」

スコアが殺気に満ちた表情でクロコをにらみつけた。
クロコの動きが一瞬止まる。

スコアはレイアを抱きかかえたまま、林の奥の方へと駆けていった。

クロコはとっさに声を出す。

「待て！ 待つんだ、頼む、待ってくれ！！」

スコアの姿は林の奥へと消えていった。

クロコはそれを追おうとするが、体が言うことを聞かず、ヨロヨロと地面に手をつく。

「待って……くれよ………クソ……チクショウ………」

林に小さな雨が降ってきた。

落ち葉に落ちる雨音の中、クロコは独り、林の中でしゃがみ込んでいた。

4 - 19 守る者

弱い雨が降っていた。

セウスノールの東の荒野、そこにある国軍の本陣。

「動ける兵士はどんどん行けー！！　いまより総力を上げて解放軍を潰しにかかるぞー！！」

国軍の上官の声が響き渡る中、本陣にいる兵士達は次々とセウスノールの街に向けて駆け出していく。

遠くから無数の爆音が響く中、その本陣へスコアがレイアを抱きかかえた状態で姿を現した。レイアは意識を失っていた。

スコアはゆっくりと本陣の中心付近へと進んでいく。そんな中だった、

「スコア……………」

レイアが薄く目を開けて、スコアの名を呼んだ。

「レ、レイア！？　良かった……………気がついたんだ。具合は大丈夫？　どこか悪くない？」

「うん……………大丈夫」

スコアはレイアの様子を見てホッとする。

「立てる？」

スコアがそう質問すると、レイアは小さくうなずいて、スコアの手から下りて、地面に立った。

「大丈夫？」

「うん……」

「レイア、すまない。ボクはすぐに戦場に戻らないと……」

「うん……」

「ここから動かないでね。絶対に動かないでね」

その言葉を聞いて、レイアは小さくうつむいた。

「……ごめん……ごめんね、スコア」

「そう思うなら、絶対に動かないで。もう、危ない行動はしないで……約束してくれる？」

スコアはレイアをじっと見つめた。するとレイアもスコアを見つめる。

「約束する」

それを聞いてスコアはほえんだ。

「ねえ、スコア。スコアも約束してほしい」

「何を？」

レイアはスコアをジッと見つめた。

「必ず戻ってきて」

「ああ、約束する。必ず戻ってくる」

「うん……」

「必ず戻ってくる、だから、安心してここで待っていて……」

「分かった。わたし、ここで待ってるから」

「うん」

スコアはもう一度ほえんだ。そしてセウスノールの街に目を移す。その表情は真剣なものへと変わった。

スコアは戦場へ向けて駆け出した。

赤い平屋根の建物が立ち並ぶセウスノールの街並みに、弱い雨が降りしきる。

そこでは、全ての兵力を投入した国軍が、一気に解放軍を攻め落とすにかかっていた。

南、中央、北の三つの大通りから攻める国軍の攻撃は、激しさを増していく。

北の大通りでは、次々と襲い来る国軍兵をミリアが次々と斬り伏せていた。レイデルに受けた傷口の痛みには耐えながら、息を乱し、必死で剣を振るう。

ミリアの活躍で、解放軍は国軍の激しい攻撃に何とか対抗していた。

南の大通りでは、国軍の剣兵の集団が次々と解放軍兵を斬り伏せ、基地へと迫っていた。

「よし、基地は目の前だー！　どんどん進めー」

先頭の兵士がそう声を出した、その時だった。兵士達の目に、前方に立つ一人の解放軍人の姿が飛び込んできた。

その軍人の存在に気付いた途端、国軍全体が足を止めた。

その軍人の左手には巨大な黒剣が握りしめられている。

「ま、まさか……」

グレイ・ガルディアが国軍の前に立ちはだかる。

「く……『黒の魔将』……」

ガルディアは国軍の群れに飛び込んだ。その直後、数人の国軍兵が宙を舞う。

ギュオンギュオンギュオン！！

ガルディアが黒剣をひと振りすることに、数人の剣兵が血しぶきと共に弾き飛ばされる。

すぐに銃兵が構えるが、一瞬で間合いを詰められ、あっさり斬り

伏せられる。砲兵部隊が仕留めようとするが、大砲ごと斬り伏せられる。

大通りの中央でガルディアは鬼神の如く暴れまわった。国軍からは次々と兵が送られてくるが、瞬く間に斬り伏せられていく。

そのあまりに激しい攻撃に、国軍兵達はガルディアを目の前にしたまま動けなくなっていった。

「ば、化けものだ……」

一人の兵士がそうつぶやいた。

ミリアとガルディアによって、左右のルートは何とか守られていた。

しかし、中央のルートからはどんどん国軍が進行する。もっとも広い中央通りには、もっとも多くの国軍兵が投入され、解放軍は為す術なく攻め込まれていた。

それによって徐々に混乱していく解放軍。

その混乱はついに基地内にまで伝わってきた。

兵士達が騒がしく走り回る基地内に、傷だらけのクロコ・ブレイリバーは何とか戻ってきていた。ヨロヨロと歩きながら医療班のいる場所まで向かう。

クロコの回りを兵士達の混乱の聲が飛び交う。

「中央が押されてるぞー！」

「いいから動けるやつはどんどん行け！！ このままじゃ攻め落とされるぞ！」

「大砲はもうないのかー！！」

兵士達の大声が響く中、クロコはケガ人の集まる、広間の端へと歩いていった。その時クロコは見た。多くのケガ人達が並べさせられている中に、深い傷を負い寝ているサキの姿を。サキだけではない、フロウやアールスロウの姿もあった。皆がすでに動けないほどの傷を負っていた。それを見てクロコは辛そうに眉を寄せる。

広間へランクストン総司令が下りてきた。

「中央が押されているぞ！！ 今基地にいる者はすべて中央へ向かえ！！ このままでは落とされるぞ！！」

ランクストンは並々ならぬ形相で大声を上げながら広間を歩く。

「中央さえ……中央さえ守り切れば勝てるんだ！！ 誰か……誰か止められる者はいないのか！！ ディスクはどこへ行った！？ スロディーンは！？ アールスロウは！？」

ランクストンの緊張はそのまま、今の深刻な状況を反映していた。動けないケガ人達の表情が見るうちに不安に染まっていく。

そんな中、ソラは混乱する広間を、不安げな表情で廊下からのぞき見ていた。

ふと広間を歩くクロコの姿を見つける。包帯をぐるぐるに巻き、ひどいケガをしていることが一目で分かった。

「クロー！！」

ソラはクロコに駆け寄った。

「クロ……こんな……ひどいケガ……」

ソラはもう涙声になっていた。

「大丈夫だ、もう応急処置は済んだ」

クロコはそう言って、基地の外へと歩き出そうとする。それを見てソラがクロコの服の袖をつかむ。

「待つてクロ！ どこに行こうとしてるの！？」

「……中央通りに行く。いま大変らしい」

「ダメだよ！ ひどいケガしてるじゃん！ 死んじゃうよ！！」

ソラは泣きわめくような声で言った。

「それでも、行かなきゃ、ここが落ちちまう」

「行かないで……お願いだから」

その言葉を聞いて、クロコは一瞬黙った。

「……サキも、フロウも、アールスロウも、もう動けない。だけど、オレはまだ動ける。だから行かないと……」

「でも……だって……」

ソラの目には涙がたまっていた。それを見てクロコはソラに向け

て、ゆつくりと笑みを見せた。

「なあ、ソラ。オレ、元の姿に戻れたんだ。少しのあいだけだったけど……」

クロコは左手の甲を向けた。左手の白い指輪にはヒビが入っていた。

「たぶん、呪いに負けちまったんだな」

クロコが指輪をチョンとつつくと、白い指輪は碎け散り、床へ落ちた。

「悪いなソラ。楽しみにしてたのに、おまえに元の姿、見せてやれなかった……」

「クロ……」

「でも大丈夫だよな。また、探せばいいんだ、呪いを解く方法を。それでその時、おまえに元の姿、見せればいいんだ。だから待ってくれ……ちょっと行って、すぐ戻るから」

「でも……」

「いつも言ってるんだろ。オレが戻るのは当然だから、何も心配すんなって」

クロコは再び歩き出した。袖をつかむソラの手が自然と離れる。

「守りたいんだ、ここにいる仲間も、おまえも、だから……行く」

クロコは基地の外へと歩き出した。

中央の大通りでは国軍が基地の目と鼻の先にまで迫っていた。

「進めー！！」

駆けつける解放軍兵の集団をなぎ払い、国軍はどんどん基地へと迫る。

「あと少しだぞ！ やつらの基地を攻め落とせー！！」

その声が響いた直後だった。先頭を走る国軍兵の目に、中央に立ちはだかるクロコの姿が飛び込んだ。

ヒュンッ！！

一瞬だった。先頭の兵士をクロコが斬り伏せる。その直後、クロコから嵐のような斬撃が放たれる。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

クロコの高速の斬撃は、辺りの剣兵を次々と斬り伏せていく。

「大砲だー！ 大砲で仕留めろー！！」

すぐに国軍の砲兵部隊が駆けつける。クロコに向かって無数の砲撃が放たれる。クロコはそれを紙一重でよけ、一瞬で間合いを詰めた。

クロコは剣を振り回し、砲兵部隊をあつという間に全滅させた。体から血が飛ぼうが、息が乱れようが関係ない、クロコは必死で剣を振るい、目の前の敵を次々と斬り伏せていった。その猛烈な攻撃に、勢いづいていた国軍の前進が、ついに停まった。

「つ……強い」

国軍兵の一人がそうぼやいた。

国軍の集団を立ち塞ぐクロコの体からは炎のような強烈な気迫が放たれていた。クロコを囲む国軍兵達が一步退く。

クロコは剣を構え、国軍の集団をにらんだ、その時だった。目の前の国軍の集団が割れ、クロコの前にワイフ・レイズボーンが姿を現した。

レイズボーンは濁った瞳でクロコをじっと見つめる。

「ずいぶん元気のいいのがいると思ったら、あなたでしたか」

レイズボーンはニタリと笑った。

セウスノールに降る雨が少しずつ強くなっていく。

4 - 20 目覚め

強い雨が降りしきるセウスノール。

南の大通り、ここではグレイ・ガルディアが圧倒的な強さを見せていた。ガルディアが剣を振るうことに、剣兵や大砲の破片が宙を舞う。

ガルディアは大通りの中央にズシンと立ち塞がり、少しでも前に出る国軍兵がいれば、あつという間に吹き飛ばした。

ついに国軍兵達はガルディアから一定距離を取ったまま動くことがでなくなつた。

「こ……こんなやつ、どうすればいいんだよ」

国軍兵の一人がそうぼやいたその時、一人の剣士がガルディアに向け、ゆつくりと近づいていく。

スコア・フィードウッドがガルディアの前に現れた。

「『瞬神の騎士の再来』か」

「……ここを通してもらう」

その言葉を聞き、ガルディアはニツと笑う。

「やってみな」

スコアが駆け出した。

ギィィィンツッ!!

二つの刃がぶつかり合う。

中央大通り、大砲の爆音が響く中、その中央でクロコとレイズボーンは向かい合っていた。

レイズボーンはニヤリと笑う。

「お久しぶりですねえ、スロンヴィアの生き残り……」

クロコは無表情で黙っている。

「無愛想な方ですね、もっと喜んだらいいものを……せつかくの復讐相手に出会えたというのに」

レイズボーンは馬鹿にしたような笑いを浮かべる。

クロコはそんなレイズボーンを一瞬にらんだあと、静かに笑みを浮かべた。

「悪いな……いまそこどころじゃないんだ」

クロコはレイズボーンをキツとにらんだ。

「オレの後ろにいるやつらを守るため……そのために剣を振るわなきゃならないからな」

クロコはレイズボーンに剣を向けた。

「まったく……農民どもの命などに、守る価値がどれほどあるのか」

レイズボーンは剣を構えた。

雨の音が響く中、二人は静かににらみ合う。

クロコが一気に駆けだした。鋭くレイズボーンに斬りかかる。

ヒュンツッ!!

クロコの斬撃を、レイズボーンはユラリとかわす。しかしクロコはさらに連続で斬撃を放つ。

ヒュンヒュンヒュンヒュンツッ!!

クロコの高速の斬撃を、レイズボーンはユラユラとした動きで全てかわす。

クロコの動きに合わせ、レイズボーンの斬撃が放たれる。その斬撃は一瞬でクロコに向かってくる。

ヒュンツッ!!

素早い反応で紙一重でかわすクロコ。

「ホウ……かわすとは」

クロコはすぐさま斬りつける。レイズボーンもそれに反応し斬撃を放つ。

ギィィィンツッ!!

二つの斬撃がぶつかり合った直後、二人は同時に後ろへ飛ぶ。
二人の距離が離れた。

レイズボーンはクロコを見つめる。

「感心しました。ここまで戦えるとは……牛の様に突進するしか能がないと思っていました」が

「なめんなよ。オレに技術を教えたのは誰だと思ってんだ」

「まあ……それでも所詮は農民の剣技。たかが知れていますがね」

その言葉を聞いて、クロコは一瞬黙ったあと、口を開いた。

「おまえ……農民農民うるさいヤロウだな。オレ達とおまえの何が違うつて言うんだよ」

レイズボーンは馬鹿にしたように笑う。

「違いますよ、明らかにね。我々貴族は優秀な血筋と、高い教養を身に付けているのですよ。あなた方とは能力そのものが違うのです」

その言葉を聞いて眉を寄せるクロコ。

「まあ……農民や平民の中にも多少は優秀な者はいますがね。それは認めましょう。しかし、ほんの一握り……その一握りを認めるために、他の大多数のゴミを認めることなど到底できはしませんよ」

クロコは小さくため息をついた。

「……オレは今まで、いろんなやつに支えられて生きてきた。

おまえの言う、能力とか優秀とか、何について言ってるのかよく分からねーが、少なくともオレを助けてくれた力は、それとは何の関係もないだろうな。まあ一つ分かったことは……」

クロコはレイズボーンに剣先を向けた。

「やっぱり、オレとおまえは相容れねえ。絶対にな」

「農民如きが私の考えを理解できるとは、初めから思ってたはいませんよ」

二人は同時に剣を構えた。

駆けだすクロコ。レイズボーンの間合いの直前で左右に俊敏に動きかく乱する。

クロコはレイズボーンの横を一瞬でついた。それと同時に放たれるクロコの斬撃。

ヒュンッ！！

レイズボーンはユラリとかわす。

「く……！」

クロコはさらに一步踏み込み、高速の斬撃を放った。

ヒュンッ！！

それでもあつさりとかわすレイズボーン。すぐさまカウンターの斬撃が恐ろしいほどの速度で返ってくる。

ヒュンッ！

クロコの肩が切り裂かれ、宙に血が舞った。

「うっ……！！」

クロコは後ろに飛んで距離を取った。険しい表情をする。

（避ける技術と、反撃の技術がとんでもなく高い……だが落ち着け……相手は防御中心だ、こっちから攻めない限りは……）

「何か勘違いをしていませんか？ あなたは今こう思っていることでしょう」

レイズボーンは笑みを浮かべながら口を開く。

「相手の戦術は所詮、防御主体。こちらから攻めない限りは怖いことはない……と」

「……！！」

レイズボーンは剣を構える。

「ですがあいにく、私の崇高な剣技はそこまで浅くはないのですよ。それを今からお見せしましょう」

その言葉を発した直後、レイズボーンは一気に近づいてくる。ユラユラと流れるような変則的な動きでクロコの間合いに入ってくる。

「……!!」

その変則的な動きから、クロコの予想と反したタイミングで、鋭い斬撃が飛んでくる。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ!!

鋭利な斬撃の嵐がクロコを襲う。クロコは避けきれず、一撃を脇腹に浴びる。脇腹は裂け、血が噴き出た。

「うっ……」

クロコは後ろへと下がりながら、その斬撃の嵐に対抗する。下がるクロコを見ながら、笑みを浮かべるレイズボーン。

「さあ、選びなさい。逃げて仕留められるか、攻めて返り討ちにあうか」

「く……ッ!」

レイズボーンの斬撃の一つをクロコがかわした瞬間だった。

クロコは一步、前に踏み込んだ、と同時に渾身の斬撃を放つ。それと同時にレイズボーンからも鋭い斬撃が放たれる。

二人の斬撃は交差した。

ヒュンッ! ヒュンッ!

戦場に、二つの風切り音が響いた。

二人がほぼ同時に剣を振り抜いた瞬間だった。

戦場に血しぶきが散った。

クロコの腹は切り裂かれていた。

「ぐ……うう……」

クロコは苦しそうに後ずさりする。レイズボーンは追わずクロコの苦しむ様子を楽しそうに眺めていた。

クロコの血が雨と共に石畳に流れ落ちる。クロコは傷口を押さえながら苦しそうに息をする。

レイズボーンはニタリと笑う。

「さあ、後悔しなさい。農民風情が、傷だらけの状態でこの私に挑んだことを」

レイズボーンはこの状況を味わうように、一步一步ゆっくりとクロコに歩み寄ってくる。

その状況の中、クロコの視界が徐々にかすむ。

（こんな……こんな所で、倒れるわけには……いけないんだ）

クロコの息がさらに乱れてくる。

（オレの後ろには、守らなきゃいけないやつらがいるんだ……ここを守るやつは……オレしか……いないんだ……）

レイズボーンの姿が目の前にまで迫っていた。

（こんな所で負けられるか……！！）

レイズボーンから容赦ない斬撃が放たれた。

ヒュンツッ!!

風斬り音が一つ、戦場に響いた。

レイズボーンの剣は静かに振り抜かれていた。

(……………なんだ?)

我が目を疑うレイズボーン。クロコの姿が消えた。

レイズボーンはすぐさま気づく、はるか後方に立つクロコの姿を。

(どういうことだ……………? いつの間にあんな遠くに……………)

クロコは静かにレイズボーンを見つめていた。冷静な表情でゆつくりと剣を構える。その瞬間だった。レイズボーンは驚いた。自分の間合いにいつの間にかクロコが立っていた。クロコから鋭い斬撃が放たれる。

「な……………速い!」

ヒュンツッ!!

レイズボーンは紙一重で避けた。しかし、レイズボーンの予想よりもはるかに速く二発目の斬撃がクロコから放たれる。

ヒュンツッ!!

レイズボーンの肩が裂けた。血が飛ぶ。

「な……………なんだと!?!」

レイズボーンはすぐに後ろに飛ぶ。クロコは追わず、その場に静かに立っていた。

クロコの真紅の瞳が、薄く光り輝く。

「不思議な気分だ……体もボロボロで、さっきまで視界がかすんでいたのに」

……才能の目覚め、それは一瞬。

「今は、全く負ける気がしない」

クロコの体から、今までにないほど強烈な燃えるような気迫が放たれていた。

レイズボーンは不快そうにクロコをにらんだ。

「負ける気がしない？ 私を前によくもそんなことが言えたものですね」

クロコは静かにレイズボーンを見つめた、その直後、クロコは疾風の如く速さでレイズボーンへと突進した。一瞬でレイズボーンの横をつく。

「く……！」

レイズボーンはすぐさま反応するが、気付けば、クロコは逆をうっていた。

ヒュンッ……！

クロコの剣はレイズボーンの足を切り裂いた。

「ぐ……！ おのれえ！」

レイズボーンから鋭利な斬撃の嵐が飛ぶ。しかしクロコはその斬撃を信じられないほどの速さで難なくかわした。レイズボーンの斬撃に合わせてクロコの斬撃が放たれた。

ヒュンッ！！

レイズボーンの肩が裂ける。

「おのれ……おのれ……」

レイズボーンは怒りの表情を浮かべた。

「農民如きがああッ！！」

レイズボーンは一步踏み込んだ。それに合わせクロコも一步踏み込んだ。先に斬撃を放ったのはレイズボーンだった。高速の斬撃がクロコを切り裂くその瞬間、

ゴッ！

クロコの蹴りがレイズボーンの腕ごと剣をそらした。クロコの剣が勢いよく振り下ろされる。

ヒュンッッ！！

レイズボーンの全身が裂け、宙に大量の血が舞い散った。レイズ

ボーンは声も上げず、後方へとのけぞりながら、大きな音を立てて倒れ込んだ。

強い雨が降る中、動かなくなったレイズボーンを、クロコは一瞬だけ静かに見つめた。

小さな息を一つ吐いて、クロコは再び前を向いた。

（まだまだ……まだ、終わってない）

クロコはよろめく体を必死で立て直し、再び剣を構えた。レイズボーンが倒れると共に、クロコの近くにいた国軍の剣兵達も再び構え始めていた。クロコは国軍兵の群れに突進した。

クロコの体は風のように大通りを動き回り、そこから放たれる閃光の如き斬撃は、大通りにいる国軍兵を一瞬にして斬り伏せていった。

（ここは……オレが守る！）

南の大通り、強い雨が降り続く中でガルディアとスコアの戦闘は続いていた。絶え間なく続く斬撃同士のぶつかり合い。大通りを爆発するような金属音が響き続けていた。

「はあっ！！」

ガルディアが掛け声と共に強烈な斬撃を振り下ろした瞬間だった。それを受け止めたスコアの体が後ろに押される。

「く……！」

体勢がわずかに崩れたスコア、その懷にガルディアが一瞬で飛び込み、強烈な蹴りを叩きつけた。

「が……ッ……！」

スコアの体は後ろに吹き飛ばされる。すぐさま体勢を立て直し、構えるスコア。

前方にはガルディアが剣を構えて立ち塞がる。

（クソ、強過ぎる……）

スコアが険しい表情をした、その時だった。

パンパンパンパンパン！！

国軍側から撤退の合図が鳴った。
驚くスコア。

「な、なに……！？」

スコアは呆然とした。

「ま……負けた……のか？」

スコアの後方にいた国軍兵も驚いていたが、あきらめる様に次々と下がっていく。スコアも共に下がろうとした。しかしその時気付いた、ガルディアから放たれている鋭い気迫がみじんも緩んでいな

いことに。

ガルディアはなおもスコアをにらみつけていた。

「悪いが逃さねえよ。ケイルズヘルの戦いでおまえを逃がした時、オレはすぐに後悔したよ。あの時潰しておけば良かったってな」

ガルディアはなおも戦いを続けようとしていた。

「おまえはまだ若い。おまえが将来ディアルミたいになる前に、いま、ここで、潰させてもらっ」

スコアの表情が険しくなる。

ガルディアは一気にスコアに向けて突進した。スコアに向けて黒剣を振り回す。

ギンギンギンッ！！

ガルディアの斬撃を受け止めることにスコアの体が押される。

「く……！！」

スコアはガルディアの斬撃の一つを素早くかわすと、一瞬でガルディアの横に回り込んだ。スコアから放たれる数発の斬撃。

ヒュヒュヒュンッ！！

ガルディアは瞬間の反応ですべて避けた。その直後、ガルディアはスコアの懷に飛び込んだ。

「……！！」

スコアは素早く鋭い蹴りをガルディアに向けて放った。蹴りはガルディアを直撃したが、その大きな体はビクともしない。

ギョオンッツ！！

ガルディアの黒剣がスコアの体をとらえた。宙に血が飛び散り、スコアの全身が裂けた。

「ぐ……あ……」

スコアは嗚咽のような声を漏らしたが、すぐにキツとガルディアをにらみつけ、素早く斬撃を返した。その斬撃をガルディアがかわしたと同時にスコアは後ろに跳んで距離を取った。ガルディアは足を止め、スコアを見つめる。

スコアの体から大量の血が流れ落ちる。傷は浅くはなかった、スコアは苦しそうに息をする。

「終わりだ、スコア」

ガルディアはそう言って、ゆつくりと歩み寄ってくる。スコアは歯を食いしばる。

（こんな……こんな所で、死ぬわけにはいかない）

ゆつくりと近づくガルディア。

（レイアと約束したんだ、必ず戻ってくるって。まだ、ボクには守らなきゃいけないものがあるんだ……ボクが死んだら、何も守れないじゃないか……！！）

スコアは強く剣を握りしめる。

ガルディアは剣を構え、スコアに向かって斬り込もうとした。しかし、すぐに動きを止める、そして、驚いた。

ガルディアは感じた、周りの空間を凍てつくような冷気が支配しているのを。

（なんだ……これは？）

凍えるような感覚だった。ガルディアは一体何が起きたのか一瞬分からなかった。しかし、すぐに気付く。

（これは……スコアの気迫！？）

ガルディアがそれに気づいた瞬間だった。ガルディアの体が突然裂けた。

「……！！」

宙に血が舞った。気付けばガルディアの目の前に立つスコア。その剣はすでに振り下ろされていた。

「なに……！！」

ガルディアが声を漏らした直後、スコアの姿が消えた。ガルディアは完全にスコアを見失った。次の瞬間、ガルディアはスコアに横をつかれたことに気づく。その直後に放たれたスコアの斬撃は、ガルディアですら反応できないほどの速さを持っていた。

ヒュンツッ！！

血が飛び散り、ガルディアの肩が切り裂かれた。

「ぐ……！」

ガルディアは後ろへ下がった。

スコアはゆつくりと剣を構え直し、ガルディアを静かに見つめていた。スコアから放たれる凍てつくような冷たい気迫。

それを感じ取ったガルディアは、体の芯から恐怖を覚えた。

（こんな恐ろしい気迫、初めてだ……。そうだったんだ、こいつもクロコと同じだったんだ。こいつの才能も、まだ目覚めちゃいなかった。それがいま、目覚めちゃったんだ）

ガルディアは険しい表情で剣を構えた。

「うおおおおッ！」

ガルディアは突進し、スコアに向けて暴風のような斬撃を放った。

ギュオンギュオンギュオンツッ！！

ガルディアから放たれる無数の斬撃は、スコアにかすりさえしない。次の瞬間、

キン

斬撃の一つが、スコアによって受け流される。ガルディアの体が

わずかに流れた。

ヒュンツ！！

スコアの剣は、ガルディアの全身を切り裂いた。
大通りに大量の血が飛び散る。

ガルディアの体が、ゆっくりと傾いた。

石畳に膝をつくガルディア。顔を上げたガルディアの目に飛び込んできた光景は、スコアが自分に向けて剣を振り下ろそうとしている姿だった。

ガルディアは静かに悟った。

（オレはどうやら……………ここまでみたいだな）

ガルディアは、静かに目を閉じた。

ヒュンツツ！！

スコアの剣はガルディアの体を深く切り裂いた。

ガルディアの体はゆっくりゆっくりと後ろに傾いていった。

ガルディアの脳裏に、最後に、ある過去の光景がよぎった。

ベッドの上のガルディアは、幼いクロコの頭を優しい手つきでなでた。クロコは嬉しそうに笑っていた。

（ごめんな、クロコ……………もう、守ってやれない……………）

雨が降りしきる大通りの石畳に、大きな水しぶきを立て、ガルデ
イアの体は倒れ込んだ。

4 - 21 さようなら

セウスノールの街から次々と国軍兵が撤退していく。

セウスノール基地広間には、傷だらけのクロコがヨロヨロと戻ってきた。

「クロツー!!」

ソラが気づき、すぐに駆け寄ってくる。クロコはソラの姿を見て、安心したようにガクツと膝をついた。

ソラはクロコの前まで来て、しゃがみ込む。

「クロ、ひどいケガ……」

「大丈夫……さっきまで大暴れしてたぐらいだ」

クロコはそう言って、ソラを安心させるようにほほえんだ。それを見て、ソラの体が震えた。

「良かった……戻ってきて、くれて」

ソラがその言葉を発した直後だった。クロコの顔から一粒の涙がこぼれ落ちた。

「クロ……?」

その様子を見て、ソラは戸惑った。
クロコは小さく口を動かす。

「……生きてたんだ」

「え……?」

「アピスが…… オレの妹が、生きてんたんだ」

クロコの声は上ずっていた。目からはポロポロと涙がこぼれ落ちる。

「オレの家族が……生きてたんだ……」

「クロ……」

戦いの終わりと共に、戦場では勝利の喜びに浸る兵士が騒ぎ始めていた。ランクストン総司令は気が抜けたようにその場でボーッと立っていた。疲れ切った表情のミリアも戻ってきた。

広間にいる皆が安堵の表情を浮かべた、その時だった。

広間に一人の兵士が駆け込んできた。

「大変だ!!」

兵士は広間全体に響くような大声で叫ぶ。

「ガルディアが……グレイ・ガルディアが戦死した!!」

その言葉と共に、広間全体が一気に静まり返った。
多くの者が自らの耳を疑った。

フロウもサキもアールスロウもソラもランクストンもミリアも呆然とした表情をする。

先ほどまで泣いていたクロコも、叫んだ兵士の方角を見つめたまま固まっていた。

「ウソだ……………」

クロコは小さくつぶやいた。

グレイ・ガルディアの戦死。その報告は、勝利の歓喜を一気に冷ますには、十分すぎるほどの衝撃を持っていた。

数日後の夜、セウスノールから東の草原で、撤退した国軍はテントを張っていた。

テントの外で数人の兵士が話をしている。

「解放軍の追撃はないようだな」

「ああ、あっちもいっぱいいでそころじゃないんだろ。
オレ達だって同じさ。このまま東へと逃げてくことになるだろうな
占領した基地も放棄するらしい」

「数日前とはえらい違いだな…………クソ、あと少しで解放軍を倒すと

ころだったっていうのに」

そんな兵士達が話す近くのテントの一つ、その中ではレイアが独りきりで座っていた。

テントの入り口が開かれ、中に眼鏡をかけたスコアが入ってくる。体には包帯が厚く巻かれていた。

「レイア」

レイアはスコアの方を向く。

「スコア……」

「体の調子はどう？」

「うん……大丈夫」

スコアはレイアに向かい合う形で座る。レイアの目を真剣な表情で見つめる。

「聞かせてくれないかい？ どうしてあんな所にいたのか」

それを聞いて、レイアは小さくうつむく。

「今回の戦い……すごく危ないって基地で聞いて……そうしたら、急にどうしようもなく不安になって……そのとき、軍用の馬車に大砲が積まれてるのを見つけて……気付いたら、その馬車の中に飛び込んだ」

それを聞いてスコアは一瞬あぜんとする。レイアは話を続ける。

「そのあと、スコアの作戦の内容を聞いて……」

「それで、ボクを追いかけてきたのか」

「ごめんなさい……」

「いいんだ、レイアが無事ならそれで」

レイアはうつむいたまま黙った。少しのあいだ静寂が流れたあと、スコアが口を開く。

「正直、きみがあそこで倒れた時、びっくりしたよ。もう……あのまま目を覚まさないかと思った」

「ごめんなさい……」

「いったい……どうしたの？　なんで倒れたか、自分では分かる？」

それを聞いてレイアは黙った。

「わ、分からないならいいんだ」

「うつん、分かる」

「え……」

「ねえ、スコア。わたしが幼い頃の記憶がほとんどないって言ったこと覚えてる？」

「うん、覚えてる」

「その頃の記憶が戻ったの」

「記憶が……？」

「レイアっていう名は、わたしの本当の名前じゃない。それはわたしを助けてくれたおじさんとおばさんが、記憶を失ったわたしにくれた名前だった。わたしの本当の名はアピス……アピス・ブレイリバー。スロンヴィアに住んでいた農民の子」

それを聞いてスコアは衝撃を受けた。

「ブレイリバー……スロンヴィア……まさか……クロコの……！」

スコアの言葉を聞いてレイアは驚いた。

「どうしてお兄ちゃんの名前を知ってるの……！？」

「お兄ちゃん……そうか、そういうことだったのか。クロコのあの話は本当で……だからきみの姿は……まさか、こんなことが……」

スコアはしばらく呆然としたあと、小さくため息をついた。

「レイア……いやアピス。教えるよ、きみの兄さんについて……すべてを」

スコアは話した。フランセールでのクロコとの出会い、戦場で再開したこと、そして先ほどの戦いのことを……

その話を聞いたアピスはあまりの驚きで固まっていた。

「こんな運命が……あるなんてね。ボクときみの兄さんが殺し合っていたなんて」

スコアは小さく言った。

アピスはなおも呆然と固まっている。

その様子を見てスコアは立ち上がる。

「このテントはきみが一人で使うといい。もし何か用があったら隣のテントに来てくれ、ボクは、そこにいるから……」

スコアは静かな口調でそう言ったあと、テントの外へと出ていった。アピスは独り、テントの中で座ったまま動かなかった。

隣のテントの外で、スコアは夜空を見上げながら、何かを考えていた。

「スコア！」

突然名を呼ばれ、見ると、コールが近づいてきていた。

「コール……」

「やあ、ケガは大丈夫」

「なんとか……コールは？」

「ボクはまだけっこう痛い」

「そうかい」

スコアは笑った。コールが隣に立つ。

「あの子はどうしたの？ クロコとそっくりな子」

「隣のテントにいるよ」

「謝らなきゃ、驚いて剣を向けて驚かせちゃったから……」

「今はやめといてあげて……色々あって、混乱してるから」

「……うん、分かった」

二人は雲だらけの夜空を見上げる。

「ねえ、スコア。何考えてたの？」

「……少しね、自分のことについて」

「自分のこと？」

「うん」

スコアはゆっくりと話します。

「ボクは、今まで、自分の大切なものを守るために戦ってきた。それがボクの信念だったし、ボク自身、それが正しいことだと思っていた。だけど……」

スコアは少し視線を落とした。

「ボクの大切なものを……大切な人を守るということは、ただ、ボクが守りたいだけだったんじゃないのかなって。本当にその人のことを想ってやっていたのになって……」

スコアのその言葉にコールはすぐに答える。

「そんなことはないよ。大切な人を守りたいって気持ちは、それだけでその人を大切に想ってるってことじゃないか。だけど……そうだね。守ることだけが、その人を大切にすることだとは限らないのかもね」

「え……？」

「例えばさ、守るってことは、必ずそのものを自分の手元に置いておかなくちゃいけないってことでしょ？　だけど、そのものを本当に大切に思っているなら、時に、そのものを手放すことも大切なんじゃないのかな。手放すことで、その人が本当に幸せになるのなら」

その言葉を聞いて、スコアは少しのあいだ黙った。

「手放すことで……」

スコアは再び夜空を見上げた。

数日後の昼、フルスロツクの街には撤退途中の国軍兵であふれかえっていた。その通りの一つをスコアは歩いていった。右手に大きな革袋を持っている。

（ここもじきに放棄される……）

スコアは街を見渡しながら歩く。

（ウォーズレイの戦いとき、フルスロツクから来た四人の援軍によつて戦局が逆転したつて聞いた。その内の一人がクロコ……）

スコアは街の建物の一つに入る。その一室にはアピスが一人、イスに座っていた。

「スコア……」

アピスはスコアの方を向く。スコアはアピスの正面に立った。

「アピス、ボクの話聞いてくれないかい。大事な話だ」

「なに……？」

「きみはここに残るんだ」

それを聞いてアピスは少しのあいだ呆然とする。

「え……？」

スコアは革袋をアピスの隣に置いた。

「この中に一週間分の食料が入ってる。これだけあれば十分なはずだ」

「どういう……こと？」

「このフルスロックの街は、クロコの住んでいる街だ。ここに残れば、じき、きみの兄さんが戻ってくるだろう」

「でも……」

アピスは戸惑った表情を浮かべる。

「きみの背中……それは、スロンヴィア事件の時にできた傷だよ。ね。きみのその傷をつけたのは国軍だ。きみの故郷を奪ったのも国軍だ。シャルルロード基地は、きみの居場所としてふさわしくない」

「でも……スコア……」

アピスはスコアをじっと見つめた。スコアは話を続ける。

「そして、ボクとクロコは、国軍と解放軍だ。互いに戦わなきゃいけない関係にある。ボクはいつか、きみの兄さんを殺すかもしれない。そんな相手と一緒にいちゃいけない」

「……！！」

「ボクと居ても、きみは幸せにはなれない」

スコアは冷静な表情でアピスを見つめる。

「きみはここにいたべきだ。ここが、きみの居場所だ」

「……でも……でも……スコア……わたし……」

アピスはスコアの目を悲しそうに見る。

その様子を見て、スコアは冷静にゆっくりと口を開いた。

「……ボクがどうしてきみを助けたのか、今なら、今だからこそ、はつきり分かる」

「え……？」

「ボクが初めてクロコと出会ったとき、ボクはクロコを見て、変わった子だけど、とても優しく暖かい子だと思ってた。そしてその時……今となっては笑い話だけど、ボクはクロコに恋をしてしまっていたんだ」

スコアはクスリと笑ったあと、今度は辛そうに視線を落とす。

「……だけど、そのあとすぐ、ボクとクロコは敵同士になった。ボクはきつと、そのことがとても辛かったんだ。自分の中で納得できなかったんだ」

スコアは静かにアピスを見た。

「そんな中で、クロコと知りふたつの姿をしたきみと出会った。ボクはそんなきみを助けることで、その辛い気持ちをなくすことができた……。ボクはきみとクロコの姿を重ねて、きみを助けることで自分の気持ちをこまかしたかったんだ。だから……」

スコアはアピスの目をじっと見つめた。

「ボクはきみ自身を見ていたことは、一度たりともなかった」

その言葉を聞いたアピスは呆然とした。

「さようなら。アピス」

アピスは何も言わず革袋を取って、建物の扉から外へと出ていった。

その扉をスコアは静かに見つめていた。

4 - 2 2 夜の再開

フルスロツクの街には多くの人が戻ってきていた。国軍の姿は完全に消え、代わりに解放軍の兵士達の姿が見えた。

フルスロツクのとある場所に位置する墓地、緑色の芝生の上には多くの戦死者の墓が立てられようとしていた。

その内の一角に、多くの人が集まっていた。

大きく掘られた穴には、グレイ・ガルディアの棺が入れられ、上からゆつくりと土がかぶせられていた。

その様子を多くの者が見守っていた。

そこには、クロコの姿があった、アールスロウの姿もあった、フロウの姿も、サキやソラの姿もあった。わざわざ外からミリアと、ケイルズヘルの司令官ローズマンも来ていた。

多くの者が涙を流していた。

クロコも泣いていた。フロウやサキやソラも泣いていた。ミリアもポロポロと涙を流して泣いていた。アールスロウは泣かず、黙って埋められていく棺を見つめていた。

墓が立てられ、参拝者が徐々に姿を消していく中、クロコは独り、墓の前でいつまでも立っていた。

クロコは墓を見つめながら、立ち尽くしていた。

「クロコ」

アールスロウが一人、後ろから歩いてくる。

「もうすぐ馬車の出る時間だ」

クロコは墓を見つめていた。

「あと少しだけ……ここに居させてくれ」

「……………」

「いまだに信じられねえよ、殺したって、死にそうになかったのにな」

アールスロウは静かにクロコの横に立った。するとクロコが口を開く。

「あんたは、泣いてなかったな」

クロコの言葉にアールスロウは少しのあいだ黙った。

「まだ……何も終わっていないんだ。泣くことは、終わったあとでもできる」

「……そうか、あんたらしいな」

アールスロウはガルディアの墓をじっと見つめる。

「…… 그레이さんは西部の生まれだそうだ。君の故郷も西部だったな」

「……そうだったのか」

「少しだけ、今と関係のない質問をしていいか？」

「……なんだ？」

「スロンヴィア虐殺、その事件を起こしたのはレイズボーンだが、その原因となった存在を君は知っているか？」

その言葉を聞いてクロコはゆっくりと口を開いた。

「ああ、知ってるよ。オレの事件だ、当たり前だろ。村長に手当てを受けた解放軍兵の存在ぐらい、知ってる」

「なら、君は……その解放軍兵を、恨んでいるか？」

「訳の分からないこと言うなよ。そいつが一体、村の誰を殺したんだ」

アールスロウは一瞬黙った。

「……そうだな」

アールスロウはゆっくりと墓に背中を向けた。

「行こう、クロコ。時間だ」

シャルルロット基地の広間、そこではセウスノールの戦いから戻ってきた国軍兵達で埋め尽くされていた。その中にスコアの姿もあった。

そのスコアにコールが駆け寄ってくる。

「やっと着いたね、スコア」

「うん、コールにとっては長い任務だったね」

「うん、本当だよ、やっと戻ってこれた。あつ、そう言えば、あの女子はどこ行っただの？ 一緒じゃないの？」

その言葉を聞いてスコアの表情が曇る。

「彼女は……もう、戻らない」

「えっ？」

「これで、良かったんだよ」

スコアの目から一粒の涙がこぼれ落ちた。

「手放すことが……別れることが、アピスにとっては、幸せだったんだ」

スコアは静かにその場にひざをついた。

「だから、これで良かったんだ。これで……」

夜のフルスロック基地、その窓からクロコは夜の景色を見つめていた。

再び人の戻ったフルスロックには、夜にも関わらず、遠くに灯る明かりが点々と見えた。

ふと、暗闇の広場に目を移した時だった。そこに立つ一人の少女の存在に気づいた。

「アピス……！」

クロコは廊下を駆けだし、広場に飛び出した。

クロコは一直線にアピスに向かって駆け出した。

「アピス……！」

クロコの叫びに気づき、アピスはクロコの方を向いた。クロコはそのままアピスにぶつかり抱きしめた。

「アピス……良かった、また会えた」

「……お兄ちゃん？」

クロコは体を離し、アピスの顔を見た。

「そうか……この姿じゃ、分からないよな。そうだ、オレはクロコだ。そっくりだな、おまえと……」

クロコはそのまま基地の個室にアピスを招いた。
部屋のベッドで二人は並んで座った。

「でもよく入れたな、門に見張りがいただろ？」

「うん……よく分からないけど、入れてくれた」

「……あいつら、オレと間違えたな」

「……………」

二人は互いを見たまま沈黙した。
クロコが口を開く。

「……あのさ、アピス。おまえ、なんであんな所にいたんだ？ あんな戦場に……………」

「それは……………」

アピスはクロコに、スロンヴィア虐殺からスコアと出会って、別れるまでのいきさつを話した。クロコはそれを静かに聞いていた。

話が終わるとクロコはゆっくりと口を開く。

「そうか…………おまえも、大変だったんだな」

「うん……………」

「でも、スコアのことを心配で戦場まで追いかけてくるって……おまえそういうところは変わってないな」

「え……？」

「おまえ、昔からオレとブレッドの遊びに無理やり付いてきて、ケガばっかしてたじゃねーか。そういうトコ、昔のまんまだな」

それを聞いてアピスはほほえんだ。

「そうだね、お兄ちゃん」

アピスの表情を見て、クロコも安心したようにほほえんだ。そのすぐあと、クロコは少しだけ暗い顔をして、アピスを見た。

「アピス……おまえには謝らないといけないな」

「何を……？」

「七年前……オレは、瀕死のおまえを死んでるものだと思って、そのまま置いてきちゃった。最低な兄貴だな」

「うつん、そんなことないよ。あの時は混乱してただろうし……それに、もしあの時、わたしなんか背負ってたら、多分みんな国軍に殺されてただろうし」

「……ごめんな」

「謝らないで、わたしはちゃんと、こうして生きているから……。わたしはただ、生きてるお兄ちゃんとこうして再開できただけで、

うれしい」

「オレもだ、アピスに会えて、本当に良かった」

それを聞いてアピスは嬉しそうにほほえんだ。

「なあ、アピス。おまえはこれからどうする？　ここに来たばかりで、働く場所も決まってるないだろ。基地で働いたっていいし、なんなら、知り合いのやってる店で働かせてもらってもいいし……」

「ううん」

アピスは軽く首を横に振ったあと、立ち上がった。

「わたし、帰らなきゃ」

その言葉を聞いて、クロコは戸惑った。

「どこへ……？」

「シャルルロード基地」

クロコは驚いた。

「どうしてだよ！　あんな所に……」

アピスはクロコを見つめ、静かに口を開く。

「スコアは……わたしをここへ置いていく時、ウソをついた。わたしのために、自分自身が傷つくウソを言ってくれた。そんな人を、

このまま放ってはいけない」

「スコア……の所に戻るのか？」

「うん、わたしにとって、大切な人だから。お兄ちゃんと同じくらい」

「……………」

クロコは辛そうな顔をしてしばらく黙ったあと、小さく口を開いた。

「……………分かった、おまえが生きる場所はおまえが決める」

「ごめんなさい」

「謝るなよ。おまえの選択だ。おまえの行きたい場所に行け」

「ありがとう……わたし、もう行くね」

「アピス」

クロコは立ち上がって、服から何かを取り出し、アピスに手渡した。

アピスの手に銀色の卵型のペンダントの片割れが光る。

「これは……………」

「スコアのモンだ。これは多分、おまえの方がふさわしい」

「ありがとう」

アピスはペンダントをしまつと、クロコの顔を見つめる。

「さよなら、お兄ちゃん……会えて、本当にうれしかった」

アピスはゆつくりと部屋の扉へと向かった。

「アピス！」

クロコの声でアピスは振り向いた。

「また、必ず会おう」

「うん、また……」

アピスはほほえんだ。

真上に昇る太陽がフルスロック基地を照らす。基地の廊下ではアールスロウとボサボサ頭の司令官ローズマンが話していた。

「わざわざお越しいただいてありがとうございました」

アールスロウのその言葉にローズマンはケラケラと笑う。

「ハハハ、なんでおまえがそんなこと言うんだよ、奥さんか！」

それを聞いてアールスロウはほほえみを作る。

「そうですね、フォローをよくしていたものですから」

「ああ、あいつもよく手紙で言ってたよ。君には良く助けられてるってな」

その言葉を聞き、アールスロウは一瞬視線を落とす。それを見てローズマンが肩をバンと叩いた。

「しっかりしろよ！ これからは君が基地を仕切るんだからな」

「心配には及びません。この戦いが終わるまでは、俺は崩れませんよ」

「そうかい、でも時には甘えることも必要だぞ。あいつも良く君に甘えてただろ？」

それを聞いてアールスロウはほほえんだ。

「忘れないようにします」

「じゃあな」

「では、またお会いしましょう」

廊下の一角でミリアは壁に寄り掛かっていた。

「ミ、ミリアさん」

サキが名を呼びながら、ミリアに駆け寄ってきた。ミリアは体を起こす。二人の背丈はほぼ同じぐらいだった。

「おまえは……………ササキ・フランティス」

「あの…………サキ・フランティスです」

「何の用だ」

「あ、あの…………その…………もうすぐ、出発するって聞いたもので、その…………見送りに…………」

「そうか、ありがとう」

ミリアはそう言って、サキの頭をなでた。

「えっ！？ あ、あの…………」

サキは顔を赤くする。

「昔…………こういう風にガルディアによく頭をなでられたんだ」

「え…………ガルディアさんに…………」

ミリアの緑色の瞳が悲しく光る。

「私がまだ小さい時…………支援員として働いていた頃に、一緒に基地にいたんだ。その時、よく、遊んでもらった」

「ミリアさん……」

「仇は必ず取る」

ミリアは歩き出した。

「やつを倒せるのは、私だけだ」

シャルルロット基地、その窓からスコアは夕暮れの空を見上げていた。

少しだけ冷たい風が吹く中、スコアはぼんやりと赤い雲を見つめる。雲は風に流されるようにユラユラと動き続けていた。

ふと視線を落とすと、基地の近くの草原が目に入った。それに吸い寄せられるかのように、スコアはゆつくりと基地の廊下を歩きだし、草原へと向かった。

ゆつくりと歩いたせいで、スコアが草原についた頃には、太陽は沈み、夜の闇が辺りを包んでいた。

草原の上で一人ぼんやりと立つスコア。

草原のあちこちで、星ボタルたちが青い光を放ち始める。

青い光が満ちる草原の中を、スコアはただ、ぼんやりと立っていた。ふと、目からこぼれる涙に気づいた、スコアは急いでそれをぬぐ

った、その時だった。

スコアは草原の中に立つ、一つの人影に気づいた。
我が目を疑った。

アピスがスコアの前に立っていた。

「レイア!!」

スコアは叫んで、必死で駆け寄った。スコアはそれを幻かと思った。しかし抱きしめると確かにそこにはアピスがいた。

スコアはギュツと抱きしめた。

抱きしめながら、スコアは震えた声を出す。

「……どうして、戻ってきたんだ」

「……ごめん」

「……あそこに居た方が、きみにとって良かったのに」

「……うん」

「……きみは本当にバカだ」

「……うん」

「……ボクは、きみにひどいことを言ったのに」

「……うん、分かってる、本心じゃないことなんか」

「……ここに居ても、きみは幸せにはなれないのに」

「……うん……そうかもしれない、けど、そうじゃないかもしれない」

二人は体を離して見つめ合った。草原の青い光が二人を包み込んでいた。

「レイア……アピス、どうしてきみはここに帰ってきたんだ？ あそこにはクロコがいたのに」

「ねえ、スコア、わたしが昔、わたしもあなたを守りたいって言ったこと覚えてる？」

「え……？」

「わたしが幸せになるために、スコアが辛い選択をすることは、わたしはいや。幸せになるなら、二人一緒がいい……だってわたしは」

アピスはほえんだ。

「スコアのこと大好きだから」

スコアの目から涙があふれた。

「ボクも……きみのことが好きだ。アピスが……アピスが好きだ」

スコアはまたアピスを抱きしめた。

「きみはボクを守る」

柔らかな青い光がいつまでも二人を包み込んでいた。

4 - 23 消えた姿

グラウドのとある地、とある場所の、とある大部屋で、多くの者達が大きな長机を囲んでいる。

「セウスノール軍は無事、生き残りましたな」

「ああ、我々の計画通りだ」

「とはいえ、きわどい戦いでしたね」

「全くだ、わざわざ国軍の戦力が完全に集結しないように、こちらが細工したというのに……」

「まあ、さすがは世界最強のグラウド国軍と言ったところですね」

「これでこちらにとっての最大の山は過ぎ去りましたね。あとはあなたの計画通り……」

それを聞いて、机の奥に座る男が静かに声を出す。

「ああ、すべて滞りなく進むだろう」

「我らの望む終演まで……ですか」

「終演ではない、開演だ。我らの『レギオス』の、新たなグラウド

のな」

フルスロツクの街の墓地。緑色の芝生には多くの戦死者の墓が並んでいる。

その一角、ガルディアの墓の前で鋼鉄のヘルムをかぶった男が立っていた。

ファントムはガルディアに静かに祈りを捧げていた。

フルスロツク基地の廊下、フロウは廊下の窓から街の景色を眺めていた。

窓から強い風が入ってくる。

「……ん？」

フロウは思わず声を漏らした。基地の前方の通りに一人の人影が見えた。

フロウは目を凝らす。

白い仮面で顔を隠した男が通りをゆつくりとした足取りで歩いていた。男の柔らかい赤髪が風に流れる。

「……なんだ？ 仮想パーティかなんかかな」

フロウは首をかしげた。

フルスロツク基地の別の廊下をクロコとソラが歩いている。

「クロはこれからどうするの？　しばらくはここにいるんだよね？」

ソラの質問にクロコは頭をかく。

「うーん、大きな戦いが終わって一段落……ってオレも思ってたんだが、フロウはこれからさらに忙しくなるとも言ってたし、正直よく分かんねー」

「そうなんだ……でもとりあえず今はフルスロツクにいるってことでしょ」

「まあな……またいつ任務が入るか分からないし、今度の休日に一緒にミリセルト大商店街へ行くか」

「え……？」

「おまえが言っただろ」

「うん、でもクロコから言い出すなんて……」

「約束したからな」

クロコのその言葉を聞いて、ソラは笑顔を浮かべた。

「うん！　一緒に行こうね」

その頃、広間をファントムが歩いていた。その隣をアールスロウが歩く。ファントムに気づいた広間の兵士達が目を丸くしてザワザワと騒ぎだす。

それを尻目にアールスロウがファントムに話す。

「ありがとうございました。あなた自ら、わざわざ足を運んでいただけなんて…………… 그레이さんも喜んでいるでしょう」

「 그레이は解放軍に最も貢献した男の一人だ。そして私にとって大事な友人でもある。足を運ぶのは当然だよ」

二人は広間から廊下へと入る。すると向かいからクロコとソラが歩いてくる。

クロコはすぐに気付いた。

「あっ！　ファントム」

「え…………… あの人がファントム」

ソラが驚く。

「久しぶりだ、クロコ。少し話をしたいところだが、あいにく今回は時間がなくてな。すまないな」

ファントムがそう言った瞬間だった、ソラの表情が変わった。

「あの声……」

ファントムとアールスロウがクロコとソラを横切っていく時、クロコはソラの様子に気づいた。

「どうした？ ソラ」

クロコの言葉の直後、ファントムは足を止めて、振り向いた。

「ソラ……だと？」

ファントムはソラの顔を見た。

「君は……まさかソラ……あのソラか!？」

ソラの顔が青くなり、一歩あとずさった。

「その声……マスティン……さん？」

ファントムとソラ、二人の様子にクロコとアールスロウは呆然とする。不意にソラが背中を向けてファントムの前から逃げ出した。それにファントムが反応する。

「まずい！ アールスロウ！！ 彼女を捕えろ！」

ファントムのただならぬ様子にアールスロウとクロコは驚いた。すぐに駆けだすアールスロウだったが……

「待て!!」

クロコがアールスロウの腕をつかんで止める。

「なに言っただよ! ソラを捕えるって!？」

「離せ! クロコ」

「ふざけんな! ということだよ」

「俺にも分からない。だが、俺は前に言っただろう、ソラ・フェアリーフには気をつけろと……そういうことだろう」

アールスロウはクロコの腕をなんとか振りほどき、広間へと急ぐ。

「おい、待てよ!」

クロコもアールスロウを追って広間へ走る。

二人は広間に出た、しかし広間にはソラの姿は見えない。
アールスロウは広間にいた兵士の一人に聞く。

「ここを少女が通っただろう」

「えっ? はい、さっき、走ってましたが……」

「どこへ向かった?」

「そのまま外の広場へ……」

アールスロウはそのまま広場へと走る。クロコもすぐ後を追った。広場に出ると、ソラは外の通りを目指して、門に向かって駆けていた。

「逃がすか……！」

ソラを捕まえようとするアールスロウの腕を、再びクロコがつかんで止める。

「何やってんだよ！」

そんなクロコを、アールスロウはにらんだ。

「君こそ何をやっている！ このままでは通りへ逃げられるぞ」

「ソラはなにもやってねえ……！」

「ならなぜ逃げる！ いいから手を離せ！」

二人が争っている内に、ソラは門を抜け、通りへ姿を消した。

「く……！」

アールスロウは険しい顔をする。

遅れてファントムも基地から出てくる。

「彼女は！？」

アールスロウがすぐに答える。

「通りに逃げられました。もう簡単には捕まえられないでしょう……」

それを聞いてファントムが緊迫した声を出す。

「まずいな……すぐに兵を集めて彼女を搜索し、身柄を拘束しろ」

それを聞いて、クロコが怒鳴る。

「おい！　どういことだよ！　ソラは拘束されるようなこととしてねえぞ！！　ソラは街に住むただの果物屋だよ……！」

「違う」

ファントムは言った。

「彼女はただ果物屋などではない。私は一度だけ、幼い彼女と会っているんだ」

「どういことだよ」

「彼女の本名は、ソラ・ライトシュタイン。国軍のライトシュタイン将軍の一人娘だ」

クロコは驚いた。

アールスロウも驚いていた。

「『戦場の魔術師』……ザベル・ライトシュタインの娘……！？」

クロコも驚きながらも何とか口を開く。

「けど……だけど、ソラは……ソラ自身は……国軍じゃない」

それを聞いてファントムが落ち着かない声を出す。

「ならどうして大貴族である彼女が、国軍中將の娘が、こんな所に解放軍の基地にいるんだ……！ 彼女は、幼い時から父親譲りの極めて高い知能を持っていた。彼女は……危険だ。その上、私の正体を知られた……！！」

アールスロウは素早く広間へと入って、近くの兵士に呼びかける。

「すぐに隊長達を呼んで兵を集めろ」

「おい！！」

広間へ入ったクロコはアールスロウをにらみつける。

「ソラは……ソラは危険なんかじゃない！！ ソラは国軍に情報を売ったりなんかしない！！ あいつはそんなことするようなやつじゃないんだ」

そのクロコに対してアールスロウは冷たく言う。

「それは捕えてみれば全て分かる」

「何の証拠もないのに疑って、いったい何の証拠で疑いが晴れるんだよ……！！」

クロコは悔しそうにギリツと歯を鳴らした。

「見損なっ たぞ…… アールスロウ」

クロコは基地の外へ向けて駆け出した。

「待てクロコ！」

アールスロウの声を無視し、クロコは外の通りへ飛び出した。

（あいつより早くソラを見つけて、守らないと……！）

クロコは街を疾走する。

クロコはソラの果物屋のある通りまで出た。

果物屋は閉まっていた、裏の扉も閉まっていた。

クロコは通りを走りながら叫ぶ。

「ソラ！ オレだ！ 出て来い、オレなら大丈夫だ！ ソラ……！」

叫ぶクロコに通りを歩く人々が一斉に目をやる。しかし当人のソラは出てくる気配がない。

真上に昇っていた太陽がゆっくりと沈み始めるまで、クロコは街中を走り回った。しかし、ソラの姿はどこにもなかった。

夕焼けの赤い光が照らす中、クロコは果物屋の壁に力無くもたれ掛かって座っていた。表情は疲れ果てている。

ときどき目の前の通りを、解放軍兵が走って通り過ぎるのを見るたびに、ソラがまだ見つかっていないことだけは確認できた。

クロコは自分の膝に顔をうずめる。

「クロコ」

自分の名を呼ぶ声を聞いて、クロコは顔を上げた、見ると目の前にフロウが立っていた。

「フロウ……」

クロコは弱々しい声で言った。

「仲間に聞いたよ。理由はよく分からないけど、どうもみんなソラちゃんを探してるみたいだね」

「ああ……」

「君もソラちゃんを探してたの？」

「ああ……だけど見つからなかった」

クロコはわずかに体を震わせた。

「そこらじゅう探したけど……どこにもいないんだ。もうこのまま

……あいつと二度と会えないかもしれない……」

クロコは震えた声を出した。

そんなクロコを見て、フロウがゆっくりとその顔をのぞきこむ。

「ソラちゃんが追われてる理由。君は知ってるんだろう。良ければ、僕に聞かせてくれないかな？」

フロウのその言葉を聞いて、クロコはフロウに事情を聞かせた。

それを聞いたフロウはゆっくりと口を開く。

「そうか、ソラちゃんが、あのライトシュタイン中将の……」

「ソラは……絶対に、そんなことするやつじゃない」

「分かってるよ。大丈夫」

フロウは笑顔を見せた。

「アールスロウさんはソラちゃんの事をよく知らないから、あんな行動をとってるだけさ。ちゃんと話せば分かってくれる。だってソラちゃんは、ずっと解放軍と関わりうとしなかったんだ。そんなソラちゃんが解放軍に関わりうとしたのは、君と出会ったからだろ？」

「フロウ……」

「ソラちゃんは、絶対に君に黙っていなくなったりしない。きっと、君にしか分からない所で、君を待ってるはずだ」

「オレにしか……分からないところ……?」

クロコの目に赤い夕陽が入る。

「……!」

クロコはハっとした。

「どうやら、心当たりがあるみたいだね」

フロウはニッコリ笑った。

「アールスロウさんの説得は僕に任せて、君はソラちゃんを迎えに行くんだ」

クロコは立ち上がった。

「ありがとう、フロウ」

「友達のためだからね」

クロコは勢いよく駆け出した。

夕陽が街全体を照らす中、ミリセルト大商店街の路地を、クロコは息を切らしながら走り抜けていた。

路地を抜けるとそこには舗装された川が広がっていた。人影のない静まりかえった川には、夕陽を浴びた石橋が架かっている。

クロコは周りを見渡す。そのとき気づいた、川の向かい側に立っているソラの姿に。クロコの方を静かに見つめていた。

「ソラ!!」

クロコが叫ぶと、ソラはほほえみを浮かべた。

「ごめんね、クロ。びっくりしたでしょ？」

クロコはソラを見つめた。

「驚くに決まってるだろ。だけど、大丈夫だ。別にオレは怒ってない」

「だけど、私は騙してた、クロを、みんなを」

「違う！ だますってのは、そいつを利用しようとするってことだ！ ソラはオレ達と一緒にいたかっただけだ。だからソラはだましてなんかない！」

クロコは一步前に進んだ。

「貴族だからって何だよ。フロウだって貴族だ、だけどみんなに認められてる」

「だけど、私の父は、みんなの仲間をたくさん殺した」

「ソラが殺したわけじゃない」

「それでも……………それでも私の父だから。私はそれを知らないふ

りしてみんなと一緒にいた、私はみんなにウソをついてた、自分にもウソをついてた」

ソラは一步下がった。

「私はみんなとは一緒に入れられない」

「そんな……そんなことない！」

ソラは悲しそうにほほえむ。

「ウソはもうばれちゃったんだ。みんなを騙してたウソも、自分を騙してたウソも……だから、私は現実に戻らないと」

「待てよソラ。オレは……オレは……」

「少し前まで、私はずっとみんなといれると思ってた。だけど、やっぱりダメだよ。ダメなんだ。ごめんね、クロ」

「そんなことない……そんなこと……」

「さよならクロ。今まで楽しかったよ」

ソラは自分の頭に付けていた髪飾りを外した。そして手から放る。髪飾りはソラの手を離れ、弧を描いたあと、川へと落ちていった。

ポチャン……

川に小さな水しぶきが上がった。

クロコはその様子を見て呆然とする。

ソラは背を向けて、路地の中へと歩いていった。

この日、ソラはフルスロックから姿を消した。

0 - 7 ソラ（前編）

十六年前、ライトシュタイン家でソラは生まれた。

大貴族の家系のソラは様々な人物の祝福を受け、生を受けた。ブルテン皇帝ですら、ザベル將軍に祝辞を送ったほどだった。

それから十年……

晴れ渡った空に照らされた青い海、その海沿いにきれいな立ち並んだ多くの純白の建物。青と白の景色がきれいに分かれている巨大な港町パシフィルド。その町全体を丘から見下ろすように、純白の巨大な屋敷であるライトシュタイン邸は建っていた。

ライトシュタイン家の庭園で十才のソラは母とお茶を楽しんでいた。

テーブルに着き、ソラは母と楽しく会話をしながら紅茶を飲む。

ソラの母、ファミリスは当時、年齢三十一歳。白い髪、細く小さな目、明るい雰囲気を持っている。

ファミリスはニコニコ笑いながらソラに話しかける。

「ソラは最近、何の本を読んでいるの？」

その質問にソラはティーカップをおぼつかない手つきで置いて答える。

「最近はグラート・ディルリッチの哲学書をよく読んでます」

「ああ、あの『ダークサークル』の名付け親ね」

「はい、それで有名な方ですが、哲学者としても非常に有能な方です」

「へえ、そうなの、それでその哲学書の内容はどう？」

「少し難しいです。内容がかなり濃密なうえ、専門的知識を前提に置いた論理を展開するので」

「それは大変そうね。理解できそう？」

「はい、他の哲学書と平行に読み進めているので、理解するには問題ありません」

「がんばってるわね」

ファミリスはほえむ。ソラはティーカップにもう一度口につけたあと、二人が座るテーブルから少し離れた庭園の一角に目を移した。

そこには父ザベルがイスに座りながら本を片手に二人を眺めていた。

ソラはテーブルの方に向き直り、一瞬だけ眉を寄せた。

ソラの父親ザベルは非常に優れた才知を持つ人物だった。そして寡黙な人物でもあった。

対してソラの母親ファミリスはザベルと対称的で平凡な人物だった。しかし明るく、優しく、快活な人物でもあった。

ソラはその頃からザベルに対してどこか不快感を持つようになっていた。

父は物事を常に冷静に分析する優れて頭脳を持っていた。しかし、人の心や感情すらも他人事のように分析していく様は、ソラにとっては不気味だった。父の分析は非常に的を射ているものだったが、それは逆に人を人とは見ていない、冷たい印象を受けた。

少し離れた場所から、ソラとファミリスの様子を見つめているザベルの無機質な目を見るたびに、ソラは自分たちが観察されているような嫌な印象を受けていた。

その頃のソラはほとんどの時間を屋敷の中で過ごすようになっていた。内乱が始まり、国が荒れてから、家を外出することがほとんどできなくなっていた。その理由は、軍人である父親の立場もあり、ソラの身の危険が考慮されてのことだ。

ソラは家にいるほとんどの時間を母親と屋敷の使用人と過ごしていた。

八才頃までは家庭教師が毎日のように訪れていたが、

「この子は私が教えるより、自分で勉強した方が効率が良いでしょう」

という言葉を残したあと、訪れなくなった。

家でのソラはひたすら読書とチェスに明け暮れていた。

読書の読み物は、屋敷に大量に保管されているザベルが若い頃に読んだ学問書。

チェスの相手は、ほとんどの父親に代わり、年寄りの長い鼻の執事レッドロッドが務めた。ただしレッドロッドは七才頃からソラの相手が全く務まらなくなっていたため、ソラは目隠しチェスや、早打ちチェスなど、一人で勝手に試行を凝らして打っていた。レッドロッド執事はゲツソリしながら毎日のようにそんなソラを相手にしていた。

それから二年後……

十二才のソラは屋敷の部屋でザベルとチェスを打っていた。

「チェックメイト」

ザベルは最後の駒を動かし、そう言った。

「うつ……」

ソラは悔しそうになる。

「あと一歩だったのに……」

「その言葉は二年前から言っているだろう。この調子だとあと二年はそう言い続けるな」

「二年後にはお父様に勝てるということですか？」

「二年後には私との実力差が思っていた以上にあったことに気づく

「ただだ」

その言葉を聞いてソラはムツとした。

紅茶の時間、庭園でファミリスと共に紅茶を飲むソラは小さくため息をついた。

「また勝てなかった……」

「そんなに落ち込むことはないわよ。あの人は特別強いんですから」

「わたし、お父様にだけ負けたくないの」

「あの人はソラにとってのライバルね」

ファミリスは嬉しそうに笑う。それを見てソラは少し眉を寄せる。

（ライバル……？ 違う……私はお父様が嫌いなだけ、だから、あの人にいいようにされるのは、我慢できない）

「でもきつとあの人もソラの事をライバルだと思っているわ。だってソラとチェスの勝負をしているとき、一番真剣な顔してるもの。やっぱりソラはすごいわ。あなたは父親に似たのね」

ソラは全く嬉しくなかった。

（私は……人殺しなんかじゃない）

ソラはファミリスを見た。

（どうしてお父様はお母様と結婚したんだろう。そもそもお父様みたいな人間が、お母様のような人に惹かれるとはどうしても思えない。まるで、お母様が自分の意のままに動かせるから、妻として迎え入れたように思える）

ソラは眉を寄せた。

（それに、私はお父様が笑っているところを見たことがない。私を見てもお母様を見ても、お父様は表情一つ変えない。そういえば、子供は私一人だけだ、貴族なのに男の子がいない。どうしても……そうか、私しか産めなかったんだ。だからお父様は、お母様にも私にも興味がないんだ）

ある日の昼、父は軍人のグロモン中将を客として招いていた。

食卓をザベルとファミリスとソラとグロモンで囲む。

グロモンは上機嫌に口を開く。

「ソラ譲、君の父親は軍人として非常に有能だよ。軍内ではロストブルーを最高の英雄と呼ぶ声が強いが、私は君の父の方がすごいと思うよ。ロストブルーは一回の戦場で倒せる敵は多くても千人がそこらだが、君の父が軍を指揮すれば数万の敵を倒すことができるのだからな」

（それだけたくさんの人を父は殺してる……そんなの何の自慢にもならない）

ソラは戦争が嫌いだった。多くの人が死ぬ戦争を認めることが出

来なかった。それは同時に、軍人であるザベルを認めることができないのと同じだった。

ソラは思っていた、ザベルは軍人として卑怯だと、自らの指揮で数万の人を殺しながら、ザベル自身は一切、手を汚していない。

ザベルはいつものように表情一つ変えずに、何も感じず、人を殺め続けている。ソラにはそう思えた。

ある日、ソラは軍服に着替えたザベルと廊下で会った。

「また任務ですか。お父様」

「そうだ」

ザベルはそれだけ答えて、ソラを横切ろうとした。その瞬間、ソラは今まで自分の中に溜め込んでいた思いをついにザベルにぶつけた。

「どうしてお父様は軍人になったんですか」

ザベルは足を止め、ソラを無機質な目で見つめた。

「ライトシュタイン家は代々軍事貴族だ。私も父の跡を継いだけだ」

「自分の意思ではないのですか」

「私の意思でもあるし、父の願いでもあった。それに決まりでもあった」

「……………!!」

ソラは不快な表情をした。

「その程度のこととで、そんなことで、あなたは戦場へ行つて人を殺めているのですか？」

「……………おまえは戦争が嫌いだな」

「言つた覚えはありませんが？」

「見ていれば分かる。だから私を遠ざけるのだらう？　戦争をする私を」

ザベルは表情を変えずに言つた。

「戦争を好きになれと……………？」

「そうは言つてはいない」

「戦争は多くの人間同士が武器を取り、殺し合いをすることです。とても正気のこととは思えません」

「おまえは戦争を愚かだと思つか？」

「愚かの行為だと思います」

「そうか……………」

ザベルは一瞬黙つた。

「だがなソラ。本当に戦争は、正気を失った人間が行う行為なのか？ 愚かな人間が行う行為なのか？ ならばなぜ、戦争は何度も繰り返されている？」

「それは……」

「戦争は正気を失った人間や、愚かな人間が起こしたものではない。まともな人間が、真剣に考え、導きだした、一つの答えだ。だから戦争は繰り返す。ならば、戦争とは人そのものだとは思わないか？」

「人そのもの……？」

「戦争を馬鹿だと言うことは人を馬鹿だと言うことだ。戦争を愚かと言うことは人を愚かと言うことだ。戦争を狂っていると言うことは人を狂っていると言うことだ。ならば、戦争を認めることは、人を認めることにはならないか？」

ザベルはソラの目をじっと見た。

「戦争を馬鹿だ愚かだと言っている内は、戦争を真に理解することはできない。ならばそう言っている限り、戦争を肯定するにしろ否定するにしろ、戦争と向き合うこともままならない、無知な批評家に過ぎないと思わないか？」

「私がそうだと……？」

「自分で考えてみればいい」

ザベルはソラを横切り、そのまま屋敷の外へと歩いていった。

ソラはその背中をにらんでいた。

（あの人はずるい。そうやって人を説き伏せて、自分の行いを正当化してるに過ぎないんだ。自分が人を殺してる事実を正当化してるに過ぎないんだ）

0 - 8 ソラ（後編）

その日はソラの十三才の誕生日だった。屋敷の昼の食卓には多くの料理が並べられていた。

「もうすぐ大きな戦争が起こるってことだし、今回も身内だけのパーティーになっちゃったわね」

ファミリスのその言葉にソラは笑顔を浮かべる。

「別に私は構いませんよ。それに見知った人たちで食卓を囲む方が私は楽しいです」

「本当に、わ、我々もよろしいのですか？」

食卓にはレッドロッド執事を始め、屋敷で働く庭師やメイドなどが招待されていた。緊張した表情で食卓を囲む。

そんな面々を前に、ソラは笑顔を見せる。

「うん、たくさんいた方がパーティーは盛り上がるでしょう？ みんなには日頃からお世話になってるし」

「そんな……もったいないお言葉です」

「私がそう思ってるからいいの！」

その様子を見ていたファミリスが上機嫌に笑う。

「さーあ、もうすぐパーティの始まりよ！」

「……でも、お父様がいない」

「うーん、そーねえ」

「今日は軍務はないはずですよね」

「ええ、たしか個人的な用事ね。予定じゃ、もう帰ってるはずなんだけど……遅いわね」

「私は別に構いませんよ。もうだいぶ待っていますし、先に始めていませんか？」

「そうね、仕方ない。まったくあの人は、こんな大事な日に……」

ソラの誕生日パーティが開かれた。

初めは緊張していた面々も、ソラとファミリスが貴族とは思えないほどはしゃぐので、そのうち緊張も緩み、皆で楽しむようになっていた。

パーティのさなか、ファミリスはソラに誕生日プレゼントを手渡した。

ソラがプレゼントの箱を開けると、そこには小さな絵画が入っていた。

夜空の星が舞い飛ぶように描かれた絵だ。

「きれい……」

ソラはその絵を見つめる。

「この絵はマーク・ジェリノですね」

「そう、この日のために依頼したの。もっと大きな絵画でも良かったんだけど、このサイズが一番いいと思って」

「……？」

ソラが不思議そうな顔を見ると、ファミリスはニコツと笑った。

「ソラは今は屋敷にばかり居るけれど、もし世界が平和になったら、外の世界をたくさん見てほしいって思うの。その時、この絵画も一緒に旅に連れってほしいなって。この絵画に負けないぐらいの素晴らしいものに巡り合ってほしいなって思って……」

ファミリスのその言葉を聞いて、ソラは嬉しそうにほほえんだ。

「ありがとうございます。とっても大切にしますね」

ソラは再び絵を見た。

「この絵も素晴らしいけど、お母様の気持ちが何よりうれしいです」

その言葉を聞いてファミリスは嬉しそうに笑った。

その後、パーティは進む。しかし、ザベルは姿を現さなかった。

パーティが終盤に差し掛かった時のことだった。ソラがパーティの面々総がかりとチェスで勝負していた時のことだった。

ソラは気付いた、ファミリスが食卓に寄り掛かって寝ている姿に。

「もう、あんな所で寝て……」

レッドロッド執事とシェフ長が次の手を議論している間に、ソラは席を立ち、母の背中に手を置いた。

「お母様、こんな所で寝ていては……」

ソラがそう言って母の背中を揺すった直後、ファミリスの体はグラリと傾き、そのまま大きな音を立てて床に倒れ込んだ。

「お母様……!」

ソラの叫びがこだまする中、ファミリスは意識を失い倒れた。

すぐに町一番の医者と呼ばれ、ファミリスの状態を見た。

ファミリスはベッドに寝かされ、そのベッドを医者とソラとレッドロッド執事が囲んだ。

レッドロッドが診察を終えた医者を見つめる。

「心臓でしょう？ ファミリス様はそこを病んでいらっしやいましたから」

その言葉にソラは驚く。

（心臓……？ そんなこと一度も聞かされてなかった……）

「ええ、間違いありません」

「どのような状態なのですか？」

医者は深刻な表情をする。

「状態はだいぶ悪いですね。もう……長くは持たないでしょう」

ソラは放心した。

「できるだけ近くにいてあげて下さい」

それから数時間後、夕暮れの部屋でファミリスは意識を取り戻した。

「お母様……」

泣きそうな顔のソラを見て、ファミリスは安心させるように笑顔を浮かべた。

「ソラ……心配しないで、私は大丈夫だから」

「でも、お母様……」

「大丈夫、私は大丈夫だから……」

その数時間後、真夜中にザベルが帰ってきた。

すぐに医者の説明を受けたザベルはファミリスのそばまで来た。

「ファミリス……」

ザベルは静かな口調でファミリスを呼んだ。

「ザベル……」

「どうだ？ 体は……苦しくはないか？」

「大丈夫……ほんの少し苦しいだけ……」

ザベルはファミリスの手を優しく握って、その顔を見つめていた。その様子をソラは黙って見ていた。

（勘違いだったんだ……お父様がお母様を愛していないなんて私のただの思い込みだった。お父様はお母様のことをしっかり愛していたんだ）

ソラは二人きりをするためにそっと部屋を出た。

ソラは部屋のすぐそばの廊下でしばらくのあいだ立っていた。

朝の太陽がゆっくりと昇り始めた頃、ザベルは部屋から出てきた。ザベルはそのまま廊下を歩き、ソラの前を通り過ぎる。

「どこに行かれるのですか、お父様」

ソラは気になってザベルに聞いた。するとザベルは表情を変えずに答える。

「任務だ。これからオールロウへ行く」

ソラは思わず目を見開いて驚いた。すぐさま大きな声を上げる。

「待って下さい！ 聞いたでしょう！？ お母様はもう長くはないんです。あと少しだけ……一緒にいてあげてください」

ザベルは足を止めた。

「それでも戦いに間に合わない」

ザベルは冷静な口調で言った。その言葉を聞いてソラは声を震わす。

「お母様より……戦争を優先するのですか？」

ザベルは一瞬黙った。

「私はもう行く」

ザベルは歩き出した。

それに向かってソラは叫んだ。

「待って下さい！ お願いだから、お母様のそばにいてあげてください！！」

ソラは泣くように叫んだ。

「愛していなくてもいい、それでも一緒にいてあげて！ 最後に一

緒にいてあげて！！　お願い……　お願いだから………」

ザベルは黙ってソラの前から去っていった。

その数日後、ファミリスの容体は急変した。
ファミリスは苦しそうに胸を押さえながら、この世を去っていった。

「どうして……」

動かなくなった母親の前でソラはつぶやいた。

「どうして、あの人はいないの……？　どうしてあの人は戦争に行ったの？　お母様が苦しんでる時に、あの人は人を殺している。あの人は……あの人のにとってはお母様の命も、戦争で奪っている命も変わらないの？　何も感じないの？　どうして……」

ソラは絞り出すように叫ぶ。

「どうして、あの人はここにいないの！！」

ファミリスの葬儀は、戦争へ行ったザベルが欠席する形で行われた。

その後、ソラは自室へ引きこもり、ずっとファミリスのくれた絵

画を見つめていた。

ファミリスが死んでちょうど一週間後、ソラは誰にも告げずに屋敷を去った。

ソラはもう、ザベルの顔を二度と見たくはなかった。ザベルと二度と関わりたくはなかった。

それから三年間、ソラとザベルが関わることはなかった。

4 - 24 これでいいのか

グラウド東部に位置する首都ゴウドルークス。その西には大きな広場があった。純白の石畳で舗装された円形の巨大広場だ。そこには数万の国軍兵が整列していた。

広場の前方に造られている純白の台座にはオルズバウロ元帥が立っていた。そしてその台座にスコア・フィードウッドが上がってくる。眼鏡は外されている。

スコアはオルズバウロ元帥の隣まで歩くと整列する兵士達の方を向く。

するとさらに台座に上がってくる者がいる。

その男は長いひげと長い髪を伸ばし、純白のローブに身を包み、頭には立派な王冠をかぶっている。グラウド帝国の皇帝ブルテンだ。左右にお付きを従えて、ブルテン皇帝はゆっくりと台座へと上がって来る。台座の中央まで進み出ると、それに合わせてスコアもブルテンの前まで進み、ブルテンを正面に、ひざますいた。

スコアはブルテン皇帝の姿をまじかで見つめる。

（この人がグラウドの皇帝……確かに威厳がある。けど……）

スコアはブルテンの姿を見ながら感じた。

（なぜだろう。威厳のある外側と違い、内側から漂う雰囲気はどこか淡く薄らいでいる……）

ブルテン皇帝はお付きの者から一本の剣を受け取った。
ブルテン皇帝はゆっくりと口を開く。

「このたびのスコア・フィードウッドの戦場での功績を評し、その褒美として、我より、聖剣ブリティンガルドを授ける」

スコアはひざまずいたまま、剣を受け取った。

スコアは立ち上がり、皇帝の隣で再び兵士達の方へ向き直った。そして剣を引き抜いて、掲げた。その剣の刀身は白い光沢を放ち、鋭く光った。

兵士達が歓声を上げる。

歓声が収まると、ブルテン皇帝は歩き出し、台座からゆっくりと下りていった。

それを確認すると、今度はオルズバウロ元帥がスコアの隣に立った。オルズバウロ元帥は兵士達に向け口を開く。

「この度のセウスノール戦いで、我らは確かに敗北した。しかし、それと同時に我らは、国軍を長く苦しめていた壁であるグレイ・ガルディアをついに仕留めることができた。このスコア・フィードウッドの働きによって！」

オルズバウロ元帥は拳を力強く握った。

「この先、セウスノール軍は勢いを増すだろう。だが、恐れることはない。やつらは英雄を失い、そして我らは新たな英雄を得た。新たな『瞬神の騎士』スコア・フィードウッドを――！」

その声と共に、広場は巨大な歓声に包まれた。

「スコア・フィードウッド！」「スコア・フィードウッド！」「ス

コア・フィードウッド!」

「スコア・フィードウッド!」「スコア・フィードウッド!」「スコア・フィードウッド!」

歓声がゆつくりと静まると共に、オルズバウロ元帥がまた声を上げた。

「諸君……」

オルズバウロ元帥は声を張り上げた。

「間もなくこの戦争は終わるだろう。我らクラウド国軍の勝利という形で!」

「おおおお

ッ!」

兵士達の歓声は長く広場を満たした。

兵士達の歓声が小さく届く基地の廊下、そこをロストブルーが歩いていた。隣には若い軍人が歩く。

その軍人は、年齢二十代半ば、白い髪で、上に伸びた眉、鋭い目、どこかまじめそうな印象を受ける。

ロストブルーの護衛ミッシュ・ノルフオークだ。

「すごい熱気ですね」

ミッシュは遠くから伝わる熱気に少し驚いている。

「ああ、新たな英雄の誕生だからね」

ロストブルーは静かに言った。
ミッシュがあきれた様子で口を開く。

「大げさですね、あんなポツと出の英雄に。いくら 그레이・ガルデアを仕留めたからといって……」

するとロストブルーは足を止めた。

「ロストブルー將軍……？」

「私はね……『瞬神の騎士』と呼ばれるようになって、その称号に特に誇りを感じたことも、愛着を覚えたこともなかった」

ロストブルーは静かな口調だった。

「一年前、スコア・フィードウッドが『瞬神の騎士の再来』ともてはやされていても、私は何も感じなかつし、何の感慨も湧かなかつた。けれどね……」

ロストブルーは少しだけ、もの悲しい表情をしていた。

「不思議だな。 그레이・ガルデアが死んだという話を聞いた時、私は初めて『瞬神の騎士』の称号が、『奪われた』のだと感じたよ」

その言葉を聞いてミッシュは一瞬口元をきつくした。
ミッシュはゆっくりと口を開く。

「ロストブルー將軍……これから、この戦争はどこへ向かうのでしょうか？」

ロストブルーは再び歩き始めた。

「終わりへと向かうだろう、大きなうねりとなって」

基地の広間の壁にクロコは一人寄り掛かって座っていた。うつむきながら床を見つめている。

クロコはさびしそくにずっと広間の床を見つめていた。

小さな風が広間へと吹き込んできた、その時だった。
クロコの前にアールスロウが現れた。

「ここにいたのか、クロコ」

「……………」

クロコは床を見つめたままだった。

「ソラについて、フロウに聞いた」

「……………」

「基地の者にも話を聞いた、ソラからは特にあやしい情報は得られなかった」

「……………」

「ファントムが得た情報では、ソラはライトシュタイン家から三年

前に失踪しているとのことだった。その後の三年間については、父であるザベル・ライトシュタインも知らないとのことだ」

「……………」

「すまなかったな、クロコ」

「いいよ……………もう」

クロコは床を見つめていた。

アールスロウは少しのあいだ黙ったあと、口を開いた。

「君はこれからどうする？」

「どうも……………」

「ただここに座り込んでいるのか？」

「……………なにが言いたいんだ？」

「君はこれでいいのかと言いたいんだ」

「これでいい……………わけないさ。でも……………もう、どうすることもできない」

クロコのその言葉の直後、アールスロウは一枚の紙をクロコに差し出す。紙はきれいに折りたたまれていた。

クロコは小さく顔を上げる。

「……………なんだよ、コレ」

「ライトシュタイン家まで、安全に行くルートが書いてある」

クロコは驚いた。アールスロウは静かに話しを続ける。

「ソラがライトシュタイン家に戻っているという確証はどこにもない。だか可能性はゼロではない」

クロコはアールスロウを見た。

「アールスロウ……」

「このままでいい訳ないのなら、取り戻しに行つてこい。クロコ」

クロコは紙を受け取った。そして立ち上がり、アールスロウを強い目で見つめた。

「ありがとうアールスロウ」

「幸運を祈る」

クロコは駆け出した。

5 - 1 ライトシュタイン邸

グラウド西部のとある馬車道。草原に挟まれたその道を一台の大型の駅馬車が走っていた。その座席の一つに、一人の少女が座っている。

年齢は十五、六、黒い髪に、鋭い目に真紅の瞳の少女だ。

クロコ・ブレイリバーは独り、東部の港町パシフィールドへと向かう。

グラウド東部の首都ゴウドルークス。純白の巨大建築物が連なる街の純白の道を、一台の小型馬車が走っている。その座席には少年の軍人が座っていた。

年齢は十五、六、白いサラツとした髪に、厚い眼鏡をかけ、優しい霧囲気を持っている。

スコア・フィードウッドは馬車の窓から、壮大な純白な街並みを眺めていた。

「どうだった、スコア」

向かいに座る軍人がそう言った。

その軍人は年齢三十代前半、黄色い髪に、細い長い目、知的な霧囲気を持っている。

ケイス・ラティル大佐だ。

スコアはラティルの方へ向き直る。

「はい……？」

「どうだったかね、数万の兵士の前に立ち、皇帝陛下と元帥に称えられた気分は……」

それを聞いてスコアは恥ずかしそうに少しうつむく。

「あ……そ、その、転ばないようにすることです、いっぱいいっぱい……」

スコアは困ったように笑う。

「それ以外は……何も……」

それを聞いてラティルは上機嫌に笑った。

「いかにも君らしい」

ラティルはスコアの腰に視線を移す。

「それを少し見せてくれないか」

「……これですか？」

スコアは自分の携えている剣を握った。

「ああ、その皇帝陛下からいただいた剣だ。確か名前は……ブリテイングルド、だったね」

「はい」

スコアは剣を腰から外し、両手で横向きに持った。
その剣をラティルはまじまじと見つめる。

「……このような形で皇帝から直接褒美をいただいた者は、五年前のロストブルー將軍と君の二人だけだそうだ。ロストブルー將軍は、世界三大金属のルーティアの青剣をいただいたそうだ。非常に名誉なことだよ。……刃も見せてくれないかい？」

「あ……はい」

スコアは鞘から刃を少し引き抜く。

刃からはまばゆい純白の輝きが放たれた。

ラティルはその刃を凝視する。

「ほう……すばらしい剣だ。この白い輝きは……おそらくは世界三大金属、その中で最も価値の高い金属であるサンティーンネシスだな。サンティーンネシスのみの刀身に、この出来栄え……世界で現存する剣の中で、最高の剣と言ってもいいだろう」

「ボクには、似合わない剣でしょうね」

「そんなことはない、君にこそふさわしい剣だよ」

ラティルはゆっくりとほほえみを浮かべた。

その時だった、別の小型馬車が急に後ろから隣に並んできた。

「おや、これは……」

車両の奥から太い男の声が響く。

四十代前半の男だ。黒い髪に深い黒ひげ、太い眉に鋭い目。威厳のある風貌をしている。隣には護衛らしき柔らかい赤髪の剣士も乗っている。

「君はスコア・フィードウッドだろう？」

「あなたは？」

「私はジオ・グランロイヤーという者だ」

その言葉にラティルが反応した。

「グランロイヤー？ まさか総務大臣閣下ですか」

グランロイヤーは人なつっこそうな笑顔を浮かべる。

「ああ、そうだ。なに、別に気にしないでくれ、興味本位で見てみただけだからな。なあリーヴァル」

「はい」

護衛の剣士リーヴァルが小さく声を出した。

「このたびの功績、流石だよ。君のさらなる活躍に期待するよ。じやあ、私はこれで失礼する」

グランロイヤーが乗る馬車は速度を上げ、そのまま追い抜いていってしまった。

追い抜き際に、スコアは、リーヴァルという剣士が自分を鋭く見つめていたのに気づいた。スコアは一瞬眉を寄せる。

「どうしたスコア？」

「い……いえ」

「しかし首都だけのことはある。著名な人物にたびたび会うな。そうだ、スコア。このまま街を出てもいいのだが、せつかくの首都だ。どこか寄っていききたい場所はないかい」

「いえ……せつかくですが、できれば早く帰りたいですね」

スコアは申し訳なさそうに笑った。

「どうもこの街にいと不安な気持ちになってくるんです」

「不安……？ 何についてだね」

「いえ、理由は特にないんですが……」

「ふむ、そうか……」

スコアは窓の景色に目を移した。

（なぜだろう……この街からは、死の臭いがする……）

クロコは草原に挟まれた昇り道を歩いていた。人一人いない静かな道だ。

ふと、眼下に広がる景色に目を移した。

建物の集団の純白な景色が広がり、その隣に青い海の景色が広がっていた。白と青の美しい景色が目に入る。

クロコは丘の上からパシフィルドの町を見下ろしていた。

再び前を向き、歩き始める。

少し歩くと、クロコの目に、ある景色が入ってくる。緑の草の中に浮き出た、純白の景色だ。

クロコが歩くと共に、視界を覆いつくすように巨大な屋敷が目の前に広がった。

足を止め、屋敷を見上げるクロコ。

「ここが……ライトシュタインの屋敷……」

クロコは高い石壁の塀に取り付けられた鉄柵の門の前に立った。巨大な門は固く閉ざされている。

クロコはその門を力任せにガンガンと叩く。

「おーい！！ 誰かいなかー！！ 門を開けろー！！」

クロコの高い大声と、叩かれた門の金属音が辺りに騒がしく鳴り響く。

しばらくその音を響かせていると、剣を携えた警備らしき男が二人、中から姿を現した。

柵越してクロコをにらみつける。

「なんだ？ きさまは」

クロコも思わず軽くにらみ返す。

「ソラに会いに来たんだ。ここに入れる」

警備の一人が眉を寄せながら口を開く。

「……？ 何を言ってるんだ。ここはきさまのようなみすばらしい奴の来るようなところではない」

「なんだと……！？」

クロコはイラついた口調で言った。

「とつとと帰れ小娘」

「な……！！ 誰が小娘だ！！」

クロコは鉄柵を蹴り飛ばした。大きな音が鳴り響き鉄柵の一部がひしゃげた。

「な……なんだこの女」

「ほつとくのも危ないな。追い返すぞ」

二人の警備は門を開けると共に、クロコの前に立ち、剣に手を掛けた。

「おい小娘。今帰ればケガをしなくて済むぞ」

「うるせー！！ いいからここに住む人間と話させる！」

「どうやら帰る気はなさそうだな」

警備の一人が剣を抜いた瞬間だった。クロコの蹴りが直撃し、警備を吹っ飛ばした。

「あぶねーモン抜くんじゃねーよ」

蹴り飛ばされた警備は気絶している。もう一人の警備が驚いた。

「おい！！ 侵入者だ！！ 集まれー！！」

「え……？」

呆然とするクロコをよそに、中からワラワラと警備たちが集まってくる。次々と剣を抜く警備たち。

クロコはすぐに鞘を付けたままの剣を構えた。

「こ……こんなことしに来たわけじゃねーのに……！」

クロコは襲い来る警備たちを次々と剣で殴りとばした。

（クソ……これじゃあホントに侵入者じゃねーか！！）

「いいから話をさせてくれよ！」

クロコの言葉も聞かず、警備たちは次々と襲いかかってくる。十人近くの警備を殴りとばしたところで、残りの五、六人の警備はクロコの強さを恐れ、じりじりと距離を取り始めた、その時だっ

た。

「何事だ」

静かな声が突然響いた。

クロコは見た、中から一人の男が歩いてくるのを。

その男は年齢三十代後半、黄色い髪に、高く整った鼻、何物にも興味のないような無機質な目をしている。

警備たちは一斉にその男を見る。

「ザ……ザベル様」

クロコもその男を見る。

（こいつが……ソラの父親……？）

「あ……あなたがライトシュタインか？」

男は静かにため息をついた。

「この家系の者は皆ライトシュタインだが……」

「国軍の將軍の……」

「何の用かね」

「ソ……ソラに会いに来たんだ」

ライトシュタインの表情は変わらない。

「そのような人物はこの屋敷にはいない」

その言葉を聞いて、クロコはドキツとした。

「ほ、本当にいないのか……？」

「いたとしても、君のような者に教えはしないがな」

「オ、オレはあやしい人物じゃない！」

「自分からあやしいという人間は少ないだろう」

「オ……オレはソラに会いに来ただけなんだ」

「娘の名を言えば、取り合ってもらえなくても思っているのか？」

「じゃあ……どうすればいいんだよ」

「とりあえず、その剣を置きたまえ。武器を持っている相手を疑わない方がどうかしている」

「剣をだと……！」

クロコは一瞬ライトシュタインをにらみつけるが、少し考えたあと、あきらめて剣を足元に置いた。

「剣を取り上げろ」

ライトシュタインの命令で、警備の一人がクロコの剣を取り上げた。

「く……!!」

クロコは思わず声を漏らしたあと、ライトシュタインを見つめる。

「これで、話をしてくれるのか?」

「聞くだけなら聞こう」

「オレはソラの……その……友達だ。フルスロツクの街で、ソラによく世話になってた。けど、急にソラのやつがいなくなって、ここにいるかと思って……」

「先ほども言ったが、娘の名を言ったところで取り合う理由はない。素性も知れん人間を信用することなどできない」

「オレの名前は……」

「名前など意味がない。言葉などいくらでも偽れる」

ライトシュタインは警備たちに目配せする。

「この者の身柄を確保しろ」

警備たちは剣を一齐にクロコに向けた。剣に囲まれるクロコ。

「く……!!」

クロコはライトシュタインの目を見る。

「頼む！ 信じてくれー！」

「何の理由があって信じると？」

「じゃあ……どうすれば信じてくれるんだよー！」

「君が何をしたところで、私を信じさせる要素になどなり得ない。ただ確かな事は、剣を持った女が、庭の入口で警備を殴り倒したという事実だけだ。信じることができるはずもない」

「クソ……」

（なんてオッサンだ。ソラの父ちゃんとは思えねー……！！）

警備たちは一斉に刃をクロコに近づけてくる。

（クソ……素手だが……やるしかないのか）

「やめてー！」

突然、高い声が響いた。

皆がその声の方向を一斉に向いた。

クロコの背後、門の外側に一人の少女が立っていた。

年齢十五、六、白い髪に、ぱっちりとしたきれいな目をした少女だ。

ソラ・フェアリーフが、屋敷の外の道に立っていた。

ソラは無表情で、ライトシュタイン将軍を見つめていた。

「三年ぶりですね……お父様」

ライトシュタイン将軍は表情を変えず、ソラを見る。

「ソラか……」

クロコを挟んで、二人は静かに見つめ合っていた。

5 - 2 パシフィルドの丘の上で

ライトシュタイン邸の庭園の芝生の上でクロコは一人座りこんでいる。腰には返された剣を付けている。

クロコはゆっくりと庭園に置かれたテーブルの方を向いた。そこにはソラとザベルが向かい合った形で座っていた。

ソラはイスに座り込み、ザベルの目をじつと見る。

（あの目……昔とほとんど変わらない）

無機質な目がソラをじつと見つめている。

不意に、その目が、クロコの方を一瞬見た。

「あの少女が、解放軍のクロコ・ブレイリバーだとはな」

「クロコを知っていたのですか」

「軍内で最近話題になっている。『灰の吸血鬼』ウィフ・レイズボーンを倒した女剣士としてな」

「……………」

「話題になったのは最近だが、過去には『裂破の獅子』ベイズ・フ

アウンド、アサシン軍総督ラギド、『死神』フレア・フォールクロスなど、名立たるつわものを倒している。フルスロック基地のグレイ・ガルディアの名で今まで隠れていたが……私は前々から名前だけは記憶していた」

「けれど、解放軍人としてではなく、クロコはクロコとしてここに来たんです」

「軍人はしばし、仕事と私情の区別がつかなくなるがな」

「それでも、この場では、クロコがお父様を傷つけることは、ありえません」

「……とりあえず、承知した、ことにしておこう」

ザベルはソラを見た。

「それで……おまえは、今さら私に何の用だ」

そうやってザベルはティーカップに口を付けた。
ソラはザベルの目を見つめる。

「私は……三年間、外の世界を、見てきました」

「そうか……」

「お父様が過去、私に、戦争は人だと言ったこと。あれの意味が少しわかったような気がします。私はいまだに戦争を誤った行為だと思っていますが、もう戦争そのものを愚かだとも、戦争を行う人を愚かだとも、思っていないません」

ソラはそう言って、ティーカップに口を付けた。
ティーカップをゆっくり置いたあと、ソラは再び口を開く。

「だから、軍人としてのお父様を認めることは、今の私にはできません」

ソラはザベルの目を見つめながらはつきりと言った。
ザベルは少しのあいだ黙ったあと、ゆっくりと口を開く。

「だからなんだ……？」

ザベルはじつとソラを見た。

「おまえが私の前から消えた理由は、私が軍人だからという理由ではないだろう」

ソラの表情がわずかに険しくなった。

ザベルはソラのティーカップを持つ手に目を移した。

「先ほど紅茶を飲んだ時、指先がわずかに震えていたな。強い感情を抑えている証拠だ」

ザベルはソラの目を見た。

「おまえはずっと、私からほとんど目を逸らさない。見たくないものを、無理に見ようとしている証拠だ。言葉とは裏腹に、おまえの体は、私への不快な感情をはつきりと表している」

ソラの口元がわずかにきつくなった。

「憎んでいるのだろう？ 私を……ファミリスよりも戦争を選んだ私を」

ザベルは表情を変えない。対してソラはずかに目をきつくした。

「憎んでいないと言えば、ウソになります。けれど……あの時の私は……」

ソラは必死でザベルを見つめた。

「あの時の私は……自分の判断だけで、家を出るという決断をしてしまった。あなたが戦争を選択したという理由も何も聞かず、あなたの言い分を何も聞かない形で……」

ザベルは表情を変えず、ティーカップに口をつける。

「あの時の戦争の話と同じように、あなたにも、何か言うことがあったはず。だからこそ、今、それを聞きたいんです」

ザベルはゆっくりティーカップを置いたあと、口を開いた。

「そんな理由など、何もない」

ザベルは無機質な目でソラを見つめた。

「あるのは、私がファミリスより、戦争を優先したという事実だけだ」

その言葉を聞いて、ソラの顔がわずかにこわばった。

「本当に、何もないと……?」

ソラは思わず強い声を出した。

「あなたは本当に、お母様に対して、何も感じていないと……!?!」

「愛していた………と言え、おまえは信じるのか?」

ソラは乱暴に立ち上がった。

「あなたは……!?!」

ソラは悲しそうにザベルをにらみつけた。

「あなたとともに話そうと思った、私がバカでした」

ソラはザベルから顔をそらし、クロコの方へ足早に歩いて行った。

クロコは近づいてくるソラに気づく。

「話は終わ……」

クロコは言いかけてた言葉を止めた。ソラの目から涙がこぼれていた。

「私……バカだ」

クロコとソラは静かにライトシュタイン邸の門を抜け、外へ出た。外へ出てすぐ、ソラはライトシュタイン邸の石壁に寄り掛かって立った。クロコも隣で寄り掛かる。クロコはソラをチラッと見る。

「なあ、ソラ……オレ、おまえを探して……」

ソラはクロコの顔を見ない。ずっと黙っている。クロコは口を閉じた。

小さな風が辺りの草木を揺らした時だった。

「ソラ様……」

老人の声が響いた。

二人がその声の方向を見ると、鼻の長い年寄りの執事が立っていた。

「レッドロッド……」

ソラに名を呼ばれ、レッドロッド執事はゆっくりとお辞儀した。

「本当に……大きくなりました」

レッドロッドはゆっくりとソラの前に立った。

「三年ぶりに……少し話をしませんか？」

ソラとクロコはレッドロッド執事に招かれて、再び屋敷の中へと

入った。

長い廊下を歩いている時、遠くの扉から、ライトシュタインが出てきた。白い将軍服に身を包んでいた。三人に気づくが、何も言わず歩き出し、横道へと姿を消した。

レッドロッドは二人を一室に招き、テーブルに座らせ、紅茶を入れると、向かい合う形で自分も座った。

レッドロッドは向かい側に座るソラの顔をまじまじと見つめると、ゆっくりと口を開いた。

「本当に大きく……美しくなれた」

ゆっくりと包みこむような口調だった。クロコの方にも目を移す。

「ご友人もおつくりになられたようで……」

ソラが一瞬返答に困るあいだにクロコが口を開いた。

「ああ」

ソラは一瞬クロコと逆の方向に視線を逸らしたあと、レッドロッドを見た。

「その……レッドロッドも、元気そうで本当に、うれしい。だけど私、もう……」

「屋敷を出られる前にほんの少しだけ、この老人の話をお聞き願いたいのですが……」

「……どんな話？」

「ザベル様についてです」

ソラは少しのあいだ黙った。

「……聞きたくない」

レッドロッドは安心させるようにほえんだ。

「きっと、ソラ様がご想像しているような話にはならないと存じます」

ソラはレッドロッドの目を見つめた。

「うん、分かった……」

ソラの返事を聞いて、レッドロッドはほえんだあと、ゆっくりと語り始めた。

「私はこの屋敷に長年召し仕えております。ザベル様が生まれる前からずっと……、だから、ザベル様が赤ん坊の頃から関わっており、ザベル様のことはよく存じております」

レッドロッドは遠い過去を見つめるような表情で語っていた。

「小さい頃のザベル様はとてももの静かな方でした。あまりものをおっしゃらず、静寂を好む方でした。ですが、十代の半ばでザベル様にはある変化が起き始めたのです。ザベル様はその頃から『人間』に興味を持ち始めたのです」

「人間……?」

「はい、けれど、それは人を、人としてではなく、モノとしての興味です」

「モノ……？」

「はい、ザベル様はその頃から、人の心を分析し、人を操ることに興味を持ち始めたのです。言葉を操り、目を操り、表情を操り、しぐさを操り、人の心を意のままに支配しようとし始めたのです。ザベル様のその技術は非常に精巧なものでした、それによってザベル様の周りには、またたく間に人が集まり、その方々は、ザベル様に従い、尊敬し、崇拝しておりました。そのため、ザベル様はお若い立場で、次々と出世していきました。富、地位、権力、人望、その頃のザベル様はあらゆるものを手に入れていました。けれど……」

レッドロッドは少し視線を落とした。

「ザベル様は、徐々に気づいていったのです。あらゆるものを手に入れているはずなのに、自分自身が孤独なことに。自らを慕う人々はすべて、偽りの自分に従っている。どれだけの人に囲まれても自分は孤独。ザベル様の心は決して満たされることはありませんでした。孤独の苦しみがザベル様を支配し続けていました。情けない話、私にもザベル様を苦しみから救うことはできませんでした。そんなときでした、ザベル様がファミリス様と出会ったのは……」

ソラは少し反応した。

「お母様と……」

「ええ、そうです。ファミリス様は、いつでも、自然に笑い、自然に話し、いつもありのままでした。ザベル様はそんなファミリス様と接するうちに、徐々に本来の自分を取り戻していったのです」

「……………」

ソラは少し視線を落とし何かを考えていた。

「ソラ様」

レッドロッドはソラの目を見つめる。

「私は……これだけは断言できます。ザベル様は、まぎれもなく、ファミリス様のことを愛しておられた。そして……ソラ様、あなたのこともです」

その言葉を聞いて、ソラはわずかに驚く。レッドロッドは話を続ける。

「ザベル様は寡黙な方です。そしてそれがあの方本来の姿なのです。本当に愛する二人の前だからこそ……あの方は、自分を偽りたくはなかったでしょう」

「だけど……！」

ソラは強く口を開いた。

「あの人は……お母様を見捨てた」

レッドロッドは少しのあいだ黙ったあと、再び口を開く。

「ファミリス様がどんなお方なのか、ソラ様もご存じでしょう。あの方は、自分より、いつも他人を大切にされるお方なのです」

ソラはふと、ファミリスが死ぬ前、ソラの前で見せた笑顔を思い出した。

泣きそうなソラの前で、安心させるようにファミリスは笑顔を浮かべて言った。

「ソラ……心配しないで、私は大丈夫だから」

「でも、お母様……」

「大丈夫、私は大丈夫だから……」

レッドロッドは静かにソラを見つめる。

「そして、ファミリス様は軍人としてのザベル様の働きについてもよくご存じでした。あの方が戦況を左右するほどの影響力を持っていることも。あの夜、ザベル様は、ファミリス様でなく、任務を選択したのは事実です。けれど、二人きりになった時、ファミリス様がザベル様に対してどんなことをおっしゃったのかは、想像に足ることと存じます。ザベル様はきっと……ファミリス様の為に……」

ソラは黙ったまま小さくうつむいた。

「そのあと、ソラ様が姿を消したあと、ザベル様はずいぶん悲し

んでおられました。ほとんど内面を見せないあの方が、私にもはつきりと分かるほどに……。そして、一言だけ、私の前でつぶやいたのです。『ソラにとって、母親を見捨てた者と共に暮らすのは、耐えがたかったのだらう』と……」

ソラは、三年前、自分が最後にザベルに放った言葉を思い出していた。

「愛していなくてもいい、それでも一緒にいてあげて！ 最後一緒にいてあげて！！ お願い……お願いだから………」

レッドロッドの話が終わったあとも、ソラはなにとも言わず呆然と座っていた。

レッドロッドは、その様子をしばらく見たあと、再び口を開いた。

「……………ザベル様はもうすぐ任務のためにお屋敷を出られます。しばらくは戻らないとおっしゃっていました。もしも何かお伝えしたいことがあるのであれば、今すぐにでも動いた方がよろしいかと存じます」

その言葉を聞き、ソラは顔を上げたが、迷ったように、その場に座り込んでいた。するとクロコが立ちあがった。

「ソラ、答えは初めから決まってるんだろ」

クロコはソラを見つめた。

「いくぞ」

ソラはクロコを見た。

「うん」

ザベルは小型の馬車に乗り込もうとしていた。ドアを開け、ゆっくりと入口に足を掛ける。

「お父様！」

ソラの声を聞き、ザベルは足を下ろし、ゆっくりと声の方向へ振り返った。

少し離れたところにソラとクロコが並んで立っていた。ソラとザベル、二人は互いに正面で向かい合っていた。

「いまさら、何の用だ」

ザベルは無表情で言った。無機質な目がソラを見つめる。

けれど、ソラはもう一切動揺を見せなかった。数歩前に進み、しっかりとザベルを見つめる。

「私は本当は、薄々気づいていたんです……………あなたがお母様を愛していたことを……………あなたがお母様の願いで、戦場へ行ったことも。けれど当時の私は、それを無意識で否定したがっていた。あなたを憎むほうが、楽だったから」

ザベルは黙ってソラを見つめていた。

「けれど、今の私も、まだ、あなたを許すことはできない。だって、あなたには、最後までお母様のそばにいてほしかった。それが私の願いだっただから……だから」

ソラはザベルの方をじっと見つめた。

「一言だけ、謝ってはいただけませんか？ それだけで、いいんです」

ザベルはわずかに口元をきつくしたあと、ゆっくりと口を開いた。

「言葉など……」

「確かに……」

ザベルの声を、ソラがさえぎった。

「確かに言葉は偽れます。それでも……言葉は……」

ソラはザベルを見つめていた。

「言葉はきつと、人と人の心をつなげるためにあると思うから」

ソラは真っ直ぐとした瞳でザベルを見つめていた。

「私なら大丈夫です。あなたの言葉が真実か偽りか、私なら分かります。だって私は……」

ソラはじつとザベルを見つめる。

「あなたの、娘だから」

ザベルは黙った。静かにソラを見つめている。
ソラもザベルを見つめていた。
辺りにわずかに小さな声が響いた。

「ファミリスに、そっくりだな、おまえは……」

その声はわずかに震えていた。
ザベルの顔から、一粒の涙がこぼれ落ちた。

「すまなかった、ソラ」

その言葉の直後だった、ソラはザベルに向かって、走り寄った。

「お父様……！」

そのままソラはザベルの胸に飛び込んだ、そして大きな声で泣き出した。

ザベルはそんなソラの背中に優しく手を置き、抱きしめた。
ソラの鳴き声がザベルの胸の中で小さく響く。

二人は静かに、長いあいだ、抱きしめ合っていた、まるで三年の間を埋めるように。

その後、ザベルは再び馬車に乗り込もうと、入口に足を掛けた。

ゆっくりと、前に立つソラを見つめる。

「この任務もまた長くなるだろう。しばらくはおまえと会うことはできない」

ソラは優しくほえんだ。

「それでも構いません。また必ず会えるから」

ザベルはソラを静かに見つめたあと、車内に視線を移した。

「お父様」

ソラの声で、ザベルは再びソラを見た。

「また……一緒にチェスをしましょうね」

「ああ」

ザベルは返事をしたあと、車内に視線を戻す。

「楽しみにしている」

ライトシュタインはその言葉を残し、馬車の中へと姿を消した。馬車は走り出した。

ソラは屋敷の外へ出て、小さくなっていく馬車の背中をずっと見つめていた。

クロコはゆっくりソラに近寄った。

「良かったな、ソラ」

ソラはクロコを見てほえんだ。

「うん、ありがとう。クロ」

ソラは再び、馬車の方向を見ようとした時だった。

「あっ!!」

ソラは何かに気づき、声を上げた。

クロコも思わずソラのんでいる方向を見る。

「な……なんだあれ？」

丘の下に広がる純白の町の景色の隣り……

眼下に広がる広大な青い海、

その水平線まで続く青いカーペットのような景色の中に、白い曲線のラインが滑らかに浮かび上がっていた。そのラインは、悠然とそして、なだらかに揺れながら、青い景色の中に静かに存在していた。

クロコはそれを呆然と見下ろす。

「な……なんだアレ……」

クロコの言葉にソラが答える。

「『パシフィード・ライン』……年に一度来る、クジラの隊列……」

「アレ、クジラの背中なのか……」

「うん、年に一度、親子のクジラの大群が……この海に現れるんだ」

「そっか………そうなのか」

広大な海の上、水平線から、白い曲線が現れ、また水平線へと消えていく。その長い長い白色のラインは、海の中で輝いていた。

「クジラの、隊列………クジラの親子か……」

「うん」

「親子……ずっと、仲良くいれるといいな」

「うん、そうだね……」

クロコは、ソラに視線を移し、少しのあいだ見つめた。

「ソラ」

クロコはソラに話しかけた。

「フルスロツクに、帰らないか？」

「でも……」

ソラは戸惑う様子を見せた。
クロコはじっと見つめた。

「あんな悲しそうな目で、別れることが、本当に正しいことなのかな?」

「……………」

うつむくソラを見て、クロコは頭をかく。

「おまえが街を去るときに言った言葉、確かにあれは正しいのかもしれない。けどよ、別にそんなこといちいち考え込む必要はないんじゃないか?」

クロコはソラを見つめた。

「おまえがそこにいたいなら、きっと、おまえはそこにいていいんだ」

その言葉を聞き、ソラは顔を上げてクロコを見た。

「クロ……………」

「フルスロツクのやつらも、おまえがいなくて、さびしがつてる。フロウや、サキだって……………」

するとソラはクロコの目をじっと見つめた。

「クロは…………?」

クロコは困ったように目をそらす。

「オレは…………その……………」

ソラは静かにほえんだ。

「いるのかいないのかも分からないのに、こんな遠くまで……わざわざ来て………」

ソラは笑顔を見せた。

「分かった、帰ろ、クロ。フルスロツクへ……」

クロコも思わず笑みを浮かべた。

「ああ！」

帰り際に、レッドロットの元に二人は寄った。

「ありがとう、レッドロット」

ソラがお礼を言うと、レッドロットは嬉しそうにほえんだ。

「本当に良かった……」

「あなたのおかげでお父様と解り合うことができた」

「もったいないお言葉です……… ああ、そうだ、少々お待ちを………」

レッドロットはそう言って、部屋をサッと出た。

ソラとクロコは思わず顔を見合わす。
レッドロッドはすぐに戻ってきた。両手に大事そうに小箱を持っていた。

「三年前のあなたの誕生日の日、ザベル様があなたのために用意していた誕生日プレゼントです」

ソラは少し驚いた。

「ザベル様はわざわざこれを取りに行くために、遠くまで出かけ、不幸にも途中で馬車が故障し、誕生パーティに遅れてしまわれたのです」

ソラは箱を受け取り、ゆっくりと開けた。
箱の中には白い美しい指輪が輝いていた。

「この指輪は、あらゆる災厄から持ち主を守るために作られたものでございます。ザベル様が、ソラ様の幸せを願い、特別に作られたものです」

ソラの手がわずかに震えた。

「お父様……」

「ソラ様……どうかご無事で……そしてまた、ここに戻ってくる日を心待ちにしております」

「ありがとう……本当に、ありがとう」

二人は屋敷をあとにした。

パシフィルドを出る大型の駅馬車の車内、クロコの隣の席で、ソラは小さな箱を開け、改めて指輪を眺めていた。それをクロコものぞく。

「高そうな指輪だな」

「もう！　そういう問題じゃないでしょ！」

ソラは指輪を手にとって色々な方向で眺める。

「わずかに青い光沢……多分原料は三大金属のルーティア」

クロコはその指輪をじっと見ながら少し眉を寄せる。

「でもこの指輪のデザイン、どこかで見たことねーか？」

その言葉を聞いて、ソラはハツとした。

「この指輪……まさか神具!？」

「……!?!」

ソラの言葉にクロコも驚いた。

「え……!?!　神具って、呪いを解く、アレか」

「間違いない。災厄から守る指輪って言ってたし……」

ソラはじつと指輪を見つめる。

「加えてルーティアは、あらゆる金属の中で最も神聖な金属って言われてる。きつとこの指輪、神具の中でも最高級のものだと思う」

ソラはクロコを嬉しそうに見た。

「この指輪だったら、クロコの呪いもきつと解けるよ！」

しかし、クロコの反応は薄かった。

「その……悪いんだが、ソラ、それ、ちょっと待っててくれないか？」

「え……？」

クロコは顔をポリポリとかく。

「この前のセウスノールの戦いで分かったんだが、どうも男に戻ると、体の変化に技術がついていかねーんだ。今から一から体に合わせて直してたら多分間にあわねー」

「じゃあ呪いを解くのって……」

「ああ、多分、戦争が一段落ついたあとだ」

「でも、元に戻れば、動きは良くなるんでしょ？」

「まあな、元に戻れば、ある程度の強さは簡単に手に入る。けどそれを踏まえても、このタイミングだと、今の状態がベストだ」

「……………」

「今……何かをつかみかけてるんだ。それを逃すわけにはいかねー」

「そっか……うーん、ちょっと残念」

「おまえが残念がるなよ」

「だって……」

「そんな残念なことばかりじゃねーよ」

クロコはそう言っ、服からあるものを取り出した。青い宝石が入った髪飾りだ。
ソラは驚いた。

「これって……」

「おまえの髪飾りだよ」

「でも……だって……あれは、川に……」

「あんま面倒かけせんなよ」

ソラは髪飾りを受け取り、大事に髪飾りを握りしめた。

「ありがとう、ありがとう……クロ」

ソラの目から、温かい涙が小さくこぼれ落ちた。

5 - 3 最後の勝負

灰色の四角い建物が連なるフルスロツクの街並み。その街全体を見下ろすようにフルスロツク基地はそびえ立っていた。

その廊下を黒い軍服を着た二人の若い軍人が歩いていた。

一人は見た目の年齢十四、五、非常に小さな背丈で、柔らかい灰色の髪、整った顔をしている。フロウ・ストルークだ。

もう一人は年齢十三、四、一か所はねた黄色い髪、ぱっちりした目に透きとおるような緑色の瞳をしている。サキ・フランティスだ。サキは小さくため息をついた。

「どうしたの、サキ君」

フロウがサキの顔をのぞくと、サキは不安そうに口を開く。

「二人はちゃんと帰ってくるんでしょうか。なんだかボク……不安で不安で」

「そうだね、二人が帰ってくることが一番いいけど、一番可能性が高いのは、ライトシュタイン邸に行った方がいいけど、空振りして、警備の兵に追いかけられるってパターンかな……」

「そ、それならまだいいですよ。もしかしたら二人……」

「あっ!!」

フロウの声にサキは驚く。

「ど、どうしたん……あつ!!」

サキも気づいた、向かいから、歩いてくる二人の姿に、クロコとソラが並んで歩いてきていた。

フロウとサキはすぐに駆け寄る。

「ソラちゃん！」

フロウはソラの前に立ってニッコリ笑った。

「おかえり」

「フロウくん……」

ソラはすまなそうに笑みを見せた。

「良かったです。ボクは本当にどうなるかと……」

サキは安心した様子だ。

「……ん？」

するとクロコが声を漏らした。みんなとは全く別の方向を見ている。

それにつられて三人がその方向を見ると、少し離れた所から一人の軍人が歩いてくるのが見えた。

その軍人は、年齢二十代半ば、長身で、長めの白い髪を後ろに結び、冷たい目つきに青い瞳、どこか気品のある顔立ちをしている。

フルスロツク基地の司令官ファイフ・アールスロウだ。

アールスロウは四人を見ながら、そのまま一直線に歩いてきた。そしてソラの前に立ち、見つめた。

「すまなかったな、ソラ・フェアリーフ」

その言葉を聞いて、ソラはほえんだ。

「いえ、アールスロウさんの立場を考えれば、当然の行動だったと思います。それに、私がここに帰ってこられたのはあなたのおかげなんですよ」

「……………」

「でも良かったです」

サキは感動したような様子で言った。

「二人がいなくなった時は、もしかしてこのまま二人とも戻ってこないかもって……………」

素早くつつこむクロコ。

「ソラはともかく、なんでオレもなんだよ。おまえいつたいどんな想像してたんだ？」

グラウド東部の首都ゴウドルークス。そこに連なる純白の巨大建築物を、さらに見下ろすようにグラウド国軍本部基地はそびえ立っていた。巨大な建物を一ヶ所に集めたような複雑な造形をしており、特に中心部は天にも伸びるような高さだ。

その基地の広い廊下を一人の将軍が歩いていた。年齢二十代後半、長身で、サラッとした黄色い髪、高い鼻、形の良い目には青い瞳が浮いている。

グラウド国軍中將のディアル・ロストブルーだ。

「おや……？」

ロストブルーは廊下を歩くライトシュタイン中將の背中を見つけた。早歩きで追いつく。

「ライトシュタイン中將」

「ロストブルーか……」

ライトシュタインは無表情でロストブルーを見た。
ロストブルーはほほえむ。

「何か良いことでもありましたか？」

「なぜそう思う？」

「表情がいつもより柔らかいような気がしたのでね」

「そうか……まあ、少しな」

「それは何よりです」

ロストブルーはほほえむ。

「君はずっとここにいるのか？」

ライトシュタインの言葉に、ロストブルーは困ったようにほほえんだ。

「ええ、オルズバウロ元帥がなかなか出してくれないのです」

「確か君は妻と娘がいたな。屋敷には帰っているのかね」

「もう三ヶ月も帰っていません。空いている時間はミッシェを連れてグラウドを旅するので……」

「そうか」

「妻にも娘にも、さびしい思いをさせてしまっています。それでも帰って来たときはいつも、笑顔で出迎えてくれるんですよ。私にはもったいないほどすばらしい家族です」

ロストブルーは少しうつむいた。

「彼女たちには、いつも与えられてばかりいる。だから、世界が平和になった時は、彼女たちには多くのものを返したいと思っています」

「そうか」

ライトシュタインは小さく言った。

「せつかくの家族だ。大切にしまえよ」

「……そうですね」

「ところで、今時間は空いているか？」

「ええ、少し」

「なら、例の件について少し話をしよう」

基地内の狭い一室、そこで机を挟んで二人は座った。
ライトシュタインが静かに話します。

「『ダークサークル』に関わるもの、今のところ目星をつけているのはレットル皇務大臣、ホーククリフ大将、マスティン軍務大臣だ。現在レットル皇務大臣についてはある人物に調べてもらっている」

ロストブルーは資料に目を通し、置くと、ライトシュタインを見つめた。

「ホーククリフ大将の調査については任せて下さい。適任者を知っています」

「ふむ、ではまず、その二人に的を絞っていかうか。情報を得次第、互いに報告しよう」

「はい」

それから数十分後、ライトシュタインは、クラウド国軍本部基地から少し南に位置しているブリアント国会議事堂を訪れた。

廊下を歩き、ある部屋の扉をノックする。

少しして扉が開くと、中からグランロイヤー総務大臣が出てきた。

「ああ、ザベル」

人なつっこそうな表情でライトシュタインを見る。

グランロイヤーに招かれる形で、ライトシュタインは部屋へ入った。

部屋にはグランロイヤーのほかに、男性の秘書と護衛の剣士リールヴアル、そしてきれいな身だしなみをした一人の男が座っていた。

その男は、年齢は五十代前半、大きなまゆ毛に、小さな目、硬い表情をしている。

ライトシュタインはその男を見て一言言った。

「これはレッテル皇務大臣、お久しぶりです」

レッテル皇務大臣はゆっくりと笑みを作った。

「ライトシュタイン中将こそ、変わらない様子で……」

ライトシュタインはグランロイヤー総務大臣に視線を移す。

「例の件について話を聞きに来たのだが、今は大丈夫かね」

「あ……ああ、ちょうど、話が終わりかけたところだからな」

二人の様子を見て、レッテル皇務大臣は立ち上がる。

「何やら忙しそうですね、総務大臣。ならば、私はこの辺で……」

「ええ、とても参考になりました」

レットル皇務大臣はゆっくりとした足取りで部屋を出ていった。

レットル皇務大臣が部屋を出てから、少し間を置いてからライトシュタインが口を開いた。

「人払いを頼む」

「ああ、悪いが少しのあいだ外で時間を潰しててくれないか？」

グランロイヤーの言葉で、秘書とリーヴアルは部屋から出ていった。

ライトシュタインとグランロイヤーの二人きりになると、互に向かい合う形でイスに座った。

「レットルについてはどうだったかね」

ライトシュタインがそう言うと、グランロイヤーがわざとらしく大きなため息をついた。

「ヒヤツとしたよ。ふつつ本人を目の前にして言うかね？」

「余計なことさえ言わなければ、気付かれることなどあり得ない」

ライトシュタインは表情を変えずに言った。

「そうかい、君には頭が下がるよ」

少し皮肉っぽい口調だった。

ライトシュタインはまるで気にしてない様子だ。

「それよりも……」

「ああ、分かっているよ」

グランロイヤーはそう言ったあと、徐々に、表情を険しくしていった。

「まだ情報半分だが、調べていて驚いたよ。少し不審な点が目立つな」

「ほう……具体的に？」

「彼の周りに探りを入れて見たが、どうも彼はプライベートで理由の分からない外出が多いらしい。さっき本人と話したときも、話の所々に筋の通らない部分があった。それから……リーヴァルに彼の調査を頼んだんだが……」

「あの剣士か……」

ライトシュタインの口調が少し厳しかった。

「そんな声を出すな、リーヴァルには彼の調査以外は何も言っていない。それに立场上、色々な要人の調査をするのはしよっちゅうだ。別に今回のことを特別視しないさ。話を戻そう……それで、リーヴァルがレットルを尾行した時、レットルの口からある気になる名を

聞いたらしい」

「気になる名……？」

グランロイヤーはライトシュタインを見つめた。

「『レギオス』」

「レギオス……？」

「ああ、確かにそう言ったらしい」

「どこで、誰と話しているときに言っただ？」

「ゴウドルークス内の高級レストランさ。相手は特定できなかったらしい。その時だけ、なぜか不自然に警備が厳重で、声を拾うのがやっとだったそうだ」

「『レギオス』……それが、やつらの組織の名か？」

「そう考えるのが妥当だろうな」

それを聞いてライトシュタインは小さくうなずく。

「ふむ、今までの話を聞くと、どうやら……」

「ああ、当たりかも知れん。とにかく引き続き調査をしてみるよ」

「ああ、頼む」

ライトシュタインは一息ついて、再び口を開いた。

「レットルの件もそうだが、ルイ・マスティンについては……」

その言葉を聞いてグランロイヤーは一瞬表情を硬くした。

「それについては、もう調べたよ」

「ほう、いつの間に……で、どうだったのかね」

グランロイヤーはほほえみを浮かべた。

「……特に何も。彼は『ダークサークル』との関わりはなさそうだ」

「……そうかね」

「初めから疑う余地などなかったんだ。彼は私の親友だ、彼のことなら良く知ってる……」

「……分かった、特にないのなら、君を信じて、それについては終わりにしよう。仮に何かあった時は君に任せるよ。では、レットルの件を引き続き頼む」

「ああ、任せてくれ」

グランロイヤーはそう言って、ほほえみを見せた。

休日のフルスロツク基地の午前、その廊下をクロコは周りをキョロキョロと見渡ししながら早足で歩いていた。
そのまま広間へと出た時だった。
遠くを歩くアールスロウの姿を見つける。

「いた……！」

クロコはアールスロウに駆け寄った。

「アールスロウ！」

名を呼ばれ、小さく反応するアールスロウ。

「どうした、クロコ」

「まえした約束覚えてるか？」

その言葉を聞いてアールスロウはわずかに反応した。

「……ああ」

「最後の勝負。今……いいか？」

「構わない、受けて立とう」

フルスロツクの実技場、白い壁に囲まれた広い正方形の空間、そ

の木製の床の中央でクロコとアールスロウは向かい合った。

クロコは木剣を一回ビュツと振る。

アールスロウは長めの木剣を構える。

「クロコ、先に言うておくが、勝負は一回だ。どんな結果で終わっても、互いに文句は無しにしよう」

「ああ、当然だ」

クロコはアールスロウをキツとにらみつけた。

アールスロウも青い瞳でクロコをにらむ。

二人は互いに向き合って、剣を構えていた。

わずかな静寂が流れたあと、アールスロウが静かに口を開いた。

「……来い」

「言われなくても……!!」

クロコが動いた。疾風のごとき速さで、一瞬でアールスロウの間に飛び込む。

その速さにアールスロウは驚く。

「く……!!」

クロコの一瞬で放たれる斬撃にアールスロウは何とか反応した。

ガアンッ!!

互いの木剣が勢いよくぶつかり合った。その直後、クロコが一瞬で横をつく。

ビュンッ！！

クロコの閃光のごとき速さの斬撃を、アールスロウは紙一重で避けると、素早く突きを返す、その瞬間、クロコの蹴りがアールスロウの腕を木剣ごとはいじいた。

「……！」

ビュンッ！！

クロコの一撃はアールスロウの体に直撃した。アールスロウの体はのけ反り、木製の床に倒れた。

アールスロウが床に伏すと共に、実技場を静寂が支配した。クロコは静かに立ち尽くし、倒れたアールスロウを見下ろしていた。

アールスロウは動かず、しばらくの間、呆然と倒れていた。

「……勝った」

クロコの小さな声の実技場に響いた。

アールスロウはゆっくりと体を起こす、そして立ち上がった。

「……強くなったな」

その言葉だけを言って、アールスロウは静かに背中を向けて、出口へ向かって歩き出した。

そんなアールスロウの背中を、クロコはしっかりと見つめた。

「ありがとうございます……」

アールスロウは実技場を去っていった。

最後に一瞬だけ見せたアールスロウの顔には、確かな笑みが浮かんでいた。

5 - 4 ある休日

午前の鐘がフルスロツクに響く。フルスロツク基地の司令室では、アールスロウが机に腰掛け、多くの書類を手際よく片づけていた。そんな中、扉が小さくノツクされる。

「入れ」

扉が開き、フロウが入ってきた。

「フロウか……何の用だ」

「少し話があります」

フロウは真剣な顔でアールスロウを見つめた。

大型店がズラツと立ち並ぶ商店街は多くの人でにぎわっている。ここはフルスロツクのミリセルト大商店街。その石畳の道をクロコとソラが歩いていた。

「ここは相変わらずにぎわってるねー」

ソラが上機嫌に声を上げる。

「またここにクロと来れて良かった」

ソラはクロコを見てニコツと笑った。

そんな商店街を歩く二人を、物陰から二つの人影がのぞいていた。

「さーあ、今回はどんな展開になるのかな」

フロウは物陰からクロコとソラの様子をのぞき見る。

「や……やっぱり、こんなこと良くないんじゃないか……」

フロウの隣でサキが不安そうな顔をしている。

ソラは商店街をピョンピョンと歩く。

「さーて、まずはどこの店に行こうか？　ねえクロ」

「おまえはどこに行きたいんだ？」

「家具屋と靴屋と洋服屋とアクセサリー屋と……」

「おまえの好きな場所にしろよ……」

迷路のような入り組んだ道が続くシャルルロットの町。その商店

街で、スコアと一人の少女が歩いている。

その少女は、クロコとურიふたつの姿をしている、ただし雰囲気は違いひっそりと静かだ。アピス・ブレイリバーはスコアと一緒に商店街を歩いていた。

アピスは周りをゆっくりと見渡す。

「ここに来るのも久しぶり……」

「そうだね、アピスの引越しの時以来かな」

「大きな戦争のあとなのに、ここはほとんど変わらないね」

「うん、シャルルロットは大型基地はあるけど、戦場になったことは一度もないんだ。平和な町さ」

「平和か……。そういえば早朝は町の見回りだったらしいけど。その時も町には事件も何もなかったの？」

「いつも通りだよ、この町は治安がいいから」

「あやしい人とかもないの？」

「うーん、そうだね。そんな目につく人はいないけど。逆に見るからにあやしい人ってほとんどいないような気がする」

「そうかなあ、いるにはいる気がするけど」

「じゃあ、アピスはどういう人だったらあやしいって思うの？」

「え……？」

アピスは少し考える。

「手が……四本ある人とか……」

「そ……それは確かにあやしいかもね、ハ、ハハ……」

スコアは必死で笑った。

ミリセント大商店街の石畳をソラは上機嫌に駆ける。

「ほら、クロ、こっちこっち」

「おい、あんま、先に行くなよ。変な奴に捕まるぞ」

クロコが急いで追いつく。

「大丈夫だって、あやしい人なんて周りにいないし」

「バカ、あやしいやつってのは、どの町にも必ずいるモンなんだよ」

「前にここに来た時にからんできたベルトだらけ人とか？」

「うーん、そいつはそこまであやしくないんじゃないか。酔っぱらってたし、アークガルドにはそんなの山ほどいたし」

「じゃあ、どんな人が明らかにあやしいの？」

「どんな人っていわれてもな……手が四本あるとか……」

「人を見た目だけで判断しちゃダメだよ」

「じゃあ、どこで判断するんだよ」

「行動とか、様子とか、とにかく身体的特徴は人格の範囲外だから、そこで判断するのは適切じゃないと思うよ」

「ん……ま、まあ、そうか……」

二人の様子を陰からフロウとサキがのぞいている。

「なんかずっと歩きながらしゃべってるね」

フロウの言葉を聞いて、サキもじっと二人の様子を眺める。

「いいですよ、あんなに仲良く。ボクもあんな風に……」

（ミリアさんと……）

フロウも少し羨ましそうだ。

「僕も、年上の彼女と……」

「あの……フロウさん、あまり理想を追いかけて過ぎない方がいいですよ」

「と、年上のどこが理想なんだよ!」

「フ、フロウさん、声大きいです。シー、シ！」

シャルルロッドの町、スコアとアピスは花屋の店内にいた。
店内には、三角の形の花や、真っ黒な花など変わった花が並んでいる。

（変な店に入っちゃったな……）

そう思っているスコアとは正反対に、アピスは興味深そうに見ている。

「な、なんかいい花あった？」

「コレ……」

アピスは妙に巨大な花を指さした。
スコアは一瞬顔がこわばった。

「えっと……これが好きなの？」

「そうじゃなくて、茎のト」……」

茎の部分を見ると、小さなヘビがにゅるにゅると動いていた。その様子をアピスはジーツと見ている。

「怖くないの……？」

スコアが尋ねると、アピスは小さくうなずく。

「全然……。むしろなんだか懐かしい」

「……？　なんで？」

「昔のお兄ちゃんを思い出す」

「……？　なんで」

「昔よく振りまわしてらから」

「なんで!？」

「意味は特にないと思う」

同じ頃、クロコとソラは薬屋にいた。

並べられている小瓶には、乾燥した草や、小さな実、ドロドロの液体などが入っている。

ソラはいくつかの薬を手際よく選んでいる。

「なあ、ソラ」

クロコが少し離れたところで声をかけた。

「なに？」

「これって何の薬だ？」

ソラは歩み寄って、クロコが見ている薬を見る。

巨大な瓶には、透明な液体の中に巨大なとぐろを巻いたヘビが浮いていた。

「ゲ……ッ！」

ソラは思わず声を漏らした。

「コレ、何の薬なんだろうな。おまえなら知ってるんじゃないか？」

「ううん、こういうジャンルは私にとって未知の世界だから」

「ふーん、そっか」

「ねえ、怖くないの？」

「ヘビなんてどこも怖くないぞ」

「へえ、さすがクロ」

「昔ブンブン振り回してた」

「なんで？」

「特に意味はない」

「へえ、さすがクロ」

薬屋の店の窓から、フロウは二人の様子をそっと見ている。

「うーん、仲は良さそうなんだけど、全く進展する様子がないな、あの二人は」

するとサキが背中から話しかける。

「でもクロコさんはあんな姿ですし、そう急ぐ必要もないんじゃないんですか？」

「ダメだよ、チャンスのときに攻めないと！ あと100回はデートするだけになるよ！ やっぱり男は押さなきゃ！ 押して押して押してときどき引いて、そして押すんだよ！」

「さすがフロウさん、でも不思議と説得力がないですね」

「ねえクロ、そろそろ一回休憩してお昼にしない？」

店を出た直後、ソラはそう言った。

「そうだな、何か食べるか」

「どこのお店に行こうか？」

ソラはニコニコしながら言った。

「別にわざわざ店で食べる必要はないんじゃないか？」

「え？」

「その辺にいるトリでも焼いて食べたり……」

ソラはニコツと笑った。

「うん、それでもいいよ、じゃあ私はそのあいだ近くの飲食店にいるから」

結局二人は近くの飲食店に入った。

スコアとアピスは、ある飲食店で昼食を食べている。
スコアはパイ包みを、アピスは魚料理を食べている。

「ここはいい町だね……」

アピスのその言葉にスコアは反応した。

「どんな風に？」

「なんとなく町全体が暖かいし、事件もないっていうし」

「うん、治安に関してはラティル大佐がかなり細かくしてるからね」

「じゃあここで大きな事件って起きたことないの？」

それを聞いてスコアはわずかに表情を暗くした。

「そうだね……一年前に一回、ひどい事件が起きた時があったけど、それっきりかな」

スコアの表情を見て、アピスはわずかに戸惑った。

「どうしたの？」

「その……」

答えあぐねているスコアを見て、アピスが口を開いた。

「いいよ、話したくないなら」

「ゴメン、また今度……いつか話すから」

「うん」

アピスは料理を一口ぱくつと食べた。

「ここのお店、おいしいね」

スコアはニコツと笑った。

「そうだね、ラティル大佐がお勧めしてた店なんだ」

「そうなんだ、通りで魚が時計の形をしてると思った」

「え……？」

スコアはアピスの料理を見た、魚が不自然に丸く切られていた。自分のパイ包みにも目を移す。器用に手持ち時計の形に作られていた。

「頭痛くなってきた……」

シャルルロッド基地の司令室、そこでラティルは腰掛けながら、机に無数の手持ち時計を並べて、楽しそうに磨いている。

「この角度から見るとなかなか……」

するとドアが小さくノックされた。

「入りました」

ドアが開き、將軍服の男が入ってきた。

それを見てラティルは驚き、すぐに立ち上がり敬礼した。

その將軍は年齢五十代後半、温厚な表情をしているが、全てを見通すような鋭い目をしている。

「ホ、ホーククリフ大将。なぜ……」

ホーククリフはニコツと笑った。

「なに、スコア・フィードウッドが皇帝陛下から表彰されたという話を聞いてね。そのスコアを育てたかわいい元部下に、祝辞を思っ
つてな」

「光栄です」

ラティルは少し不自然な笑顔を見せた。その表情をホーククリフは敏感に察知した。

「どうした、ラティル？」

「いえ……お気になさらずに」

（ロストブルー中將の情報だと、ホーククリフ大將が『レギオス』に関わっている可能性があると言うが……私の元上司が……確かにこの方は昔からどこか読めないところはある……しかし……）

「ホーククリフ大將。せっかくなので場所を移してゆっくり話をし
ませんか？」

ホーククリフは嬉しそうにほえんだ。

「ああ、そうしょうか」

客室に移動し、互いに向かい合って腰をかけた。
ホーククリフは上機嫌にラティルを見つめる。

「君の働きはよく耳にするよ、間接的にはあるがね。ここはスコア・フィードウツドのいる基地として有名だからな。聞く話によるとこの基地は、実績だけでなく、町の住民との関係も非常にいいらしいな」

「ええ、軍は国民を守るためにあります。しかし同時に軍も国民に守られていることを常々忘れないようにしています」

「ふむ、いい心がけだ。この基地が良い働きをするのもうなずけるよ。君は若い頃から司令官としての素質を持っていたからな。物事をよく考え、様々な人に興味を持って接していた」

ラテイルはほほえんだ。

「それを見出してくれたのはあなたです。戦闘訓練で挫折を覚えていた私に対して『君は肉体ではなく、知性を磨くべきだ』とアドバイスをして下さらなければ今の私はありませんでした」

「ああ、君は見込み通り大きく成長した」

ホーククリフはほほえんだ。そしてゆっくりと口を開く。

「……このトシになると、若い頃の欲はすっかり消えてな、その代わりによく思うんだ。自分の人生は果たして意義あるものだったのかとな。けれど、元部下が立派に成長し、それが結果的に国民の力になっているのを見ると、私の人生もそれなりに意義があったと思うよ」

「……………」

（この方が、『ダークサークル』に……関わっているのか？）

「ホーククリフ大将、少しお話したいことがあるのですが……」

「……？ 何だね、ラティル」

「『ダークサークル』……そう呼ばれている今の国の状態、それに関して不自然に思ったことはありませんか？」

「不自然……？」

「私は……こう思うのです。この今の国の状態は、大きな力を持つ何者かが、意図的に引き起こしたものであると。事実、この国がここまで荒れる直前には、国民の不満をおおるような不自然な事件がたびたび起きていました」

「……………」

ラティルの言葉を聞いたホーククリフは腕を組んで、何かを考える様子を見せた。やがて腕を解き、ラティルを見つめる。

「もし……君の推測が当たっていたとして、その者は何のためにそんなことをしたのかね？」

「その場合、その者達の狙いはおそらく一つでしょう。権力の掌握です」

「……………」

ホーククリフはまた何かを考える様子を見せたあと、ラティルを見つめた。

「どうやら君はそれに対してかなりの確信を持っているようだな。ならば、ラティル、君はそれに対して、どのような行動を起こそうと思っているのかね」

「何も……」

（確かめなければ……この方が白か黒か……）

「考えても見てください。私は基地一つをまとめるのに、大変な苦勞をしました。けれど、その人物は国一つを思いのままに操っているのです。その人物の高い能力に対して、一体何を疑うことがあるでしょう。高い能力の者が上に立つことは、グラウドをより強い国へと変えることにつながります。それは国民にとっては幸福なことです」

ホーククリフの表情がわずかに曇る。

「……それによって多くの国民が苦しんでいるが」

「改革に犠牲はつきものです。今の犠牲は、やがて必ず報われることになるでしょう」

ホーククリフは黙った。腕を組み、少しのあいだ考え込んでいた。やがてゆっくりと立ち上がると、そのまま、部屋のドアの方へと歩いて行った。

「どこへ行かれるのですか？」

ラティルの問いに対し、ホーククリフは振り向かなかった。

「君は……もう少し見込みのある男だと思っていたよ」

ホーククリフはドアに手を掛けた。

「失望したよ、ラティル」

ドアを開け、そのまま出て行こうとするホーククリフ。

「お待ちください！」

ラティルは声を上げた。ホーククリフの動きが止まる。

「申し訳ありません……あなたを試したのです」

ホーククリフはゆっくりとラティルの方を振り向いた。

「試した……だと？」

「もう一度話をさせていただきませんか。私が話せる限りの真実をお話しします」

ホーククリフは再びイスに座った。ラティルはホーククリフに自分が『ダークサークル』について調べていること、自分には仲間がいることを話した。

「その仲間というのは……信用できるのかね？」

「口約として、仲間の名前は明かせませんが、信用できる人物です。できればあなたにも協力していただきたい。あなたなら、元帥の情報でさえ手に入れることができるでしょう」

「ふむ……」

ホーククリフはまた腕を組み、考える。今度はずいぶん長く考えていた。やがて、腕を足に置き、ラテイルを見つめる。

「どうやら君は、私の人生に大きな意義を与えてくれたようだ」

ホーククリフは静かにほえんだ。

商店街を歩いているスコアとアピスの横を小さな猫が通り過ぎた。

「猫だ……」

アピスが猫を目で追う。

「好きなの？」

「うん、わたし、猫は好き」

クロコとソラは洋服店にいた。女性物の服をソラは興味津々で見

て回っている。

クロコは店の端に一人しゃがみ込んで、じっくり何かを見ていた。

「クロ！」

ソラがクロコに声をかける。

「ん？」

ソラは洋服を持っていた。黒のドレスだ。

「これ似合うと思う？」

「黒は……おまえには似合わないんじゃないか？」

「ううん、クロに」

「似合わないーよー!!」

「それよりクロ。さっきから何見てるの？」

「ん？ ああ、こいつだ」

店内の脇で猫が丸くなってスヤスヤと寝ていた。

「あつ、猫だ。ぐっすり寝てるね」

「ああ」

ソラも猫をのぞく。

「スースーって息してる。かわいい」

「ああ、オレも猫は好きだ」

「へー、そうなんだ」

「油で揚げるとうまいんだ」

「そっいつ好きなの!？」

「ああ……もちろん、ウソだ」

「クロコが言つとウソに聞こえない……」

ケーキ屋の店内でテーブルを挟んでスコアとアピスが座っている。カラフルな店内は、いつもどおり多くの客でにぎわっている。そんな様子をアピスは見回す。

「今日もにぎやかだね」

「うん、ここはいつでも人気だよ」

アピスはメニュー板を手にとって見る。それを見ながら少しほえみを浮かべる。そんな様子を見てスコアが話しかける。

「もしかして、今日一番の楽しみだった？」

「うん」

アピスはパッと答えた。メニューを楽しそうに見ている。

「……？ ワインケーキだけがない」

それにスコアが答える。

「ああ、今がフアンセールで一番竜巻が起こる時期だから、ワインケーキが不足するんだ」

「へえ……」

「ワインケーキ食べたかったの？」

「ううん、気になっただけ、スコアは何にするの？」

「ボクはフルーツケーキかな」

「じゃあ、わたしもフルーツケーキ」

運ばれてきたフルーツケーキを、アピスは満足そうに食べる。

「おいしい」

そんなアピスの様子を見ながらスコアは笑みを浮かべる。

「アピスはホントにケーキが好きだね」

「うん……大好き。多分、これがなかったらここに帰ってこなかっ

たと思う」

「え!？」

「もちろん……うそ」

「ア、アピスが言つとウソに聞こえないよ……」

クロコとソラは商店街の道を歩いていた。
ソラが道を見渡しながら口を開く。

「少し奥まで行きすぎたかな。ここら辺は、道がよく分からないや」
「オレはなんとなく分かるぞ」

「え、なんで？ ここにはほとんど来てないはずなのに……」

「勘だ」

「勘って……」

「丘の上から一回街を眺めれば、どついう道を通ればどこへ行くかなんたなくわかるだろ」

「つまり建物の配置を全部記憶するってこと？」

「だから勘だつて言つてんだろ。近道も大体分かる」

「へえ、じゃあさ、どこが近道なのか教えて。分かりやすく丁寧に、ジェスチャーで」

「からかってんのか！」

「うん」

ソラは楽しそうだ。

その後、クロコとソラは路地を抜けて、商店街の大通りへと出た。

「ほら、近道だっただろ、って……あつ」

クロコは何か気付いた様子で、ソラを見た。

「どうしたの？」

「ソラ……おまえの右肩」

「ん？」

ソラは自分の右肩を見た、そこにはゆっくりと足を広げて休んでいる大きなクモがいた。

「キヤアアアアアッ！！」

ソラは大通りに響く大声を上げた。声こそ大きいが体は石のように固まっている。

「怖い怖い！ 取ってー、取って取って！」

涙声のソラ。クロコは冷静に眺めている。

「大丈夫だよ、毒グモじゃない」

「そ、そういう問題じゃないよー！」

「しょうがねーな」

クロコはクモを取ろうと手を伸ばす。ソラは石のように固まっている。

「あ、足が八本もある……」

ソラのその言葉で、クロコは伸ばした手をピタッと止めた。

「そういえばソラ、身体的特徴で判断するのはダメなんじゃなかったか？」

「どうでもいいから早く取ってよー」

クロコは楽しそうだ。

その後、クロコとソラは大通りを歩く。ソラは今日初めてゲッソリしている。

「……そういえば、クロはどこか行きたいお店はないの？」

「いや、別にねーけど」

「新しいブーツは欲しくない？ ほら今クロの履いてるブーツ、修理の跡だらけで、ずいぶんいたんでるし、少し質が落ちてるんじゃない？」

「確かに修理で少しいたんじゃいるけど、革自体は柔らかくなって足に馴染んでるからいいんだよ。今が一番いい時だ」

「へえ、じゃあ武器屋は？」

「剣はもう上等なものを持つてるから」

「へえ、いい剣、手に入れたんだ。じゃあそれを大事に使うんだね」

それを聞いてクロコは黙って何かを考える。

「クロコ？」

「……とにかく、武器屋に用はない」

二人がそんな会話をして歩いていると、向かいからひげで顔が覆われた老人が歩いてきた。

「おや、お二人さん、ひさしぶり」

「あつ、職人のじいさん」

武器職人の老人だった。クロコは老人をじっと見る。

「なんだ？　なんでこんなトコ歩いてんだよ」

「家の近くの道を歩いてるのがそんな変かい？」

「仕事かなんかか？」

「いや、散歩だよ」

老人はゆつくりと上機嫌そうに笑みを見せる。

「最近大きな仕事をやり切ったせいだな。少し休暇を入れてるんだよ」

「ふーん」

するとソラが話しかける。

「じゃあ、今日はアクセサリー屋は開かないんですか？」

「ああ」

「少し残念です。今日あなたの店を見るの楽しみのひとつだったの
で」

「いや、悪いね、お嬢さん」

老人は申し訳なさそうにほえむ。

「でもソラ、このじいさんアクセサリーが本業じゃないんだぞ」

「え？ そうなの」

「ああ、アクセサリー屋は副業で、路地のぼろい鍛冶屋で、世界有数の腕だってアールスロウが言ってたけど、実際はよく分からない」

「もうちょつと整理して説明してくれないかな……」

「じゃあ、わしはこの辺で失礼させてもらつよ」

老人はゆつくりと二人を横切ろうとする。

「じいさん」

クロコが老人を呼び止める。

「なんだい？」

「もし、オレが今依頼したら、何か作ってくれるか？」

「そうだな……。君はわしにとっては常連さんの域だからな。なんせ四回……いや三回だっけな。三回もモノを買ってくれたからな。君の頼みなら、作らんこともないが……」

（四回でも三回でもなく、二回だろ。もうボケてんのか、このじいさん）

「何か、また作ってほしいものでもあるんかい？」

「いや……聞いて見たただけだ」

「そうかい、それじゃあまたな」

老人はそのまま横切って行った。

夕焼けの光がゆっくりとミリセルド大商店街を照らし始める。夕焼けの路地をフロウは走り回っていた。

「くそ……二人はどこだ？」

キヨロキヨロと辺りを見渡すフロウ。すると曲がり角からサキが現れた。

「ダメです。見つかりません」

「くそー、完全に見失ったな」

「もうあきらめて帰りませんか？」

「ダメだよ、ここからクライマックスかもしれないのに！！」

ミリセルド大商店街の脇にある川、そこにかかる石橋を眺めながら、クロコとソラは立っていた。

「また……ここに来れた」

ソラは嬉しそうにほほえむ。じっと夕陽の橋を見つめながら、ソラは口を開いた。

「ねえ、クロ」

「なんだ？」

「戦争が終わった時、また一緒にここに立とうね」

「ああ」

クロコも石橋を見つめている。

「約束する」

夕陽の橋は静かに輝いていた。

クロコとソラは再び路地を通り、大通りに出ようとした時だった。フロウとサキにバッタリと出会った。

「……………なんでおまえらここにいるんだ？」

クロコは二人をじっと見た。

「そ、それは……………」

焦ってオドオドするサキ。フロウが素早く口を開く。

「ちょっと二人でお買い物、ね」

「男二人で？」

ソラが素早くつつこむ。

フロウが不自然に笑う。

「そっちだって女二人だろ？」

「誰が女だ！！」

夕焼けのシャルルロードの通りをスコアとアピスが歩いていた。

「ねえアピス。今日はその……」

「なに？」

「今日は、楽しめた？」

「うん」

アピスはわずかに口元を緩めて言った。

すると突然、二人の隣に一人の少年がヒョコッと現れる。

「やあ」

その少年は年齢十四、五、少しねている茶色の髪に、青い瞳、幼

い顔立ちをしているが落ち着いた雰囲気を持っている。

「あ、コール」

「偶然だね」

コールは二人の様子を少し眺める。

「ジャマだった？」

するとアピスが口を開く。

「ううん、帰り道だったから……一緒に歩こう、コール」

三人は夕焼けの道を歩く。

アピスが二人を見ながら口を開く。

「二人はこれからどうなるの？」

「え……？」

スコアは小さく反応した。

「国軍は、少し前に大きな戦いに負けたんだよね。これから大変なんじゃない？」

「そうだね……」

「いつかはまた基地を出るんだよね。これから、どっいう風に動いて決まってるの？」

「いや……それはまだ」

するとコールが口を開く。

「多分、解放軍の動き次第になるだろうね」

アピスはコールの方を見る。

「でもコール。今の状況だと、解放軍がそのまま中部を直進して、ゴウドルークスまで攻めてくるんじゃないの？」

それを聞いてコールがほほえむ。

「アピスもだいぶ戦局が読めるようになってきたね。けど……状況はもう少し複雑だね」

「そうだね」

スコアがうなずく。

「普通に考えれば、解放軍は中央の前衛基地ビルセイルドに軍を集めて、ゴウドルークスに向けて進行するって考える。けどね、ビルセイルドとゴウドルークスのあいだには『ウォールズ・ヘルズベイ』がある」

アピスは首をかしげる。

「『ウォールズ・ヘルズベイ』……？」

フルスロツクの通りを一台の駅馬車が走っていた。

その車内に、クロコとソラ、それとフロウとサキが乗っていた。

「何なんだよ、こいつら……」

クロコは、フロウとサキをにらんでいる。

「ハハハ、仲良く帰ろうよ」

フロウが笑いかける。

クロコはプイツと窓の方を向く。

「あ……」

窓をのぞきながら、クロコは口を開いた。

「そっといえば……」

「どうしたの？」

ソラが反応した。クロコは窓の景色を見たまま口を開く。

「初めてここに来たときに通った道だ」

「初めてかあ……そっといえば、クロは初めてここに来たときに、私を助けてくれたんだよね」

「まあ、オレはそのあとに会った呪い屋のババアのインパクトが強すぎてあんまり覚えてないけどな」

「あの時のクロはカッコ良かったな」

「……今はこんな姿になっちまったけどな」

「今のクロだって、かっこいいよ」

クロコとソラが窓の景色をのぞいていると、フロウがソッと口を開く。

「さてと………今日で、しばらくはみんなと会えないな」

「えっ?」

クロコは思わず声を漏らす。ソラとサキも驚いてフロウを見る。

「僕はしばらく、フルスロックから離れるよ」

フロウのその言葉に、サキは目を丸くする。

「えっ、どういうことです?」

「自分を一から鍛え直そうと思ってね、話はもうアールスロウさんに通してある」

クロコは一瞬何かを考えたあと、口を開いた。

「……だけど、フロウ。おまえの剣技はもうほとんど完成されてる

んじゃないのか？」

「ああ、その通りだよ」

フロウはクロコを見つめる。

「今の僕じゃ、これ以上大きな飛躍は望めない。だからこそ、今の剣技を崩して、一から新たな剣技を作ろうと思ってる」

「けど、ヘタしたら、今より弱くなるぞ」

「確かにね、でも、セウスノールの戦いではつきり分かったんだ。今のままじゃ、みんなの力にはほとんどなれない。だったら、弱くなったってほとんど変わらない、どちらにしろ半端者さ。それなら、新たな可能性に賭けたいんだ」

フロウは、クロコとサキを見つめた。

「僕は、みんなの力になりたい。それが戦場に身を置く、僕なりの『誇り』さ」

「そっか……」

クロコは静かに言った。

「当てはあるんですか？」

サキの問いにフロウはほえんだ。

「ああ、大丈夫」

クロコはフロウの方を見つめた。

「なら……フロウ」

クロコはキッとフロウを見た。

「必ず強くなって、戻ってこいよ」

フロウはニコリと笑った。

「ああ……最後の戦いには必ず間に合わせるさ」

サキは少しさびしそうな様子だ。

「フロウさんにとって、今日はみんなと遊べる最後の日だったんですね」

「ハハハ、だからハシャがせてもらったよ」

「ホント、楽しそうに尾行してましたもんね……あっ！」

クロコが素早く反応した。

「尾行……?? おまえら、やっぱり……」

クロコはギロリと二人を見る。フロウが素早く口を開く。

「び、尾行じゃないよ、ただ全く同じ道を通ってただけさ」

「それを尾行って言うんだよ!!」

そんな様子を見ながらソラが一言。

「案外近くにいたね、明らかにあやしい人」

5 - 5 受け継がれる力

フルスロック基地の灰色の廊下をクロコは歩いていった。
司令室の扉の前で立ち止まり、ドアをノックする。

「いいぞ」

クロコは声を聞いて少し戸惑う。

（あれ、アールスロウの声じゃない。誰だ）

ドアを開けると、司令室の机にベイトム隊長が座っていた。

「何でアンタが座ってんだよ」

「私が座って何が悪い！」

ベイトムは不機嫌に机を軽く叩いた。

「アールスロウは？」

「……セウスノールに招集を受けている。大きな会議があるそうだし、その代理だ。私が、今は副司令代理だからな」

「ふーん、アンタが代理か。まあ副司令になることはないと思うけど」

「きさまになぜそれが分かる！」

ベイトムは怒って机をバンツと叩いた。

「用事があるなら私が聞いてやろう。仕方なくな、仕方なく！」

クロコはプイツと背を向けた。

「いいよ、アールスロウの方が確実だから」

「私が信用できんというのか！！」

ベイトムは怒って机をバンバン叩く。

クラウド西部に位置する巨大都市セウスノール。

そこにそびえるセウスノール基地、その大会議室では、大きな机を解放軍の重役たちがズラツと囲んでいた。大型基地の各司令官、アールスロウに、ケイルズヘル基地のローズマン、クラット基地のロイムなどが並んでいる。さらに、数名の副総司令、そして総司令のランクストンが座る。

ランクストンは年齢四十代後半、黄色い髪、ピンとはねた黄色いひげ、開いているのか閉じているのか分からないほど細い目をしている。

そのランクストンの隣の席、最も奥の上座だけが空席になっていた。

各重役たちが黙って座っていると、会議室の扉が開き、鋼鉄のヘルムで顔を隠した男が入ってきた。

「遅れてすまない」

ファントムはゆっくりと奥の席へと歩を進め、座った。

座ってすぐに、全体を見渡すファントム。会議室にいる全ての者が一斉にファントムを見つめた。

ファントムはヘルム内に反響する声を出す。

「……ついに、我々解放軍にとって、最大のチャンスが到来した」
皆がファントムに注目している。

「セウスノールの戦いで、国軍は我らに敗北した。現在国軍は大きく崩れている。いまより我々は、国軍の本拠地、首都ゴウドルークスに向けて、進行を開始する。そのために、今度の動向を決めたいと思う」

ファントムが言い終えるのを待っていたかのようにランクストン総司令がファントムに向けて声を出す。

「ではまず、ファントムの考えをお聞かせいただきたい」

ランクストン総司令の言葉と共に、ファントムは小さくうなずいた。

「では私の提言を述べさせていただく。今一度言うが、今回の状況は我々にとって今までにない最大のチャンスだ。ならば、これを逃す手はない。これより、中央の前衛基地ビルセイルドに解放軍領の全戦力を終結させ、国軍の本拠地、首都ゴウドルークスへ向けて進行を開始したい」

その話の直後、会議室がさわめいた。

「ぜ、全戦力……！？」

「解放軍の全ての戦力で進行するだつて！？」

「これではほとんど捨て身の特攻だぞ」

わずかに騒がしくなった会議室で、一人の男が手を上げた。

「ファントム」

ランクストン総司令だった。

「その作戦のリスク。ファントムなら、それを十分承知した上での発言でしょう。しかし、それを踏まえた上でも……」

ランクストン総司令はファントムを静かに見つめる。

「それには一つ大きな問題があります」

皆がランクストン総司令を見る。ランクストンの表情は険しかった。

「ビルセイルド基地と、首都ゴウドルークスのあいだには、ウォールズ・ヘルズベイ基地があります」

ランクストン総司令は細い目でファントムを見つめる。

「知つての通り、ウォールズ・ヘルズベイ基地は、解放軍の進行を止めるために建設された、国軍が誇る世界最大の要塞です。巨大で

厚い城壁の裏には、巨大柱で支えられた『空中砲台』が基地本体を四方に囲んで設置されています。そしてそれらに守られた基地本体も、大型基地の五つ分の規模……全体の火力は十倍以上あるでしょう」

ランクストン総司令の表情はさらに険しくなる。

「解放軍がこの基地の詳しい見取り図を手に入れ、私がそれを見た時、正直な話こう思いました。『これは人間が攻め落とせる基地ではない、神でもなければこんなものを攻め落とせるはずはない』と……たとえば200000の兵力をぶつけたとしても、粉々にされるかもしれない、ウォールズ・ヘルズベイとはそういう基地なのです」

その言葉が響くと共に、ランクストン総司令に注目していた面々の表情に緊張が生まれる。ランクストン総司令の話は続く。

「全戦力の集結はケイルズヘルカクラットにして、ウォールズ・ヘルズベイだけは避けるべきです。南か北から回りこめば、確かに時間は食います。しかし、もしウォールズ・ヘルズベイで大きな被害をこうむれば、そのまま逆に攻め込まれ、こちらが敗戦することも十分ありえるでしょう」

ランクストン総司令が話を終わると、会議室はしばらくの間、静まり返った。

その静寂の中、ローズマン司令が声を出す。

「けど……南か北に回り込むと、今度は国軍に時間を与えることになっちまう。ゴウドルークスに届く前に抑えられる可能性もある」

するとロイム司令官が声を出す。

「だが確実に領土は広げられるな」

するとローズマンがすぐに言い返す。

「全戦力を使った捨て身の突撃だぜ？ 領土なんてすぐ奪い返される」

アールスロウが口を開く。

「逆にもし、ウォールズ・ヘルズベイを最小の損害で突破できれば、勢いそのままに、ゴウドルークスを攻め落とせる可能性は跳ね上がる」

「だがあの基地を攻め落とすことは容易ではない」

ランクストン総司令がそう言った直後だった。

「つまりは……」

ファントムの声が響くと共に、皆が一斉に黙った。

「つまりは、ウォールズ・ヘルズベイの突破を狙えば、こちらが勝利をつかみ取る可能性が高くなる、半面で敗北の可能性も高くなる。北や南から回り込めば、勝利を逃すことになるかもしれないが敗北はまぬがれる……というわけだ」

ファントムは皆を見渡した。

「諸君、少し考えてほしい」

ファントムの声にわずかに力が入る。

「もし、ウォールズ・ヘルズベイを突破することができれば、その瞬間に、我々は、勝利をつかみ取る最大のチャンスを得ることになるだろう。いま目の前にあるこの機会を見逃せば、その後にとれだけのチャンスが巡ってきてても、勝利を得ることは、永遠に叶わないだろう」

ファントムの声が徐々に大きくなっていく。

「確かに敗北を恐れることは必要なことだ。しかし、戦争に置いて最悪なことは、敗北することではない。戦争において最悪なことは、敗北も、そして勝利もしないこと。つまり、戦争が終わらないことだ。現在、我々には二つの選択肢が与えられている。その選択肢とは、勝利をつかみ取る可能性をとるか、戦争を長引かせる可能性をとるかだ」

その声が響き終わったあとも、皆はしばらくのあいだ静かにファントムを見つめていた。

数人の司令官は強い目でうなずいた。

今まで不安な表情を浮かべていた司令官たちは、何かを考え込んでいる様子だ。

会議室を静寂が支配した、その時だった。

「私は……」

アールスロウの声が響いた。

「私は、ウォールズ・ヘルズベイ攻略を支持したい。そして、もしもこの場にグレイ・ガルディアがいたとしたら……」

皆がアールスロウに注目する。

「間違いなくウォールズ・ヘルズベイ攻略を支持したでしょう」

その言葉と共に、会議室を再び静寂が支配した。ロイム司令官は静かにうつむき、リンクストンは口を固く閉じていた。

ファントムとアールスロウの言葉に対し、反論する者は一人もいなかった。

ローズマンはニヤツと笑う。

「決まりだな」

ファントムが勢いよく立ち上がった。そして叫んだ。

「これより、我らセウスノール解放軍は、首都ゴウドルークスへの進行を目的として、ウォールズ・ヘルズベイ攻略の準備を行う。中央前衛基地ビルセイルドに戦力を結集させる……！」

首都ゴウドルークス、その純白の街並みにそびえ立つ巨大基地グラウド国軍本部。その白い壁に囲まれた広い部屋、そこにライトシユタインが一人、机に腰掛け、資料に目を通していた。

突然ドアが勢いよく開かれた。

「ライトシュタイン中将！」

ロストブルーが緊迫した様子で入ってきた。

「どうした？」

「大変です」

ロストブルーはライトシュタインを見つめた。

「レットル皇務大臣が殺されました」

「……………！」

その数時間後、総務省の客室でライトシュタインはグランロイヤ
ー総務大臣と向かい合って座っていた。

グランロイヤーは疲れた様子で口を開く。

「ここに来たってことは、話はすでに聞いているんだろう」

「ああ、レットルが殺されたと」

グランロイヤーは頭を抱える。

「ああ……各省、大騒ぎだよ。例の重役殺らしい」

「やはりか……」

「君の考えでは、奴らが重役殺しと関わっているのだろう？　なら、レットルは白だったってわけだ」

「ああ、そうだな。または、切り捨てられたかだ」

グランロイヤーは戸惑った表情を浮かべる。

「切り捨てられた？」

「つまり、我々が調べていることを『レギオス』が知り、レットルを排除したということだ」

「仲間すらも平然と犠牲にしたと？」

「君の調査ではレットルに不審な点が見られたのだろう、なら、その可能性も考えるべきだ」

それを聞いてグランロイヤーは少しのあいだ黙ったあと、緊迫した様子で口を開く。

「……もしそうなら、奴らは我々の存在に気付いたことになるが」

「ああ、その可能性も踏まえないなら、どこまで気付けたかは、君の調査方法にもよるだろうがな」

「ああ……気付かれるとしたら私と、私と関わっている君ぐらいか」

「……それを踏まえて、慎重に行動した方がいいだろう。もし奴らが仲間の犠牲すらもいとわない連中ならば、非常に危険な思考の持ち主だ」

「やれやれ、慎重に加えて、警戒もしておいた方が良さそうだな……しかも……」

「ああ、調査は振り出しに戻った……ということだ」

フルスロツク基地、その廊下をクロコが歩いていた。広間へ出ると、いつもと様子が違うことに気づく。多くの兵士たちが見えなくなり動いている。

「なんだ……？」

するとクロコは広間にいるアールスロウを見つけた。クロコはアールスロウに駆け寄る。

「アールスロウ、帰ってきてたのか」

「ああ、少し前にな」

「それよりどうしたんだ？ 少し騒がしくなってきたけど」

「まだ連絡が来ていないのか。もうすぐ、フルスロツク全戦力をビルセイルドに移動させる」

「えっ……全戦力を……！？」

「本部は、国軍の本拠地ゴウドルークスを攻め落とすために、解放軍の全戦力をビルセイルドに集結させる決定を下した。一度移動を始めれば、おそらく、しばらくはここに戻れなくなるだろう」

「そうか……そうなのか……」

クロコは一瞬うつむいたあと、アールスロウを見た。

「なあ、一つ頼みがあるんだ」

「なんだ？」

クロコは自分の腰に付けている大剣にゆっくりと触れた。

「ずっと、考えてたんだ……」

クロコはアールスロウを見つめる。

「新しい剣が欲しいんだ。今の体に合った剣が……」

クロコは大剣を少しだけ見たあと、再びアールスロウを見つめる。

「この剣はガルディアからもらった大切な剣だ。できるなら手放したくない。だからずっと迷ってた。だけど、この剣じゃ、オレの力を発揮しきれない。仲間の力になるためには、これじゃダメなんだ……」

「……………」

「頼む、アールスロウ、今の体に合った新しい剣を作ってくれ」

アールスロウは小さくため息をついた。

「戦力の移動は今より二日後だ。剣を作るには最低五日かかる。はつきり言つて、言い出すのが遅い」

その言葉を聞き、クロコはガクツと肩を落とした。

「だが……………そろそろ言い出す頃だと思っていた」

クロコはキョトンとした。

「え…………？」

「ついて来い、クロコ」

アールスロウに案内された基地の狭い一室、その机の上に一本の剣が置いてあった。

美しい鞘に収まった小型の剣だ。

クロコはそれを見つめる。

「これは…………」

「抜いてみる、クロコ」

クロコは剣を手を取った。

（なんだ…………手に馴染む）

クロコが鞘を抜いた瞬間だった、黒い刀身が鋭く光った。

「これは……」

「この剣は……グレイさんの剣から作られたものだ」

「……！？ ガルディアの……！！」

クロコは剣を見つめた。黒い刀身は、ガルディアの持つ黒剣と同じ輝きを放っていた。

アールスロウもその黒剣を見つめる。

「この剣には、グレイさんの意志が宿っている。この世界に、たとえどんなに素晴らしい剣があったとしても、この剣ほど、君にふさわしいものはないだろう」

「……………」

クロコは黒剣をしっかりと見つめた。今まで見たどんな剣よりも強烈な存在感を放っている。まるで魂が引きつけられるかのようだった。

「クロコ、この剣に名前をつけてやってくれ」

その言葉を聞いて、クロコは少しのあいだ黙った。

「なあ、アールスロウ。この剣の名前、あんたがつけてくれないか」

「オリジナルの剣の名は、本来持ち主がつけるものだが……」

「あんたにつけてほしいんだ」

クロコはじつとアールスロウを見た。

「そうか……………分かった」

アールスロウは少しのあいだ考えたあと、口を開く。

「なら…………この剣の名は」

窓から入るわずかな光で、黒剣の刃が鋭く光った。

「スピーゲルグレイ」

クロコは満足そうにほほえんだ。

「いい名だ」

クロコは新たな剣を鞘におさめ、腰に付けた。

出発の日、クロコが基地の広場に出ると、その中央付近にソラが立っていた。

クロコが駆け寄ると、ソラは小さく口を開いた。

「クロ……………」

名を呼ばれクロコはソラを強い目で見つめた。

「約束は守る」

「え……?」

「夕陽の橋に、必ずまた、一緒に……」

それを聞いてソラは笑みを見せる。

「うん……!」

クロコを含めたフルスロックの全軍は、ビルセイルド基地を目指し、出発した。

5 - 6 戦いの前

青い空の下、マスティンは芝生に挟まれた石畳の階段を昇っていた。その階段を登り終えると巨大な純白の建物が見えた。ゴウドルクス大学の建物へ向かって、芝生に囲まれた長い石畳の道を歩く。すると、向かいから一人の若者が歩いてくる。若き日のグランロイヤーだ。

「やあ、ジオ」

マスティンがあいさつをすると、グランロイヤーは人なつっこい笑顔を浮かべた。

「よう、ルイ。また資料室か？」

「ああ」

「また彼女と二人きりか。羨ましいな、上手くいつてるか？」

グランロイヤーが冗談っぽい口調で言った。マスティンは笑って見せた。

「残念ながらまだ何も、彼女にはもう恋人がいるからね、研究っていうね」

「ハッハッハッ、それは手強いな。じゃあ、またな」

グランロイヤーは横切っていった。

しばらく歩いていると、大学のすぐ横の芝生に一人の若い女性が足を伸ばして座っていた。長い黄色の髪のきれいな目をした女性だ。マスティンは小走りで近寄った。

「リナ、どうしたんだ？　こんな所で……」

リナはニコリと笑みを見せる。

「ちょっと休憩、あんなホコリっぽい部屋にずっとこもってたら、頭がしおれちゃうわ」

リナは、周りの景色に目を移す。白い純白の建物と、それを囲うように緑の庭園が広がっている。リナは静かにその景色を眺めていた。

「こうやって、緑や建物を眺めていると、何かいい考えが閃きそう」

マスティンはリナの隣に腰を下ろして座る。

「そうかい、もしその閃きが僕の研究に役立ちそうなものだったら、ぜひ教えてくれないか」

リナはマスティンを見てほえんだ。

「もちろん」

「しかし……君はよくあんなに情熱を注げるな。あの研究に……」

「あんな将来性のなさそうな研究に？　ってことでしょ。でもあいにく私はそうは思わないわ」

「ふっ、そうかい、なら今度その将来性についてぜひ聞かせてくれないか？」

「いいわ、あなただったら喜んで」

リナはそう言ってほほえんだあと、再び景色に目を移した。

「ねえ、ルイ」

「なんだい」

「あなたは……この世界に満足してる？」

マスティンは目を覚ました。広い部屋のベッドで一人、体を起す。朝の柔らかな光が窓から入ってきていた。

（彼女の夢を見るのは………ずいぶん久しぶりだ）

マスティンは着替えて、ヘルムをかぶり窓から景色を眺める。

眼下には広い工場地帯が広がり、それを囲むように灰色の建物が立ち並んでいた。さらに遠くには、山の斜面に並ぶ灰色の住宅地が見える。

（ビルセイルドについて二日……動き出すまでもう少しか）

基地の広場へと視線を移すと、その広場の端っこに、たった一人で立っているある人影に気が付いた。

「あの子は……」

ビルセイルド基地の広場、その石壁のすぐ横に、クロコは独りで立っていた。ビルセイルドに到着して三日、早朝の広場に出て、新たな剣の感触を確かめていた。

軽く数回振るうと、剣は鮮やかに空気を切り裂いた。

（いい剣だ……今までの剣とは比べ物にならない。それに、何より体に馴染む）

クロコはもう一度、剣を振るう。鋭い音を辺りに小さく響かせた。

（この剣なら、オレの力をさらに引き出せる）

「やあ、クロコ」

遠くから、こもった声が聞こえた。見ると、鋼鉄のヘルムをかぶったファントムがゆっくりと近づいてくる。

「ファントム……どうしたんだ」

「君が剣を振るっている姿をたまたま見かけてね」

ファントムはクロコの前で足を止めた。

「少しの間、話し相手をしてくれないか？」

二人は広場の端の石壁に寄り掛かって座った。
ファントムがゆっくりとしゃべり出す。

「この戦いもうすぐ終わりを迎えようとしている……」

「みたいだな、オレにとってはあっという間だった」

「私にとっては長かった、けれどやはり、あっという間でもあった」

ファントムはビルセイルド基地を眺めた。フルスロック基地よりも一回り大きい巨大基地だ。

「クロコ……一つ、聞いてくれないか」

「なんだ？」

「もし……この戦いに勝利した時は、私は、この国にある階級をすべて取り払おうと思う」

クロコは少し驚いた。

「階級を……？」

「すべての国民が、平等な権利を持つことのできる制度を新たに作

るんだ」

「……………」

クロコは少し呆然としていた。

「…………でも」

クロコはファントムを見る。

「確かに一見理想っぽいけど、誰かが国を治めないと、国そのものがなくなっちゃうんじゃないか？ みんなが好き勝手やってたら大変だろ」

「もちろん治める者はいるさ。それは国民全てで決める。もしその者が不当な行為を働けば、国民の支持は得られず、別の者に変えることができる。まあ、他にも色々問題はあがあるが、理論上はそれらの問題にも対処できる、国として動かすことは可能だ」

クロコは少しだけ眉を寄せて黙っていた。

「私も当初、その話を聞いた時、君みたいに半信半疑だった。けれど彼女は違った」

「彼女…………？」

「そう…………私の大学時代の友人、名は、リナ・フォルスウェイ。彼女は純粹にその理想を信じていた」

「……………」

「彼女が一回私に聞いたことがあったな『あなたは、この世界に満足してる?』って……。世界は、多くの問題と過ちに満ちている。けれど人はそれに目をつむり、それが正しいことなんだと自分自身に言い聞かせる。そう彼女は言っていた。そしてそれが何よりも嫌だとも……」

クロコはファントムの様子を見ながら、ゆっくりと口を開く。

「その……リナっていうのは、あんたの恋人かなんかだったのか?」
その言葉を聞いて、ファントムはヘルムの奥で小さな笑い声を響かせた。

「いや………けれど、私は彼女のことを好きだった。それに、彼女も私のことが好きだった」

「じゃあ、なんで……」

「恥ずかしかったから、と若者ならそうなるが、あいにく私たちはそこまで若くなくてね。私たちの場合は、お互いに分かっていたからさ」

「分かっていた?」

「近いうちに必ず別れることになるってね」

「どういつことだ?」

「リナは、国民中心の国家制度の研究に自らの人生の全てを注ごう

としていた。そしてそのために、当時その道の権威と言われた博士の下で研究するために、隣国サンストンへ行こうと決めていた。行けば、長い間、帰ってこれない」

「……………」

クロコは少し黙ったあと口を開いた。

「引き止めなかったのか？」

「引き止める気はなかったよ。けど、最後の最後でつい……彼女を引きとめようとしてしまった。でもダメだったな……彼女の決意は固かった」

ファントムは小さくため息をついた。

「彼女は十年研究するって言ってたよ。だから私は言ったんだ、『なら十年後にまた会おう』ってね。昔からしつこくて、しぶとかったんだ。けど、彼女はなんだか嬉しそうだったな」

「……………それから、どうなったんだ？」

「彼女と離れて二年後、彼女の行ったサンストンは、友好条約を破って、グラウドに戦争を仕掛けた」

「……………！」

「その結果、サンストン国内のグラウド上位階級の者は次々と捕えられて、処刑されたらしい、貴族であった彼女も当然標的となっただろう」

「……………」

「君も知つての通り、今でもクラウドとサンストンの間では緊張状態が続いている。あの時から二十年以上が経った今、彼女が生きているのか、死んでいるのかは、もう分からない」

「……………」

「昔の話さ」

ファントムは少しのあいだ遠くを見つめていた。

「けれど不思議な話だ。もし解放軍が勝利して、私がリナの理念をクラウドに導入すれば、私は彼女の意志を継いだことになるんだろ
うな。ただの半信半疑で、彼女のそばにいただけの男がね」

ファントムは少しのあいだ小さく笑っていた。

「もし、それでクラウドが生まれ変わったのなら、彼女が死んでい
ようと生きていようと、きっと、彼女の魂に届くだろうな」

「……………」

クロコはファントムを静かに見つめていた。

ファントムがゆっくりと立ち上がる。

「さて、そろそろ時間だ……………」と、待てよ」

ファントムはクロコの方を向いた、ファントムが自分の服の裏に手を入れると、突然、白い鳥が飛び出した。白い鳥はおとなくファントムの腕に載っている。

「……手品？」

クロコもヒョコツと立ち上がる。

「もちろん違うよ、この鳥は小型の手紙鳥さ」

「へえ、こんな小さいの初めて見た」

「ああ、携帯用手紙鳥さ。かなり珍しいやつだね、ついでにかなり値も張る。これを君に渡そう」

「これを……？」

「私の拠点の一つに直通で連絡できる」

「どうして、それをオレに？」

「セウスノールで初めて私がした話のことを覚えているかい？」

クロコはハツとした。

「『ダークサークル』を起こした者たち……」

「そうだ、この戦争の裏で動いている者。その者と戦わねばならないとき、君が私を必要とする時が来るかもしれない、私も君が必要とする時が来るかもしれない。これはそのための、私と君との繋が

りだ」

クロコはその鳥を受け取った。

「まあ、君の場合はまず目の前の戦いに専念すべきだがね。このことに関しては、主に私の役目だな。この国を、その者たちに渡すわけにはいかない」

（彼女が愛したこの国を……）

「ではそろそろ行かなくてはな、また会おう、クロコ」

ファントムはサッと立ち去っていった。

とある場所のとある建物、その大部屋の机を多くの者が囲んでいる。

「危なかったな、足をつかまれるところだった。全くレッテルのやつは……」

「まあ、これであの無能を切り捨てられたことですし、結果的には良かったのでは？」

「だが、こんなことはレッテルだけで終わりにしようじゃないか。仲間を切り捨てることは連携の関係上望むべきことではない」

「そうですね、なら、早いうちに、我らの足をつかもうとしている
邪魔者たちを片づけてしましましょう」

「メンバーはほぼ割れていますしね」

「しかし……メンツがメンツ、一筋縄ではいかんぞ」

「確かに……どういたしましょうか？」

一斉に奥の男に視線が集まる。

「放っておけ」

「それでよろしいので？」

「心配する必要はない。時が来れば、最小の労力で処理できるだろう。もう道は開けたのだ」

奥の男は周りの者と見渡す。

「もう、我らの歩みを止めることはできん。我らの望む目的地まで、決して止まることはない。そして始まるのだ。我ら『レギオス』の新たな国がな」

ビルセイルド基地の一室で、ファントムはケイルズヘルの司令官
ローズマンと話していた。

「ミリア・アルドレットが来ていないだど？」

ファントムの言葉に対して、ローズマンは軽く笑みを見せる。

「ええ、今回の戦いには参加させないって聞いたのでね。そしたら本人が、ギリギリまで基地にいたって」

「だが、彼女は我々の切り札の一つだ。使わないにしても、できればここにいてほしいがな」

「まあ、そうなんですがね。ただセウスノールの戦い以後、どうも何かの特訓をしてるようですね。なに、ゴウドルークス進行までには必ず来ますよ」

「ふむ、ならいいのだが」

グラウド南部の乾いた土地、そこにゆうぜんとそびえ立つステイアゴア台地、その隣に隠れるようにケイルズヘル基地は建っている。その基地の実技場、六角形の空間の隅に、一人の女が座り込んで休んでいた。

その女は年齢十八、九ぐらい、きれいな体つきで、黄色いサラツとした長い髪をしている。顔立ちもきれいで、冷たい目つき、緑色の瞳をしている。全体的にも冷たい雰囲気をもっている。

ミリア・アルドレットだ。

息を切らし、汗を流している。

「やあ、ミリアさん」

突然の声を聞き、ミリアは実技場の入り口を見た。
そこにはフロウの姿があった。

「おまえは……フロウ・ストルーク」

フロウはほほえみを見せた。

「練習相手が欲しくない？」

ミリアは表情を変えない。

「ケガでは済まないかもしれないぞ」

フロウは強い目でミリアを見た。

「覚悟は決めてきた。戦場で仲間の助けになれずに犬死にするぐらいなら、ここで死んだ方がマシさ」

それを聞き、ミリアは緑色の瞳で鋭くフロウを見つめた。

「いいだろう」

ミリアは静かに立ち上がった。

ウォールズ・ヘルズベイ基地の純白の広い廊下を、ある将軍が歩いていた。

その将軍は、年齢四十前後、白い髪に、鋭い目、顔は整っているが、少し恐そうな印象を持っている。

『七本柱』の一人、ジン・ファイナス少将だ。

廊下を軽い足取りで歩いていると、向かいから歩いてくる一人の軍人の存在に気づく。

「彼は……」

その軍人も、ファイナス少将に気づき足を止める。

その軍人は、年齢十五、六、長身に、赤い髪、赤い瞳が特徴的だ。その若い軍人を見て、ファイナス少将はほほえみを見せる。

「君は『紅蓮の稲妻』フェイム・トリプリッドかね？」

「はっ、そうですあります」

フェイムはサッと敬礼した。

「国軍の未来を担う天才の一人に会えて光栄だよ。私はジン・ファイナスだ」

「あの『剣封』の……ですか」

「ああ、君は私の期待通りの働きをしてくれるかな」

「いえ、期待以上の働きが出来るでしょう」

フェイムは赤い瞳を鋭く光らせた。

「フツ、頼もしいじゃないか」

ファイナス少将が手を差し伸べ、二人は握手をした。

ファイナス少将はフェイムと別れたあと、しばらく歩くと、廊下に並ぶ扉の一つで立ち止まった。

ファイナス少将がその部屋に入ると、そこには別の将軍が座っていた。

その将軍は年齢三十半ば、黄色の髪で、上にとがった特徴的な髪形をしている。細い目と高い鼻に、全体的にどこか高貴な雰囲気をもっている。

落ち着いた様子で紅茶を飲んでいた。

ファイナスはその将軍に笑顔を見せて口を開いた。

「久しぶりだなロイスバード少将」

ロイスバードはティーカップを置き、ほほえみを見せる。

「ああ、君こそ。ジン・ファイナス少将。元気そうだなによりだよ」

ファイナス少将はほほえむ。

「やっと君に、解放軍にリベンジできる機会がきたってわけだ」

それを聞いてロイスバード少将は鋭く目を光らせた。

「ああ、勿論だ。ケイルズヘルでの敗戦の恨みは必ず晴らす。もっ

とも……今回は司令官としてではなく『七本柱』の剣士としてだね」

それを聞いてファイナスは笑みを見せる。

「ああ、頼もしい限りだよ。『七本柱』の中で、ロストブルー中將に次ぐ高速の剣技、『絶影』ジェス・ロイスバード少将」

ビルセイルド基地にある大部屋の一つ、そこにはフルスロック軍の一部が待機していた。

その兵士の集団の中にクロコとサキの姿はあった。

二人は座り込み、話をしている。

「オレ達はそのウォールズ・ヘルズベイってトコを落とすんだよな」

「はい、世界最大の要塞だそうです……」

「初めての基地攻略が世界最大か………上等じゃねーか」

「……………」

サキは少しうつむきながら口を開く。

「ボクは正直不安です」

「……………」

「セウスノールの戦いで、解放軍の精鋭はほとんど戦死して……ミリアさんもいない。名の通った戦士だって、アールスロウさんぐらいしがいなくて……でも、国軍側には強い戦士がまだゴロゴロいて……本当にボクら……勝てるんだろうかって……」

「心配すんな」

クロコはパツと答えた。

「ここにはオレがいる」

クロコは右手に持っていた剣を強く握った。

「どんなやつが来ても、オレが倒す」

5 - 7 ウォールズ・ヘルズベイ攻略

ビルセイルド基地の作戦会議室では、各地から集まった解放軍幹部たちが作戦会議を開いていた。部屋の前にはウォールズ・ヘルズベイ基地とその周辺の見取り図が書かれた紙が張られ、その前にランクストン総司令が立っている。それに向かい合う形で幹部たちが整列して座っている。

全体に向かって説明をするランクストン。

「ウォールズ・ヘルズベイ基地は、クラウド国軍が保有する世界最大の基地だ。基地そのものの規模もさることながら、四方を高さ60mの分厚い城壁で守られている。さらにその城壁の裏には巨大な『空中砲台』がそびえ立っている……」

ローズマンが軽く手を上げる。

「『空中砲台』について詳しく説明してもらえませんか。この基地とセットでよく名が挙げられるんですが、細かくは知らないもので」

「ふむ……」

ランクストンは軽くうなづく。

「空中砲台というのは、ウォールズ・ヘルズベイ特有の建築物だ。五本の支柱に支えられて、上空へと押し上げられた要塞だ。しかも、

その支柱の高さは120mにも及ぶ……120mもの上空に浮かぶ巨大な砲台。それが空中砲台だ」

「そりゃあ、また、とんでもないモンですね……」

「ああ、その超高度に設置された要塞によつて、城壁の裏からの大規模な砲撃を可能にしている。この空中砲台に設置されている基地砲は、およそ五十門。その火力は皆一つ分に匹敵する」

「へ……へえ、皆一つ分……」

「加えて基地砲の射程は本来約450mだが、この空中砲台から放たれる基地砲は、高さによつて上乘せされ、射程は推定600m……城壁からの距離だと550mになるな」

「しかも……それが四方を囲んでるんですよね」

ローズマンが確認するように言った。

「そうだ、この空中砲台の存在によつて、元から世界最大規模を誇る基地の火力が、さらに増大されている。まさに驚異的と言えるだろう」

ローズマンは思わず苦笑いを浮かべた。

ランクストン総司令は全体を見渡して再び口を開く。

「では話を続けよう。このウォールズ・ヘルズベイ基地に対して、四方にある城門のどれかを目指して、まっすぐ前進して攻めた場合、城壁から550m手前で、空中砲台からの砲撃の壁が襲ってくるだろう。さらに500m手前で、城門と連結して建てられた砦からの

砲撃の壁が襲ってくる。そして450m手前で止めを刺すように、ウォールズ・ヘルズベイ基地本体からの砲撃が襲ってくる。つまりウォールズ・ヘルズベイは、三層の砲撃の壁に守られていることになる」

ロイム司令官が険しい表情で口を開く。

「これでは並みの軍勢なら、基地にたどり着くことすらできない」

アールスロウが冷静な様子で口を開く。

「もし私が指揮官なら、これに加えて、城壁手前に多数の砲兵隊を配置させ、350m地点に第四の壁を作りますね。完全に息の根を止める形で」

アールスロウの発言と共に、会議室は沈黙に包まれた。ランクストンも思わず口を閉ざしてしまう。

そんな中、部屋の脇に座っていたファントムが冷静な声を響かせる。

「それも、計算に入れておくべきだな」

ローズマンが眉を寄せる。

「つまり四層の砲弾の壁を想定する必要があるってことか」

再びファントムが声を響かせる。

「さて……どう攻めるか」

一人の司令官が声を上げる。

「今の話を聞くかぎりでは、正面对決は避けた方がいいですね、砲撃を避ける形で斜めから滑り込む形で近づいた方がいいでしょう」

それを聞きローズマンが声を上げる。

「まあ、普通に考えればな……でも、どうもしっくりこないな……。この手の話だと、ロイム司令官が詳しいんじゃないですか。クラット基地も似たような守りをしてたでしょう？」

ロイム司令官に視線が集まる。ロイム司令官は静かにうなずく。

「ふむ……この手の守りをする基地に対しては、最悪なのは長期戦に入ることですな」

アールスロウが口を開く。

「つまり最善はその逆、早く攻め、早く落とす……ということですね。もし砲撃から避けるように動けば、それだけ基地の回りをウロウロする羽目になり、そのあいだに逆に砲撃の餌食となる」

ランクストンが口を開く。

「……となると、たとえどれだけ火力が脅威でも、細かく動きまわらず、突撃したほうがいい……と言うことになるが……」

それを聞いてロイム司令官がうなずく。

「そういうことになります。ウォールズ・ヘルズベイの火力から下

手に逃げようとすれば、かえって追い回されることになるでしょう。どんなに嫌でも前進して立ち向かう覚悟がいきます。それと………：戦力を小出しにしないことです。小出しにしたらした分だけ、砲撃による被害が大きくなる。戦力は固めておくべきです」

それを聞いてローズマンがパツと口を開く。

「そうなる、戦力を固めて横陣で前進ってことになるな」

すると副総司令の一人が声を出す。

「戦力を固めた上での横陣では、突撃速度が削られる。基地砲のいいのだ」

「じゃあ、縦陣か……」

すると司令官の一人が口を開く。

「その場合は、砲撃を抜けるにはいいが、そのあとに控える国軍勢を相手にする際不利になる」

「となると斜め陣か……」

「ローズマン司令官、あまりいい加減な意見をポンポン出さないでもらいたい」

「こついうのは意見が多い方がいいんだよ」

一人の司令官の発言に、ローズマンが少しにらみながら言い返した。

「こういう手はどうでしょうか？」

アールスロウが落ち着いた様子で声を出した。

「まず横陣を左右正面三つに分ける。その分けた三つの部隊を三方で突撃させる。これなら突撃速度が速く、加えて砲撃を分散させることができます。そして砲弾の壁を突破後、三つの隊を集合させ、元の横陣として敵勢にぶつけます。これなら、突撃速度を落とさず、敵勢にも力負けしません」

会議室は静寂に包まれた。皆が何かを考え込んでいる様子だ。
一人の司令官が口を開く。

「少々奇策の匂いがするが……」

するとローズマンがパツと口を開く。

「そうですね？ 機動性も戦闘力も確保できる、この状況ならいい手だと思いますがね」

アールスロウが再び話し始める。

「この陣形の最大の利点は、横陣で敵と戦えることにあります。これなら中央突破を狙えます。迅速な制圧が可能でしょう」

それを聞いてロイム司令官が口を開く。

「加えて、突撃速度も申し分なし……」

ファントムが声を出す。

「不安どころは、砲撃の際にどこかの部隊がひるんで、バラバラになること。それと集合の際に陣形が崩れることだが……」

ローズマンが笑みを見せながら口を開く。

「フルスロックやウチの兵もいるんです。そこは心配に及びませんよ」

ランクストンが会議室を見回したあと、小さくうなずく。

「よし、決まりだな。ではこの作戦を軸にして、細かな動きを決めていこう」

数時間後のビルセイルド基地の広場。

灰色の石畳の広い空間を大勢の兵士が埋め尽くしていた。

その兵士たちは、次々と大型馬車に乗り込み、ウォールズ・ヘルズベイに向けて出発する。

その中にクロコとサキの姿もあった。

クロコは外へ向かう馬車の集団を見ながら口を開く。

「いよいよだな……」

「はい」

サキははつきりとした口調で返事をした、もう覚悟は決まったようだった。

二人は馬車に乗り込んだ。

ウォールズ・ヘルズベイの広場には多くの国軍兵が整列していた。その一角にロイスバード少将が立っていた。腰には剣をつけている。そんなロイスバード少将に大柄の部下が近づいてくる。

「少将、解放軍が姿を見せたようです」

「そうか……」

「いよいよケイルズヘルの恨みを晴らす時が来ましたな」

ロイスバードはニヤリと笑う。

「ああ………しかし、やつらはこの広場までたどり着くことができるかな？」

薄茶色の広大な大地、そこに解放軍の巨大な軍勢が展開していた。解放軍の軍勢が三か所に離れた形で並んでいる。

三つの太い横陣。その中央の陣の前衛に、クロコはいた。隣に立つサキに話しかける。

「少し変わった陣形だな……」

「はい、基地を出る前にアールスロウさんに聞いたんですが、約80000の軍勢を三ヶ所に分けてるそうです。後方には20000の軍勢が控えていて、ボクらの全兵力は約100000だそうです」

「国軍側も同じぐらいなのか？」

「いえ、情報によると国軍側の全兵力は70000ほどだそうです」

「じゃあ、数としてはこっちが有利ってことか」

「はい、そうなんですが……ウォールズ・ヘルズベイの守りを頭に入れると倍以上と想定した方がいいと言っていました」

「じゃあ、こっちが不利だって？」

「いかに早く崩せるかがカギみたいですね。ウォールズ・ヘルズベイをいかに機能させないようにするかってことみたいです」

「なるほどな……まあ、よくわかんないが」

クロコは正面に広がる景色を眺めた。遠くの大地には、巨大な建築物が山脈のようにそびえ立っていた。大地には高い城壁が広くそびえており、その上には太い柱に支えられた横長の建築物が顔を出している。さらにその上に、基地本体と思える縦長の複雑な建築物が天に向かって伸びていた。少し曇った空に浮かぶその巨大な影は、

まるで魔城のようにも見えた。

城壁の前には国軍の青い横長の布陣が展開されていた。規模は40000ほどだ。

少し強めの風が吹き、荒野の砂を舞い上げる。

横に並んだ解放軍の三つの軍勢と、国軍の横陣は、数kmの距離を開け、少しのあいだ、互いににらみあっていた。

パンッ！

信号銃が響くと共に、解放軍の三つの軍勢が動き出す。

ウォールズ・ヘルズベイから見て、北西、西、南西の三方向から攻めて来る。

三つの軍勢は勢いよく突進する。

先頭の剣兵たちが勢いよく走り、後ろから砲兵たちが大砲を走らせながら必死で追いかける。

初めは、左右二つの軍勢が少し前を走っていたが、徐々にクロコたちのいる中央の軍勢が追いついていき、ほぼ横並びにウォールズ・ヘルズベイ基地へと迫っていく、その時だった。

クロコは見た、城壁の上空に浮かぶ横長の建築物から、無数の煙が飛び出してくるのを。その直後、目の前に無数の爆炎が立ち塞がった。

「く……っ」

クロコは思わず険しい表情をする。雨のような砲弾が目の前の大

地に降り注ぎ、巨大な爆炎の壁を造っていた。

「なんて量の砲弾だ……」

辺りの兵士たちがそのあまりに激しい砲撃にわずかにひるんだ時だった。

「ひるむな!!」

先頭を走るアールスロウが、大声を張り上げた。

「突破する！ 皆、俺に続くんだ」

アールスロウは全く走る速度を緩めず、爆風の嵐に向かって突進する。

「く……負けるか……」

クロコもすぐにあとへ続く。

「ボ、ボクだって……」

サキがさらにあとへ続く。

「お……オレたちも行くぞー!!」

兵士たちも次々と後へ続いていく。

巨大な爆炎が、次々と兵士たちを襲う中、解放軍全体は足を止めることなく、一気に前進する。三つの軍勢は被害を受けながらも、空中砲台からの砲撃の壁を突破した。

中央を走る軍勢、その先頭でアールスロウは、今度は城門と連結して建つ砦に目をやる。

（次は……砦からの砲撃か）

左右の軍勢は、少し中央に寄りながら走っている。それによって、三つの軍勢は中央に集まる形で、徐々にウォールズ・ヘルズベイへと迫っていく。

三つの軍勢がさらにウォールズ・ヘルズベイに近づいていくが、それにも関わらず砦からの砲撃は行われない。その様子にアールスロウは戸惑う。

（なぜだ……？ なぜ砦からの砲撃がこない）

間もなくして、基地本体からの砲撃が放たれ始める。空中砲台の支柱の間をくぐり抜けて放たれる砲撃は、再び爆炎の壁を形成する。しかし、先ほどよりも爆炎の密度は薄い。

解放軍兵はひるむことなく、その爆炎に向かって突進した。二つ目の砲弾の壁をくぐり抜けると、いよいよ国軍勢が近くに見えるてきた。

三方向から進んだ解放軍の三つの軍勢の距離は、もうほとんどなくなっていた。ゆつくりと重なり合う形で集合していき、長い横陣が形成されていく。

横陣へと変化した解放軍の軍勢は、そのまま国軍の横陣へと距離を詰めていく。それと共に、国軍から砲撃が放たれる。

解放軍陣の所々で爆炎が上がっていく。

中央の先頭を走るアールスロウはその様子にまた少し戸惑う。

（砲撃が思ったより薄い。通常の砲撃体勢程度だ。大砲部隊を集結させていないのか？ 何かを狙っているのか？ しかしこの基地を

背に小細工など必要ないはず、ただ攻めが雑なだけなのか……？)

うねりを上げて動く解放軍の横陣は、城門を守る形で展開されている国軍の横陣にぶつかる。

砲撃の被害を受けたとはいえ、解放軍の軍勢の規模は国軍の軍勢よりもはるかに上回っていた。

「いくぞ！」

アールスロウの掛け声と共に、剣兵たちが一気に斬り込む。

先頭のアールスロウは長剣を引き抜き、洗練された剣技で次々と国軍兵たちを斬り伏せていく。

「よし……オレも行くか」

後ろを走るクロコも黒剣を引き抜いた。黒剣の刃が鋭い光を放つ。

「行くぞ、スピーゲルグレイ」

クロコは風のように大地を駆け抜けた。突進し、クロコは一気に斬り込んだ。

ヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！

クロコから放たれる無数の斬撃は、まるで壁のように国軍兵たちの前に立ち塞がった。国軍兵たちはその壁にぶつかると共に一瞬で斬り伏せられていく。そのあまりの速さに国軍兵たちだけでなく、クロコ本人も驚いた。

(軽い……体が風のように動く)

クロコの体は、戦場を縦横無尽に駆け巡った。国軍兵たちの体はまるで嵐にでも遭ったかのように次々と倒れていく。

アールスロウよりもはるかに速く、クロコは国軍兵たちを斬り伏せていく。

その光景を後方のサキが呆然と眺める。

「クロコさん……凄すぎる……」

先頭を走るアールスロウもその光景を少しのあいだ眺めていた。やがてアールスロウは走る速度を落とし、先頭をクロコに譲った。アールスロウはクロコの右側面につき、クロコをフォローする形で敵兵を斬り伏せる。

サキもクロコの左側面につきフォローする。

解放軍の軍勢はクロコを中心にして、国軍の厚い陣をどんどん切り崩していく。

国軍の陣は中央から徐々に崩れていき、真つ二つに分断されていた。

ウォールズ・ヘルズベイの巨大な城門が目の前に迫ってくる。それをアールスロウは見つめる。

（ここまでは作戦通り………順調だ）

解放軍の軍勢は、ついに国軍勢を中央から完全に分断した。解放軍はそのまま、一気にウォールズ・ヘルズベイの広場を目指し、城門に向かって突き進む。

アールスロウもそれに向けて走るが……

（なぜだろう……順調過ぎる。そんな気がする）

アールスロウは走る速度を徐々に落としていった。

（先ほどの突撃の時……なぜ砦からの砲撃がなかった……？）

そのとき、アールスロウは気付いた、クロコが足を止めていた。それを見て、アールスロウも足を止める。二人を置いて、解放軍はどんどん突き進む。

アールスロウはクロコに駆け寄る。

「どうした、クロコ」

クロコは上を向いていた。

「アレ……」

クロコは上を指さす。アールスロウもその方向を見た。城壁の上空に浮かぶ空中砲台、そこに無数のロープが吊り下げられていた。異常に長いロープだった、おそらく広場の床面まで続いている。

アールスロウは眉を寄せる。

（地上に下りるためのロープ？ いや、変だ、空中砲台は、支柱に設置された階段を使って昇り降りするはずだ。それをわざわざロープで……？）

「アールスロウ……」

クロコが上を見ながら口を開く。

「あの柱で支えられてる建物。もう、人の気配がないぞ」

「……………！」

アールスロウは空中砲台に目を移した。確かに人影は何も見えない。大砲だけが置き去りになっている。アールスロウは素早く周りを見た。そして気づいた。

先ほどまで戦っていた国軍。その左右に割かれた軍勢が、そのまま左右へと動き、逃げるように散っていた。アールスロウの心臓が嫌に高まる。

「嫌な予感がする……………この状況、前にどこかで……………」

アールスロウは緊迫した声を出した。クロコがうなずく。

「嫌な予感が……………オレも同じだ」

クロコは前を向く。

「サキ！！ 止まれ！！」

前方を走るサキが足を止めた。

「え……………？」

サキが不思議そうな様子で振り向いたその時だった。

ドオオオオオオオンッ！！！！

巨大な爆炎が、空中砲台を支える巨大な支柱を包んだ。耳を弾くような爆発音と共に、支柱がゆっくりと砕け散っていく。

「これは……仕掛け爆弾!？」

アールスロウはその様子に目を凝らした。

「これは……前方の支柱だけを破壊している。ということは……」

前方の支柱を砕かれた空中砲台は、バランスを失い、ゆっくりと傾いていく、解放軍の方向へ向かって。

「逃げろー!!」

アールスロウは周りの兵士たちに呼びかけた。

「ウ……ウソだろ!」

クロコはウォールズ・ヘルズベイに背を向けて一気に駆ける。サキも駆けだす。アールスロウも駆ける。

巨大な建築物が天から解放軍に向けて降ってきた。まるで天地がひっくり返り、地上が落ちてきたかのような光景だった。砕かれた柱の一部は城壁と砦に降り注ぎ、上部を粉々に破壊していく。城門から広場へ侵入しようとしていた解放軍兵たちに、巨大な破片が降り注ぐ。逃げ遅れた多くの解放軍兵たちが、巨大な破片に押し潰されていく。

降り注ぐ巨大な破片から、解放軍兵たちは死に物狂いで逃げる。その中で、クロコとアールスロウは何とか逃げ延びていた。遅れて走っていたサキのすぐ後ろで、巨大な破片が落下していく。サキ

もギリギリで逃げ延びた。

最後に巨大な建築物そのものが地面に叩きつけられ、大地を狂ったように揺らした。逃げ遅れた解放軍兵たちの姿は、その中へと消えていった。

大地に落ちた空中砲台は、その衝撃で粉々に砕け散り、一万を超える解放軍兵たちを飲み込み、その動きを止めた。

クロコたちの目の前にはガレキの山が広がっていた。それを見てクロコは呆然と立ち尽くす。その隣でアールスロウも呆然と立ち尽くしていた。

「基地の損害も全くとわない……なんて作戦だ」
アールスロウの表情が徐々に陰しくなっていく。

「この……絶望にも似た悪寒……俺は知っている……過去に、確かに経験している。間違いない。やつだ。『七本柱』唯一の軍師……」

アールスロウの表情にわずかに恐怖が走る。

「『戦場の魔術師』……！」

左右へと散った国軍の軍勢、その一方から一人の将軍が馬にまたがり、動きを止めた解放軍の様子を眺めていた。
ライトシュタインはゆっくりと口を開く。

「全て……作戦通りだ」

5 - 8 絶望の猛攻

薄茶色の大地にそびえ立つ超巨大基地ウォールズ・ヘルズベイ、その四方を守る空中砲台の一角、西の空中砲台が完全に崩れ落ちていた。巨大なガレキは、城壁を砕き、山となって積もっていた。それを目の前にして、解放軍の兵士たちは呆然と立ち尽くしていた。

その軍勢を左右から眺める国軍の軍勢、その一方の中心付近、そこに馬にまたがったライトシュタイン中将の姿があった。何事もなかったように冷静な表情で、混乱する解放軍の軍勢を眺めていた。ライトシュタインは、解放軍をじっと見つめながら、ライトシュタイン邸での出来事を思い出していた。

（クロコ・ブレイリバー……おそらくはあの中にいるのだろう。しかし、悪いが、私の指揮を信頼する部下の為に、手を抜くことはできない）

ライトシュタインは信号銃を高く構えた。

「まずいな……」

アールスロウは、すぐにガレキの山に背を向ける。

「すぐに一時撤退させないと……」

すると近くに立つクロコが声を上げる。

「一時撤退！？ 逃げるのか……！」

「この状況で戦うのは危険すぎる。それにもし奴なら、これで終わるはずがない」

「でも、どうやって……」

「指揮官に直接言うしかないだろう」

アールスロウが走り出そうとする、その時だった。

「な……なんだ、アレ！？」

クロコの声聞いてアールスロウは足を止めた。クロコの見ている方向を見る。

左右に散った国軍の後方の地面が盛り上がっていた。巨大な土の山が、国軍と同じように左右から挟むように現れた。土が徐々に落ちていき、中から恐ろしく巨大な大砲が姿を現した。

クロコは思わず目を見開く。

「アレは……グラン・マルキノ！？ 地面に隠してたのか！？」

アールスロウの表情が険しくなる。

「急がないと……」

ドオオオン！！ ドオオオン！！

大地を揺らし、赤い閃光が噴火のごとく地面から吹きあがった。グラン・マルキノの巨大な爆炎は、解放軍陣の中心を飲み込んだ。アールスロウの体に強い爆風が叩きつけられる。

「く……！！ あそこはちょうど、指揮官がいる位置………指揮系統が吹き飛ばされた」

（正確すぎる砲撃……事前にこちらの動きを予測していたのか……！！）

ライトシュタインは、遠くから巨大な爆風を見つめていた。

「どんな巨大な獣も、頭を狙えば剣の一刺しで息絶える」

ライトシュタインは信号銃を再び構えた。

「さて、仕留めさせてもらおう」

アールスロウは天に向かって昇る黒煙を見つめていた。

「指揮系統が潰されたか………だが、なんとか後退させなければ」

左右に散っていた国軍が動き出した、解放軍を挟み込む形で。

大地を踏みしめ、国軍の大軍が解放軍へと迫ってくる。

それを見てアールスロウは辺りを見渡す。

「サキ！！ サキ・フランティス！！」

「はい！」

遠くから声が聞こえたと同時にサキが現れ、駆け寄ってくる。
アールスロウはクロコとサキに向かって声を飛ばす。

「君たちは後方に回り込め！ 退路を確保するんだ」

「分かった！ アンタは？」

「俺は中央へ進んで指示を出す」

三人は陣の中を駆け抜ける。

国軍はついに、解放軍陣の両翼を左右から挟み込んだ。対する解放軍は、先ほどの崩落攻撃と巨大砲撃により、完全に陣形を崩していた。

混乱した解放軍兵に向けて、連携の取れた国軍兵たちの攻撃が襲いかかる。連続で放たれる銃撃に、剣兵たちの集団攻撃。解放軍兵たちは次々と倒れていく。指揮を失った解放軍には為す術がなかった。

さらに追い撃ちをかけるようにグラン・マルキノの巨大な爆炎が、解放軍の側面を吹き飛ばす。

側面戦力は見ると見るうちに破壊されていった。

そんな中、解放軍陣の中央で、アールスロウが信号銃を構えた。

パンパンパンッ！！

「後退だー！！ 後退しろー！！」

アールスロウの声が響き渡る。

しかし、信号銃の音に最初に反応したのはライトシュタインだった。

「そうはさせない」

ライトシュタインは素早く信号銃を構える。

後方に回ったクロコとサキ。

クロコは退路となる大地に目を向ける。

「んっ！？ こっちには国軍がない……」

（左右から挟み込むだけ……。前みたいに退路を塞いでないのか？）

ライトシュタインは全体を眺めていた。

「前回のよう、後方を兵で押さえるようなことはしない。代わりに……」

国軍から無数の砲撃が放たれた。

「先ほど温存していた爆炎の壁をいま見せよう」

解放軍の後方を塞ぐように、砲弾の雨が大地に降り注いだ。解放軍陣のすぐ後方の大地が爆風に包まれる。

クロコの目の前が赤い炎と黒煙に包まれる。

「うわっ!!」

隣のサキが声を上げ、顔を腕で覆う。クロコはひるまず前方をにらみつけた。

「く……こんなもので……」

クロコは駆け出した。

「撤退するぞ!! みんなついて来い!!」

クロコは爆炎の壁に向かって駆け出した。サキがそれに続く。少し走った時だった。

「待って下さい!! クロコさん止まって!!」

サキの声でクロコは足を止めた。後方を振り返り、驚いた。サキの他に味方は誰も付いてこない。

「え……？」

他の解放軍兵たちは爆炎の壁を前にひるんで、走り出すことができずにいた。

「おい！！ 走るんだ！ 下がらないと全滅するぞ！！」

クロコが呼びかけても、まったく動き出す気配がない。

「クソ……」

国軍陣の中で、ライトシュタインは固まった解放軍を眺める。

「解放軍に、この砲撃の壁を突破することはできない。勝利という希望の為に立ち向かう勇気を振り絞れる者はいるが、恐怖という絶望の中で逃げ出す勇気を振り絞れる者は少ない。これだけの爆炎の壁を作れば、それだけで十分解放軍を縛りつけることができる」

動きを止めた解放軍に、国軍の猛烈な攻撃が襲いかかる。

剣で斬り伏せられ、銃で体を貫かれ、解放軍兵たちは次々と倒れていく。

解放軍の中央でアールスロウは立ち尽くしていた。

「く……!!」

アールスロウは悔しそうに信号銃を投げ捨てた。

戦場から離れた大地、そこでは、後方で控えていた解放軍の軍勢が動き出していた。

ファントムが六台のリック・ノールを従えて、戦場へ向かった。

戦況を見つめるファントム。

「これは……まずいな」

1 km 近く離れた地点で、援軍は足を止めた。

「これより、リック・ノールによる援護砲撃を行う」

すると一番近くのリック・ノールの操縦員が声を出した。

「標的はグラン・マルキノですか？」

「違う」

ファントムは左右から挟み込んでいる国軍の軍勢をそれぞれ見る。

「狙うは国軍の砲兵部隊だ。砲撃の陣形を乱して味方の退路を確保する。リック・ノール照準合わせろ」

六台のリック・ノールが、国軍内の砲撃の煙が集中する場所へ、

それぞれ照準を合わせた。

「リック・ノール撃てー！！！！」

長い砲身から爆音がとどろいた。国軍の砲兵部隊に、巨大な爆撃が襲いかかる。

「うわああああ！！」

砲兵たちは叫び声を上げ、爆風により吹き飛ばされる。

後方に立つクロコは、爆炎の壁が薄くなるのを確認した。

「今だ！！ 進め！！」

クロコは再び走り出した。数人の兵士たちが付いていく。すると、さらにアールスロウが飛び出してくる。

「撤退するには今しかない。皆、続けー！！」

次々と兵士たちが動き出す。

ついに解放軍全体がゆつくりと動き出した。

その様子をライトシュタインは静かに見つめていた。

「リック・ノールで砲兵部隊をかく乱したか……いい判断だ」

国軍は後退する解放軍に対して追い打ちをかけるが、解放軍はそれに応戦しながらも、徐々に国軍から離れていく。

ライトシュタインはその様子を静かに眺めていた。

「さすがに40000の軍勢で、80000の軍勢を仕留めきるの
は無理だったか……。しかし、十分な損害を与えることはできた」

後退する解放軍の一角で、アールスロウは悔しそうな表情を浮か
べる。

（損害は軽く見積もっても20000以上……最悪な状況だ）

ウォールズ・ヘルズベイの西に広がる薄茶色の大地に、逃げ延び
た解放軍の軍勢は待機した。

ライトシュタインの圧倒的な攻めにより、ほとんどの兵士たちは
放心に近い状態になっていた。

その軍勢の中央付近に、アールスロウの姿はあった。

「では、副司令。指揮を頼んだ」

「はっ」

アールスロウの言葉に対し、若い副司令が敬礼した。
立ち去ろうとするアールスロウに、若い副司令が呼び止める。

「アールスロウ司令官」

「なんだ？」

「司令官はどのように動くのですか？」

「俺は前線で剣を振るう。ライトシュタインが相手では、指揮のレベルを上げたところであまり意味はないからな」

アールスロウはそう言ったあと、若い副指令に背を向けて歩き出す。すると、兵士の群れからヒョコツとクロコが現れる。

「あつ、アールスロウ」

「クロコ……」

アールスロウは少し眉を寄せる。

「なぜ君がここにいる。早く持ち場に戻るんだ」

「けど……」

「なんだ？」

「これからどうするんだ？ どうやって戦うんだ？」

クロコは不安そうに問いかけた。

「とにかく陣を横に広げて前進する。指揮官がライトシュタインだと分かった以上、小細工は逆効果だ」

「だけど、兵力の差はもうほとんどないんだろ。加えてウォールズ・ヘルズベイの要塞に、ライトシュタインのおっさんの指揮……それで勝てるのか……？」

「……………ウォールズ・ヘルズベイとライトシュタイン……考えられる組み合わせの中でも最悪の部類だろうな」

アールスロウはそう言ったあと、黙った。
しばらくの静寂が流れた。

クロコが口を開く。

「増援を要請した方がいいんじゃないか？」

「それはできない。100000の兵力が、ウォールズ・ヘルズベイ攻略に出せる最大限度だ。これ以上の兵力をウォールズ・ヘルズベイに割けば、ゴウドルークスの決戦で勝てる見込みがなくなる。最終的に勝つためには、今ある兵力で勝たなければならない」

「だけど……このまま、正面对決を挑んでも、はっきり言って勝てる気がしない。そうだな」

クロコはアールスロウを見つめた。

「このまま戦ったらダメだ。そんなのアンタだって分かってるはずだ」

アールスロウは険しい表情をした。

「しかし……ライトシュタインを相手に下手な小細工は逆効果だ……」

「でもこのままじゃ、どっちにしる負ける」

その言葉を聞いて、アールスロウは黙って立ち尽くした。厳しい表情をする。

（分かっている……このままでは、しかし、どうすればいい？　これ以上兵力は割けない……なら、あきらめると言うのか、この戦争に勝利する最大の好機を……？　そんなことはできない。しかし、この状況を打破できるいい手など……）

「手なら一つだけ……あるんじゃないのか？」

クロコの声が小さく響いた。

「……なんだと？」

アールスロウが聞き返すと、クロコは真紅の瞳で静かに見つめた。

「クラット基地防衛戦のとき、あいつの陣形が一度だけ崩れたことがあったよな」

「……………！」

「聞いた話によれば、あれはガルディアが、ライトシュタインの陣形をかき乱したのが原因らしいな。あれと同じことをすればいい」

「それを、誰がやるんだ？」

「オレがやる。中央から国軍を、ライトシュタインの予測を超えた速さで引き裂けば……」

アールスロウは少しだけうつむいた。

「言葉を返すようだが、それは無理だクロコ。あの時は、奇襲による側面からの攻撃だったうえに、ライトシュタイン本人がすぐ近くにいたという幸運が重なって初めてできたことだ。正面からでは、 그레이さんでも奴の軍勢を乱すことはできない」

「……なら」

「仮に俺やサキが加わったとしても、それでも足りないだろう。 그레이さんを超えた働きが出来たとしても、ライトシュタインの軍勢を乱すことはできない。解放軍の誰であってもだ」

「……………」

クロコは悔しそうに黙った、その時だった。

「いえ、それができる奴なら一人いますよ」

突然、離れた所から声が響いた。

クロコとアールスロウは同時にその声の方向を向く。

一人の剣士が、二人に向かってゆっくりと歩み寄ってくる。

「ライトシュタインの計算を超えて、奴の軍隊をかき乱せることのできる剣士が、ここに一人だけね」

その青年の剣士は、流れるように立った黄色の髪をしていた。細い目で、二人の方向を見つめながら笑みを浮かべている。クロコとアールスロウの前に、フィンディ・レアーズが現れた。

5 - 9 誇りを背負う者

ウォールズ・ヘルズベイ基地の西に広がる薄茶色の大地、そこに待機している解放軍の軍勢。その一角に立つクロコとアールスロウの前に、フィンディ・レアーズが姿を現した。クロコはその姿を見て驚く。

「フィンディ……なんで、おまえが……」

フィンディはクロコの様子を見て笑みを浮かべる。

「援軍として来たんだよ。ケガも治って、調子も戻ったからな。まあ少し遅れちゃったが」

クロコは戸惑った様子で口を開く。

「でも、おまえには、もう……」

「戦う理由ならあるさ」

フィンディはクロコを見つめる。

「この戦場で、忘れ物をしちゃったからな」

「忘れ物……？」

「命の恩人を、戦場に置き去りにはできないだろ」

フィンディは優しくほえんだ。

「おまえを助けに来たんだよ、クロコ」

「……………」

クロコは驚いた。

「フィンディ……………」

フィンディはアールスロウの方を見る。

「話は戻りますが………… オレなら、ライトシュタインの軍勢を正面から切り崩せる。その自信はあります」

しかし、アールスロウの表情は曇ったままだ。

「君の対集団戦の技術は認める。しかし、たとえ君でも、ライトシュタインの軍勢を正面から切り崩せるとは思えない」

その言葉を聞いて、フィンディは余裕の表情を見せる。

「そうですか？」

フィンディは自信に満ちた笑みを見せた。

「言っときますけど、オレの戦闘能力は集団戦最強です。たとえばグレイ・ガルディアと比べたって、二倍は早く敵陣を切り裂ける自信

はある。加えて、オレは前のように、人を殺すだけの剣技は二度と振るわない。相手の動きを止めるだけなら、さらに二倍早く切り裂ける。これで四倍。加えて、スタミナの温存も一切なしで、目の前の敵陣を切り裂くことだけに全力を懸ける。これでさらに二倍、つまり八倍。そして最後に……」

フィンディは目をギラツと光らせた。

「死ぬ気で切り開く。これでちょうど十倍」

フィンディはそう言って軽く笑みを見せたあと、アールスロウを見つめる。

「グレイ・ガルディア十人分の速度。ライトシュタインの計算を上回るには、十分でしょう？」

アールスロウはあきれるようにため息をついた。

「ずいぶん都合のいい計算だな。集団戦最強というのもあやしい……」

アールスロウはそう言ったあとフィンディを真っ直ぐ見つめる。

「だが、それに賭けるしかなさそうだ」

フィンディはニヤリと笑う。

「決まりですね」

ウォールズ・ヘルズベイ基地から北、そこに広がる荒野に、解放軍は展開した。後ろで備えていた軍勢も加わり、全戦力の70000で、再び横三つに分かれる。

ウォールズ・ヘルズベイの、北の巨大な城門の前にも、国軍の40000近くの軍勢が横に大きく展開していた。その中心には、ライトシュタインが馬にまたがっている。

解放軍の三つの内の中央に位置する軍勢。その前衛には、フィンデイ、クロコ、サキ、アールスロウの姿があった。

パンッ！！

一発の信号銃と共に、三つの解放軍の軍勢が動き出す。

クロコたち四人は、先頭を駆ける。基地の城門が近づくと共に、ウォールズ・ヘルズベイの北の空中砲台から、砲撃の雨が降ってきた。クロコたちは目の前に立ち塞がる爆炎の壁に向かって、迷わず突進する。

強烈な砲撃の嵐をくぐり抜けると、今度はすぐに、城門と連結している砦の砲撃の壁が立ち塞がった。クロコたちはひるまず突破を図る。後方からは味方の叫び声が次々と上がる。クロコたちは前だけを見て駆け続けた。

その砲撃の壁を抜けてすぐに、要塞からの砲撃の壁が現れた。その壁に飛び込むと、クロコの隣のサキが爆風でわずかによろめいた。

「サキ！」

「大丈夫です！」

サキはすぐに体勢を戻し、クロコの隣に戻ってくる。

三つ目の爆炎の壁を抜けると、今度は、国軍からの砲撃の壁が目の前に立ち塞がった。

砲撃の嵐の連続で、クロコの表情も険しくなる。

「クソ……!!」

すぐにアールスロウがクロコに呼びかける。

「ひるむなクロコ。これで最後だ」

クロコたちは、四つ目の爆炎の壁を抜けた。

そのまま一気に、国軍の軍勢に向かって突き進む。間もなく、左右から、同じく爆炎をくぐり抜けてきた解放軍の部隊が姿を現し、三つの軍勢が一つの横陣へと姿を変えた。

解放軍はそのまま国軍へと突進する。

国軍の布陣の中心、そこでライトシュタインは突進してくる解放軍の様子を見る。

「やはり横陣で来たか。私の存在に気づいたようだ。だが思ったよりも横に広がっていないな。とはいえ、予測の範囲内だ。予定に狂いはない」

解放軍の横陣が、待ち構える国軍の横陣にぶつかろうとしていた。

解放軍の前衛、アールスロウは走りながら声を上げる。

「予定通り、フィンディを中心に中央突破を図る。クロコ、サキ、二人はフィンディの側面をフォローしてくれ、後方にはオレがつく」とするとすぐにフィンディが声を上げる。

「必要ありません、下手なフォローはかえってジャマです。サキ一人だけでいい」

「分かりました」

サキはアールスロウの方を向いて口を開く。

「アールスロウさん、集団戦でのフィンディさんの動きは独特です。たぶんボクしかフォローできない」

「分かった、なら俺とクロコはフィンディの切り開いた場所を広げることには徹しよう。分かったか、クロコ」

「ん？ ああ……」

ライトシュタインは信号銃を構える。

「ただ牛の様に突進するだけならば、まずは側面を囲ませてもらおうか」

国軍の両翼の一部が動き出し、横に長く広がっていく。

そんな中、解放軍はついに国軍とぶつかった。その瞬間だった、先頭に立つフィンディは、そのまま一気に国軍の剣兵の群れに突進する。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

フィンディの嵐のような斬撃が、国軍の剣兵たちを襲った。剣兵たちの群れは、まるで強風にでもあったかのように、次々と体を傾かせて、地面に倒れていく。

「はああああッー！！」

フィンディは掛け声を上げて、戦場を風のように駆ける。体を高速で動かし、力強く剣を振り回す。フィンディが剣をひと振りすること、一人の剣兵が地面へと倒れる。恐ろしく正確なその斬撃は、剣兵たちの脇腹や足をピンポイントで切り裂き、確実に動きを止めていく。

フィンディの側面を守るサキは、その動きについていくのがやっとだった。

「すごい……」

サキは思わずフィンディの戦いに見入ってしまう。

（クラット基地で見たどの戦いとも違う。ゲームと例えた戦いじゃない。決死の覚悟で戦ってるんだ……）

フィンディの回りの敵兵たちは将棋倒しのように倒れていく。

国軍の巨大な軍勢、その中央前衛が徐々に崩されていく。その様子に国軍の中心にいるライトシュタインは気付いた。

「ふむ……中央が押されているな。ということは、作戦は中央突破……私に正面から挑むつもりのような」

ライトシュタインは信号銃を構える。

「いいだろう、受けて立とう」

国軍の布陣に変化が生じる。両翼の戦力が徐々に中央に向けて集まろうとしていた。

フィンディは解放軍の先頭に立ち、高速で剣を振り回す。口を開き、わずかに息を乱している、それでもフィンディの動きは全く衰えなかった。目の前に立ち塞がる国軍兵をあっという間に斬り伏せていく。

そんなフィンディの前に、銃兵部隊が立ち塞がる。

「構えー！」

十丁の銃が一斉にフィンディの方を向く。次の瞬間、フィンディの姿が消えた。

「なに……！？」

銃兵隊の隊長は驚く。すると、目の前の国軍兵の群れからフィンディが飛び出してくる。

「な……!?!」

ヒュンヒュンヒュンッ!!

フィンディの斬撃は銃兵隊をあっという間に斬り伏せた。
続けて、国軍の大砲部隊がフィンディを狙う。遠くからフィンディに照準を合わせようとする。しかし……

「早く照準を合わせろ!」

砲兵隊の隊長が兵士たちに命令する。

「ダ、ダメです! 撃てません!」

フィンディは、国軍の剣兵の後ろに隠れるように移動していた。

「クッ……他の砲撃部隊も全く撃つ様子がない。どうなっている?
……まさか、こちらの位置を完全に把握しているのか?」

「み……見失いました!」

すると突然、砲兵たちの目の前にフィンディが現れた。

「うわあああ!」

ヒュンヒュンヒュンッ!!

フィンディは一瞬で砲兵部隊を斬り伏せた。

フィンディは異常な視野の広さで、周りの敵の動きを一瞬で把握し、変則的に戦場を駆け回る。サキはそんなフィンディの動きをなんとか読んで、あとに付いていく。

フィンディの攻撃によつて、国軍の布陣が切り開かれていく。そこへ解放軍の剣兵がなだれ込む。

サキはフィンディの側面の剣兵を斬り伏せ、クロコとアールスロウも前線で剣を振るい、フィンディの切り開いた道を一気に広げていく。

国軍の巨大な軍勢は分断される方向でどんどん切り崩されていく。

その様子をライトシュタインは見つめる。

「早いな……まさかここまで早く陣形が崩されるとは。とはいえ両翼のフォローがあれば、そうそう崩されはしない」

フィンディはひたすら剣を振るっていた。次々と国軍兵を斬り伏せていく。全ての力を込め、暴風のように剣を振るい続ける。

「ハア……ハア……ハア……」

息を大きく乱しながら、それでもその勢いは全く衰えることはなかった。中央に徐々に国軍の戦力が集めていくが、それよりも速くフィンディは陣形を切り崩していく。

国軍の陣形の崩れは止まることはなかった。徐々に徐々に、巨大な軍勢に裂け目が入っていく。

その様子をライトシュタインは静かに見つめていた。

「中央突破の対策は十分に立てている。中央が崩れることはない」

フィンディはどんどん国軍兵を斬り伏せていく。大きく息を乱しながらも、その剣の勢いは衰えることはなかった。敵の群れへと特攻し、捨て身で敵兵を斬り伏せる。すでにフィンディの体は斬撃をいくつか浴び、数ヶ所の切り傷を負っていた。フィンディはできるだけ早く敵陣を切り裂くことだけに集中していた。

そのあまりの速さについてサキが置いていかれた。フィンディは単独でどんどん敵兵を斬り伏せていく。

剣も、銃も、大砲も、何もフィンディを止められない。人知を超えた速さで、国軍の陣形は崩されていく。

国軍の布陣を切り裂く解放軍の進撃は、止まることはなかった。解放軍の群れは、徐々に徐々に、ライトシュタインへと近付いていく。

その光景を目の当たりにしたライトシュタインは、初めて緊迫した表情を浮かべる。

「早い……早過ぎる。これではフォローが間に合わない。何が起きている……？」

フィンディは独り先頭に立ち、国軍の陣を突き進む。すでにゼイと息を乱していた。それでもフィンディの勢いは止まらない。次々と目の前の剣兵を斬り伏せ、次の群れへと一気に突進する。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

フィンディはあっという間に剣兵の群れを斬り伏せていく。

（あと少しだ……いける……中央を切り崩せる……！）

フィンディがそう思った瞬間だった。

ヒュンッ！

フィンディの放った斬撃が、初めて空を切った。剣兵の一人がフィンディの斬撃をかわしたのだ。フィンディは驚いた。

（しまった、わずかに剣先が狂った！！）

フィンディは剣兵に懐に入られた。

ヒュンッ！！

突然、クロコが横から現れ、剣兵を斬り伏せた。

「ク、クロコ」

驚いて思わず声を出すフィンディ。

「おまえ、ハア……ハア……アールスロウさんの話聞いてたのか？」

「いや、聞いてなかった」

「しょうがねーやつだな……ハア……助かったぜ、クロコ」

「行け！ フィンディー！！」

「ああ！！」

フィンディは一気に直進した、目の前の剣兵の群れを斬り伏せ、道を切り開いたその瞬間だった、目の前には、馬にまたがったライトシュタインの姿があった。

ライトシュタインはその光景に我が目を疑っていた。

「なに……！？」

フィンディは迷わず突進し、一瞬で斬り込んだ。

ヒュンッ！！

ギン！！

ライトシュタインは素早く小剣を引き抜き、フィンディの斬撃を受け止めていた。

驚くフィンディ。

「なに……オレの斬撃を止めた！？」

「く……！！」

ライトシュタインは険しい表情で、素早く馬から跳び下りた。フィンディとライトシュタインのあいだに馬がさえぎり、フィンディは動きを一瞬止めた。その隙にライトシュタインは国軍兵の群れの

中へと姿を消した。

「チツ！」

（逃したか……だが、もう指揮系統は機能しないはず。いまはとにかく……）

フィンディは再び駆け出した。

「この陣を完全に分断する！！」

フィンディは再び剣を振るい、国軍兵を斬り伏せていく。サキが何とか追いつき、再びフィンディをフォローする形で剣を振るう。クロコとアールスロウもどんどん陣を切り崩していく。

国軍の巨大な布陣は、ついに左右に分断された。

国軍の布陣は、中央へなだれ込んでいく解放軍兵によって、徐々に崩れていき、やがて囲まれるように押されていった。

国軍陣の中で、ライトシュタインはその様子を呆然と見ていた。

「まさか……私の指揮する軍が、正面对決で敗れる日が来るとはな……」

ライトシュタインは口元をわずかに歪め、その場で目を閉じた。しかしすぐに目を開け、いつもの冷静な表情に戻った。

「……だが、最低限のノルマは果たした。あとは彼らに任せる

としよう。歴戦の戦士たちに「

5 - 10 待ち構える者たち

ウォールズ・ヘルズベイ城壁の手前では、城門を守っていた国軍の横陣が、フィンディの猛攻により左右に分断されていた。

分断された国軍はそのまま解放軍に囲まれるように崩されていく。

クロコたちのいる中央の部隊は、崩れた国軍を置き去りにして、城門から、ウォールズ・ヘルズベイ基地の広場へ向かって前進しようとしていた。

そんな中、フィンディは一人足を止め、少しのあいだ肩で息をしたあと、ゆっくりとよろけながら、地面にひざをついた。

フィンディは大きく息を乱しながら、その場で力尽きた。剣を握ったまま、地面にゆっくりと手をつけた。

そのフィンディを、広場を目指す他の兵士たちが次々と追い抜いていく。

「フィンディ」

クロコがフィンディの横に立ち、声をかけた。

「あとは任せる。オレたちがケリをつけてくる」

それを聞いて、フィンディは笑みを見せた。

「何言っただよ……オレは……少し休むだけさ……すぐ……」

追いつく……」

「そうか」

クロコは前を向いた。

「なら、先に行ってくる」

「ああ……」

クロコはフィンディを置いて、城門へ向けて駆けだした。

解放軍兵の大群は城門を抜け、一気に広場へとなだれ込んでいった。

広場には国軍兵たちの大軍が待ち構えていた。城門から入ってくる解放軍を、左右から挟み込む形で国軍の砲撃が狙い撃ちする。基地本体に設置されている大型大砲も、近距離砲撃を仕掛けてくる。

解放軍兵たちを、無数の砲火が襲った。

仲間が次々と爆炎にのみ込まれていく中、解放軍兵たちは怯まず、どんどん広場を前進していく。

アールスロウとサキも広場へたどり着いた。アールスロウは辺りを見渡す。

「クロコは？」

「さっきまでいたはずですけど……」

するとクロコがヒョコツと出てきて横に並ぶ。

「フウ、追いついた」

「何をしていたんだ？」

「ちょっとな……」

クロコがそう言った直後、すぐ前方に爆炎が上がった。
クロコは腕で顔を覆いながら、険しい顔をする。

「すげー砲撃だ。かなりの兵が広場にいるぞ」

「まだ30000の兵力が残っているからな。この配置は計算の内だ」

アールスロウは冷静な様子だ。

「国軍は戦力を三つに分けている。ここから見て右側面から攻撃を加える部隊と、左側面から攻撃を加える部隊。そして基地そのものを守る部隊だ」

アールスロウは、クロコとサキの顔を見渡す。

「これから俺たちもそれぞれ別れるぞ。右側面を押さえる部隊にはサキ。左側面を押さえる部隊にはクロコ。基地占拠の部隊には俺が行こう」

「はい！」

「ちょっと待て！」

サキの返事の直後、クロコが声を上げた。

「基地占拠の部隊にはオレが行く」

「なぜだ、理由でもあるのか？」

するとクロコは一呼吸置いて、アールスロウを真っ直ぐ見つめた。

「……多分、基地を守る部隊には、ここの一番強いやつがいる」

クロコはアールスロウをじっと見る。

「今いる味方の中で、一番戦えるのは多分オレだ。だからそこには、オレが行く」

「……………」

アールスロウは少し迷うように黙った。

「頼む、行かせてくれ」

クロコの言葉を聞いて、アールスロウは小さくため息をつく。

「分かった……………」

アールスロウはクロコの持つ黒剣に視線を移した。

「それが、この剣を持つ者の宿命なのかもしれないな」

アールスロウは再びクロコを見つめる。

「必ず生きて帰って来い、クロコ」

「ああ……アンタもな。それにサキも」

「はい、クロコさんも、どうか無事で……」

クロコはウォールズ・ヘルズベイ内部を目指して駆けだした。

残ったアールスロウは左に位置する国軍を見つめる。

「俺たちも行くぞ」

サキは右に位置する国軍に目を移す。

「はい」

アールスロウとサキは素早く左右に分かれた。

城門をくぐり抜けた解放軍は、広場で待ち構えていた国軍とぶつかり合う。

国軍は左右から、解放軍を挟み込む形で攻撃を加えていた。それにより解放軍の左右側面では激しい戦闘が始まった。

解放軍の左側面、国軍の砲弾が降り注ぐ中、剣兵同士の激しい戦

いが繰り広げられていた。そんな中、アールスロウは中央で鮮やかな剣技を振るい、国軍兵を次々と斬り伏せていく。

解放軍の右側面では、サキが、剣先に取り付けた鏡で敵の注意を引きつけ、素早く死角に入りこむ鏡の剣技。それを使って、剣兵を一人、また一人と斬り伏せていく。

そして解放軍の正面にそびえ立つウォールズ・ヘルズベイ本体。その入り口入ってすぐの広間では、占拠を狙う解放軍と、基地を守る国軍の激しい戦いが繰り広げられていた。広間には待ち構えていた国軍の銃兵隊の弾丸が乱れ飛び、解放軍兵たちを次々と襲っていた。

そんな中、クロコは風のように駆け、広間を縦横無尽に跳び跳ねて、次々と銃兵を斬り伏せていく。

「く……あの剣士を仕留めろ!!」

すぐに銃兵たちの注意がクロコへと向かう。

クロコへ向かって次々と発砲されるが、全く仕留められない。

その隙に解放軍兵たちが一気に進行し、広間を守っていた国軍があっという間に切り崩していった。

ウォールズ・ヘルズベイ広場、解放軍左側面では、アールスロウが次々と国軍兵を斬り伏せていた。立ち塞がっていた銃兵部隊を斬り伏せた時だった。正面から一人の国軍人がゆっくりと近づいてき

た。

それを見た瞬間、アールスロウの表情に緊張が走る。その国軍人は白い将軍服を着ていた。六本の鍵爪を付けた奇形槍ギサイアを構え、ファイナス少将が姿を現した。

ファイナスは不敵にほほえむ。

「また会ったな。『千牙の狼』ファイフ・アールスロウ」

「『剣封』ジン・ファイナス……」

互いに武器を構え、二人は静かに向かい合っていた。

二人のすぐ横で爆炎が上がった直後だった。

ファイナスが素早くアールスロウに突進する。

ヒュンッ！！

ファイナスの斬撃を、アールスロウは素早くかわす。ファイナスは次々と斬撃を放ってくる。

ヒュンヒュンヒュンッ！！

「く……！」

アールスロウは紙一重で斬撃をかわしていく。そんな中、アールスロウはファイナスの斬撃の一つを見切った。ファイナスの斬撃の軌道を見すえ、受け流そうとしたその瞬間、その斬撃の軌道が変化した。

ガッ！

鍵爪の一つが、アールスロウの剣を引っかけた。その直後、アールスロウの剣は無理やりに逸らされた。次の瞬間、

ヒュンッ！

ファイナスの斬撃がアールスロウの脇腹をわずかに切り裂いた。

「く……！！」

アールスロウは素早く後ろに跳び、距離を取った。

ファイナスは追わず、足を止め、余裕の笑みを浮かべた。

「どうした、また逃げるのか？」

その言葉を発したファイナスを、アールスロウは鋭く見つめる。

「いや……」

アールスロウは再び剣を構える。

「悪いが、今回はその気はない。正面から倒させてもらっ」

「ほう……面白い」

二人は再び向かい合って武器を構える。

一方、解放軍の右側面では、サキが必死に剣を振るっていた。目の前に大柄の剣兵が立ち塞がったが、死角に入りこみ、素早く斬り

伏せた。

「フウ……」

サキが疲れた様子で、小さく息を吐いた時だった。

目の前に一人の国軍人が現れた。その軍人の来ている將軍服を見て、サキは驚く。

剣を構えたロイスバード少将がサキの前に現れた。細い眼でサキを鋭くにらむ。

「さて……この剣で復讐を果たすときが来たようだ」

「く……！」

サキは素早く剣を真上に上げて構えた、その直後だった。

サキの懷に一瞬でロイスバードが入った。

ヒュンッ！

サキの左肩が裂けた。

「な……速い!!」

サキは後ろに飛んで距離を取ろうとするが、ロイスバードが一瞬で距離を詰める。

ヒュンッ!!

サキの脇腹が切り裂かれた。

「うっ……」

（鏡の剣技を使うスキがない……）

サキは素早く斬撃を放つ、あっさりとかわすロイスバード。

「センスはいい。だが、私の相手ではない」

ロイスバードの鋭い蹴りがサキに直撃した。

「ぐ……あ……」

サキの体が止まった。

ヒュンッ！！

サキの全身が裂け、血が噴き上がった。

「あ………」

サキはヨロリと、その場でひざをついた。そのサキに向かってロイスバードが鋭い一撃を放った。

ヒュンッ！！

ギンッ！！

ロイスバードの一撃は、素早くあいだに入ったフィンディによっ

て止められていた。

「まったく、ギリギリだな……」

フィンディはヒヤツとした様子だ。

「フィンディさん……」

ロイスバードはその名を聞いて、素早く後ろに跳び、距離をとる。フィンディは、ロイスバードをにらんだまま、サキに話しかける。

「こいつはオレが引き受ける。おまえは早く下がれ」

「す、すみません、ボ、ボク……」

「フォロー専門のくせに無理し過ぎだ。あとは任せろ」

「は……はい……」

サキはよろめきながら後ろへと下がっていった。

向かい合うフィンディとロイスバード。

ロイスバードは笑みを浮かべながら見つめる。

「『狂舞の悪魔』フィンディ・レアーズか……」

ロイスバードはフィンディの様子をじっと観察する。フィンディはわずかに息を乱し、体に数か所の浅い傷を負っている。

「万全とは言えん状態だな。それで私に勝つつもりかね？」

「当たり前だろ」

フィンディは強気に笑って見せる。

ロイスバードも笑みを見せる。

「言うておくが、私はラズアームのようにぬるくはないぞ」

「知ってるよ。『絶影』ジェス・ロイスバード。セウスノール三剣士『雷神』デュラン・ランバートを一対一で破った男」

「ふ……懐かしい名だな。グレイ・ガルディアも死に、セウスノール三剣士は全て死んだな」

「まだオレたちがいるさ」

「主力が、狂った剣士に、女の剣士……。それでクラウド国軍に勝てると思っているとはな……。哀れになるよ」

「ふん、うつせーよ」

フィンディは剣を構えた。

「年寄りが前線で出しゃばんな」

ロイスバードも剣を構えた。

「何も知らない若造が。あまり調子に乗るなよ」

二人は鋭くにらみ合った。

5 - 11 二つの激闘

薄茶色の大地にそびえ立つウォールズ・ヘルズベイ基地。基地本体をきれいに囲んでいる広大な広場、その北側では、解放軍と国軍による激しい戦いが繰り広げられていた。

勢いに乗る解放軍と、基地の大型大砲の援護を受ける国軍の戦いは、ほぼ互角だった。

その一角で、アールスロウとファイナスは互いに武器を構え、向かい合っていた。

すでに脇腹に傷を負ったアールスロウ。少し険しい表情をしている。

対するファイナスは余裕の笑みを浮かべている。

「今回は逃げないか……私を前にしてなかなかの度胸だ」

その言葉を聞き、アールスロウはファイナスを静かににらむ。

「この均衡した戦いを前に、あなたを放置するわけにはいかない」

「ふ……いい判断だ。しかし……」

ファイナスの笑みは消えない。

「ノーマルな剣士では、この剣封じの技を破ることはできない。それに、君は特に型にはまったきれいな剣技を使う、私にとって最も戦いやすいタイプだ。加えて……」

ファイナスはアールスロウの持つ長剣を見る。

「この長い剣は、さらに軌道を逸らすのを容易にする。残念だが君では私に勝てない」

ファイナスは余裕の表情でアールスロウを見つめる。

「相性が悪かったな」

アールスロウは動じない。

「戦う前から、あまり余裕を見せない方がいい」

その言葉の直後、アールスロウは駆け出した。ファイナスの間合いに一気に入り、素早く斬撃を放つ。ファイナスはそれを見切り、素早く捕まえようとしたその瞬間、斬撃の軌道が変わった。

ヒュッ！！

鋭い突きがファイナスに向けて放たれる。素早く体を反らし紙一重でかわすファイナス。すぐさまアールスロウは剣を引き、突きの構えに移った。

ヒュッヒュッヒュッ！！

連続の突きがファイナスを襲う。ファイナスはそれらを素早くかわし、後ろに飛んで距離をとる。

二人のあいだが離れた。

「なるほど……突きか……」

ファイナスの言葉が静かに響いた。

「相手に対して、線である斬撃に対し、突きは点だ。捕まえて逸らすのは難しい。長剣の性質も十分に生かせる。なかなか頭が切れるじゃないか」

その言葉を発したファイナスの表情から余裕は消えていなかった。アールスロウは表情を変えず、静かににらんでいる。ファイナスはゆっくりと槍を構え直した。

「だが残念ながら……それでは私に勝てない」

爆音が響く広場、別の場所では、フィンディとロイスバードが互いに剣を構えて向かい合っていた。フィンディはわずかに息を切らしている。

「どうした？ 来ないのか？ フィンディ・レアーズ」

ロイスバードが挑発するように言った。
鋭くにらむフィンディ。

「そんなに早く斬られたいなら、望み通りにしてやるよ」

フィンディが動いた。一瞬でロイスバードの間合いに入る。

ヒュンッ！！

高速で放たれたフィンディの斬撃を、ロイスバードはヒラリとかわした。次の瞬間、ロイスバードはフィンディの横を素早くついた。

ヒュンッ！

フィンディの左腕がわずかに裂ける。

「チ……！」

フィンディは素早く連続の斬撃を放つ。ロイスバードも素早く返す。

ギンギンギンギンッ！

無数の斬撃が一瞬で二人のあいだではじけた。フィンディはロイスバードの斬撃の一つを見切り、素早くかわすと、懐に入り、鋭い蹴りを放った。

ゴッ！

ロイスバードの体は後ろに押された。

「く……」

素早く後ろに飛ぶロイスバード。二人の距離が離れた。

「やるじゃないか……レアーズ。ここまでの速さを持っているとはな。私の動きに良くついてくる……」

ロイスバードは冷静な様子だ。
対するフィンディはわずかに険しい表情をしている。

「……万全だったら、あんたより速いさ」

「さあな、それは分らんよ。……私はまだ、本気ではないからな」

「……！」

ロイスバードは一瞬でフィンディに斬り込んだ。

ヒュンッ！！

フィンディは素早く体をそらす、反応しきれずわずかに体が裂ける。

「く……！」

フィンディはすぐさま嵐のような斬撃を返す。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

その高速の斬撃をロイスバードはすべてかわした。すぐさまロイスバードから高速の斬撃が返される。

ヒュンヒュンヒュンッ！！

フィンディの体の数か所が切り裂かれた。辺りに血しぶきが飛ぶ。

「クソ……」

フィンディは素早く後ろに下がるが、ロイスバードが一瞬で間合いを詰める。

ヒュンッ!!

ロイスバードの剣がフィンディの右肩を切り裂いた。わずかに顔を歪ませるフィンディ。

「その程度かね、レアーズ」

「チッ！ オレの武器は速さだけじゃねーよ！」

フィンディから正確な斬撃の嵐が鋭く放たれる。その斬撃はロイスバードの死角を的確にしていた。

「……なに！」

ロイスバードの体の数か所が切り裂かれる。今度はロイスバードが後ろに下がった。素早く追撃するフィンディ。二人の剣が高速でぶつかり合う。連続で剣をぶつけ合う最中、ロイスバードがゆっくりと口を開く。

「なるほど、恐ろしいほど正確な剣技だ。ラズアームを破ったのもうなずける。だが……」

キン

ロイスバードはフィンディの斬撃を受け流した。

「な……！」

ヒュンッ！！

宙に血しぶきが飛んだ。フィンディの左肩が裂ける。

「く……」

フィンディは険しい表情で後ろに下がった。ロイスバードは追わず、その様子を見ている。ゆつくりとほえむロイスバード。

「剣技が正確なら、先読みは容易だ」

「チ……！」

「先ほどの速さに、正確な剣技。なるほど、この二つの武器を持てば、集団戦で絶大な強さを誇るのもうなずける。だが……一対一では話は別だ」

ロイスバードはゆつくりと距離を詰める。

「さて、君にはもう武器は残っているのかね」

「……………残ってるさ、とっておきのがな」

「気合とか、精神力とか言うのはやめてくれよ」

「うるせーよ……！」

フィンディは一気に突進した。二人のあいだで斬撃が高速ではじ

け合う。

別の一角では、アールスロウとファイナスの素早い攻防が繰り返されていった。

アールスロウは小刻みなステップを使い、上手く距離をとりながら突きを繰り返している。ときおり蹴りも交える。

一方、ファイナスは強引に距離を詰め、斬撃を繰り返そうとしている。

アールスロウの蹴りがファイナスの体に直撃した。わずかに押されるファイナス、しかし、すぐに斬撃を返す。アールスロウの右足がわずかに裂けた。

両者はほぼ互角の攻防をしている。

それにも関わらず、ファイナスは不敵な笑みを浮かべている。

「なかなかやるじゃないか。ファイフ・アールスロウ」

アールスロウは鋭い斬撃を放った。その斬撃の軌道は素早く変化し、斬撃は突きへと変わった。

ヒュッ！！

その突きをファイナスは、完璧な形でかわした。直後に放たれた反撃の突きは、アールスロウの左肩をかすめた。宙にわずかに血が飛ぶ。

「……………」

「アールスロウは距離をとる

ファイナスは余裕の笑みを浮かべている。

「気付いたかね？」

ファイナスはアールスロウを見つめる。

「君の先ほどの攻撃パターンは、すでに一回使っているな」

「……！」

「そろそろ種明かししようか。……君も知つての通り、連続した攻撃には、必ず一定の型が存在する。つまりコンビネーションは、パターンが必ず決まっているというわけだ。そのパターンは、どんなに技が豊富な剣士でもせいぜい50パターン。だが、それはあくまで斬撃を交えての話。単調な突きのみでは、パターンはどれだけ多くてもその10分の1……5、6パターンに限られる」

ファイナスはニヤリと笑う。

「つまり……戦いが長引くにつれ、君は攻撃パターンを出し尽くして、同じ攻撃を繰り返し返すことになる。その状況になれば、君の攻撃をすべて読むことなど、私にとっては容易だ」

アールスロウはわずかに表情を険しくする。何も言わず静かにファイナスをにらんでいる。

「認めたくはないかね？　だが事実だ。すぐに分かる」

ファイナスは笑みを浮かべながら、目つきを鋭くする。

「終わりだよ、ファイフ・アールスロウ」

ファイナスは素早く突進する。距離を詰めるファイナスに対し、アールスロウは向かい撃つ形で斬撃を放つ。斬撃は途中で止まり、反応して動きを止めたファイナスに合わせて、アールスロウは一步踏み込み、蹴りを放つ。後ろに跳び、素早くかわすファイナス。その動きに合わせ、アールスロウは突きを放とうとする。

ファイナスは笑みを浮かべ、目を見開いた。

「そのパターンも先ほど見た!!」

ヒュッ!!

しかし、ファイナスはその突きをかわせなかった。アールスロウの突きは、ファイナスの足をわずかに切り裂いた。

「なに……!!」

驚くファイナス。素早く距離をとる。

「今のパターンでは胸にめがけて突きを放つはず。なるほど……まだ、突きのパターンが残っていたか。噂通り技術は大したものだがこれで流石に打ち止めた」

ファイナスは笑みを浮かべ、槍を構え、鋭く斬り込んだ。

ヒュンッ!!

アールスロウは素早くかわし、反撃に出る。鋭い突きを放つ。突きは途中で軌道を変え、斬撃へと変わる。

斬撃は突きへとさらに変わっていく。ファイナスはその突きを完全に見切っていた。それをかわす体勢に入ったその瞬間、突きは途中で動きを止めた。

ゴッ！！

アールスロウの蹴りがファイナスに直撃した。

「ぐ……！！」

思わず声を漏らすファイナス。その瞬間だった。

ヒュッ！！

アールスロウの突きがファイナスの右肩を切り裂いた。宙にわずかに血しぶきが飛んだ。

ファイナスの表情から余裕が消えた。距離をとり、険しい表情をする。

「なぜだ……そんなはずは……」

アールスロウは冷静な表情で、ファイナスを見つめていた。

「どうやら予測が外れたようだな」

「どうなっている……貴様の攻撃パターンは……」

「出尽くされているはず、か………だが、一つだけ教えておこう」

アールスロウは静かにファイナスを眺めていた。

「異名とは違い1000とはいかないが、オレの持つ攻撃パターンは387パターン……うち、突きを主体で攻めるものは43パターン。通常の戦闘をするには何の問題もない」

ファイナスは目を見開き、我が耳を疑った。

「な……なんだと!？」

アールスロウはゆっくりと口を開いた。

「相性が悪かったな」

その言葉を聞き、ファイナスはギリツと歯を鳴らした。

「おのれ……!! 図に乗るなよ……!!」

ファイナスは一気に突進した。その動きに合わせ、アールスロウから鋭い突きが放たれる。

「く……!!」

突きは途中で止まり、斬撃へと軌道を変え、さらに突きへと変わった。

ファイナスは素早く反応したが……

ヒュウンツッ!!

軌道は斬撃へと変わり、ファイナスの体を一瞬で切り裂いた。
宙に大量の血が噴きあがり、ファイナスの体がゆっくりと傾いていく。

「バカな……この私が……斬撃で、倒れる……だと？」

ファイナスはその場で倒れ伏した。
その姿を静かに見つめるアールスロウ。

「のまれた時点で、あなたの負けだ」

広場の一角、そこでは、フィンディとロイスバードの激しい打ち合いが展開されていた。

二人の体は戦場を高速で動き続け、二人のあいだでは刃同士の、火花のようなぶつかり合いが繰り返されていた。鋭い金属音が止むことなく響き続けている。

「はあっ！！」

ロイスバードは掛け声を上げ、力強く剣を振り下ろした。

ヒュンッ！！

フィンディは後ろに跳び、紙一重でかわした。
二人の距離が離れた。

「クソ……!!」

イラだった声を上げたのはロイスバードだった。

（なぜだ……なぜ仕留められん。押しているのは私だ。なのに攻撃が紙一重で当たらない）

フィンディは再び剣を構える。それに応じロイスバードも剣を構える。

二人は同時に駆けだした。

ロイスバードから放たれる嵐のような高速の斬撃。それに対し、フィンディは素早く反応し、全てを返した。

ギインギインギインッ!!

ロイスバードは一瞬の隙を見つけ、一步踏み込んだ。鋭い斬撃を放つ。

ヒュンッ!!

フィンディは紙一重でかわした。素早く反撃を放つ。

ヒュンッ!!

ロイスバードも紙一重でかわす。素早く後ろに跳び、距離をとった。

「く……!!」

ロイスバードはその状況に困惑する。

（どうなっている……フィンディのスピードが明らかに上がっている。最初は私の方が明らかに速かった。なのになぜだ！？まさか、最初は手を抜いていた！？違う、そんな様子はなかった……）

「不思議か……？」

フィンディは静かに言った。

ロイスバードはフィンディを黙ってにらむ。

フィンディは冷静にロイスバードを見ていた。

「あんたは言ったよな。オレの武器は速さと正確な剣技だって。その分析は確かに当たってる。けどな、それだけじゃないんだよ」

「なんだと……？」

「さっき言ったよな、まだ武器は残ってるって。オレにはさらに武器が二つある。一つは、周りの状況を冷静に見極める情報把握能力だがこれは対集団戦でしか活かせない」

フィンディは笑みを浮かべた。

「問題はもう一つの方、オレが持つ最後の武器、それは………ス
タミナだ」

「……………！！」

「オレはペース配分さえ考えれば、1000人斬ったところ、息一

つ乱れない。……………オレが速くなったんじゃない。あんたが遅くなったんだよ」

ロイスバードは気付いた、自分が肩で息をしていることに。

「悪いが、あんたと戦ってる間に、体力は完全に回復した」

フィンディの息は完全に整っていた。ゆっくりと剣を構え直す。ロイスバードは一步下がった。

「こんな……こんなことが……」

フィンディが動いた。高速でロイスバードに突進する。その動きは、今まで闘っていた中で最高の速さを持っていた。もうロイスバードは、反応すらできない。

ヒュンッッ!!

フィンディの剣は一瞬でロイスバードの全身を切り裂いた。大量の血しぶきが飛び、ロイスバードはゆっくりと崩れ落ちる。

「まさか……私が……私が……」

ロイスバードの体は石畳に倒れ伏した。フィンディはゆっくりと口を開いた。

「言っただろ、年寄りが前線に出しゃばるなって」

5 - 1 2 現れた剣士

薄茶色の大地にそびえ立つウォールズ・ヘルズベイ基地。城門の外側の大地と、城門の内側の広場では、なおも激しい戦闘が繰り広げられていた。兵士の雄叫びと、大砲の爆音が鳴り響き、銃声が鳴り、剣と剣がぶつかり合う。

基地の内部でも激しい戦闘が繰り広げられていた。解放軍はすでに入り口付近の広間を突破し、数十人ごとに分かれて基地の各通路を進んでいた。その通路の一つ、広い廊下をクロコは走っていた。後ろには数十人の解放軍兵が付いてきている。

クロコは先頭を駆け、立ち塞いでくる国軍兵をあっという間に斬り伏せていく。剣兵も銃兵も全く相手にならなかった。

クロコは足を止めることなく廊下を進む。順調に進行しているにも関わらず、その表情はどこか落ち着きがなかった。

(……………なんでだ)

クロコは剣を握る力を強める。

(何で、さっきから嫌な感じが抜けない)

クロコはずっとゾツとするような嫌な感覚が続いていた。

(基地に入ってからずっとだ…………この基地に、それを感じさせる何かがあるのか…………?)

けれどクロコは走る力を緩めなかった、解放軍兵たちは基地の廊下をどんどん進んでいく。

すると突然、後方から味方の悲鳴が上がった。クロコは足を止め、振り返る。

「敵だー！！ 後ろに回り込まれたぞー！！」

激しい銃声が連続で響き渡る。

「銃兵隊だー！！ かなりの数だー！！」

クロコは後方をにらむ。

「この……」

クロコは後ろに引き返そうとする。すると、すぐ後ろの兵士がクロコを止める。

「待て、ここはオレたちに任せろ。おまえは先に行くんだ。」

「……けど」

別の兵士も口を開く。

「これぐらいの広さだったら、おまえ一人の方が戦いやすいだろ。先に行つて、早くこの戦いを終わらせてくれ」

クロコは一瞬迷ったがうなずいた。

「……分かった」

クロコは兵士たちに背を向け、一人で走り出した。長く続く広い廊下をクロコは進む。

先ほどの銃声が小さくなっていった頃だった。数人の国軍の剣兵が再び前を立ち塞ぐ。しかし……

ヒュヒュヒュンッ！！

クロコは一瞬で斬り伏せた。

そして再び前に進もうとした、その時だった。

「そこまでだ」

クロコの正面に、若い剣士が立っていた。赤髪の剣士フェイムが剣を構えて立っていた。

フェイムは静かにクロコをにらみつける。

「黒髪に真紅の瞳……なるほど、最近噂になっているクロコ・ブレイリバーか」

クロコは黙って足を止めた。

フェイムは自信に満ちた笑みを見せる。

「本物のスピードというのを見せてやろう」

フェイムは一瞬でクロコの横をついた。直後、鋭い斬撃を放つ。

ヒュンッ！！

クロコはあっさりとかわした。

「なに……!」

フェイムが声を漏らした時には、クロコはすでにフェイムの横についていた。

ヒュンッ!!

クロコの斬撃はフェイムよりはるかに速かった。右肩が裂けるフェイム。

「く……、この……!」

フェイムは素早く斬撃を返す。

ヒュンヒュンヒュンッ!!

三発の鋭い斬撃を、クロコはかわした、風のように流れる動きだった。

「な……なんだこの速さ……」

フェイムが驚きの声を上げた直後、素早く放たれたクロコの蹴りは、フェイムの剣を握る拳を直撃した。フェイムの腕が大きく逸れる。

「え……!?!」

ヒュンッ!!

クロコの黒剣は、フェイムの体を深く切り裂いた。血しぶきが上がり、フェイムはヨロヨロと数歩下がる。

フェイムは信じられないという表情をしていた。

「そ……そんな、こんな、バカなことが……」

フェイムは力無くドサツと石床に倒れ伏した。

クロコは動かなくなったフェイムの姿を少し見つめたあと、再び廊下を走りだす。

（嫌な感じが消えない……。こいつじゃない、嫌な感じの正体は……）

再び、剣兵が現れた、五、六人の集団だ。

しかしクロコは足を止めない、左右に素早く動きながら距離を詰め、その集団を一瞬で斬り伏せた。

クロコはどんどん廊下を進んでいく。廊下はわずかに狭くなり、息苦しい感じがした。先ほどの嫌な感覚も含め、どこか気分が悪くなってきた。

（早くこの廊下を抜きたい……）

クロコは自然にそう思っていた。

敵が突然現れなくなり、廊下だけが延々と続いていた。

角を曲がった時だった。狭い廊下が突然途切れ、急に視界が開けた。

薄黄色の壁が辺りを包む。クロコは広間の一つに出ていた。息苦しさの消えた広い空間が視界を包む。

黄色い広間に入ったクロコは、思わず足を止める。

その時、クロコは気づいた。その黄色の広間の石床、クロコの正面に一人の剣士が立っていた。

クロコは思わずその剣士を見つめた。

その長身の剣士は、黄色い髪をしており、青い瞳で、真っ直ぐとクロコを見つめていた。

その剣士はほほえみを浮かべている。

「やあ……久しぶりだね、クロコ」

クロコはそのとき、嫌な感覚の正体をはっきりと分かった。ディアル・ロストブルーがクロコの前に立っていた。

5 - 13 闘ってはいけない相手

ウォールズ・ヘルズベイ基地内部、薄黄色の壁に覆われた広間で、クロコとロストブルーは向かい合って立っていた。

緊迫した表情で剣を構えるクロコ。柔らかいほほえみを浮かべているロストブルー。剣は鞘に収まったままだ。

クロコはロストブルーをじっと見つめる。

「ディアル……」

「また戦場で出会うとはね」

ロストブルーはクロコの姿を見つめる。

「黒い髪に、黒い軍服、それに黒剣か……まるで小さなグレイだな」

ロストブルーはゆっくりと一歩、また一歩と歩み寄ってくる。クロコは動かず、じっとロストブルーを見つめていた。

「逃げないのかい？ それとも逃げる隙をうかがっているのかな」

その言葉を聞き、クロコはロストブルーをにらみつけた。

「逃げないさ……オレがここで逃げれば、アンタは他の味方を斬るんだろ」

ロストブルーはゆっくり、ゆっくりと近づいてくる。

「その結果は、君が逃げなくても同じじゃないのか」

「違う」

クロコは鋭く見つめた。

「オレは、アンタには負けない。ここでアンタを倒す」

「そうか……」

ロストブルーは足を止めた。

「勇敢だな」

ロストブルーは剣の柄を握り、ゆっくりと青い大剣を引き抜いた。

「では勝負といこう、果たして今の君は、私と一騎打ちで戦う資格があるのかな」

ロストブルーは剣を構えた。

クロコとロストブルー、お互いに剣を構えて、向かい合う。

ロストブルーの目つきがわずかに鋭くなる。

二人は静かににらみ合っていた。

静寂が流れる広間に、外の爆音がわずかに響いたその瞬間だった。ロストブルーが動いた。二人のあいだの空間を飛び越えるような圧倒的なスピードで、一瞬にしてクロコの横に立っていた。直後に放たれた斬撃は、一瞬の閃光の如く、クロコの体へと伸びていった。

ヒュンッ！！

その斬撃は空を切った。クロコは一瞬の反応でかわしていた。すぐさまクロコは攻撃の姿勢に移った。次の瞬間、二人のあいだで無数の斬撃が飛び交った。二人の体は瞬間の反応を繰り返し、高速で広間を動き回った。その二人の間を刃の光が火花のように弾け飛ぶ。人知を超えた高速の攻防が一瞬のあいだ繰り広げられた。

ヒュンッ！！

クロコの斬撃が空を切った直後、ロストブルーが後ろに跳び、距離を取った。

二人は静かににらみ合う。

剣を構えるクロコ。その右肩はわずかに切り裂かれ、血が流れていた。

ロストブルーはゆっくりと自身の左肩に手を触れた。ロストブルーの左肩も、切り裂かれていた。わずかな血が白い軍服を赤く染めていた。

ロストブルーは手に付いた血を一瞬見たあと、嬉しそうにほほえんだ。

「戦場で、私に一撃を当てたのは君で二人目だよ。君と…… 그레이 だけだ」

ロストブルーは青い瞳でクロコを見つめた。

「どうやら君は、私と戦う資格を持つ者のようだ」

クロコは黙ってロストブルーを見つめる。
ロストブルーはゆっくりと話し出す。

「正直信じられないよ。たった数ヶ月で、別人のような強さだ。い
ま思えば、フルスロツクの街で初めて君と出会ったときから、私は、
君の内に秘められたものを感じていたのかもしれない」

ロストブルーは青い大剣を構え、クロコを鋭く見つめた。

「だが……この運命も、ここまでの様だな。私が君を倒して、静か
に終わりを迎えるのだろう」

「オレは……アンタには負けない」

「そうか、ならば見せてみたまえ、君の強さを」

クロコは動いた、一瞬でロストブルーの間合いに入る。左右に俊
敏に動いたあと、瞬時にロストブルーの横をつき、鋭い斬撃を放つ。

キーン

その斬撃はあっさりと受け流された。クロコの動きはロストブル
ーに完全に読まれていた。クロコの体はわずかに流れた、それにより
できた一瞬の隙を、青い大剣が鋭くついた。

ヒュンツッ!!

クロコの脇腹がわずかに裂けた。

「く……!!」

クロコは一瞬で体勢を立て直し、素早く反撃に出た。空間を切り裂くような高速の斬撃。

キン

再び受け流される。直後のロストブルーの剣がクロコの左肩を切り裂いた。クロコはひるまず、一瞬で逆を突く。鋭く放たれた黒剣の斬撃は、素早く軌道を変え、突きへと変わったあと、打ち下ろす斬撃へと変化した。

ヒュンッ！！

キン

ロストブルーはあっさりと読み切っていた。クロコの斬撃が床を切り裂いた、次の瞬間、

青い斬撃が空間を飛び越えるようにクロコに向かって直進する。

ヒュンッ！！

クロコの腹から血が噴き出る。

「う……！！」

クロコは素早く後ろに跳び、距離を置いた。ロストブルーは追わず、動きを止める。

二人の距離が離れた。

険しい表情のクロコ。ロストブルーはほほえみを浮かべた。

「かなりのレベルの技術だ。いい師に巡り合えたようだね。……
…だが、まだまだだ」

「く……！」

クロコは突進した。高速の斬撃を連続で放つ。

ヒュヒュヒュヒュンッ！！

クロコは嵐のような斬撃を放ちながら、ロストブルーに詰め寄っていく。

二人の間で高速の斬撃がぶつかり合った直後、

「ああっ！！！」

クロコから掛け声と共に、大振りの力強い斬撃が放たれた。

ギイイインッ！！

ロストブルーは素早くその斬撃を受け止めた。

「なるほど、次は力押しか……」

ギインギインギインッ！！

ロストブルーはクロコの強烈な斬撃を受け止め続ける最中、ゆっくりと口を開く。

「……だがそれは、小さな君がもつとも打ってはいけない手ではないのか？」

クロコの斬撃の一つをロストブルーはかわした、その直後、

「はあっ！！」

ロストブルーは掛け声を上げ、力強く剣を打ち下ろした。

ギィィインツッ！！！

「う……！！！」

剣を受け止めたクロコの体は浮き上がり、後方にふっ飛ばされた。床に着地して、バランスを崩したクロコに、ロストブルーの斬撃が襲いかかる。

ヒュンッ！！

クロコの左腕が切り裂かれた。血しぶきが飛ぶ。

「うう……」

クロコは、逃げるように後ろに飛ぶ。再び二人の距離が離れた。クロコの表情に緊迫感が増していく。

ロストブルーはそんなクロコの様子を静かに見ている。

「技術ではダメ……力でもダメ……では、次は何で勝負する？」

「……………」

クロコは静かにロストブルーをにらみつけた。表情を冷静なもの

に戻し、ゆつくりと剣を構え直す。

クロコは小さく息を一つ吐いた。その直後、クロコは動いた。風のように速く、クロコの体はロストブルーへ向かっていく。

「なるほど、速さ、か……」

クロコの体は、ロストブルーの回りを縦横無尽に動き回る。クロコの体は無数の残像となって、ロストブルーの周りを囲んでいた。その直後、クロコはロストブルーの横を一瞬でついた。ほぼ同時に斬撃を放とうとした、その瞬間、

ロストブルーはクロコの横に立っていた、クロコよりはるかに速く。

ヒュンツッ!!

ロストブルーの剣はクロコの脇腹を容赦なく切り裂いた。

「あ……!!」

クロコの口から思わず声が漏れる。血が飛び散り、クロコの体はグラリと崩れる。

ロストブルーは静かに口を開いた。

「私の異名を、知っているか？」

クロコの体は広間の床にうつぶせに倒れた。

黄色い広間が静まり返った。

倒れたクロコの姿をロストブルーは見つめる。

「分かりきっていた結果とはいえ……」

その言葉の直後だった、突然、すぐ横の壁が爆発した。
ロストブルーは素早くその場を離れる。

「解放軍の砲撃か……」

砕けたガレキが辺りに散らばり、爆撃の炎が広場のあちこちに広がり、壁全体を赤く照らす。

「押され始めたか……すぐに助けに入った方が良さそうだな」

ロストブルーは倒れたクロコに背中を向け、クロコが先ほど来た廊下へ入ろうと歩み始めた。

「待て……」

クロコの声が小さく響いた。ロストブルーはゆっくりと振り返った。クロコは立ち上がっていた。脇腹を押さえ、体のあちこちから血を流し、辛そうな表情でロストブルーをにらみつけていた。

「オレは、まだ、負けてない……」

「まだ動けたのか」

ロストブルーは無表情で言った。

「だがどうする？ まだ戦うのか……この傷で」

「当たり前……前だ」

「やめておきたまえ」

ロストブルーの声が響いた。

「いま剣を納めれば、命だけは助けよう。もう分かっただろう？
君では私に勝てない。私は本来、軍人として君を始末すべきだ。だが本心では、君を殺したくはない。今、もし君が戦いを放棄すれば、これ以上君の命を狙うことはしない」

「……………」

クロコは黙った。

「そもそも君は、自らの人生を取り戻すために解放軍に入った。いまここで、私に斬られれば、その目的は果たせない。君の行為は矛盾している。それとも、解放軍が絶対的に正しく、その目的のためとを考えを改めたのかね？」

「なら、あんたは国軍が絶対に正しいって言う自信はあるのか？」

「いや…………」

ロストブルーはほえんだ。

「私は神ではない。絶対に正しい決断などできはしない。だが……
決めなければならない。決断しなければ何の行動も起こせないのだから」

ロストブルーは真剣な表情でクロコを見つめる。

「君と始めて会ったときに、最後に言っただろう。もしどちらが正しいという判断を下せないのなら、自らの中にある正義を頼るしかない。私は国軍人として、国を救い、私の愛する者のために戦う。それが、私の正義だ。君にはあるのかね。その正義が……？」

「オレには……………」

クロコはロストブルーを見つめた。

「オレは、アンタみたいな大層な考えなんて持ってない。だけど一つだけ言える。もしここでアンタを通して、オレの大切な仲間の誰かが死ねば、オレは絶対に後悔する」

クロコは黒剣を再び構えた。

「だから、アンタはここで、オレが倒す」

「……………」

ロストブルーは口を閉ざし、静かにクロコを見つめていた。

「分かったよ」

ロストブルーは青い大剣を再び構えた。

「ならば決着をつけよう。この戦いの果てに生き残るのは、どちらか、一人だけだ」

5 - 14 燃えさかる広間の中で

黄色の広間は、燃えさかる炎で赤く輝いていた。

辺りに炎が広がる中、クロコとロストブルーは互いに剣を構え、向かい合っていた。

クロコはいくつもの傷を負っている。特に深い脇腹の傷から血がポタポタと流れ落ちる。それでもロストブルーを鋭くにらみながら、黒剣をしっかりと構える。

ロストブルーも鋭くクロコをにらみながら、青い大剣を構えていた。

「来ないのか？ クロコ」

クロコは黙ってにらみつけている。

「そつか……………なら、私から行こう」

先に動いたのはロストブルーだった。疾風のごとく速さでクロコに突進した。クロコの前方に一瞬で立ち、強烈な斬撃を放った。

ヒュンツッ！！

クロコは一瞬の反応で、紙一重で避けた。素早く放つ反撃の斬撃。

ヒュンツッ！！

キン

ロストブルーはあっさりと受け流した。クロコの体は大きく崩れ、前方に倒れていく。ロストブルーが斬撃で仕留めようとした瞬間、クロコは地面を踏みしめた。

「まさか！？ わざと前に……」

クロコはロストブルーの懐に入った。小ぶりの一撃を放とうとした瞬間、

ゴッ！！

ロストブルーのひざ蹴りがクロコに直撃し、後ろに吹き飛ばした。

「う……！！」

クロコは地面に片手を着く。そのクロコの目の前にロストブルーが一瞬で立った。

ヒュンッ！！

クロコはとつさに跳んで、逃げたが、わずかに足が切り裂かれる。

「く……！！」

クロコは一瞬で体勢を立て直し、一気に斬り込んだ。クロコの鋭い斬撃をロストブルーはヒラリとかわし、一瞬で反撃の斬撃を放った。その直後、クロコは隠し持っていたガレキの破片を盾にした。ロストブルーの剣がガレキに触れるか触れないかの内にクロコは一

歩踏み込もうとした、しかし……

「……………！」

ロストブルーの斬撃はガレキに触れたあとも、ミジンも勢いが衰えなかった。クロコの全身を切り裂く形で直進する。クロコは一瞬で体を後ろに倒し、後方に跳んだ。

ヒュンツッ！！

クロコは避けきれなかった。ロストブルーの剣は、クロコの腹を切り裂いた。

「う……………！」

クロコの顔が苦痛に歪む。

後ろに跳んだクロコが離れるのを見て、ロストブルーは動きを止めた。

「小細工は私には通用しない。私に勝ちたいのなら……………純粹に実力で超えるんだな」

「く……………」

クロコの体からポタポタと血が流れ落ちる。

「辛そうだな、クロコ。なら……………」

ロストブルーは真剣な表情になった。

「もう、終わりにしよう」

ロストブルーは一瞬でクロコの横に立った。ロストブルーから一瞬で三発の斬撃が放たれる。クロコは素早くその全てを避けたが、直後……

ゴッ！！

ロストブルーの重い蹴りが直撃した。

「ぐ……あ……」

一瞬動きを止めたその瞬間、

ヒュンツッ！！

ロストブルーの剣は、無情にもクロコの全身を切り裂いた。大量の血しぶきが飛び散り、クロコの動きが止まった。その体は、ゆっくりと傾いていき、床へ崩れ落ちる。

「さようなら、クロコ」

クロコはドサツと床に倒れ伏した。

ロストブルーは倒れたクロコに背を向け、廊下へ向けて歩きだした。しかし途中で足を止めて、振り返る。

「しぶといな……」

クロコは立ち上がっていた。苦しそうに息をしながら剣を構えている。

ロストブルーは冷静な表情でそれを見ていた。

「急所を切り裂いたつもりだったが……なるほど、しぶといとは違うな。とっさの反応で急所を避けたのか。研ぎ澄まされた防衛本能というべきかな」

クロコは何も話さない。黙って息を乱しながら、苦しそうにロストブルーをにらんでいる。

ロストブルーは広間を照らす炎を見た。

「……この広間で、これ以上戦闘はしたくはない。もう心臓が止まるのを確認するまで、剣は下ろさないよ」

クロコは乱れた呼吸で、必死に息をする。それでも目を逸らさないように懸命にロストブルーを見つめる。クロコは口を開いた。

「オレは……アンタを超えて、生きて戻る」

「いいだろう……ならば、そろそろ……」

ロストブルーは青い瞳でクロコを見つめた。

「決着といこう」

二人は互いに剣を構え直した。

クロコはロストブルーを真っ直ぐ見つめながら、必死で息を整える。

（勝機は、決していないわけじゃない。全てがあいつに劣っているわけじゃないはずだ。思い出せ……最初の攻防で、オレの剣は確かに

あいつに届いた。なぜ届いた……何があいつを上回った……何が……）

クロコはゆっくりゆっくりと息を整えていく。

（そうか……）

クロコの息が整った。

（俊敏さだ。クマはネズミほど細かく動けない。体の大きいあいつは、小さなオレよりも、切り返しの時の体にかかる負担が大きい。速さでは上回れても、俊敏さだけは上回れないんだ……なら……）

クロコはロストブルーを強く見つめた。

その様子を見たロストブルーの眼つきも、徐々に鋭くなっていく。二人は静かににらみ合っていた。

クロコは一瞬だけ下を向き、小さく息を吐き、再び前を見つめた。

「行くぞ、ディアル」

「来たまえ、クロコ」

クロコは動いた。疾風の如くロストブルーに突進する。クロコが左右に動こうとした瞬間だった。

ヒュンッ！！

ロストブルーから間合いの長い斬撃が飛んできた。

「く……！！」

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

ロストブルーの斬撃は自らの間合いギリギリで、連続で放たれる。クロコは全く近づけない。

「うっ……」

（この攻め方……クソ、完全にこっちの狙いを読んでいる）

クロコは避けているだけで、体から血が流れ落ちる。クロコの息が再び乱れていく。

「く……」

「どうしたクロコ。そのまま何もしないで倒れるか？」

「そんなわけ、あるか！！」

ギイインッ！！

クロコの大振りの斬撃が、ロストブルーの剣をわずかにはじいた。その瞬間にクロコは一步踏み込もうとしたが、それよりも速く、狙い澄ましたようにロストブルーが踏み込んだ。

ヒュンッ！！

クロコの足が裂けた。

「ぐ……！！」

「これで足は封じた」

「そんなもんで……オレは止まらない!!」

クロコは高速でロストブルーの回りを動く。足から血が流れるが、その動きは変わらない。細かく細かく、一瞬で体を切り返し、ロストブルーをかき乱そうとする。

そのクロコの動きをロストブルーは素早く目で追っていた。

クロコは、痛みに耐えながら、必死で隙を生み出そうとする。

その一瞬の攻防の中だった。

クロコは見つけた、ロストブルーに生じたほんの刹那の隙を。その小さなすき間をなぞるようにクロコの斬撃は放たれた。閃光の如き高速の斬撃。その斬撃を放つ最中、クロコは見た、わずかに笑みを浮かべるロストブルーの顔を。その瞬間直感した、ロストブルーに誘い込まれたことを。

ロストブルーはその斬撃を一瞬で見切り、受け流す体勢を取っていた。二人の剣がたがいに触れるその瞬間だった。ロストブルーは我が目を疑う。クロコの剣が、刃がぶつかるその瞬間、軌道を変えた。

「な……!?!」

ガアアアアアンツッ!!!

剣と剣が勢いよくぶつかり、ロストブルーの大剣は弾き飛ばされた。クロコの体はロストブルーの懐に入っていた。

ヒュンツッ!!

黒剣は、ロストブルーの全身を切り裂いた。

宙に大量の血が舞った。

「う……………ッ！」

ロストブルーの口からわずかに息のような声が漏れたあと、その体がゆっくりと、ゆっくりと、傾いていった。
ロストブルーの体は静かに、地面に伏した。

クロコは独り、静かにその場に立っていた。
遠くの大砲の爆音が広間に再び響く。

クロコは倒れたロストブルーを一瞬見たあと、前を向き、ヨロヨロと歩き始める。

少し歩いた時だった。クロコは振り返り、遠くに倒れているロストブルーの体を再び見た。

「ディアル……………」

クロコは一度だけ名を呼んだ、その直後、ガクツとひざをついた。

「クソ……………」

（体が……………動かない……………。だが、倒れるわけにはいかない。生きて帰るって約束したんだ……………こんな、所で……………）

クロコはなんとか足に力を入れた、その直後、砲撃が広間の中へ

と入って来た。爆風が広間全体に乱暴に広がる。

「く……!!」

広間全体はあつという間に炎に包まれ、赤く染まった。

炎に包まれる広間、クロコがその輝きを見つめた時だった。クロコは気づいた、炎の中に浮かび上がる一つの影を。

広間で燃え上がる炎を背に、ディアル・ロストブルーは立っていた。白い軍服を血で赤く染め、青い大剣を構え、立っていた。

「私は、こんな所で、死ぬわけにはいかない………私にはまだやらねばならないことがある。私の帰りを待つ者もいる。私はまだ、死ねない……!!」

ロストブルーの青い瞳から強烈な光が放たれていた。

クロコは歯を食いしばり、立ち上がった。

「クソツたれ……」

クロコはフラフラと再び剣を構える。その時クロコは見た、ロストブルーの周りを包む炎を。大砲の炎とは違う、青い、輝きのような炎が、ロストブルーの全身を覆っていた。広間を覆う炎よりも、はるかに強く、はるかに激しく、その炎は燃えていた。それを見て、クロコは息をのむ。

（初めて見た……これがディアルの気迫。ガルディアを超えらなくてもない気迫だ……）

赤い炎が辺りを包み込むなかで、二人は剣を構えて、再び向かい

合う。

互いに苦しそうに息を乱していた、互いに体から血を流していた。だが二人の眼光は、先ほどよりもはるかに強く光っていた。

ロストブルーは静かに口を開く。

「いくぞ、クロコ。この戦いの果てで生き残るのは、どちらか、一人だけだ」

二人は同時に動いた。

クロコは真っ直ぐに突進した。それ以外の動きをするほどの力はまだ残っていなかった。それはロストブルーも同じだった。二人は真っ直ぐに突進し、剣を振るう。

ギンツツ！！

金属音が辺りに響くと同時に、クロコの体はわずかに押される。

ロストブルーは一步前に出る。クロコはひるまず剣を振るった。

ギンギンギンギンギンツツ！！

二人の間を縦横無尽に刃が飛び交う。クロコは歯を食いしばり、必死で剣を振り回した。ロストブルーも辛そうに連続で剣を振るい続ける。激しい斬撃がぶつかり合う。

赤い炎が辺りを照らし、熱気で意識がくらむような空間の中で、クロコとロストブルーは剣を振るい続けた。剣がぶつかり合うだけで、互いの体から血があふれ飛ぶ。

その攻防の中、ロストブルーの剣が、少しずつ、少しずつ、クロコの体をとらえていく。肩が裂かれ、腕が裂かれ、脇腹が裂かれる。ロストブルーの剣が、クロコの体を削ることに、クロコは、自分の命が死に近づいていくのを感じた。クロコは今までのどんな戦いよ

りも死を近くに感じた。ロストブルーと剣をぶつけあうことに、自分が死に向かつて一歩一歩近づいていくのを感じていた。

けれどもクロコは、ロストブルーを見つめ続けた。力強く剣を振るい、生き残ることだけ考えた。その中でも、ロストブルーの斬撃は徐々にクロコの命を削っていく。

次の瞬間だった。ただ剣をぶつけ合うだけだった攻防の中、ロストブルーが一瞬の集中を見せた。

キン

クロコの斬撃の一つが、ロストブルーに受け流された。わずかに崩れるクロコの体をロストブルーの剣が切り裂いた。体が裂け、血が流れ出た。

クロコはひるまなかった。

「あああっ!!」

クロコは大きく剣を振った。ロストブルーは再び受け流そうと構えたが、寸前で黒剣の軌道が変わった。

ガアアアアンツ!!

ロストブルーの剣は弾かれなかった。ロストブルーは力づくでクロコの斬撃を止め、弾き返した。直後に放たれたロストブルーの斬撃は再びクロコの体を切り裂いた。

クロコは、自分の死が、目の前に迫ってくるのを見た。わずかに崩れるクロコの体に、ロストブルーの青い大剣が容赦なく打ち下ろされる。

ヒュンツ!!

その瞬間、クロコの動きが変わった。ロストブルーの剣を紙一重で避けた。

ロストブルーは見た。クロコが流れるような速さで動く姿を。まるで時間を飛び越えるようにクロコの体は動いていた。その速さはほんの一瞬だけ、ロストブルーの速さを上回っていた。続けて放たれたロストブルーの斬撃をクロコは鋭くかわした。次の瞬間、クロコはロストブルーの懷に飛び込んだ。

ヒュンッ！！

クロコの黒剣が、ロストブルーの体を一閃に切り裂いた。宙に大量の血しぶきが舞い散った。

青い大剣の先端が、ゆっくりと床に向かって下がっていく。

ロストブルーの動きが完全に止まった。その顔からはもう力が抜けていた。

徐々に後ろに傾いていくロストブルーの体。それはまるで、紙が地面に落ちるかのように滑らかだった。ロストブルーはゆっくりと倒れていく。

（なぜだろう……）

ロストブルーは思った。

（私は、完全にあの子を上回っていた。能力だけじゃない。精神力も、意志も、信念も、決して劣っていたわけではなかった。なのに、なぜ負けたのだろう……？）

ロストブルーの体はゆっくりと床へ向かっていく。

（そうか……………私はどこかで……………あの子にはまだ、死んでほしくないと思ってしまっていたんだ……………ここでクロコに負けるのも悪くはないと、思ってしまっていたんだ。だから、最後の最後で……………）

ロストブルーの体は地面に倒れた。

脳裏には、妻と娘の顔がよぎっていた。

（すまない……………。君たちには、いつも与えられてばかりいた。だから、全てが終わったときに、多くのものを返したかった。けれども……………返せない）

ロストブルーは静かに息を止めた。

燃えさかる広間の中で、クロコは独り立っていた。

息を乱しながら、虚ろな表情で、その場に立ち尽くす。体からは止まることなく血が流れ出していた。

すぐ隣で炎が揺らめく中、クロコは力無く、ゆっくりとその場に両ひざをついた。

薄茶色の大地にそびえる巨大なウォールズ・ヘルズベイ基地、その所々から黒煙が上がっていた。城壁の前の大地には、国軍の軍勢は姿を消し、基地から逃げる国軍兵の姿がポツポツと浮かんでいた。広場の所々では手を上げて降伏する国軍兵の姿があった。

広場全体に解放軍の勝利の歓声がこだましていた。

多くの兵士が勝利の歓声を上げる中、アールスロウはゆっくりと広場を歩きながら、周りを見回す。するとフィンディの姿を見つけた。

「フィンディ！」

フィンディが振り向くと共に、アールスロウは駆け寄った。

「クロコの姿は見たか？」

「いえ、オレも探してるんですが……」

フィンディは少し落ち着かない様子で言った。

「……………」

アールスロウは深刻そうに黙ったあと、駆けだす。

「どこに行くんです？」

フィンディが聞くと、アールスロウは小さな声で答える。

「基地を探す、まだ中にいるかもしれない」

「オレも……！」

二人が基地の出口まで走っていった時だった。もう人の気配のない基地の入り口に、一つの人影が立っているのを見つけた。

そこに、傷だらけのクロコが立っていた。力無く、ヨロヨロとゆっくり歩いている。今にも倒れそうだ。

「クロコ……！」

アールスロウが名を呼ぶと、クロコはボーンとした表情で二人を見た。

二人がすぐ前に立つと、クロコはその場で崩れ落ちた。

アールスロウとフィンディはすぐにクロコの体を支える。

アールスロウは小さな声でクロコに呼びかけた。

「よく戻ってきた……クロコ」

クロコはぼんやりとアールスロウを見つめた。ゆっくりとほほえみを浮かべる。

「約束………したからな」

クロコはそう言ったあと、安心したように、その場で目を閉じ、意識を失った。

5・15 一つの終わり、一つの始まり

クロコが目を覚めたのは、治療室のベッドだった。

「う……………」

少し体を動かすと、激痛が走った。

「いってっ!!」

「クロコさん！」

クロコの視界にサキの顔が飛び込んでくる。

「サキ……………」

「良かった……………目を覚まして……………」

サキは安心したように言った。

「傷のほうは大丈夫ですか？」

「大丈夫に見えるか？」

「いえ……………」

クロコはサキの体を見た。厚い包帯が巻かれている。

「おまえも派手にやられたな」

「はい……ボク、最近全くいいトコ無しで……」

「そんなことねーよ。いいトコがないんじゃない、目立たないんだ」

「……………」

クロコは痛がりながらゆっくり体を起こした。

「ここは……ビルセイルド基地か？」

「はい、いったんここに帰って……準備を整えるみたいです」

サキがそう言った直後だった。

「おっ！ 目、覚ましたみたいだな」

部屋にフィンディが入ってきた。一人の女性を連れている。

その女性は年齢十八、九、黒い短めの髪、大きな目、どこか活動的な雰囲気を持っている。クラット基地で出会った支援員のファリス・ルナテークだ。

「フィンディ……。それにファリス、久しぶりだな」

「クロコこそ、久しぶり」

ファリスはクロコの様子を見る。

「ケガ、けっこー大変そうだね」

「ああ、しばらく動けそうにない」

するとフィンディが軽い調子で口を開く。

「大丈夫だよ。数ヶ月前のオレのケガよりは軽い」

「アンタの意見は聞いてないよ」

ファリスがピシツと言った。

「だいたいあのケガより重かったら死んでるし」

クロコはそんな会話をする二人の様子を見ながら口を開く。

「仲直り、したみたいだな」

するとフィンディがすぐに反応する。

「別に仲がいいってわけじゃねーよ。……まあ、悪くもないが」

「そうそう、昔っからこんな感じだし」

ファリスはケラケラと笑った。

クロコはそんな二人を少し見たあと、うつむいて少しだけ何かを考える様子を見せた。

「どうしました？」

サキが聞くと、クロコはゆっくりと口を開く。

「ウォールズ・ヘルズベイは落ちた……これからオレたちは……」

「……そうですね。ウォールズ・ヘルズベイが落ちた今、首都ゴウドルークスへの道は完全に開けました。解放軍は戦力が集結し次第、首都ゴウドルークスへ進行を開始するでしょう」

「そうか……けど……」

少し不安そうな様子のクロコを見て、フィンディが話しかける。

「どうしたんだ？」

「進行はいつ頃になるんだ？ このケガじゃ、下手すりゃあ完治が間に合わないかもしれない」

「それは心配いらねーよ。すべてはおまえに合わせて動くからな」

「どういうことだ？」

フィンディは少し困ったように笑う。

「おまえ、自分がやったことのデカさに気づいてないみたいだな」

ビルセイルド基地の司令室、そこに鋼鉄のヘルムをかぶったファ

ントムと、ランクストン総司令がイスに座りながら話をしていた。

「ミリア・アルドレッドももうすぐ到着するそうです」

ランクストンの言葉に、ファントムはうなずく。

「ああ、あとは戦力の集結、そして……」

「クロコ・ブレイリバーの回復を待つことですか」

「そうだ」

「しかし……いまだに信じられません。確かにクロコは、 그레이が押すだけあって高い実力を持った剣士だと思っていました。しかしそれが、あのディアル・ロストブルーを倒すまでになるとは……」

ファントムは静かにうなずく。

「ああ、今やクロコの存在は、解放軍には欠かせないものとなった。『黒の魔将の再来』……いや、新たな『黒の魔将』と言っべきか」

ウォールズ・ヘルズベイの陥落、それはシャルルロット基地にも伝わっていた。

「ウォールズ・ヘルズベイが落ちた……」

基地の食堂、そのテーブルに座っているスコアは深刻な表情で言った。向かいにはコールが座っている。

「うん、それにあのディアル・ロストブルーも戦死したって……」

「……………」

スコアは思い出していた。このシャルルロッドの一室でロストブルーと話した時のことを。ロストブルーの言った言葉が思い出される。

「私が強さを求めたのは、国を変えたかったからだ。貴族が支配する国で、平民である私にできること、変えられることがあると信じてね」

「あの頃の私は様々起こる世界の変化に翻弄されていた。それ故に世界を変えたいと強く願ってもいた」

スコアは胸が絞め付けられるようだった。

（あそこまで国のことを想っていた人が……。それに妻も娘もいるって言ってた……）

スコアは悲しみと悔しさで、自分の目から涙が出そうになるのを感じた。

「スコア？ どうした」

スコアはハッとしてコールを見た。

「う……うつん、なんでもない」

「だけど……これで大変なことになったね」

それを聞き、スコアは真剣な顔つきになった。

「うん、そうだね。いよいよ最後の戦いが始まるうとしてるんだ」

スコアは目を鋭くさせた。

「次は……ボクらの番だ」

基地の廊下、そこでアピスは小さな荷車を引いていた。荷車には食糧がたっぷり載っている。廊下を進んでいると、せわしない様子の軍人数人が横切っていた。

（ウォールズ・ヘルズベイが落ちたって聞いたけど、やっぱりこれからすごいことになるのかな……）

アピスはそんなことを思いながら、ゆっくりと廊下を進み、広間に出た、その時だった。

「募集ー！！ 募集ですー！！」

基地の広間で知らない兵士が大声を張り上げている。

「支援員を募集しています。我らに勝利を呼ぶために、ゴウドルー

クスまで足を運んでくれる支援員を募集しています！」

「支援員……」

アピスは兵士を見ながら、足を止めた。

シャルルロッドの町、その迷路のように入り組んだ道路の一角では女性たちが集まり噂話をしていた。

「なんだがいま大変らしいわよ」

「ええ……知ってる知ってる。解放軍がものすごい勢いに乗ってねえ」

「このままじゃ首都が攻め落とされるかもって」

「まさか！ グラウド国軍は世界最強の軍隊なのよ。農民の寄せ集めじゃ簡単には倒せないわ」

「でも……もう首都に迫ってるって噂よ。このままだとこの国がひっくり返るかもって」

「この町には国軍の基地があるし、もしそんなことになったら私たち、どうなるんだろう……」

そんな話をしている女性たちの集団に、一人の軍服を着た男が近づいてくる。

「やあ、何の話だい。私も混ぜてくれ」

ラティル大佐が笑顔で近づいてくる。

「あら、ラティル大佐」

「また、こんな所に来て」

女性たちは笑みを浮かべる。

「そうだ！ ラティル大佐。いま噂になつてゐる話……」

「ああ、解放軍が首都に迫つてゐるという話だろう？ 本当だよ」

「このまま、国がひっくり返つてしまふんですか？」

「さてね……。単純に、我ら国軍が負けるはずない！ というのは簡単だが……。そうだな、客観的に判断すると、それでもまだ国軍がずいぶんと有利だろうな。なぜなら国軍にはまだ余力があるからね。それに比べると解放軍は身を削るような戦いの連続だ。けれど……勢いに乗る解放軍が不気味であることは確かかな」

「でも、国軍にはスコア・フィードウッドもいるものね」

「ああ、彼は本当に頼りになる。それよりご婦人方、今度は私の方が聞きたいことがあるんだが……」

「あら、なにかしら？」

「最近、軍内部に不穏な動きがあるらしくてね。こんな時期だ。私に調査の依頼が来てね。ここのご婦人方は、確か夫が、商人をしていて外へ出かけることが多かったと思うのだが、どこかこの町の外で、軍が変な動きを見せていたとか、そうだな……ただ見かけただけでも構ないのだが、そういう目撃情報を聞いた方はいないかね」

それを聞いて女性たちは互いの顔を見合わせる。

「さあ……私は聞かないわね」

「私の主人もそういう話は……」

「私も」

「あ………私は……」

一人、内気そうな若い女性が小さく手を上げた。

「おや、何かあるのかね」

「あ………やっぱり違いました」

「なんでもいいんだ、聞かせてくれないかい」

「いえ……軍ではなくて、その……大臣で」

「大臣……？」

「夫のことはご存じですか？」

「もちろんだ、金属商人だったね」

「はい、その仕事の途中で、おかしなところで皇務大臣を見たところ……」

その言葉を聞き、ラティルはわずかに驚いた。

「皇務大臣……レッテル皇務大臣のことだね。確かなのかな」

「その……夫は仕事の関係で、一度だけ皇務大臣の顔を見たことがあるらしいので……ただ本当かどうか」

「詳しく聞かせてくれないか？」

「あの……その……三カ月前ぐらいに、ある町で、私服を着たレッテル大臣を見かけたそうなんです」

「……………その町の名は？」

「中部の大きな湖のある町で、名前は確か、リヴァブリア」

「リヴァブリア……………」

首都ゴウドルークス。立ち並ぶ巨大な純白の建物を見下ろす形でそびえ立つクラウド国軍本部基地、その司令室に、一人の軍人の姿があった。

その軍人は年齢五十代前半、顔は整えられた白い髪とひげで覆われ、丸っこい顔には少したれ気味の小さな目が浮いている。目こそ小さいがそこから放たれる眼光は鋭い。

サーマス・オルズバウロ元帥だ。

オルズバウロ元帥は深刻な表情で窓から街を見下ろしている。

「まさか、ウォールズ・ヘルズベイがたった一日で落ちるとはな……」

後ろに立つ將軍が、不安そうに口を開く。

「戦力の集結を急がせます」

その言葉を聞いて、オルズバルロ元帥はゆっくりとうなずく。

「ああ……それと、東部のゴッドブラン中將にもここに来るよう要請しろ」

「で、ですが、ゴッドブラン中將は、サンストン国境線を守護する役目が……」

「構わん、ここで負ければ全てが終わるのだ。もう四の五の言っではいられん。グラウド国軍の全戦力を持って、セウスノール解放軍を叩き潰す」

本部基地の廊下、そこを一人の將軍が歩いている。ザベル・ライトシュタインだ。険しい表情をしている。

（まさか国軍がここまで追い詰められるとはな……………ウォールズ・ヘルズベイ……………あれは完全な敗北だった）

ライトシュタインは口元を険しくする。

（まさか……………あのロストブルーが戦死するとは……………）

ライトシュタインが広間に出た時だった。兵士でこつたがえす広間に、不自然に、一人の女性がポツンと立っている。

茶色の髪をした三十代前半の女性だ。

ライトシュタインは気になり、その女性に声をかけた。

「どうしましたか、こんな場所に何か用ですか」

女性は声をかけられ少し驚いてライトシュタインを見た。

「え……………その……………」

「こんな所にあなたのような女性がいるのはいささか不自然ですね。何か特別な用があるのですか？」

「その……………一つお聞きしたいのですが……………」

女性はおそろおそろライトシュタインを見つめた。

「夫の……………ウォールズ・ヘルズベイの戦いで国軍人の戦死者の遺体は、本当にここには来ないのですか？」

「ええ、ウォールズ・ヘルズベイは解放軍に占拠されたのでね。遺

体は解放軍が埋葬するでしょう」

「そうですか……」

女性は悲しそうにうつむいた。

「失礼ですがご婦人の夫の名は……？」

「ディアル・ロストブルーと言います」

「……！！」

ライトシュタインは驚いた。今一度しっかりとその女性の姿を見る。

將軍の妻とは思えないほど質素な格好をしていた。

ロストブルー夫人は悲しそうに声を漏らす。

「もし……本当にもし、ここに遺体が届いたのなら、どうしても一目、見ておきたかったです」

「私は……生前のロストブルー中将と関わりを持っていました」

ロストブルー夫人は驚いた。

「……夫と？」

「ええ……」

ライトシュタインはそう答えたあと、話を続けた。

「彼は……誠実で、真面目で、そして誇り高い軍人でした」

その言葉を聞いたロストブルー夫人の体がわずかに震えた。
ライトシュタインは話を続ける。

「それから……彼は、あなたと娘のことを、自分にはもつたいない妻と娘だと。彼女たちには、いつも与えられてばかりいたと……そう言っていました」

その言葉を聞いて、夫人はその場で崩れ落ちた。

「ディアル……」

夫人は震える声を漏らした。

ライトシュタインは落ち着かせるように、ゆっくりと夫人の背中をさすった。

「もし、なにか困るようなことがあれば、そのときは私に連絡をください。ライトシュタイン家があなたの家族の力になります」

夫人はまだ落ち着かない様子で、体を震わせていた。

「違っんです……」

夫人は小さく声を漏らした。

「……？」

「そんなことないんです」

「なにがですか？」

夫人は小さく首を振りながら声を漏らす。

「もったいないなんて……与えられているなんて……そんなことはありません……」

夫人はポロポロと涙を流していた。

「そんなことはないんです、私の方が……彼よりももっと、多くのものを……与えられた……」

その言葉を聞いてライトシュタインは小さく夫人に語りかけた。

「私はあなたたちの関係については何も知らない。けれど一つだけ言えます。あなたのような家族を持って、彼は、まぎれもなく幸せだったでしょう」

ライトシュタインは小さく言った。

「今はただ、祈りましょう」

0 - 9 スコア・フィードウッド（前編）

柔らかい日の光が降り注いでいる。純白の四角い大きな建物が建ち並ぶ町並み。その町の外側では、いつも通り、多くの大工が集まり、新たな建物を次々と建築している。粘土石のレンガを積み上げながら、町全体を押し広げるように増築していた。ここはクラウド中部に位置する国軍領の町シャルルロッド。

そのシャルルロッドの町の隅に建っている木製の小屋、その脇で中年の男が大きな斧で、木材を叩き割っていた。木製の小屋の横には小さく割られた木材がずっしりと積みまれている。

「こんにちは」

少年の声が響いた。男が声の方向を見ると、そこには十四才のスコア・フィードウッドがいた。厚い眼鏡をかけ、愛想良く笑いながら近づいてくる。

「いつもの通り、買いに来たんですが」

「悪いが、まだ区切りが悪くてね……」

男は再び木材を割り始める。

「いつもの分は、この木材の山の後ろに積んである」

「なら、お金は小屋の机に置いておきますね」

「ああ」

スコアは小屋に向かって歩き出す。

男は一瞬手を止めた。

「そういえば……」

男は再び木材を割り出す。

「あのバカはどうしてる？」

スコアは足を止めた。

「フレアのことですか？」

男は木材を割りながら口を開く。

「そうだ、オレの跡も継がずに軍に入ったバカ息子だ」

「すごく活躍してるそうですよ。この前も大きな戦果を上げたって。すごいすよね」

「ふん、すごいものか」

「……おじさんのことも思ってるんですよ。最近の建築は粘土石が多くなって、木造はほとんどないですからね。木材屋はどこも大変みたいです」

「けど、君はいまだにお袋さんと二人きりで、亡くなった父親の店

を継いでるじゃないか。あのバカと違って君は偉いよ」

「そんな、ボクはそれ以外できないだけですよ。ボク……」

スコアは自信のない笑顔を浮かべた。

「ドジで不器用だから……」

スコアは木材を荷車に積んで、小屋をあとにした。

荷車を引いて、商店街の道をゆつくりと歩く。

様々な大型店が並ぶ商店街の中で、一件だけ木製の小さな店が、大きな店のあいだに物置のようにチヨコンと建っていた。

スコアはそこで足を止め、店の後ろに回り込む。荷車を置き、裏口のドアだけを開けて、荷車の前に戻ると、木材の一部を両手で抱え込む。

スコアはヨタヨタと店の中へと入っていった。中の工房では三代半ばの女性がイスに座りながら作業をしている。片手にはナイフを持ち、もう片方の手には、作りかけの木彫り細工があった。

「ただいま母さん」

「おかえり、スコア、お疲れ様」

母はスコアの方を見てニコリと笑う。

スコアは木材を運びながら、母の手にある作りかけの木彫り細工を見た。

「新しい作品？」

「ええ」

「どんな作品なの？」

「題名は『青く発光しながら空を飛ぶつさぎ』よ」

「へ、へえ……」

できかけの作品はすでに異様な形をとりつつあった。スコアはそれ以上はつつこまなかった。

スコアは木材を全て中に運び終わると、フーツと息を吐いてイスに座りこむ。

母は手を止め、スコアが運んだ木材に目を移す。

「フォールクロスさん、またわざわざ細かく割って下さったのね、手間がかかるでしょうに……」

「母さんとボクじゃあ、大きなものは作れないって分かってるんだね」

スコアも木材を見つめた。

「だけど……小さなものばかり作ってもね。今ほとんど町が大きくなって、新しい店もどんどん出来てきてる。小型の家具や木彫り細工ばかりじゃ、もう無理な気がする。大型の家具とかも作るようにしないと店が潰れちゃうよ」

「だけど私は大きなものは……」

「うん、ボクもまえ挑戦したけど、ひどい出来だったし。だけど、何とかしないことには……」

頭を悩ませるスコアを見て、母は口を開いた。

「ねえ、スコア。あまり無理はしなくていいのよ。このまま店を続けていくのはこれからもつと大変になる。だったら、店にこだわらず、自分の好きな仕事をすればいい」

「だけど……ボクは正直、何をしたいかわからないし……」

「探してみたらどう？ 魅力的なことは、探せばたくさん散らばってるものよ。スコアだったらきつとすごいことができるわ」

「そんなこと……ボクじゃ、何もできないよ。ボク……何やつても下手だし」

「そんなことない。あなただったら、なんだってできるわ」

「……うん、だけど……」

「だけど……なに？」

「仮に何かできたとしても、ボクにはあんまり関係ないよ」

「関係ない……？」

「うん」

スコアは母を見ながらゆっくりとほほえんだ。

「ずっと昔からそうなんだ。ボクは、偉くなるとか、裕福になるとか、そういうのにあんまり興味ないんだ。ボクはただ、母さんや友達と一緒に、仲良く笑って暮らせればそれでいいと思ってる。それ以外は正直……何もいらぬ気がするんだ」

それを聞いて、母は少しのあいだ黙ったあと、ゆっくりと口を開く。

「……あなたは優しい子ね」

「え……なんで？」

「なんとなく、そう思ったの」

スコアは少し顔を赤くした。

「そ、そろそろ店の準備しなくちゃ」

スコアは立ち上がって表に向かって歩く。

「そうね、私はまずこれを完成させないと……かなりの自信作になる予定よ」

「ハハハ、楽しみにしてるね。よし、今日は店の売り上げを伸ばすぞ」

シャルルロッドのとある民家、その入り口を数人の国軍兵が囲んでいる。

その民家の部屋の中にも軍人が立っていた。一人の少年の軍人だ。長身で、少し横に跳ねた黒髪に、黄色い瞳をしている。十四才のフレア・フォールクロスは、部屋の様子を見渡していた。

眉をよせ、不快そうな表情をしている。

その部屋の景色は、普通の部屋の景色とは明らかに違っていた。異様な光景だった。

部屋全体がおびただしい量の血痕で染まっていた。血をバケツでまいたように、壁という壁に黒く変色した血がべつとりとこびりついていた。床も全体が黒く染まっている。

その部屋にもう一人軍人が入ってきた。

ケイス・ラティルだ。

「これは……すごいな」

ラティルも思わず眉を寄せる。

「ラティル中佐……」

「噂には聞いていたが、ここまでとは……一体どういう殺し方をすれば、こんなことに……」

フレアは何とか表情を整えて、ラティルの方を向く。

「死体を確認したんですが、ひどかったですよ。戦場で死体は山ほど見ましたが、それでも正直吐き気がしました。若い女性だったんですが、刃物でズタズタにされた後、傷口を鈍器で何度も殴られた

跡がありました。この様子を見る限り、さらに部屋中を引きずりまわしたんでしょうね」

それを聞いたラティルは思わず首を不快そうに横に振った。

「……………ついにこれで三件目。シャルルロード始まって以来の事件だな」

「一体犯人はなんでこんな事したんでしょうね。恨みにしたってひど過ぎる」

「さあな」

ラティルは部屋をもう一度見渡す。

「一つ言えることは、犯人が異常であるということだけだ。目的なんてものはないのかもしれない」

「ただ、ひと月前に、国軍が近くの街でルザンヌ軍をせん滅したらいいですね。もしかすると生き残りがこの町で暴れてるのかも…」

…」

「可能性はあるな」

「聞く話によるとルザンヌ兵っていうのは、相当頭のおかしい連中らしいですからね」

「ルザンヌ軍は、軍事訓練のノウハウがない代わりに、精神を鍛えようとするらしい。兵士一人ひとりに洗脳まがいの教育を行っらしい」

「ウエ……………そんなのに関わりたくないな」

「まだルザンヌ兵とは限らない。最近町のはずれの市場にも変な連中が集まるようになっていそうだし、色々と詳しく調査をしなくては。とはいえこれで三件目。見回りの強化は必須だな」

その後、一通りの調査を終え、フレアは外で休んでいた。するとラティルが声を掛けてきた。

「基地に戻ろうと思うのだが、一緒に行かないか？」

「あ、はい、オレもちょうど戻りたかったんで」

フレアとラティルは馬に乗り、シャルルロッドの石畳を駆ける。

「ラティル中佐！」

フレアが後ろから声を飛ばす。

「この辺に、まえ話したやつがいるんです」

「スコア・フィードウッドか？」

「はい、あいつとは長い付き合いなんですけど、絶対に軍に入れるべきですよ。あいつだったならオレぐらい強くなれます。おとなしいし、ボーッとしてるせいで分かりにくいんですが、運動能力はすごいし、何より、感覚の鋭さが半端じゃないんです」

「君がそこまでいうんだから、相当なものなのだろうな。少し興味があるな」

「じゃ、ちょっと見てみますか？」

「ああ、そうしよう」

二人は道の端に馬を停めた。

商店街を少し歩くと、小さな店が目に入る。

「あの店で働いてるんですけどね、あつ、ちょっと待って下さい」

フレアは道端に落ちていら石畳の破片を拾った。

「ラティル中佐、ソーツと、ソーツとついてきて下さい……」

フレアはボソボソ言ったあと、音を立てずにスコアの店に近づく。ラティルも静かについていく。

ラティルが店の窓をのぞくと、スコアの姿が目に入った。ちょうど、木彫り細工を店の棚の上に置こうとしているところだった。

「よく見てて下さいよ」

フレアはベルがならないようにソーツと店のドアを開けて顔をのぞかせる。棚の上に木彫り細工を置いたスコアは、背中を向けたまま気付かない。そのスコアに向かって、フレアは先ほど拾った石畳の破片を思いっきり投げつけた。破片はスコアの後頭部めがけて勢いよく飛んでいく。破片が後頭部にぶつかる直前だった。

スコアの右手が後頭部に素早く回り込み、パシッと破片をつかん

だ。

「……………!!」

ラティルは驚いた。

「振り向きもしないで……………」

破片を受け止めたスコアも驚いている。

「な……………なんだ!？ コレ……………あつ、フレア!!」

スコアはフレアの方を向く。

「何してるんだよ、突然……………」

フレアはヘラヘラ笑いながら、店に入っていく。

「悪い悪い……………ラティル中佐におまえのこと紹介しようと思って」

「ラティル中佐……………?」

フレアに続き、ラティルも店に入る。

「初めましてスコア・フィードウッド」

ラティルは愛想よく笑って言った。

「は、はじめまして、噂はときどき耳にします。よく町民と関わっている軍人がいるって……………」

スコアは緊張している様子だ。

「軍務中に町民と話している不真面目な軍人だって？」

ラティルは意地悪く笑みを浮かべる。

「い、いえ、そんなことは……評判がとてもいいです、すごく協力的だって」

ラティルはニコリと笑う。

「そう言ってもらえると嬉しいね。それよりスコア、先ほどの動きを見せてもらったよ。すばらしい感覚の鋭さだ」

「そ……そんな、まぐれです」

「まぐれであんな動きはちょっとできないな。君なら強い軍人になれるかも知れないし……なれないかも知れない」

「なんですかその言い方」

フレアがつつこんだ。

「まあ、本人次第だからな」

「大丈夫ですよ、スコアだったら絶対強くなれます」

「……とフレアは言っているが、スコア、軍に入るつもりはないかね」

「い……いえ……ボクは」

「あまり乗り気じゃないようだな」

「いつもこうなんですよ」

フレアは少し眉を寄せた。

「申し訳ありませんが、ボクには軍人なんてとても……」

スコアは小さい声で言った。

「そうかい、乗り気でない者が軍人になっても苦勞するからな。まあ、気が向いたらいつでも来てくれ」

「あら、お客さん？」

母がヒョコツと奥から現れた。

「こんにちは、奥さん」

ラティルはニコツと笑った。

「何かお探しでしたか？」

「いえ、あいにく別の用事でね。それももう済みましたが……」

そう言ってラティルは店の商品を見回す。

店には小型の家具や、木彫り細工などが置かれている。ラティル

は先ほどスコアが置いた木彫り細工に目を止めた。
異様な格好をした老婆の置物だ。

「これは……」

「ええ、題名は『イモムシのドレスを着た老婆』です」

母の言葉に、ラティルは表情を崩さずに一瞬黙った。

「なかなか他では見られないような作品ですね。どのようなテーマで？」

「テーマは『美』です」

母は笑顔で言った。

「……斬新ですね」

ラティルの隣でフレアが苦笑いを浮かべていた。

「またプライベートに寄らせてもらいますよ」

ラティルがそう言ったあと、フレアがスコアに話しかける。

「そつえばスコア、オレのオヤジ、元気か？」

「元気だよ、たまには顔を見せてあげなよ」

「でもなー……話すごとにケンカになるからなあ。一言目には『うるさい』『一言目には『黙れ』『三言目には『静かにしろ』だもんなー』」

「それは……その……フレアがしゃべり過ぎるからじゃない？」

フレアとラティルが立ち去った店で、スコアはいつも通り商売を続けた。

夕暮れの光が差し込み、店の窓からは数匹のコウモリの飛ぶ姿が見えた頃だった。

「そろそろ店じまいね」

母の言葉にスコアは小さくうなずいた。

「うん……」

スコアは深刻な表情だった。

（今日もほとんど売り上げがなかった……このままじゃいけない……
…やっぱり何か具体的な手を考えないと……）

次の日の朝早く、スコアは店の商品をいくつもの木箱に詰める。
その様子に母が気付いた。

「スコア！ 何しているの？」

「町のはずれの市場に行ってくる。このままじゃさすがにきついし、
店の宣伝にもなるかもしれない」

「だけど、スコア、あそこはすごく遠くよ」

「うん、だから帰りは遅くなるかも」

「それに……あそこは最近治安が悪いって聞くわ」

母は不安そうだ。

「大丈夫だよ、噂によると変なものは売ってないらしいし、いるのはほとんど商人のはずだから……」

スコアは安心させるように笑顔を見せた。

「ちゃんと売ってくるよ。ほら、この『イモムシのドレスを着た老婆』も、もしかしたら売れるかもしれないよ」

「でもスコア……」

「大丈夫だって」

「……分かったわ、でもホント、気を付けてね。危なそうだったらすぐ戻ってくるのよ」

「うん、分かった」

スコアは商品を入れた箱を荷車に載せて、市場へと向かった。二、三時間、スコアはひたすら荷車を引いて町を歩く。

途中少し道に迷いながらも、スコアはなんとか市場にたどり着くことができた。

大きな建物の裏手にできた広い空間に、商人たちが布を広げ、商品を並べている。客層はほとんどが男で、中には危ない雰囲気を漂よわす者も少なからずいた。商人の中にも一人、奇抜な格好をした危なそうな男がいて、筋肉質の眼つきの悪い男と大声で言い争っていた。

スコアはその光景をチラッと見て、息をのむ。

（確かに治安はいいとは言えないな……で、でも大丈夫さ。普通そんな商人も混じって商売してるし……変に目立つような商売をしなければ、まあ母さんの作品は目立つけど……）

スコアは拳をギュッと握って覚悟を決めた。

（せっかくここまで来たんだ、何としても商品売るぞ）

スコアは荷車を引きながら、辺りを見渡し商品を並べるスペースを探した。

（あそこは日当たりが悪いな。あそこは高級そうな店の隣だ、見劣りする。あそこは人が通らなそうだし……。うーん、いいトコがないな）

スコアはキョロキョロと辺りを見渡す、途中、筋肉質の眼つきの悪い男と一瞬目が合ったが、すぐに逸らした。

（あっ！！　ここはいいぞ）

布屋とガラス屋のあいだにちょうどいいスペースを見つけた。

（よし……ここに……）

ここに決めようとした時だった、スコアは気付いた。ちょうど真正面に危なそうな男の店があった。まだ筋肉質の眼つきの悪い男と大声で言い争っている。

（う……よりによってこの向かいか……でも、ここだったらきつと売れるはず……変な事さえしなければ大丈夫だ。ここで売って決めたんだ、大丈夫、勇気を出そう）

スコアは必死に自分を勇気づけた。

「すみません、ここに店を開かせてもらいます、いいですか？」

布屋とガラス屋の商人の顔を見ながら、スコアは言った。

「ああ」

「いいよ、邪魔しないんだったら好きにしな」

（よし、きつと売るぞ）

スコアは元気良く布を広げた。

「次は商品つと」

スコアが荷車から商品を取ろうとした時だった。

「うわっ！！」

スコアは何もないところで足を滑らせ、道に商品をばらまいてし

まった。その内の一つ、『イモムシのドレスを着た老婆』が特に勢いよく飛び出した。

「あっ！！」

向かいの店の前にいる筋肉質の男の足にぶつかった。

「いつて！！」

男はその場で飛び跳ねた。すぐに怒りに満ちた顔でスコアの方をにらんだ。

「てめえ！！ 何やってんだ、クソガキ」

スコアは震えあがった。

「す、すみません、すみません！ 転んでしまつて」

スコアは平謝りしながら、男の足元にある木彫り細工を取ろうとした。だが、男はそれを許さなかった、男の大きな足は勢いよくスコアの胴体に叩きつけられた。

「う……！！」

スコアの体は後ろに飛ばされる。

「クソガキが……」

男は足元にある木彫り細工に視線を移した。

「こんな気味悪い商品売りにきやがつて」

男は足を上げ、その木彫り細工を勢いよく踏みつけた。

バキンッ！

木彫り細工は中央からへし折れ、バラバラになってしまった。

「あ……………」

スコアは呆然とした。

男の怒りはまだ収まらない。ギロリとスコアをにらんでいる。

「てめエ、とつとここに散らばってるゴミを片づけて消えろ！！
てめえみたいなクズが商売できるところなんかねえんだよ」

筋肉質の男はスコアを強烈に威圧する。

「で…………でも…………ボクはここでモノを売らなくちゃ……………」

それでも引き下がらないスコア。それを見て、隣の商人の一人が焦って口を開いた。

「やめとけ！！ もうあきらめな、あいつににらまれたら商売どころじゃないよ。商品全部ぶっ壊されたくないんだったら、今日はもうあきらめな」

「……………」

スコアは力無く黙った。

「とつとと消える、クス野郎」

男にののしられながら、スコアは静かに店の商品を片づけた。

帰り道、スコアの足取りは重かった。

（なにも……出来なかった。その上、母さんの作品まで壊してしまつて……ボクがあんな所で転ぶから。どうしてだよ。ボクじゃなかったらきつと、何の問題もなく商売できてただろうに。どうしてボクは……いつも……）

スコアが店に戻った時には、辺りはもう暗くなっていた。

「ただいま……」

スコアは重たい声で言った。

「あら、スコア、お帰り」

母は笑顔で迎えてくれた。

「ごめん、母さん。商品売れなかった」

母はスコアの様子を見て、少し悲しそうな表情をした。

「そう……でも、仕方ないわね」

「本当は……きつと……売れたはずだったんだ」

スコアは自分の声が震えているのを感じた。

「でも……ボクが何もないところで転んで、男の人ともめちゃってそのせいで。ごめん、母さん。ボク、本当に、バカで、ドジで、結局……何もできなくて……それに……」

スコアはへし折れた木彫り細工を取り出して母に見せた。

「母さんの作品、壊しちゃったんだ……。全部、ボクのせいで……」

スコアは必死で涙をこらえていた。

「ごめんなさい、母さん」

スコアの目からついに涙がこぼれ落ちた。

そんなスコアを見たあと、母は優しく笑顔を見せた。

「謝ることなんかないわ、スコア……」

母は両手をスコアの肩に置いた。

「あなたは、私や店の心配をして、あんな遠くまで行ってくれたんじゃない。どうしてあなたが謝る必要があるの？」

「でも……ボクは……結局何も……」

「そういう時もあるわ。誰にだってうまくいかないことはある。でもそんなことで悲しんではダメ。あなたは立派よ。私やお店のため

に、あんな遠くまで行ってくれたんだから」

「そんなこと……」

「それにスコア……あなたは、あなたはバカでドジな子なんかじゃないわ。あなたは賢くて、勇敢で、なにより優しい子……ずっと見てきた私が言うんだから間違いないわ。だから……そんな言葉で自分を否定しないで」

「母さん……」

母は壊れてしまった木彫り細工に視線を移す。

「私が作った作品……ちょっと残念だったわね。ねえスコア、この作品の名前覚えてる？」

「え……『イモムシのドレスを着た老婆』」

「さすがスコア！」

母は嬉しそうだ。

「それにテーマは『美』よ！」

母はスコアを見つめてほほえんだ。

「よく聞いてスコア。本当に美しいものは、ときに醜く映るものよ。今日、あなたには自分の姿がみじめで醜く映っているのかもしれない。だけど、だからこそ、私にはあなたが美しく見える」

「母さん……」

「あなたは悲しむ必要なんか何もない。だから、いつも通り、元気でいて……」

その言葉を聞いたスコアはぐっと全身に力を入れた。

「うん、分かった」

スコアは涙をぬぐって、笑って見せた。

「ありがとう母さん、もう大丈夫」

「うん、その意気その意気！」

日が完全に沈み、月明かりが部屋に差し込む中、スコアはベッドの上で考えごとをしていた。少し暗くなっていた気持ちをなんとか盛り上げて、もう一度頑張ろうと決めていた。

（よし、明日もう一回市場に行ってみよう。この前の人がいたら少しお金を渡して謝ろう、それで何とかなるかもしれない）

スコアは考えがまとまると体を起こし、居間へと下りていく。ランプがわずかに照らす居間に、母は一人で座っていた。

「母さん、ボク明日もう一度……」

母は、何かを手にとって見つめていた。

「母さん……？」

スコアに気付き、母は振り向いた。

「あら、スコア、どうしたの」

「何を見てたの？」

「ああ……コレ？」

母の手には銀色の卵型のペンダントが光っていた。

「きれいなペンダントだね」

（母さんにしては珍しくセンスがいい……）

「そうでしょ？」

母は嬉しそうに笑った。

「これはね、死んだお父さんからもらったものなの」

「父さんから……？」

「ええ、結婚する前にね」

スコアは興味も持ち、母の隣に座った。

「もつと聞かせてよ」

「そうね……父さんはね、もともとはシャルルロッドの人ではないの。旅の商人で、ずっと店を持つのに憧れていた人なの。それから私もシャルルロッドの生まれではなかったのよ」

「そうだったんだ」

「私はグリーンレイって町の生まれでね、そのとき商売に来たお父さんとたまたま出会ってね。話しているうちに意気投合して、数日のあいだだけでも、二人で一緒に遊んだわ。そしてそのとき、このペンダントをもらったの。ちよつと見てて」

母は、卵型のペンダントを二つに割って見せた。

「このペンダントはね、片割れずつを二人が互いに持つと、その二人が別れても、再びめぐり会うことができるっていう不思議な力があるらしいの。だから私とお父さんでこれを持って、また必ず会おうって……だけど、私はそのあとすぐ、戦争の影響で別の町に引越したの。私は正直、もう彼とは会えないと思ったわ。でもね、このシャルルロッドの町で二人は偶然再会したの」

母は幸せそうに笑った。

「そのまま結婚しちゃった。お父さんがコツコツ貯めたお金で店も買ってたね」

「なんだかものすごくロマンチックだね」

「そうでしょ」

母はとても嬉しそうに笑った。

それを見たスコアも思わず笑みを浮かべてしまった。

「母さんは本当に父さんのことが好きだったんだね」

「好きだった、じゃなくて、好き、よ」

「ハハハ、そっか。じゃあさ……」

スコアは母を見つめた。

「約束するよ。死んだ父さんの代わりに、母さんもこの店も、ボクが守るよ」

「スコア……」

「ボクにとって、それが一番大事なんだ。ボクはきつと、そのために生まれてきたんだと思う」

母とこの店を守る、その日、スコアはそれを心に誓った。

0 - 10 スコア・フィードウッド（後編）

スコアは朝早く、荷車に商品を詰めて出かけようとしていた。

「これでよしと」

荷車に箱を積み終えたスコアに、母が駆け寄ってくる。

「待つてスコア。これもお願い」

母の手にはうさぎの木彫り細工があった。うさぎとは思えないようなポーズを取っている。首も妙に長い。

「えっと、確か『青く発光しながら空を飛ぶうさぎ』……だったよね。なんだか変わったうさぎだね」

「ええ、発光しながら空を飛ぶ様子を表そうとしたら、少し変わった感じになっちゃったわね。でもかなりうまくいったと思うわ。かなりの自信作よ。……どう？」

「う、うん。いいと思うよ」

スコアはその木彫り細工も箱に入れる。

（いまだに自信作と失敗作の見分けがつかないんだよなあ）

「スコア、気を付けてね」

「うん、それじゃあ行ってくるよ」

スコアは出発した。

その日は少し冷たい風が町に吹いていた。荷車を引いてスコアは歩く。

数時間後、今度は迷うことなく、町のはずれの市場にたどり着くことができた。

（今日こそは、なんとか商品売ろう）

そう思ったスコアだが、昨日の嫌な記憶が少しだけよみがえる。

（もし、昨日の人にまた会ったら……………いや）

スコアは必死に自分を勇気づけた。

（怖がっててもしょうがない。とにかくお金を稼がないと…………）

スコアは市場全体を見渡した。昨日とは商人の顔ぶれも違い、布の敷かれている位置も変わっていた。昨日見た筋肉質の男は、今日は見かけなかった。

スコアは適当に空いているスペースを見つけ、そこに商品を並べて、商売を始めた。

人影はポツポツと見えるが、ほとんどの客はスコアの店に見向きもしなかった。

それから数時間が経っても、店の商品は一つも売れなかった。

（全然客が来ない……数人は見てくれたけど、すぐに行っちゃったし……せっかく勇気を出してもう一度来たのに、徒労に終わっちゃうのかな……）

スコアが小さくため息をついた時だった。中年の小男が、スコアの店をのぞいた。

「いらっしやいませ」

小男は、じつと母の作った木彫り細工を眺めていた。興味を示してくれたようだ。

「ど、どうですか？」

子男はひげを触りながらうなずいた。

「ふむ……私はね、レデツリーの出身の商人なんだがね」

「レデツリーっていうと木彫り職人の聖地ですよね」

「ああ……もしかしたら、レデツリーで高値で売れるかもしれん」

「ええ！？」

（母さんの作品が……よりによってレデツリーで売れるって！？そんなすごかったのか！？）

子男はまじまじと母の木彫り細工を見つめながら口を開く。

「レデツリーの木彫り細工はね……なんていうか、完成度はすごい

んだけど、どの職人も、なんて言うか、似たり寄ったりでね。同じようなものばかり作るんだ。そのせいで、最近若い職人のあいだで木彫り細工の新境地を開拓しようって運動が盛んになってね。その関係で個性の強い作品に高値がつくようになったんだよ。ここの商品、個性はすごいよね」

「そ、そうですね。個性だけはどこにも負けないと思います」

「これと、これと、これと、あとこちら辺にあるの全部……もらえないかな」

「え！？ 買っていただけですか？」

「ああ」

「あの……この『青く発光しながら空を飛ぶうさぎ』は、少し高めで3200バルするんですが」

「ああ、構わんよ」

「はい！ ありがとうございます、全部で36500バルになります」

「36500バルね……はいよ」

男は金を払って、二十近くの木彫り細工を買っていった。

（やった、やった、やった！）

スコアはその日、軽い足取りで帰宅する。

夕暮れの空、店にたどり着く直前だった、スコアは馬にまたがったフレアに会った。

「ようスコア」

「フレア、見回り？」

「ああ……」

フレアは馬を停めて、降りる。険しい表情でスコアの前に立った。

「また殺人だ。今回で四件目」

「また……」

「おまえも気をつけろよ」

「うん……」

（またか……市場に行くのは残念だけど、しばらくは無しだな。店に母さん独りにしておくわけにはいかない）

「手がかりはつかめてるの？」

「そうだな、目撃情報はあるんだけど、仮面と黒いローブで姿を隠してるらしいからな。それでもガタイは良かったから男だろうって。あと凶器が中型の刃物ってことは分かってる」

「そっか、それだけじゃ探すのは大変だね」

「ああ、だから見回りが中心だよ。とにかく気をつけろよ」

「うん」

「ついでにおばさんの顔も見てくかな」

そう言ってフレアはそのままスコアについてきた。

「ただいま」

スコアが戻ると、母はすぐに笑顔を見せた。

「おかえりスコア、あら、それにフレアも」

「こんにちは、見回りのついでです」

「あら、わざわざ来てくれてアリガト。そうだ！ 聞いてスコア。今日店の商品がたくさん売れたのよ」

「え！？ 母さんも」

「そうなの、いくつも商品を買ってくれたお客さんがいてね。それにほら、私の自信作のひとつ『逆さで高速回転しながら踊る力二』も買ってくれたのよ」

「え、あの特に変……じゃなくて、特に自信を持ってたアレを……」

「ええ、そうなの、ただ少しだけ変わった人だったけど」

「ええ、それは分かります」

フレアがパツと答えた。

営業を終えたスコアは、外の道路に出て、夕焼けの空を眺めた。

（今日は本当にいい日だった。母さんの店で商品が売れたのも、レヅリーの運動と関係あるのかな？ だったらこれから木彫り細工が今より多く売れるようになるかも）

スコアは将来への希望が少し湧いてきた。

（これからうまくいくようになるかもしれない）

するとコウモリがキーキーとうるさく鳴き声を響かした。

（騒がしいな……どうしたんだろ）

コウモリの鳴き声に導かれて、スコアが数歩道路へと歩いた、その時だった。

ドンッ！

何かにぶつかりスコアは吹っ飛ばされた。見ると、すぐ近くに柄の悪い男が立っていた。

筋肉質の眼つきの悪い男だ。昨日、市場でスコアを追いだした男だった。

（市場はここから大分離れてる。どうしてこんな所に……）

スコアが呆然と男を見つめていると、男はギロリとにらみつけてきた。

「テメエ……この前の……」

スコアはハッとした。

「ご、ごめんなさい」

スコアはすぐに謝ったが、男はスコアの首をつかんで、押して、店の壁に叩きつけた。

「どうやら全然こりてねーらしいなあ」

スコアの首はギリギリと力づくで絞めつけられた。

「うっ……」

苦しむスコアを、男は血走った眼でジロリと見つめた。

「オレをなめたらどうなるか……分かってねえみてえだなあ」

男は大きなナイフを取り出して、それにほおずりをした。

「オレはなあ、おまえが思ってるより、ずっつと恐ろしい男なんだ」

ぜ。ヒヒヒ」

男の明らかにおかしい様子を見て、スコアは背筋がゾツとした。

（がたいがよくて、中型の刃物。まさか……！）

「な、何してるの……！」

母が気付いて店から飛び出してきた。

男は母をじつと見つめた。

「おまえの母親か……？ いい女じゃねえか、まだ若い。オレの好みだ……」

男はスコアの首から手を離し、母の方を向いた。ナイフを持ったまま、血走った眼でゆっくりと母ににじり寄る。

「やっぱり女は良いぜ。女はな……」

母が恐怖で一步下がった。その時だった。スコアは男を鋭くにらみつけた。

「母さんに手を出すな……！！」

次の瞬間、スコアの拳が男のアゴを勢いよく打ち抜いた。男の体はぐらりと揺れ、その場で大の字になって倒れた。

「ス、スコア……」

母はその様子を見て驚いていた。殴った本人であるスコアもその

状況に驚いて呆然としている。

少しのあいだ、二人が立ち尽くしていた時だった。

「どうした、何の騒ぎだ！」

見周りの兵士が三人、馬に乗って現れた。

「息子が……この男に襲われていて……」

母がすぐに声を出す。兵士の一人が馬から降りて、気絶している男を見る。

「ナイフを持ってる……それにこの体つき。まさかこいつ……とにかく連行しよう」

男は縄で縛られて連れていかれた。

その様子を見送りながら、母は一言言った。

「でもどうしてあの男、スコアを襲ったのかしら」

「道でぶつかっちゃって、その前も市場で一回もめたんだ……。でも、よりによって、それが殺人犯だったなんて……」

「不運だったわね。でもこれで捕まったから良かったわ。これで一件落着ね」

母は嬉しそうに言った。

その日の夜、二人はテーブルを挟んで話をした。

「へえ……レデツリーでそんなことが」

「うん、これから店の売り上げも良くなってくるかもしれない」

「そう……」

母は少しだけ何かを考えている様子だった。

「大丈夫だよ、母さん。ボクもがんばるから、この店はきつとつま
くいくようになるよ」

「そうね」

母は笑顔を見せた。

「スコアもやる気があるし、とにかく今は頑張りましょう」

夜のシャルロット基地の廊下でフレアは一人壁に寄り掛かって
いた。すると近くのドアが開き、若い兵士が一人出てくる。

「どうでしたか、あのナイフ男は？」

フレアが兵士に訪ねた。

「知らないの一点張りだよ。……とはいえ、見た目は目撃情報とは

一致するしなあ」

「……………」

フレアは少し何かを考える様子を見せたあと口を開いた。

「確かに相当悪そうには見えますけどね。だけど、あれほど異常な事をするほどおかしい奴にも見えないんですよね」

「……………確かに。オレも正直そう思っただ」

すると、別の年配の兵士が廊下側から現れた。

「どうだった？」

若い兵士が苦笑いを浮かべる。

「何だか自信がなくなってきましたよ」

年配の兵士が残念そうに眉を寄せる。

「そうか……………別の線で考える必要もありそうだな。それと関係して何だが、今日の昼に、気になる目撃情報が入ってたな」

「目撃情報？」

フレアが反応する。

「ああ……………四件目の被害者、花屋の若い女の子の件なんだけどな。その店の客の一人が、殺された日の昼、妙な男性客を見たって言う」

てるんだ」

「妙って、どついう風にですか」

「見た目は普通だったらしいんだ。むしろ小ぎれいな格好をしてたらしいんだが、その客がその子に、変な質問をしてたそうなんだ」

「変な……質問……？」

その時だった、フレアの脳裏に、夕方、スコアとスコアの母とした会話の内容がよみがえった。

「そうなの、いくつも商品を買ってくれたお客さんがいてね。それにほら、私の自信作のひとつ『逆さで高速回転しながら踊る力二』も買ってくれたのよ」

「え、あの特に変……じゃなくて、特に自信を持ってたアレを……」

「ええ、そうなの、ただ少しだけ変わった人だったけど」

「ええ、それは分かります」

フレアがパツと答えた。

そのすぐあと、スコアが話を続けた。

「どんなふうに変だったの？」

「それがね、変わった質問をしてきてね」

フレアの心臓からドクンと嫌な音がした。

『国軍は好きですか?』

フレアは、一瞬で緊迫した。

「まずい……!!」

ガンガンガン!!

スコアの家ドアが乱暴に鳴った。

「なに……?」

居間に一人でいた母は、ドアの方へと歩いていった。

母がドアを開けたその瞬間だった。

母は見た。目の前に、大きな男が立っているのを。黒いマントに身を包み、禍々しい大きな目玉のヤギの仮面をつけていた。手には大型のナイフが握りしめられている。

その男はブツブツと独り言のように何かをつぶやいていた。

「愚かなる国軍に従う、罪深き下僕………国民の裏切り者に……
血の制裁を……!!」

家中に母の甲高い悲鳴がこだました。

悲鳴を聞きつけ、居間へと駆けつけたスコアが見たものは、部屋の隅で震え上がる母と、その母にナイフ片手ににじり寄る不気味な風貌の男だった。

「やめるオオオオオオオ！」

スコアは男に突進し、勢いよく体をぶつけた。男はテーブルを巻き込んで、大きな音を立てて倒れ込んだ。スコアは素早く立ち上がり部屋に置いてある自衛用のこん棒を拾い上げた。

「アアアアアアアア！」

男は奇声を上げ、立ち上がった。

「血の制裁を、血の制裁を、血の制裁をオオオオオ！」

スコアは震えながらも男と向かい合い、こん棒を構えた。

「アアアアアア」

男はスコアに向けた斬りつけた。そのナイフをスコアは素早くかわした。

ゴッ！！

こん棒が、男の仮面に直撃した。仮面は勢いよく割れ、鼻血と共

に男の素顔が現れた。

「あ……昼間の人……」

母は呆然と声を漏らした。男は大きな音を立て、勢いよく仰向けに倒れた。男に巻き込まれ、ランプの灯が床に燃え移る。スコアはそれには目もくれず、すぐに母に視線を移した。

「か……母さん」

スコアが母の方を振り向いた瞬間だった。スコアの体から血が噴き出た。ナイフが体を貫通していた。男はいつの間にか上体を起こし、スコアにナイフを突き立てていた。

スコアの姿を見て、母が悲鳴を上げた。

「スコア、スコア！」

スコアの体がよろける。男は再び立ち上がり、狂気に満ちた目でスコアをにらみつけていた。炎が徐々に床を満たしていく中で、男はナイフを再び構え、スコアににじり寄ってくる。

「うっ……」

スコアは必死で向かい合い、こん棒を構える。

男は再び奇声を上げ、スコアに斬りかかる。スコアはよろけながらも、ナイフを紙一重でかわし、再びこん棒を男の肩に叩きつけた。鈍い音が響き、男の体がよろける。

その男の体を、さらにこん棒で殴りつけた。

「ぎゃあああああー!!」

男は叫び声を上げたが、その体は倒れることはなかった。ナイフは再びスコアの体を切り裂いた。

「うわああああ!!」

スコアは苦痛で叫び声を上げた。血が大量に床に飛び散る。スコアの体はバランスを崩し、ついに床に倒れてしまった。

スコアは苦しみながらも力を振りしぼり、なんとか上半身だけ起こしたが、男はすでにナイフを振り下ろそうとしていた。

「血の制裁をオオオオオオ!!」

スコアに向かってナイフが一直線に振り下ろされた。部屋中に大量の血が飛び散る。

スコアは我が目を疑った。

スコアの前に、母が盾になるように立っていた。その体は無残に切り裂かれ、おびただしい血が噴き出していた。

「うわああああああ!!」

スコアは叫んだ。激痛すらも忘れる悪夢のような光景だった。

母の体は力無く、床に倒れ込んだ。その時だった、ドアが乱暴に開かれ、フレアが部屋へ飛び込んできた。フレアは部屋を燃やす炎に一瞬驚いたあと、すぐにその炎に照らされる母の姿に気付いた。フレアは一瞬呆然としたあと、見る見るうちに怒りの表情に変わっていく。

「このヤロオオオ!!」

フレアは男に向かって突進した。男はナイフで斬りかかってきたが、フレアは小剣を引き抜き、男の体を一瞬で切り裂いた。

「ガアアアア!!」

男の体は引き裂かれ、大きな音を立て、倒れ伏した。フレアはもがく男の前に立ち、その体にさら剣を突き立てた。男は悲痛な叫びを上げながら息絶えた。

「クソ……………」

フレアは悔しそうに言った。

すぐにフレアは棚の上の水びんに手をかけ、床全体にまき散らした。それによって炎の勢いが徐々に衰えていく。

わずかに燃える炎で照らされる部屋で、スコアは血で染まった母の体に覆いかぶさっていた。

母は虚ろな目で、スコアを見つめる。

「スコア……………無事……………?」

小さな声だった。

「母さん……………」

「良かった……………」

母は安心したように言った。

「いやだ……………母さん、死なないで……………」

「ごめんなさい……」

「母さん……」

「スコア……最後に良く聞いて」

「最後なんて、聞きたくない」

「お願い……」

「……」

母は優しく見つめる。

「高く、空を飛べるのは、鳥だけとは限らない。いつかあなたが瞳を輝かせて生きていく姿を、私は何度も思い浮かべたわ。だからあなたは…… あなたの行きたい場所へ。あなたのなりたいものに……」

母の言葉が途切れた。

「母さん………？ 母さん！！」

母はもう動かなかった。

「ウソだ…… ウソだ…… こんなはずない…… こんなはずない……」

動かなくなったその体の上でスコアは震えた。

フレアは思わず目を逸らしそうになったが、必死でスコアを見つ

めた。

「スコア……」

フレアの呼びかけに、スコアは全く反応しない。母の体を覆ったまま、ずっとつぶやいている。

「ボクは……守るんだ……母さんを……ずっと……ずっと一緒に……」

スコアは泣いていなかった、ただ震えるようにその場でつぶやき続けていた。

「守るって約束したんだ。ボクが……ボクが母さんを守るって……！
なのに……なのに……どうして……？　ボクはボクは、母さんに……母さんに……」

スコアの体はガタガタと震え出した。
大きな叫び声が部屋中に響き渡った。

数時間後、商店街の道路に五、六人の国軍兵が集まっていた。大きな店同士のあいだの狭いスペース。小さな店があったその場所には、建物の形をした燃えカスがポツンと存在していた。
道路では引っぱり出された殺人犯の死体を国軍兵たちが囲んでいる。

その少し離れたところに、母の死体が同じように置かれていた。

そのすぐ隣に、スコアは座っていた。下を向いたまま、まるで動く気配がない。

その近くで、ラティルは兵士たちと話をしている。

「一連の殺人事件、犯人はコレで間違いなさそうだな」

「はい、犯人の姿も目撃情報と完全に一致しています」

確認を取ったラティルが、兵士たちから離れた時だった。ラティルの目の前にスコアは立っていた。

「スコア・フィードウッド……」

スコアは真っ直ぐラティルを見つめていた。

「すまなかったスコア。我々がもっと早く……」

そのラティルの言葉をスコアの声がさえぎった。

「ラティル中佐、決めました」

「……？ なにをだね」

「ボクを軍に入れてください」

その言葉を聞いてラティルは一瞬戸惑った。スコアはラティルを真っ直ぐ見つめていた。

「欲しいんです、力が……大切なものを守る力が……」

ラティルを真っ直ぐに見つめていたスコアの目から、遅れた涙が流れ出してきた。

「ボクは母さんに守られた。命を助けられた。ボクが弱かったから……」

涙であふれるスコアの目、その目に浮かぶ深い青い瞳は力強くラティルを見つめていた。

「ボクはもう……誰にも守られたくない……強くなって、大切なものを、守れるように、なりたい……!!」

ラティルはそんなスコアを静かな目で見つめていた。ラティルの口が小さく開かれる。

「確かに承諾した、スコア・フィードウッド」

数週間後、シャルルロッド基地の一室、イスに座るラティルの前に、スコアは一人立っていた、青い国軍の軍服に身を包んだ姿で。

「なかなか似合うじゃないか、スコア」

ラティルはほほえんだ。

「ありがとうございます」

スコアもほほえみを浮かべる。

「さて、これで君は軍人となった。君のような若者には、この世界は少し厳しいかもしれない。けれど……」

「覚悟はあります」

スコアははっきりと言った。

「どんな辛いことがあっても、どんな厳しいことがあっても、どんな恐ろしいことがあっても、それでもボクは、強くなりたい」

スコアはラティルを鋭い目で見つめた。

「ボクは、ボクの大切なものを守りたい、守れるようになりたい。そのためなら、ボクは、ボクの全てを懸けられます」

その言葉を聞いてラティルはほほえんだ。

「頼もしいな」

ラティルはそう言ったあと、真剣な表情でスコアを見つめた。

「けれど忘れないでほしい」

ラティルはゆっくりと語りかける。

「君が、君の大切なものを守りたければ、君自身が生きていなければ

ばならない。君が死んでしまえば何も守れないのだから」

ラティルは静かに言った。

「君は、君の大切なものを守るため、どんなことがあっても生きなければならぬ。それだけは忘れないでほしい」

スコアは敬礼した。

「了解しました」

5 - 16 動き出した闇

雲の少ない暖かい日だった。太陽の光がシャルルロッドの町を照らす。

シャルルロッド基地の司令室で、ラティルはイスに腰掛けている。机の上には様々な資料が散らばっており、その内の一枚を手に持っており、見つめている。

ラティルの表情は徐々に緊迫していく。

（なんてことだ……）

ラティルの額から汗がにじむ。

（先日聞いたリヴァブリアという町……『ダークサークル』に関わる資料をこの町を中心に見ていくと……全てが繋がっている）

ラティルの手がわずかに震えていた。

（まさか……こんな状況になっているとは。これはまずい。こんなことが……）

トントーン！

突然のノックの音にラティルは驚いた。

「は……入りたまえ」

兵士が入ってきた。

「ラティル大佐、手紙が届きました」

「手紙……？ 誰からだね」

「それが……差出人が書かれていないのですが、紙が非常に上質なので地位の高い方だと思い、お渡ししようかと……」

「そうか、ご苦労だった」

兵士が出ていったあと、ラティルは手紙を開いた。

「これは……」

ラティルは手紙をじつと見る。

（暗号文……しかもこれは、五年前に私がいた基地で使われていた暗号。という差出人はホーククリフ大將か。内容は……）

ラティルは静かにその手紙を読む。

シャルルロット基地の廊下を、夕暮れの赤い光が染めていた。その廊下をスコアは一人で歩いていた。

（決戦が近い今……ボクが招集されるのも時間の問題か）

そんなことを考えていると、ふと向かいからラティルが歩いてくるのが見えた。

「やあ、スコア・フィードウッド、探したよ」

「ラティル大佐……ボクに何か御用ですか？」

ラティルは笑顔を見せる。

「ああ、前に君がゴウドルークスで表彰された時があっただろう。基地の司令官としてその祝いをまだしていなかったと思うてね」

「そんなこと……。もう皇帝陛下にしていたただけで十分過ぎます」

「遠慮するな」

ラティルは笑みを見せる。

「スコア……君は強くなった、初めてここに来た時と比べて見違えるほどに」

「……………確かにそうかもしれませんが、ここに初めて来たときは、こんな風に称賛される日が来るなんて夢にも思ってませんでした」

「そうかね。私は、君は強くなると確信していたよ。いや……君は初めてここに来た時からすでに強かった。それがただ、体現化されただけに過ぎない。さて……では祝いの品を渡そう」

ラティルはポケットをゴソゴソと探り、中から赤い手持ち時計を取り出した。

「どうだい、なかなか良い品だろう」

「は……はい」

ラティルはスコアの手に手持ち時計を置いた。

「気に入らないんだったら、叩き壊してくれていい」

「い、いえ、そんなことは。大切にします」

ラティルは嬉しそうに笑った。

「スコア、時計がなぜ美しいか分かるかい？」

「え？ それは……その……」

「分からないのなら無理に答えなくていいよ」

ラティルはニコリと笑った。

「スコア、時計の針を見てくれないか」

スコアは時計の針を見た、カチカチと音を立て、時が進んでいく。

「時計は、時と共に姿を変える。それは人とよく似ていると思わないか」

「人と……」

スコアは時計の針をじっと見つめた。

「さて、では私は司令室に戻るとするか。実は少し忙しくてね。明日ちょっと用があつてここを離れなくてはいけないんだ」

ラティルはサツと横切つて、そのまま立ち去っていった。

数日後の夜、私服姿のラティルはある町の飲食店のテーブルに腰を下ろした。

「やあ、ラティル」

向かいには同じく私服のホーククリフ大将が座っている。ニコリとほえむ。

ラティルはその姿を見たあと、狭い店内の様子を見渡す。

「いい店とは言い難いですね。女性が少ない」

ホーククリフに視線を戻し、笑みを浮かべる。

「あなたほどの方が、こんな質素な店に普通に座っているというのは、少し不思議な気がしますよ」

「一番目立たない店を選んだのでね」

「そういう意味では最高の店、ですね」

ラティルは真剣な表情に変わる。そしてゆっくりと小声を出す。

「送っていただいた手紙の内容を見ました。『ダークサークル』に関する重要なことが分かったと……」

ホーククリフも真剣な表情になる。

「ああ……こんな時期だが、急いだ方がいいと思ってな」

「奇遇ですね、私も、重大な手がかりをつかんだところなのです」

「ホウ……そうなのか」

ラティルはホーククリフをじっと見つめる。

「リヴァブリア、という町をご存じですか」

「……………」

その言葉を聞いてホーククリフは少しのあいだ黙ったあと、静かに口を開く。

「やはり……」

ホーククリフはニヤリと笑みを浮かべた。

「……………急いで正解だったよ」

その言葉の直後だった、ホーククリフは胸元から素早く小銃を取り出し、銃口をラティルへと向けた。

「……………！」

ラティルは一瞬驚いたあと、ホーククリフをにらんだ。

「どういうおつもりですか？」

「見た通りだよ。君ならすぐに分かるだろう？」

ホーククリフは冷たい口調だった。

「あなたが……………」

「我ら『レギオス』にとつての邪魔ものは、始末しなくてはね」

ラティルは緊迫した表情で、腕にわずかに力を入れた。

「抵抗ならやめた方がいい」

ホーククリフはもう一方の手を軽く上げた、その直後、店の客が一斉に立ち上がった。一斉にラティルたちの方を見る。

「この店にいる客はすべて、私の部下だ」

「……………どおりで女性客がないはずだ」

ラティルはホーククリフをじっと見つめた。

「あなたは言いましたね、欲などもうないと……人生を意義あるものにしたいと……」

ホーククリフは声を上げて笑った。

「ある一部の人間にとって、欲とは死ぬその直前まで消えることはないものだよ。人生の意義？ そんなことを考えるのは暇人だけだ。それを知ったところで、一体何が手に入るというのかね」

「……………あなたには失望しました」

「だろうな、君は我らの計画には絶対に相容れない。だからこそ、優秀な君を、手元に残しておかなかったのだよ」

「……………」

ラティルは辛そうに眉をよせ、視線を落とした。

「私は……………あなたを信じたかった」

「ああ、分かっていたさ。そうでなければ、君がむざむざこんな所におびき出されるはずはない。情に流されやすいのは、昔も今も、君の最大の弱点だよ」

ホーククリフは冷たい眼でラティルを見ていた。

「さようなら、ラティル」

ラティルは静かに目を閉じた。

（ここが、私の最後か）

店内に銃声が響き渡った。

5 - 17 中心に立つ者

シャルルロッド基地の食堂のテーブルでスコアとアピスが話していた。

「もうすぐボクはゴウドルークスに招集を受けると思う」

「うん、分かってる……」

アピスは少しうつむいている。

その様子を見てスコアは笑顔を見せる。

「大丈夫、ボクは必ず戻ってくるから……」

「うん……」

アピスは弱く返事をした。どこか様子が不自然だと、スコアはそう感じた。

「アピス……？」

「スコア！」

突然、コールの声が響いた。驚くスコア。
コールは勢いよくスコアの前に立った。

「大変だ」

緊迫した様子のコール。それを見てスコアは戸惑った。

「いったいどうしたの？」

コールは少し間をおいて息を整えたあと、ゆっくりと口を開く。

「ラティル大佐が死んだ」

スコアは一瞬、耳を疑った。

「……え？」

スコアは呆然としたまま口を開く。

「そ、そんなはず……だって、数日前まであんな元気で……」

コールは辛そうに口を開く。

「殺されたんだ……例の重役殺しだ。ラティル大佐がその被害に……」

スコアはまだ信じられない様子だった。

「ウソだ……そんなこと……」

スコアの体がわずかに震えた。

「そんなはず……ない」

クラウド国軍本部基地の広い廊下を、ライトシュタインは緊迫した様子で歩いていった。

「なんてことだ……」

ライトシュタインは早足で廊下を歩く。

（ラティル大佐が殺された……やったのは間違いなく『レギオス』だ。ラティルはおそらく我々の協力者だった。ロストブルーが協力者として選んだ人物がラティルだった。だとすると、ラティルを殺したのは、ラティルが協力者として選んだ人物か。そうなるとロストブルー側の協力者はすべていなくなったと見ていい……そうなる……と……）

ライトシュタインの表情に徐々に緊張感が増していく。

（この状況はまずい……まず過ぎる。今すぐに行動を起こさなければ……！）

夜のゴウドルークス。その闇に染まった巨大都市の中心には、首都のシンボル、デュークヴァン城がそびえ立っていた。ブルテン皇帝の権力の象徴である巨大で華やかな城も、夜の闇の中では、不気

味にそびえる山脈のように見えた。

その巨大な門の前に、ライトシュタインの姿があった。

門に向かって真っ直ぐ歩くライトシュタイン。すると門の前に建つ警備兵二人が気付き、止めに入ってきた。

「止まれ、何者だ」

「国軍中将、ライトシュタインだ」

ライトシュタインは冷静な様子で言った。

二人の警備兵は同時に驚いた。

「ラ、ライトシュタイン中将……し、失礼しました！」

もう一人の警備兵が口を開く。

「し、しかしライトシュタイン中将、こんな夜中にどのような御用で……」

「グランロイヤール総務大臣に会いにきた。現在皇務大臣代理として、城に身を置いていると聞いてな」

「は、はい、ですが……」

「緊急だ、すぐに通してくれ」

二人の警備兵は一瞬顔を見合わせる。

「……分かりました。しかし、ご存じだと思いますが、四階以上は皇族以外立ち入り禁止です。たとえ議員の方でもです。ご注意ください」

「さい」

「分かっている」

ライトシュタインは城の中へと進んでいった。

デュークヴァン城五階、その暗い階段の前には皇帝護衛の近衛兵が二人立っていた。

わずかな火と、月明かりの光だけの暗い空間の中、片方の近衛兵が口を開く。

「今日は特に月明かりが弱い。なんか不気味な夜だな」

「おい、あまり口を開くな」

もう片方の近衛兵が注意した。

「分かってるよ、けどどうも落ち着かなくてな」

「……………まあ気持ちは分かるよ。最近変な事件が多いからな」

「ああ、巨大な事件から、妙な事件までな。今夜だって……………ん!？」

近衛兵の片方が素早く剣を抜いた。それを見てもう一方の近衛兵も剣を抜く。

向かいから人影が近づいてきていた。

「誰だ!!」

二人は剣を構える。

近衛兵たちの前に、ライトシュタインが現れた。

「ここを通してくれないか？」

「あなたは……ライトシュタイン中将。なぜあなたがここにいる！？」

「ここは皇族以外立ち入り禁止だぞ!!」

「知っている」

ライトシュタインは冷静な様子だ。

近衛兵はしっかりと剣を構え、ライトシュタインをにらむ。

「どういっつもりだ！」

「ここから先は皇帝陛下の寝室だぞ!!」

「知っている、皇帝陛下と話がしたい」

ライトシュタインは小剣を抜いた。

「黙ってここを通してほしい……できれば、君たちを斬りたくはない」

その言葉を聞いて、二人の近衛兵の表情が一気に緊迫する。

「く……!!」

「おい、どうする!?!」

「斬るぞ、たとえ中将とはいえ、皇帝陛下の寝室に侵入するなど許されることではない」

近衛兵の二人はライトシュタインに斬りかかった。

ヒュンッ!!

ライトシュタインの小剣は、近衛兵の一人を切り裂いた。

「ああ……!!」

短い悲鳴と共に近衛兵の一人は床に倒れた。

「この!!」

もう一人の近衛兵がライトシュタインに斬りかかる。

ギンッ!!

互いの剣がぶつかり合った。二人は鋭い斬撃を連続でぶつけ合う。

ギンギンギンッ!!

「流石は近衛兵……手強い……だが」

ヒュンッ!!

ライトシュタインの小剣は近衛兵の体を切り裂いた。
勢いよく倒れる近衛兵。

痛みで苦しむ二人の近衛兵を置き去りにして、ライトシュタインは皇帝の寝室へと歩いていった。

階段を上るライトシュタイン。その先の短い廊下のさらに先に、扉があつた。ライトシュタインは扉を開け、部屋へと入る。

「誰だ……！」

すぐに声が飛んできた。炎に照らされた広い部屋、数々の修飾品の姿が、炎に照らされてぼんやりと浮かびあがっている。部屋の中央の白い机に、長いひげと長い髪の老人が座っていた。ブルテン皇帝だ。

「な、なんだ、誰だ貴様は！？」

ブルテン皇帝は怯えたように声を張り上げる。

「十六年ぶりですね、皇帝陛下」

ライトシュタインは入口の前で足を止める。

「じゅ……十六年ぶり……？」

「お忘れですか、ザベル・ライトシュタインです」

ブルテン皇帝は落ち着かない様子でにらみつける。

「な、なぜ貴様がここにいる！？ すぐに出て行け！ へ、兵を呼

ぶぞー!!」

ライトシュタインはじつとブルテン皇帝を見つめる。

「落ち着いてください。私は陛下に何かしようとしてここに来たのではありません。陛下にどうしてもうかがいたいことがあって来たのです」

「で、出て行け!! 貴様に教えることなどない」

「……………」

ライトシュタインはじつと観察するようにブルテン皇帝を見つめる。

「……………陛下、話をするだけです」

「く……………出て行け!」

ブルテン皇帝は、部屋の隅に設置されているロープに視線を移す。ライトシュタインは素早くそれに気づいた。

（城中にベルを鳴らす、非常用のロープか）

ブルテン皇帝は立ち上がり、部屋の隅にあるロープに右手を伸ばそうとする。それを見た途端だった、ライトシュタインは、ブルテン皇帝をにらみつけた。

「誰だ……………おまえは……………」

ライトシュタインの殺意に満ちた低い声で、ブルテン皇帝の動きが止まった。

「皇帝は……左利きだ」

ライトシュタインの音が響いた直後だった。皇帝の喉の奥から小さな声が漏れ始める。

「……ヒ……ヒ……ヒ……」

皇帝は痙攣するように体を震わした。

「ヒヒヒヒヒヒヒ……」

ライトシュタインは小剣を引き抜いた。

カンカンカンカンカンカン！！

城中に巨大なベルの音が響き渡った。城中の近衛兵たちが一斉に皇帝の寝室へと駆けつける。初めに来た数人が、寝室へと続く階段の前に倒れる二人の近衛兵に気づく。

それを見て、先頭の近衛兵が仲間呼びかける。

「おまえはこの二人を！ 私たちは寝室へ急ぐぞ！！」

一人を残し、あとの三人の近衛兵は寝室へと飛び込んだ。炎が消え、部屋は闇に包まれていた。

「火をつけるんだ、早く!!」

近衛兵の一人が部屋に明かりをともした、その時だった。

「うわああああ!!」

部屋の壁に皇帝が寄り掛かって倒れていた。胸の真ん中からは大量の血が流れ出ている。

「な……なんてことだ」

近衛兵たちは一瞬立ち尽くした。

「医者だ!! 早く医者を!!」

叫ぶ近衛兵の前に、先ほど残してきた近衛兵が駆けつけてきた。何かを報告しようと口を開きかけたが、部屋に倒れている皇帝を見て言葉を失う。

「何だ、何を言おうとした!!」

その言葉にハッと正気を取り戻す。

「ラ……ライトシュタインです。倒れている近衛兵はまだ息があり、ライトシュタイン中將がやったと」

「な……なんだと!?!」

すぐに城中に明かりがともされた。廊下という廊下を近衛兵たちが騒がしく駆け回った。

ドンドン！！

グランロイヤーの寝室が騒がしくノックされる。

ノソツと動き、扉を開けたグランロイヤーに、緊迫した近衛兵の顔が飛び込んできた。

「グ、グランロイヤー総務大臣！！」

「な、何かね、一体……」

近衛兵の様子に驚くグランロイヤー。

「詳しいお話はできないのですが………我々はいまライトシュタイン將軍を探しているのです。見かけてはいませんか？」

「え？ ライトシュタイン？」

「はい、ライトシュタイン將軍です」

「見かけるも何も、私はずっと寝室で仕事をしていたから……」

「分かりました、もし万一ライトシュタイン將軍の姿を見つけたら、すぐに城の兵士にご連絡を」

「あ、ああ……分かった……」

部屋の扉は閉められた。

グランロイヤーはゆっくりと部屋のイスへと進んで、ため息をついた。

「ふう……」

イスへと腰掛けるグランロイヤー。

「城中が騒がしいし……あの近衛兵の様子……一体何をやらかしたっていうんだ。君は……」

向かいにはライトシュタインが座っていた。

「……………」

ライトシュタインは軽くうつむきながら、静かに口を開いた。

「ブルテン皇帝を殺してきた」

「……………!!」

グランロイヤーのイスが勢いよく揺れた。

「お……おい……!!」

「だがあれはブルテン皇帝ではない。偽物だった」

「え……？ に、偽物……」

「ああ、ブルテン皇帝とうりふたつのな」

「じゃあ、本物は……？」

「……………」

ライトシュタインは口元を険しくした。

「なぜ、やつらが、ここまで国を自在に操れたのか、やっと分かったよ」

ライトシュタインのその言葉に、グランロイヤーは呆然とした。

「ま、まさか、皇帝をすり替えたのは……？」

「ああ、そして、もう本物は……この世にはいないだろう」

グランロイヤーは言葉を失った。

ライトシュタインも黙る。

少しの静寂の後、グランロイヤーが口を開いた。

「こ、こんなことが……こんなことがあっていいのか……」

おびえた声だった。

「奴らがここまでの力を持っていたなんて……」

「私も完全に誤算だった」

「ザベル、その皇帝を偽物だと証明できるんだろうな」

「できないだろうな。現実にはできるが、奴らにかき消されるだろう」

「じゃ、じゃあ、君はもう……」

グランロイヤーは徐々に冷静さを失っているようだった。

「な、仲間は……いま何人ぐらいいるんだ？」

グランロイヤーはさすがのようにライトシュタインを見つめた。
ライトシュタインは冷静に口を開いた。

「君と私だけだ」

グランロイヤーは恐怖で震えた。

「そ……そんなことが……」

「こんな状況だからこそ、このような行動をとるしかなかった」

グランロイヤーは顔を手で覆い、少しのあいだ固まっていた。やがて手を下ろしライトシュタインを見つめた。

「なあ、ザベル、一つ答えてくれないか？」

「なんだ」

「私と君は……一体これから、どうなるんだ？」

その質問を聞いて、ライトシュタインは黙った。

部屋が静寂に包まれる。

ライトシュタインは冷静な表情でグランロイヤーを見つめていた。ライトシュタインの口がゆっくりと開く。

「君が、それを私に聞くのか？」

「え……………」

「『ダークサークル』を引き起こした張本人は、君だろ」

部屋が再び静寂に包まれた。遠くで響く近衛兵の声が、部屋の窓から入ってきた。それ以外の音は部屋にはない。

夜の静かな部屋でライトシュタインとグランロイヤーは向かい合って座っていた。

「お…………おい、冗談はやめてくれよ、ザベル」

グランロイヤーは笑いかけた。

「私が首謀者だって？ 君は何を言って…………」

「偽物の皇帝…………アレにもう少し忠義心を植え付けておくんだつたな」

「え…………？」

「胸に剣先を当てただけで、色々と話してくれたよ」

ライトシュタインの言葉の直後、グランロイヤーは口を閉ざし黙

った。

わずかな静寂の後だった。

「ククク……………ハハハ……………」

グランロイヤーの口からわずかに笑い声が漏れた。

「ハハハ……………ハハハハハハ！！！」

グランロイヤーは鋭い笑い声を響かせた。

ライトシュタインは冷静にその様子を見つめている。

グランロイヤーは冷たい目でライトシュタインを見つめる。

「そうだよ、私が『レギオス』のトップ。『ダークサークル』を引き起こした張本人だ。だがまさかこのタイミングで気付かれるとはな。あんな偽物のじじいに足を引っ張られるとは夢にも思わなかったよ」

「いや……………」

ライトシュタインは冷静な様子だ。

「一応、あの偽物の名誉のために言わせてもらえば、あれから情報を得たわけではないよ。君が首謀者だと確信したのは、今さっきだ」

「……………！！！」

グランロイヤーは一瞬驚いたあと、悔しそうに笑みを浮かべた。

「とんだ子供だましに引っ掛かってしまった訳か……………」

「別に気にすることはない、事件の夜は誰もが冷静ではいられないものだ。あの偽物がすぐに非常用ベルを鳴らしたせいで、問い詰める時間がなかったんだ」

「……だが、私にカマを掛けたということは、君は私を疑っていたという訳だな。いつだ？ いつの段階で疑っていた？」

ライトシュタインはじつとグランロイヤーを見つめる。

「初めからだよ」

「……………協力を頼んだ時からか」

「私は始めから君に目星をつけて、君を監視するために協力を要請するふりをした」

「君は言ったな、私の言葉や発言が信頼に値すると……………」

「あいにく私は、人を言葉だけでは絶対に信用しない」

「……大した狐だ。なるほど、私と君が手を組んだふりをした時点で、私と君は騙し合いをしていたという訳か。……………だが、なぜ私を疑った？」

「理由は二つある」

ライトシュタインはゆっくりと話し出す。

「まずは、ダークサークルの動きだ。国の荒れ具合は、皇族と貴族、

そして国軍に、富と権力の偏りを見せていた。この現象について単純に考えれば、皇族や貴族、国軍の増長を狙っていたかのように思える。しかし実のところ、狙いは逆。偏り過ぎた富や権力……巨大になり過ぎた力は、ピークを過ぎれば必ず衰退へ向かう。国民の怒りを買った皇族と貴族……解放軍やルザンヌ軍に刃を向けられた国軍……。つまり本当の狙いは、それら国家権力の弱体化だったわけだ。そうなると残る権力は議員、特に大臣たちの権力だ。その視点で物事を見れば、もっとも疑うべきはその大臣の中心、つまり総務大臣の君だ」

「ふ……大したものだ、外側からこちらの狙いを的確に見極めていたとはな」

「ああ、だがこれはあくまで表面的な推測にすぎない。決め手となったのは、君の内面だよ」

「私の内面だと……？」

「そうだ、君は、常に皮をかぶっていた。快活で、人なつっこく、素直な人間を装っていた。そういう人間の前では、人は心を開き、信用することを知っていたんだ。私にもそれに近い時期があったから良く分かったよ……。そういう人間を演じ、人に取り入り、邪悪な意思で意のままに操ろうとする。それが、私が君を疑う最大の理由となった君の内面……つまり、君の本性だ」

「……………」

「ついでもう一つ言わせてもらおう。総務省に君に見せたもらった資料。あれには改ざんの跡があった」

「……気付かないように、自然に見える形で改ざんしたはずだが」

「確かに一見、改ざんしたかしないか判断できないようにしてはあった。しかし部分部分で完璧にカモフラージュできても、それを全体として見れば、その部分は必ず浮き出て見えるものだ。物事を判断するときは、理屈やつじつまだけで見てはいけない、最も重視すべきは経験から得た感覚だ」

「……………大したものだ」

グランロイヤーは一瞬苦笑いを見せた。

「君を相手に一対一の騙し合いの勝負をしたこと自体が失敗だったわけだ。結果的に、こちらの情報だけを一方的に吸い取られる形になった。やはり君は恐ろしい男だよ」

グランロイヤーは自信に満ちた笑みを浮かべる。

「だが、最後に勝つのは私だ。君は仲間を全て失い、たった一人。さらに逆賊として国中を追われる羽目になる。もう君には何の手だてもない」

「それはどうかな？」

ライトシュタインは素早く立ち上がり、小剣を引き抜いた。

「ここで君を斬れば、私の逆転勝利ということになる」

「そんなことは……………」

グランロイヤーは懷に忍ばせていた小銃を素早く取り出した。その小銃が火を噴く直前だった。

ヒュンッ!!

ライトシュタインの斬撃が、小銃を真つ二つに切り裂いた。グランロイヤーは驚き立ちあがり、数歩下がった。

そのグランロイヤーに対し、ライトシュタインは剣先を向ける。

「チェックメイトだ」

「それはどうかな？」

グランロイヤーの顔から余裕の笑みが浮かぶ。

「私にはまだ、切り札があるのだよ」

その言葉の直後だった、部屋のガラスが勢いよく割れ、ベランダから人影が飛び出してきた。

ギィィンッッ!!

ライトシュタインの剣と、リーヴァルの剣が互いにぶつかり合った。二人の剣は交差したまま震える。

「リーヴァル・クロスレイか……!!」

ライトシュタインの表情が険しくなる。

リーヴァルが腕に力を入れた途端、ライトシュタインの剣は勢いよくはじかれた。

「く……！」

後ろに下がるライトシュタイン、それを追撃するリーヴァル。直後、二人のあいだで、数発の斬撃が交錯した。その直後、ライトシュタインの脇腹が裂けた。

「ぐう……！」

ライトシュタインは苦しそうに後ろへ下がった。その様子をグランロイヤーは楽しげに眺める。

「無駄だよザベル。彼には絶対に勝てない。私が見つけた最高の才能だよ」

脇腹を押さえるライトシュタインに、リーヴァルがにじり寄る。

リーヴァルが鋭く斬りつけようとしたその瞬間、ライトシュタインは懷から何かを取り出し、床に叩きつけた。その直後、白い煙幕が部屋中を満たした。

驚くグランロイヤー。

「発煙弾か！！　リーヴァル、私を守れ！！」

リーヴァルは素早くグランロイヤーの前に立った。

「流石はザベル、用意がいい」

煙が収まると、部屋にはライトシュタインの姿だけが消えていた。

「逃げたか……」

するとリーヴァルが口を開いた。

「ですが……」

リーヴァルは床を見る。床には大量の血だまりが残っていた。血は廊下へと続いている。

「私がつけた傷は浅くはありません。遠くまでは逃げられないはず」

リーヴァルは冷静な様子だ。

「そうか……ならば追えリーヴァル」

「生け捕りになさいますか？」

「いや、殺せ」

「承知しました」

リーヴァルは駆けだした。

リーヴァルは廊下へと続く血の跡を追う。血の跡は近衛兵の掛け声から遠ざかる形で、廊下の奥へと続いていた。リーヴァルはその血を延々とたどる。そのまま廊下の角を曲がった時だった。

「クソ……」

血がきれいに途絶えていた。

「悪あがきを……」

闇に沈むデュークヴァン城のベランダの一つに、ライトシュタインの姿はあった。手すりに寄り掛かりながら、どうにか立っている。脇腹のケガを押さえながら、苦しそうに息を乱す。

「まだだ……………まだ……………」

ベランダには血だまりができていた。

「見つけたぞ」

ベランダにリーヴァルが入ってきた。

「もう無駄だ、あきらめろ」

リーヴァルは大剣を片手にゆっくりと近づいてくる。
ライトシュタインは手すりに寄りかかりながら、リーヴァルの方
向を向き、真っ直ぐにその姿を見つめた。

（どうやら……………）

ライトシュタインはゆっくりと床に腰をつけた。

（どうやら死の瞬間が来たようだな。私の命はここで尽きる……………
……………）

リーヴァルが目の前に立った。それを見て、ライトシュタインは

静かに目を閉じた。

（すまないソラ。チェスの約束、守れなかった……）

大剣は振り下ろされた。

ライトシュタインの体は切り裂かれ、大量の血しぶきが上がった。
その体はベランダの床に倒れ伏した。

それと時を同じくして、デュークヴァン城から一羽の小型の手紙
鳥が飛び立った。

5 - 18 動き出す者たち

部屋の木窓の隙間から朝日の光が差し込んでくる。

こぎれいに整理された部屋のベッドの上で、スコアは一人横になつてボーッとしていた。

（ラティル大佐が死んだ……………）

スコアの目から涙がじわりとにじむ。

（ボクは何も出来なかった…………）

スコアは思い出す、最後に廊下でラティルと会った時のことを。ラティルの言葉がよみがえる。

「時計は、時と共に姿を変える。それは人とよく似ていると思わな
いか」

（ラティル大佐…………）

スコアは体を起こした。立ち上がり、部屋の棚の前に立った。棚の上には、いくつもの勲章と、そしてラティルからもらった赤い手持ち時計が置かれていた。時計の針がカチカチと音を立てて動いている。

「気に入らないんだつたら、叩き壊してくれていい」

その言葉を思い出した時だった、スコアは頭に何か引つ掛かるのを感じた。

（何でラティル大佐はあんなことを言ったんだ……？ あんなに時計が好きな、あの人が）

スコアは赤い時計を手にとり、軽く揺らした。

カサ……

中から妙な音が響くのに気づいた。

（……………）

スコアは時計を持った手を振り上げた、そして勢いよく時計を床に叩きつけた。

ガシャンッ！！

赤い時計は粉々に砕け、歯車や細かい部品が床に飛び散った。バラバラに散らばった時計の部品の中に、不自然な小さな白い紙があった。

スコアは紙を拾い上げる、紙には文章が書かれていた。

スコア・フィードウッドへ

そう書かれていた。

「ラティル大佐……？」

スコアはその文章を目で追った。

ここに書いてあることは、私が君に信頼を置いて記したものだ。
ここに書かれている情報をどう処理するかは、君に任せる。

今、この瞬間にも、邪悪な者たちがクラウドを乗っ取ろうと動いている。ダークサークルは彼らによって、意図的に起こされた現象なのだ。もしこのまま彼らを野放しにしたまま最後の決戦を迎えれば、すべて彼らのシナリオ通りに進むだろう。彼らの予定通り、クラウドは彼らの手に落ちる。

彼らは、国軍にも力を及ぼす存在だ。議員にも、貴族にも、皇族にも、彼らの影響は及んでいる。

君がこれを知ってどのような行動をとるかは君に任せる。
君には国軍人としての使命もある、仲間を守りたいのいう信念もある。だから、無理強いはできない。選択する権利は君にある。
彼らの計画を止める可能性のある情報を最後に残そう、これを君が使うか使わないかは君の自由だ。

クラウド中部、湖の町、リヴァブリア

スコアは呆然とした。

「これは……こんな……」

スコアは紙を持ったまま立ち尽くしていた。

「こんなことが………けど、ラティル大佐が……」

（間違いない……ラティル大佐は、そいつらに殺されたんだ。ラティル大佐は秘密裏にそいつらを追っていた、そして殺されたんだ……！）

スコアは手紙を持つ手が震えるのを感じた。

（どうする？ これをボクはどうすればいいんだ？ 上官に伝える？ いや、軍に影響を及ぼす者と書いてあった。信頼できる人に……けれどラティル大佐はこれを知って殺された……なら……ボクが動くか……でも、ボクには軍人として戦う使命がある）

スコアは考える、部屋で呆然と立ち尽くし、必死で考える。

（ボクは国軍人だ。ボクを信頼する仲間がいる。アピスがいる。ボクには英雄としての責任もある。ボクがここを離れるわけにはいかない）

その時だった、スコアの頭に、ある言葉がよみがえった。

「もし、君の信じる世界が、君の思っているものとは大きく異なっていたとしたら、君は変わらずその信念を守り切ることができるのだろうか？」

それはロストブルーの言葉だった。

（ボクは……）

スコアの瞳に強い光が宿る。

（ボクの信念は変わらない）

スコアは紙をバラバラに破いて、窓の前に立ち、外に投げ捨てた。捨てられた紙は、風に流れ、散っていき、やがて見えなくなった。

スコアは体の向きを変え、部屋に置いてある剣を手についた。

（ボクはボクの大切なものを守る。だから、ボクの大切な人の幸せを守るために、国を悪い奴らに乗っ取らせるわけにはいかない。アピスを、コールを、大切な仲間を、本当の意味で守ることこそが、ボクの信念だ）

スコアは部屋を飛び出した。

（みんな許してくれ、最後の戦いには必ず戻ってくる）

解放軍ビルセイルド基地の廊下をクロコとサキは歩いていた。クロコは腕をクルクル回す。

「よし、調子はだいぶ良くなった」

その様子を見てサキがほえむ。

「良かったです、これでクロコさんの調子も良くなったし、それに聞いた話だとミリアさんも基地に到着したそうですよ。戦力は集結

しました、これでゴウドルークスへの決戦の準備が整ったはずですよ」

「いよいよ最後の戦いか……」

二人は廊下を進み、大広間を横切る時だった。クロコは驚いた。大広間にソラの姿があった。ソラもすぐクロコに気づいた。

「クロ!!」

ソラが駆け寄ってくる。クロコもすぐ走って近づく。

「バカ! 性懲りもなく、なんでまた来るんだよ!」

二人は互いに足を止めて、向き合った。

「違う……」

「何が違うんだよ」

「違う……」

ソラの声が震えていた。様子がおかしい、そうクロコは思った。

「ソラ……?」

ソラの表情が異常に弱々しかった。

「私……ここに来る気なんかなかった……フルスロックで待ってよ
うって……でも」

ソラの体は震えていた。

「フルスロツクの果物屋でいつも通り、働いてた……そしたら、突然、レッドロッドが来て……」

「レッドロッド……ソラの家の執事……」

「レッドロッド……ひどいケガしてて、それで、どうしても私に伝えなきゃいけないことがあるって言って、それで……」

ソラの目から涙がこぼれた。

「お父様が死んだって……」

「……!?!」

「お父様が……お父様が……」

ソラはその場で崩れ落ちた。すぐにクロコはかかんでソラの背中に手を置く。

「ソラ……」

「私、どうしていいか……」

ソラはそう言って泣き出した。口から苦しそうに声を漏らす。

ソラはしばらくのあいだ泣いていた。ここに来るまでのあいだ、ため込んでいたものを吐き出すように泣いていた。

長いあいだ泣いたあと、少し落ち着いたソラは、クロコの目を見つめた。

「ごめん……アリガト」

「ソラ、聞かせてくれないか。一体何が起きたのか？」

「お父様は、皇帝を暗殺しようとして、失敗して、近衛兵に殺されたって……そういう噂が立ってるってレッドロッドが言ってた」

「皇帝を暗殺!？」

「でも、きっと真実はそうじゃない。お父様は、多分、殺される直前、手紙鳥を飛ばした。レッドロッドに向けて……ううん、本当は私に向けて。そして手紙にはこう書いてあった。自分の最も信頼する人にこの情報を託せて……」

「え……?」

ソラは手紙をクロコに手渡した。

「これが、お父様の最後の手紙……」

クロコは手紙を受け取り、見た。小さな手紙には、走り書きで、血で書いた短い文章がつづってあった。

クロコはその内容に目を通す。

レッドロッド、もうすぐここに危険が迫る、屋敷の者はすぐに身を隠せ。

ソラ、最も信頼できる者にこの情報を。

ダークサークルの真実。
全てはリヴァブリアに。

「ダークサークルの真実……」

クロコは驚いた。

「私には正直何のことなのか……」

「オレには……多分分かる」

クロコは静かに悟った。

「その時が、来たってわけか」

クロコはすぐに歩きだす。

「クロ！」

「すまないソラ。すぐ動けなくちゃいけない。多分もう時間はほとんどない」

クロコはソラを置いて駆け出した。基地の建物を飛び出し、広場

にいたアールスロウに駆け寄った。

「ファントムは!?!」

アールスロウは不思議そうな様子だ。

「ファントムに何の用だ」

「緊急なんだ、ファントムはどこにいる!?!」

「ファントムはいま基地にはいない。詳しいことは分からないが、何か重要な仕事があるらしい」

「……………そうか」

クロコはアールスロウに背を向けて、馬小屋に走り出した。
馬小屋に置かれている馬にまたがった。

「クロコ!?!」

アールスロウがすぐに追いついてきた。

「どこへ行く、クロコ」

「やらなきゃいけないことがあるんだ」

「ダメだ。どんな理由があろうと、いま君が基地を抜けることは許されない。いまの君の立場を自覚するんだ」

「悪いけど、アンタに説明してる時間はないんだ」

クロコはアールスロウを置いて馬を走らせる。

「クロコ!!」

叫ぶアールスロウを置き去りにして、クロコは広場を駆ける。そのまま広場の門から外へと出ようとした時だった。門の前に立つ人影に気づき、クロコは馬を止める。フロウが立っていた。馬にまたがるクロコと向かい合う。

フロウは見上げて、真っ直ぐクロコを見つめていた。

「フロウ……」

「どこへ行くんだ。クロコ」

静かな口調だった。じっとクロコを見つめている。

「アールスロウさんが止めてるよ」

「行かなきゃいけないんだ」

「何のために？」

「『ダークサークル』の真実を見極めに」

「……!!」

フロウは目を見開き、驚いた。
すぐに冷静な表情に戻り、静かに口を開いた。

「君が向かおうとする場所にそれがあると……?」

「あると信じてる」

「……………それは、君に課せられた使命なの?」

「ああ」

「そう……」

フロウはクロコの目をじっと見つめた。

「一つだけ、頼みを聞いてくれないかい」

「なんだ?」

「僕の心も、そこへ連れて行ってほしい」

「ああ、約束する」

フロウは静かに道をあけた。

クロコは馬を走らせ、基地から飛び出した。

門の前で独り立ち尽くすフロウ。

そのフロウの前にアールスロウが遅れて現れた。

「フロウ……これはどういうことだ?」

「大丈夫です。アールスロウさん」

「大丈夫……だと？」

フロウは強い目でアールスロウを見た。

「クロコは必ず、戻ってきます」

6 - 1 最強の戦士たち

グラウド中部のとある村、その道の脇に少女が立っている。
年齢十五、六ぐらい、肩まで伸びた黒髪に真紅の瞳、どこか威圧的な雰囲気がある。

私服姿のクロコは、村のおばあさんと話していた。

「だから！ リヴァブリアだよ！ その場所が知りたいんだ！」

「え……なんだって？」

「リヴァブリア！」

「りば……なんだって？」

「リ・ヴァ・ブ・リ・ア！」

「あーあー、知つとる知つとる、昨日じいさんと食べたわ」

「違う！ 何のこと言ってるか知らないが、違う！」

（クソー、せめてソラかアールスロウに場所だけでも聞いておけばよかった。なんにも分からずに出発しちゃった……）

グラウド中部、薄茶色の大地にそびえるウォールズ・ヘルズベイ基地。

その超巨大要塞には、各地から集めた解放軍の全戦力が集結していた。

司令室には数人の解放軍幹部が座っている。その内の一人の男が険しい顔をしている。

その男は四十代後半、黄色い髪、ピンとはねた黄色いひげで、目は開いているのか閉じているのか分からないほど細い。

解放軍の総司令官ティム・ランクストンだ。

幹部の一人と話している。

「ファントムとの連絡は取れないのか？」

ランクストンの言葉に幹部の男が答える。

「はい……各連絡線を使っても連絡はとれず、手紙鳥も帰ってこないままです……」

「うーむ」

「総司令はお聞きになってはいないのですか？」

「どうしてもやらなければならない事があるとした……」

ランクストンは眉を寄せる。

（ファントムの言っていた『ダークサークル』に関わる者たち。そ

れをファントムが追っていることは知っている。おそらくそれと関係のあることなのだろう……。戦争に関しては全て私に任すということか。だが……。この厳しい決戦の時にファントムの存在がどうしても欲しかった……………)

ランクストンは拳を強く握る。

「私が皆の士気を高めるしかないのか」

(決戦前にも関わらずファントムは不在。加えて……………)

「クロコ・ブレイリバーは見つかったのか？」

「いえ……………しかしアールスロウ司令官の話では、戦いには必ず現れる、と……………それだけしか……………」

「それを信じると？」

「見つからない以上は……………」

「うーむ……………」

ランクストンは頭を抱える。

(クロコ……………一体何をしているんだ。新たな英雄として、国軍との決戦の最大の希望だと思っていたのに。今の状況ではとてもじゃないが期待できない。あとは他の精鋭たちに期待するしかないのか……………)

ウォールズ・ヘルズベイの大部屋の一つ、床全体に敷かれた布の上で大勢の兵士が待機している。その部屋の角で、二人の若い軍人が壁に寄りかかりながら話している。

一人は年齢十三、四ぐらい、一ヶ所はねた黄色い髪、ぱっちりした目に透きとおるような緑色の瞳が浮いている。サキ・フランティスだ。

もう一人は年齢十四、五ぐらい、とても小柄で、柔らかい灰色の髪に、きれいに整った顔だちをしている。フロウ・ストルークだ。

「もうすぐ動き出しそうですね」

サキの言葉にフロウがうなずく。

「そうだね」

「正直なところ、ボクらにどれだけ勝ち目があるんでしょうか？」

サキは不安そうだ。フロウが答える。

「戦う以外の選択肢がない以上、勝ち目を考えることにあまり意味はないと思うけど、知りたいって気持ちには分かるよ」

フロウは落ち着いた様子だ。

「ここに集結した解放軍の戦力は250000。そして国軍側に集結する戦力は推定で250000。戦力は互角だけど、実力にはらつきのある解放軍兵に比べれば、国軍兵の力は安定してる。総力戦になれば、僕らの方が勝ち目は薄い。それは紛れもない事実だろう

ね」

サキは視線を落とす。

「それに、クロコさんもいなくなって……」

「大丈夫、クロコは必ず戻ってくるよ。それにクロコがいなくても、僕らがそれを補えるぐらいじゃないとね」

フロウはニコリと笑った。

「そ、そうですね。ボクらがしっかりしないと」

「それに、頼れる人は他にもいる」

基地の個室の一つ、そこに一人の軍人が独りっきりでイスに座っていた。

その軍人は、二十代半ば、白い長い髪を後ろで結び、気品のあるきれいな顔だちをしている。全体的にどこか冷たい印象だ。

ファイフ・アールスロウは静かに瞑想していた。

（ついにここまで来た。解放軍に入って八年か……）

アールスロウは静かに目を開けた。

（俺は、自らのやれることをやるだけだ）

広間に置かれた机の前で、一人の若い軍人がだるそうに腰かけていた。

年齢十八、九ぐらい、流れるように立った黄色い髪、細い目に高い鼻、どこか軽そうな雰囲気を持っている。

フィンディ・レアーズは深くイスにもたれ掛かっている。

「もうすぐ、戦いの始まりか……」

その隣には一人の女の支援員が座っている。

年齢は十八、九、黒い短めの髪に、大きな目、活発そうな雰囲気を持っている。

ファリス・ルナティークだ。フィンディを軽くにらんでいる。

「アンタ、戦いの前なんだよ。なにそのやる気なさそうな格好。もっと気合入れなよ」

「リラックスしてるって言えよ」

フィンディはため息をつく。

「クロコは行方不明っていうし、オレには戦う理由はねーな。帰ろうかな……」

「フィンディ……！」

「冗談だよ。あいつが戻ってこないわけない」

フィンディはニヤツと笑う。

「あの大バカがな」

外の広場、その一角に、建物の壁にもたれかかっている一人の女の軍人がいた。

年齢十八、九ぐらい、きれいな体つきで、黄色いサラツとした長い髪、きれいな顔立ちで、冷たい目つき、緑色の瞳をしている。全体的にも冷たい雰囲気だ。

ミリア・アルドレットは空を見上げていた。

青空には大きな雲が流れている。

（もうすぐ、全てが終わる……）

ミリアは空をじっと見つめている。

（解放軍は……私が勝たせる）

純白の巨大建築物が軒を連ねている。

ここは首都ゴウドルークス。

その首都の巨大建築物をさらに上から見下ろしている建物がある。いくつもの巨大な建物が無数に集まったような複雑な造形をして

おり、中心に位置する巨大建築は天にも伸びるような高さだ。

ここはクラウド国軍本部基地。

その巨大広間は兵隊たちで埋め尽くされていた。

巨大広間の上部に設置されたバルコニーから、一人の軍人が広間全体を見下している。

その軍人は五十代前半、白い整った髪とひげに覆われた顔には、少したれ気味の小さな目が浮いている。目こそ小さいがその眼光は鋭い。

サーマス・オルズバウロ元帥だ。

静かに広間の様子を眺めている。

「大した数ですね……」

背後から一人の軍人が近づいてくる。

その軍人は年齢四十代半ば、とがった目つきに、高くとがった鼻。大きく跳ねた髪形をしている。

オルズバウロ元帥は視線だけ動かしその軍人を見る。

「カルス中将……」

カルス中将はオルズバウロ元帥の隣に立ち、巨大広間を見下ろす。

「この広大な空間をあっさり埋め尽くすとは……」

カルス中将の言葉を聞いてオルズバウロは小さく口を開く。

「ここにいるのは全体のほんの一部だ。精鋭しか置いていない」

「ホウ……精鋭ですか」

「そうだ……身の程知らずのセウスノール軍を完膚なきまでに叩き潰すには十分なほどのな」

「精鋭ということは、名うての戦士もいるのですか？　ウォールズ・ヘルズベイの戦いで相当減ったと思うのですが」

「冗談を言うな。当然まだ多くいる。見ろ」

オルズバウロ元帥はある一ヶ所を指さす。

そこには一人の剣士が壁に寄り掛かって立っていた。

年齢は十六、七ぐらい、少し乱れた長めの灰色髪に、鋭い目に赤い瞳、全体的に雰囲気は落ち着いているが、どこか殺気のようなものが漏れだしている。

壁に寄り掛かり、あくびをしている。

オルズバルロ元帥が口を開く。

「レイデル・グロウス。『消剣の騎士』だ。気分屋とはいえ、その才能は疑いようもない……この戦いで間違いなく大きな戦果を上げるだろう」

レイデルは広間の様子をゆっくりと眺める。

「いい雰囲気だ……どいつもこいつも気迫がみなぎってやがる」

レイデルは笑みを浮かべる。

「さあ、もうすぐだ。もうすぐ最高に刺激的な戦いが始まる……」

オルズバウロ元帥はまた広間を見渡す。

「それから……」

オルズバウロはまたある箇所を指さす。

そこには青年の剣士が直立不動の姿勢をとっていた。

その剣士は二十代半ば、白い髪に、上に伸びた眉に鋭い目、真面目そうな雰囲気を持っている。

「ミツシュ・ノルフオーク。あのディアル・ロストブルーが、数多くいた弟子志願者の中で唯一認めた男。ロストブルーの右腕として育てられた天才だ」

ミツシュは静かに目を閉じ、精神を集中させていた。

（ロストブルー将軍、あなたの分まで剣を振るい、必ず国軍を勝利に導いて見せます）

ミツシュの全身から強烈な気迫が漏れ出していた。

オルズバウロ元帥は、また別の一ヶ所を指さす。

そこには長槍を携えた青年が壁に寄り掛かって座っている。

年齢は二十代後半、黄色い髪、細い目に高い鼻、厳格そうな雰囲気を持っている。

「アグレス・ロウレイブ。『一角獣』……軍事貴族ロウレイブ家の若き当主だ。槍技の技術において右に出る者はいないだろう」

ロウレイブは静かに座っている。

（クロコ・ブレイリバー。この戦いで、今度こそきさまを倒す）

ロウレイブは槍を持つ手にわずかに力を込める。

オルズバウロ元帥は広間を見渡しながらまた指を漂わせる。

「あの集団は……？」

カルス中將が声を出す。

「ああ、アレか……」

広間の中央付近に、赤い制服に白いマントを羽織った集団がいた。

「アレが噂の聖騎士軍だ。セウスノールの戦いで第三聖騎士隊は全滅したが、聖騎士隊は第一から第六隊まで存在している。この状況下ということもあって、皇族直属にも関わらず全面的に協力し、指揮下に入ってくれた。もっとも、最強の第一隊は皇帝陛下の護衛の

ためにデュークヴァン城にいるらしいが……それでも2000人の聖騎士がいる」

「2000人の聖騎士ですか、この状況では実に頼もしいですね……第一隊もいてくれれば良かったのですが」

「ああ、だが、彼がいてくれる」

「彼……？」

オルズバウロは聖騎士軍の先頭に立つ剣士を指さした。

その剣士は年齢二十代前半、整った黄色い髪に、太いまゆに大きな目、整った鼻、全体的に気品を漂わせ、落ち着いた雰囲気です騎士たちを見渡している。

オルズバウロが口を開く。

「聖騎士軍総督アウサー・レイクラーズ。二十三の若さで聖騎士軍をまとめる最強の聖騎士だ」

レイクラーズは整列する聖騎士たちと向かい合い、声を上げた。

「君たちに限って油断することはないと思うが、この名誉ある聖騎士軍、他の国軍の主力などに後れをとるなよ」

「はっ！」

聖騎士たちは一斉に胸に拳を置き、頭を下げる。

レイクラーは満足そうにほほえむ。

「よし、それでこそだ」

カルス中將は静かに口を開いた。

「これが……」

「そう、これが我がクラウド国軍の主戦力だ。『七本柱』が過去の英雄たちならば、彼らはこれから英雄となるであろう若き力だ。解放軍ごときに決して後れは取らん。おっと……」

オルズバウ元帥はある一ヶ所を見つめる。

「なにも若者だけとは限らん」

広間のある一ヶ所を一人の軍人が歩いていた。恐ろしく巨大な体を揺らしながら歩くその軍人を、周りの兵士たちは目を丸くして次々と道を開けていく。

その軍人は白い將軍服を着ていた。

その將軍は年齢三十代半ば、2mを優に超える身長に、軍服の内側からもはつきりと分かる強靱な肉体をしている。黄色い逆立った髪に、逆立ったひげ、強烈な威圧感を全身にまとい、殺気の塊のような眼で周りを見下ろしている。

オルズバウ元帥は口を開く。

「ゴーガン・ゴッドブラン中將。『七本柱』最後の一人。かつて口ストブルーと肩を並べた国軍の英雄。平民にも関わらず戦果のみで

議員権を獲得したのはロストブルーとあの男だけだ……最強のパワーを持ち、『破壊の騎士』の異名を持つ男」

広間を歩くゴッドブランは、周りを見下ろしながら小さくつぶやく。

「まさかこの私が軍務で首都に呼び出される日が来るとはな。農民の寄せ集めごときに後れを取りおって、なんという体たらくだ。むしろが走るな……！」

ゴッドブラン中將は強烈な威圧感で広間を揺らしながら歩く。

「大したものですね……」

カルス中將がつぶやくように言った。オルズバウロは小さくうなずく。

「ああ、この戦いが解放軍の最後となるだろう」

オルズバウロはそう言うと、広間に背を向けて廊下へと歩いていった。

一人残されるカルス中將。

「解放軍の最後か……」

カルス中將は小さく笑みを浮かべる。

「確かに解放軍はこの戦いで最後となるでしょう。けれど元帥、あなたにとってもこの戦いが最後となるのですよ。我ら『レギオス』の生贄となつてね……」

6 - 2 湖の屋敷

青い輝きを放つ水面が広がっている。巨大な湖の周りには灰色の建物がポツポツと寄り添うように建っていた。町を緑色に染める木々の脇、静かな石畳の道をクロコは歩いている。

「ついに着いたぞ……ここがリヴァブリアか」

クロコは足を止めて、近くの木に寄り掛かった。

「さてと……」

（ノーヒントでここまで来たからな。何をすればいいのかさっぱり分からねー）

クロコは青空を見上げた。

「いい天気だな」

ウォールズ・ヘルズベイ基地の大部屋の一つ、そこには多くの解放軍兵が待機している。その角にミリアは一人座って、支給された干し肉を細かくちぎって食べていた。

「あの……一緒に食べませんか？」

サキがミリアの前に立っていた。

「サキか……」

サキはニコニコと笑う。

「しょ、食事は多い方が楽しいと思いますし」

ミリアは何も言わない。無表情でサキを見ている。

「あつ！ ミリアさんって瞳が緑色なんですネ。ボクも緑色なんです。そういえば髪の色も同じですね。お、お揃いだな……なんて」

「……………」

「やあ、こんにちは」

突然別の声が飛んできた。

フィンディがミリアに向かって近づいてくる。

「こんなところに女性がいるなんてね。もしかしてきみが『戦乱の鷹』ミリア・アルドレットかい？」

フィンディは愛想良くほえむ。

「そつだ」

「ああ、やっぱり。オレはフィンディ・レアーズっていうんだ」

「……クラット基地のエースか」

「知っててくれたのかい。光栄だな。でもまさか、噂に名高いミリア・アルドレットがこんなに美しい女性だとは思わなかったよ。どうだい、こんな端っこで食事してないで、オレと一緒に食べない？」

「この隣の部屋に空いたテーブルがあったんだ」

するとサキが素早く声を上げる。

「フィ、フィンディさん！ な、何を言ってるんですか」

「ん……？ サキ、いたの？」

「い、いますよー！」

「うるさいやつだな、なんでおまえがいるんだよ。クロコとクラットの町へ出た時も付いてきたし。おまえ、オレの邪魔するのが趣味なのか？」

「ち、違いますよー！」

サキはブンブン怒っている。

「だいたいフィンディさんにはファリスさんがいるでしょ！」

「はっ？ どうしてあの女の名前が出るんだよ。オレはだいたいあんなツンツンした女は趣味じゃないんだ。ミリアのようなおとなしい女性が好きなんだよ」

「クロコさんナンパしたくせに……」

にらむサキを無視してフィンディはミリアを見つめた。

「こんなお子様ほつといて、行こうぜ、ミリア。前線基地を守ってきた剣士同士でしか分からない話だってあるはずさ。同じ守護神同士、一緒に話そうぜ」

「ふーん……」

さらに別の声が飛んできた。振り向いたフィンディの背後には、ファリスが立っていた。

「ずいぶん楽しそうだね、フィンディ」

ファリスは笑みを浮かべていたが、目は笑っていない。フィンディの顔がわずかに青くなる。

「あんたと食事しようと思って探してたんだけど、まあわたしはお邪魔みたいだし、別の場所で食事させてもらおうかな……」

「あ……いや……その……違うんだ……」

ファリスはプイツと背中を向けて歩きだす。

「だいたいフィンディ様はおとなしい子が好みの方ですよし」

スタスタと歩いていくファリス。フィンディは青い顔で追いかける。

「いや……そうじゃなくて、それは勘違いで……」

「ツンツンしたわたしとは話なんて合わないもんねー。同じ剣士同士で話したら？ 守護神くん」

「お、おい、ちょっと待てって！」

フィンディはファリスを追っていなくなってしまった。
とり残されるサキとミリア。

サキは呆然と立ち尽くしていたが、ハッとしてミリアの方を見る。

「そ……そのミリアさん」

ミリアは小さくため息をついた。

「私はああいうタイプは嫌いだ……」

ミリアはそう言ったあと、サキを見た。

「座らないのか？ 一緒に食べるんだろう」

ミリアの言葉を聞いて、サキは一瞬ボーッとしたあと勢いよくうなずいた。

「は、はい！」

基地の広い廊下を、フロウは一人で歩いていた。軽い足取りだ。すると向かいからアールスロウが歩いてきた。

「フロウ」

アールスロウが話しかけてきた。

「はい？」

「先ほど、広間でソラ・フェアリーフを見たのだが」

「あー、はい、僕です、連れてきたのは。ほとんど無人になるビルセイルドに置き去りにするのは少し気が引けて……ショックを受けている様子だったので」

「まさか戦場に連れていく気ではないだろうな」

「い、いえ！ もちろんそんなつもりはありません！」

基地の広間の一つ、その端っこに一人の少女が立っていた。年齢十五、六ぐらい、白い髪に、ぱっちりとしたきれいな目をしている。

ソラ・フェアリーフは天井をボーツと見つめていた。

「……………クロ」

「あやしい場所？」

男は目を丸くする。

「そうだ」

リヴァブリアの町で、クロコは通りすがりの男に話しかけていた。

「場所じゃなくてもいい。あやしいやつとか……あやしい物とか……とにかくあやしければ何でもいいんだ」

「いや……そんなあやしいモン、この町にないけど」

「く……ッ」

（クソー、一体どこにあるんだよ！ この町に『ダークサークルの真実』があるんじゃないかったのか！？）

クロコは湖の方に目を移す。

「ん……？」

クロコは気づいた、湖の真ん中付近に小さな島がある。目を凝らすと、小島には大きな屋敷が建っていた。

「あの屋敷って何だ？」

クロコは男に聞いた。

「ん……ああ、どつかのお偉いさんの別荘だよ」

「……………どうやってあそこまで行くんだ？　泳いでいくのか？」

「そんな馬鹿な。ボートを使っていくんだよ」

「どこにあるんだ？」

「この付近の人が保有してるのがいくつかあるよ。多分言えば貸してくれると思うけどね」

「……………行ってみるか」

クロコはその後、住民の一人からボートを借りた。
湖の岸でボートを押しながら、クロコは聞いた。

「あの屋敷は誰のものか知ってるか？」

ボートの持ち主の老人はもごもご言いながら口を開く。

「ありやー、そうだなー、たしか……………グランロイヤー総務大臣
の別荘だったはずだよあ」

「グランロイヤー総務大臣……………？」

「この町にはな、十年ぐらい前からなあ、ときどき、高貴そうな方
々がゾロゾロと訪れることがあったんだがよ、最近はそれがよくあ

「つたなー」

「ふーん……別に聞いてないけど」

クロコはボートで湖を渡り、小島に到着した。

木々に囲まれた道を屋敷へ向かって歩く。

屋敷の屋根が見えてくると、クロコは木々の深い場所へと潜り込んで、屋敷の様子を探ってみた。屋敷の鉄柵に設置されている門の前では、剣を携えた門番らしき男が四人も立っていた。

クロコはコソコソと裏へ回り込む。

裏には人の気配はなかった。クロコは高く飛び跳ねて、鉄柵を飛び越え、中へと侵入した。

「さてと……ちょっと調べさせてもらおうかな」

クロコは裏に取り付けられている大きな窓の前に立って、剣を抜き、軽く飛び跳ねた。

ヒュヒュヒュヒュンッ！

窓は四角形にきれいに切れた。落ちてきた窓をクロコはパシッとつかんで、ポイツと捨てた。

ピョンッと跳ねてクロコは屋敷の中へと侵入した。

（こういうことはガキの頃からしょっちゅうやってるんだよねー）

クロコは暗い廊下を歩く。

（人の気配は薄いな。だけどいないっていう保証もないか……警戒はしといた方がいいな）

クロコは音を立てずに屋敷を歩きまわる。二階へと上がり、少し廊下を歩いた時だった。

「……！」

クロコは足を止めた。ちょうど廊下の角の直前だ。

（人の気配がする。誰がいる……）

クロコは壁に体をくっつけて、神経を集中させる。

（こっちに近づいてくる……ひとりか。なら静かにぶっ飛ばすか）

クロコは剣を鞘に納めたまま構える。

（……………）

クロコは剣を握る力を強める。

（……………こいつ、足音も立てずに、ほとんど気配を消して歩いている。オレじゃなきゃ絶対気づかなかったな。ただものじゃない、何者だ……？）

少しずつ少しずつ近づいてくるのを感じた。

（もう少し………）

気配がすぐそこまできた。

（今だ！！）

クロコは飛び出して、剣を思いっきり振った。人影は鮮やかにそれをかわし、後ろへ跳んだ。

「なに……！！」

クロコは驚いた。その人影を見つめる。そしてさらに驚いた。

「え……！？」

クロコの前には一人の少年が立っていた。年齢は十五、六、サラツとした白い髪、深い青い瞳、鋭く冷たい眼光でクロコを見つめていた。私服姿のスコア・フィードウッドだった。

「スコア……！！」

目の前にいるスコアは素早く白剣を抜いた。

「クロコ……！？」

クロコも黒剣を鞘から引き抜く。

「おまえ……！！　なんでここにいるんだ！」

（スコアがまさか、『ダークサークル』に関わっていた！？ いや、こいつに限ってそれはないはずだ……）

スコアは剣を構えて、クロコを鋭くにらんでいる。けれど斬りつける様子はない。スコアもまた混乱しているようだ。

「……………」

二人はしばらく向かい合っていた。

黒剣を構え、見つめるクロコ。

白剣を構え、にらむスコア。

静寂がその場を支配する。

クロコは静かに剣を鞘に納めた。

わずかに驚くスコア。

「……………何のつもりだ、クロコ」

クロコはじつとスコアを見つめた。

「ここは戦場じゃない」

「……………」

「……………オレはここに、『ダークサークル』を引き起こしたやつを探しに来たんだ」

スコアは驚いた。

「まさか……………きみも」

「おまえもか……」

クロコはそう言ったあと、少し考えて、口を開いた。

「剣を引け、スコア。いま、オレたちには戦う理由はない」

スコアは少し迷ったあと、剣を鞘に納めた。

「どうやら、ボクらの目的は同じみたいだね……」

「なら、ここは争うより、協力した方がいーんじゃねーか？」

クロコの一言に、スコアは黙った。少しのあいだクロコを見つめた。

「……………分かった」

スコアの眼つきが少しだけ緩んだ。

「……………だけど、今だけだよクロコ」

クロコはニコリと笑った。

「分かってるよ」

6 - 3 明かされる真実

青く輝く水面に浮かぶ小島、その中心に建つ大きな屋敷。その中の廊下をクロコとスコアは並んで歩いていった。薄暗い廊下には二人以外の気配はない。

「だけど、おまえが『ダークサークル』について調べてたなんてな」
クロコの言葉にスコアは鈍く反応する。

「……………ボクがここに来たのは偶然みたいなものだよ」

「そっか、まあ、オレも偶然といえば偶然なのかもしれないな」

「きみはこの『ダークサークル』についてどれだけのことを知ってるんだ？」

「いや、正直ほとんど知らない。ただ、なにか悪い奴らがわざと起こしたモンだってことは知ってる」

「……………ここはどうやって突き止めたんだ」

「教えてもらっただんだよ」

「そっか……………ならたぶんボクの方がきみよりも詳しく知ってるはずだ」

スコアはゆつくりと話し出す。

「このダークサークルはクラウドの上位権力者の一部が組織的に引き起こしたものだ。そしてその組織のアジトがこの屋敷だったんだと思う。この町の人の話を聞く限り、その組織のメンバーが定期的にここに集まり、企てを行っていたんだ」

「ふーん……」

「だからそのメンバー全体の細かな動向を探れば、必ずこの町を中心にして動いていたことが分かるはずだ。ボクにその情報を伝えてくれた人は、おそらくそれでこの町に行きついたんだと思う。メンバーの動向から逆算したのか、それともこの町の存在を知ってからメンバーの動向と照らし合わせたのか、どちらなのかは分からないけど……」

クロコは頭をかいた。

「まあとにかく、ここを調べればそいつらのしつぱをつかめるってことだな」

「そういうことになるね」

二人は同時に足を止めた。廊下の奥の大きな扉の前に二人は立っていた。

「見るからにあやしいが……」

クロコは扉を見つめる。すぐにスコアが一步前に出て扉を開けた。

扉の奥には大部屋が広がっている。

大部屋の中央付近には長い大きな机があった。イスがいくつも置かれている。

「会議室みたいだな……」

クロコは部屋を見渡しながら言った。

「というより会議室だね。おそらくここで奴らは話し合いをしているんだ」

スコアは部屋を見回す。大部屋の奥にある扉に目があった。金属の扉だ。スコアは大部屋を横切り、その扉の前に立った。

「ん……？」

スコアの動きに気づき、クロコもスコアを追って扉の前に立つ。スコアは扉を開けようとしたがカギが掛かっている。

ドガッ！！

スコアは扉に鋭い蹴りを浴びせた。金属の扉は部屋の壁からはがれて奥に向かって倒れ込んでしまった。

クロコは目を丸くする。

「おまえ思ったより強引だな」

扉の奥には小さな部屋があった。仕事机と本棚と大きな棚だけが置かれている。

「一人部屋って感じだな」

クロコは中を見ながら言った。

「多分、グランロイヤー総務大臣の書斎だ」

「さっきも聞いたんだが、グランロイヤー総務大臣って誰だ？」

「……国の重役だよ。グラウドの三大権力、皇帝、大臣、国軍。その大臣の中心的人物だ。一度首都で本人と会ったことがある」

スコアは仕事机をあさり出した。書類のいくつかを流し読みする。

「……『ダークサークル』に関わるような情報はないな」

「おいスコア！」

スコアは声の方向を向くと、クロコが棚の中に頭を突っ込んでいた。お尻を向けながら声を出している。

「この奥に何かある！」

「……………」

クロコが少しずつ棚の中から後退しながら出てくると、それと共にズルズルと重い何かが動く音が響いてきた。

ドスンッ！

大きな金属の箱が出てきた。

「ふう……見るからにあやしそうな箱だろ。棚の奥の壁の裏に隠てあった」

「よく見つけたね……」

スコアは床に置かれた箱を見つめる。

「金庫だ……しかもこの茶色の光沢は、合金の中では最大硬度を誇るゼラライト製だ……」

クロコは金庫の扉を開けようとするが、ビクともしない。

「うーん、メチャクチャ固いな……ん……？　ココに回転盤がある。十二ヶタか……しかもヒントは無し……」

クロコは回転盤をクルクル回す。

「開きそうもないな……」

「クロコ、少しどいて……」

クロコの横に立つスコアは、剣を引き抜いていた。クロコが驚いて少し下がった瞬間だった。

ヒュンッ！！

扉の部分がきれいに切断されて、扉がゴトツと音を立てて倒れた。

「こんな謎解きに付き合う必要はない」

「……………」

クロコはジーツとスコアを見ている。

「……………？ どうしたクロコ」

「……………いや、昔同じような状況があつてな。オレがこういう開け方を提案したんだけど、相手にされなかったなーって思つてな」

「時間はない、ムダ話はあとにしてくれ」

スコアは金庫の中をのぞきこむ。金庫の中にはいくつもの書類が置かれていた。

スコアは書類を手にとって、そのいくつかに目を通す。その直後、スコアの表情が一瞬で緊迫する。

「な……………何だこれ」

クロコもその書類をのぞきこむ。

「ん……………オレにはよく分からないな……………組織名は『レギオス』
つてことぐらいか」

「これは、『レギオス』の構成員の名前が書かれて紙だ……………」

スコアは紙を今一度見つめる。

ジオ・グランロイヤー総務大臣
レオン・ホーククリフ大将
オズ・レース内務大臣
メルチ・アルテバラン財務大臣
コースト・リアネール商務大臣
サイド・コード国土大臣
アーノル・レットル皇務大臣
ワイズ・カルス中将
ロア・アクベス中将
.....

「大臣と国軍の権力の半分近くのメンバーが参加してる……議員権力なら半分を超えてる……」

「それって……すごいことなんだよな。たしか議員は国の半分以上の権力があるって」

「ああ……これは実質、議会を掌握してる。信じられない事態だ。この国の大部分の権力が、『ダークサークル』を引き起こすために動いてたなんて……」

「……要するに、この国は上からすでにグチャグチャだったってことだな」

「……………」

スコアは他の書類にも目を通す。するとまた驚いた。

「……………なんだ、コレ」

「……………?」

「皇帝の暗殺計画」

「……………!」

クロコも驚いた。

「まさかそいつら、皇帝を暗殺する気が!」

「いや、これは十二年前のものだ」

「十二年前……………?」

「クロコ……………内乱が起きたのは何年前か知ってるか?」

「たしか……………十年前……………」

「そうだ、だけど、実質国全体が荒れ始めたのは、十二年前からだ」

「……………!」

「きっかけは、子宝に恵まれなかったブルテン皇帝の一人息子ファルゼム皇子の病死だと言われてた。だけど……………」

「まさか、皇帝そのものが入れ替わってたのか!」

「……………」

スコアの手が震えていた。動揺を抑えきれないようだ。

「ボクは皇帝をじかに見たことがある。そのとき、なぜか目の前に立つ皇帝の存在が淡く薄らいで見えたんだ。だけど今思えば……どうりで」

クロコが声を出す。

「だけど、だったら、今の国家権力はもう完全に『レギオス』ってことになるんじゃないのか？ 『レギオス』そのものが国のトップ……」

「いや、これはあくまで水面下で行われていたことだ。もしこれが明るみに出れば、他の貴族や皇族、特にオルズバウロ元帥を中心とした国軍権力が黙っているはずがない。特に皇帝の暗殺なんてことが……。もしこんなことが表ざたになれば、新たな権力対立が起きて、新たな内乱の引き金になるだろう」

「……………よく分かんないが、気持ち悪いほどおかしい状況だっことは分かった」

クロコはそう言っただけの資料に目を通す。

「……………？ これはなんだ」

クロコは不思議そうな顔をする。

「なんだ？」

スコアが反応した。

「いや、なんかの設計図みたいなんだが」

スコアはクロコに渡された書類の束を見た。

「この設計図は……蒸気機関か……？ いや、なにか違う。そもそもこのスケールは……あまりにも大き過ぎる。まさか、これは……」

「どうした？ もう大抵のことじゃ驚かないぞ」

「これは爆弾の設計図だ。従来の火薬を用いたものに、蒸気機関を組み合わせた、猛烈な爆風による圧殺を目的とした爆弾だ。しかも小型の基地ぐらいのサイズがある」

「……！！ どうしてあいつらがそんなものを……」

スコアは他の資料に目を通す。それを見てスコアはさらに驚いた。

「その巨大爆弾が、首都ゴウドルークスの地下にある……！！」

「え……！？」

スコアは冷や汗を流す。

「ボクが少し前に首都に行ったとき、街全体から、戦場にいるような濃い火薬の臭いが漂ってたんだ。そうか……そういうことだったのか」

「だけどそいつら……それを何に使っ気なんだ？」

スコアは別の資料に目を通す。

「……………！！！！　こんなことが……………！！！！」

「もういい加減にしてくれよ……………」

クロコはもう驚き疲れた様子だ。

「いや、これはきみにも直接関わることだ」

「え……………？」

「やつらは…………『レギオス』は、国軍と解放軍によるゴウドルークスの決戦の時にこれを爆発させる気だ」

「……………！！！！」

「この爆発による被害者数の推定は、解放軍140000。国軍90000。この爆弾の製造を国軍上層部が秘密裏に行ったことにして、その罪を『レギオス』にとつての最大の障害である、オルズバウロ元帥を中心とした国軍権力に着せる計画だ」

スコアは険しい顔で説明する。

「これによつて、自分たちにとつての最大の障害を取り除くと共に、内乱とその中で起こった非人道的な作戦を口実にして、皇族と国軍から権力を完全に奪い取つて、『レギオス』として堂々と表舞台に出る気なんだ……………」

「……………」

それを聞いたクロコはしばらくの間、黙っていた。やがてゆっくりと口を開く。

「詳しいことはよく分からなかったが、この作戦を考えた奴が最悪のクソ野郎だってことはよく分かった。人を200000以上ぶっ殺して、その罪を他人に着せて、自分たちは正義面して偉くなろうなんてな……………頭の中が腐ってると思えねー」

クロコの眼には怒りがこもっていた。

「ああ……………そうだね」

スコアは静かに言った。スコアの眼にも静かな怒りがこもっていた。

「こんな下らない権力欲のために、この『ダークサークル』が起きていたなんて……………そしてラティル大佐が……………絶対に許せない。この作戦は必ず阻止する」

クロコは真紅の瞳をギラツと光らせた。

「ああ、当然だ……………!!」

6 - 4 ゴウドルークスへ

屋敷の小部屋でスコアは金庫から取り出した書類の束を流し見ている。

隣でクロコが口を開く。

「なあ、スコア。けど、作戦を阻止するにしても、やつらがどこにいるのか分からないと阻止しようもないよな」

「今それを調べてる」

スコアはそれだけ言うと黙って書類に目を通す。

「あつた……！」

「何が？」

「もしあの巨大爆弾をそのまま爆発させたら、それを使った人が必ず爆発に巻き込まれる。だから、必ず時限式か、遠隔操作で爆発させる仕掛けをしてあるはずなんだ」

「うんうん、まあ、そうだよな」

「そしてこの爆弾は遠隔操作によって爆発させるように造られている」

「つてことは……」

「ああ、その発火地点にやつらはいる」

「どこなんだ？」

「この紙には、ゴウドルクス市内の見取り図と、爆弾の仕掛けられてる場所、そして爆弾の発火点が表示されてる。爆弾の場所はゴウドルクスの南地区のほぼ中心、そして発火点は東地区の東端……総務省局だ」

「よっし、それさえ分かれば……」

「あとは動くだけだ」

「……っと、ちょっと待ってくれ」

「なんだ？」

クロコは仕事机に腰を下ろして、机の中から手紙用の紙と羽ペンを取り出すと、何かを書き始めた。

「今まで分かった情報を、あいつに伝えないと……」

（ファントムに……）

「あいつって誰？」

「まあ仲間だよ」

「頼りになるのか？」

「ああ、多分な」

クロコは右手で手紙を書きながら、左手を背後に立つスコアに向けて差し出した。

「メンバー表の紙取ってくれ」

「あ……ああ」

クロコは慣れない手つきでペンを走らす。

「クロコ……まだか？」

「ちょっと待ってくれ……文字を書くの苦手なんだよ」

「ボクが書こうか？」

「オレが書く。誰に送るかも知らないだろ」

「……………」

「スコア、組織名って何だっけ？」

「『レギオス』だよ……………」

「ああ、そうそう……………あっ！！」

「どうした！？」

「……なんでもない」

「早くしてくれ……時間はあまりないんだ」

スコアはイライラしながら言った。

「皇帝が入れ替わったのって……」

「十二年前」

「爆弾が仕掛けられた場所は……」

「南地区の中心」

それからしばらくして、クロコはなんとか手紙を書き終えた。
クロコは服から小型の手紙鳥を取り出した。

「手品みたいだろ？」

「早く送って」

クロコは手紙鳥の足に手紙をくくりつけて窓から放った。

「これでよしと」

「行こう、クロコ」

スコアとクロコは小部屋から会議室へと出た。するとスコアは窓側まで歩いていき、いきなり窓を蹴り破った。

「時間がない、ここから出るよ」

「おまえ短気だな」

「そこまでだ」

突然何者かの声が響いた。

「……！」

クロコとスコアが出口の扉の方を振り返ると、そこには大柄で眼つきの悪い国軍人が立っていた。さらにゾロゾロと国軍の兵士が部屋へと入ってくる。十人以上はいるだろう、一斉に剣を抜く。

「間に合わなかったか……」

スコアはボソツと言った。それにクロコが反応する。

「な、なんだよ、気付いてたのか？」

「ああ、だから時間がないって言ってたんだ」

「先に言えよ！」

「間に合うと思ってたんだ、きみが手紙を書くのがあんなに遅いとは思わなかった……」

眼つきの悪い軍人は大きく咳払いした。クロコとスコアは会話を止め、軍人たちを見る。

「緊張感のないやつらだな、この状況でロゲン力か？」

眼つきの悪い軍人はスコアの方をジロリと見る。

「なあ、スコア・フィードウッド」

「……………」

スコアは黙って眼つきの悪い軍人をにらんでいる。

「まさか貴様がここに侵入してくるとはな……………思いもよらなかったよ。ラティルの小僧の差し金か……………？ 鼻の具合はどうかね、ん？」

眼つきの悪い軍人の言葉を聞いて、クロコは前を向いたままスコアに話しかける。

「スコア……………あいつ知ってるのか？」

「ああ、基地で一度話しかけられたことがある。名前は知らないけど……………」

その言葉を聞いて、眼つきの悪い軍人はスコアをにらんだ。

「国軍准将グロップスだ。自分を殺す相手の名だ、しっかりと記憶しておけ」

剣を構えた兵士たちが二人を囲むようにジリジリと歩み寄ってくる。その様子を、グロップス准将は出口の前で眺めながら余裕の笑みを浮かべる。

「だが、まさか国軍の英雄が我ら『レギオス』に牙をむくとはな。まあいい、この功績で私は……」

そう言いかけたグロップスの目の前には、いつの間にかクロコが立っていた。クロコと背中合わせに立つ兵士たちの体が一斉に傾いていく。

ゴスッ!!

クロコのとび蹴りがグロップスの顔面に直撃した。グロップスは白目をむき、鼻血を出しながら、バタンと仰向けに倒れる。

クロコはスタツと着地した。

「……っと、勢いよく蹴り過ぎた。鼻折っちまったかな………で、倒しても良かったんだよね?」

クロコはスコアを見て言った。スコアはあきれた様子で口を開く。

「別に良かったけど………話の途中じゃなかった?」

クロコは倒れた兵士たちを避けながら、先ほど割れた窓の方へと歩いていく。クロコは窓に足を掛けた。

「さて……じゃあ行くか、ゴウドルークスへ」

ウォールズ・ヘルズベイの広場には解放軍の兵士たちが整列している。巨大な広場を兵士たちが埋め尽くす。その兵士たちの前に設置されている大きな石の台座の上に、兵士たちと向かい合う形で、ランクストン総司令が立っていた。

静まり返る広場に、ランクストンの声が響いた。

「諸君、いよいよ時が来た！」

ランクストン総司令の声が響き渡る。

「ついに我々にとっての最後の戦いが始まるうとしている！これから首都ゴウドルークスで我らは、国軍と激突する！私の背後を見てください」

ランクストンの背後には、ヘルム型の旗印の赤色旗が風に揺れている。

「この戦いが終わるころにはグラウドの国旗は、ネシス神がまたがる聖馬グライドライコンから、我らが英雄ファントムのヘルムへと変わっているだろう！我らの勝利の歓声と共に！！」

「ウオオオオオオオオオ！！」

兵士たちは歓声を上げた。広場を満たす歓声と共に、ランクストンはゆっくりと台座から降りていく。

「見事です、ランクストン総司令。まさかここまで兵士たちを奮起させるとは……」

副総司令の一人が話しかけてきた。ランクストンはニコツと笑う。

「ああ、ファントムが置いていった原稿をそのまま言っただけなんだがな。ファントムの言葉だと思うと自信を持って言えたよ」

「……………」

グラウドのとある馬車道を一台の小型馬車が駆け抜けていた。

その車内には、一人の男が座っている。

その男は四十代前半、茶色の髪に、茶色の柔らかい口ひげ、鋭い目つきをしている。

ルイ・マスティンだ。

落ち着いた様子で座っているが、どこか緊迫感が漂っている。

（奴らに、この国を乗っ取らせるわけにはいかない……）

ゴウドルークスの純白の街並み。その中に建つ正方形の建物。ここは総務省局。

その地下に造られた薄暗い巨大部屋、その奥には、ある男が座っている。

その男は四十代前半、黒い髪にあごをおおう黒いひげ、太い眉に鋭い目、全体的に威厳に満ちた顔だちをしている。

ジオ・グランロイヤーは静かにそこに座っていた。

その両脇には二人の男が立っている。

一人は二十代半ば、長身で、柔らかい赤髪、鋭く大きな目、威圧的な雰囲気を持ち、腰には大剣をつけている。リーヴァル・クロスレイだ。

もう一人は五十代後半、温厚な顔だちをしているが、全てを見通すような鋭い目をしている。レオン・ホーククリフ大將だ。

「静かな空間だな」

グランロイヤーは言った。

「この静かで薄暗い空間に、このグラウドの全てを変える鍵があるとは到底思えないな」

その薄暗い大部屋に突然、人の歓声のような音が小さく響いてきた。

「何の音だ……？」

グランロイヤーの言葉にホーククリフ大將が答える。

「国軍兵の歓声ですな。オルズバウロが兵士たちを奮起させているのでしょ」

グランロイヤーは小さく笑う。

「……オルズバウロか。自分の運命も知らずに、哀れなものだな」

「さて……私はそろそろ行くとしましょう。ここの護衛隊の指揮をとらねば」

ホーククリフは歩き出す。

「まあ、ここに突入してくるような輩がいるとは思いませんが……」

それを聞いてグランロイヤーは笑みを浮かべる。

ホーククリフが部屋を出ていったあと、グランロイヤーはリーヴアルを一瞬見る。

「まあ実際、君一人いれば、護衛隊など必要ないがね」

グランロイヤーは楽しげに笑う。

「さあ………全てを変える神の風が、もうすぐこの街に吹き荒れる。その瞬間、再生の時は訪れる」

国軍本部基地の広場、兵士たちで埋め尽くされているその一角に一人の少年軍人が立っていた。

その少年は年齢十四、五ぐらい、少しねた茶色の髪に、青い瞳、幼い顔立ちをしているが、雰囲気は落ち着いている。

コール・レイクスローは静かに自分の剣に触れた。

（もうすぐ、最大最後の戦いが始まる……）

純白の壁に一人の少女が寄り掛かっていた。

その少女はクロコとうりふたつの姿をしている。しかし雰囲気だけは違いひっそりと静かだ。

アピス・ブレイリバーは壁に寄りかかりながら青空を見つめていた。

「雲が速く流れてる……」

アピスはため息をついた。

「スコア、怒るだろうな……」

ウォールズ・ヘルズベイ基地から、次々と解放軍の大型馬車が出発していく。

基地の巨大な広場では、大型馬車に兵士たちが次から次へと乗り込んでいた。

馬車の一つにフィンディが乗り込もうとしている。後ろを振り向いた。

「おい、ファリス。先に乗ってるぞ！」

「うーん！」

遠くでファリスが返事をする。

ファリスは馬車へ向かって駆け出そうとしていた。

「アレ……」

ファリスは広場のある一角に視線が移った。

そこにはソラがポツンと立っていた。静かに出発する場所の集団を見つめている。

「あの子ってたしか……」

「おい、ファリスー！ もうすぐ出るぞー！」

フィンディが馬車の窓から声を飛ばしていた。

「あ、急がなきゃ……！」

次々と走りだす馬車の集団を、アールスロウは広場の一角から眺めていた。

するとある男が隣に立つ。

その男は三十代前半、ボサボサ頭でぶしゅひゲを生やしている。ケイルズヘル基地の司令官ライム・ローズマンだ。

「もうすぐだな……」

ローズマンの言葉に、アールスロウは広場を眺めたまま口を開く。

「はい、この長い戦争に終止符を打つ戦いです」

「ああ、とんでもねー戦いになるだろうが……がんばらねーわけにはいかないよな。アイツの分まで……！」

「はい」

アールスロウは目つきを鋭くさせた。

（ 그레이さん……必ずこの戦い、勝利して見せます ）

基地へと出る大型馬車の一つ、その車内の奥の席にフロウは座っていた。

（『真実』は、もうすぐそこまで来ている。そのためにも、この戦いで死ぬわけにはいかない ）

フロウは静かに目を閉じる。

（マウル……クレイド……僕を導いてくれ ）

セウスノール解放軍は、首都ゴウドルークスへ向けて動き出した。

6 - 5 開戦

緑色の草原帯が広がっている。

その草原帯を、東から西へと流れる巨大なニコ川が分断している。

そのニコ川の南側の草原、そこには数えきれないほどの多くの解放軍兵が整列していた。

ヘルムの旗印の赤色の旗を高く掲げ、黒い軍勢が緑の草原を覆い尽くしている。

解放軍領の西部、北部、南部、中部から集結した解放軍の兵力は250000。

その兵士たちが整列し、巨大な陣を形成していた。

そのおよそ1.5 km前方、ニコ川の上流には純白の巨大都市が広がっていた。

首都ゴウドルークスだ。

巨大な城壁に囲まれた純白の街。東南には城壁を分断した形でエコースト山がそびえている。

西の城壁の前には、解放軍と向かい合う形で国軍が待ち構えていた。

解放軍と同じく、国軍領全土から集められた兵士たちが、陣を作つて構えている。およそ100000の横陣。それでも全体の一部だ。

角の生えた馬の旗印の緑色の旗を高く掲げ、青い軍勢が静かに解放軍をにらんでいる。

晴れ渡った空の下、緑色の草原に弱い風が吹いた。

解放軍は50000ずつの横陣を五列作り、静かに国軍を見つめている。

その先頭の前衛、そこでフロウ・ストルークは、静かに前方を見つめていた。

国軍の軍勢が、緑の草原の中に青いロープのように伸びているのが見えた。

その後方には白い壁が見える。横長の純白の巨大城壁が草原の上に厚いじゅうたんのように広がっていた。そのそびえ立つ城壁のさらに上に、巨大な純白の建築物の姿が所々はみ出して見えた。純白の四角い屋根が所々で頭を出し、とがった屋根もいくつも見える。とても高い塔が針のように突き出ていた。そのさらに奥、純白の街の右側には、緑色の山がそびえ立っていた。

青い空に、緑色の草原、純白の都市、魅入ってしまうような美しい景色が目の前に広がっている、にも関わらず、辺りを覆う空気はそれとはまるで違っていた。

息が止まるような強烈な緊張感が辺りを支配している。

目の前に広がる景色は、これから始まる決戦の息継ぎにもならない。

兵士たちはただ黙って、始まりの合図を待っていた。

時間だけが、ただ静かに過ぎていた。

パンッ！！

一発の信号銃と共に、解放軍の第一陣が動き出した。50000の軍勢が雄叫びと共に国軍に向かって一直線に突き進んでいく。ジワジワと国軍との距離が縮まっていた。横陣の幅は国軍とほぼ同じだ。

国軍は動かなかった。どっしりと待ち構えている。解放軍があと少しで国軍とぶつかるだろう、その瞬間、

ドンドンドンドンドンドンドンッ！！

国軍から数え切れないほどの砲弾が飛び出した。砲弾は雨のように解放軍の軍勢に降り注ぐ。解放軍の巨大な軍勢の所々から赤い閃光が瞬いた。

解放軍は怯まず突き進む。

ついに解放軍の軍勢が国軍の軍勢にぶつかった。その瞬間だった。

解放軍陣の前衛、その中心から、二人の剣士が飛び出した。ミリアとフィンディだ。

二人の剣士は一気に国軍の集団へと飛び込んだ。

ヒュヒュヒュヒュヒュン！！

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！

二人は圧倒的な速さで剣を振り回す。ミリアは自らの前方に超高速の斬撃の壁を作りだし、触れた敵兵を一瞬にして斬り伏せる。フィンディは動きを止めるピンポイントの斬撃でどんどん敵兵を斬り伏せていく。

中央の国軍兵たちは雪崩に遭ったかのようになぎ倒されていく。

国軍陣の中央が大きく切り開かれていった。

その切り開かれた空間に、解放軍の剣兵が一気になだれ込む。

「このまま一気にケリをつけてやる！」

フィンディは次々と敵兵を斬り伏せる。

ミリアも次々と敵兵を斬り伏せていく。

国軍の分厚い陣が徐々に徐々に崩れていく。その時だった。

「……………！」

ミリアの目の前に突然一人の剣士が飛び出した。ミッシュ・ノルフォークだ。

ギンッ！！

ミリアの斬撃がミッシュによって止められた。

「はあ……！」

ミッシュは勢いそのままにミリアの剣を力づくで後ろに弾き飛ばした。わずかに崩れるミリアの体勢、その一瞬の隙。

ゴッ……！！

ミッシュの重い蹴りがミリアの体をとらえた。

「……………！！」

ミリアは後ろに弾き飛ばされる。

それとほぼ同じ時、フィンディの目の前にとんでもなく巨大な剣士が立ち塞がっていた。

ゴッドブラン中將が殺気に満ちた目でフィンディをにらみつけた。

「ここまでだ……小僧」

ギュオンッ！！

ゴッドブランから巨大な剣が振り下ろされた。フィンディは素早く反応し、受け止めるが……。

「なに……！！」

ガアアアアン！！

受け止めたフィンディの体は浮き上がり、後方にふっ飛ばされた。ミリアとフィンディの前進が止まったその瞬間、

ドンドンドンドンドンドン！！

国軍の後方から解放軍の中央に向けて大量の集中砲火が注がれた。

「うわっ！！」

フィンディの目の前を爆炎の壁が包み込む。

「……………！！」

ミリアも爆炎の前で動きを止められた。

あまりに激しい爆炎の前に、二人は下がるしかなかった。解放軍

の前進が止まった、その直後だった。

国軍陣のさらに後方、国軍陣と城壁のあいだの地面が次々と盛り上がっていく。

解放軍左翼、フロウは一気に表情を緊迫させた。

「まさか……あれは！」

解放軍の前方に次々と現れる巨大な影。

屋敷ほどの大きさの鉄の塊、上部の煙突二つから煙を噴き上げ、鋼鉄の車輪で草原を揺らし、巨大な砲身を斜めに天へと伸ばし、グラン・マルキノが姿を現した。

二台や三台ではなかった、解放軍の前に現れたグラン・マルキノの数は二十近くあった。

遠くからその様子を見ていたローズマンの顔が引きつる。

「おいおいメチャクチャだぜ。あの数のグラン・マルキノをふつつ地面に隠そうとするか……？ 地形変わってんじゃないか……」

ドゴォーンドゴォーンドゴォーンッ！！ ドゴォーンドゴォーントッ！！ ドゴォーンドゴォーントッ！！

無数のグラン・マルキノの砲口が揺れた。
その直後、

ズオオオオオンッ！！　ズオオオオオンッ！！　ズオオオオオン
ツ！！　ズオオオオオンッ！！　ズオオオオオンッ！！　ズオオオ
オオンッ！！

空と大地が赤い閃光で染まった。

いくつもの巨大な火柱が、解放軍の黒い軍勢を一瞬で飲み込んだ。兵士たちの数え切れないほどの悲鳴が上がる。陣全体を砕くような大爆撃だった。

フロウの体にも強烈な爆風が叩きつけられる。

「＜…＞！」

フロウは見た、近くで新たな火柱が広がるのを。

辺りを再び赤く染め、大爆音が頭の中で暴れる。次から次へと新たな爆音が鳴り響き、頭の中で狂ったように叫び続ける。

遅れて、さまざまな方向から爆風が吹きつけ、爆風同士がぶつかり合い、辺りの空気が竜巻のように暴れまわる。草原の草が一気に巻き上げられ、緑の紙吹雪ように辺りに舞い上がっていった。その天へと上がっていく草の影に紛れて、いくつもの人の影も空へと舞い上がっていた。

「リック・ノール前進！！」

ランクストン総司令が叫んだ。

長い長い砲身をつけた四角い鉄の塊が、煙を噴き上げ、無数の車

輪を回し、戦場へ向かって前進する。

十二台のリック・ノールはグラン・マルキノに向かって進んでいく。

1kmほどの距離を取って動きを止めた。

操縦士の一人が声を上げる。

「しかし総司令！ リック・ノールは連続撃ちできません、あのグラン・マルキノを全部破壊するのは無理ですよ！」

「構わん！ いまは壊せるだけ壊すんだ」

操縦士は回転レバーを回す。砲身が上へと向いていく。

十二台のリック・ノールはそれぞれグラン・マルキノへと照準を合わせた。

ドオンドオン！ ドオン！ ドオンドオンドオン！ ドオン！

砲口が震えた直後、

ドオオオオンッ！ ドオオオオンッ！！ ドオオンッ！ ドオオオンッ！！

グラン・マルキノの前部を守る鎧が碎け散った。

いくつものグラン・マルキノが内部から爆発を起こし、破壊されていく。

黒い煙を上げて動きを止めるグラン・マルキノ。

草が降ってくる戦場、その中央前衛でミリアはグラン・マルキノを見渡す。

「破壊されたのは十二台………あと七台か」

残ったグラン・マルキノからさらに巨大砲弾が撃ち込まれる。

ズオオオオオンッ！！　ズオオオオオオンッ！！　ズオオオオオンッ！！

地獄の業火がさらに解放軍を襲った。戦場を振動させるほどの巨大爆発により、解放軍の横陣がさらに崩れていく。

その崩れていく解放軍をさらに追い込むように国軍の部隊が次々と攻撃を仕掛ける。

剣兵隊や銃兵隊が冷静さを失った解放軍兵を次々と襲う。

剣兵による連携攻撃、銃兵による連続発砲。国軍の連携のとれた攻撃が、解放軍兵をどんどん仕留めていく。

戦場の一角、解放軍に猛攻撃を仕掛ける国軍兵たちの中で、特に動きの鋭い戦士がいた。

アグレス・ロウレイブは長槍を振り回し、解放軍兵を次々となぎ払う。

崩されていく陣形を守ろうと、必死で戦う解放軍兵たちだったが、ロウレイブの鮮やかな槍技の前ではまるで歯が立たなかった。

ヒュウンヒュウンヒュウンヒュウンッ！！

「ぬるい……！　ぬるいぞ……！」

解放軍兵たちはロウレイブに次々と斬り伏せられていく。

「そこまでだ」

「む……！」

ロウレイブの前に一人の剣士が立ち塞がった。フロウだった。ロウレイブは足を止める。

「……きさまは見覚えがあるな」

ロウレイブは笑みを浮かべる。

フロウは落ち着いた様子で口を開く。

「セウスノールではどうも」

その言葉を聞き、ロウレイブはフロウの姿をじっと見る。

「そうだったな、たしかきさまはクロコ・ブレイリバーと共に戦っていた」

「ああ、そうだ、クロコは僕の友達だからね」

それを聞き、ロウレイブは嬉しそうに笑みを見せる。

「……クロコ・ブレイリバーの首以外には興味がなかったが、奴を葬る前に、その友の首を取るのも面白い。奴はさぞ悔しがるだろう」

「いい趣味してるね。だけど……今回はそう簡単にはやられないよ」

「私の攻撃をまともに受けることさえできない分際で……」

「まあね、今までだったらね」

フロウは自らの剣を横に構えた。

「む……！」

ロウレイブはその剣を見て声を漏らす。

フロウの手には小型の剣が握られていた。その剣は幅が広く、細長い盾のようにも見える。

「……シールドソードか。変わった武器を使うな」

フロウは鋭くロウレイブをにらむ。

「これが僕の新たな力だ」

「面白い……！」

ロウレイブは長槍を両手で構えた。

爆音が響き続ける戦場で、二人は黙ってにらみ合っていた。

先に動いたのはロウレイブだった。

鋭く長槍を打ち下ろす。

ヒュウンッ！！

フロウは素早く横にかわす。しかしロウレイブの槍の軌道が一瞬で変化する。素早く放たれる横の斬撃。

ヒュウンッ!!

フロウは身をかがめてかわした。

「やるな……しかし！」

ロウレイブは軽やかなフットワークで、一瞬でフロウの横に滑り込んだ。ロウレイブの槍が打ち下ろされる。フロウは素早く反応したが、それはフェイントだった。槍の軌道は横へと変化する。

ヒュウンッ!

ロウレイブの槍は勢いよく振られた。

ギイインッ!!

フロウはロウレイブの槍を受け止めた。余裕の笑みを浮かべる。

「軽いね」

「……あまり調子に乗るな。今のは小さく振っただけだ」

ロウレイブは体を回転させる。

「だが! これは受け止められるかな……!!」

ロウレイブは体全体を回転させて勢いよく長槍を横に振った。

ヒュウンウンッ!!

フロウがその斬撃を受け止めようと構えた瞬間だった、槍は軌道を変え、フロウの足先へと伸びる。

「バカめ!!」

「…………!!」

一瞬の反応だった、フロウは素早く後ろへ跳んでかわした。そのフロウに向かってロウレイブが狙いすましたように追い討ちをかける。

「くらえ!!」

ロウレイブは再び全身を回転させ、強烈な斬撃をフロウに放った。
ガアアアンツ!!

フロウはロウレイブの斬撃を受け止めた。その小さな体はビクともしない。ほほえみを浮かべる。

「この程度かい？」

「……………」

ロウレイブは後ろへ跳んで距離を開けた。
フロウは口を開く。

「もともと僕はかわすのは上手かった。けど防御は苦手だった。そのせいで攻め方が必然的に絞り込まれていたんだ。けどもう、

僕は自由に戦える」

それを聞いてロウレイブは笑みを浮かべた。

「だからどうした。防御ができただけで、この私と対等になったつもりか？」

フロウは鋭く見つめる。

「まさか……せっかく化け物を修行相手に選んだんだ。弱点の克服だけで済ますはずないだろ」

その言葉の直後だった。フロウは動いた。一瞬でロウレイブを斬りつける。

「な……速い!!」

フロウの速さにロウレイブは驚く。

ギンッ!!

二人の間で斬撃がはじけた。フロウがさらに一歩踏み込む。鋭い斬撃がフロウから放たれた。

ヒュンッ!!

「く……!!」

ロウレイブは後ろに跳んで紙一重でかわす、しかし素早くフロウが追撃する。

ヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！

フロウから放たれる高速の斬撃の嵐。ロウレイブは避けきれない。いくつもの斬撃がロウレイブの軍服を裂く。

「チィ……！！ 図に乗るな……！！」

ロウレイブは軽やかなフットワークで、一瞬でフロウの横に回り込んだ。鋭い突きが飛ぶ。フロウは素早くかわそうとするが、突きは途中で軌道を変え、横の斬撃となってフロウを襲う。しかし、フロウはそれを見切っていた。

ギィンッ！！

あっさり止めるフロウ。その直後叫んだ。

「はあっ！！」

フロウは力任せに長槍を弾き飛ばした。槍はロウレイブの意思に反して大きく横にそれる。ロウレイブの体勢がわずかに崩れたその直後、

ヒュンッ！！

フロウの斬撃が、一瞬でロウレイブの全身を切り裂いた。血しぶきが上がり、ロウレイブの体が後ろへと傾く。

「そんな……こんなことが………すまない、サイ………」

ロウレイブは草原に倒れ伏した。

フロウは息一つ乱さず立っていた。

「やるじゃないか……」

突然、フロウの前方から声が聞こえた。見ると、そこにはコール・レイクスローが立っていた。

「君か……」

コールはゆっくりと歩み寄る。

「まさか、『一角獣』をあんなにあっさり倒すなんてね」

コールはゆっくりと近づいてくる。静かにフロウを見つめていた。フロウは剣を横に構える。

「悪いけど、もう君には負けないよ」

「それはどうかな……？」

コールは剣を前に構えた。その剣はフロウの知っているコールの剣とは明らかに違っていた。非常に長い剣だ。

「……！！ 長剣か」

コールは青い瞳で鋭くフロウを見つめた。

「強くなったのが、自分だけとは思わないことだね」

6 - 6 鉄壁の剣技

緑色の草原の上で、解放軍の軍勢と国軍の軍勢がぶつかり合っている。

解放軍の陣形は所々が攻め込まれて薄くなっていた。グラン・マルキノの砲撃で動きが大きく乱されたためだ。

草原を押しつぶし進むグラン・マルキノ。

そのグラン・マルキノの一つひとつが爆音をとどろかせることに、地面が噴きあがり、巨大な炎が辺りを照らす。

そんな中だった、グラン・マルキノの一つ、その前部が突然大爆発を起こした。それと共にグラン・マルキノの木窓から人影が飛び降りてくる。ミリアだ。

「これで二台目。あと五台……………」

草原に着地したミリアは、近くにあった他のグラン・マルキノの一つに視線を移す。その時だった、そのグラン・マルキノも突然爆発した。

「……………」

黒煙を上げるグラン・マルキノ。その巨大な胴体からフィンディが飛び出した。

フィンディはスタツと地面に着地する。

「ふう、これであと四台……」

解放軍左翼の一角で、フロウとコールが向かい合っていた。

小剣を横に構えるフロウ。

長剣を前に構えるコール。

二人は静かににらみ合っていた。

すぐ近くで大砲の爆音が響いた、その直後、

フロウが動いた。風のように速く、鋭く突進する。一瞬でコールとの距離を詰める。コールの間合いへと入った瞬間だった、フロウは驚いた。

ヒュウンッ！

コールの斬撃は、素早いフロウの動きに完璧に合わせて放たれていた。

とっさに後ろに跳ぶフロウ。肩がわずかに切り裂かれた。

「く……！」

コールは動かず、フロウを静かに見つめている。

「やるね……」

フロウはそう言って剣を構え直す。フロウは再び動いた。今度は

俊敏に左右に動きコールをかく乱する。コールは動じず冷静にフロウの動きを追っている。フロウは一瞬でコールの横に回り込み、一歩踏み込んだ、その直後、

ヒュウンッ！！

コールはあっさり反応し、フロウの動きに合わせた斬撃を振るう。

ギインッ！！

フロウはとっさに防御した。続けて放たれるコールの斬撃。

ギインギインギインギインッ！！

フロウとコールの斬撃がぶつかり合う。フロウが距離を詰めようとにじり寄ると、コールはそれに合わせて後ろへ下がる。

フロウは険しい表情をする。

（懐に入れない……！！）

間合いが長いコールの斬撃だけが一方的にフロウを襲う。斬撃の一つがフロウの肩をわずかに切り裂いた。

「く……！！」

フロウは勢いよく踏み込んだ。直後、コールの斬撃がその動きに合わせてフロウの胴体を切り裂いた。

「ぐ……ッ……！！」

宙に血が飛ぶ、それでもフロウはひるまなかった、さらに一歩踏み込んだ。

「この距離なら……!!」

フロウは斬り込んだ。

ヒュンッ!!

紙一重で避けるコール。

「まだまだあ!!」

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュンッ!!

フロウからスピードにものをいわせた無数の斬撃が放たれる。コールは全て紙一重でかわす。コールは顔色一つ変えない。

キン

コールはフロウの斬撃の一つを鮮やかに受け流した。わずかに崩れるフロウの体。それに襲いかかるコールの斬撃。

ヒュウンッ!!

フロウは後ろへ跳んで離れた。しかしコールの斬撃はすでにフロウの全身を浅く切り裂いていた。

「くう……」

フロウはわずかによろめく。体からは血がポタポタと流れ落ちた。
コールは追わず、その場で剣を構え直す。

「なるほど……君からは来ないのか」

フロウの言葉にコールは冷静に答える。

「まあね、いま押してるのは国軍の方だし、無理にきみを倒しにいかなくても、勝手に解放軍は崩れていくから」

「やれやれ、まいったね……」

（まるで別人のような強さだ……天性の見切りのセンスに加え、長剣による懐の深さと高い技術が加わって、鉄壁の防御を成している……この年でこの強さ。末恐ろしい子だ）

「こないの？」

コールが静かに言った。

「……………」

フロウは黙って剣を構える。

（これを崩すことは……できるのか？）

解放軍陣の中央、前方に立ち塞がるグラン・マルキノから巨大な砲撃が放たれた。

その大爆発により、解放軍の中央がさらに崩れる、その時だった。そのグラン・マルキノの鉄板の上から無数の人影が解放軍に向けて飛び出してくる。その空中を飛ぶ人影から、無数のナイフの雨が解放軍兵たちに放たれた。

「うわああああ!!」

無数のナイフは、中央を守る解放軍兵たちに降り注ぎ、次々と体を切り裂いていく。

宙を舞い飛ぶ人影は全員、黒い衣装で全身を包んでいた。

グラン・マルキノから無数のアサシンたちが飛び出してきた。

地面に着地するアサシンたち。80人ほどの大集団だ。

先ほどの砲撃とナイフの雨で、解放軍陣の中央を守る兵士がだいぶ減っていた。アサシンたちは一斉に駆け出し、中央の兵士たちをあっという間に斬り伏せていく。

素早い身のこなしで襲いかかってくるアサシンたちに、解放軍兵は全く対抗できない。次から次へとナイフで斬り伏せられていく。

アサシンたちは真っ直ぐ指揮官を目指して突き進んでいた。

先頭のアサシンが口を開く。

「指揮系統を一気に潰すぞ!! この状況なら行ける!」

アサシンたちは次から次へと解放軍兵を斬り伏せ、一気に中心部に向かって突き進んでいく。

「これで終わりだ、道は開けた!!」

ヒュウンヒュウンッ!!

前を走るアサシン二人が血しぶきを上げ、倒れた。アサシンたちは一斉に立ち止まる。目の前にはアールスロウが立っていた。

「残念、行き止まりだ」

「『千牙の狼』……！ なぜこんな所に！」

アールスロウは静かに口を開く。

「この状況で、全体を冷静に見渡せる者が一人ぐらいは必要だろう」

アールスロウは剣を構え、アサシンたちを鋭くにらむ。

「さあ、かかってこい」

パンッ！

「第二陣突撃！！」

後ろに控える解放軍の50000の横陣が戦場に加わろうと動き出した。

解放軍左翼の一角、フロウとコールはにらみ合っていた。すでにいくつかの傷を負うフロウ。

傷一つなく、動かずに待ち構えるコール。

フロウは静かにコールを見つめる。

(……………ダメだな。彼の守りを打ち砕く手が思い浮かばない。まったく……………どっしりと構えちゃって、憎たらしいな。手がないなら仕方ないか……………)

フロウは小さく息を吐いて、再びコールをにらむ。

(あとはもう、自分を信じよう)

フロウは駆けだした。高速でコールに向かって突進する。フロウが間合いに入った瞬間、コールの斬撃が飛ぶ。

ギーン!!

二つの斬撃がぶつかり合った。フロウは足を止めない。一気にコールの懷に迫る。その動きに合わせて、コールからさらに斬撃が飛ぶ。

ヒュウンッ!!

フロウの腕がわずかに切り裂かれた。しかしフロウは止まらない。

「うわああああ!!」

フロウは剣を振り回した。

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュンッ！！

フロウから無数の斬撃が放たれる。コールはすべて見切つて紙一重で避ける。

それでもフロウはひるまない。さらに剣を振り回す。

（速く……もつと速く……！！）

コールはフロウの様子に戸惑う。

「まさか、ボクの見切りに対抗してる……！！？」

コールは鋭く斬撃を返す。フロウは素早く反応した。

ギンッ！！

剣がぶつかり合った直後、フロウは再び連続の斬撃を放つ、先ほどよりもはるかに激しく。

（どんなに剣を鍛えたとしても……僕の長所はやっぱりこのスピードなんだ。だから、ここだけは負けられない！ここだけは信じる！！）

ヒュンッ！！

フロウの斬撃の一つがコールの体をかすった。

「く……！！」

コールの目が鋭くなった。

キン

コールはフロウの斬撃の一つを受け流した。

わずかに崩れるフロウの体。コールは鋭く斬撃を放つ。フロウは一瞬で体勢を立て直し、剣を振るう。

ヒュンッ！！ ヒュンッ！！

フロウの脇腹から血が噴き出る。その中でフロウはさらに一歩踏み込んだ。

ヒュンッ！！

コールの肩がわずかに切り裂かれた。

「く……！」

わずかにひるむコール、後ろへ跳んだ。その瞬間だった、フロウは前へ飛び込んだ。

ヒュンッ！！

フロウの剣はコールの脇腹を深く切り裂いた。コールの脇腹から血が噴き出る。

「ぐ……ッ！」

コールの体がわずかによろめく。フロウはさらに一歩踏み込んで斬りつけた。しかしコールも負けていなかった。コールは叫んだ。

「うわああああ!!」

フロウの剣が届く直前、コールの蹴りがフロウをとらえた。フロウは後ろへ押された。

コールは後ろへ跳ぶ。二人の距離が離れた。

「く……………」

コールは険しい表情をしていた。脇腹からは血が流れ落ちる。

「こんな……………こんなところで、まだ、倒れるわけにはいかない……………」

コールは後ろへとさらに跳ぶと、そのまま後退していった。

フロウは追わず、静かにそれを眺めていた。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

荒く息をするフロウ。わずかにふらつく。

「二連戦は……………さすがにきつかったな……………」

そんなフロウの前に、一人の剣士が近づいてきていた。フロウはそれに気づく。そして、その剣士の姿を見た途端、苦笑いを浮かべる。

「まさかの三連戦か……………しかも相手は……………」

フロウの前に、レイデル・グロウスが現れた。赤い瞳で鋭くフロウを見つめている。

レイデルはニヤリと笑った。

「さて……………殺すか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5569k/>

ブラックリング

2011年10月19日19時38分発行